まんじ

No.143

2017.2.1

まんじ第百四十三号　目次

田沼意次再考……千坂精一…4
相模原界隈の「物価考」……新井宏…24
人口知能の展望と限界……大貫陽平…30
火の玉……太田精一…34
短歌　行雲流水（五十一）……石黒修…40
漢詩　潮汐錄（八十六）《漢詩の流れ74》……鯨遊海…44
漢詩　汲深録（七）……松井秀人…47
ロボット雑考（その六）……三戸岡道夫…49
古い物・遠い夢　逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）…忠内正之…70
「農ある暮らし～私の日常～」(2)……古屋富雄…80

里見氏と北条氏―房総の戦国興亡史―（3）……山田嘉久…85
『時評家　新明正道』（評伝その七）……山本鎭雄…94
世界の国旗から学ぶ（第二回）……米村典紘…108
性と化粧の物語（七）……鈴木守…122
内田国の境物語……横山正義…134
神（仏）と人間はどんな関係？……鍋屋次郎…141
千家尊福伝（一四）……村上邦治…152
腐敗した市政に悩んだ東京府知事
明治時代の著述者　渋江保の一生（その八）……山本勉…170
夢夢夢……匠克仁…174
表紙　絵……田寺怜葦…178
「木鶏は動ぜず」についてのあれこれ
編集後記……編集子…179

田沼意次再考

千坂精一

序

田沼意次といえば、清廉潔白な松平定信の引き立て役に恰好の賄賂塗れの代表として悪の権化にされている。

意次は小身から立身出世して幕臣最高位の老中にまで上り詰めた成上り者だったから、品性下劣と極め付けられ、卑賤の輩にありそうな話として尾鰭つきで喧伝されたために功績のほうは隠れてしまっているふしがある。

こういうことは往々にして私怨を抱く者か、または政敵が針小棒大に流布して陥れ、失脚させることが多い。

たしかに意次は、老中に就任するや腹心を要職に据え、反対勢力を悉く排除すると同時に、諸大名を与党に取り込むための方策として官位や利権の斡旋を積極的に行って勢力の拡大を図ったので、進物の献上品が横行し、それが賄賂に発展して身代を築いたことから悪徳政治家の烙印を押され、天下の大悪人にされてしまった。

だが、国家を統治しようとする政治家たる者が、品性下劣で悪徳塗れでは老中などつとまるはずがない。

人は誰しも正と負の両面を持っている。

負の部分だけをとり立てれば正の部分は消え去ってしまい、人物評価は悪人に片寄ってしまう。

そう考えたときに、田沼意次の実像は果たしてどうだったのだろうか。

意次の名誉挽回なるか、その足跡を検証してみよう。

一

田沼意次の祖父義房は紀州藩士であったが、病を得て職を辞し和歌山城下の民家に閑居したというから、譜代家臣ではなく一代限りの低い身分だったのだろう。

父意行は叔父に養育されて成人すると紀州藩に仕えたが、やはり親と同様一代限りの軽輩だったに違いない。

だが親の轍を踏まなかったのは、藩主の徳川吉宗が八代将軍に選ばれるという強運にあやかって意行は二百人の従者のなかに選ばれる幸運に恵まれ、一藩士から幕臣になおって直参になり、小姓に登用されて蔵米三百俵を下賜されたから、親を超えての破格の出世であった。

とはいえ、五百石以下の小身は御家人といって、直臣であっても将軍には御目見えできない立場であった。

のち六百石に加増されて旗本の列に加わり、御小納戸頭取になってようやく将軍に拝謁できるようになった。

幕臣はそれほど身分制度がきびしかったのである。

意行が江戸に落着いて三年後の享保四年（一七一九）に嫡男が誕生した。それが田沼意次である。

田沼氏は藤原氏の出自で佐野成俊の後裔だという。

『寛政重修諸家譜』によれば、六代重綱が下野國安蘇郡田沼村（栃木県佐野市田沼町）に住んだことから田沼氏を名告り、以後四代にわたり上杉氏や武田氏に仕官したあと、江戸期になって紀伊徳川家に仕えたとある。

意次は十六歳のとき西の丸小姓に召し出された。のちに九代将軍になる世嗣家重の身辺雑用係であった。

「その容姿が認められて――」

が登用理由だったと伝えられているが、東京駒込にある菩提寺の勝林寺に遺っている意次の肖像画を見ても苦み走った好男子であるから、満更追従ではあるまい。

その年の暮れに近い十二月十八日に父意行が世を去ったので、意次は少年の身で六百石の田沼家を嗣いだ。

西の丸に十一年勤めて二十七歳になった延享二年（一七四五）九月一日、八代将軍吉宗が隠居して世嗣家重が九代将軍になったので、意次は本丸小姓になった。

家重は不肖の子といわれている。

幼少から病弱のうえ中風を患い、強度の言語障害で自暴自棄になり、政治に無関心で専ら酒色に溺れていたので、老中松平乗邑は弟君の田安宗武を推挙していた。

乗邑は大給松平家の出で、大坂城代のとき吉宗に見込まれ三十八歳の若さで老中に抜擢された逸材であった。

乗邑は、吉宗の期待に違わず大岡忠相、神尾春央らの有能な幕吏を存分に働かせ、とくに勝手掛老中に就任してからは徹底した年貢徴収で財政再建の実績をあげた。

吉宗はその乗邑の推挙を退けて家重を世嗣に定めた。

医師で作家の篠田達明氏の『歴代将軍のカルテ』（別冊歴史読本）によると、家重のはアテトーゼ型脳性麻痺による言語不明瞭であって、この病者は見かけからは想像できぬほど知的水準の高い者が多い、という。

吉宗のわが子を見る目は確かだったのである。

松平乗邑は、財政再建に貢献した功績に因り吉宗から一万石を加増されたが、家重は、吉宗が隠居すると待っていたかのように乗邑を罷免し、一万石の加増地と西の

丸下の役宅を没収して隠居謹慎を命じた。

なぜ乗邑が処罰されたのか、理由は定かでないが、乗邑が家重を廃嫡して弟宗武を世嗣に推挙しようとしたことを知っていて、その遺恨に因る報復だったのだろう。

二

家重が九代将軍になったことで、世嗣付小姓だった意次はそのまま将軍付小姓になって出世の端緒を掴んだ。

とはいえ身分制度の厳格な人事は、いかに努力しようとも能力だけで昇進するにはおのずから限界があった。

意次は世嗣家重の側にいたこともあって幕府内の人事異動の噂はよく知っていたので、実力者に縋り可愛がってもらえなければ出世できないことを肝に銘じていた。

だから意次は小普請組から西の丸小姓になったとき、十歳年上の小姓頭大岡忠光に気に入られるよう努めた。

さいわい忠光も目をかけてくれて指導してもらえた。

大岡忠光は、八代将軍吉宗の『享保の改革』で活躍した大岡越前守忠相の再従弟大岡忠利の嫡男であった。

忠光は家重を励まし親身になって仕えたので言語障害の家重の意志を以心伝心で汲み取れるようになった。

意次はその忠光を見習って、誠心誠意尽くした。

家重が将軍になって当惑したのが老中たちであった。

上申して意見を拝聴しようとしても、家重がなにを言っているのかまったく理解できないのである。

困り果てた老中たちは、幕府のなかでただ一人家重の真意を汲み取れる忠光を蔑にも縋る思いで頼りにした。

忠光は四千石の小姓組頭から五千石の御側御用取次に祭り上げられて、正式に将軍の通訳を勤めさせられた。

もはや忠光なくしては政務全般を統一管理する権威を保てぬ老中たちは、月番を無事に終えると、忠光に謝礼の金品を贈って挨拶するのが慣例になっていった。

こうして、いつか老中をも凌ぐ幕閣第一の権力者になった忠光ではあったが、しかし決して権勢を笠に着るような専横な振る舞いはなかったので、その人柄のよさがまたまた老中たちの評価を高めた。

意次もまた、驕らぬ忠光を尊敬した。

意次は、大岡忠光が御側御用取次になったあとを受けて二十九歳で小姓組番頭になり、足高制による役高四千石を下賜されて歴とした旗本に昇進した。

そして、さらに四年後には三十三歳で先輩大岡忠光と並ぶ役高五千石の御側御用取次に栄進していった。

その年寶暦元年（一七五一）、大岡忠光も五千石を加増されて一万石の大名になり、諸侯に列して上總國勝浦（千葉県勝浦市）の藩主になると、二年後にはさらに五千石を加増されて奥勤めのまま若年寄に昇進した。

意次ら側衆、役方、文官は老中支配であり、若年寄は小姓組や書院番、長谷川平藏で知られる火附盗賊改など

の番方、武官を支配する組織になっているので忠光はいったん意次の上司からはずれたが、二年後に老中と並ぶ側用人に抜擢されてふたたび将軍の側近に戻ってきた。

しかし忠光は、このとき五千石を加増されて武藏國岩槻（さいたま市岩槻区）二万石の藩主に出世していたので、意次には手の届かぬ高位高官になっていた。

意次は、先輩忠光の栄進をよき手本にして励んだ。

その努力が実を結び、寶暦八年（一七五八）九月三日四十歳のときに五千石を加増されて一万石の大名に列せられ、評定所に出座することになった。

評定所は、和田倉門外辰ノ口（丸の内日本工業倶楽部あたり）にあって寺社奉行、町奉行、勘定奉行の三者がそれぞれ重要案件を持ち寄って合同審議する場であり、そこに老中、大目付、側衆などが加わって裁定するのだから、現代の最高裁判所といったところであろう。

六百石の家格の意次が二十三年後には一万石の大名になったのだから、その立身出世ぶりは目覚ましい。

意次は、この評定所へ出座することで、訴訟をとおして世の中のどろどろした生臭い情況を習得していった。

それから二年後の寶暦十年（一七六〇）四月一日に、九代将軍家重が隠退して二の丸に移った。

この家重の隠退によって側用人の役目を成し遂げたかのように、意次が尊敬してやまなかった大岡忠光が、その月の二十六日に五十二歳で世を去った。

二十六年間、実の兄のようにその人柄を慕いつづけ、模範にしてきた偉大な人物を喪って悲嘆に暮れた意次であったが、よき先輩だった忠光を超えることが恩義に報いることだと決意して、幕政を一手に握る老中にまで上り詰める努力をつづけることをひそかに霊前に誓った。

九月二日に、家重の嫡男家治が十代将軍になった。

三

隠退した家重は、翌年六月十二日に五十一歳の生涯を閉じたのだが、江戸幕府の編年体実録『徳川實紀』によると、家重は臨終の枕許に家治をよんで、

「主殿はまたうとのものなり。行く行くこころを添えて召し使はるべき（田沼主殿意次は完全無欠な人間である。さまざま心をかけて召し使うように）」

遺言した。

家治は、

「至孝の御心により登庸もなさるべし（父家重への孝心によって引きつづき意次を登用した）」

つまり意次は、家重・家治の二代にわたって引き立てられたのだ。

意次は五千石加増されて一万五千石になった。

だが、だからといってすぐに幕閣の頂点に立てたわけではない。

このときはまだ門閥の先輩たちが数人頑張っていた。

家治が将軍になって八年後に意次は西の丸老中になった板倉勝清の後任として側用人に就任し、五千石を加増されて遠江國榛原郡相良（静岡県牧野原市）二万石の領地を賜わり、四十九歳ではじめて城持ち大名になった。

側用人というのは将軍の命令を老中に伝え、老中や若年寄の上申を将軍に取り次ぐ役職であるから、将軍と直接口を利ける立場にあると同時に、幕府内のことはすべて把握できたのである。

そのころ、意次の後輩でのちに腹心になる水野忠友も側衆から若年寄に昇進して一万石の大名に列せられた。

三年後、意次は五十一歳のときさらに五千石を加増されて二万五千石になり、老中格に昇進した。

将軍の身辺に仕える側用人、側衆、小姓など奥向きの役人は、役職に昇進しても老中にはなれなかった。

五代将軍綱吉お気に入りの側用人柳澤吉保は、老中格、大老格にはなったが、ついに老中、大老にはなれず、現代の企業でいえば取締役待遇までで終わっている。

若年寄まで出世した大岡忠光が、これまでの奥向き役人の最高位であったのだ。

だが、意次は老中格の側用人ではとどまらず、三年後の明和九年（一七七二）正月、三河國内で五千石を加増されて三万石となり、ついに老中に栄達したのである。

老中になると他の役職はすべてはずれるのだが、意次の場合は側用人のままであったから、将軍と直接話ができるただ一人の老中で絶大な権力を握ったことになる。

これは、家治が将軍になって十一年後のことであるから、この意次の異例の出世は前将軍家重の遺言に因るものだけではなく、家治自身がよくよく意次の資質を認めての抜擢だったにちがいない。

四

五十四歳で老中に昇進した意次は、三河國内に五千石を加増されて三万石になった。

だがこの年は、春には大火が起こり、秋には台風に見舞われるという異常事態になって、物価が暴騰した。

大火は二月二十九日火元は目黒行人坂の大圓寺で、武州無宿の眞秀という二十六歳の願人坊主の放火だった。

この日は折悪しく春一番が吹き荒れていて、強風に煽られた火はたちまち白金、麻布、西久保と北へ向かって燃え拡がり、外櫻田御門、日比谷御門、馬場先御門、和田倉御門から西の丸下におよび、江戸城を掠めて一橋邸、神田橋御門、本町、石町、筋違橋、湯島聖堂と延焼して、神田の高台からさらに下谷鳥越、浅草箕輪、金杉田町、千住小塚原にいたる広大な面積を焼き尽くした。

この日はまた、酉の刻（午後六時）ごろに本郷菊坂町からも別の出火があり、谷中三崎に延びた火は東叡山上

野寛永寺を取り巻くようにして一帯を焼き尽くした。

この目黒行人坂の火事は、明暦三年（一六五七）の振袖火事、文化三年（一八〇六）の牛車火事とともに江戸時代の三大火事にあげられるほどの大火であった。

放火犯人眞秀は、六月二十一日に市中引回しのうえ浅草において火炙りの刑に処せられたが、このため焦土と化した江戸市中の復興で諸物価が一斉に暴騰した。

そんなところへ、こんどは八月二日に東海地方へ上陸した台風が関東、東北地方へ襲ってきたので、江戸の町は建築中の家屋や板塀などが吹き飛ばされ、永代橋が傾いて通行不能になるなど踏んだり蹴ったりの大被害になったが、農村地帯も収穫期をまえにしての風水害で実りの秋は一転して大凶作状態になってしまった。

この災厄つづきの凶年を嫌った幕府は、朝廷に奏上して十一月十六日に『明和』を『安永』に改元したが、元号変更だけで諸物価の高騰が収まるはずはなかった。

うんざりした庶民のあいだで、

世の中は安く永しと変はれども
諸色高直いまに明和九

そう幕府の無策を嘆き嘲弄する落首が広まった。

意次は老中格から老中の末席に就いたばかりの年に世上混乱収拾の試練を受けて、前途多難な船出になった。

五

意次は老中になったもののすでに四人の先任がいたので、側用人兼帯とはいえ先輩たちを立てて自重した。

その序列にはじめて動きが出たのは、七年後の安永八年（一七七九）七月であった。

先代将軍家重の代から二十二年の長きにわたって老中を勤めてきた松平右近将監武元が六十七歳で死去した。

松平武元は翼鑁として老中首座・勝手掛の重職を勤め、権勢を誇っていたので、その座を目指す意次は時節到来を待って雌伏せざるを得なかった。

その松平武元の長期政権が終わったことによって、意次はようやく権力の座に一歩近づくことができたのだが、しかし、武元のあとの首座松平右京大夫輝高が意次より五歳年下であることが気掛かりだった。

だが、意次の強運がその懸念を払拭した。

親亀が倒けると、子亀もつぎつぎに倒けたのである。

翌年には三席の板倉佐渡守勝清が、翌々年には首座の松平輝高が相次いで世を去って、老中は松平周防守康福と意次だけになってしまったことから、久世大和守廣明が老中に側用人の水野出羽守忠友が老中格に栄進した。

天明元年（一七八一）九月のことである。

将軍家治は、この機会を捉えてこれまでの慣例をあらため、財務担当の勝手掛はかならずしも老中首座でなくてもよいとして、経済感覚に優れた聡明な意次を起用し

ようとしたが、意次は首座松平康福の立場を気遣って固辞し、かわりに老中格になった水野忠友を推挙した。

水野なら若年寄のときに勝手掛の事務方を勤めたことがあるので登用に無理はなかったし、自分が受けなければ康福もきっと承知するだろうと考えたのである。

意次と康福とは古くからの馴染みで、いつごろからか肝胆相照らす仲になっていたことから、嫡男意知に康福の娘を娶って姻戚関係になっていた。

こうして老中は、首座松平康福、次席意次、三席久世廣明、勝手掛は老中格の水野忠友という体制になった。

意次は、康福に遠慮してせっかくの好機を先送りしてしまったようにみえるが、実はそうではなかった。

松平康福は人畜無害の好人物だったから、首座として祭り上げてさえおけば意次の施政方針に異議を唱えることはないはずだし、水野忠友はこれまでなにかと目を掛けてやってきた意次の腹心であった。

だから、表向きはともかく、実質的には意次が老中首座と勝手掛の重職を掌中にしたも同然なのであった。

こうして身辺を固めておいて田沼時代の幕を開けた。

以後、意次は天才的行政手腕を発揮して、つぎつぎに画期的な政策を実施してゆく。

六

これまでの幕府財政は、赤字になれば年貢率を引き上げて穴埋めするという御座なりなものであった。

開府当時の徳川家は膨大な資産を所有していたから、いくら支出が増えようとも不足分は資産の一部を充当すればそれで事足りたので損益計算など考える必要がなく、無計画が慣習になっていた。

ところが、百年後の元禄のころになると、その所有資産も底を突いてしまった。自己資本の食い潰しである。

はじめて財政危機に直面した八代将軍吉宗は、背に腹はかえられず強引に『享保の改革』を実施して行政改革をおこない、さらに倹約令や年貢の増徴など形振り構わぬ諸政策を打ち出して、どうやら黒字財政に転換した。

だが、内部留保を蓄積するところまではいたらず、財政内容は依然として予断を許さぬ状況にあった。

計数に明るい意次は、財政を担当するにあたって予め収入計画と費用の支出額を定めておくべきだと考えた。

今日でいう資金繰りである。

年貢収入はもはや限界率ぎりぎりまで取り立てていて、これ以上の増徴はのぞめないことから、諸掛費用を収入の限度内に抑え込まなければならなかったのだ。

そこで意次は各部署に費用を配分して収支の均衡をとることにした。はじめての勝手掛予算制度の確立である。

費用のなかでは、将軍の身の回りや大奥などの御納戸と、町奉行担当の民政関係がもっとも多額であった。

意次は、その部署の大幅な切り詰めを策した。

御納戸の諸経費についてはなるべく倹約するよう要請し、民政関係の費用は必要最少限度の合理化を図った。

そのため、御納戸は将軍家治の理解は得られたものの、大奥の顰蹙を買って怨まれたが、この緊縮政策によって辛うじて赤字経営から脱することができたのである。

七

農業基本の幕府税収入は、米の収穫高（所得）に一定率を割当る年貢という直接税方式であったから、その年の作柄によって増減する不安定なものであった。

だから幕府は、収入が減少すると一方的に年貢率を引き上げて不足分を補塡し、収支の辻褄を合わせてきた。

しかし、そんな姑息な手段を弄したところですぐに限界がきてしまい、吉宗のときには年貢率を引き上げたことによって農民一揆が多発して世情騒然となった。

当時西の丸の世嗣（家重）付小姓を勤めていた意次は、吉宗の失政で幕閣が動揺するのを目撃して、年貢という直接税だけに依存する税制の欠陥を肌で感じていた。

このことから意次は、

「財政は常に予備費を計上するだけの予猶を持たせ、財源に窮しても安易に年貢率を引き上げるべきではない」

そう考えて予算を立てた。

年貢率を引き上げれば農民の可処分所得が減って生活が苦しくなるのは当然であって、農民を犠牲にして財政を潤沢にしようと考えるのは悪政であるに違いない。

意次は、

「農民あっての国家（藩）」

だとする施政を貫いて改革をすすめていった。

同時代の上杉治憲（鷹山）の理念とおなじである。

では意次は、年貢率の引き上げをやらないでいったいなにに新たな財源を求めようとしたのだろうか。

元禄以来商品の流通が盛んになってきていて、この流通業界の発展が経済規模を拡大してきていたのだが、これまでの税制は商品には課税しないことになっていた。

一時期、五代将軍綱吉の元禄時代にときの勘定奉行荻原重秀が米の仮需要を抑制するため酒造に五十パーセント課税をしたことがあったが、まもなく新井白石によって潰され、酒造制限令に入れ替わってしまっていた。

意次は、農民が重税に喘いで米穀生産の意欲を喪い、商品作物の生産に励んで課税を回避していることや、課税されない商業が発達して流通が盛んになってきている現状を直視して、年貢の増率に代えて商人たちに同業組合を結成させ、運上金という名の間接税を課した。

発想の転換による税制大改革である。

そうなると、商人たちのほうも黙ってはいなかった。

課税される反対給付として、納税組合に流通の独占権

を与えることを要求してきた。
意次は、相互利益でこの条件を受け入れた。
こうして流通業界にはじめて『株仲間』が誕生した。
吉宗のときにつくられた『座』は同業組合であったから、同業者は誰でも自由に入ることができたが、この『株仲間』は組合の権利が株というかたちで固定されるから、同業者が増えることはなく、したがって無理な販売競争はおきないし、利益は擁護されるという商人にとって願ってもない独占権であった。
特定の集団による専売制度の発足である。
意次はこの株仲間を商品ごとに増やしてゆき、さらには商品販売のみに限定しないで廻船、飛脚といった輸送、通信業者にまでひろげて運上金収入の増大を図った。
この新税収入によって、幕府の財政は好転した。
意次による重農主義から重商主義への転換である。
株仲間は許可制度なので、専売によって営業が保護される利点があるところから、幕府は新たに株仲間を許可するときには冥加金を上納させた。つまり献金である。
だが、この『株仲間の許認可制度』が、利権がらみの汚職の温床になってしまった。
意次は、これまで収賄政治家として汚れた印象が強いが、権力の座に就けばつねに賄賂がついてまわるのだ。
意次が清廉潔白だったとはいわないが、賄賂政治に終始した悪徳権力者だったというのは、多分に政敵松平定信の遺恨による誹謗中傷によって強調されすぎたのだ。
このことについては、あとで詳述する。

八

幕府は、開府九年後に家康がキリスト教禁止令を発布して以来、わずかに長崎港だけをひらいて中国、オランダと通商するほかは、諸外国との交流や日本人の海外渡航を禁止する鎖国政策をとっていた。
だが、中国、オランダとの通商も片貿易といわれる輸入だけだったので、莫大な金銀が流出した。
鎖国で海外の事情がわからず金銀相場にも無知だったことから、不当な代価を支払わされていたようである。
意次は中国貿易の決済に金銀支払いをやめ、七割を銅、三割を俵物や昆布などの海産物で支払うことにした。
このことによって金銀の流出を防いだだけではなく、現物での支払いは同時に海産物の輸出につながった。
進歩的で開明派の意次は、はやくから海外に注目していて、オランダ文化に強い関心を抱いていたので、洋学研究の禁止令を緩めて積極的に蘭学時代の幕を開けた。
意次の恩恵に浴した前野良澤、杉田玄白は、中川淳庵、石川玄常、桂川甫周の協力を得て安永三年（一七七四）八月に『解體新書』を刊行したし、薬用植物研究家で劇作者、浄瑠璃や歌舞伎脚本の作者でもある多才な平賀源

内を援助して、海外物産展をひらかせたりした。
こうした政策をみてくると意次は鎖国を解いて開国しようと考えていたのではないかと思われるのだが、幕府の正史『徳川實紀』を調べてもそれらしい記述がない。
ところが、あるとき先輩作家のN氏と雑談していて、話題が幕末の開国政策に及んだとき、N氏が突然、
「動きはもっとまえからあって、中期の老中田沼意次はすでに大船を建造して欧州航路を開こうと考えていた」
のだということを話された。
これまで田沼意次は賄賂政治で失脚した悪徳老中ときかされていたので、そのあまりの較差に耳を疑った。
「あの田沼意次がですか」
私は唖然として思わず疑わしい素振りをみせたらしい。
するとN氏は、
「そのことは、当時長崎に駐在していたオランダ商館長イサーク・チチングの著書『日本誌』に書かれている」
そう確信をもって言われた。
さらにN氏は、
「チチングは、意次だけでなくその子意知についても高く評価していて、同書の文中に、『田沼山城守意知は非常に才識があり、父主殿頭とともに種々改革を企てようとして開国のことを図ったが、他の高官のために弾劾されて暗殺された。この山城守の死によって開国の望みは絶えた』とも記されている」
こともつけ加えられた。
このチチングの記述によれば、このときすでに幕閣内では攘夷論と開国論との対立があったことになる。
たしかに歴史に「もしも」は無意味だが、敢えていえば、もし意次のこの理想が実現していたら、日本は嘉永七年（一八五四）の『日米和親条約』を待たずに八十年も早く開国して、近代国家になっていたはずである。
意次は、早過ぎた開国論者であったのだ。

九

経済とは、大義では国を治め人民を救う『経国済民』を省略してのことであるが、その観念となると観察し思念すること、すなわち経済観念とは金銭を効率的に使い遣り繰りしようとする考えをいうことになる。
その金銭とは、すなわち通貨のことである。
江戸時代の通貨は、東国が金貨、西国が銀の地金を秤で量って使用する秤量貨幣であった。
この二本立通貨体制であったために、金と銀との交換相場で両替商が不当な巨利を得ていた。
吉宗は『享保の改革』でこの通貨の一元化を図り、民政担当の町奉行大岡越前守が両替商との交渉にあたったが、結果はこれも挫折して一元化にはいたらなかった。
『銭』という小額通貨だけが全国共通であったが、小銭

が経済取引の決済に使用されるはずはなかった。
この二本立が、大坂の出荷地と江戸の消費地との流通をややこしくしていて、経済発展の支障になっていた。
経済を発展させてゆくには通貨の一元化が不可欠の要因であると考えた意次は、吉宗以来停滞し懸案になっていたこの問題の解決に取り組んだ。
明和二年（一七六五）に『明和五匁銀』を鋳造して、銀の質や量に関係なく銀五匁の貨幣であるとした。
そして、銀貨の匁表示ではあるが金銀相場の交換比率に関係なく十二枚で金一両として流通するよう命じた。
江戸時代の銀貨は秤量貨幣であると述べたが、これによってはじめて銀貨が定額貨幣になったのである。
意次の才覚で、難題だった通貨の一元化が実現した。
幕府が公定交換比率を認定しようとすることに頑強な抵抗をつづけて利権を維持してきた両替商たちは、この意次の意表を突く着想に茫然自失したに違いない。
なおこの『明和五匁銀』は品位が悪かったため、明和九年（一七七二）九月に『南鐐二朱銀』に替えられた。
一朱十六枚で一両だから八枚で一両ということになり、『南鐐二朱銀』は『明和五匁銀』より価値が上がった。
後日談だが、この通貨の一元化は天明八年（一七八八）両替商たちが幕閣に取り入り、将軍補佐役松平定信によって『南鐐二朱銀』の鋳造が停止され『丁銀』という海鼠形の銀塊に替えられて秤量貨幣に戻ってしまった。

このことによって、せっかくこの意次の時代に大発展した日本経済も頓挫してしまったのである。
通貨の一元化が実現するのは明治四年（一八七一）五月十日発令の一円を単位とする『新貨条例』によってであるから、八十三年もおくれてしまったことになる。

十

意次は、運上金という流通課税を実施して税収を増やし、財政を好転させはしたが、しかし、まだ不時の出費に備える予備費を確保するまでにはいたらなかった。
年貢率を引き上げずに予備費の財源をどう捻出するか、この難しい問題に意次はあれこれ思索を重ねた。
そして、課税対象になる耕地の拡大に思いいたった。
増税なき増収のための広範囲な新田開発構想である。
候補地は下総（千葉県）の印旛沼と手賀沼であった。
印旛沼は吉宗の『享保の改革』で実施されかけた。
この沼は利根川下流の右岸に位置する曲がりくねった沼で、利根川満水時の遊水地の役割も果たしていた。
その印旛沼の水を西端の平戸（八千代市）から江戸湾の検見川（千葉市花見川区検見川町）まで掘り割を作っておとし干拓しようという計画で、享保九年（一七二四）八月平戸村の名主染谷源右衛門からの出願を受けた幕府は、乗り気になって六千両の補助金を与えたのだが、工

事は思いのほか難航して費用が嵩み、ついに金主の源右衛門が破産して立ち消えになってしまったのである。
天明二年（一七八二）二月、意次は勝手方勘定奉行松本秀持に調査を命じ、その現地調査の結果、享保九年の工事計画の概要をそのまま引き継ぐことになった。
この計画のなかで意次が一箇所修正させたのは、利根川と通じている沼の北端を閉鎖しないで観音開きの水門にさせることだった。印旛沼が受け持っている利根川遊水地の役目をそのまま活かそうと考えたのである。
さらに、銚子沖に辿り着いた東北諸国からの物資輸送船が、利根川を遡行して佐原で川船に積み替え関宿から江戸川に入って江戸湾へ到着している現在の水上交通経路を、この掘り割りを運河にすることで大幅に短縮すれば輸送費軽減によって流通が活性化されると考えた。
これは総費用六万両、人足数二百四十万人を超える大工事であったが、江戸浅草の長谷川新五郎と大坂の天王寺屋藤八郎が金主を引き受けてくれたので、地元の名主が世話人になって、完成した新田の八割を金主に、二割を世話人たちに配分することで実施が決まった。
実現すれば三千四百町歩の新田開拓で収穫量は反当たり一石、一町歩は十反だから三万四千石が見込まれた。
そればかりではない。印旛沼はこれまでたびたび洪水をおこして周辺の米作に被害を与えていたから、その二万五千石あまりが冠水を免れるという恩恵もあった。

意次は、課税対象の収穫高を試算して増加する税収を目論見、たのしみにしていたに違いない。
ところが翌年、そんな夢を打ち砕く天災が起こった。
天明三年（一七八三）七月六日、上野と信濃の国境に聳える三重式活火山の浅間山が大噴火したのである。
三箇月まえの四月八日から鳴動がはじまって、五月二十六日と六月十八日に小規模の噴火があった。
これが予兆であった。
噴火は、二十八、二十九、三十日と次第に激しさを増していって、ついに七月六日夜から八日にかけての三日間まるで地獄絵でも見るような大噴火が起こった。
火砕流で麓の鎌原村（群馬県吾妻郡嬬恋村）が埋没、火山灰は上野、武蔵、信濃國の広範囲に降り積もった。
それは、八十年まえに起こった元禄十七年（一七〇四）正月元日から三日にかけての噴火とは比較にならぬ超弩級で、まさに想像を絶する凄まじいものであった。
上野から武蔵にかけての一帯には天領が点在していて、幕府はこの降灰によって年貢減少の大打撃を受けた。
幕府財政はそれだけにとどまらず、降灰除去の公共事業に膨大な臨時出費がかかって収入減少、費用増大の二重打撃を受けて深刻な事態に立ち至ったのである。
その財政再建にも印旛沼の干拓工事は急務であった。
意次の激励を受けて工事は順調に進捗し、七割がすすんだところまできたとき、またまた天災が起こった。

天明六年（一七八六）七月、関東を襲った集中豪雨で各河川が氾濫し、大水害になってしまったのである。

三年まえの浅間山大噴火のときの降灰が河床に積もっていて、水捌けが悪くなっていたのが原因であった。

この大水害によって、印旛沼と手賀沼の干拓工事は頓挫してしまい、やむなく断念せざるを得なくなった。

意次が財政再建で取り掛かった干拓事業は、再度にわたる天災によって虚しく挫折してしまったのである。

どんなにか無念だったであろう。心中が察せられる。

十一

意次は、印旛沼の干拓と同時にもうひとつ遠大な計画を立てていた。それは蝦夷地（北海道）の開拓である。

蝦夷地は松前藩の領有地であった。

藩主松前道廣の居城松前城は、青森県津軽半島と向き合う北海道南西部松前半島の南端松前郡松前町にある。

そんな辺鄙な片隅にいて八万三千平方キロメートルもある北海道全域を支配できるだろうかと疑いたくなる。

実際は、疑念を抱くまさにそのとおりであった。

藩祖松前慶廣は慶長九年（一六〇四）に家康から蝦夷地の支配権を認められたが、北方辺境の不毛の地で米の収穫がなかったので石高はなく、藩財政は商人たちからの運上金で遣り繰りされ、家臣に宛行う知行は沿岸の漁業権という幕藩体制下で唯一変則的な藩であった。

だから、蝦夷地は松前藩領といっても名ばかりで、実情はその大部分が治外法権の原野だったのである。

意次は、これまで手つかずのまま放置されているこの広大な荒地に目をつけて、開拓しようと思い立った。

意次の心を動かしたのは、工藤平助が提出した『赤蝦夷風説考』という著書を読んでのことであった。

平助は紀伊國（和歌山県）の生まれで、先代藩医工藤丈庵の養子になると服部南郭、青木昆陽らに儒学を学び、長崎留学中に政治に興味を抱いた開国論者であった。

平助は著書のなかで、ロシアの南下を警告して交易をすすめ、併せて蝦夷地を開拓経営することを主張した。

意次は、この『赤蝦夷風説考』に触発されて、夢のような経営計画を本気で実行しようと決断したのである。

着想を出しておきながら、実現困難だとさっさと見切りをつけてしまうのは並の政治家だが、知恵を振り絞ってその夢の実現に挑戦しようと奮い立って行動を起こしたところに意次の非凡な大物政治家ぶりがうかがえる。

天明五年（一七八五）二月、意次は山口鐵五郎ら五人の普請役を選んで蝦夷地の調査を命じた。

彼らは蝦夷地へ渡ると松前に本拠を置き、東回りと西回りの二隊に分かれて同時に調査を開始した。

秋になって松前から届いた調査報告によると、全面積約千百六十六万四千町歩の一割が耕地になるという。

計数に明るい意次は、報告書をもとに試算してみた。

耕地可能面積百十六万六千四百町歩を反に換算すると、一町歩は十反だから千百六十六万四千反になる。

当時の米の収穫高は反当たり一石だったが、北辺の寒冷地ということを考慮して反当たり二分の一の五斗と見積もっても、五百八十三万二千石の収穫が期待できる。

天領は四百五十万石だから、倍増以上の収入である。

意次は、具体策決定次第各藩から移住者を募り原住民のアイヌ人たちも帰農させて労働力にしようと考えた。

ところが翌年八月二十七日、意次は政敵松平定信を中心とする反対勢力の政権奪取によって辞任に追い込まれてしまい、この遠大な開拓計画は夢と消えてしまった。

このとき、意次が失脚せずに蝦夷地開発構想が実現していたら、明治七年（一八七四）六月の屯田兵制度の設置より一世紀も早く北海道の警備と開拓がすすめられて、巨大な荒地が活用されていたはずである。

次の松平定信政権では、意次の政策が悉く否定されてしまったために、印旛沼の干拓も、この蝦夷地の開拓も引き継がれることはなく、立ち消えになってしまった。

十二

田沼政権の崩壊は意次の嫡男意知が江戸城内で刺殺されたことが契機であった。

意知は天明三年（一七八三）十一月一日、三十四歳の若さで若年寄に抜擢された。

幕府組織のなかで大名の役職は、老中、若年寄、側用人、奏者番、寺社奉行、京都所司代、大坂城代である。

老中を年寄衆といったから若い老中ということで若年寄といったのであろうから、老中に次ぐ重職であった。

側用人から老中に就任した意次は異例の抜擢であったが、意知のほうはいきなり若年寄になったのであるから、父を凌ぐ異例中の異例ともいえる大抜擢に違いない。

このことが、幕府の首脳たちに危機感を抱かれて、

「田沼親子は、幕府を私物化しようとしている」

そう思われて警戒された。

その意知が、若年寄就任から僅か五箇月後の天明四年三月二十四日に、執務を終えて退出しようとして新番所のまえを通りかかったとき、なかにいた佐野善右衛門政言が飛び出してきて、いきなり意知に斬りかかった。

手傷を負った意知が、組頭の詰所桔梗の間へ転がり込んでその場に昏倒したところへ、追い付いた善右衛門に滅多斬りされて、間もなく息を引き取った。

善右衛門はただちに取り押さえられ、江戸城内で刃傷に及んだ犯罪人として十日後に切腹させられた。

意知は三十五歳、善右衛門は二十八歳であった。

なぜ、このような刃傷事件が起きたのか。

佐野善右衛門政言は四百石の知行取り佐野政豊の子で、

お目見得以下の御家人であったため、なんとしても出世をしたいと願って若年寄の意知にたびたび金品を贈って取り縋ったのだが、いっこうに取り立ててもらえなかったので、ついに腹を立てて刃傷に及んだというのだ。

この事件を伝えきいた田沼親子の暴政に苦しむ江戸の町人たちは、善右衛門を〈世直し大明神〉と称えたと伝えられているのだが、まえに述べた長崎駐在のオランダ商館長イサーク・チチングの著書『日本風俗圖誌』によると、事情がまったく違っていた。

チチングは、この著書のなかで、

「諸般の事情から推察するに、この事件は、松平定信ら幕府の有力大名が佐野善右衛門に指図して、犯行に及ばせたように思われる」

そう推理している。

そして、その根拠として、

「そもそも、この暗殺計画は、田沼意次、意知親子の改革政治を妨害するために、意次を亡き者にしようとしたといわれる。しかし、意次は老齢であるから間もなく死ぬであろうし、そうなれば改革も中止になる。が、意知のほうはまだ若いから、父意次の遺志を継いで実行する歳月は充分にある。大事な息子を殺してしまえば父親にとって大打撃であり、悲嘆のあまり改革の手も鈍るであろう。そう考えて、意次ではなく意知のほうを殺すことに決定したのである」

そう断定している。

チチングの推理がどこまで当たっているのかはさだかでないが、当時オランダ、スペイン、イギリス、フランスなどの西欧列強は、あわよくば日本を植民地にしようと虎視眈々と狙い、競い合っていたふしがあり、当時の駐在者は日本の国情を細大洩らさず具に探索して逐一本国へ報告していたのだから、このチチングの記述は満更当て推量ではないであろう。

事実松平定信に表沙汰になっては困ることがあった。

天明二年（一七八二）から七年にかけて、関東以北は五年も冷夏暖冬の異常気象になり、凶作がつづいた。

なかでも天明三年には、七月初めに袷に綿入れを着用する異常事態になり、未曽有の大飢饉になった。

とくに、奥羽地方の被害はひどく、杉田玄白の『後見草』や菅江眞澄の旅日記『外ヶ浜風』などには、

「飢えた者たちが死者の人肉まで食べた」

そういう信じられないような凄まじい描写がある。

戦後の文壇で人肉食を扱った小説といえば武田泰淳の『ひかりごけ』で、太平洋戦争末期に難波した船の船長が同船している水夫の肉を食って生きのびたという話ぐらいだったが、先年物故した三浦哲郎が昭和五十六年（一九八一）に発表した『おろおろ草紙』はずばりこの天明の飢饉をとり上げたもので、奥州八戸藩内で起こった凄惨を極めた住人共食いの惨状を具体的に書いている。

餓死者の推定人数について、本多利明の『經世秘策』には、

「癸卯（天明三年）以後四ヶ年、凶歳飢饉にして奥洲一ヶ國の餓死人數およそ二百萬人余」

とあり、松平定信の『宇下人言』には、

「こぞ（天明四年）仙臺にて餓死したる人四十萬人に満てり。津輕も二、三十萬人死せり」

と記されている。

このため、消費地である江戸の米価は倍以上も吊り上がって社会不安になった。

飢えた人々は村を捨て江戸を目指した。江戸へ行けばなんとか生き延びることができるだろうと思ったのだ。

ところが、江戸は異常な米価高になっていて、裕福な人たちでさえ満足に食べられない状態であった。

そのため、難を逃れて辛うじて江戸へ着いた農民たちは、つぎつぎに飢え死にしていった。

あちこちの道端に行き倒れの死骸を見かけない日はなく、奉行所に届け出た数だけでも千人を超えたという。

幕府はこれらの避難民たちに救米を放出し、粥を炊いて施したが焼け石に水であった。

飢えた人たちは、生きるために徒党を組んで米屋や商家を打ち壊す暴挙に走り、物情騒然となっていった。

意次は、天明四年四月二十三日米商人以下に米の買い占めや売り惜しんで囲米することを禁止する布令を出すとともに、徒党、打ち壊しの弾圧と厳重取り締まりを命じた。つまり世にいう〈戒厳令〉である。

意次は、大飢饉になった凶作は異常気象に因る関東、奥羽地方の範囲に限られていて全国的な現象ではないから、米の買い占めや囲米を禁止して流通を統制すれば飢饉は救済できると考えたのだ。

このとき、奥羽に領内から餓死者を出さなかった名君が二人いた。

ひとりは、明和四年（一七六七）に十七才で累積赤字を抱え倒産状態だった米澤藩を受け継ぎ財政再建に打ち込んできた上杉鷹山（治憲）で、窮乏のなかから僅かずつ備蓄をつづけてきた貴重な米を放出して領民を飢餓から救済すると同時に、この不測の事態を教訓にして、あらためて備蓄二十年計画を立てて実施に踏み切った。

もうひとりは養子に入って昨年白河藩主になったばかりの松平定信で、飢餓になるとすぐさま行動に移り、家臣を上方へ派遣して米商人から六千九百五十俵の米を買い占めさせ、三代まえまでの旧領越後高田藩に懇願して一万俵を借り入れると、これを備蓄米と称して放出し、領内から餓死者を出さなかったので名君の声が高まり、翌年十二月、親藩、譜代大名のなかから老中とともに重要会議に参画を許される江戸城溜場詰に選ばれた。

鷹山も、定信も、領内から餓死者を出さなかった行政手腕は高く評価されるが、内実は鷹山が自力で苦しい財

政のなかから貯えたものを放出したのに対して、定信は他に依存して急場を凌いだのであるから、この買い占めや囲米は明らかに幕法違反であった。

後日事実が判明すれば処罰されることは間違いない。

定信は、ことが露見するまえに田沼政権を倒してしまわねばならない必要に迫られていた。

そうみてくると、名君と称えられて溜間詰に選ばれた定信は、切羽詰まって策を弄し、佐野善右衛門を唆して刺客に仕立て、田沼意知を殺害したというチチングの推理は正鵠を得ているといえる。

十三

意次の資質を認めて幕閣最高位の老中にまで取り立ててくれた将軍家治が不治の病に倒れると、溜間詰になった松平定信を中心とする反田沼派勢力が台頭してきた。

そして意次は、定信らに、

「浅間山の大噴火や、それにつづく大水害、大飢饉などはすべて田沼意次の悪政による天罰なのだ」

そう責任を押しつけられて、大水害でやむなく印旛沼の干拓工事を中止した直後の天明六年（一七八六）八月二十七日に、十七年間勤めた老中職を罷免させられた。

そして、将軍家治の死去から二箇月後の閏十月五日に封地二万石と江戸屋敷、大坂蔵屋敷を収公され、さらに翌七年十月二日に遠江相良三万七千石を収公されて別荘に謹慎蟄居を命ぜられた。

このとき田沼家は嫡孫意明にあらためて陸奥信夫郡と越後頸城郡のうち一万石を与えられて家督を許され、陸奥下村（福島市）に陣屋を構えた。

将軍の後ろ盾を得て小身から老中に出世し、権勢を誇った意次だったが、偉大な支えを喪っては御三卿や門閥、譜代大名の圧力に耐え切れず、脆くも崩れ去った。

意次は、これまで述べてきたように経済に明るく、開国を目指して貿易や蝦夷地の開発に積極的だった進歩的開明派の敏腕政治家であったが、賄賂政治だけが喧伝されて蔑視され、悪徳政治家の烙印を押されてしまった。

田沼意次以前にもおなじような話があった。

元禄のころに荻原重秀という能吏がいた。

重秀は老中支配の勘定吟味役のときに、商品経済の著しい進展によって貨幣の絶対量が不足していることを痛感して、改鋳の必要性を建議した。

重秀が提案した改鋳案というのは、金の含有量を六十七パーセントに、銀を八十パーセントに減らして流通量を増やすというものであった。

この重秀の金融政策は、ときの権力者側用人柳澤出羽守吉保ら幕閣の絶大な支援を得て、元禄八年（一六九五）八月、勘奉行に老中阿部豊後守正武、若年寄加藤明英の両名を据え、主任の重秀が陣頭指揮を執るという

特別編成組織によって鋳造が開始された。

この元禄の貨幣改鋳によって幕府の財政は潤沢になったが、その反面物価騰貴を招いて経済が混乱した。

通貨の流通量を増やせば貨幣価値が下がり、物価が急騰してしまうのは当然のことであるが、商品経済の伸長に合わせて通貨の発行量を増やすことは貨幣経済としては已むを得ない政策であった。

重秀は、幕府の財政を潤沢にした功績により、翌九年四月十日勘定奉行に栄進した。

重秀は、将軍が五代綱吉から六代家宣に替わったあとも勘定奉行の職にあって、寶永七年（一七一〇）にもさらに含有量を減らす改鋳を実施したが、儒者新井白石の三度にわたる弾劾上申によって世紀の大悪人の烙印を押されてしまい、正徳二年（一七一二）九月十一日ついに勘定奉行を罷免された。

重秀は白石に「品性下劣」と罵倒されたが、二度貨幣の品位を下げたのだからそう蔑視されても仕方がない。

この荻原重秀と同様に意次もまた政敵松平定信の誹謗中傷によって「君側の奸」にされてしまったのである。

このころの『伊呂波歌留多』にも、

「武士は食わねど高楊子」

とあるように武士は貧困の苦しみにあっても体面を重んじて気位を高く持てと教えられていたので、金銭を卑しむ賤貨思想が根強かったから荻原重秀の商品経済進展に追随する貨幣量産の金融政策や、意次の時代を先取りした重商主義は封建武士社会の美意識から嫌悪された。

それもあってのことであろうが、直接的には松平定信らの反田沼派がこの数年のあいだにつづいて起こった浅間山の大噴火、江戸の大火（鳥越火事）や風水害、それに奥羽の大飢饉などの天災を恰好の攻撃材料にして、

「これらの災害は、すべて田沼の悪政に因る天罰だ」

そう天災を人災に転嫁すると、既成の制約に拘束されない柔軟な発想で新時代を築こうとした意次の政策を非難して、強引に失脚させてしまったのである。

十四

松平定信は田沼意次に徒ならぬ遺恨を抱いていた。

八代将軍吉宗は、家康が本家に嗣子なきときを慮って尾張、紀伊、水戸の三家を継嗣家にして徳川姓を与えた故事に倣い、田安、一橋、清水の三卿を三家に次ぐ家格として賄料十万石を与え、徳川姓を許した。

この吉宗の思惑は杞憂に終わり嫡男家重、嫡孫家治と順調に継続してきたがここへきて継嗣問題が起こった。

家治には男子が二人いたが、二男貞治郎は生後三箇月で早世してしまっていて、嫡男家基だけになっていた。

その家基があろうことか十八歳で病歿してしまった。

安永十年（一七八一）二月家基の三回忌法会のあと、

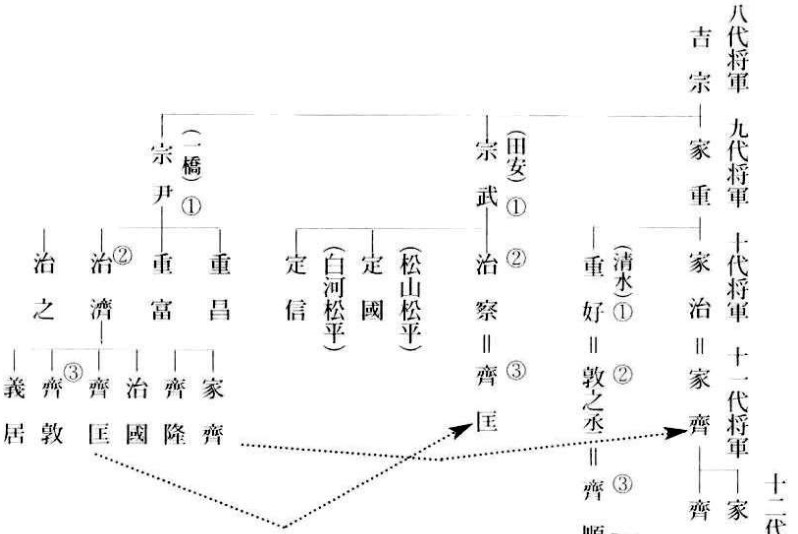
家治は将軍世嗣になる養子の人選を意次に命じた。
これを知った一橋・二代治濟が意次に取り入ってきた。
意次の弟意誠、意致父子は一橋家の家老であった。
そんな縁故で意次は治濟と親交を深めていたのだ。
意次は、人選の対象を三卿に絞ったが、その場合一橋家より筆頭の田安家から選ぶのが順序であった。
田安家は当主の二代治察が病弱で、弟定國はすでに伊豫松山藩主久松松平定靜の養子に入っており、末弟定信も陸奥白河藩主久松松平定邦の養子を命ぜられていた。
当主治察には嗣子がなく、定信に家督相続を考えていたので、白河への養子入りを強硬に辞退していた。
治濟は、英才の誉れ高い定信が田安家を継げば次期将軍に推されるに違いなく、一橋家にはまわってこない。
治濟はなんとしても嫡男家齊の将軍を実現させるべく、将軍家治にも大奥にも信用のある意次を取り込んだ。
意次も英明な定信より家齊を担いだほうが得策と考えていたのだが、表面上は至難を装い渋々承諾した。
意次は田安家への説得は力づくよりほかなしと覚悟を固めて治察と面会すると、有無を言わさずいきなり、
「白河松平家との養子縁組は公方様のご命令である」
そう高飛車に出て承諾させることに成功した。
久松松平家は家康の生母お大の再嫁先であるから、徳川一門の松平家に次ぐ名門だったので、意次は一橋治濟の将軍職横奪に加担したとはいえ三卿内部の出来事なのでさして罪悪感はなかったようである。
ところが、定信が松平定邦の養子になって白河へ発った五箇月後に当主治察が病歿して田安家は断絶状態になってしまった。
意次は治察の弟定國の子に相続させてはと真面目に考えていたのだが、意次の上を行く治濟が三歳の四男齊匡を養子に入れて田安家を乗っ取ってしまい、清水家も重好に嗣子なく家齊の二男齊順を養子に入れたことから三卿は事実上一橋家の独占にしてしまった。
さらに治濟は一橋家の保全を謀り、沈む夕日の意次を見捨てて昇る朝日の定信に接近し、老中に推薦する黒幕として暗躍する。
このことが、さらに意次追い落としに拍車を掛ける結果になっていった。
意次の失脚によって、重商政策で勢いづいた高度経済成長が頓挫してしまったところへ、さらにうちつづく天災の打撃を受けて大不況に陥ってしまった。
この田沼意次時代が途中で挫折したために近代国家の幕開けが七十年も遅れてしまったことが惜しまれる。
最後に敢えて付記しておくと、意次が賄賂塗れの政治家だったとする史料の多くは意次に遺恨を抱く松平定信とその一派によって捏ち上げられたもので、その悪評だけが増幅されて功績のほうは無視されてしまっている。

意次は幕府の重鎮で権力の座にいたのだからその生き様は功罪混淆であったろうが、賄賂にばかり光を当てられたために業績のほうは否定されて翳ってしまった。
真偽はどうあれ一旦定説になってしまったものを覆すのは至難の業である。
（了）

主な参考文献

徳川将軍列伝　秋田書店
藩史事典　秋田書店
年表日本歴史　筑摩書房
田沼時代　徳富蘇峰　講談社学術文庫
田沼意次の時代　大石慎三郎　岩波現代文庫

〈徳川三卿略系譜〉



相模原界隈の「物価考」

新井宏

相模原市に住んで、五十年近くなる。町村合併によって、人口八万人で市制を敷いたのが昭和二十五年。市役所は各町村とは別に、新たに相模原台地の中央部に定められた。我が家は、そのすぐ近くの地図上だけは「一等地」にある。現在人口七十二万の政令都市。

そもそも相模原市は陸軍の軍都で、造兵廠や士官学校、軍病院などを中心にして、昭和十二年に都市計画された。私の生まれた年である。おそらく、何もないところに、気ままに図面を引いたのであろうか、市役所前通りや近くを通る十六号線の道路も幅四十メートルで、周辺の大路は二十五メートル幅、我が家の前の中路でさえも十二メート幅、横の小路も六メートル幅、隅切りもしっかりしている。都内の最大幅の道路は昭和通りで四十メートルあるが、銀座通りや第二京浜が二十五メートル幅、一般小路が三〜四メートル幅であるのと比較して、かなり贅沢に計画されている。もっとも、市役所前通りは、飛行機の発着ができるように造られたと言う。

もう二十年近く、健康のために家の周りを毎日二万歩ほど歩き廻っている。したがって、市役所を中心として約十キロメートルの範囲の規制緩和やその結果による栄枯盛衰を体験的に知っている。

街路樹や公園は良く整備され、本来なら緑の豊かな街である。しかし、実情はむしろ緑の少ないドライな街なのである。東京の住宅地なら、狭い庭にも樹木が茂っている。ところが、相模原の市街地では一戸建てに二台の駐車場をつけるのが普通で庭木のない家が多い。

そう言うと貧弱な建売住宅を想像するかも知れないが、この二十年間に作られた家屋は、概して建坪も四十坪ほどで、色とりどりの窯業系や金属系のブロック状サイディングを使っており、劣化を全く感じさせない。それまでの建物がトタン壁やモルタル壁で、風化、カビ、サビなどの汚れにより、みすぼらしくなっているのと較べると歴然とした違いであり、地域によっては、住宅展示場「住宅公園」の趣きさえある。おそらく数十年後にも、外観は変わらないので、大幅な住居「物価」の低減につながるであろう。その頃には庭木も多少増えるかもしれないが、とにかく緑は乏しいのである。

しかも残っている空地は、ほとんど全て、スーパーやファミレス、集合住宅の駐車場になっていて、樹木など全く植えられていない。その中でも特筆すべきなのがコンビニ店の駐車場なのである。

酒販制度の規制緩和により、スーパーや酒量販店がほぼ自由にアルコール類を売れるようになったのが二十五年前である。当然、酒屋はバタバタ倒産したが、その中で生き残る方策がコンビニ店に変わることであった。それなりの土地や地盤もありコンビニ店なら酒屋も継続できる。だからスーパー等の量販店に先行して酒類のシェアーを伸ばしたのはコンビニ店であった。

ところが、相模原は車社会の最先端を走っていた。消費者は無理して買った車のメリットを活かすため、多少遠くとも、車で買い出しに行くのが当たり前の社会となっていた。

まず道路に駐車できないコンビニ店から潰れた。そのため目先の利くコンビニ店は、隣家の数十坪の土地を買収して駐車場を作り頑張った。そこに更なる流通革命が押し寄せた。生産と消費を直結させた企業のみが生き残れる。

相模原市街地からはあらゆる小売店が消え去った。かつて盛業を謳歌していた米軍補給廠前の商店街は今や見る影もない。細々とやっているのは飲食店くらいで、新規に始めた弁当屋等さえ次々とシャッターを下ろしている。代わって猛烈な勢いで出てきているのが、駐車場を数百坪もつ超大型コンビニ店である。店舗そのものは六十坪ほどで従来店と変わらないのだが、実にゆったりとした数十台の駐車場を持っている。月々の借地料はおそらく五十万円レベルとなるであろうが、それほど負担にならないらしい。相模原はそれに耐えられる安価な土地がまだまだある。

その結果、こんどは盛業中であった駐車場十台未満のコンビニ店がバタバタ潰れ始めた。潰れたコンビニ店に張り出された「テナント募集」の張り紙が既に古びている所が多い。その中でもやや大型の店は新種のファミレス店に変身している。相模原では、コンビニ店同様、ファミレスも十台以上の駐車場なしにはやって行けないのである。

ところで相模原市街地にいくつコンビニ店があるだろ

うか。グーグル地図などで相模原市中央区を調べてみると約百店ある。ついでにスーパーも調べると二十五個所ほどであった。スーパーは規模が大きいので、独自に駐車場建物を建てる場合も多いが、大きな空き地に駐車場を併設するのが普通である。もちろん公共的な市役所、市民会館、商工会館、警察、医療・保険関係、更にファミレス店やドラッグストア、パチンコ店、高層マンション、賃貸アパート等の駐車場を加えると、市街地の総駐車場面積は十万坪を下らないであろう。わが家の隣にある農協会館でも千坪以上の駐車場を持っている。相模原は駐車場だらけなのである。

近くを通る四十メートル巾の十六号線は、昔からファミレスの激戦地。橋本駅から古淵駅までの九キロメートル内に約五十軒あり、その多くが二十台以上の駐車場を備えている。百八十メートルに一軒の割合である。名の通ったチェーン店やフランチャイズ店は全て出ている。

十六号線に出店してやって行けたら、全国展開をする「アンテナショップ」の役割だという。観察していると、場所によっては、何をやっても流行らず、数年で店種が替わるところがある。素人でも結構良く判るものだ。

最近の大きな変化は超高層ビルの建設ラッシュである。東京都心ならいざ知らず、相模原市に十八階建て以上のビルだけでも二十棟以上も出来たのである。小泉純一郎の規制緩和の効果であるが、今もその流れは止まらない。

その結果、何が起きたか。JR横浜線の駅近くから十六号線に囲まれた便利なところと相模原郊外との格差拡大である。高度成長期に争って買い求めたサラリーマンの住宅地は、概して相模原の「田舎」にある。それでも一戸建てに入居でき、土地の値上がりもあって、幸せを享受していた。それに続いたのが、相続税対策で急速に広まった民間アパート建設ブームである。いずれも主として郊外に建てられた。

しかし相模原市の発展を支えた工場群が次々と地方の新工場に移転している。空地化した工場跡には、超高層ビルや大型住宅団地が開発され、良質な住居が安価に供給されている。そのため、郊外の民間アパートは益々空室化する。便利な駅近辺の方がむしろ安価なためである。

だからと言って、民間アパートが新規入居者の家賃だけを下げて対抗する訳には行かない。それと同時に、乱開発の一戸建て地域は、徐々に「過疎化」して行き、地価は二十五年前に比べて三分の一以下まで下がった。最近やっと、駅周辺は値上がりに転じたが、郊外はまだ値下がりが続いている。「田舎」が再び「田舎」に回帰しているのである。

青山学院大学の例が象徴的である。一九八二年に厚木市の研究学園都市「森の里」の誘致で厚木キャンパスを

造ったが、二〇〇三年には、より東京に近い淵野辺の新日鉄研究所の跡に相模原キャンパスを作り移転、更には二〇一三年には都心の青山キャンパスに高層校舎をつくって、相模原からも主力を引き上げている。新宿から一時間半もかかる田舎の厚木キャンパスは、おしゃれな気風の青山学院の学生には全く不人気であった。

そもそも規制緩和とは既得権の破壊である。理髪店は強固な組合組織によって、三千五百円の料金を守っていたが、今や千円カットの時代である。相模原市内には、借金してやっと構えたと思われる住居付き理髪店が数多くあるが、あまり客の入っているのを見かけない。その結果であろうか、私の行きつけの千五百円カットのお店にも腕の良い職人がいる。

先日も大型コンビニが開店したばかりだというのに、その百メートル先に大型コンビニの工事が始まった。建物はプレハブ状で、あっという間に出来上がったが、駐車場の工事と出入り口の公共歩道の工事に手間取っていた。やっと完成しそうになってから、工事の進展に異常がある。突貫工事の様子が見られなくなったのである。どうやら、予定していたコンビニに逃げられたしまったらしく、開店を前にして早くも躓いた。それでも半年後にはなんとか開店し、そのあおりでまた近くのコンビニが潰れた。

規制緩和とは、いわば革新である。世代交代の速度と見合った規制緩和には救いがあるが、ミスマッチになると酒屋や理髪店の悲劇となる。その点では東京都心は、大型店舗の用地難のため変化が穏やかで、工夫次第で地元商店街もやって行ける。

昔、革新を担ったのは社会党であった。しかし、真っ先に保守化したのが社会党である。総評、日教組などの組合活動が既得権化し、国会議員を幹部間で順送りするようになると、若い血が入らず次々に老齢化して行く。

それに較べて、保守党は選挙地盤を親子間で継承するので、世代交代が順調であった。そのため保守党が規制緩和などの革新を担い、革新党が変化に抵抗する保守派となってしまった。小泉純一郎は、自民党をぶっ壊すと言って規制改革をした。

世界的に見ても、共産党政権は全て、独裁化して変化に対応できず没落している。未だ共産主義の旗印を掲げている中国は、資本主義国以上に大富豪を生み、北朝鮮は古代専制国家的な金王朝となってしまった。

毎日二万歩も歩いていると、すぐ靴底が磨り減る。とにかく日課の最優先事項なので、高価でも安全で歩きやすい靴を選んでいるが、靴底がソフトなほど磨り減るのも早い。そのため、新品を購入するのと同じくらい補修

費が嵩むが、極力直して使っていた。

ところが、いつも頼んでいる小さな修理屋が廃業してしまった。大きな靴屋さんに行けば、修理してくれるだろうが気が進まない。

そこで思いついたのは、自分で直せないかということであった。歩き方にくせがあって、靴底の減り方が不均一であるが、要は靴底を張れば良いだけである。靴底にガムがへばりついて取るのに苦労したことから見ると、素人が貼付けても保つかもしれない。

ホームセンターや百円ショップに行けば、接着剤付きの薄いゴムシートなどを置いている。磨り減った形に合うように切り取って積層し貼りつければ出来上がりである。試用すると剥がれることもなく調子が良い。まだ体裁には工夫の余地がありよそ行きには使えないが次からは上達するであろう。

また、先日も一万円台のポケットコンピュータを買ってきて遊び道具の講演用プロジェクターに付けた。重いパソコンを持ち運ぶのが負担になってきたので、超軽量（本体五十グラム）のパソコンを探したのであるがOSは立派にウインドウズ10が付いている。ウインドウズ10はソフトだけでも二万円位すると言うから満足感がある。

そう言えば、始めてパソコンを買った時はプリンターを含めて七十万円かかった。その頃、一日かけて計算させていた問題が、いまでは一秒もかからない。

散歩して見ていると、新築住宅の品質向上には目を見張るものがあり、今後、立替需要など大巾に減るであろう。

これらのことから、日本の経済を思った。

いまや、政府や日銀の最大の関心事は「物価」である。バブル最盛期に「物価」と言えば、如何にしてインフレを抑制するかであったが、今は物価を二パーセント上げて、何とかデフレから脱出するのが課題である。

景気を良くするために「物価上昇」が必要なのは良く判る。いやそんな高尚なことではなく、世界の歴史で、借金帳消しは「戦争」か「インフレ」によって行われた。

GDPの二倍を超える借金にあえぐ政府が、とにかく最優先にしなければならないのが「国の借金」問題であるが、物価を二パーセント上げることが出来れば、GDPも二パーセント上がり、GDPに対する借金比率も二パーセント下がるので、二十兆円規模の借金帳消し効果に相当する。

そのために金利ゼロ政策を続けて、「景気」を刺激しているのが建前であろうが、どうやら本音は「景気」だけではなく、国債の金利も下げて、その利払いを数十兆円削減することにあるのではないかと疑っている。金利ゼロとは、「借金がない」のと同意義である。だから、最近になって、もし国債金利が一パーセント上がると、銀行等の国債保有者に六十兆円の評価損が生じると騒ぎ始め

た。まさか、ブラジル、トルコ、ロシアほどの高金利になることもあるまいが、金利二%ほどの韓国や中国のレベルは警戒しなければならない。

ところで自給自足や物々交換の世界ではGDPは発生しない。だから老人が靴の修理を自分でやるようになれば、その分だけGDPは減少してしまう。

最近、折にふれて唱えていることは「ただ働き」と「ただ遊び」の勧めである。定年後の老人が豊かに過ごすのに最良な方法だと思っているが、これでは自給自足や物々交換の経済になって、GDPを下げてしまう。

車を買ったので少し遠くまで買い物に行く。家族で行けばちょっとしたドライブも楽しめる。お陰で小商店はつぶれ、流通経費が大幅にさがり、物価が下がってGDPが減少する。百円ショップで買ったゴムシートで靴を修理すると、かなりの「満足感」があり立派な「ただ遊び」である。『まんじ』に雑文を書いて、「同人」の方に読んで頂きながら、他の「同人」の作品を楽しむ。これも「ただ働き」と「ただ遊び」であろう。

中国ではGDPの成長率が六パーセントを割ると危険状態になると言う。そのはずである。自給自足的な農業経済から賃労働に変わるだけでもGDPが大きく増大する国である。もはや中国が自給自足経済に留まることなど許されないのであるから。本当にトランプが四十五%の関税をかけたら、大変なことになる。

「生涯現役」というスローガンがあるが、何か歳をとってからも働けという「貧しさ」も感じる。豊かな世界では、「ただ働き」と「ただ遊び」こそが「生涯現役」なのではなかろうか。

韓国のニュースに金沢工大のことが出ていた。地方の私立大で、一流大学というわけでもないのに、就職率が常には九十パーセントを維持しているという。そして、その秘訣を探ったところ、その教授陣の多くを企業定年のOBで固めていることを知ったと言う。金沢工大の教授には何人か知人がいたが、いずれもその世界では名の知られた技術者であった。しかし高給で教授に迎えられたわけでもないようで、OBたちは大学教授という「ただ遊び」で十分満足している様子であった。事実、手弁当で東京から通っている教授も知っている。

概して、これらの教授連は、業界に顔も広く、就職の斡旋にも頼りになる。大学内で純粋培養した教授ではとても歯が立たない。その結果が韓国では信じがたい程の驚異的な就職率なのである。

ここまで書いて読み返してみると、前に三回ほど連載した「八つ当たり語録」のことを思い出した。もう書くまいと思っていたのに、いつの間にか、また「八つ当たり」気味である。

人工知能の展望と限界

大貫陽平

人工知能という言葉をニュースで聞かない日はないというぐらい、人工知能がブームである。事実その発展には目覚ましいものがあり、人工知能が人間の仕事を奪うというような意見もある。

最も有名な人工知能は「二〇〇一年宇宙の旅」に登場するＨＡＬという名前の人工知能であろう。ＨＡＬはまるで人間のごとく会話をし、宇宙飛行士のチェスの相手になり、宇宙船を万全に管理する。人間と同じことが、人間よりももっと上手にできるというのが、この映画からうける人口知能のイメージである。

あたかも人口知能が人間のようのふるまいうるという話もあって、我々が多くのものを人口知能に期待しているのは間違いないであろう。しかしその実態はどうであろうか。

現在の人工知能ブームは第三次人工知能ブームである。第一次ブームは一九五六年、第二次ブームは一九八〇年に始まったとされているが、そのどちらも世間からの過剰な期待に応えることができなかったことでブームが収束している。例えば第一次ブームではチェスで世界チャンピオンに勝ちうる人工知能が開発できるとされていたが、実際のところ一九九六年のディープ・ブルーの登場まで、人工知能が世界チャンピオンを打ち負かすことはできなかった。

人工知能はブームと冬の時代を交互に繰り返しており、人々の期待に応えることができなければ現在の第三次ブームが終了し、冬の時代に突入するのは間違いないであろう。

人工知能が目覚ましい発展を遂げているのは間違いのない事実である。グーグル社の人工知能が世界最強クラスの囲碁棋士に勝利したのは記憶に新しい。同社の機械翻訳サービスは人工知能を導入しており、論文など崩れの少ない文章であれば、きわめて高精度に翻訳が可能である。一部の医療の現場では人工知能が導入されており患者の病状をより正確に把握できているという。

人工知能の産業分野への導入はすでに進められており、それらが生産性の向上に寄与することは間違いないであろう。一方で現在の人工知能は人間の道具である、という段階から脱していない。目の前に課題が存在したときに、いかなる人工知能を使ってそれを解決するかを決めるのは、あくまで人間なのである。一部で喧伝されているような、ありとあらゆる問題に対して回答を用意できるような人工知能はまだ開発されていない、以下では人工知能の実際について考察を行い、現在の方法の人工知能の限界と、将来的な展望について述べてみたい。

今の人工知能には、メディアでいわれているような人間を超えるような総合的な問題解決能力はない。現在の人工知能はいずれも単独の問題を効率よく解くことに特化しており、物語の人工知能のごとく、ありとあらゆる問題に答えることはできない。つまり、人間の脳を換算再現したような人工知能が、現在の第三次ブームの中で誕生する可能性は極めて低い。

例えば白黒写真に自動で着色する人工知能が存在しているが、この人工知能は人間が用意した大量のカラー写真とそれらの白黒版をもとに、着色のパターンを学習し、それをもとに未知の白黒写真を着色するのである。写真の用意には人手が必要であり、人工知能の性能にはどういった写真を集めてきたかも影響する。もちろんこの人工知能は白黒写真の着色以外の問題を解くことができないので、他の問題を解く人工知能が必要であれば、人間の技術者を呼んできて、新しい人工知能を作ってもらうしかない。

現在の人工知能はあくまでも単独の問題に回答することしかできない。このため一つの人工知能であらゆる問題に回答するということは不可能である。一部の人工知能は汎用人工知能なる名称を関してはいるものの、汎用には程遠いというのが現状である。

現在の人工知能は大量の問題と解答のペアの中からパターンを発見し、そのパターンを用いて未知の問題に回答をしている。これが可能になったのは、インターネットの普及によって、大量のデータがインターネット上に保管されるようになったからである。例えばインターネットでライオンと検索すれば、数えきれないほどのライオンの写真がヒットする。こういった大量のデータをもとにして人工知能は学習を行っているのだが、当然データが十分に収集されていない分野では、人工知能は活躍

できない。

人工知能が大量のデータをもとに学習することには、もう一つ問題がある。

言葉のつながりを予測するような簡単な人工知能であっても、最低でも数万単位のデータが必要とされる。データの量が増えれば増えるほど、人工知能の学習時間は増大する。グーグル社がかつて行った、大量の動画を人工知能に学習させることで猫などの概念を理解させるという実験では、千台のコンピュータを三日間稼働させる必要があった。この人工知能は人間の脳の百万分の一程度の性能とされており、単純計算だと、人間の脳を再現するには千台のコンピュータを約八千年稼働させる必要があることになる。

これはいささか極端な例であるものの、人工知能がコンピュータの性能の限界に近付きつつあるのは間違いない。一方コンピュータそのものの性能に関しては大規模な発展がみられておらず、人工知能がコンピュータの性能限界に追いついてしまい、その発展が止まってしまう可能性は高い。もちろん量子コンピュータといった大発明がなされる可能性はあるが、人工知能の限界までの発達と、量子コンピュータの実用化のどちらが早いかがわからない以上、人工知能の発達がコンピュータの性能の限界によって、一時的とはいえ停止する可能性は否定できない。

以上みてきたように、現在の人工知能は三つの問題をかかえている。ありとあらゆる問題に答える汎用で万能な人工知能は作れない。データが十分に集まっていない分野では、活躍が期待できない。コンピュータの性能限界の問題で、発展が止まる可能性がある。

これらの三点、特にひとつめは極めて重要であるが、一部の人工知能関係者が、楽観論からそれらを無視した宣伝を行っている側面があり、これが必要以上に、世間の人工知能への期待を煽ってしまっている。

人間を超越する人工知能が登場することで、人間の仕事が奪われるという見方もあるが、ここ十年単位の話としては、そういったことはないと断言できる。理由は二つあり、ひとつは人間の脳を模した人工知能が誕生することがないということである。現在の計算機の性能と学習方法からして、人間並みにあらゆることに解答できる人工知能は作れない。

ふたつめは、社会が人工知能に適応していないことである。多くのデータが電子化されつつあるものの、いまだ紙のままのデータは多い。また個人情報となるようなデータをどう扱うかは、社会での合意がとれておらず、現在もたびたび問題になっている。結果として人工知能は学習に必要な量のデータを入手することができない。

以上二点から、人間の仕事のほとんどが人工知能に代替されることは、数十年はあり得ない。

もちろん、現在の人工知能は素晴らしいものである。大量のカルテをもとに次に発病する恐れのある病気を特定する人工知能があるが、これは今までに人間には難しかった作業であるが、実際の治療の方針を決め、患者に接するのは人間の医者である。

いまのところ人間にできることと、人工知能にできることは、すみわけがある。人工知能は大量のデータと向き合いパターンを発見するのが得意であるが、人間社会に物理的に関与することはできないし、そもそも、どんな問題を解く必要があるのかを、考えることはできない。対して人間は問題設定が可能であり、物理的に人間社会に関与することができる。この二点を踏まえて、人間と人工知能が共同して活躍できる社会を、考えていく必要があるだろう。

火の玉

太田精一

終戦後四年が過ぎた彼岸前の蒸し暑い夕方のことであった。

五社神社の境内には、いつになく多くの人々が集まっている。

そこには、一ヶ月前ロサンゼルスで開催された北米水上選手権大会の記録映画を上映するための、にわか作りの野外劇場が設けられていた。

中学生の木本伸一は、出来るだけ良い場所で、その記録映画を見たいと考え、夜八時の上映開始時間より二時間も前に、友だちと語らって境内に詰めかけていた。

五社神社は、浜松市の中央部の利町にあり、市内でも有数の神社である。大玉命、武雷神、など五祭神を祀った神社で、徳川家康が曳馬城内に入城する以前から建てられていた。

家康が曳馬城を浜松城と改め、二代将軍秀忠が誕生すると五社神社は、産土神となった。その後、三代将軍徳川家光が諏訪神社の社殿を五社神社の南隣に建てた。それ以来、五社神社と諏訪神社の併存する利町は、浜松の神社信仰の中心地として栄えた。

ところが、昭和二十年六月の大空襲により両神社とも社殿が焼失し、映画会が催されたこの時には、空き地となっていた。

戦災後、市民の尊崇を集めた両神社の復興を願う輿望が反映され、昭和三十五年に両神社が合祀され、仮の社殿が建てられた。その後、本格的な社殿建設が行われ、平成四年になって江戸の往時の面影を偲ぶことが出来る立派な神社が完成している。

昭和二十四年は、日本の競泳史上特筆すべき快挙が達成された年であった。ロサンゼルスで開催された全米水泳選手権大会で、日本から派遣された古橋、橋爪を中心とする六人の日本水泳選手団が大活躍した年である。

古橋広之進選手は、日本国内でこの大会前から四〇〇メートル、八〇〇メートルの自由形で世界記録をつぎつぎと塗り替え、世界の注目を集めていた。

だが、終戦直後の日本は、スポーツの世界でも世界の檜舞台で活躍する場を与えられなかった。

在米日本人の応援もあって首尾よくこの大会に出場の機会を得た古橋は、日本国民の日頃の鬱憤を晴らすように、一五〇〇メートル自由形で、前人未踏の十八分十九秒〇の世界記録を樹立し「フジヤマノトビウオ」と称えられ、世界の水泳界をリードする存在となった。

古橋の偉業は、敗戦によってうちひしがれた日本人に明るい光を投げかけた。

彼は、一躍国民的英雄となり、小中学生の憧れの的となった。

だが、それだけの大記録を達成するためには、血のにじむような努力があったのである。

浜松の西縁にある浜名湖の畔に生まれた彼は、子供の頃から浜名湖で泳ぎ、体を鍛えて来た。

だが、中学生の頃戦争が激しくなり、学徒動員に駆り出され、その時に作業していた工場で左中指を切断した。

終戦後、再び水泳が出来る環境になったが、水掻きをする上で、左中指が半分ないのは大きなハンディである。古橋は、そのハンディを乗り越え、一日二万メートルも泳ぐ練習を重ね、世界のトップスイマーに成長したのである。

浜松近在の住民にとって古橋広之進は、まさに郷土の英雄であったのだ。

その英雄のロサンゼルスでの雄姿を無料で、大画面を通して見ることが出来るのである。

陽が落ち始めた午後七時を少し過ぎた頃から、老若男女がそれぞれ提灯や懐中電灯をかざして五社神社の境内に集まって来た。

上映時間の午後八時には、五百人ほどの人が集まり、漆黒の境内が提灯や懐中電灯の光で、人の顔が識別できるほどの明るさとなった。スクリーンいっぱいに映し出された選手たちの顔は、まだ幼さを留めている。

全員スタートラインに立ち号砲が鳴り、一斉に水に飛び込んだ。

古橋が八百メートルのターンを終えた頃、観衆の歓声の中に混じって悲鳴が聞こえた。その甲高い悲鳴を聞い

て、多くの人びとが空を見上げた。
誰かが大声で叫んでいる。
「火の玉だ。鬼火だ。あんなところに火の玉が二つ並んでふわふわと舞っている。あ、こっちに来るだに」
火の玉に気付いた数人が、指差す方向を観客は一斉に仰ぎ見た。すると二つの火の玉が戯れるように相前後してスクリーンの近くに下りて来た。
幼児の頭ほどの赤黄色の炎が、尾を引きスクリーンの周りをひと回りして上空へ舞い上がり、五社神社の北隣にある心造寺の方角へと消えて行った。
「心造寺で新仏を葬ったずらか。それにしても二つの火の玉が仲良く並んで出たのは、何か訳ありの仏さんじゃあないだらか」
「こんなに大勢の人が集まる所に火の玉が出るなんて、思ってもみなかったやあ。生まれて初めて見たが、何か言いたいことがあっただら」
「空襲でこの五社神社のまわりでもずいぶんたくさんの人が焼け死んだじゃん。終戦後四年になるが、まだこの世に未練を残し、迷っている人の魂が、生き残った家族に会いに出て来たかも知れないだに」
さまざまな憶測が飛び交った。
伸一は、不思議と火の玉を見ても少しも恐怖を感じなかった。
暗闇からいきなり火の玉が飛び出したのとは、状況が違っていたからである。
五百人余りの観客も同様で、はじめの騒ぎが収まった後は、全員心造寺に消えて行く二つの火の玉を静かに見送った。
心造寺は、阿弥陀如来を本尊とした浄土宗の寺である。
徳川家康の愛妾で、二代将軍秀忠を生んだ西郷の局が開基した由緒ある寺だ。西郷の局と火の玉とは何か関係があるのか。火の玉に関する憶測が飛び交い映画は、中断された。
「生まれて初めて火の玉を見たに。第一火の玉などはないと思っていたじゃん。本当にあったので驚いた。でも怖くはなかったやあ。きっとこれだけの人が皆んな見ていたからだに」
三十を少し回った水商売風の女が言った。
「心造寺から出た二つの火の玉は、心造寺で別々に葬られた相愛の男女の霊が迷って出たものではないずらか。きっと一緒に葬って欲しいと皆に訴えるためにここまで下りて来たに違いないに。もしそうなら、後で調べて一緒に葬ってやらにゃ可哀想じゃん」
その隣にいた四十がらみのおかみさん風の女が呟いた。
すると一人の五十がらみの職人風の男が声を上げた。
「いや、火の玉は、古橋の縁者が、彼の世界記録達成を

喜んで、映画会があるというので見に出て来たじゃあないだらか」
それに対してすぐ反論が出た。
髪を七、三に分けた四十代の教師風の男が口を挟んだのである。
「そんな馬鹿なことはない。火の玉なんて人の魂でも何でもない。ただ、土に埋められた人や動物の骨の燐が自然発火しただけだという学者もいる。人の骨が埋まっている寺が隣にあって、気温が高く湿気が多いこんな日には燐も燃えやすい。ここに出たのはそうした偶然が重なった結果、火の玉になったものと思う」
火の玉が、心造寺に消え去った後もしばらく興奮が収まらず、火の玉にまつわる憶測会話が飛び交った。
平成の時代になった今では、火の玉も科学的に解明されるようになり、骨の中の燐が燃えるという説は否定されている。土中に埋まった人間や動物の遺体が腐敗して硫化水素が生じ、メタンガスを発生させ、それが自然発火したと考えられるという説や放電による一種のプラズマ現象であるという説がある。
いずれにしてもまだ完全に解明されたわけではない。心霊現象によるものか、単なる自然現象によるものか、火の玉を見た場所、時間、その時の心理状態、見た人の宗教観、霊感、人生観によっても受け止め方が異なる。
恐怖感についても人それぞれによって異なり一律ではない。未知故に生まれる恐怖感もあれば、先人によって語り継がれ植え付けられた恐怖感もある。
少なくとも伸一には、火の玉によって呼び起される恐怖を感じることはなかった。
やがて観衆も落ち着きを取戻し、中断していた記録映画も再開された。
その後三十分ほどして映画は終了し、九時半ごろ観衆は家路についた。
古橋、橋爪の活躍は、伸一に大きな感動と勇気を与えたことはいうまでもない。映画を見てから伸一は、水泳選手になるのは、無理だとしても何か自分の得意な分野を見付けて人に感動を与えるような人物になりたいと思った。
だが、それ以上に火の玉の強烈な印象は伸一の脳裏から離れなかった。
(火の玉は、何故発生するのだろうか。火の玉が出ることと人の死とは、何か関わりがあるのだろうか。昔から人間の死体から出た怨霊が火の玉となって表れたと、いわれているが本当だろうか。怨霊とか霊とは関係なく、単に骨の中の燐が燃えて火の玉となるだけなのだろうか)
伸一は、先ほど映画で見た古橋のプールの中で躍動する姿と火の玉の出現とが頭の中でまぜこぜになって、複

雑な思いを抱えたまま大工町の家に帰った。

伸一が家に着くなり、母親のさきが、映画会の様子を尋ねた。

「映画はどうだった。面白かったかね。古橋選手の泳ぐ姿は本当にトビウオのように見えた。どの位の人が集まったの」

矢継ぎ早に発する母の質問に答えながら、伸一は火の玉出現の話をいつ切り出そうかとタイミングを計っていた。

「お母さん。映画を上映している最中に心造寺の方から二つの火の玉が出て来たに。しばらくふわふわと映画を見ている人たちの頭の上を舞って、また心造寺の方へ消えて行ったよ」

「そうだったの。怖くなかったかい」

「大勢の人が見ていたから、ちっとも怖くなんかなかった。ただ、どうしてあんなに人がたくさんいる前に出て来たのだろう。道々考えながら歩いて来たら電信柱にぶつかりそうになった」

「そう。それはとんだ映画会だったじゃん。もし古橋選手がその場にいたらびっくりしたろうね。その時見ている人に何か変わったことは起こらなかったかい。たとえば人が死んだとか。急病人が出たとか」

「何も変わったことは起こらなかったに。映画を見ている人が騒いでいるうちに、火の玉は、スクリーンのそばまで来てまたスーと舞い上がり、心造寺の方に消えて行ったに」

「どうして二つ並んで出たのかねえ。心中事件でもあったずらか。人が死んだ夜などは、よく火の玉が出るというじゃん。私には分からないけど、死体から魂が離れ出るという人もいるし、燐が燃えて火の玉になるという人もいるだに」

「人が死ぬということと火の玉が出ることと何か関係があるのかな。おばあちゃんが死んだ時も火の玉が出た」

伸一は、霊感が働く方ではない。心霊現象に関しては極めて鈍感である。物事を合理的に考えようとする性格で霊魂の存在など認めていなかった。

「そうねえ。確かにおばあちゃんの死んだ時は、火の玉など出て来なかったね。人が死ぬとき常に火の玉が出るというものではないと思う。それが証拠に火の玉なんか見たことがないという人がほとんどで、見たことがあるという人の方が少ないじゃん。何か特別な時しか火の玉は出ないのじゃあないかと思うよ。おばあちゃんは家で亡くなったのではなく遠州病院で亡くなったから、もし病院から魂が抜け出たとしても家にたどり着くまでに消えてしまっていたのかもしれないに。でも人が死ぬことと火の玉とは関係あるように思う。この大工町の家に嫁ぐ前、私も実家の白羽の家で見たことがあるだに」

さきは、子供の頃の遠い記憶を辿りながら、これまで語らなかった体験談を伸一に語った。

「あれはまだ私が小学校の三年生の時だった。梅雨時でしゃぐじ川に蛍が飛び交っていた。お前も知っているように白羽の家のまわりは、夜になると真っ暗で何も見えないじゃん。街灯などなかった時代だからね。晴れの夜には、お月様の光、お星様の光を頼りに外へ出ただに。雨の日は全く見えないので外には出ないことにしていただら。夜九時頃だったように思う。私は、おしっこがしたくて戸を開け外の厠に行きしゃがんだ。井戸の近くには蛍が舞っていた。蛍が見えなくなると、どこから出たのか分からなかったが、腰のまわりを火の玉が回っているじゃん。びっくりして家に転がり込んだに。そうすると火の玉が私について来て、家の中をぐるっと回り、空いた戸口から外に消えて行っただに。その二日後、可愛がっていた弟の弥四郎が死んだ。その時から、私は火の玉は人魂で、人の死と関係があると思っているよ」

「それは本当にあった話なの。お母さんの作り話ではないね」

「お前に嘘をついても仕方ないだら。弥四郎は、体が弱く、その二、三日前から風邪をこじらせ、肺炎になって高い熱を出し、うわごとを言う状態だった。私は、弥四郎の魂が、何か私に言い残そうとしたに違いないと今でも思っているだに」

弥四郎の亡くなった大正十三年頃は、やっと浜松周辺の農家にも電線が敷かれ、電燈が灯り始めたばかりである。街灯はなく、家の外は夜ともなれば闇に包まれる。

ほとんどの農家には、家の中に厠がなかった。戸を開けたすぐ外に尿を貯める穴が掘ってあり、その周りを板で囲っていた。少し離れた所に便所があり、そこには大きな穴が掘ってある。下肥として溜めるためである。排泄物の屎尿類は貴重な肥料で無駄にしないという考えであった。

さきは、自らの体験を通して霊魂があることを信じるようになった。

五社神社に出た火の玉は、この世で添い遂げることが出来なかった男女の魂が、別々に埋められた墓からお互いに言い交したようにさ迷い出て、大勢の人の前に現れ、二人の仲を世間に認めてもらおうとしたのだと、さきは思った。

そう思うことによって、さきは二つの火の玉が相寄り添うように墓から舞い出て、また心造寺に向かって消えた意味が理解できるのであった。

伸一は、人生の哀歓を知る中年になって、きっと母には、そうした想い人があったに違いないと、気付くようになっていた。

(六)

短歌

行雲流水（五十一）

石黒修身

近詠三十首

米

TPP生き残り賭け「旨い米」造る農家の逞ましさはや

名にしおう「瑞穂の国」に米を買え食の外交このレトリック

米剰り飽食の世に旨い米選ぶ幸せ何時まで続く

「青天の霹靂」と云う米ありと青森産とて食してみたし

我食す故郷産の「ユメピリカ」可も不可もなく常食となる

御飯炊くそして載く習慣は食の文化の柱とぞ思う

紅葉・花

箱根路を行けば随所の山間（やまあい）に紅葉の群紅く耀う

宙空を渉る箱から府瞰する箱根全山紅葉の波（ロープウエイ）

湯煙の漂う中に幾本（いくもと）の楓の紅が朝陽に映える（湯宿にて）

街角の店にリンドウ並びたり紫紺の彩（いろど）り秋の深まり

散策の連（つ）れ求めたるリンドウに曽遊の「安比」自生のさまを（安比高原）

皇族

天皇の生前退位の法制化議論は多く御心（みこころ）に副うのか

皇室の内側につきマスコミの興味本位の報道を忌む

軍籍にありても反戦唱えしとうリベラルな「殿下」百才で薨ず
戦後には歴史の学を極められ「古代オリエント」世に顕わなり

時局

隣国の統治乱れて百万のデモが渦巻き安定は何時
トランプ氏そのいち人の言動に振り廻される世界は何故
強(したた)かなスラブの民かプーチン氏北方領土は還ってくるのか
法案の通過が至上か国会の数の横暴懸念は消えず

身辺

この年の鮭は不漁と報じらる放流稚魚の回帰寡なく
鮭の卵一(ひと)はら買いて妻造るイクラ漬けにて旬を味わう

遠方の老友の訃に駈けつけず供花ですます老いの身なれば
「良く来たな」杖を曳く友また増えて同期の会はいたわりの会
若き日ゆ続きし会も高令化そぞろ終りの近づくを想う

姉

夫(つま)は亡く子も無き姉は肺患で急拠入院重篤と云う
入院の姉を見舞えば老い吾に元気で居るか風邪をひくなと
ステロイド治療の故かその意識生死の狭間揺れ動くらし
病室ゆ遠く望める富士山をスマホで撮るの元気は何か
画家として己が作品何処(いづこ)にか想い巡らすよすがもあるらし
巨大なる綜合病院コンビニもコーヒー店も賑わいており

漢詩

潮汐錄（八十六）

鯨游海

賀丁酉春　　平成二九年元日

神器名門不想先
液晶過信尙纏綿
鷄群一鶴在松下
未使鴻公納早川

押韻・先綿川

〈丁酉の春を賀す〉

神器の名門　先を想はず
液晶を過信して　なほ纏綿たり
鷄群の一鶴　松下（幸之助）在せば
未だ鴻公をして　早川を納めしめじを

〔注　解〕

神器＝三種の神器。皇位の象徴たる神から伝授された宝。ここでは戦后の文化生活を支えた白物家電製品。特に早川電機の製品は業界をリードする優れた品質だった。纏綿＝からみ合って離れない。まといつく。執着する。鷄群一鶴＝掃き溜に鶴。凡人中の逸材のこと。晉書・嵇紹傳「嵇康　在稠人中　昂昂然如野鶴之在鷄群」松下＝松下幸之助。鴻公＝ここでは台湾の鴻海精密工業㈱を指す。早川＝シャープ㈱。納＝収める。合併する。併呑する「鴻飛千里而海納百川」より。

〔口語訳〕

三種の神器といわれた白物家電の名門早川は時代の先を見通す力なく破綻した。液晶を過信し固執したからだ。もし掃き溜の鶴の如き松下幸之助が健在ならば、未だ鴻海をして早川を併呑せしめなかったであろうに。

☆鷄群に一鶴在らば早川も
　彼の鴻に呑まれじものを

舛添要一 辭京兆尹　　平成二八年六月

狐假虎威無正襟
公私混頓闇渠深
縱雖合法是誰許
況給盜人追錢金

押韻・襟深金

〈舛添要一が京兆の尹を辞す〉

虎の威を借る狐は　襟を正すこと無く
公私混頓として　闇渠深し
たとひ合法と雖も　是れ誰か許さん
況や盜人に追ひ銭の金を　給すとは

〔注　解〕

虎の威を仮る狐＝実力ない者が空威張りする・戦国策。盗人に追ひ銭＝被害を受けたのに更に損を追わされる。

〔口語訳〕

虎の威を仮る狐の如く、実力のないくせに威張り散らしている小役人の舛添知事はなお自からの行動を正さず、公私混同も甚だしく公私の金が区別出来ぬ程闇は深い。たとひ法に触れず合法的としても、誰一人許さない。更にその上、盗人に追銭の如き退職金を支払うとは！

☆舛の字は過誤の意なるを君知るや
　公私の乱れまさに極まる

小池百合子就京兆尹　　平成二八年八月

僻遠關東非故園
壓勝何故世喧喧
應援禁令含親族
熟女濃粧大失言

押韻・園喧言

〈小池百合子が京兆の尹に就く〉

僻遠の関東　故園に非ざるに
圧勝したるは何故ぞと　世は喧々たり
「応援の禁令に親族を含めしこと」と
「熟女の濃粧」の大失言と

〔注　解〕

小池百合子は兵庫県蘆屋市出身で東京は敵地、いわば異郷の戦場で不利を逸れなかった。それにも拘わらず、自民公認の増田裕也、野党連合の鳥越竣太郎に圧勝した。何故であろうか。答は転句と結句に述べる二つだ。

〔口語訳〕

僻遠の地、関東は故郷とは無縁で、役に立たないにも拘わらず圧勝したのは「応援の禁止令に親族を含めた」事と、更に「年増の厚化粧」の大失言との二つである。

☆何事ぞ親族の応援禁ずとは
　さらに駄目押す年増の化粧

《漢詩の流れ74》 平安時代④橘直幹・猿丸大夫

橘　直幹（？～九六〇？）大学頭、文章博士、式部大輔、冷泉帝の侍読などを歴任した。詩文、和歌をよくし詩句は「和漢朗詠集」「新撰朗詠集」に、文は「本朝文粋」に、和歌は「後撰集」に載る。

秋宿驛館（秋、駅館に宿す）

洲蘆夜雨他郷涙　洲蘆の夜雨　他郷の涙
岸柳秋風遠塞情　岸柳の秋風　遠塞の情
臨水館連江雁翼　水に臨むの館は　江雁の翼に連なり
枕山樓入峡猿聲　山に枕むの楼に　峡猿の声が入る

この詩には私注があり、「常州下向時、浮嶋原にして駅館に宿る」とある。京から常陸（茨城県）に下る時に静岡県沼津の浮嶋が原の宿にて作ったもの。

旅愁、夜雨、秋風、他郷、遠塞、江雁、峡猿と寂しさ悲しさを表す語を散りばめている。

無　題　　猿丸大夫

秋山寂寂葉零零　秋山寂々として　葉は零々たり
麋鹿鳴音數處聆　麋鹿の鳴く音　数処に聆ゆ
勝地尋來遊宴處　勝地尋ね来たりて　遊宴するところ
無朋無酒意猶冷　朋なく酒なく　意なお冷らかなり

「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の……」の漢詩による表現。

漢　詩

汲深録（七）

松井秀人

秋山返照　　秋山返照

平成二十八年十一月

秋風雲散日西傾　秋風　雲散じ　日西に傾く
山腹楓林返照明　山腹の楓林　返照明らかなり
樹杪恰如然萬葉　樹杪　恰も万葉　然ゆるが如し
更知此景麗妍生　更に知る此の景　麗妍を生ずるを

押韻・傾　明　生

〔注　解〕

返照＝光が照り返す。夕ばえ。
樹杪＝樹梢。こずえ。
麗妍＝美しく、艶やか。

〔口語訳〕

秋風が雲を散じ、日は西に傾いている
山腹の楓林に、返照が明るい。
こずえの万葉も夕ばえで、恰も燃えているようだ
更にこの光景は、美しく艶やかさを生じていることを知る。

林苑初霜　　林苑の初霜

平成二十八年十一月

早晨林苑覺輕寒　早晨の林苑　軽寒を覚ゆ
滿地初霜倚杖看　満地の初霜　杖に倚りて看る
散策足音秋可聽　散策の足音　秋を聴く可し
西風颯颯錦楓殘　西風　颯颯　錦楓を残す

押韻・寒　看　殘

〔注　解〕

早晨＝早朝。
倚杖看＝杖に倚りて看る。
颯颯＝さっと吹く風の音、また、そのさま。
錦楓＝錦のように美しく紅葉した楓。

〔口語訳〕

早朝の林の園にいると、少しの寒さを覚える。
地面いっぱいになる初霜を、杖に倚って看る。
散策すれば、さくさくという霜を踏む足音に秋を聴く。
西風がさっと吹いて、錦楓を残す。

山郭霜楓　　山郭の霜楓
平成二十八年十一月

深秋山郭溢清寒　深秋の山郭　清寒溢る
風動楓林霜葉丹　風動く　楓林　霜葉丹なり
熟柿争紅揺落朶　熟柿　紅を争い　揺落の朶
炊煙一縷夕陽殘　炊煙一縷　夕陽残る

押韻・寒　丹　殘

〔注　解〕

山郭＝山の中の村。
霜葉丹＝霜のために葉が丹い。
朶＝木の枝。
一縷＝一本の糸のように細長くつらなるさま。

〔口語訳〕

秋のすえの山村に寒さが溢れ
風が動いて、楓林では霜葉が丹い。
熟柿は揺れ落ちた木の枝と、紅色を競い争い
炊煙が一すじ上り、夕陽が残る。

梯田観月　　梯田観月
平成二十八年十一月

山村氣爽夜雲流　山村　気爽やかにして　夜雲流る
徑畛登來収一眸　径畛を登り来れば　一眸に収まる
幾百梯田光蕩漾　幾百の梯田　光蕩漾
自生清籟滿天秋　自ずから清籟生ず　満天の秋

押韻・流　眸　秋

〔注　解〕

徑畛＝あぜみち。
梯田＝棚田。
蕩漾＝水が揺れうごくさま。
清籟＝清らかな風の音。
滿天秋＝空一面の月光。

〔口語訳〕

山村の気は爽やかにして、夜雲が流れ
畦道を登って来ると、光景が一眸に収まる。
多くの梯田で、水に映る月の光が揺れ動く
自ずから清らかな風の音が生じ、空には一面の月光。

卿信開封　　郷信開封
平成二十八年十二月

異邦就業歳寒身　異邦の業に就く歳寒の身
時起歸心感慨新　時に起こる帰心　感慨新たなり
燈下郷書自千里　灯下の郷書　千里自りす
開封安否憶家人　封を開けば安否　家人を憶う

押韻・身　新　人

〔注　解〕

歳寒身＝老年の身。寒い季節になる。
自千里＝千里の遠きより。

〔口語訳〕

異国で仕事に就く老年の身
時に故郷に帰りたいと思う心が起こり、身に染みて歎きを感ずる。
灯の下での郷書は、千里の遠きよりきたもの
封を開けば安否、家族のことを憶う。

ロボット雑考（その六）

三戸岡道夫

一、人工知能（ＡＩ）の光と影

人工知能（ＡＩ）はいまや「第四次産業革命」といわれる革新的な社会的原動力として脚光を浴びている。しかしその反面、ＡＩの負の側面としていろいろな懸念が表明されている。そのいくつかを記してみる。

第一に、ＡＩの安全性と制御可能性の問題である。現在のＡＩ技術の中心となる大量のデータからの統計学習手法が、多様で予測困難な現実世界のあらゆる状況で、適切に動作するという保証は、まだ得られていない。またＡＩが暴走して、人間の管理能力を超えた事態を引き起こすのではないかとの、不安を払拭できていない。自動運転車、オートパイロット搭載車の事故がつづくなど、ＡＩが安全面で未完成であることを示す例も現れている。

第二に、ＡＩによる日常生活のリスク増加の問題である。情報収集のための圧倒的な質・量のセンサーネットワークと、ＡＩ技術を用いたデータの自動解析技術の広がりにより、プライバシーやセキュリティなど、日常社会生活に不可欠な権利保護が破綻するのではないか、という不安がある。

物質・エネルギーにより、我々の住む物理世界に作用する従来技術と異なり、ＡＩは情報を通じて人間自身の心的世界に作用する。このため客観的にとらえたり、人間社会から切り離して実験したりすることを困難にしている。

第三に、ＡＩによる失業の問題である。これまで人間が手がけてきた高度に専門的な仕事の多くを、ＡＩ技術によって、より高品質に、高速に、低価格で実現できるので、大規模な失業が生じるのではないかという懸念がある。

第四に、自律兵器の開発の問題である。それは道徳心のある人間の介入なしに、自律的に攻撃目標を定め、人々を殺生する兵器が、ＡＩ技術を使って開発される危険である。

しかし情報化社会では、インターネットからＡＩツールを入手して、手元のコンピューターで簡単に実行できるので、このような自律兵器の開発を防ぐのは、非常に困難である。

第五は、ＡＩによる人間社会の衰退の問題である。ＡＩの進展により、人類が培ってきた人間力や、社会力が、衰退するのではないかという恐れも表明されている。

そしてこうした懸念は、具体的な事故や惨事からの問題提起というよりも、現在起きつつある急速な変化を示す種々の兆候から生じた不安、という色彩が強いのである。

以上のような事態に対処するため、二〇〇五年（平成七年）頃から、ＡＩの研究開発およびそれを統括する経営者、政府機関の側から、ＡＩの健全で有益な発展の方向を促すための、具体的な取組みが開発された。

職業倫理の制定に関しては、日本の人工知能学会が二〇一四年（平成二十六年）に立ち上げた倫理委員会が二〇一六年（平成二十八年）六月、誠実性や説明責任など、ＡＩ研究開発者があまねく順守すべき事項を示した、倫理綱領案を公開した。

一方、アメリカボランティア団体ＦＬＩ（Future of Lif Institute）は二〇一五年（平成二十七年）に、オープンレター（公開書簡）という方法をとり、世界中のＡＩ研究開発者に、具体的な項目をあげて、倫理を考慮した研究開発をすることを呼びかけた。

負の側面に配慮しつつ、人間社会に有益なＡＩを開発すべきだという声明には、八千人超の人間が署名した。さらに自律兵器開発反対の声明には、二万人超の人間が署名した。その後、頑健で有益なＡＩ研究推進に資する研究提案を募集し、三十七件に研究資金を提供した。

欧州では、ＡＩを搭載する可能性の高いロボットに、道徳判断機能を持たせるべきではない、という考え方が強い。英工学物理研究会議では、ロボットの研究開発と適用を手掛ける人間の責任の所在を明確化し、意図を持つかのように振舞って利用者の弱みに付け込んではいけない、とする原則を提案している。

長期的な側面への取組みについては、米人工知能学会が二〇〇八年（平成二十年）～二〇〇九年（平成二十一年）に、ＡＩが社会に与える影響を視野に入れて、今後百年間にわたるＡＩの、健全で有益な研究開発に関する公的な議論を開始した。現在はスタンフォード大学がホストとなり、常任委員会を設置して「ＡＩ一〇〇」として活動している。その検討項目は、

安全性、
プライバシー、
悪用、
軍事、
倫理、
法、
人間とテクノロジーの共存、
心の哲学、
自由と民主主義、
など多岐にわたっている。ＡＩの倫理的側面への取組みは、日米の政府レベルのＡＩ関連施策の取組みの中でも取上げられている。

長期的には、テクノロジーの進歩でその枠組みは大きく変容し、社会状況も現在とはかなり異ったものになる可能性がある。そのため従来の原理原則や知識だけに依存することなく、原点に立ち返り、様々な可能性を視野に入れた広い議論が不可欠である。

二、機械知と生命知

人工知（ＡＩ）が将棋やチェスと勝負して勝ち、また囲碁の名人にも勝ったことで、ＡＩに対する期待が一気に高まった。しかしそれだけでなく、ＡＩが大学入試問題を解く能力も年々向上している。

「コンピューターが人間より頭が良くなるのは、もう時間の問題である」

という確信に満ちた声も聞えてくる。

しかし、そうなると困ることがある。ホワイトカラーの仕事が、ＡＩによって奪われてしまうかもしれないのである。やがて国内労働人口の約半分の仕事がＡＩによって代替されるという調査報告も、平成二十七年に発表された。未来のＡＩ社会は、幸福なのか、不幸なのか…。ＡＩ発展の根本には、重大な問題が横たわっていると言われている。

しかしそうした期待や心配は大きな誤解に基づいていると言えよう。というのは、昔から人間はいろいろな機械を使っているが、それはその機械の能力が、人間をしのいでいるからである。たとえば自動車は人間が走るより速く走るから、人間は使用しているのである。ＡＩが百科事典を丸ごと記憶しているといっても、別に驚くことはないのである。

昔から機械の力は、部分的には人間の力をしのいでいるのである。自動車とマラソン競走をして、負けたからといって、怒る人間がいるであろうか。ＡＩの場合もそれと同じである。

しかし世間の大騒ぎには、それなりの理由がある。二〇一〇年（平成二十二年）代後半に入って、ＡＩが新た

な産業革命を起し、近未来社会を変えるという議論が、専門家の間で急速に盛り上ってきた。

グーグル、米マイクロソフト、米ＩＢＭなどの企業は、すでに巨大な研究プロジェクトに着手している。日本でも平成二十八年四月に、政府主導で人工知能技術戦略会議が作られ、産官学一体となってＡＩ研究を進めるという。そこでは膨大な経済効果が見込まれている。しかし成果をあげるには、欧米の後追いであるから、まず機関と人間の知に対する深い考察が不可欠である。

現在のＡＩブームは第三次である。

第一次ブームは一九五〇年代（昭和二十五年）、第二次は一九八〇年代（昭和五十五年）、ともに、期待外れに終った。

とりわけ日本が一九八〇年代に開発した第五世代コンピューターは、五〇〇億円以上の予算を注ぎこんだあげく、失敗した。コンピューターは論理機械であるから、正確な論理操作をすれば、答えが誤ることはない。だが純粋な論理操作だけで解決できる問題は、簡単なゲームやパズルくらいしかない。

この挫折から、多くの「知識」をメモリーに蓄積して、それらを組み合わせて推論するという発想が出てきた。これが「第二次ＡＩブーム」である。

しかしこの第二次ＡＩブームは発展せず、衰退した。それは知識の活用で応用範囲は拡ったが、答えの精度が落ちる恐れが出てきたからである。人間の知識は全部正確無比とは限らない。しかし何か誤謬が起きたとき、人間は何とか直観を働かせて乗り切るが、そのようなことはＡＩには無理であり、そこに挫折の根本問題があった。

日本の第五世代のコンピューターの失敗の原因は、この難問から目をそむけ、ただ推論操作の高速化だけに取組んだ点にあった。

第三次ＡＩブームを起したのは、「深層学習」という技術によってである。

昔からコンピューターは、画像や音声などのパターン認識が苦手な分野であったが、深層学習はここに画期的なブレークスルー（技術突破）をもたらした。これまでのパターン認識では、人間が外部からパターンの特徴を機械に与える。しかし深層学習を用いるＡＩは、自分で特徴を抽出する。

有名な「グーグルの猫認識」は、動画投稿サイト「ユーチューブ」の一千万の動画から、自動的に猫の画像を取り出してみせた。さらに深層学習のプログラムは、脳神経に似た構造を持っている。

しかし深層学習はすぐれた技術であるが、あくまでパターン認識において有用であるにすぎない。実際に行っているのはビッグデーターの統計処理であり、人間の脳における、社会的、言語的な概念の処理と、直接関係づけるのは困難である。

以上のように深層学習を駆使したＡＩは、万能ではないし、決して何でも出来る汎用機械ではない。アルファ碁が出来るのは囲碁だけで、投資相談も無理だし、経済学の論文も書けない。それなのに、

「近い将来、人間より賢い汎用ＡＩが登場する」

などという議論が出るのは何故であろう。

ＡＩが二〇四五年（平成五十七年）には、人間の脳を上回るという「シンギュラリティ（技術的特異点）仮説」は、そうした妄想の典型である。これはアメリカの発明家レイ・カーツワイルが主張している仮説で、約三十年後にはコンピューターは自我を持ち、人間の代わりに知的作業を行うというのである。

しかし一方、これは機械による人間の支配であり、阻止すべきだという論もある。

しかし人間は論理機械ではなく、多細胞生物である。そのため人間の思考は論理矛盾を含んでいることも多いし、身体的な直観にも支えられている。ＡＩという機械知は過去のデーターに基づくものであるので、安定状態での作業効率は良くても、まったく新しい環境条件には対応できないのである。生物は激変する地球環境の中で生き抜いてきた。この柔軟性こそが生命知の本質ではあるまいか。

したがって大切なことは、自我を持つ汎用ＡＩといった幻想を追わず、実用的な専用ＡＩの精錬にまい進することである。応用する分野には、自動運転、農業、スマート工場など、数多くある。目ざすのはＡＩではなく、「ＩＡ」（人知）（インテリジェンス）の、増幅器（アンプリファイアー）なのではあるまいか。

三、人工知能は敵か味方か（書評）

ジョン・マルコフの「人工知能は敵か味方か」という書がある。

ＡＩか、ＩＡか。

すなわちＡＩ（Artificial inteligence）（人間の知能を実現する人工知能）を作るべきなのか。

ＩＡ（Inteligent Amplifier）（人間を助けその知性を拡張するもの）を作るべきなのか。

研究者のなかにはＡＩ派もいれば、ＩＡ派もいる。人工知能の世界で、長年つづいてきた、いわば宗教戦争である。

ＡＩが目指すのは自動化である。人間の知的活動を自動化し、コンピューターやロボットなどにより、次々と自動化していくのである。目指すところは、運転から災害救助や介護まで、多岐にわたる。

一方、ＩＡがめざすのは人間の補助である。コンピューターは人間の判断を助け、人間の指示で動くのである。

では、ＩＡの方がいいのではないか。しかしそんな単純な話ではない。本書でその論争が、時には近づき、時には離れて進んできた歴史が、くわしく書かれている。

この本書の特色は二点ある。

一つは、人工知能の初期から現代に至るまでの超有名人が、次々と紹介されることである。現在のコンピューターの基礎を作ったフォン・ノイマンから始って、ノイマンの指導を受けたＡＩ派の代表であるミンスキー、

ＩＡ派の代表のエンゲルバート、

さらにＡＩ派からＩＡ派へ転身したウイノグラード、

その教え子でＧｏｏｇｌｅを創業したペイジ、

ディープラーニングの「教祖」であるヒントン。

過去から現在へつづく人脈が、見事に描かれている。

特色の二点目は、人工知能の世界の大きな流れである。スタンフォードにいたセバスチャン・サランが何を考え、自動運転車を作ったのか。Ｇｏｏｇｌｅのロボット戦略の鍵をにぎるアメリカ・ルービンは、どんな人物で、何を志向しているのか。トヨタの研究所を率いるギル・プラットは、どういうルーツがあるのか。

さて、問題はＡＩか、ＩＡか。いつの時代も、自動化技術が文明を前進させている。それを選ぶのは人間自身である。

四、考える産業ロボット

米エヌビディアは、ファナックと技術提携をすると、二〇一六年十月（平成二十八年）に発表した。

米エヌビディアは、ゲームやコンピューターグラフィック用半導体の世界大手である。技術提携することによって、エヌビディアの高性能半導体をＡＩ（人工知能）のエンジンとして、ファナック製品に搭載し、自らスキルを磨く、

（考える産業ロボット）

を開発するのである。

産業機器の世界では日本が得意な「頭脳」の世界へ、アメリカ企業が押さえる構図が現れつつあるといえよう。

エヌビディアがファナックとともに目指すのは、ＡＩ（人工知能）で作業を学ぶロボットが働く「未来の工場」である。ロボットが自らソフトウエアを書き換え、同僚といえる別のロボットと通信しあって、自律的に生産性を高めるのである。一台のロボットが学習した最適な作業ノウハウを共有し、「改善活動」を加速させるわけだ。

ファナックは、ＩＴ（情報技術）企業や機械メーカーなど、国内外二百社超と組み、あらゆるものがネットにつながるＩＯＴと、ＡＩ（人工知能）を融合させた、次世代工場システムの開発を始めたばかりである。そこへエヌビディアが合流するのである。エヌビディアは、

「ファナックの手法は、世界を席巻する」

と予言している。

エヌビディアは、ゲームやＣＧ向けに大量の画像データーを高速処理する、半導体の企業だった。ただ、名前が一気に知れ渡ったのが、自動運転技術だった。カメラ画像から先行車や歩行者を認識し、ブレーキやハンドルを自動制御するＡＩのエンジンとして、エヌビディアの半導体が抜群の性能を発揮したのである。

トヨタ自動車や独ＢＭＷ、米テスラモーターズなど、世界の新旧自動車メーカーがこぞって採用に動いており、はやくもこの世界で主導権を握りつつあった。その勢いで、ＡＩを活用するあらゆる業種に進出するのである。ファナックと組むのは、日本のお家芸だった生産設備の領域でめざましい進化をとげる、頭脳を握るためである。

パソコンやサーバーでは米インテル、スマートフォンでは米クアルコムが、狙いを定めた分野に経営資源を集中して、市場を席巻した。これに対し、日本の半導体メーカーは挑みはしたけれど、事業や事業や品揃えが多すぎる高コスト体質を引きずり、敗退をくり返してきた。

半導体はトップがうま味の大部分を手にする「オール・オア・ナッシング」の世界である。

日本勢は自動運転やロボットの分野でも、まともな勝負が出来ず、アメリカ企業が事実上の世界標準を握ることになるのではあるまいか。

エヌビディアＣＥＯ（最高経営責任者）であるジェンスン・ファンは、次のように語っている。

ファナックと組むことで、未来の工場が実現する。

ファナックは、工場用ロボットでは世界のリーダーである。新製品開発や生産現場の設計で、先見の明がある。ＡＩでロボットに革命を起すことが出来ると考えており、その手法は世界を席巻し、他社にも採用が拡がるであろう。

これまでＡＩで賢くなる工場は誰も手掛けたことがない。どのようなＡＩが適しているのか。半導体の演算能力はどのくらいが適当なのか、といったことから、共同で研究していく。

ロボットが自律的にプログラムを書く未来はいつ実現するのかということが問題にされるが、一年後には起るであろう。ＡＩは空想科学小説（ＳＦ）ではない。

五、金融ロボット・アドバイザー

扱うデーター量が多い金融業とＩＴ（情報技術）とは、特に関係が深い。

コンピューターのプログラムが個人投資家に、資産運用を助言する

（ロボット・アドバイザー）

が、日本でも普及期に入ろうとしている。

世界最大の運用会社である米ブラックロックが近く（二〇一六年）サービスを始めるほか、日本でも大和証券や松井証券など、証券会社も参入する。ベンチャー企業を合わせれば、二十社程度がサービスを提供するであろう。個人金融資産一七〇〇兆円をめぐり、競争が激しくなりそうである。

ロボット・アドバイザーは、コンピュータープログラムが個々の投資家の志向に応じ、最適な運用資産の配分を提案するサービスである。先行するアメリカでは、大手だけで資産残高が四兆円に達している。

「何歳か」、「投資経験はあるのか」、など簡単な質問に答えれば、

「先進国株」

「新興国債券」

「金」

などを組み合わせた運用メニューを、数分ではじき出す。スマートファン（スマホ）や、パソコンを通じて、気軽に利用できる。

最大の強みは、金融とＩＴ（情報技術）を組み合わせたフィンテックが可能にした、コストの低さである。手数料は運用額の〇・二～一パーセントにとどまる。富裕層が利用するプライベートバンキングや、金融機関に運用を任せる既存のラップ口座（二～三パーセント）を下廻る。

世界で約五〇〇兆円を運用する最大手、米ブラックロックは、近く日本でサービスを開始する。自社やプロの機関投資家が使っている資産配分システムを、日本の証券会社に提供する。証券会社の店頭や、営業担当者を通じ、個人投資家に、上場投資信託（ＥＴＦ）などを中心とした資産配分を提案する。

日本の大手金融機関も次々と参入を表明している。大和証券は二〇一七年（平成二十九年）一月に、ロボット・アドバイザー技術を使うサービスを開始する。先行するアメリカでも、ゴールドマン・サックス、ウェルズ・ファーゴなど、大手金融機関が続々と参入している。二〇二〇年にはアメリカの運用資産が、二、二兆ドル（二〇〇兆円強）に膨らむとの試算もある。

ただし、これは二〇〇八年の金融危機以後に拡った新しいサービスであるので、世界の金融市場に大きなショックがあった場合の、運用成績への影響は未知数である。世界の金融商品に分散投資するために、為替リスクも負うことが多いと思われる。

今後、証券会社が取組むのは、ＡＩ（人工知能）を使った株価予測である。

野村証券では、株価の過去の平均からの乖離率などのデーターを取り込み、個別銘柄の五分後の株価を予想するサービスを手掛ける。みずほ証券が開発したＡＩは、過去の株価のパターンから、一時間後の個別銘柄の株価を、「〇・五パーセント以上上昇」などの形で予想する。その的中率は、八割以上に達しているという。

保険業界では、データーを使って保険料を適切に算出する試みが拡っている。あいおいニッセイ同和損害保険とトヨタ自動車は、自動車に付けたセンサーで膨大な運転データーを集め、保険料に反映する新しい自動車保険の開発に乗り出した。

みずほ証券では二〇一六年（平成二十八年）十一月に、ＡＩ（人工知能）を搭載した株式売買システムを、機関投資家向けに提供し始めた。ＡＩは自社開発で、株価変動を予測して、

（安く買い、高く売る）

ように、注文執行のタイミングを調整する。機関投資家が受託している年金基金や投資信託の運用成績の下支えに、つながる可能性がある。

個別銘柄ごとの注文状況や売買ボリューム、過去の値動きなどのデーターから、株価が三十分～一時間後に、現時点と比べて、どのくらい上昇下落するかを、ＡＩで予測する。

株価予測は、顧客の売買頻度が高い東証一部の時価総額上位五百社の銘柄からスタートし、対象を順次拡大していく。注文金額の〇・〇一パーセント程度の運用成績改善が見込めるという。システムの利用料は徴収しない。

金融業界でもＡＩの利用が拡がりはじめているが、ＩＴ（情報技術）系企業と共同で開発するのが、一般的である。

六、自動運転のための地図

現在、運転手の居ない自動運転車の研究が盛んであるが、自動運転のためにはそのメカニズムの作成と同時に、巨大な地図が必要である。すなわち自動運転車はその地図を頼りに、日本全国（将来は世界各国）を走り廻るからである。

政府は二〇二〇年（平成三十二年）までに、高速道路での自動運転の実現を目ざしている。しかし、国内の高速道路は総延長で三万キロメートルあり、このほか主要な幹線道路は約一二七万キロメートルもある。従ってすべてを測量するには多くの時間がかかる。費用も膨大で、測量車を走らせるだけで、数百億円かかるとみられている。

今から二百年前、伊能忠敬は十七年間の測量をやって「大日本沿海輿地全図」を作成したが、現在はその現代版ともいうべき、自動運転に欠かせない高精細な三次元地図を作成するため、様々な機器を積んだ自動車が、主要高速道路の測量を始めている。

屋根一面に多くの機器をのせた一台のワゴン車が走る。車内の二つのモニターには、現在走っている場所を示す地図と、カメラが撮影した周囲の風景が映っている。三菱電機やゼンリン、自動車九社が出資して設立した「ダイナミックマップ基盤企画」（東京・港区）が進める、三次元地図作りの光景である。現在、機器の最終調整をしており、近く国内の主要な高速道路の測量を始める。

屋根にはいろいろな種類の計測機器が取りつけられている。まず、全地球測位システム（GPS）で、どこを走っているのかを精密に把握。レーザー計測器やカメラを使い、道路の形状や車線、停止線、車線変更表といった道路の情報はもちろん、信号機や標識、周辺の建物なども計測する。これらの情報を組み合わせて、

（どこに何があるか）

を割り出すのである。

さらに車体に取りつけた加速度センサーなどの情報から、道路の勾配や、路面の傾斜を調べる。日本の道路は複雑に交差しており、上下も識別する必要がある。

江戸時代の伊能忠敬の測量隊が歩いた距離は、のべ四万キロメートルで、地球の一周分に達した。その行程でていねいに何度も測量し、それが正しいかどうか補正するといった、地道な作業をくり返し、それによって正確な地図が出来上った。

しかし現在の先端技術を駆使した測量車は、道路を一～二回走るだけでよい。種々のセンサー情報を比べることで、自動的に補正し、点の集まりの測量データーを、自動運転に必要な線で表わす地図情報に変えるのである。誤差は十センチメートル以内である。

自動運転車には高精細な三次元地図が不可欠である。車載センサーやGPSの情報だけでは、走行している車線の特定などは難かしい。三次元地図と組み合わせれば、たとえば交差点で右折する場合に、専用レーンはどこにあるか、どのルートを選んだらよいのか、などがわかる。自動車がどこを走っているのかも、誤差が数センチメートルという正確さで、割り出せる。

高精細三次元地図とは、道路の傾斜や構造、車線、標識、周辺の建物などの情報を盛り込んだ、デジタルデーターの地図である。立体的に認識することで、現在のカーナビゲーションシステムの地図では難かしかった、立体交差や坂道などの情報を把握できる。

自動運転車は自らの位置や周囲の状況を、正確に把握する必要がある。センサーやカメラの性能を発揮するには、高い精度の地図が必要である。前方の坂道やカーブの情報がわかれば、走行速度を変えることが出来る。たとえば上り坂にさしかかった時には、アクセルを踏んで渋滞を防ぐ。上り坂の先にある信号や渋滞が把握できれば、自動で減速して事故防止につながるのである。

七、自動運転の開発競争激化

日本だけでなく、日米欧の自動車メーカーの間で、自動運転をめぐる開発競争が激しさを増している。

アメリカではフォード・モーターが二〇一六年（平成二十八年）に、ハンドルやアクセル、ブレーキのペダルがなく、機械が人間の代わりに運転する「完全自動運転車」を、二〇二一年までに実用化する計画を発表した。高速道路などでのテスト運転などをやらずに、一気に完全自動化を狙い、技術の主導権争いを優位に進めたいという考えである。まず配車サービス事業などに使う商用車として売出し、その後、自家用車に応用する。

フォードは自動運転の開発強化に向け、センサーや地図などの技術を手掛けるベンチャー企業への出資や買収、提携戦略を矢つぎばやに行った。カリフォルニア州にある研究開発拠点の人員も拡充し、公道実験に使う試験車は年内に現状比三倍の約三十台に、次の年には九十台に引き上げて、二〇二一年の完全自動化を目指す。

自動運転をめぐっては、日米欧の大手が熾烈な開発競争をくり拡げている。日産自動車は平成二十八年八月に発売するミニバン「セレナ」の新型に、高速道路の同一車線で使える自動運転機能を採用し、東京五輪が開かれる二〇二〇年までに、一般道での実用化を目指す。トヨタ自動車やホンダも二〇二〇年を目途に、高速道路で車線変更が可能な車両の発売を計画している。

海外では、ドイツのBMWが完全自動運転の実現に二〇二一年までの生産開始を目指し、米ゼネラル・モーターズ（GM）も、カナダの自動運転の研究開発拠点を拡充し、早期の実用化を急いでいる。

完全自動運転車の開発では二〇二〇年前後の実用化を狙うグーグルに加え、ドイツのフォルクスワーゲン（VW）、ドイツBMWも、それぞれ二〇二一年の導入を表明した。このように二〇二〇～二〇二一年が節目となる中で、後発のフォードが一気に量産時期にまで踏み込んだのである。

その背景には、世界で拡がる開発競争に乗りおくれれば、供給に限りがある部品メーカーの協力を得られにくくなるという事情もある。とくに障害物を検知する周辺認識の部品などは、すでに各社の囲い込み競争が激しくなっている。BMWは米インテルと提携したほか、ダイムラーなどと共同でドイツのデジタル地図会社も買収した。米ゼネラル・モーターズ（GM）や日産自動車も、イスラエルの企業と提携する。

しかし完全無人車が出来ても、公道で走らせるためのルールが出来ていない。国際的な交通規則を定めた「ジュネーブ条約」は、人間の運転手がいない車を認めていない。また、事故の責任を誰が取るのかという問題も残

る。

しかしルールの確立などを待っているだけでは、自動運転車は実現しない。欧米企業の動きは試行錯誤を繰り返しながらも、民間主導で最適な落し所を探っているかに見える。二〇二〇年の東京オリンピックを見据えて、トヨタ自動車など日系企業も同時期の実用化を目ざしている。欧米各社が開発スピードを上げる中で、日本勢にとっても「この先五年」の攻防が、正念場である。

各社の自動運転への取組みは次の如くである。

日産――二〇一八年に高速道路で車線変更も可能な技術を実用化し、二〇二〇年には交差点を含む一般道での導入をめざす。イスラエルのセンサー企業と提携

トヨタ、ホンダ、富士重工――二〇二〇年をめどに、高速道路で車線変更も可能な技術の実用化をめざす。トヨタはシリコンバレーにAI開発子会社を設立

BMW――アメリカ半導体大手のインテルやイスラエルのセンサー企業と提携し、完全自動運転車も視野に、二〇二一年の生産開始をめざす。地図会社をダイムラーなどと共同買収

ダイムラー――自動運転バスを実証運行。トラックも開発

フォード――二〇二一年に巻全自動車の開発をめざす。センサー会社に出資。シリコンバレー拠点の人員倍増

GM――相乗りサービスのリフトに出資。自動運転ベンチャーを買収

VW――イスラエルの相乗りサービス会社に出資

グーグル――商用化をにらみ、FCAと提携。自動車業界の人材も引抜き

八　自動運転の基準規則

自動運転車について日本では、高速道での規制速度の在り方など検討する警察庁の検討委員会が、二〇一六年（平成二十八年）六月に発足し、第一回の会議か開かれた。学者や業界団体メンバーなどで構成、二〇一七年春まで議論を重ね、報告書をまとめる。

政府は、東京五輪が開かれる平成三十二年までに、高速道路で走行できる自動運転車や、特定地域で遠隔操作できる車の実用化を目指しており、開発を後押しするのが狙いだ。

政府は自動運転を、運転手もおらずハンドルもない「完全自動運転（レベル4）」から、操作が原則自動で必要時に運転者が運転する「準自動運転」（レベル3）、制御や加速、ハンドル操作のうち、複数が自動の「準自動運転」（レベル2）、制御など一部機能が自動の「安全運転支援」（レベル1）と定義している。遠隔無人運転は、完全自動運転ではないが、車内に運転手がいないことから、「レベル4」に相当すると位置づけられた。

規制速度の見直しや、事故時の責任の所在、道路交通法の改正など、法令改正に向けた議論は、平成二十九年度からスタートする。

日本だけでなく、ドイツ、フランスなどの欧州主要国でも、自動運転の共通基準を作っている。まず二〇一八年にも、高速道路で人間がハンドル操作をせずに、追い越しや合流ができる車を走れるようにするための、ルールを作る。参加国は、これを自国内の基準に採用する。自動運転車で先行するアメリカは、独自にルールを作る方針である。

自動運転車の開発をめぐっては、トヨタ自動車、日産自動車や、ドイツ・ダイムラー、アメリカ・ゼネラルモーターズ（GM）といった、日米欧の自動車大手と、アメリカ・グーグルなどのIT大手が、しのぎを削っている。

一方、アメリカ・テスラモーターズの車が「自動運転モード」作動中に死亡事故を起こすなど、問題も起きはじめており、開発の指針となる基準作りを急いでいる。

現在、国連の専門家会議で、自動車追い越し、合流が出来る車の共通基準作りを進めている。この会議には、日本、韓国、ドイツ、フランス、イギリス、欧州連合（EU）の欧州委員会などが参加しており、出来上れば、参加国はこれを国内の基準に採用する。

共通基準には、自動追い越しできるのは高速道路に限り、事故が起った場合は、ドライバーに責任があるなどの原則を盛り込む。更に、

①機械より人間の運転操作を優先する

②ドライバーの居眠りや、よそ見を防ぐ装置を搭載する

③ドライバーが警告に反応しない場合は、自動で路肩に停止する

といった安全に配慮した規定も導入する。

居眠りや、よそ見を防ぐ方法としては、定期的に運転席のボタンを押させたり、ドライバーの状態をセンサーで監視したりする案が有力である。すでにオムロンが、ドライバーの集中度合いを判定する車載センサーを開発するなどの動きも出ている。

アメリカでは、自動で追い越し、合流ができる、車の走行を認めているが、欧州各国では事実上禁じている。日本では明確なルールがない点が、量産のネックになっている。

日欧は、コンピューターが運転全体を制御する完全な自動運転車の基準作りも、国連で主導する方向である。

アメリカは日欧の基準作りに加わっていない。しかし近く運輸省道路交通安全局が、独自のルール案を公表す

る見通しである。

このように最近は、人間の運転を助ける、自動運転車の安全性を高める技術開発が、相次いでいる。

日本でも東京大学は、車の現在位置を、全地球測位システム（ＧＰＳ）の精度が落ちるトンネル内でも、正確にとらえる装置を試作した。名古屋大学とトヨタ自動車などは、人工知能（ＡＩ）で、歩行者を精度よく見分ける技術を開発した。二〇二五年にも普及期を迎えるとされる、完全な自動運転への応用も、視野に入ってきた。

自動運転は運転手の判断ミスを減らし、渋滞の緩和や、運転が不慣れな高齢者らの移動の助けになる。周囲や、車体の位置を、高精度に認識する技術が欠かせない。東大がデンソーなどと開発した装置は、ＧＰＳの電波が届かないトンネル内や、屋内の立体駐車場などでも、高精度で走行位置を検出できる。自動運転車の多くは、走行車線や停車位置を決めるのに、ＧＰＳの位置情報を使う。屋内では位置を見失う恐れがあったが、走路からはみ出す心配がなくなる。

新装置は一センチ四方の大きさで、液体を入れた容器が載る。車内に固定して液面が波打つ様子をセンサーで記録すると、車体がどこで、どれだけ傾いたか、がわかる。速度データーなどから、車が進んだ方向と距離が推定でき、トンネルへの入口からの移動ルートが計算できる。従来も車の角度や加速度から、移動ルートを調べる方法はあったが、新装置は振動などの影響を受けず、ＧＰＳを捕える。

名大とトヨタ自動車などは、前方の歩行者を九〇パーセント以上の確率で検出できる技術を開発した。車のカメラで前方の風景を撮り、レーザー距離計の情報と組み合わせる。

ＡＩに様々な姿勢の人の画像を学習させ、顔の向きを覚える。道路を渡ろうとする歩行者をいち早く見つけ、運転者に知らせたり、自動ブレーキをかけたりできる。手にしたスマホに見入る人も、画像から認識し、危険性を測定できる。

路面の凍結を発見する技術を開発したのが、リコーである。見た目が似る材質も区別できる「偏光カメラ」と、通常のカメラで撮った画像を分析する。誤検出の割合は、従来の十分の一から、百分の一になった。雨に濡れた路面と、凍結路面では、ブレーキのかけ方が違い、誤った判断ではスリップなどの恐れがある。

そのほか、自動技術の開発では、交差点での危険察知や、白線の整備されていない一般道の走行、多くの歩行者や自転車の認識など、課題も多い。

以上のような状態から、産業界ではＡＩに関連した企業買収や投資がふえている。

トヨタ自動車はＡＩ分野への投資が膨らむこともあって、平成二十八年度の研究開発（Ｒ＆Ｄ）費が、はじめて一兆円を超える。日産自動車もＲ＆Ｄ投資は、過去最高である。

しかし世界を見れば、積極的な企業はいくつもある。たとえば、アメリカのグーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン・ドット・コムなどがある。最近はこれらを総称して「ＧＡＦＡ」と呼んでいるが、四社はいずれもＲ＆Ｄ投資が一兆円を大きく超え、研究領域も自動車など、あらゆる産業とＡＩの融合に及んでいる。

「小粒でもピリリと辛い」と言われたスズキ自動車が、トヨタ自動車に提携を願い出たのも、Ｒ＆Ｄレベルの大競争が背景にあるからである。研究開発費が一兆円を超す企業は、日本ではトヨタだけである。

スモールか、ビックか、企業はそんな選択を迫られる時代になったといえようか。それは経済規模だけでなく、ビックデーターをどれだけ多く持てるかの競争である。

ではスモールな日本企業が、ビックデーターや世界市場を相手にするにはどうするのか。それは海外の政府や企業との連携である。たとえば欧州である。欧州は存在感を増すアメＩＴ企業に監視を強める一方、日本の政府や企業に連携を求めてきている。大詰めの日ＥＵ（欧州連合）の、ＥＰＡ（経済連携協定）交渉がそうである。争点は農産物や自動車関税だといわれるが、もっとも期待が高いのは、自動運転などのＩＯＴ（モノのインターネット）での、規格標準化協力だという。アメリカはデファクトスタンダード（事実上の標準）作りがうまい。それならば日ＥＵはデジュールスタンダード（公的標準）を拡げよう、というような提案である。

自動車を取巻く再編は、一九〇〇年代後半の「四〇〇万台クラブ」の時より、広い業種に及ぶ。欧州、新興国企業とも、技術や資本で提携することが、ふえる可能性もある。日本にとっては何よりも、産業界がビックでいられるかどうか、背水の戦いになるであろう。

ホンダとソフトバンクは、ＡＩ（人工知能）を使った自動車の運転支援システムを共同開する。

走行データーだけでなく、表情や声のトーンから、感情や嗜好を分析。行動パターンを推測し、運転手が欲しい情報を対話形式で迅速に提供する。車が学習しながら、知識を蓄え、人間のように会話したり、作業を代行したりできる、新たな仕組みを目指している。対象は通信機能を備えた「コネクテッドカー（つながる車）」で、二〇三〇年には約七億台と、乗用車の過半数になる見通しという、試算がある。

ホンダはソフトバンクの持つ人の感情を学習し、会話する技術などを活用する。ソフトバンクは自動車関連事業の拡大につなげる。車が集める膨大なデーターをめぐ

り、自動車と通信の連携が加速するのである。

車内に備えたカメラや運転手との対話を通じ、クラウド上のＡＩがクセなどを学ぶ。方言で会話をしたり、よく通る道路いのおすすめ店を紹介したりすることを想定する。

このようにドライバーの代わりにＡＩ（人工知能）が操縦する「完全自動運転車」の実用化に向けて、ＡＩがどのような判断で車を操作したのかを、詳細に記録するシステムを、産業技術総合研究所（産総研）などが現在開発している。二〇二〇年（平成三十二年）にも、完成させる予定である。自動運転車が事故を起こした際の捜査や、原因究明、再発防止に、役立てる狙いである。国内外の自動車メーカーに提供し、技術の世界標準化を目指す方針である。

新エネルギー・産業技術総合開発機構（ＮＥＤＯ）の委託を受け、産総研人工知能研究センターが、平成二十七年から九州工業大学と共同で開発を進めている。

このシステムは、自動運転車のＡＩが一つ一つの捜査を判断した際の「根拠」を集めていく。たとえば車を発進させたとき、

「青信号で、前方に歩行者が居なかった」

のが根拠だったとする情報を、日時、場所、車載カメラの映像などとともに、記録する。そして無線通信でつながるＩＯＴ（モノのインターネット）を経由してサーバーに送信、保存する仕組みである。

自動運転車の開発競争は世界中で加速しており、アメリカ自動車大手のフォード・モーターは二〇二一年（平成三十三年）までに、完全自動運転車を供給する予定である。

日本国内では、平成二十八年九月に経済産業省が、完全自動運転車の販売開始目標を、平成三十七年から数年程度、前倒しする方針を表明した。安倍首相は平成三十二年の東京五輪・パラリンピック開催時に、東京で自動運転車を走らせる目標をたてており、専用レーンで自動運転バス運行することなどが、検討されている。

ただ、完全自動運転車はドライバー不在で走るケースも想定され、事故の際に、操作の経緯や、事故原因を把握できない恐れが、指摘されている。産総研はこうした課題を克服するシステムを提供し、自動車メーカーの開発を後押しする考えである。

アメリカ・フォード・モーターは、二〇二一年までに、ハンドルやアクセルのない、完全自動運転車の量産を始めると発表した。

まず、ライドシェア（相乗り）などの配車サービス向けに供給する。関連技術への投資を拡大し、研究拠点の人員を倍増する。アメリカＩＴ（情報技術）大手を含む

自動運転車の開発競争が、より激しくなってきた。

フォードは量産に向けて、関連技術を取り込む。自動運転車で、対向車や歩行者、建物などの状況や距離を立体的に認識する。レーザー光センサーの大手、アメリカ・ベロダインに、七五〇〇万ドル（約七五億円）出資したほか、画像認識技術に強みを持つ人工知能ベンチャーのサイプス（イスラエル）を買収した。ベロダインには、中国のインターネット検索大手の百度（バイドウ）も同額を出資した。

フォードは二〇一五年一月に、シリコンバレーの中心地パロアルト市内に、研究拠点を開設した。現在は研究者や技術者などが一三〇人いるが、二〇一七年末までに、デザイナーや新規事業開発の担当者を含め、二六〇人に倍増する。

アメリカでは自動運転車の実用化に向けて、連邦政府や各州レベルで、法的な枠組みをどうするのか、議論が進んでいる。自動運転車の開発をめぐっては、アメリカ・グーグルが先行している。自動車メーカーでは、ドイツ・ＢＭＷが二〇一六年に、二〇二一年までの完全自動運転技術導入にむけて、アメリカ・インテルなどと提携。完成車メーカーの間でも、開発競争が加速している。

日本の国土交通省は、二〇一六（平成二十八年）十一月に、自動運転車で事故を起した場合の損害賠償責任を議論する、有識者研究会の初会合を開いた。ドライバーがハンドルを握らない完全自動運転車では、車の所有者のほか、メーカー側にも賠償責任が生じる可能性がある。国交省は早期に課題を整理し、解決策を示すことで、制度面から実用化を後押しする。

自動運転は社会問題を解決する有用な手段であるが、実用化に必要である検討事項の一つが、民事責任のあり方である。交通死亡事故の九〇パーセント以上が、ドライバーの法令違反が原因である。現状の自動車損害賠償では、人身事故の場合、原則として車の所有者のドライバーが、責任を負うと規定している。

しかし、ＡＩ（人工知能）がハンドルやブレーキを操作する完全自動運転車は、ドライバーが運転に関与せず、ＡＩが通信機能などと連動し、周囲の状況を判断して、ハンドルやブレーキなどを操作する。このため、現行の法規制が当てはまらない場合が想定される。

たとえばＡＩを含めた制御システムの欠陥が事故原因の場合、システムを開発した企業にも責任が及ぶ可能性がある。またサイバー攻撃で、自動運転車の通信機能が不能になり、事故となるケースも考えられる。

こうした事故時の責任の所在が不透明なままでは、メーカーが技術開発に二の足を踏み、実用化に遅れが出る懸念がある。また、事故が発生した時の、被害者救済が遅れる恐れもある。国交省は今後、自動運転に関する交

通法規を議論している警察庁とも連携し、平成二十八年度中に論点を整理し、平成二十九年度以降、自賠法改正を含めて検討する方針である。

政府は平成三十二年をめどに、特定の場所に走行できる自動運転技術を実用化するほか、平成三十七年をめどに、完全自動運転車の実現をめざしている。アメリカではすでに自動運転機能を備えた車による死亡事故が発生している。平成二十八年九月に開かれた、先進七カ国（G7）交通相会合の共同宣言では、この死亡事故も念頭に、法的対応も今後の検討課題として盛りこまれていた。

このように自動運転に関するルール作りは、始ったばかりである。保険や安全規格などで日本勢が国際的なルール作りを主導できるかは、国内自動車メーカーの動向にも影響する。

市場に出ている自動ブレーキなどの自動運転技術で事故が起きれば、現在の損害賠償の仕組みで救済できる。しかし運転手がまったく運転に関わらない場合の事故は、どう扱うのか。事故の被害者救済や賠償責任の追及について、どのようなルールを作るかの議論は、今後世界共通の課題になる。

二〇一六年五月に、アメリカ・テスラモーターズの自動運転中に、はじめて運転手の死亡事故が発生したが、原因究明には時間がかかっている。この件にかかわらず、原因究明が遅れるようだと、被害者救済が後まわしになりかねない。かりに運転者の責任がない場合、現在は保険会社が自動車保険で補償できない。海外でも自動運転の事故は苦慮している。欧米大手では自動運転で事故が起きた場合の、契約者の車両などへの補償は用意しているが、自動運転の事故の被害者から求められる賠償責任まで対象にする保険はない。

日本勢は、自動運転システムのデファクトスタンダード（事実上の標準）を目ざす構えで、東京海上日動火災保険が賠償責任に踏み込んだことで、他社も追随の可能性がある。

矢野経済研究所によると、二〇一五年のレベル2の自動車は全世界で二万三千台。二〇三〇年には、三一五五万台まで増えると予測されている。アメリカ運輸省は二〇一六年九月、自動運転の開発・運用指針を発表し、システム異常時や衝突時の安全対策など、十五項目を示した。賠償責任については、自動運転を六段階のレベルに分けて議論している。

自動運転車の開発が進むと、保険対応も課題になってくる。

東京海上日動火災保険は、二〇一七年四月から、自動運転中の事故を、自動車保険の補償対象に加える。自動車保険の契約や、更新時に全契約者に無料の特約として

提供、事故の被害者が長期間救済されない事態を避ける。自動運転を対象にした保険は、日本国内で初めてである。自動運転の普及が、ビジネスモデルを変え始めているといえよう。

自動運転は、加速、操縦、ブレーキのうち、一つの操作をシステムが担う「レベル1」と、複数の操作をシステムが担う「レベル2」まで、実用化している。レベル2には、日産自動車の「セレナ」や、アメリカ・テスラモーターズの「モデルS」が該当する。

緊急時にドライバーが対応する「レベル3」はまだ実用化していない。しかし東京海上はこのレベルまでを、新保険の対象と想定している。ドライバーが運転に関与しない完全自動運転の「レベル4」は、実現していない。従って東京海上も、現時点で対象に含めていない。

自動運転では、自動車会社や通信会社など、事故責任の特定に時間がかかる。そこで、まず運転者に保険金を払い、被害者を救済する。東京海上がメーカーなどにまとめて賠償請求するので、運転者や被害者など個人の手間を省け、業者側も対応しやすくなる。

自動車保険は国内損保の正味保険料収入の五割程度を占める主力商品であるが、自動運転が普及すれば、従来のビジネスモデルが大きく変わる。保険を活用した形で、被害者の早期救済につながる仕組みをどう作るかが、課題になっていた。

九、AIがフルに働く社会の可否

今後AI（人工知能）の発展は目ざましいものがあり、最終的にはどの辺にまで達するのかはちょっと想像も出来ないが、AIが普及した世になると、AIは人間の仕事を奪うのではないかという心配がある。

資本主義の歴史の中で、技術の進歩とともに多くの労働者が仕事を失ってきたが、それを新しい仕事に移る「労働移動」によって、失業を解消してきた。AIもいずれ、これまでと質量ともにまったく異る規模で、人の仕事を代替していくであろう。

米グーグルが開発した囲碁AI「アルファ碁」や、自動運転技術がいま注目を浴びているが、これらは「特化型AI」と呼ばれ、実はそれほど多くの仕事を人間から奪わない。

本当の脅威になるAIは、何でも出来る「汎用AI」で、二〇三〇年頃に実現すると言われている。これが普及すると、もはや労働移動で吸収できなくなる。クリエイティビティ、マネジメント、ホスピタリティを伴わない仕事は、汎用AIに置き代わり、働ける人間は人口の一割という未来がきても、おかしくはないと言われている。

では汎用AIが普及したとき、経済はどうなるのであ

以上のようにＡＩ（人工知能）やロボットに代表される次世代の技術が、社会を大きく変えようとしている。日本もこの潮流を戦略的に生かし、活力のある未来を開かなくてはならない。

これまでの世界の三度の産業革命は、

蒸気機関

電力

コンピューター

の台頭によるもので、いま世界に抬頭している第四次産業革命は、

「インダスリー四・〇」

と呼ばれており、ＩＴ（情報技術）が飛躍的に進歩し、産業や就業構造を塗り替えるものである。

それにつれて新たな事業や、市場を作る競争が世界規模で始った。イノベーションの停滞が日立つ日本でも、好機を逃さず経済成長につなげなくては、ならない。

変革を担うのは企業であり、長崎県佐世保市にあるテーマパーク会社のハウステンボスは、ロボットが受付や清掃などをやるホテルを、一年前（平成二十七年）に開業した。客室は一四四室と当初にくらべ倍増したが、従業員は三十人から十人に減った。それは八十二台から一八二台に増やしたロボットが、主な戦力になったからである。

ろうか。その時の世界は、一部の資本家は汎用ＡＩが働く無人工場で、効率的にどんどん商品を作り出す。しかし多くの人間は、失業していて、商品を買うことが出来ない。すなわち潜在成長率は伸びても、個人需要がまったく追いつかない状態になるのである。

このような状態をどう解決するのかが、ＡＩ普及の世界には拡るのである。

それを解決する方法として、一つの方法は、生産手段を国有化して、国民に平等に商品を配る方法である。しかしこの方法は観念的には考えられるが、それを理念としている社会主義の歴史を眺めると、現実的ではない。

そうなると税を通じて所得を再配分する方法である。今の制度では生活保護である。しかし九十パーセントの国民を被保護者にするとなると、それは最低生活保障として毎月一定額を国民に配る、ベーシック・インカム（ＢＩ）の考え方に近くなる。

しかし、これも世界の一部の国で議論されてはいるが、歴史上もこのようなことが行われたことは一切ない。

しかしＡＩの進歩は人類をそのような局面にやがて追いこんでいくのである。汎用ＡＩの研究と並行して、人類はこの難問とも対決していかなくては、ならないのである。

十　産業革命四・〇が拓く未来

またＡＩを接客に使う実験も進めている。技術をうまく使って労働力不足補うだけでなく、それをチャンスに事業内容を刷新して新たな価値を創出する、それが企業を強くするのである。

労働生産性の向上にも技術は生きる。政府によると、日本の非製造業の生産性は、アメリカの五割程度にとどまる。とくに飲食や宿泊、小売り、運送など、業務の多くを人手に頼るサービス産業が低い。裏を返せば、技術の活用で伸びる余地が大きい。

単調な動作の繰り返しといったきつい仕事をロボットに任せば、人が働きやすい職場になる。女性や高齢者も働きやすくなり、就労機会の拡大にも結びつく。

しかし一方で、ＡＩが人間の仕事を奪いかねないという問題がある。最近の調査では、事務員や店員など、日本の労働人口の四十九パーセントが、今後十～二十年で、ＡＩやロボットで代替が可能になるという。しかし「技術は脅威である」と過度に警戒してはならない。消える職業がある反面、生れる職業もあるからである。たとえば、職場に導入したロボットを管理する「ロボット・コーディネーター」などは、新しく生れる職業の一例である。新たな課題の発見や、ひらめきなど、人間の生きる力は多面的であり、脅威論に偏らないで、技能を磨くべきである。技術との共生が、人の新しい能力を引き出すのである。

ＡＩベンチャーのエーアイスクエア（東京・港）は、ＡＩと人が連携して、消費者の問い合わせに応じる、コールセンターを新設する。定型的な内容はＡＩが、込み入った内容は人間がと、役割を分担する。

日立製作所は、ＡＩが従業員に能率の上がる働き方を助言する、実験を始めた。営業部門の六百人に名札型の端末を身につけさせ、集めた行動データーを分析する。「幸福だと感ずると仕事がはかどる」という研究にもとずき、ＡＩが同僚との会話を促すなどして、職場に一体感をもたらしたりする。

ＡＩもロボットも、組織や業務プロセスの見直しにまで踏みこんでこそ、導入効果が高まる。ＡＩも競争力を左右する中核の技術と位置づけて、企業は大胆に取り入れる戦略を立て、実現していく必要がある。

（つづく）

古い物・遠い夢

忠内正之

逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）

五

秀吉の正体をようやく思い知った信雄が、家康と結んだのは、あるいは自然の成り行きとも言える。

秀吉が織田の重臣を次々に己が傘下に組み入れて勢力の拡大を図りつつあるのを見て、家康の心中は穏やかではなかった。

家康は織田後継者の問題からは、出遅れてしまっており、一歩退いて自領の富国強兵に専念していた。

そのような時、信雄が股肱の三人の家老を秀吉側に寝返ったという理由で切腹させる事件が起きた。明らかに、秀吉に対する挑発であり、背後には家康の使嗾があったものと思われる。

家康は信雄を己が陣に取り入れ、さらに秀吉に敵意を抱いている信長の旧臣達を味方につけて秀吉に戦いを挑むかに見えた。

長益は、信雄の配下となる知多大草の領主であり、かねて親交のある秀吉から、信雄の動きについて調整を依頼されていた。

長益はどちらにも組みせず、中立の立場を取ることによって己の意志を貫いた。

翌年天正十二年三月、小牧長久手の合戦が起こる。長期戦となった。

この戦いで長益は周旋役を買って出た。ころあいを見計らって、長益は信雄に進言した。「家康には内密に、秀吉と講和せよ」と。こちらから共闘を求めた相手に内密で事をすすめては、家康の顔に泥をぬることになる。信雄は、叔父の非常識をとがめる口ぶりで反対した。

「信雄どのは若すぎる」

長益は、ひとつため息をついて説得した。

家康を通じて和を講じては、家康を秀吉の下風に立たせることとなる。たしかに内密では、家康を侮辱したように思われるが、実のところ、秀吉の予想外の動員力を見た家康も安堵するはずだ。

秀吉と対等に戦えたことで家康は満足のはず、このまま泥沼化するのは、家康も秀吉も嫌うところだ。表面上では、家康に多少の傷を負わせることになるが、その責任は長益が背負えばすむことである。

長益の思惑どおりに、和議は成立、戦いは終息した。家康から長益に、「よくぞ、講和を導き出してくれた」とする感状がとどいたほどであった。

織田家、ひいては自分自身の身の処しかたを、長益は改めて確信し得た。織田家の嫡流意識を捨てて、秀吉と家康との調停役に徹する覚悟が定まったのである。

ある時は秀吉方、またある時は家康方に立つことになろう。そうすれば、口さがない連中が、またぞろ、「逃げの源吾」だと悪口をいうだろうが、かまうものかと割り切った。

秀吉が長益、信雄の二人を大坂城山里丸の数寄屋に招いたのは、和睦の成立の裏に長益の尽力があったことを認めたためであろう。

あくる年、天正十三年二月のことであった。秀吉は上機嫌で、自らの点前をして二人をもてなした。

席に入って水指の前に飾ってある茶入を見て、長益はそれが天下に四つの茄子と謳われる唐物茶入であるのに気付いた。兄信長公から今井宗久に下されたと聞いている。それがここにあるということは、宗久が早速に秀吉に献上したと見える。そつのない宗久の顔を思い浮かべて長益は苦笑した。

猿奴の点前もそれなりに上達しておる。

長益は醒めた目で派出な袱紗を捌く秀吉を見ていた。

一口に和睦周旋と言っても、むじなと狸のような秀吉と家康の間を取り持つのは大仕事だったのである。家康は表面には出てこない。表立って交渉するのは信雄である。繰り返し秀吉と信雄の間を調停して和睦にこぎつけた時は年末になっていた。

立場は秀吉の方が優っていた。領地についても当然だが、秀吉は人質として信雄の娘と長益の息子、それに信雄の重臣の親族を差し出すことを要求した。

なぜ、仲裁者の親族が人質に取られるのか癪にさわったが、保身のためには無理を承知で受け入れなければならなかった。逆らえば信雄が討たれ、矛先は織田一族に向うは必定である。織田の係累は秀吉の天下取りにとって邪魔者でしかなかった。

長益の嫡男長孝は人質として大坂城に入った。親としては胸が痛んだ。最後には家康が次男の於義丸を人質同然の養子として秀吉に差し出して和睦が成立した。家康

は信雄が秀吉との和睦の話に乗ったと知って、素早く態度を改めた。そして実子を人質に出す、その変り目の早さに、長益はあきれ返った。

秀吉と家康の対立は一応防がれたが、誰の目から見ても秀吉の優位は歴然としている。今は秀吉に花を持たせて、三河に身を引いた家康の胸勘定を思うと空恐ろしくなる。天下の騒動は簡単には収まるまい、茶筅を振る秀吉の得意顔を見ながら長益の気持は冷えるばかりである。

「長益師匠どの、いかがでござるか、わしの腕前は」

赤の今焼茶碗に一服点て上げて長益にすすめると秀吉は客の方を向いた。秀吉の権勢は上り坂である。顔には自信がみなぎって、長益が知り初めた頃の貧相な面差しは見られない。

「上達されましたな。御精進でございますか」

「その通り。宗易（利休になる以前の名称）にな、毎日うるさく言われております」

筆頭茶頭の千宗易は秀吉に信頼されて、今や政道のことまで相談に預かると聞いていた。大坂城でも常に秀吉のそばを離れないと言う。茶の稽古とは言え、茶室に二人籠もることの多いのを石田三成はじめ側近たちが嫌がっているとも聞いた。

長益は秀吉の命によって宗易自身の台子の伝授を受けている。それは堂々と自分の席を持って茶の湯ができるという秀吉の許可状でもあった。

ここで一寸道草を食うが、長益の茶の湯における立ち位置について述べておきたい。

利休は長益より二十五歳年長者であり、当然のことに利休の茶の湯における弟子に数えられて然るべきである。「利休七哲」や「利休台子七人衆」と呼ばれる、利休の高弟たちがいる。いずれも、茶を嗜む武将（大名）たちから選ばれているのだが、長益の名は入っていない。

七人とは、蒲生氏郷、高山右近、細川忠興、芝山監物、瀬田掃部、牧村兵部、古田織部の七名である。

「台子七人衆」については、有楽流の茶法書『貞要集』に詳しく書かれているというが、七人衆の中に有楽の名はない。

「台子の茶」とは、草庵の茶（侘び茶）が主流となる桃山期以前の、書院における茶事であり、その作法は村田珠光が確立したとされる。

この「書院台子」の茶の作法を秀吉に伝授したのは、千利休であった。秀吉は、この作法を秘法にしたくなった、そこで、利休には「自分勝手に他の人には伝授しない」という誓詞を出させ、伝授は秀吉だけが直々におこなうとした。

この秘法を秀吉から授かった者たちは、豊臣秀次が加わった程度で、他は「七哲」とほとんど変りない。ではなぜ有楽の名がないのか、『貞要集』で次のように述べてい

る。

有楽は、自分にも台子の作法を伝授してほしいと願い出たところ、秀吉は、「有楽は年来の茶の湯巧者であるによって、利休が直接伝授すべきであろう」と言った。

そこで、秀吉の御前で、利休が有楽に伝授したという。つまり有楽は「七人衆」を超越した別格とされたのである。有楽は、これまでの屈辱を一気にくつがえすほどの、茶匠としての誇りと存在感を手にしたのである。

話は前に戻る。

「のう長益どの、この茶入はどうじゃ。見事と思われませぬか」

秀吉は水指の前におかれた茄子形茶入の自慢をした。

「はい、席に入りました時から見事な唐物と思って見ておりました。たしかに紹鷗茄子、名物でございますな」

「よう言うて下さった。この頃はこれが気に入りでな、ま、滅多に出さぬが、今日はお師匠どのが来られるので並べました。今井宗久がのう、上様拝領の品だからと申してわしにくれたのよ。憂い奴よ」

「ほう、父上の品でしたか」

信雄が身を乗りだして茶入を見つめた。

「おう、信雄どのにも一服をのう」

秀吉は点前座に向き直って別の茶碗を取り茶を点てて信雄にすすめた。

茶席が済んで二人が辞そうとする時、秀吉は信雄に優れた茶入を贈った。

「わしの名物の一つじゃ。惜しいがの、和議の祝いじゃ」

「京極茄子」と称する唐物茶入である。はじめバサラ大名佐々木道誉が所持していてその屋敷が京の京極にあったのでそう呼ばれたという。室町以後何人かの手を経て秀吉に渡っていた。

信雄は恐縮して戴いた。その日信雄はまだ秀吉に気を許さず、本気で茶を飲む気にもなれないでいたのである。

この茶入はのちに信雄から有楽斎（長益）の手に渡り、有楽斎没後は嫡孫の織田長好に伝えられたので、一名『織田茄子』ともいう。現在は紀州徳川家が所有していると聞く。名物茶入であり、拝見したいと思うが機会は無さそうである。

天正十三年七月、秀吉は更に上りつめる。関白の位を朝廷から授けられ、二ヶ月後には豊臣の姓を名乗った。

やがて黄金の茶室などという途方もない物を作り出したのには世の人々は驚いた。思いついたのは秀吉だが、命じられて細工をしたのは宗易だと聞いて茶匠たちはさらに驚いた。侘び茶を提唱する宗易に金ピカの茶室、茶道具は似合わない。

長益は常日頃宗易には批判的であった。茶匠なら茶匠の分を守るべきだと言いたくなる。茶人が政治の舞台に

出しゃばるのはやり過ぎである。もともと堺の会合衆出である今井宗久や津田宗及にもその傾向はある。この乱世に茶人として世に出るためには仕方のないことかも知れなかった。

十月には宗易は朝廷で茶事を催した秀吉に従うべく、利休居士の号を下賜された。

六

朝廷からの叙勲を次々に受けた秀吉は、天正十四年には大坂城を建てた。元旦の拝賀の式典には諸国から武将が参列し、その豪華さに息をのんだ。儀式の後では茶の湯が催され、長益も列席しなければならない。しばらく大坂城を去ることが出来なかった。

秀吉はこの一連の行事に家康を参列させて、自らの優位を示したかった。だが家康は浜松城を動かなかったのである。

妹の旭姫を家康のところに嫁がせることは秀吉が思いついた窮余の一策であった。家康は築山どのと呼ばれた正室を信長の強要で殺して以来正室を持っていない。徳川方ではこの縁談に大反対であった。秀吉の四十四歳にもなる妹をなに故迎えなければならぬのかと、家中でこぞって主君に諫言した。だが家康の考えは違っていた。人質を取るつもりならばよい、と側近に洩らしたとか聞く。

この話が起きた時、長益は信雄を通じて家康への斡旋役を頼まれた。だがあまりに非現実的な話を疎ましく思い、病気を口実に断った。

まさかと思っていた縁談がまとまって、浜松城への付添いを命じられた時も逃げたかったが、信雄の懇願で出馬せざるを得なかったのである。

天正十四年四月、浜松城に着くと早速本丸御殿で家康と旭姫の婚姻の儀式が挙げられた。前夫と無理やり別れさせられた旭姫は、感情を持たぬ死人のような有様であった。家康だけは対面上、四方八方愛想よく振舞っている。立会人の役目を果たすと、長益はすぐに浜松を引き上げた。

長益が知多の大草城へ戻ったのは五日後である。城に入るとどことなく様子がおかしい。三姫はともかく、妻お清の出迎えもない。玄関に平伏する家臣たちの顔色も冴えなかった。表座敷で家老平手長成が訝しがる長益に報告した。

「申しわけございませぬ。この十四日、信雄様が手勢を連れて大草城に入られ、姫様方を清洲城へお連れになりました。私共はどうすることも出来ず見送るだけでございました」

思いがけぬ報告に長益は驚ろいた。十四日と言えば家

康と旭姫の婚儀の当日である。信雄にしてやられた。ここにも茶々姫を手許に置こうとする秀吉の意図が見てとれる。

「姫たちは素直に従ったのか」

「否も応もございませぬ。兵どもが奥御殿に入り込み、身の回りのお品を長持に投げ込むという狼藉でございました。信勝様がどのように説得なされたのか、姫様方は早々に駕籠に乗られ、奥方様にお目通りする間もありませんでした」

「奥にも会えなかったのか」

「大蔵卿様が取り乱されて奥方様のお部屋に向かおうとなされましたが、兵どもに阻止されました」

「なんという奴」

信雄に対する憤りが込み上げる。今や信雄は秀吉の傀儡に成り果てていた。一度は家康に媚を売って秀吉に敵対しようと企んだがうまくいかず、その借りもあって秀吉には頭が上らない。もともと一族を背負って立つ器量のない男である。弟の信孝の方がまだしも利発であったが、信雄はその信孝を殺してしまった。

「奥はどうしておるか」

「奥方様はあれ以来お引き籠もりです。殿の留守中に申し訳ないことをしたと御自分を責めておられる御様子でございますが、この責任はすべて留守家老の私奴にございます」

最後は涙声になって長成は這いつくばった。老齢で痩せ細った背中が細かく震えている。長成は、亡き義父平出政秀の異母弟で、お清の叔父にあたり、その縁で家老に過している半ば隠居の老人であった。

長益は見るに耐えなくて、

「もうよい」と言い捨てると奥御殿に入った。

侍女に支えられたお清が廊下の中程に座り、頭をたれていた。

「仔細は長成から聞いた、えらいことじゃったの」

「申しわけございません。不意のことで私はお止めするどころか、見送ることも出来ませんでした。駆けつけた時はもう駕籠に乗られたあとでございました」

お清はわっと泣き伏した。

「泣くな、起きたことはもう仕方がない。すべて信雄の計略であった。あれは愚鈍なのにつまらぬ悪知恵だけは働かす」

「姫たちは清洲城に置かれましょうか」

「しばらくはな。そのあとはさて、大坂城へ連れて行かれるか」

或いは、と長益は考える。秀吉は京に贅を極めた別邸を建てたという。聚楽第と名付けられたその邸に茶々を住まわすつもりでないだろうか。

「それでは秀吉様が」

終りまで言わずにお清は泣き顔となった。

「折角亭主が戻ったのに、その顔ではすむまいぞ。さあ茶を点ててくれぬか」

お清は涙を拭って点前座に座った。茶杓や柄杓を扱い始めると、背筋が伸びる。お清は落ちつきを取り戻して点前に没頭した。

「清、わしはこの度の浜松城の婚儀を見て、つくづく武家というものが嫌になった。歳のいった妹を嫁に出す秀吉も秀吉なら、それを受け取る家康も家康じゃ。お互い魂胆はわかっていながら、とぼけて金のかかる芝居をやりおる。眞顔でその茶番劇を見届けておる己れ自身にも愛想がつきた」

長益はお清が点てたお茶をうまそうに呑み干した。

「回りの武将たちは両方を天秤にかけてどちらに付くが有利かはかるのに神経を使っている。この度の信雄のやり方もそうじゃ。秀吉の顔色をうかがっての行動故、正面からわしに頼んだら断られるのはわかっておるからわしの留守を狙いおった。考えればあれも可哀想な男じゃ、父と兄を失って織田を支えていかねばならぬ身なのに、その器量もなくじたばたして、そのくせ誇りだけは高い。秀吉を草履取り上がりと卑下しながら手玉にとられておる」

長益は心の底にわだかまるもう一つのことが頭に浮んだ。

信雄に同行するときの茶々の様子である。

長益が最も知りたかったことであり、家老の長成に問うたが、

「御出立の折は、静かな御様子にお見受けいたしました」

という意外な返答であった。

お清と老女の話では、別れの対面が許されぬあわただしい退出であったのは事実にしても、強く出れば叶えられたものを、茶々は妹姫二人と侍女たちをむしろ急かせて、離れた場所で立ちすくむお清たちには顔をそむけて立ち去ったという。

大蔵卿局だけは、何か訴えたげに後戻りしかけたが、信雄の武士に押され、頭を深く下げ、袖で目頭をおさえて一行を追ったというのである。

(裏切られた……)

とは考えたくない。

しかし、茶々の忘恩ともいうべき態度には何があったのか、と悩まざるを得ない。

信雄が言いくるめたことは間違いない。従兄妹の間柄ではあるが、茶々は秀吉に追従する信雄をひどく嫌っていた筈である。

その茶々が、信雄に素直に従い、母とも慕っていたお清に礼を失した眞因は何であったのであろうか。

「結局、女は女じゃ」と嘲笑うような信雄の言葉が聞こえそうである。「女の夢は、権力者を、一人占めにし、贅沢三昧に暮らすことよ」

茶々の本心は、入城する折り、

「ほんとに小さなお城」

と言い放った。その狭い城郭の、変化のない大草城奥御殿での質素な暮らしが、耐えがたくなっていたのであろうか。

長益は飲み干したあとの高麗茶碗の肌を愛でながら妻の顔を見て言った。

「信雄宛てに、大草城と一万三千石を返上するとの書状と隠居願いを認めたいと思っておる。よいか清」

長益は、信雄の寄子であった。叔父とは言いながら、長益に対し居丈高に接するのも一理あった。この事からも解放されよう。

「私は殿様に従って静かに暮らせましたらそれ以上の望みはございません」

柄杓で釜に水を足しながら、お清はきっぱりと言った。先程の涙は消えてその顔には長益への信頼の思いが溢れていた。

長益はこの際、底の知れない武将たちとの付き合いはやめて、茶室に籠もりたい。茶碗や茶入れなど、物言わぬ茶道具を相手に静かに暮らしたいものと決意したのであった。

間もなく長益は法体となり、有楽斎と号した。当初は無楽斎と考えたのだが、妻のお清が、「無楽では、あまりに淋しゅうございまする。これから世を眺めてお暮らしなら、高みの見物をお楽しみなさいませ」

との忠言を取り入れて有楽斎とした。

長益改め有楽斎の隠居願いを秀吉は押しとどめ、所領を増やすとまでも申し出たが、有楽斎は固辞した。

結局堺の別邸はそのままで、隠居料に摂津の国味舌二千石を受けることになった。二千石は家族と居残った僅かの家臣を養うためのぎりぎりの扶持であった。味舌は宇治や醍醐などと共に茶の産地として知られていた。

茶を作ってそれなりの収益をあげることも出来た。有楽斎は味舌の屋敷に大坂城の人質から帰された嫡男の長孝とその実母おみや(有楽斎の側室)を住まわせ、自分はたまに訪れて茶の味を楽しんだ。

堺でのんびりと隠居生活を送るつもりで居ても、全く政治から遠のくことは出来なかった。周旋役に長じた有楽斎の腕が必要な時には秀吉の意向を受けた使者がやってくる。敵味方を通じて信頼が厚いのは、有楽斎の穏やかな性格の故であった。その度に有楽斎は二千石の扶持の手前もあり、重い腰をあげて義理を果たした。

旭姫の輿入れから間なしに、秀吉は今度は母の大政所を徳川へ送り込んだ。家康の上洛との交換条件の人質である。表向きは娘旭姫との対面のための下向となってい

る。有楽斎は豊臣、徳川両家から望まれてその随行に指名された。

家康は大政所が徳川領に入るのを確認してから上洛し大坂城に入った。権中納言に叙任され、諸大名が居並ぶなかで関白秀吉に拝謁した。

この儀式で、ようやく正式に秀吉と家康の君臣関係が成り、豊臣政権が安定したのである。

天正十五年正月には大坂城大茶の湯が催され、全国から諸大名が駆け参じて秀吉に年頭の賀辞を述べた。秀吉は前年十二月に太政大臣に任じられており、大広間上段の間で次々に諸大名に謁見した。有楽斎は臨席していて派手な金襴の衣装に身を包み、黄金の敷物に座って鷹揚に諸大名に目通りする秀吉を眺めていた。晴れの関白太政大臣である。かつての草履取りの猿が権勢の極みに居る。時の勢いとは言え感慨無量であった。

正月の大坂城での式典後、九州征伐の軍が編成され、総勢二十五万の兵が次々に出陣して行った。有楽斎はこれには加わらず堺に籠もって茶事に没頭した。三月には秀吉自身が出陣した。

四月には豊前小倉に入り、秋月種実の居城を攻めた。種実はついに秋月城を明け渡して降伏した。この時秀吉に差し出したのが天下に三つの名物と言われた「楢柴の肩衝茶入」である。（この茶入は「初花肩衝」、「新田肩衝」とともに甲を競ったが、明暦三年（一六五七）の江戸大火にあい、その後修復されたが消息を絶ってしまったという）

軍勢は秋月から熊本に入り遂に薩摩出水から阿久根に達した。

ここに至って島津氏は戦う気力を失くし秀吉の和議交渉に応じて降伏した。秀吉は島津義久の降伏を受け、義久には薩摩一国をそのまま安堵した。秀吉は六月七日に博多へ凱旋した。

当時の博多は戦国時代の肥前竜造寺と豊後大友氏との長い合戦のために荒れ果てていた。秀吉は博多の復興を計画して、かねて秀吉に誼を通じていた豪商で茶人である島井宗室と神屋宗湛にそれを命じた。両者は故実に習って東西南北十町四方の町に縦横の小路を割り、民家を再建した。また博多港の商業保護政策を取って町民が誰でも自由に取引できるようにした。

貿易港としての堺も次第に落ち目で、明貿易の中心は博多に移りつつあった。秀吉の目も九州、博多に向けられている。

関白秀吉は七月十四日に大阪へ帰って来た。有楽斎は住吉の津に出向いて、意気天を衝く秀吉を迎え、戦場の祝を申し述べた。

一年半の歳月をかけ、贅をつくした京都内野の別邸が

完成し、九月十三日、秀吉は本拠を大坂城から、この聚楽第に移した。

盛大な祝典が数日にわたって催され、長年の周旋役で顔がひろく手慣れている有楽斎は秀吉の要請で接待役をつとめざるを得なかった。

しかし、こうして勅使や公卿、大名、高僧、富貴の人々と親しく接することは、己の存在価値を天下に示し、それ故に身の安全を保つ処生術である。有楽斎はこう自戒し、与えられた役どころを大過なく演じた。

そのまま有楽斎は京に留まり、十月一日から十日間おこなわれる、北野天満宮の森での前代未聞の大茶会の支度を手伝うことを命じられる。

やがて一年振りに茶々と再会することとなる。

続く

「農ある暮らし〜私の日常〜」(2)

古屋富雄



農業で暮らしていた頃

過ぎし日の故郷はどこの家も農家でした
食べている物も着ている服も
お大尽以外はみんな同じでした
それが当たり前だと思っていました

田植えの時期は学校が休みになりました
勉強するより家の手伝いが
大切だったそんな時代でした
先生もしっかりやれと言っていました

あー　貧しかったけれど
　　貧しさなどは感じなかった
あー　白いおにぎりが
　　なんと美味しかったことでしょう

過ぎし日の故郷はどこの家も農家でした
食べている物も着ている服も
お大尽以外はみんな同じでした
それが当たり前だと思っていました

稲刈りの時期も学校が休みになりました
イナゴを取ってそれを売って
修学旅行の足しにしました
記念の集合写真は無邪気な笑顔でした

あー　貧しかったけれど
　　貧しさなどは感じなかった
あー　母の卵焼きが
　　なんと美味しかったことでしょう



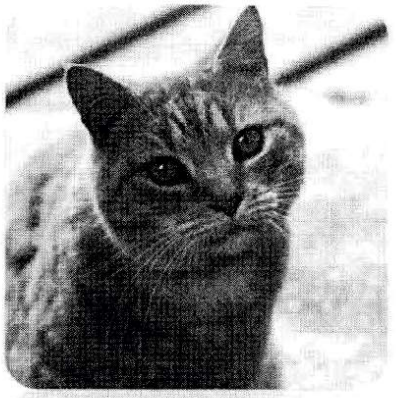
農家の猫

昔の農家は大変でした
全てが人の手作業でした
田植えもしかり
稲刈りもしかり
家族みんなで汗を流しました

お米が大事な時代でした
猫がネズミの番人でした
我が家もしかり
隣もしかり
何処の家にも猫が居ました
ネズミを捕るのが仕事でした

今の農家は楽ですね
機械を使って作業をします
田植えもしかり
稲刈りもしかり
全て一人で出来てしまいます

お金がかかる時代です
猫はペットになりました
我が家もしかり
隣もしかり
ネズミを知らない猫たちです
こんな暮らしになりました



父の三十三回忌

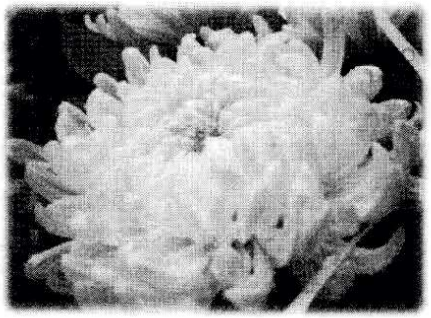
今日は父の三十三回忌の法要です
久しぶりに親類縁者が集まりました
叔父や叔母もどうにか参列をしています
これが最後の顔合わせになりそうです

父さん月日が流れましたね
母はあなたが逝った
20年後に亡くなりました

厳かに供養のお経が始まりました
姉が供えた季節の花が綺麗です
お線香の紫の煙が漂っています
歳を取らない遺影が滑稽です

父さん月日が流れましたね
私もあなたが逝った
64になりました

父さん月日が流れましたね
孫七人、ひ孫五人が
あなたに向かって手を合わせます

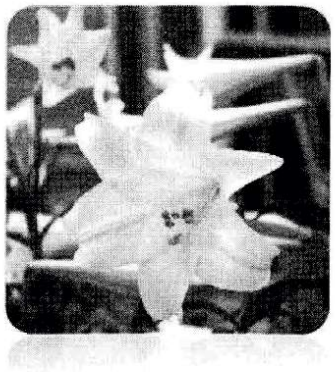


里子おばあさんの夢

里子おばあさんは歳のわりに背の高い人です
鼻が高くて日本人離れした顔立ちです
里子おばあさんは町場育ちのお嬢さんでした
縁があって叔父と所帯を持ったと聞いています
分家の叔父は会社勤め
共稼ぎの生活でした
休みには本家の野良仕事を手伝ったそうです
こんな話しを聞いたのは叔父の四十九日のことでした

里子おばあさんは婦人警官になりたかったそうです
試験に受かって面接だけが残っていました
しかし家長の兄の許しがもらえず諦めました
日本で最初の婦人警官
こうして夢は消えました
夢は消えても優しい叔父が待っていてくれました
この人と一生共に暮らしたいと思ったそうです

子供を育て、家を建て
地域の役も受けました
定年祝いと言って二人でハワイに行きました
夢に見た沢山の思い出が走馬灯のように浮かびます
こんな話しを聞いたのは叔父の四十九日のことでした



里見氏と北条氏
―房総の戦国興亡史（3）

山田嘉久

十　「南総里見八犬伝」の謎

「南総里見八犬伝」は江戸時代を代表する文豪の曲亭（滝沢）馬琴（1767―1848）が江戸時代後期、文化11年（1814　48歳）から天保12年（1848　75歳）まで28年かかって著した全9輯98巻106冊に及ぶ日本古典文学では最も長く、世界でも有数の長篇小説である。

中国の豪傑小説「水滸伝」の影響を色濃く受けた「勧善懲悪」「因果応報」の伝奇小説で、時代を戦国時代に求め、房総里見氏の歴史と房総の地理を背景に話は進む。

南総里見家の勃興と里見氏の始祖である里見義実の娘伏姫の因縁を説く発端部（伏姫物語）

関八州に生れ仁義礼智忠信孝悌の霊玉と牡丹のあざを持つ義兄弟八犬士の流転と集結の物語（犬士列伝）

それに里見氏に仕えた八犬士が関東管領、滸我（古河）公方連合軍との戦争（関東大戦）を戦い大団円に向かう部分と大きく分かれているが、所詮は架空の物語である。

しかし架空の物語とはいえ、あまりに実像とかけ離れていることが古くから指摘されてきた。

里見氏の安房統一伝承やところどころに実在の人物などを登場させたので、虚像としての里見氏をつくってしまった。

里見氏の祖先は清和源氏、新田氏の一族で、もとは上野国里見郷（群馬県高崎市）を本拠としていたといわれる。里見氏が安房を統一したのは、15世紀末から16世紀初頭であったと考えられるが、いつ房総に移住し、どのように安房を統一したのか正確には分からない。

しかし「太平記」などによると、新田義貞の挙兵に加わったが、やがて足利氏に仕え、室町時代初頭には鎌倉公方に仕えた。永享11年（1439）、足利持氏が6代将軍足利義教に反旗を翻し追討された永享の乱では里見家

基が持氏とともに戦っている。この家基こそが里見氏初代の義実の父と云われる。

家基は持氏亡き後も鎌倉府の再興に執念を燃やした。永享12年、下総の結城氏朝が持氏の遺児を奉じて挙兵した結城合戦には結城方として参加して敗れた家基は、落城にあたり子息の義実を城外に逃がした。

2、3の従者を連れて三浦半島に逃れた義実は、三浦氏の援助を受けて房総半島に渡り安房白浜（南房総市）に上陸したという。

当時の安房では長狭郡の東条、安房郡の神余（かなまり）、平群郡の安西、朝夷郡の丸などの国人領主が割拠していた。安房上陸した義実はそれらの領主を次々に滅ぼし、文安2年（1445）に安房を統一したといわれるが、確実な資料は全くない。

それより200年以上前、安房で再起を果たした源頼朝の逸話と混同されている部分が多いという。（そういえば、安房の4領主征服など「吾妻鏡」に描かれた頼朝伝説とそっくりである）

いずれも後世に創作された逸話である可能性が高い。

では、安房に基盤がなかった義実がどのようにして房総に覇を唱えることができたのであろうか。

14世紀末、安房守護は関東管領上杉憲方が兼務しており、その後も上杉一族に受け継がれていた。

前述の通り、関東における戦国時代の幕開けとなった享徳の乱（1465―82）の最中に、義実は古河公方足利成氏から対立する関東管領上杉氏討伐を命ぜられ、上杉氏の拠点の1つである安房に入部したことが明らかになってきた。

当時安房は上杉氏が掌握する東国海上交通の軍事、経済上の拠点であり、とりわけ白浜（南房総市）は早くから水軍の要衝と知られていたのである。

義実が最初に上陸したという白浜には、当時上杉氏の家臣で武蔵六浦を管理していた木曽氏がいたと云われる。（現在でもこの地に木曽姓が多い）

かくして安房進出の足掛かりを得た里見氏は、やがて上総武田氏とともに房総半島を2分する戦国大名へと成長を遂げて行くのである。

では、なぜ里見氏の前半の歴史は事実と異なり、謎の部分が多かったのであろうか。

それには、これも既述の天文2年（1533）に起こった内乱が関係している。この内乱によって嫡流の里見義豊（ここまでの系統を前期里見氏という）は庶流の義堯（ここから後期里見氏）に滅ぼされた。勝利した義堯側はみずからの正当性を主張するために、前期里見氏の歴史を改ざんしてしまったのである。

そのため前期里見氏の系図に架空の人物が挿入されたり、年代上に大きな矛盾がみられる結果となった。その

誤った歴史像に基づいて、馬琴が「南総里見八犬伝」を著してしまったのである。

例えば初代里見義実が隠居した後、「八犬伝」では嫡子の義成が継ぎ稲山城に居城したことになっているが、この人物は里見氏系図の年代を調整するために無理に挿入された架空の人物とされている。

前述の通り、馬琴は「八犬伝」の完成に48才から75才までの後半生を費やした。しかもその途中、失明という困難に遭遇しながらも、息子宗伯の妻であるお路の口述筆記により最終話まで完成させることができた。

この物語は刊行当初から江戸中で絶賛された。

当時の年間発行部数は五百部ほどと推定されるが、当時流行の貸本により多くの人によって読まれ、そのほか八犬士の肖像絵は飛ぶように売れ、子供の着物や凧絵、風呂屋の暖簾にまで氾濫したという。

いわば八犬士は庶民のヒーローとして愛されたわけだが、明治に入ると急速にその人気は衰えた。

坪内逍遥がその著「小説神髄」で「八犬伝」を「仁義八行の化け物にして決して人間とはいい難し」と断じたからである。逍遥は近代文学が乗り越えるべき旧時代の戯作文学の代表として批判した。

この事以来「八犬伝」の評価は没落したが、なぜか戦後の1970年代から80年代にかけて復権した。

映画や漫画、小説、果てはテレビゲームなどの源泉として繰り返し登場している。

現在、館山城址近くにある「館山市立博物館」はさながら「八犬伝」のテーマパーク的存在となっている。

それにしても馬琴は縁もゆかりもない土地の英雄を「八犬伝」のモデルに選んだのだろうか。

「八犬伝」以前から「椿説弓張月」などを上梓して、すでに売れっ子作家だった彼は一度も安房を訪ねてはいない。

尤も、馬琴は若い頃、安房に北接する上総夷隅郡神置村（現いすみ市）を訪ねている。当時の最大人気作家だった山東京伝と弟の京山が此処の出身であるので酒一樽を下げて弟子入りを頼んでいるのだ。

また此処で絵師葛飾北斎とも会っている。北斎が房総に来たのは、尊敬する彫刻家武志伊八郎（通称波の伊八）とともに房総の荒波を観察するためだった。因みに彼の代表作「神奈川沖波裏図」は伊八の彫刻を参考にしているといわれる。

この様な縁で「八犬伝」の挿絵は北斎が担当したが、その後、両者はいさかいを生じ絶交状態となった。

因みに「八犬伝」の書き出しは伊八が彫刻を彫った上総行元寺から始まっているが、馬琴は伊八とも面識があったのだろうか。

それはともかく、馬琴にとって読者の中心は江戸庶民である。

彼らにすると当時の安房はあまり彼らの訪ねる機会のない場所であったに違いない。江戸庶民にとって安房は「近くて遠い」場所だった。

近世後期、庶民の間には旅行ブームがあったが、人気の旅行先は川崎大師や伊勢神宮、熊野三山であった。

当時、江戸と安房とは舟運で結ばれているとはいえ、江戸庶民はレジャー目的で房総半島の先までは足を運ばなかったかもしれない。房総を訪ねる場合でも一番人気はやはり「成田詣で」あった。

だとすると、江戸庶民にとって安房は「身近」にありながら「新鮮」な場所だったといえる。しかもそこで生れた英雄は物語でこそ活躍するが、史実では「悲劇の一族」である。

物語としては「売れる」要素が詰まっている。里見氏の知名度に重なって、江戸と安房の物理的、精神的な距離感も読者の興味を引き付けたに違いない。

十一　里見氏ゆかりの城跡を歩く

○白浜城跡（南房総市）

里見氏が最初に拠った城である。

里見氏が安房に来る前から関東管領上杉氏が、太平洋の海上交通を押さえる拠点としていた。

そのため鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏が対立した「享徳の乱」において、安房地方を上杉氏から奪う為に公方派から送りこまれたのが里見氏初代の里見義実だが、その義実が最初に拠ったのが白浜城である。

その後、稲村城が安房支配の拠点になってからも、隠居した里見義通が白浜城に入って稲村城の義豊を支えた。

○稲村城跡（館山市稲地区）

城山下バス停で降りると、目の前に標高50㍍の小高い山がある。その山頂が里見氏初期の本城であった稲村城の主郭部である。

稲村城は安房の国府を押さえる水陸交通の要衝の地に築かれ、16世紀初期には里見氏の当主義通、義豊父子の居城となった。

有名な「天文の内乱」の舞台ともなった。

これは既述の通り、稲村城にいた当主義豊が叔父の実堯と家臣の正木道綱を殺害して内乱が発生した。

その後、義豊は従兄弟義堯のため敗死したため、里見家の実権は嫡流の義豊から庶流の義堯に移った。

そのため稲村城は使われなくなったが、戦国前期の城の姿がいまも残された貴重な遺跡と評価されている。

城郭の中心部は城山と呼ばれ、その南に舌状丘陵が続

き、数多くの遺構（曲輪、土塁）が残っている。

○滝田城跡（南房総市）

城主は一色九郎。里見義豊の妹を妻にしていた。

一色氏は里見氏が安房の主になった際、従ったものと思われる。一色九郎の時、前記「天文の内乱」に遭遇した。

義豊側に味方した九郎の居城である滝田城は義豊派最後の拠点として徹底抗戦の場となった。

滝田城は天文2年（1533）に落城、一色氏は実堯の子義堯によって滅ぼされた。

○岡本城跡（南房総市）

戦国時代末期の里見家当主里見義頼、義康2代が居城とした城である。

富浦町豊浦の海岸にせり出した丘陵に位置した海城であることから里見水軍の拠点ともなった。

義堯、義弘などの里見氏の主力が上総に展開しているあいだ、安房の押さえとして岡本に義頼が置かれた。その後、秀吉に上総を没収されたのを契機に里見義康が居城を館山に移すまで、里見家当主の城として機能した。

○館山城跡（館山市）

里見義康が岡本城から館山城へ移転することになったきっかけは、豊臣秀吉に「惣無事令」違反を問われ、上総領を没収されたからである。

上総から引き揚げてくる多くの家臣を収容するために、選ばれたのが館山だった。館山城は早くから岡山城の支城として使われていた。

秀吉の時代になると、勝手な侵略ができなくなるとともに、自らの経済力を高めなければ領国を維持し支配することが困難な時代に入って来たのである。

戦国大名から近代大名への歩み始めたことになる。

義康が館山城に移って来たのは天正19年（1591）であった。秀吉の朝鮮侵略の時には、義康は家康配下として、此処から肥前名護屋に出陣した。

関ヶ原では徳川側につき秀忠とともに宇都宮に出陣したので、その功により常陸国鹿島郡3万石が加増された。

しかし僅か20余年後の慶長19年（1651）には突然の国替を言い渡され伯耆国（鳥取県）に移されている。

結局、館山城は在城わずか20余年の里見氏最後の居城であった。幕府は直ちに館山城受け取りの軍を編成して、接収し建物を破却、堀もすべて埋め立ててしまった。

伯耆国に移された里見忠義が元和8年（1622）29歳で亡くなったことは前述した通りである。

なお、「八犬伝」に登場する館山城は全く架空の城であり、モデルは上総国夷隅郡にある豪族上総広常の館と考えられる。

○久留里城跡（君津市）

里見氏の有力支城

JR内房線木更津駅からローカル線久留里線に乗り換えて約1時間、久留里駅下車。このあたり「房総のチベット」といわれる深山渓谷。標高80―120㍍の急峻な丘陵上に久留里城がある。

戦国時代前半に上総武田氏が築城したと伝えられるが、その後里見氏の上総支配の拠点となった。

第2次国府台合戦で敗れた里見軍が敗走して逃げ帰ったのもこの城である。

江戸時代には譜代の大須賀氏（3万石）、土屋氏（2万石）、黒田氏（3万石）の居城となった。

なお儒学者新井白石も当地出身。18歳から21歳まで久留里で勉学に励んだことは、自叙伝の「折たく柴の記」に記されているという。

二の丸にある資料館には白石自筆の書簡などが展示されていた。

○勝浦城跡（勝浦市）

里見氏重臣正木氏の居城

八幡岬の先端に突き出るように築城された典型的な中世の海城で真里谷武田氏の属城だったとされる。

天文年間には里見氏重臣正木時忠の居城となった。

その後、秀吉の小田原攻めに際して、本多忠勝らによって落城した。

その際、正木時忠の娘万は母と弟を背負い八幡岬の断崖を白布を垂らして海におり小船で逃げたという「お万の布たらし」伝説が残っている。（城跡にお万（養珠夫人）の像あり）

その後、お万は徳川家康の側室となり、紀伊徳川家、水戸徳川家の祖となる頼宣、頼房の生母となった。

なお彼女は司馬遼太郎の短篇「戉女守（めかけもり）」の主人公の一人となっている。

○小田喜城（大多喜城）跡（夷隅郡大多喜町）

勝浦城と同じ里見氏の有力な支城の一つ。

天文年間、重臣正木時茂が武田氏に代わり入城した。

天正18年の小田原合戦ののち、家康の関東への入国に伴い、徳川4天王の一人本多忠勝が10万石を与えられて城主となり、地名も小田喜から大多喜へと改められた。

江戸時代には城主も阿倍氏、青山氏、稲垣氏、松平（大河内）氏と目まぐるしく変わった。

フイリッピン総督だったドン、ロドリコは「日本見聞録」の中で「城は高い場所にあって壕に囲まれ城門は大きく殆ど鉄でできている」と記している。

そのロドリコは1609年、マニラからスペイン領メキシコに向かう途中、大多喜藩領岩和田沖で遭難、地元民によって救助された。彼は2代目藩主本多忠朝（忠勝の子）の面会を経て、江戸城で徳川秀忠、さらに駿府城で家康とも会見した。

翌年、家康は三浦安針（Wアダムス）に日本最初の大型帆船を作らせ、ロドリコらをメキシコに送り返した。

これを記念して数年前、現地で「日本、メキシコ、スペイン修好400年祭」が執り行なわれた。

○万木城跡（いすみ市万木）

万木城は三方を夷隅川に囲まれた標高65―85㍍の要害の地に築かれた中世城郭である。

この城は千葉県内でも最大級であり、戦国時代後半に現在の規模になったと考えられる。

城主は上総土岐氏であるが、同氏は不明な点も多い。秀吉の小田原攻めによって北条氏とともに土岐氏も滅亡した。

従来はこの時に廃城になったと考えられていたが、家康の重臣本多忠勝が大多喜城に入る前に在城していたことが近年、明らかになった。

○一宮城跡（長生郡一宮町）

里見氏領域最北端の居城。

この城も重臣正木一族の城で、交通の要地を押さえる役目も持っていた。

天文年間、小田原の北条氏康が里見義堯の守る久留里を攻めた際、一宮城主須田将監は北条勢と城外で激戦を展開してさんざん破ったと「房総里見誌」に書かれているという。

天正18年、本多忠勝らに攻められて陥落した。

享保11年、伊勢八田1万3千石の藩主加納久通が一宮に陣屋を営み立藩した。明治維新まで8代142年間続いた。

加納氏は天保末年までは参勤交代を行わない定府大名であったが、弘化年間から半年ごとに参勤交代する大名に昇格した。

また歴代藩主のうち久徴は弘化元年（1844）、領内の海岸に砲台を構築して外敵に備えた。幕府の品川砲台より早かったといわれる。（その砲台は現在、千葉県立中央博物館に陳列されている。）

現場には「旧加納藩台場跡」の石碑が立っている。

因みにその横に並んで立つ「風船爆弾打ち上げ基地跡」は、それから丁度100年後、太平洋戦争さなかの1944年秋から、風船爆弾がこの地から放たれた。旧陸軍の「新兵器」で、冬の偏西風に乗せて米本土に向け飛ばされた。

最後の城主久宣は維新後、鹿児島県知事などを務め、またその子久朗は戦後、千葉県知事にもなっている。

知事といえば平成13年に千葉県知事となった堂本暁子

氏は母方の実家が房総里見氏の出身である。松尾藩（現松尾町）に仕えた里見氏だという。因みに松尾藩は維新後の明治2年、遠州掛川から移転してきた太田資宗を藩祖としている。

○長南城跡（長生郡長南町）

長南町の東側丘陵一帯に長南城跡が広がる。

15世紀後半に武田氏が甲斐から当地に入部し、在地領主の長南氏から覇権を奪い取り、長南城を築城したと云われる。

長南武田氏は、まず里見氏に従い、後に北条氏に属して戦国時代を生き抜いた。戦国時代末期には1500騎を有する上総有数の勢力となったが、秀吉による小田原攻めのあと、北条氏と命運をともにしたのは前述の通りである。

この近くにある浄徳寺は明治維新後、わずか5ケ月間であるが、安房上総知県事役所が置かれた。

○真里谷城跡（木更津市真里谷）

長南武田氏から分かれた真里谷武田氏の本拠地。

康正2年（1456）に武田信長がこの城に入って以来、一族の分裂を経て、天文2年（1552）に信政が椎津城で敗死するまで、この城を中心として西上総を治めた。

主郭は千畳敷と呼ばれる土累に囲まれた曲輪で、ここに城主が住んでいたと考えられる。

○本納城跡（茂原市本納）

構築は室町末期、享録2年（1529）と伝えられるが、武将黒熊大膳亮影吉の居城であった。永禄7年（1564）国府台合戦ののち、里見氏から離反した土気城主酒井胤治に急襲され落城、影吉は切腹したと伝えられる。

小田原落城後、徳川幕下の旗本知行地となった。

標高60㍍の高台にあり、この地から南に広がる南総の展望は素晴らしい。

○土気城跡（千葉市緑区土気）

国府台合戦後、劣勢となった里見氏だが、最後まで北条勢に抵抗したのが土気城主酒井定隆である。

定隆の出自についてははっきりしないが、新田氏の後裔足利満隆の孫といわれる。鎌倉公方足利成氏に仕え、ともに戦った里見義実を頼って房総に渡った。そんな縁で最後まで親里見氏の立場を貫いたのであろう。

土気城は室町前期には千葉氏の流れをくむ土気氏が領していたが、酒井定隆によって奪われた。

彼はのちに土気から東金に移り東金酒井氏の祖ともなった。

（定隆は城主になると領内全域（土気、東金、茂原にわたる七里四方）を法華宗へ改宗令（七里法華）を出したことで有名である。）

土気城は酒井氏5代、約100年の居城となった。

しかし4代胤治のとき寝返って北条の支配下に入った。秀吉の小田原攻めにより小田原城が落城すると、土気城も開け渡した。

5代目は家康の旗本となっている。

○生実（おゆみ）城跡（小弓城跡）（千葉市中央区生実町）

室町時代に千葉氏の一族である原氏が本拠として築いたのが生実城である。現代は空堀と土塁、大手口跡が残っているだけ。

下総進出をねらって生実の原氏と戦っていた真里谷武田氏は古河公方の足利政氏の子義明を迎えて小弓公方としたのは前述の通り。

これまでは、義明が居城としたのは生実城跡から1、2キロ南にある小弓城跡であり、生実城跡は義明滅亡後に築かれたと考えられてきた。しかし近年の研究では生実城説が有力となっている。

西側にある生実藩陣屋の主は江戸時代初期に生実藩初代藩主となった森川重俊であり、徳川秀忠に仕え1万石を与えられた。

その後、老中までなったが、秀忠に殉死した。

近くにある森川重俊院には13代にわたる森川家累代の墓碑が並んでいる。森川藩は明治まで続いた。

○国府台城跡（市川市国府台）

前述の通り、里見氏と北条氏が再三にわたって死闘を繰り返した合戦場として有名である。

（八犬伝では関東大戦の合戦城として登場）

元来は扇谷上杉家の家宰太田道灌が文明10年（1478）に仮の陣屋としてかまえたのが、この城の始まりといわれる。

道灌は武蔵にいた千葉自胤（よりたね）をたすけ千葉孝胤と戦うため此処に陣取った。

これより前、千葉自胤は「市川城」に立て籠り足利成氏に抵抗していたが、この市川城と国府台城が同じものなのかは不明である。

国府台は標高20―25㍍の下総台地の西の端で、江戸川に並行して南に張り出した舌状の丘陵であり、現在は「里見公園」となっている。園内には土塁状の城郭遺構が僅かに残っている。

第一次国府台合戦は天文7年（1538）、北条氏綱と小弓公方足利義明、里見義堯らが戦ったが、小弓公方と本家筋の古河公方の戦いであった。

これに対して永禄7年（1564）の第2次合戦は北条氏康と里見義堯、義弘の戦いであった。

（終わり）

『時評家　新明正道』（評伝その七）

―「社会の印象記」から形式社会学の研究へ―

山本鎭雄

第六章　関西学院文学部教授の五年間

一　若き新明正道の「社会学」講義

新明は、神戸のミッション系（メソジスト派）の関西学院教授の就任にあたり、学院当局から政治学と社会学の講義、ドイツ語の演習を要請された。新明が困惑したのが、社会学の講義だった。なぜなら、東京帝大の社会学研究室の建部遯吾教授がフランスのオーギュスト・コントの総体社会学に依拠し、社会学の講義（選択科目）を担当していた。新明は一年間の建部教授の自信に満ちた講義を受講せずに卒業した。ただ、「社会学はコントに始まり、遯吾において大成する」と豪語する建部教授の講義は学生には大いに人気を博したであろう。のちに、新明は社会学を講義するようになって、遯吾の講義を聴講しなかったことを後悔している（新明正道「社会学五十年の回顧」、一九六八年一月）。

政治学徒の新明は反国家主義的・反権力主義的な「社会思想」や「社会問題」を考察し、東京帝大新人会機関誌に盛んに政治・思想評論を発表した。その後、新明は在職した五年間の関西学院時代でも、新人会ＯＢが発刊した同人誌『社会思想』、および長谷川如是閑と大山郁夫らが発刊した文明評論誌『我等』に同じく政治・思想評論、マルクス主義を含むフランス、イギリス、ドイツの多種多様な「社会主義」を渉猟し、さらに集団闘争説や国家論を中心に展開したオッペンハイマーらの「オーストリア社会学派」に関する論考をもとに盛んに発表した。

当時、早稲田大学教授で政治学者の大山郁夫は「政治は社会的に基礎づけられている」という観点から、「科学としての政治学」を確立しようとした。政治学徒の新明は大山郁夫の考察を検討し、その「社会の研究」が「社会学」として通用すると考えた。さらに長谷川如是閑の『現代国家批判』（一九二一年）と『現代社会批判』（一九二二年）が収録されている『我等』に掲載された論考を読み、それもまた「社会の研究」であると考え、「社会学」の講義をして、盛んにペンを動かし、就任して二年後に早くも『社会学序説』（一九二二年一二月、大鐙閣）を上梓した。

のちに、関西学院教授の新明は政治学と政治学史の研究よりも、社会学の講義の必要から「勉強の方針を社会学中心としまして、……外国の書物なども八割位は社会学の本を買い込んで大いににわか勉強をやったものであります」と回顧している。ただ、その当時の社会学の研究動向からすると、『社会学序説』は必ずしもオーソドックスな社会学ではないが、しかしそこで考察された集団闘争説や国家批判は、関西学院の学生、とくに学生組織の社会科学連合会（「社研」）や全日本学生社会科学連合会（「学連」）を支持する学生たちに大いに歓迎されたことであろう。それ以上に、この『社会学序説』に固執したのは国家権力に支えられた官憲であろう。

新明の回顧によれば、官憲は本書の出版後、しばらくして国家を否定し、無政府主義に帰着するのではないかと見なし、発禁処分にした。新明自身はイギリスの政治学者のラスキやイギリスの経済学者・社会主義者のコールらの多元的国家論の影響も受け、一元的国家論やその国家権力論を批判したに過ぎないが、新明自身は官憲が措辞（言葉の使い方）にラジカルな印象を与えたと推測している。

二　短歌と小説と戯曲

新明が赴任した当時の関西学院文学部社会学科の学生は三〇名を超えていない。河上、新明、松沢、坂本勝などのごく少数の教員と少数の学生が極めて緊密に交流した。自由な学風を尊重する関西学院は入学する学生が増加するとともに、学生運動がますます活発化した。そのような学内の動向とは別に、学外では静かな短歌会も開催され、新明と松沢は短歌会「傾斜地」を主催した。神戸は地形的には山地と海岸が迫り、総じて坂道の多い「傾斜地」である。

短歌会「傾斜地」が開催されたのは、二四年から二六年の春までただの四回に過ぎない。新明の転任によって自然に閉会した。参加した学生の一人が酒井一雄である。彼は京都学連事件に関連し、関西学院の学内でビラを撒いたという理由で、退学処分となった。学生の処分撤回運動にも関わらず、処分撤回は実現しなかった。新明にとって「酒好き」の酒井は関西学院の学生のなかで最も気になる学生の一人であろう。

ここに詠草点の高い新明の短歌三首を掲げれば、

青草の街路いちやうに混へるこの日の夜は風さへ光り
湖の底に砂は蒼ざめて波もなく薄ら曇った五月の朝空
葦の間に葦切がなく鋭さを包んで暮れる潟の夕影

雑誌『新潮』は小特集「文学青年時代」を企画し、三一歳の新明は「文学青年の思い出」を寄稿した（一九二九年三月、二六巻三号）。「大学卒業後の七年間、忙中閑を偸んで書いた小説と戯曲は、十数篇ある」と書いている。そのうち、大宅壮一・河野密らが創刊した第二次「クラルテ」（月刊）に「称名寺住職」（二五六月）、「砂糖と白楊」（同年七月）、「夢遊武官」（同年八月）という短編小説を連続的に発表したが、いわゆる三号雑誌で終刊になり、短編小説を依頼されず、発表する機会を失った。人に頼まれれば、「書く」というのが新明の執筆方針だった。

そのほか、新明は那智嶺の筆名で長谷川如是閑らが編集する『我等』に一幕物の戯曲「夜の影」を発表した（一四年九月、六巻八号）。製鋼所の職長を不景気のため解雇され、大都市の場末で撞球場を開業したが、休業して酒に酔う経営者の悲劇と家族の崩壊の顛末をドラマにした。その経営者の名前がさきにふれた酒井一雄（戦後、兵庫県会議員）だった。しかし戯曲全体の台詞はあまりにもくどく生硬だと酷評されたりしたが、戯曲も書いた長谷川如是閑は彼の親切心から手紙で「手法は拙いが、案外実演すると効果があるかも知れない」といった意味の返事が送られたという。

新明は社会学研究のほか、のちに出版社や雑誌社から依頼され、多数の政治・思想評論を発表し、時評家として『欧州の危機』、『文化の課題』、『東亜協同体の理想』、『思想への欲求』などの著書を上梓した。それ以外に即興的に短歌や俳句を書き留め、色紙に俳画を描き、弟子たちに贈った。さらに雑誌社・新聞社から依頼され、多岐にわたりエッセーなどを寄稿し、多才なライターとして活躍した。それらの政治・思想評論は新明の社会学研究と無関係ではなく、いわばメダルの両面をなしている。

三　高田保馬著『社会学概論』（一九二二年）の衝撃

のちに、新明は日本で最初の体系的な『社会学辞典』（一九四四年、初版・三〇〇〇部、二〇〇〇九年に復刻増補版を刊行）を編集・刊行した。「社会学史」（第二部）で「日本社会学」を記述している。すでに触れた建部博士は、明治三〇年以降に社会学の命名者のオーギュスト・コントの社会有機体論に拠って『理論普通社会学』（全四巻）を刊行し、総合社会学を体系化し、明治後期から大正前期にかけて社会学界の第一人者として君臨し、建部時代を画した。

だが、コントの社会有機体説が否定され、建部は学界

から政界に転身したこともあって、その学問的影響は途絶した。ちなみに、ジンメルはコントの旧式の総合社会学について、「諸科学の全体を一つの壺のなかに投げ入れて、これに社会学という新しいレッテルをはるだけではなんにもならない」と批判した（ジンメル『社会学の根本問題』）。このような社会有機体説への批判は、日本の社会学研究に限らず、すでに欧米の社会学研究において通説となった。

当時、新明の社会学の研究方向に決定的な影響を与えたのが高田保馬の『社会学原理』と『社会学概論』である。高田は京都帝大の米田庄太郎教授（彼は二二歳からアメリカとフランスで六年間の在外生活を送った）のもとで最新の欧米の社会学とその動向を学び、大著『社会学原理』（一九一九年）に次ぎ、『社会学概論』（一九二三年）を刊行した。

高田によれば、社会学は総合科学ではなく、個別科学、つまり「社会科学界の一平民」である。「社会」を「人人の結びつき又は結びつける人人」と把握し、社会学は何よりも人間の結合を考察する科学と提唱した（「社会」societyはラテン語のソキエタスsocietasが語源であり、人間の「結びつき」を意味する）。個人が何故（＝群居の欲望）、どのように「結合のために結合」するのか、そして「望まれたる共存」（共存したいという欲求とそれに基づく共存の状態）が社会学的認識の第一の課題とした。

新明は、のちに『社会学辞典』で「我々はこれ（高田の社会学の出現―括弧内、引用者）によって社会学が精密な学問的思惟によって裏づけられた体系を与えられ、社会学的認識の基準が一段と高められるにいたった」と高田の社会学研究を評価した。新明は「社会問題」や「社会思想」を考察する「社会の研究」が「社会学」に通用すると自己流に理解し、すでに触れたように『社会学序説』を上梓した。

新明の社会学の研究を方針転換させたのが高田の研究である。新明は米田の膨大な社会学の研究のうち、とくに注目したのが経済を含む社会諸現象に潜在する主観的な人間の社会心理的諸要因の分析であり、さらに米田の弟子の高田が影響を受けたジンメルの形式社会学に関する文献研究である。

四　高田保馬と新明正道の人的交流

すでに触れたように、新明が「先生」と心から敬愛した恩師は、政治学の吉野作造博士であり、社会学の高田保馬教授である。新明は高田とは直接の師弟関係はなかったが、高田の『社会学原理』、『社会学概論』その他の著作で社会学を学び、かつその「習練」時代に盛んに激励され、本格的に社会学の研究に邁進した。新明は関西学院から東北帝大に転任したが、のちに「関西学院に在職していたら、私はあるいは学問的にも全く博士（高田

博士のこと）の忠実な一弟子になっていたかもしれなかった」と回顧している。一時期、新明は高田の創造的で緻密な「特殊科学的」社会学に共鳴したが、東北帝大では独自に綜合社会学を模索し、ついにその精緻な体系化に成功した。それにはなんと一〇年以上の歳月を要した。

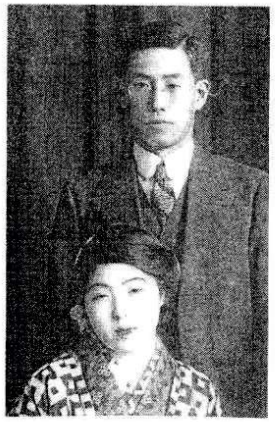
新明はジンメルらの形式社会学を咀嚼していた時期、雑誌『改造』の小特集「高田保馬論」（一九二四年一二月）で与謝野晶子は「高田さんの短歌について」を寄稿し、新明は「蒼白な情熱家（高田保馬論）」と題して、高田の学問論に言及した。新明によれば、高田の「社会学的貢献が決して模倣や翻訳ではなく、社会学一般の領域に一つの気高い高峰としてそそり立っている」と評価した。高田は社会学の研究では「精緻を極めたるその論理」のうちに、「心操の冷静とこれを裏づける熱情」を秘めている。新明の「蒼白な情熱家」という高田の人物評は、その後は「読み人知らず」として世に流布したという。

その後、総合雑誌『中央公論』や『改造』よりもはるかに後発の総合雑誌『経済往来』編集部は新明にＸＹＺという筆名で人物評論を依頼した。そこで、新明は「新渡戸稲造論」に次ぎ、「高田保馬教授論」（一九二八年一月）と題して、高田の人物評論を寄稿した。新明は高田を「学界における教授の地位を盤石に据え」、「広汎で常人の追随を許さない。語学に秀で数学を理解し、おまけに詩を誦す。精力絶倫、研鑽して倦むところを知らず」と的確に人物批評した。

さらに、『経済往来』編集部はドイツ留学から帰朝し、最新のドイツ通の評論家として注目された新明に一年間、ＸＹＺの筆名で人物評論を依頼した。新明は最初に「高田保馬・小泉信三論」を寄稿した（一九三四年一〇月）。新明は高田は「市中を水筒を下げて闊歩した」、「焼きとうもろこしを齧って歌を作る」といったエピソードを書き、高田の社会学と民族論の矛盾を指摘した。高田は発



長女・美夜子さんを抱く新明正道教授
（家永登氏提供）



1923年（大正12年）7月、金沢の白銀教会で松岡貞一牧師の司式で綾夫人と挙式

行して数日後に―同号に高田の論文「弁論覚書」を掲載している―、雑誌編集部に電話して「匿名評論の主は誰か」、「通俗的な人物評論のかたちで実は学問批判を行っている。学問批判をするなら堂々と本名を名乗ってやるのが筋ではないか」と烈火のごとく「憤怒」し、反論を掲載させろと要求し、次号一一月号に「世界主義と民族主義」と題して、新明の所説を批判した。

当時、編集部の石堂清倫は高田からの電話で匿名の筆者の新明の名前を知らせず、新明に事情を話した。そこで、新明は高田に手紙を書き、私が執筆したと名乗り出て、陳謝した。高田は「あなたでしたか」というさりげない返事をしたが、新明は高田にたいして長い間気まずい思いがしたという。歳月の経過とともに、新明と高田は再び旧情を温めることが出来るようになった。新明はその後も『経済往来』で土方成美や河合栄治郎について、匿名で人物評論を寄稿し続けたが、意想外に問題化し、新明は中途で筆を折ることを依頼され、中止した。

戦後、日本社会学会機関誌『社会学評論』四号（一九五一年三月）で「誌上討論・社会学に対する私の立場」について、高田保馬、新明正道、尾高邦男による論争が掲載された。社会学をめぐり自らの社会学的立場をめぐり理論論争が試みられた。その詳細についてはここでは省略するが、明らかなことは、高田と新明は相互に対立した社会学理論を提示した。

五　関西学院の内外の経験

新明の社会学研究への方針転換は学外の「社会学」、「社会学概論」の講義でも知ることが出来る。すでに触れたように、大阪労働学校（校長・賀川豊彦）が開設された（一九二二年六月）。関西学院文学部教授の新明は、東京帝大の学友で大阪労働学校の学校主事（兼有給講師）の松沢兼人から講義を依頼された。開校式の当日、新明は労働組合から推薦された受講生のために基礎学課（マヽ）「社会学」を講義した。のちに、新明はこの大阪労働学校の講義について、「毎期何回ほど講義したかははっきりしておらず、肝腎の講義の内容にしても、何を話したか、皆目覚えていない」と回顧しているが、ただ「『社会学序説』を執筆していたので、その内容に近いものを講義したのではないか」と述べている。新明は「社会の研究」、「社会の印象記」の一端を講義したのであろう。

二一年一一月、長野県上田に在野の哲学者の土田杏村の指導と協力で信濃自由大学（のちに、上田自由大学）を開講した。その後、同県飯田でも伊那の農村青年が自主的に伊那自由大学（のちに、南信自由大学）を開講した。土田からも講義を依頼された新明は伊那自由大学で「社会学概論」の集中講義をした（二四年三月）。新明は事前に同校の幹事の横田憲治に手紙を送り、社会学講義の参考書として「原論的なもの」として高田保馬の『社会学

原理』、『社会学概論』、『社会と国家』、京都帝大講師（当時）で高田保馬の師の米田庄太郎の『現代文化人の心理』、『経済心理の研究』など、また「特殊的なもの」として土田杏村の『新社会学』、新明自身の『社会学序論』など約二〇点の文献を列記している。ところが、建部遯吾の著書については「二、三あれど読むに当たらず」と記している（一九二四年三月五日付）。

新明の伊那自由大学の「社会学概論」の集中講義は内容的に大阪労働学校における「社会学」の連続講義と異なっていることは明白である。新明は自著の『社会学序論』を「特殊なもの」とされているが、のちに、新明は本著を内容的に「政治社会学」と命名したいと述懐している。新明は高田の新著『社会学概論』の刊行後の一九二三年春以後に熟読し、当時の社会学者によって論究されたアカデミックな形式社会学の研究に方針転換した。

それはジンメル、テンニース、マックス・ヴェーバーらのドイツの社会学である。とくに、日本でも雑誌『社会科学』（改造社、一二五年六月～二九年九月）は「形式社会学」を特集したように、すでに社会学界では形式社会学への関心が高まっていた。新明はその雑誌に「自然的社会学と文化的社会学」を寄稿した（二五年一〇月）。

新明が関西学院に在職中の後半、学生が「校風刷新運動」として学生大会で若い英語教員Mのボイコットを決議した。授業中、教員Mは学生の質問にたいして、知らないことは、「アッサリ知らない」と答え、また学生の英語の解釈に際して、断定的な答を与えず、ただこうでしょうと言うだけだった。そこで、一部の学生が無能呼ばわりして署名運動をし、学生大会でボイコットを決議した。新明は学院当局から依頼され、東京帝大の吉野教授と相談のうえ、英語学者の市河三喜教授の推薦によって、

関西学院文学部教授



左：新明正道、右：松沢兼人



河上丈太郎

招聘されたのが英語教員Mであった。

新明は学生代表の話しを聞き、激昂して大会決議の撤回を迫った。学生から「おやぢ」、「オトッアン」と慕われていた学生監の河上丈太郎教授もまた決議の撤回を申し入れた。その結果、学生代表は「涙を浮かべ」、自らの軽率な行為を反省し、学院当局に決議の取消しを申し入れ、一部の教員にたいするボイコット騒動はひとまず落着した。

新明自身は政治学のほかに、専門外の社会学の講義やドイツ語の演習を担当し、「今度は学生から失格教授という烙印を押されるのではないか」と胸中まったく穏やかではなく、このような不見識な学生を相手に安心して教鞭を執ることには積然としなかった。そこで、新明は人生の師と仰ぐ吉野作造教授に手紙を書き、事情を説明し、東京方面に職探しを依頼した。吉野教授の奔走にもかかわらず、東京、九州の諸大学の転任は何れも実現せず、格好な転職先は見つからなかった。新明自身は一時の憤懣から覚め、関西学院で教鞭を執り続けることにした。

六　形式社会学の習作

すでに触れたように、新明は形式社会学の研究を精力的に進めるとともに、一九二四年一二月には日本社会学会（理事）に入会した。その翌年、学会誌『社会学雑誌』に論文「行為における社会の形式性」（二五年一一月、一九号）を掲載した。のちに、新明はこの論文について、「形式社会学の提唱者のジンメルの形式としての社会の概念を肯定し、完全に自分を形式社会学の立場に立脚させていた」と回顧している。すでに触れたように、新明はドイツ形式社会学をもっぱら独学で研究して学生に講義し、しかもテンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（一八八七年）を学び、「社会結合の『共同』と『集合』―共同社会と集合社会―」、「共同社会論」などを発表した（当時、テンニースのゲゼルシャフトは「集合社会」と訳されていた。今日では「利益社会」と定訳されている）。

当時、日本でも最も注目された社会学はドイツ帝国時代に生きたドイツのゲオルク・ジンメルが提唱した形式社会学である。ジンメルは経済・法律・宗教などの社会の「内容的な世界」（経済学、法律学、宗教学などの研究対象）と概念的に区別し、社会の「形式の世界」、つまり「社会をして社会たらしめるもの」として「社会化 Vergesellschaftung そのものの形式の世界」を対象とし、社会関係や社会集団、社会においては上位と下位、競争、模倣、反抗、分業、さらに位階制の形成、党派の分裂などに見い出せるとした。

その後、ジンメルの形式社会学はドイツ・ヴァイマール時代のケルン大学で『ケルン社会学季報』を創刊したフォン・ヴィーゼ教授に受け継がれ、彼は社会の「関係

学」を提唱し、形式社会学の体系化に努めた。すでにベルリン大学のフィーアカント教授はジンメルに刺激され、本質直観による現象学的方法によって、社会学を研究し、ジンメルの非組織的な研究ではなく、社会関係や社会集団を組織的に研究し、新明が在独中にドイツで最初の『社会学辞典』（二一年）を編集した（後述）。

だが、ジンメルはベルリン大学で哲学の博士号と教授資格を取得し、同大学で私講師・員外教授（今日で言えば、非正規の教員で、受講生が支払う受講料が報酬）として主として哲学を、ときに社会学を講義して形式社会学を提唱した。さきに触れたフィーアカントは地理学や民族学を研究し、後年になってベルリン大学の教授の地位を保証され、ジンメルの形式社会学とテンニースの影響を受け、社会学を講義した。フォン・ヴィーゼは国民経済学で博士号と教授資格を取得し、歴史の浅いケルン大学で正教授として社会学を研究・講義した。

当時、伝統的に「派閥根性に固まった」ドイツの大学では社会学は制度化された専門学科Fachとして認められておらず、精神科学や社会科学の一つの学問上の視座Aspektに過ぎなかった。そのため、専門学科として社会学は大学において極めて「不安定な状況」におかれていた。ジンメルは「社会の内容」を研究の対象とする法学、政治学、経済学、哲学のような専門学科と区別し、社会学を「社会化の形式」を対象とする社会科学と定義し、社会関係や社会集団を研究対象とした。

一九七三年、社会学者のJ・マテスは「ドイツにおける社会学の理論と歴史は古くかつ豊富であるが、しかし独自の重要性をもつアカデミックな専門科目としての社会学の伝統は新しくかつ乏しい」と総括した。「ドイツ帝国」の時代のジンメルは長くベルリン大学の私講師・員外教授に留まり（彼がユダヤ系であったことも大きい）、ヴァイマール時代以降もドイツ社会学の豊富な学問的形態と大学における歴史の乏しい教授的形態の乖離を物語っている。

さて、新明は関西学院高等商業部機関誌『商光』に「社会意識について」（二五年九月）を掲載した。新明は高田に従って社会の本質を「意欲された結合関係」とした。論文「社会意識について」では社会意識と「社会」の形成と存続との関連、さらに社会規範との関連を論じたが、新明自身が回顧しているように、論考としては形式社会学の「習作」の域を全く出ていない。

ところが、高田は新明宛に絵葉書で「『社会意識について』をのせたる『商光』一部を御恵送願はれましくや、当地にて入手の方法、無之間、何卒御許し下されたく候、先は御願迄」（二五年一二月）と、新明の論考の送付を依頼した。新明は高田の葉書による依頼に驚き、しばらく躊躇したが、掲載誌を恵送した。高田から折り返し、「大変参考になった」という礼状が新明の手元に届けられた。

なお、新明は形式社会学の提唱者のジンメルの『断章』（日記抄）の一部に接し、その「思想的な豊かさと特有な論理」に魅了されていた。

新明は財団法人協調会発行の『社会政策時報』に「社会関係論に就いて」（二五年一一月、六二号）を発表し、社会関係は社会学研究の根幹として、社会は結合関係と分離関係、その両者の混合によって形成されたとした。高田はこの論文を読み、再び新明宛の手紙で大いに参考になったと称賛し、自ら『社会関係の研究』（二六年）を上梓し、社会関係の本質に論究し、これまでの結合関係と分離関係のほか、新たに支配関係を加え、精密な社会関係論を提起した。

七　大学で教鞭を執る者は「すべて僥倖の支配下にある」（マックス・ヴェーバー）

一九二二年八月、東北帝大法文学部は、のちに設置された九州帝国大学法文学部と同じく、文科、法科、経済科によって構成され、総合的な高等教育の実施を設立目的とした。その三年後に社会学講座が開講された。その当初、東北帝大法文学部教授会はドイツのケルン大学教授のマックス・シェーラーの同意を得て、社会学講座主任の招聘人事を決定したが、彼はフランクフルト大学に任命され、招聘人事は実現しなかった。

二五年夏、吉野作造教授の門下で東北帝大法文学部の河村又介教授（戦後、最高裁判事）―おそらく同学部の鈴木義男教授（同じく吉野教授の門下）と相談したであろう―は、金沢に滞在中の新明に電報で「社会学の講座新設につき貴下をその候補者として選考したいと思うが、もし確定した場合来任してもらえるかどうか」と打診した。無論、河村は吉野教授から新明の転職の依頼を受け、推薦人事を打診したのである。

金沢で「群集社会の研究」に没頭していた新明は、熟慮してそれに応諾する電報を送った。新明自身は形式社会学に関する「習作的な」研究論文を精力的に発表した。東北帝大法文学部教授会は新明を将来有望な若手の社会学研究者と認め、助教授として任用することを決定し、文部省に辞令交付を内申した。法文学部教授会は新明を二六年四月の新学期までには文部省の発令を期待したであろう。

新明は四月から東北帝大で形式社会学の講義が出来るようにプランを立てて準備していたが、文部省からは辞令の交付はなかった。ところが、二五年末に京都府警察部は社会科学研究会関係の学生を検挙するために京都帝大寄宿舎を家宅捜査した。大学の自治と学問・思想の自由を侵害するとして京都帝大法学部と経済学部の教授会は抗議の意見書を発表した。その翌年一月、京都府警は京都帝大、関西学院など全国の社研学生（中退者、卒業生を含む）を検挙した（京都学連事件、三八名が逮捕・

起訴され、最初の治安維持法適用事件）。京都府警は内偵し、関西学院では教授の河上丈太郎、松沢兼人、講師の坂本勝らとともに新明もまた家宅捜査を受けた。ただ、新明はそれに動ずることもなく、京都学連事件とはまったく無関係だと楽観視していた。

当時の文部大臣の岡田良平は「アメとムチの文教行政」を実施した。臨時教育会議を新設して高等教育機関の整備・拡充を含めて学制改革を実施する一方、中等以上の学校で現役将校による軍事教練の導入、学生・生徒の社会科学研究の禁止と、高校・高等専門学校にも軍事教練の導入を通達した。それ以前、小樽高商の軍事教練で小樽高商事件を契機に、社会科学連合会（学連）を中心に全国的に軍事教育反対運動が再燃した。

当時の新聞の暴露記事によれば、岡田文相はいわゆる「左傾教授」や「赤化学生」の動向に注意し、常時いわゆるブラックリストを携帯していた。新明は「新人会加盟以来、昭和六年末迄思想要注意人物トシテ視察ニ附セラレタ」（文部省東北帝大教授ノ思想傾向）と経歴と思想経歴の後に「備考」として記録されていたように、文部省当局が新明を「要注意人物」として常時監視し、岡田文相のブラックリストに記名された一人であっても少しも不思議ではない。文部省当局が大学の自治と思想・学問の自由を牽制し、「要注意人物」とされた新明の人事に強力に介入すれば、新明の東北帝大法文学部助教授の就任も困難であったろう。とまれ、文部省当局は東北帝大法文学部の新明の就任を出来るなら阻止したかったであろう。

再び新聞の暴露記事によれば（その真偽は明らかではない）、岡田文相が満洲・朝鮮の視察旅行中に新明の助教授就任人事が発令された。帰国後、岡田文相は新明の人事報告を受け、切歯扼腕したとのことである。司法省の検察官が社研学生三八名を裁判所に起訴した。おそらく文部省は京都学連事件の一応の決着を予測して、新学期の四月が過ぎて、新明の招聘人事を発令した。

大正一五年四月二四日の『官報』（第四〇九八号、内閣府印刷局、《一九二六年》）によれば、新明は同月二三日付で東北帝大助教授の辞令が交付された。さらに「東北帝国大学学報」によれば、「法文学部勤務、社会学講座分担」を任じられた。新明が提出した「着任届」（『学内綴』に保存）によれば、新明は神戸から仙台に五月三日に着任し、家族は遅れて同月一六日に着仙した（いずれも、東北大学資料館に保存）。極めてあわただしい人事異動だったが、ドイツの大学教授の人事とは異なり、新明の東北帝大の就任人事は設置者の国家権力との関係でまさに「僥倖の支配下にあった」と言える。

新明助教授にたいする文部省当局の「いやがらせ」人事はさらに続き、早くから東北帝大法文学部教授会は文部省に新明の海外留学の内申を提出したが、文部省当局は次年度の在外研究を発令し、新明はあわただしく神戸港からアメリカ丸に乗船し、大連から満鉄に乗車して、シベリアを縦断し、モスクワを経由してベルリンに到着した。ベルリンでは社会学研究に励むとともに、ヴァイマール崩壊期とナチス・ヒトラー登場の危機的な時期に一年間、雑誌『経済往来』に「時評」として遠い日本の読者に発信した。

八　水は方円の器に随う（したが）（荀子（君道））

新明の関西学院の五年目に話しをもどせば、新明は退職と転勤で極めて慌ただしい九日間を過ごした。二六年四月二四日の朝、新明は関西学院に出校すると、ベーツ学院長は「新明さん、あなたは人が悪い。今日の官報を見ると、あなたは東北帝大の先生になっています」と言って、官報を見せられ、新明の辞令が載っていた。新明にたいして東北帝大から何の連絡もなかっただけではなく、文部省当局は辞令交布を拒否するであろうという悲観論が伝えられた。新明は官報を見て、ベーツ学院長以上に驚愕した。新明は学院長にこれまでの事情をつぶさに説明し、転任の了解を求めた。学院長は新明の辞職を了解し、そのかわりに社会学を担当する後任を推薦してほしいと依頼した。

数多くの自薦他薦の候補者の話しがあったが、新明は九州帝大の高田保馬教授と相談し、高田は九州帝大法文学部の小松堅太郎助手を後任に推薦した。小松助手は直ちに神戸の学院を来訪した。それまで、新明は小松とは一面識もなかったが、すでに彼が学術雑誌に発表した論文を読み、「中々の勉強家で、形式社会学についてはひとかどの見識の持ち主」と認めていた。新明は学院当局が小松を教授候補に内定したことを確認し、五年間在住した神戸を出発し、仙台に向かった。新明にとって、また小松にとっても慌ただしい九日間だったであろう。

マックス・ヴェーバーは『職業としての学問』（一九一九年）で職業（Beruf、天職・使命とも訳す）としての学問の外面的事情について、ドイツでは私講師や員外教授が将来的に正教授や研究所幹部となるためには、「ただ僥倖を待つほかない…まったくの偶然の支配下にある」と述べている。教授は人選に当たり、選択の公平を期そうとする「善良の意思」が働く。ところが、「驚くべきは、…いつも適任者が任命されてることが多いということでなければならない」と述べている。

少なくとも、東北帝大法文学部（のちに、東北大学）に任命された新明正道の場合、そして関西学院文学部（のちに、関西学院大学）に任命された小松堅太郎の場合も、まさに社会学教授として「適任者」にほかならない。その後の三〇年以上の新明と小松の社会学の研究と教育がそれを証明していると言えよう。

関西学院文学部で法学関係の講義を担当した河上丈太郎教授（戦後、社会党委員長）は関西学院教授グループ

として新明、松沢兼人、坂本勝らとともに神戸を舞台に政治研究会神戸支部を結成し、河上は二八年二月の最初の普通選挙で無産諸派八名の一人として当選した。坂本と松沢は兵庫県と神戸市でそれぞれ地方議員に当選した。新明は彼らとは別に学究の道を歩んだ。

のちに、河上は「新明正道君を教授として迎えたことは特筆すべきことであります。同君は学生時代に既に多くの著述もあり、当時学生界の思想的最高水準にあった人であります。この人が吉野作造博士の紹介で学院（ママ）に来られ、高田氏に代わって社会学の講義をせられ、社会科（ママ）の基礎を強固にせられました。同君は五年間、―東北大学の社会学の専任教授（ママ）として赴任せられるまで、学院のために尽くされた努力はなみなみならむものがありました」と回顧している（「学院と私」、一九四九年、『関西学院六十年史』）。

九　形式社会学の本格的な研究

新明は仙台に着任すると、河村又介教授が出迎え、用意された広瀬川畔の借家に寄り、次いで河村教授の案内で佐藤丑次郎法文学部の学部長、宗教学講座の主任の鈴木宗忠教授に就任の挨拶をした。その当時、帝国大学は制度として教授だけが講座を「担当」した。当該講座で教授が空席の場合、他の講座の教授が「兼担」した。鈴木教授は宗教学講座を「担当」するとともに、社会学の普通講義を「兼担」し、授業題目として社会学概論を指定した。新明は助教授として社会学特殊講義を担当し、授業題目に「形式社会学」を指定した。

当時の講座制の日本の帝国大学について言えば、講座の「担任」、「兼担」、「分担」という制度は、おそらく一九世紀初頭のドイツのヴィルヘルム・フォン・フンボルトの「近代大学」の制度をモデルにしたのであろう。一応、日本の大学でも講座の主任教授は二重に絶対的な支配権が認められていた。それは、一方では教授は講座制のもとで研究と教育、人事と財政（予算と支出）などに絶対的権限を有し、もう一方では教授は学部教授会のメンバーとして教員の招聘や昇任の推薦権と決定権、学位の審査権などを有していた。

ところが、明治以降の日本では「文明開化」という国策に従い、かつ国家予算で教育と研究の制度が整備・拡充された。帝国大学令（一八八六年）によれば、帝国大学は最高学府として国家の須要に応ずるために学術研究・官僚養成を目的とし、国家主義教育を奨励する一方、集会条例・新聞紙法・出版法などによって集会を始め、言論・思想の自由を抑制した。大学の自治や学問の自由を擁護するために行政権の介入にたいして、大学は根強く抵抗する局面もあったが、東京帝大経済学部の森戸辰男助教授の筆禍事件のように、大学は司法省や文部省の圧力に即応して、教官を休職・免官し、また学生の学内

および学外の自主的活動を禁止し、退学処分や休学などに加担することを余儀なくされた。

これまで触れてきたように、新明は国家権力（官憲や文部省当局）の抑圧に抗して、自己の信念を貫き、学究の徒としてラジカルに学問研究に邁進した。ここで「ラジカル」radicalというのはただ「急進的」という意味ではなく、むしろ「徹底的」、「根源的」という意味である。東北帝大法文学部助教授の新明はドイツのみならず、日本でもすでに研究されていた形式社会学を社会学特殊講義のテーマに選び、理論的かつ社会学史として徹底的に研究・講義し、最後は内在的に批判するようになった。それは、新明が本格的に社会学を研究・講義して、早くも三年後の一九二八年五月に大著『形式社会学論』に続き、その翌年二月に『独逸社会学』を上梓した。

すでに触れたように、新明は小著『ソフィストの政治学的研究』（一九二一年）、『社会学序説』（一二年）その他を上梓したが、のちに新明は「自ら社会学の処女作として実感的に回想されるのが大著『形式社会学論』だ」と回想している。一般に、作家は処女作maiden workに向って成熟すると言われているが、社会学者としての新明はジンメルらの形式社会学を徹底的に研究し、かつ内在的に批判し、コントやスペンサーとはまったく異なる独自の綜合社会学を提起し、それに向って精進したと言えよう。

（二〇一六年一一月三〇日　擱筆）

世界の国旗から学ぶ（第二回）

米村典紘

第二回目の書き出しは、リオ五輪、金メダルシリーズの続き、「セルビア共和国」から「タジキスタン共和国」までの国旗等の紹介となります。

前回、小生の拙文をお読み頂いた友人から「インカ帝国の国旗について大変興味がある」とのメールを頂きましたので、前文と云うことで、始めにご紹介をさせて頂きます。

インカ帝国の前身であるアンデス文明は、紀元前7500年頃に始まったとされています。（ご存じの様に、文字を持たない文明であった事なので、定かではありません）

ここで申しあげるインカ帝国の国旗は1438年から1533年、スペイン人に征服される迄の約100年間、南米ペルー、ボリビア、エクアドル地方に住んでいた先住民ケチュア族が、三千四百メートルの標高に首都（クスコ）を置き、繁栄していた時代の国旗についてのお話です。

インカ帝国の国旗は、主に二つの国旗が残されています。いずれも大変ユニークでカラフル、芸術的にも大変優れ「さすが、インカだな」と感心させられるほど、素晴らしいデザインです。

一つは少し縦長で、「白地の上部に半円の虹が描かれ、その虹の中央、高い位置に赤糸で作られた風鎮が垂れ下がっています。虹の左右の端を、黄金の二匹の動物が呑み込んで支えている構図となっています」。

その動物は、「何だと思いますか？」、黄金の蛇なのです。

下からシンメトリーで、尻尾を下にし、ニョキニョキと登ってくる、黄色蛇の口が、虹の端を飲み込んで、支えている構図なのでした。・・・何とも独創的な国旗ですよね。（イメージお分かりになりましたでしょうか）

もう一つは、これもカラフルな小さな正四角形で、パ

ッチワークの色見本を作った様な七色の国旗で、インカの催事の時には、各地で使用されていたそうです。

（先日、その旗が、お土産品として販売されている映像をテレビで紹介していましたが、実際は、一つ一つが、インカの末裔達によって手織物で作られている心のこもった旗だ、と云う事でした）。

それでは、まんじ142号百十五ページの続きで、セルビアからの紹介となります。

セルビア共和国（金2：銀3：銅2）

セルビアの国旗を紹介することは、何ら難しいことではないのですが、セルビアを擁するバルカン半島の歴史を簡単にご説明する必要がございます。しかしながら、世界史の中で、最も複雑な歴史を持つのがバルカン半島なので、詳しい歴史部分は歴史学者にお任せするとして、第一回に出てきた「汎スラブ」についての解説から、始めて行きたいと思います。

ヨーロッパの民族は、ゲルマン民族、スラブ民族、ラテン民族、その他、で構成されると云われています。「アングロサクソン民族は？」との疑問が出てきますよね

そうです、ゲルマン民族も多数の民族から成り立っています。その一つが「アングロサクソン人」であり、「アングロサクソン人」も、先住の「ブリトン人」と「アングル人」「サクソン人」などの民族に分かれるのです。「スラブ民族がゲルマン民族に対抗する為に一つに集まろうとの運動、それが「汎スラブ」（スラブ語を話す民族をまとめよう）のきっかけとなりました。スラブ系言語も、ロシア語、マケドニア語、クロアチア語、セルビア語、ボスニア語、スロベニア語、オーストリア語等、多岐に亘っているのです。

第一次世界大戦前、セルビアの隣国には、同じスラブ系国家である、ボスニア・ヘルツエゴビナがありましたが、当時、ボスニア・ヘルツエゴビナは、オーストリア帝国（スラブ系）が併合していました。

ボスニアの首都がサラエボで、有名な「サラエボ事件」が起きたのです。（オーストリア帝国の皇太子が、セルビアの青年に暗殺された事件）。この事件が、きっかけとなって、民族同士の争いとなり、第一次世界大戦が始まったのです。

同盟国と連合国に分かれて、戦火は増々拡大していきました。

同盟国と云われる国は、ドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、オスマン帝国、ブルガリアの四カ国に対して、連合国は、イギリス・フランス・イタリア。セルビア・ルーマニアなど、27カ国が参加し、日本もイギリスと日英同盟を結んでいた関係から連合国側に参加いたしました。

セルビアも多大な損害を被りましたが、終戦を迎え「ベルサイユ条約」で、イスラム系、ゲルマン系に支配されていた国々が、「民族自決の原則」により、セルビア、モンテネグロ、クロアチア、スロベニア、の四つの地域・民族が、「ユーゴスラビア王国」として誕生しました。

しかし、汎スラブと云っても、もともとセルビア人とクロアチア人は違う訳で、クロアチアで、国王が暗殺された事件をきっかけに、クロアチアはドイツの支援を受け、自治州となりました。

それから又第二次世界大戦に入りますが、その時ドイツと戦って、英雄となったチトー元帥（ゲリラ軍であった）が、その指導力とカリスマ性で、ユーゴスラビア連邦人民共和国（後に社会主義連邦共和国に改名）を統一し、一応バルカン半島は落ち着いた状況となりました。

即ち、スロベニア：クロアチア：ボスニア・ヘルツェゴビナ：セルビア：モンテネグロ：マケドニアの国々が、統一国家となったのでした。（アルバニアはユーゴスラビアには参加していません）

その後、１９８０年にチトーが亡くなり、ソ連が崩壊すると、今迄の「社会主義」強権政治に不満を持った国々が爆発しはじめました。

１９９１年に、クロアチアとスロベニアが独立、１９９２年ボスニア・ヘルツェゴビナが独立、（アルバニアも１９９２年４月にアルバニア共和国となり、現在の国旗に変更）、マケドニアの独立、更に２００６年にはモンテネグロが独立し、セルビアは単独国家となったのでした。

現在、セルビア国内には、コソボ自治州とヴォイヴォディナ自治州が含まれていますが、コソボについては、事実上独立している状況となっています。

しかしながら、問題がすべて収まった訳ではなく、今も小競り合いが続いているのです。

前置きが長くなりましたが、セルビアの現在の国旗を説明するには、前述した長い歴史を頭に浮かべながら、考察して行きましょう。１８３５年に最初に採用された国旗は今のロシアと同じ、上から白、青、赤の三色旗（旧セルビア・モンテネグロ）、次にユーゴスラビア時代は、黄色で縁取りされた、赤い五稜星が社会主義の象徴として、中央に描かれていました。現在は、三色旗の色順番が変わり、上から赤、青、白の三色ボーダー旗に、国章をあしらった国旗となっています。

国章には、カラジョルジェビッチ家の紋章である「双頭の鷲」が描かれています。

双頭の鷲の由来は、ビザンチン帝国（東ローマ帝国）が東と西に厳しい顔で睨みを利かしている、力強さを描がいた紋章なのです。その為、近隣国である、モンテネグロ、アルバニアの国章にも、双頭の鷲が描かれています。

（参考：ルーマニアに隣接するモルドバ共和国の国章は、同じ鷲でも東西に睨みを利かす双頭の鷲ではなく、単頭の鷲で、嘴には十字を加えた穏やかな表情の鷲です）

ウズベキスタン共和国（金２：銀２：銅２）

ブルーと赤い縁取りのある白と緑の横三色旗。ブルーは、トルコ系民族の伝承色、白は平和を、緑は肥沃な国土を表す意味と三日月と星を含めてイスラム教国を表し、赤い線は国民の生命力をあらわしていると云われています。

この国旗の特色は、旗竿側の空色部分に三日月と共に描かれた、白抜きされた十二個の星（デザイン的に３：４：５に分けられて描かれている）が特徴となっています。

１３７０年モンゴル帝国崩壊後に、テイムールが一代でテイムール帝国を築き、文化、特に天文技術を駆使し、十二宮、一年を十二か月とした彼の功績を称え、国旗に十二の星を配置した国旗となりました。

（ＥＵ連合旗も当初は十五星でしたが、加盟国が増加して来た事もあり、この考えを取り入れて連合旗も、十二星円状とした旗に替えたと云われています）

ベルギー王国（金２：銀２：銅５）

１８３１年オランダからの独立時に、現在の国旗となりました。縦型の黒：黄：赤の三色旗（ドイツは横柄の上から黒、赤、黄色）で、ベルギー国旗は、フランス国旗に影響されている、と云われています。（ヨーロッパでは縦3色は、フランス、イタリア、ルーマニア、アイスランド、ベルギーと、小さな国で、フランスとスペインの国境にあるアンドラ公国、ルーマニアの隣国モルドバ共和国のみが縦縞三色を使用）ベルギーは王国でありながら、フラマン語（オランダ語）共同体の北部、フランス語共同体の南部、ドイツ語共同体のドイツ国境近くの南東部の三つの地域政府による連邦国家制をとっている国となっています。

スイス連邦（金２：銀２：銅２）

スイスも多国語（ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語）を認めている連邦国家。永世中立国は、ご存じの通りですが、正式な国連加盟は２００２年からなのです。また、スイスの国旗は「良く知っているよ」とおっしゃるでしょうが、赤地に白抜き十字の長さが、縦が六分の一だけ長い事は気付かないのではないでしょうか？また赤旗は、社会主義の象徴の様に思われがちですが、神聖ローマ帝国の軍旗の一つで、主権と力を表すものだといわれています。

タイ王国（金2：銀2：銅2）

タイは、東南アジア諸国の中で、唯一、植民地とならなかった王国です。当初の国旗はスイス同様、赤一色でしたが、他国との差別化のため、赤地に白象（王家のシンボル）を描いたものでした。1917年にチャオプラヤ川が氾濫した時、当時の国王が、象柄の国旗が逆さに吊るされているのをご覧になって、現在の横柄三色旗（横柄六分割の国旗で、上から赤1白1青2白1赤1なので上下逆さでも同じ国旗になる）に変更したといわれています。

タイは在留日本人が多い国として知られていますが、一番は米国（412,639）、中国（135,078）、オーストラリア（81,981）、英国（67,148）、カナダ（62,349）に次いで、六番目に多い国（59,270）であり、ブラジル（56,217）が7番目と続きます。この統計は2013年10月末なので、現在は、タイの在留邦人は日系企業の進出や、親日国で、物価も低い事から、日本の年金生活者の移住も多くなり、増加していることは確かです。

スロバキア共和国（金2：銀2：銅0）

チェコスロバキアは、1969年に自由主義体制を目指した革命「プラハの春」がテレビ映像で全世界に流れ、高齢者にとって印象深い事件だったと思います。

1989年、共産党政権崩壊を経て、1993年にチェコスロバキアから分離独立し、スロバキア共和国となりました。首都はブラチスラヴァで、ハンガリー王国時代に、首都であった時もありました。（プラハはチェコ共和国の首都）

北はポーランド、南はハンガリーで、ハンガリーの影響が強い国家です。

チェコが工業国、スロバキアが農業国とのイメージ通り、国土の三分の一が森林地帯となっています。

国旗は汎スラブカラーの典型で、白：青：赤の横三色旗でしたが、1992年にソ連崩壊によってロシア国旗が復活した為、ダブル十字と三つの青い山（タトラ：フアトラ：マートラ）を盾の中に描いた国章を加えました。ドイツ、オーストリア、ハンガリー、ロシア等の列強国に囲まれた長い歴史を持ち、侵略などで、度々国旗が変更されて来ました。

ジョージア（金2：銀1：銅4）

北部をロシア、南部をトルコと隣接し、西部を黒海に面している国家です。

2015年に日本の外務省が、ロシア語読みのグルジアから英語読みのジョージアに国名の読み方をかえました。実は、グルジアと云う国名も十字軍の守護聖人、聖ゲオルギウスに因んだ名前ですが、聖ゲオルギウスはキ

リスト教の聖人の一人で、英語名が聖ジョージなのです。

聖ジョージは、イングランド、ロシアの守護聖人でもあります。

ジョージアの国旗は、前述の通り、聖ジョージにあやかった国旗で、2004年に白地にセントジョージの赤十字を描き、それぞれ四つの白い余白部分に四つの小さいクロスパテイ型の赤十字を描き、この国がキリスト教国である事を強調しています。

1991年に旧ソ連から独立、国民は、旧ソ連の支配が長かった事もあって、独立後はウクライナ、アゼルバイジャン、モルドバ等と、欧州評議会のメンバーとなっています。

（なお、大相撲の臥牙丸はジョージア出身力士で、ソ連の書記長として権力を振るった、あのスターリンも、ジョージア出身者でした）

いよいよ、金メダル1個の国に入ります。

アゼルバイジャンからタジキスタン迄の二十か国（個人資格を除く）の説明となります。

それらの国々については、カッコ書きでメダルの種類ではなく、金メダルを獲得した競技種目を書きました。

アゼルバイジャン民主共和国：（テコンドー男子80K以上）

カスピ海の西側に面し、1991年のソ連崩壊後に復活した国。以前の国旗は、ソビエト連邦のメンバーとして「ハンマーと鎌と星」が、描かれていました。

現在は、空色・赤・緑の横三色旗で、中央赤の部分に、トルコ系8部族（アゼルバイジャン：オスマン：チャガタイ：カザフ：タタール：トルクメン：キプチャク：セルジュク）を意味する八稜星と、三日月が白抜きで描かれている。空色は、トルコ（テユルク）」系民族を、下部の緑は云わずと知れたイスラム教の色を意味した旗となっています。（旧オスマントルコの国旗と同様）

注：（ソ連崩壊後独立した14か国の独立以前の自治州等の旗には、「鎌と星」が描かれている）

ベラルーシ（男子トランポリン）

ソ連時代は白ロシアと呼ばれていましたが、1991年のソ連崩壊後に、初めてベラルーシ人の国家として独立をしました。ベラルーシとは、ベラルーシ語で「ベラ」は白、「ルーシ」はルーシー族との意味です。白の意味は、ベラルーシ人の肌の色が特に白いとか、この地区のキリスト教徒を「白」と呼ぶとか云われていますが、定かではありません。

色白の金髪美人が多い国であることは、ヨーロッパに

於けるモデル達が多い事で証明されている様です。（余談：先日、早稲田大学近くのレストランで、金髪で色白の美人がいましたので、「貴方の国はベラルーシでしょう」と聞いたら「yes」とにこやかに答えてくれました。）

国旗は、ソ連時代に使われていた赤2緑1の横柄の国旗と殆ど変りませんが、ハンマーと鎌と金の星は除かれました。

又、竿側に、縦で伝統的織柄を赤・白を反転させただけでしたが、それを、新しい国旗と定めました。

しかし、ベラルーシは人種問題を抱えている事もあり、欧州評議会のメンバーから外されています。

トルコ共和国（レスリング男子百二十五キロ級）

トルコの国旗は、以前より、赤地（一時は緑の時もあった）に三日月と星（星は一時期無くなった時もあった）の新月旗が、長く定着しています。このデザインは新興イスラム諸国の手本となっていきました。

トルコは、セルジックトルコ・オスマントルコを名乗った強国としての歴史を持ち、現在のイスタンブール「昔のコンスタンチノープル」は東西文化の懸け橋として、昔から栄えてきたのでした。現在でも、世界で最も人口の多い都市（一千四百万人）となっています。

競技種目では昔から、レスリングの強国として有名で、リオ五輪でも獲得した8個のメダル中、5個が男子レスリングで獲得したものでした。

トルコの歴史を語るには、浅学な私では無理があり、少なくとも「親日国」である事だけは強調しておきたいと思います。

アルメニア共和国（レスリング男子九十八キロ級）

トルコの東隣りに位置し、男子レスリングで金メダルを獲得しました。アルメニアはキリスト教を国教としたこの地域での最初の国家で、ノアの箱舟の子孫と云われています。

ナチスによるユダヤ人虐殺は余りにも有名ですが、オスマン帝国による、アルメニア人150万人虐殺（アルメニア人ジェノサイドとも呼ばれる）という事件があった事は、悲しい出来事でした。

国旗は、赤・青・黄色の横柄三色で、神から授かった虹の旗に由来すると云われています。

チェコ共和国（柔道男子百キロ級）

クルバレフが金メダルをとり、日本の羽賀選手が銅メダルとなった種目。

チェコの国旗は、チェコスロバキア国旗をそのまま継承した、汎スラブ三色旗。しかし、この旗は偶然に出来上がったと云われています。当初は白と赤の二色旗を考

えていましたが、隣国ポーランド国旗と同一になるため、慌てて旗竿側に青の三角旗を入れたことで、変形三色旗となってしまったそうです。（ドイツ保護領時代は白・赤・青の横三色旗にさせられていた時代もありました）。東欧圏では最も工業化が進んでいる国で、皆様ご存じのピルスナービール（国民一人当たりのビール消費量は世界一）、ボヘミアングラス、ボヘミア磁器等は特に有名です。

エチオピア連邦民主共和国（陸上女子1万メートル）

エチオピアの三色旗（上から緑・黄色・赤）は、汎アフリカ色の手本とされていました。（近年にはその三色に、黒を加えるアフリカに於ける新しい国が多くなってきました）

この三色旗は、エチオピアでは、1897年から長い間使用されてきましたが、1996年に連邦制となると、ソロモンの封印の紋章（国家と民族の団結統合を表す五稜星）が旗の中央に加わった、新しい国旗となりました。

アフリカにおけるキリスト教徒の多い国であり、またアフリカ最古の独立国であります。

スロベニア（柔道女子六十三キロ級）

スロベニアは1991年6月、ソ連の崩壊によってユーゴスラビアとの連邦解消を宣言し、独立しました。

実は、国名の意味は、スロベニア人の国で（スロバキアもスロバキア人の国）と全く同じ民族であり、国旗も上から白・青・赤の汎スラブ色となっています。

二つの国旗の違いは、スロベニアが縦1に対して横2であり、スロバキアは縦2に対して横3の割合で、長さが異なる事と、ちょっと国章が異なるだけでそっくりなのです。

（国連会議や五輪等では、旗の大きさは二対三に統一されるので、国章だけの違いとなります）

国章は、国内最高峰（2860メートル）の白い三つの頂を持つトリグラフ山等が描かれた紋章で、スロバキアの三つの山と似通った国章となっています。

スロバキアの独立が1993年なので、スロベニアの方が、その二年前に独立と国旗制定をしていますから、正当性があるのですが、全く同じではない事として、現在は問題になっていません。（実は、正式な場合を除くと、国章は複雑なため、省略される場合が多い事も知っておかなければなりません）

参考に、最近、次期アメリカ大統領トランプ氏のメラニア夫人が、スロベニア出身のモデルであったということが、大きな話題となっています。

インドネシア（バトミントン混合ダブルス）

インドネシアの国旗については、第一回にモナコの国旗と類似している事で記載済みなので、国旗の説明は省略いたします。

インドネシアの国名は「インドの島々」との意味で、世界で一番多くの島（一万三千以上）を持つ国なのです。

昔から、バトミントンの強国でしたが、近年、中国が卓球同様、最強国と成っています。然しながら、女子ダブルスで、日本の松友、高橋組が、金メダルを獲得した事は嬉しいニュースでした。

ルーマニア共和国（女子エペ団体）

ルーマニアとは、ローマ人の国を意味しています。一部の人からは、イタリアにローマがあるからイタリア人がローマ人ではないのか？、と思われる方もいるでしょうが、東欧では数少ないロマンス語系言語を話す民族なので、スラブの国ではない、ルーマニア人の国とした訳でしょう。（ロマンス系言語とはラテン語を源流とした言語：フランス語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語等）

国旗は、フランスーイタリアと同じく縦型の3色旗で、旗竿側から、青・黄・赤の三色旗となっています（この国旗も、ルーマニアが社会主義の国章を抜いた事から、アフリカのチャド共和国の国旗と、ほぼ同一となった状態が今でも続いています）

【参考：フェンシングには、「フレール」「エペ」「サーブル」の三種類の武器があり、武器毎に競技種目があり、攻める部位も異なる。日本の太田選手はフレールに出場しました。エペは何処を攻めても良く、本来の決闘に最も近い競技。サーブルは、馬上の戦いをイメージした競技です。】

バーレーン王国（女子3千m障害）

バーレーン島を中心とした島国。産油国としては湾岸諸国の中では一番産油量が乏しいため、中東の金融商業センターに変貌してきました。

当初の国旗は、イスラム教シーア派の赤一色でしたが、旗竿側から白（1）赤（2）の縦2色旗で、更に赤と白の境目をジグザグ模様とする等、変化させて来ています。

ベトナム（男子エアーピストル）

「金星紅旗」と呼ばれる北ベトナム時代からの国旗で、社会主義国家を表す赤旗に黄色い大きな五稜星（五稜星は、労働者・農民・知識人・青年・兵士を表す）の国旗です。最近、日本人の観光客も多い事と、日系企業の進出も盛んな事から、お馴染みの国旗となってきました。

（参考：ミュージカルの「ミスサイゴン」で、本田美奈子（ミスサイゴン役でしたが、白血病により38才で亡りました）市村正親が「エンジニア」と呼ばれる役を演じていますが、ここで呼ばれる「エンジニア」とは技術者ではなく、英語の隠語で詐欺師的な意味でつかわれています）

台湾（重量挙げ女子53キロ級）

台湾の金メダルは女子重量挙げによるものですが、58キロ級女子でも銅メダルを獲得しました。（それと、アーチェリー女子団体で銅）いずれも、女子でした。

中国は、自国の一部と主張し続けています。日本も米国にならって同調していますが、実態としては、中国の主権が及ばない共和制国家体制となっています。

最近では、台湾の蔡総統と米国のトランプ新大統領との電話会談があり、今後の動向が注目されています。

日本にとって台湾は、輸出相手国の四番目（42,316億円）の国家であり、大切な存在と成っています。（米国（136,492億円）、中国（133,815億円）、韓国（54,559億円）

国旗は「青天白日旗」と呼ばれ赤・青・白の三色は孫文の三民主義（赤は民族主義の自由：青は民権主義の正義：白は民生主義の友愛）を意味しています。カントン部分に描かれた、青地に白い太陽が発する12稜の光線は、十二支と12刻を意味するといわれています。

バハマ（陸上女子400m）

カリブ海に浮かぶ島で、コロンブスが最初に上陸した事で有名です。スペイン領を経て1783年に英国の植民地になりましたが、1973年に独立しました。気候が温暖で、サンゴ礁が美しい事から、世界のリゾート地として有名です。

国旗は二色のボーダー柄で、横両端にマリンブルーを、同じ幅で中央に黄色の帯（中央の黄金色は砂浜を意味する）を、旗竿側からの黒い三角形はアフリカ系黒人を表す国旗となっています。

コートジボアール共和国（テコンドー男子八十キロ級）

アフリカの西海岸に位置する国で、フランス語で象牙海岸を意味しています。ガーナとリベリアに挟まれ、1960年にフランスから独立しました。国旗もフランス三色旗にならって、旗竿からオレンジ・白・緑となっています（逆さにするとアイルランドの国旗になる）。この国はチョコレートの原料であるカカオ生産が世界一の国です。

フィジー諸島共和国（ラグビー男子）

太平洋南部に位置する島国。1970年に英国から独

立。国旗はブルー地にカントン部分には、ユニオンフラッグが入っています。

また、英国領時代の国旗盾紋章は、英国の国章であるライオンとセントジョージクルスだけを残し、サトウキビ、ココナッツやバナナ等の特産物と、平和のシンボル白いハトを入れた国章を、国旗に使用しています。

ヨルダン・ハシミテ王国（テコンドー男子六十八キロ級）

アラビア半島北西部に位置する、イスラエルと国交のある、穏健路線を取っている国家。

国旗は、オスマントルコ支配からの反乱に使用された、反乱旗に基づいています。

上から黒・白・緑の三色旗に、旗竿部分から赤い三角形が伸び、その中央に白い七稜星が配置されています。

コソボ共和国（柔道女子五十二キロ級）

国旗については、まんじ142号の100ページにも述べましたので省略いたしますが、ケルメンデイ選手の、金メダル獲得は、同国の国情を考えると、エールを送りたい心境となりました。

プエルトリコ（テニス女子シングルス）

西インド諸島の、プエルトリコ島の米国自由自治州。米国の51番目の州を目指しています。（テニスはプロテニスプレーヤーも参加可能であり、男子では日本の錦織選手が、男子テニスで、銅メダルを獲得しました。）

旗はキューバ国旗と形は全く同じですが、赤と青の色を逆にしただけの国旗となっています。（赤白のボーダーに旗竿側から、白い星を持った青い三角が伸びています。）

シンガポール共和国（男子100mバタフライ）

マレー半島南端の小さな島国でありながら、アジアを代表する加工貿易、金融センター、そして国際的貿易港と発展し続け、アジアでは一人当たりのGDPも日本に次いで第二位となった、みごとな国家です。

国旗は、インドネシアと同じ上が赤で下が白のボーダー二色旗でしたが、赤の旗竿側に三日月と五つの五稜星を配置しています。しかし、シンガポールの三日月も星も、イスラムとは無関係で、五つの星は、民主・平和・進歩・正義・平等を表し、三日月はその理念を支えるものと云われています。

タジキスタン共和国（男子ハンマー投げ）

1991年ソ連崩壊後、独立しました。

国土は、世界の屋根とも呼ばれ、その九割が平均高度3千メートル級の山岳地帯で、綿花栽培に依存する最貧国の一つと云われています。

国旗はイラン（ペルシャ）との伝統色を使用し、赤（1）・白（2）・緑（1）の、横三色旗で、白の部分中央に王冠のタジクの語源となったタージ（冠帽の意味）と、幸運と人徳を呼ぶと云われる七つ星が、黄色で描かれています。

以上、リオ五輪で金メダルを獲得した国家（日本を除く57カ国）と国旗の紹介を致して参りました。

しかしながら、金メダルは取れなかったが、銀メダルはとれた国（14か国）、金、銀は取れなかったが、何とか銅メダルには届いた国（14か国）、頑張ったが全く取れなかった国（36カ国）もございました。

パラリンピックに於ける、日本の金メダル「ゼロ」については、語るまでもなく、スポーツの領域に留まらず、官民あげた障害者に対する、メンタリティーの改革こそ、重要な事だと痛感しております。

スポーツの祭典では、素直に涙をながし喜ぶ姿、また悔しがる姿や、敗れても相手を称える姿に観客はエールを送り、称えるのでした。二年後にはお隣の韓国で、冬季オリンピックが、4年後には、東京オリンピックが開催される予定となっています。

今回、私が「何故金メダルの多い順から国旗を紹介したのだろう」と、考えてみますと、当初は深い意味は持ちませんでした。

しかし書き終えた今、感じている事は、大国と小国：強国と弱い国：富める国と貧しい国：そして栄枯盛衰の歴史、大国で豊かな国が、スポーツも強国と成っている事が、浮彫となってまいりました。

反面「メダルの数を大国同士が競う事が良いのだろうか」「試合の中身、マナーにも送るメダルがあっても良いのではないか」その事の方がオリンピック精神にマッチしているのではないかと、思う様にもなりました。

最後に、1908年のロンドン大会で、セントポール寺院に集まった選手達を前に主教が述べた言葉、「オリンピックで重要な事は勝負を競う事ではなく、参加する事」、また「オリンピックの理想は人間を作る事、世界各国の人間と付き合い、知る事、そして世界平和の意味を理解する事」と述べたそうです。その場にいあわせた、クーベルタン氏は、感動し、英国主催の晩さん会で主教の言葉を引用し、「参加する事に意義がある」と云ったので、クーベルタン氏の言葉として、現在も残っている訳です。

東京五輪に向けて、私達は、参加する選手達の努力を応援し、また、世界各国の歴史、状況を理解し、メダルに拘らず、分け隔てなく応援する事が、「平和を愛し寛容な精神を持つ」日本人の真の姿をアピール出来る、最高の大会になると信じています。

国旗掲揚の基本ルールも当然あります。

○国旗は国家国民を象徴するシンボルですから、汚ごしたり、破損したものを使ってはいけない。

○国旗を旗竿に掲載する場合は、常に旗竿の最上部に接して掲げる事。三脚などを使用する場合は、国旗を地面に付けてはならない。

○日本国旗と外国国旗を同時に掲げる場合は、国旗の大きさや高さも同一でなければならない。

○自国の国旗を掲げる事なく、外国国旗のみを掲げてはいけない。

○一つの旗竿に一つの国旗。大会旗等を一つの旗竿に掲げてはならない。

その他、雨の時の取扱、夜間の取扱、国連旗や大会等で複数の国旗を掲げる際の順序、弔旗の上げ方などの決まりもあります。

中でも、オリンピック等、国連旗を同時に掲げる時は、旗の大きさは国連旗の大きさに全て合わせる事が決まりとなっています。

オリンピック憲章65条には「優勝者の国の国旗は中央の旗竿に掲げて、第二位と第三位の国の国旗はこれに隣接した旗竿に掲げて、その栄光を祝福する」という規則を設けています。旗の順番は、向かって左側が上位なので、二位が左、三位が右側となっています。

この辺で、国旗に関するリオ五輪編をひとまず終了とし、国旗の国際儀礼について、簡単に述べて行きたいと思います。

国旗の国際儀礼（プロトコール）について、「国旗」は、海外からの国賓や閣僚などのＶＩＰを迎える際に礼を失する事の無い様に定められた、一定の取扱ルールがあります。民間企業でも海外から顧客を迎える場合、その国の国旗を入口や会議室のテーブル等に、飾る事もあったと思います。外務省が、編集している諸雑誌によれば、「国旗の取扱いには、十分気をつけるとともに、正しい知識を身につける事」「国旗を間違えない事」等と、イロハのイの字から記載されている手引書があります。更に、革命や、国家元首が変わると国旗も変わる事が良くあるため、国旗の図案も、国旗の取扱いも間違えたりしないように、万が一でも間違ってしまうと、その国に大変失礼にあたるばかりでなく、国際親善や友好のチャンスも台無しとなってしまうこと等、注意深く記載されています。

即ち、国旗はその国そのものであり、取扱を間違えると大問題になる恐れがあるため、取扱プロトコールが作られているのです。

それでは、国際間の儀礼上のプロトコール、基本ルールを少し見てみましょう。

次回の展開は、三戸岡先生からご案内頂いた「柳幸典（現代美術家）のワンダリング・ポジション」（場所：横浜馬車道）の現代アート作品の中に、世界の国旗を題材にした作品があり、作品を見て感じた事から書き始めたいと思います。

つづく。

【参考文献】
今回の執筆では、前回の参考文献に加えて
世界の国情報　出版社　リブロ社。
やさしい国際儀礼　出版社　世界の動き社
国際儀礼に関する十二章　世界の動き社

尚、国際儀礼に関する事柄については、各国の大使を経験なされたS氏にご尽力を頂きました。

（つづく）

性と化粧の物語（七）

鈴木守

第二話　性と歯の化粧（二）

第二節　お歯黒風俗と性（一）

平成の現在、我が国では街を歩いていてもお歯黒を施した女性に出会う事はありません。真っ白な歯が持て囃され、歯の化粧と云えば専ら歯磨きです。

白い歯については、旧約聖書には「ミルクより白い歯」とあり、フィス・デューマの椿姫にも「ミルクのように白い歯」と表現しています。唐の詩人・杜甫は澄んだ眼と白い歯を〝明眸皓歯〟と称して美人の形容として彼の詩の中に詠んでいます。我が国でも杜甫の四字熟語は美人の形容として人口に膾炙しています。

子供の頃の事です。我が家のアルバムの第一頁にお祖母さんの写真が貼ってあったような記憶です。確かお祖母さんは、頬笑みかけるような笑顔で、心持ち開いた口から真っ黒な歯が覗いていたと朧げ乍ら覚えていたような気がします。

祖母は私が小学校に入る前に他界し、又、外孫だった私の印象は淡いものでして、お祖母さんと云えば幻想かも知れませんがアルバムの笑顔でした。しかし、アルバムは小学校六年の年、震災（昭和一九年の東海南海地震）で我が家も倒壊し、その際行方不明になってしまいましたので、今更ら確かめる術もありませんが、子供の頃のイメージがお歯黒の歴史探訪に誘っているような気がしています。

それはそれとして、古今東西、白い歯を美人の要素として来た事は前述の通りです。にも拘らず、歯を黒くする風習が何故生じたのか、そこに格別の興味を覚えましたので、『性と歯の化粧』の主題の一つに『お歯黒化粧と性』を取り上げて考察する事にします。

一項　現代と近代のお歯黒風俗

ここでは平成と昭和を現代、大正と明治を近代として話を進めます。これらの時代は、一九八九年が平成元年、一九二六年が昭和元年、大正と明治は夫々、一九一二年と一八六八年に始まっています。

(1)　平成と昭和のお歯黒事情

祖母のお歯黒については既に触れましたが、子供の頃の古い記憶では思い違いの可能性も否定できませんので、姉と兄に尋ねますと二人とも「お祖母ちゃんはお歯黒をしていた」と答え、兄は「お歯黒の壺を嗅いだら物凄く臭かった」とも云いましたので、祖母のお歯黒は私の幻想でない事が確かめられました。また、小学校の同期会で皆に聞くと、数人の友達が「お祖母ちゃんの歯は黒かった」と証言しました。

その外、九州にも終戦の頃まで歯を染めていた老女二名の消息がありました。一人は宮崎県椎葉地方、他は熊本県阿蘇南方の山地でして、両老女の曽孫が母親から聞き取って、お歯黒の消息を伝えて呉れました。従って、九州南部の九州山地に点在する山村には戦後の頃まで黒歯風習が残存していた事になります。

ポーラ文化研究所研究員だった村沢君は、昭和五四年に秋田在住の老女のお歯黒を取材し、「彼女は18歳で嫁ぎ、結婚の前夜、初めて歯を染め、96歳の今日までお歯黒を保って来た。彼女にお歯黒を実演して貰うと、火鉢の隅に埋めてあったお歯黒壺を温め、アルミ製の薬罐に掬いとり、妻楊子の先に脱脂綿を丸めて付けた筆先を浸し、薬局で買って来たタンニンを筆に付けて染めた」と報告し、「実際にお歯黒をしている最後の人だと思う」と締め括りました。

平成の代に入りますと、生のお歯黒を見る事はありませんが、虚像の世界に残されているのではないかと思い、時代劇映画に登場した女性像を思い浮かべてみました。

曽って、映画『忠臣蔵』で山田五十鈴さんが扮する〝りく女〟の歯は黒く染められ、彼女のお歯黒姿が艶かしくも美しく見えましたので明瞭と覚えています。その後も忠臣蔵は繰り返し繰り返し製作られていますが、何故か主演の内蔵介よりも仇役、吉良上野介を演じた人達の印象が残されています。伊藤雄之助、西村晃、石坂浩二の面々です。それはそれとして、山田五十鈴のりく女は再婚しなかったのに、歯は白いままでした。何も忠臣蔵だけではありません。本来歯を染めるべき武家の妻女、市井のお内儀の歯も真っ白です。虚像で構成される映画の世界でも、お歯黒は過去の文化となってしまいました。

一方、歌舞伎の世界ではお歯黒が残されていました。母校立教大学の記念行事（一九九五）で催された『古典

芸能の夕べ』の際、女形の中村芝雀丈（現・中村雀右衛門）を紹介され、お歯黒を尋ねますと、「必要があれば染めます。小道具さんが舞台専門店で買い求めて来ます」と教えてくれました。

テレビでは時代劇ですと、今川義元や公家役の男優の人達は染めますが、女優さん達はお歯黒を嫌うようです。いつ頃の事だったか忘れましたが、NHKの『お江戸でござる』で女優さんが歯を染めているのを久し振りで見ました。矢張り時代考証と銘打った作品では、史実に忠実であって欲しいと思います。

芸能の世界は別として、昭和末期の頃までは、民俗風習として儀式化されたお歯黒を見る事が出来ました。前出の村沢博人氏に依りますと、「南西諸島のトカラ列島では成女式に際して、鉄漿付けの祝いを行い、長野県松本市界隈では結婚式の時〝ハネツケ〟の儀が執り行われていた」そうです。ハネツケは鉄漿付けの訛った言葉です。その時から20年近くの歳月が経過しました。その後の消息を調べていませんので、時代の流れに押し流されているかも知れません。

(2) 大正と明治のお歯黒事情

大正と明治の時代には、外人が見たお歯黒の記録があります。大阪の一流料亭に招かれた一外交官が、黒く歯染めした芸妓の様子に吃驚。鹿鳴館で出会う政府高官の令夫人達の様にならない洋風の化粧に再度、吃驚。彼は驚きの連続を書き残していました。

又、大森貝塚の発見者エドワード・モースは『日本その日その日、一九一七』に彼の使用人の歯染め姿のスケッチ共々、お歯黒化粧の委細を紹介していました。

明治維新を迎えますと、その初頭元年に、公家に対し、明治三年には華族に対し、太政官名で歯染めと眉落としの化粧を禁止しました。その理由は「上古にはなく諸外国にもない野蛮な風習」と云う事でした。文明開化を標榜した明治政府らしい施策ですが、化粧史の立場からみますと、政治的圧力が化粧風習を左右した典形的な事例と云えます。この禁止令は女性は該当しませんでしたが、昭憲皇后が明治六年の女の節句の日に率先して止められましたので、人民もこれに倣った為、女性の場合も衰退の道を辿りました。

明治大正時代における国内のお歯黒風習に関する情報は少く、寧しろ海外の黒歯風習に関心が向けられていたような印象です。

明治時代の生物学者であり、民俗学大家だった南方熊楠（一八六七～一九四一）は『南方随筆』に「森三渓らがお歯黒は東南アジアの檳榔を噛む風習に由来すると主張しており、パキスタンやカンボジアには初潮をみると歯を染める風習がある。檳榔を噛む風習のないウズベキスタンやロシアの妻女が歯を黒く染め、南米やマダガスカルの或る種族は装飾目的、或は歯の保健の為に歯を染める」と述べていました。

その外、「ベトナム、タイ、スマトラ、エチオピアにも歯を黒く染める風習がある事を記した書やパミール高原の国タジキスタンの女性はタンニンと鉄をワックス状にして歯に塗っていたが、西欧化が進むにつれて消滅した」と云われています。

(3) 現近代のお歯黒とその要約

明治以降現在までのお歯黒風習について要約します。明治以降のお歯黒は挽歌を奏でる歴史でした。この歴史は明治初頭にお歯黒禁止令が公布された事に基づきます。

この禁止令によって男性の黒歯は速やかに消滅しました。一方、女性のお歯黒は禁止令の対象外でしたので、明治六年三月三日、女性の節句の日に、昭憲皇后が率先して歯染めを中止された為、女性のお歯黒姿も追い追い減り、大正初期の頃には都下では殆ど影を秘めましたが、山村では昭和初期、山間僻地では戦後の頃まで残っていましたが、昭和末年の頃、秋田在住の老女を最後に〝生のお歯黒風習〟は終焉したと思われます。

生のお歯黒を別にしますと、歌舞伎を中心に芸能の世界では、虚像ではありますが、お歯黒の仕様を維持している事は、中村雀衛門丈の言葉から確実です。

明治時代の我が国の書には、自国のお歯黒情報は少く、専ら海外の黒歯風習に触れていました。先ず、黒歯風習の発祥について述べ、この風習の発祥は東南アジアに見られる檳榔子咀嚼風習に基づくと云う森三渓らの説が紹介されており、お歯黒は東南アジアを中心とした海外諸国で風習としており、我が国に自生した風習でない事を示唆していました。

歯染めの目的については、装飾や歯の保健等がありましたが、東南アジア各地で、娘が初潮をみると歯を染めますので、歯染めが成女の表示となり、日本では結婚の前夜歯を染め始め、結婚式は既婚者の表識としています故、性の風習抜きにお歯黒風習の発展はなかったのではないかと思います。

二項　近世のお歯黒風習

日本の近世は所謂、江戸時代であり、徳川家康が江戸に開府した一六〇三年から十五代徳川慶喜が大政奉還した一八六七年までの時代を云います。江戸時代にお歯黒があったかどうかは今更ら云うまでもありませんが、明治初頭にお歯黒禁止令が公布された事は江戸時代にその風習が繁栄していた事を示す絶好の証拠ではないでしょうか。

(1) お歯黒風習を支えた材と用具

村沢らが纏めた『化粧史文献資料年表』には数多くのお歯黒の資料が収められています故、その中から先ずはお歯黒風習を支えた材と用具から紹介する事にします。

①鉄漿と五倍子：　お歯黒を意味する言葉はいろ〳〵有ります。江戸時代には、お歯黒と云う言葉は公家言葉だったようで、堂上方はフシ水或はヌキ水と呼び、下々の人達は鉄漿付けと呼んでいました〝かね〟の漢字表記は鉄漿、金、鉄、錆鉄等で、〝フシ〟は五倍子、倍子で書き現わし、お歯黒の別名として黒歯、金黒、鉄黒等と読み書きされていました。ヌキの水の由来は不明でした。

お歯黒の染料に用いられる五倍子は、紅葉樹・白蓼の葉に寄生する油虫の一種ヌルデノミミフシが作る耳朶状の虫瘿から採取されます。五倍子はタンニンを70～80％含み、黒色塗料として使用されます。

十返舎一九（一七六五～一八三一）の『東海道中膝栗毛』に「川端のふしの子は雪を欺き」と京都寺町通竹屋町にある店の五倍子を雪に喩えていました。五倍子は黒色塗料ですが現物は白色です。タンニンは酸化されますと、分子が幾つか重合して黒い色素になり、これがお歯黒の本体です。

お歯黒は鉄漿水作りから始まります。先ず鉄漿壷に屑鉄とか古釘のような鉄片、並びに古米、粥、とぎ汁等を混ぜ込んで水に浸します。この鉄漿壷を夏は三日、冬は七日間ほど暖所に保管します。この間に空中に飛散している酵母菌が鉄漿水中に落下し、澱粉を酢酸発酵させ糖分や酢酸まで分解します。従って鉄漿水が黄赤色を帯び、微かに甘味を感ずれば、使用可能だと云われています。川柳「仲直りお歯黒壷へ拾い込み」は鉄漿に古鉄を使う事を知らなければ理解し難い句です。

所で、鉄漿なしで五倍子だけ塗っていても数年間続ければ黒くなりますが、真っ黒にはなりません。この反応に鉄を加えますと、歯を速やかに染め、真っ黒にする事が出来ます。斯様に鉄イオンを触媒にして、反応を促進させる方法を鉄媒染と呼んでいます。従って、お歯黒は化学的に云うと、酢酸発酵と鉄媒染を応用した化粧法と云えます。

鉄漿は鉄漿でも早鉄漿と云う染め方がありました。蜀山人の号を持つ大田南畝（一七四九～一八二三）は「役者は次の演目に出演する為、素早く鉄漿を落とす必要から、松脂を付けてから歯を染め、これを早鉄漿と称していた」と彼の書『金曽木、一八一〇』に書き記していました。

②歯染めの七つ道具：　歌川国貞（一八〇七～六四）描く『化粧三美人』の一人、歯を染めようとしている美形の脇に歯染めの七つ道具があしらわれていますので、七つ道具とお歯黒を施す所作を紹介します。

最初に、歯染めする女性の前に渡し金を載せた耳盥を

置きます。渡し金の上に漱子（盃）、右側に嗽茶碗と歯黒筆、五倍子箱を置き、鉄漿水を鉄漿水壷から鉄漿続へ移し、漱子に必要なだけ鉄漿水を注ぎます。面倒なようですが、飲兵衛が面倒がらずに、酒を一升瓶から徳利へ移し、次いで盃に注ぐのと同じです。これで歯染めの準備は整いました。

次に、五倍子を指で歯に擦り付け、手鏡を見乍ら鉄漿水を含ませた歯黒筆で塗り、嗽い水で口を注ぎ耳盥の中に吐き出します。この一連の作業を数回繰り返して歯染めは完了しますが、口注ぎを十分に行う事が肝心です。

口注ぎを十分に行うのは、口の中が黒く染まったり、タンニンの渋みや鉄漿水の酸味を除く外、鉄漿付けでかぶれる事がありますが故、その予防の役割もあります。「鉄漿親は腫れるものさと落着かせ」と川柳にも詠まれています。この句を裏の意味に解釈して喜んでいる好き者もいますが、真っ直ぐに読めば「鉄漿付けで炎症が生じた」と云う事です。

一方、『奥田松柏軒、女用訓蒙図彙、一六八七』には「粗い五倍子は金漿に艶がなく歯の間に挟まる。新しい五倍子には甘草を混ぜて使え」と注意事項を与えていました。甘草には抗炎症剤として知られているグリチルリチンが含まれています。

(2)　歯染めの心得

①歯を綺麗に染めるには：　『佐山半七丸、都風俗化粧伝、一八一三』に「鉄漿を付ける時は、消し炭で静かに歯を擦り、よく磨いて下地のお歯黒や歯の間の滓を取り去った後に鉄漿水を付ければ、よく付いて光沢が出る。更に艶を出したければ、お歯黒の上に紅を塗れば色艶がよくなる。歯を染める時、唇に泌みる場合は髪油を付けておけば泌みる事はない」と教えを垂れています。

②歯染めの百面相：　『女鏡秘伝書』の注意書きは機智に富んでいるので面白い。その要点を拾い書きします。「朝夕、歯を磨く事が肝要ですが、殿方の前で歯磨きや鉄漿付けをしてはいけません。歯の養生は夜恐ろしげな所で行えば、鬼神でさえも怖れる事でしょう。お歯黒をしない時は白いのが肝心で、よく磨く事です。お歯黒の跡は群らがない黒い歯を男達は好んでいます。所々白いのは帳消しです」と認めていました。歯磨や歯染めの百面相は百年の恋も覚めてしまうに違いありません。川柳には「お歯黒は食いつくように鏡を見」とか「お歯黒は怪訝な方へ向いて付け」と百面相を詠み、挙句「鉄漿付けの顔を眺めて叱られる」と云う始末になりました。

(3)　歯染めと菠薐草

我が国最初の図解百科事典『寺島良安、和漢三才図絵、一七一三』の鉄漿の項に、「俗に言い伝えられている事だ

が」と断わりを入れて「歯を染める日に菠薐草を食べてはいけないとあり、川柳でも「七軒で菠薐草の事を云い」と詠まれていますので、歯染めと菠薐草の禁忌は江戸市民の間で流布した心得だったと思われます。尚、金漿水を隣近所で分けて貰うのが仕来りで、恐らく結婚の御披露目を兼ねていたと思考されます。この書の菠薐草の項に「歯を染めてから暫くして菠薐草を食し、吐血致死した例がある」との記載もありました。

この禁忌について、前出の村沢氏は「菠薐草は蓚酸を多く含んでいる為、お歯黒となるタンニン酸第二鉄が還元分解し、水に溶ける第一鉄イオンとなり、黒が消えてしまう事による」と考察していました。しかし、村沢氏も含め、菠薐草併用による毒性発現に関して考察した書は見当らなかったので、愚見を被歴する事にします。

歯染めでは、歯の表面にタンニン酸第二鉄の黒い塗膜を作ってお歯黒としていますが、その上に、新たに歯染めを施して菠薐草を食しますと、タンニン酸第二鉄と酢酸第一鉄の反応系に蓚酸が加わります。この反応系で重要なのは、鉄イオンの挙動です。鉄属原子における原子価の変換は極めて容易である為、触媒的性質の強い事は化学の情識です。従って、この反応系では鉄イオンが触媒となって蓚酸の脱炭酸を促し、引き続き脱水反応が誘導され、一酸化炭素が発生するメカニズムが考えられます。一酸化炭素中毒と云われているように、一酸化炭素は毒性ガスの代表的な物質です。

(4) お歯黒を愛用した人々

江戸時代のお歯黒風習の中心は、庶民の内儀さん達でした。ここでは彼女達の歯染めに対する拘泥振りを川柳を介して紹介し、次いで内儀さん達以外の人達のお歯黒風習について触れておきます。

①川柳に詠まれたお歯黒：　前出の『都風俗化粧伝』には、お歯黒を綺麗に染める為の呪いのようなテクニックが幾つか紹介されていました。例を挙げますと、煙草の吸い殻とか燗冷しの酒等を鉄漿壷に入れるのです。そんな様子を詠んだ川柳に、「女房は一口吸って鉄漿に入れ」や「これ程に飲んだら酔うと鉄漿に入れ」と詠まれていました。

極めつけの呪いは褌なしの殿方に鉄漿壷を跨いで貰う方法です。その様は「酒、塩や飴でいけぬとへのこ出し」や「こうかえと、お歯黒壷にぶらり出し」と詠んでいました。へのこは男性のシンボルですから、江戸の女性達は綺麗に染めるのに多大な努力を払っていた訳で、お歯黒も美の演出だったとの思いを強くした次第です。

初鉄漿は結婚の前日、当人が自ら隣近所を回って分けて貰うのが慣例だった事は既に述べました。川柳の「お歯黒をくんなと顔隠し」は娘心を見事に表現しており、

目に見えるような句です。又、「鉄漿の礼出し俯けて言葉なし」も娘さんの羞恥をよみ取れます。

初々しい新妻姿をみて「よき娘惜しい事には歯は黒し」や「お歯黒を付けて娘は野暮になり」は野郎どもがやっかみ半分の負け惜しみを川柳にしたと思われます。「七軒のほかは下沙汰なその当座」は髪床談義か井戸端会議で猥談のヒロインにされている情景が目に浮かびます。

②既婚者以外のお歯黒風習：　既婚女性以外の人達のお歯黒風習に触れる事にします。

『守貞漫稿』には、「民間人の場合、京阪では20歳の時、江戸では20歳未満で嫁ぐ以前に歯を染める事が多い」と成女表示の風習に触れており、「京阪の未婚の女性は21歳から22歳になると歯を黒くした」とあるから、恐らく、売れ残りのオールド・ミスと云われたくなかったのに相違ありません。

後家や尼になりますと、鉄漿を落として白歯に戻りますが、再婚の意志のない女性は鉄漿を付けるのが普通でした。

武家社会では、侍達は歯を染めませんでしたが、上級武士の家庭では通常、娘が9歳になりますと、鉄漿付け初めの儀式を行う風習がありました。武家の妻女はお歯黒を施し、武家の侍女達は夫がなくても、十六、七になりますと歯を染めたそうです。

③廓の女達：　岡場所にも鉄漿付けの風習がありましたので、江戸と京阪の廓の様子眺めてみますと、京阪の遊女や芸者は歯を染めていました。一方、江戸では吉原の傾城や遊女は染めましたが、芸者は年をとっても染めずに過ごしました。深川や品川等の岡場所の遊女、芸者は年増になっても白歯で過ごしたと云われています。

④男性のお歯黒：　武士が白歯だった事は既でに述べた通りですが、公家のお歯黒は現代人の常識ではないでしょうか。公家方のお歯黒は、堂上人が地下人と差別する目的で歯を染め始めたと云われていますので、公家の黒歯は階級標識を目的とした化粧と見做されます。

公家以外の男性のお歯黒姿を『井原西鶴、好色一代女、第三巻、一六八六』に二点見る事が出来ました。一点は「俺様が男じゃと云い様、鉄漿付けたる口を開いて女に喰らいつきし」。他は「歯黒付けたる口は漢竹の楊子使いて祈れど…」とお歯黒と鉄漿の両者が登場しました。当時、身分高い人はお歯黒を鉄漿と称していたと云われていますので、前段の俺様は身分の高い俺様です。後段の祈りは山伏の調伏を記していました。従って、江戸時代には、公家の人達の外に、山伏とか正体不明の身分ある人達がお歯黒の愛用者だったようです。尚、公家の子息が13歳になりますと、初染めの儀が執り行われ、成人を迎えま

した。

その他に井原西鶴は『好色一代女、三巻、一六八六』に男性のお歯黒一点を著わしていました。一点は「俺様が男じゃと云い様、鉄漿付けたる口を開いて女に食らいつくし」と述べ、他の一点は「歯黒付けたる口は漢竹の楊子使いて祈れど…」と記していました。この当時、身分高い人はお歯黒を鉄漿と称していましたので、前段の俺様は身分高き俺様でした。後段の祈りと云うのは、山伏が調伏の祈りを唱えていました。

(5) 落穂拾い

江戸時代のお歯黒風習を取扱った資料を探しますと可成り豊富に入手出来ました。因みに前出の『化粧史史料年表』だけでも83点の資料が紹介されていました。従って、この項では、これまでに紹介しなかった資料の中から落穂拾いする事にします。

①江戸期お歯黒化粧の流れ：江戸時代の黒歯風習の中心は、市井の内儀さん連中でした。彼女達のお歯黒は既婚者表示の化粧に位置付けられています。では既婚者表示のお歯黒風習がいつ頃成立したかを知る目的で、江戸時代に執筆されたお歯黒の記事に目を通しますと、一六二四年に登場した『きのふはけふの物語』が最も古い記録でした。この物語には離縁話を持ち出された女房が半ば諦め顔で登場し、(『是非に及ばぬ。さ程に思し召さば(実家に)帰らふ』と嫁入りの時着た衣裳を着る儘に髪に油を付けて歯を染め出立ければ、男つくづくと見て、もとの〝あらばち(未婚女性の意)〟の姿也」と著わされていましたので、既婚女性のお歯黒姿は江戸期初頭の巷間で眺める事が出来た事を示唆していました。

又、江戸期お歯黒用塗料の初登場は一六六〇年の『女諸礼集』で〝ふし壷〟の名が記載されていました。所がポーラ文化研究所刊の雑誌『is』に連載された『風景劇場』に宮本武蔵(?～一六四五)が対決した「吉岡道場の始祖・憲法が布地強化を目的に檳榔子を鉄漿染で黒く染めた」と海野弘が執筆していましたので、江戸開府当時には歯染めにも檳榔子を使用していた可能性がありました。時を経て一六三〇年代の頃になりますと、鎖国となり檳榔子が入手難になった為、吉岡染めにはヤマモモの樹皮から得たタンニンを使用したと海野氏は述べていました。

ヤマモモのタンニンを歯染めに用いたか否かは不明ですが、佐藤成祐に依ると『中陵漫録、一八〇〇～二六頃』に(奥州白河の村民は、春櫛の木の新芽を採り、青汁を絞りトロ火で煎じて軟膏のようにして木の葉に包み日干しにしました。時を経て硬くなると包みを破り、鉄漿に入れて五倍子の代薬とし、村人は是れを鉄と云い、市中に売りに出る」と櫛のお歯黒を紹介していました。江戸

時代の歯染め染料の主役は五倍子でしたが、櫛のようなタンニン含有の植物材が歯染め染料として用いられた可能性も考えられます。

五倍子や櫛の外にも、茶葉や柿渋のようなタンニン含有の材料は数多く知られています故、各土地特有の材を用いて歯染めに勤しんだケースもあろうかと思いますが、江戸期のお歯黒は初期の武家文化の時代を経て、元禄や化政文化の時代は市井の女性達が歯染めに励んだ為、盛期を迎えました。しかし、明治時代以降、近・現代のお歯黒は既に述べましたように挽歌を奏でる時代となりました。

②歯を黒く染める理由：本節の冒頭に、「洋の東西を問わず黒い歯より白い歯を賞美している」事を述べましたが、我が国では水戸黄門(一六二九～一七〇〇)に至っては、『西山公随筆』に「歯を染む事は如何なる故とも弁へ難し。貴賤を分たん為か、婦女を分たん為か」と悲憤慷慨し、今風に云えば人間の差別化を激しく非難していました。

他方、黒く染めた歯を貞節の証と誉めそやす文章も幾つかの書で見受ける事が出来ました。新井白蛾は『牛馬問、一七五六』にて「女の歯を染むる事は必ず婚礼定りての事也。黒色は変ざる故、夫婦の間も変るまじの義也」と説いています。

又、加藤美紀の『南窓随筆、一七七六～八〇』では、「歯を染めるのは何の為か」の問いを発し、続いて「物の色は白を基本とし、白色は何にても好きに染められる物也。黒く染めた色は再び染め変えられぬ也。女の未だ嫁せざるは白色の如し。嫁して誰々が妻と定まる時は黒く染める色の如く、再び外の色に変えられぬ也。歯を染むるは女の操を示して染めたるものなれば、女たる者知らずんばあるべからず。それに依りて故実は、親の家にいて未だ男の定まらざる間には歯も染めぬ事也」と教示していました。

③浮世絵とお歯黒：喜多川歌麿(一七五三～一八〇六)の画集、渋井清監の『浮世絵シリーズ、歌麿、平凡社、一九七五』の頁をめくりますと、口を僅かに開いた美女達の唇の陰は白かったり黒かったりでした。白は小町娘、黒は若内儀に描き分けているのに気付きました。その中の一つに〝かねつけ(紅つけ)〟と題名をつけた作品がありました。この絵には、立膝をつき赤い蹴出から脛を覗かせた、なまめかしい若内儀の化粧姿が見られました。この絵の詳細を書付けておきますと、若内儀の正面に渡し金を載せた耳盥、渡し金の上に漿子、右側に穂先の乱れた筆を乗せた啉い茶碗と五倍子箱が置かれ、左手に手鏡を持って歯染めの七つ道具が揃っています。所が右手には口に向けて穂先が揃った筆を持っていました。

この作品の解説文に「口が少さくて、紅筆で化粧しているのか、鉄漿をつけているのか分らない。道具は鉄漿のようだ」と記述されていました。私がこの絵を見て咄嗟に閃いたのは佐山半七丸の言葉でした。彼は前出の『都風俗化粧伝』に「お歯黒に艶を出したければ、お歯黒の上に紅を塗れば色艶がよくなる」と宣っていました。この絵では、黒く乱れた筆と歯染めの七つ道具が揃っているのは鉄漿付けが終った所であり、右手に穂先が乱れていない筆を持って口先へ運んでいるのは、黒歯の艶出しの為の紅付けの場面であると推察しました。従って、私ならばこの絵に〝黒歯艶出し〟と銘を打つでしょう。

④性とお歯黒：「性とお歯黒。今更ら何だ」と思いますが、第三節の主題ですから触れずに過ごす訳には参りません。

性とお歯黒の関係を手っ取り早く知るには川柳に限ります。前出の川柳「お歯黒をくんなと顔隠し」とか「鉄漿の礼、差しうつむいて言葉なし」は結婚した娘さんの羞恥心が性との関係を如実に物語っていますし、「七軒の外は下沙汰なその当座」は七軒がお歯黒の代名詞となって下ネタに花を咲かせています。長屋夫婦の下沙汰話ならば、やがて二人が下沙汰行為を始めるのではないかと勘繰ったりしてしまいます。そんなたわいない事を想像し乍ら、江戸時代のお歯黒を定義しますと、「結婚と云う通過儀礼を媒体にした既婚者表示の化粧」に位置付ける事が出来ます。

既婚者表示の化粧とは別に、当時の高級武士階級の息女は、9歳にして初鉄漿の儀を執り行ない成人となりました。9歳の成人に疑義を抱きますが、千姫の婚儀は6歳だったと云われれば、9歳の成人を認めざるを得ません。従って、江戸時代には女性の場合、9歳にして成人標識の化粧・お歯黒を施したと結論するしかありません。

参考文献

鈴木守、化粧品のルーツを訪ねて（一）
まんじ、一〇七号、二〇〇八

村沢博人、津田紀代、化粧史文献資料年表、
ポーラ文化研究所、一九七九

芳賀幸四郎、年表式日本史小事典、文英社、
一九八八

著者不詳、きのふはけふの物語、一六二四

著者不詳、女鏡秘伝書、一六五〇

著者不詳、女諸礼集、一六六〇

菊地丈伯、女重宝記、一六九二

寺島良安、和漢三才図絵、一七一三

佐山半七丸、都風俗化粧伝、一八一三

喜多川守貞、守貞漫稿、一八三七～五三

髙山紀斎、鉄漿論、一八八一

森三渓、江戸と東京、一八九八

石井研堂、増訂・明治事物起原、一九〇八

アーネスト・サトウ、一外交官が見た
明治維新、一九二一

村沢博人、美人進化論、東京書籍、一九八七

橋本澄子、高橋雅夫、浮世絵に見る
江戸の暮らし、河出書房新社、一九八八

村沢博人、顔の文化誌、東書選書、一九九二

鈴木守、コスメトロジー入門、
化粧品の基礎知識、幸書房、一九九三

渋井清監修、太陽浮世絵シリーズ・歌麿、
平凡社、一九九四

下山引、川柳のエロティシズム。新潮選書、
一九九五

大阪城天守閣編集・戦国の女たち
―それぞれの人生―、一九九五

渡辺信一郎、江戸の化粧・川柳で知る
女の文化、平凡社、二〇〇二

（次号に続く）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額一、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇一七〇―〇―六四五九二一

加入者名　まんじ

内田国の境物語

横山正義

一、天下の境関が原

日本史上、天下の分け目の戦いのひとつに、関が原の戦いがあります。東軍の総大将五大老筆頭、徳川家康と西軍の総大将五奉行筆頭石田三成との戦いです。

石田三成は慶長五年（一六〇〇）旧暦九月十五日、大垣城を出て、関が原で徳川家康率いる東軍と戦い、小早川秀秋の内応で敗走する。

三成大名　一〇九家、十九万四千石
家康大名　九十家、二百五十万石

この戦いで、先陣を切ったのは井伊直政でした。

関が原での井伊直政の活躍は、島津義弘の五百人の兵による、中央突破を追撃し、先陣を切ったことにあるのです。直政は島津義弘の甥、豊久を討ち取ったが、島津が退路にふせって残兵に銃撃され、二箇所を負傷しました。そのとき直政は二百余の首級を家来に運ばせ、家康の本営に引き上げました。

このとき家康は直政に傷に薬を塗り、労をねぎらったと伝えられています。

石田三成、身の丈一五六センチ虚弱体系であったという。

二、関が原の戦いの時代

豊臣秀吉嫡男豊臣秀次文禄四年（一五九五）自殺。豊臣秀吉慶長三年（一五九八）死亡。豊臣秀頼六歳。豊臣政権はまことに、頼りない状態にありました。

石田三成の評価は時代によって、変化してまいりました。

江戸時代は家康信奉者による、石田三成悪者説。

明治時代、渡辺世祐氏『稿本　石田三成』では

「多年奸（かん）と罵（ののし）られ、邪と謗（そし）られたる石田三成の伝を草して、ここに大方諸賢の劉覧（りゅうらん、広く見る）を辱うとする。」

石田三成は秀吉の恩を忘れなかった「忠義の臣」と捕らえられています。

桑田忠親氏はその著で次のように述べておられます。

「豊臣家防衛するといった大義名分が三成にあったには相違ないが、単に、大義名分といった正義観念のために戦ったのでもない。やはり、おのれを知る人、つまり、太閤秀吉にたいして、その好意と恩恵にこたえるために、精根をつくしてことにあたり、みえも外聞も、恥辱も眼中にいれず、徳川家康という大敵にむかって体あたりしていったのだ。」

『近江が産んだ知将石田三成』の著者大田浩司氏説。

「石田三成は戦国という世がもっていた社会構造を打破し、その上に新たな政治・経済システムを構築した政治家として評価したい。」

戦国時代、戦乱の世が続けば、庶民は建物の破壊、食料の略奪、婦女暴行など破滅の生活を強いられます。

徳川の世が二百七十年続き、文化が育まれ、一般庶民にとって、平和な時代が続きました。

石田三成が自らを犠牲にして、徳川家康にたいし、不満武士を関が原の戦いで一掃されたことが、江戸時代という、長期に天下泰平の世をもたらしたと、考えられないだろうか。

庶民の生活を一番理解し、平和を願う石田三成は徳川家康の政治経験からの政治力、これを高く評価していたのではなかろうか。

三、石田三成の家族

敗走した石田三成の残された家族の安否はどうなったのか。

一女　豊後安岐城主熊谷直盛の室。
二女　尾張犬山城主石川定清の室。
三女辰子　豊臣家の養女、津軽信牧の室、関ヶ原役後、側室大館御前と称す。
四女　阿波藩士箕浦平左衛門の室等はすでに嫁していました。

取り残されたのが、長男重家、隼人正、次男八郎と五女妙（たえ）姫でした。

四、城からの逃亡

旧暦九月十七日

「小早川秀秋を将とし、井伊直政が続く一万五千人の兵が左和山城を包囲した」

「徳川家康は左和山の南正法寺山に陣をおく」

「迎え撃つ石田勢は三成の父・正継を先頭に二千八百余人の布陣であった」

「関が原で石田三成公は負けた、伊吹山山中に逃げ込み、

母の在所古橋村を訪ねたが、最後は捕らえられた」
「城が攻められる」
「子供は逃げよ」
「四女までは嫁している」
「重家、八郎そしてたえ姫はまだ七歳不憫だ、そんなことは言っていられない、皆で逃げよ」
母は悲痛な叫びをあげた。
母は大泣きして、別れを悲しんだ。
妙（たえ）姫は、事態は判らぬが母と泣いた。
祖父の正継、伯父の正澄涙をこぼして、別れを惜しんだ。
家重、八郎、たえ姫、家人出来蔵、三蔵ほか二人の親戚縁者計七人。
うねりの無くなった晩秋の夜空に、湖北に輝く、生死の神・北斗七星に祈りをこめ、七人にしたのです。
「武士を捨てよう、刀など武具は全て捨て、農夫になろう」
七人は城を逃げ出し、陸地では石田狩にあい殺害されることを怖れ、ほとぼりのさめるまで、勝手知った琵琶湖の古びた屋形船に逃げこみました。
ところどころに廃船が捨てられていました。そのなかのひとつです。
それは葦に囲まれて隠れるには絶好の場所だからです。
旧暦九月十八日
左和山城は小早川秀明、井伊直政等により攻められ、石田三成一党の城は陥、父正継、兄正澄自決。三成室は女郎谷に身を投げたという。
後に佐和山城は井伊直政によって、廃城となり、新たに移築再建され、彦根城となる。
翌日、「祖父正継、伯父正澄、母が自決した」と下僕より、廃船に連絡を受ける。
湖面の東方、石田村の方から、何事も無く、あいかわらず日が昇る、湖面がまぶしい。
旧暦九月二十二日に石田三成は越前との境付近古橋村で捕縛されました。
旧暦九月二十三日大津で石田三成は家康と対面後、大阪・堺を引き回されました。

五、石田三成死亡の知らせ

船の中で、「旧暦十月一日に京の六条河原で、父三成公が殺害された」と連絡を受ける。最後の言葉は敵方の差し出した柿に、「いらぬ」と答えた。それは柿に無き主君秀吉、父正継、兄正澄等の人魂が籠るからです。
「あの世で太閤秀吉に会うのが、楽しみだ」
石田三成、辞世の句
「筑摩江や芦間に灯すかがり火とともに消えゆくわが身なりけり」
「石田村の親戚縁者は石田狩にあい、全員殺害されたと

のことです。」
下僕から連絡があった。
石田三成従四位下治部少輔・豊臣氏奉行近江佐和山城主三十万石家紋寄り九曜　旗印大一台大万大吉　慶長五年十月一日京六条川原にて絞首刑となる。享年四十一歳。

六、敗道路

十月とは言え、旧暦の十月は現在では十一月比数山おろしの風は冷たい。
琵琶湖西岸を南に下り、葦の茂みの間をひっそりと、大同河を登り、伊庭内湖にはいり上陸し、慈恩寺の軒下で泊まった。
中仙道を下り、重家、八郎、妙（たえ）姫そして家人は出来蔵、三蔵を含め四人計七人で夜の帳が降りると、夜陰を、屋形船で逃げ、草津についた。
「大勢で、逃げるのは危険だ」
重家
「私は長男なので、西に向かい、大阪城で秀頼公にお目にかかり、敗戦のお詫びをしたい」
八郎
「私は出来蔵、三蔵と兄者のお供をする」
家人二人と妙（たえ）姫
「戦いの残党がまだ街道にいる、疑われないためにも、女子と農夫の服装が良い」
「遠江に私達と先祖を同じくする、栗田氏を改姓した栗田氏が住み、石田と同じ、青蓮院の荘園であった所があると言う、八幡宮を信奉するのも同じだ。事情を話せば匿って、お力添えを頂けるのではないか、めざそう」
「わが石田家はもともと藤原家を祖としているが、栗田家は先祖に藤原家から養子をとっているという」
「私たちは東海道を東に向かおう」
草津で二手に別れました。
重家
長男・隼人正、関が原役の時に大阪城の秀頼に伺候、敗戦後に京都妙心寺寿聖院に入り済院宗享禅師として貞享三年閏三月八日死去。
八郎
次男八郎右衛門　佐和山落城後に家人の出来蔵、三蔵の両名に守られて備中国小田郡吉田村に帰農　庄屋相勤石井氏初代。
四女
妙姫は家人と伴に、東海道を東に向かい、遠江国城飼郡いにしえの鹿城（からこ）卿平尾についた。
そこは粟田を栗田に改め、栗田姓を名乗る栗田吉勝が統治していました。
栗田氏は高天神の戦いで今川方として、徳川家康と戦い、敗軍の将でしたが、統治能力を評価されて、内田の

地を統治していたのでした。

栗田吉勝はたえ姫一行を迎え、立場を良く理解し、鹿城卿はすでに内田と称していたが、平尾村内の枯木ヶ谷「慈恩寺」を住居として認めたのでした。

そして中国唐代の「慈恩寺」の古事、高宋が母文徳皇后の慈恩に報いるために創建したのに由来する寺です。

妙（たえ）姫が自決した母への慈恩を偲ぶ、寺の名前でした。

七、勝者井伊直政の善政

井伊直政は左和山城戦、篭城戦を含む、関ヶ原の合戦で先陣を切ったのが評価され、後の論功行賞により、井伊直政に左和山城が与えられ、慶長六年（一六〇一）正月、直政は上野国高崎城より左和山城に入りました。直政は左和山城を廃城として、新たに彦根城を創建し城主となりました。

直政は関ヶ原の合戦で受けた鉄砲傷が悪化して、翌年死亡しました。

直政は平成二十九年度ＮＨＫ大河ドラマ女城主直虎に育てられ、井伊谷新野で育つ。直虎の父は井伊家出の井伊直盛、母は新野氏出の祐椿尼でした。

新野氏は西暦一二二一年の承久の乱では新野氏と内田氏は軍事同盟を結びともに戦いました。

井伊直政は（一五六一～一六〇二）は知勇にすぐれた武将だが、行政官としても優秀だった。関が原の戦いのあと、石田三成の旧領を相続することになり、

まずは石田時代の法や慣習を尊重し、さらに「関が原合戦に関することを語るな」と家臣に徹底して命じました。

語れば、三成の悪口になり、三成をひそかに慕っているかもしれない、民間の感情を傷つけることになる。

この態度について、司馬遼太郎は「英国貴族のような気配がある」と評しているのです。

井伊直政は「徳川四天王」と評されていました。

徳川家の信頼を得た井伊家は、大名随一の三十五万石となりました。

井伊家十三代直弼は桜田門外の変で暗殺されました。十六代井伊直愛は昭和から平成に懸け、彦根市長連続九期三十六年勤めました。

天下人となった、その後の徳川家はどうなったのか。

徳川家康は慶長十二（一六〇七）年に駿府城（静岡市）に入城し、二年後、慶長十四（一六〇九）年に十男の徳川頼宣が、駿河・遠江五十万石の大名として入部する。

徳川家康元和二（一六一六）年四月死亡。

徳川頼宣は元和五（一六一九）年七月に紀伊和歌山に五十五万石で転封し、御三家の祖となりました。

八、徳川頼宣の思いやり

同じ平尾村の中に、遠江の領主となり、のちに紀州藩藩主となった徳川頼宣の屋敷があり、時には、巡行のとき、徳川頼宣が立ち寄ることもあったのでしょう。

徳川頼宣は石田三成の娘の話を栗田氏から聞き、あわれみ、紀州に連れて行き、紀州の町医者・佐藤三益の妻とし、頼宣が三十扶持を送ったということです。

紀州屋敷跡と徳川頼宣お手植えの「なごみ」の木といわれる、椰（なぎ）の巨木が現在、平尾八幡宮に残こされ、敵ながら石田三成を思いやった、頼宣の気持が偲ばれます。

そして石田三成一族の一党が数軒、営々として、現在、当地に御繁栄されています。

井伊直政関連系図（おんな城主井伊直虎の生涯、編者　金子堅太郎　洋泉社）

祐椿尼（新野氏）

＝――直虎（井伊城女城主）

井伊直盛　←後見　（直盛、西暦一五六〇年桶狭間合戦で戦死）

直親――直政

『参考文献』

『石田三成とその一族』　白川亨　新人物往来社

『左和山城ガイドブック』編集　彦根市教育委員会・滋賀県教育委員会

『日本古代史事典』　阿部猛　朝倉書店

『新修大津市7』　大津市（一九八四）

（荘園・公領と武士）

《近江国》

伊香立荘

滋賀郡の荘園。現在の滋賀県大津市内

立荘時期は未詳。無動寺領で、長承元年《一一三二》青蓮院行玄が無動寺検校を兼ね、これを契機に青蓮院が本所なったものか。保延元年《一一三五》の記録に荘名が見え鎌倉初期、青蓮院の収集は米六十石。北にあったかつら川との間に鎌倉期を通じて堺相論が展開された。）

『改定近江国坂田郡史』　滋賀県坂田郡教育委員会

（続日本書紀

天平神護元年三月葵巳状、近江国坂田郡人粟田臣乙瀬・真瀬・斐太夫・池守ら四人に朝臣の姓を賜う。

称徳天皇の時、本郡に粟田臣あり。その族繁栄せしか。乙瀬、真瀬、斐太夫、池守の四人同姓にして、在郡せり。何の勲功によりて、朝臣の姓を賜りしか分明ならざれども、同族四人同じ恩恵に浴す。居住の遺蹟、詳ならず。）

『読本石田三成』　監修者　下程勇吉　京都大学教授

著者　長浜市立北郷里小学校　読本石田三成編集委員会

代表　山中信而

発行所　財団法人　石田三成公事蹟顕彰会
（石田三成の先祖は藤原氏で、当地の栗田氏と同じです。石田三成の出生の地の横に氏神八幡神社があります）
『近江が生んだ知将・石田三成』　大田浩司
発行所サンライズ出版株式会社
（石田三成出生の地は比數山門跡・青蓮院の所領であった）
『日本古代政治史研究』　岸　俊男　塙書房
（近江国坂田郡内に粟田臣の存在が確認できる。）
『石田三成子孫、菊川市中内田平尾在住、石田善則氏より』
（口伝によれば先祖は石田三成の息女「妙（たえ）姫という。石田家祖先観法智妙尼。
慈恩寺開山（寛文元年一六六一年）
空印祖心（宝永三年五月二十一日・一七〇六）
空巖清華尼（元禄十二年四月二十八日・一七〇四）
観相了意（明和六年拾月十八日・一七七〇）
淨林森栄尼（安永七年四月二十日・一七七九）
直到無関（寛政六年八月三日・一七九四）
松園妙真尼・松円妙真尼（明和九年三月二十二日・一七七三）
月窓浄心（享保十年拾月六日・一七二六）
無禅心法（寛政十年九月三日・一七九九）
鉄山妙牛尼（文政七年九月二十八日・一八二九）
以上百六十八年）
『国史大辞典』　吉川圭三　吉川弘文館
（＊慈恩寺・滋賀県神崎郡五個荘清水鼻二七二　東海道線能登川駅
正平年間の開創。領主佐々木六角判官氏頼が母菩提のため創立。
＊慈恩寺・三重県亀山にあり、廃寺となり、寺名を変更。
慈恩寺の由来
中国唐代の長安（西安市）に建てられた寺。大慈思寺ともいう。貞観二十二年《六四八》当時皇太子であった高宗が、その母文徳皇后の慈恩に報いるために創建したもの。十余院もある大寺院であったが、貞観十九年にインド・西域の旅から帰って仏典翻訳を始めていた玄奘を迎えて上座（最高の長老）とし、彼のためにさら翻経院を造営した。玄奘の訳経の大事業はほとんどここで行われた。またその弟子の窺基もここに住し、慈音大師と称され、法相宗の祖となった。寺内の大雁塔は玄奘がインドから持ちかえった経像を安置するため永徽三年《六五二》に造られたものであるが、現在は明・清代に修復された七層《六十四メートル》の専塔として残っており、唐代の建築美を残したものとして名高い。）

神（仏）と人間はどんな関係？

鍋屋次郎

ジョン・サマリンはカリフォルニアで大学の神学部を卒業後、キリスト教東洋伝道を志し、昨年日本にやってきた二十八歳の青年である。大学ではキリスト教神学を学ぶ傍ら「ユダヤ教」「イスラエルの歴史」も学んでいた。彼は大学在学中日本語を四年間学んでいるので、日本での読み書きには困っていない。横浜市の北部高級住宅地の聖キリスト教会に伝道師として働いている。住まいは教会の敷地内にある宣教師宿泊施設を借りている。

聖キリスト教会員の中井洋介は、横浜山手の、横浜開港時代から歴史のあるミッションスクールの高校教師をしている。ジョンと洋介は同年ということもあり、伝道師と一般教会員との関係以上にいろいろと互いに教え合っていた。

七月の中旬、日曜日午前十時からの聖日礼拝が終わって、その日の午後は珍しく教会内部の打ち合わせ会は何もなかった。ジョンは洋介に

「洋介、まだ十二時時半だけど僕の話を聞いて欲しいのだが、時間はある？」

と洋介を誘った。何の話か分からないまま、ジョンの部屋に行った。礼拝後の礼拝堂のお掃除が終わったご婦人が

「ジョン先生と中井さん、仲良しでいいわね。じゃ、さようなら」

と言って帰って行った。

洋介が涼しい風の入る窓際に座ると、ジョンは

「日本人の神様について教えてほしい」

と、洋介が日頃全く考えてもいないことが質問された。

「どういうこと？」

「日本人は、神社やお寺によく行くよね。行ってどうするの？」

「神様や仏様を拝みに行くのですよ」
「どうして神社やお寺に拝みにゆくの？神様や仏様を拝むと、拝んだ人に何かいいことあるの？」
「なぜ行くのか、何かいいことあるのかって、ジョンは何を聞きたいの？どこから答えてよいのか分からないよ」
「洋介、ゴメン。では一神教のユダヤ教について最近読んだ本の受け売りだけど話をするから、その中で日本の神について答えられるところから、答えてほしい。そうねぇ、結構時間がかかりそうだね。長くなると思うけど時間は大丈夫？」
「夕方までならいいよ」

神による選民

ジョンは自分の英文旧約聖書を机上に開いて
「洋介、ユダヤ教の聖書を律法と云おう。ユダヤ教徒が守るべき戒律、いや守らなければならない神との契約書と言った方が分かりやすいかな。その全てはキリスト教側からいえば旧約聖書で、モーセ五書をはじめ三十九の文書からできている。紀元一世紀頃、これだけの文書をユダヤ教の律法と決められたので、洋介が持っている旧約聖書と内容が違うところはあるかもしれないが、殆ど同じと思ってもらっていいよ。創世記第一章天地創造の中には、神様がご自分にかたどって人間の男女を創って、それがアダムとエバだということが書かれているよね。その後、アダムとエバの子孫は、セト・エノシュ・ケナン・マハラエル・イエレド・エノク（三百六十五年生きて、エノクは神とともに歩み、神がとられたのでいなくなった）・メトシェラ・レメク・ノア（箱舟・洪水）・セム・アルパクシャド・シェラ・エベル・ベレグ・レウ・セルグ・ナホル・テラ・アブラムと、アダムから十九代目のアブラムに神が現れた。」（創世記五章参照）
洋介は、自分の旧約聖書を開いて、ジョンの説明している箇所の記事を追っている。ジョンは続けて
「そこでアブラムは神様から次のような召命を受けた。

『あなたは生まれ故郷
父の家を離れ
わたしの示す地に行きなさい。
わたしはあなたを大いなる国民にし
あなたを祝福し、あなたの名を高める
祝福の源となるように。
あなたを祝福する人をわたしは祝福し
あなたを呪う者をわたしは呪う。
地上の氏族はすべて
あなたによって祝福にはいる』

と。」
ジョンは続けて
「そしてアブラムは主の言葉によって旅立った。

この旅達は彼の一族と多くの家畜、奴隷等、周辺の他部族と争いがあった場合に対抗することができるような集団で、創世記を読み進むと、アブラムは非常に多くの家畜と金銀を持っていた（十三章二節）。親族のものが捕虜になったと聞いて、彼の家で生まれた奴隷で訓練を受けた者三百十八人で追跡し、全ての財産と親族の人々もすべて取り返した。（創世記十四章十三～十六節）。」
一息ついたジョンは、黙って自分の旧約聖書に目を通している洋介をチラっと見て、そのまま続けて
「神はアブラムが九十九歳になったとき、アブラムに語りかけ、次のような契約をした。『これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。あなたは、もはやアブラムではなくアブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。わたしはあなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする。王となる者たちがあなたから出るであろう。わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立てて、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。わたしは、あなたが滞在しているこのカナンの全ての土地を、あなたとその子孫に永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。』」
「神はまたアブラハムに言われた。
『だからあなたも、私の契約を守りなさい。あなたも後に続く子孫も。あなたたち、およびあなたの後に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼（注①）を受ける。包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの契約の印となる。いつの時代でも、あなたたちの男子はすべて、直系の子孫はもちろんのこと、家で生まれた奴隷も、外国人から買い取った奴隷であなたの子孫でない者も皆、生まれてから八日目に割礼を受けなければならない。あなたの家で生まれた奴隷も、買い取った奴隷も、必ず割礼を受けなければならない。それによって、わたしの契約はあなたの身体に記されて永遠の契約となる。包皮の部分を切り取らない無割礼の男がいたなら、その人は民の間から断たれる。わたしの契約を破ったからである。』（創世記十七―一―十四）
この後すぐにアブラハムの一族、奴隷や買い取った奴隷など自分の家にいる男子をすべて集めて、すぐその日に、神が命じられたとおり包皮に割礼を施した。このとき、アブラハムは九十九歳、息子イシュマエルは十三歳であった。翌年、アブラハムは百歳のとき、妻サラも老人になっており月のものもとうになくなっていたが、主が先の契約を語った時に予告した通り男子イサクが誕生した。（創世記二十一―一―八）」

注①　割礼　男性器の包皮の一部を切除することを云い、生まれたての赤ちゃんの包皮を切り取ることで、

割礼をした赤ちゃんはその時から包茎でなくなる。

ジョンは旧約聖書を示しながら口頭で

「洋介、あなたも知っている通り、イサクにはヤコブという子どもがいてヤコブには十二人の子どもがいました。ヤコブが神様からイスラエルへの改名指示とともに、次の様な祝福（創世記三十五―九―十五）を受けました。その内容は『わたしは全能の神である。産めよ、増えよ。あなたから一つの国民の群れが起こりあなたの腰から王たちが出る。わたしは、アブラハムとイサクに与えた土地をあなたに与える。また、あなたに続く子孫にこの土地を与える（創世記三十五―十一―十二）。』」

「ヤコブの十二人の息子たちは次の通りで、ルベン・シメオン・レビ・ユダ・イサカル・ゼブルン・ヨセフ・ベニヤミン・ダン・ナフタリ・ガド・アシュルの十二人です。父イスラエルは末子ヨセフをどの息子より可愛がっていました。そこへヨセフが太陽と月と十一の星（父母と十一人の兄たち）が自分にひれ伏した夢を話したので、兄たちはそのことでヨセフに反感を持ちヨセフを殺そうとした。長兄のルベンは命をとることに反対してヨセフを荒れ野の穴に投げ入れた（創世記三十七章二十四節）。その直後、ミデアン人の隊商がそこを通りかかって、ヨセフを穴から引き揚げて、そこにまた通り掛かったイシュマル人商人たちに銀二十枚でヨセフを売ったので、ヨセフはエジプトに連れて行かれてしまいました（創世記三十七―二十八）。

エジプトでのヨセフは宮廷役人の家で、家庭内のことをすべて任されるようになりました。その二年後、ある日ヨセフはその二人の宮廷役人の夢の解き明かしをしたことからそれが王の知るところとなり、王の夢も説き明かして七年間の豊作とそれに続く七年間の大飢饉を予言し、王はヨセフを宮廷の責任者、王の次の位につけてすべてを任せるようになったのです（創世記四十一節四十章）。」

ジョンはここまで話して

「洋介、一休みしようか。ユダヤ民族が、なぜエジプト人による迫害から逃げ出さなければならない状態に陥っていたのか、聖書を見て見よう」

「ジョン、それは創世記の次にある出エジプト記だよね。天地創造をした神様が、アダムとエバの子孫はカインの子孫のように他にもいるのに、アブラハム、ヤコブに現れて、二人だけの子孫に豊かな土地も与えて、その上で子孫も増やして守る、と言ったのか、どうしてなのか分からない」

「洋介、それは神様がそうなさったのだから、神様の御意志による選民として理解するほかないのではないか。守るべき民族を選ぶのは神様が一方的に選んでいるのだよ。では話の続きをするよ。」

「カナン地方が強烈な飢饉に見舞われ、ヤコブは、子どもたちに『エジプトには食料が豊かにあるらしい。行って買ってくるように』命じ、末弟のベニヤミンを父の所に残し、兄弟十人をエジプトに行かせた。十人がエジプトに来てヨセフに挨拶したあと、ヨセフには間もなく彼らが自分の兄弟たちだということが分かったがその場では言わず、食料を持たせたとき、今度来るときは、話に出ていたあなた方の末弟の顔も見たいので連れてくるようにと指示した。

二回目に兄弟十一人でエジプトに来たときに、ヨセフは自分が「あなた方の兄弟ヨセフ」であることを明かし、父ヤコブと共に家族一同のエジプト移住を奨め、ヤコブの家族総員七十名がエジプトに移住したのです。」

「ジョン、このヤコブ＝イスラエル一行がエジプトに移住した時期は時代的にはいつごろですか」

「洋介、イスラエルはエジプトに四百三十年いた、と言われているから、そこから考えてBC十七世紀のことだと思ってください。エジプト歴代王朝の中に記録が見つからないらしい」

「ジョン、なぜイスラエルの人たちは迫害されたの？宮廷トップの責任者で社会的立場も立派にあったにもかかわらず」

「当時のイスラエル一行を保護していたときはエジプトのヒクソス王朝で、BC十六世紀にテバイス王朝に変わったころには、イスラエル人が急増して、エジプト社会が不安を感じ、イスラエル人を奴隷状態に酷使し、当時の王様はイスラエル人に男子が誕生した場合は即殺すことを命じていた」

イスラエル民族のエジプト脱出

「BC十三世紀末頃のことと思われるが、エジプト人からイスラエルの民への迫害がピークに達していたのか、神はエジプトからイスラエル民族を脱出させるリーダーというか、神様の代理人としてモーセ（注②）を選んだのだよ。

ジョン、旧約聖書に出エジプト記がありますよね。その頃先にも言った通り、エジプトでのイスラエルの民の人口が増えたことをエジプト為政者が警戒し、過酷な労を強いられ迫害されていた。そのような状況の中に神はイスラエル人であるモーセに

『わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、私は降って行き、エジプト人の手から彼らを救いだし、この国から、広々とした素晴らしい土地、乳と密の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ヒビ人、エブス人の住むところへ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の声が、今、私のもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きな

さい。わたしはあなたをファラオ（注③）のもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。』（出三―七～一〇）」

注② モーセはヤコブの三男レビの子孫にあたるアムラムの妻ヨケベドとの子ども。当時、エジプト王がヘブライ人根絶を期して男子が生まれたら全てナイル川に投げ込むよう指示が出ていた。ヨケベドは三か月間自宅に隠していたが隠し切れず、ある日、パピルスの籠にその子を入れて葦の茂みにそっと置いた。たまたまそれをエジプト王の娘がその子どもを見つけ、その赤子がヘブライ人の子どもと分かったが、あまりの美しさに自分で育てることにした。成長してエジプト人のヘブライ人への虐待を目の当たりに見てそのエジプト人を殺害し、遊牧民の一員として砂漠で過ごしていた。

注③ ファラオ（Pharaoh）はエジプト王の称号。文の流れによってエジプト王とファラオを使い分けています。

これに対し、モーセは

『わたしは何者でしょう。どうしてファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々を、エジプトから導き出さねばならないのですか』

と辞退するが、その後の神の具体的な指示に基づき神の召名を受けることになった。

ファラオとの交渉はなかなか捗らない。神はモーセを通して「血の災い」「蛙の災い」「ぶよの災い」「あぶの災い」「疫病の災い」「腫物の災い」「雹の災い」「いなごの災い」「暗闇の災い」など九つの災いをエジプトにもたらせたが、それでもファラオはイスラエルの民を去らせなかった。最後の決定的なものとなったのは、今もユダヤ教徒に伝わる『過ぎ越しの祭り』として伝わっている災害である。これは神がモーセに命じたことで

『今月の十日、人はそれぞれ父の家ごとに、すなわち家族ごとに子羊を一匹用意しなければならない。もし、家族が少人数で子羊を一匹を食べきれない場合には、隣の家族と共に、人数に見合うものを用意し、めいめいの食べる量に見合う子羊を選ばねばならない。その子羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。用意するものは羊でも山羊でもよい。それはこの月の十四日まで取り分けて置き、イスラエルの共同体の会衆が皆で夕暮れにそれを屠り、その血をとって、子羊を食べる家の入口の二本の柱と鴨居に塗る。そしてその夜、肉を火で焼いてたべる。また、酵母を入れないパンを苦菜を添えて食べる。肉は生で食べたり、煮て食べてはならない。必ず、頭も四肢も内臓を切り離さずに火で焼かなければならない。それも翌朝まで残しておいてはならない。翌朝まで残った場合には、焼却する。それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、

急いで食べる。これが主の過越しである。その夜、私はエジプトの国を回り、人であれ、家畜であれ、エジプトの国の全ての初子を撃つ。また、エジプトの全ての神々に裁きを行う。わたしは主である。あなたたちのいる家に塗った血はあなたたちを過ぎ越す。わたしがエジプトの国を撃つとき、滅ぼす者の災いはあなたたちに及ばない。この日はあなたたちにとって記念すべき日となる。あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、代々にわたって守るべき不変の定めとして祝わなければならない』（出エジプト十二章一―十四節）」

「真夜中になって神はエジプトの国ですべての初子を撃たれた。王座に坐しているファラオの初子から牢屋に繋がれている捕虜の初子まで、また家畜の初子もことごとく撃たれたので、ファラオと家臣、またすべてのエジプト人は夜中に起き上がった。死人が出なかった家は一軒もなかったので、大いなる叫びがエジプト中に起こった。ファラオはモーセとアロンを夜のうちに呼び出して言った。

『さあ、わたしの民の中から出て行くがよい。羊の群れも、牛の群れも連れて行くがよい』

とエジプトから出て行くことを求め、イスラエルの人々はエジプト人から金銀の装飾品や衣類も求めて出て行った。」（出エジプト十二章三十一節以降参照）

「洋介、このときエジプトから脱出した人数は何人くらいと思うか」

「うん、聖書のどこかに書いてあったと思ったが、ちょっと分からない」

「聖書にはこう書いてある。『イスラエルの人々がエジプトに住んでいた期間は四百三十年であった。エジプトの国を去った人員は、妻子を別にして壮年男子だけでおよそ六十万人であった。その他種々雑多な人々もこれに加わり、牛・羊など家畜もおびただしかった。』と書いてあるよ。妻子を入れたら総勢で百五十万人以上になるのではと考えられる。それとエジプト人からどさくさに分捕ってきた家畜もあるので、脱出した人々の脱出後の生活維持は大変だったと思うよ」

葦の海の奇跡

「エジプトを脱出してシナイ半島に向かって行けば、紅海の北スエズ湾があり、行く手は海、背後からはファラオが陣頭指揮するエジプト軍が迫ってくる。イスラエルの人々は万事窮し、恐怖で混乱に陥った。主はモーセに言われた。

『なぜわたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に命じて出発させなさい。杖を高く上げ手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いたところを通ることができる。しかし、わたしはエジプト人の心をかたくなにするから、彼ら

はお前たちの後を追ってくる。そのとき、わたしはファラオとその戦車、騎兵を破って栄光を現すとき、エジプト人は、私が主であることを知るようになる。』

モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。イスラエルの人々は海の中の乾いたところを進んで行き、水は彼らの右と左に壁のようになった。エジプト軍は彼等を追い、ファラオの馬、戦車、騎兵がことごとく彼に従って海の中に入ってきた。朝の見張りのころ、主は火と雲の柱からエジプト軍を見下ろし、エジプト軍をかき乱された。戦車の車輪をはずし、進みにくくされた。エジプト人は言った。『イスラエルの前から退却しよう。主が彼らのためにエジプトと戦っている』

主はモーセに言われた。『海に向かって手を差し伸べなさい。水がエジプト軍の上に、戦車、騎兵の上に流れ返るであろう。』モーセが手を海に向かって差し伸べると、夜が明ける前に海は元の場所へ流れ返った。エジプト軍は水の流れに逆らって逃げたが、主は彼らを海の中に投げ込まれた。

それからシナイ半島で約四〇年、その間水は岩間から湧き出させ、食料は、神がマナという食物や鳥を天から降らせて救済され、荒野での流浪を続けた。そのようなある日、神はシナイ山頂から降臨して、「十戒」を記載した石板をモーセに渡し、民との契約を行った。

十戒の内容は次の通りである。

一、あなたにはわたしをおいてほかに神があってはならない。
二、あなたはいかなる像も作ってはならない。
三、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
四、安息日を心に留め、これを聖別せよ。
五、あなたの父母を敬え。
六、殺してはならない。
七、姦淫してはならない。
八、盗んではならない。
九、隣人に関して偽証してはならない。
十、隣人の家を欲してはならない。

民は記載事項全てを順守・実行することを神に誓った。

モーセは百二十歳でカナンの地に入る直前、主はギレアドからダンまで、ナフタリの全土、エフライムとマナセの領土、西の海に至るユダの全土、ネゲブおよびナツメヤシの茂る谷からツォアル迄見渡せるビスガの山頂に登って『これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見るようにした。あなたはしかし、そこに渡って行くことはできない。』と言われた。

モーセはここで死に、ヌンの子ヨシュアが後継者となった。

その後イスラエルは与えられた領土を、ヤコブの子十二人をそれぞれ族長とした十二部族が支配していたが、周辺部族との対応上の必要性から十二部族が合体してイスラエル王国を建国した。王位にはサウル・ダビデ・ソロモンが順に就いた。

ところが十二部族の統一は続かず、BC九三二年頃イスラエル王国は分裂。北イスラエル王国（北部十部族）と南ユダ王国（南部二部族）に分かれた。その後BC七二二年には北イスラエル王国がアッシリアにより攻め滅ぼされ、南ユダ王国はアッシリアの属国的状態で独立を続けていたが、BC五八七年にバビロニアにより攻め滅ぼされ、イスラエル民族はバビロンに捕囚となった。当然のことヤーヴェ信仰の神殿も破壊され、民族の拠るべき国家も土地も、信仰拠点の神殿も破壊された。

イスラエル民族の神ヤーヴェへの一神教信仰は、民族がエジプトから救済されたとき、民族を守り救ってくれる神として、モーセの指導のもとに、ヤーヴェ信仰が成立し、そこにユダヤ教の起源があると考えていいと思います。

歴史的には神が自ら守るべき民族を選び、神自らが戦い、且つ民族生存の支援を行い、奴隷状態にあったエジプトから救出し、乳と密の出るカナンの地を与え、ソロモンの時代には栄華を極める独立王国にまで成長・発展させた。しかし、北イスラエル王国滅亡時も、南ユダ王国滅亡時も、アブラハムやヤコブに約束した神は沈黙し続け、民族の救済のためには動かなかった。

この神の沈黙を、民族はどのように考えたか。例えば、以下のように考えたのではないか。

①アブラハム・ヤコブの子孫の優位と繁栄を、きちんと約束してくれたではないか。その約束がありながら、どうして救済してくれなかったのか。

②我々を救ってくれない、役に立たない神との関係は今後どのように考えるべきか。

③だけど、神だけを一方的に責めることはできない。我々は神と契約している。我々は神との約束の点で、神に対して約束を守れなかった、いや守らなかったことから神に対して自己の正当性を主張できるのか。罪は神に対して償うことができるのか。

④そう考えて行くと、神の我々に対する態度は、神は民族を救済したという大きな正義がある。反面、我々は神に対する自己正当性の主張はできない。

⑤ここから「神が動かず沈黙をしているのは神の定めを守らない民が悪い」との前提で、「神の義と人の罪」の論理が成立し、そこから「人は神を選べない」ことに民族意見が集約され、神ヤーヴェへの一神教が、エジ

プト脱出時以来改めて確認・成立したと思います。」

ユダヤ教聖典の編纂

「ユダヤ教の律法聖典、キリスト教で言うところの旧約聖書の編纂は、北イスラエル王国も、南ユダ王国も滅亡し、民族はバビロニアの首都バビロンに連行されバビロン捕囚の時期に、ペルシャの支配下にあるときでした。

モーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）等の「ユダヤ教の律法」の編纂が開始され、上記五書以外のイザヤ書（第一～第三）など旧約聖書にあるすべての文書も同時期に編纂され、出来上がったのはBC五世紀末頃でした。この時代のイスラエル民族はペルシャ支配下にあったため、ペルシャから一字一句の加筆・削除・修正も禁止するとの条件付きの許可を受け、ユダヤ教としてそれを順守し現在に至っています。」

二十世紀の奇跡

「最後に私なりの二十世紀の奇跡とも考えられることをお話ししたい。

国家が滅亡し、国家として存立できる領土もなく、その状態が約二千年続いた後に、ユダヤ教信仰者による『イスラエル国家』が復活したことです。一九四八年五月十四日にイスラエル国家が独立宣言をして、現在に至っています。イスラエル国家の場所も、神がアブラハムに約束した土地（完全には同じでないと思いますが）とほぼ同じと思います。

一般論として、国家が滅亡してその民族が離散すると、離散した場所でそこの民族と同化を繰り返し、元の民族も信仰していた宗教も霧消しているのが歴史的な一般的事実であったのではないでしょうか。

約二千年の間、ユダヤ民族が民族離散状態の中でどのようにしてユダヤ教が守られ存続してきたのであろうか。詳しい説明はできないが、ユダヤ教信仰者により、ユダヤ教の教会で、ユダヤ人の礼拝・集会のための建物で、宗教だけでなく文化・教育・社会活動を行う機能を持つ「シナゴーグ」が各地に存続し活動できていたことが、二千年後にイスラエル国家の復活した大きな要素であったと思う。このイスラエル国家の復活には大きな国際的政治情勢の絡みの要素は否定できないが、ユダヤ教の神ヤーヴェが二千年以上にわたる沈黙を破り、アブラハム・ヤコブに約束したことを守ったと考えるのは、考えすぎでしょうか。」

ここまで話し終ったジョンは一呼吸ついて

「洋介、長い話で聞いている方も疲れたでしょう。なんでも疑問や意見を聞かせて欲しい」

「一つの民族が、自分たちの意志ではないところから、神ヤーヴェの支配下というか、その神のみを信仰せざるを得ないことになったというか、そういうことは日本人の宗教世界とは根本的に異なっているよね。日本人である自分にはユダヤ教の世界は理解できない。自分の不勉強が最大の理由だけど、随分違うものだと思って聞いていたよ」

日本人の持つ宗教は

「洋介、では聞くけど、日本人にとって神様や仏様ってどのような存在なの？」

「ユダヤ教のように神様や仏様が定めた人間との約束事って、僕は聞いたことがないよ。」

「うーん、約束事がない関係か」

「ジョン、今聞いたばかりのユダヤ教のことがまだ頭の中で整理がつかないので、日本人の宗教論議どころではないよ。ジョンに時間があれば来週日曜日の午後までに、日本人の神社・仏閣への思いを考えておくよ。今まで全く考えていなかったことだから。でも、旧約聖書を見ればユダヤの宗教史は活字では理解できるが、今日は有難かった。」

ジョンは手帳を開いて

「洋介、次の日曜日は午後二時からでいいかな。午後一番で婦人会役員会が入っているので」

「ジョン、わかった。それまでにどこまでまとめて答えられるか分からないが、考えておくよ」

続く

千家尊福伝（一四）

腐敗した市政に悩んだ東京府知事

村上邦治

はじめに

初の政党内閣成立に反旗を翻し、即刻静岡県知事を辞職した千家尊福は、貴族院法典調査会の閑職に就いた。この間最大派である研究会から独立し、新たに男爵議員をまとめた木曜会を創立し、その領袖になった。派の団結力を強め、貴族院の反隈板内閣派を糾合して、倒閣に動き、大隈首相を追い詰めていった。自由党と進歩党が大同団結した憲政党は、わずか四か月で分裂、憲政党（旧自由党）と憲政本党（旧進歩党）に分かれ、内部崩壊した。その結果大隈内閣は、一度も国会に臨むことなく、総辞職してしまった。

明治三一年（一八九八）一一月、山県内閣に政権交代すると同時に、尊福は地方官の最高位東京府知事（高等官一等）に、任命された。これまでの地方官実績（埼玉、静岡両県知事）、貴族院内における倒閣運動の糾合、人物・政治家としての徳望・人望、いずれをとっても文句の付けどころのない、誰もが認める人選であった。

しかし、東京府政は、立憲一〇年を経て、東京市政が大きく変わる難しい時期であった。

一　東京府知事就任

明治三一年通常府議会は、就任二週間後の一一月二八日より八日間に亘り開催された。四か月前の七月臨時府会は、既に大隈内閣が成立しており、府知事の更迭が確実視されていたため、岡部長職（子爵貴族院議員）知事

は出席せず、知事代理として書記官が開会の趣旨を述べた。前肥塚龍（横浜毎日新聞社長を経て進歩党・憲政党議員）知事は、在任四か月の短期間に終わり、一度も府会に出席できなかった。

今通常府会は、三二年度予算、三一年度追加予算、師範学校敷地変更等の議案を審議するものであった。着任早々の千家知事が出席、久々の知事自身の開会挨拶に、議員並びに職員は緊張した。議事説明委員として、府庁から書記官、参事官等委員全員と、説明嘱託委員として、東京市から警視庁警視等が出席、これまでにない多くの出席者により、熱のこもった府議会の開催となった。

参列者を前にして、新知事は、淡々と次のような開会の辞を述べた。

「諸君、明治三二年度地方税収支予算等議定の為、本日を以て第二一回通常府会並びに市部会郡部会を開く。

三二年度の地方税支出予算は、之か編成に際し精々節約を加えしか、なお前年度に比し

市郡連帯において　四万七千円余
市部において　四万四千円余
郡部において　四万八千円余

の増額なり。

その主なる費途は、

市郡連帯においては土木費、教育費、救育費、勧業費
市部においては警察費
郡部においては土木費、町村土木補助費、地方税取扱費等である。

以上増加の理由は、今秋雨度の水害に鑑み差し置き難しと認むる土木工事、師範学校の建築、一府九県連合共進会の開催、水道消火栓竣成に伴う消防機関の設備等を主とし、何れも法令の結果又は実施の必要に応ずるものなりとす。

終に臨み、なお一言せんと欲するは、今秋水害の復旧土木費、年度初よりの米麦代価の高騰より生じたる監獄費の不足、師範学校の建設費、消火栓竣成部分に設備すべき消防機関に要する警察費等の為に、

市郡連帯において　二五万円余
市部において　一万七千円余
郡部において　一万二千円余

を、三一年度予算に追加の議案を提出しおきたり。

諸君宜しく精査審議の上、適当の議決あらんことを望む」（一部省略）

と、議案の必要性とその要因を簡潔明瞭に述べ、議員の協力を依頼した。

千家知事の演説は短いものの、威厳があり、しかも核心を捉えた分かりやすいもので、経験深い知事の議会運営を、早くも議員は歓迎した。

尊福の知事就任時の府政には、大きな問題を抱えていた。一つは府下に伝染病（赤痢、コレラ、ペスト）が、周期的に流行したことである。東京市では人口増加が著しく、塵埃の収集・清掃が追い付かず、市内はいたる所で塵の山となっており、防疫上由々しきことであった。府市会では「塵問題の解消について東京市長を指導してほしい」との建議がなされた。議員からのこの意見書は『東京日日新聞』に大きく取り上げられ、知事としても速急な解決が求められたのである。また、伝染病の流行を防ぐのには、上水道の完備が急がれた。『昭和天皇実録』には、伝染病流行の兆候に対し、当時皇孫であった迪宮（昭和天皇）は、東京を一時移転し、沼津に滞在したことが記されている。（明治三五年七月）

この建議に対し千家知事は、松田東京市長に、速やかな対策を指示したのである。三三年四月、塵処理は市の直営に移行となり、ようやく解決に向かった。しかし後でこの清掃引受人の選定に対し、収賄事件が明らかになる。

上水道の整備は、水源確保のため三多摩地区が、神奈川県から編入された明治二八年から懸案になっていた。東京市の人口急増に、水の供給が間に合わない状態が続いていたのである。衛生病院費の市部負担割合が、八分六厘と九割近い高負担であったことが示すように、この問題は東京市の問題であった。明治三二年一二月淀橋浄水場の完成により、給水不足の解消は大きく前進することになり、水道網は急速に拡大した。水道網の整備により、疫病と大火（消火栓の設置）対策に効果を上げ始める。しかし、後刻水道管納入を巡る汚職事件が発覚する。

衛生問題が解決に進みだしたあと、東京市政をめぐって、社会を揺るがす事件が続発し、府知事の尊福を煩わし続けた。憲政党（後立憲政友会）実力者星亨の東京市会参入による汚職事件である。三三年一一月の通常市部会において、

「近頃東京市行政上容易ならざる失政がある趣、世上に喧伝されている。就いては知事に於いて特に十分の監督あらんことを望む」

旨の建議が、議員から提出され可決された。

また翌月第一五回通常国会の衆議院で、東京市政に関連する疑獄事件が発生し、東京市政監督に関する質問書が提出された。

「政府は東京市に対し、今に至るまで何らの処分をとらないのは、監督官庁たるの職責を尽くさないものではないか」と、追及された。

さらに、議院の体面及び議員の特権に関する質問が行われ、

「府政はこれを議院に通知しなかったことは、先例に反するものではないか」

など、四件の質問が出された。東京市の不正問題は、国会でも、野党から追及され事態にまでなったのである。なかには千家府知事の責任を追及するともとれる質疑があり、尊福を悩ましたのである。

しかし明治三二年一〇月からは、東京府知事は、これまでと異なり、東京市政に直接関与することはできなくなった。憲政党さらに政友会の実力者剛腕星代議士（市会議員）に対し、不正を押し止めることは、制度上できないことであった。

二　市長不在の東京市

東京府が地方自治体として発足したのは、徳川幕府の行政機構を受け継ぎ、東京府庁を開庁した慶応四年からで、初代府知事は烏丸光徳（尊王攘夷派公卿参議）であった。

明治四年廃藩置県において、浦和県、品川県、小管県等を管轄することになり、現在の二三区域に拡大した。町制組織は新たに区制が引かれ、一一区となった。

明治一一年いわゆる「地方三新法」（郡区町村編制法、府県会規則、地方税規則）の発布により、東京府は府内のうち、市街化が進み府税納入の多い地域を「区」部とし、その他を「郡」部とした。これにより一五区六郡に再編成され、官選の区長、郡長が任命された。

この年府県会規則により府議会議員選挙が実施され、一二年には最初の臨時府議会が開催された。また区においても区議会選挙が、郡部においては町村会議員選挙が各々行われ、議会を開催し、地方自治が発足した。国会開設より一〇年前の事であった。

東京府では、同一府内でありながら、区部と郡部との生活環境が余りに格差があることから、「三部経済制」（区部、郡部、郡区共通）の予算とすることになり、府会の機構も、区部会・郡部会を設置した。この体制は、昭和の初めまで続いた。維新以降、政府が所在する東京府は、文明開化、殖産興業政策により人口は飛躍的に増加していったが、それはあくまで区部の発展によるもので、郡区とでは経済規模が極端に異なる状況に、この三部体制はよく機能したといえる。尊福の開会挨拶は、この三部経済制に基づき説明したものである。

東京市は、明治二二年の市制・町村制の公布により、京都、大阪など三六市とともに市制が施行され誕生した。東京市となったのは、府内一五区であった。そして近代日本の帝都に相応しい都市建設事業が、政府の後押しを受け、優先的に進められた。上下水道整備、道路拡張、河川改修（隅田川）、橋梁建設、公営市場（築地）、墓地（青山）、公園（日比谷公園）などが新設され、大都市に改造されて行った。

こうした政府・府一体となった東京市の近代都市化が進んだのは、「市制特例」によるところが大きかった。明治二二年市制が敷かれたものの、東京、京都、大阪の三市については、元老院の強い反対により、独立した地方自治体の形を採らず、政府の直接管理下に置くこととしたのである。これら三市は、政府にとって特別重要な市であり、議会において政党の妨害により、建設・管理に支障をきたす恐れがあることを危惧したためである。

そのためこれら三市については、市長の職務は府知事が、助役の職務は府の書記官が行うとし、市参事会は府知事、書記官、名誉参事会員で組織するものとしたのである。実質上これら三市の自治は、府知事の職務とし、内務省の管理下に置いたのである。この市制特例の効果は東京市においては著しく、近代都市がいち早く進み、変貌を遂げることができたのである。

なお東京府が、現在の東京都（昭和一八年都制に変更）と同じ管轄地域になるのは、明治二六年である。明治一一年静岡県より伊豆諸島が、一三年内務省より小笠原諸島が、財政事情の豊かな東京府に編入された。明治二六年神奈川県より多摩三郡が編入された。これは府内の水源地を確保することが主な理由であった。

三　市制特例廃止

三市特例法により、東京市には市長、助役、書記などが置かれず、自治体としての東京市は、東京府の業務の一部として扱われ、東京府から制約を受け、独立した自治体とはいえなかった。

一方で、区は存続しており、市参事会が選任する区長と書記を選任し、区議会が開催され、区としては自治体として存在する変則的な体制であった。

議会開設以来三市特例廃止の運動は、各方面から継続的に行われてきた。第一議会から、東京市を地盤とした立憲改進党議員の建議を皮切りに、衆議院の各党からその廃止について、議会が開かれる毎に強く求められた。貴族院では平田東助等が五、六議会で廃止の発議していた。こうした根強い特例廃止運動に対し、内務省でも、「都制」案や「京制」案が検討されたが、いずれも実現までには至らなかった。

東京市をはじめとする三市では、特例を廃止し、自治権拡大を目指す市民運動が、次第に高まってきていた。こうしたおり、明治二八年東京市で、一旦検査により不合格になった鉄管を、無断で使用するといった鉄管不正納入事件が発生した。この事件から、市長をはじめとする市制強化の重要性が認識され、三市特例廃止論は一挙に具体化した。そして議会開設後一〇年を経た明治三一年、第三次伊藤内閣において、ついに衆議院および貴族院にて特例廃止法案が可決され、実施は明治三一年一〇

月に決まった。この廃止決定には、板垣率いる自由党と提携するために、伊藤内閣は自由党の要求を、飲まざるを得ないものであった。

早速東京市長の人選が始まり、市会は徳川慶喜のあと、第一六代将軍を継ぐはずであった徳川家達（公爵当時貴族院全院委員長）を、名誉ある初代東京市長として指名・依頼した。しかし家達は、「将軍が町奉行になるようなものだ」と言って、固辞した。結局貴族議員谷干城と競い、区会議員、府会議員、衆議院議員の経歴を持つ進歩党の老練な政治家松田秀雄が、進歩党（前改進党）が強い地盤を背景に当選した。松田市長は教育に関心が深く、神田女学校を創立、地方、国政に豊富な政治経験を有していたが、大きく飛躍を遂げている東京市長として、構想力や指導・決断面については満足できる人物ではなかった。

尊福が府知事になるのは、松田市長誕生の一か月後であった。東京市長の就任で、これまでの府知事の業務は、大きく変わった。従来府知事は市長を兼務し、市の行政に携わってきたが、施行後は、東京市長が市政を、府知事は府政に専念することになり、東京市政については、市長を通じて監督する間接的なものとなったのである。この特例制度廃止により、千家府知事の東京市への関与は、これまでの知事より、はるかに後退したものとなった。

四　憲政会最高実力者星亨

第二次山県内閣は、最初の政党内閣であった大隈内閣の総辞職により、貴族院からの圧倒的な支持を受け、明治三一年（一八九八）一一月急遽発足した。

この年の一月松方内閣（第二次）総辞職後、六月伊藤内閣（第三次）、一一月大隈内閣と、極めて短期間で、相次ぎ総辞職したが、この内閣は、明治三三年（一九〇〇）一〇月までと、ほぼ二年間続いた。この間、短期間で政権交代が続いたため、山積となっていた重要法案を次々と成立させた。

まず日清戦争後、何れの内閣も実現できなかった地租増徴案を、一部貴族院議員（谷干城や大地主の多額納税者勅選議員）や、憲政本党の強い反対にあいながらも可決させた。当初案の地価四%引き上げはできなかったものの、二・五%から三・三%へ引き上げ、増徴期間は五年間に限ると妥協したが、この増税実施により、拡大する軍備費や膨張する行政費などを賄う目途が付き、財政の安定化を果たしたのである。

次は文官任用令の改正と、文官分限令・文官懲戒令の制定である。従来勅任文官については、自由に任用できることになっていたが、これを文官高等試験に合格した

奏任官からのみ任用することとし、各省次官・局長、知事への、自由任用の道を閉ざしたのである。これは政党員の勅任官任用の道を、封じることを意図したものであった。この制定により、高等行政官を政治的任免の対象から外し、官僚の身分を安定させることになった。今後内閣が変わろうとも、継続した行政の執行を狙ったものでもあった。

第三は陸・海軍省官制の改正により、軍部大臣現役武官制が確立し、陸・海軍大臣が現役将官（大、中将）以外から、任命される道は閉ざされた。政党寄りの予備役軍人登用の道を、許さないためであった。しかしこの改正により、昭和初期の軍国主義時代に、内閣に対する軍部の圧力が大きくなり、政治を左右することになるのである。

第四は府県制の改正である。これまで府県会は、等級選挙制の町村会の上に郡会をおき、その郡会と等級選挙制の市会うえに府県会を構成していた。この制度により、府会・県会が、政党の影響を受けないようにするためであった。しかし中央政界の進出が強まり、当初の意図は達成できなくなった。そのため混乱を招いてきた複雑な旧制度を、各選挙区選出議員で構成することに改正された。明治二三年の府県制を公布した第一次山県内閣が一〇年を経て、ようやく自ら改正し、有権者の意思を反映させる地方自治体制に近づけたのである。

第五には、衆議院議員選挙法改正が挙げられよう。この改正により、選挙人は直接国税一〇円以上（改正前一五円以上）としたため、九八万人と二倍以上に増加した。選挙区は小選挙区から、一府県をもって一選挙区とし、三万人以上の市も、一選挙区とした。この背景には、有権者を増大させる要求が政党側からの強く、しかも大都市の商工団体から要請が相次ぎ、これらに応じたものであった。

そのほかに、成立当時注目されなかったが、公害問題（足尾鉱毒事件）、組合結成（鉄工、活版工）、争議（製糸工場、日本鉄道）の頻発から、治安警察法が制定されている。

貴族院や官僚からの支援があったとはいえ、衆議院に足場をもたない山県内閣が、多くの重要法案を成立させたのは、憲政党との協力関係に、成功したからにほかならない。

衆議院の圧倒的な議席を占めた大隈憲政党内閣が倒れたのは、新憲政党（旧自由党）が、旧憲政党を分裂（新憲政党と大隈らの憲政本党）させた為であり、これを強引に推し進めたのは、旧自由党議員星亨であった。その後党内の反対議員を抑え、山県内閣との協力体制を築いたのも星であった。この時期既に板垣の指導力は失われ、星は党内最高実力者にのし上がったのである。

星の政治姿勢はすべてに積極主義といわれるもので、党勢拡大については、衆議院の過半数を目標におき、これまでの党の方針に縛られず、修正や変更についても柔軟な姿勢をとった。星は常に党勢拡大を第一に掲げ、そのためには、これまで民党（野党）としての主張から、一早く脱皮することで、政府に接近したのである。山県内閣成立後、衆議院第二党の立場ながら、政府の国会運営が円滑に進まないことを見越し、山県内閣に同調することで、党勢拡大の実現を図ろうとしたのであった。

星は山県内閣との協力関係については、当初は多くの党員の要望を押さえ、最小限に止めた。閣僚の要求は見合わせ、わずか内務省局長に一人を入れ、知事五人を留任させたにすぎなかった。主要な提携条件は、山県のこれまでの超然主義を放棄する旨の宣言、憲政党綱領の採用、憲政党との永続的な提携の三項目に過ぎなかった。多くの憲政党員は不満を抱いたが、星の党内操縦により、不服議員を押さえ込んだ。そのためは、政治資金を必要としたのである。

山県内閣最大の難題は、地租増徴などの増税案であった。松方内閣（第二次）、伊藤内閣（第三次）では、大差で否決されたこの法案は、憲政党の意見を考慮し、政府原案の四％（六〇％引き上げ）を、三・三％（三二％引き上げ）に引き下げ、さらに五年間という期限を設ける修正をした。しかし衆議院の第一党は憲政本党で、四四％（一三一名）を占めており、法案可決には憲政本党の不満分子を抱き込むために、多額の政治資金が動いたのである。各新聞は連日地租増徴案に対する反対同盟の声明や、政府及び憲政党による議員収賄について、大きく報道した。しかし星は、政府から譲歩条件を引き出し、まず憲政党を賛成にまとめ上げ、さらに野党議員への札束攻勢により、難関であった増徴案の成立にこぎつけた。この成立に至る星の活動は、ひときわ目立ち、国政での地位を不動のものとしたのである。

文官任用令等三令の改正は、突然に提出された。当然ながら憲政党員を激昂させた。星は、提携維持に向けて、いくつかの例外規定による自由任用枠を広げさせ、改正案を仕掛けた内務省次官を更迭させることで、党員の怒りを押さえた。この改正を、国民主義の新聞『日本』は、

「山形内閣の藩閥擁護策として大成功」

と、皮肉交えて報道したのであった。

府県制、衆議院選挙法の改正については、党勢拡大に躍起となっていた星は、法案を強く推進した。明治三二年九月、地方制度改正に伴う府県会全国一斉選挙の実施を受けて、いち早く選挙活動に入り、

「山県内閣と連携する憲政党こそ、鉄道の敷設、道路・港湾の整備、大学などの高等教育機関の誘致が実現できる」

と呼びかけ、非増税案を掲げる憲政本党と対抗した。多額の政治資金を使い、山県系知事の応援を受けた選挙運動であった。自らも劣勢であった東北・北陸地方の遊説に奔走した。選挙結果は憲政党系約八〇〇、憲政本党系四〇〇余、国民協会から変わった帝国党系一〇〇余となり、憲政党が圧勝した。この選挙結果により、星の山県内閣との提携策は大成功となり、星の憲政党における指導者としての地位は不動なものとなった。

明治三三年になってこの選挙結果などを背景に、強気に転じた星は、山県首相に憲政党員の入閣など、新たな要求を出した。

これに対し山県首相は、あらかた処理すべきことは、片付けることができたとの思いから、星の要求に対しこれを拒絶、退陣を決意したのである。憲政党は五月末、山県内閣との提携打切りを公表した。

山県首相には、これ以上政権を担う意欲は無く、辞表を出した。しかし清国では二年前、保守派による政権奪取（戊戌の政変）により、西太后が再び権力を取戻した。西太后は、日清戦争敗戦後日本の明治維新を範に、立憲政治を基本とする立憲君主制の実現を目指して国内改革を進めてきた、変法運動（指導者康有為）を弾圧した。この弾圧に清国各地で、宗教結社義和団が反乱を起こした。いわゆる義和団の乱である。山東省で暴動を起こした一団は、首都北京に迫ったが、乱を鎮圧する力はもはや清国政府にはなく、英、米、日、仏、独、露、伊、オーストリア八か国の連合軍が出兵した。これをみた西太后は、逆に義和団に同調し、連合国と対峙したものの、すぐに連合国に鎮圧された。いわゆる北清事変である。日本は一個師団を出兵させ、連合軍の主力であった。しかし後でこの派遣費用を巡り、伊藤内閣は窮地に追い込まれる。こうした中国の内乱により、終息するまで山県内閣は慰留されることになったのである。

五　立憲政友会創立

山県内閣との提携打切り宣言をした後、翌日には、憲政党星は、新政党創立を具体化させていた伊藤博文に、破天荒と思える、憲政党党首就任を要請したのである。しかし博文は、既成政党の宿弊から完全に脱する必要から、まったく新しい政党を組織する意向を、星に打ち明けた。星は直ちに、憲政党を一旦解党し、改めて、党員全員を伊藤新党に加わることを、博文に申し入れたのである。憲政党指導者星は、伊藤を党首に取り組むことや、新党結成を阻止できない、と読んだことからの提案であった。伊藤が新党結成するなら、それになだれ込むのが、党勢を拡大するのに、最善の策であると即断したのである。

内閣制度や立憲議会制度を構築した伊藤博文は、早くから政党の重要性を認識しており、政党結成について、これまで既に二回検討していた。最初は、明治二四年松方内閣が民党の支配する衆議院に抵抗され解散、品川内相が大選挙干渉引き起こした時と、二年前自由党と進歩党（旧改進党）が大同団結して憲政党を結党した時であった。いずれも、元老だれ一人として賛同する者がおらず、断念を余儀なくされてきた。

三度目の今回は、すでに政党内閣である隈板内閣を経ており、政党嫌いの山県首相でさえ、政党との提携なくしては、政治が進まないことを認めざるを得なかった。三度目の今度こそ、博文が理想とする模範的政党結成の好機であった。

博文の理想とした政党は、新党設立の趣旨、綱領の中に示されている。第一に、

「そもそも内閣大臣の任免は憲法上の大権に属し、人選は、党員あるいは党外の士を以てす。皆元首の自由意思に存する。輔弼の職に就き、元首を補佐するために行うことについては、党員政友といえども決して許さず。」

と、党首総裁の権限をより強く描いていた。

次はもっとも博文が嫌った、これまでの政党の公益を忘れ、党利を優先させることからの脱却であった。

「地方若しくは団体利害の問題に至りては、公益を以て準と為し、緩急を按じて之が施設を決する。郷党の情実に泥み、あるいは営業の請託を受け、与ふるに、党援を以てするが如きは断じて不可なり。」

と、強く戒めている。

さらに秩序ある党運営を主張した。いわく

「政党の動作・行為と云ふものは素より文治的なもので平和の仕事でありますから、壮士的の働きなどは避ける様にならなければならぬ。若し無産にして無頼の連中を加ふるは、我々が折角政治上に効力を与え良民の業をして益々発達せしむるの目的に反するのである。」

と、自由民権運動から続いた政党の行動や、これまでの組織からの離脱を目指した。

こうした博文の描く新党は、党利党略から国家を基準とする政策の立案や実現を果たす、本格的な近代政党を創立し、立憲政治の完成を目指すものであった。これまでの政党と差別するため、党名も「党」から「会」とすることにこだわった。地方支部については、本部の統制的な関係から、緩やかな関係にするため、「倶楽部」とすることを主張したが、党運営の実務に詳しい星らに、これでは統制ができないと反対され、已むえず「支部」のままにした。

明治三三年（一九〇〇）八月伊藤博文は、西園寺公望ら一三人を招き、新党の創立委員とし、立党の趣旨と九綱目からなる綱領を披露したのである。

九月憲政党は一旦解党し、党員は自動的に立憲政友会に入党した。発会式では、正式に伊藤博文が総裁に就任、補佐する総務委員として、

伊藤系　西園寺公望（侯爵）、渡辺国武（第二次伊藤内閣蔵相）、本多政以（男爵元加賀藩家老伊藤の資金提供者）、金子堅太郎（法相）、末松謙澄（娘婿内相）、都筑馨六（井上馨女婿）、原敬（幹事長兼任後逓相）、渡辺洪基（東京帝国大学初代総長東京府知事）

党人系旧憲政党　星亨（逓相関東派）、松田正久（文相九州派）、林有造（農商務相土佐派）

旧憲政本党　尾崎行雄（三重県選出議員）

旧帝国党　大岡育造（山口県選出議員）

旧無所属　長谷場純孝（鹿児島県選出議員）

その他　鶴原定吉（関西財界）

が就き、創立委員がそのまま横滑りした。

伊藤総裁が理想とする、これまでにない政党を目指すには、憲政党員以外から幅広く人材を集める必要があった。入党勧誘状を無所属議員、前代議士、市長や地方議会議員、会社経営者、弁護士、銀行頭取、その他地方の名望家等に発出し、入党を促した。しかし大会社三菱、三井、住友の経営者は、むしろ山県有朋を望んでおり、両者から、中立の立場をとった。また憲政本党員に対し、尾崎を通じて勧誘したものの、九名の参加に止まり、大きな成果とはならなかった。

しかし政友会創立時には、衆議院議員三〇〇名のうち、一五二名が所属し、単独で過半数を獲得したのである。問題は七割以上が旧憲政党員であり、党運営については、実力者である星が、実権を握ることになった。

この発足をみて、幸徳秋水は新聞『萬朝報』紙上で、

「噫（ああ）、自由党死す矣」と題し

「而して光栄ある歴史は全く抹殺されぬ」

「汝自由党が自由平等の為に戦い、文明進歩の為に闘うや、義を見て進み正を踏んで懼れず、千挫屈せず百折撓まず、凛乎（りんこ）たる意気精神、真に秋霜烈日の概ありき」

「今や諸君は退去命令（明治二〇年保安条例公布し民権派を三年間皇居外三里の地に追放）の総理伊藤候、退去令発布の内相山県候の忠実なる政友として、汝自由党の死を観る」

と、痛烈に批判した。秋水自身も、政友会による長期政権を予想していたのである。

六　第四次伊藤内閣成立

長年の構想を実現した伊藤総裁の政友会は、星の憲政党員全員入党するという強引な荒業で、創立されたともいえた。辞意を固めていた山県は、北清事変の終結に伴い、九月末に辞任した。山県は衆議院の第一党になった政友会伊藤総裁に後継を奏上した。結党後半月という短期間であり、一度は断ったものの、元老らによる説得により、準備不足のまま組閣をせざるを得なかった。

明治三三年一〇月第四次伊藤内閣は成立、政友会を基盤とする本格的な政党内閣となった。例外として四〇歳の若さながら、外交手腕を評価していた前駐英公使加藤高明（陸奥宗光腹心）を、党員でないにもかかわらず起用した。桂陸相、山本権兵衛海相は留任となった。

四回目となるこの度の伊藤内閣は、衆議院の過半数を占める政友会を基盤としており、最有力の元老として天皇の信認篤い伊藤首相が率いており、国政を安定させ、東アジアの厳しい情勢に確り対処できる、最強の内閣と思われた。

しかし、組閣当初から、政友会創立委員長であった渡辺国武（信濃諏訪出身県知事大蔵次官を経て第二次伊藤内閣蔵相）が、この内閣では当然蔵相になるものと思い込んでいたが、伊藤総裁は井上馨を据えることを知り、不満を新聞記者にぶちまけたことから、騒動になった。連日内紛が新聞に掲載されたため、発足時から、政友会の内部事情は複雑であり、伊藤人脈内での争い、さらに党人派との軋轢が表ざたになった。結局井上に辞退させ、渡辺を蔵相に据えることで治めたが、この内閣の今後に不安を感じさせることとなった。

七　東京市政の腐敗

星亨逓信大臣・東京市会議員は、世間では、

「右手にステッキ、左手に金をもち、買収に応じぬ者に対しては、そのステッキをふるって押し通る」

といわれた。星の半生は、ステッキを持った人生であった。

嘉永三年江戸で生まれ、父が家出したため、貧困の幼児時代を送った。母が医師と再婚し、その養子となり星と名乗る。当初医学を志したが、一二歳の時に英語を学び始め、その後開成所の英語教師や、幕府の通訳、大阪府や神奈川県の英学校教師・教頭を務めたあと、英語の力が認められ、横浜税関長となった。

明治七年二五歳の時太政官から、英国派遣を命じられ、約三年間大学で法学を学び、英国の弁護士資格をとった。帰朝後、司法省に弁護士（当時は代言人）制度を建議し、わが国初の弁護士となった。

明治二九年駐米公使（高等官一等）に任ぜられ、二年間務め、その間米国との関税問題解決に貢献している。こうした履歴からは、頭の切れる英国紳士を思わせる。

一方、明治二三年四一歳のおり自由党に入党、四三歳で、第二回衆議院選挙に栃木県から立候補し当選、第二

議会で早くも衆議院議長に就任した。

星が政界から注目されたのは、大隈首相兼外相の訓令を無視して帰国、自由党と進歩党の合同で結成された憲政党を、元の二党に分裂させ、大隈内閣を倒閣に追い詰めたことからである。この時以来新憲政党（旧自由党）の実力者となり、山県内閣と提携し、重要法案に反対する党員をまとめ、次々に成立させていった。

伊藤博文の新党構想をいち早く聞くや、直ちに憲政党員全員を新党に入党させ、政友会の結党に協力、衆議院第一党の実力者として、中央政界の主導権を握る大物政治家の一人として認められたのである。

その星が、明治三二年市会議員半数選挙改選で、麹町区一級議員選挙に立候補して、東京市政の掌握に乗り出したのである。狙いは憲政党の拡大と、実業界への浸透などの理由のほか、急発展する東京市の利権を狙い、政治資金を確保することにあった。

新聞『日本』は五月二六日の紙面で

「星亨東京市に食い入らんとす」

との見出しをつけ、

「麹町区一級議員選挙の一級選挙権者は、総数一五名にしてその四人は三井家一族中の選挙者なるより、先ず右三井四家の投票を得んとして、井上伯に懇請し、其の添書を得て同家に赴き、漸く其の承諾を得た」

と報じた。中央政界の伝手により、難なく当選を果したのである。

もっとも、星は麹町区の公民たる資格有しておらず、同区長は無資格者と認め、公民名簿より削除されていた。東京市長は星の当選に疑惑ありとして、千家府知事と交渉し、内務大臣に伺書を提出した。しかし内務省地方局長は、山県内閣に協力する星に対し、強い姿勢を示すことはできず、外国に在勤（米国公使）したことにより、公民資格あり、として無効を取消した。このことが報道されるや、星の悪者像が定着した。

日清戦争後の東京は、市街地の拡大、市中人口の急増、商工業の目覚まし発展などにより、上・下水道、電燈、道路、海岸の埋め立て地拡張、市街鉄道の延長など、公共土木事業が急増していた。これらは公共的性格が強く、市長や市議会の認可事項であり、市会を牛耳ることにより、これらの利権に近づくことが出来たのである。

憲政党（後の政友会）の実力者星は、中央政界を動かす大物政治家であり、その利権が、政府にかかわるものであれば、所轄大臣や行政府高官と、強い交渉ができたのである。

星の政治手腕とその行動力を裏付けたのは、豊富な政治資金を使ったからでもあった。

星の資金源は、まず安田善次郎や古河市兵衛などの新興実業家であることが明らかになっている。それより大きな金脈は、ハワイ移民会社の機関銀行として設立された「京浜銀行」であった。ハワイ移住に協力した自由党は、ハワイで成功した移民会社の利益金と移民の個人資金を、この銀行に預金させた。そして金に不自由な議員に空手形で貸し付けたのである。星の命に従う者には其の儘に取り立てない、一方命に背くものには厳しく取り立てるので、借りた議員は服従せざるを得なかった。結局この銀行は整理されたが、不足金は六三万円（現在に換算して約百億円）に上った。今度は急発展する東京市の土木事業に目をつけ、市議会に参入したのである。

星の市会入りの前に、星派の利光鶴松（弁護士衆議院議員後現小田急創業）らを、東京市会議員として送り込んでいた。この星系議員らの収賄事件を、島田三郎（元進歩党）が主宰する『毎日新聞』が執拗に取り上げ、その後各新聞が追随競って報道し始めた。星派の東京市会議員たちが、市の水道用鉛管納入、量水器購入、汚物掃除請負人指定などで収賄し、関係業者の利益を図ったとの内部告発をもとに、暴露記事を連載したのである。

星派議員の汚職記事は伊藤内閣成立直後のことだけに、世間の注目を集めた。「星・利光一派の収賄を告発」（日本）、「星亨は巨魁なり」（毎日新聞）、「政友会の市政紊乱糾弾」（日本）などと追及は収まらず、ついに星自身に矛先が集中した。「星逓信大臣以下の醜類（悪人の仲間）」、「星攻撃の世論今や燎原の火」、「政界極度の腐敗に大隈伯憤慨」（いずれも日本）と、立て続けに指弾されたのである。

これらの報道により、井上馨は星に向かって、「切に辞職を勧告」、伊藤首相は星を呼び寄せ、「この際断然辞表を出すべき」と厳命したことが、詳細に報道された。その翌日、新聞各紙は「利光鶴松等の大物拘束」の見出しで、星派議員の自宅や事務所が家宅捜査され、そのまま東京地方裁判所判検事により、召喚されたことを報じた。

一週間後ついに星は、伊藤首相に辞表を提出するとともに、「潔白無罪」を強調した弁明書を発表した。この中で、

「公盗醜賊と非難されているのは、すべて政敵の醜詆悪罵のみである」

として、政敵の批判を受けて、検察が動いたことを主張したうえで、

「政敵の怨悪を買うこと深く、この騒擾（騒動）を致しめた」ことを謝した。その後星は、汚物掃除請負人を決定する際の収賄を告発されたが、証拠不十分で不起訴処分となった。しかし再告発され、不起訴となるや、また追起訴され、世間から非難を浴び続けたのである。

伊藤首相は、後任に若手官僚の時から高く評価してい

た幹事長の原敬を任命した。伊藤の理想にしていた政党を基盤にする政友会内閣は、組閣当初の伊藤系渡辺国武の大臣争奪が詳報され、早くも躓いた。今度は党人派の最右翼で、実力者星亨が社会から追及され、辞任に至った。最強かつ安定と思われた内閣であったが、相次ぐ不祥事により、政権の人気は下降せざるをえなかった。

収監され取り調べを受けていた、利光等星配下の東京市参事会員の収賄事件は、予審にて、汚物掃除請負人の指定、量水器、水道用鋳鉄管、水道用鉛管の購入について、いずれも収賄が認定され、公判に付されることになった。この予審内容（事件の詳細）についても、大きく報道された。

八　貴族院の抵抗

前山県内閣が衆議院の反対勢力に対し、憲政党との提携で乗り切ったのに対し、衆議院を押さえた伊藤内閣は、今度は貴族院に徹底して抵抗されることになった。

前内閣において、地租増徴案が成立し、財政問題については、当面問題はないと思われたが、北清事変の勃発により、またもやその軍事費用負担の為、増税の必要に追い込まれたのである。

伊藤内閣は、増税諸法案を衆議院で可決させたが、貴族院の頑強な反対にあった。貴族院が反対したのは、税収が軍事費補填の目的がすんだ後には、鉄道通信などの公債事業費にも使用されることになっていたため、そこに党利党略を嗅ぎ取ったからであった。

元々貴族院は、伊藤首相の政友会が、憲政党の基盤を基に結党され、山県内閣後の政権を担うこと自体に、快く思わない議員が多数いたのである。例外は木曜会領袖であった千家尊福ら少数に止まった。尊福は博文の目指す政党は、まさに国を最優先にしており、尊福の考えていた理想的な政党と一致していたのである。結党時博文は、二院制の確立を考えており、貴族院議員の入党参加は頭になく、また、自分の創った貴族院が反抗することなど、考えられなかったのである。

伊藤内閣は成立したものの、その実態は星らの旧憲政党が実権を握っており、しかも星派議員の東京市会における汚職事件が大きく報道され、伊藤の目指した政治は、急速に評判を落とし、貴族院の反対は次第に強くなっていた。

貴族院議員尊福が、明確に博文に反対した形となったのは、増税案を貴族院が一致して、否決することに決まったことからであった。さらには、東京府知事として、市政を混乱させている星等への反発があったのかもしれない。山県、松方、西郷、井上の四元老から、山県系議員や尊福など伊藤寄り議員の説得や、伊藤自ら「私の膝は百度折っても宜しい」とまで哀願する演説、反対する

貴族院の改革をほのめかしたことなどにより、一時揺れ動いたものの、結局貴族院はこれを一致して否決したのである。もはや貴族院では、自ら創り初代議長であった伊藤博文の威光は、政友会結党とともに、失われていたのである。

増税諸法案は完全に行き詰り、やむなく八日間さらに五日間停会された。この間も元老により調停は続いたが、打開の兆しはなかった。困り抜いた伊藤首相には、最後の奥の手である天皇に頼る以外、解決の道は残されていなかった。

三月一二日、明治天皇は近衛貴族院議長に「朕は速やかに廟謨（政府案）を翼賛し、国家をして他日の憾みを遺さざらしめむことを望む」との勅語を下した。まさに劇薬的効力をもたらし、貴族院は原案通り、直ちに可決したのであった。

新聞は、「貴族院、政府と正面衝突し、畏し！大詔貴院に下る」と大見出しで報じた。続いて「大詔渙発の奉請を為すに至りて　天下の義憤伊藤の上に集まる」と、伊藤首相のやり方を、厳しく非難した。貴族院研究会派の実力者岡部長職は「立憲政治にあるまじき奸策」として嘆き、その他議員も落胆したのである。

最後の切札を使ったことで、伊藤首相の信頼は大きく崩れてしまった。しかも一五議会閉会後、またもや財政堅実派の渡辺蔵相が、三五年度以降の「事業は一切中止」を主張し、他の大臣と衝突した。積極財政を唱える星は、混乱を起こした渡辺蔵相を、政友会から除名すべしとの発言を繰り返した。伊藤首相には、最早内閣を統一する気力は失せ、五月閣内不統一を理由に、総辞職を余儀なくされたのである。

第四次伊藤内閣成立時には、理想とする政党を三度目にして、ようやく創り上げ、衆議院の過半を占める政友会を基盤にした、盤石の内閣とみられた。にもかかわらず、貴族院の軽視から増税案に抵抗され、子飼いともいうべき渡辺蔵相に初めから、終わりまで振り回され、さらに政友会の実力者星派議員による東京市会での収賄事件が重なり、八か月という短期間で倒れてしまったのである。

九　星亨暗殺

世間からの非難を浴びて、逓信相を辞任した星は、依然として衆議院と東京市会の議員を続けており、三四年一月には東京市会議長に就任した。五月星の部下利光鶴松らによる東京市参事会員収賄被告事件は、東京地裁から有罪判決が出され、重禁固、罰金、追徴金など刑罰が言い渡され、これまでの報道が誤っていなかったことが明らかとなり、改めて社会から非難を浴びたのである。

それでも星自身は、東京市会では、議長として新たに東京湾大築港計画（羽田から墨田川までを埋め立て、横浜港以上の港湾施設を建設するもの）に共鳴して、東京市議会、参事会で、計画実現に精力的な活動をしていた。政府の支援を受けるため、所轄大臣や内務省に働きかけなど、並々ならぬ意欲を燃やしたのである。

六月二一日市参事会例会日の終了後、星亨は、松田市長・助役・参事会員らと雑談をしている折、突然伊庭想太郎（元日本貯蓄銀行頭取、四谷区議会議員、同学務委員）に暗殺された。斬奸状によると、これまでの星の政界や東京市における行動・挙作に対する幾多の罪悪に対するものであった。剣客であった伊庭の兇刀に

「思ふが儘に怪腕を振い来たりし一代の梟勇も、伊庭の利刀に一足喘ぎだもせず」

と、暗殺の状況を報じ、号外や続報・詳報が相次いだ。さすがにこのときばかりは、「巨星の死は、国家のため一大痛恨事」と、報道したのであった。

星の評価については、大きく別れる。急ごしらえであった憲政党を分裂させ、最初の政党内閣である大隈内閣を倒した。山県内閣と提携し、困難を極めた増税増徴法案を成立させた。伊藤博文の立党に協力し、立憲政友会に憲政党員全員を入党させ、安定内閣の道筋を開いた。こうした政界を読むその先見力と、清濁併せのむ行動突破力、党員を束ねる掌握力、東京大築港計画等のだれもできない構想力など、いずれも藩閥政治家にはいない、一代の英傑として評価するものである。

一方、その政治行動力を支えるには、巨額の政治資金を必要としていた。その捻出のため、一銀行（京浜銀行）をつぶし、東京市の公共事業に積極的に関与し、そこから多額の政治資金を得ていたとする、「公盗の巨魁」とみなす者も多い。当時の新聞や雑誌は徹底して星の負の側面を追及した。内部告発に基づく報道は、裁判でも多くは認定され、星は悪者との見方が定着した。

しかし死後残された個人財産は少額であり、大半は政治につぎ込まれたものであった。星は正・負両面を持った、稀有のまさに「大政治家」であったものと思われる。

あれだけ千家東京府知事を悩まし続けた星は、暗殺という思いもよらない衝撃的事件により、生命を絶たれた。この事件以後、東京市を監督する尊福にとって、不正事件で煩わせることは無くなった。星の死後、東京市政は落ち着きを取戻し、市政を巡る大きな不正事件は、姿を消したのである。こうして、星を巡る尊福の悩みは、突然解消したのであった。

おわりに

明治三四年五月第四次伊藤内閣は倒れ、翌月には政友会の実力者東京市会議長星亨が暗殺された。伊藤博文を尊敬する尊福にとって、伊藤の退場に、心ならずも手を貸すことになった貴族院の増税案反対には、複雑な心境であったであろう。しかも伊藤が頼りにした星亨の死は、知事として安堵する気持ちとともに、親近感を持ち始めた政友会の今後を按じたことであろう。日本という国を常に判断の基本におく尊福は、博文の描く理想とした政友会自体には、異存はなかったのである。

東アジア情勢は、北清事変の後、中国を巡り西欧列強諸国は、より積極的に領土拡大や権益を狙い、軍事同盟・貿易協商などを結び、各国は複雑に絡んでいた。わが国としても「臥薪嘗胆、他日を期す」を合言葉に、難しい国内政治状況をなんとか乗り切り、軍備強化を図ってきた。二〇世紀初頭には、自国の権益を守り、拡大させるためには、西欧の大国と同盟を結ぶことが不可欠となっていた。日本としては、英国か露国の二大国いずれかを選択するという大きな岐路に立たされた。

非戦論派の伊藤が再び組閣するのか、あるいは戦争を厭わない積極派の山県やその系列の人物に大命が下るのか、どちらを選ぶかによって、戦争につながりかねない重要な選択であった。五月から六月にかけて。元老でありしかも政友会総裁でもある伊藤博文をめぐる駆け引きが、これからの日本の行く末を決めていくことになる。

千家尊福東京府知事は、貴族院有力会派を率い、星亡き後の政友会に接近を図る。差し迫りつつある東アジアの緊迫した国際情勢に、貴族院議員として、政局に影響を及ぼすとともに、わが国の中心東京府の統治責任者として、引き続き府知事を続けていくことになるのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

明治時代の著述者

渋江保の一生（その八）

山本勉

第七期　東京横浜毎日新聞時代（東京）
一八八二年（明治十六年）一月～一八八五年（明治十八年）十二月

渋江は宝飯中学校での勤務を終え、一八八二年（明治十五年）十二月に東京に戻った。森鴎外の『渋江抽斎』その百四に当時の様子が次のように記されている。「抽斎歿後の第二十五年は明治十六年である。保は前年の暮に東京に入って仮に芝田町一丁目十二番地に住んだ。そして一面愛知県庁に辞表を呈し、一面府下に職業を求めた。保は先づ職業を得て、次で免罷の報に接した。一月十一日には攻玉舎の教師となり、二十五日には慶應義塾の教師となって、午前に慶應義塾に往き、午後に攻玉舎に往くことにした。攻玉舎は社長が近藤真琴、幹事が藤田潜で、生徒中には後に海軍少将に至った秀島某、海軍大佐に至った笠間直等があった。慶應義塾は社頭が福沢諭吉、副社頭が小幡篤次郎、校長が浜野定四郎で、教師中に門野幾之進、鎌田栄吉等があり、生徒中に池辺吉太郎、門野重九郎、和田豊治、日比翁助、伊吹雷太郎等があった。愛知県中学校長を免ずる辞令は二月十四日を以て発せられた。保は芝烏森町一番地に家を借りて、四月五日に国府から還った母と水木とを迎へた。」(1) ここにある「攻玉舎」とは、幕末から明治初期に掛けての教育者、近藤真琴（一八三一～一八八六）が設立した学校で、現在の東京都品川区にある攻玉舎学園の前身である。

渋江はなぜ一年五ケ月余りで宝飯中学校を辞して東京に戻ったのだろうか。『三河最初の中学校』には渋江の後任の校長として慶應義塾で英学を学んだ山崎程者のことが次のように記されている。「彼は渋江が明治十五年十二月九日東京へ戻ると、一時的に校長代理としての職務を行い、同十六年二月十六日渋江保の辞任が正式に決まると、同日付で宝飯中学校長に任ぜられた。二十四歳の若き校長である。渋江の退職によって、再び宝飯中学校には教諭はただ一名だけとなった。山崎はその後明治十九年九月に至るまで約三年半、校長の職務を遂行し、その間、明治十九年四月『中学校令』により、一県一公立中学校となって、大きな衝撃を受けたであろう。彼は同年九月退職願を出した。」(2) とある。また『渋江抽斎』には、「保は『横浜毎日新聞』の寄書家になった。毎日は島田三郎さんが主筆で、『東京日々新聞』の福地桜痴と論争していたので、保は島田を助けて戦った。主なる論題は主権論、普通選挙論等であった。普通選挙論では外山正一が福地に応援して、「毎日記者は盲目蛇におじざるものだ」と言った。これは島田のベンサムを普通選挙論者となしたるは無学のためで、ベンサムは実は制限選挙論者だというのであった。そこで保はベンサムの憲法論について、普通選挙を可とする章句を鈔出し、「外山先生は盲目蛇におじざるものだ」という鸚鵡返しの報復をした。これらの論戦の後、保は島田三郎、沼間守一、肥塚龍らに識られた。後に横浜毎日社員になったのは、この縁故があったからである。」(3) とある。森鴎外も『渋江抽斎』で触れているように、渋江は当時、東京横浜毎日新聞の寄書家になっていた。武田進平の死去に伴い、自らの身の危険や母五百の安全、また渋江自身の将来への不安や生活費のことを考え、島田三郎らとの縁により東京横浜毎日新聞社員になり宝飯中学校長の職を辞したと思われる。渋江の後任の校長人事についても、渋江同様、慶應義塾で英学を学んだ山崎が充てられたことも宝飯中学校を去る一因になったと考えられる。ここに普通選挙論についての記載が見られるが、渋江の民主的思想の一端が現れている。また、『鴎外歴史文学集第五巻』の注記6に、島田、外山の論戦について「両者の主張については「歿後」に拠るが、事実は逆で、島田はベンサムを制限選挙論者とし、外山は普通選挙論者とする。」(4) とあることを付記しておく。

渋江が東京横浜毎日新聞の記者になったことが『渋江抽斎』その百八に次のようにある。「保はこの年六月に京浜毎日新聞の編輯員になった。これまではその社とただ寄稿者としての連繋のみを有していたのであった。」(5) また、渋江が実際に横浜毎日新聞の記者として記事を執筆していることがわかる資料がある。この資料は東京横浜毎日新聞の記事『浜松紀行第二』（明治十八年十月三十日付）と『浜松紀行第二』（同年十一月五日付）である。既に参考書誌研究第六〇号の『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』の注記（15）において藤元直樹もこの記事の存在について次のように指摘している。「人脈的につながりのある『嚶鳴雑誌』での著名原稿はいくつか確認できるが、同新聞（引用者注：東京横浜毎日新聞）上に著

名原稿が確認できたのは入社後一八八五年十月三十日、十一月五日掲載の「浜松紀行」のみである。」(6)ここにある『嚶鳴雑誌』とは一八七九年十月二十五日創刊の自由民権運動期の政論雑誌で、沼間守一や島田三郎らが執筆した。『浜松紀行』については、実際に地元の図書館を通して国立国会図書館に問い合わせをしたが、やはり渋江の原稿が確認できたのはこの二つの記事のみであった。この記事の内容と符合する記載が『渋江抽斎』その百八に次のようにある。「保は枳園の求めに応じて、新聞社に紹介し、二三篇の文章を社に交付しておいて、十二日にまた社用を帯びて遠江国浜松に往った。然るに用事は一箇所において果すことが出来なかったので、犬居に往き、掛塚から汽船豊川丸に乗って帰郷の途についた。そして航海中暴風に遭って、下田に淹留し、十二月十六日によう家に帰った。」(7)とある。しかしこの記載には若干の相違がある。渋江は伊豆半島の妻良港(静岡県賀茂郡南伊豆町妻良)へ流され、陸路下田へ赴き通快丸にて帰京している。このことが『浜松紀行第一』には次のようにある。「余は是迄の苦痛と危険とを懲り殊に該船の着京は到底覚束なきを以て□然陸行することに決し該夜は妻良に宿泊し翌二十五日陸行下田に到り通快丸の便を待ちて昨日帰京したり」(8)渋江はこの帰京の長旅により体調を崩している。『浜松紀行第一』には「嗚呼豊川丸が舞阪港を解纜してより一週日一たびは下田に碇泊し再び妻良に吹返され猶ほ進行すると能はず余の如きは第一帰京を急ぎ第二費用を節せんと欲して乗船せしに予期に反して時間と金銭とを浪費し加ふるに精神を苦しむ身体を疲労せしめ四失一得なし然れども既往は咎むるも及ばず将来世の旅行をなさんと欲する者は予しめ注意しておくべきことなり」(9)とある。『渋江抽斎』その百八によれば渋江の帰京は「十二月十六日」とあるが、『浜松紀行第一』の記事掲載の東京横浜毎日新聞には一八八五年(明治十八年)十月三十日付とあるので、帰京は当然十月三十日前と考えられ、『渋江抽斎』記載の日付とは合致しない。『抽斎歿後』では確認できなかったが、この点について『森枳園傳』に『渋江抽斎』と同様のことが触れられている。『森枳園傳』においても、渋江の帰京の期日は「十二月十六日」(10)とある。鷗外文庫書入画像データベースの『森枳園傳』の説明文には次のようにある。『渋江保筆の原稿を鷗外が一冊に綴じた本。鷗外は、大正五年(一九一六)一月一九日付渋江保宛書簡で、保に対して執筆の礼を述べている。また、同年一月二十四日付保宛書簡では、その原稿を受け取ったことを報じているので、本書もこの時期の成立と考えられる。『渋江抽斎』中の森枳園に関する逸話の多くは、本書に依拠している。』(11)渋江執筆の『浜松紀行第二』には、結びに「未完」(12)とあるので、浜松紀行の続編を掲載する予定であったのであろう。しかし体調を崩したのか何らかの理由により浜松紀行の続編は執筆しなかったと思われる。渋江は程なくして新聞記者の仕事を辞することになる。

注記

(一) 森鷗外『渋江抽斎』(中公文庫　一九八八年十一月十日)二八七頁

(二) 山田東作・武田二夫『三河最初の中学校』(ちぎり文庫　一九八一年十一月三日)三二六頁

(三) 森鷗外『渋江抽斎』(中公文庫　一九八八年十一月十日)二八八頁

(四) 『鷗外歴史文学集第五巻』(岩波書店　二〇〇〇年十月一四日)三二一頁

(五) 森鷗外『渋江抽斎』(中公文庫　一九八八年十一月十日)二九九頁

(六) 藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』(参考書誌研究第六〇号　二〇〇四年三月)一一四頁

(七) 森鷗外『渋江抽斎』(中公文庫　一九八八年十一月十日)二〇〇頁

(八) 渋江保『浜松紀行第一』(東京横浜毎日新聞　一八八五年十月三十日)

(九) 渋江保『浜松紀行第一』(東京横浜毎日新聞　一八八五年十月三十日)

(十) 渋江保『森枳園傳』(鷗外文庫書入画像データベース　大正初期)三一頁

(十一) 渋江保『森枳園傳』(鷗外文庫書入画像データベース　大正初期)

(十二) 渋江保『浜松紀行第二』(東京横浜毎日新聞　一八八五年十一月五日)

夢夢夢

匠　克仁

夢夢夢は「ぼうぼうたるゆめ」と読ませる。143号は夢夢夢という題だけ決めて書き始めた。同じ漢字三字の夢夢夢は、太太太・男男男・上上上のシリーズであるが夢夢夢でこのシリーズも終わりである。もっとも今回は夢夢夢1としないといけない。というのは、144号が夢夢夢2になるからである。なぜ、こうなるかというと夢夢夢がただ締切に間に合わなかったのである。今回の夢夢夢はいつもよりも少ないエッセイになる。ゆめゆめ夢夢夢を諦めるな、と頑張ったが締切になった。本当は夢夢夢夢夢を諦めるな、と表現したかった。ゆめゆめは夢夢でなく努努と書くのが正しいのである。ゆめゆめを夢夢とゆめゆめ書いてはいけない。ちなみに、ゆめゆめ夢夢でなく努努は「けっして」という意味である。また夢夢でなく努努はゆめゆめ肯定文で使わない。音読みで夢夢は、ぼうぼうと読む。『詩経』大雅が出典で、「視爾夢夢我心慘慘」とある。爾（なんじ）、つまり、あなたの夢夢たるを視て、私の心は慘慘である。この記述にある夢夢は、乱れた様子、暗い様子という意味である。題は夢夢夢「ゆめぼうぼう」と読んでもよい。みだれた夢で夢夢に夢が乱れる。愛燦燦・涙そうそうみたいだ。また夢夢しだと非常に少ない意味の古語になる。この場合の夢夢は、ゆめゆめと読ませる。辞書に「煉貫水の大津酒夢夢しうござりますれども」浄瑠璃とあった。現代は『夢夢しい女たち』（矢代静一）という小説がある。ここで夢夢しいというのは現実離れした理想の恋を望むことを夢夢しいと表現したようである。全く関係がないのだが夢夢（むむ）ちゃんというパチンコのキャラがある。

夢夢の部首はくさかんむりと勘違いしそうである。それか夢は見るものだから寧と同じ目と考えそうである。実は夢の下の「夕（ゆうべ・ゆう）」が部首である。なぜなら夢は夕つまり夜に見るものだからである。

夢を見ていて、本当にその世界に没入する。文字通りの夢中なのである。ところで、よく間違える熟語に、五里夢中というのがある。正しくは五里霧中である。

夢は見る人と見ない人がいが、ぼくはよく見る。ここで夢といっているのは未来の希望でなく寝ている間に見る夢である。もっとも、ぼくの場合は、起きていても白昼夢を見る。普通に日常生活を送っていても、現実なのか夢なのか区別が付かなくなる。今回は夜に寝ていて見る夢についての話である。

夢の大半はほとんどがゴキブリ男になるとかくだらない夢である。一大スペクタクル巨編のスケールのでっかい夢も見る。たまにエッセイのネタになるような役に立つ夢を見るので、そのまま書いている。

夢で五年間も解けなかった密室トリックが浮かんだので夢には感謝している。

夢の中で夢と気付きながら、見続けることもある。明晰夢というのが正式名称である。

夢の中で夢を見るときも多い。これは正式名称では夢中夢という。

夢に見たことが将来、実現することがある。これを予知夢という。もしかしたら、ゴキブリ男になることが予知夢かもしれないと心配している。

夢を辞書で引くと、たいてい五つの意味が載っている。

夢①　睡眠中の幻覚
夢②　未来の希望
夢③　現実離れの空想
夢④　心の迷い
夢⑤　儚いこと　ちなみに、夢⑤の例文として「人生は夢だ」とある。

夢は他の辞書で、現実と離れた甘美な状態とあった。

夢の左に人偏をつけると儚い（はかない）になる。儚い夢である。ぼくは言葉の発音から色々と妄想する。儚い夢から、履かない靴、穿かない変態、吐かない酒などが夢の中で浮かんだ。墓ない幽霊、歯がないドクロなども夢に出てくるのである。

夢でダジャレを思いついて、寝言を言う。大声で「儚い夢、穿かない変態」と満員電車の居眠り中に叫んだ。

夢を叶える夢を見たのである。最初に使われている方の夢が②の意味で、下が①である。

夢のような夢である。

夢を叶えるといっても、他力本願である。

夢の中で、どんなに無茶な要求でも三つは叶えるという夢の神様が出現したのである。ぼくは無神論者なのだが夢神論者で、困ったときだけ神頼みする。

夢の神様は、中性っぽくって、すごく優しい感じで竹

久夢二が描く絵に出てくるような落ち着いた様子だ。徳川夢声のような話し方をする。雰囲気としては、ちょうど夢野久作の小説のように神秘的である。現代的には井上夢人の小説のようである。BGMには、ビートルズの『夢の人（I've Just Seen A Face）』がかかっている。

夢で真っ先に頭に浮かんだのは、チンチンが百個欲しい夢なのだが、諸般の事情により断念した。それの代りの夢で百万円欲しいと言おうと思ったのだが、どのような夢でも叶える神様だったら、百億円でもと悩んだ。無我夢中で何とかがめつい願望を言おうと思った。

夢の神様にぼくは「ちょっと待って」と言った。瞬間に夢の一つが実現したのである。

夢の神様は、本当に、ちょっと待ったのである。ぼくは夢を無駄遣いした。「さっきの取り消し」と言った。その夢も実現した。「ちょっと待って」「さっきの取り消し」で夢が二つ無くなったので、残りあと一つになった。

夢の神様はちょっと待つのを取り消したので「早く次の夢を言えー。イエー。家ー。遺影ー」と急かした。

「夢の数を無限にする夢を実現して」とぼくは言った。

夢の神様相手に激しい交渉をする。しかし、その前に「夢の数を無限にできるか、教えて」とぼくは質問した。

夢の神様は「できます」と答えた。教えてというぼくの夢を実現した時点で三つ全部が使い果たされた。

夢を無限にすることは四つ目にカウントされてしまって夢が実現することが無かった。悔しがっているところで夢から覚めた。

夢の中でもぼくは論理的である。不思議に予定調和的な夢を見る。

夢は叶わないことを、逆算した上でプロットを組立てて夢を見ている。

夢のシナリオライターがぼくの深層心理にいる。そんな夢を本当に見るのかと疑う読者がいるかもしれない。

夢を見る前、つまり、寝る前に原稿を書くので、続きを夢に見るのである。

夢から覚めて、その内容を原稿に書くのである。今回の夢の話は少し変えた。チンチンが百個になるというのを夢で願って、本当は現実に叶った。ヴィジュアル的には夢の神様が「言えーイエー」言ったときに、家と遺影が夢の中で飛び交うのである。反対に自分の書いた文章を夢でそのまま見ることがある。実際は、エッセイが先か夢が先か、パターンがあるが、本当によく見る。こんな夢を見た、というエッセイを書いている自分自身の姿を夢見るのが最近は多くある。締切が近づくと、まんじの夢を見る。まんじの原稿のような文字が多くあらわれる夢を見るのである。例えば、昨日見たのは次のページの夢である。せっかくなので最後の締めは、夏目漱石の『夢十夜』のような感じにして、終わろうと思う。こんな夢を見た。

酉年表紙画「木鶏は動ぜず」についてのあれこれ

田寺怜葦

今年は酉年です。毎年の干支を「まんじ」の表紙画にと、お取り上げいただいたのが戌年でしたから、ちょうど一巡したことになります。

思い返せば、長いようで短い十二年間でした。

表紙画を描く事によって自らも成長出来た年月でもあります。

三戸岡先生をはじめ、「まんじ」の皆さまには心より感謝申し上げます。

さて今年のコブッタさんですが、初めて笑顔ではないのにお気づきでしょうか。

コブッタさんは不動明王に扮しているのです。酉年の守り本尊が不動明王だと知り、このようなシチュエーションを思いつきました。

出来れば表紙画を見る度に、皆様が笑顔になって下さるようにと心掛けてまいりましたが、今年でひと巡り、ちょっと締めてみようかと…。

往年の名横綱双葉山と日本随一の陽明学者であり、政治家、哲学者でもある安岡正篤氏とのエピソードにヒントを得て構想を練りました。

題名も「木鶏は動ぜず」少し難解で硬派なものとなった次第です。

双葉山が残した名言「われ未だ木鶏足りえず」は勝負の世界で生きる人なら誰もが抱えている課題かと思われます。

驕り、怯えを払拭し、無我無心の境地になるのは生易しい事ではありません。

苛酷な修行を積んだ高僧でも、なかなか到達できない境地ではないでしょうか。

余談になりますが、２０１５年2月の衆院予算委において、自ら発した野次で民主党（現・民進党）の反発を買った安倍首相が「いまだ木鶏足りえずという気持ちだ」と答弁したそうです。

これを中国メディアが取り上げ、「日本の安倍首相が、中国の名著『荘子』を典拠に野党の質問に答えた。」と報じました。

日本にとっては久しぶりの長期政権を担い、海外からの評価も高い安倍総理大臣です。木鶏の態で、混迷を続ける今の世界情勢を乗り切っていただきたいと切に願っています。

編集後記

今年最初のまんじ一四三号の発刊を、同人皆様と共にお慶び申し上げます。

本号より毎年お世話になっています画家田寺怜葦先生の表紙絵が変わりました。絵の本旨については田寺先生からご寄稿を戴いておりますので、まんじ誌をご覧ください。

本年に入り一月に三戸岡道夫氏のご紹介により、新たに永田俊一氏を同人としてお迎えしました。永田氏は信託協会副会長・専務理事等を歴任され、「信託のすすめ」等多くの著書を発刊されておられます。今後、まんじ誌へのご寄稿を楽しみに期待したいと思います。

いよいよトランプ氏がアメリカ大統領に就任しました。早速米国ファーストの言動が現れました。素人の私ですが世界の中で国力トップのアメリカが、外交にしても、経済にしても、相手を思いやる気持ちと行動を表さなかったら、世界はどうなるのでしょう。しばらく発言と行動を注視して見たいと思います。

今日の新聞でエルサレム問題の懸念を報じていました。これはアメリカとイスラエルの利害の一致からのことであり、中東諸国におけるエルサレムの信仰的位置の重要性をどこまで考えているのか全く分かりません。今後の中東問題に大きな影響が出るような気がします。

末筆ですが、今年もまんじ誌に、同人皆様が健筆を奮われることを、心から祈念申し上げます。

（鍋）

まんじ第143号

平成29年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 045（346）2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東ワークス・モトヤマ（日東印刷株式会社）
〒154-0016　東京都世田谷区弦巻3-13-18-202

表紙の絵について
「木鶏は動ぜず」
田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.144

2017.5.1

まんじ第百四十四号　目次

椿花抄……三戸岡道夫……4
「ジパング円」は「金本位制」？……新井宏……31
策に溺れて自滅した将軍補佐役　松平定信……千坂精一……39
初フルマラソンを涙のゴール……安藤剛……55
内田国の『いなぎ』物語……横山正義……67
次世代インターネットと人工知能……大貫陽平……74
短歌　行雲流水（五十二）……石黒修身……78
漢詩　潮汐録（八十七）　漢詩の流れ《75》……鯨遊海……82
汲深録（八）……松井秀人……85
「信託の起源」1……永田俊一……87
　信託遺贈―ザルマン―ユース

古い物・遠い夢　逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）……忠内正之……113
人たらしの文章　―司馬文体の魅力―……山田嘉久……122
『時評家　新明正道』（評伝その八）……山本鎭雄……131
「農ある暮らし～私の日常～」（3）……古屋富雄……140
世界の国旗から学ぶ（第三回）……米村典紘……145
性と化粧の物語（八）……鈴木守……156
千家尊福伝（一五）……村上邦治……165
　―帝都騒乱に立ち向かった東京府知事―
神（仏）と人間はどんな関係？（二）……鍋屋次郎……183
明治時代の著述者　渋江保の一生（その九）……山本勉……193
夢夢夢2……匠克仁……198
編集後記……編集子……203
表紙　絵……田寺怜葦

椿花抄

三戸岡道夫

椿の花には、なにか暗くてなまめかしさがある。

（一）

駅を降りると、目の前にH城の天守閣がそびえて見えた。

H城は平山城である。H市の東部の丘の上に、すっくと五層の天守閣がそそり立ち、その千鳥破風や唐破風が乱舞するさまは、あたかもH市に浮かんだ壮麗な軍艦のように見えた。

H市を訪れたのは初めてである。駅から道はまっすぐに東へのび、その突き当りにH城はある。恵介はその一直線の駅前大通りを、ためらわずに歩いた。

大通りはきれいに整備され、見事な並木通りが限りなくつづいて、その柳や銀杏の枝々からは、煙のようにかすんで見える早春の若芽が、いっせいに芽ぶいていた。

H城は一名、椿城とも呼ばれていた。

城中には椿の木がいちじるしく、H城の丘は、全山が椿の山といえばよかった。花盛りの季節、その花の美しさは全国的に有名であった。春秋の二回、椿城はそのおびただしい椿の赤い血のような花群によって、びっしりと飾り立てられるのであった。

恵介は城に向かってまっすぐに歩き、城に次第に近づくと、天守閣の高みが目の前に迫ってきた。全山を覆った椿の森が、南国の早春の光の中にその肉厚の葉をつやつやかに光らせて、その色つやを競いあい、その群緑の茂みの間に真紅の花がなまめましく咲いて、無数に点在していた。その椿の花の山上にそそり立つ白亜の天守閣を、恵介はま近に見上げた。

大通りが途切れたと思った瞬間、城の濠にぶつかった。

濠の水は古めかしく、凄いような深い緑色によどんでいた。そしてその青い水面に、石段と櫓の白壁とがさかさまに映って、さざ波にゆれていた。そしてその映像が一段と華麗に見えたのは、水面にも真紅の椿の花が点々と映っているからだった。その白と赤との映像は、何か城に伝わる妖美な正体の一端を、そこにかいま見る気がした。

右手の奥が裏門の方角のようであった。その裏門の濠の水は、さらに濃く、深く、暗く、木の茂みが水面を覆っていた。その中にはひときわ茂った竹藪が、乱れた女の髪のように濠の水面に落ちかかり、そこにも点々と落椿が散っていた。

恵介は道を左手にとって、大手門に入った。そしておびただしい椿の花群をくぐり、白壁と石垣の間を抜け、いくつかの門をくぐり、暗い廊下を通り、急な階段を登って、天守閣へ登った。

天守閣から見下す眺めはすばらしかった。右手にはH市の街並みが一望のもとに見下ろされ、左手には平野や丘陵が広々と拡がって、その先に海が見えた。恵介は、H市がこんな広々とした緑の中にあったのかと、なにか新しい発見をしたような気になった。早春の芳醇な光が一面に野にみちて、その色彩豊かな山野が、つややかな椿の森越しに見えるのであった。

恵介は天守閣を降りると、各階層の内部をゆっくりと見て歩いた。恵介がこれから手がけなければならないH市百年史を書くに当たって、なにか参考になるものを、自分の感覚で少しでも捉えなくてはならないと、思ったからである。

ウィークデーなので見学者は少なく、時々、廊下の暗がりやせまい階段で、まばらな見学者とすれ違うだけで、城の中は暗く、森閑としていた。

長い風雪に堪えて生き残った廊下や、階段、広間、小部屋、それに荒々しく組まれた天井の材木の重なりなどは、古びて、黒い。それが外界の光を遮断した暗がりの中で、人の気配をうかがう猫の眼のように黒光りしていた。その黒々とした光は、長い歴史の時間の中で、この城に関係のあった多くの人々の恨みや溜息、血と涙とをたっぷり吸い取って、いまだに命長らえている艶のように思われた。城内いちめんに立ちこめるそのような闇には、戦国時代や江戸時代そのままの呼吸が、そこに息づいている妖しさを感じた。

天守閣は昔そのままの姿で保存されていたが、二層、三層、四層の広間には、この城の遺品や記念品などが陳列されていた。それは主として、櫓や屏風、刀剣や甲冑、着物や手廻りの工芸品などであったが、特に三階の半分ほどのスペースには、数十点に及ぶ絵が飾ってあっ

た。

しかしこれは城の遺品ではなかった。明光院と称する、女性の描いた絵である。

城の遺品が城中に飾られているのは珍しいことではないが、城の住人の描いた絵が大量に保存されている例は珍しい。明光院という女性は、よほど優れた人物だったのであろう。

その明光院は、H藩中興の祖といわれた三代目藩主、正興の生母であった。明光院は淑徳高き賢夫人であり、正興が幼くして藩主の地位を継いだので、生母である明光院がしばらく後見の役をつとめた。正興が成人してからは、もちろん身を引いて表に出ることはなかったが、しかし蔭ながら正興の政を見守り、正興がH藩中興の祖といわれるようになったのは、ひとえに明光院の蔭の力があったからである。

しかしそうした活躍と並行して明光院は絵をたしなみ、その画境は素人の手すさびの域を脱して、専門家の域に達していた。

そこに年代順に飾られている絵を見ると、確かに最初の方はまだ素人らしいところが残っていたが、その技量は急速に進歩して、途中からは専門家の絵の中に置いても、少しもひけを取らない絵となっていた。

絵の主題はほとんど女性の姿を描いたものが多かった。そしていずれも繊細な感覚で、清らかにまとめられていた。

その中で、「春怨」と題する絵が恵介の眼をひいた。

ほんのりとしのび寄る夕暮れの中に、漣洒な粧いの佳人が、もの憂げに立って、暮れなずむ残照の一点を見つめている。ほんのりと淡い水色の衣の下に、わずかに見える小袖の赤い色が、まるで闇にもえる炎のように見え、女の顔は夕闇に浮かぶ白い幻花のように見えた。

次の一枚、「清少納言」と題する絵がある。香炉峰の雪をと、御簾をあげている図である。画面の半ば以上に青々とした御簾が垂れさがり、その御簾ごしに清少納言の黒髪や、白い顔、そして十二単の美しい重なりが見える。前景は、竹に積もった雪。まるで洗いあげたように、すがすがしく、華麗な絵である。

「蛍」という絵があった。丸髷姿のしっとりとした妻女が、すだれに手をかけている。すだれの重なりは二つに割れて、ゆるい弧を描き、その半月形の隙間から、団扇片手の女がすらりと立って、庭にとぶ蛍を見つめている。そのすらりと、たおやかな姿は、まるで薬師寺の吉祥天を思わせる。

「羽衣」という絵。七人の天女の舞楽の図である。中央の天女一人以外は、遠景の群舞になっている。大空は金に塗られて輝き、天女はそれぞれ手に楽器を持ち、朱や緑や純白の羽衣が天に舞い、天女の顔や腕の白さがまばゆいばかりである。

次は「湯けむり」。絶世の美女といわれる楊貴妃の湯あみの艶麗な姿を描いている。うすい衣の下に、湯あがりの肌が透けて見えて、匂うようである。朱塗りの障子のかげに侍女がかしずいていて、楊貴妃の髪飾りを直している。

「御殿女中」という絵。黒塗りの駕籠の横に、美しい掻取姿の御殿女中が立っている。あたりには桜吹雪が散り、花見の帰りなのでもあろうか、その花吹雪の梢を見上げた白い横顔が美しい。

次に「春の雪」。春の雪の中を、傘を片手に女が立っている浮世絵風の構図である。雪の冷たさの中に立つ女の姿の中からは、春の気配がただよってくる。

絵は次々と現れては、尽きなかった。

初期の作品には、吉祥天女像とか、源氏絵巻の女性、あるいは三十六歌仙の小野小野など、原画の模写に近い作品が数点あったが、これは習作期の作品であろう。

その後は、自分独自の画風が確立されて、題名も、中世から江戸時代まで、あるいは古代中国、そうかと思うと御殿女中から町娘、あるいは能の世界や浮世絵の美人画からヒントを得たと思われる構図まで、さまざまに幅広い美人画が、繊細華麗にかつ清楚に描かれていて、それはすばらし画境であった。

二百年も前の江戸時代の女性が、かくも素晴らしい絵を残したということは、驚異だと恵介は思った。

見終わって恵介は三階のその広間から出た。

暗い廊下に出ると、今の華麗な世界を見ていたことが、嘘のように思われた。

恵介は二階へ通ずる暗い階段を降りたが、その古い、がっしりと組まれた、黒く光った暗い階段をふみしめる恵介の中に、ふと、

(あの一連の清楚な美人画の女性には、どれにも妙な、なまめかしさがあるな)

という美人画とはちぐはぐな印象が、なぜか残った。

恵介がH市に来たのは、椿城の見学が目的ではない。

H市は市制をひいて今年で五十年になる。市制五十年の記念行事として、H市史の編纂が計画され、その取りまとめと執筆とが、恵介のところに持ち込まれたのである。

H市へはまだ一度も行ったことはなかった。しかし名城H城のある街であるということと、そのH城を椿城と名づけせしめている、濃艶に咲き乱れる椿の花の美しさに心ひかれて、恵介はこの仕事を引き受けた。

H市は城下町として発達した町である。だからH市史をまとめようとすれば、勢いH城の歴史を遡らなくてはならない。

そのため恵介は駅に降りると、依頼を受けた市役所へ

行く前に、誰からも先入観を与えられる前に、まず自分の眼で椿城を眺め、自分の肌でその雰囲気を感じ取っておきたいと、一人で天守閣まで登ったのである。

椿城で時間を取られたので、約束の時間よりだいぶ遅れ、市役所では恵介の到着を待ちかねていた。

市役所に着くと、恵介は型の如く、市長、助役、収入役と、三役の挨拶を受け、さらに市制五十年記念委員会長に引き合わされたが、こうした肩書を持った連中は具体的な仕事の進行にはほとんどタッチせず、最後に広報課にバトンタッチされた。

広報課には若い係員が揃っていて、前もっていろいろな資料が集められていた。恵介は、

「とにかく一度資料を拝見させていただきましょう」

と、参考資料の山を眺めた。それは古文書や古雑誌、持ち出しできないものは、コピーしたものがホチキスで止めてあった。

「先生、まだ何か足らないものがありましたら、おっしゃって下さい。すぐ探して取り揃えます。」

「まあ、一度よく読ませていただきましょう。これだけあれば多分大丈夫でしょう。」

恵介は資料の山を眺めながら、

「できたら、少しH城の資料も拝見したいですね」

と聞いてみた。

「ええ、この中にも少しは入っておりますが…」

と係員は答えてから、

「もっとくわしいものでしたら、H城の管理事務所まで行かないとありませんが…、よろしかったらご案内いたします」

若い係員はきびきびそう言って、恵介を車でH城まで連れて行ってくれた。

恵介は先ほどくぐった大手門を、もう一度くぐった。門を入って左手の、三の丸に近い物見櫓の中が、管理事務所になっていた。市制五十年記念行事のことはこの事務所の方にも徹底していたので、話はすぐ通じた。

さきほど恵介が市役所の広報課から受け取った資料の中にも、ここから借り受けたものも少しあるようであった。

恵介は管理事務所の職員からもいろいろ話を聞き、また所蔵している資料をいろいろと見せてもらった。そして必要なものは、その場で直ちにコピーしてくれた。

こうして恵介は山のような資料を鞄に詰めこみ、さらに風呂敷にも包んで、駅に向かった。持ちきれないものは、後日郵送してもらうことにした。

列車が動き出した。

すると車窓に椿城の天守閣と森が見えた。H市の上空に白い羽を広げたような椿城の姿は、列車がスピードをあげるにしたがって、急速に視界から遠ざかっていく。そのあっという間に姿を縮めていく天守閣を恵介は眺めながら、その暗い天守閣の中にある華麗な絵の数々と、真青な濠の水面に散る、赤い落ち椿の群を思い出していた。そして同時に、ふと、

「なぜ、あの絵に描かれた女性には、変になまめかしいところがあるのだろう」

とふたたび恵介は思った。

（二）

明光院のこと、そして彼女の描いた数々の絵のことが、妙に恵介の頭の中から離れなかった。

家に持ち帰った資料を丹念に読み、H市史の構想は次第にまとまっていったが、それにつれて明光院のことも少しずつ明らかになっていき、明光院への関心が次第に高まっていった。

とくに恵介の関心を引いたのは、あの日椿城でコピーしてくれた資料のなかに、明光院の日記があったことであった。いや、日記というとりも、たんなる手記、あるいは随筆集とでもいったほうが適切なのかもしれない。その日、その時の感想を、思いつくままに明光院が書きつづったもので、表紙に「椿花抄」と書いてあった。

明光院はH藩二代目の城主、成興の正室であった。しかし成興は若くして死去した。

そこで彼女も髪をおろして明光院と称し、城の郭の一角にある椿屋敷と称する屋形に入り、世間から身を引いて、ひっそりと暮らしていた。しかし今はもうその屋形は残っておらず、森閑とした屋敷跡には、椿の花だけが咲き乱れ、散っている。

世継ぎの正興はその時わずか九才にすぎなかったが、その幼さで家を継ぎ、H藩三代目の君主となった。後見には叔父に当たる興之丞が当ったが、それは形の上だけのもので、実際に幼い正興を補佐して藩政をみたのは、生母である明光院のようであった。

正興は十五才で後見を解かれ、藩政治の中心に座ったが、藩史によると正興はH藩の中興の祖とよばれる名君であった。藩内の産業を興して経済の復興をはかり、領民の生命財産をよく保護し、秩序を守った。しかしそれは正興の生まれながらの聡明さもさることながら、陰で正興を助けた明光院の力が大きかったものと思われる。

椿城に展示された絵の中に明光院の肖像画が一枚あった。それを恵介は思い出してみた。

それは完成された絵ではなくて、まだ未完成のもの、あるいは素描かもしれないものを表装したものであったが、それだけにかなり写実的に描いてあって、明光院の面影を彷彿とさせていた。意思の強そうな、気品のある美貌の顔で、H藩中興の祖の母堂にふさわしい、姿であ

った。

その肖像画を城中で見たとき恵介は、細川ガラシャ夫人像と、北政所像を一緒にしたような感じだなと思った。最初、その絵は明光院自身の筆になる自画像かと思ったが、しかしそうではなくて、別の絵師の筆になるもののようであった。そう言えば、筆の勢いがきびしくて、強く、女性の筆の線ではない。とすると明光院の絵の師匠の手によるものなのであろうか。

正興が十五才で任官して、名実ともに藩主の座に座ると、そこで明光院は藩政からすっかり身を退いた。ちょうど三十台半ばの、女盛りであった。しかしその熟れた身を否定するかのように、絵の世界へその余生を投げていったのである。

しかし明光院の絵は余生を送る手なぐさみといったようなものではなく、絵の世界へのうちこみようは非常なものであった。そのために最後は専門家の域に達しており、「椿花抄」をひもとくと、手すさびに絵の余生を送ったというような生やさしいものでなく、後半の人生を絵の道専一の精進に捧げた有様が、随所に出てくる。

たとえば写生である。

写生や、デッサン、模写が、絵の修業には欠かせない常道であることは、今も昔も変わらない。あまつさえ明光院の時代には、現代のようにカメラもなければ、印刷もない。従って画集が出るということもないから、自分が眼で見たものを、自分の手で写し取る以外に、その図を自分の手許に残す方法がないのである。そのため明光院は写生や模写に、狂奔したのである。

どこかにいい絵があると聞くと、明光院は紙と矢立てを持って駈けつけていった。そしてその絵のすぐれた部分を、写させてもらった。だから明光院は外出するときは、どんな場合でも、矢立てと写生帖を携えていくのを忘れなかった。そして草花、野や川の眺め、屏風絵の一部分、古い絵巻物、能面、佛像、なんでもいいと思ったものは、せっせと写生帳に写しとっていた。ある寺の秘蔵の佛画に感心したときは、一日中座って、それを模写していたことなどもあった。

とりわけ模写のすさまじさは、明光院の師が大作を描いたときであった。明光院は勉強のために、その絵を模写したのである。昼間では師の制作の邪魔になる。そこで明光院は朝はやく、まだ暗いうちに起きて、師の画室に通って模写にはげんだのである。しかしこれには師の方が困ってしまった。藩主の生母がわざわざ早朝に、絵師の画室に通うなどということは稀有である。

「模写が必要ならば、私がその絵を持って城中に参上いたします」

と言っても、明光院は聞き入れなかった。絵の道に王道はないということか。

写生帖は厚いものから薄いものまで、いろいろあったが、明光院が精根つくして集めた写生帖は、三十冊ほどにも及んでいた。そして三階の絵の展示場の、ガラスケースの中に展示されていた。色糸や銀糸などで丹念に綴じられたものもあれば、麻糸でそっけなく綴じたものなど、形はさまざまであったが、いずれも女性特有の繊細な線で森羅万象が刻明に写しとられていた。しかしどの写生帖も使い古して手垢によごれ、そこには貧婪なまでに真摯な明光院の絵への精進の姿と、女の執念の凝固を見る思いだった。

こうした明光院の絵の精進のすさまじさは、「椿花抄」の随所にでていた。

いったん絵を描きはじめると、徹夜で絵を描き上げることも、しばしばであった。

「春怨」と題する名作がある。恵介が展示室の中で見て、最も印象に残って絵の一つであるが、このときなどは三日間も徹夜した。

徹夜といっても少しは休むのであろうが、夜中までは一心不乱に描きつづける。疲れると絵筆をおいて、シュンシュンと煮えたぎった茶釜から湯をくんで茶を立て、お薄茶を一服飲む。寝静まった城内には物音一つせず、ただ黒々と茂った椿の茂みを包んで、闇が無限に拡がっていた。そのしじまの中に端然と座って、ゆっくり茶を喫していると、精神が鎮って、眼が冴えてくる。その勢いをかりて、その翌日も徹夜の延長をして、描きつづけるのであった。

「春怨」を描いているときのことである。

「春怨」の画面は、しのび寄る夕暮のなかに滓洒な粧いの佳人がものうげに立って、暮れなずむ残照の一点を見ている絵であるが、ほんのりと淡い水色の衣の下に、わずかに見える小袖の色合いが、明光院にはなかなか思いつかなかった。

考えに考えあぐねて、夜が更けた。明光院は画境の壁に付き当たったような気がして、力のない手で散乱している絵筆や絵具皿の片付けをはじめた。だがその時、絵具皿のはしに着いている色が、ふと眼にとまったのである。それが疲れた明光院の眼には、不思議な新鮮さに映った。

なにか神秘的にもえ上がった朱の色。いつのまにこんな色が出来たのであろう。この色こそ探しあぐねていた小袖の色ではないか…。こうして小袖の色にたどりつくと、やっと白い幻花の「春怨」のイメージが出来上がったのであった。

そうなると再び右手は絵筆をにぎって、疲れも忘れて画境に没入していった。そうなると明光院は絵の鬼である。描きだすと、絵筆を止めようとしても止まらない。絵より外のことは明光院の中には一切なく、時のたつのも忘れて夜を徹し、知らぬ間に朝はしらじらと障子の外に来ていた。

明光院はつねに清澄な絵を描きたいと願っていた。だから椿花抄の中にも、

「…一点の卑俗なところのない、清澄な香り高い珠玉のような絵こそ、私の念願とする絵である」

と記している。

したがってその画題も、歴史や能楽の中の理想的な女性に求め、また画法も師からの教えのほかに、仏画や浄土絵巻の雰囲気なども巧みにとり入れて、清冽ななかにも艶麗な画面にまとめ上げていた。

清少納言や紫式部、衣通姫や額田女王などのほか、楊貴妃、西施、唐美人のように支那の歴史から取材したものも数多い。しかし明光院が最も関心を持っていたのは、能の世界からの画題で、作品として残っている絵の中でも、羽衣、江口、通小町、桜川、二人静、葵上などは、能の中からの画題である。

それは明光院が能に造詣が深かったせいもあろうが、能の世界と明光院の求める世界とが、ぴったり一致していたからであろう。謡曲をうたっていると、身も心も涼風に洗われたように清浄になっていく自分を感ずると、明光院は椿花抄に記している。謡曲には明晰な道義観があり、人の歩むべき正しい道があり、清冽な貞操観念がある。能のテーマには品位の高いものが多いから、その世界を描いていけば、自ら明光院の求める品格高き絵の世界が構成されるということであろう。明光院は椿花抄に、

「その絵をみていると邪念が起こらない、また邪念を持っている人でもその絵に感化されて邪念が清められる、そういう絵こそ、私の願うところである」

と書いてあり、そして続けて、

「そのためには、よい人間でなければ、よい絵は描けない」

と強い調子で自分を戒めている。

こう讀んでくると、明光院は絵を単なる美というだけでなく、眞、善、美の一体を考えていることがわかる。そして絵をそうした至高のものとするためには、絵を描く画家自身が至高の人間でなくてはならないと、自らをはげまし、自己精進に鞭打っているのである。その姿を想像すると、絵にはげむ明光院はあたかも修行僧のように感ぜられるのであった。

絵を描く苦しみは、同時にたのしみである。法悦である。絵に精進する苦楽は、相半ばして一つの魂となり、絵という世界で溶けあっていく。絵を高めることで明光院は自分の人生を高め、自分の人生を高めることによって絵を高め、明光院は浄土の花のうてなの上に座る思いで、安らかに画境三昧の世界に浸っていたのであった。その心境が椿花抄では次のように記されている。

「私の画室は、渡り廊下でつづいた奥座敷を使っている。ここは私一人の仕事場。誰も入ることはできない。

わが子である藩主正興でさえもである。画室の周囲にはおびただしい椿の木が茂り、おびただしい花が咲いている。朝、画室に入る。静寂。樹だちを洩れて、清らかな陽光が澄みきった画室の中にみちている。どこかで遠い野鳥の声がする。それ以外の何の音もない。私はだまって、その澄みきった光の中に坐る。すると心の底から洗われたような気がする。この朝の一瞬、これこそ私の浄土世界である」

そしてまた少しおいて別の個所に、

「禅道を行う者が僧堂で無念無想の坐禅を組むのも、茶人が松風を聞いて茶室に坐すのも、絵師が画室で絵筆を取るのも、その到達する境地はひとつに違いない。絵具を溶き、絵絹をひろげて、視点を一点に集めて姿勢を正せば、無念無想、そこにはなんの雑念もない。私にとって画室は花のうてなであり、花の浄土である」

という一節もある。

明光院は画室を「幻花庵」と名づけていた。幻の花のように咲く、椿の花に囲まれた静寂な画室。それは花の浄土ともいうべき画室にふさわしい名前である。

今日も一日画業にはげもうと、絵三昧境にひたった、無心で、清らかで、穏やかで、純粋無垢な、澄みきった心や姿が、手にとるようである。恵介は観世音菩薩のように清らかな明光院の姿を、瞼の裏にありありと想像した。

こうして明光院は絵の世界に浸ることによって、その人生の後半を、花の浄土の中で終えたのである。それは同時に、日藩三代目の藩主の名君正興の母堂として、ふさわしい人生であった。

しかし……と、そこまでくると、恵介の中には、あの日椿城の中で感じた美人画の女性たちの、

「あの、妙ななまめかしさは何なのだろう……」

という疑念が、頭をもたげてくるのだった。

清らかに気高く、清明な女性像。その何処がどうと、指摘できるわけではないのだが、しかしどこか妙になまめかしいのが、恵介の中で今も消えないのだった。いや、かえってますます強くなってくる。

明光院があれほど至高の絵を求め、清浄無垢な女人像を描いたのに、出来上った女性像は、なにか明光院の眼の届かないところで、それを裏切っているようなところがある。そう思いはじめると、恵介にはそのなまめかしさが、清浄という衣をまとって、絵の中に立っているように思えるのだった。

それはなぜか。

思いすごしかもしれないが、明光院はこの「椿花抄」が記し、藩史が伝えるような、本当に至高にして清明な女性だったのであろうか、というとんでもない妄想が、恵介の中に乱雲のように湧き上ってくるからだった。

そう思いはじめると、あの城中のおびただしい椿の花群の鮮やかな色さえも、なにかなまめかしい、崩れた女の濡れた肌のように思えてくるのだった。

（二）

それからしばらくして恵介は、二回目のH市史編纂拾合せ会のため、H市を訪れた。

しかし恵介の心は完全に明光院のことに奪われていた。恵介は打合せはそこそこにすますと、

「ご案内いたします」

という広報課係員の申出もことわって、一人で再び椿城に登った。

この前と同じように、椿の花は今を盛りと咲いていた。椿城の椿は、ほとんどが一重のやぶ椿である。単純で肉厚な花弁が、ぼってりと濃艶に咲いている。それは大手門の横からはじまって、濠のまわり、石垣の上、二の丸、三の丸、中庭、間道、裏山と、至るところを椿の樹海で埋めつくしているので、全山に眞紅の椿が咲き狂っているとしか思えなかった。いやこの眞紅の色は、この城に流れている血の化身なのではないかとさえ、恵介には思われた。

明光院の住居であった椿屋敷へと、恵介は二の丸から腹切丸を通り、落椿の道を登っていった。

しかし今はもう椿屋敷の建物は残されていなかった。天守閣や、二の丸、城門、そして他の屋敷はほぼその形を残しているのに、椿屋敷だけは姿を消し、そこを取巻く椿の樹海だけが、その面影を残していた。

椿の群葉には陽が当っているのに、その屋敷跡だけはひんやりとしていた。そこには見上げるような椿の大木が何本か生えていて、まっ赤な花群が瀧のように咲いていた。

と一瞬、恵介は足を止めて、息をつめた。

恵介の眼の前で、すーっと一条の血の糸が、地面にむかって尾を引いたのである。が、血の糸と見えたのは、赤い椿の花が、突如、音もなく枝を離れた軌跡であった。

この裏庭までは掃除の手が届かないのか、それとも異様な落椿の美を残すために、わざとそのままにしてあるのか、地面一帯はびっしりと落椿で埋って、ほとんど地表は見えないくらいであった。

それはあたかも血の池であった。恵介は落椿の海を、美しいと思うよりも、無気味に感じた。それはここへ来る途中に通りすがった、腹切丸を思い出したからだった。

井戸櫓のそばに、血洗い井戸というのがあった。その昔、ここで血を洗ったところから、つけられた名前であろう。もちろんすでに井戸は枯れている。枯れ井戸の残骸だけが残っているのであるが、恵介はその中を覗いてみた。中はまっ暗で、何も見えない。ためしに小石を投げこんでみたが、小石は吸いこまれるように闇の中に消えて、音もしなかった。

腹切丸とは、切腹の座である。椿城で切腹が行われるときは、すべてこの腹切丸で行われた。その切腹に使った刀の血をこの井戸で洗ったので、血洗い井戸の名前がついたのであろう。

腹切丸は櫓のせまい庭の一角に、北を向いて陰惨に建っていた。なんの飾り気もない、一間四方ぐらいの白木の建物。三方が板囲いで、庭に面した正面には、扉もなければ、格子戸もない、開け放しの造りである。何人の武士がこの床の上で腹を切ったことであろうか。記録をひもとけばわかるかもしれないが、今の恵介には知る由もない。

切腹させられた武士たちは、いずれもその不本意さに、張りさけんばかりの怨みを胸に抱いて、武士の掟に従って死んでいったのであろう。二百年前、この腹切丸の上で死んでいった無念な武士の顔が、一人一人、恵介の眼の前に浮かんでくるようだった。

そして、その怨みに血塗られた床板も、長い時を経るにつれて、風雨にさらされ、古び、朽ちて、乾いて、埃が積っていた。

恵介は少し身をのり出すようにして、腹切丸の内部をのぞいてみた。すると床の中心部、すなわち人の座ったあたりを中心に、乱れた波のように黒ずんでいるのが見えた。「切腹のしたたかな血を吸いこんだ床板は、時を経てもその怨みを、不気味な地図のように残しているのだった。」

顔面を蒼白にした白装束の武士が、決意の刀を腹に突き立てる、たちまちどっと溢れ出る血の流れ……、それがまるで生きもののように床板に触手を伸して不定型に流れ、そしてまだ前の罪人の血が乾ききらぬ床板の上を、更に新たな血流で染めていく。

その生ま生ましい血の海が恵介の頭の中に、ぬめぬめと浮かんだが、その血の色が眼の前の紅い落椿の海の色と同じなのである。切腹の連想は、落椿の海を、暗い、妖しく、不気味なものにした。

だが、その時恵介の中に、ふと、

（この血の中に、明光院の流した血が入ってはいないだろうか）

と、考えてもいなかったことが、浮かんだのである。なぜ、そんなことを思ったのだろうか。わからない。だが、華やかに暗く、あでやかな落椿の色は、なぜか明光院の中にひそむ、暗い何かに連っている、ような気がしてならないのだった。

恵介は近寄って、落椿の一つ一つをあらためて見た。

一重のやぶ椿は一つ一つ原型のまま、首からすとんと落ちる。したがって落花は地面に原形のままで横たわっている。だから地面に拡る落椿の海は、血にまみれた多くの打首が、無惨に散らばっているかのようにも見えるのだった。

さまざまな方向をむいて重っている落花の首は、武士の打首が無念の思いをこめて、さまざまな方角に首を向けているかのように見えた。そして花はその中心に黄色の蕊をのぞかせているので、その蕊が、打首から中空を見上げる怨みの眼のように見えるのであった。

ここが椿屋敷の跡だとすれば、この落椿の血の海のなかに、明光院の画室はあったのである—と、恵介はありし日の明光院の画室のただずまいを想像してみた。

すると明光院は、画室を花の浄土だと言っているが、実はその逆ではなかったのではという思いが、恵介の胸を突き上げてきた。この暗く不気味な血の花池が、どうして浄土などであるものか。浄土というよりも、地獄といった方が、ふさわしいのではあるまいか。

血の池地獄。その時、

……ぽとり……

恵介の眼の前で、一椿の花が一輪、落ちていった。それはものうげで、重く、なまめかしい、濡れた音だった。

恵介はぎくりとし、花が落ちてきた方向を見上げると、そこには大きな蜘蛛の巣が銀色に輝いていた。恵介は一瞬、ぞっとした。蜘蛛の巣の中央には、鮮やかな黒と黄色の縞模様の美事な女郎蜘蛛が、銀色の糸を細かくふるわせて陣取っていた。その女郎蜘蛛が椿の花の首を喰いちぎって、落したのにちがいない。

裏庭は城の裏山へと続いていた。

赤い落椿の道が、裏山の茂みの中へと赤く伸びている。恵介はその落椿の道を通って、裏山へ入ってみた。山道も落椿がいっぱいで、まるで一本の赤い帯が裏山の中へ分け入っているようだった。だがそれは、血の池が小川となって、裏山の方へ流れ出ているのかもしれなかった。

恵介は落椿の道を、一人でしばらく歩いた。裏山は森閑として、音がしない。ただ明るい陽ざしだけが、無数の落椿の骸の上に音もなく降りそそいでいる、それは無気味な山道であった。

山道はどこまでも続いていた。そして赤い落椿の道も、いつ果てるともなく続く。

「どこまでこの赤い山道は続くのだろう……」

どこまで歩いても際限がなかった。恵介はまるで妖かしの血の道に迷いこんで、どこか妖かしの世界に踏みこんでしまうのではないかと、そんな気持にかられて、途中から引き返した。

帰りがけに恵介は、城の管理事務所に寄った。事務所

の職員は、恵介の顔を覚えていてくれて、

「あの山道はどこまで続いているのですか」

と聞くと、

「ずっと歩いていきますと、植伝の裏山へ出ます」

「植伝？」

「そうです。土地の旧家で、尾山伝蔵といいますが、代々植木職をしておりますので、人々は昔から、植伝、植伝と言っております。伝蔵というのが世襲の名前で、二百年以上もつづいた名家です。土地では植伝といえば、知らぬ者はおりません」

「二百年以上…？」

「そうです。初代伝蔵は、二代目藩主の成興公に供えたと言われております」

「そうすると、明光院の頃ですね」

明光院の名前を出すと、職員の顔に一瞬とまどいの翳が走った。しかしその翳はすぐ消えて、職員は姿勢を立て直し、

「ええ、そうなりますね。どんな植木でもやりますが、椿の木が専門です」

「椿の木…？」

恵介はおおむ返しに聞き直した。その声があまりに大きかったので、職員は、

「椿にご関心がおありなんですか」

「ええ、花をいろいろ研究しているものですから…」

なんとなくすらすらと、恵介は嘘を言った。

「それでは一度ご案内いたしましょう」

H市史の編纂者という恵介の立場を尊重してか、職員は親切にも恵介を車にのせて、植伝まで案内してくれた。

車は町なかを抜け、しばらく山裾伝いに走った。

その山裾にも椿が多い。

いつの間にか恵介の頭の中では、明光院と植伝とがつながっていた。どんなつながり方なのか、よくはわからない。しかしさっき職員がちらっと見せた一瞬のとまどいの表情からすると、なにか尋常なつながりではなさそうな気がする。それをこの職員は知っているにちがいないのだが、それを聞くのは、まだあまりにぶしつけのような気がする。

しかし、とにかく連っていることはたしかである。ちょうど椿屋敷の裏庭と植伝の裏山とが、あの落椿の血の山道でつながっているように。そう考えてみると、明光院と植伝をつなぐ糸は、なぜか暗い血の糸のように思えてくるのだった。

(四)

植伝も、椿の森に埋った大きな邸だった。

さすがに植木の専門職だけあって、邸を囲む椿の生垣は整然と刈りこまれ、前庭や中庭の椿の大樹と、裏山の椿の森とは一続きになり、沈鬱な光のなかに紅椿の花が咲き乱れていた。

その花の色は、邸が山蔭になっているためか、椿城の花よりもいっそう濃く沈んだ色に見えた。その沈んだ色が、濃緑の葉群の下にのぞいているのは、なにか人間の怨みの眼ざしが、葉陰からひっそりとこちらを伺っているように思えた。

事務所の職員は恵介を植伝に紹介すると、すぐまたあわただしく車の音をたてて帰っていった。

恵介は広い落椿の庭に面した縁先で、植伝の当主、尾山伝蔵と対して座った。伝蔵はすでに七十歳の半ばを越した好々爺で、白髪の頭を短かく刈り込み、

「もう仕事のことはすっかり息子に任せているのです」

と言った。

大きな木で組まれた母屋の建物は、江戸時代のものがそのまま残っているかと思われるほど、古びて黒光りがし、そのほの暗い室内を背にした植伝の顔は、二百年の植木職の歴史を受けついだ、端正な顔をしていた。

「椿屋敷の裏庭の道が、こちらの庭に連っていると聞いたものですから、お伺いしてみたくなったのです」

「それは、それは、ようこそお越し下さいました。こんな田舎の山道を、それほどまでに思ってくださる方は、めったに居りません」

「その落椿の道が、あまりにきれいだったものですから…、なぜか心ひかれて……」

(まるで血の小川のような落椿の道が、私をこの邸まで導いたのです)

と言いかけて、危く恵介は言葉を押さえた。

「あの椿屋敷の裏庭は、私の先祖が作ったのです。そう、二代目伝蔵のときです。二代目伝蔵が、精魂こめて作ったのです」

「やっぱりそうなんですね。私もなぜかそんな気がしたのです」

瞬間、恵介はさきほど見てきたばかりの椿屋敷の裏庭を、思い浮かべていた。

その時、伝蔵は、

「ご覧になりますか…?」

「えっ……?」

植伝は、恵介がそれを期待しているのは当然のように、そう言って、すっくと立ち上った。そしてどこかに恵介を案内しようとした。

「何なのだろう」

恵介の中に不安と期待が渦巻いたが、だまってその後について行った。

植伝は庭下駄をつっかけて、中庭にむかった。中庭に

も落椿がおびただしい。だが、中庭から裏庭へと一歩足をふみ込んだとき、恵介は、あっと、声をのんだ。

その裏庭には紅い椿が血の海のように散りつもり、その裏庭は、あの椿屋敷の裏庭とそっくりなのだった。恵介はふたたびあの椿屋敷の中にいるような錯覚をおぼえた。

「ね…、そっくりでしょう…」

植伝は言った。

「二代目植伝が丹精をこめて作り上げたのです。椿屋敷と同じ椿の庭を…」

植伝が言う通り、それはまさに椿屋敷の裏庭の復元と言えた。

庭の形、椿の木の大きさ、その数、その姿、そして落椿のおびただしさの具合から、その落椿の血の池が一本の細い流れとなって、裏山の椿の森の中へ消えていく裏道の具合までもが…。

この裏庭の陰鬱な妖しい美しさは何なのだろうか。

そこには二代目植伝の、異様な執念が動いていた。それは単に偏屈な職人にある、庭の復元に対する異常な執念などとは違ったものだった。それは謎の執念だった。その謎の執念が、椿屋敷の方へ触手をのばしているのである。

(植伝の裏庭と、椿屋敷の裏庭が、赤い落椿の山道で連っているのは、この執念によるのにちがいない)

解答のヒントを恵介は掴んだように思った。

「だいぶ冷えてきましたな」

植伝はそう言って、しのび寄る夕闇から逃れるように屋敷へ戻った。

そして夕闇のひたひたと迫る奥座敷のうす闇の中で、植伝は執念の原型を拡げて見せてくれたのである。恵介は、

「あっ…、これは…?」

あまり突然のことなので、瞬間、それが何を意味しているものか、恵介には判断できなかった。

その夕闇の中に拡る異様なもの。

夕闇に白く浮かぶ画紙の上の、奇怪な曲線。そして妖しい色。その赤い妖かしの色は、暮れなずむ庭の木下闇く咲く椿の花弁の色なのか。

十枚ほどの秘画。

「……」

黙って差し出された秘画の意味するものを、恵介はさぐるように植伝の顔を見つめた。

秘画は十二枚あった。それはすばらしい出来ばえで、腕ききの絵師の筆によるもののようだった。

図柄は主として大奥の局や御殿女中と、前髪姿の色若衆や、月代の剃りあともみずみずしい若侍との交合の図であった。鮮やかな着物の裾を乱して抱きあったままの図柄から、全裸の男女が入り組んで息たえだえにあえぐ

姿まで、十二枚の内筆画は、ふくよかに張りつめた肉体の曲線を絶妙に描いていた。

夕闇のなかで恵介は一枚一枚息をつめてめくっていたが、半ばをすぎた頃、恵介は一枚の図柄の怪奇さに、

「あっ…」

と声をあげた。

「それは蜘蛛と人間との交合の図柄であった。毒々しい女郎蜘蛛に喰い殺されている全裸の若衆。毒蜘蛛に犯されている狂乱の女。そうかと思うと、頭が蜘蛛で身体は人間の男女が抱きあっていたり、また頭は人間で身体は蜘蛛の男女が睦みあっていた。」

秘画をめくる恵介の手つきを植伝はだまって見ていたが、ややあって、

「それは明光院さまが描いたということで、昔から我が家に伝っているものです」

と静かな口調で言った。

「えっ…」

恵介は耳を疑って聞き返した。

「あの明光院が…？」

恵介には信じられなかった。

『そんな馬鹿なことが……』

と恵介の心は否定した。そんなことは想像もできなかった。H藩中興の祖である三代目藩主の生母であり、品格たぐいまれな明光院が、たわむれにもこのように淫らな絵を描くなどということは、ありえよう筈がなかった。恵介が椿花抄の中から読みとった明光院の姿は、きびしい絵の修行に生涯を捧げ、絵の世界に浄土を見出した、高潔な女性であった。

「とても信じられません」

恵介の言葉に、植伝はそれ以上、何も言わなかった。しかし恵介を見つめる顔は、水のように冷静だった。そしてその表情は、思いなしか、謎のように笑っていた。

（五）

十二枚の異様な絵は、恵介に強烈なショックを与えた。秘画という凄絶さもさることながら、それが明光院の筆になるという、植伝の老人の発言にである。

とっぷりと暮れた植伝の邸を辞して、夜の灯がきらめく市内に戻ったとき、恵介は妖かしの世界から、急に現実の世界に戻ったような気がした。

恵介はその日の夕方に帰京する予定であったが、予定を変えて、ホテルに一泊した。あの絵の謎が解けないまま、帰るわけにはいかない気がしたからである。

ホテルの窓から見ると、H市の夜の灯が、きらめく海のように拡っていた。その中に椿城の森が黒々と横たわっている。

（あの椿城の天守閣にもう一度登ってみなくてはならない。そしてもう一度この眼でしっかり、あの絵の正体を確かめてみなくてはならない）

天守閣に展示された数十点におよぶ明光院の清冽な美人画を思い出した。

（あの美人画と秘画の描き手は、本当に同一人なのであろうか？）

するとその時、恵介が最初城中で美人画を見たときに、『この清楚な美人画の女性には、妙ななまめかしさがあるのはなぜだろう』と感じたことが、再び恵介の中に甦ってきた。

明光院は絵の名手である。描こうとすれば、あの程度の秘画を描くことは可能である。しかしその必然性がない。

恵介は窓外の椿城の闇を見つめながら、植伝で見た秘画の一枚一枚と、天守閣の美人画とを、重ね合せてみた。何らかの共通点がないであろうか…。

するとふと恵介は、ある一つのことに気がついた。というのは、今まで秘画といえば、歌麿とか英泉とか男の名前しか思い浮かばないので、「秘画の描き手は男とばかり思っていたのだが、あるいは女かもしれないという予感が、恵介の中を走ったのである。

そう考えると、絵の中の男の顔が、やさしすぎるような気もするのだった。もちろん秘画であるから、相手の男が色若衆や若侍の、花もあざむく美少年、美青年であり、顔も美しくやさしいのは当然なのであるが、しかし恵介には、男の顔が女の顔の延長のような気がするのだった。たとえやさしい若衆の顔を描いても、男の絵師の描いた顔と、女の絵師の描いた顔とでは、差があるのではあるまいか。

ましてや明光院の絵はほとんど美人画中心であるから、男の顔を描くのにあまり慣れていないはずである。そう考えると、若衆や美青年の顔は、男の顔を描きなれていない、明光院が描いたものという感じもするのである。

それからもう一点は、男の身体の描き方である。紫の色小袖の下にむき出しになっている若衆の下半身や、女を抱きしめる男の身体が、いかにも弱々しく、なよやかなのである。繊細で、ふっくらしすぎている。いくら若衆の身体でも、しなやかな身体の底には、男の強さが息づいている筈である。それがまったく感じられない。

形は一応男の身体でも、それは女の身体の延長のように思われる。それはやはり、女の筆による絵からなのではあるまいか。

もちろん、これは恵介の推定である。断定することは出来ない。画面からの直感である。しかし、そうだとすると、あの秘画が明光院の手になるものだという可能性

が、ないこともないと思われるのだった。
しかし明光院が何故…？
それは闇の中である。

翌日、恵介は謎の手がかりを求めて、もう一度椿城に登り、展示室へ入った。
数十枚の絵は、前回恵介が見たときと同じように、ガラスケースの中に並んでいた。今度恵介はその一枚一枚を丁寧に、まるで医者が患者の病気を看るような眼で眺めていった。
すると展示されている絵はこの前と同じなのに、見る方の意識の変化からなのか、この前とは違った印象を受けるのだった。
絵はほゞ制作年順に展示されている。
初期の習作時代の絵は、まだ技法もぎこちなくて、生硬なところが目立った。年代が進むにつれて技法は進歩して、絵は繊麗になり、色彩も澄明なものになっていった。
清澄な美人画がしばらく続く。
だがその後半にさしかかると、画面に微妙な変化が現われてきた。美人の顔や手足の線に、次第にふくよかさや丸みが現れてくるのだった。しかしそれは徐々の変化で、順を追って見ていっただけでは、絵筆の進歩としかとれない。
しかし比較する絵の距離を少し離して、前半の絵と後半の絵とを比較してみると、そこにはっきりと差異が現れてくるのだった。
それは同じく清らかな女や天女、清純な母子像を描いていても、前半の絵の女性は清浄そのものなのに、後半の絵の女性の身体には、妙ななまめかしさがあるのである。
たとえば「白花」と題した一枚がある。白い蓮の花群のなかに、女が幻のように立っている。蓮の葉の海は金泥で図式化され、夢のように画面いちめんに拡っており、その中に蓮の花が白く、幻のように浮かんでいる。その画面の中央に、中国古代の服装の女が朱の衣をまとって、か細い姿で、炎がゆらめくように立っている。
それは浄土の世界を暗示した清浄な幻想的な絵なのであるが、しかし、その赤い炎のようにゆれている女の姿が、澄明というよりも、どこかなまめかしい花の精のような感じがするのである。白い無垢な蓮の花の海の中に立っているので、いっそうそう感じるのであろうか。やるせなく、せつない女のなまめかしさの昇華を、そこに見るような気がするのである。
それから数枚おいて、「泉水」と題する絵がある。
澄みきった泉のほとりに古代の美女が立って、水に映った己れの姿を見つめている。美女といっても姿は天女をかたどり、その裾を引いたゆるやかな衣の立姿は、あ

たかも佛が蓮池の中をそっとうかがっているかのように見えるのである。
しかしよく見ると、「その天女の官能美はどうであろうか。白い衣は薄いので、その豊かな胸やゆるやかな腰、そして両足のさまが、半分以上透けて見える。その少しひねった腰の線のなまめかしさは、とうてい天女の身体とは思えない。」恵介はその腰の線に、ふと、あの秘画の中の女の腰を思い出した。
天女は水に映ったおのれの姿を見つめているのだが、よく見るとその眼は、おのれの美しさに見とれているというよりも、もっと別の何かを眺めている眼線のような気がする。天女は画面に描かれていない、別の何かを見つめている。それは天女の足下に横たわっている、若い男の裸像なのではあるまいか。
だが、なんと言ってもその異様の極致は、「怨」と題する画であった。それは制作順ではかなり最後の方に配置されていたが、それは凄まじい絵であった。
画面いっぱいに、青い炎と、赤い炎とが燃え上っている。曲線を描いてからまりあった炎は、いつの間にか女の着物になっていた。炎の着物をまとった女は、炎の化身なのであろうか。炎の延長である打掛けは、赤と紫とに燃え上っているのだが、よく見ると、その表面には紫色の糸で椿の花群が裾模様のように描かれ、さらに銀糸で見えないほど細い蜘蛛の糸が、袖や肩や背中に張りめぐらされていた。

← 追いこんで行く表現

その炎の化身とも思われる女は、遠目には清楚に見えるのだが、近寄ってよく見ると、女は打掛けの下で、豊かな肢体を妖しげにくねらせ、炎のあらぬ一点を見つめている。その乱れた黒髪が、長く渦巻いて、蜘蛛の打掛の上に、蛇のように巻きついている。
女は炎の中で、何をしているのだろうか。よくわからない。見ようによって、女は嘆いているようにも見えるし、炎にむかって叫んでいるようにも見えるし、炎の熱さに歓喜し酔いしれて、身もだえしているようにも見える。
しかも凄絶なのは女の眼であった。白く伸び上った首の上の蒼白な顔の中央に、炎の色を映した眼が異様に輝いている。明光院は珍らしく、その眼に泥眼を使っていた。泥眼とは眼の白眼のところに金泥を入れることで、明光院は絵絹の裏から金泥を塗っていたので、金が輝く度にきらめく眼の光は、怪異だった。見る角度によって、それは涙に濡れたようにも見えた。したがって炎の女の眼は、泣いて、酔いしれて、怨んで、炎の一点を見つめているのだった。
これはいったい何の絵なのだろうか？
このなまめかしく、切なげな絵は、何なのであろうか。
これは明光院が清澄な絵の表現を借りながら、女の悩

み、女の苦しみを、のろってもがく、「女の業を」描いたものかもしれないと恵介は思った。

あるいはまた、明光院は清澄な絵を描きたいと念じながらも、筆の勢いが溢れて、押えきれない女の怨みを、はからずも描き出してしまったのかもしれなかった。

しかしいずれにしても、この展示場の絵には、眼をよくこらし、細かく観察すると、いずれも、ただ澄明な美人画ばかりが描かれているのではなくて、その奥に暗い女の闇が描かれているのだった。

明光院はたえず澄明で品格の高い絵を描くことを念願していた。そして絶えずそのような絵を描いた。しかしその結果、このような絵が出来上ったのである。それは、なぜか。

故意か、

偶然なのか。

それとも予定された結果なのか。

どうしてこうした変化が起きたのであろうか。この変化、異様さは、あの秘画と、どこかで繋っているのではあるまいか。繋っていないことは絶体ないと、恵介は思った。

（六）

暗い天守閣から恵介は外に出た。光がまぶしい。

明光院の絵を見直して、恵介はその秘密の入口にたどり着いたような気持になった。一刻もはやくこのことを、植伝の伝蔵に伝えたかった。しかしまだ、あの秘画のことがすっきりと解明されたわけではない。

どこかで一休みして、この気持を落着かせよう。どこが、よかろうか。やはり手近かな所では、椿屋敷しかない。

恵介はいったん血洗いの井戸と、腹切丸のところまで戻り、そこから奥に折れて、椿屋敷に入った。

椿の花は昨日と同じように咲き、庭の上に散り積っていた。少しも変ったところはない。恵介は少し離れた庭石に腰掛けて、落椿の血の池を眺めていた。

すると、かつてこの場所に建っていた明光院の「幻花庵」と名づけられた画室が、幻のように眼の前に見えてくるようだった。

恵介は「椿花抄」で幻花庵という名前を読んだとき、明光院の画室にふさわしい名前だと思ったが、しかし、いま、実際その幻花庵のあった場所に立ってみると、本で読んだときとは少し違った響に聞えてくるのだった。

幻という文字には、二通りの意味がある。一つは「実在しない、はかないもの」という意味であり、もう一つは「あやかし」という意味にも使われる。夢幻とか、幻花とか、幻の世、などと使われる場合には、はかなげな

花、はかない世の中、という意味であるが、幻怪とか、幻化、幻妖という場合には、あやかしいこと、人をまどわす、妖怪、などという意味になってくる。

明光院の名づけた幻花庵は、表面上の使い方としては「はかなげな花」として使っているのだが、しかし恵介には

（実はその逆なのではないか）

と思われてならないのだった。明光院の画室は、この妖かしの落椿の血の池に浮かぶ御堂だったのだから、まぼろしの花ではなくて、妖かしの花なのである。

そう思った時、恵介は、あの椿花抄をもう一度、別の角度から読み直してみる必要があると思った。

これまでは、あまりに澄明な、無垢な手記として読みすぎていたのではなかろうか。するとにわかに椿花抄への疑惑が、恵介の中で大きくなってきた。

椿花抄には、絵に精進することによって自己の心を浄化し、画境三昧にひたることによって、浄土に安住した明光院の姿が、くり返し、くり返し、記されている。たとえば、次のような記述がある。

「…朝、画室に入る。静寂。樹間を洩れて、清らかな陽光が、澄みきった画室の中にみちている。どこかで野鳥の声がする。それ以外は何の音もしない。私はだまってその澄みきった光の中に座る。心の底から洗われるような気がする。この朝の一瞬、これこそ私の浄土世界である…」

「…墨をすり、紙をひろげて、視点を一点に集めて姿勢を正せば、無念無想、そこにはなんの雑念もない。私にとって画室は花のうてなであり、花の極楽浄土である…」

恵介が椿花抄をもう一度別の角度から読み直してみると、明光院が澄明な絵、品格の高い絵を描きたい、そしてそのような絵を描くことによって、私はいま極楽浄土にいるということを、あまりに強調しすぎているように思われてならなかった。第三者が記した文章なら別であるが、本人自身が記したのにしては、少し不自然な感じがする。

なぜであろうか。理由は二つ考えられた。

その一つは、明光院は何かを隠している、という推測である。なにかを隠蔽するために、別のことを強調するはよくあることである。ということは、明光院の人生は、実際は、極楽浄土ではなかった。それを隠すために、殊更に極楽浄土に安住していると強調したのではなかろうか。

二つめの理由は、自分への戒めである。自己精進への鞭である。現実には浄土などとはほど遠い世界にいる明

光院が、その浄土を願うあまりに、その点を椿花抄に記して、自己を励まし、祈ったのではあるまいか。「どうぞ極楽浄土へ行けますように」という祈りと、「浄土の世界へ行かねばならぬ」という決意との混合が、心で祈るだけでは足りずに、文字の上にも現れてきたのではあるまいか。

たしかに明光院の絵の精進には、絵に対する興味の域をこえた、なにか絵にすがりつくような異常さがある。まるでなにか救いを求めて経典を読むかのように、絵に必死に救いを求めているようなところがあった。

絵にむかって叫んでいるような、祈っているような、訴えているような、明光院の必死の姿が、そこに見えるのである。

明光院の絵には、修行を越えたすさまじさがある。それはあたかも精力をもてあました若い僧が、それを修行によって昇華せんとして、荒修行にはげむ痛ましさのようなところがあった。また三味線や踊りの修行に身を打ちこむことによって、女盛りの肌のうずきを消そうとする女の姿が、恵介の心の中で、明光院の上に重なってくるのだった。

こう考えてくると明光院という女性は、明光院自身が椿花抄の中で記したり、また藩史が伝える女性像とはちがった人間で、実際は浄土世界とはほど遠い世界の中で苦しんでいた女性ではなかったのかという思いが、恵介の中で強くなってくるのだった。

だが、その明光院が己れの手記の中にも記せず、また藩史にその片鱗も見せていない、明光院の苦しみの世界とは、何だったのか。

その暗い世界は知る由もない。

だがその時恵介の中で、あの数々の美人画の謎のなまめかしさが、霊感のようにひらめいたのである。あのなまめかしさの奥をたどっていけば、その原点へたどり着けるのではあるまいか。

しかし、そのようなことが果して可能であろうか。

だがその解決方法として、恵介が先般椿花抄を別の角度から読み直したのと同じように、明光院という女性を別の角度からもう一度見直すことによって、その糸口が見つかるかもしれないと恵介は思った。

明光院は藩主の生母である。だから品格高潔でなくてはならない。女性の生きた鑑でなくてはならない。そして藩史もそうした女性として、明光院を伝えている。明光院自身もそうした女性であろうと努力した。だが…。

明光院は本来そのような女性ではなかったのではなかろうか。明光院の夫である二代目藩主成興が死亡したとき、明光院は二十七歳という、女盛りの入口にさしかかっていた。明光院は直ちに髪をおろして椿屋敷に入り、世間から身を引いたが、それは形の上だけで、実際は幼

い三代目藩主正興の政治を援けて、何くれと忙しかった。

しかし正興が十五歳で任官して藩主の座につくと、明光院はすっかり政治の世界から身を引いた。明光院は三十三歳という、女盛りである。そしてその前に開けていたのが、絵の世界であった。今まで少しずつ余技に習っていた絵が、正興の任官を機会に、にわかに本物になってきたわけである。

明光院は清らかな絵の世界に自分を没入することによって、自分を浄化し、昇華しようとした。それが成功したか、どうか。それはあの天守閣の数々の絵が示しているのではなかろうか。

明光院は三十三歳という女盛りである。これまでは政治の世界で忙しかったのに、それから解放されてすっかり暇になると、それまで隠れていた女体のもだえが、頭をもたげてきた。そして筆を押えても、押えても、そのもだえが描く女性の上に、あのなまめかしさとして、反映してしまったのではなかろうか。

(七)

この結論を恵介は急にあの老人に話したくなって、再び植伝まで車を走らせた。

「これはあくまで私の推理ですから、間違っているかもしれません。でも、とにかく聞いてください」

恵介が空想したことをすべて話すと、植伝はだまって静かに聞いていたが、

「あるいは、そうかもしれません」

と一言、ぽつんと言った。

そしてしばらく腕を組んだまま、なにかを瞑想するように瞼を閉じていたが、ややあって植伝は決意するような眼つきになり、

「実は、明光院は自殺したのです」

と言った。

「えっ、自殺…?」

ふたたび恵介は予想もしない衝撃に襲われた。

「このことは今まで誰にも言ったことはありません。だが本当なのです」

老人は冷静な口調で言った。

「どうして自殺など…」

「私の祖先がそのことに関係しているのです…」

明光院が没したのは三十八歳の時である。それは公式の記録にも載っている。恵介も藩史をひもといた時、明光院の死が三十八歳と知って、若くして死んだなと思った。しかし自殺だなどとは、知る由もなかった。もちろん公式の記録も明光院自殺のことは隠している。理由の如何はともあれ、藩主の生母が自殺したなどということ

は、公にすることはできない。明光院の自殺は、表向きは病死として扱われ、そしてそのことを知っているのは、それに関係したごく一部の人に限られていたのであろう。そのごく限られた中の一人が、この植伝なのである。

「祖先と言いますと、二代目植伝…？」

恵介の頭には瞬間、椿屋敷と相似の椿の裏庭を、自分の邸の庭にも作りあげた、二代目植伝のことがひらめいた。

「そうです。尾山家の二代目伝蔵。伝蔵はその時、二十三歳でした…」

老人が話す二代目植伝の話はこうであった。それは二百年も昔の話である。

日藩のお出入り庭師として植伝の地位は固まり、初代植伝とともに、二代目植伝も城中の造園に出入りするようになった。

二代目植伝は若いのに似ず、いい腕を持っていた。それで初代植伝も息子の将来をたのしみに、自分が長い間かかって会得した植木の秘伝を、次々と仕込んでいったが、とりわけ二代目植伝は古い日本の庭園の中に、新しい感覚を盛りこんだ造園に、特異な才能を見せはじめていた。そのため、その感覚を見込まれて、折りから明光院が工事を起した椿庭の造園に、当ることになったのである。

造園といっても、もともと椿の木が多い城中であるから、その裏庭のあたりにもいちめんに椿が咲き乱れていた。だからその椿の樹林の配置や形を庭の形に整理すればよいのであったが、二代目植伝はそれだけではなく、椿の花の種類をやぶ椿一種類に絞ったのである。

「椿の花は色が鮮やで濃い。それが群をなして咲く。だから一重の単純なやぶ椿の花の群集が、一番美しい全体となる」

そういう若い庭師の考え方を、絵に造詣の深い明光院は理解したのである。

そのため、白椿とか、八重桜とか、美事な椿が何本もあったが、それは他の場所へ移され、それと共におびただしいやぶ椿が運び込まれて、やぶ椿一色の庭となったのである。

二代目植伝は他の工事をいっさい絶って、この裏庭のみに専念した。

しかし正確に言うと、椿の裏庭は完成しなかった、と言うべきなのかもしれない。庭は完成の寸前まで行ったが、しかし完成の寸前で中断したのであった。

それは完成の寸前に、明光院が自殺したからである。そのため工事は中断され、その時を境にして、二代目植伝は二度と城中へは足を入れなかった。

植伝の古い土蔵の中には、代々の古い記録が残されており、その中には二代目植伝の日誌もあるのだが、その

中に奇妙な一節があった。それは明光院が自殺した二日前の日付の頁に、

「明光院　宿直」

ただそれだけが書いてあるのだった。すなわちその夜、若い二代目植伝は城中から家へ戻ってこなかったのである。そしてその二日後に、明光院は自殺した。

「明光院宿直」とは、いったいどういうことだったのであろうか。

若い植木職人が、どうして明光院の椿屋敷に、宿直などしたのであろうか…？

そして宿直の翌日、二代目植伝が城中から去るとき、持ち帰ったのが、あの十二枚の秘画であった——というのが、老人から聞き出した話であった。

恵介の頭の中には、いろいろな疑問がいっせいに湧き上ってきた。

明光院はなぜ自殺したのか？

若い植伝は何のために宿直したのか？

明光院と植伝との間には、何があったのか？

秘画はいったい誰が描いたのか？

そして老人の話は、全部本当の話なのであろうか？

二代目植伝は城から帰ってくると、別人のように無口になった。そしてなにかに憑かれたように空ろな、時には暗く沈んだ表情で、裏庭でこつこつと椿の枝を剪定したり、移植したりしていた。そして椿屋敷とそっくりの裏庭を、植伝の裏庭にも再現したのである。

二代目植伝はその仕事に、まる三年、狂気のようにかかりきりになった。椿屋敷の裏庭に三年の歳月をかけたように、わが家の椿の裏庭にも、同じ三年の年月をかけたのである。だから三年たって、椿の裏庭が出来上ったとき、二代目植伝はまるで椿屋敷の中に立っているような気持だった。この椿の裏庭は二代目植伝にとって、明光院の片身だったのである。

二代目植伝はこの椿の裏庭の片隅に小さな家を建てて、そこに住み、一生娶らなかった。

そのため三代目植伝は弟が継ぎ、その弟の家系が今日の植伝へと続いているのである。

(八)

老人の話は嘘ではあるまいかという思いが、長い間、恵介の頭から消えなかった。

日藩中興の祖の母堂として、賢夫人の誇れ高き明光院が、若い植木職人と誤ちを犯したり、また凄まじい秘画を描くなんて、考えられもしないことだった。これは植伝の長い歴史の中で、誰かが語った作り話が、いつのまにか虚実入り乱れて、そのまま伝説として、ひそかに語

りつがれているのではないかと、考えれば、考えられないこともなかった。

しかしそうは言うものの、現に椿屋敷と同一の椿の裏庭や、十二枚の秘画があるのである。そして更に、明光院の自殺、二代目植伝が生涯独身ですごしたという事実もあるのである。そう考えてみると、老人の話はやはり本当であるのかもしれない。やはり明光院と二代目植伝との間には、世間に秘さなければならない関係が、あったのである。そしてその事を、明光院は秘画に描いて、世を去ったのである。

H市史の原稿が出来上ったのは、夏と秋がすぎて、その年の暮に近い頃であった。

恵介はその原稿を持って、最後のH市訪問をした。

椿の森はいつものようにつややかな濃緑色に輝き、そして初冬の椿の花がいっせいに咲き始めていた。

今年の春、恵介が最初訪れたときに咲いていた全山の椿の花はすべて散り、その間に今年の若葉が芽吹いて見事に成長し、そして新しい花が再び咲き乱れていたのである。花群の美しさは同じでも、半年の間に花はその世代を一新させていた。

その花の森の中に、H城の天守閣は変らぬ姿を輝やかせていた。

（終）

「ジパング円」は「金本位制」？

新井宏

三十年以上も前から、世界各地、各時代のいろいろな金属の生産量や価格の歴史を調べていた。基礎的で重要な歴史項目であるから、どこかに資料がまとまっているはずだと探しまくった。しかし、どうやら世の中にそんな表や資料を作った方はいなかったようである。

もちろん特定な金属、特定な地域、特定な時期の資料について纏め上げた資料は散見されたが、それらを集成したものは全く見当たらない。思うに、それらをただ収録しただけでは、空白部分があまりにも多く、とても一覧性のある資料にはならないからであろう。

学者は専門分野に忠実かつ微視的であり、論証できないことまで手を広げないし、素人では、あまりにも広範な歴史とか金属や度量衡あるいは通貨に関する知識が必要で手が出せなかったに違いない。

それなら私がやってみよう。

いまだ、遅々として進んではいないが、永年にわたって集めた文献や史料はかなりな水準で、「浅く広く」と言うならば、おそらく他に類例を見ないであろう。

もちろん、「最大のネック」は古代にある。例えば、ローマ時代の「鉄の価格」を示す史料は、つい最近までどうしても見つけることができなかった。

一言で「鉄」と言っても、種類も多いし、用途、形状も種々雑多で、その当時の通貨単位で価格が分かったとしても、金銀や穀物、労賃、生活費との関係が簡単に分かるわけではない。そんな困難な状況の上に、ローマ時代を通じて「鉄の価格」は一件も知られていなかったのである。

ところが最近、ついに一件だけではあるが、ハドリアヌス帝（一一七～一三八年）が英国の北部平原に築かせた一二〇キロメートルの長城跡から鉄価格を示す貴重な史料が見つかった。

それはイギリスのくびれた部分、西部カーライルから東部ニューカッスル・アポンタインに至るハドリアヌス長城の中間点にあるヴィンドランダ要塞から出土した八五三枚木片の第一八三番に「鉄九〇ポンドが三二デナリウム」と読み取れる内容が記されていたのである。

当時のポンドやデナリウスを調べて、解釈して見ると、「鉄三〇キログラムが銀貨重量で一二五グラム」、すなわち、鉄は銀の二四〇分の一の価値となる。ちなみに、奈良時代の日本では二八〇分の一、一三世紀の英国でも三八〇分の一なので納得できる値である。

賢帝と称された皇帝ハドリアヌスが、ローマ帝国の最果てに築いたヴィンドランダ要塞からは、実に様々なものが発掘されているが、そこからは、最果ての辺境で、想像を超えて優遇されていた兵士たちの日常と、肥大化した軍事大国の姿がうかがえると言う。

さあ、永年探し求めていた史料が一件だけではあるが、見つかった。そして、昨年末『たたら研究』に一三頁にも及ぶ長文の論文を載せた。たった一件の史料から、十三頁の論文を書いた筆者の心意気を評価して貰いたい。

ここまでが今回の前置きで、ここから本題に入る。

永年、歴史上の金属の価格等を収集していると、圧倒的に多くの史料が見つかるのは、当然ながら通貨として用いられた金・銀・銅である。その中でも、いつの時代、どの地域を採っても、通貨の基準は常に金、すなわち擬似的な「金本位制度」であった。だから、私は歴史時代に限らず、現近代に至るまでの金価格を各国通貨で表示して収集し続けていたのである。

そして奇妙なことに気付いた。最近の「円価」の動きがあたかも「金本位制度」に復帰しつつあるように見えるのである。

それは、ドル表示の金価と円価を比較すると完全に連動していて、金の価値を円価で表示するといつも一定値となり、あたかも、擬似的な「金本位制度」の様相を示しているからである。もちろん、このような通貨は、変動相場の現在、他の通貨には見られない。

しかし単なる「思い込み」でものを言うのは避けなければならない。そこでまず最も簡単な統計的な検討を昨年（二〇一六年）の資料について試みた。要は、世界各国の通貨の中で、金価格が最も安定していたのは、どの国かについて調べて、その結果を別表の左欄にまとめたのである。

結果は、日本の円による金価のみが、最も安定していて、そのばらつきは、わずか二・三パーセントにすぎなかった。その他の国は、金価との連動性でしばしば話題になるスイスフランを含めて、全て四パーセント以上で

金1グラムの各通貨平均価格と変動率（%）（2016年と過去10年間の要約）
「金価」を「円」で示すと「金本位制」かと思われるほど一定している

国名	通貨・単位	2016年			2012～2016年			2007～2011年			10年間の価格	
		平均	%	順	平均	%	順	平均	%	順	倍	順
米国	ドル	40.3	5.8	13	43.5	14.6	15	34.3	29.9	13	1.80	7
カナダ	ドル	53.3	4.3	7	49.2	8.7	3	25.9	26.3	10	2.33	13
欧州	ユーロ	36.4	5.0	10	35.3	12.1	9	24.8	30.9	14	2.23	13
日本	100円	43.7	2.3	1	43.2	5.0	1	31.9	17.0	1	1.66	13
英国	ポンド	29.9	9.4	18	28.4	14.5	13	20.7	36.2	18	2.67	16
スイス	フラン	39.7	4.8	8	41.0	13.8	11	35.3	19.9	2	1.48	1
オーストラリア	ドル	54.1	4.3	6	49.5	7.7	2	38.3	21.8	3	2.03	11
ニュージーランド	ドル	57.8	4.2	3	56.3	11.3	5	47.6	25.7	8	1.90	9
韓国	1000ウォン	46.7	4.2	4	48.4	14.8	16	38.5	32.8	15	2.25	15
メキシコ	10ペソ	75.3	7.1	17	63.4	14.0	12	42.1	34.3	16	3.08	17
ブラジル	レアル	139.9	5.7	12	112.3	16.7	17	62.1	25.1	5	3.22	18
中国	元	267.7	6.0	15	274.0	14.5	14	234.3	25.2	6	1.57	2
マレーシア	リンギット	166.7	4.3	5	150.7	10.2	4	112.2	25.3	7	2.17	12
ロシア	100ルーブル	26.9	6.5	16	19.3	26.4	18	9.9	35.3	17	4.71	20
シンガポール	ドル	55.6	4.1	2	56.4	11.4	6	47.1	23.4	4	1.65	3
南ア	ランド	590.8	5.9	14	476.5	13.5	10	260.8	28.8	11	3.75	19
IMF	SDR	29.0	5.3	11	29.5	11.9	7	22.1	29.2	12	1.99	10
台湾	100ドル	13.0	4.8	9	13.3	12.0	8	10.8	26.1	9	1.76	5

香港ドルとサウジアラビルリアルはほぼ完全に米ドルにリンクしているので、表示を省略

大きく異なる。

統計学で遊ぶ私にとっては、これで十分に分かるのであるが、おそらく統計学になじみの薄い方には、実感が乏しいであろう。

そこで、米ドル基準による金価や各国通貨価値を図1に整理して見た。グラフを一瞥しただけで、この間の金価と円価が完全に連動していて、他の通貨に類例がないのがお分かりであろう。

もう少し、しつこく示そう。

あるいは昨年だけが偶然だったのではないかとの疑問もあろう。そのため、別表に、過去十年間の資料についても、前半と後半にわけて、そのばらつきを各国通貨と比較してみた。この間は金価そのものが、大きく上昇した時期なので、どの通貨を取り上げても、数値的には、ばらつきが大きくなるが、いずれの期間も日本の円価による金価表示が最も安定していたのである。念のため図2に過去五年間の流れを示す。

このような円価の安定した動きに較べ、米ドル、ユーロ、英ポンドはもとよりスイスフランも、更には人民元も大きく騰落している。

そうなると、日本の通貨当局が意図的に擬似金本位制度を志向しているのかと疑って見たくなる。

しかし、日本は外貨準備高に占める金の比率はわずか

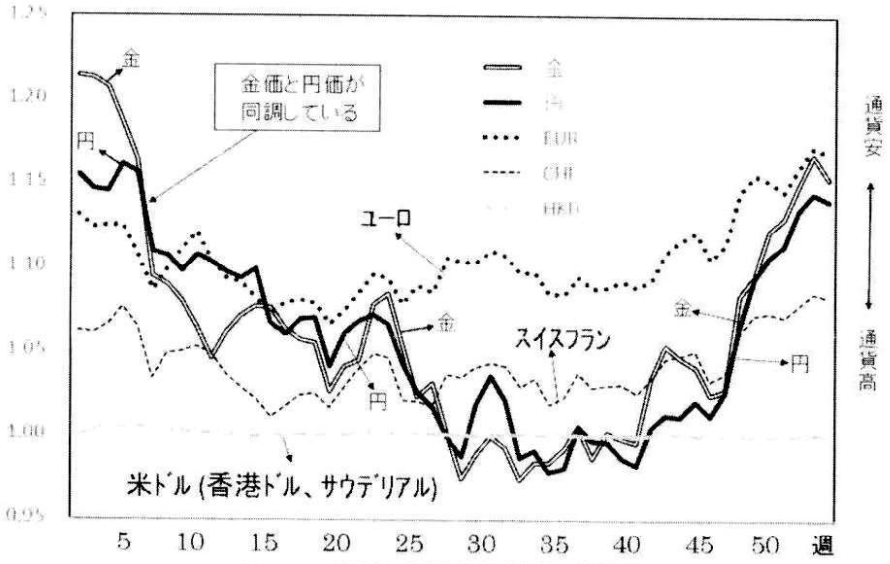


図1　米ドル基準の各通貨価値変動
2016年の週足 (最近5年間平均=1.00)

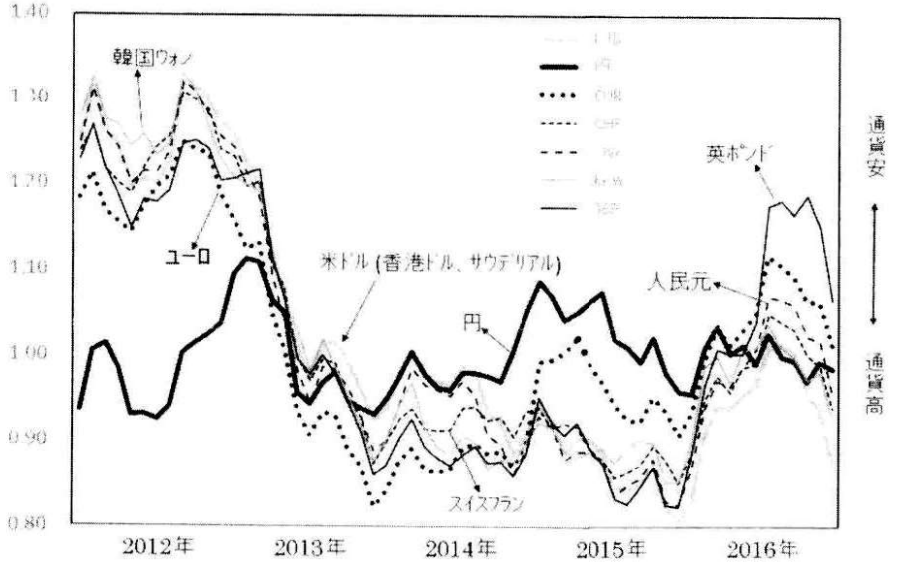


図2　金価格基準の各通貨価値変動
2012～16年の月足 (最近5年間平均=1.00)

三パーセント（七六五トン）に過ぎず、主要五十ヶ国中に同レベル以下の国は、韓国、中国、サウジアラビアくらいしかない。

その一方で、外貨準備高に占める金保有比率が高いのは、七五パーセントの米国（八一三四トン）、七二パーセントのヨーロッパ主要国（ドイツ、フランス、イタリア）であり、概してヨーロッパ諸国は金保有比率が三〇パーセント以上である。

金融不安がしばしば話題になるポルトガル、ギリシャでさえ、なぜか金比率が八〇パーセントを超えている。

その中で、金融大国のスイスだけは一四パーセントで最も低い水準である。だから、外貨準備高に占める金の比率が低いことは、金本位制度志向とは無関係、いや逆の関係なのであろう。

周知のように、近代的な金本位制は、英国が一八一六年に金一トロイ・オンス（三一・一グラム）を三ポンド一七シリング一〇ペンス（一ポンドは金八・〇グラム）と定め、その後イングランド銀行が金と交換可能なポンドを兌換紙幣として発行して成立した。

当時のイギリスはインドなど広大な植民地を有し、最も安定した財政基盤を有し、世界経済のヘゲモニーを確保していた。その意味ではインドは「国際金本位制＝ポンド体制」を支える最大の安定要因であった。

かくして、確立した金本位制であったが、第一次世界大戦で一旦崩壊してしまった。しかし疲弊した英国ではあったが、その面子から旧制度と同じ兌換比率で一九二五年に復活させる。

ところが、無理して復活した金本位制も、金が過度に米国に集中し、その反動の世界恐慌で再び金本位制は崩壊してしまった。

そして再度復活したのが、一九四五年に発効したプレトンウッズ体制である。その際には一トロイオンス（三一・一グラム）の金が米ドル三十五ドル（一ドルが金〇・八八九グラム）、すなわち、それまでの一トロイオンスの金が二十ドル（一ドルが一・五五グラム）から約半額に切り下げられ、実質的にはドル本位とでも言うべき金本位制度であった。

しかし、戦後二十五年も経過すると、安価に固定されていた敗戦国の通貨、マルクや円に対して、ベトナム戦争等で経済力の落ちた米ドルは耐えきれなくなった。一九七一年ニクソン大統領は、突如としてドルの金兌換を停止し変動相場制への移行を宣言して、金本位制を終焉させてしまったのである。ここにドル本位制とも言うべき制度が成立した。

かくして崩壊してしまった金本位制ではあるが、その後、米国経済は膨大な赤字続きで、「ドル札鉱山」によ

ってドル本位制を維持していることへの不満から、金本位制の復活についてしばしば話題になっている。

しかし今の世界経済規模に対して、金はあまりにも少額であり、金価格が十倍にでもならないと金本位制維持には力不足だと言うのが経済界の認識である。確かにそうかも知れない。

そこで、現在人類が所有する金や各国が外貨準備として保管している金の総価格を計算してみた。

地上で人類が所有する金　十六万六千トン　八〇〇兆円
全世界外貨準備の保有金　三万一千トン　一五〇兆円
世界経済規模（GDP基準）　八〇〇〇兆円

それでは、世界の経済規模に対していくらの通貨が必要であろうか。日本の例ではGDPの二〇パーセント程の円札が流通しているので、その割合とすると一六〇〇兆円の通貨が必要となる。

しかし、金本位制になったとしても、金を日常通貨として使うわけではなく、各国間の取引精算に用いるのが主目的なので、現状の全世界各国の外貨準備高総計の六二〇兆円程度を金で保有すれば良いであろう。そのためには、金を現行価格で一三万トン準備するか、金価格を五倍程度に高騰させなければならない。やはり非現実的なのかも知れない。

そこで生まれるアイディアは、金といずれかの通貨を組み合わせた複合的金本位制である。それはブレトンウッズの金・ドル複合本位制と良く似ているが、金満国の円が金と全く同じ動きを示していることをヒントとして生まれるアイディアである。

さて、金と円の共通点は何であろうか。簡単に思いつくのは、共に「安全資産」と言われていることと、「金利を生まない資産」といわれていることである。

例えば、最近のニュースでは、円を「安全資産」として「世界経済の先行き不透明感から、ドルを売って、安全資産とされる円を買う動きが……」とか「リスク選好が戻ると低リスクの円を売る動きが……」などと説明している。

また、金はその地位を落としたとは言え、「誰の債務でもない」ので世の中が不安になると買われる「安全資産」である。

その一方で、円も金も明らかに「金利を生まない資産」である。投資家は「金利を生まない資産」を長期に持ち続けるより、一時的なリスク回避の「資産」として選好している。

おそらく金価と円価の連動性は、日銀当局とかロスチャイルドが意図的に仕組んだことではなく、「一時的なリスク回避の安全資産」としての共通認識によるものであろう。

それならば数多くの通貨の中で、なぜ円だけが「安全資産」の地位を占めているのであろうか。

それは後付け的な説明になるが、外貨準備高と対外純資産を比較してみると簡単に分かる。表示の一貫性のため、単位は円で示すので、その換算値はアバウトなものである。

	対外純資産(兆円)	外貨準備高(兆円)
日本	三三九	一二五
ドイツ	一九五	一九
中国	一九二	三一〇
香港	一一八	三六
スイス	九一	六一
ノルウェー	八五	六
カナダ	五六	八
ロシア	三八	三九
イギリス	▲一二	一六
フランス	▲五〇	一四
イタリア	▲五七	一三
米国	▲八八六	三八

ここに国別の通貨の安全性を最も良く示すのが対外純資産である。米国がマイナス八八六兆円であることにドル本位制への最大の懸念があるのは直ちに理解できるであろう。その一方でダントツの対外純資産を持つのが日本である。外貨準備高の最大を誇る中国は、対外純資産が一九二兆円しかなく、しかもその内訳に外貨準備高が含まれるので、香港を含めても実質的な対外純資産はマイナスである。ドイツは確かに日本に続く対外純資産を持つが、EU加盟国であり、フランス、イタリアを含めればとても余裕はない。

かくして、対外純資産から見れば、日本の円のみがダントツの一位なのである。

国家の総合的な債務履行能力を示す国の格付けで、国の借金がGDPの二倍に達している日本は、格付AAAどころか、英国、フランス、韓国、中国、チェコのAAよりも低いAであり、第二四位である。先進国中では最下位に近い格付けの日本の円が「安全資産」と言われる奇妙さは、ひとえに日本が膨大な対外純資産を持っているからであろう。

今の国際通貨体制、ドル本位制はいずれ崩壊するしかないが、受け皿がない。そこを狙っているのは中国の人民元である。なんとか米国なみの「人民元鉱山」を作って一気に金融世界を支配したい。

しかし、いくら背伸びをしても力不足は否めない。

したがって、知恵者が出て、「金」と「ジパング円」を統合し、金円本位制度をつくらないかと期待しているのである。

例えば、金価と円価が完全に同調するように為替操作することを考えてみる。

円価の場合、既に長期間にわたって同調しているので、その実現性はあり得るであろう。具体的には、金安時には円で金を購入し、金高時には手持ち米ドルを売って円に戻す。これで為替操作は可能で、長期的には米ドルを売って金保有を増やす効果がある。

トランプ政権の「米国第一主義」と「世界のドル支配」は両立しない。その解決のために、米国の軍事力を使う危険性についても留意しなければならないが、いずれにせよ「ドル鉱山」のツケを払わねばならないであろう。

その際に、受け皿としての「ジパング円の金本位制」に同調する通貨も出てくるかも知れない。別表の動きから見ると、差し当たり、シンガポール、マレーシア、ニュージーランド、オーストラリア、カナダなどがその候補者になる。期せずして全てがTPP参加国である。

トランプがTPP離脱を宣言する背景には、このような通貨戦争の予測があるように思われてならない。

今後の世界経済は、中国はもちろん、インドや南アメリカ、そしてアフリカを無視しては語れない。一国の経済力や軍事力に依存した通貨システムは、もはや終焉せざるを得ないと思う。

二〇一七年一月末擱筆

（追記）

トランプ氏が当選した直後から、トランプ氏の意に反して大幅な円安が進んでいたが、大統領就任後は「為替操作国発言」等で、ドルベースで円高に復帰している。ところが、金を基準にすれば、むしろ円安になっている。

	一ドル等価	一万円等価
二〇一一～二年	七九・八円	金二・三四グラム
二〇一三年	九七・六円	金二・一八グラム
二〇一四年	一〇五・九円	金二・三二グラム
二〇一五年	一二一・〇円	金二・二二グラム
二〇一六年一一月	一〇八・七円	金二・三〇グラム
二〇一七年 一月	一一四・九円	金二・二七グラム
二月	一一二・五円	金二・二五グラム
三月	一一二・九円	金二・二四グラム

策に溺れて自滅した
将軍補佐役
松平定信

千坂精一

江戸幕府最後の将軍十五代慶喜は水戸齊昭の七男であるが、八代一橋昌丸の養子に入ってあとを継いでいた。

さすがに幕末近くになって持て余したらしく、清水六代を水戸家に、尾張十四代以降と一橋十代を水戸分家に渡しているが、江戸の中・後期は一橋家が徳川、松平一族の頂点に立っていたのである。

この一橋家の繁栄の礎を築いたのは二代治濟であった。一部の史料では治齊とも書かれているこの人はたいへんな策士で、家治、家齊時代の政界の黒幕であった。

定信、一橋治濟に遠去けられる

松平定信は田安宗武の七男で吉宗の孫にあたる。六人の兄のうち四人は夭逝していた。

父宗武が七十五歳で病歿し五男治察が家督を継いで三

御三家と御三卿

八代将軍吉宗は家康の興した『御三家』に倣い、二男宗武に田安家を四男宗尹に一橋家を興させて甲斐、武蔵など六箇国の天領から賄料として十万石を与えた。

つづいて九代将軍家重も、これまた父に倣い二男重好に賄料十万石を与えて清水家を興させた。

この三家を称して『御三卿』という。

家康の創設した『御三家』は将軍家の血筋を絶やさぬための予備的計らいであったが、吉宗のそれは将軍職を尾張、水戸の両家に渡さぬための防衛措置であった。

なかでも家齊が十一代将軍になってからの一橋家の権勢は凄まじく、将軍家を独占しただけにとどまらず、『御三卿』の田安三代、清水二代以降『御三家』の尾張十代、紀伊十一代以降をすべて奪い取ってしまった。

年後の十七歳の三月、定信は十代将軍家治から突然奥州白河十一万石久松松平定邦の養子を命ぜられた。

兄治察が病弱で六男定國はすでに伊豫松山十五万石久松松平定静の養子になっていたので田安家の断絶を危ぶんで辞退したが許されず、養子になった五箇月後に兄治察は病歿してしまった。このときも定信の復帰は許されず田安家は一橋治濟の三男齊匡に継がれてしまった。

実家を一橋家に乗っ取られたわけだが、この定信追い払いには老中田沼意次の暗躍があったという。

家重、家治の二代にわたって側用人をつとめ、幕閣最高の老中にまで上り詰めて権力を恣にしてきた田沼にとって、秀才の定信は煙たい存在ではあった。

家治に子がなく、定信の兄治察が病弱とあって、このまま推移すれば定信の十一代将軍が有力になってくる。

定信の才能を恐れた田沼は、将軍の予備として田安家とともにある一橋家の治濟が、わが子を将軍にと希っている胸中を察して近づき、治濟と組んで田安家から定信の切り離しを画策したのだという。

定信は、利害が一致した田沼と治濟の謀略によって、奥州白河へ追い遣られてしまったのだった。

白河十一万石の養嗣子になった定信は、領国経営の実習のなかではやくもその才能を発揮して、衰退しつつある農業立て直しの政策を図り、質素倹約を心掛けさせて万一に備える貯蓄を奨励した。

天明三年（一七八三）養家を継いで二十六歳で藩主になったその年に東北地方は冷害と長雨で大飢饉になったが、定信は備蓄米を放出して領内から餓死者を出さなかったとして名君の評判が高まり、二年後に有力譜代大名の列に加えられて江戸城溜まりの間詰めを命ぜられた。

その翌年、天明六年（一七八六）九月八日に十代将軍家治が五十歳で世を去り、半年後の翌年四月十五日に十四歳の一橋家齊が十一代将軍になった。

定信は、

（自分が田安家を継いでいたら、間違いなく将軍に推挙されたに違いない）

そう思うといまさらながら口惜しく、田沼意次の重商主義政治批判勢力の急先鋒に立って、天明の飢饉による政策挫折を機に老中を失脚させたあともなお恨み骨髄に徹して、死者に鞭打つ思いであった。

定信、老中首座に抜擢される

そんな定信の怨念が天に通じたのか、田沼意次の老中罷免後もなお田沼支持派と定信擁立派とのあいだで暗闘がつづいていたが、その十箇月にも及ぶ政治空白が幕府への不信と社会不安を招き、天明七年（一七八七）五月二十日に江戸で大規模な打ち毀し騒動が起こった。

治安の乱れに乗じて五日間もつづいたこの『天明の打ち毀し』暴動を契機にして派閥抗争は沈静化し、田沼意次を罷免した御三家と一橋治濟が定信の起用を図った。

定信は、いきなり老中首座に抜擢されたのである。

慣例としては奏者番、寺社奉行、大坂城代、京都所司代、若年寄などを歴任して経験を積み、人脈をつくりながら政治運営の技法を会得してから、隠退した元将軍や世嗣の住居である西の丸老中になって幕閣最上位の役職を習い覚えたのちにはじめて本丸老中になるのである。

江戸幕府は『家産官僚制』といわれ、身分や家格が物を言う身分制社会であったから、能力があれば誰でも昇進できるという制度はなく、御三家は「敬して遠去ける」と別格として扱い、幕政への介入をさせなかった。

久松松平家からも幕閣に入った人はいなかった。

つまりその家格でなかったということである。

その久松松平家の定信が、幕閣経験のまったくない一門の平大名からいきなり老中首座に抜擢されたのであるから、異例中の異例というよりほかない。

重農主義を重商主義に転換して消費を助長し、高度成長政策で華やかな元禄時代の再現を目指した田沼政治の失敗と折り悪しく浅間山の大爆発と大飢饉の天災が重なって、深刻な事態になったこの大不況期を任せる人材がいなかったといってしまえばそれまでだが、実はこの前例のない抜擢人事には一橋治濟の思惑があったのだ。

治濟は、わが子家齊将軍の安泰を図って、田沼批判勢力の急先鋒で民衆に人気の高かった定信を幕閣へ取り込み、人心が安定するまで利用しようと謀ったのだ。

このころ、巷間では、

田や沼や汚れた御代を改めて
清く澄ませ白河の水

という落首が広まっていた。

「どんなに経済が発展して華やかな世になっても、汚れた政治は嫌だ」

そう田沼政治を批判する庶民感情が単的に表現されていて、白河藩の清廉な政治実蹟を高く評価し、定信に大いなる期待を寄せているのであった。

将軍補佐役になって権力を握る

改革を実施するにあたっては、独占的支配体制でなくては成果を挙げることはできないし責任をとれない、とはやくも改革結果の世評を気にした定信は、御三家の水戸中納言徳川治保に『意見書』を提出した。

その内容を要約すると、

○今年はさいわい豊作で五年つづいた大飢饉状態から脱け出せる見通しがついたので改革の時期が到来した。

○幕府財政は窮乏の極限にあるため、綱紀が緩み、人心

は離散し、いまや貨幣と米穀を支配する権限すらも町人の手に握られている始末で、幕府の権威は地に墜ちて危機状態にある。

○この危急存亡の秋にあたり、身命を賭して改革に取り組む決意を固めたので、一人で存分に働ける組織と環境をつくってほしい。

そう現状打開の危機管理体制実現を御三家に訴えた。

定信の意見に同調した御三家が一橋治済と将軍家斉に働きかけて説得した結果、定信に家斉の内意が伝えられ、

「定信一人の考えで存分にやってよろしい」

とのお墨付きが与えられた。

そして定信は、半月後の天明八年（一七八八）三月四日、上意により正式に将軍補佐役に任じられた。

補佐役といっても将軍家斉はまだ十六歳の少年だったから実質的には将軍になったも同然で、三十一歳でようやく幕府全権掌握の理想が適い心中快哉を叫んだ。

定信は絶大な権力を手中にすると、『将軍御心得十五箇條』を制定して将軍をも規制する強権をふるった。

一橋治済と田沼意次の謀略によって将軍への道を絶たれた無念さを、現将軍を抑える立場に立つことによって憂さ晴らしをしたのである。

いつまでも根に持つ執拗い人ではあるが、善意に解釈すればそれだけ幕府の統領に立って国を治めることに自信があり、意欲に満ち溢れていたともいえる。

だが、この最高権力者である将軍補佐役にも、将軍の信任が不可欠の条件というアキレス腱があった。

賢明な定信は地位安泰を図るために、その気もないのに繰り返し執拗に辞表を提出して、そのたびに家斉から慰留されることによって将軍信任の確認をとった。

定信は自分が退任すれば家斉が困ることを承知のうえで、辞める気もないのに信任を確認させていたのだ。

思い上がるエリートにありがちな嫌がらせである。定信にもそんな底意地悪い性癖があった。

この責任逃れともとれる辞意繰り返しの演技といい、改革の実施はまず独占的支配体制を確立しておいてからという慎重さといい、このあたりは定信の神経質で生真面目な性格を端的に現わしている。

こうした経緯があって将軍補佐役に就任した定信は、まず残留している田沼派の老中を排除しておいていよいよ世に言う『寛政の改革』にとりかかることになる。

田沼派老中を排除して幕閣を固める

現代でも、不況に喘ぐ業態を改善するために企業再構築で活性化を図ろうとする経営者が、社内の人心を一新するために外部から有能な人材を発掘してきて再建を託すことがよくある。

定信の起用もその例であった。

しかし、その人物がいかに辣腕家であっても、社内の人材と融和して協調体制が確立できなければ、所期の目的を達成することは難しい。

こういう外部からの異質の人材は、ややもすると社内の合意が得られぬうちに功を焦って強引に突っ走るので、社員たちの反感を買って疎外され、せっかくの能力が空回りして実績が上がらないことが多い。

そういう結果になると経営者は見込み違いだったといって嘆くが、そうではなくて社内の人間関係が円滑でないために非協力という制御装置が作動してせっかくの優秀な性能が全部可動できなくなってしまったのである。

定信は政治改革を実施するにあたり、まず幕閣の協調体制をつくらなければ成果は上がらないと考えた。

だが、老中のなかには田沼意次の一派が残っていた。

いかに首座とはいえ同役の首切りはできなかった。

半年後に将軍補佐役に任じられると、機会を狙っていた定信はただちに人事の刷新に大鉈を振るい、田沼派老中の水野忠友、松平康福、牧野貞長を罷免し、白河藩主時代から刎頸の交わりのあった松平信明、松平乗定、戸田氏教、本多忠籌らの大名を起用して幕閣を固めた。

これで、『寛政の改革』を担当する顔触れが揃った。

足許を固めた定信は、改革の実施に踏み切る。

武士の頽廃と長谷川平蔵の活躍

寛政三年（一七九一）六月、幕府は江戸市中を荒らし回る盗賊横行についての評議が開かれた。

それは神出鬼没の大松五郎という怪盗で、捜査の目を掻い潜って一夜に二、三件、この一年で五十件余りも犯行を重ねている大盗賊であった。

定信は、治安の乱れを深刻に受け止めた。

噂に尾鰭がついて市民は戦々兢々となり、とくに旗本、御家人の武家屋敷にも押し入ったという噂が広まっていることを重くみた。

定信は、この噂は武士階級の衰退にあると判断した。

旗本、御家人が贅沢で怠惰な生活に慣れ、地位と収入の向上を図って上役や重臣に賄賂を贈る慣習が借金を増やして返済できず、生活困窮に陥っているのは〈田沼病〉が原因であると極め付けた。

武士階級の衰退に反比例して、商人が台頭してきているのは由々しき問題であった。

封建社会を支えている士農工商の序列が崩れて「下勢上を凌ぐ」となった現状認識が定信の危機感であった。

老中たちも、そろってこの事態を深刻に受け止めた。

その武士を見縊る元凶の怪盗大松五郎を捕えて幕府の権威を回復したのが、池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』でお馴染の火附盗賊改長谷川平蔵であった。

平蔵は本所二ッ目（地下鉄都営新宿線菊川駅付近）に住む旗本長谷川宣雄の妾腹の子で銕三郎といった。母の実家上総國山邊郡片貝（千葉県山武郡九十九里町片貝）の庄屋宅で育てられ、成人まえに本所の屋敷へ引き取られたが義母との折り合いが悪く家を飛び出して無頼の徒と交わり三ッ目入江町（墨田区緑四丁目）あたりを塒にして〝本所の銕〟とか〝入江町の銕〟と呼ばれていた。

父宣雄の死後家督を継いで平蔵宣以となったが、長谷川家は四百石の小禄御家人だったので、直臣といっても将軍に拝謁できない御目見以下の軽輩であった。

その平蔵が四十二歳になった天明七年（一七八七）九月、先手弓頭から火附盗賊改の活躍の場を与えられた。

この役職は八代将軍吉宗の享保年間に火附改、盗賊改、博奕改の三役が統合されたもので、老中支配下の町奉行が役方という文官なのに対して若年寄支配下の番方である武官の先手組頭（千五百石）の加役（兼務職）になっていて六十人扶持が加給されていた。

先手組とは合戦時に徳川軍団の先鋒をつとめる斬込隊のことで、弓、鉄砲などを武器にして突撃する気性の激しい命知らずの荒武者集団であった。

乱世には大いに活躍した先手組も太平の世では無用の役職になり、無駄に禄を食む厄介な存在になってしまっていたので、幕府は先手組を活用するため町奉行や寺社奉行の管轄範囲を超えさらには諸大名の領地をも含む全国規模で手に負えない凶賊や武士凶悪犯の探索を引受けて、独断で逮捕処分できる権限を持つ加役を与えた。

享保年間にこの役を勤めた徳山五兵衛は、東海地方一帯を荒らし回った盗賊で歌舞伎狂言『白浪五人男』の頭領日本駄右衛門の実在人物日本左衛門こと濱島庄兵衛を捕えて遠州見附宿（磐田市見付）で獄門に懸けているし、平蔵の父宣雄も京都西町奉行のまえに勤めている。

長谷川平蔵率いる火附盗賊改もまた与えられた任務を天職と心得て治安維持の使命感に燃え懸命に勤めたので、神出鬼没の怪盗大松五郎や葵小僧のほかに数十人の手下を動員して東北から関東にかけての広範囲を荒らし回って盗みを働いていた大盗賊神稲小僧を捕えて武州大宮（大宮市）で獄門に懸けた実蹟を持っている。

この火附盗賊改は捕えた凶悪犯人に自白を強要する拷問の方法が荒っぽく非人間的であったために町人のあいだで嫌われる存在だったとも、また同心たちが権威を盾にして専横の振る舞いが多く弊害があったともいわれているから、そんな気性の荒い集団を統率する頭の長谷川平蔵はかなり厳つい強面の人物だったに違いない。

その長谷川平蔵が提案した画期的な企画がある。

江戸湾の石川島に設置された〈人足寄場〉がそうだ。

江戸市中の無宿者をここに収容して犯罪の発生を未然に防ぐとともに、その無宿者たちを教育して各種の技術を会得させ人別帳への復帰を目的とするものだった。

定信がつくらせたかのように伝えられているが、凶悪犯の成敗に辟易している平蔵ならではの発想である。

現在は佃島と接続してしまっていて面影がないが、江戸初期に石川八左衛門の所有だったという石川島は、門前仲町から越中島を通って相生橋を渡った右側のもと石川島播磨重工業第一工場があったあたりの佃二丁目付近がそうで、当時は四面海に囲まれている一万六千坪（約五万三千平方メートル）の広大な土地であった。

そこへ蔀、炭団、紙、精米、油絞り、鍛冶場などの作業場を建設した。

多い時には六百人もの無宿者がここで仕事と食事を与えられ、更正するための心学の講義も受けた。

もっとも無宿者の収容所であるから食事も住居もよいはずはなく、懲戒的な性格が強かったに違いない。

人足寄場は明治維新までつづきその後は監獄署になったが、それも明治中期に巣鴨へ移管されて廃止になった。

長谷川平蔵は火附盗賊改に任じられて八年後の寛政七年（一七九五）五月に五十歳の働き盛りでこの世を去った。

日夜緊張の連続で寛ぎのときがなく、東奔西走の激務が重なってあたら生命を磨り減らしたのであろう。

さきの『享保の改革』のときの大岡越前守や徳山五兵衛、このあとにつづく『天保の改革』のときの遠山金四郎らと同様に、長谷川平蔵もまた『寛保の改革』の歪みを担ってその解消に身命を賭した能吏の一人であった。

文武の奨励

田沼意次の重商主義政策で貨幣経済が進展して金・銀・銭の通貨が幅を利かすようになってしまったために武士の俸禄である米の価値が下がって収入が減り、そのうえ贅沢な風潮に慣れての浪費癖が重なって借金漬けになり、すっかり退廃してしまった士風を引き締めるために定信はまず改革の手始めに文武を奨励することにした。

そのことで武士の風習があらたまり、困窮も改善されて人の上に立つ本来のすがたに戻れるだろうと考えた。

謹厳実直で神経質な定信は、ひとつひとつ丹念に改革の具体策を立てて、忠実に実行していくことにした。

まず学術の振興については、五代将軍綱吉が林羅山（信勝）の創設した忍岡聖堂を湯島台に移築して幕府直轄校とした湯島聖堂を昌平坂学問所と改めて、儒学のうちの朱子学を正学と定め、他の学問の講義を禁止した。

寛政二年（一七九〇）五月二十四日発令の『寛政異学の禁』であるが、定信は幕府の官学の統一を図ったのであって、一般に禁止したのではなかったが、しかしこれによって以後役人の登用試験は朱子学でおこなわれるこ

とになるのであるから、必然的に洋学衰退の学界統制、思想統制に発展する結果になってしまったのである。

この昌平坂学問所は、二年後に幕臣一般を対象とする講釈をはじめて学問吟味という試験をおこない、さらに翌年には、十五歳以下にまで対象を拡げて漢文学習の初歩である素読（読み方）吟味という試験制度を開始し、成績優秀者を表彰した。

こうした幕府の文教重視姿勢が諸藩に大きな影響を与え、幕府に倣って藩校を創設したり、既設校の内容充実を図ったりして、全国的に武士階級の教育が盛んになり、それがさらに庶民教育の振興にまで発展していった。

現在、わが国が高度の教育水準にあるのは、この定信の文武奨励策によってその基礎が築かれたからである。

また、武士が武術を怠り、盗賊にまで見縊られる情け無い情況になっていることを憂慮した定信は、毎年将軍の御前で武術を披露する上覧試合を実施して、優れた者に名誉を与えるなど武士道の回復に躍起になった。

この定信の〈文武の奨励〉について当時の洒落本、滑稽本、人情本などの戯作者大田南畝（別号蜀山人）は、

世の中に蚊ほど煩きものはなし
文武文武と寝てもいられず

という狂歌を詠んで茶化した。

大田南畝は御目見以下の小禄御家人で、定信が制度化した幕府学問吟味（現在の国家公務員試験）で首席になった秀才であったが、役職は勘定奉行配下の支配勘定（民政、財務関係事務職）で終わっている。

改革を茶化した狂歌が定信の勘気に触れたかどうかは、いまとなっては知る由もない。

旗本、御家人救済の『棄捐令』

定信は小禄御家人の実態に触れて、住居不定で衣服はあるが武士の身分を象徴する大小を持たないすがたを嘆いているが、とかく問題を起こし士風地に墜ちて幕府の威信にかかわる住居不定のそれら御家人たちを町人の目から隠すために甲府や駿府に長屋を建てて収容し、甲府勤番や駿府定番の監視下におくことや、鎌倉に土着させ武芸学問所を設置して再教育することなどを考えた。

しかし、武士が誇りを維持できなくなった原因は生活の困窮であった。

武士が背に腹は変えられず町人に借金を頼み回っていたのでは、士農工商の序列が崩れるのは当然である。

そんな旗本、御家人を困窮から救う方法はただひとつ、幕府が俸禄を加増してやればそれで解決するのだが、いまの幕府財政にそんな余裕はなかった。

追い詰められた定信は、とんでもない策を講じた。

寛政元年（一七八九）九月布令の『棄捐令』である。

『棄捐』とは貸借関係を破棄させることで、旗本、御家人の債務を免除するというのである。その債権を一片の通達で否応なく放棄させられたのは札差であった。

札差というのは、旗本、御家人に代わって幕府の蔵から支給される俸禄米を受け取り、その販売をも代行して手数料をとる業者のことで、彼らはその俸禄米を担保にして金銭を貸し付けていた。浅草蔵前に店を構えていたのでこの札差のことを蔵宿ともいった。

いつしか両者の関係は金を貸す側と借りる側という金融だけの単純な関係になり、貸す側の強い立場と借りる側の弱い立場がつづいてついに武士と町人の身分的上下関係はなくなり、横柄な態度をとる町人のまえに武士が体面を捨てて卑屈に這いつくばるといった哀れなすがたになってしまっていたのだ。

『棄捐令』の内容は、

一、天明四年（一七八四）以前の札差からの借金は破棄する。

つまり、五年以前の借金は帳消す。

一、天明五年（一七八五）から寛政元年（一七八九）のあいだの借金は年利六分に引き下げて年賦返済とする。

一、来年以降の借金分から年利一割二分にする。

というものであった。

この『棄捐令』による札差八十八人の債権放棄総額は、百拾八万両だったといわれている。

定信は、これまで幕府が御用金（借金）を返済しなかったことについて、

「幕府の信を失う行為である」

と非難していたのだが、にも拘わらずあえて『棄捐令』を出したのは、

「下勢上を凌ぐ」

現状に幕府体制瓦解の危機感を抱き、その窮地を打開するために恥も外聞も捨てざるを得なかったのだろう。

この『棄捐令』布告について定信は、言い掛かりとも思える大義名分をたて、

「商人たちは、旗本、御家人から吸い上げた利益で贅沢な生活をし、風俗を乱している」

そう極め付けておいて、

「武士に頭を下げさせ、土下座までさせているような札差の態度は無礼至極である」

と頭ごなしに抑えつけて実施に踏み切ったのである。

『金穀の柄』をとり戻す

『金穀の柄』というのは金銭と米を支配する力のことで、これを握れば天下国家を統制することができる。

定信は、将軍補佐役になる直前の天明八年（一七八

八）正月二日に霊岸島（中央区新川一、二丁目）の吉祥院に、三月には白河城内の廟所にそれぞれ、

「幕府の中興成就」

を祈願して、願文を奉納した。

『中興』というのはいったん衰えたことを再び盛んにすることであるから、すでに幕府の統制力が弱体化してしまっていたということである。

言い替えれば、国の経済を支配する力は町人である豪商たちに握られてしまっているということで、まさに「下勢上を凌ぐ」状況にあったわけだ。

だから定信は、神社に参詣して『金穀の柄』を幕府に取り戻すことに身命を賭ける決意を誓ったのである。

だが、いかに幕府の権力を持ってしても、時代の趨勢に抗して旧に復することなどできるわけがない。

定信も、重大な決意をもって取り組んではみたものの、至難の業であることを悟って諦めたようだ。

というのは、強権をもって豪商たちを弾圧した形跡はなく、むしろ一部の豪商たちを幕府側へ取り込み、資金を提供させて〈勘定所御用達〉に登用したのだ。

幕府組織の頂点に立って田沼批判の改革実行に取り組んだ重農主義の定信も、すでに発展している田沼改革の重商主義貨幣経済を弾圧することはできず、やむなく妥協して「辛うじて幕府の主体性を維持するだけの竜頭蛇尾に終わってしまった。」

だが、定信の考えている幕府の主体性は抽象的で、豪商たちの巨大な商業資本を統制できる具体的政策がなかったために思惑と実践とが大きく食い違ってしまった。

後述する『物価引き下げ令』の挫折とともに、定信の政策が軌道に乗らなかったのはこの経済政策であった。

専門家の商人たちでさえ予測の難しい経済を、素人が統制しようとしても無理で、火傷するのが落ちである。

備荒貯蓄の奨励

備荒貯蓄というのは、凶作や災害による飢饉に備えて食料品を貯蔵しておくことである。

戦国の武将たちは、戦局が不利になって籠城を余儀なくされたときの兵粮米として常時城内に貯蔵していた。

つまり、非常時対策である。

吉宗は、『享保の改革』のなかで、年貢の一部を郷村に設置してある共同の穀倉に貯蔵しておいて、不作時に農民に貸し付ける夫食貸の制度を実施したが、年貢の増徴にしたがって農民への貸し付けが増大していき、増徴分が相殺されてしまう事態になってしまったので、年貢の一部ではなく、農民自身の負担で米を貯蔵しておいて貸し付ける相互扶助方式に切り替えた。

しかし、その相互扶助米も、田沼改革の浸透で貨幣に代わってしまっていた。

定信は、この時態を是正するために、五年期限で祖父吉宗が実施した『上米令』を復活させようとした。

『上米令』というのは、諸大名に禄高一万石につき百石（一パーセント）を上納させた制度である。

しかし、将軍家斉が、

「自分が倹約するから、諸侯に難儀をかけぬように」

止められたので、やむなく断念せざるを得なかった。

のちに側室四十人を抱えて五十六人の子女をもうけ奥女中九百人といわれる前代未聞の奢侈な生活をおくった家斉も、このころはまだ真面な考えであったようだ。

定信はやむなく『上米令』を中止すると、その分を五年間籾で貯蔵するよう『囲籾令』を公布した。

凶作などで困窮していた藩主たちにとっては、上米とおなじ拠出であっても払い出すのと備蓄するのとでは事情がまったく異るのでこの政令はすんなり受け入れた。

倒産寸前の米澤藩を再建した名君上杉鷹山は、この備荒貯蓄を独自に早くから実施していた。

現代の企業に例えれば、利益の内部留保であろう。

定信は、諸大名に『囲籾令』を通達する以前に、天領の農村に『貯穀令』を出して備荒貯蓄を実施していた。

これが順調に蓄積されていけば、天明七年の打ち毀し騒動を収拾したときのような巨額救済金は不用になって財政負担がなくなるし、凶作の年も飢饉にならず、一揆や打ち毀し騒動を未然に防げることになる。

また、豪農者にとっては負担が多いが、そのかわり凶作時に狙われず、不安に脅えることはないし、中・下層農民にとっても僅かな負担で大きな恩恵が期待できる。

現在の損害保険に相当する社会補償制度である。

これは誰もが納得する巧妙な仕組みで、天領では幕末までつづいたからこれについての定信の功績は大きい。

定信の経済政策が強圧的ではなく、誰もが納得し協力する制度であったならば、改革は成功したであろう。

物価引き下げの失敗

定信の『物価引き下げ構想』は、単に食料品などの生活用品を引き下げるだけではなく、地代、店賃の引き下げや町入用の減額まで視野に入れていた。

町入用は公共的支出で、現在の住民税に相当する。

町入用は、町内の地主だけがその所有面積割合に応じて負担していたもので、借地、借家人には負担がないところから町の正式構成員ではなかった。

定信は、町入用を減額すれば地主の負担が減り、その分だけ地代、店賃の引き下げは可能だと考えたのだ。

つまり、町入用減額分だけ地代、店賃を引き下げても、地主に損害がないから抵抗はないはずだと踏んだのである。理屈のうえではそのとおりであった。

物価引き下げのほうは、生産価額の調査に時間がかか

るので当面の策として一律二割の引き下げを命じたが、引き下げ率に根拠がなく無茶苦茶な話で、享保のときの吉宗の米の公定価額問題と同様あまりにも強引すぎた。

いかに封建社会であっても無謀な上意下達に商人たちが応ずるはずはなく、物価引き下げは実現しなかった。

また町入用減額で地代、店賃を引き下げた分を物価引き下げに充てる発想も、各町によって減額がまちまちで地主の手取り増加分が一律にいかなかったために僅かの引き下げにしかならず、有耶無耶で終わってしまった。

こうして改革の大きな柱である『物価引き下げ』は結局挫折してしまい、町入用減額分の処理だけが残った。

その配分は、七割を積み立て、一割を町入用に再組み込みして、残りの二割を地主に返還することにした。

地主への返還は、もともと地主が納めたものであるから、現在の特別減税のようなものである。

この七分金積み立てについては当面これといった目的がなかったので凶作時の救済資金として貯蓄することにしたのだが、それが実際のちの天保の飢饉のおりに役立ったのであるから定信の怪我の功名だったといえよう。

重農主義政策の復活

当時の農村は若年従事者の多くが江戸へ出稼ぎに出てしまっていたので、人手不足で耕地が荒れ果てていた。

そのため生産農民が激減し消費市民が激増していた。

定信は農村立て直しに本腰を入れ農村人口定着の対策として『出稼ぎ制限令』や『旧里帰農奨励令』などを出し、Uターン奨励制度を設けて帰農する者には手当を支給することにしたが、いったん江戸の生活に馴染んではもはや帰農などする者はなく、制度は失敗に終わった。

現在の農家が抱えている後継者不足とおなじである。

定信は、

「幕府政治の根本は農業だから、農民こそ国の基礎だ」

と考える重農主義者だったから、政敵田沼意次の重商主義政策を潰すことに躍起になって商業を抑え、米穀生産を重視する農業振興策を採ったのだった。

だが、その農村も田沼病に侵されていた。

農民たちは利益の追求を第一に考える商人たちの貴金賤穀の風潮に同調して米より菰、藍、紅花などの換金容易な作物をつくり労せずして金を儲けることに傾倒していった。

ために米づくりの農業に力が入らず、耕地は荒れ果ててしまって凶作になり、そのうえ年貢の重税が拍車をかけてついに本末転倒の状態になってしまったのである。

定信は、荒廃した農村の復興を急務とする農業振興策として備荒貯蓄を復活させて郷倉への囲籾を奨励、費用負担の軽減措置として村入用の削減、手数料をとって年貢納入を代行している納宿（大坂では藏宿）の廃止、な

どの農政をつぎつぎに打ち出していったが、それらの姑息な削減よりも農民にとって最大の過重負担になっているのは年貢なのであって、年貢率が大幅に軽減されないかぎり米づくりをしても苦しむだけであった。

この年貢率について定信は、老中首座就任の直後に「年貢率大幅減税」を公約したのであるが、ついに実行されず、むしろ代官に作況調査（検見）を厳正・公平におこなうよう指示して、五割課税（五公五民）から七割課税（七公三民）に増税する方針とともに、その収穫量の引き上げにも躍起になったために馬脚を現わしてしまい、理屈の建て前と実践とが大きく矛盾してしまった。

さらに定信は、農村から田沼病の一掃を策して、田沼重商主義政策を非難する法令を強く打ち出した。

- ○ 奢侈を禁じ、質素倹約を守ること。
- ○ 農閑期に商業に携わったり、村内に髪結床（理髪店）を置くことを禁止する。
- ○ 灯油原料の菜種を除き、それ以外の商品作物の栽培を制限して、その他の雑穀を多く作付けすること。

など、つまり農民が穀物より商品作物の生産をすることや、農業以外の商売に精出すことを禁じたのである。

こうして定信は、重農主義政策の復活に懸命になったが、当時の傾向は新しい重商主義貨幣経済に向かっていたところから、旧習を守ろうとすることはもはや時代遅れであったために、見るべき成果は挙げられなかった。

定信の人気翳る

定信は、頭脳明晰な人格者で、前述の

田や沼や汚れた御代を改めて
清く澄ませ白河の水

と庶民に期待され、田沼金権政治批判の急先鋒として歴史の表舞台に登場したのであるが、その政策は、祖父吉宗将軍の『享保の改革』に倣い、支出の抑制を図ることに重点を置いて倹約を奨励し、商業を弾圧して奢侈品の売買を禁止し、風俗の粛正を図って混浴を禁止したり、好色本などの出版を取り締まり、洋学を禁止して儒教の朱子学を幕府の正学にする事実上の学界統制をおこない、さらには貿易も禁止して鎖国してしまうなど徹底的な締め付けをやったので、緊縮政策の支持が得られず不況に陥り、経済はマイナス成長に転じて世の中は暗く落ち込んでしまった。

その厳しい締め付けに堪り兼ねた庶民のあいだに、

白河のあまり清きに住み兼ねて
汚れるもとの田沼恋しき

という落首が広まり、定信の緊縮政策を嘆いた。

定信政治にうんざりの気持が率直に表現されている。

どんなに政治倫理が確立されて政界が浄化されようとも、景気がいっこうによくならないのではもとの田沼政治のほうがまだましだ、というのである。

わたしたちもかつておなじ思いをしたことがあった。

それは長期政権のもとで不正が露呈して、当時単独与党だった自民党が内部分裂を起こし、大混乱のなかでなんとか再編成はされたものの、政治不信を回復する改革に懸命で、泡沫的投機現象崩壊後の深刻な不況対策が後回しにされてしまい、酷い仕打ちを受けたものだった。

あのときの苦い経験と思い合わせてみると、庶民感情はいつの世もおなじであることがわかる。

ところで、定信が『寛政の改革』に着手したより二十年も早く自藩の改革に立ち上がった大名がいる。

明和四年（一七六七）、弱冠十七歳で藩主になった上杉鷹山は、累積赤字を抱えて倒産寸前状態の米澤藩十五万石を再建させるにあたり、領民あってこその藩という愛民思想を基本理念に据えて、将来に希望を持てる具体的な改革構想を開示し、藩士と領民の合意を得ると、藩主から領民にいたるまで米澤領内の全員が一体となって喜びも苦しみもともに分かち合おうという姿勢を貫き、改革の成果に準じて徐々に領民を潤しながら、めげず焦らず、五十五年の歳月をかけてみごと再建に成功した。

人は、どんな悲惨な状態にあっても、希望があれば耐えられるものである。

鷹山は、つねに領民に希望を与えながら苦難を乗り切ったのだ。

その場かぎりの姑息な手段だけで明日のための政策がなくては、改革とはいえない。

定信の失脚

松平定信は全権を掌握している将軍補佐役にありながら、僅か六年で解任されて表舞台から消えてしまった。

改革に悪戦苦闘し、強硬な締め付けによって庶民感情が離れていってしまったことはまえに述べたが、それとても『享保の改革』のときの大岡越前守の弾圧にくらべれば失政とは言えない。

では、なぜ罷免されたのか。

定信が補佐役に選ばれたとき十五歳の少年だった将軍家齊が、二十一歳に成人したのが直接の原因であった。

心身発育して人格が形成されていけば、傀儡を脱して主義主張を唱えるのは当然のことであって、そうなると将軍補佐役のいることが権力の二重構造になり、家齊にとって定信は煩わしい存在になってきたのである。

家齊に愚痴をこぼされ、不満を訴えられた父一橋治濟は一計を案じ、まえに述べた将軍の信任を確認するために定信が繰り返し辞表を提出する演技を利用して、家齊に受理させ解任したのである。

定信は、駄々を捏る策に溺れて自滅した。

慢心の悪癖が禍して墓穴を掘ってしまったのだった。

それにしても一橋治濟は、はじめは田沼意次と謀り、将軍予備軍の御三卿のなかから英明な人格者で強力な競争者の定信を田安家から外すことでわが子家齊の立場を有利にし、つぎには御三家と謀り、その田沼を失脚させて定信を将軍家齊成人までの中継ぎに立て、そして最後は、家齊の成人で邪魔になった定信を解任するという、権謀術数に長けた冷酷な政界の黒幕であったのだ。

定信は、治濟に操られ、振り回され、利用された挙げ句用済みとなって弊履の如く捨てられてしまったのだ。

一橋治濟が定信罷免を急いだ理由としてもうひとつ考えられるのは、表面化した太上天皇尊号事件である。

太上天皇というのは、天皇が退位したのちに贈られる称号であって、文武元年（六九七）八月文武天皇に譲位した持統天皇に贈られたのがはじまりだといわれている。

このほか、天皇の実父にも贈られたことがあった。

ことの起こりは、安永八年（一七七九）十一月に即位した光格天皇が、実父の閑院宮典仁親王に太上天皇の称号を贈りたいと考えたことにはじまる。

光格天皇は、そのことを繰り返し幕府に要求したが、幕府はそのたびに言を左右にして回避しつづけた。

なぜ光格天皇が実父に太上天皇の称号を贈ることを固執したかというと、元和元年（一六一五）七月十七日に幕府が『武家諸法度』『諸宗諸本山諸法度』とともに制定した『禁中並公家諸法度』のなかに席順が定められていたからである。

その席順規定は、

「三公の下親王、その故は右大臣不比等（藤原）舎人親王の上に着す。殊に舎人親王、仲野親王、贈太政大臣。穂積親王准右大臣。これ皆一品親王以後大臣を贈らるる時は、三公の下勿論たるべきか。親王の次前官の大臣、三公、在官のうちは親王の上たると雖も、辞表の後は次席たるべし。その次諸親王」

となっていて、たとえ親王最上位の一品親王（第一位親王）であっても、席順は三公の下、つまり、太政大臣、左大臣、右大臣の下に位置づけられているのだ。

このため、光格天皇の実父閑院宮典仁親王は天皇の父であるにもかかわらず、親王であるため、臣下の三公よりうしろに坐らなければならなかった。

光格天皇がこのことを嘆き、実父に太上天皇の称号を贈って三公より上位の席順を切望したのである。

定信がはじめてこの問題に直面したのは、老中首座に就任して半年後の天明八年（一七八八）であった。

この年、一月三十日に京で大火が起こり、御所、公卿屋敷町、二条城、東西両町奉行所、所司代屋敷が焼失したので、定信は上洛した。

そのとき天皇側近の公卿から直接要望されたのである。

定信は、

「たしかにこれまで親王に太上天皇の称号を贈った例はあるが、それはいずれも衰乱の時期に限られている」

つまり、それは特別の理由だということで拒否した。

だが、その後も執拗に要求がつづいたので、ついに腹を立てた幕府は、寛政五年（一七九三）三月七日に尊号推進派の公卿中山愛親を閉門、正親町公明を逼塞処分にすると、他の同調派の公卿たちも処罰した。

このことで、朝廷と幕府のあいだに亀裂が入り、両者のあいだが険悪になった。

閑院宮典仁親王に太上天皇の称号を贈ったところで幕府がどうなるということではないのに、なぜ天皇側近の公卿たちを処罰してまで頑なに拒んだのか、それにはほかに理由があった。

ちょうど時期をおなじくして、将軍家齊が父一橋治濟に大御所の尊称を贈りたいと言い出していたのである。

定信は、

「大御所様とは、そもそも将軍を隠退なされたおかたに限られた尊号でございます」

将軍経験者でもない者に尊号を与えるとはとんでもないこと、と言外に匂わせていた。

一橋治濟に大御所を与えないためにも、閑院宮典仁親王の太上天皇尊号は回避しなければならなかったのだ。

このことが治濟、家齊父子の怒りを買って、定信は四箇月後に突然罷免されることになったのかも知れない。

定信は、『寛政の改革』の実施にあたって、祖父吉宗の政策を踏襲したのであるが、幕府の財政再建だけに汲々として庶民を締め付け、上意下達の一方通行で合意を得なかったために結局改革は支持されず、突然の罷免によって中途半端のままで終わってしまったのであるから、この改革は成功したとはいえない。

（了）

主な参考文献

徳川将軍列伝　秋田書店
藩史事典　秋田書店
年表日本史　筑摩書房
松平定信　藤田覚　中公新書

初フルマラソンを涙のゴール

安藤剛

【フルマラソンへの挑戦】

還暦を過ぎて始めたマラソンがちょうど一年になる平成二〇年一月のメモリアルランを、南房総のフラワーラインを走るフルマラソンに決めた。

前年二月に第一回東京マラソンが開催され、「東京がひとつになる日」のコンセプトで、走る感動を日本中に与えた衝撃的な映像に、マラソンを始めた自分もぜひ参加してみたいと、今年の第2回大会に申し込んだが、五倍以上の抽選の壁にその夢は虚しく消えて、走るモチベーションも一気にクールダウンしてしまった。

先月の「東京立川クリスマスラン」で走る楽しさを再び味わい、やはり一度でいいからフルマラソンを走ってみたいという気持ちが沸々と再燃して、落選した東京マラソンに代わる制限時間の長いフルマラソンをネット検索、前泊しなければ参加できないが、制限時間と何とか走れそうな「館山若潮マラソン大会」を見つけ出した。

受付が先着順とあって、すかさず申し込み、心は早くも南房総へ、大海原を望みながら、早春の暖かい陽射しと潮風を浴び、菜の花の咲き誇る海岸ロードを颯爽と走る自分の雄姿に思いを馳せた。

今年の走り初めは、正月三日に自宅近くの用水堀コースで一〇キロ、九日から皇居周回ランを再開して、業務終了後に一周五キロ四周をノルマに自主トレをこなしたが、二〇キロの壁が大きく立ちはだかってきた。

走り始めて一年、これまで出場したマラソン大会は、五キロ一回、一〇キロ五回、ハーフが二回、二一キロ以上はまだ走ったことがなく、初めてフルマラソンを走ろうとする自分に、四二・一九五キロをしかも五時間以内に走るのは、やはり無理なのだろうか、そんな不安が日増しに強くなってきた。

しかし、制限時間云々するよりまず四二キロを走り切

れるかどうかが先決ではないか、時間がいくらかかってもいい、とにかく四二キロという距離に挑戦してみようじゃないか、途中で足が前に進まなくなるようなら、その時に本番は躊躇せず棄権すればいい、と開き直った。

かくして、本番を一週間後に控えた日曜の朝八時、冷たい北風の強いなか、いつも走る自宅近くの用水堀コース片道五キロを四往復、フルマラソンに近い四〇キロに挑戦した。とにかくどんなことがあっても今日は走り続けよう。万一のため救急セットを背中のバックに自宅を飛び出した。

四月には桜と菜の花が一斉に咲き誇る用水堀コースも、僅かに白梅のつぼみが膨らんでいた。往路は追い風に助けられたが、復路の向かい風には前傾姿勢で風神に頭突きするも、まさに牛歩の如し、である。とにかく今日は走り切るのだ。三往復まではなんとか走れたが、四往復目になると、いつもの右足の筋肉硬直と左足の靴ズレが襲ってきた。

途中の公園で、筋肉痛軟膏を擦り込み、救急絆創膏を貼り直し、膝の屈伸を繰り返し、チューブのゼリーでエネルギーを補給、どうにか四往復を走り切った。時計は午後一時を少し回っていたが、とにもかくにも四〇キロを走れたというガッツポーズが自然に出ていた。

これで恐うことなく「館山若潮フルマラソン」出場は決まった。大会運営事務局から送られていたマラソンコースマップを広げ、早速、前泊する館山市内の民宿と帰りの特急指定券を予約した。

【大会前日の館山雑感】

大会前日の朝刊の「安房、初の夢切符」という文字が目に飛び込んできた。選抜高校野球大会の二一世紀枠で初めて甲子園への切符をつかんだ安房高校は、一〇〇年以上の歴史を誇る進学校で、部員三五人全員が地元出身者、という記事である。

同校が館山市にあるという。今夕から館山への走りの旅立ちを前に、縁起のいい朗報ではないか。老いてなお青春を標榜する自分も、彼らの一途でひたむきな若い力にあやかり大いに頑張ろうと心に誓った。

昼に地元テニス仲間と初打ちを楽しみ、新年会は後日開催に延期してもらい、テニス仲間の声援を背に、館山に向かい出立した。東京駅で総武線に、千葉駅で内房線に乗り換え、五井を過ぎた頃から、東京湾に沈む夕陽と孤高の富士の姿を車窓に期待したが、あいにく水平線に濃墨の雲がたれこめ、茜ね雲の僅かな隙間を探るうち、漆黒の帳は下りてしまった。

暇つぶしに持参した城山三郎の「望郷のとき」を読むうち、トンネルをくぐる轟音が多くなってきた。海岸線の岸壁を走っているのだろう。時おり闇夜の海に反射する港町の灯りが見えて額を窓ガラスに押し付けた。各駅

停車の度に車内は疎らになり、まもなく終着の館山駅に着いた。

南欧風の駅舎を出ると駅前広場に巨大な椰子の木のシルエットが夜空高く浮かび上がっていた。南国情緒豊かな椰子の並木道を進むと、打ち寄せる波の音が微かに聞こえ、自然に足速やになった。真っ暗な海岸線に波頭の白線がおぼろげに浮かび、明日のコースになる洲崎灯台までの町明りだろうか、漆黒の館山湾を縁取っていた。

ここ館山は東京湾の入口という要衝の地にあるだけに、これまで幾度か悲劇の舞台になってきた。あの怪獣ゴジラが日本に上陸して暴れたのが館山だったし、館山城主の里見氏が関ケ原で功を上げながら、大久保忠隣失脚に連座して鳥取倉吉に減封後廃絶させられたのも、江戸の海洋交通の入口を外様大名に領有させられないという幕府の思惑があったからだという。

また先の大戦末期に米軍の日本本土上陸地点を房総半島と想定、帝都防衛の重要拠点として館山市に大要塞と特攻兵器の基地が建設されたという。幸いにしてロケット式特攻機「桜花」や木造高速艇「震洋」が米艦体当たりに出撃する直前に終戦になったが、もし終戦の英断が遅れていたら、館山は沖縄以上の悲惨な戦場になっていただろう。事実、戦艦ミズーリ号艦上での降伏調印の翌日、米軍は館山に日本本土初上陸したのである。

館山市観光協会のホームページに「花だより」「ウミホタルのまち」「夕日の美しいまち」の写真に彩られた平和な観光都市が紹介されていた。明日は、美しい大地を走り、南房総の館山を満喫し、そして平和な時代に感謝しよう。

【館山若潮マラソン大会(平成二〇年一月二七日)】

目覚ましが鳴る前に目覚めた。かなり強い海風が唸っていた。朝食を済ませて外に出ると、民宿の小母さんが「正面に富士山が見えるんだけどね。でも裾野が少し見えるわね」そして「昨日今日と特別寒いのよ」と申し訳なさそうに話しかけてきた。確かに、大海原の向こうに富士を望みながら早春の南房総を走りたい一心でやって来たのは事実だが、今は震えるような寒さの中をどんな服装で走ろうか、そのことで頭が一杯になっていた。

駅前からシャトルバスで会場に入ると、地元の特産物コーナーが連なり、郷土色豊かな雰囲気で、一面の菜の花が大会を盛り上げていた。大会冠名の「若潮」は広辞林に「小潮から大潮に向って干満の差が次第に大きくなる時期の潮」の意とあったが、若さと勢いを感じさせる響きがあり、拙マラソンブログ「老いてなお青春」のテーマにぴったりではないか。よし今日は、若潮となって大いに頑張るぞ。

待合運動場には無数のシーツが広げられ、家族や仲間と団欒する選手たちの誰もが上下のトレーニングウエア

である。朝からの震えるような寒さに、自分も同じ出で立ちで走ることに決めた。黄色の菜の花で飾られたステージの前で記念写真を撮り、軽い屈伸運動を始めたが、今日はフルマラソン、長丁場なので体力温存のため走り込みは自重、逸る気持ちをおさえた。

やがて集合案内放送でスタート地点に向うと、半袖かノースリーブに短パンの本格的アスリートがひしめいているではないか。さすがフルマラソンにエントリーするだけのことはある。私のような長袖長ズボンの上下トレーニングウエア姿はとんと見掛けない。いつのまに着替えたのだろう。

彼らのあまりの変わり身の速さに裏切られた思いがしたが、気温四度という寒さに震え上がる彼らの悲鳴を耳に、「ざまあみろ、やせ我慢して」とほくそ笑みながら、二三〇〇人の出走者の中で、フルマラソン初挑戦で制限時間五時間内完走を目指すのは自分ぐらいかもしれない、年齢別のゼッケン番号からランキャリアを値踏みしている自分が可笑しかった。

やがてゼッケン番号順に並ばされ、かなり後方のグループになり、ピストルの合図からスタート地点を通過するまで一分少々かかった。まずは想定通りのペースで順調な走り出しである。右手に館山湾を見ながら海岸線沿いに南下した。やはり富士山は見えず残念だが、同じコースに戻る復路を楽しみにしよう。

館山港に繋留される漁船群の絵画のような構図に、横道にそれてカメラに収めた。今回は、五時間に及ぶ長丁場、どんなアクシデントがあるかわからない、救急用品を入れたウエストポーチを腰に巻いたが、美しい房総の景色をカメラに収めて初フルマラソンの記念にしようとデジカメも入れておいた。

大会後援の新聞社の旗を振る沿道や給水所のボランティアに若い女性が多いのには驚いた。大都市から遠く離れた地方の若い人達の地域活動への参画意欲は都会人とは違うのだろう。素晴らしいことだ。

老人ホームの前で勢揃いした車椅子の応援にハイタッチしていると、視線の合った一人のおばあさんの瞳に、年老いて不自由な自分でも他人様を応援できているという喜びを見た気がした。走り過ぎてなお脳裏に残るおばあさんに、いつまでもお元気でと祈りとエールを送った。

市街地を抜けて紺碧の館山湾に沿った走りは爽快である。青空が広がり日差しも強くなり、気温も上がって軽装で良かったかなと反省したが、ウエアを脱ぎ捨てる訳にもいかず致し方ない。まもなく一〇キロ地点で一時間二分。キロ六分ちょっとのペース、ゆっくりのつもりが少し速すぎたかもしれない。

やがて海軍特攻艇基地のあった波左間のバス停が見えてきた。左右に目を泳がすが、それらしき案内板や洞窟跡は見付け出せなかった。「震洋」は船首に爆薬を詰め

て敵艦に体当たり攻撃するモーターボートで、戦争末期の比島と沖縄で、乗れる飛行機の無くなった予科練上がりの若者二五〇〇人以上が戦死したという。

震洋は本土決戦の切り札として首都防衛拠点の館山にも配備されたというが、機関銃の砲列に竹槍で突撃するような無謀な自殺行為ではないか。米軍の本土上陸直前に降伏、最悪の悲劇は避けられた。

磯浜の岩場に打ち寄せ砕け散る荒波と静かな紺碧の海原が覗いてきた。その海原が岩陰に隠れると、小さな漁港が突然姿を現す、その繰り返しが始まった。遠くみちのくの山間で育った私にとって、蒼い海が見えてくるだけで胸が騒いでくる。

一二キロ地点の給水所でポカリスエットとバナナを補給、予防のため右膝に鎮痛スプレーを噴き付けた。やがて東京湾の入口に建つ洲崎燈台が岩陰から見えてきた。石橋山合戦に敗れ伊豆の真名鶴岬から広大な相模湾を小舟で逃れてきた頼朝が、僅かな主従と洲崎明神の前で合掌する姿が浮かんできた。敗北感に打ちひしがれ先の見えない憔悴し切った心境はいかばかりだったろう。

反対車線に寄って白い洲崎燈台にカメラを向けていると「余裕だね」と背後から声をかけられた。しばし同年配の彼と並走しながら、燈台の手前を外洋に向う坂道に入ると、向かい風と追い風が交互に寄せてきた。登り切ると前方に紺碧の大海原が広がり、房総フラワーライン

である。ロードの両端に植え込まれた菜の花の列が真っ直ぐ延びている。植え込みに入り黄色の花道にシャッターを切った。菜の花のツンとする強い香りが包んできた。

約六キロのハイウエーのようなフラワーラインの右手に広がる砂浜が弓なりに海原を囲み、沖合に浮かぶ黒い塊は伊豆大島だろうか。紺碧の大海原と真っ青な大空が繋がり、藤沢周平が好んだ「海坂（うなさか）」という美しい言葉が浮かんできた。

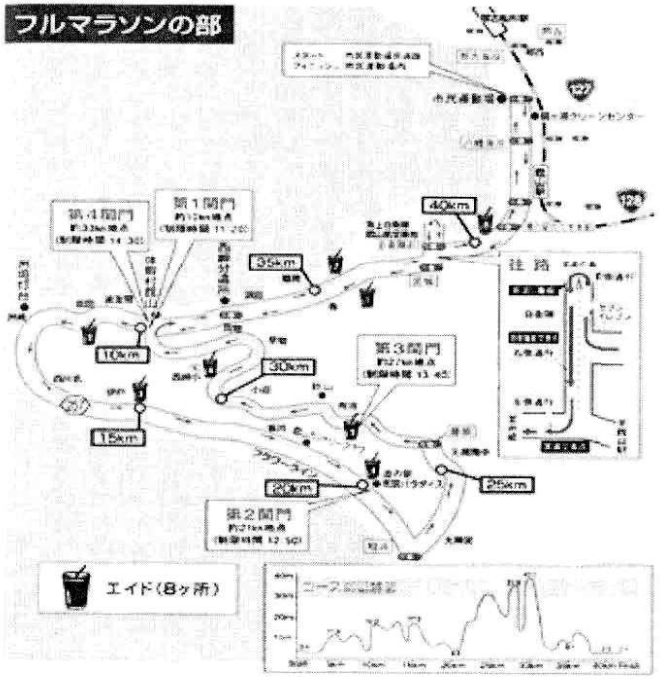
やがて二〇キロ地点で二時間八分。中間点通過タイムは、給水所で水とバナナとトイレを済ませ鎮痛スプレーを噴霧した休憩を入れて二時間一七分、この調子ならペースダウンはしても、後半二時間四三分で五時間内の完走はいけると確信した。

しかし、ここから魔のロードが始まった。紫やピンクや白のストックの美しいお花畑が、実は、過酷な山道への入口だった。目の保養になっていた大海原に代わって現れた美しい花園ロードは、なだらかだが、じわじわと、残り少なくなった体力を奪い取っていった。

本大会は、房総半島南西端を一周するコースで、前半は内房の海岸線を南下して房総突端を半周、南面のフラワーラインを東へ約六キロ、折り返して内陸に入り山間部を横断、海岸線に戻り往路をゴールへ北上するため、完走できるかどうかは、後半の高低差ある山道をいかに走り切るかにかかっていることは、コース案内で覚悟は

していたが、高低差三〇～四〇Mのだらだら坂の繰り返しは、さすがに両足に堪えてきた。

幾度か立ち止まり屈伸を繰り返し、ズボンを捲し上げて両膝に鎮痛スプレーを噴霧、走っては歩き、走っては歩き、の繰り返しになっていた。途中の給水所で可愛いお嬢ちゃんに飴玉を頂戴して姿えてくる気持ちを持ち直し、三〇キロ地点で三時間一八分、残り一二キロを一時間三〇分で走るのはなんとかいけそうだが、頭の中は、タイムの計算でループしていた。



やはり左足小指の感覚が麻痺してきた。力が入らない。ついに堪えきれず路肩に座り込んで靴を脱いでみると、小指がふやけて大きな水疱が出来ていた。救急絆創膏を巻きつけて走り出したが、両足の筋肉の硬直も続いて、すっかりペースダウンしてしまった。

大きく蛇行する山道のアップダウンが続き、三三キロで三時間五八分。なんとキロ一〇分もかかっていた。並走するランナーが赤い旗を振る係員に「関門ですか」と尋ね「ぎりぎり大丈夫ですよ」という返事が返ってきた。この三三キロ地点が、四時間で閉じられる最後の関門だったのである。

これまで自分に関門など関係ないと気にもかけず走っていたが、スタートのタイムラグが一分だったから、関門時間まであと一分しかなかったではないか。うっかりしていたな、危なかったな、関門に引っ掛かるところだった。ホッとすると同時に、五時間という制限時間が急に現実味を帯びてきた。最終関門を通り抜けると「まもなく海が見えますよ」という女性係員の声にどれほど勇気付けられたことか。走者の苦しい心理を知った優しい声掛けに感謝した。有難う。頑張ります。

ようやく海岸線の平坦コースに下りてきたが、残り九キロを一時間で走らなければ、それには、キロ七分を切らねば、と思うのだが、ペースが上がらない。膝の屈伸を繰り返し両足指のマメの痛みに耐えて引き摺るような足取りでは、どう考えても制限時間内は、もう無理だ。箱根駅伝で制限時間の壁にタスキが繋げず、泣き崩れるランナーのシーンが浮かんできた。

今年の正月箱根駅伝で、アンカーを走る息子に脳梗塞と心臓病に襲われ杖を突きながら応援に駆けつけた母親が書き送ったという熱いエールの言葉「風を感じ、大地に触れ、走れ！」を思い出した。重くなる足の運びにリズムを与えようと、声を出して、叫んだ。「風を、感じ！」「大地に、触れ！」

周りを走る仲間たちが、先になり後になり、同じ顔ぶれになっていた。立ち止まり歩き始め走りだしの繰り返しで誰もが苦しかった。ただ黙々と足を交互に前に進めて一歩でもゴールに近づきたい、その思いだけである。あのインパール退却の死の行軍の戦友のような重い沈黙の中に不思議な連帯感と親近感が生まれていた。

あと五キロの標識が見えてきた。キロ八分にペースアップはしていたが、どうみても残り五キロを二一分では走れない。いつもなら二五分で走れるが、両足に痛みを負った今の状態ではキロ九分で四五分はかかる。制限時間五時間内にゴールすることは、もはや絶望的だ。いつもの悪魔が囁いてきた。「諦めようよ。あと二〇分でレースは打ち切られるんだから。」

収容車のラベルを貼ったバスがすれ違って行った。やがて最後尾の落伍ランナーから収容して追い掛けてくるのだろう。ついにマラソン初のギブアップか。諦めるのも勇気が必要だ、最後の選択が迫られているのを感じた。四〇キロ地点の立て札を持った女子係員が「頑張ってください」と声援を送ってきた。時計は四時間五八分を指していた。「（え？もう時間がないのに、まだ頑張っていいの？）」まだ走っていいんだ、よし、最後まで諦めず頑張ろう。

まもなく収容車が後方から「制限時間の五時間が過ぎました。交通規制は解除されました。路肩に寄ってナンバーカードをはずし収容車に乗ってください」アナウンスしながらすぐ脇をゆっくりと通り過ぎた。

後ろを振り返るとゼッケンを付けた仲間が数人走っていた。前方の仲間も収容車に乗る気配がない。前後を走る仲間には負けられない。よし、収容車の呼び掛けを無視して走り続けよう。根性が自分の信条じゃないか。自分からギブアップはしないぞ。まだ走れる。最後まで、倒れるまで走ろう、頑張ろう。

道路の中央線に置かれた道路標識のコーンがどんどん片付けられ、蛍光色ウエアの大会職員の動きが気になってきた。ゴール会場はどうなっているのだろう。すっかり片付けられて、五時間を過ぎて走り込む場所は無くな

っているのではないだろうか。電光掲示板も五時間で止まっているかもしれない。でもいい、それでもいい、自分のストップウオッチが今日の記録を残してくれるんだから。とにかく走ろう。

ゴール手前の橋を渡る所で大会職員が叫んだ。「ナイスファイト！あと三〇〇メートル！」。敗残兵のようにすっかり落ち込んでいたのに「？（ナイスファイト？このまま走っていいんですか？）」もういい加減走るのを諦めたら、と言われるどころか、落ちこぼれランナーにナイスファイトと賞賛の声がかけられるとは、思いもしなかった。その隣で高校生たちが熱い声援を送っていた。

突然、後ろから、聞き覚えのある歌を歌いながら走ってくる足音が聞こえてきた。振り向くと先程の男子高校生四・五人が歌いながら、私を囲んで伴走してくれるではないか。彼らの歌う二四時間テレビのマラソン応援歌『負けないで』が私を勇気付けてくれた。

国道を左折してゴール会場に入ると、正面に大きなゴールゲートが見えて、五〇メートルばかりの直線コースの両側に数百人の人たちが、大歓声と盛大な拍手で、私と、並走するもう一人を迎えてくれた。伴走してくれた高校生たちは、後続のランナーの方に戻っていった。

ゴール正面に、脚立にあがったカメラマンが勝者の凱旋を撮影するかのようにカメラを構えていた。高校生たちが歌ってくれた『負けないで』の歌が耳鳴りのようにこだましている。ゴール横の電光掲示板が五時間一七分を表示していた。時計は五時間で止まることなく時を刻んで待っていてくれた。そして制限時間を過ぎてなお走り続ける落伍者を、館山市の人達は最大限の賞賛で迎えてくれていたのである。

ゴールの瞬間、涙がどっと噴き出して思わず天を仰いで目を閉じた。嗚咽の声が胸を掻きむしった。一瞬、ゴールの写真入り記録表があとで送られてくることが頭をよぎった。写真の出来が悪いなと思いながら、再びあの歌が今度は自分の声となってほとばしり、感動の涙に酔い痴れた。

預かり手荷物の返還コーナーで、数個だけの荷物を前に係員が並んで待っていた。「遅くなってすみません」とか細い声で謝る私を、「お疲れさまでした」と英雄のように拍手で迎えてくれた。ここでまた涙である。

さっきまでの苦しい走りの中で「こんなに苦しんで何の意味があるの？意地で走るのならこれで終わりにしたら？もう十分走ったんだし、フルマラソンにまで挑戦したんだから、良く頑張ったよ、君は」と自問自答していたのに、すっかり心変わりしていた。

「やはりマラソンはやめられないね。いくら苦しくとも最後にはこの感動が待っているんだから。そう思えるのも、館山市の人達そして応援してくれるみんなのお蔭だね。自分ひとりじゃあないんだよね」

会場からのシャトルバスで館山駅に着くと、バスから降りる一人一人に、手渡しで甘酒の振る舞いが待っていた。素晴らしい涙の感動の一日に感謝して、差し出された甘酒を持つ係員の手に「ありがとうございました」と頭を深く下げた。

帰りの車内で感動のゴールシーンを反芻した。ゴール時のあの涙はなんだったんだろう。走り終えた安堵感でも達成感でもない、もちろんフルを走り切った歓喜の涙でもない、落伍者を伴走して応援してくれた高校生や敗者を賞賛する大会関係者への感謝と感動の涙であったことはまちがいない。（後日、館山市長にお礼のメールを送った。）

それにつけても、ゴールしたあと、一緒にゴールした彼と健闘を讃え合い、後続の仲間を抱き迎えてあげなかったことだけが悔やまれた。

帰宅後、大阪国際女子マラソンで福士選手が後半失速して転倒を繰り返しながらゴールまで走り続けた映像に今日の自分と重ね合わせ胸の詰まる思いがした。

翌日からの通勤の往復に、高校生たちが伴走しながら歌ってくれたＺＡＲＤの『負けないで』を口ずさんで歩いている。元気と勇気をもらったあの歌をこれからの私の人生の応援歌にしようと思っている。（完）

拙ブログ「老いてなお青春」より抜粋

『余話①　安房里見氏の盛衰記』

マラソンが開催された館山市は、南総里見八犬伝で有名な里見氏の城下町である。

里見氏を調べて、初めて源氏一門と知った。平安時代後期に武家の棟梁といわれた源義家の孫義重（新田氏の祖）の長男義俊が上野国里見郷を領して里見氏を名乗り、義重の次男義範が山名氏の祖、三男義兼が新田氏を継ぎ、四男義季が世良田氏の祖、義重の異母弟義康が足利氏の祖となり、里見氏は、足利氏、新田氏、山名氏に並ぶ源氏直系だったのである。

戦国時代に里見義実が安房国大名となり、里見義康が秀吉の惣無事令違反で上総国を没収され安房一国に減封されるが、関ヶ原の功で館山藩一二万石の大名となる。義康の子忠義が、大久保忠隣失脚に連座して伯耆国倉吉三万石に減封され八年後に病死、里見氏は嗣子がないとされ断絶、忠義に殉死した側近八人をモデルに滝沢馬琴の南総里見八犬伝が生まれた。

一昨年一〇月の鳥取砂丘マラソンに参加した折、倉吉市大岳寺に里見忠義を墓参した。白壁土蔵群から五分程、山門を入ると右手に忠義の墓と八賢士の五輪の塔が並んでいた。なぜ安房館山から遠く裏日本の伯耆倉吉に配流されたのだろうか。

忠義に非があったわけでなく、大久保忠隣の孫娘を正

室に迎えていただけ、譜代武功派の大久保忠隣と吏僚派の本多正信・正純親子の権力抗争に巻き込まれた被害者ではないか。

大岳寺の山門左手に駒姫八幡と大江磐代君御母堂おりんの方霊廟が並んでいた。大江磐代は尊皇倒幕思想の萌芽といわれる尊号事件で幕府と対立した光格天皇の生母、磐代の母おりんの母駒姫は山名氏豊の娘、大岳寺は氏豊の館跡だという。なんと伯耆国に配流された里見忠義は、同じ源氏の山名氏末裔氏豊の館跡に眠っていたのである。これは偶然なのだろうか。

山名氏と里見氏の不思議な因縁から源氏の血脈を調べるうち、意外な事実に遭遇した。

鎌倉幕府を開闢した源氏嫡流が桓武平氏の北条氏に滅ぼされ、その北条氏が源氏傍系の新田氏に、新田氏が同じ源氏傍系で室町幕府を開闢した足利氏に、その足利氏が織田信長に、源氏傍流の山名氏も織田信長に滅ぼされ、残る源氏は、里見氏と世良田氏だけとなった。里見氏は安房館山に、では世良田氏（群馬県太田市）はいずこにいるのだろうか。

なんと徳川家康がその世良田氏の末裔を名乗っていたのである。家康の出自は三河の国人土豪・松平氏とされているが、祖父松平清康の時代に清和源氏新田氏支流世良田系統を自称しており、始祖世良田義季が得川四郎を名乗ったことから、家康は松平から徳川に改姓したという。この時家康まだ二四歳、信長と清州同盟を結び三河の国を平定したばかり、だが、家康はこの時すでに源氏だけが担ってきた武家の棟梁としての征夷大将軍を見据えていたのだろうか。

源氏世良田氏の末裔を名乗り征夷大将軍となった家康にとって、唯一残る源氏直流の里見氏は煙たい存在だったにちがいない。家康は里見氏抹殺の機会を狙っていたのではないだろうか。そしてついに、大久保忠隣の失脚に乗じて、里見忠義を源氏直系山名氏の末裔氏豊が没した伯耆倉吉に配流、忠義の死後に嗣子がないとして里見氏を断絶してしまったのである。

『余話② 頼朝の安房上陸』

今回マラソンで走った房総半島先端の館山市洲崎は、源頼朝上陸地と伝えられる。

平安時代末期の治承四年（一一八〇年）に源頼朝が平家打倒で挙兵した石橋山の合戦に敗れ、伊豆の真名鶴岬から相模湾を渡り安房国洲崎に逃れたといわれる。北側の鋸南市に上陸したとする説もあるという。

「吾妻鏡」に平北郡猟島（鋸南）に着いたとあり、「源平盛衰記」には、挙兵時に合流予定だった三浦一族が衣笠城合戦に敗れて安房に逃れたと聞き安房洲崎に向かったとあり、「義経記」には、真名鶴崎から三浦一族（横須賀）と合流を目指したが雨風烈しく安房洲崎に漂

着したとある。

安房に逃れていた三浦義澄と合流した頼朝は、安房の上総介広常と千葉介常胤に加勢要請の使者を送り、洲崎明神に戦勝祈願したという。石橋山に挙兵して敗れた頼朝にとって、頼みは三浦一族だったのである。三浦氏と源氏にどんな繋がりがあったのだろうか。

三浦氏の祖為通は桓武平氏良文の曾孫、前九年の役の武功で源頼義に相模国三浦郡を受領、為通の義弟景通が鎌倉郡を受領して共に相模守になった頼義を支え、後に為通の孫義明・義澄親子が保元・平治の乱で源義朝・義平に従い、平清盛に敗れて相模三浦郡に雌伏した三浦氏は、頼朝の旗揚げに一族挙げて加わる、まさに源氏シンパだったのである。

三浦義澄の父義明の娘が鎌倉にいた義朝の側室となり頼朝の兄悪源太義平の母といわれ、三浦氏の支援を受ける義平は都へ戻った義朝のあとの東国の地盤を引き継ぎ、後に平治の乱に敗れ処刑される。

頼朝の父義朝は、曽祖父義家の死後の内紛で河内源氏が凋落するなか東国に下向、安房に移住し上総氏の庇護を受け、やがて鎌倉を拠点に源氏の地盤を作り、平治の乱で敗れ逃亡中に謀殺される。その上総介広常と千葉介常胤は同族の房総平氏で又従兄弟である。

頼朝は、頼義・義家そして父義朝と兄義平が築いた東国武士団を頼りにし平家打倒の旗揚げをしたのである。

しかしその三浦氏・上総介・千葉介はともに坂東平氏の流れのはず、なのになぜ坂東平氏は源氏の平家打倒に加勢したのだろうか。

桓武天皇の孫高望王が平朝臣を賜与され臣籍降下、八九八年に子たちを伴い坂東（関東）に下向して土着、長男国香の末裔が後に伊勢平氏となり、次男良兼は甥の将門と争い衰退、三男良将は子将門が官賊（平将門の乱）となり衰退、五男良文の子孫が坂東平氏になっている。

良文は朝廷に反抗した甥の将門に組みして国香・貞盛親子と戦い、良文の中央政権への反骨精神は孫の忠常に引き継がれ、一〇二八年に房総で平忠常の乱を起し、その鎮圧に朝廷から派遣された平直方は貞盛の曾孫である。

朝廷で権勢を得た貞盛流伊勢平氏と関東に土着した良文流坂東平氏は、同じ桓武平氏ながら、歴史的に宿命的な敵対関係にあったようである。

京に栄華を誇る伊勢平氏清盛の打倒を掲げて挙兵した源頼朝に、坂東平氏が加担した所以はそこにあったのだろうか。どうも義朝・義平親子が築いた東国武士団、というだけではなさそうである。

頼朝は、安房に上陸後、上総介広常と千葉介常胤の大軍が合流して軍勢を立て直し、石橋山合戦で敵対した坂東武士も従えて鎌倉に入り、富士川の戦いで平家の大軍を迎え撃ちこれを敗走させてしまう。

富士川の合戦で平家の大軍に勝利したあと、頼朝は敗走する平家軍を追撃して京に一気に攻め上がろうとしたが、三浦義澄と上総介はこれを思い留まらせたという。頼朝が源氏の頭領とは名ばかり、三人の協力がなければ何もできなかったのである。

坂東平氏は源氏再興のためでも平家討伐のためでもなく、将門や忠常の描いた東国武士の独立のために頼朝に加勢した、だけだったのではないだろうか。良文流坂東平氏に流れる中央政権への反骨精神の血が彼らを突き動かしたのかもしれない。

平家を倒し鎌倉幕府を開き武士の社会を作った主役が、実は源頼朝ではなく房総半島に土着した坂東平氏だったとは。房総を走るマラソン大会に参加しながら、思わぬ歴史発見である。

（完）

内田国の「いなぎ」物語

横山正義

まえがき

静岡県菊川市下内田の集落の中に、菊川市の構図によれば稲木（いなぎ）と言う地名があります。私は地名の由来を調べてみました。門外漢の私には、遺物を実証するものではありません。

文献によれば、稲木は垂仁天皇の子孫と鉄の文化と、稲の文化両方を持った人たちが住んだ場所なのです。

鋳土（いなぎ）であり、稲木であるのです。そして稲置（いなぎ）は古代の地方の高官の役職名です。

『古事記』より

天照大神と須佐之男神の大蛇退治

須佐之男神（スサノオノミコト）が八岐大蛇を退治すると、尻尾から剣が出てきましたことが古事記に記載され、蛇は鉄の仮の姿なのです。

須佐之男神の令室が櫛名田比売（クシナダヒメ）で稲田神社に奉られて、稲の神なのです。

これは出雲の国のお話で、「たたら」製鉄の発祥の地で、現在、なお脈々と製鉄の歴史が繋がれています。日立金属など、近代企業もあります。

産鉄集団と稲作集団が信仰した神々の歴史を調べてみました。

須佐之男神の流れを汲む五世が大国主命で、大国主命の御霊を奉ったのが大物主命同一神です。出雲大社の祭神は大国主命で、現在、「御札」は蛇が描かれています。

崇神天皇は三輪山に大物主命を奉りました。古事記、日本書紀にあるごとくご神体は蛇です。

最澄が延暦寺を創建するさい、守護神として日吉神社を祭り、勧請したのは、三輪山の大物主命でした。

菊川市内田の稲木に奉られているのが、日吉神社です。

古事記、垂仁天皇の項に「稲木の別（わけ）」の名前があります。

当地内田、稲木の近隣東平尾、西平尾の地図から蛇の

腹のような地形のところに、「金糞」と呼ばれる地名があり、鉄分を含んだ汚水が流れ、大地を褐色に染めています。そのほかにも、稲木の近く、高台にある内田地区唯一の前方後円墳は関連の施設と、私は仮説を立てるのです。

産鉄集団が鉄を求める全国の人々の所に移動した時代があり、そして国の統一の序曲であったのでしょう。

一、稲木について

一ノ一、『歴史読本』特集古事記・日本書紀二〇〇五年七月号　新人物往来社より
監修＝菅野雅雄、執筆＝大脇由紀子・田中智樹
日本古代・氏族事典より
因支（いなき）
大化前代の地方官職の稲置に由来する氏族。稲置・稲木・因支です。
『古事記』
垂神天皇、一后妃皇子女には垂仁天皇と氷羽洲比売命（ヒバスヒメノミコト）
の第三子大中津日子命（オオナカツヒコノミコト）の後裔十氏族の一つに稲木乃別（イナキノワケ）の名が見えます。
『書紀』には大中津子命はみえない。『新選姓氏録』

氏子数　二三〇戸

二、稲木の地名

二ノ一、稲木郷
平安期に見える、郷名。『和名抄』尾張国丹羽郡十二卿の一つ。
東急本の訓は「以奈木」。式内社の稲木神社は、「尾張国内神名譜」に稲木天神とあり、当卿にあったものであろう。卿域について、「地名辞書」「地理志料」はともに現在の江南市南東部にあてる。
二ノ二、稲木
愛知県新城市にあり、豊川中流右岸本宮山東東麓に位置する。奈良期以前より開け、稲置が居住したのが地名の起こりであるともいう。（千郷村史）。縄文中期の吉村遺跡あり、伝説では平安中期から末期ごろ、稲木の長者が栄えていたが、寛治七年に熱田大宮司系の千秋氏によって退転させられたという。

三、稲木と蛇と鉄

高知医科大学助教授阿部真司歴史読本臨時増刊一九八九―三ノ一、古事記より
沙本毘売（サホビメ）の八塩の紐小刀・錦色小蛇（垂仁天皇条）肥長比売・大蛇（垂仁天皇条）
三ノ二、日本書紀より
狭穂比売（サホビメ）のヒ刀・錦色小蛇（垂仁紀）

古事記垂仁天皇「二」沙本毘古と沙本毘売
沙本毘古王（サホヒコオウ）の反逆
八塩折紐小刀（何度も鍛えた刀剣）が夢に小蛇となってあらわれる。これは紐小刀の霊が蛇であることを示す、この小刀の霊が蛇であることを示す。この小刀を持つ沙本毘古・沙本毘売（サホヒコ・サホヒメ）兄妹は天皇に反逆し、稲城で焼かれて滅びるが、そのとき、火中に本牟智和気王（ホムチワケ王）がうまれる。このホムチワケの誕生譚は鉄の生産過程を物語化したものであるとみないと理解不能です。
稲城（いなき）は稲で作った城ではなく、鋳土（いなき）である。砂鉄より鉄を作る仕切られた空間＝溶鉱炉であろう。

四、産鉄集団と稲作集団の信仰する神々

四ノ一、征服された産鉄集団―やまたの大蛇（ヤマタノヲロチ）
古事記上つ巻　天照大神と須佐之男神
須佐之男神の大蛇退治

左京皇別には稲城任生公が記され、後裔氏族とも推測されます。同状には「出字垂仁天皇皇子鐸石別命也。」とあり『記』の始祖注と伝えを異にする。
稲木は尾張国丹羽郡稲城郷（愛知県江南市付近）を本拠としていたらしく、『延喜神名式』は同地に稲木神社を伝える。
一ノ二、『愛知県神社名鑑』
十一等級　稲木神社旧郷社
鎮座地　愛知県江南市大字寄木字東郷中五一一番地
祭神　天照大御神　大中津日子命
由緒　この地は『和名抄』に丹羽郡稲木。以奈木〟とあって「延喜式神名帳」には丹羽郡稲木神社とあり、「尾張国神名帳」に従一位稲木天神とある。
祭神は垂仁天皇皇子、大中津日子命で「古事記」の垂仁期。大中津日子命は山辺の別、三枝の別、稲木の別・・・の祖なり〟とある。
明治三年九月犬山藩庁式内社、村社。
明治四十四年十二月二十七日供進指定を受ける。
大正十二年二月二日郷社に昇格した。
昔より天道の宮といわれ皇室尾張藩公の信仰が厚かった。
特殊神事
境内坪数　一、〇一三、一三坪

天照大御神が天の石屋戸から戻った後、八百万の神々は協議して須佐之男神（スサノオノミコト）を高天原から追放する。須佐之男神は出雲の国の肥の河の上流、鳥髪へ降りてきました。川に箸が流れてきたので、川上に人が住んでいるのであろうと訪れると、老夫婦が、娘を中にして泣いていました。須佐之男神は問いました。「おまえたちは誰だ。」老父は答えました。「国つ神大山津見神の子で、私は足名椎（アシナズチ）、妻の名は手名椎（テナズチ）といい、女（むすめ）は櫛名田比売（クシナダヒメ）といいます。」

須佐之男神「なぜ泣くのだ」と重ねて聞くと、老夫婦は「この土地には恐ろしい怪物がいます。頭が八つ、尻尾も八つ、その目は酸漿（ほおずき）のように真っ赤に燃え、その身は八つの谷を越える大きさで、背には杉や檜が生い茂り、その腹はいつも血にただれています。八岐大蛇と呼ばれる怪物は、毎年のように現れては娘をひとりずつ食い殺し、今までに七人も殺されてしまった。今度は八人目の櫛名田比売（クシナダヒメ）が殺される番なのです」と、須佐之男神に訴えました。須佐之男神は、「娘を自分に呉れるなら、大蛇を退治しよう」と言い、櫛名田比売を櫛の形に変えて自分の髪のなかに隠し、老夫婦にはこのように命じました。「お前たちは八塩折（やしおおり）の酒（八回醗酵を重ねた強い酒）を作れ、また八つの門のある垣根を作り、その門のすべてに酒ダルをおけ」こうして準備は整った。待つほどにやがて現れた八俣の大蛇は、酒ダルに気づくとすさまじい勢いで八つの頭を突っ込み、強い酒をぐんぐん飲んで酔いつぶれてしまう。ここぞと須佐之男神は十拳剣（とつかつるぎ）をぬいて、大蛇をずたずたに切りました。流れる血は大地を這い、肥河の流れを真っ赤に染めました。

尾の一つを切ったとき、剣の歯が欠けたので裂いてみると、中から立派な太刀がでてきました。大蛇は鉄であったのです。

この地は広島県横田町、八岐大蛇の大蛇退治の舞台となった場所。「たたら製鉄」のたたらの里でもあるのです。

近くには櫛名田比売を奉る稲田神社があり稲作の神であります。

すなわち、菊川市内田の各地に固い岩盤を掘削した横穴式の古墳が数十存在するが、それは鉄が無い限り掘削不可能です。筆者が七十年ほど前、小学生の郷土研究部で横穴式古墳に入ったとき、剣らしい、鉄の塊を見つけ、先生に提出したことがありました。

国史編纂事業の「古事記」編纂が進展するとともに、「八色（やくさ）の姓（かばね）」制定され、後の世に、長は地方では最高の役、稲置（いなぎ）の役職を賜ったのでしょう。（西暦六八四）仮説です。

日本天台宗宗祖最澄は新たに、延暦寺を創始、守護神

として、日吉神社に鉄の神、大三輪神社の大物主神を奉りました。

現在、菊川市内田稲木では日吉神社を奉っています。

大物主神は鉄など炉を使用する民族の神なのです。

四ノ二、大神神社。

日本書紀巻第一　神代の上

奈良県桜井市三輪の大神（おおみわ）神社。大物主神を奉る。

大和平野の東にあって山容の立派な三輪山（御諸山）信仰から発展した神社と思われる。古事記上巻には大国主神が海を照らして寄りくる神を倭の青垣山の上に奉ったものです。

大国主命は別名大物主命ともいう、神代紀下の一書から大物主神と記される。大国主神が自分の御魂を奉ったのが大物主神で、大国主命は須佐之男神と櫛名田比売との六世の孫子です。

四ノ三、大物主神は子蛇であり、産鉄集団と稲作集団の守り神

日本書紀　崇神天皇

天皇の大叔母である倭亦亦日百襲姫命（ヤマトトビヒモモソヒメノミコト）は大物主神の妻となった。ところがこの神は、いつも昼はその姿が見えず、夜ばかり、通って来た。倭亦亦日百襲姫命（ヤマトトビヒモモソヒメノミコト）はそこで夫に語って、「あなたは昼お見えになりませんので、まだ私は、あなたのお顔を眺めたことがございません。どうかもう少しゆっくりして下さいまし。朝になって、あなたの美しいお姿を拝見いたしとうございます。」

こう頼んだ。大物主神は、

「それはしごくもっともだ。明日、わたしはお前の櫛箱のなかにはいっていよう。ただ、私の形におどろいてはいけないよ。」

それは子蛇であったのです。大物主神は蛇だったのです。姫は驚いて、思わず叫ぶ。神は人の形になり、「お前は私に恥をかかせた。今度は私がお前に辱めをする。」といって、大空を飛んで三輪山（御諸山）にのぼった。姫は後悔して、急に座った。そのとき、箸が陰部に突き刺さり命を落としてしまった。それで亡骸を大市に葬った。時の人はその墓を名づけて箸墓という。

箸墓古墳

奈良県桜井市大字箸中に所在する。箸中山古墳とも呼ばれる。三輪山の大物主神に仕える巫女であり、妻であったと伝えられる倭亦亦日百襲姫命（ヤマトトヒモチソヒメミコト）の「箸墓」の伝承をもち、現在、宮内庁により倭亦亦日百襲姫命（ヤマトトヒモチソヒメミコト）大市墓と比定されている。奈良盆地の東南部、三輪山の山麓裾部に近い平地で巻向川の右岸に立地する。前

方後円墳で、全長約２８０メートル後円部径１５５メートル、高さ29、4メートル前方部幅１２５メートル、高さ１６メートルを測る。全国で第十一と巨大な前方後円墳である。

近隣に阿弥陀堂があり、そこに鎌倉時代、最初の頃の阿弥陀仏といわれる仏像がありました。現在、応声教院で奉られています。

八、野神

私達の子供のころ、稲木の近くに、昭和二十年以前、田の中に、榎の古木がありました。触ると祟りがあるから、「触るな」と大人から、言われていました。しかし木を傷めないように、子供は実を食べるのは良いとも言われていました。

正月には餅、二月三日にはひし餅、五月五日には、ちまき、七月七日にはお赤飯、九月九日には、だんごとか重陽の吉日には農家の人々が豊作を祈念して、奉納していました。

『参考文献』

日本書紀　坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋
校注　岩波書店

古事記　倉野憲司
岩波書店

古事記・日本書紀を歩く　林　豊
JTB

『歴史読本』特集古事記・日本書紀一一〇〇五年七月号
新人物往来社より　監修＝菅野雅雄

『延喜神名式』

『愛知県神社名鑑』
編集発行愛知県神社庁

高知医科大学助教授　阿部真司
歴史読本臨時増刊
一九八九ー一二

考古学選書9

鉄の考古学　窪田蔵郎　雄山閣出版

角川日本地名大事典　愛知県　編者　竹内理三
（株）角川書店

図説　日本の古墳・古代遺跡　歴史群像シリーズ特別編集
学習研究社

日本書紀　坂本太郎　家永三郎　井上光貞　大野　晋
岩波書店



菊川市旧内田村地図

次世代インターネットと人工知能

大貫陽平

意味のこと

次世代インターネットのための技術として、セマンティックウェブとインターネットオブシングスの二つが考えられている。セマンティックウェブとはインターネットの索引を作ろうという構想である。インターネットオブシングスとは現実世界の電子機器をすべてインターネットに接続しようという構想のことである。

インターネットとは様々な情報が掲載された一個の巨大な書物とみなせる。この書物には無秩序に追記修正が施されている。現在は索引がないために極めて使い勝手の悪い状態であるが、次世代のインターネットでは、索引が付け足されることによって大幅に使い勝手が向上することとなる。これがセマンティックウェブである。

現在のインターネットだと、開いてみるまではそのページに何が書いてあるかはわからない。次世代インターネットでは索引が作成されているので、ある情報を知りたいときに、どのページを開けばいいかを簡単に知ることができる。

インターネットに索引がつくことで喜ぶのは、人間だけにとどまらない。人間よりもこの恩恵を大きく享受するのは人工知能たちである。人間は索引のない現在でもインターネットをうまく使いこなせている。対して現在の人工知能は索引がついていないとインターネットを使いこなすことができない。このため、現在の人工知能はインターネット上の莫大な情報を活用することができず、その一部を利用するにとどまっている。

次世代インターネットへの移行が完了すれば、人工知能はそれに記憶されている膨大な量の情報を活用することが可能になり、さらなる性能の向上が見込まれる。現在の形式の人工知能は、膨大な量の情報を学習することで高い性能を実現しているため、より多くの情報を活用

することができるならば、より性能が向上すると考えられる。

しかし、人工知能がインターネット上のすべての情報を使えるようになった場合、新たな問題が発生する。それは嘘の情報である。

インターネットには、ありとあらゆる人が情報を描き込むことが可能であり、これらを検閲するための仕組みは存在していない。まったく自由に情報をやり取りできるのはインターネットの長所であるが、同時に嘘がはびこることを許してしまうという短所も持っている。もし誰かがインターネット上に「カラスは白い」と書き込んだ場合、人工知能がそれを信じてしまう可能性がある。

これを解消するためのアプローチが二つ存在している。一つ目は、インターネット上の情報の真偽を識別する仕組みを作ることである。もう一つは、人工知能にインターネットを使って学習をさせる前に、辞書などを用いて常識をあらかじめ学習させておく方式である。

一つ目のアプローチでは、インターネット上の情報を用いて情報の真偽を確認する。例えば「カラスは黒い」という記述が百回あるのに対して、「カラスは白い」という記述が一回しかないのであれば、「カラスは黒い」が真実であると考えられる。他にも、黒いカラスの写真が載っていれば、「カラスは黒い」とわかる。このように他のインターネット上の情報を用いることで、ある情報が真実であるかを知ることができる。

もう一つのアプローチでは、人工知能に常識をあらかじめ学ばせる。例えば広辞苑のカラスの項には、「黒くて光沢がある」と記述がある。このようにきちんと事実のみが記されている情報源を用いて、人工知能に常識を学ばせてからインターネットでの情報を行えば、「カラスは白い」という嘘に惑わされることはないと考えられる。

インターネットにセマンティックウェブが導入されれば、人間にとっての利便性向上のみならず、人工知能にとっての利便性も向上するので、より高性能で汎用的な人工知能の開発が見込める。

インターネットオブシングスとは、ありとあらゆる電子機器をインターネットに接続しようという構想のことであり、これが実現すれば、例えば出先からインターネット経由で自宅のエアコンをオンオフしたりすることが可能になる。より大きなメリットとしては、カメラや位置情報システムなどがインターネットに接続されることで、ネット経由で素早く現実世界の情報を入手可能になることがあげられる。すなわち今までのインターネットでは手に入れることが難しかった、現実世界で今どのようなことが起こっているかを簡単に知ることが可能となる。

インターネットオブシングスの欠点としては、プライ

バシーを侵害する恐れがあることがあげられる。大量のカメラなどがインターネットに接続されるため、もしセキュリティが破られれば、プライバシーが侵される恐れがある。

これへの対抗策としては、情報の匿名化があげられる。例えば私が今日池袋のジュンク堂に行ったという情報が、位置情報システムによってインターネット上に書き込まれたとする。このときに「大貫陽平が今日ジュンク堂池袋店に行った」と記録するのではなく、「東京都在住の二十代男性がジュンク堂池袋店に行った」と記録すれば、私のプライバシーは守られる。このように書き込む情報からプライバシーにかかわる部分をそぎ落としておくことで、プライバシーの侵害を防ぐことが可能となる。

インターネットオブシングスが導入されれば、インターネットを通じて今日池袋を何人が訪れたか、東京都の家庭のエアコンの設定温度の平均は何度だったか、といった情報を得ることができるようになる。

これは人工知能にとって大変喜ばしい事態である。

現在の人工知能は、人間が問題解決に必要だと判断した以外の情報を活用することができない。例えばあるスーパーの売り上げを人工知能で調査するとして、それを命じた人間が、この調査に気温や最寄り駅の混雑度合いなどの情報が不要だと判断すれば、人工知能はそれらを活用することができず、調査が不完全なものに終わってしまう可能性がある。

もし次世代インターネットに接続された人工知能であれば、必要であるならば気温や最寄り駅の混雑度合いなどの情報を自発的に入手することで、より完全に近い調査を行える。この際には、セマンティックウェブによるインターネットの索引作成と、インターネットオブシングスによる現実世界の情報収集が必須となる。

次世代のインターネットと人工知能が組み合わされば、人間が規定した問題解決の枠組みを超えて、人工知能が問題を解決することが可能となる。

人工知能が人間の規定した問題解決の枠組みを超えて問題を解決した例としては、アメリカのＧｏｏｇｌｅ社が開発した囲碁人工知能、ＡｌｐｈａＧｏの例が挙げられる。この人工知能は人間の定石からすれば悪手であるような手を用いて、世界トップクラスの棋士を打ち破っている。

次世代インターネットの登場により、人工知能がより多くの情報に接することができるようになれば、今まで人間が考え付きもしなかったような解決策を編み出すことができるようになるかもしれない。

ただし次世代インターネットへの移行には、最低でも十年程度は必要と考えられるし、途中で頓挫してしまう可能性もある。また、インターネット上のすべての情報を活用するような人工知能の実現には、既存のものと比較して圧倒的に高性能なコンピュータが必要となる。

実現には困難が伴うとはいえ、人間の想像を絶した解決策を示すような人工知能が登場する可能性は、十分に高いと考えられる。

短歌

行雲流水（五十二）

石黒修身

近詠三十首

去りゆく人・晩節

演歌とう大衆歌謡を世に広め船村徹逝く温もりのこし

大衆と時代に添いし歌あまた「船村節」は耳朶に馴染みき

吾が好む「風雪流れ」は余韻嫋嫋情感籠る

元知事は吾と同年老残の気配著るきに哀感そそる

今さらに論を交える要ありや往年のヒーロー晩節如何に

君唱う矜持と美学いづれもが時の流れに瑤蕩ている

時局

デラシネの如く流れる大統領の言振り回される宰相たちは

「暗殺」とう悍しき語が往き来して世界の平穏脅かされぬ

南北にアポリアを持つ半島と隣り合わせの脅威は募る

吾が総理周りに漂う疑惑あり一強の傲りか脇の甘さか

安泰と見られし政権時ならぬ「蟻の一穴」懸念は消えず

内政に躓きあれど経済に成長あるはせめてもの救いか

世相・社会

若きらの台頭著るきアスリート世代交替好ましきこと

WBCメジャー居ずとも若きらが勝ち抜いていくパワー頼もし

稀勢の里横綱振りが気に掛かる日本人たるナショナリズムが

天降りそんなに悪いか仕事にも人の繋がり利点もあろうに

IDのカード吊り下げ昼食に群れる男ら企業戦士は

この国の旗艦企業の「東芝」が崩壊著るく再建難しと

サウジ王威風漲る振舞にアラビアのロマン漂うている

金満の国と思いしアラビアが石油のみでは立ちゆかぬ事情

季節・身辺

稀に見る大雪となり列島の北半分は白魔の恐怖

大雪の恵みはあるか「スノーイヤーイズリッチイヤー」天からの手紙

少なくも平穏ならぬ世相でも季節は巡り桜の開花が

彼岸過ぎ三寒四温が定まらず開花宣言寂しく響く

寒鰤がまた獲れるとは北海の水温が因と旬は揺らぐか

旬の香が滲む椋の芽・蕗の薹妻の手による天麩羅が良し

パリ勤務四年余を経し吾が息なり今年は帰国評価と慰労は

息の帰国ひたすら待つは留守妻子そして母なる吾の妻なり

友の訃が今日また届く吾が残すエンディングノートに何を加えん

美しき事嬉しき事の寡くて老人吾は何をこそ詠まん

漢詩

潮汐錄（八十七）

鯨游海

平成二八年十一月

簒奪白亞館

逸脫公論月旦傳
不相應宰導那邊
蒼民喝采千里壁
萬國高官唯呆然

〈白亜館を簒奪す〉

公論を逸脱せりと　月旦は伝ふ
宰に相応し不ず　那辺に導くや
蒼民は喝采す　千里の壁に
万国の高官は　ただ呆然たり

押韻・傳　邊　然

〔注　解〕

月旦＝月旦評＝人物評論。後漢・許劭伝の故事より。後漢の許劭は毎月初従兄弟と故郷の人物の批評をし合った。宰＝長。首長。頭。宰相＝首相。総理大臣。

公論＝輿論＝世論。公論は権力の匂がする。なお輿とは「こし」のことで、貴人を載せて担ぐ人夫らの意見を大衆一般の声として尊重した。現代のタクシーであろうか。蒼民＝民衆。蒼生。蒼氓。平民。ここでは高官と対比。呆然＝茫然。自失。呆れ果ててぼんやり過ごすこと。詩題の簒奪とは、帝位、大権を奪い取ること。

〔口語訳〕

「万機公論に決すべし」にも拘わらず彼の論は公論から逸脱していると人物評論は伝えている。
宰＝大統領には、全く相応しくない。彼はどの辺りに世界を導くのであろうか。
然し多くの庶民は千里の壁＝国境の長城に喝采したが、一方、世界中の高官＝政府機関は呆然自失状態だ。

☆綿津見の潮目変はるを蒼民は知る
　四方の高官なほ気づかねど

彈劾青瓦臺

平成二八年臘月

陽氣俄崩波浪高
失政憤懣糾彈號
焉消所在不明恨
蠭起市民終拔刀

〈青瓦台を弾劾す〉

陽気にわかに崩れ　波浪高し
失政への憤懣　糾弾する号び
焉ぞ消えん　所在不明の恨み
蜂起せる市民　終に抜刀す

押韻・高　號　刀

〔注　解〕

弾劾＝罪や不正をあばいて公開し告発すること＝糾弾。青瓦臺＝韓国大統領府の別称。憤懣＝忿懣。蟠まり怒る。蠭＝蜂の正字。

〔口語訳〕

陽気俄に崩れ、波浪愈高い（天気晴朗なれど波高し）。失政への憤懣は横溢し、民衆は糾弾の号びを挙げる。所在不明の七時間の怨恨……どうして消えようか。市民は全国で蜂起し終に伝家の宝刀を抜いた。

☆不義不徳失政の罪重かりき
　青瓦台辺今日も雄叫び

故　郷

平成二七年四月

故園回雁浴春陽
山笑水歌聲未忘
竹葉拍肩飜袂戲
復尋何日次歸鄉

押韻・陽　忘　鄉

〈故　郷〉

故園の回雁　春陽を浴び
山笑ひ水うたふ声　未だ忘れず
竹葉肩を拍き　袂を翻えして戯れ
復た尋ぬ「何れの日か次に帰郷するは」と

〔注　解〕

故園＝故郷。回雁＝帰雁。春には北帰し秋には南帰する渡り鳥。ここでは作者自身。
拍肩飜袂＝拍肩執袂＝旧友が再会し互に「肩を拍き袂を執り合って睦み合う」さまを捩った表現。竹葉は旧友。

〔口語訳〕

故郷に帰って来た雁（私）が春陽を浴びて休んでいる。山笑い川うたう声を未だ忘れてはいない。竹葉が肩を拍き袂を翻えして戯れ「次はいつ帰るのか」と復た聞く。

☆故郷は有り難きかな故き友
　次いつ帰ると復たも問ひかく

《漢詩の流れ75》 平安時代⑤菅原文時

平安時代の最高の文人で文章博士だった菅原道真の孫。菅三品といわれた。詩文に長じ、元稹、白居易らの遺響有りと評される。詩文には長じたが官位は父、祖父程には進まず九八一年に没した。

山中有仙室（山中に仙室あり）

丹竈道成仙室靜　丹竈道成りて　仙室静かに
山中景色月華低　山中の景色　月華低れたり
石床留洞嵐空拂　石床洞に留りて　嵐むなしく払ひ
玉案抛林鳥獨啼　玉案林に抛ちて　鳥独り啼く
桃李不言春幾暮　桃李もの言はず　春幾ばくか暮るる
烟霞無跡昔誰栖　煙霞跡なし　昔誰か栖みし
王喬一去雲長斷　王喬一たび去りて　雲長えに断ゆ
早晩笙聲歸故溪　早晩笙の声の　古溪に帰らむ

丹竈＝丹薬を練り合わすかまど。月華＝月光。玉案＝仙人の用いる食卓。

（はかない人間の生命に比べれば天地自然や草木は悠久である。山中の仙室に目を止めた作者が、そこに繰り広げられた生活に思いを馳せ、問う由もないと知り乍ら桃李や烟霞にふと問いかけ、先人の生活を懐古し追慕した句。「桃李もの言はず下自から蹊を成す＝史記・李将軍傳」及び「王喬＝周霊王の太子で、笙の名手であった。道士浮丘公と共に嵩高山に隠生し仙道を修めた」を引く。

漢詩

汲深録（八）

松井秀人

歲晩書懷　歲晩　懐いを書す

平成二十八年十二月

映窗陋巷雪中看　窓に映る　陋巷　雪中に看る
風叩貧居擊柝寒　風叩く　貧居　撃柝寒し
歲晩小斎燈下坐　歲晩の小斎　灯火に坐す
殘書山積獨長歎　残書　山積　独り長歎す

押韻・看　寒　歎

〔注　解〕

陋巷＝狭くてむさ苦しい町すじ。
擊柝＝拍子木を打って夜回りすること。
歲晩＝年の暮。

〔口語訳〕

窓に映るむさ苦しい町すじが雪中に見えて
風が叩く貧居に、拍子木のさびしい音が聞こえる。
年の暮に部屋で読書をしているが
今年も読み残しの本が山積みになっており、独り長歎する。

元朝賽社

元朝賽社

平成二十九年一月

元朝麗日五雲天　元朝　麗日　五雲の天
賽社韶光朱殿鮮　賽社　韶光　朱殿鮮やかなり
賀客長蛇登石磴　賀客　長蛇　石磴に登る
一年萬福一家全　一年万福　一家全し

押韻・天　鮮　全

〔注　解〕

元朝＝元日の朝。
五雲＝めでたき五色の雲。
賽社＝秋の収穫が終わり、田の神に感謝する祭り。社は土地の神。
石磴＝石段。石だたみの坂道。
萬福＝多くの幸福。
一家全＝家内安全なり。

〔口語訳〕

元日の朝、うららかな日で、空にはめでたき雲。
賽社は明かるい光で、朱殿は鮮やかである。
参拝客は長蛇の列で石段を登っていく。
一年幸福で、家内安全である。

聖廟景風

聖廟景風

新正聖廟慶雲昌　新正の聖廟　慶雲昌なり
閑静庭前聞暗香　閑静の庭前に暗香を聞く
吹度景風梅芯綻　吹き度る景風　梅芯綻ぶ
湯岡和暖遍春光　湯岡　和暖　春光遍し

押韻・昌　香　光

平成二十九年一月

〔注　解〕

新正＝正月。
湯岡＝湯島。

〔口語訳〕

正月の聖廟は、慶雲が昌である
閑静な庭には何処からともなく梅が匂ってくる。
吹き渡る風で、梅も綻んできた
湯島の岡も穏やかに暖かく、春光が広がる。

古關送客　古關に客を送る

平成二十九年二月

曉見古關行店前　曉に見る古關　行店の前。
春風送客柳生烟　春風は客を送り　柳は烟を生ず
昨宵酒盞離情切　昨宵　酒盞　離情切なり
誰識何時再會筵　誰か識る何れの時に再会の筵

押韻・前　烟　筵

〔注　解〕

古關＝古い関所。
行店＝宿屋。
酒盞＝酒杯。
何時＝何れの時か。

〔口語訳〕

早朝、宿屋の前に古い関所が見える。
春風は客を送り　柳は烟を生ずる。
昨晩は酒筵で、別れは切なかった
誰が知ろうか、再会の筵が何れの日になるのかを。

江村雪朝　江村雪朝

平成二十九年二月

江村客舍渡頭前　江村の客舎　渡頭の前
曉雪霏霏風颯然　曉雪　霏々　風颯然たり
兩岸鋪銀人跡絶　両岸　銀を鋪き　人跡絶ゆ
野航結纜異鄉天　野航　結纜　異郷の天

押韻・前　然　天

〔注　解〕

渡頭＝渡し場のあたり。
霏霏＝雨や雪などが乱れて降るさま。
鋪銀＝雪がふりつもる。
野航＝いなかの渡し舟。
結纜＝ともづなを結ぶ。船をとめること。

〔口語訳〕

江村の宿屋は、渡し場の前にあり
早朝の雪は乱れて降り、風は颯然と吹いている。
両岸には雪が降りつもり、ひとの往来もなく
異郷の空の下で、いなかの渡し船は留まったままである。

信託の起源 1

信託遺贈―ザルマン―ユース

永田俊一

信託とは委託者が受託者に自分の財産を託し、受託者が重い責任義務を背負って、受益者の為に、一定の目的（信託目的）に従い、その信託財産を管理又は処分及びその目的達成に必要な行為をするものです。お馴染みの投資信託等信託商品をこの仕組が支えているわけです。

その信託の起源について、古くエジプトやバビロニアに求めることもありますが、私の著書ではローマの信託遺贈に求めています。現在の法制度との関連において、制度の原型をなすことが、資料的な面からもはっきりと分り易いという意味で、適当と考えられるからです。

しかし、信託の説明がなされる場合、触れるとしても起源からその制度成立までの歴史そのものについては、普通は、話の導入や味付けに数行で簡単に触れられるのが正直なところで、たとえば次の如くです。

「古くは紀元前二～一世紀のローマで信託遺贈の制度があったと文献にはあります。愛する者に財産が引き継がれるよう、信頼する者に後事を託すものです。ポエニ戦役時、モラル強化や奢侈抑制を狙い制定されたウォコニウス法は、女性を相続人に認めませんでした。信託遺贈は自然法的立場からの批判を容れて、女性でも間接的に遺産を受け継げるようにしたものです。

その後の中世ゲルマン法の下では、相続人不在の場合、一旦遺産を第三者（ザルマン）に移した後に、ザルマン指定の者に引き渡す仕組みが出来ました。それがノルマン・コンクェスト後のイギリスで、長子相続を逃れ教会への寄進や戦役に伴う寡婦への遺贈の為などからユースとして発展し、遺産の承継や財産の分配や管理・処理を通じて社会的法理として確立されてゆきます。

普通法裁判所と並んで衡平法裁判所で信託の衡平性が

判断され、トラストの名で普及するようになりました。

これがアメリカに渡ったわけですが、南北戦争前後からの経済の急速な発展の中で、信託会社が増加、大陸横断鉄道等社会的巨大事業の遂行に伴う投資事業資金のニーズの高まりを背景にヨーロッパ等から巨額の資金調達が行われ、営業信託が成長しました。そして維新後の日本に伝わるところと成りました。」

ただ、ローマを起源としても、二千年に及ぶ歴史の中で形成されてきたものですから、正面から歴史物として詳述すれば、何巻本にもなりましょうが、それはまた別途歴史家の仕事と言えましょう。

そこで現代の信託制度の説明との関係において、その歴史自体の叙述として、時代や国の変遷や社会の進化の中で、その因って来るところの流れをいま少し理解しやすく述べてみたいと存じます。

一、信託遺贈

（一）歴史的社会的背景

○ローマの起源は紀元前八世紀もしくは九世紀ごろ、北方から移動してきた民族がテヴェレ川河畔に定住し、紀元前七世紀頃には都市国家としての整備が進み、排水路や公共の施設や神殿が作られ、フォロ・ロマーノはローマの政治・経済の中心へと発展しました。王政は紀元前六世紀末で終わり、共和制が始まり（紀元前五〇九年）、二名の執政官がローマの政治を司ることになり、政治は、元老院と執政官ら政務官を中心に、民会等で一般ローマ市民の意思も反映されながら運営されました。

ガリア人がイタリア半島に進出した紀元前四世紀前半頃までには防衛の石垣セルウィウス城壁がローマを覆うように建設されたと伝わり、共和政ローマ期にはイタリア南部をほぼ領土とし、その首都ローマは人口増加で市街は広がり、道路の整備も進み、紀元前三一二年からはローマ街道の敷設やローマ水道の建設も始まります。

○イタリア半島の統一を果たしたローマは、西地中海の商業覇権を巡って、紀元前二六四年から、カルタゴとの百年以上の戦争へ突入、第一次ポエニ戦争で、シチリアを獲得し、この地を最初の属州としました。紀元前二一八年から始まった第二次ポエニ戦争では、カルタゴの将軍ハンニバルに苦戦しましたが、スキピオの活躍で、再び勝利します。この時、イベリア半島南部におけるカルタゴの拠点を奪い、西地中海征服を果たします。

また、カルタゴに味方したマケドニアにも遠征を行い、イリュリアやアカエア（ギリシャ）を影響下に置きました。紀元前一四九年より第三次ポエニ戦争が始まり、紀元前一四六年に、カルタゴは破壊され消滅しました。

○ポエニ戦争の後も、対外征服戦争や反ローマの反乱などによりローマの軍事活動は続きました。ローマ軍の中核をなしていた自由農民は、連年の出征によって農地から引き離され、また属州より安価な穀物が流入したため次第に没落していきます。この状況を打開するために、グラックス兄弟が、平民の支持を得て、土地分与の改革を実施しようとしますが、改革は失敗に終わり、紀元前一三三年ローマは内乱の一世紀に突入しました。

優れた指揮能力を持つ執政官が必要とされ、台頭したのが、民衆派（ポプラレス）ガイウス・マリウスと、元老院派（オプティマテス）のルキウス・コルネリウス・スッラです。激しい内戦の末、スッラが勝利します。

紀元前七三年から七一年に、スパルタクスの反乱、という剣闘士や奴隷による反乱が起こりましたが、クラッスス、ポンペイウスにより鎮圧されました。

彼ら二人にカエサルを加えた三人は、第一回三頭政治を結成し、元老院に対抗します。クラッススの死後、残る二人の間で内戦が起き、カエサルが勝利します。カエサルは、紀元前四五年に終身独裁官となりますが、前四四年に共和主義者ブルータスによって暗殺されました。

○この後、オクタウィアヌス、アントニウス、レピドゥスが第二回三頭政治を行います。

オクタウィアヌスは、紀元前三一年、アクティウムの海戦でアントニウスに勝利し、紀元前二七年に「尊厳者（アウグストゥス）」、「第一の市民（プリンケプス）」の称号を得て、共和政の形式を残しながら、プリンキパトゥス（事実上の帝政）が始まりました。

こうして、ローマ帝政は、アウグストゥスの皇帝就任と、ユリウス・クラウディウス家の世襲で始まります。初代皇帝アウグストゥスの時代に、常備軍の創設や補助兵制度の正式化、通貨制度の整備、ローマ市の改造や属州制度の改革、などを行い、帝国の基盤が整えられました。さらに防衛がし易い自然国境を定め、そこまでの地域を征服した為、帝国の領域は拡大し、安定した防衛線に守られた帝国領内は、パクス・ロマーナ（ローマの平和）、と呼ばれる平和が長く続くこととなりました。

ローマはローマ帝国の首都となり、皇帝アウグストゥスの時代には一〇〇万人が居住する世界最大の都市となりました。皇帝ディオクレティアヌスがニコメディアに遷都するまでがローマ帝国は隆盛を極めた時期でした。

（二）法制度

○王政末期から共和制初期には、開戦・和平の権限を持つ武装集団であるケントゥリア民会が法制定の権限を有するようになり、紀元前四四九年にローマ法歴史の中で最初の法典化である十二表法が起草されます。因みにローマ法は長年月をかけて歴史的に発展した不文の慣習法なのですが、二番目で最後になるのが、十二表法の方向

性が帝政期に理論的に体系化・精緻化し発展し、その成果を集大成して六世紀前半東ローマ皇帝ユスティニアヌス帝により法典化された市民法大全でした。

十二表法は制定当時既存の慣習法の変更を意図した規定を集めたもので、あらゆる法分野に関係していますが、最大部分は私法と民事訴訟に関するもので、以来、補完・修正のため幾つもの法が制定されます。

○ポエニ戦役の始まった頃は、平民会の決議でそうした法が制定されてゆき、十二表法は全ての法の源といわれました。遺産の相続・引継ぎという点で当時のローマ法では次のようなものでした。

・ある家の財産が他家に移転しないことを求め、そこから基本的に法定相続人は自権相続人（子及び父権のもとで生活していたすべての卑属＝子・孫等自分より目下の者）と（彼等がいない場合の）宗族（男系の最近の血族＝同じ血筋の親族）の二種類に限定されていました。その結果、女系の血族の相続、更に、子の母からの相続・母の子からの相続は財産が別の家に移るので禁じられました。なお、自権相続人は男でも女でも可能でした（女の場合血族なら前述で排され、他で結婚しても母方の血族即ちその子は相続できず元へ戻りますから）。

・遺言について初め公民は遺言することも禁じられていましたが、やがて自分の財産を人民の集会で処分することが許され、十二表の法律は、遺言する者にその欲する公民を相続人に選ぶことを許します。アテネでは子をもつ者を除いて許しましたがローマでは子の損害において遺言することさえ許した訳です。

・これが、次第に土地の分配に関する国制上の措置を少しづつ破壊し、貧富の差を広げ、多くの分け前が同一人に集中することになります。不断に分け前を奪われた人民は土地の新しい配分を絶えず求めることに成ります。

また、人民の大集会は年に二度しかなかったのでやがて五人の公民（人民の五つの階級を代表、第六の階級は外れた）が選ばれ、その前で実質的に買い取った相続人は遺言を受け、遺言者からその相続財産を譲り受けた訳です（聾唖者、浪費者は遺言出来ず、浪費者はいわば禁治産で家産売却は不可）。

・遺言はむしろ公法の行為と成り、父はその権力下にある息子が遺言をすることを許可出来なくなりました。また契約と違い人民の集会による法律命令調のもの故、ある者に一部の遺産を他の者に交付するように依頼し託すこと（信託遺贈）は出来ませんでした（一定の場合には補充指定をして遺産が他の相続人に移るよう命ずるのが不可だったわけではありませんが）。

・なお、無遺言で父を相続した筈の彼の息子・孫に被害与えぬよう、父が息子を相続人に指定することも排除することもしなかった時は遺言は破棄されました。一方、損害を孫息子に与えぬので、娘を排除することも相続人

に指定することもしなくても遺言は有効でした。

・このように初期のローマ人の法律は、土地分配の精神に従うことしか考えていなかったので、ある意味女性の富を十分に制限せず、それによってこうした富と常に不可分である奢侈に門戸を開放していたとはいえます。

（三）ウォコニウス法

・第二ポエニ戦役と第三ポエニ戦役の間にその弊害が意識され、ウォコニウスの法律が作られました（BC169）。オッピウスの奢侈そのものを阻止する法律案を擁護とともに、奢侈の原因を予防しようと望んだ、かの大カトーはこの法を受け入れさせようと全力を尽くしました。

・即ちこの法は、未婚・既婚の別なく女性を相続人にすることを禁じたのです。

勿論女性の過大な富を予防するため、奪わなければならないのは、莫大な相続財産であって、相続を剥奪された女性に与えられるべき一定の金額は定めました。富を規制する法律で貧困を規制するものではないので、公民名簿に登録された人々（前述の五つの階級？）についての規定しか設けなかったのです。

・これが法律回避の口実を与えました。娘に相続財産を残し得るよう自分を公民名簿に登録して貰わぬ親が出ました（法務官も違反とせず）。それが広がってくると逆に、例えば記録によると、法務官ウェルレスが出世のため買収されアニウス・アセルスの一人娘の相続人指定を禁じたことが大事件になりました。

セルウィウス・トゥリウの制度によれば公民名簿に登録してもらわなかった公民はすべて奴隷とされていましたが、財産に応じ位置づけられた第六階級の人（人頭税は払う―アエラリイー、且つ最下層民位置づけ）はウォコニウス法による公民名簿にはなくても、セルウィス・トゥリウの制度の非公民には当りませんでした。

（四）信託遺贈

・そこまでやらねばならない、この回避の希望が信託遺贈に繋がります。例えば記録に残る一例として、法律が排除している者に相続財産を交付するよう懇願され莫大な遺産を与えられたセクトゥス・ペドゥカエウスは遺言者の寡婦を捜しに行き彼女の夫の全財産を与えました。

一方でセクスティリウス・ルーフスがファディウス・ガルスの遺産を娘ファディアにウォコニウス法の許す以上のものを与えず自ら莫大な相続財産を得たような、キケロが紹介しているような例もあります（キケロはファディアについて行ってやっています）。

・モンテスキューは「法の精神」でウォコニウス法について次のように言っています。

「ウォコニウス法は公民をも人間をも犠牲にし、国家のことしか考えなかった。法律は遺言者における自然の感情を無視していた。娘における孝心を無視していた。信

託遺贈の懇願を受けた者は、交付すれば悪い公民となった。保持すれば不誠実な人間となった。法律を回避しようとする人が依頼するために選べたのは誠実な人だけだった。なぜなら貪欲と逸楽とを克服することは常に一つの勝利であり、この種の勝利を得るのは誠実な人々だけだからである。彼等を悪い公民というのは過酷でさえあろう。もっとも、法律が誠実な人々だけにそれを回避することを強制するようなものであるとき、その立法者は目的の大部分を達成したと言えなくもない。」

・アダム・スミスも「法学講義」で言っています。

「人々は女性が富裕になるのを阻止しようと努めた。このことのために、ローマで、ものごとを昔の状態に戻すひとつの法律がつくられて、ウォコニア法と呼ばれた。この法律を回避するためにひとつの信託遺贈が発明され、それによって、人が自分の領地を法律では許されない人に残そうと思ったとき、彼はそれを誰か他人に残してその人がそれを彼が意図していた人に譲渡するという厳粛な約束を、その人からとったのである。このようにして所有権が、最初の相続人を越えて拡大されたのであり、この段階がこうして獲得されれば、人々は容易にその先に進んで、限嗣相続を導入したのである。」

・その後共和制末期においては、習俗が腐敗し、ウォコニウスの法律が持っていた強制力より、信託遺贈が法律を回避するために持っていた力のほうが小さくならざるを得ないほどになりました。内乱が無数の公民の命を奪い、平和を回復したアウグストゥス治下の初期ローマは殆ど無人郷でした。ローマの人口を増やすため、パピウスの法律が作られ、公民が結婚して子をもつよう奨励しうるあらゆる手段が何も脱落しないようされました。主要な手段の一つは、法律の意図に応じる者に対しては相続の期待を増加させ、それを拒む者には相続の期待を減少させることでした。

女性を相続力の無いものとしていたウォコニウスの法律につき一定の場合にこの禁止をやめさせました。アウグストゥスは、受託者がいつでもそれを回復することを義務付ける法律を作り、その目的のために、信託遺贈執政官を任命しました。その領地を残された人は、信託された相続人とよばれ、それが回復されることになる人は信託受贈者とよばれました。

・女性、特に子を持つ女性は夫の遺言で遺産を受ける能力ありとされ、子を持っているときは女性は他人の遺言によって遺産を受けることが出来ました。ただ一人の子持ち男性は他人の遺言で全財産受けられましたが、女性は三人の子持ちでなければ同じになりませんでした。また血族の相続については古い法律とウォコニウスの効力を全て残しました。長続きはしませんでしたが。

・ハドリアヌス治下（在位117～138）ではウォコニウス

の法律はほとんど廃棄されていたといいます。父母の姉妹が相続可となり、母の子の遺産相続が認められ、女系の血族の相続を阻害していた法律を徐々に覆しました。皮肉にも君主制の奢侈はこれにより促進されました。

ユスティニアヌスは（東ローマ皇帝、在位527～565）、男性と女性の間、女系の血族と男系の血族との間のいかなる区別もなしに、三つの相続人の順位、卑属、尊属、傍系親を定め、この点に関し残っていた全ての区別を廃止しました。

二、ザルマン

中世ゲルマン法では、相続人不在の場合、放っておきますと遺産は国王に帰してしまいました。そこで遺産を、繋ぎにいったん第三者（ザルマン）に移した後に、ザルマン指定の者に引き渡す方法が考案されます。多くが宗教団体、慈善事業などに土地を寄進する為に使われたようです。これが現在の信託制度の起源といわれるユースとなるのは、ノルマン・コンクェスト後の英国においてのことです。

このザルマンの手続きには僧侶や寺院関係者が関与・担当していたことが多いとされています。フランク族は早くからこれを用いていたと言われており、きっとカロリングルネッサンスで設立された学校の中にも、ザルマン制度で修道院や教会へ寄進された資産が貢献していたものも多いと想像されます。

（一）歴史的社会的背景

○ローマ帝国では、ティベリウスの死後、軍事・政治の両面で徐々に変化が起りました。軍事面では、自作農が没落したため徴兵制が破綻し、代わって傭兵制が取られましたが、帝国内部に強大な常備軍が常駐するようになり、潜在的な政治集団の発生につながりました。政治面では、六八年、ネロが亡くなると皇位継承戦争が発生し、四人の皇帝が次々と擁立されたことから、四皇帝の年とも呼びます。一時帝国は複数の属州軍閥に分割され、これにガリアなどローマ化の進んでいた属州や、ユダヤ人等東方の反乱も同期しました。

○紀元一世紀の末から二世紀にかけて即位した五人の皇帝の時代にローマ帝国は最盛期を迎えました。二人目のトラヤヌス（在位98～117）の時、領土が最大となり、ハドリアヌス（117～138）の東方国境安定化・全属州視察や内政整備・防衛体制の確立、アントニヌス・ピウス（138～161）の内政改革や財政健全化を経て、哲人皇帝マルクス・アウレリウス（161～180）の晩年、天然痘の流行や各地の反乱や災害や異民族の侵入に悩まされることになりました。

この時代には、法律（ローマ法）、交通路、度量衡、幣

制などの整備・統一が行われ、領内には軍事的安定状態が保たれていたようですが、地中海の海上流通は減退が見られました。また軍隊とつながる大土地所有者が力を持ち、自由農民が重税を避けて逃げ込むケースが増え、自給自足的な共同体が増加した時期でもあります。次のコンモドゥスが悪政の末暗殺（192）され内乱が勃発し、五皇帝の年と呼ばれる混乱が起き、内戦を制したセプティミウス・セウェルスによって一九三年にセウェルス朝が開かれます。

軍団兵・補助兵のなり手不足に対処するため、二一二年、カラカラ帝のアントニヌス勅令によりローマの支配下全ての地域に同等の市民権が与えられます。逆に市民権に価値がなくなったために、帝国内の補助兵のなり手が急減、軍事力衰退を招き、二三五年、時の皇帝が軍の反乱により殺害されセウェルス朝は断絶、以後五〇年に二六人という軍人皇帝時代の混乱に突入しました。

○パクス・ロマーナにより、戦争奴隷の供給が減少して労働力が不足し始め代りにコロヌス（土地の移動の自由がない農民）が急激に増加し、この労働力を使った小作制のコロナートゥスが発展し始めると、人々の移動が減り、商業が衰退し、地方の離心も促進されていきました。最後の軍人皇帝となった（284～305）ディオクレティアヌスは、混乱を収拾すべく帝権を強化しました（専制君主制）が、強大な複数の外敵に面した結果、皇帝以外の将軍指揮の大きな軍団が必要とされ、それら軍団はしばしば中央政府に反乱を起こします。

その後混乱が続く中、西方副帝であったコンスタンティヌス一世が皇帝となり（324）、専制君主制の確立につとめる一方、東のササン朝ペルシアの攻撃に備え、三三〇年、交易ルートの要衝ビュザンティオン（ビザンティウム）に遷都して国の立て直しを図りました。

コンスタンティヌス一世の死後、北方のゲルマン人の侵入は激化、特に三七五年以降のゲルマン民族の大移動が、帝国を揺さ振ることとなりました。

○帝政初期に、帝国領内のユダヤ属州で生まれたイエス・キリストが創始したキリスト教は、徐々に信徒数を増やしてゆき、二世紀末には帝国全土に広まりました。三一三年にコンスタンティヌス一世は、ミラノ勅令を公布してキリスト教を公認しました。更に、三九二年にテオドシウス一世のときに国教に定められ、異教は禁止されることになりました。三九五年、彼は帝国を東西に分け、長男・次男に分治させ、以降のローマ帝国を、それぞれ西ローマ帝国、東ローマ帝国と呼びます（当時の意識としてはあくまでも一つのローマ帝国でした）。

○西ローマ帝国（395～476）皇帝の所在地としての首都は、ローマからミラノ、後にラヴェンナに移りました。西ローマ帝国はゲルマン人の侵入に耐え切れず四七六年、ゲルマン人の傭兵隊長オドアケルによってアウグス

トゥルス帝が廃位され滅亡しました。

○東ローマ帝国（395年～1453）は、首都をコンスタンティノポリスとし、一五世紀まで続きました。東ローマが、ゲルマン人を退けることができた理由として、アナトリアのイサウリア人のようにゲルマン人に対抗できる勇猛な民族がいた、アナトリア・シリア・エジプトのような、ゲルマン人の手の届かない地域に豊かな穀倉地帯を保持していた、首都コンスタンティノポリスに難攻不落の大城壁を築いていた、西ゴート人や東ゴート人へ貢納金を払って西方へ移動させた、ことなどが挙げられます。東ローマ帝国は、古代末期のローマ帝国の体制を受け継いでいましたが、完全なキリスト教国であり、また徐々にギリシャ的性格を強めていきました。西ローマの消滅後は唯一のローマ帝国政府として、名目上では全ローマ帝国の統治権を持ちました。

○東ローマによる帝国の再建は何度か試みられ、六世紀のユスティニアヌス一世によるものは一定の成果を収め、地中海の広範な地帯が再びローマ帝国領となりました。しかし、ユスティニアヌス没後は混乱と縮小の時代に入り、七～八世紀、イスラム帝国やスラヴ人（ブルガリア帝国）などの侵入により、領土が大幅に縮小します。そのため、テマ制（軍管区制）が導入されました。

ラテン語使用の帝国西方の喪失は、公用語のギリシャ語化（七世紀）を促し、八世紀にはローマやラヴェンナを含む北イタリア管区を失い、また、西欧に対する影響力も低下します。これらは帝国の性格を変化させ、ヘレニズムとローマ法、正教会を基盤とした、ビザンツ文明とも呼べる段階に移行します。

○ローマの東西分裂を機に、ライン川下流の東岸に定着していたゲルマン一派・フランク人（フランク族）は、ライン川を渡ってガリア地方（現在のフランス辺り）の北部に移動し、数々の小国家を形成、その中からでた一支族（サリー支族）の王位についたのが、メロヴィング家のクローヴィス（在位481～511）で、他支族をおさえて、国家を統一（フランク王国）、私的にガリア地方を制していたローマ将軍シアグリウスを敗り同地を征服し、その後、西ゴート族も敗り（507）領土を広げます。また、ランス（フランス東北部）の聖レミ司教によって多勢の家臣と共にアタナシウス派キリスト教の洗礼を受け（クローヴィスの改宗。496）、異端とされたアリウス派キリスト教を受け入れていたこれまでのゲルマン諸国と違い、ローマ系の大土地所有者や高位聖職者との関係を円滑化し、彼らの支持や協力を容易なものにしました。

○メロヴィング朝はゲルマン人の分割相続制を継承していたので、六世紀半ばにはフランク国は、東北部（アウストラジア）、中西部（ネウストリア）、南部（アクイタニア）、東部（ブルグンド）の四つに分れ、それぞれ国王

を戴き争う分裂期となりました。七世紀初めクロタール二世の時に統一回復されましたが、それ以後の国王は怠惰、無能なものが多く、クロタール二世を助けたピピン（大ピピン）のアウストラジアのカロリング家が宮宰（マヨル＝ドムス）として実権を振るうようになりました。またこの頃から、ヨーロッパ南部へのイスラム帝国（ウマイヤ朝661～750）の侵入が激しくなり、西ゴート王国（415～711）が滅ぼされ、メロヴィング朝フランクも危機に陥りますが、カロリング家の宮宰カール＝マルテルがトゥール・ポワティエの戦い（732年）で撃退し、カロリング家の名声がさらに高まり、その子ピピン（小ピピン）がメロヴィング朝最後の王ヒルデリク三世を廃し、短躯王ピピン三世（在位751～768）として王位に就きカロリング朝を創始、次のカール大帝（在位768～814）の時代に全盛期を迎えます。

この間、ピピンは北イタリアのランゴバルド王国（ロンバルド王国）から奪ったラヴェンナ地方をローマ教皇に寄進し、カールは北イタリアに侵攻してランゴバルド王国を滅ぼします（774）。八〇〇年にはローマ教皇からローマ帝国皇帝の冠を授けられ（カールの戴冠）、ローマ教会の保護者としてキリスト教世界の中の権威を獲得、同時に西ヨーロッパ全域を支配する王国の王権を獲得しました（カロリング朝　751～987）。

○カール大帝の出征は五十回を上回り、ゲルマン一派のサクソン族（ザクセン＝ドイツ地方・エルベ川中流域）と三〇年以上に及ぶ大戦争を繰り広げ（サクソニア戦争。772～804）征服し、イベリア半島に遠征してイスラム教徒に進撃し（778～801）、エブロ川以北を占領してスペイン辺境伯領をおき（この戦いは十二世紀になり、フランス最古の武勲詩『ローランの歌』でも広く読まれた）、バイエルン公国（ドナウ川上流）を併合（787）、中央アジアから侵入してきたモンゴル系遊牧民アヴァール人を平定し（791）ドナウ中流域にまで勢力を広げました。こうしたカール大帝の出征により、西ヨーロッパは次々フランク王国に飲み込まれ、八世紀末迄には西ヨーロッパ統一が完成、ヨーロッパ世界は東方にビザンツ帝国、西にフランク王国が二分する形態となりました。

○もともとビザンツ帝国は、三三〇年首都がローマからコンスタンティノープル（当時名：ビザンティオン）に移され、東ローマ帝国として継続を続けてきた国であり、当然教会もコンスタンティノープル教会としての首位権を主張していました。一方のローマ教会はイエスの12使徒の筆頭ペテロがローマで殉教したことから教会の首位性を主張、その結果東西における教会の対立が生まれ敵対していきました。カール大帝は、広大な西ヨーロッパ領土の統治のためには、西ローマ帝国を復活、皇帝となり権威を高める必要があると考えます。

○七九九年、ローマ教皇レオ三世（位795～816）が暗殺

されかかりフランク王国に亡命しカール大帝の保護を受けます。翌八〇〇年クリスマスの日、サン＝ピエトロ大聖堂での「イエス＝キリスト生誕ミサ」の席上、教皇レオ三世は保護の報償として、教皇自ら、西ローマ皇帝の冠を、突然カール大帝に授けます（カールの戴冠）。西ローマ帝国の復興を意味し、ローマ教皇からしてみれば、コンスタンティノープル教会に対して教皇権の優位性を知らしめる結果となり、西ローマ皇帝にしてみれば、ビザンツ皇帝に対して西ローマ帝国復活による脅威を与える結果となったわけで、フランク王国の絶頂期を現出したのです。当初カールのローマ皇帝位を認めなかった東ローマ帝国も、八一二年に承認します。以後、ローマ教会と西欧は、東ローマ皇帝の宗主権下から離れ、更に、九六二年、オットー大帝がローマ皇帝に戴冠し、神聖ローマ帝国が始ります。

○カール大帝は現在のフランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・北イタリアを合わせた地域に加えて、東方ではハンガリーに侵入したアヴァール人を撃退、イベリア半島ではイスラム勢力と戦い、その支配は現在の西ヨーロッパ世界と同じ広範囲におよび、中央集権国家を確立するため、各地方に国王直属の地方行政官・伯を設置し、また伯の専横防止のため巡察使を派遣し監視します。

また、アーヘンの宮廷にはイギリスから神学者アルクィンを招くなど、カロリング＝ルネサンスと言われる古典文明の復興に努めます。しかし、地中海はイスラム勢力によって抑えられたため遠隔地貿易は行われなくなり、貨幣経済も衰えて農業生産を基盤とした封建社会が始まることとなります。

○カール大帝の死後、子のルイが全領土を継承してフランク王ルイ一世（敬虔王、在位814～840）となり、戴冠を受けてローマ皇帝の地位も受け継ぎましたが（817）、政治力に優れず、分割相続制にもとづいて帝国を三分割し、三人の子（ロタール・ピピン・ルートヴィヒ）に与えます。しかし本人が再婚して、末子シャルル（823～877）が誕生したことにより、既に与えた領土をシャルルに再分割しようとしました。ロタールら三人の兄は再分割に猛抗議し反乱に発展（829）、ルイ一世は敗れ、一時廃位されます（833。翌年復位）。

○子ピピン（838）、父ルイ一世（840）が亡くなった後でも宮廷内での抗争は鎮まらず、長兄ロタールはフランク王と西ローマ皇帝（在位840～855）を承認され（ロタール一世）、その後も全土支配を主張したことでルートヴィヒとシャルルが手を組み戦い、ロタールは敗れ（841）、二年後フランス北東部ヴェルダンで条約（843）を結び王国は正式に三分割されます。ロタール一世は西ローマ皇帝の帝号・中部フランク（アルザス／ロレーヌ地方）・北イタリアを獲得、ルートヴィヒはライン川及びアーレ川以東の地、つまり東フランクを獲得、

ルートヴィヒ二世（在位843～876。ドイツ王）として帝位につき、そしてシャルルは西フランクを獲得、シャルル一世（在位843～877。禿頭王。）となります。

ロタール一世（855）の遺産のうち中部フランクを継承したロタール二世も亡くなる（869）と、シャルル一世とルートヴィヒ二世は、翌八七〇、現オランダ内に位置するメルセンで条約を交し（メルセン条約）、北イタリアを除く中部フランクは東フランクと西フランクに均等に分割しました。かくして、西フランク王国（843～987）・東フランク王国（843～911）・イタリア王国（843～875）がまとまり、それぞれフランス・ドイツ・イタリアの基礎が形成されます。

○その後、東フランク王国（ドイツ）では、ルートヴィヒ四世（幼童王。ルートヴィヒ二世の曾孫。在位899～911）の死をもって断絶、東フランク王国のカロリング朝は途絶え、後に神聖ローマ帝国（962～1806）の誕生に途（みち）を開きます。西フランク王国（フランス）では、ルイ五世（在位986～987）の死をもってカロリング家が断絶、パリ伯ユーグ＝カペー（938？～996）が王位についてフランス王国・カペー朝（987～1328）が誕生、イタリア王国（イタリア）のカロリング家も二代で断絶（875）、神聖ローマ帝国のイタリア政策により支配されます。カロリング朝のヨーロッパ支配は終わり、同時にフランク王国の名による支配も終わり、今後歴史を揺るがす三大国へ受け継がれていきます。

○他方東ローマ帝国は、九～十世紀頃には安定期に入り、再び積極的な対外行動をとります。帝国の領土は再び拡大、一一世紀初頭にはバルカン半島とアナトリア半島の全域、南イタリア、シリア北部等を領有します。しかし、その後はイスラムや西欧に対し劣勢になり、ノルマン・東ローマ戦争（1011年・1185年）、セルジュク・東ローマ戦争（1055年・1308年）等が起こります。

（二）経済

○民族移動と征服により、ゲルマン社会もまた、大きく変化します。定住生活にはいったことによる土地への依存の増大、征服による大土地所有の成立、大経営の集約化による経済的不平等の進展、自由人の没落と平行した領主制の発達、キリスト教の影響が、この時代の変化を特徴づけています。このころのヨーロッパは、まったくの農業社会であり、自然経済社会であります。

○大土地所有の成立、経済的不平等の進展、自由人の没落は、互いに密接に関係しています。大経営は自給自足体制を整え、危機に陥った多くの小経営農民は、大土地所有に併合されていきます。彼等は、自己の所有地を大土地所有者に寄進し、それを改めて借地・小作地として借り戻しました。これを、プレカーリア契約といいます。この契約そのものは自由身分を失わせるものではなかったのですが、社会的・経済的従属をまねきます。

また、もはや共同体の保護をあてにできなくなった自由人の中には、有力者の人的保護をもとめて、自己託身する者も現れます。被保護民は、軍役等の公的負担を免れる代りに保護者の裁判権に服して、種々の貢租を負担しなければなりませんでした。経済的従属と人格的従属があいまって、しだいに領主制（グルントヘルシャフト＝荘園制）が発達していきます。その過程で、自由人と非自由人との平準化がすすみ、自由を制限された農奴身分が成立してゆきます。

○領主制の単位である古典荘園（ヴィリカチオン制）は、八世紀ころ成立しました。それは、かならずしも全ヨーロッパに普及したわけではありませんが、十二世紀ころまで優勢であり、その後、純粋荘園に移行します。古典荘園の特徴は、領主直営地を中心とする自給自足経営にあります。土地領主である荘園領主は、下級裁判権を行使し、農奴（隷属農民）にたいする体僕支配権をも有していました。農奴は、賦役（労働地代）を提供するため土地に緊縛され、自由な結婚ができず、死亡時には死亡税を納めなければならなかったのです。

（三）法制度

○四七六年西ローマ帝国が滅びると古典期のローマ法の精妙な議論は軽視され、ついには忘れ去られて行きます。古典期の法はその内容があまりに高度であると考えられ、ゲルマン的慣習に適するように書き換えられます（卑俗法化）。その結果ローマ法は、アラリック抄典（507）などに取って代わられました。

○一方東ローマ帝国においては、古代ローマ帝国最後の皇帝であるユスティニアヌス帝が前述のように市民法大全を創造しました。ユスティニアヌス一世は法務長官トリボニアヌスをはじめとする一〇名委員会に、古代ローマ時代からの自然法および人定法（執政官や法務官の告示、帝政以降の勅法）を編纂させ完成した『旧勅法彙纂』を五二九年に公布・施行しました。ついで、法学者の学説を集大成させ、これが五三三年に『学説彙纂』として公布されました。

これと同時に、初学者のための簡単な教科書『法学提要』も編纂させ、同年公布・施行されました。このあと、新しい勅法が公布されており、かつ『学説彙纂』や『法学提要』の編纂によって、『旧勅法彙纂』を改定する必要が生じ、ユスティニアヌス帝はトリボニアヌスをして新たに勅法の集成を命じ、これで生まれたのが『勅法彙纂』であり、五三四年に公布・施行されました。

○フランク時代の主な法源は、①部族法典、②カピトゥラリア、③特権状です。

①部族法典としてもっとも古いものに属しゲルマン固有法の要素を最も強く保有し、かつもっとも重要なもの

が、「サリカ法典」です。これは、現在のベルギーに建国したサリ系フランク族の慣習法を成文化したもので、フランク族のひとつサリー族の法典で、その基本テキストはクローヴィス王の治下（508～511年）頃の成立とされます。成文化は国王の命令によりはじまったとみられますが、サリカ法典の序文にあるように、部族法典は法判告（裁判集会や裁判所で判決人が具体的事件において行う法の宣言の一種）であったとされます。八世紀には、バイエルン族やアレマンネン族も部族法典を作成しました。部族法典の内容は、古い法慣習の記録であり、人民法ともよばれ、その多くは刑事訴訟法的な規定で、国制や民事法にかかわる規定はほとんどありません。

②カピトゥラリアは、人民法にたいして、王令ともよばれます。フランク王国の諸王はさしあたって解決しなければならない聖俗のことがらにつき、そのつど、勅令を発しました。これらの勅令が、カロリング時代にカピトゥラリアとよばれました。勅令はいくつかの条文をもつ複数の章に分かれていました。

カピトゥラリアは、王国の集会で、参集した貴族の審議と承認のもとに口頭で布告されたものであり、国王が単独で定めたものではなく、カロリング期の国王の立法活動は、範囲も効果も限られ、余り纏まりのないものだったようです。

③特権状は、フランク時代後期と中世に重要な役割を果します。最初は王により、後には領邦君主により発せられ、その性格は権利創出的で、個人或いは教会や都市・村落共同体に対し個別的権利を授与・保証しました。

○フランク王国成立後、王権は国王裁判所を組織し裁判による和解を強制、裁判外での和解を犯人隠匿罪として拒否、またキリスト教の影響で刑罰におけるゲルマンの宗教的要素が後退、死刑が忌避されるようになります。

国王裁判所の創設で、王国には二種類の裁判所が併存し、役割を分担するようになります。国王裁判所は、上級裁判所として、大事件（死刑・身体刑相当の犯罪、不動産訴訟、自由身分にかんする訴訟）を管轄しました。

伝統的な自由人による裁判集会［人民裁判所］は存続しましたが、そこでは、六世紀以降、行政区長官（グラーフ）が裁判長を勤めるようになり、その結果、人民裁判所は、下級裁判所として国王裁判所に従属する機関となり、小事件を管轄しました。

国家が刑罰権を独占するようになったことで、死刑や身体刑は、もはや私的復讐としては禁じられ、純国家的な応報手段となりました。ただし、すべての刑罰は身請けすることができ、人命金に相当する贖罪金を支払えば刑罰を免れることができました。人命金は、身分に応じて定められていて、たとえば、自由フランク人を殺害した場合、加害者は、六〇頭の牛に相当する二〇〇シリングを人命金として支払わなければならず、そのうち、3分の1が平和金（罰金）として国庫に、3分の2はフェーデ金（損害賠償金）として被害者の相続人や親族に帰属し、更に平和金の3分の1は裁判官収入となる、といった具合でした。このことからフランク時代に実刑を科せられたのは、贖罪金を支払うことができない貧しい人びとだったことが分ります。

（四）ザルマン

サリカ法典によれば、フランク人には、既に土地の一時的信託とも言うべきザルマンの制度がありました。当時被相続人に相続人がいないとその相続財産は国王に帰属し、それを避けるため、委託者が後日その指定する者に財産権を移転することを条件に、受託者たる第三者ザルマンにその財産権を移転した場合は、ザルマンは委託者の死亡後十二ヶ月以内にその移転の義務を負いました。

これが次第に広く利用されてゆきます。例えば、

○宗教・慈善その他公益の為に財産を提供しようとする者がザルマンにその財産を譲渡、ザルマンにこれらの目的の為に当該財産を管理処分して貰います。このザルマンの役割は僧侶が担うことが多かったと言われます。

○死亡・疫病その他の事由が発生した場合、或る財産権を他人に贈与しようとする者が、その贈与を確実にするために、ザルマンに当該財産を予め移転しておき、事由が発生した場合、ザルマンからその指定した受益者に財産権を移転してもらう事例も出てきます。

○また親族法の関連で、妻がその嫁資を保護するために、これをザルマンに移転し、ザルマンは婚姻の存続中妻の為にこれを保管することも認められます。

○不動産の訴訟に於いて当該不動産をザルマンに移転し、ザルマンは委託者たる譲渡人のために必要な訴訟行為をします。

○当時の法制一般に、妻・寺院又は法人は借地能力を持たなかったので、彼等は、借地能力者たるザルマンに、地主と借地契約を締結して貰うようになります。

○或る都市の市民でないとその都市の不動産が取得できないケースが多く、ザルマンに間接的に不動産を獲得して貰い、目的を達することも行われました。

○なお、ランゴバルドの法では受託者は遺言執行者となり、受託者は遺言者の死亡後その趣旨に従い、夫々財産の処分をするが、その場合受託者は遺言者またはその相続人の所有に属す財産の上に或物権を有するか又は当該財産につき所有権を有するも一定の解除条件が附加せられたるものかいずれかとなります。

○サリカ法典から窺えるザルマンの代表的性格は、一言でいえば、土地の一時的信託という制度であります。これが、前述のランゴバルトの法でみるようにローマ法

の遺言の影響を受けて、大陸においてはザルマンが遺言執行人へと発展して行ったものと考えられています。

三、ユース

英国でも、教会に土地が寄贈され、国王や領主はその力の及ばない教会に土地が寄進されると地代や税金が取れなくなりました。長男子相続とそれに伴う様々な封建的負担の強制が、財政確保の為に必要でした。十二世紀後半から十三世紀にかけ、教会に土地保有を禁じたり、許可なく土地を寄進する者に対し土地没収に出るなど、これを禁止する法律が相次いで制定されました。

これに対し、人々は第三者に譲り渡した土地を直接教会には寄贈せず、第三者が教会の為に土地を管理し、その収益を教会が受け取れる方法を考えだします。これがユースで、その後広汎に利用されるようになりました。

(一) 歴史的社会的背景

○当初はパリ周辺の諸侯の連合政権といた小国であったカペー朝は、十二世紀のフィリップ二世が十字軍（第三回）参加やイギリスの持つ仏領土の奪還で版図・勢力を拡げます。十三世紀には敬虔なカトリック信者であったルイ九世が、十字軍（六・七回）を率いたり、南フランスの支配権を得る等勢力を拡大、その孫フィリップ四世がローマ教皇に対決し聖職者・貴族・平民の代表からなる三部会という身分制議会を開き、ローマ教皇庁をアヴィニョンに移すなど、十四世紀初めにカペー朝の最盛期を迎えます。

フィリップ四世が亡くなると男子系の血筋が絶え、親戚筋のフィリップ六世が即位しますが、カペー朝の血を引くイギリスのエドワード三世が異を唱え、またベルギーの毛織物産業の中心地フランドル地方の覇権を巡る争いも絡み、かの百年戦争（1339～1453）が始まります。

○九六二年、オットー一世がローマ教皇から冠を受けたドイツの神聖ローマ帝国は、イタリア介入政策で本国が手薄で、初め度々行った教皇庁への介入も、教会改革運動が進展すると一一世紀後半から一二世紀にかけての叙任権闘争は皇帝側の敗北に終わり、諸侯の力が強くなり統一が遅れます。一一三八年から一二五四年まで君臨したホーエンシュタウフェン朝が断絶すると、大空位時代の混乱が起こります。一二七三年諸侯によりハプスブルグ出身のルドルフ一世が選ばれ収束するも、神聖ローマ皇帝選考問題は続き、一三五六年ルクセンブルグ家のカール四世の時、三司教と四諸侯（七選定候）による皇帝選出手続きが決定されました（金印勅書）。しかし、その後も逆に七人の力が強くなり、皇帝の力は弱く各地の諸侯の力が強く、不統一の時代が続きます。

一四三八年に即位したアルブレヒト二世以降はハプスブルク家が帝位をほぼ独占するようになり、マクシミリアン一世治世の一四九五年から帝国改造が行われ、神聖ローマ帝国は諸侯の連合体として新たに歩み始めます。

一六世紀のカール五世の治世に始まった宗教改革により、帝国はカトリックとプロテスタントに分裂しました。宗教紛争は最終的に皇帝側の敗北に終わり、アウクスブルクの和議によりプロテスタント信仰が容認されるとともに領邦の独立性が更に強化されました。

○九六一年、東フランク（ドイツ）王オットー一世はイタリア王国に攻め込み、年末パヴィアで自らイタリア王オットーネ一世として戴冠します。オットーネ一世以後に独自のイタリア王が立てられたのは一例のみでドイツとイタリアは皇帝という共通の君主を持つことになります。帝国は一〇二一年にブルグント王国も統合します。

皇帝のイタリア滞在は少く、イタリア中央政府は中世盛期には消失しますが、イタリアが帝国の中の王国であるとの認識は残ります。歴代皇帝はしばしばイタリアに進駐、発展していく都市国家群に対して影響力を行使し、結果として、ゲルフ（教皇派、反皇帝派）とギベリン（皇帝派）の間で戦争が起こるのが、一二世紀から一四世紀に於けるイタリアの政治的状況であり、ロンバルディア同盟は独立宣言こそ行わなかったものの、皇帝のイタリア王としての権力主張には明確に反抗しました。

一五世紀までに、都市国家群の権限は大幅に衰退、一四九四年にイタリア半島はフランス王国に侵略され、一五五九年まで続く大イタリア戦争が勃発、殆どのイタリア領邦はその支配権をスペイン王国のフェリペ二世に譲ることとなり、スペイン・ハプスブルク家は帝位を世襲するオーストリア・ハプスブルク家と連携し、一七〇〇年に断絶するまでイタリアを支配し続けます。

○一方、カエサル以降ローマが支配し、被支配のケルト人をブリトン人と呼んだイングランドは、ローマ人が放棄した四五〇年頃、アングル人、サクソン人、ジュート人に侵攻され征服され同化し、一部はコーンウォール、ウェールズ、スコットランドに押し出されます。六〇〇年ころ、アングロ＝サクソン人はキリスト教に改宗し、アルフレッド大王（在位871～899）以来、国家の基礎が固まります。

しかし、その頃からデンマークのヴァイキングであるデーン人の侵入が続きます。一〇一六年、クヌートがデーン朝として征服支配するも、一旦はフランスのノルマンディー公国の王ギョームの支援を受けアングロ・サクソン王朝のエドワード懺悔王が即位し復活します。一〇六六年、懺悔王死去に伴う後継争いに乗じて、ノルマンディー公ギョーム二世がイングランドに上陸、ハロルド二世をヘイスティングに破り、ウェストミンスター寺院で戴冠、ウィリアム一世となります（在位1066～1087）。アングロ＝サクソン貴族は所領を没収され、国

王を頂点とする封建制が整備されていきます。

ノルマン朝はわずか四代で王位を継ぐ者がいなくなり、一一五四年フランスのアンジュー伯家から新王ヘンリー二世が迎えられ、プランタジネット朝となります。ノルマンディー公国とともにアンジュー伯領もイングランド王の支配地となり、フランス王との関係は悪化の方向をたどることになります。

第三代の王ジョンはフランス王フィリップ二世に敗れ大陸領土の殆どを失い、一二一五年、王の強権（当時フランスとの抗争で、貴族も重税が課されていた）発動を抑制しようとする貴族の一斉反抗に敗れたジョンは議会による承認なしに新たな課税はできない等とするマグナ・カルタを認めさせられます。

これは王権を抑制する議会権力の伸長の第一歩となり、ジョン後継のヘンリー三世の時代に、高位聖職者、貴族からなっていた身分制議会に騎士、都市の代表を加えられ、その後エドワード一世によってモデル議会（Model Parliament）が召集され、現在のように上院である貴族院と下院である庶民院に分かれたのが一四世紀、金銭法案に関する先議権が庶民院に与えられたのは一五世紀です。

また、エドワード一世はウェールズ大公グリフィズを破り（1277）、ウェールズを征服、ウェールズで生まれた王太子エドワード二世にプリンス・オブ・ウェールズ（ウェールズ大公）の称号を与え、これ以降イングランド王室次期王位継承者に対してその称号を用いる等親和策をとります。

フランスでカペー朝が断絶し、ヴァロワ家からフィリップ六世が即位する（1337）と、イングランド王エドワード三世が異議を申し立ててフランスの王位継承権を主張してフランスに侵入を開始、百年戦争が始まります。開戦当初はエドワード黒太子の活躍もあり、フランスの半分以上を占領し優位にたち、ヘンリー六世の時代には一時期英・仏の統一王朝が成立しますが、その後フランス王シャルル七世とジャンヌ・ダルクによる巻き返しで敗退しはじめ、一四五三年にはボルドーも陥落し、カレーを除く大陸領土全てを失います。

エドワード三世の孫リチャード二世が廃位させられるとプランタジネット家は断絶、王位はランカスター家に渡り、この後一四五五年からランカスター家とヨーク家が争う薔薇戦争になります。最終的にはランカスター家の支流のヘンリー・テューダーがエドワード四世の娘でヨーク家のエリザベスと結婚して即位、一四八五年にヘンリー七世としてテューダー朝（～1603）を起こします。

百年戦争とバラ戦争で貴族、騎士層は疲弊し、相対的に王権は強まります。

また、この間イングランドではペストが流行、農奴がワット・タイラーの乱を起こす等社会は混乱を極め、その間にも農奴制は崩壊に向かい、封建制は崩れ去り、騎士と貴族の社会を破壊し、この後のテューダー朝による絶対王政の基礎が形作られた期間でもあります。また、この時期に良質の羊毛生産に支えられた毛織物工業が発達してハンザ同盟との競合の少ない低地地方との交易を通じて典型的な農業国からの脱出を徐々に図っていくことになります。

イングランドにおける絶対王政はイングランド国教会を成立させます。一六世紀に入るとヨーロッパでは宗教改革の動きが活発になります。イングランドにおける宗教改革はヘンリー七世の次のヘンリー八世が、離婚を認めぬ教皇に怒って、教会の首位権は国王にあるとの国王至上法を発布、反対する者を次々処刑するといった、全く非宗教的な理由から出発しているところに特徴がありますが、最終的に国教会の優位が確定されるのは、エリザベス一世によって国王至上法が再発布され、重ねて礼拝統一法が制定された後のことになります。

エリザベス一世はイングランドにおける絶対王政の頂点を極め、この時代はエリザベス朝と呼ばれます。当時、無敵艦隊を率いて世界各国に植民地を持ちヨーロッパの強国となっていたスペイン・ハプスブルク家に挑戦、ネーデルラント北部七州の独立運動の支持・援助を行い、一五八八年、スペインの無敵艦隊をアルマダの海戦において破り、イングランドの国際的地位を高めます。

テューダー朝はエリザベスで終り、その後継にはスコットランド王であったステュアート家のジェームス六世が指名され、ジェームス一世と成ります。ジェームス一世は国教会に統一することに腐心、ピューリタンやカトリック教徒を弾圧し、息子チャールズ一世はさらに、国教会を長老派の強いスコットランドにも導入しようと試み大反乱となります。

軍事で屈服させ大増税で賄おうとしましたが、議会の承認を得ていなかったので、イングランドで大反発を招く結果となり、一六二八年議会は権利の請願を王に提出し、議会の承認に基づかない金銭法の施行を行わないこと、法に拠らない不当な逮捕を行わないことを求めます。一旦認めたチャールズも直後に議会を解散、以降一六四〇年迄議会が召集されず、王と議会の対立は決定的となり、一六四二年ついにイングランドにおいて内戦が勃発、当初は王党派優位でしたが、鉄騎隊を率いるオリバー・クロムウェルの登場で劣勢に転じ、一六四六年チャールズは降伏、一旦は脱出し反旗を翻すものの一六四八年再び捕えられ翌年処刑され、イングランドにおける王統は一旦断絶し、国王を戴かない共和制となります。

〇一四五三年五月、オスマン帝国軍の二ヶ月にも及ぶ包囲戦の末、コンスタンティノポリスは陥落、東ローマ帝国は滅亡します。陥落の原因としては、西欧の援軍がな

かったことがあります。この頃ヨーロッパでは、神聖ローマ帝国では、ルクセンブルク家の帝位が終わり、一四五二年ハプスブルク家のフリードリヒ三世が、神聖ローマ帝国皇帝で即位したばかりで、フランスとイギリスの間では百年戦争が行われた時です（1337年1453年）。

（二）経済社会

○中世西ヨーロッパの社会経済構造は、封建制（フューダリズム）と荘園制に特徴付けられます。

ヨーロッパの封建制は、相対の双務的契約関係で、主君は家臣に封土（領地）を与え保護する義務があり、家臣は軍役や奉仕を通じて主君に報いなければいけない、双方がそれぞれの義務を尽くさないと関係性が終わるものです。この関係は、一対一の契約だったので、国王が自分の家臣の家臣を支配するようなことはできませんでした。八世紀から九世紀にかけて、ヨーロッパは異民族の侵入によって混乱しており、人々は自己防衛のため、有力者を見つけ保護してもらう必要性があり、こういう関係をつくっていったのです。

その成立には、古くからあった二つの制度即ち、古代ローマからあった恩貸地制と古代ゲルマンの従士制が関係しています。恩貸地制は、ローマ帝国末期、混乱する社会で土地所有者が自分の領地を守るため、その地域の有力者に土地を差し出したあと、改めて借り受けるという制度でした。従士制は自由民が有力者から保護してもらう代わりに、従士として忠誠を尽くす制度です。土地を与えられる恩貸地制と、主従関係を結ぶ従士制が一緒になりました。

荘園制は、領地を所有した国王や諸侯、騎士、教会を領主といいますが、これら領主の所有地を荘園といい、多数の農奴がここで働いていました。初期は領主直営地、農民保有地、共有地からなる古典荘園が主流になります。領主直営地は、領主が直接経営した土地で、ここでの収穫物はすべて領主のものになりました。直営地での労働を賦役といいます。農民保有地は、領主が農民に保有させた土地で、自分の取り分と、地代（貢納）を納めなければなりませんでした。　共有地は農民が共同で使う土地で、牧草地や森林などのことです。

農奴は賦役と貢納の他にも、結婚税、死亡税、教会への十分の一税等の税を支払わねばなりませんでした。また、仕える領主裁判権に従う必要があり、荘園における領主の権力は非常に大きく、農奴は力によって支配されていました。

○王権が弱体化したフランク王国の末期以降、有力な領主は不輸不入権を獲得します。これは荘園内の課税や裁判を拒否できる権利で、国王でも侵すことが出来ず、その後王権は更に弱体化、大小の領主の分立が続きます。

時が経つにつれて、重要有輪犂や、春耕地・秋耕地・

休閑地にわける三圃制農業が普及する等新しい農法が確立していき、農業の生産性が向上しました。これをうけて一三世紀頃には、古典荘園の領主直営地が農民保有地に分割されていきます。賦役がなくなり、農奴のやる気が高まり、貢納のみになった純粋荘園（地代荘園）へと変わり、純粋荘園では地代の金納が進むにつれ農奴の地位も向上し、農業生産は飛躍的に高まっていきます。

○カロリング朝フランク王国のカール大帝は、デナリウス銀貨といわれる銀貨を鋳造しましたが、王国の分裂に伴い、国王の鋳造する貨幣にかわって、領主や教会が貨幣鋳造権を握り、粗悪な銀貨がつくられるようになります。中世では金貨はつくられなくなり、このような銀貨がわずかに流通するだけとなります。一一世紀末に経済活動が復活すると、銀貨の需要も強まり、フライブルク銀山などが開かれますが銀の不足は続きます。地中海貿易が復興すると、貨幣需要も復活、銀貨は一一九二年、ヴェネツィアで質の高いグロート銀貨が鋳造され、また金貨はシチリア王国（1231）での鋳造を始め、フィレンツェのフィオリーニ金貨（1252）、ヴェネツィアのデュカット（1284）等が生まれますが、中世では国家による貨幣の統一的発行との運用は行われませんでした。

中世ヨーロッパにおける貨幣経済の復活は、封建社会のあり方を変化させます。貨幣経済が荘園の中に浸透、荘園領主の生活にも貨幣が必要となり、農民の納める地代は貨幣地代が多くなり、また荘園内の手工業が次第に盛んになり、在地の商工業も盛んになり、これらが農民の自立を促すことになります。その反面、困窮した領主は、農民に対する課税を増やし統制を強めようとしました。これが封建反動と言われる動きであり、それに反発した農民一揆が多発することになります。こうして貨幣経済の荘園への浸透が荘園制の崩壊をもたらし、農奴解放が進んで、ひいては封建社会を解体させることに繋がることに成って行くことになります。

（三）法制度

○ユスティニアヌス法成立後東ローマ帝国においては、ユスティニアヌス法典が法実務の基礎となり、レオーン三世は、八世紀前半に新法典エクロゲーを公布します。

九世紀には、バシレイオス一世とレオーン六世がユスティニアヌス法典中の勅法彙纂と学説彙纂を総合的にギリシャ語に翻訳させ、バシリカ法典（英語版）として知られるようになります。ユスティニアヌス法典やバシリカ法典に記録されたローマ法は、東ローマ帝国の滅亡とオスマン帝国による征服の後でさえ、ギリシャ正教の法廷やギリシャにおいては法実務の基礎となり続けました。

○西ヨーロッパでは、ユスティニアヌスの権威はイタリア半島やイベリア半島の一部までしか及ばなかったわけですが、東ローマ帝国が東ゴート王国を滅ぼし、わずか

な間ではありますが、イタリア半島を制圧したことから、ローマ・カトリック教会がユスティニアヌス法典の保存者となりました。

その他の地域では、ゲルマン諸王が独自に法典を公布し、多くの事案で、かなり長い間、ゲルマン諸部族には彼ら独自の法が適用されましたが、ローマ市民の末裔には卑俗法が適用されていました。もっとも、それらの中にも先行する東ローマの法典の影響を確かに見て取ることができますが、中世初期には法実務に対する影響力はわずかでした。ですからローマ法は、教会法に影響を与えることにより細々と生き続けていたといえます。

西ヨーロッパでもユスティニアヌス法典のうち勅法彙纂と法学提要は知られていましたが、勅法彙纂は雑多な法の集合にすぎず、法学提要は初心者向けの内容にすぎなかったのですが、それでも当時のゲルマンの法律家にとってはその内容は難解で十分に理解できるものではなかったといわれます。西ヨーロッパでは、学説彙纂は何世紀もの間おおむね無視されていましたが、その理由はあまりに大部で理論的に難解であったことにあり、十字軍をきっかけにヘレニズム文化がイスラムを通じて伝播されることによりようやく学説彙纂の真の価値が再発見される下準備が整うことになるわけです。

一〇七〇年ころ、イタリアで学説彙纂の写本（いわゆるフィレンツェ写本）が再発見されました。この時から、古代ローマの法律文献を研究する学者が現れ、研究の中心となったのはボローニャで、ボローニャの法学校は次第にヨーロッパ最初の大学の一つへと発展します。中世ローマ法学の祖であるイルネリウスが註釈学派を起し、ボローニャ大学でローマ法を教えられた学生達は、皆ラテン語を共通言語に、後にパリ大学、オクスフォード大学、ケンブリッジ大学等でローマ法を広め、西欧諸国に共通する法実務の基礎を築きました。

一四世紀から一五世紀にかけてバルトールス・デ・サクソフェラート（1314～57）を代表とする註解学派と呼ばれる一派がおこり、ローマ法の多くの規範が、ヨーロッパ中で適用されていた慣習的な規範よりも、複雑な経済取引を規律するのに適していることに着目し、推論によって抽象的な原理を導き、当時の経済状況に合わせた自由な解釈を行ないました。こうして、ローマ帝国の滅亡から何世紀も経て、ローマ法や、そこから借用した条項が、再び法実務に導入され始めます。多くの君主や諸侯がこの過程を支援し、大学の法学部で訓練を受けた法律家を顧問や裁判担当官として雇い入れ、例えば、有名な「元首は法に拘束されない」といった法格言を通じて自らの利益を追求したりします。

中世においてローマ法が選好された理由がいくつか考えられます。それはローマ法が、財産権の保護や、法主体及びその意思の対等性（強者の意思が弱者に優越する

というものではないというイメージ）を規定していたことや、遺言によって法主体が財産を随意に処分し得る可能性を規定していたことが挙げられます。このように発展してきたローマ法が教会法やゲルマンの慣習、特にレーン法と呼ばれる封建法の要素と混交された結果、ある法制度が出現します。

この法制度は、大陸ヨーロッパの全域（及びスコットランド）に共通のもので、ユス・コムーネと呼ばれました。ユス・コムーネやこれに基礎をおく法制度は通常、大陸法（英語圏の国ではcivil law）として言及されます。

一六世紀中葉までに、再発見されたローマ法はほとんどの西欧諸国における法実務を支配する形で継受され、教会法とローマ法の博士を持つ者は「両方博士」と呼ばれ大きな影響力を持ちました。一七世紀になるとドイツでは、ローマ法が自国内の各領邦に共通に適用される普通法として強い影響を与えると共に、各領邦の社会情勢に応じて自由にローマ法を解釈するようになります。

○イングランドだけは、ローマ法を部分的に継受しません。その理由の一つは、ローマ法が再発見された当時、イングランドでは既にコモン・ローが成立し、発展を始めていたという事実です。ローマ法が神聖ローマ帝国やカトリック教会、絶対主義を連想させるというのも一つの理由にあげることもできます。英国法の歴史から明らかなように、スコットランドがイングランドに対抗し大陸法を継受したという事実もイングランドにとってローマ法をますます受け入れ難いものとしました。

この結果、イングランドの制度であるコモン・ローは、ローマ法を基礎とする大陸法と並立して発展しました。とはいえ、「先例拘束の原則」のようにローマ法由来の概念もコモン・ローに入って来ています。特に一九世紀初頭、ウィリアム・ブラックストン等、イングランドの法律家や裁判官は意識的にヨーロッパ大陸の法律家や直接ローマ法から規則や発想を借用しようと努めました。また、イングランドの「海事裁判所」はコモン・ローを使わず、ユス・コムーネを使用していました。

フランスでは、一六世紀になると、ルネサンス・人文主義を思想的背景に、文献学的・歴史学的にローマ法大全の古典古代の法文を厳密に探求することを掲げる人文主義法学と呼ばれる一派がおき、バルトールス学派を批判します。

また、神聖ローマ帝国に対抗するという政治的な理由から早くからローマ法の影響を脱し、独自のフランス法が発展をみていましたが、一八〇四年、フランス民法典が施行されると、一九世紀のうちに、多くのヨーロッパ諸国では、フランス法を模範として採用するか、自国固有の法典を起草するかのどちらかになって国家が法典化に乗り出し、ローマ法を実際に適用する動きや西欧流のユス・コムーネの時代は終わりを迎えました。

（四）ユース

○先に述べたザルマンの制度のポイントを整理しますと、土地等の一時的信託ともいうべきものが見られ、大陸ではローマ法の遺言の影響を受け、ザルマンは遺言執行人（テスタメンタリー・エクゼキューター）に発展したことにも触れました。

○イングランドでは、土地の遺言処分が禁止されていたために、この方面の古い例は余り見られないようですが、十二世紀には、土地の一時的信託ともいうべきものがみられるといわれます。十二世紀においては、土地の売買に領主が介在することが間々あったようです。売主は、先ず、売ろうとする土地を象徴する小枝を領主に渡し、その土地を買主の為に領主に放棄します。次いで領主は、小枝を買主に渡して、土地を買主に引き渡します。これで売買は完了しますが、この売買では一時的にしろ土地が領主に移転したので、売買がうまく行くかどうかは領主の良心一つにかかっていました。十三世紀になると継承的不動産権設定のためにも、一時的信託が見られるようになったと言われます。

○他方で永久的信託と言われるべきものも、ノルマン・コンクェスト当時まで遡れると言います。当時の十字軍遠征に参加した兵士たちの間で、国に残した家族のために信頼する友人等に、管理保有してくれるよう託して土地を譲渡することがあり、このようなものを称してユースと言われるようになります。死後その土地そのものあるいはそこからの成果物を残された家族に渡すのですが、土地の長子相続を前提にしての徴税制度の下では実質脱法になりますので、当初普通法（コモン・ロー）裁判所はまだ一般的に、これを認めようとしませんでした。

　これが、大々的に行われるようになったのは、十三世紀前半のフランシスコ教団がイングランドにやって来て以降のことです。教団の戒律には赤貧の誓いがあり、修道僧たちは個人的にも組織的にも一切財産保有が認められなかったので、少なくとも必要な宿舎位は与える方法を考えないといけませんでした。

　家や土地を彼等のために自治都市に譲渡することが考え出され、教団渡英後程なくして、イングランドの様々な町でこうして多くの土地が教団に提供されるようになり、ユースは全土に広がっていったと言われます。

○十四世紀末あの王位継承のため国内を二分して争ったバラ戦争が始まると、貴族の中にもユースを利用する人々が増えてきました。

　前述の通り帰還出来ないと土地を没収されるため、戦地におもむく前に信頼できる人に土地を譲渡して出かけたものです。十五世紀の初めには、普通法裁判所では救済を受けられない人々の、国王の慈悲への訴えに国王の

側近で聖職者でもある大法官が衡平と良心に基づいて、ユースを強制する命令を発し始めます。これが後に衡平法（エクイティ）裁判所に繋がって行きます。やがて信託違反事件が続出し、さしもの大法官も委託された財産の横領事件などを中心に、目的財産の回復、受託者の責任追及、信託履行の強制をせざるを得なくなり、衡平法裁判所として信託上の義務履行を命ずることで、その役割を担うことになります。

○こうしてユースが認められるようになり、十五世紀から十六世紀にかけてますます利用者が増えました。真正の特に幼い相続者に封建的負担がかからないように、人々はくぐり抜けの方法として仮の受益者をおき彼等が真の受益者のために土地を保有する、といった二重のユースなるものも考えだされます。一五三五年に財政窮乏の為ヘンリー八世が、有名なユース法を出してこの手のユース禁止を図ったのは、こうした背景がありました。

　しかしながら皮肉なことに、この禁止措置は反乱まで誘発し撤回に追い込まれ、他方で裁判所がこのユース法の禁止措置の適用外として解釈していったものがトラストと呼ばれ、近代信託の基礎となって行きます。こうした中、衡平法裁判所の大法官も専門職業的裁判官が就任するようになり、十七世紀初めには衡平法裁判所として普通法裁判所と並び独立的地位を確立します（なお両裁判所が統一されるのは、十九世紀後半）。

○こうして二重のユースは必要ないものになりますが、同時に伝統的なユースの用語も使われなくなり、信頼を表わすtrustという現代の用語に変わります。衡平法裁判所の判例の集積によるエクィティーにより、近代信託制度の発展を基礎づけることも可能になったのです。

　ただ、こうした歴史的経緯から所有権などについて、財産の名義人（受託者）は普通法で、利益を受ける人（受益者＝教会など）は衡平法で保護されることとなり、二重の所有関係で保護が強い一方、信託制度がいささか理解しにくい要因になっているようにも思われます。

（勿論、補完し合う必要な機能を統一的な法でカバーすることは、時間的にも面的にも動態的な社会では難しい面があり、無理に形式的に統一することで両機能とも意義が失われることもあるので注意が必要だと思いますが。）

○ユースが土地の遺言処分にまでその活動領域を拡大し、十四世紀以降のイングランドで、大変重要な社会的機能を持つに到るにはザルマンの制度からの影響が多分にあったと考えられます。一二六七年のマールボロー法が、領主が後見権に基づき課す封建的付随負担を回避するため、長子たる相続人に生前土地譲渡をしたり、高額地代支払を条件に友人にその土地を再封与しておくといったことを禁じています。よって十三世紀末の土地保有

者は別の新しい負担回避手段を考える必要がありました。

一方で当時、動産法の分野では遺言執行人制度が発展を遂げつつあり、遺言で動産遺贈を行い、死者の金銭債務全面責任、相続人の責任縮小という制度改正が行われました。その結果、不動産遺産を直接相続した相続人は土地もしくは土地からの収益を、被相続人の金銭債務の支払に充てられなくなりました。

こうしたことが重なり人々に、封建的付随負担の回避と土地の遺言処分を可能とする制度を考えさせ、ザルマンに起源を持つ遺言執行人制度に目が行き「土地の遺言執行人」というべきものを作り出すことになったのだと推察されます。

こうしてユースの活動領域を土地の遺言処分にまで拡大させ、譲受人は譲渡人よりコモン・ロー上の不動産権の譲渡を受け、譲渡人の生前その指示に従って新たな不動産権の設定を行い、この設定を譲渡人の死後まで延期するとともに、土地の権利が譲受人に移転している間は、土地から上がる収益をその指示に従って処分させるようにすれば「土地の遺言執行人」の機能は、この譲受人によって十分果しうるということになったわけです。

（続く）

古い物・遠い夢

忠内正之

逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）

七

秀吉は九州から凱旋して間もなく、畿内の辻々に北野天満宮で茶湯を催す旨の高札を立てた。

一、北野の森で十月一日より十日の間、天気次第で大茶湯を催し、秘蔵の名物を揃えて数寄者に披露する。

一、茶湯を好む者は、若党、町人、百姓までも、何を持ってでも出席出来る。

一、松原で行うから、畳二畳、持って居ない者は、筵、ゴザを敷いてもよい。

一、数寄心を持つ者は唐国の者でもよい。

一、遠国の者のために十月一日まで待って行うものである。

一、この度不参の者は今後こがしを点てることも無用である。

一、貧しい者であっても、遠国から来た者でも、関白様のお点前で茶を下さる。

という内容である。

北野茶湯の布告は畿内の小大名や数寄者の間に混乱を巻き起こした。十日の間に茶道具を持って出席しなければ、今後茶が出来なくなるというので大あわてであった。数寄者だとは言えなくても少々茶を知っている者は関白様の茶が飲めるのなら、筵を下げてでも行こうかという気になる。

十月一日の初日、北野天満宮の拝殿には、誰もが拝観できるよう、黄金の茶室をはじめ秀吉所持の高価な茶道具が、所せましと飾られた。掛物、花入、風炉（茶道における七輪）、釜、茶壺、茶入、茶碗、茶杓、茶筅、棚

物、水指、香炉、香合、菓子器、等である。

参道の右側にひろがる松原の中央広場に、柴垣をめぐらして表側を開けた四軒の仮設茶室が建っており、ここが関白お点前の席であった。

このほか、畳二畳の小間小屋千五、六百、筵敷きが数百を数え、集った数寄の者は、左大臣近衛信尹をはじめ、豊臣秀長、徳川家康、織田信雄、前田利家、蒲生氏郷、宇喜多秀家、上杉景勝、細川忠興ら高名の大名から粗衣の侘者までざっと一万余人に及んだ。

広い社域が、野次馬も加わって身動きがとれない有様である。

秀吉の点前は午前と午後にわかれ、昼食後の点前がはじまると、柴垣の周囲は警備の者が押し返されるほどの人波となった。

秀吉は上機嫌で、午前と同様、次々に伺候してくる公卿や大名に、利休、宗及、宗久の介添で茶を給している。

しかし待たされ、じれた群衆は、

「わしら侘者にも、関白はん、早よう、お情けのお点前をくださらんかい」

「そうや、そうや、ぎょうさんの人出やおへんか。そろそろ始めんと、お陽さんが落ちはるで」

口口に遠慮のない催促の声を放っていたがやがて後方から罵倒が加わる。

尾張の百姓の生まれとも伝わる関白への、仲間とも思うが故の怒りと、歯に衣を着せない京童の痛烈な揶揄が、茶室の一軒で控える有楽斎に感じられた。

(さてどうなるか)

浅野長政、前田玄以、石田三成ら側近たちの狼狽を横目に、神妙顔で有楽斎は高みの見物である。

(民衆は愚かではない)

有楽斎は、堺の市井に住んで、権力や財力に必ずしも屈伏しない庶民のしたたかさを、垣間見ている。

武力と黄金の誇示で万民を征服したつもりの秀吉は、天下人が手ずから侘者にまで茶を施すと沙汰すれば、庶民は恐懼感激して這いつくばい、日が落ちようと夜半になろうと、おとなしくおめぐみを待っているものと思い込んでいたものに違いない。

何もかも思い通りになる、と信じていたとすれば、

(権力ぼけじゃ)

一歩離れ、名利を捨てた目で眺めれば、人の姿、世の流れが、面白いようによく見えてくる。

秀吉は、ついに自制を抑え切れず、茶筅を叩きつけ、水屋へそそくさと身を隠してしまった。

有楽斎をのぞき、四軒の茶屋にいた人士が総立ちになっている。すぐに表と裏で、怒号と悲鳴と泣き声が飛び交う大騒乱が巻き起こった。

警護の将であった加藤清正がひげづらに朱を注いで槍を振り回し、群衆を追っ払っている。水屋の裏のあたりでは、秀吉の退出路をひらくためであろう、突きとばされた人々と清正らに追われた人々がぶつかり合い、阿鼻叫喚の惨状となった。

騒ぎは、秀吉一行が遠ざかるにつれて、潮が引くように収まったが、柴垣の向う一帯で倒れたまま動かない人々を、警備の足軽隊が乱暴にかつぎ上げ運び出している。

大混乱となった北野大茶会は、結局初日一日で中止せざるを得なかった。

理由は、表向きは平定した九州の肥後で反乱が起きたため、とされたが、「天下人が遠国の一揆に腰を抜かして、天下一のお楽しみを取り止めなさった」と非難を浴びる結果となったのである。

余談であるが、有楽斎はこの北野大茶湯を大失敗であったと、断じているが、後世の史家の書物では、秀吉ならではの催しであり、話題をさらったと大きく評価をしている。

肥後の反乱は、九州征討時の戦功で肥後一国を与えられた佐々成政の支配の失敗から起きたものであった。

成政は統治の功を急ぐあまり、検地を強行して国一揆を生じさせてしまった。

反乱が収まると、乱の責を問われて成政は自害を命じられ切腹して果てた。天正十六年、五月十四日のことである。享年、五十歳。

有楽斎はこの知らせを堺の屋敷で受けた。かつて己の守役の一人であり、軍事の師であった成政の死に、もはや格別の感慨は催さなかった。「織田家譜代の武将は、いずれ消え去る運命じゃ」と独りごとをしたのみである。

その後肥後は二分され、子飼いの加藤清正と直臣の小西行長に与えている秀吉の処置を見れば、失政がなくても成政の命脈は尽きていたと思わざるを得ない。

聚楽第からの使者が、上洛を請う茶々姫の手紙をもたらしたのは、この訃報に接した翌月である。

小憎らしくもあり、気にかかって忘れられないこの姪とは、大草城を出て行った一昨年以後、およそ二年間、会ってもいないし、消息を交わし合ったこともなかった。

八

一昨年さらわれるようにして大草城を出ていった三人の姫とは、あれから会っていない。懸念していた通り茶々が秀吉の側室になったと聞いて臍をかんだが、もとより有楽斎の力の及ぶところではなかった。

今茶々は聚楽第の奥まった場所に住居を構えて侍女たちにかしずかれている、

二年の間に他の二人の姫もがらりと運命を変えている。末娘のお江が先ず大野城主の佐治一成に嫁いだ。一成は有楽斎の支配下の知多衆に属していて母は信長の娘という姻戚関係になる。次女のお初は近江の国大溝城主、京極高次に輿入れした。こちらの母親は浅井久政の娘なので、高次とお初はいとこ同士となる。

一人残った茶々姫はいつの間にか聚楽第に移っていた。反抗するものと期待した者が多かったと思うが、茶々姫はたやすく秀吉の意に従ってしまったようだ。幼時から茶々の激しい性格をよく見知っていた有楽斎は、その成り行きが不安であると共に、女心の不思議さをつくづく感じたのである。

その茶々が叔父の有楽斎に頼み事だという。またも頼られる重荷と、反面久し振りに合う姪との対面を期待して茶々屋敷の門をくぐった。

二十二歳になった茶々はまるで若い頃のお市そのままであった。ほぼ同じ歳のお市にあこがれていた有楽斎は成長した美しい茶々に目を見張った。

「叔父上」

茶々はなつかしさをみなぎらせて有楽斎にすり寄った。茶々にとって本心をさらけ出して頼れる叔父なのである。

茶々は信雄にだまされるようにして出た大草城の不義理を詫びると共にこう言い放った。

「叔父上も叔母上もこのような身になった茶々をさぞ軽蔑しておいでしょう。わかっております。だが叔父上、茶々は秀吉に復讐しておるのです。我々一族の敵であるあの成り上り者の子を産んで、天下を奪い返そうと企んでおります」

茶々の目が虚空を見つめ、爛々と輝やく。

有楽斎もよく知っている激しく不気味な性格が表われている。

「秀吉の子をか」

正室のおねも子を生んでおらず、秀吉には子種がないというのが世間の風説である。

「子を産むのは秀吉ではなく、この私でございます」

茶々は艶やかに微笑んだ。有楽斎はまたもこの姫の底知れぬ恐ろしさを感じ、背筋が寒くなるのを覚えた。そして奥まったこの男子禁制の屋敷から早く抜け出したかった。

「それでわしに何の用事かな」

「はい、叔父上に茶々の相談相手になってほしいのです。茶々には叔父上の他、心底頼れるお方はありませぬ。この曲輪に留まりになって茶々にお力をお貸し下さい」

茶々はしおらしく両手をついて懇願した。

「これは関白様のお頼みでもございます」

こうまで言われると断ることのできない有楽斎であった。

気のすすまぬ聚楽第での暮らしがこうして始まった。御殿の内に住むことを嫌った有楽斎は外堀内に屋敷を与えられ、昼間だけ茶々御殿に通った。

有楽斎は有楽斎で己の自由度を残す暮らしが欲しかったのである。有楽斎は日が暮れるとさっさと退出して外堀内の屋敷に帰った。

そんな暮らしが五ヶ月も過ぎた頃である。茶々がわざわざ関白を呼び、有楽斎も控える前で子が出来たことを告げた。

有楽斎も驚いたが秀吉の動転のさまは見ていられぬ程であった。立ったり座ったり心ここにあらぬ体で、急に血の上った顔で突っ立ち、

「医者を呼べ、天下一の産科医じゃ」

と叫んだ。

召し出された産科医によって茶々の懐妊が確認され、誕生は五月か六月とされた。

茶々の勝ち誇った表情に、有楽斎は複雑な気持ちである。まこと秀吉の子かという疑惑は消えない。しかし牡の猫さえ居らぬという男子禁制の御殿である。男子は一人として近付くことは出来ない。疑惑を口にすることは御法度である。本人が言うように、子を産むのが茶々であればそれでいいのであろう。

翌年天正十七年になり、秀吉は身ごもった茶々のために淀城を造った。聚楽第と大坂城の丁度中間地点にある風光明媚なところである。新しい城で出産出来るように工事を急がせて、桜の咲く頃には移転が行われた。

有楽斎は引続き後見役を命じられ、共に淀城に移った。

五月二十日、秀吉はまたも世間をあっと言わせた。男子無事誕生の祈願のためにと聚楽第の門内白洲で集まった人々に金配りをしたのである。金貨四千九百枚、銀貨二万千百枚を豊臣一族、公家、大名等に分配した。

金配りの効果あってか、その七日後の五月二十七日の明け方、茶々は無事に男の子を出産した。秀吉の喜びはたとえようもない。産着にくるまれた若君を抱き上げてそばに居る者に見せて回った。有楽斎も、わしに似ているであろう、と云う秀吉に、

「全く生き写しです。お世継ぎの御誕生、豊臣家万歳でございますな」

と世辞の一つも言わねばならなかった。

淀君と呼ばれるようになっている茶々を見舞うとやつれた顔に誇らし気な笑みを浮かべている。すっかり満足した母親の顔である。

だが淀君は三ヵ月後には失意に襲われる。鶴松と命名

された赤子は豊臣家の嫡男として大坂城で育てられることになったからである。淀君は半狂乱になって赤子を離したがらなかったが、秀吉はこの時だけは淀君に対しても冷酷になり、赤子をひき離して乳母に預けた。

淀君の出産を機会に有楽斎はお役御免を願い出て許された。淀君は愛児を取られて失意のどん底にあり、秀吉の関心は鶴松の養育と関東の北条攻めに移っていた。淀君の状態だけが気になったが、大蔵卿局や侍女たちに任せて、有楽斎は気骨の折れた長い間の後見役から解放された。

九

その後、およそ四年の間、有楽斎は秀吉とも淀君とも会うことなく、悠々自適の日々を送った。

とは云え、身辺が全く平穏だったわけではない。

「小人閑居して不善をなす、とやら、全くお恥ずかしい次第でござる」

と、堺の今井宗久に夫婦喧嘩の仲裁を頼むはめになったのは閑居の間に自分の子があちこちで生まれたからである。

味舌の館に置く側室おみやが、その後一男を追加したときは、

「めでたい儀でございまする。なれど、男子が三人、もはや充分でござりましょう」

とお清は寛容であった。

だが、聚楽第外堀内の屋敷を引き払うにあたって大坂に移した京妻には一男二女が、さらに堺の隠し女が一男を出産したことが露見するにおよんでは、無事にすむわけがなかった。

さしもの賢女も逆上して家を飛び出し、十町ほど離れた妙国寺へ籠もってしまった。

この寺には、有楽斎の数少ない門弟の一人である役僧玄旦が住している。

お清は、「もう何もかもいやになりました。男と女の醜いかかずらいから離れ、いっそ尼になりとう存じます」と、泣いて訴え、玄旦を困らせているという。

「お迎えにお出ましくだされ」と、玄旦は言うが、自分がのこのこ出掛けては、火に油を注ぐことになりかねない。四十坂に入ったお清は、今でいう更年期障害を時折り発症するようになっていたのである。

さしも周旋上手の有楽斎も、自らのこととなるとまるで及ばず、何かと世話になっており、お清が父とも慕う今井宗久に助けを求めたのであった。

有楽斎の身辺には、このように艶っぽいさざ波が立ったが、時代の流れについては、幾つかの大きなうねりが続いていた。

天正十七年十一月二十四日、秀吉は諸大名に軍令を発し、出陣準備を命じた。関東の北条攻めである。

先鋒の将は、関東に隣接して地形を知る徳川家康であるが、家康の愛娘が敵方の総帥北条氏直に嫁している。秀吉に必ずしも心服していない家康の寝返りが全くなし、とはいえなかった。

折悪しく、年が明けた天正十八年一月十四日に、家康の正室になっていた旭姫が、里帰り先の聚楽第で、気うつの病が高じて死去した。

堺では、首を吊ったという噂も流れ、輿入の仲介を果した有楽斎は、旭姫の苛酷すぎる人生を思い涙したのであった。

(これで、豊臣、徳川両家の縁は切れた。さて家康はどうでるか)

有楽斎は無関心ではいられない。

秀吉の打つ手は早かった。急ぎ、織田信雄の姫を養女とし、一月二十一日に家康の三男長丸(秀忠)と妻合わせ、両家の姻戚関係を継続させたのである。

秀吉の京都進発は三月一日であった。

豊臣軍は総兵力二十二万と号している。

対する北条軍は五万五千程度といわれた。

戦闘は、三月二十九日、箱根山口ではじまり、七月五日、氏直の降伏によって終った。北条家は滅んだが、氏直は家康の女婿ということで助命され、高野山への追放にとどまった。正室だった家康の姫も、無事、徳川家へ戻っている。

その後、奥州の覇者伊達政宗が臣従し、抵抗する豪族は討伐して、秀吉の日本全土平定が成ったのである。

北条家の旧領は徳川に与えられた。徳川の家中ではこの大転換を猛反対する向きもあったが、家康は之を抑えて秀吉の意向に素直に従ったのは頗る賢明であった。

この移動のとばっちりで織田家にとっては良くない結果となった。

信雄が徳川の旧領、三河、遠江、駿河、甲斐、信濃へ移封を命じられたが反抗し秀吉の怒りを買ったのである。先祖代々の地である尾張は離れられぬと主張し、尾張、三河、遠江、駿河が欲しいと申し出た。

信雄は未だに織田直系の誇りを捨てきれずにいた。かつての家臣筋の秀吉は無理を聞いてくれるものと誤算していた。信雄は関白太政大臣に逆らった罪で領地を取り上げられ下野の烏山に配流になった。養女の縁は解かれ、長丸との婚姻も消滅である。

有楽斎は信雄の思慮の無さを今更憤る気にもなれなかった。織田家の没落を内心嘆くだけであった。

天正十九年一月には秀吉の異父弟秀長が死んだ。長年秀吉のかげにあって兄を支えてきたが、持病の労咳が悪化して大和郡山城で他界した。秀吉は片腕をもぎ取られ

たかのように嘆いたという。

翌月の二月には利休切腹事件が起こる。その報を堺の屋敷で聞いた有楽斎は、これまでの利休と秀吉の仲を反芻して複雑な思いである。理由は色々取り沙汰されたが、結局二人は水と油だったのだと有楽斎は思った。長い間の無理が晩年に至って爆発した。

有楽斎は利休から台子点前の伝授を受けた時のことを思い出した。秀吉は台子の伝授を利休が直接授けることを禁じていたのだが、有楽斎にだけは利休が授けることを許した。

秀吉の前での台子相伝が済んで秀吉が去ったあと、利休は関白の面前では言えなかった極意を伝えようと有楽斎に囁き、すべて自分の作意、趣向で行うのが台子の秘事であって相伝などはないのだと言った。

台子伝授を私物化して茶の世界まで自らの権威で押さえつけようとした秀吉の態度を不服とする利休の言葉に利休の本心を見た気がした。

あとで聞いたことだが、正月十三日の利休屋敷二畳茶室での茶湯では、利休は秀吉の嫌う黒茶碗を用いたという。秀吉が陰気だとして特に嫌う黒茶碗をわざわざ目の前に出したことに、有楽斎は利休の強い意志を感じた。関白に屈することを利休は拒絶した。

秀吉に謝罪するように、利休の弟子でもある武将たちは説得したが、利休は応じなかったという。意固地に自分の意志を通して死を選んだ。

(勝ったのは、利休どのじゃ)

有楽斎はそのように思い、利休居士の姿を偲び心から冥福を祈った。

この年の八月五日、三歳になっていた鶴松君が淀城で病死した。鶴松は大坂城で育てられていたものの、癇が強く病気がちのため、淀君の強い要望で生母のもとに戻されていたのである。秀吉の嘆きは見ておられぬほどであった。三日三晩清水寺に籠もって号泣したという噂が有楽斎のもとに届いた。有楽斎は淀君の悲しみを思いやって胸を痛めた。

秀吉は子を失った痛手を打ち払うように朝鮮征伐の意図を具体化し、九月に入って正式に命令を下した。

前線基地としての肥前名護屋での築城と軍船二千艘の造船が命じられた。諸大名に合せて三十万の兵と武器食糧調達が告げられた。諸大名も資金を徴発される堺会合衆も、内心ではこの戦に反対であった。

信長の時代からでも、戦乱が三十数年、絶え間なくつづいていた。そのたびに大軍が動き、農民も召集され、多くの人馬が死に、田畑が荒れ、貯えもついえている。国全体が荒廃しており厭戦気分が蔓延していた。

千利休が死を賜わった真因は、堺商人の一人として、また茶室で接する諸大名や庶民の苦しみを代弁する思い

で朝鮮討入りの無謀を諫言した。このことで秀吉の逆鱗に触れたため、とする新説が流布しているのも戦争に反対する世相のあらわれであると有楽斎は感じた。

十二月には養子になっていた姉ともの子、秀次に関白の地位を譲り、自身は太閤になった。秀吉は自分の子を持つことを諦めたのか、あれほど自分の子に天下を継がせたがっていた淀君はどう思っているのであろうかと、淀城にいる彼女の気持を推しはかった。

天正二十年は十二月八日に文禄元年と改元された。その二月から軍勢の肥前名護屋への移動が本格化した。

太閤秀吉の京都進発は三月一日と発表されたが、秀吉の出陣は遅れた。

今井宗久が訪ねてきて語ったところでは、病に臥しているようだという。太閤さま御不例と御乱心の噂は年末から流れていた。

血を分けた世継ぎを断念し、秀次に位を譲ったのは、秀吉がおのれの心身衰弱を覚ったからであろうと有楽斎は納得した。

ここまでは高見の見物であった。だが突如世捨て人同様の有楽斎に出陣命令が下ったのである。

三月二十五日であった。知友というべき前田玄以(五奉行の一人で、太閤の側近)が京都から馬を走らせて堺の寓居に飛んで来た。

京都進発を明日に控えて、従軍の御咄衆に有楽斎を加えよ、と鶴の一声が出たのだという。わしの好みの茶を点てられるのは、有楽ただ一人と、もうその気になっていて、たしなめようものなら、堪え性の無い太閤ゆえ、死を賜わりかねない情況だというのである。

御咄衆というのは、御伽衆とも称され、主君のそばにあって、話相手や見聞のひろめ役にたずさわり、茶事、詩歌、碁、将棋などの相手もつとめる。

今回、肥前名護屋本陣に詰める御咄衆の面とは、元大名の金森法印、稲葉兵庫、佐久間不干斎、黒田如水の叔父で茶人の小寺休夢、今井宗薫、典医の施薬院金宗、右筆の大村由己等二十数人におよぶという。

有楽斎は、あわただしい従軍を承知した。玄以の苦衷を察したのであるが、丁度お清と京妻や堺の隠し女のことで揉めている時であり、しばし「逃げの有楽」をきめこむことも良策かと考えたのである。

それに加えて、秀吉の心身衰弱の姿をこの目で確かめてやりたいという興味もあった。

その日のうちに、有楽斎は玄以と共に京都へ向かい、翌二十六日、太閤とその軍列に加わったのである。

続く

人たらしの文章
—司馬文体の魅力—

山田嘉久

昭和から平成にかけて「国民的作家」といわれた作家司馬遼太郎が平成7年2月に急逝してから、早くも20年が経った。

その間、司馬作品の人気は依然として衰えることなく、読み続けられている。その人気の源泉はなにか。彼の考え抜かれた深い時代考察、それと凡人には及ばない繊細な人間観察などいろいろ考えられるが、忘れてはならないのは、彼の独特な文章力であろう。

以下、司馬文章の魅力を私なりに探ってみた。

1　司馬文章の基本は「話し言葉」

—同人雑誌「近代説話」からの出発

司馬遼太郎は大阪産経新聞文化部に勤務していた昭和26年（1951）、友人の石浜恒夫や寺内大吉と同人雑誌「近代説話」を創刊した。

同人には司馬、寺内、石浜のほか、その後、清水正二郎（胡桃沢耕史）、花岡大学、辻井喬、尾崎秀樹、伊藤桂一、黒岩重吾、永井路子などが集まった。（この中から後に6人の直木賞作家が誕生することになる。）

同人たる資格は今までに懸賞などで当選や候補作に残った経験のある書き手ということであったが、皮肉なことに発起人である司馬のみがこれに該当しなかった。

そこで早速、書き上げて「講談倶楽部賞」に応募、入選したのが「ペルシャの幻術師」である。日本人が一人も登場しない不思議な幻想小説だが、13世紀の匈奴の英雄、成吉思汗鉄木真が中央アジアのオアシス国西夏を攻めて、その公主で絶世の美女李睍を手に入れる物語である。

ここでは作品の内容よりは、司馬の「受賞の言葉」に注目したい。

「さる友人が一読して（君の話の方がおもしろいんや）。これは痛烈な酷評でした。となると私はまず、私の小説を、私の話にまで近づけるために、うんと努力しなければなりません。

小説は書くのではなく、しゃべくりまわるのです。」

司馬は小説家としてのスタートから「話すこと」が作家活動の本質と考えていたことがわかる。

そういえば同人誌の誌名は「近代説話」。文学の説話性の回復を目指したものだった。司馬は「小説という形態を説話の原型にまで還元したい」と語っている。

後年の司馬が「対談の名手」と言われたのも、この辺に原因があるのかもしれない。

2　「剣豪作家」としてのスタート

後に司馬と同様、直木賞作家となった津本陽は、司馬の初期の短篇「愛染明王」を読んで「氏の卓抜な話し上手の才能が、書き出しの一行目から光っている」（随筆「小説のうまさ」）と評している。

因みに「愛染明王」の書き出しの一行はこうである。

〈こんな男も、めずらしい〉

そして、こう続く。

〈子供のころのことだ。尾張海東郡二つ寺村の桶大工のせがれが、十四歳のとき、城外須賀口にかかっている橋を渡っていた。〉

因みに、この小説の主人公は豊臣秀吉子飼いの武将福島正則である。

司馬の一行目の書き出しを褒めた津本は、それと同時に「剣劇場面にも卓抜な手腕を発揮された。」とも書いている。

津本自身、剣道の有段者として有名だが、彼は司馬本人もかなりの使い手に違いないとまで推察しているのだ。（確かに司馬は剣道二段の腕前である。）

そのため、「燃えよ剣」や「新選組血風録」を書いていた頃の司馬は世間からは五味康祐らとともに剣豪作家と見られていた。

このことは将来、本格的歴史小説家を目指す司馬にとっては不本意な評価であったであろうが、剣劇場面に自信を持っていたことは確かである。

そういえば、司馬自身が数多くの自作の中で、一番好きな作品として挙げたのは「燃えよ剣」である。

津本は、司馬の巧みな剣劇場面を具体的には指摘していないが、私なりに、いくつかの例を抽出してみる。

〈芹沢への初太刀は沖田、起きあがろうとしたところを歳三が二の太刀を入れ、それでもなお縁側へころび出て文机でつまずいたところを、近藤の虎徹が、まっすぐに胸を突きおろした。〉

「燃えよ剣」（芹澤派の粛清）

〈歳三は馬腹を蹴ってその頭上を跳躍した。
が、馬が再び地上に足をつけるとき、鞍の上の歳三の体はすさまじい音をたてて地に転がっていた。
歳三は死んだ。〉

「燃えよ剣」（歳三の最期）

〈「清河、みたか」
致命傷は、佐々木の正面からの一太刀だった。右首筋の半分まで裂き、その勢いで清川の体は左へ数歩とんで横倒しになり、半ば切れた首がだらりと土を噛んだ。
土に、酒のかおりがむせるように匂っていたという〉

「幕末」（奇妙なり八郎）

〈（佐野竹之助は）「奸賊」
と、駕籠の中を突き刺した。
が、そのとき、むこう側から駕籠にとびついて駕籠を串刺しした治左衛門とどちらが早かったか、わからない。
いや、この二人より早く、重傷で倒れていた稲田重蔵が、這いながら駕籠を突き刺した一刀が、初太刀だったかもしれない。〉

「幕末」（桜田門外の変）

〈動いた。
抜きうちで、田代彪蔵の影を斬りさげようとしたがおよばず、田代の影は、かるがると飛びさがった。キラリ、と田代は刀をぬいた。月はまだ昇らない。〉

「新選組血風録」（前髪の惣三郎）

なお、本編は大島渚監督により映画化させている。（「御法度」）

初期の司馬には時代劇とミステリーの組み合わせが多かった。本編のほかには「壬生狂言の夜」などがある。

3　「幻想作家」司馬遼太郎

時代は前後するが、司馬はまた「幻想作家」とも云われた時代もあった。

冒頭の処女作「ペルシャの幻術師」は幻想感をこめた歴史ロマンの異色作だが、その後司馬は立て続けて、同人誌「近代説話」に「戈壁の匈奴」「兜率天の巡礼」を掲載した。司馬は、このほか「外法仏」「牛黄加持」「飛び加藤」「果心居士の幻術」などの幻想小説を書いている。

しかし、正直にいって、これらの司馬の幻想小説を読んだ私は多少戸惑ったというのが読後感だった。生来、幻想感の全く乏しい私は濃密な司馬の幻想に付いて行けなかったのだ。

僅かに「下請忍者」などの忍者小説に救いを求めたが、これらは、その前に書いて直木賞受賞作となった「梟の城」に繋がっている。これら忍者小説にも、実は

豊富な幻想性が投影されているのに気が付いたのは大分後になってからである。

このことは、当時の評論界でも見抜けず、司馬を「忍豪作家」ともよんだ。

更にその前の「花妖譚」は本名福田定一で書いた最初期の作品だが、花にまつわる10の幻想小説が展開されている。まず「水仙」から始まり、ついで「チューリップ」に引き継ぎ、各編ごとに異種の花を選び、最後は「桜草」まで、花の（妖しさ）を主題とする物語である。

私にとっては、前述の「ペルシャの幻術師」と同様に理解の域を超えていたが、不思議なことに晩年になって読んだ「江戸妖草伝」（三戸岡道夫著）に司馬と共通のものを感じたのはなぜであろうか。

ともかく、既成の小説にならって小説を書くことを嫌う司馬は、「忍豪作家」のレッテルをはられたために、鬱懐となりその後、幻想的な忍者小説は一切、書かなくなってしまった。

しかし司馬は言っている。

「神様が私に、一生のうち、小説を1篇だけ書くならば、どんな作品か、と尋ねたとすると、即座に、幻想小説と答えますよ」

これが司馬の本音だろう。

幻想小説を書かなくなってしまった司馬だが、その後の作品に、彼の「本音」が時々顔を出す。

中世、戦国時代を背景とした「妖怪」「大盗禅師」でも幻術師が頻繁に登場する。「山伏（行者）兵法から忍者は生れた」とする彼の持論から山伏や役行者への興味も人一倍強い。

さらに言えば、彼の代表作となった「空海の風景」も「雑密」（行者などの唱えた断片的な密教）と「純密」（空海以降の体系化された密教。東密、台密ともいう）の相克を描いた司馬文学の真骨頂だが、厳密にいえば広い意味での幻想小説と見ることもできよう。

また、晩年の旅行記「草原の記」でも〈空想につきあっていただきたい〉という冒頭の文章から始まっている。

司馬は広大なモンゴル草原の世界に、自分の空想とともに、読者の想像力を働かせてほしいと願っているのだ。

更に生涯最後の長編小説「韃靼疾風録」。

司馬にとっては、珍しく架空の人物を主人公としている。その主人公桂庄助は平戸藩（松浦家）に仕える武士だが、平戸島に漂流してきた韃靼の公主（妃）アビアを故国に送り帰すため、朝鮮半島を経て、当時、大明帝国と戦っていた謎多き国（後金、のちの清国）に赴く。そして数奇な2人の愛の行方を軸にして、東アジア世界の陸海に展開される雄大なロマンとなっている。（昭和63年大仏次郎賞受賞作）

この小説を読んだ私は、なぜか冒頭に記した司馬最初の創作「ペルシャの幻術師」を真っ先に想起せざるを得

なかった。

幻想小説からスタートした司馬が、その後、この種のものを敢えて断念したものの、最後には当初の念願の作風に回帰したと考えるべきであろう。

4　司馬文体の特徴―口語化された漢文調

司馬文体そのものに戻ろう。

文芸評論家向井敏は、その著「文章読本」で司馬遼太郎を「漢文調の文体を操る名手」として取り上げている。

〈東に一声すると、西が呼応する。やがて周囲の樹木すべてが、湧くがごとく梟の声を放った。〉

（梟の城）

直木賞受賞作「梟の城」の一節である。

漢文調特有の短切で張りのある語調。簡潔で耳に快い漢文調の機能と美質を備えていることがよくわかる。口語化された漢文調といえる。

〈天に意思がある。

としか、この若者の場合、おもえない。

天が、この国の歴史の混乱を収拾するためにこの若者を地上にくだし、その使命がおわったとき惜しげもなく天へ召しかえした。

この夜、京の天は雨気が満ち、星がない。

しかし、時代は旋回している。若者はその歴史の扉をその手で押し、そして未来へ押しあげた。〉

（竜馬がゆく）

〈空海の生身（しょうじん）は、まことに薪尽き火滅した。この報をうけた長安の清龍寺では、一山粛然とし、ことごとく素服をつけてこれを弔したといわれる。〉

（空海の風景）

そのため、司馬は漢語に和語のルビを振ったり、漢語を和語風に読みかえて用いている。司馬のような大家だけに赦された特権だろう。

例えば、「情報」―はなし　姿―なり　中国―から　船長―ふなおさ　帳三李四―ねこもしゃくしも　意味―こころ　騒ぐ―さえぐ　破顔う―わらう　虚喝―おどかす　の類である。このことによって平易、簡潔、端正、頸直、そして気品ある文章ができあがるのである。

（注）「張三李四」　張氏の3男と李氏の4男、転じてありふれた平凡な人（広辞林）

また、司馬は平易な文章を作るために、敢えて当用漢字でさえ平仮名で書く傾向がある。前述の文章でいえば、

頃―ころ　倅―せがれ　思えない―おもえない

このことは、司馬文章を引用する際に、一番神経を使う点である。

更に、その平易な文章の中に、司馬は意識して彼の好きな「四文字熟語」を多用する。それにより平易のために冗漫になりがちな文章が簡潔になるのをねらっているのだろう。

単独では分からないような難解な四文字熟語も、前後の平易な文体に囲まれると分かったような気分になるのは不思議だ。

〈一藩の人物を同一の模型に入れ、為に倜儻不羈（てきとうふき）の気性を失わせた〉（この国のかたち）

一藩とは佐賀藩を指し、この藩の教育学制を批判しているのである。「倜儻不羈」は司馬の最も好きな4文字熟語で、独立心の強いことを意味する。

5　印象的な書き出しの一文と終わりの一文

前述の津本陽が指摘したように、司馬は書き出し（冒頭）の一文を大切にする。このことは終わりの文章においても同様である。

これは司馬が新聞記者出身であることと無縁ではないかもしれない。

例えば代表作「坂の上の雲」の書き出しはこうである。

〈まことに小さな国が、開化期を迎えようとしている。明治を生き、「坂の上」に浮かぶ「雲」を目指して、人生をかけ上った人間たちの生涯を描く大作の冒頭の文章としてはなにかを暗示したような恰好な一文といえる。

また、終わりの一文はこうである。

〈奉天へ。

と、うめくように叫び、昭和5年11月4日午後7時10分に没した。〉

日露戦争時、世界最強を誇ったコサック騎兵をやぶった秋山好古は、71歳で亡くなったが、その病床で数日うわごとを言い続けたことの描写である。

また、佐賀藩出身で明治5年司法卿につき新司法制度の成立に尽力して、後に「佐賀の乱」で政府に敗れ斬首された江藤新平の波乱の生涯を描いた「歳月」の冒頭の一文。

〈この稀代のーというには後述に待たねばならないがー策士がはじめて世間に姿をあらわしたのは、幕末の京である〉

（歳月）

〈落ち着いている。

声がである。（中略）

世は戦国の初頭。

「国主になりたいものだ」と乞食はつぶやいた。〉

（国盗り物語）

（国盗り物語）は京の油商から美濃国主になった斉藤道三の出世物語だが、冒頭の文書は完全に主語と述語が逆転している。典型的な話し言葉だろう。

最初と最後の文章を大切にする司馬文体の例は挙げればきりがないが、思いつくままに数例を挙げる。

（書き出しの文章）

〈佐渡は、越後からみれば波の上にある。〉

（胡蝶の夢）

〈淡路の島山は、ちぬの海（大阪湾）をゆったりと塞ぐように横たわっている。〉

（菜の花の沖）

〈会津松平家というのは、ほんのかりそめな恋から出発している〉

（王城の護衛者）

（終わりの文章）

〈竹筒1個、書類2通

という品目で、いまも松平容保の怨念は東京銀行の金庫にねむっている〉

（王城の護衛者）

補足すると、松平容保は不本意ながら京都守護職に就任して入京するが、意外にも孝明天皇からは信頼され、2度も親翰を頂戴した。容保はこれを竹筒に入れ生涯、肩身離さず首から下げていたが、竹筒の中身については家族にも明かさなかった。

結果的には容保は朝敵になってしまったのは、司馬は歴史の皮肉と捉えている。

〈英雄というのは、時と置きどころを天が誤ると、天災のような害をすることがあるらしい〉

（英雄児）

「英雄児」は、長岡藩執政の河井継之助が西洋式軍備の導入に成功して、戊辰戦争では中立を目指すが新政府軍に認められず、交戦。長岡城を失い落名した短篇。白眉の文章だろう。

同じ河井継之助を主人公とした長篇「峠」の最終文はこうである。

〈「松蔵、火を熾（さかん）にせよ」

と、継之助は一度だけ、声をもらした。そのあと目を据え、やがては自分を焼くであろう闇の中の火を見つめつづけた。

夜半、風がおこった。

8月16日午後8時、死去〉

（峠）

〈それ剣は瞬息／心気力の一致／という、この技術者のもっとも好んだ言葉が墓石の横の碑に刻まれていたというが、今はその碑はない〉

（北斗の人）

その技術者とは、司馬の言葉を借りれば〈剣法から近代的な体育力学の場で新しい体系をひらいた〉千葉周作

のことである。

「Japanese is a Japanese」

（木曜島の夜会）

木曜島はオーストラリア大陸北端から35キロにある小島。明治期から釦の材料となる貝類の採集地として繁栄した。司馬は昭和50年代、わざわざこの弧島を訪れ、此処で数奇な生涯を送った日本人漆千松の足跡を追っている。

この傾向は司馬後半生の代表作となった「街道をゆく」でも随所にみられる。

「街道をゆく」第1巻（湖西のみち）は次の有名な文章で始まる。

〈「近江」

というこのあわあわとした国名を口ずさむだけでもう、私には詩がはじまっているほど、この国が好きである〉

なんと自由で、闊達な気分にあふれた書き出しであろう。この数行を読んだだけで、わたしたちもまた、もう（詩がはじまっている）気分に引き込まれてしまう。

大げさにいえば、漱石の「草枕」の冒頭の文章を連想してしまうほどの名文である。

漱石といえば司馬が子規とともに最も敬愛した作家で、〈20代になって夏目漱石の文章が、やはり表現力の幅と深さにおいてもっともすぐれていることを知り〉（私の文章作法）と記している。

好きといえば、冒頭の文章ではないが、こんな文章もある。

〈―私は城が好きである。

あまり好きなせいか、どの城址にいってもむしろ自分はこんなものはきらいだといったような顔を心の中でしてしまうほどに好きである。だからできるだけ自分の中の感動を外らし自分自身にそっけなくしつつ歩いてゆくのだが―〉

「街道をゆく」（大和、壺坂みち）

最初と最後をインパクトの強い文章にするというのは、司馬が新聞記者出身であること無縁ではないと書いたが、その典型が「作品の題名」の付け方だろう。

「竜馬がゆく」「燃えよ剣」「坂の上の雲」「翔ぶが如く」「花神」「胡蝶の夢」

等々、ひねりにひねった題名をつけたのは、司馬が「新聞の見出し」と同様に大切に考えていたからであろう。

5　豊富な比喩を多用する

司馬文体の特徴の一つとして、人物の表情やしぐさを

表現するのに、感覚的な比喩を多用することが挙げられる。

例えば、最後の創作といわれる「韃靼疾風録」を開いてみても、随所に比喩が用いられている。

〈銅板を打ち付けたような面〉

〈蛍火がほおをかすめたような微笑〉

〈殻から脱け出たばかりの蝉のような濡れた心〉

〈おのれの皮を剥ぐほどの正直さ〉

なお、豊富な比喩を多用する例は、そのほかの作品でも、挙げればきりがない。

〈庄九郎は、京文化の油壺からぬけだしてきたような男だ〉

（国盗り物語）

〈一望の田園は膏肉のようにゆたかであり、〉

（城塞）

〈劉邦は、大きなたらいに水を張ったような無心の表情のまま笑った。〉

（項羽と劉邦）

〈地の割れ目に落ち込んでゆくように、大がかりな思惑だった。〉

（ひとびとの跫音）

司馬遼太郎は豊臣秀吉をさして〈無類の人蕩し〉（新史太閤記）と呼び、また〈人の心をとる名人〉（播磨灘物語）とも表現した。

司馬の死後、「司馬遼太郎全集」第3部（第51巻―第68巻）を責任編集した評論家向井敏は、改めて司馬全作品を通読してみて、司馬自身の文体こそ「人たらし」と呼んでみたいと書いている。

けだし実感であろう。

（続く）

『時評家　新明正道』（評伝その八）

―新進社会学者、最初の普通選挙と治安維持法―

山本鎭雄

一　東北帝大法文学部助教授に就任

すでに触れたように、一九二六年四月に自由な校風の関西学院文学部教授の新明は、東北帝大法文学部の助教授として転任し、授業題目に「形式社会学」を選び、社会学特殊講義を行った。私学と官学の組織や校風の違いを実感したが、新明はそれには無頓着に過ごした。

新明が着任した直後、新入生歓迎会の一環として日本三景の一つ、風光明媚な松島と松島湾の小島を見物したりした。その後、経済政策論担当の宇野弘蔵助教授から「これまで助教授も教授会に出席しており、その権利はあるのだが、最近は通知も来なくなった。これを確認するために助教授の会をつくって話し合おう」といわれた。

「助教授の会」にはすべての助教授が参集し、決議文を作成した。いざその決議文を携え、学部長に面会しようとすると、大半の助教授は尻込みをして同行せず、宇野と新明だけが学部長に面会することになった。その後、新明にたいして「新米のくせに」と言う教授連もいた。ドイツでは正教授と員外教授・私講師の身分上の格差は歴然としている。当時のドイツと日本とは大学の制度は多少異なるが、日本でも帝大の講座主任の教授と常任とはいえ助教授・講師の身分上の格差は歴然としていた。そこで、新明は関西学院の自由な私学と東北帝大の権威主義的な官学の学風と組織の相違を改めて実感した。

そもそも、二一年三月に宇野（経済学部）と新明（法学部）は東京帝大を同期に卒業した。新明は、いわゆる「就活」として森戸辰男研究員の推薦で倉敷紡績の経営者の大原孫三郎が設立した大原社会問題研究所（当時は大阪天王寺）に応募した。ところが、宇野もまたこの研究所

に応募した。研究所は研究員一名を採用する予定だったため、なかなか決定しなかった。

新明は研究所研究員に内定したが、報酬は半額だった。そこで、所長の高野岩三郎の諒解を得て、副職口を探すことにした。郷里の金沢の白銀教会で親しい松岡貞一牧師（おそらく関西学院神学部を卒業したのであろう）に関西方面に適当な副職口があったら、世話してほしいと手紙で依頼した。

早速、松岡牧師から神戸の関西学院で教師を募集しているという返事が来た。新明は東京に来たベーツ関西学院長と面談し、政治学担当の非常勤講師に内定した。その後、学院長と再び面談した結果、新明は政治学と社会学の講義、ドイツ語の演習を担当する専任教授の就任を要請された。

とはいえ、新明は政治学はともかく、社会学の講義には躊躇したが、新人会ＯＢの友人に助言され、東京帝大新人会機関誌に社会問題や社会運動について研究・執筆したことから、「社会の研究」をもって「社会学」を講義することにして、研究所の応募を辞退したいと申し出て、関西学院文学部教授に就任することにした。もっとも、その当時の学界では一般に「社会学」はその程度にしか認識されていなかった。

その後、宇野弘蔵は大原社会問題研究所の嘱託となり、その翌年の一二年にドイツに留学し、ベルリン大学で学び、レーニンの『帝国主義論』の独訳初版などの文献を渉猟した。二四年に帰国し、東北帝大法文学部で経済政策担当の助教授に就任した。

四月、新明は法文学部助教授に就任した。すでに触れたように、新明は授業題目に「形式社会学」を指定し、社会学特殊講義を開始した。法文学部で社会学を専攻する学生は僅か二名にすぎなかったが、若き新明の講義（選択科目）の受講生は法律学や経済学を専攻する学生約二〇〇名を超えたという。

その翌年、神田の巌松堂書店の店主（波多野一）は、新規に学術書の出版を企画し、仙台の新明に出来るだけ早く出版したいと申し出た。そこで、新明は「背水の陣」を敷く覚悟で形式社会学について体系的に詳述し、最後に原稿を執筆しながら講義に臨み、まとまった原稿を書店に郵送した。出版を急ぎたい書店はときに店員を仙台に出張させ、教室の廊下に待機し、新明の講義が終了すると、講義原稿をそのまま東京に持ち帰ったというエピソードが伝えられている。

原稿を活版に組むと、あまりにも大部になり、書店の店主は新明にいい加減に切り上げてほしいと申し出た。すでに形式社会学の歴史、方法論、社会概念、主要理論（第一章から第四章まで）を書き上げた新明は、最後の第五章を「形式社会学への批判」にあてた。だが、新明は独自の社会学を構築するには一〇年近くの研鑽を要した。

二　最初の男子普通選挙と無産政党の乱立

第一次加藤高明内閣（護憲三派内閣）が成立すると、二四年六月、嶋中雄三、青野季吉らは無産政党結成をめざして「政治研究会」（その前年一二月に結成された「政治問題研究会」はその前身）を結成した。同研究会は機関誌『政治研究』、機関紙『民衆政治』その他を発行し、民衆への政治的な啓蒙宣伝活動をおこなうとともに、全国各地に「政治研究会」の地方支部の結成を促した。

新人会ＯＢで社会思想社の三輪寿壮、平貞蔵らは雑誌『社会思想』で無産政党の中間派の日本労農党への支持を表明した。それと前後して、政治研究会の「創立委員」の一人、三輪は社会思想社同人で神戸の新明に政治研究会神戸支部の結成を要請した。



上　新明正道助教授
左　綾夫人　右　長女・美夜子
（家永登氏提供）

それを受けて、新明は教授の松沢兼人、講師の坂本勝らと相談し、関西学院教授グループの最年長の河上丈太郎教授を支部長に担ぎ上げ、政治研究会神戸支部の発会式が行われた。発会を記念する講演会には東京から駆け付けた大山郁夫と奥むめお（婦人運動家）が演壇に立って激励し、地元から新明、松沢のほか、高山義三（京都）らが演説した（二五年九月）。二八年二月、最初の男子普通選挙（第一六回衆議院議員総選挙）の開票が行われた。

日本労農党から兵庫県一区で出馬した河上丈太郎は、政友会の立候補者が乱立したこともあって、四位で当選した。仙台で学究の道に進んだ新明は、河上の当選の報道を知り、心から祝福したことであろう。戦後、社会党国会議員の河上は全国遊説の旅に出て、東北地方に来ると、仙台の新明の自宅をしばしば訪問し、歓談したという。

改めて普通選挙法の成立の経過を見ると、二五年二月、第一次加藤高明内閣は普通選挙法案に関して、それに反対する枢密院および貴族院との妥協が成立すると同時に、政府は衆議院に治安維持法案を緊急上程し、普通選挙法と治安維持法はまさに抱き合わせで施行された。

二五年五月、最初の男子普通選挙は、納税額によって制限された制限選挙とは異なり、新有権者の無産階級（労働者・農民ら）は労働組合や農民組合を母体に単一

の無産政党を結成しようとした。だが、単一の無産政党は、労働組合や農民組合がそれぞれ対立、分裂、脱退したりして、実現しなかった。

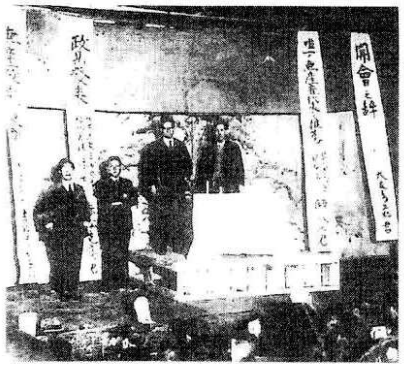
そこで、独立労働協会を創立した安倍磯雄、慶応大学の堀江帰一教授、吉野博士は連名で「健全なる」無産政党の結成を声明し、右派の社会民衆党（委員長、安倍磯雄）を結党した（一九二六年一二月）。左翼合法政党として再出発した左派の労働農民党（委員長、大山郁夫）、さらに中間派の日本労働党（書記長、三輪寿壮）、それ以前に日本農民党（幹事長、平野力三）のほか、地方の無産政党も結成された。

乱立した各無産政党は、いわば四分五裂の状態で普通選挙戦に臨み、政友会や民政党の既成政党と対峙した。しかも、この普通選挙戦では、警官は集会の解散権を行使する治安警察法を適用し、さらに公布された治安維持法によって各無産政党を徹底的に選挙妨害した。その一方、政友会と民政党の既成政党や保守系無所属の陣営は、最初の普通選挙で選挙民の個別訪問が禁じられているにも関わらず、公然と買収と供応を行った。各無産政党は警官を総動員する選挙干渉にたいして共同で抗議し、七一名の立候補者を擁立したが、苦戦をしてわずか八名が当選したに過ぎなかった。

三　宮城県一区の赤松克麿候補の選挙

吉野博士は社会民衆党の宮城県会議員の師義三（もろぎぞう）から郷里の宮城県第一区に出馬することを要請されたが、それを固辞し、それに代わって娘婿で社会民衆党書記長の赤松克麿を推薦した。吉野博士は次女の明子から無心され、婿の赤松候補のために多額の選挙運動資金を提供した。また立候補には多額の供託金の納入を義務づけられ、金銭的に淡泊な吉野博士は資金的に大いに協力したことであろう。

それだけでなく、吉野博士は病躯をおして数回にわたり厳寒期の選挙区に出向き、仙台、古川、塩釜、白石などの演説会で「無産政党の使命」と題して講演している。ところが、仙台に次ぐ大票田の郷里の古川では、既成政党は吉野博士を悪宣伝をして「アカ」呼ばわりした



古川の演説会（1928年2月10日）
左より大友為三郎、師義三（選挙長）、赤松克麿（候補）、吉野作造（「無産政党の使命」）

という。仙台で発行する東北地方の代表紙『河北新報』（二八年二月一二日付）によれば、吉野博士は仙台と小牛田で満員盛況の演説会に出演した直後、突然体調を崩し、仙台でしばらく休養・手当てをしたあと、急遽夜行列車で帰京した。

社会民衆党は労働農民党と選挙対策協定を結び、赤松は共同公認候補となり、政友会や民政党の既成政党の有力候補に挑戦した。選挙戦では宮城県の労働農民党と日本農民組合左派が組織を挙げて、赤松候補を支援した。さらに、吉野博士の教え子で東北帝大法文学部の河村又介、鈴木義男の両教授のほか、経済学の堀経夫教授らは交代で会場や街頭で赤松候補を精力的に応援演説した。

新明助教授も赤松候補を応援したいと吉野博士に申し出たところ、吉野博士は新明の助教授から教授への昇任人事で悪しき影響が出ることを懸念し（法文学部教授会が教授への昇任人事を申請しても、文部省は辞令に難色を示すことも考慮されたのであろう）、応援演説などで表に出ず、裏方に徹することになった。吉野博士は新明が優れた研究者・教育者として学究への道に無用な傷が付くことを何よりも懸念したのであろう。

選挙期間中、『河北新報』は「街頭に立って」という啓蒙的なシリーズを掲載した。それは最初の普通選挙で「如何なる態度で投票すべきか」という知識人による論説である。河村又介、鈴木義男の教授は普通選挙の政治的意義を述べ、無産政党から出馬した赤松候補への支持を暗に論評した。このシリーズの最後に新明は二回にわたり論説を寄稿した（二月一四・五日付）。新明はまず有権者が「政党か、人物か」という投票態度に言及し、政党政治のもとで「人物中心主義」を基準とする投票態度を率直に批判した。次いで、普通選挙で選挙権を得た新有権者の政党選択に言及し、「今回の普選を機として現れ出た候補者のなかで、特にわれ等の注意を惹くのは、無産政党の候補者である。……本県においても、一名の候補者が出て異彩を放っている」として、新有権者にたいして暗に無産政党の赤松候補者への投票を論説した。

さらに『河北新報』（二月一四日付）によれば、日本農民組合（宮城県）を中心に仙台の東一館の会場で「普通選挙法改正演説会」と題して民衆大会を開催し、田中義一内閣の選挙妨害を糾弾しようとした。ところが、臨席した警官は弁士が演壇で発言すると、治安警察法により直ちに「弁士中止」と警告し、次の弁士が登壇すると、直ちに発言中止を連発し、さらに警官は抜剣して演説会を解散させようとした。

赤松候補の選挙長で農民活動家の袖山開は、警官の発言中止の警告を無視して演説を続行した。袖山らは事前の打ち合わせどおり会場の電灯を消し、暗がりの中で支援者と警官は大乱闘を演じた。その隙をつき、袖山は会場から脱兎のごとく逃亡し、選挙事務所に寄り、その後

は行方をくらました。

選挙戦の裏方に廻った新明は、二週間ほど袖山を自宅でかくまうことになった。新明以上に難儀したのは自宅で世話をした妊婦の新明綾夫人であろう。潜伏した袖山は選挙開票後に公然と姿を現わし、「東一館事件」で逮捕・起訴され、罰金刑に処せられた。新明は袖山を秘匿したが、治安維持法に問われなかった。

吉野博士は多くを語っていないが、選挙運動期間中に演説会でこのように官憲と騒動を起こすことには極めて懐疑的であった。選挙の直前、演説会で演じられた大乱闘は『河北新聞』でも報道され、新有権者の投票行動に大いに影響を与えたであろう。

赤松候補の演説会場ではいつも満員盛況で既成政党の立候補者にたいして大いに気を吐き、運動員や支持者だけではなく、新明もまた当選確実と予想したが、開票の結果は期待に反して惜しくも次次点で落選した。新明はこの事態に大いに落胆したことであろう。

四　治安維持法下の文部省の圧力

最初の普通選挙後、治安維持法を本格的に適用した「三・一五事件」が起こった。田中義一内閣の鈴木喜三郎内務大臣の指揮下で司法省検事と特高警察により全国一斉に労働農民党、日本労働組合評議会などの日本共産党と関係のある諸団体の事務所、幹部の家宅を捜査し、一六〇〇名が検挙された。取調べの結果、四八八名が起訴され、三分の二がまもなく釈放された（日本共産党などの幹部の多くは検挙を免れた）。政府は四月一〇日になって「三・一五事件」の記事を解禁した。解禁の前日、各種の新聞はこの事件を大々的に報道し、また治安維持法にもとづき共産党支持の三団体を解散処分にした。

文部大臣の水野錬太郎は官学の高等専門学校や帝国大学に圧力をかけた。「赤化学生」の団体と見なし、東京帝大では後期新人会の解散を命令し（四月一七日）、さらに京都帝大に次いで、九州・東北帝大でもそれぞれ社会科学研究会を解散させた。それと同時に、文部省は各帝大に「アカ」の学生団体ができるのは、「左傾教授」がいるからだという理由で、京都帝大では総長の荒木寅三郎に勧告、経済学部教授会の決議によって河上肇教授は辞職を迫られ、辞表を提出して「依願免官」となった（四月一八日）。

新明の回顧によれば、文部省は九州帝大や東北帝大の総長に好ましからぬ教官の辞職を要請しているというわさが流れた。そこで、東北帝大法文学部の鈴木義男教授の呼びかけで、赤松候補の選挙応援をした河村教授、堀教授のほかに、経済政策論の宇野弘蔵助教授、社会政策論の服部英太郎助教授などが集まって話しあい、対策を協議した。その結果、いずれ小川正孝総長から何らかの意思の表示があるだろうから、それまで静観して待

ち、その上で改めて協議して具体的な対策を立てることにした。

東京帝大の経済学部の大森義太郎教授は大学を追われた（四月二三日）。その翌日、新明の回顧によれば、文部省の要請に応じて、九州帝大の土壌学者の大工原銀太郎総長が法文学部教授会に要請し、石浜知行、佐々弘雄（ささひろお）、向坂逸郎の三教授の辞職を決議した。その結果、彼らもまた「依願免官」し、大学を追われた。

石浜知行と佐々弘雄は新明とともに、東京帝大の前期新人会のOBで、彼らが発行した『社会思想』の同人である。大学を退職後、石浜と佐々は改造社が企画した『社会科学辞典』の編集を担当し、社会思想社とその周辺の人材が執筆し、三〇年五月に類い稀な社会科学の辞典を完結した（新明も同辞典に「社会学」のほかの項目を執筆している）。

東北帝大では誰一人として教官は大学を追われなかった。新明によれば、東北帝大では小川正孝総長から事前に誰に対しても何の示唆も与えられることなく、何時とはなしにこの問題は立ち消えになった。文部省は、好ましからぬ教官として新明を含めて数名に辞職を要請したであろう。ところが、小川総長は独自の信念から文部省の意向に従わなかった。

文部省は、帝大や高等専門学校の好ましからぬ「左傾教授」にたいして執拗に「いやがらせ」を行い、治安維持法のもとで出来れば、そうした教官を学外に追い払おうとした。新明は文部省の「左傾教授」のリストに記載されていたであろう。新明はすでに前期新人会加盟以来、「思想要注意人物」として「視察」され、特高からたえず尾行され、私服警官からも内偵されていた。

東北帝大法文学部教授会は文部省に新明のドイツの在外研究員の辞令を申請したが、文部省は「いやがらせ」をしてなかなか発令しなかった。文部省が発令したのは、次年度の在外研究の発令の直前の新学期開講の四月だった。大学はカリキュラムを変更し、急遽休講にした。そのため、最も迷惑したのは新明の社会学特殊講義の受講を予定した学生たちであろう。治安維持法の下で文部省の教育行政は、学生の受講計画には一切配慮せず、もっぱら国家権力を背景にして、いわゆる「赤化学生」や「左傾教授」をたえず「監視」し、公教育の攪乱者として終始した。

五　新明助教授の旺盛な著作活動

新明はあわただしく留学先のドイツに向け、仙台を出発し、しばらく東京に滞在し、東京帝大法学部研究室の一隅で『群集社会学』の校正をした。家族や親族とともに桜の咲く京都の円山公園や知恩院に遊び、神戸港から多くの旧知に見送られ、アメリカ丸に乗船した。船室で『群集社会学』の校正と「跋文によせて」を書き、停泊

した門司港でかっての教え子の大道安次郎に託して、ロゴス書院に郵送を依頼した。

新明はドイツ留学中に『群集社会学』（一九二九年五月、ロゴス書院）のほかに、『社会学』（一九二六年六月、岩波書店。のちに朝日新聞社から『社会学』を出版し、それと区別するために、本書を岩波版『社会学』と称する）を出版した。

岩波版『社会学』は三木清らが編集した「続哲学叢書」の一書として執筆した。新明はドイツ在外研究の帰国後に執筆したいと申し出たが、三木から急いで出版したいと言われ、「社会学論」（序論）に次ぎ、「社会学内容論」と「社会現象の理論」（本論）を構成とする岩波版『社会学』をわずか三か月間で完稿した。新明はさらに門司港から乗船して大連へ行き、満鉄の汽車に乗って中国北部のロシアとの国境の満州里（マンチョウリー）でごく短い「はしがき」を書き上げて、投函した。

新明はその「はしがき」で、「本書は社会学への入門であるが、その内容はたんなる主要問題の概説ではなくて、これを中心としてある組織を構成しようとしたものである。この意味において、本書は、未完成ながら、さらに次の、あるいは全く面目を一新するかもしれない社会学の試みに対して、重要な標識をなすものである」と記述した。このように、新明は未完成な社会学の入門書と自認し、一新するかもしれない社会学の重要な標識であるとして出版し、ドイツの首都ベルリンでの在外研究に大いに期待していることを物語っている。

さらに、新明は、出国以前に総合雑誌『改造』、『中央公論』よりも後発の月刊誌『経済往来』（のちに『日本評論』と改題）に評論やエッセーを盛んに寄稿していた。そのこともあって、新明は『経済往来』編集部からドイツの社会時評の連載を依頼された。二九年一〇月二四日、ニューヨークの株式市場が大暴落し、ブラック・チューズデーに世界恐慌が始まり、ワイマル崩壊期、超右翼の群小政党のナチスが台頭した政治と文化の激動する国際都市ベルリンは、政治評論を連載するには格好の適地だった。

新明はベルリンで数種類の新聞や雑誌を頻繁に購入し、滞在して六か月後に『経済往来』に「欧州通信」の連載を開始し、一年間に一二編を送信した。それはドイツを中心に激動するヨーロッパ諸国の政治的状況を遠い日本の読者に切迫感と臨場感をもって伝えた。それは『経済往来』の洛陽の紙価を高めたことであろう。ドイツから帰国して三編を執筆し、『欧洲の危機』を上梓した（一九三一年、日本評論社）。

しかも、晩年の新明はドイツ留学日記のうち「ケルン大伽藍の空のもとで」、「ベルリン大学内外」を在職する大学の紀要に掲載した。新明の没後、『欧洲の危機』から五編その他を掲載し、『ワイマール・ドイツの回想』

（恒星社厚生閣）をご遺族の家永登氏によって上梓された。同氏の「あとがき」によれば、「ベルリンはなおワイマール文化の真盛り」が新明の絶筆だったという（一九八四年一二月）。

新明は二年間のドイツ滞在中に断続的だが、毎日のように日記をつけていた。ご長女の家永美夜子氏は大学ノートから全文を浄書され、また印刷後に校閲・校正され、『ドイツ留学日記　一九二九年―一九三一年』（一九九七年、新明正道著、山本鎮雄編、時潮社）を上梓した。本書は勉学の傍ら、当時のベルリンの食文化を始め、政治文化、歴史文化、さらに映画・演劇などの大衆文化や前衛芸術にいたるまで関心のおもむくままに記録されている。

ドイツ文学者の平井正は本書を「鋭く透徹した観察眼未だ消え去ろうとしない過去を今に伝える」と書評した（『週刊　読書人』一九九七年六月）。また加藤哲郎著『ワイマール期ベルリンの日本人―洋行知識人の反帝ネットワーク』の第四章「新明正道と杉本栄一の『第三の道』」で紹介され、批判的に検討された（二〇〇八年一〇月、岩波書店）。『ドイツ留学日記』は、『欧洲の危機』とともに表裏一体の貴重な記録であるが、ワイマール崩壊期のドイツの楽屋裏の日常的生活を伝えている。

注

一　新明正道博士のご長女の家永美夜子氏のご好意で拝借した未発表の草稿「自叙伝」を新明社会学研究会『新明社会学研究』八・九号（二〇〇三年・四年）に掲載した。本稿ではその「自叙伝」の一部を引証した。

二　最近、通常国会で「共謀罪」法案が上程されるという。この法案を危惧する法曹関係者は「平成の治安維持法」と批判している。国体の変革と私有財産制度の否認を掲げた治安維持法が成立した当時も「一般人は無関係だ」と宣伝していたが、二八年二月の最初の普通選挙後に本格的に適用された「三・一五事件」では共産党員・そのシンパのほか、それとみなされて約一六〇〇人が全国的に一斉に検挙された。その後、二度の改悪や拡大解釈によって、戦後占領軍の指令で廃止されるまで、六〇、〇〇〇人以上が検挙されたように、「一般人は無関係」ではなかった。

（擱筆　二〇一七年一月二五日）

「農ある暮らし～私の日常～」(3)

古屋富雄



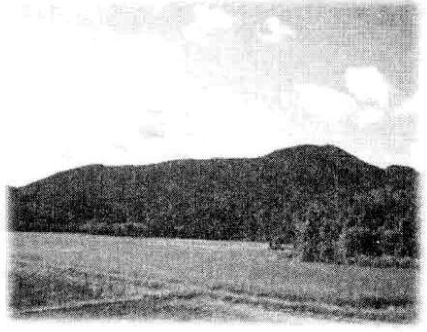
不便な暮らし

あえて不便な暮らしをしています
一から十、誰の助けも借りません
不便な暮らしをしています
食べるものもから着るものすべて作ります

毎日忙しく　毎日楽しい
やることがいっぱいある
妻の笑顔が柔らかい
そんな暮らしをしています

こうした不便な暮らしが良いようです
この一年、風邪もひかずに過ごしました
不便な暮らしが良いようです
たくさん働きぐっすり眠り目覚めます

毎日忙しく　毎日楽しい
やることがいっぱいある
妻の笑顔が柔らかい
そんな暮らしをしています
不便な暮らしのお陰です



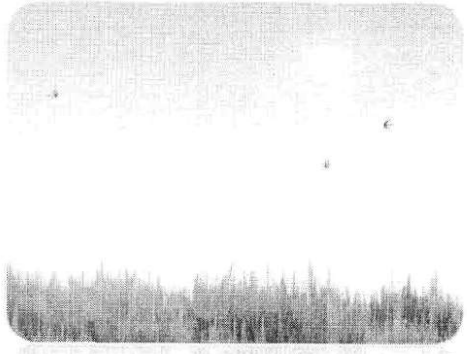
あなた(貴社)に託すもの

先祖代々の田や畑を、あなたに託したいと思います
本当は息子か娘に、跡を継いで欲しかったのですが
村に帰って来る、気持ちはないと言っています

爺さんの植えた蜜柑の木は、今年もたわわに実をつけました
稲の穂も黄金に色づき、実りの秋が近づきましたが
収穫作業は、今年も妻と二人です

これから何年今のまま、元気にやっていけるか不安です
友が一人また一人、鬼籍に入ってしまいましたが
あなたが町から　移り住んでくれました

あなたの家から幸せそうな、皆の笑う声が聞こえます
この先も子供や孫と、暮らせる当てがないのなら
田んぼや畑は
あなたにすべて託します
あなたに夢を託します
村の未来を託します



天気予報

いつもテレビで天気予報を見ています
明日は雨だというのに月が出ています
雨なら妻と二人で町へ出かけます
その日一日、畑の仕事は休みです

予報がたまに外れる時もありますね
今日は朝から日が差す良い天気です
草刈り作業があと一息で終わります
妻に「夕食、外で取ろう」と言いました

農家の仕事は天気に左右されますよ
晴れが続けば仕事のはかが進みます
雨も程よく降ってくれると良いですね
妻の笑顔、町で見るのも良いですね



耕作放棄地

稲の作付けが制限されて
故郷の景色が変わり始めました
綺麗に揃った早苗の里も　今は昔の原風景
田んぼは米を作る所で
米は主食と思っていました
黄金色した実りの里も　今は昔の原風景

あー　時代が変わったのか
あー　暮らしが変わったのか
田んぼに何も作らない　農家が増えてきています

みかんの値段が下がり続けて
故郷の景色が変わり始めました
笑顔で溢れたみかんの畑も　今は昔の理想郷
野菜の値段も上がることなく
後を継ぐ子も居なくなりました
一家総出の野良の仕事も　今は昔の理想郷

あー　これで良いのだろうか
あー　これからどうしようか
畑に何も作らない　農家が増えてきています



世界の国旗から学ぶ（第三回）

米村典紘

先日（2月25日）の合評会終了後に、数名の先生方から、

「日本の日の丸は本当にシンプルですっきりしたデザインですね。他の国で日の丸の様なデザインの国旗はあるんですかね」

と尋ねられましたので、書き出しはその説明から始めたいと思います。

日本の「日の丸」と同じデザインの国旗はバングラディシュ人民共和国（旧東パキスタン）の「緑地に赤い円」と、パラオ共和国の「ブルー地に黄色の円」の、二カ国の国旗があります。バングラディシュの赤い円は、日の丸同様「太陽」を意味していますが、同時に独立時に流れた血の色を表しています。緑は豊かな自然と農業の発展、若者の意気を表しているそうです。パラオの黄色の円は、太陽ではなく「満月」を表しています。旗地の色は太平洋の海の色だそうです。パラオの国旗も「日の丸」を参考にしたと云われています。

バングラディシュの国旗デザインには秘話があります。2014年に日本を訪れていたシェイク・ハシナ首相が、父親ムジブル・ラーマン氏（建国の父、初代大統領）から聞いた話として、

「我が国の国旗は日本に魅せられ、日の丸のデザインを取り入れた。農業国であった日本が工業国に発展しようとしている。バングラディシュも将来そうなるべきだ」

と云っていたそうです。そのラーマン氏は1971年のクーデターで、妻、長女ともども暗殺されてしまいましたが、たまたま長男のハシナ氏だけは、ドイツに留学中であったため、難を逃れたそうです。

「日の丸」との違いは、色の違いは勿論ですが、はためく時に太陽の丸が真ん中に見える様に、若干旗竿側に

寄っている事が日本の日の丸と異なる点です。パラオの国旗もバングラディシュと同じ理由で、「円」が左に寄っています。

太陽を赤色でデザインした国としては、日本とバングラディシュ「マラウイ共和国」が横平行縞三色（上から黒：赤：緑）の黒い部分の中央に、「赤い日の出の太陽の半円」を描いた国旗がございます。

いずれにしても、日本と同じデザインの国は、バングラディシュとパラオだけです。

また、学士会館での合評会で、第2回の記述のうち、「文字が無いとしてもアンデス文明は紀元前七千三百年ではなく、北のチセン遺跡から推察しても紀元前五千年位より後ではないか」

との貴重なご意見を頂きました。

人類の歴史は今から700万年前に、二足歩行したホモサピイエンスがアフリカで誕生し、各大陸に「出アフリカ」として移住を始めました。南アメリカの南端には120万年前に到達したとの記述があり、小生の知人、人類の生命を研究している某医学博士から「紀元前七千三百年前がないとは言い切れない」とのご意見もございました。

ヨーロッパ民族の分類で、オーストリア・ハンガリー帝国をスラブ民族と誤記しましたが、1913年当時はオーストリア・ハンガリー帝国として、スラブ諸国を従えていました。ハプスブルグ家は、間違いなくゲルマン民族でありますが、オーストリア帝国は弱体化しつつありました。しかも権力を握っていたドイツ系民族は24%であり、ハンガリーに於けるマジャル人20%と手を組む事で権力を維持しよう考え、オーストリア・ハンガリー帝国が生まれた訳です。中東欧は多民族国家が多く、ハンガリーだけでもマジャール人の国家と云われていますが、スラブ系、ユダヤ系、ラテン系、デユルク系、イラン系、ドイツ系などが複雑に混じっている様です。現在でも、統一か民族独立か等、民族問題は難問続きです。（皆様からの貴重なご意見、ご指導、有難うございました。）

さて前回、現代美術作家「柳幸典（やなぎゆきのり）のザ・ワールド・フラッグ・アンド・ファームの作品を見て、感じた事を述べたいと申し上げました。

柳氏は1959年生まれの現代美術作家。現代美術作家で世界的に著名な人はと云うと、「ジャスパー・ジョーンズ」、「アンデイー・ウォーホール」あたりでしょうか。

日本では代表的作家として、「山口長男」、「草間彌生」、「奈良良知」、「村上隆」が有名です。

柳幸典の名声は、「ザ・ワールド・フラッグ（世界の国旗）」と云う作品をニューヨークで発表し、今までの

「誰も考えなかった作品」、即ち、国旗の形をした透明のプラスチックの薄い箱に色付きの砂粒で世界の国旗を描き、その中に蟻が放されている。そして、各国の箱（国旗）に放たれた蟻が、自由に行き来出来るように、透明のチューブで国旗の箱を結ぶんであります。

幼い頃、「牛乳瓶に砂を詰め、数十匹の蟻を放すと、牛乳瓶の外側から蟻が作る道があちらこちらに見えた」ことを思い出しませんか？

作品は、蟻が他の国旗を侵略した様な道が数多く見られ、崩れてしまった国旗もありました。それが、長い年月を掛けて完成した、彼の作品でした。これをニューヨークの美術館で発表し、議論の的になったのでした。

彼のコンセプトは「ワンダリング・ポジション」（さまよえる視点）にあります。

彼の主張を要約すると、

「生まれながらに人は、人種・国籍・国家・宗教などあらかじめ決まった枠に属し、物の見方や立場が縛られている」

しかし、実際、「人間が作った枠としても、世界は多様性があり、何が正解で何が不正解と云う事はない」と柳氏は云っています。

結果は作家の意思とは関係なく、「決まった枠にとらわれない蟻が、勝手に作り上げた作品であり、その作品を見る人がどの様に思うか・・・・・、それも勝手なのです」と主張している様に思います。

作品には、「大韓民国と北朝鮮」「中国と台湾」「アメリカ合衆国とロシア」「日本と中国と韓国」など、個別に作られた作品もありました。

世界の反響としては「蟻には国境と云う意識はないから、国境、や国旗はナンセンスだと蟻は云っている」とか、「大切な国旗をこの様に扱うとは怪しからん」、「我が国では展示を受け付けない」、「蟻は獰猛な昆虫であり、侵略あるのみ、人間とは違う」、「いやいや、防衛しないと、侵略される」など、様々な意見が出てきたそうです。

第二次世界大戦後、新しい国が次々と誕生し、新たな国旗も生まれて参りました。敗戦国のドイツ、イタリアも新たな国旗に変わりました。しかし、日本は、建国以来一度も変わらず、敗戦後も同じ国旗を使用し続けている、大変珍しい国家なのです。

日本は戦争中、占領地では日の丸を掲げる事を強要していたそうです。特に、中国や韓国で「日の丸」の評判が悪いのはそのせいかもしれません。

余談になりますが、米国が沖縄を占領した時、アメリカ軍は「日の丸」を使用する事は禁じていましたが、「米国の旗を掲げろ」との強制はしなかったそうです。又、占領下の日本本土では日の丸の使用は許可されていました。米国は、国旗について比較的穏やかな国なので

しょうか。ハワイ州の旗が未だカントン部分にユニオンフラッグが入っている事を思いますと・・・、異論もあるでしょうが、「日の丸」が使い続けられるのはよかったですね。

○アフリカの貧しい国々

そろそろ、本題に入りたいと思います。又、今回から最終欄にアフリカ諸国の国旗を白黒で掲載致しましたので、ご参考にして頂ければと思っています。

さて、リオ五輪では、豊かな国が金メダルを独占し、貧しい国家はなかなか・・・と書きました。でもアフリカの国々は貧しい国が多いのに、「陸上長距離分野ではケニア、エチオピア等、メダリストが多い国もあるなあ」と最近感じているところです。

そこで「疑問が生じます。「何故、ケニア、エチオピアも短距離分野も頑張れば・・ジャマイカも長距離で・・もっとメダルが獲れるのではないか?・・・」

私の素朴な疑問を、小生が通っているスポーツクラブの友人（某大手雑誌社の編集長を長年なさっていた方）に話をしたところ、

「アフリカの東海岸の黒人と西海岸の黒人とでは、筋肉の色が違うんですよ。東は赤い筋肉で魚に例えればマグロ、西海岸は白い筋肉で、魚はヒラメ」

「西海岸は奴隷としてアメリカ大陸に移住しているのは、サッカー男子で銅メダルを一つ獲得しています。）

とは言いながら、リオ五輪で金メダルの獲得が少なかった大陸は、やはり「アフリカ大陸」でした。５４カ国もありながら、金メダル獲得は4か国、ケニア、エチオピア、南アフリカ連邦、コートジボアールだけでした。ケニア、エチオピア、南アフリカ連邦は全て陸上中長距離の種目によるもので、西海岸のコートジボアールはコテンドーによる金メダルでした。やはり、筋肉説は正しいのかもしれません。

又、数多くの日本人は、アフリカ大陸の国々について、新興国が多い為、うろ覚えだろうと思います。（実は小生もそうでしたから）

そこで、世界で最も貧しい国、国民一人当たりのＧＤＰが低い国ワーストテン（２０１３年度）の国をご紹介いたします。

まず、①ソマリア（１３３ドル）②ブルンジ（２５１ドル）③マラウイ（３１５ドル）④中央アフリカ（３４３ドル）⑤ニジェール（４１５ドル）⑥リベリア（４５３ドル）⑦マダガスカル（４６３ドル）⑧コンゴ民主共和国（４８４ドル）⑨ガンビア（４８８ドル）⑩エチオピア（４８９ドル）と、それが全てアフリカの国々なのです。

で、天性の瞬発力と技術が結合して、短距離などで優秀な選手が出ているのです。東海岸側はマグロの筋肉なので、長距離向きで、走っている事が当たり前なのです」

更に、アフリカ諸国が何故貧しいのかについて話が続きました。

「エジプトのナイル川デルタ地区を除いて、北には世界最大のサハラ砂漠があり、高原地区には人間が飼う事の出来ない猛獣が多い事で、人間が本来出来る作物を育てる事、動物を飼育する事が出来なかった為、食糧問題が常に発生し、部族間の争いが絶えない事が大きな要因の一つに成っているのです」

とお話を頂きました。

ちなみに、ナイジェリア連邦共和国（アフリカに於ける五分の一近くの人口1億6千5百万人を抱える国）は主要部族として、ハウサ族、ヨルバ族、イボ族、フラニ族など、２５０以上の部族で構成されている多民族国家の代表国家です。その為、１９９９年迄は内戦続きで疲弊してしまったのです。

現在の国旗は英国から独立した１９６０年に制定され、縦柄で、緑：白：緑のシンプルな国旗で、緑は森林資源と農地、白は平和と統一を意味するものだそうです。しかしナイジェリアは、世界有数の原油生産国でもあり、人口も多く、国土も広い国なので、安定すれば瞬発力で大発展するのではないでしょうか。（リオ五輪で

【参考：因みに、国民一人当たりの所得が多い国としては①モナコ（173,377ドル）リヒテンシュタイン（152,933ドル）③ルクセンブルグ（113,373ドル）④ノルウウェー（103,586ドル）となります。ヨーロッパの豊かな国対アフリカの貧しい国との比較では、年間一千万円対、年間5万円にも満たない国と云う事になります。これこそが、「南北問題」なのです。】

ソマリア連邦共和国：（1,081万人：133ドル）

アフリカの東、アラビア海と紅海の入り口（アデン湾）に位置しています。国土の大半は砂漠気候で、内陸部は一年中、３０度を超す極暑。北部はイギリスが、南部はイタリアが、そしてフランス、エチオピア、ケニアなどが入乱れ、部族間の争いが絶えませんでしたが、１９６０年に国連の調停により、独立しました。その為、国旗は国連旗の色ブルーを基調とし、中央に白い五稜星を白抜きで描いた国旗となっています。最も貧しい国の経済情勢は、国連の介入、米国の介入でも収まる事な

く、未だに部族間の内戦が続いている国なのです。「ソマリアの海賊」は困ったものですが、日本の自衛隊が日本船の航行支援に携わった事で有名になりました。在留日本人も、リオ五輪のメダルも勿論ゼロです。

ブルンジ共和国（1,048万人：251ドル）

北部をルワンダ、南東側をタンザニア、西側をコンゴ民主共和国に面し、タンガニーカ湖の北東部に位置する高原国です。国旗はキリスト教国を表す白い×十字と、その真ん中を白い丸で、平和を表しています。中央の白円部分に赤い六稜星を三つ（フツ族、トワ族、ツチ族の主要三部族）星が協力し「団結：進歩：努力」をする事を国旗に書いているのです。色は白の×十字の上下は赤色（独立闘争と革命）左右を緑色（希望と発展）の三色旗となっています。

気候はアフリカ大陸のなかでは、標高が800～1000メートルと高い事から、熱帯雨林から山岳気候まで、多様。コーヒー、茶、などを生産する農業国。在留日本人は10名程度。リオ五輪では、陸上中距離女子800メートルで、銀メタル一つ獲得しています。

マラウイ共和国（1,683万人：315ドル）

マラウイ共和国はアフリカ大陸の南内陸部で、マラウイ湖の西側を、囲む様に位置しています。東側はモザンビークで、西側は、銅、コバルト産出国のザンビア共和国です。主な産業は、たばこ、茶、コーヒー、綿花、砂糖などの農業物。内陸性気候の為、風強く乾燥し、更に朝夕の寒暖差が激しい国です。前述の2カ国は在日大使館を置いていませんが、マラウイには海外青年協力隊も派遣している事もあり、大使館を設置しています。

国旗は本稿の始めに「赤い太陽」でご紹介致しました、黒：赤：緑のボーダー三色旗で、上部の黒の部分から、夜明けを示す31本の赤い線光を放す、赤い太陽が昇っている、国旗となっています。

【有名は市民権活動家のマーカス・ガービーが考案した旗は、赤：黒：緑のボーダーに、中央の黒の部分に昇りかけている太陽が描かれているので、マラウイ国旗は良く似ていると云われますが、どこかの五輪シンボルマークの様に問題にはなっていません】

中央アフリカ共和国（480万人：343ドル）

中央アフリカの国旗は、国旗の中央に赤いベルトを縦に描いた図柄はこの国だけなので、容易に中央アフリカ共和国の国旗だと分かります。更に、旧フランス領であった為、国旗の色は、フランスの三色旗（青：白：赤）

と、汎アフリカ三色（赤：黄：緑）を取り入れ、横柄で、上から青：白：緑：黄色と4分割し、中央縦に赤いベルトを、旗竿側上部に独立と進歩を象徴する五稜星を配置した、モダンな国旗と成っています。

しかしながら、1960年独立後、ボカサ独裁体制下を確立すると、20世紀最後の帝国を立ち上げましたが、度重なるクーデターと乱費により、国力が低下し、1979年のクーデターにより帝国は崩壊して、中央アフリカ共和国となりました。綿花、林業に加えダイヤモンド等の鉱物産出国でありながら、最貧国の一つ（人口の90%は一日2ドル以下の生活）で、失敗国家とも云われています。在留日本人4名、リオ五輪メダルゼロ。

ニジェール共和国（1,990万人：415ドル）

国境は、北はアルジェリア、南はナイジェリア、東側をチャド、西側はマリに囲まれた西アフリカサハラ砂漠の共和制国家。1960年フランスから共和国として独立しました。

国旗はインドの国旗と、色も（オレンジ：白：緑）、形も（横柄水平）同じですが、異なるのは縦横の長さ（インドは2：3に対して6：7）と中央の○部分がインドは仏教の法輪に対して、ニジェールはオレンジの太陽を描いた点の違いだけです。

意味する事は当然異なり、オレンジは砂漠の色、白は国内を流れるニジェール川の色、緑は南部の草原の色で、中央の円はサハラ砂漠の太陽を意味しているそうです。

1999年には国家経済が事実上の破産状態となりましたが、IMFの貧困国救済策により、明るい兆しも出てきています。ウラン鉱石の埋蔵量は世界第三位。在留日本人は11名、リオ五輪ではテコンドーで銀メタル一つ獲得しています。

【参考】アフリカ大陸には世界最大を誇るナイル川86,695kmがありますが、その他にも4,000km級の大河が二つございます。コンゴ川4,695kmと、ニジェール川4,184kmです。この二つの大河に由来する興味ある共通点、がある事をご存じでしょうか。即ち、コンゴ共和国とコンゴ民主共和国。ニジェール（フランス語読み）とナイジェリア（英語読み）と川の名前の二つの国が存在すると云う事でした。

リベリア共和国（328万人453ドル）

リベリアの国旗が米国の星条旗に良く似ている訳は、以前にも「米国の植民地を与えた事による」と、報告させていただきました。実はその裏話があったのです。第16第大統領のリンカーンのゲティスバーグでの演説は

あまりにも有名で、「全ての人は平等につくられている」として、奴隷制度廃止をとなえた偉人です。その過程で、「逃亡奴隷法（主人の元に返す）」が邪魔になり、多くの黒人南軍捕虜の処理に頭を痛めていました。

リンカーンは、奴隷制度廃止を宣言しましたが、解放された黒人達を南に戻す事に懸念していました。

アフリカのリベリアに再入植させる事で、黒人捕虜問題を「いっきに解決出来る」と思い、植民地であったアフリカ大陸の一部を分割する事にしたのです。

しかしながら、１８４７年に独立はしたものの、アフリカ特有の内戦、クーデターなどの連続でした。

やっと２００３年に停戦合意し、大統領選挙で米国が推す、エレン・ジョンソン・サーリーフ女史が大統領となり、落ち着いてまいりました。（２０１１年にサーリーフ大統領は「平和と女性の地位向上に貢献した」としてノーベル平和賞を受賞した事は有名な話です）

リベリアの経済は、１４年もの長い内戦により、インフラ面を含め疲弊しましたが、鉄鉱石、パームオイル、ゴム産業などの成長分野もあり、日本も２００７年に二国間経済協力を再開し、支援を続けています。

マダガスカル共和国（５９万人４６３ドル）

マダガスカルは、アフリカ東海岸から４００ｋｍの所にある島国です。

そのマダガスカル島が、皆さんが思っているより大きな島なのです。広さは594,200㎢で、日本の１・６倍の面積を収めている国家なのです。

【参考：島面積の世界ランキング】

① グリーンランド島（デンマーク領）
② ニューギニア島（インドネシアとパプアニューギニア）
③ ボルネオ島（インドネシアとマレーシアとブルネイ）
④ マダガスカル島（マダガスカル）
⑤ バフィン島（カナダ）・・

尚：日本の本州は七番目。

この島の９０％の動植物が「バオバブの木やキツネザル、カメレオン」など固有種である事は有名な話です。

イメージ的には、最貧国のイメージはありませんが、２００９年の政変を機に経済は低迷していったのです。

産業はバニラやエビなどの農水産が主体なので、２０１３年度は一人当たりのＧＤＰが４６３ドルでした。

しかし、マダガスカルも天然資源に恵まれて、サファイアの鉱脈や、世界最大の埋蔵量を持つチタン鉱脈などがみつかり、巨大な重質油鉱床の開発も期待されています。

国旗は旗竿側、縦に長方形で白、横ボーダーで上から赤：緑の三色旗です。赤と白はマレー系民族のメリナ族を意味する色。（インドネシア国旗と同じ色）緑は東海岸に定住しているベツイミサラカ族の色で、主権、純潔、希望を表しています。尚、アフリカ諸国の国旗で、旗竿側が縦長方形、外側横二色長方形の国旗は、マダガスカル、ギニアビザウ、ベナンの三カ国だけです。日本とは政治家同士の交流もあり、対日感情も良好です。

コンゴ民主共和国（6,936万人４８４ドル）

アフリカにはコンゴと呼ばれる国が二つ在ります。コンゴ民主共和国と、コンゴ共和国です。コンゴ民主共和国は、１９９７年迄はザイールと呼ばれていました。コンゴ川の東岸に広大なアフリカ第二位234万㎢の国土を持ち（日本の約6倍）、人口も6，９３６万人の大きな国家です。

コンゴ川の西岸にはコンゴ共和国（３４万㎢日本の０・９倍）があり、人口は４５６万人の国家があります。

コンゴ民主共和国は、ダイヤモンドなどの豊富な天然資源に恵まれていましたが、内戦による混乱により国名、国旗とも、たびたび変化してまいりました。

現在の国旗は以前（１９６３年～１９７１年迄）使用していた国旗を復活、平和と希望を意味するブルーを基調色とし、斜めに黄色で縁取りした赤い帯を右上部から左下部に（黄色は豊かな天然資源を、赤は国家統一で流された民衆の血）、そして左側上部に描かれている黄色の五稜星は民族と国家の統一を示すものとして描かれています。内戦の為の疲弊と人口が多い為、一人当たりのＧＤＰでは、最貧国となっています。在留日本人７２名、リオ五輪ゼロ。

尚、アフリカ諸国の国旗の中で、斜めに帯が入っている国旗は、コンゴの二カ国とナミビア、タンザニア、の４か国だけです。

ガンビア共和国（１５２万人：４８８ドル）

ガンビア共和国はアフリカの西海岸に位置し、東西に貫くガンビア川の領域の細長い国家。元イギリス連邦加盟国であり、１９６５年の独立と共に、国旗も制定されました。ガンビア川の河口を除くと、すべてセネガル共和国（旧フランス領）に囲まれています。即ち国旗は、横柄中央に、青色でガンビア川を、青を囲む様に二本の白い帯は、ガンビア川の両岸を走る幹線道路を（国民の平和と団結を象徴するとも云われる）、上部の赤は太陽を（友好）、下部の緑は豊かな農業資源（希望）を意味したもので、政治色を抑え、ガンビアの自然を表した国

旗となっています。

しかしながらこの国も、政治は混迷し、２０１７年の大統領選挙で長期独裁政治を敷いていたヤヒヤ・ジュメ大統領が、アダマ・バウロに敗れても辞任を拒否し、居座り続けていましたが、今年（２０１７年1月２３日）多額の政府資金を持ち逃げし、退陣をしたそうです。在留日本人6名、リオ五輪ゼロ。

エチオピア連邦民主共和国（７７４３万人４８９ドル）

同国はリオ五輪で、金メダルを1つ、銀2、銅5を獲得しています。その為、第二回の１１５ページで紹介済みではありますが、改めて最貧国としてご紹介致します。

アフリカ大陸の東に位置し、日本人には東京五輪に於ける、マラソン金メタリスト「裸足のアベベ選手」の国家として馴染みがあります。（お年の人だけですかね）

首都アディスアベバは、海抜２３２４メートルにあり、国土は日本の三倍広く、民族も８０近くからなる多民族国家なのです。

歴史は古く紀元前1世紀に遡り、アフリカ大陸で植民地化を拒み、独立を保ち続けた唯一の国家です。

しかし、そのエチオピアがまさかの最貧国である理由は、農作には向かない国土に8千万人近くの人口を抱え、慢性的な食糧不足とインフレが、最大の理由と云われています。援助国のベストスリーには、米国、英国、そして我が国ですが、最近は中国が接近しつつあります

永年続いた王政もハイレセラシエ1世の封建的絶対王政に、国民の怒りが爆発、１９７４年の革命により廃止されました。

１９９１年にエチオピア人民民主戦線がアディスアベバに侵入し、１９９５年にエチオピア連邦民主共和国を樹立しています。

１９９６年2月には、以前の横柄三色（緑：黄色：赤）の国旗をベースとし、国旗の中央に、青地の円にソロモンの封印の紋章と云われる、黄色で五つの光線を放つ星の形を描いたものを加えました。（星ではなく、厄除けと云われている紋章、モロッコの星の形も同様です。）尚、エチオピア国旗の緑色：黄色：赤色の三色は、二十数か国のアフリカ諸国で使われ、第二次世界大戦以降に独立した、新興国の手本となりました。

【番外】南スーダン共和国

「南スーダン」という国家が最近、話題となっています。南スーダンは、２０１１年にアフリカ大陸５４番目の独立国としてスーダンから独立致しました。スーダン

がアラブ系のイスラム教徒が多いのですが、南スーダンはアフリカ系のキリスト教徒が多い為です。

日本の自衛隊が国連平和維持活動に加わり、道路建設などの復興支援をしていましたが、今年5月には撤退すると云われています。一人当たりのＧＤＰは７９０ドルとなっていますので、エチオピアより、高いのですが、それは、農業に適した大地を持ち、しかもアフリカ屈指の産油国であるため、ＧＤＰそのものは高くなっています。

しかしながら、国家予算の６０％が軍事費に使われ、成長率も△６％と低く、その上内戦が長期間続いている状況です。恐らく国民の生活は数字以上に最悪だと思い、番外と致しました。

国旗はスーダンの国旗と形は同一で、類似しています。即ちスーダンの国旗は、横水平柄三色で、赤：白：黒に、旗竿側から緑の三角旗を入れた4色旗です。

南スーダン国旗は、横水平柄三色の中央の赤に、白いボーダーを入れ、上部に黒、下部を緑色とし、旗竿からブルーの三角旗に黄色い五稜星を描いた、六色旗と成っています。黒は南スーダン人、白は平和、赤は革命の血の色、緑は国土、青はナイルの水、黄色はベツレヘムのキリストを象徴を意味した国旗となっています。

以上が、最貧国１０か国＋ワン（全てアフリカの国）の、国と、国旗を、ご紹介致してまいりました。リオ五輪の金メタル獲得国4か国（ケニア：南アフリカ：コートジボアール：エチオピア）を合わせても、アフリカの未紹介国はまだまだ残っています。次回も引き続き、アフリカ諸国の紹介をして行きたいと思っています。

（つづく）

性と化粧の物語（八）

鈴木守

第二話　性と歯の化粧（三）

前号から『性と歯の化粧』の第三節に『お歯黒風俗と性』を取り上げ、この風俗の歴史的変遷について、現代から遡って、前号では近世・江戸時代のお歯黒風俗の概要を紹介しました。今回は、中世から古代・平安時代まで遡上する心算です。

第三節　お歯黒風俗と性（二）

三項　中世のお歯黒風俗

我が国の中世は、源頼朝が鎌倉に幕府を構えた一一九二年から徳川家康が江戸に開府した一六〇三年までと設定されています。この間、源氏と北條氏が実権を握っていた鎌倉時代。次いで足利尊氏が京都室町に幕府を開いた一三三八年から、一五七三年に織田信長に滅された約二五〇年間の室町時代が続き、その後、信長と豊臣秀吉が実権を握っていた安土桃山時代（織豊時代）を経て江戸時代に入ります。

（1）安土桃山時代

この時代に著作された書には化粧、ましてやお歯黒に関する記載を見る事が出来ませんでしたが、江戸時代の二・三の書に、お歯黒に関する記事がありました。

江戸時代直前一六〇〇年に天下分け目の合戦、関ヶ原の戦いがありました。この戦いに参じた「廿四五歳の武者が半化粧に**鉄漿**、爪紅を施していた」と国枝清軒著の『武辺噺聞書、一六八〇』に記されていました。又、喜多村信節は『嬉遊笑覧、一八三〇』に「信長公呢懇の侍

が歯に**鉄漿**を付けていた」と書止め、それに加えて、加藤宗直は『筵響録、一七六七』に「昔は公武（公家と武家）ともに歯を染めていたが、いつ頃よりか染めないようになった。信長公の時節より国家多事になった為であろうか」と考察していました。

この当時、風潮として武家の**白歯化**が進んでいたように窺われ、前出の嬉遊笑覧や『陶犬新書、おほ家かね延、一八三二』には、三浦茂信の『北条五代期、一六四一』を引用して「後北条家では、〝忠臣二君に仕えず〟と称して、黒色は不変の為、侍たる人は老若を問わず**歯を黒く染めた**」と記していました。

話は変りますが、我々現代人も「お歯黒首は手柄仕事だったので、勤務評定上有利だった事を聞き知っていたと思いますが、女性が著わし戦記物・山田去暦女の『おあん物語・一七一一～三〇』に「昔は**お歯黒首**は能き人とて賞翫した（愛でて弄ぶ）。それ故、白歯の首にはお歯黒を付けて給われと頼まれておじゃった」と主人公おあんはそのように語っていました。

（2）室町時代

お歯黒に関連する事柄を取り扱った室町時代の著書としては、類聚雑要抄、婿入記並びに健内記がありました。

『類聚雑要抄』は著者、成立年とも不詳ですが、藤原時代における公家の室内装束や饗宴の献立、調度等の記録を取り上げて図解した書ですが、お歯黒関連の用具としては、**歯黒女盤**、**歯黒女壺**と**歯黒女筆**等が記載されていました。歯黒女盤は歯染めの時、滴たり落ちる涎や鉄漿水の受け皿に使用し、歯黒壺は鉄漿水保存用の容器、歯黒女筆は歯染め用の筆です。

伊勢貞陸の書と云われている成立年不詳の『婿入記』には「**おはぐろ箱**とは、是も鉄漿の類ひの入物なり。手箱の如くしたるもの也」とお歯黒箱を説明していました。

万里小路時房の日記『健内記、一四三二』には「予女九歳祝事。**歯黒美**。三筆予付。眉毛ヌク事。母是ヲヌク」と書き留めていました。

伊勢貞丈の書『貞丈雑記、一七八四』は江戸時代に書かれた書ですが、「〝忠臣二君に仕えず〟。黒色変ぜざる故、**鉄漿とす**」と云って歯を染めた後北条家の風習について「始祖、北条早雲（一四三二～一五一九）は元は京の人なる故、東国に来ても京の風を改めず、**歯を黒く染められし**故、其の家中の侍皆、**鉄漿付けし也**」と後北条家の黒歯風習の由来を開陳していました。

（3）鎌倉時代

鎌倉時代は武家政治草創の時代で、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた時から、北条高時が滅亡した一三三三年まで

の約百五十年間の時代の呼称です。

この時代にお歯黒に関連した情報を記載した書としては源平盛衰記、平家物語、とりかへばや物語及び明月記が知られていますが、前二者は内容が平安時代になります故、室町時代に著作された義経記とともに平安時代の項で扱う事にします。

『とりかへばや物語、著者・成立年不詳』では「男装の麗人を口説き落した中納言は嬉しさのままに、頭洗はせなどして、髪もかき垂れなどして見れば、尼のほどにふさふさとかかりたり。眉抜き、**鉄漿付け**など、女びさせたれば…」と叙述していましたので、当時の公家社会の女性は眉を抜き、歯を染めていた事が窺われます。

又、藤原定家の日記、『明日記』には二箇所ばかりお歯黒の記述がありました。一つは「建仁三年（一二〇三年）十二月十日。女房手箱物具等な炭、櫛十束、蒔絵鏡島、同白物筥、**歯黒筥**已下厳粧具等…」と記してありました。他は嘉禄二年（一二二六年）七月廿九日の日記には「成実今日直衣始、直衣色甚濃、**付鉄**作眉」と定家の息・成実の直衣始の儀に鉄漿を付けた事がメモされ、鎌倉時代初期の頃には、直衣を始めて装着する時、歯も初めて染める様子が書き残してありました。

（4）中世黒歯風習の総括

中世黒歯風俗の歴史を遡りますと、江戸時代のように庶民階級のお歯黒姿は影を潜めていましたが、公武両層男女の**鉄漿付け**並びに**お歯黒用具**の資料が認められましたので、中世社会のお歯黒風俗を慮る事にします。

①男性黒歯風習：　江戸時代武家社会には黒歯の形跡を見る事が出来ませんでしたが、江戸時代以前には、関ヶ原の戦いに**鉄漿**を付け爪紅を施した武者が登場した事が知られており、嬉遊笑覧には信長昵懇の侍が**歯を染めていた**事を紹介しています。又、筵響録によりますと、昔は公武とも歯を染めていましたが、信長公の頃から武家の白歯が増え、織豊時代には江戸時代に向けて、武家の黒歯が見られなくなって来ました。従って、武家黒歯風習の残映が関ヶ原に写し出されたように思われます。所が、武家の**白歯化**が進む中で、後北条の侍達は〃黒は他の色に変る事がない為、忠臣二君に仕えず〃を建前に歯を染めていました。この後北条の伝統は家祖・早雲の出自が京であり、彼が京風の化粧を東国に持ち込んだ為、家臣達が**歯染めの風習**を受け継いだと貞丈雑記に記されています。従って、武家の黒歯風習は早雲の時代、室町中期以前まで溯行する事が確められました。

武家の鉄漿付けとは別に、公家の歯染めはよく知られていますが、それを示す資料は乏しく、鎌倉時代初期に至って、藤原定家の明月記の中で始めて、**付鉄**の文字に触れる事が出来ました。付鉄は鉄漿付けの意で、定家の

息・成実が直衣始めの際に鉄漿を施した事が記されていました。従って、鎌倉初期の頃には、成人表示を目的に歯を染める事が仕来りなっていた事が窺われます。

②女性のお歯黒習俗：　中世女性のお歯黒については、建内記に娘九歳の祝い事に歯を染めた事が記されていました。祝い事は恐らく成人の祝いであろうと推察しました。

成女表示とは別に、鎌倉時代の書とりかへばや物語には、男装の麗人を口説き落とした中納言は彼女の頭を洗わせ、髪を梳かせ、お歯黒をつけて女らしくさせると…」と記されていました。

室町時代の類聚雑要抄、姫入記に歯黒女盤、歯黒女壺、歯黒女等と歯黒箱の名が認められ、鎌倉時代初期の明月記には定家夫人が使用した化粧用具整理箱の一つに歯黒筥がありました。従って、女性のお歯黒習俗も公家階級の黒歯習慣と同様、鎌倉時代初期の頃まで辿る事が出来ました。

四項、古代のお歯黒風俗

古代とは、一般的に原始時代の後を受けて、中世に至る時代を指しており、我が国では、大和、奈良、平安の各時代に当ると辞書は説いていますが、ここでは、奈良時代以前を上古、若しくは上代とし、平安時代、即、中古・古代として話を進めます。

平安時代は文化史年表で見ますと、奈良時代の天平文化期の後を継いで、弘仁・貞観文化期・藤原文化期、院政文化期と連なり、これらの期は、ほぼ平安前・中・後期に相当しています。従ってお歯黒風習の資料を、この三期に分けて探す事にします。

（1）平安後期・院政文化期

院政文化期は、白河天皇が上皇となって院政を始められた一〇八六年から始まりますが、院政文化期も末の頃になりますと、源平確執の時代となり、中世に執筆された戦記文学には源平の諸将の歯染めが記されていました。

『義経記、著者不詳・一四〇八頃』には、鏡の宿、吉次が宿に強盗が入る条に「南都山門に聞えたる児鞍馬を出で給へる事なれば、きわめて色白く、**鉄漿黒**に眉細く作りて…」と記され、又、義経吉野山を落ち給ふ条には、「若大衆の鉄漿黒なるが、腹巻に袖付けて…」と義経のお歯黒姿を描写していました。

源平盛衰記と平家物語には、敦盛最後と忠度最後が著わされていました。『平家物語、著者・成立年不詳』の記述を借用しますと、敦盛最後の場面（一一八四）は「とって押えて頚をかかんと甲を押し上げて見れば、年

一六七なるが、薄化粧して**鉄漿黒也**」とあり、又、忠度最後（一一八五）の段には「抑、いかなる人で在まし候ぞ、名乗らせ給へと申しければ、是は味方ぞとて、振り仰ぎ給へる内甲より見入れば、**鉄漿黒也**。あっぱれ味方には**鉄漿付け**たる人はない物を。平家の公達でおわすにこそと思ひ、押し並べてむずと組む」と述べていました。

『源平盛衰記』著者・成立年不詳』には、「流罪に申し宥めて伊豆国へ下し候ひぬ。其時十三と承りき（一一六〇）、**かね付け**たる小男の、生絹の直垂に小袴着て侍りしを…」と源頼朝の歯染めを書き留めてありました。

武家の歯染めとは別に、公家、特に殿上人のお歯黒が江戸時代の書に数多く記されていました。これらの書は男性黒歯の発祥に関する叙述が多く、男性黒歯の発祥を鳥羽院の時節とする説を始め、後白河院・或は後鳥羽院の頃を主張する説が掲載されていました。

私の目に止まった、これらの説を羅列しますと、鳥羽院説を主張する書が最も多く見られ、『文会雑記』、湯浅常山、一七四九～五三』、『茗和、五井菊洲、成立年不詳』、『筵響録、前出』、『南窓筆記、加藤美樹、一七七六～八〇』、『安西随筆、伊勢貞丈、一七一七～八四』、『貞丈雑記、前出』、『玉勝間、本居宣長、一七九四～一八一二』、『嬉遊笑覧、前出』、『陶犬新書、前出』、『海録、山崎美成、一八二〇～三七』の10点。

後白河院説は『雍州府志、黒川道祐、一六八四』のみ。後鳥羽院説としては『安西随筆、前出』、『閑田耕筆、伴蒿蹊、一八〇二』及び『胆大小心録、徳田秋成、一七九五』の3点がありました。

以上の文字資料とは別に、『徳川美術館名品集・絵巻、一九九三』に収載されている『天皇摂関御影』を紹介します。この絵巻には奇しくも鳥羽院から後伏見天皇に至る17人の帝と関白藤原忠道から関白近衛兼常までの11人の関白或は摂政の方々の姿が描かれています。これらの画像を具さに観察しますと、心持口を開いた後鳥羽院を初め、摂政九条教実と関白九条兼常の口中は黒く、**お歯黒**を施しているかのように窺われました。この点については、本誌前号で紹介した江戸の小町娘の口中は白く、若内儀は黒くお歯黒を施しているように観察されました。従って、天皇摂関御影の黒い口中は**お歯黒**を象徴しているものと推察されます。斯くして、平安時代後期の殿上人の**黒歯風習**は文字資料だけでなく、画像でも実証する事が出来ました。

その外に文字資料としては、『伊呂波字類抄、橘忠兼、一一四四～七』に「**黒歯ハクロメ**」が紹介され、一二世紀末の絵画『病草子』には、大きな口を広げて**歯を彩って**いる婦人と、口を押えて笑いを堪えている娘さん二人が描かれていましたので、平安後期・院政文化期の女性も**歯染め**していた事が確認されました。

（2）平安中期・藤原文化期

藤原文化期を遡上しますと、最初に『栄花物語、著者・成立年不詳』に出会いました。この書には「**歯黒黒**らかに紅赤の厳粧ぜさせて…」と云う一文がありました。

次に、著者不明で一〇五〇年頃の書『堤中納言物語』の虫めづる姫君の条の一節に「人はすべてつくらふところあるはわろしとて、眉さらに抜き給はず、**歯ぐろめ**さらにうるさし、きたなしとてつけ給はず。いと白らかに笑みつつ、この虫どもを朝夕に愛しみ給ふ」とあり、この当時は既に眉毛を抜いて眉作りし、歯を染める風習が定着している事を示唆していました。尚、〝いと白らかに〟は〝白い歯を露にして〟の意味です。

紫式部本人もお歯黒をしていました。『紫式部日記、一〇〇八』に「つごもりの夜、追儺はいと疾くはてぬれば、**鉄漿つけ**などはかなきつくろいどもすとて、うちとけゐたるに弁の内侍来て物語して臥し給へり」と式部の私生活の一端を記していました。

又、『源氏物語、一〇〇二』では「古体の祖母君の御名残にて、（紫は）**歯黒め**も、まだしかりける、（源氏が）引きつくろはせ給へれば、眉のけざやかになりたるも、美しう清らかなり」と認めていました。

一方、清少納言は『枕草子、成立年不詳』に見ぐるし き物とか似げなき物を論っていました。例えば、〝有難き物として、舅に褒められる婿、姑に思はるる嫁の君、毛のよく抜くる毛抜、主をそしらぬ従者を挙げています。それでは少納言は、お歯黒をどのように評価していたかと云いますと、「ねぶりて陀羅尼読みたる声（唾りながら呪文を唱える声）」と同様に「聞き難きものは**歯黒めつけ**てものいふ声」なんだそうです。恐らく、歯染めして、お歯黒が歯に馴染むまで口を半開きにして喋る声を取り上げたのでしょう。

枕草子より古くは、『宇津保物語、著者不詳』に「御鏡、畳紙、**歯黒**よりはじめて一具」と化粧用品が紹介され、三十六歌仙の一人、源順著の日本最初の辞書『倭名類聚抄、九三五』以前には「黒歯。文選註云、**黒歯国在東海中**　其土俗以レ草染レ歯、故日黒歯俗云**波久路女**、今婦人有　**黒歯具**　故取レ之」と記されていました。

尚、江戸時代の書、『閑際筆記、藤井懶斉、一七一五』及び『類聚名物考、山岡浚明、成立年不詳』に「醍醐天皇（八八五～九三〇）は生来、歯が黒く、其れを気になさっている事を近臣達が知り、帝の気が少しでも紛れるように皆、歯を黒く染めた」と記述し、この黒歯が我が国最初の黒歯である事を力説していました。

更に、その外の黒歯に関連する資料を求めて、平安前期の弘仁・貞観文化に向かって彷徨いましたが、九〇〇年前後の頃の書、『延喜式』と菅原道真の『菅家文草』

に化粧関連の文言を見出しましたが、黒歯に関する資料には遭遇しませんでした。

（3）平安時代の黒歯風習総括

平安時代のお歯黒風習を総括するに先立って、男性黒歯風習の発祥について考察し、その上で男女両性の黒歯風習を分けて、総括する事にします。

① 男性黒歯発祥譚：　黒歯風習を考察するには二通りの切口があると考えています。一つは発祥の理由とか動機であり、他は発祥の時代であり、時期です。

発祥の理由については、江戸時代の数多くの書に記載されている事は前述の通りで、その内容を具体的に示しますと、上田秋成は、「後鳥羽院は男色を好み、若公達に**歯を染めさせた**」と言い、雍州府志には「後白河院時、**男色**が盛んになり、堂上の男子が十六七歳になると、**鉄漿で歯牙を染めさせた**」と記され、南窓筆記には「鳥羽院、殊の外に**男色**を好み、公家の子供が参内する時、女性のように**歯を染めて**出仕するように仰せになった」と著述されていました。

伊勢貞丈は、男子が鉄漿付けを始めたのは、「**好色**に基づく」と喝破していましたし、お歯黒とは関係ありませんが、白河院も稚児に紅白粉で女のように化粧させたと云われています故、院政文化期の殿中は衆道趣味の巣窟の感があり、男性黒歯の発祥は衆道趣味に基づくと云わざるを得ません。

次に黒歯風習発祥の時期については、江戸時代の著書に鳥羽院の時節を初め、後白河院或は後鳥羽院の頃に始まったとする三説が提唱されていましたので、この三説を中心に考察を進めます。

男性黒歯発祥の時期とは別に、平家物語等の戦記文学を見ますと、源平諸将の鉄漿付けが記載されています。中でも最も古い黒歯例は源頼朝伊豆配流の時の一一六〇年の歯染めでした。従って、先に述べた三説のうち、後鳥羽院の御生誕は一一八〇年ですから、後鳥羽院説は成立しません。

伊勢貞丈は貞丈雑記に「保元・平治以来の合戦に、公家より向はるる大将は皆、化粧し**鉄漿で歯を染めて**いた為、武士にも、その風が移りて京家の武士は皆、鉄漿を付けるようになりたり」と述べています。保元・平治の乱は夫々一一五六年と一一五九年ですから、保元の乱は後白川院が在位中であり、平治の乱は上皇の時代ですから、男性黒歯は後白川院の時節に始まった可能性は十分にあり、且又、鳥羽院説の可能性を高めており、更に言及しますと、後白河院説を唱えているのは雍州府志だけでしたが、鳥羽院説を採用している書は伊勢貞丈の文会雑記等10点に及びます故、鳥羽院説を本命にするのが妥当ではないかと判断しています。

② 男性黒歯風習：　**男性黒歯**の情報は鳥羽院以前にもありました。それは前述した醍醐天皇の御代のお歯黒です。このお歯黒は後世の鳥羽院以後の黒歯風習とは無関係に一過性に生じたお歯黒故、本邦最初のお歯黒であっても、男性黒歯発祥の座を与える訳には行きません。それ故、男性黒歯発祥の時期を、鳥羽院の時節として話を進めます。

男性の**黒歯風習の発祥**は、鳥羽院が男色を好まれた為、公家の子供が参内するに際して歯を染めて出仕する事を帝が仰せつけられた事が発端となって、男性が歯を染めるようになりました。恐らく、雲上人達は体裁を重んじて、この歯染めを成人の標識に位置付けたに相違ありません。その証拠として明月記に定家の息・成実が直衣始にて鉄を付くと記されています。

男子の黒歯風習については、貞丈雑記の記載によりますと、保元・平治以来の合戦に出陣した公家出の大将は皆、**黒歯を施し**ていた為、その風が京在住の武家に伝わり、武家の大将も歯染めするようになったと記しています。その証拠として、平治の乱（一一五九）に敗れ、伊豆に配流された十三歳の源頼朝が歯を染めたと源平盛衰記に記されています。従って、武家社会における黒歯は平治の乱の時節に伝播したと推定されます。

その後の男性黒歯の跡を辿りますと、北条早雲と後北条家、並びに今川義元の歯染めが見られましたが、近世社会では武家の歯染めは姿を消していました。一方、公家階級の黒歯は近世まで維持されていましたが、明治政府の黒歯禁止令によって姿を消しました。

③ 女性のお歯黒風習：　平安時代後期の絵画・病草紙には、大きく口を開いて**歯を染めて**いる女性が描かれ、当時の辞書・伊呂波字類抄には、**黒歯ハクロメ**と記載されていましたので、院政文化期には女性のお歯黒風習は確実に存在していました。

平安中期、藤原文化期には、栄花物語等の文芸作品に波久呂女が登場し、紫式部日記には式部本人の**歯染め**体験が記されていますので平安中期のお歯黒も確実です。その外、堤中納言物語や枕草子にもお歯黒のエピソードが見られます。

以上の平安時代の書には、黒歯・鉄漿などの記載はなく、歯染めと〝**ハクロメ**〟と呼称し、〝**波久呂女**〟と表記していました。しかし、平安前期の弘仁・貞観文化期には、お歯黒に関する資料が一切見られませんでしたので、女性のお歯黒も平安時代に発祥したのかと思いました。しかし、九三五年前項に完成した我が国最初の漢和辞典、前出の『倭名抄』には**黒歯国**が紹介され、今の婦人は**黒歯具**を有している」と著わしていますので、平安前期の婦人達はお歯黒を施している事を示唆しておりま

す。従って、女性のお歯黒風習の発祥については、奈良時代以前の資料を待つ事にもなります。

参考文献

小山田子清、松尾筆記、一八一五～四六
高橋雅夫、日本における化粧品の文化史、犬養智子編、化粧品の全て、国際商業出版、一九七八
樋口清之、化粧の文化史、国際商業出版、一九八二
谷山茂、人名大事典縮刷版、むさし書房、一九八二
芳賀幸四郎監修、日本史小事典、文英堂、一九九三
鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三
鈴木守、化粧のルーツを訪ねて（一）、まんじ一〇七号、二〇〇八
鈴木守、性と化粧の物語（五～七）、まんじ一四一～一四三号、二〇一五～一六

（次号に続く）

千家尊福伝（一五）

帝都騒乱に立ち向かった東京府知事

村上邦治

はじめに

明治三四年初夏は、貴族院議員・東京府知事の千家尊福にとって、節目の時になった。念願であった立憲政友会を自ら結党し、天皇が最も信頼する元老伊藤博文の第四次内閣は、衆議院で過半を占めていたにも関わらず、五月初めわずか八か月で、あっけなく倒れた。その政友会の実力者であり東京市議会議長星亨は、六月市庁舎内で白昼暗殺された。

博文の辞任は、依然として衆議院第一党で過半数を占める政友会総裁であることから、余力を残した辞任であり、引き続き五次内閣を組閣することが十分予想された。特に東アジア情勢は、北清事変が終結したにも関わらず露国軍は満州から撤退せず、緊迫度を増しており、この難局を乗り切れるのは、博文しかいないと思われた。列強諸国との戦争を避けたい天皇は、博文の日露協商路線を認めており、全幅の信頼を置いていた。一方世界最大の陸軍を持つ露国に対抗するため、英国と同盟を急ぐ立場の元老や山県系官僚・軍人がおり、路線を巡り対立していた。

日露協商と日英同盟路線の帰趨は、明治日本の最大危機に繋がりかねないものであった。

一　開戦前の東京府政

東京府知事を悩まし続けた星亨の突然の死と、利光鶴松ら星系議員の、収賄による有罪判決に伴う辞職が続き、東京市会はようやく平穏に戻った。

東京府会は三四、三五、三六年度ともに、予算案の審議と教育関係の議案が大半であった。特に実業教育の振

興から、商業学校、農業・園芸学校、工芸・織染学校などの設立や、小学校の改築、幼稚園の新設など、教育の充実に関する議案が多く、教育に積極的な千家知事の姿勢を反映したものであった。府会との良好な関係もあり、波乱なく審議は進んだ。千家知事の真摯な教育に対する施策は、議員の信頼を得ており、反対はなく何れも可決された。

その他では府税の増収を図るため、新税（電話税、庭園税）、税率改正（家屋税、営業税）などを提案したが、滞りなく府会で承認された。

府会議員はこれまでの府知事より長期間の在任で、腰の据わった千家知事の行政手腕を高く評価しており、府会の運営は順調であった。一方東京市は、市内外の鉄道路線の拡張や架橋（江戸橋、京橋）、電気、ガス会社の合併など社会基盤が整備され、住民の増加を賄った。経済界では、商業会議所や全国手形交換所連合会が設立され、商工業の発展を促した。とくにこの時期軽工業は、飛躍的に発達した。星亡き後、府・市会ともに、大きな波乱は生じなかった。

明治三六年（一九〇三）、五年の任期をわずかに残した初代松田市長は、予算を巡り府と市会との調整に苦しみ、任期を待たず辞任した。後任には、東京府から干渉されず市の自治を強めるため、大物市長の就任を望んだのである。市会では千家府知事に対抗できる、市長の人選が始まった。

強力な二代目市長候補として、衆議院議員尾崎行雄に白羽の矢が立った。当時尾崎は、桂内閣の地租増徴案に反対しており、賛成にまわった伊藤政友会総裁のもとを離れ、閑暇の毎日を送っていた。政治的清潔さと、二五才で東京府会議員、四〇才で隈板内閣の文部大臣に就任、文部省改革を果たし、物議をかもした共和演説事件では、最後まで政治家として正論を貫くなど、高い政治力と豊富な経験を持つ尾崎は、まさに適任の二代目東京市長として見られたのである。

しかしその実態は大きくかけ離れていた。自らの『咢堂回想録』ではっきりと述べているように、「うっかりなった　市長」と題して、東京市長になった動機として、

「天与の休養時期であると解し、しばらく静養しようと思っていたところ、ある日、旧友の丸山憲政本党議員と中鉢政友会議員の二人から、東京市長就任の交渉を受けた。

薮から棒のこの交渉に私はただちに辞退したところ、両人は、市の実務は及ばずながらわれわれ両人がやるから、ただ名さえ貸してくれればよい。出勤も一週に二、三度、参事会の開かれるときだけでよい。としきりに勧めるので、そんなに暇があって、しかも相当の俸給がとれるなら、こんな結構なことはない」

と思い、市長に応ずることにしたと回想している。

期待していた大物市長のやる気のない姿勢に対し、当然ながら後で、市議会や参事会から、市長不信任の決議をされた。

市長としてあまりのふがいなさに、

「咢堂すでに死せり」

と、新聞で書き立てられたほどであった。

後に「憲政の神様」と言われ、護憲運動の先頭に立った同じ人物と思えない、東京市長時代の尾崎行雄の仕事ぶりであった。

同じ回想録で、開戦直前の国会で「勅語奉答文事件」の黒幕であったことを白状している。この事件は、河野広中衆議院議長（憲政本党と政友会の連携で就任）が、開院式で天皇の勅語を受け、奉答するなかで、

「今や国運の興隆洵に千載の一遇なるに、内政は弥縫を事とし、外交は機宜を失し」（一部略）

との一節を入れ、内閣を弾劾した。あまりに堂々とした奉答であったため、議員の多くは慣例通りの奉答文として思い込み、全会一致で承認してしまった。後で内閣弾劾であったことが判明し、大混乱に陥ったのである。しかしもはやどうにもならず、桂首相はやむなく解散せざるを得なかった。奉答文を書いた尾崎本人は、

「つまらぬイタズラであった」

「つまらない罪つくりをした」

と、振り返っているが、この事件が国政を混迷させ、政府・軍部が主導する露国との開戦を、促すことになったことは間違いない。こうした尾崎市長の民党（野党）的姿勢が、後に東京の中心地を大混乱に陥れた騒乱の発端となるのである。

二　貴族院会派の盛衰

貴族院では、日清戦争による軍人の大量授爵により、各派の勢力図は、大きく変動した。伯子男爵互選議員は、「各々総数の五分の一を超過すべからず」と規定されていたため、子爵議員は七〇名で一定していたが、男爵議員は、明治二三年二〇、三〇年三五、三七年五六名と急増した。

子爵を主体とする研究会（山県系支持派）は、貴族院の主導権を握り、山県内閣（第二次）を支えてきたが、男爵議員の増加により、次第に弱体化したのである。

一方、男爵議員で構成する尊福率いる木曜会は、研究会から独立し、纏まりの強さと、増加する議員により、貴族院内での発言力は次第に大きくなり、反研究会的傾向を強めていった。当然貴族院での存在感は、山県系内閣（桂第一次内閣）といえども、重視せざるを得ないも

のとなり、その最高指導者千家尊福は、貴族院を動かす一人になったのである。

こうして日露戦争前後では、千家尊福は、帝都東京府知事として地方官最高の地位にあり、また国政では貴族院木曜会の領袖として大きな発言力を有し、その存在感を高めたのである。

三　対露国方針の対立

日清戦争後も国内政治は、元老が首相を務める藩閥政府が続き、政党の攻勢を受け安定しなかった。対抗手段として、衆議院の解散と藩閥内閣の繰り回しにより、辛うじて、軍備の強化・整備を進め、対外的に東アジアの主要国として認められるまでになった。

さらに日本が主要西欧諸国と肩を並べ、列強国の仲間入りをしたのは、清国で起きた義和団の乱から始まる北清事変の鎮圧に、主力的な働きをしたことからであった。

しかし満州に出兵した露国は、自国の権益（東清鉄道）を保護するとして、終結後も駐留し軍事占領を続けた。この露国東アジア政策は、わが国の権益である韓国にも及ぶ懸念が、強く持たれたのである。

伊藤博文は「恐露」病といわれ、世界最大の陸軍を擁する軍事大国露国との摩擦回避には、露国と協商条約を交渉、締結することが最も有効である、と日清戦争終了直後から一貫して主張してきた。

一方、世界各地で露国と対峙している英国と同盟を結び、露国と対抗することにより、韓国の権益を守るとする元老や山県系官僚・軍部らとの対立があった。

路線の対立は、詰まる所、露国皇帝ニコライ二世を、信頼できるか否かの相違といえた。

明治二四年（一八九一）ニコライ二世は皇太子の時、日本を訪問、大歓迎を受けたのであるが、大津で警備中の巡査にサーベルで切り付けられるという、当時の日本にとって驚天動地の大事件が発生した。この時天皇は夜にもかかわらず、東京から一五時間かけて、京都に赴き、皇太子を見舞った。その後一週間毎日見舞いの為滞在するホテルに出向いた。常時天皇に従い、事件の処理に采配を振るったのが、伊藤博文であった。この事件発生により、日本に戦争を仕掛けるのではないかとの恐怖が、天皇をはじめ、政府首脳や国民まで広がった。天皇と博文は、皇太子対し、懸命の治療と手厚い看護に当たったのであった。

意外に皇太子の傷は浅く、回復して帰国する露国軍艦に、天皇を見舞いの返礼に招待した。この時も天皇が連れ去られるのではないかと重臣たちは危惧したが、天皇は即座に応じ、最後の懇親を深めたのである。天皇とニコライ二世とは、このときから信頼関係が育まれた。この一〇年前の事件により、天皇は、日露協商について前向きであった。

第四次伊藤内閣が明治三四年五月総辞職した後、非戦派・露国協商派（伊藤・井上馨）か、それとも露国との対立も辞さない強硬派・日英同盟派（山県、桂）かのいずれに大命が下るかにより、これからの対露国政策が決まりかねなかった。今から思うと、この五月一か月は日本のこれからを左右する、まさに歴史の転換点であった。

戦争を避けたい天皇は、引き続き伊藤博文の再組閣を望んだ。天皇の意を汲み、元老会議では、伊藤に留任を勧告した。しかし伊藤は、元老達が一致して伊藤内閣を支援する姿勢がないことを感じ取り、首相再任を固辞したのである。天皇はその後も伊藤に対し、再三首相復帰を目論み、侍従長兼内大臣（徳大寺実則　西園寺の兄）を遣わし、また元老達に伊藤首相奏上を画策した。

しかし山県は、伊藤の政友会結党を快く思わず、また財務面から陸軍の縮小を進めたい博文に対し、元老達は積極的に支援する姿勢を見せず、遂に天皇の意向は通らなかった。

四　幻の井上馨内閣

伊藤博文の総理就任固辞により、次善の策として、博文と同じ日露協商路線を唱える元老井上馨を、後継首相に推すことで、天皇と元老会議は妥協した。

当時井上は伊藤と同じ政治行動をとり、博文の政治活動を支えてきたが、結成された政友会には入党せず、第四次伊藤内閣に入閣していなかったので、山県系の政治家・官僚達から、首相就任に反対はでなかったのである。

井上馨にとっては、待ちに待った大命であった。木戸・大久保亡き後維新政府を主導した博文より、若いときには常に上の立場にいた。年齢は六歳年上であり、足軽の博文と違い、毛利元就以前から仕えた藩士の家柄であった。博文を西欧通に開眼させる契機となった英国密航を企て、博文を誘ったのも馨であった。大蔵省では、大蔵大輔で、少輔の博文より上位であった。大きな格差が生じたのは、博文は明治五年岩倉使節団の全権副使に選ばれ、大久保利通の知遇を得たことからである。

馨は、大蔵大輔として留守政府の事実上の長官として予算権を握り、「今清盛」と呼ばれるほどの権勢をふるい、部下の渋沢栄一（旧幕臣）とともに、逼迫していた政府の財政を一手に掌握していた。しかし帰国後の大久保と衝突し、部下の渋沢とともに、大蔵省を辞職して実業界に転じたのである。

西郷が馨を、「三井の番頭さん」と揶揄したが、三井物産の前身先収会社を設立するなど実績を挙げた。しかし明治八年、博文の説得に応じ、政府高官に復帰した。

以後、常に総理大臣の博文を、第一次では外務大臣、第二次では内務大臣、第三次では大蔵大臣という主要大臣として支えた。政友会結成時には、多額の政治資金を実業界から集め、資金面から支援した。既に元老会議には出席しており、当時の元老博文、黒田、山県、松方はいずれも総理大臣を経験していた。西郷は兄隆盛の関係から総理就任は辞退しており、馨のみが取り残されていた。六五歳になる井上にとって、最後の首相になれる機会が到来したのである。

五月一六日大命降下を受けた井上は、内外の厳しい情勢を踏まえ、これまでにない斬新な人事を構想した。前内閣が財政問題により倒閣したことから、経済・財政に明るく、実業界の効率主義により、硬直化した行政・財政整理を指揮するため、大蔵大臣に、元大蔵省の部下である実業家渋沢栄一を起用することにしたのである。もう一人は、露国との紛争を考慮し、陸軍を束ねる陸相に、桂太郎を留任させる陣容を骨子とするものであった。

馨は直ちに渋沢に大蔵大臣就任を要請した。大蔵省を同時に退任後、「日本資本主義の父」あるいは「日本近代経済の父」と呼ばれ、五〇〇以上の会社の設立に関わり、六〇〇以上の社会・教育事業に関与した渋沢に、いち早く蔵相を依頼したのである。当時東京商業会議所会頭、東京手形交換所委員長、東京銀行集会所（現東京銀行協会）会長などを務め、実業界の第一人者であった。

各業界を取りまとめており、事前に業界の主要人物に相談したが、伊藤、井上より、山県の方を評価する者が多く、しかも目まぐるしく変わる総理大臣をみて、何より政治に中立が最善として、多くの関係者は消極的であった。自ら頭取を務める第一銀行でも、銀行役員に意見を聞いたが、賛成する者はいなかった。近親者は経済団体や多くの会社役員、社会事業・教育団体に携わり、現在でも多忙を極める栄一の健康を心配して、全員反対であった。実際四月一か月の行動をみても、第一銀行の韓国融資問題、韓国京釜鉄道発起人、社会福祉事業四恩瓜生会銅像建設委員長、日本女子大学開校式や新潟商業学校さらに講道館での講演など、多事多端な毎日であった。蔵相就任に固守する井上に、大蔵省を退任した時の「政府官僚にやれないことをやる」とした決意を伝え、二二日井上に辞退を申し出た。

一方桂は、伊藤と同様、厳しい財政状況から陸軍の縮小を狙い、かつ日露協商派である井上とは、基本的に路線が相違しており、いずれ内閣不一致の事態を引き起こすことが予想されたことから、陸軍大臣留任を断った。

井上内閣を支える大蔵大臣に指名した渋沢栄一と、陸軍大臣を要請した桂太郎の二人に断られた井上馨は、ついに組閣を断念、翌二三日大命拝辞を奏上した。これにより井上は、総理大臣になる最後の機会を、逃すことになった。

明治天皇紀には、

「（山県）有朋・（松方）正義参内す、二人、さきに伯爵井上馨が各組織の大命を奉じてよりしきりに閣員を選考し、交渉を累ぬる所あるも、適任者の之れに応ずるもの甚だ乏しく、到底成立の目途立たず、遂に二三日大命拝辞の意を（西園寺）臨時内閣総理大臣及び諸元老に通報せる」

と、その間の事情を記している。

五　桂太郎内閣発足

井上馨の大命辞退後、

「以て、諸元老商議を累たる結果、陸軍大将子爵桂太郎を推薦するに決したるの事情を奏し、改めて、大命を太郎に下したまはんことを請ふ」（以下明治天皇紀）

こうして大命は、桂太郎に下ることとなった。しかし桂は、簡単に引き受けなかった。元老という看板を持たない桂は、博文が首相就任へ翻意しないことを承知しながら、わずか半年で辞任したことは、

「邦家のために利ならず」

と、大磯の博文宅を訪問し説得した。そしてこのことを天皇に奏し、天皇から

「再任して、今日の難局を処理すべきことを親諭したまはん」

ことを、請うたのである。こうした桂の政治感覚、年上の元老達への細かい配慮が、その後の桂内閣を強力、かつ長期安定なものにするのである。

桂の奏上を受けて、天皇は一縷の望みをもって、再度博文に留任を説いた。

「侯爵伊藤博文大磯より帰京し、天皇に謁す、天皇乃（すなわ）ち命ずるに再任の事を以てしたまう」

天皇自ら懇命な説得したことが、「乃ち」という語に表れている。

しかし混乱した一月を経ても、博文をみる元老達の冷淡な態度は、辞任の時と全く変化はなかった。

「博文固辞して承けず、之を陸軍大将子爵桂太郎に命じたまはんことを請う」

こうして、露国との衝突回避を強く望んだ明治天皇の意向は、伊藤内閣の継続さらに井上馨の組閣、いずれも失敗に終わり、遂に実らなかったのであった。

歴史に「ｉｆはない」といわれるが、明治三四年五月伊藤や井上に執着した天皇の意向が実現されていたら、大きな犠牲を払った日露戦争は起きなかったであろう。

満州を手に入れ、発言力を強めた陸軍が独走し、大陸で多くの事件を起し、戦乱が泥沼化することもなかったのではないだろうか。まさにこの一か月の天皇による大命の行方が、歴史の転換点となった。

六月二日桂内閣が発足した。外務小村寿太郎（外交官前駐清公使）、内務内海忠勝、大蔵曾弥荒助、陸軍児玉源太郎、海軍山本権兵衛（薩摩）、司法清浦清吾、文部菊池大麓（前東大総長数学者）、農商務平田東助、逓信芳川顯正の布陣で、政党員は一人もおらず、山県系七名を核とする内閣であった。首相が元老でない初の内閣であることから、「小山県内閣」と呼ばれ、又「次官内閣」、「二流内閣」ともいわれ、発足当初大きな期待はできない、と思われた。

が、この内閣は四年七か月という、戦前では最長の政権となり、通算二千九百日弱の戦前戦後を通じ最長内閣の第一歩となった。（第二位佐藤栄作内閣二千八百日弱）

六　日英同盟締結

桂内閣の外交方針は、

「独力を以て東洋の大局に当たるは困難なれば、某国（英国）と或種の協定をなすことに注意すること」

「韓国は保護国となす目的を達すること」

の二大綱領を掲げ、日英同盟の締結により、韓国支配を強めることを、最大の課題とした。

桂内閣は英国と同盟締結に向けて、精力的な交渉を開始した。その中心人物は、外務大臣小村寿太郎であった。駐英林公使（西園寺第一次内閣外相、第二次逓信相）を指揮し、三四年末には、ほぼ合意に達したのである。

露国との衝突を避けたい天皇と伊藤は、この時点でも露国との協商締結に望みを持っていた。伊藤は米国外遊を済ませ、そのまま露国に向かい、一一月博文自らニコライ二世に拝謁し、協商交渉を本格化させた。

日本最高実力者伊藤を迎えた露国は、これまでの交渉から、日本が主張する「韓国を日本の勢力圏とする」ことを認め、露国の満州での一定の権益を認める「満韓交換論」で合意するところまで、煮詰まった。

伊藤は桂首相に交渉結果を電報で逐次報告、天皇もこの交渉に期待した。立憲制下天皇の政治的発言は抑えられてはいたが、博文の交渉に望みを託し、山県・桂の押す日英同盟の交渉経緯を、ペテルブルグで露国と交渉している博文に伝え、意見を求めさせた。

露国との交渉推移をみていた英国は、危機感を持ち同盟締結を急いだ。伊藤不在の東京では、閣議、山県・西

郷・松方ら博文不在の元老会議、いずれも日英同盟を承認した。ここに至り、さすがの天皇も同意したのである。

伊藤は、露国でこの決定を知らされ、

「頗る大早計なり」

と嘆いたが、後の祭りであった。日英同盟締結は、桂内閣誕生時からの、公約実現に過ぎなかった。

七　桂外交を後押しする世論

日清戦争後、当時の新聞界は、「百家争鳴・百花繚乱」の黄金期であった。明治三〇年松方内閣による新聞紙条例の改正により、行政権による発行禁停止が廃止されて以来、新聞を通じて言論の自由が拡大し、多くの新聞が創刊されたのである。高級紙としては、福沢の創刊した『時事新報』があり、主要紙として、陸の率いる『日本』、伊東巳代治の政府系『東京日日新聞』、徳富蘇峰の『国民新聞』、桂内閣と近い『東京朝日新聞』があった。反政府系として、憲政本党の機関紙であった『報知新聞』、島田三郎（元改進党後憲政本党議員）が経営する『毎日新聞』、リベラルな『萬朝報』と『二六新報』、社会主義者たちの『週刊平民新聞』があり、政府批判を活発に掲載していた。

明治二〇年代以降総合雑誌が刊行され、多彩な主義主張を発表し、社会に影響を与えた。徳富蘇峰が社長の『国民之友』、三宅雪嶺の『日本人』、高山樗牛主筆の『太陽』、与謝野夫妻の『明星』、その他『中央公論』などである。

北清事変前の明治三一年には、すでに『時事新報』は英国新聞からの報道として「日露開戦論」を掲載、三二年『国民新聞』は、朝鮮を巡って「日露関係切迫」を報道し、早くから露国の東アジア政策に警鐘していた。

北清事変後、満州占領を続ける露国を批判する新聞報道が頻発する。特に桂内閣が成立し、その政綱に日英同盟締結と韓国の保護国化を掲げると、多くの新聞は、同盟の締結に賛同する記事や社説を掲げ、桂内閣を後押しした。その中で冷静慎重な態度を取り続けたのは、伊藤博文系の『東京日日新聞』、民権派島田の『毎日新聞』、原敬が主筆の『大阪新報』がある。社会主義の立場から、最後まで反戦を貫いたのは『平民新聞』であった。

日英同盟の締結は、当時世界中に広大な植民地を持ち、独国や米国が台頭してきたとはいえ、世界第一の大国で「光輝ある孤立」と称した英国との同盟締結は、これまで慎重な態度をとり続けていた新聞各紙も、桂内閣の偉業として賞賛に転じ、対露国政策に同調したのである。

日英同盟締結後は、天皇や伊藤が懸念したように、政府も言論界も、英国の後ろ盾が得られたとして、露国に対して、強硬な要求をするように変わっていった。

当初伊藤達は、日露とも韓国、満州各々極力利益確保を低くして、日露の併存を図ろうとした「朝鮮中立論」、そして「満韓交換」による日露の地域支配へ変化していった。さらに三六年末では、韓国における権益確保は無論のこと、露国が現実に占領している満州の権益までも日本は主張し、日露間の妥結は遠のく一方であった。

桂、小村の強硬路線を奮い立たせたのは、三六年六月『東京朝日』で、一ページにわたる「大学七博士の意見書」であった。これは、戸水（法博後政友会議員）、富井（法博後法科大学学長）、寺尾（法博アジア主義者後孫文支援）、高橋（法博後法制局長官）、金井（法博後経済学部長）、小野塚（法博後東京帝大総長）六名の東京帝大教授と、中村学習院大教授（法博）の七博士が、桂首相に提出したものであった。

当時京都帝大が出来た時点で、教授は二百名もおらず、最高の知識人しかも海外経験豊かな七名の意見は、開戦論者を勇気づけたのである。

彼らの発言行動は、貴族院議長近衛篤麿の対外硬運動の一環としてであった。曰く、

「今日満州問題を解決せざせば、朝鮮空しかるべく、朝鮮空しければ日本の防禦は得て望むべからず」

「姑息の策（満韓交換論）に甘んじて曠日弥久するの弊は、結局自屈の運命を待つものに外ならず」

「今日の時機に於いて、最後の決心を以て、この大問題を解決せよ」（一部抜粋）

と、露国と戦争によってでも、わが国の権益確保を強硬に主張したのである。

露国の満州撤退が進まず、協商交渉も進展しない情勢に、これまで慎重であった新聞を含め、露国との開戦を声高に主張し始めた。

「和戦を決するは我にあり」（東京朝日　三六年一〇月）

「自衛のため起つはやむを得ず」（国民　三七年一月）

「最後の決断を」（時事　三七年一月）

「日本は今や自由行動をとれ」（大阪毎日　三七年一月）

「戦争も辞すべからず」（東京日日　三七年二月）

など、国民を煽る報道の嵐は、大国露国との戦争は無謀であることを、次第に忘れさせた。

しかし、第一線で直接戦火を交える陸海軍の首脳は、苦悩が続いた。露国との国力、軍事力いずれも大きな差があった。人口で四四百万人対一億二五百万人、生産力は五兆円対十五兆円といずれも三倍、軍事力に至っては、常備兵力二〇万人対二百万人の一〇倍であった。

過熱する新聞報道により、露国との戦争を望む国民の多くや、陸海軍の高級参謀らの積極開戦論に対し、当初軍部首脳は開戦に消極的であった。

陸軍参謀総長大山巌は

「露国は大国でごわすからな」

とつぶやき、黙り込んで開戦の是非を言明しなかった。

海軍大臣山本権兵衛は

「韓国如きは失ふも可なり。帝国は固有の領土を防衛すれば足る」

との意見を持ち、逸る軍令部を抑えたのである。

政界では元老伊藤、井上とともに、星亨亡き後政友会の実質的な責任者となった原敬は、一貫して社長兼主筆の『大阪新報』で、日露開戦に慎重であり、政府と露国の交渉を急ぐべきことを主張した。総裁伊藤と党運営責任者原の姿勢は、政友会議員の大勢となっていた。

実業界においては、経済への悪影響を懸念し、おおむね開戦には消極的であった。特に『大阪新報』の地盤関西では、大阪財界人に平和論を語らせそれを連載し、冷静な言動を求めたのである。実業界は元来紡績など産業の近代化により、輸出を増大させ、貿易の進捗がわが国にとって、最も重要であることを訴えたのである。

貴族院議員・東京府知事千家尊福は、開戦後の五月、政府主導により「大日本宗教家大会」が東京で開催され、そこに来賓として招かれた。神道、仏教各宗派、耶蘇教各派が参加、神官、僧侶、内外宣教師が一堂に相会した。開戦直後であり、日本の立場を是認する大会決議を行ったが、そのあと

「宗教家の相反目するは国家にとって不利益なりとて、その懇親の必要を説く」

「戦争と宗教との関係ついては、戦争と宗教とはお互い相容れざるるべからざるものなるも、国家と宗教とは相離るべからざるもの」

「仏教の大慈悲と耶蘇教の博愛とは同一なり」

など、宗教人の大会らしく、控えながらも戦争については、消極的な態度も表明したのである。

尊福は、東京府知事として出席、祝辞を述べたが、宗教家としては、

「唯未来の安心を説くのみならず、現世においての福徳を増遂することを」

と述べ、

東京府知事の立場からは、

「大いなる国利民福を起こす事業に力をつくされよ」

と論じ、戦争をただ鼓舞する祝辞とはかけ離れた演説であった。尊福が親近感を持つ伊藤博文の非戦論に賛同、原敬が主導する政友会の立場に近いものであった。

しかし、桂内閣内務省下の東京府知事の立場は、自己の信念を明らかにすることは許されなかった。しかも貴族院議員木曜会最高責任者の立場からは、なおの事控えざるを得なかった。木曜会が貴族院での最強会派として増員団結できたのは、日清戦争後戦功のあった軍人が男爵に授爵されたからであり、軍部出身者の増加によるものであった。会派を維持するには、軍部出身者に、配慮せざるを得なかったのである。

八　日露開戦

開戦に消極的であった政界、陸海軍の一部等も、露国の第二次撤兵期限を守らなかった明治三六年（一九〇三）四月以降、次第に開戦やむなしの態度に変わった。

露国では、駐露公使や陸軍駐在武官（明石大佐）が報告してきたように、皇帝をはじめ中央の政府高官たちは、日本を侮り、戦争を考えている者は少なかった。しかし日本は、露国の満州周辺における子細な行動を、過大に取り上げ、韓国進出を警戒し、戦争準備を開始したのであった。

明治三七年（一九〇四）二月六日、日本は断交を宣言し、朝鮮戦争として日露戦争は始まった。日本連合艦隊は宣戦布告前ながら、韓国鎮海湾を奇襲攻撃により制圧、八日には陸軍先遣部隊を仁川に上陸させた後、港外の露国艦隊へ攻撃を開始（仁川沖海戦）した。ここに至り、九日露国、一〇日日本が、各々宣戦布告をした。

その後は旅順の露国艦隊を巡り、旅順港閉鎖作戦、黄海海戦と、日本はいずれも完全制覇に失敗する。朝鮮・大陸との制海権確保のため、旅順要塞制圧が陸軍の最大な戦略目標となった。

八月から乃木将軍率いる第三軍の総攻撃は、三回に及び多大な戦死者を出すも失敗、やっと一二月二〇三高地を奪取、高地からの砲撃により、旅順艦隊を全滅させた。

一方満州では、八月より遼陽会戦が始まっており、両軍主力が激突、日本軍は遼陽を占領したが、露国軍の壊滅には至らなかった。一〇月からは撤退した露国軍と沙河で会戦したが、冬を迎え膠着状態になった。

翌三月満州の中心奉天で会戦、旅順攻略に成功した第三軍が加わり日本軍二五万、露国軍三二万による最大の陸戦となった。日本軍は奉天を占領したものの、もはや後退する露国を追う戦力は残っていなかった。満州軍は、将校・下士官の一割超を失い、兵力は枯渇するも補充はままならず、砲弾等物資も使い切っていた。それでも戦闘を続けたい政府・大本営ではあったが、和平交渉を進言する満州総司令部の進言を受けざるを得なかった。財政上から、もはやこれ以上の戦争は無理であった

のである。当時の国家予算は約三億円であったが、総額一七億円に上る戦費は、内国債六・二億、外国債六・九億合計一三・一億円を調達、そのほか非常特別税として増税一・四億円を国民に課していた。

政府内では、奉天会戦勝利を奇禍として、講和への流れが強くなるのは当然であった。こうした機運の中、五月末対馬沖にて、日本連合艦隊と露国バルチック艦隊との海戦は、わが国未曾有の大勝利に終わり、講和への動きを一挙に加速させたのである。

九　繁忙極める府知事

戦争開始後、千家東京府知事は多忙となった。

先ず東京府会で、予算の修正審議に追われた。開戦一か月後、臨時府会の開催に際し、知事は、

「目下の時局に鑑みて、三七年度の予算に対して地方経済を緊縮するの必要を感じまして、茲に変更に関する議案を提出いたした」

と説明し、歳出削減案への理解を求めた。

議員たちは、この更生案に対し、

「今や日露の国交断絶して干戈を交ふるに至り、その事態の重大なること、振古未曾有の国難である。その秋に当たて帝国臣民たるものは、宜しく挙国一致殉難の誠を尽して戦闘の後援をせねばならぬ」

として、知事が提案した歳出予算減額案に賛同した。承認されていた予算から、土木費の削減を中心に、一割六分（七六・七万円を六四万円）の削減ができたのである。

さらに、議員から

「目下国債募集中であるから、知事からも各方面へ、依頼状を発せられた。議員各位奮って応募、勧誘についても、充分努力援助せられたい」

として、知事の公債応募努力を称えたのである。

三七年度通常府会では、逆に追加予算案二万二百円を計上するに至った。時局緊縮を要するとして既定予算の更正案を議決したにもかかわらず、数か月経過したにすぎないこの通常議会に、相当巨額の追加予算を提出したことに、各議員から峻烈な質問が、知事に浴びせられた。

千家知事は、「今夏の水害による河川の治水復旧堤防土木工事は、冬期の施工が最も適当である」とする丁寧な説明を行った。これまでの知事の執行振りを見ていた議員たちは、ようやく賛成したのである。

開戦後府民の戦死者は、日清戦争と比較にならないほど激増した。鴨緑江方面から奉天に展開した第一軍（黒木司令官）には近衛師団が、旅順攻略を担当した第三軍（乃木司令官）には東京の第一師団が、それぞれ編入さ

れたためであった。特に延べ一三万人を擁する第三軍は、二次に渉る総攻撃により、戦死者一万五千名、負傷者四万四千名、戦病者三万名と、七割にも上る大損害を出した。総力戦であった奉天会戦では、死傷者は日本軍七万、露国軍六万名に上った。

いずれの戦いも、日本軍の勝利ではあったが、予想をはるかに上回る損害であった。府知事として尊福は、停車場における軍隊の送迎、負傷兵の慰問、そして戦死者の会葬、軍人家族並びに遺族の救護など、戦死者が群を抜いて多く、府民の支援に多事を極めた。また赤十字社の救護班、看護婦人会、愛国婦人会や軍人家族授産婦人会には、夫人や娘たちも率先して参加し、犠牲者・留守家族を励ましたのである。

戦中時には、講話会が度々開催され、講演者として演壇に立つ事も多かった。講演は分かりやすく、戦場で勇壮果敢に戦う出征兵士を思いやるものであった。

時には、

皇軍の　旗手の風し　つよければ
　　たつ草もなく　もろこしの原

などの得意の和歌を交え、最後には、出征軍人家族の救済に力を貸してほしい、と結んだのである。

一〇　日露講和条約

露国国内では、開戦前より、社会主義政党が結成され、専制君主制にたいする批判が高まっていた。まさに日本と戦争中の一九〇五年一月サンクトペテルブルグで、民衆の平和的デモ行進に向かって、軍隊が発砲する「血の日曜日事件」が起きていた。六月にはオデッサで戦艦ポチョムキンの水兵が、反乱を起こし、露国においても、早く終了させたい内部事情を抱えていた。

日本は日本海海戦の圧倒的勝利を背景に、六月米国ルーズベルト大統領に講和斡旋を申込み、八月からポーツマスにて、日本側全権大使小村寿太郎と露国全権大使ウイッテ元蔵相との間で講和会議が始まった。

皇帝ニコライ二世にとっては、バルチック艦隊の全滅は確かに予想外の結果ではあったが、陸戦では単に前線を後退させたにすぎず、露国内へ攻め入れられたわけでもなかった。敗北した意識はなく、ウイッテ大使に、賠償金や領土の割譲を厳禁する指示をしていたのである。

この間日本の各紙は、講和条件について、勝手な主張を載せた。

中でも開戦を積極的に建議した戸水ら七博士は、

「戦争継続を主張」（大阪毎日　五月）

「講和条件は土地割譲の外、償金三〇億円」（日本　六月）

と、内実を知らないで、強硬論を発表し続けた。

その他の新聞も

「ウラジオストクの明け渡し」（時事新報　七月）

「樺太の還付と賠償金の支払い」（時事新報　八月）

「樺太と露国沿海州の割譲」（東京二六　八月）

など掲載し、賠償額は戦争費用に見合う、二〇億円前後を予測した。（日清戦争　戦費二億円　賠償金三億円）

ところが八月末の講和条件（韓国・満州の権益と南樺太の割譲、旅順大連の租借権移譲、南満州鉄道の権益）が報道されると、

「死体的講和に弔旗」（大阪毎日）

「天皇に屈辱講和の破棄を願う」（大阪朝日）

「講和の条件は遺憾」（時事）

「千古の大屈辱には弔旗をもって」（萬朝報）

「不平不満の投書が殺到」（東京朝日）

「償金放棄は不可」（東京日日）

「屈辱講和を怒る町の声」（大阪朝日）

「天人ともに許さざる屈辱外交」（報知）

などと、各紙は期待した賠償金が全く取れない講和条件を非難し、反政府の論陣を張った。その中で、徳富蘇峰の『国民新聞』のみは、

「講和を全面的に支持」との見出しで、

「世界第一の陸軍国たる露国に連戦連勝、東洋艦隊、バルチック艦隊を全滅させたことは、千古不磨である。賠償は取れず、樺太は全部領有できなかったが、この大戦争を無限に持続することは、条理の許さざるところである。屈辱と叫び、失敗と叫ぶが如き、むしろ己れを欺き、人を欺くの類のみ」

と、政府の締結した講和条件支持を表明したのである。

講和条件の内容が報道されると、民衆は政府批判一色の新聞報道にけしかけられ、各地で反対運動を起こした。多くの戦死者を出したこの戦争は、一体何であったのか、という政府の責任追及をする声が各地で一斉に上がったのである。三日に大阪中の島で、四日には名古屋御園座で講和反対の市民大会が開催された。

五日の締結日には、講和問題同志連合会が、日比谷公園で講和条約反対国民大会を開催することを決め、警視庁麹町署に届けを出した。警視庁は政府の意向を受けて、大会中止を申し入れたが、主催者はこれを拒否した。

警視庁は大会禁止を通達、発起人を検索し、警官三五〇人を動員して入口に木材を築き閉鎖、民衆の入場を禁止した。

ところが尾崎行雄市長は、一方的に公園閉鎖をしたことを知り、内務省に問い質し、同時に警視庁、麹町署に開門をするよう要請した。警視庁は改めて閉鎖を求めたが、参事会の肥塚龍（前東京府知事憲政本党議員）らは、公園に出向き、警備中の警官に開門を談判したので

ある。

こうした尾崎市長の判断は、日頃の市政の取り組み姿勢や元来の自由民権運動の精神からくるものであり、さらに衆議院開院奉答事件の盟友、河野広中が大会会長であることも影響した。尾崎市長の見通しを欠いた判断が、焼き打ち事件を引き起こしたといえる。数万の群衆が警官と衝突し、乱闘状態になり、公園に入り込んだ。

国民大会は二〇分で終わり、講和条約否認、満州軍の露国軍粉砕、枢密顧問官への批准拒絶奏上の三項目を決議して終了した。しかし大会終了後民衆は、二重橋方面と、新富町方面に分かれ、過剰に配備・警備する警官と衝突し、多数の負傷者を出した。警察隊のあまりの暴圧に憤慨した民衆は、その責任は内務大臣や警視総監にあると叫び暴徒化、公園内にある内相官邸や府下の警察署、派出所、交番を攻撃し焼き打ちを始めた。

夜に入るに及んで、さらに騒動は激しくなり、広域に拡大した。市内や府内の一部では、無政府状態になり、秩序は全く失われ、暴動は益々激化、ついに警官及び憲兵の力では制止することはできなくなった。

東京府知事には、制度上師団に対して、出兵請求権（警視総監が保有）を持っていなかったが、警視庁が騒乱に巻き込まれ、正常な警備体制が出来なかったことから、千家東京府知事は果断な行動に出た。

明治大皇紀に次のくだりがある。

「是に於いて、東京府知事男爵千家尊福は、兵力を以てこれを鎮圧せんことを東京衛戍（えいじゅ）総督に要求せり」

と、千家知事の越権ともいえる出兵要請を、日露戦争に伴い設置された天皇直隷の陸軍東京衛戍総督部に依頼したことが、生々しく記述されている。続いて、

「これより先東京衛戍総督子爵佐久間左馬太、国民大会の余勢不穏の行動に出づべきを慮り、命を近衛・第一両留守師団に下して予めこれに備ふる所あり、よりて即時両師団の兵を出して、宮城の内外及び各主要官衙・各国公使館等を警備せしむ」

と、千家知事からの軍隊派遣要請を受け、佐久間総督（大将）の機敏な出兵の様子が記されている。

天皇の御座所は桜田門に近く、日比谷公園の喧騒の声は直接届いた。その後も、器物を破壊する音や人民叫喚の声は次第に高くなり、天皇は一睡もできなかった。憲兵は拳銃を放って威嚇し、騒動を鎮圧しようとしたが、却って逆効果となり、一層騒ぎを増幅した。

翌六日も公園付近に集った民衆は、夕刻より電車や巡査派出所に火をつけ、焼き払った。暴動は七～八の集団に分かれ、東京市内と荏原、豊多摩、北豊島、南足立、南葛飾の各郡にまで及んだのである。

ここに至り遂に深夜、政府は緊急勅令を発して、東京

全市及び近接郡部に戒厳令を敷いた。近衛、第一両師団を各要地に配置し、また警視総監に検問所設置、集会、新聞、雑誌の取り締まりを厳しくさせた。戒厳令の実施と、夜から雨が降る悪天候により、さしもの大騒動もようやく沈静したのである。

民衆の焼き打ちの対象になったのは、内相官邸から始まり、首相官邸、山県ら元老の邸宅、外務省、米国公使館、条約に賛成をした国民新聞社、一〇以上に上る耶蘇各派のキリスト教会堂、警察署、派出所交番であった。この騒動による死傷者は民衆五六〇（内死者一七名）、警察官など官憲は五〇〇、合計で千名を超えたのである。暴動に加わった民衆のうち、二千名が検挙され、最終的に一〇〇名を超す者が有罪となった。

内実を知らない民衆は、政府の連戦連勝の報道を信じた。新聞は日本の勝利は大々的に報道し、日本軍の退却・敗退・艦船沈没などは小さく扱った。扇情的に煽る七博士らの主張は、大きく扱い、日本の宣告前の奇襲攻撃を非難する海外報道は、掲載しなかった。日清戦争とはけた違いに多い戦死者や、戦時下の苦しい生活に耐えた民衆の怒りが、一挙に暴動に繋がったのであった。

警察者や派出所交番が焼き打ちの対象になったのは、官憲の日頃から威張り散らした言動や、弾圧に対する手荒な行為など、積年の反感が噴き出たものであった。政府は民衆の暴動再発を警戒し、結局戒厳令を解除したのは、一一月末であった。

焼き打ち事件後、警視庁に対する非難が高まった。九月八日東京府会議員協議会が開催され、

「警察力を極度に暴用し、無辜の良民数百名を殺傷する」

「当時の指揮者や警察力を乱用した者の処分がない」

事を非難して、

「不法行為をした者を検挙し、処罰せよ」

と決議、知事を通じて警視総監に伝致を依頼した。

さらに九月末には、

「警視庁を廃止し警察制度の根本的改善を期すこと」

を決議、東京市会、東京弁護士会と共同で、警視庁廃止期成同盟の組織化を採択し、内務大臣に建議した。

東京府の行政機構が、知事とは別に警視総監という特別官庁があり、知事には、警察権が持てず、従って非常急変の場合、師団長に対する出兵請求権が与えられていなかった。府知事には、府下の警察署長を指揮監督する権限のみでありながら、予算は東京府が負担するという変則的な制度に対する、東京府の不満や反発があったのである。

千家府知事の出兵要請を、咎める者は誰もいなかった。尊福の非常時に際しての果敢な判断と行動がなければ、暴動は更に大規模に発展したことは、明白であった

からである。

おわりに

日露戦争について、司馬遼太郎は『坂の上の雲』で、「日本側の立場は、追いつめられた者が、生きるぎりぎりのものをふりしぼろうとした防衛戦であったこともまぎれもない」「祖国防衛戦争であり、であればこそ民族をあげて戦いぬきつつある」との歴史観により、陸海軍軍人秋山兄弟と俳人正岡子規を描いた。この司馬の日露戦争観が一般的であった。

しかし歴史的事実を追うと、露国はこの戦争に消極的であった。しかも戦場は、満州と朝鮮であり、日露両国は、この地を外交でなく、戦争という手段で奪い合ったのである。とても日本の祖国防衛戦争とは言い切れない。

大国露国との無謀ともいえる戦争は、避けることができた。明治三四年五月の総理大臣の決定が、その後の日本の運命を決めることになった。反対する元老を押さえ、桂首相・小村外相は、日英同盟の締結に全力で取り組んだ。新聞などの報道機関を味方につけ、民衆を次第に戦争になびかせていった。しかし民衆から手酷くそのしっぺ返しを、焼き打ち事件で被ることになった。

まさに日本の中心、帝都東京で起きた民衆の大騒乱は、一時は革命をもたらすのでは、と危惧されるほどの規模となった。

しかし、千家尊福知事の越権行為ともいえる出兵要請が、騒動沈静化の端緒となったのであった。

尊福は明治三一年東京府知事就任後、山県内閣、伊藤内閣、桂内閣の三内閣に仕え、七年が経過した。これまでの府知事二、四人分の期間であり、最長となっていた。

しかしどこからも、千家尊福東京府知事交代の動きは出てこなかった。尊福の存在は、危機に直面した時こそ、何よりも大きいものであったのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

神（仏）と人間はどんな関係？（二）

鍋屋次郎

先週に引き続き、日曜日午後、聖キリスト教会の礼拝堂のサイドルームで洋介はジョンの来るのを待っていた。

真夏の窓外は、教会庭の銀杏の葉の緑が美しい。きれいに黄ばむのは十一月末頃だろうか、などととりとめのないことを思っていると

「洋介、お待たせ」

とジョンが入ってきた。ジョンがテーブルを挟んで洋介の向かいに座り

「洋介、日本の神様について洋介なりの説明を聞きたい」

と切り出した。洋介は

「先週の話を再確認すると、ユダヤ教やキリスト教、恐らくユダヤ教から分かれたイスラム教も、神様は万物の創造主で、人間は神様の被造物だよね。被造物は絶対的に創造主の命令には服従しなければならない、という関係が存在する。日本人の神様は、日本人の創造主ではない。つまり日本人は神様の作り物ではない。だから神様から絶対に守らなければならないという、人間に命じられた、ユダヤ教で言う律法はない。そこが根本的に異なる所だよね」

ちょっとジョンを見た後

「先ず日本人の神様が日本人を作ったのではなく、神様は神様、人間は人間で、ユダヤ教のように創造主と被造物と云う関係ではないことを前提として理解してほしい。僕自身よく分かっていないから、ジョンに分かるような説明ができないかも」

自然界の恵みに感謝する日本人

洋介は続けて

「日本人はいつごろからか知らないけど、大昔から、宇宙万物、地上にある全てのものに神が宿っていると信じてい

るのだよ」

怪訝な顔をして聞いているジョンを見て

「ジョン、日本人は自然界の恵みに感謝して生きている民だと思うよ。それと日本人は自分の力の及ばないところを、神様に守って戴いていると感謝している民族だよ」

ジョンが

「洋介、日本の神様は大昔から日本にいたの？それともどこかからやって来たの？」

「僕はよく知らない。神話に出てくる神様が宮崎県の日向の高千穂と云うところに降りてきて、天照大御神とか大国主命とかがその後現れて日本の国を作ったと古事記に書かれています。古事記と云う書物は日本最古の歴史書と言われていて、出来た年代は和銅五年（七一二）で、太安万侶という人が編纂して、元明天皇に献上したものです。この年は神武天皇が即位してから一二八九年も後のことです。この経過年数が正しいかどうかは別として、太安万侶が文字のない時代から口伝えに伝えられていた神話を編纂したのではないかと思います」

「その古事記に出てくる神様は、日本の神話の起源と考えられるのですか」

「うん、そういうことだと思うけど」

「神様が降りてきた場所は日向の国と言ったけど、神様はどこから降りてきたの」

「それは知らない。日本人は天からとしか思っていないと思うよ」

洋介は続けて

「それと、先程日本人は自然界の恵みに感謝して生きていると云いましたよね。それが大昔から、いつのころからかは分かりませんが、宇宙万物と云うと大げさ過ぎるかもしれないけど、地上にある山・川・海などの自然と動植物の全てに神が宿っていると信じているのだよ。だから日本には八百万の神があって、日本人はそれを信じていると言われているよ」

「ヤオヨロズノ神ってなに？」

洋介は立ち上がって、ホワイトボードに八百万と書いて

「ヤオヨロズは八百万と書くの。つまり八百万の神様がいると言われています」

訳が分からない、と言った顔をしているジョンに

「例えばね、井戸には井戸の神様、川には川の神様、海には海の神様、樹齢が古い樹木にはご神木と云うのもあるし、名前の付いた何々の神と云う固有名詞の神様ではなく、そこを守ってくれている神様、という考えだと思うよ。井戸は水が涸れないようにお守りくださいとか、川では上流に向かって氾濫が起きませんように、というように、それぞれ守ってくださる神様にお願いするのだよ。他には海水浴が始まるとき海水浴場で海開きという行事をやって、神主さんが海の安全をお祈りしています」

ジョンは

「うん、よく分からないけど、日本のような、文化にしても科学にしても大変な先進国が、どうして自然界との関係を科学的に考えないで、神頼みをするのかがよく分からない。不思議な感じがする」

ジョンは続けて

「洋介、ところで多くの日本人が、神様をどのように思っていて、神様にどのように対応しているか、教えて欲しい。お正月の日本人の初詣、新聞報道によれば明治神宮とか川崎大師などはお正月三日間で三百万人がお参りしたなどがニュースになっていますね。十二月三十一日から一月一日に日付が変わった瞬間、テレビでは明治神宮に凄い人数が参詣に来ていることを報道していました。洋介、こんなに大勢がどうして年の最初の日の最初の時間に我先にとお参りするの？神様のお誕生日とか？」

「日本では神様の誕生日など考えたこともない。日本人は一年の最初に『今年も家族が無事に過ごすことができますように』とか、『希望大学に合格しますように』とか、『いい結婚相手が見つかりますように』など、その人その人の思いで祈願しているのではないかと思うけど。しかしお正月初めのこの初詣は相当部分がレクリエーション化していることも否定できないと思います」

「お参りしてどうなるの？神様は願いを聞いてくれるの？」

「聞いてくれることを願って、または信じて、初詣をしていると思うよ。家族安全を願った人で、年末になって家族一同が無事一年を過ごすことができた人は『家族一同、事故も病気もなく無事年を越すことができたから、お正月はまた初詣に行って、守ってくれたお礼と、また来年も守っていただくことをお願いしよう』または希望大学に見事合格した人は、『神様へのお礼と新たな大学生活の願い』を持ってまた初詣に行くでしょう」

「洋介、願いが聞き届けられなかった人は、『役に立たない神様』ということでもう初詣に行かないということにはならないの？」

「そうはならないと思うよ。願いがかなわなかった人は、そのお願いする事柄の成就のために自分の努力・・例えば受験であれば勉強が足りなかったなどを反省して、再度お参りしてお願いする人が多いと思うよ」

「一月一日になったばかりの時、テレビで明治神宮の初詣に来た人、凄く大勢の状況を放送していたね」

と言ったジョンは、突然思いついたように

「ちょっと待って！　明治神宮って日本の明治天皇を祭ってあるのだよね。明治天皇は人間だよね。それが神様になって皆さんからお参りされてお願いを聞くわけ？　それと川崎大師はお寺だよね。神様ではない。この辺が分からない。日本の神様って人間もなれるの？」

「明治神宮は皇室所縁の神社として、明治天皇夫妻をお祀りしているところだよ。だけど、一般参詣者はお願い事や

祈願を明治天皇夫妻にしているという意識はなくて、都心の近いところでなんとなく厳かな感じのする神社で、どの神様と云うことはなく、ただ、神様に祈願をする、という意識ではないかと僕は思います。明治天皇ご夫妻をお参りしてお願いしているのだ、という方がいれば困るけど」

「洋介の話を聞いていると、日本人がお願いする神様は特定の神様ではなくて、神社に祭られているどの神様でもいい。神社であればお参りする、ということになってしまう」

「川崎大師はお寺だけど、災厄はすべて取り除いてくれる厄除け大師として、信仰を集めている大師だよ」

洋介はここまで言って、ジョンを見つめて

「今さっき、ジョンは日本人は神様であれば、それが誰であっても関係なく御参りする、と言ったが、それは日本人の神社に祭られている全ての神様に対する敬虔な思いからきていると思うよ。これを理解することはなかなかできないかもね」

と、ジョンを見つめて

アニミズム（Animism）

「僕はね、日本人が大昔から八百万（やおよろず）の神を信仰する原点は、アニミズム（Animism）にあると思います。日本人は自然界から与えられる恵みの全てが神様から与えられる、結果として、人間が及ばないところを守ってくれているという感謝の思いから、八百万の神を受け入れることができていると思います。八百万の神様には、宇宙万物の自然現象から動物、植物に至る迄ありとあらゆるものが信仰の対象の神になっています。このように言うと、ジョンは『日本人は原始民族だ』と云いだすのではないかと心配になってくるよ」

と言ってジョンを見た。ジョンがどのように返事をしていいのか言葉を探している様子を見た洋介は

「ジョン、もう一度言いましょう。日本人の心の中に、大昔からいわゆる原始的ともいえる、万物に神が宿るというか、万物に霊魂が宿っているとして、それを崇め受け入れる宗教的な心があります。一見、文明とは程遠い未開民族を想定するかもしれないが、日本人は自然現象や植物・動物にも、ありとあらゆるもの全てを尊重して謙虚に接すること、ここが基本で、四季の自然現象を含めて全ての動植物に神が宿っていて、四季それぞれ恵みを与えて人間を活かしてくれている、という感謝の気持ちからそのようになっていると思うよ」

洋介はお茶を一口飲んで

「そのような万物に対する謙虚な心から、八百万の神への信仰の形態を見て、『偶像崇拝』と決めつける意見も聞いているが、実態はそうではなく、人間の謙虚さから発する、人間が及ばない力、例えば、井戸であれば水が枯れることなく人間に水を供給してくれるから井戸に宿る神様を祭り、お供え物を備えるとか、井戸そのものを崇拝するのではなく、井戸に宿る神様を崇拝している、というように理解してほしい」

洋介はジョンが疲れている様子なのを見て休憩を提案して、おやつとして教会のご婦人からの戴きものの水羊羹を食べた。休憩が終わってジョンが話し始めた。

「洋介、洋介は日本人が全ての神様に対して謙虚に接しているというが、大分前になるが、家を建てる土地の上でやっている式典を見る機会があった。鳥帽子をかぶって白衣を着た人が祭壇に向かって何度もお辞儀をしたり、祈っていたよ」

一呼吸おいて

「そこはね、何日か前に古い住宅を取り壊した場所で、その日は雑草もゴミもなく綺麗にお掃除がしてあって、その土地の上にテントを張って、中に祭壇らしいものを作って、烏帽子をかぶって白衣を着た人と、黒の略式礼服を着た人たちが何人かが集まって、祭壇に向かって、手を打ってお辞儀をしていたのを見た。見たことがなかったから少し離れたところから見ていたが、あれは何をしていたのだろうか」

と質問があった。

洋介は聞きながら「地鎮祭」のことと理解して、机上のパソコンを開けてインターネットで地鎮祭を検索して、式次第の画面をパソコンのデスクトップいっぱいに表示して、ジョンを洋介の横に座らせて

「ジョンが見たのは、建築工事が安全に行われますようにという、家の建築を始める時に行う神様への安全祈願の式典だったと思うよ。この式典を地鎮祭と言って、その式典の式次第を画面に出したから説明しよう」

と言って説明を始めた。

「地鎮祭は建物を建設する場所で行うことになっていて、そこを清めて、テントを張って、祭壇を作って、献上物（さしあげ）を祭壇に供えてから始めることとなっている。式次第はここに「降神の義」と書いてあるのは、この祭壇のところに神様に降りてきていただくお祈りなのだよ。それで降りてきた神様に、この土地に建物を建築する工事が事故もなく安全にできるように守ってください。目的通りの建物を無事完成させてください、というお祈りをした後、建築主と工事関係者が玉串を奉奠して二礼二拍手一礼の拝礼をします。一通り参加者の拝礼が終わると、式次第に昇神の義と書いてあるよね。ほら、ここに。これは神様が帰ってゆくお祈りをして、神様がお帰りになるところを、全員起立して頭を下げてお見送りをする。それで地鎮祭の式典は終わります」

「私は少し離れたところから見ていたので、式典の内容まではわからないけど、多分、今、洋介の説明のとおりだっ

たと思うよ。それで質問があるのだけど」
「どうぞ、なんなりと」
「地鎮祭の祭壇に降りてきてくれる神様はどこにいてどんな神様ですか」
洋介は再びパソコンで検索して
「地鎮祭は氏神様にお願いすることになっていて、日本では住んでいる地域ごとに氏神様があって、その神様をお招きします。なぜ氏神様かというと氏神様がその土地を守っていると考えるから、と書いてあるよ」
「守っているって、どういう意味？」
「守っているというのは、氏神様は一定の地域の土地と、そこに住む住民の安全を守ってくれる神様だから、建築する人もこの地域の住民で、氏子として神様に拝礼して、神様が守ってくれると信じてこのような地鎮祭が行われるのだよ。横浜は都会になってしまったけど、田舎の村を想定してみるとわかると思うけど。村では昔から全村民が氏子になっている神社があって、それが氏神様だよ」

人間の方が偉い？

ジョンは突然驚いたように立ち上がって
「洋介、それから降神の義と昇神の義というのは、僕の言う言葉は乱暴かもしれないが、その祭壇のところに神様をお呼びして、言葉を変えればお招きして、お願いがすんだら帰ってもらう、ということだよね」
「乱暴にいうとそういうことになるのかな」
「乱暴ではないよ。客観的に考えてみると、人間の都合の良い時、都合の良い場所に祭壇を作って、神様に来てもらう。言葉を変えれば神様を呼び出す。そしてお祈りと云うかお願いが終わったら、つまりお願いが終わって神様にこれ以上そこにいてもらう必要がなくなったら、お帰り戴く。地鎮祭は神様がいないと式典にならないから神様をお呼びする。これは人間の都合で神様を呼び出し、用事がなくなったらお帰り戴く。どうも人間の都合で神様に来てもらったり、帰って貰ったり、ということになるよね。神様より人間の方が偉い、人間が神様を使っている人間中心の行事、ということになるのでは」
「日本人は、人間が神様よりもえらい、人間中心なんてことも思っていないよ。僕はクリスチャンだから日本の神様も仏様も信じていないけど、生まれ育ったこの日本で、日本人の神様や仏様への信仰を見ているから言うのだけど、神様は人間の思いや力の及ばないところを守ってくれる存在で、神様にお願いすることで安心感と云うか、安らぎを得ることができる。しかし、先ほどの話の地鎮祭でも、地鎮祭をやって神様にお願いしたからもう安心ということではなく、建築業者が工事中の安全管理にベストを尽くす中で、無事工事が完了すると、『神様のお守りもあって無事工事が完了した』という神様への感謝の思いを持つ。その

時には「竣工式」と云う式典を行って神様に感謝します。この関係が神様と日本人の関係で、日本人の謙虚さが現れていると思うよ。ただ、地鎮祭を行わないで工事を着工した場合は、地鎮祭をしてなかったから何か不慮の事故でも起きるのではないか、という不安を持つのは否定できない。地鎮祭をやっていれば、そのような不安を持たない安心感というか安らぎというか、そのような心の状態が工事関係者にはとても大切なことだと思うよ。この点は外国の人には理解してもらえないかもしれないね」
「洋介、先程の僕の言葉は、地鎮祭の順序を動画的に描いてみると、神様が人間の呼び出しでやってきて、用事が済むと人間のお帰りくださいと言う言葉で帰って行く絵を頭に浮かべたから言ったのであって、今、洋介の話で、日本の人々の神への思いが理解できたような気がする。ところで、日本人の中には『あれほど神様にお願いしたのに何もご利益がない。やめた！』という人はいないの？」
「ご利益宗教にはまっている人はいますね。この神様を信じていると、病気が治ったとかいう事例を書いたチラシが配られているときがあります。詳しいことは分かりませんが、病気を治してもらえる、ということから自発的な献金も沢山する方もいると、巷では言われています。本当かどうかは分かりません。噂ですから」
「そのような人は、次々と神様を変えているのですか」
「実際に見たことはありませんが、大衆的な週刊誌にはそのような記事があったように思います。その記事の内容の真偽は分かりません」

お札とお守り

ジョンが元の席に戻って
「洋介、話は替わるけどね、この間アメリカから成田空港に着いて、時間があったので観光案内所に行ってどこか見ることのできる所はないかと聞くと、成田山新勝寺を教えてくれた。バスルートも教えてくれたので行って来ました。
成田山新勝寺で売っている『お札』と『お守り』のことなのだけど、多くの参詣人が有難がって買って行きました。お札はどのように使うの？　和紙で作られていると思いますが、折りたたんだ紙の表に成田山新勝寺と大きく書いてあって、文字はそれだけではなかったと思います。それからお守りは木で作られているものと、和紙を小さく畳んだものとあったように思いますが、売り場には厄除けとかご利益が書かれていたと思います。お札とお守りは成田山とどのような関係にあるか、教えて欲しい」
洋介は手元のパソコンで検索して
「うん、成田山新勝寺にお札もお守りもあるよね。成田山は仏教の「真言宗智山派」のお寺で、川崎大師と同じ宗派と書いてある。ご本尊は不動明王で、家内安全、交通安全

と書いてある。お参りに行く人々は、家族が安全に暮らすことができますように、また交通事故に遭いませんようにと、お祈りするのでしょうね。それでお札を家の中に掲げて毎日拝んでいれば、成田山へお参りに行ったと同じご利益が得られる、ということだと思うよ。お守りは身に着けていれば交通事故に遭わない等のご利益があると信じて身に着けていると思うよ」

「ということは、お札やお守りは神様や仏様の代理？」

「代理とは違うね。お札やお守りに家内安全や交通安全のご利益があるように、ご本尊の不動明王にお祈りしてあるから、単なる紙や木でなくて、ご利益霊験があるものになっていると成田山では言っているのだよ」

「偶像礼拝ではないの？」

「形はそうかもしれないが、成田山が言っているご利益霊験を信仰の対象にしているのだから、偶像礼拝にはならないと思うよ」

日本の神様の命令は？

ジョンが

「日本の神様は、日本人に『人間はこのよう生きなさい』という様な命令はしてないの？」

「僕はそのような神様の命令などは聞いたことがないからないと思います」

「では、日本人の生きる基準と言ったものは、神様との関係では何もないの？キリスト教では洋介も知っている通り、旧約聖書では『あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない』とか『姦淫してはならない』などが定められている『十戒』とか、新約聖書ではイエス様の教えで『隣人を愛しなさい』とか沢山ありますよね。そういった人間が生きて行くための基準のようなものはないの？」

「神様が人間に対して『これを守ってこのように生きなさい』ということはないと思うよ。あれば必ず各神社で人々に教える筈だからね」

「日本人の神様への信仰は、例えばキリスト教のように『神様の教えを忠実に守り、神に対して罪を犯さない』という様な関係はない、ということ？」

「でもね、日本人が神仏に祈ること、その祈りの中で、人間の心の中に、つまり一般的に悪いことはしない、これからも正しい道を歩きますから、家族一同の安全を守ってください、ということになって、生きる中での自戒ができて行くのではないでしょうか。ここに人間の心の中の浄化ができる宗教効果があると思います。そこに日本人の謙虚さがあるのでないでしょうか」

「ところで日本に神社数はどのくらいあるのですか」

「パソコンで神社数を検索してみると、あるホームページでは八万五千の神社があって、信徒数は一億六百万人と書いてあります。これは氏神様の神社が地域人口の全てを氏子として数えたり、参詣人の数を入れたりしているということなので実態は分かりません。また、全く別の所では、日本人の七十～七十五％は無宗教と云う統計もあります。僕もこの統計が『うん、こんなところかな』と思う様な数字です」

「日本人は『死んだ時の葬儀』をどのように考えているの？」

「死んだらお寺の坊さんに葬式をお願いして、お墓に埋葬してもらうから、死を考えるときまでは、お寺のことも、お墓のこともあまり考えていないのではないかと思います。田舎でも都会でも親子代々同じ家に住んでいる人達は、先祖から伝わるお寺とお墓がありますが、そうではなく、自分の代に都会へ出てきた人たちの多くは、殆ど考えていないのが実態ではないでしょうか。今、結婚式もやらない人たちが増えてきたのと同じで、死んでも葬式はやらない、そのまま火葬してもらって、樹木とか許されたところに散骨で済ますことを考え、寺もお墓もいらないという、それを手助けする葬儀社も出ているようですよ」

「先程洋介が言った『無宗教が人口の七十～七十五％いる』と言う数字を洋介はどう思いますか？」

「多くの人が、死んだときは仏式で葬式を行う、と言っても日頃の生活はお寺と全く関係なく、まして仏教徒と言えるほどお経が分かっているわけでもないと思うよ。ジョンのお話の地鎮祭でも、恐らく建築会社が氏神様の所に行って地鎮祭が行えるようにしていて、建築主は氏子と言われる地域に住んでいても、氏神様とは全く無縁な生活をしているのではないかな。だから、お正月に初詣に行った人の全てがそこの信者とは限らない。今、日本人で、毎日の生活のどこかで神様やお寺との関係を持っている人はきわめて少ないと思うよ」

「そうすると、日本人の多くの人々は、毎日の生活では神や仏とは無関係ということになるけど」

「その無関係の人たちは、神様との関係をどのように思っているのだろうか。無関係とは言いながら、神社のお守りを買ってきて子どもに持たせたり、ランドセルに結び付けたりしているよね。これはそうしないと不安だからではないですか」

「洋介、時間も遅くなってきたので、結論というわけではないけど、多くの日本人の神様との関係は、一言で言ったらどうなるかな」

「一言では言えないけど、神社・仏閣等に所属していない多くの日本人は初詣などで神様（神様なら誰でもいいというわけではないけど、とにかく神様、お寺であれば仏様）に生活上などの安全をお願いすることで、心の中で安心を得ている関係、ということになるのかな。むしろ、お願い

しないと不安なので、お願いしていると言った方が正確なのかもしれない。しかし、神様はお願いされたからと言って請け負っているわけではないし、お願いした人に約束するわけでもない。そして、一年間に一度も神社やお寺に行かない人たち、つまり多くの無宗教の人たちがいることも事実だと思うよ」

「お願いする人間の方が偉いのか、お願いを聞いて聞き届ける方が下なのか、の上下関係については？」

「先にもお話ししたけど、日本人は自分の能力を上回る、自分の力では及ばない分野のことを神様にお願いする。これは一例だけど、ある夫人が神様に『今年こそは息子の嫁が決まりますように』とお願いして、決まらなかったらまた来年お願いする。決まらなかったからと言って神様を恨まない。後日決まったら『神様にお願いしていて決まった』と喜んで神様に感謝する。人間はひたすらお願いするのみだから、人間が神様より上と云うことはあり得ないよ。このような、人間に謙遜と、ゆとりと、おおらかさと、感謝の気持ちを持たせてくれている神様との関係が、日本人の素晴らしい社会を作っている源だと思うと、このような神様概念を持っている日本人の素晴らしさを誇りに思うよ。キリスト教の素晴らしさとは、また次元が異なる素晴らしさだよ」

「洋介、今日は有難う。いい勉強になったよ。地鎮祭の話では、人間が神様を使っていると思ったけど、洋介の話で分かりました。日本で無宗教が七十%程度いるという話も聞いたけど、今は世界的にそうなっているのではないかと思う。これは全世界の課題だね。今日はどうも有り難う」

（完）

明治時代の著述者

渋江保の一生（その九）

山本勉

第八期　静岡時代①（周智郡犬居村（領家村）現浜松市天竜区春野町）

一八八五年（明治十八年）十二月～一八九〇年（明治二十三年）三月

渋江保の静岡時代は大きく二つに分けることが出来る。一つは周智郡犬居村（領家村）時代、そして、もう一つは静岡市時代である。

先ず周智郡犬居村（領家村）時代について見ていきたい。周智郡犬居村（領家村）は町村合併により一九二八年（昭和三年）犬居町、一九五六年（昭和三十一年）春野町となった。その後二〇〇五年に周辺十市町村と共に浜松市へ編入合併し現在に至っている。渋江は東京横浜毎日新聞に勤務している時に新聞記者としてこの地を訪れている。現浜松市天竜区春野町は静岡県西部の遠州地方に位置し、東海道沿線にある袋井市袋井駅より車で一時間ほど入った山間にある。

『渋江抽斎』に「保は枳園の訃を得たのち、病のために新聞記者の業をやめ、遠江国周智郡犬居村百四十九番地に転籍した。保は病のために時々卒倒することがあったので、松山棟庵が勧めて都会の地を去らしめたのである。」(1)とある。松山棟庵は幕末から明治期にかけての医師で、渋江に先立つこと十数年前に慶應義塾で福沢諭吉に英学を学んでいる。松山棟庵は日本の近代医学の発展に貢献した医師であり、東京慈恵会医科大学の創立者でもある。『渋江抽斎』にある「犬居村」は、一八八九年（明治二十二年）に当時の堀之内村・領家村・和泉平

村が合併して発足した村である。このため、渋江が犬居を訪れた当時、犬居という地名はあったものの堀の内村犬居であり、森鴎外が『渋江抽斎』の中で「犬居村」と書いているのは誤りで、渋江の記憶違いと思われる。

ここに渋江の転籍地について興味深い資料がある。川崎司著作の『高木壬太郎　その平凡な生涯をたどって』に人物資料として渋江保のことが書かれている。その中に「遠江国周智郡領家村百廿四番地　静岡県士族渋江保安政四年八月十日生」と記載があり、「渋江保履歴書静岡市教育委員会」(2)とある。この資料の出典について静岡県立図書館を通して静岡市教育委員会に問い合わせをしていただいたが、現在のところこの資料の出典はわかっていない。

この資料の渋江の転籍地は『渋江抽斎』記載の転籍地と相違があるが、渋江が犬居を訪れた当時、「犬居村」の村名がなかったことを鑑みると、『高木壬太郎　その平凡な生涯をたどって』にある渋江保履歴書記載の「遠江国周智郡領家村百廿四番地」の方が信憑性が高いと思われる。

では渋江がなぜ交通の便の悪い周智郡犬居村（領家村）に転籍したのか。周智郡犬居村（領家村）に在住したことがわかる数少ない資料から渋江の足どりを追ってみたい。

木下恒雄の『気田川畔民俗誌5山林の思想』に「遠江国周智郡犬居村百四十九番地」の所在についての研究がある。しかし、実際に直接木下恒雄氏に面会し尋ねてみたが今のところその所在を特定することはできなかった。

渋江が周智郡犬居村（領家村）に転籍の理由の一つは『渋江抽斎』にあるように「松山棟庵が勧めて」であるが、渋江自身も東京横浜毎日新聞時代に新聞記者としてこの地を訪れている。渋江の最初の周智郡犬居村（領家村）来訪については、木下恒雄の『気田川畔民俗誌5山林の思想』に「明治十七年から始まっていた王子製紙会社気多工場が創設されたのを、取材に来たものであると想像する。」(3)とある。王子製紙は現在の王子ホールディングス（王子製紙）と日本製紙の前身にあたる製紙会社で、渋沢栄一が中心となって設立した会社である。現在の浜松市天竜区春野町気多に一八八九年（明治二二年）に王子製紙気多工場は新設された。

次に渋江保が周智郡犬居村（領家村）に在住していたことを示す資料を見ていきたい。静岡大務新聞の記事『英学研究所』（明治十八年五月十五日付）に次のような記載が見られる。「遠州周智郡領家村の栗田輝永氏の

邸内へ先頃より英学研究所なるものを設け東京より竹谷熊吉を教師に聘し昨今頻りに英学を研究さるるに据り入学者もまた数十名の多きに及ぶといふ。」(4)静岡大務新聞の記事『英学研究所』には、渋江保の名前の記載はないが、『嶽陽名士傳全』の「栗田輝永君之傳」に静岡大務新聞の記事に見られた竹谷熊吉に並んで渋江の名前が見られる。

「栗田輝永君之傳」には次のように渋江のことが記載されている。「仝十六年に犬居銀行を設立し十八年に竹谷渋江の二氏を聘して英学研究所を設置す君の公共の事業に推薦せられたるものを列挙すれば」(5)と栗田輝永の功績の中に渋江の名前が見られる。竹谷とあるのは、竹谷熊吉、また渋江とあるのは渋江保に違いない。

『嶽陽名士傳全』にある渋江が渋江保であることを裏付ける資料がある。この資料は、『犬居小学校文書（若身）』の中の『領家尋常小学校沿革史八』に閉じ込められていた『栗田輝永君小傳』である。この小傳は、一八九〇年（明治二十三年）六月十三日に出版されている。執筆者として森下喜作(6)の名がある。『領家尋常小学校沿革史八』には、第九附記として次のように筆書きで題名が書かれている。「第九附記　一学校の為に功労あるものの事績　周智郡犬居村領家七十八番地平民栗田輝永」(7)この附記は二頁に渡って書かれており、その後に、『栗田輝永君小傳』が閉じ込められている。『栗田輝永君小傳』には「出版」とあるので小冊子として出版したのだろうか。この点について郷土史家の木下恒雄氏に尋ねたところ、木下恒雄氏の手元に『栗田輝永君小傳』の複製があった。この複製を木下恒雄氏よりご厚意で譲り受けることが出来た。しかし、『領家尋常小学校沿革史八』に閉じ込められていた『栗田輝永君小傳』は筆書きの直筆であり、譲り受けた小冊子は活字で組まれた印刷物である。文面の内容は同一であるが、直筆のものには、最後の行に「明治廿七年静岡県々会議員トナル。行年六十五歳ナリ。静岡県平民犬居同志会々長森下喜作氏に据る。」(8)とある。

この二つの『栗田輝永君小傳』には竹谷熊吉と渋江保の両氏の名前が次のように記されている。「明治十二年ニ於テ七百余円ヲ投シ領家学校ヲ新築シ十四年其経費中へ百円ヲ寄附シ再ビ十八年ニ至テ三百三十円ヲ寄附シ仝年竹谷熊吉渋江保ノ両氏を聘シテ自村へ英学研究所ヲ設置セリ」(9)

木下恒雄氏によれば、山田萬作が『嶽陽名士傳全』を編集するにあたり、森下喜作に『栗田輝永君小傳』の執筆を依頼したのが始まりであるとのことだ。先ず『栗田輝永君小傳』を森下喜作が執筆し、それを参考に山田萬作が『嶽陽名士傳全』に『栗田輝永君小傳』を載せ、一方静岡県士族間宮武が『栗田輝永君小傳』を小冊子とし

て活字を組み印刷出版したと考えるのが自然ではないかと思われる。

栗田輝永（一八五〇～一九〇四）は地域の名望家であり、犬居銀行の設立を始め、街道の整備や領家小学校の建設等数多くの事業を手がける傍ら、静岡県議会議員も務め郷土発展のために尽力した人物である。

次に渋江自身が周智郡犬居村（領家村）を訪れたことを記した資料について述べてみたい。森鴎外が『渋江抽斎』を執筆するにあたり参考とした『抽斎歿後』の他に、渋江は山路愛山の『独立評論』に春野町犬居を訪れたことを次のように記している。「東京新聞の話は之れ位に止めて置いて序でに少しばかり地方新聞の古い頃の話をしませう。私は明治十八年頃精神過労のため毎日新聞を止め、遠州の乾へ引込んで暫らく其処で静養して居たが、其後東京へ帰りがけに静岡へ立寄った処を旧知の前田五門といふ人に取捉へられ、否応なしに同市に引き止められて、静岡英学校、文武館及び高等英華学校の三校に教鞭を取ることになった。」(10)

ここに記載のある「乾」が「犬居」であることは言うまでもない。

渋江と竹谷が教師となって村民に英語を教えた英学研究所ではどのような英語教育が施されていたのか、村民たちは渋江や竹谷から英語を通して何を学んだのか。渋江が犬居を去った後、英学研究所はどのようになったのか、その詳細は今のところわかっていない。

渋江は一年にも満たない期間を犬居で過ごしその後静岡に移り住むことになる。

注記

（一）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）三〇一頁

（二）川崎司『高木壬太郎　その平凡な生涯をたどって』（近代文藝社　二〇一〇年一月十五日）三五四・三五五頁

（三）木下恒雄『気田川畔民俗誌5山林の思想』（一九九六年五月吉日）八七～九〇頁

（四）『英学研究所』（静岡大務新聞　一八八五年五月十五日）

（五）山田萬作編集発行『嶽陽名士傳全』（暁鐘新報社印刷　一八九一年十月十七日）一一九頁

（六）森下喜作『栗田輝永君小傳』（『領家尋常小学校沿革史八』閉込み　一八九〇年六月十三日）

（七）森下喜作『栗田輝永君小傳』（『領家尋常小学校沿革史八』閉込み　一八九〇年六月十三日）

（八）森下喜作『栗田輝永君小傳』（『領家尋常小学校沿革史八』閉込み　一八九〇年六月十三日）

（九）森下喜作『栗田輝永君小傳』（静岡県士族間宮武印刷　一八九〇年六月十三日）

森下喜作『栗田輝永君小傳』（『領家尋常小学校沿革史八』閉込み　一八九〇年六月十三日）

（十）山路愛山『独立評論』第四号の澁江保氏談話「新聞今昔譚」（独立評社　一九一四年四月一日）六〇頁

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇一〇二六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

夢夢夢2

匠　克仁

夢夢夢は夢の途中で終わったので、今回は、その続きで夢夢夢2とする。それなら前回も何回目が書くべきだが夢夢夢1とはあえてしなかった。その時は、読み切りの夢夢夢で完結の予定で書いていたからである。もっとも夢夢夢3は書かない。夢夢夢2は夢夢夢の続きだから夢夢夢夢夢を読む前に、夢夢夢2を読まないでほしい。夢夢夢夢夢の最初の夢夢は、努努（けっして）を当て字で夢夢としたのである。けっしての意味の努努をゆめゆめ夢夢で使わないようにと思ったが使いたくなった。この夢夢いや努努は英訳ではneverになる。ということは「夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢あきらめるな」Neverを夢夢と訳した、チャーチル英首相の名言である。今回の夢夢夢2も短いエッセイになる。前回は夢の種類の中で夢中夢について少し書いたが、詳しく述べる。もっとも夢中夢といっても無我夢中で夢を見るというのではなく夢の中で夢を見るという文字通りの意味である。例えば夢から覚めたと思ったら、それも夢だった。ぼく自身が夢中夢をよく見る。二重構造のものでなく、三重構造の夢中夢中夢も見る。三重どころか、もっと多層になって夢中夢中夢中夢中夢中夢中夢中夢中夢だ。この夢の中で、夢を見ているぼく自身に対し、なんとかして夢を見ているのに気付かせようとする第三者的な自分が夢に存在するのである。その第三者的な自分も、自分が夢の中なのになぜ気づかないかとイライラする。そんな夢でイラつく第三者の自分を冷静に観察してる第四者が夢の中に生まれる。その冷静な第四者の自分を見ていて夢で、なんで他人事なんだと怒っている第五者が……と夢みている間に何人もの多重人格のぼくが現れる。五里夢中、じゃない、五里霧中の夢である。このような話は夢と現実と二項対立の様であるが、現実と思っていても夢かもしれないのである。読者「あなた」は、まんじを夢でなく現実に読んでいると思考する。読んでいるのが夢である。「あなた」は読んでいるのでなく、眠っていて夢を見ているのである。「あなた」は読むつまり思うので夢でなく現実に「あなた」がいると考えている。しかし夢の中で、まんじを読んでいるだけである。「あなた」は夢の中にいるだけで実在しない。「我思う故に我有り」は夢物語である。我が思っているというのは実際のところ夢で思っているだけなのである。「我思う故に我有り」は夢の中の演繹法で成立しているかもしれないが現実には夢と違って成立しないのである。「我思う故に我有り」は夢であるとぼくは哲学者のパスカルに反論した。という夢を見た。眠りながらもぼくは哲学的に思考する。この夢中夢の他に夢の種類がたくさんあるので、説明する。正夢（まさゆめ）＝夢で見たことが現実に起こること。逆夢（さかゆめ）＝夢と反対のことが現実に起こること。悪夢＝怖い夢。後述する警告夢や予知夢も該当する。警告夢＝現状のままで悪いことが起こると警告する夢。予知夢＝未来に起こる（主に悪い）ことを予知する夢。明晰夢＝夢の中で夢であると気付く（目覚めない）夢。象徴夢＝別のものがシンボルとして表れる夢（後述）　不安夢＝不安がそのまま表れる夢。例えば、試験の夢。願望夢＝願望がそのまま表れる夢。例えば、結婚の夢。現在夢＝現在していることを夢の中で同じ様にする夢。過去夢＝子供の頃など過去に経験したことを繰り返す夢。吉夢＝良い夢。凶夢＝悪い夢。白昼夢＝覚醒しながら見る夢。白昼夢は夢分析では夢でないと言われている。さて夢分析と言えば、精神分析家のフロイトである。有名な夢の症例として、既婚の女性が見たものがある。帽子の夢であるがつばの左が垂れた山高帽である。象徴夢では夢のシンボルの中でも代表的なものが帽子である。象徴夢の帽子は男性器のシンボルである。フロイトは、この夢を聞いて、夫の左玉が垂れているのを気にしていると夢分析をするのである。『左玉の法則』はフロイト博士の夢分析にも出てくる。読者に精神医がいたらぼくの見た夢を書くので分析して下さい。最近見たのは恐ろしい悪夢である。ぼくは現実でも落とし物が多いが落とし物の夢である。ぼくは長い坂道を下って歩いている。そんな夢でズボンの左の裾から何かが落ちる。左の金玉という夢である。右裾から金玉が落ちる。二個の金玉が転がる夢である。転がり落ちる金玉をぼくは追いかけて坂道を夢中で駆け降りる。金玉は大型トラックに踏み潰される夢である。実は、何か追いかけるよりも追いかけられる夢の方が圧倒的に多い。先日も直腸鏡に追いかけられ

る夢を見た。この前は鮫が大口を開けてぼくを追いかける夢である。噛むのでなく尻の穴に突っこんで大口を開く夢である。映画化したらヒットする。最も恐ろしかった夢は銀行に勤めたときに見た次の支店に転勤するという夢である。その支店とは択捉島支店なのである。しかも夢の中での赴任は徒歩と水泳という条件である。季節は夢も真冬である。えんえんと歩き続けて、泳ぎ続ける悪夢である。反復夢というのである。それよりも恐ろしい夢は銀行で働いたときに見た別の会社に出向するという夢である。○○○銀行系列の子会社に○○○石炭という夢幻のような会社が新設され、そこに出向し働くという夢である。仕事は、えんえんと素手で石炭を掘り続ける夢である。他に変身する夢が多い。レミングに変身する夢を見た。物質移転装置を使用して、ゴキブリ男になる夢を見た。自分の玉玉になる夢とか、パンティーになる夢とか将来の夢はパンティーになることと言う小学生の夢を見た。本当に色々なパターンの変身を経験した。初夢は「一富士二鷹三なすび」が良いというが本当にその夢を見る人がいるのだろうか。よりによって、なすびを夢に見るなんて、富士・鷹と比べて変である。ところが夢理論では、なすびは英語でエッグプラントで、豊穣の夢象徴である。食物が豊かとか、子宝に恵まれるとかの夢なのである。これは心理学者の『プロカウンセラーの夢分析』に説明されていた。ところで、ぼくはなすびの夢を見たことがある。左右の玉玉が二つのなすびになる夢である。目覚めたら、煩悩くんがなすびだった。鷹の夢もある。鷹に鷲づかみされ空高く連れ去られるという夢である。上空で鷹は鷲づかみを離して墜落する。その夢では『空飛ぶ人喰いイカ』で無事着陸する。富士山の夢も見たことがある。富士山は煩悩くんのパンツという夢であった。目覚めても富士山状態であった。まんじで夢を随分と書いてきた。初エッセイは『風船恐怖症』で夢の話を書いた。実は執筆中のタイトルは違っていて『夢十夜』であった。夏目漱石の名作にならって「こんな夢を見た」で始まるエッセイである。

夢1直腸鏡が火を吹いて襲い、ぼくのお尻で爆発する。
夢2ぼくはお尻の穴の直腸鏡から火を吹いて飛び回る。
夢3鳥の足の生えた直腸鏡に体をなぶられる。
夢4お尻の穴から巨大な直腸鏡が出て、山となる。
夢5巨大な直腸鏡の内側とお尻の直腸鏡に挟まれる。
夢6目が覚めたら直腸鏡に変身していた。
夢7周りの物や人が全て直腸鏡に変わっている。
夢8直腸鏡がお尻の穴から入って口から出てくる。
夢9口鼻耳と全身の毛穴から直腸鏡が出てくる。
夢10直腸鏡でお尻の穴が裏返って体を飲み込む。

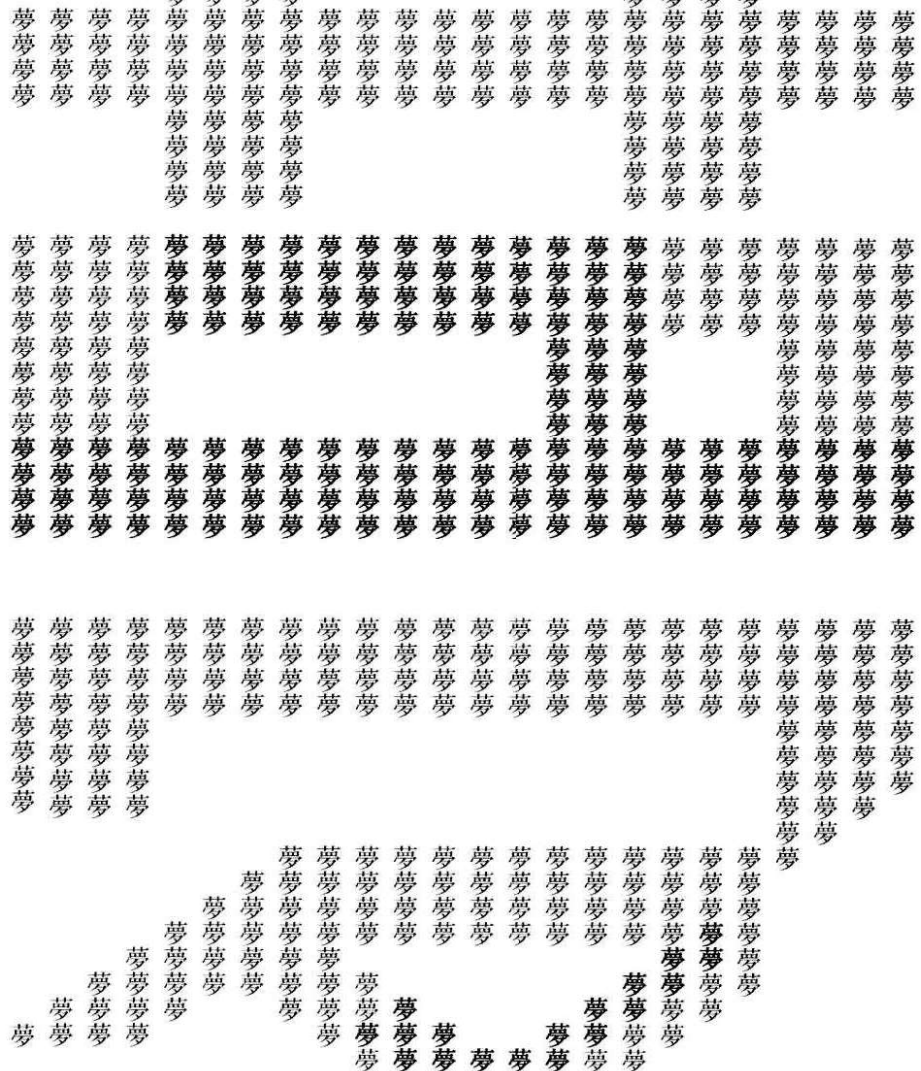
夢のエッセイは、他にも『地球制服』がある。「ぼくには夢がある」で始まるが、将来の希望の夢である。

夢1地球征服

夢2全裸の女子大生の満員電車　この話は最後に邯鄲之夢・胡蝶之夢の落ちがついている。女子大生には名前に夢の字が皆の名に付いている。一人目の女子大生は『真夢子』なのである。マムコだがムをンと読んでもよい。真夢子ちゃんは、女性の色気があるので女性のシンボルに夢の字を入れた。二人目はボーイッシュな女の子で『知夢子』である。女の子なのに男勝りで、ガキ大将的な知夢子ちゃんである。三人目はとても運の付いた子で『宇夢子』である。汚いといじめられる醜いアヒルの子の宇夢子ちゃんだったが、美しい女子大生になった。他にも夢を書いたのは、『白豚に乗った王女様』で、「ぼくには夢がある」で始まる。このエッセイはほとんど夢であり夢とは逆玉である。おかげで右の玉と左の玉が逆になる夢を見た。他にも夢を書いたので、分析してほしい。

夢1『白馬に乗った王女様』
夢2『白豚に乗った王女様』
夢3『白豚に乗った大女様』
夢4『白豚に乗った白豚様』
夢5『白豚に乗った女王様』
夢6『白豚と罵り乗る女王様』
夢7『白熊に乗った王女様』
夢8『白馬にまたがった王女様』
夢9『白馬とまたがあった王女様』
夢10『白馬とまぐわった王女様』
夢11『白布をまたにあてがった王女様』
夢12『白馬に登った王女様』
夢13『白馬鹿に乗った王女様』
夢14『墓場にのたうった王女様』
夢15『白馬に乗った王女様』
夢16『白UMAに乗った王女様』
夢17『白馬の脳になった王女様』
夢18『白い海馬になった王女様』
夢19『白海馬に乗った王女様』
夢20『白馬になった王女様』
夢21『白馬に乗った王子様』
夢22『白馬にまたがった王子様』
夢23『白馬並のまたがあった王子様』
夢24『白UMAのまたがあった王子様』
夢25『白馬に乗った玉子様』
夢26『白馬に乗った玉玉様』
夢27『白馬に乗った内親王様』

夢の中で一番は23で、次は6である。このエッセイで夢が入る熟語を色々と書いたが、最初に浮かんだ熟語が夢精であった。いかにもぼくらしいなあ。ぼくの最大の夢は、エッセイで自殺するのを諦めた人が一人以上いる夢である。それから地球を瞬間冷凍する夢である。この夢夢夢や夢夢夢2を書いているため、また活字でできた夢を見た。夢中夢である。夢の中に夢があるのである。



編集後記

二十名の同人の寄稿を得た一四四号は、確かなデータは持ち合わせませんが、記憶の限りではまんじ誌発行以来の記録ではないかと思います。内容と云い、寄稿数と云い、充実化している「まんじ誌」を互いに喜びたいと思います。

本号より新たに永田俊一氏と安藤剛氏のお二人を同人としてお迎えしました。永田氏はご専門分野の信託について分かりやすく寄稿され、安藤氏は氏のマラソン参加について、参加者の立場からお書きになって、先に同人に参加された米村氏、大貫氏と共にまんじ誌が一層幅広いジャンルを持つことができたことを感謝したいと思います。

世界はこれからどのように変わって行くのか、トランプ大統領のアメリカ最優先に加えて、イギリス、フランスその他の国々が移民受け入れに消極的な姿勢を打ち出し、世界の協調が崩れかけているように感じます。

同時に北朝鮮問題も日本にとっては大きな脅威になっています。過日アメリカ副大統領は「平和は武力？（力？）の裏付けによってもたらされる」という趣旨の発言がありましたが、現下の日本憲法はこれにどのように答えるのでしょうか。いつまでアメリカが日本を一〇〇％守る発言が続くのでしょうか。ローマの崩壊は、国の防備が外国からの傭兵であったことにも起因しています。

新緑、今の季節は柔らかく、可愛い緑が目に鮮やかに映ります。見ていると新しい生命を感じます。同人皆様が健康に恵まれ、益々ご健筆を発揮されますよう心から祈念申し上げます。

（鍋）

まんじ第144号

平成29年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 045（346）2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東ワークス・モトヤマ（日東印刷株式会社）
〒154-0016　東京都世田谷区弦巻3-13-18-202

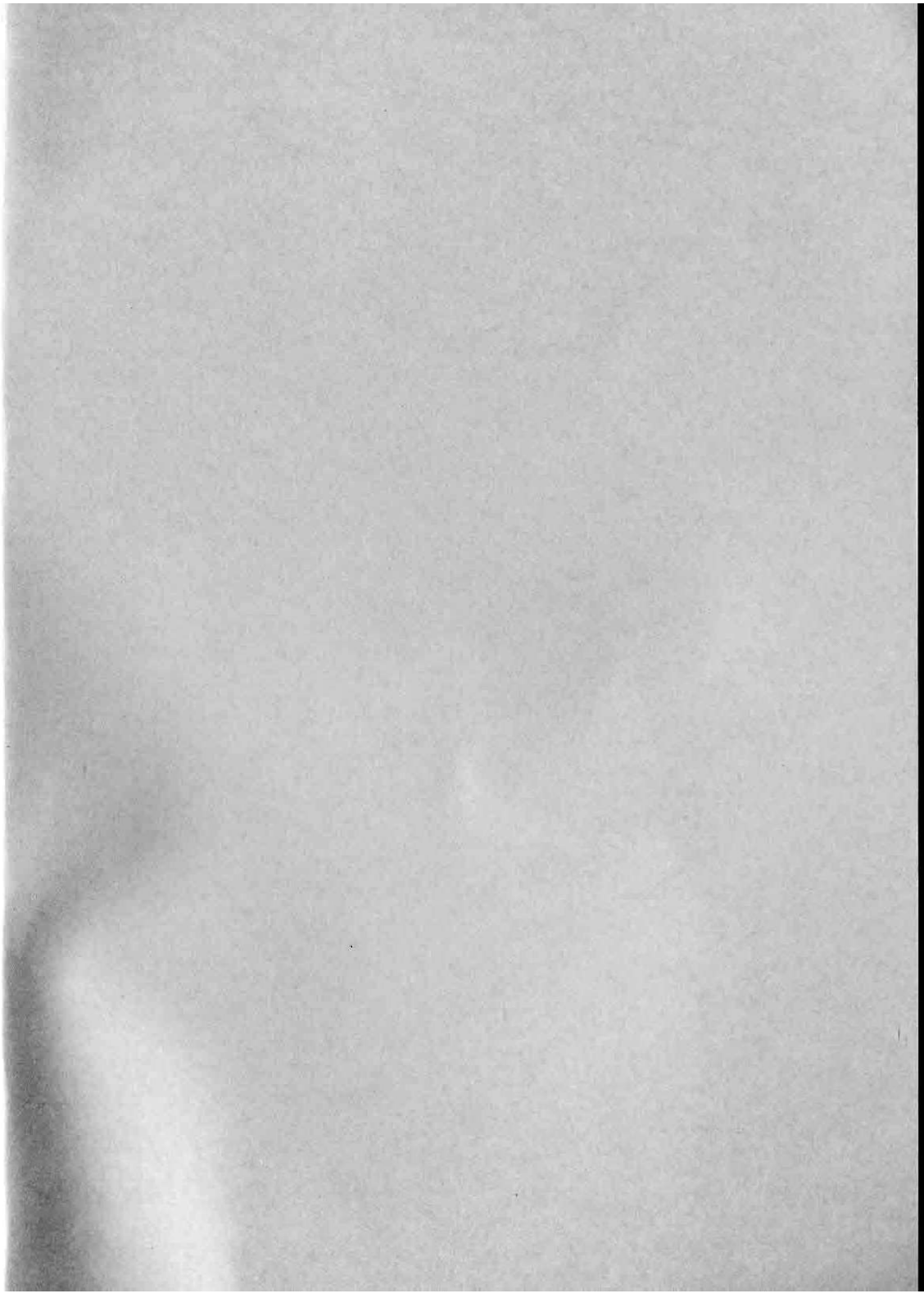
表紙の絵について
「木鶏は動ぜず」

田寺怜華（たでられいか）画

まんじ

No.145

2017.8.1



まんじ第百四十五号　目次

「ベニシアのエッセイ」……新井　宏…4
夏の昆虫の思い出」……稲垣克巳…12
太平洋戦開戦時の日本……太田精一…16
—元外務次官天羽英二日記から—
「人工知能による単語間の関係の予……大貫陽平…22
ダークマター……横山正義…25
霧笛……鍋屋次郎…35
—大仏次郎作品—
短歌　行雲流水（五十三）……石黒修身…42
大岡信「折大岡信「折々のうた」と「台湾万葉集」…石黒修身…45
漢詩　潮汐錄（八十八）（漢詩の流76れ）……鯨游海…49
漢詩　汲深録（九）……松井秀人…52
信託の起源2……永田俊一…54
—ユース—トラスト—信託
ロボット雑考（その七）……三戸岡道夫…83
出世欲に駆られた
賄賂老中　水野忠邦……千坂精一…98
古い物・遠い夢　逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）…忠内正之…108
人たらしの文章……山田嘉久…118
—司馬文体の魅力（2）—
世界の国旗から学ぶ（第四回）……米村典紘…126
「農ある暮らし～私の日常～（4）……古屋富雄…139
東日本大震災の被災地を走る（その一）……安藤剛…145
『時評家　新明正道』（評伝その九の一）……山本鎭雄…158
—ベルリンはなおワイマール文化の真っ盛り—
性と化粧の物語（八）……鈴木守…174
千家尊福伝（一五）……村上邦治…179
たっての要請で就任した司法大臣
明治時代の著述者　渋江保の一生（その九）……山本勉…194
50才からの発達障害（アスペルガー）入門……匠克仁…203
編集後記……編集子…208

「ベニシアのエッセイ」

新井　宏

テレビはほとんど見ない。ニュースやスポーツの実況を別とすれば、たまに見るのは、「題名のない音楽会」と「小さなイタリアの村の物語」、そして「猫のしっぽカエルの手」くらいである。

「題名のない音楽会」は一九六四年に黛敏郎の司会で始まり、五十年を越す「世界一長寿のクラシック音楽番組」としてギネスにも登録されている。もちろん誰でも知っている。

「小さなイタリアの村の物語」も番組の回数を見ると既に二五〇回を超えている。日本テレビの衛星放送で、当初はそれほど目立たぬ番組だったと思うが、第一回の放送からちょうど十年目、どうやら同じ内容を二週連続して放送している他に、アンコール放送も二回ずつあるようなので、計算すると既に千回ほど放送されていることになる。だから「隠れた人気番組」などといったら叱られるであろう。

私たち夫婦もシチリアを含めてイタリアを一ヶ月ほど見て廻ったので、多少の土地勘もあり、妻が最初にはまってしまった。そして、たまたま一緒に見ている内に、これは「イタリア人の生活哲学」を主題とした番組なのではないかと思うようになった。とにかく、千人位の「小さな村」の主人公たちの語る言葉がどれを採っても、哲学であり詩なのである。

このことをぜひ『まんじ』に書きたいと思うようになってから久しい。ところが、いざ文章にしようと思うと、彼らの語った言葉があまりにも平凡で正確には思い出せず、私のつくり直した言葉では、とてもその味わいは伝えることができない。いつもそこで止まってしまってい

た。どこかにシナリオでも出ているだろうと探したがまだ見つからない。

イタリアの小さな村の住人たちだけが、そんなに素敵な哲学や詩を語れるはずもない。製作スタッフがかなり潤色しているのであろうが、それにしても幼い頃から村の教会で馴染んだ「聖話」のフレーズが、ちょっと格好をつけると無意識にでてくるのであろう。

さて次は「猫のしっぽカエルの手」である。京都大原に住む英国貴族出身の女性、ハーブ研究家・英会話教師・ベニシア・スタンリー・スミスの「エッセイ」である。

三年ほど前、妻と夕食を採っていたら、NHK衛星放送から、とにかく美しい「英語」が響いてきた。何を言っているのかさっぱり判らないが、前後関係や字幕から「英詩」らしい。聞き取れもしないのに「美しい英語」などと云うのは不遜であるが、ぜひもう一度聞いてみたいと思った。

それが「猫のしっぽ……」との出会いであった。

わずか一～二分の「英詩」が現れる時間帯はその都度変わるようで、結局、三十分の番組をいつも全部見ることになった。しかし、最初「英詩」と思ったのは、どうも間違えで「ベニシアのエッセイ」というらしい。

しばしば見るが、なかなか聞き取れない。日本語でさえ、聞き取れない今日なので、耳の衰えかも知れないと音量を上げるが同じだ。リズムは、昔話の出だし「ワンスアポンナタイム」に似ている。ただし、こんなうまい英語を久しく聞いてないとの印象は変わらない。

なぜ、そう思ったのか、散歩しながら考えた。それは小山台高校の英語教育にあったのではないかと。

英語が大嫌いで、英語が零点でも入れる大学に行くと決めていた。しかし、クラス委員などをしていて、なにかと英語の先生とも「付き合い」が多く、最低限の勉強はしていた。特に、若い副担任の勢山先生はなかなかの美人、また通称「ロンドン乞食」という大島先生も、ロンドンに行ったこともないとの噂のなかでも「あの街角を右に曲がって……」などと授業で名調子である。ただし、共通していたのは、おそらく「米語」ではなく「英語」を教えていたのではなかろうか。

宿題はいつも「英語の名文」の暗記である。その中には気の利いた「ことわざ」も多い。名文を暗記すると、それを適当に連ねれば、下手な英会話よりもはるかに高度な意思疎通ができる。

そのことから思い出したのが、G・ギッシングの『ヘンリ・ライクロフトの私記』である。英語副読本であった。ハードカバーの本だったように記憶するが、中学校でまともに英語の授業を受けずに高校に進んだ世代なので、

とにかく難しかった。

それが「米語」ではなく「英語」であったのは間違いない。「ロンドン乞食」が、あたかも犬養孝が万葉歌を吟ずるが如く、英語を読む。

もう一度「ライクロフトの私記」を眺めて見たい。探すが見つかるのは翻訳本ばかりで英語版はない。まあ良いかと、文庫本を入手して斜め読みする。

この本の作者ギッシングは「三文文士」を書いて有名だそうだが、一九〇三年に亡くなった人。翻訳書でも二十五万字くらいになる長編をギッシングはわずか七週間で書き上げたという。翻訳本で読んでも難しい。

何でこんな難しい副読本を採用していたのか調べて見てびっくりした。戦前の「実業補習学校」で多く読まれた「英文学作品」なのだと云う。

実業補習学校とは、尋常小学校または高等小学校を卒業して、既に働いている青年に対し、夜間に教育を授けた機関である。英語の素養などない生徒ばかりであったろう。要は「夜間高校」の生徒に対して『ヘンリ・ライクロフトの私記』を教えていたわけである。その要求水準の高さに、かつての「英語読解力」の高さが頷ける。いくら英会話ができても、読解力が不足する今日とは正反対だ。

残念ながら、私は小山台高校を卒業すると同時に「英語」とは決別してしまった。必要あって論文を読むことがあっても、相変わらず「英語」嫌いであった。

しかし、海外出張のチャンスがありそうなので「英会話」を始めたのは二十七才近くなってからである。セイロンの大僧正と日系の母から生まれた退役米国人から個人レッスンを受けたが、完全な「米会話」で、「お前の英語」は「南部訛り」よりはマシだなどとおだてられていたが、そのため耳は「英語」から完全に「米語」にシフトしてしまった。

そこにベニシアのエッセイとの出会いがあった。ある種の感激であった。

相変わらず、耳にはとても心地よいのであるが、まともに聞き取れない。なんとか「ベニシアのエッセイ」の英文を読みたいと思うが、見つかるのは、日本語の字幕文ばかりである。エッセイ朗読の時に、字幕文を見ていると、すぐに耳がおろそかになってしまうほど洗練された訳文である。

その字幕を眺めながら、どんな原文だったのか想像してみた。そこで思いついたのは、翻訳文の字幕文をインターネットの自動翻訳にかけてみることである。全てパソコン上でできて、手数はかからないので、十篇ほど翻訳して見た。

ちょっと紹介する。日本語が字幕文である。（ＮＨＫ番組紹介「京都大原ベニシアの手作り暮らし」より）

私たちは四季を感じることで幸せな気持ちになります。
We feel happy by feeling the four seasons.
生命の編み物のようになって私たちをつないでいます。
It connects us like knitting of life.
私たちが心を開けば、周りにある植物や木々の鼓動を感じることができるでしょう。
If we open our minds, we will be able to feel the heartbeat of the surrounding plants and trees.
毎日、私のハーブガーデンで時間を過ごすと心配事やストレスが溶けて無くなっていくような気がします。
Every day when I spend time at my herb garden, I feel that worries and stress melt away.

これが字幕の日本文を英語に自動翻訳したままの英文である。いくつか翻訳して見るが、いずれも詩的なエッセイになっている。とても私の英語力ではここまでの英語にならない。経験からも言えることだが、正しい日本語を入力すれば、かなり正確な英語が戻ってくる。

韓国の学生の英語を添削しながら思ったことがあるが、韓国の学生の「韓国語力」は絶対に私の「韓国語力」以下だと。要は、私の日本語力の方が、彼らの韓国語力よりも勝っているだけなのであるが、論文はもちろんのこと、詩や歌であっても、その背景に論理性がなければ、とても読めない。だから素敵な日本詩を英訳すれば、素敵な英詩が返ってくるはずである。

そして、突然、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の英訳を調べて見たくなった。

雨にも負けず　　Unbeaten by rain
風にも負けず　　Unbeaten by wind
雪にも夏の暑さにも負けぬ　　Unbowed by the snow and the summer heat
丈夫なからだをもち　　Strong in body
慾はなく　　Free from greed
決して怒らず　　Without any anger
いつも静かに笑っている　　Always serene
……
そういう者に私はなりたい　　Such a person I want to be

(http://www.pichio.co.jp/museum/)

多くの人によって練られた訳詩のようであるが、原詩の雰囲気を実に良く伝えている。

もちろん、「漢詩」を素晴らしい「書き下し文」で読ん

できた日本人なら誰でも良く知っている。言語も韻も完全に異なる「漢詩」よりも、何故か「書き下し文」の方が魅力的なことさえあることを。

春望　杜甫

国破山河在　国破れて山河在り
城春草木深　城春にして草木深し
感時花濺涙　時に感じては花にも涙を濺ぎ
恨別鳥驚心　別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

月下独酌　李白

花間一壺酒　花間一壺の酒
獨酌無相親　独り酌んで相親しむもの無
舉杯邀明月　杯を挙げて名月を迎え
對影成三人　影に対して三人と成る

ベニシアのエッセイの原文を知りたい。そんな思いがますます募った。

そしてついに『ベニシアの言葉の宝箱』(世界文化社)という本を見付けた。対訳が二十七篇載っている。読んで見て驚いた。どのエッセイを読んでも、極めて平易な英語なのである。どうしてこんなに簡単な英文が聞き取れなかったのか。

One summer afternoon when I was a young child,

子供時代のある夏の日の午後、

I decided to secretly venture out of my grandparents' huge country estate and see what the world outside looked like.

私は祖父母の広大な屋敷からこっそり抜け出して、外の世界を探検することにしました。

My heart beating fast, I asked the gatekeeper to open the gates, and I walked along the lanes and came to the cottages in the nearby village of Kedleston.

どきどきしながら守衛さんに門を開けてもらい細い道を歩いていくとケドルストンの村の集落に辿り着きました。

Suddenly I saw my dream house:

そこに突然私の理想の家が現れたのです。

何と平易な英語であろうか。それが全く聞き取れなかったのである。

このエッセイの中にもあるように、ベネシアの育ったのは名門貴族である母の実家、ダービー州にあるケドルストン・ホールである。映画『ある公爵夫人の生涯』のロケ地になった豪邸で、八二〇エーカー(百万坪)の敷地というから、ゴルフ場がいくつも入る大きさである。

その名門貴族の出身のベニシアは、貴族社会に疑問を持ち、インドを旅して一九七一年に来日、京都で英会話

学校を始め、九四年に山岳写真家の梶山正と再婚、九六年に大原にある築百年の民家に移住して、ハーブを取り入れた手作りの暮らしをしているという。一九五〇年生まれ。貴族社会に疑問を持ったのは、おそらく次のエッセイとも関連するのであろう。

As a child, my father would always read to me when he came to visit.

子供の頃、父は会いに来てくれると、必ず本を読んでくれました。

At seven o7, clock, he would come to my room to read me a story…… a chapter a day of a classic children's book

夜七時に部屋に来て……子供向けの名作を一日一章ずつ読んでくれました。

He was a natural actor and loved to change his voice, and act out each story to make me laugh.

生まれながらの俳優だった父は、声を変えたり、身振りをつけての朗読で笑わせてくれました。

ベニシアのエッセイ朗読に「ワンスアポンナタイム」のリズムが色濃く感じられるのは、おそらくその時の影響なのであろう。奔放な貴族育ちの母と「生まれながらの俳優だった父」は、ベニシアが二歳の時に離婚している。

もっとも俳優といっても大金持ちの出身と云うから、「芸能人」であったわけではないが、そこに「貴族社会への疑問」の原因もあったのではなかろうか。

ベニシアの笑顔を見るとはっとするような美人にみえる。しかし、その半面、厳しい表情になると、アーサー王を囲む円卓の騎士を思わせるような男性的な顔つきになる。それが貴族の顔なのであろうか。

ところで、ベニシアのエッセイの原文を探している内に、ベニシア自身が、「ベニシアのエッセイ」のことを「ベニシアの四季の詩」と名付けているのを知った。やはり、これは「詩」だ。

それにしても分かりもしないのにベニシアのエッセイについて長く紹介した。それには若干の心積もりがあってのことである。

『まんじ』に参加して十七年。その間、いつか「香りのある文」を書きたいと思いながら、未だ目的を果たしていない。いつも納期が迫ると急いで「雑文」を書いて間に合わせて来た。強いて云えば、「エッセイ」と云えるかも知れないが、ベニシアとは雲泥の差である。

その過程で、『まんじ』で最も多く学んだのは、「漢詩」と「短歌」である。必ず合評会があるので「しっかり読ん

で行かないと」宿題を忘れた生徒になってしまう。同人の小説類からも多く学んだが、いつも時間をかけて読んだのが漢詩と短歌であった。

自分でも詩を作りたいなどと考えていたわけではない。せめて。その「漢詩」や「短歌」の約束事や歴史だけでも勉強しておきたいとの思いであった。だから鯨游海さんの「漢詩」はもちろん、曽根竣作さんや石黒修身さんの「短歌」や「評論」からは非常に多く学んだ。ある意味で、『まんじ』の合評会は、私にとって、漢詩と短歌との出会いであったと云っても過言でない。だから時には不遜なことを云いながらも、実は諸先輩に非常に感謝しているのである。

振りかえってみれば、『まんじ』には、自分の書きたい事ばかり書いてきた。「書きたい事」を書いているのだから、満足感はあるが、不特定な読者からも評価を受けたいという気持ちは途中から完全に失せていた。しかし、いつかは再挑戦してみたいと、このところ「題材」を拡げていた。習作として、北上夜曲、千の風、赤毛のアン、月は上りぬ、遥かな友に、などを題材としたが、いずれでも「歌」や「詩」を採り上げている。

ただ、相変わらず、それが理屈っぽい「解析」から脱皮していない。

詩には果たして「様式美」が必要なのだろうか。

和歌・短歌の歴史を学ぶと、「本歌取り」のように、集成された様式美を尊ぶ流れに対し、「万葉」に戻ろうとする流れがあったという。様式美は「良いもの」を「定石化」したものであるから、学べば常に一定水準のものが書ける。しかし、そこには、かならず純粋培養(形式化)と、はみ出すものを排除する世界が生まれる。

人間の耳に心地よく響く言葉のリズムが、五・七・五の定型だと云う。五言絶句、七言絶句なども漢字一文字が一音節であるから、その例に入るのだろう。

しかしそうともいえない。世界的に見て、五音節、七音節の響きが良いと決まっているわけではない。日本にだって、いくらでも例外がある。

うさぎおいし　かのがわ
こぶなつりし　かのがわ
ゆめはいまも　めぐりて
わすれがたき　ふるさと

まどは　よつゆに　ぬれて
みやこ　すでに　とおのく
きたへ　かえる　たびびと　ひとり
なみだ　ながして　やまず

ゆうやけ　こやけの　あかとんぼ

おわれて　みたのは　いつのひか
やーまの　はたけの　くわのみを
こかごに　つんだは　まぼろしか

詩に定形化が必要であり、リズムや韻が重要なのは理解している。いや、わかりきっている。しかし、「ベニシアのエッセイ」を読んで、あらためて思った。詩は、美しい韻や心地よいリズムが、耳や目に心地よく響くばかりでは足りない。平易な文章であっても、ベニシアが童話を読むかのように、そこに「詩心」を与え、聞く人の心に響かせるものこそ「詩」なのではないかと。

最近、鯨游海さんに薦められて正岡子規の「歌よみに与ふる書」を読んだ。冒頭から、子規がかつて崇拝していた「古今集」を「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」と痛快である。いわば日本独特の「様式化」や「家元制度」への批判であり、これが明治の風潮に受けたのであろう。

しかし、世界の東端に位置し、流れ込んできた多くの文化を「様式」として完成させたのが日本文化の特徴であり、「家元制度」はその「傑作」ともいえるものであろう。子規が痛烈に批判した「古今集」も「歴史遺産」を生きたまま千年も伝えたものと考えれば、自ずから評価は異なる。

日本における「漢詩」とは、主として唐の「五言絶句」や「七言絶句」を意味するらしい。しかし中国には「宋詞」と云う宋代以降に隆盛を極めた韻文の形式もあると云う。一句の文字数が一定でなく、長短不揃いであり、句数も色々あるとのこと。そう思ってみれば、「唐詩」のルールに極めて忠実に、江戸期・明治期の教養人が確立した日本の「漢詩」の様式美は、今や本家の中国でも希薄になっている。

唐詩の平仄や韻の規則、「康熙字典」の字画を忠実に守ろうとする「漢詩」も、日本の誇る「家元制度」と似ているが、時には良寛の漢詩のように熟知していても「平仄」には拘らない大らかさに魅力を感じる。

そのため、酒席では「漢詩保守派」に向かって何かと毒づいているが、それはまず学ばなければ絶対に近寄れない「漢詩」のアプローチの長さに辟易して不満を述べているだけなのかも知れない。いわば私の小山台高校時代の「英語嫌い」と根は同じなのであろう。

京都大原三千院は私達が五十年ほど前に、新婚旅行で回った思い出の地である。

夏の昆虫の思い出

稲垣克巳

今から八十年前、私が小学生であった頃の夏の夜空には中天に天の川が南北に流れ、澄んだ全天には無数の星が散りばめられていた。

家のすぐ前を幅一メートルくらいの「前の川」が流れていた。水田の中を通り抜けてくるので、泥の混ざった底土であり、ドジョウが多くナマズもいたし、川面にはモロコ・ハヤ、草かげにはフナもいた。底土にはトンボの幼虫のヤゴやヘイケボタルの幼虫がいた。

家の西方に川幅約二メートルの「西の川」があり、内津川から下手の村落の水田灌漑用に分流されたもので、清流で水路は砂地であった。モロコやハヤ、底土にはヤゴのほかゲンジボタルの幼虫がいた。二つの川ともに、ミズスマシ・アメンボ・ゲンゴロウ・タガメなどの水生昆虫が多かった。

七月になると暗闇の底にゲンジボタルが飛んできた。大型のホタルで光が鮮明でよく目についた。やがて、夏休みを迎える頃になると小型のヘイケボタルに代わる。ヘイケボタルは庭の広場へ無数に飛んでくる。竹箒でヘイケボタルをすくうと、箒の枝に何匹ものホタルが止まる。そのホタルを蚊帳の中に放して楽しんだ。しかし、ホタルは水分のない蚊帳の中では一両日中に死んでしまうので、翌日には放してやった。

区画整理でかつての川はなくなり、農薬の影響で幼虫はいなくなり、ホタルだけでなくトンボやミズスマシも少なくなってしまった。

蛍火に殊(ことに)うれしき家居かな　蕪村

ホタルは腹部に発光器官がある。ホタルの光の点滅は雌雄間での配偶行動のコミュニケーションになっている。雄は飛びながら発光し、雌は葉の上などにとまり雄の発光に応じて発光する。瞬間的に明るくきらめく閃光（せんこう）による交信を繰り返して、雄は雌に近づき交尾が行われる。ホタルの発光は成虫だけでなく、卵・幼虫・蛹も光る。

ホタルの幼虫は巻き貝を捕食するが、ヘイケボタルの幼虫は淡水の巻き貝、ミヤイリガイを食べる。この巻き貝は日本住血吸虫の中間寄主であり、ヘイケボタルは人間がこの恐ろしい病気にかかることを防いでくれている。

家の前には小川をはさんで、雑木とマダケの林があった。五月になると木の高いところでハルゼミがギーギーと鳴きはじめる。高いところで鳴くので姿を見たことはない。

梅雨が明ける頃、ニイニイゼミがジージーと高低をつけて鳴き出す。夜が明けるのを待ちかねたように鳴きはじめ、日中から夕方まで一日中鳴いている。

夏休みがはじまるとアブラゼミの世界になる。庭のマツやサクラの大木に、何十匹と鈴なりにとまって、シャーシャーと鳴き騒ぐ。セミの仲間では誰にも知られているいちばんの普通種である。水田地帯をはさんで氏神様の社叢からはセミ集団の喧噪が響くように伝わってくる。アブラゼミの鳴くのを聞くと今年も夏がきたと実感させられる。

クマゼミはジャージャーと大声で鳴き、セミの王様である。アブラゼミより数は少ないが、辺りを圧倒して我物顔である。最近は生息数が増えてきた。クマゼミの生息地は東海地方以西であり関東では稀であった。近年、東京はじめ関東各地でも多くみられるようになり、地球温暖化のあらわれとされる。

ツクツクボウシが特徴のある声で鳴きはじめるのは、きまって八月の終り頃である。若い頃、この声を聞くと、夏休みももう終わりかと寂しくなったものである。

ヒグラシとミンミンゼミは私の住んでいる愛知県尾張地方東部にはいない。この二種のセミの声を聞くようになったのは、東京へ転勤したり、長野県開田高原の山荘へ出かけるようになってからである。

アブラゼミの一生をたどると、卵は主として枯れた木に生みつけられる。卵はその翌年に孵化し木を下りて土中にもぐり込む。そして木の根にとりつき、その汁液を吸って育つ。幼虫で五年を経過して成熟し、土中から出て木の幹にはい上がり、そこで脱皮して成虫になる。卵が生れてから七年目に成虫になる。成虫の寿命は一～二週間で、七年間の地中生活に比ぶればはかないものである。

しづけさや岩にしみ入る蝉の声　芭蕉

「夕焼け小焼けの赤とんぼ、負われてみたのはいつの日か」で歌われたのはアキアカネである。アキアカネは稲作用の水田で生まれたトンボである。田んぼはアキアカネの幼虫のヤゴが生育するのに、栄養豊富で餌となる生き物が多く好適な環境である。

田んぼでヤゴから羽化したアキアカネは、夏になると水辺から標高が一〇〇〇メートルを超える高原へ移動する。私が盛夏に出かける開田高原は標高が一〇〇〇～一二〇〇メートルあり、高原の疎林中でアキアカネをよく見かける。

秋になって涼しくなると、アキアカネは避暑地の高原から下りてくる。黄金色に色づいた稲田の上を飛び交い害虫を食べるので、人人から親しまれ大切にされている。アキアカネが群れて田んぼの上を飛び交う風景は、古くから日本人に愛されてきた。古くは日本のことを秋津島といった。秋津とはトンボのことである。

夏のチョウの前に、ギフチョウとツマキチョウの二種にふれたい。

ギフチョウはアゲハチョウ科の日本固有種であり、春爛漫の候、桜の咲くのと同時に美しい姿を現すので「春の女神」といわれる。黄と黒の縞模様の羽と、後翅の端に鮮やかな赤とるり色の紋があってよく目立つ。

春先、雑木林に咲くカタクリやスミレの蜜を求めて、ゆるやかに羽を動かして飛び、四月の僅かな間しか姿を

やがて死ぬけしきは見えず蝉の声

チョウトンボは羽の大半が黒で、後翅の付け根が広くなっている。いつも二匹のチョウトンボが、前の林の高木・アラカシの近くの定位置に浮かぶように飛んでいるのが私の部屋からよく見えた。低いところへは下りてこず、どうしても捕えることができない私にとっては手の届かぬトンボであった。

家の庭でいちばんありふれたのはシホカラトンボである。雌雄、色を異にし、雄は灰白色の白粉を装い雌は黄褐色で、雄をシホカラトンボ雌をムギワラトンボという。

トンボは均翅類と不均翅類の二つに分類される。均翅類は前翅と後翅が同じような形をしているトンボで、カワトンボやイトトンボがこれに属する。前の川の南の方へ向かって川の西側は竹藪東側が水田で日射が半分となる。この水際の日陰をカワトンボやイトトンボの仲間が好んだ。ハグロカワトンボ・モノサシイトトンボなどが、羽を上下に動かしてゆったりと飛んでいた。

不均翅類は前翅と後翅が違った形をしていて、後翅の方が前翅よりも幅がやや広く羽の基部が広がっている。ヤンマ、シホカラトンボ、アカトンボの類である。ヤンマは羽を細かく振動させるだけで、羽はピンと張ってスピードを出して飛ぶ。

見ることはできない。やがて、カンアオイの葉の裏に産卵して一月にもみたない短い成虫の時期を終える。幼虫はカンアオイの葉を食べて成長し、雑木林が若葉で包まれる晩春には蛹となる。蛹の状態で夏、秋、冬の十ヵ月間春を待っている。

ツマキチョウは春の訪れとともに年一回、四月下旬から五月上旬にかけて発生するシロチョウ科のチョウである。モンシロチョウ、スジグロシロチョウのようにジグザグには飛ばないで、スーと一直線に飛んでくるやや小型のチョウである。前翅の端が尖って雄は黄と黒の斑紋となり、雌は黒だけで黄がない。レンゲやタンポポの咲く田園や浅い丘陵で見られ、タネツケバナなどを食草とする。スマートでおしゃれな感じの、春の一時しか見られぬチョウである。

盛夏のチョウを代表するのはナミアゲハである。春にも小型のナミアゲハが発生するが、夏とともに大型になって現れる。夏の照りつける日中に、大輪のヒマワリに飛んでくるナミアゲハは夏の風物詩である。

チョウのヒラヒラと舞う飛び方は、天敵の鳥の攻撃から身を守るための逃避行動である。直線的に高スピードで迫りくる鳥の攻撃をかわすためである。羽を閉ぢてふわっと落ちると、羽をばたつかせて舞い上がるという動きをくり返している。もっとも羽が大きいので激しく上下動をして敵をまどわすのに対して意外に体の方は大き

くは上下しない。何とも優れた飛び方である。

森林に多いのはタテハチョウ科である。コナラやクヌギの幹に傷がついて蜜が出ているところに集ってくる。蜜にはカブトムシやクワガタムシもくるが、スミナガシ・ゴマダラチョウ、ミスジチョウ・コミスジ・イチモンジチョウ、オオウラギンヘョウモンが集まる。私が勤労動員されていた中学生の頃、動員先の陸軍補正紹廠からの帰り道に蜜がよく出る樹があった。帰り道に立ち寄って、チョウや甲虫類を観察するのを楽しみにしていた。

太平洋戦開戦時の日本

—元外務次官天羽英二日記から—

太田精一

天羽英二氏は、大正、昭和の激動の時代を外交官として駆け抜けた。明治四十五年外務省入省後、在支（中国）大使館一等書記官、在ソ連大使館参事官、外務省情報部長、在イタリア大使、外務省事務次官を歴任、戦時中は、内閣情報局総裁として辣腕をふるった。彼は、四〇年以上にわたる激職のなかにあって、膨大な日記を書き残している。

日記には、駐在した各地の経済、社会、風俗習慣はもとより、外交交渉における彼の本音や心情も書かれている。

彼の事績を世に知らしめ、大正、昭和にかけての政治外交の裏面を伝えたいとする知人友人の中から同日記の掘り起し作業が始まった。

その作業の取りまとめを次男の天羽民雄氏が当ることになった。同氏が関係者と相談した結果、父英二氏の日記に、当時の外交文書、新聞・雑誌記事、交友録などの資料を加えた日記・資料集として発刊することになった。

編纂を始めてから十年、こうして天羽英二日記・資料集全五巻が平成四年六月に完成したのである。

同日記・資料集は、日露戦争以降、欧米列強に伍して覇権国家の道をたどった日本外交の歴史を研究するには、まさに第一級の資料と言える。

私が、同日記・資料集を入手したのは、平成十五年の春であった。鎌倉市笛田の教養センターを訪れた時、偶然に見付けたのである。

天羽英二氏の次男天羽民雄氏は、私がジェトロのベオグラード駐在員であった当時の駐ユーゴスラビア日本大使であった。日本人会の役員をしていた私は同地で知己を得、その関係から父の天羽英二氏の外務省でのご活躍ぶりはお聞きしていたから、同日記・資料集を目の前にした途端、ぜひ読んでみたいと思った。

そのことを、同センターに申し出、長期間の貸し出しを要請した。すると同センターから、「ある篤志家が昭和史に興味のある方に是非差し上げて頂きたいと寄贈されたものなので、自由にお持ち帰りください」との回答を頂いた。私は小躍りしながらそれを車の後部座席に乗せ、家に持ち帰った。

入手した当初、私はこの日記・資料をもとに大正から昭和にかけての歴史読物を執筆するつもりでいた。だが、雑事にかまけてつい伸び伸びになってしまっていた。

入手後十年経って、史遊会での講演の当番が回って来た時に、そのことを思い出し、執筆の準備を兼ねて、取りまとめた概要をもとに史遊会で「天羽英二日記にみる太平洋開戦時の日本と世界情勢」と題する講演をさせて頂いた。

それからまた十年近くが過ぎてしまった。

私が昭和史に関心を抱くようになった原点は、戦時中戦禍に見舞われ、過酷な少年時代を過ごしたことにある。

まだ、小学生であったが、焼夷弾攻撃によって無残に焼失したわが家を見て、茫然自失したことを鮮明に記憶している。その時から、何故このような惨禍を招いたのか、ずっと疑問を持ち、その解を求め、近現代史に関する書物や資料に目を留めてきた。

だが、出版されている書物の多くは、既存の公表された資料を取りまとめたもので、体験から根ざしたものは少ない。天羽英二日記・資料集はその点違っていた。

日々の出来事を綴った彼の日記から、外交の裏面を読み取ることができるのである。

そこで私はこの日記をもとに日露戦争後、いかに日本は、軍事力を背景に大正、昭和にかけて国際政治の場で、横車を押し通してきたか。そしてその横車を当然のことのように思うに至った軍部、マスコミ、一部外務省の幹部の驕りや当時の民衆の動向を、歴史読み物として取りまとめて見たいと考えた。

だが、残念ながら私の力量と肉体的な衰えが思うように筆を運ばせてくれない。どこまで書き進むことができるか、不安な気持ちを抱えながら次回から筆を執ってみることにする。

まずはとりあえず天羽英二氏の人物像を取り上げてみることにしようと思い立った矢先、史遊会の平成二十五年の講演録が残っていることに気が付いた。今回はそれ

を再現し、ここに掲載することによって同氏の人物像の紹介の一端に代えさせていただくことにしたい。

講演録は敬称を省いたものとなっているので、あらかじめお断りしておく。

天羽英二は、開戦直前時の外務次官であった。昭和十六年八月から十月まで第三次近衛内閣の豊田貞次郎外相の下で次官を務めた。

豊田外相は、海軍出身であったことから、次官には、ベテランの外交官である天羽英二が配置されることになったのである。

彼は、昭和八年五月から同十二年四月まで、外務省情報部長を務めた。その間、昭和九年四月十八日に、満州国を巡る日本の立場を非公式談話として発表した。これが天羽声明として取り上げられ、当時の日本政府の立場を本音で語るものとして国の内外に大きな反響を呼んだ。その内容は次の通りである。

「日本は、満州問題に関し、国際連盟を脱退したが、これは東亜における平和維持の根本義につき日本と連盟との間に大きな意見の相違を見たためである。日本は、諸外国に対して、友好関係の維持増進に努めているのは言うまでもないが、東亜に関する問題については、日本の立場及び使命が列国のそれと一致しないものがあるかもしれない。日本は、東亜における平和及び秩序維持について東亜諸国と責を分かつべきである。支那（原文のまま）の保全及び統一秩序の回復は、日本の最も切望するところだが、それは支那自身の自覚又は努力を待つよりほかない。よって支那がもし他国を利用して日本を排斥し、東亜平和に反する措置に出るごとき（例えば武器、軍用飛行機の輸入、軍事教官の雇入れ、政治借款）ことがあったならば、日本は黙っていられない。また、列国側が、支那に対して共同動作を取らんとするようなことがあったら、例え名目は、財政的又は技術的援助であるにせよ事実においては、政治的意味を帯びていることは必然である。もし、その形勢が助長されるときは、支那にとって非常に不幸をきたすのみならず、東亜の安定ひいては日本に対しても重大な結果を及ぼす恐れがある。だから、日本としては、主義としてこれに反対をせざるを得ない。しかし、各国が支那の平和に支障を及ぼさない経済活動をすることは無論歓迎するところである」

これに対して米、中両国は、強い反発を示し、英国もそれに同調した。

ロシアは、意外と冷静を装っていた。フランスは、国際連盟を擁護しつつ、ある程度日本の立場に理解を示した。ドイツは、批判的論調であったが、米、英の強硬姿勢も自制するよう求めた。

その他、ベルギー及びカナダは、日本の立場を理解し、比較的好意的な論調であった。

天羽声明は、満州国の存在が国際的に認知されることを前提として、それ以上の中国への領土的野心はないとするものであった。だが、満州国が、日本の傀儡政権であることを承知している欧米諸国は、日本の中国への干渉の継続をこの声明から嗅ぎ取った。

これを契機に、欧米列強は対日警戒をさらに強め、満州国の存在を否定する論調が相次ぎ、中国支援の方向に傾いて行った。

天羽英二は、明治二十年八月十九日徳島県板野郡撫養町（現鳴門市撫養町）に男五人、女三人の八人兄弟の三男として生まれた。生家は、肥料、砂糖、建築資材などを扱う問屋で、煉瓦工場も経営し、広い農地を所有する地主でもあった。

明治三十三年撫養町立高等小学校卒業、徳島中学入学。神戸高商（現神戸大学）を経て、東京高商（現一橋大学）専攻部領事科を明治四十五年に卒業、同年外交官試験に合格した。六百人の受験者中合格者は五人で、そのうち東京帝大が三人、東京高商が一人であった。

昭和十二年四月、天羽英二は外務省情報部長からスイス駐箚公使兼国際連盟帝国日本事務局長に任じられ、同年八月、スイスのベルンに着任した。が、二年後の昭和十四年九月末日付で、イタリア大使となり、同年十一月、ローマに転任している。翌十五年九月六日、三国同盟に反対する天羽大使は、松岡洋石外務大臣によって任を解かれた。解任直後の昭和十五年九月二十七日、日、独、伊三国同盟がドイツのベルリンで独リッペントロップス外相、伊チアノ外相、大島駐独大使によって調印された。

天羽英二がスイス赴任のため、日本を発つ直前の昭和十二年七月七日、北京西南郊の蘆溝橋付近で、日本軍と中国軍が衝突、それがもとで日中全面戦争へと戦火が拡大した。

昭和十二年九月十二日、中国は「日本は九カ国条約及び不戦条約に違反した」として国際連盟に提訴。麻薬を中国に持ち込んでいると日本を批難した。

天羽事務局長は「支那の捏造によるもの」と反論、国際的な非難を打ち消すことに奔走し、成果を上げた。日本は、国際連盟を脱退した後も、非政治的問題については、同連盟と協力を続けていたのである。だが、軍の圧力により「連盟への協力を絶つべし」との訓電を受け、日本は完全に国際連盟との関係を絶ち、ますます孤立して行った。

昭和十五年十二月、天羽英二がヨーロッパ、シベリア、満州と回って帰国する頃には、イタリアも参戦、ヨーロッパは、戦場と化し、枢軸国の軍隊が全欧州を蹂躙

していた。かろうじて、英国が度重なるロンドンへの空襲に耐え、独に抵抗していたのである。

三国同盟を結んだ日本は、英、仏を支援する米国との関係がますます悪化し、日米開戦は、避けられない事態に追い込まれて行く。

昭和十六年六月、ドイツは、対ソ戦を開始、雪崩を打って、ソ連領内に侵入した。

同年七月、日本は仏印に進駐、南方の資源確保を図り、中国及び欧米との長期戦に備えようとした。

これに対し、米国は、伝統的外交政策のモンロー主義を捨て、武器援助法を成立させ、国家非常事態宣言をして、対枢軸国との戦争に備えた。それによって対日外交も強硬姿勢を際立たせ、在米日本資産凍結、石油全面禁輸措置に出た。

そんな時、天羽英二は、第三次近衛内閣の豊田外相の次官に就任した。海軍出身の豊田外相の外交力を補うためであった。

天羽次官は、就任後直ちに「国際情勢に対する日本の対外方針」と題する政策を打ち出した。「日本は、経済封鎖を受け、単独でABCD包囲網を跳ね返せない。したがって、しばらく中立を守り、国力を保存、後日の有事に備えるほうが得策である。その間ヨーロッパ戦線の交戦国は疲弊し、日本に有利な国際情勢が生まれる」と訴えた。

十月十二日、近衛首相、豊田外相、東條陸相、及川海相、鈴木企画院総裁が集まって、荻窪で会談が行われた。

「豊田外相は、この政策に基づいて日米交渉継続を主張したが、東條陸相は反対、及川海相は首相一任。しかも陸軍、海軍とも戦う自信はなく、軍内部の強硬派に押されてやむなく動いているようであった」と天羽日記は語っている。

豊田外相の命令を受けて天羽次官は、十月十四日、東條陸相と直接面談「撤兵問題を譲歩して日米交渉をまとめたらどうであろうか」と勧めた。

すると東條陸相は「撤兵問題は、〝軍の心臓だ〟と言って譲らず、二時間かけて議論したが、東條陸相から譲歩の言質を取ることができなかった。だが、米国との戦いは極力避けたいという意思は感じられた」と記している。

その二日後の十月十六日、近衛内閣は総辞職した。強硬に日米戦反対を主張すると期待した海軍が、「首相一任」と責任を近衛首相に押し付けたことが、彼の重荷となった。思惑の外れた公家宰相の弱さが露呈した。一身にかかった重責に耐えきれず、ついに政権を放り出してしまったのである。この時、天羽次官も辞任している。

十月十八日、東條内閣が誕生し、外相には東郷茂徳が就任した。外務省出身の彼は、戦争はやらないと明言した。にもかかわらず陸軍の強硬派を東條が抑えきれず、かつ、海軍の責任逃れのような「首相一任」の態度が、戦争へといっきに突き進むことになった。最早、一外相の力では、戦争への流れを堰き止めることはできなかったのである。

何よりもハルノートに現れた米国の開戦への決意を秘めた対日強硬姿勢は、日本の選択肢を狭め、首脳部に「清水の舞台から飛び下りる」無謀な行動をとらせたと言える。

だが、それも日露戦争後、過度に高揚したナショナリズムの帰結であったかもしれない。

天羽英二も国益の追求に身を挺しているうちに、そのナショナリズムが、軍事力を押し上げ、国家に禍をもたらすほど膨れ上がっていることに気が付いた。

だが、その時すでに日本は、取り返しのつかないところまで来てしまっていたのである。

人工知能による単語間の関係の予測

大貫陽平

今回は私が大学四年生の時の、卒業研究の紹介をさせていただきたいと思う。

インターネットをより便利に検索できるようにするための仕組みとして、セマンティックウェブというものがある。これは例えば「モナリザ」と検索すると、「所属はルーブル美術館」、「作者はレオナルド・ダ・ビンチ」といったような、関連情報を一緒に教えてくれるものである。

セマンティックウエブの構築に必要なのが、オントロジーである。オントロジーとは「モナリザの作者はレオナルド・ダ・ビンチ」、「モナリザの所蔵はルーブル美術館」、「ルーブル美術館フランスに存在」といったような、意味情報を記録したデータベースのことである。オントロジーでは一般に、「AのBはC」といった形式で情報が記録されており、例えば「日本の首都は東京」という文が考えられる。このうちAとCのことを単語と言い、Bのことを関係という。

オントロジー上には、関係のわからない単語のペアがいくつもそんざいしているが、これらの関係を高い精度で予測することができれば、既存のオントロジーを拡張することで、より大規模なオントロジーを構築することができる。現在グーグルにナレッジグラフなどの、セマンティックウエブが存在しており、今後オントロジー学習のための単語間の関係予測の需要が高まることを考えると、単語間の関係予測は重要である。

私の卒業研究では、オントロジー上の単語間の関係を、高い精度で予測することを目標とした。本研究では、たとえば「日本の首都は東京」という文があった時に、日本と東京を入力として与えると、首都と答えを返すような、人工知能を作成した

今回の研究で用いたのは、ディープニューラルネットワーク（以下ＤＮＮ）を用いた人工知能である。この形式の人工知能は、入力されたものの特徴を、自動的に発見することで、分類をすることができる。入力された写真に何が写っているのかを、高い精度で分類できるため、ＤＮＮを用いた人工知能は、画像認識の分野などで活躍している。また、自動運転車にも搭載されており、車載カメラの情報をもとに、周辺の状況を把握する際に用いられている。また最近では、文章の解析に用いよう、という動きが出てきている。

今回の研究では、入力を、二つの単語として、出力を、これらふたつのあいだの関係とした。単語間の関係予測はその二つの単語の組が、どんなカテゴリーに分けられるか、の分類問題とみなすことができる。ＤＮＮは分類問題をとくのが得意であるため、ＤＮＮを用いれば、高い精度で予測をすることができると考え、結果として七割の正答率を得ることができた。これは
既存手法と比較すると、一割ほど高い正答率であり、性能の向上を達成することができた。

この単語間の関係を予測する人工知能の特徴としては、単語の性質を理解したうえで、予測を行っていることが挙げられる。例えば「アーネスト・ラザフォード」と「イギリス」の関係を予測すると、答えは「出身」となった。しかしラザフォードはニュージーランド出身イギリス在住の科学者であるので、この予測は間違いである。学習に用いたデータをみると、人間と国家の間の関係としてもっとも多かったのが「出身」であり、これにひきずられてこのような誤答をしたのだと考えられ、人工知能が、ラザフォードは人間であり、イギリスは国家だと理解していたことを示唆している。

この人工知能が応用できそうな領域としては、例えばインターネット通販での商品推薦などが考えられる。他にもマルコフ連鎖モデルという、予測のためのモデルを作成する際にも利用できる。

マルコフ連鎖モデルとは、例えば今日の天気が「晴れ」であるときに、明日「晴れ」である確率が六割、「くもり」が三割、「雨」が一割といってようにして、ある状態から別の状態に遷移する確率を収集することで、次に何が起きるかを予測するモデルである。これを作成する際に、今回の人工知能が応用できる。まず状況とその遷移する確率をいくつか集めた後に、今回の人工知能で分析を行えば、遷移する確率が不明となっている状態間の空白を、埋めることが可能である。

今後の展望としては、第一に予測精度の向上があげられる。既存手法と比較して高い精度を達成できたとはい

え、まだ正答率は七割程度であり、実用化を考えた場合、十分な精度であるとは言えない。

また、単語間が無関係な場合でも、何らかの予測が出力されてしまうという欠点があるため、この点を改善する必要がある。たとえば、「レオナルド・ダ・ビンチ」と「スターウォーズ」の関係を予測すると、「監督」という予測がなされてしまうが、正しくは「無関係」である。この点をしっかりと改善しないと実用化は難しい。

まだまだ欠点の多い単語間の関係を予測する人工知能であるが、ポテンシャルは大きいと考えられ、今後実用化に向けて、ますますの性能向上を図りたいと考えている。

ダークマター

横山正義

まえがき

＊銀河の生々流転の影の主役ながら姿が見えぬ謎の物質。宇宙の至る所に存在するが、未だ人類が捕らえたことの無い物質。

＊老子は在っても、人間の意識に上らないことを、『無』と表現しています。

＊ガン治療でガン細胞があっても、健康を維持できることを知りました。

一、「きのこ」について

私は「きのこ」の愛好家A氏に、最近、「きのこ」の薬効の記事が、健康誌に取りざたされたくなったので、現状を尋ねてみました。

すると、A氏から次のようなお手紙を頂きました。A氏自身不幸にして、ガンに罹病され、「きのこ」の免疫効果で健康を維持し、元気にご活躍とのことでした。

お会いしてみると、二十年以前と同じように、大変お元気そうでした。

二〇一七年(平成二十九年)二月某日

A氏よりの手紙

「アガリクス茸資料3点読ませて頂きました。厚生労働省資料(注1)、『健康食品』の素材情報データーベース(注2)はアガリクス茸に発ガン性があるという内容でびっくりしました。ホクト㈱と信州大学医学部共同研究による資料(注3)は私が考えていた内容に近いものでした。

私は抗ガン剤の治療を受けて解かったのですが、ガンは抗がん剤では治らないということです。ガンは元来自分の体の一部ですから、ガンを治すには免疫機能を強化して、体を痛めることなくガンを退治しなければなりま

せん。

最近話題になっているオプシーボ（注4）もキイトルーダ（注5）も免疫機能を助けるための薬です。私も自分の免疫機能を高めるために、沢山食べて体力を高めようと思っています。アガリクス茸はβ－グルカンの働きによって、免疫機能が高まると言われているので、私はアガリクス茸を飲むことにしました。

結果、体力の消耗を防ぎ、ガン細胞があっても、増殖することなく、現状維持で、健康が保たれている」とのたよりを頂き、私は驚きました。

「きのこ」について内田技師より聞いた話を、振り返って偲んでみます。

一九二九年（昭和四年）三月

農林省農業試験場内田技師となる。

木炭自動車開発、戦闘機燃料研究などを行う。

一九五七年（昭和三十二年）

内田技師、アメリカの技術誌に「きのこ」に含まれるβ－グルカンがガンに効果があるという記事をみつける。厚生省に確認すると、事実だという。

のちに、ガンセンターから発表される。

当時、日本は食糧難の時代で、結核が死亡率一位の時代でした。先進国アメリカはすでに、ガンによる死亡が問題になっていたのです。

一九六七年（昭和四十二年）

内田技師、各県の農林事務所に依頼し、さるのこしかけを採集、それを原料にβ－グルカンを抽出、健康食品を作り、林野弘済会で配布。

二、薬になつた「きのこ」

昭和四十年頃になると、多くの企業が「きのこ」の研究を始めました。

特許ラッシュとなり、毒性の無い「きのこ」はほとんど特許申請されるような状態となりました。

糖類の権威、元静大農学部農芸化学科生物化学研究室金兵忠雄教授そして引き継いだのが元水野卓教授で各種植物の糖類を研究され、そのひとつとして「きのこ」もとりあげて研究されていました。

丸山ワクチンは一九六四年（平成三十九年）から使われる。

二ノ一、クレスチン

クレハ製造のかわらたけ由来のクレスチンが厚生省より免疫効果がある抗ガン剤として認可されました。

「免疫に刺激を与え、ガン細胞も含めて異物を攻撃できるのではないか」

出典：フリー百科事典『ウィキペディア』パソコン検索による。

クレスチンは、クレハと第一三共より共同販売されている抗悪性腫瘍癌剤（抗制がん剤：生物学的応答調節剤の商品名。成分はカワラタケ株菌糸体より得られる多糖類でたんぱく質と結合している。）

「きのこ」由来の薬は全て姿を消し、六十年の歴史に終止符を打ちました。

カワラタケから抽出された多糖ータンパク質複合体が抗腫瘍活性を示すこと一九七〇年（昭和四十五年）に報告されました。

経口投与で、深刻な副作用がないことから、一九七七年（昭和五十二年）の販売開始後、当時ほかに抗ガン剤が無く、単独でかなり多く５００億円以上の売り上があるほど多く使われていました。一九七九年（昭和五十四年）十二月に効能・効果が改められ単独使用は認められなくなり、化学療法と併用する薬剤となりました。クレスチンは、坦ガンにより低下した免疫応答機構を改善・回復することにより腫瘍作用を発揮すると考えられます。

二〇一七年（平成二十九年）三月十七日製造販売中止。

二〇一八年（平成三十年）三月末で薬価基準から削除されます。

効能・効果

胃ガン（手術例9および結腸・直腸ガン）治癒切除例における化学療法との併用による生存期間の延長。

小細胞肺ガンに対する化学療法との併用。

後発医薬品として「アスクレ」（日医工）「カルポクリン末」（大洋薬品工業）現・武田テバハーマ）「クレチール末」（沢井製薬）「チオレスチン」（長生堂製薬）なども発売されたが薬価基準から、すでに排除されています。

二の二、レンチナン

シイタケから抽出したレンチナン。抗悪性腫瘍剤の一種。シイタケの子実体より抽出した多糖体を抽出した物質であります。静脈内注射。点滴静脈注射。

作用機序

マクロファージ、T細胞、NK細胞に作用し免疫力を増強し抗腫瘍効果をあらわす。本剤が直接的に腫瘍細胞を攻撃するものではありません。

（味の素、山之内製薬、森下製薬）

二の三、シゾフィラン

スエヒロタケから産出する多糖類。子宮頸がんにおける放射線療法の直接効果の増強。

作用としてショック。ほかに注射局所の疼痛・腫脹・発赤・発熱等があります。（台糖、科研薬品）

そのほかに、「きのこ」以外、抗ガン剤として溶連菌から抽出したビシバニールなどがありました。

三、アガリクス茸について

＊二〇〇五年(平成十七年)七月十九日ＮＨＫテレビ放送　クローズアップ現代国谷裕子キャスター
ガン健康食品ブームが到来しています。注目されているのがアガリクス茸であるが、アガリクス茸では調査したところ、人体に効果があつたという実例は全くありません。
＊二〇〇五年(平成十七年)十月五日午前十時十四分より十一時十分ＮＨＫテレビ放送ラジオ放送
末期ガン患者がアガリクス茸の宣伝に惑わされて飲用したが死亡により、業者が過剰宣伝ということで、逮捕されました。
＊二〇〇六年(平成十八年)二月十六日ＮＨＫテレビ放ラジオ放送
どうなるアガリクス問題としてとりあげられました。

三の一、アガリクス茸(かわりはらたけ)を含む製品に関するＱ＆Ａ厚生労働省医薬食品局食品安全部基準審査課新開発食品保険対策部(注3)パソコン検索
二〇〇六年(平成十八年)当時、広く国内に流通していた製法の異なる代表的なアガリクスを含む三製品についてラット(ねずみの一種)を用いた発ガンを促進する作用を確認する試験を行ったところ、キリン細胞壁破砕アガリスク顆粒(販売者キリンウエルフーズ(株))について、製品の摂取目安量の約五倍から十倍程度の量を与えたところ、多臓器イニシエション処置を行ったところ試験系において発ガン作用を促進することが、認められたところです。
二製品のうち、二製品、仙生露顆粒ゴールド(販売者牌サンドリー)、アガリクスＫ二ＡＢＰＣ細粒(販売者勝サンヘルス)ついては遺伝毒性試験は陰性であり、中期多臓器発ガン性試験においても発ガンを促進する作用はみとめられていません。(問題とされた製品に認められた作用は、発ガンの過程の一部であるプロモーション作用であり、発ガンの最初の引き金になるイニシエーション作用は二製品について認められていません。)このように、今回報告された試験結果は、ただちにアガリクスを含む製品全体に発ガンを促進する作用が疑われるものではありません。
ヒトへの健康被害を未然に防ぐため、製品名を公表して注意喚起しました。
今後、食品安全法第八条や食品衛生法第三条により、食品関係事業者(製造業者、販売業等)は自ら販売する食品の安全性を確保する必要があることが規定されており、各事業者においては、自らの責任において確認して頂く、必要があります。
そのため、たとえば錠剤、カプセル状等の成分が濃縮された形状の食品について一定の安全性を確保するため、

厚生労働省では、「錠剤、カプセル状等食品の適正な製造にかかわる基本的考え方について」および「錠剤、カプセル状等食品の原材料の安全性に関する自主点検ガイド」(平成十七年二月一日)(Ｐｄｆ)を通知し、安全確保について事業者の自主的取り組みを促しているところです。
厚生労働省としてはアガリクスを含む製品の安全性等について、国民に対し適切な情報を広く提供していくこととしており、食品安全委員会から提示された今回の評価書においても指摘されており、引き続き必要な調査等実施していくこととしております。消費者におかれましても、多種多様な食品の中から自らのライフスタイルや健康状態に合わせて製品を慎重に選んでいただくことが重要です。

三の二、『健康食品』の素材情報データーベースより(注2)パソコン検索アガリクス(別名：メマツタケ、カワリハラタケ、ヒメマツタケ)
注意事項として、データの無断転用、引用、商用目的の利用は厳禁とあるので詳細はパソコンで検索をお願いします。参考資料のあるのみ記載いたします。
一九六五年(平成四十年)ブラジルより移入されて移入されて以来、人工栽培されるようになったが、菌株、栽培条件や産地により、その特性や含有成分が異なります。俗に、「抗ガン効果がある」「免疫力を高める」などといわれ、アガリクスと名のつく健康食品も数多くみらますが、ヒトでの有効性と安全性については信頼できるデータは見当たりません。わが国におけるガン患者の多くが代替療法の一つとしてアガリクスを利用していることを報告していると調査があります。アガリクスは食経験がなく歴史的に浅い素材であり原材料や製品により品質に大きな違いがあることから、厚生労働省のアガリクス(カワリハラタケ)を含む製品に関するＱ＆Ａには、「製品毎の安全性については、その製品の製造者販売者に問い合わせるなどしていただき、慎重に判断してください」と記載されています。その他、詳細については、「すべての情報を表示」を参照。
＊結論としての総合評価
『ヒトに対する安全性については参考になる十分なデータは見当たらない。ヒトに対する有効性については参考になる十分なデータは見当たらない。』

三の三、安全性について
一般健康成人十一名(平均四十三・六歳)にアガリクスを九グラム一日あたり六ヶ月間摂取させたところ、体調、肝機能、腎機能、に変化はなく、有害事象は認められなかったという予備的報告があります。
＊アガリクス茸に因果関係が疑われる健康被害事例十九例報告

ムリル

第二講座アガリクスの驚くべき力ガンのメカニズム

アガリクスエキス成分が、ガン細胞を直接死滅させたというより、アガリクスがマウスの免疫力を高め、それがガンの増殖を抑えたということが解かったのです。つまり、アガリクスには、免疫細胞を活性化させる力があるということです。ホクト（株）、信州大学医学部の共同研究によるものです。

第三講座アガリクスはどのようにガン細胞に作用するのか。ガンを攻撃する免疫細胞の活性化

人の体は、細菌などの異物が体内に侵入するのを防いだり、侵入した細菌を殺す（排除する）機能を持っていて、その機能を免疫系といいます。その免疫系では、侵入した細菌を殺す働き持つ細胞（白血球、ナチュラルキラー細胞、マクロファージ、Tリンパ球など）や異物を排除するのに役立つ物質（抗体）を作り出す細胞（Bリンパ球）が体を異物から守るために活躍しています。

ガン細胞は、もとは自分の体の一部であった正常細胞に異常が起こった結果発生するものです。ガン化した細胞は、免疫細胞が異物として認識することから免疫細胞の働きで排除されるのです。

＊マウスによる研究の結果。

生アガリクス抽出物は、マウスの免疫担当細胞を活性

四名肝機能不全。一名全身掻痒感、眼球結膜の黄染、褐色尿。肝障害三十一名のうち一名アガリクスが原因でのちに悪性胸腺腫により死亡。

急激な血糖の上昇と顔面、両上肢に皮疹が出現した。掻痒、呼吸困難。急激な血糖の上昇と顔面に皮疹が出現した。アレルギー性接触性口唇炎。多発性神経障害。メラニン関連代謝物、悪性黒色腫腫瘍マーカーが高くなった二例。

I型糖尿病一名。急性肝障害一名。九名中一名が高β－D－グルカン血症。ガン治療を受け、経過観察中の泌尿器科がん患者四十九人および婦人科がん患者三十二名を対象にアガリクスを一、八～五、四グラム／日六ヶ月間摂取させたとろ、十名で腹部不快感、吐き気、手の震え、皮疹、肝機能障害、下痢、腸閉塞などがみとめられた、とあります。

これらの件以来、社会の関心が、「きのこ」より遠ざかったのです。しかし、栽培、製法管理を工夫し、商品化している企業があります。

三の四、ドクターアガリクスこと阿賀陸輔のアガリクス講座（注3）

㈱小野経営サポート東京都中央区日本橋三－二－十四日本橋KNビル4F　パソコン検索

第一講座アガリクスとは何学名アガリクス・ブラゼイ・

化することで、腫瘍の発育を抑制することが示唆されました。この実験結果はホクト、信州大学医学部の共同研究によるものです。

きのこ由来の薬は一定の効果が確認できる患者もいましたが、まったく効果が無いヒトも多くいました。

時代とともに、三大療法すなわち、外科療法、放射線療法、化学療法（抗癌剤）にとつて変わつていきました。

四、pD－1によるガン治療

しかし、現在化学療法では薬害すなわち脱毛、吐き気、下痢、肺の間質という部分が炎症を起こす間質性疾患などが起こるので、ふたたび、免疫療法は脚光を浴び、京都大学名誉教授で先端医療振興財団理事長　本庶　佑による「ガンにおけるベニシリン」といわれるpD－1による免疫ガン治療は生きています。

小野薬品工業の製品名オプジーポ（注4）、メルク米㈱社製キイトルーダ（注5）などが注目されています。二〇一七年（平成二十九年）

「キイトルダー」メルク社製　保険可

「オプジーポ」小野薬品発売　保険可

杭がん剤ではなく、免疫療法により治癒。効果あるひと十パーセント。

キイトルダー、オブジーポは同じような薬効です。

効果無い人二十パーセントの人に効果ある人と同じように、体質を変える薬として次の薬があります。

「ヤーボイ」（一般名イピリマブ）

米ブリストル・マイヤーズスクイブ（BMS）製

薬オプジーポは高価です。一年で三千五百万円、治癒するまで何年を要するか解かりません。健康保険の破綻の危機が取りざたされています。

五、現在進行中のガン療法

参照一、二〇一七年（平成二十九年）四月二十三日、BS－TBS　六チャンネル午後7時、

「ガン医療最前線～前編驚異の最新治療法」

参照二、二〇一七年（平成二十九年）四月二十八日BS十二チャンネル午後七時、

「ガン治療」

五の一近赤外光線療法

ガン細胞に目じるしを付け、近赤外線を照射四十分。

アメリカで日本人技術者が行う。

五の二、化学療法

風邪のウイルスの新薬テロメライシンが、ガンに効果

五の六、ガンゲノム医療
　免疫細胞の遺伝子を操作し、ガン細胞を認識する能力を高める療法。（ＣＡＲ－Ｔ法）

五の七、免疫療法
前記述、オブジーポ等。などが現在、研究されているガン治療法です。

五の八、ガンに負けない食生活
＊フナ寿司（植物性乳酸菌）免疫細胞活性化している。フナ寿司ヨーグルトは免疫力乳酸菌が沢山あります。乳酸菌活用。
＊食生活を変える。京都からすま和田クリニック指導
　和田洋美。京都大学医学部卒、医学博士、京都大学名誉教授。
1、野菜、「きのこ」、フルーツたっぷり。体をアルカリ性にする。尿のＰＨチェック。
2、塩分ひかえめに。
3、ヨーグルトなどの乳製品はご法度。
4、牛肉、豚肉、加工肉を摂らない。
5、たんぱく質は植物性か魚が正解。
6、未精製の炭水化物は少々。
7、体に良いオメガ三、九系の油、魚介類に含まれるＤ

があることを突き止める。岡山大学病院　藤原医師
肝臓ガン、食道ガンに効果あり。合成生物学活用。

五の三、ガン特有のたんぱく質を免疫細胞教え込み、その働きを高めることでガンを攻撃する治療法　金沢大学水腰衛四郎教授。
樹状細胞ワクチン
　樹状細胞は、ガン細胞などの抗原の特徴をＴリンパ球に教え込む抗原提示細胞です。その樹状細胞をガン組織や人工抗原などと一緒に培養し、がん細胞の特徴を教え込んでから体内にもどします。
効率を上げるには免疫抑制細胞をブロックすることが考えられ、近赤外線療法を併用すれば、治癒率三十パーセントまで効率が上げられる可能性があります。

五の四、ガン幹細胞を攻撃する方法
　ガン細胞を攻撃し、死滅させてもガン幹細胞が残ると、再発します。
リウマチの薬スルファサラジンが効果ありと、突き止め、現在、結果分析中。ＩＧＴクリニンツク

五の五、カテーテルでガン治療
　従来の抗ガン剤をカテーテル療法でがん細胞のある患部まで杭がん剤を移入する方法。

ＨＡやＥＰＡなど不飽和脂肪酸が良い。
8、リンパ球を増やす。「きのこ」が大切。五十グラム以上。卵を混ぜ、ペースト状にする。
　『ここで再び「きのこ」が登場しました。』
注意、「しいたけの大量摂取はプリン体が多いので、通風の原因となります。」
9、ガン免疫細胞が活躍できる場を提供する、抗酸化成分としてビタミンＡ、Ｃ、Ｅや、ポリフェノールなどがあります。
例を記述します。
ビタミンＡ　にんじん、かぼちゃ、小松菜、大葉、ほうれん草、トマト、春菊、ケール、ブルーン。
ビタミンＣ　赤パプリカ、菜の花、ブロッコリー、貝割れ菜、ジャガイモ、レモン、キウイ、グレープフルーツ、オレンジ、いちご、ほうれん草、キャベツ、柿、ピーマン。
ビタミンＥ　かぼちや、モロヘイヤ、落花生、真いわし、ホウレンソウ、ひまわり油、小麦胚。
ファイトケミカル
　アントシアニン　ブルーベリー、ぶどう。
　テルペン類　梅、ローズマリー、オリーブ。
　フラボノイド　セロリ、ピーマン、たまねぎ。
　リコピン　とまと、スイカ、柿。
　ポリフェノール　ゴマ、大豆、たまねぎ、唐辛子、トマト、カレー粉、そば、海藻類、蟹、えび
＊食事療法、免疫療法で二割の人が助かる。体の耐病性能が増す。
＊腸内細菌でガン予防。便に百兆匹の細菌がいる。

五の九、ガン検査方法
＊フリーズドライブで調べる。
＊ＰＥＴマンモグラフーで調べる。
＊食堂がんは口臭から調べる。順天堂医学部（ガン患者の口臭特有。ブタノン、アセトン、ブタノンなど。）
＊唾液からガン発見
＊メトドローム（代謝物よりすい臓がん、乳がん、喉頭がんなど発見。）ガン未然に防ぐ。
　ガンの司、司令塔又（代謝異常悪性ガンポリープができるとＸが増す。）

五の十、ガンの苦しみ緩和ケアー
＊北里医大病院（重緩和ケアー）

＊治療計画（チーム医療アメリカ、主治医緩和ケアー医、外科、内科等協力）
＊静岡ガンセンター（アメリカ資格チャイルドライフスペシャリスト日本四十人）

子供の治療への恐怖心を和らげる。
＊早期発見が大切。
最後に近藤　誠医学博士の言葉を記します。
『死を招くガンが本当のガンで、招かないガンは真のガンではない。』

『参考文献』
木炭とともに五十年　内田　憲
免疫革命　がんが消える日　編集日本経済新聞
発行者斉藤修一
発行所日本経済新聞出版社
きのこ健康読本1季刊健康の科学No.1　発行人長谷川佳哉
発行所東洋医学舎
がんに絶対勝ちたい和田式食事療法　和田洋巳㈱宝島社
ビタミン　ミネラルＢＯＯＫ　監修者　枡重正一、鈴木和春　新星出版社
「がん」の医学百科　監修　向山雄人　主婦と生活社
『参考資料』
＊出典：フリー百科事典『ウィキペディア』パソコン検索
＊厚生労働省医薬食品局食品安全部基準審査課新開発食品保険対策部より資料パソコン検索
＊『健康食品』の素材情報データーベースより資料パソコン検索
＊ドクターアガリクスこと阿賀陸輔のアガリクス講座
㈱小野経営サポート　東京都中央区日本橋三―二―十四日本糯ＫＮビル四Ｆ　資料パソコン検索
＊二〇一七年（平成二十九年）四月二十三日ＢＳ―ＴＢＳ六チャンネル　午後7時、「ガン医療最前線～前編　驚異
＊二〇一七年（平成二十九年）四月二十八日ＢＳ十二トゥエルブチャンネル　午後七時、「ガン治療」

霧笛

―大仏次郎作品―

鍋屋次郎

明治維新、それは日本の近代化と西欧化の面から、日本の歴史上特筆に値する素晴らしい一時期と思っていました。それは小生が感じていた政治での鹿鳴館の華やかな国際的舞台であり、ヘボン等キリスト教の日本宣教から始まるキリスト教の波と女子の近代的教育など、東アジアの中でも日本ならではの発展の歩みと思っていました。

しかし、わが国でも不平等条約に基づく治外法権の下での、外国人とその屋敷で働く日本人との主従関係に、単なる主従でなく、植民地的支配を感ずる主従関係が存在し、その支配的主従関係と、外国人居留地社会を、大仏次郎がこの「霧笛」で小説として描いていることに驚嘆しました。治外法権の下で、日本にとって暗黒の社会があったとは言いすぎでしょうか。

私はある日、以前から何度も歩いていた港が一望できる港が見える丘公園、外人墓地、山手の通りに沿った昔の番地表示などを見ながら、山手の神奈川近代文学館から大仏次郎記念館を訪ねてみました。

神奈川近代文学館内には「横浜の作家」掲示があり、大仏次郎が横浜出身で、横浜に居住して作家活動をしていたことは知っていましたが、作品を読んだ記憶（子どもの頃鞍馬天狗余燼は読んだかも？）がなく、大仏次郎記念館で所蔵・刊行していた「霧笛」を購入しました。

霧笛は初版が、昭和八（一九三三）年に新潮社から発行されたものです。今から八十四年前のことです。

購入動機は、小生が昔の横浜港をイメージするとき、霧に覆われた湾内で、停泊している船から聞こえる汽笛が

「霧笛」と表現されていることに魅力を感じていたので、書店では絶版していると言われた「霧笛」が、記念館では独自に刊行して販売していたからです。

それと、その日初めて気がついたことですが、神奈川近代文学館を出ると、港が見える丘公園方面に向かう橋が架かっています。橋の下は川でも海でもなく、神奈川近代文学館と港が見える丘公園の台地間をつないでいる橋ですが、その名前が「霧笛橋」という名前であることを発見して、嬉しくなったことも動機の一つかもしれません。

右側に横浜港を眺めながらその橋を渡って行くと、前方に色とりどりの季節の花を綺麗に植えこんだ花壇が見え、花壇に出ると左側に「大仏次郎記念館」がありました。

入館して最初に、「大仏次郎ってどんな人でしょう」と記載したパンフレットを手にしました。そこには「大正から昭和にかけて活躍した小説家で、明治三十（一八九七）年十月九日に横浜で生まれて、昭和四十八（一九七三）年四月三十日に亡くなっています。その間、横浜がとても好きでしたので、横浜を舞台にした小説をいくつか書いています。猫が大好きで、いつも十匹以上の猫が家にいたそうで、「白猫」というエッセイの中で「私の家に住んだ猫の数は五百匹に余ると書いている」と伝えています。

小説「霧笛」について

「霧笛」に書かれている時代が、小説の中では具体的な年代の記載はありませんが、想像するところ明治初年ではなかろうかと思います。場所は横浜の外国人居留地、人物はイギリス商人と日本人下男を描いています。

治外法権は、例えば日米修好通商条約は安政五（一八五八）年六月十九日に調印され、翌安政六（一八五九）年六月二日に発効して、治外法権の撤廃は明治二十七（一八九四）年までかかり、関税自主権の完全回復は明治四四（一九一一）年までかかっています。（アメリカ以外に、イギリス、フランス、オランダ、ロシアの各国と同様な条約を締結していました）

治外法権条項は、日米修好通商条約第六条に「日本人に対して犯罪を犯したアメリカ人は、領事裁判所にてアメリカの国内法に従って裁かれる。アメリカ人に対して犯罪を犯した日本人は、日本の法律によって裁かれる」と定められ、アメリカ人の日本人に対する犯罪は、日本の警察権はノータッチで、言葉を替えていえば手も足も出すことができない状態になっています。

明治維新と云う時代は、日本人挙げて西欧に追いつく努力をしながら、鉄道等に代表される社会的インフラ整備や富国強兵政策、学校教育の整備など社会的に陽があたる事柄が多く伝えられている中で、不平等条約下の外国人居留

地の外国人（小説の中ではイギリス商人）と日本人使用人との関係が、恰も東南アジアなどの植民地の状況を垣間見るように記されており、日本にも一部ではあるがこのような「植民地」的な状況があったことをこの小説で知ることができました。

参考として「外国人居留地」をインターネットで検索すると（http:www.geocities.jp//hatm3/069.html）、「居留地は外国人にとってどういう土地になると思うか」の質問に対し、「列強は実力で居留地を拡大してゆくだろう。そうなると日本の中に外国の領土ができるようになる。横浜では欧米人は高台を占拠して都市整備をしていった。警察権を握り、自治を行い、治外法権の規定もあったために事実上外国領土である。清の場合、「中国人と犬は立ち入り禁止」という立札が立てられたりして、外国人に土地を取られたようなものだった」とありました。

小説「霧笛」の描写手法

この本を一通り読んでみて、大仏次郎の描写方法がユニークなことに驚きました。

小説の中の主従関係、また外国人居留地の説明描写が、最初に詳しく全体を説明しているのではなく、主従関係にしても、外国人居留地の場景にしても、ストーリーの展開に合わせて必要なことを部分的に記載し、本の中頃に行って、初めて主人の使用人に対する姿勢や、使用人が主人をどのように怖れているか、また、怖れの中にも離れ難い感情を持っていることや、また外国人居留地の状況などが総合的に理解でき、しかも、読者が読み進むなかで説明不足を疑問に思わせることなく、いつの間にか全体を理解させている描写方法に感銘を受けました。

以下に、テーマごとに断片的な説明を集めてみました。記載した説明文は小説の中の文章をそのまま引用し、漢字などはそのまま使いました。

外国人居留地の中での主従関係

主人　　クウパー（イギリス人　四十代半ば？）
使用人（下男）　千代吉　（二十一才）

○主人との出会い

千代吉が主人クウパーに初めて会った時のことである。町の混雑の中でポケットから紙入れを抜き取ったのを、あの恐ろしい目でじっと睨まれて立ちすくんだ。クウパーの持っていた太いステッキが真向から下りるものと見たので

ある。

「一緒に来い」

縛られたのも同じだった。この異人は、終始千代吉を軽蔑したまま、自分の屋敷に置くことにした。動きのとれない支配下に入ってしまった。

○主人　クウパー

妻もない、子もいない。他の外人のように犬や小鳥などを可愛がるようなこともない。何か、気の弱みを見せるようなことは決してない。誰に向かっても傲然としている。笑う顔までがそれであった。

千代吉がいつも見て、魚の目玉を入れたような心持のする冷たく光る青い目は、これまでに、幾たび、どんな凄いものを見てきたか、恐らく本人以外は想像もできなかろうと思われる。

（屋敷内での叱責場面から）

主人の洋服箪笥の中に入れてあった洋服にカビが生えていた。主人は千代吉を呼びつけ「マコトがない！」「マコトがない！」と怒鳴った。青い恐ろしい目で睨みつけられると、俺の身体がまるで射すくめられたように、固く、身動きができなくなる。その眼の色に奴隷をにらむ支配者の、ありとあらゆる軽蔑が込められているようであった。

生死を支配していると言ってもよいような圧倒的な気力が、こちらを去勢されたように無力にしてしまう。

外国人居留地内の日本人

○居留地にいる日本人

異人館のボーイなんかにくすぶっているところを見ると、もっそう飯も一度や二度はかっこんで来たやつであろうが、遊び人の面倒を見ている親分肌の男もいる。

俺の友達で異人館にいる奴ときたら、たいてい何かあって警察（ポリス）を避けている男だ。あそこはどんな刑事（デカ）だって、一歩も踏み込めねえんだからなあ。

居留地内の外国人

○居留地の外人たち

外国航路の船に出迎えに行ったとき、外人たちの高笑いや、傲岸らしい顔つきや態度には、依然として未開の植民地にでも来たような、不遜な気分が漲っているのを見ずにはいられなかった。

居留地内でのクウパーは、今の支那にいる外人のように治外法権を握って、この国の裁判権、警察権には服さない

でいる白人の間では紳士として相当の尊敬を受け、居留地にいる日本人に対しては睨みがきいて、恰も椰子の木が繁っている蛮地に入ってきた征服者のような威厳を示しているのだった。

○クウパーが囲っていた女性

外国人居留地の中、鷺山二十七番地に、家を建てて住まわせていた。十七～八の小柄な日本人女性。居留地内の日本人を差配している男（豚常）が世話をした女性。後に千代吉と懇ろになる。

外国人居留地の描写

○居留地の風景

宵の口から淋しい居留地の屋敷町です。

千代吉の主人の家　（朝、千代吉が廊下の拭き掃除をしながら）廊下の正面のドアを開けた。ヴェランダになっていて、前の家の庭の緑の木立の向こうに、港の全景が眺められるのである。いつもと何の変化もない静かな景色を見渡した。朝の微風が木々の茂みを軽く戦（そよ）がしている。汽船は昆虫を置いたように小さくて、思い思いの位置に、ひっそりとしている。ヴェランダでは睡蓮を植えた支那焼の水鉢の縁に、蜻蛉（とんぼ）が一匹、羽を光らしてじっとしている。

夏の晩だった。通りを隔てたフランスのブレッキマンの屋敷でも、まだ窓から灯影が庭にさして、よく繁った植え込みの陰が黒々としていた。通りまで伸びている枝の陰に鉄の策がめぐらしてある。

○居留地内の遊び場所

この家だってこの頃居留地に増えたあいまい屋の一軒に違いない。内部の椅子や卓子（テーブル）から見て、いずれ主人は外国人で治外法権の特別の取り扱いがあるから、日本の警察が手を入れられないのを好都合として、荒っぽいもうけをしている家に違いないのだ。

気がついてみると、ガラス戸の外は直ぐ往来で、瓦斯燈の光が青くふるえながらガラスに映っているわけだ。酒場は台の上に置いたランプが、棚に並べたいろいろな壜の腹をぼんやり浮かしているだけで、天井から下げてある瓦斯燈も、もう消えている。

奥に入って行くと数人の男女がいて、花札と紙幣（さつ）や銀貨が散らばっていた。女は一見して異人屋敷の女とわかる。

もうすっかり夜になっていた。桜道のあたりはこのころ幾軒もできた麦湯の茶屋の前を通ると、縁台に腰掛けてい

た団扇を使っていた女が、白粉の濃い顔を向けていやらしい笑いを投げかけてきた。「兄ちゃん、寄ってらっしゃいよ」と女は媚を目元から口元にいっぱいにたたえていた。そこを通り過ぎると、家は欠けた歯並びのようにまばらになり、人通りも少なくなった。

外国人とその文化

○急速な文明開化は白人がもたらした魔法？

居留地の外の、日本人ばかりの世界でも、文明開化の世の中で、汽車にしろ、瓦斯燈にしろ、その他の機械にしろ、白人がもたらした数々の魔法に、ただ人が唖然と目を見張っている際であった。居留地において直接その神々に仕えて見れば、誰だってロビンソン・クルーソーに捕まった黒ん坊の奴隷のような気持ちにならざるを得ない。種族が違うのだ。

主従の決別時の出来事

千代吉がクウパーが囲っている女と知らないで関係を持ったことから、それが露見して千代吉がクウパーの許を去ることになった時、千代吉はクウパーの所有する大きな外国航路の船に連れて行かれ、幾つかの階段を下りて船倉のような、窓もなく暗くて広いところに連れて行かれた。奥には石炭らしいものが山のよう積まれている。千代吉以外には船長一人がクウパーに同行している。歩いているクウパーは片手にピストルを握っている。暗さに目が慣れると、クウパーの少し前方に三人の東南アジア系の男が床に座っていた。

クウパーは船長に合図して男たちを一人ずつ立たせて、無言で射殺した。床はまたたく間に血の海となっていた。射殺の理由は反抗したからとのこと。千代吉は次は自分の番かと覚悟を決めたとき、クウパーと船長は三人の死体をそのままに廊下に出た。千代吉も促されて一緒に出た。クウパーと一緒に船を下りると、船は外国に向けて出航した。しばらくしてその船の汽笛が聞こえた。千代吉はクウパーの屋敷を出て、クウパーの紹介で別の外人屋敷に勤めた。

読み終えて

大仏次郎が、昭和八年にこの本を出版した動機を考えたが、私には分かりません。

外国人居留地内のことは、表向きはともかく、日本人でも知る人は実情を知っていたのではないかと思いました。私は、外国人居留地は、江戸末期の攘夷浪士から外国人の生命を守るための方策・・・例えば神奈川に住まいしていたヘボンを、安全を図るために外国人居留地に移転させるなど・・・と思っていましたが、治外法権ということになると、そのような綺麗ごとでは済ませられなくなります。

クウパーの汽船の中は、日本の警察も手を出せません。反抗したという理由で射殺された東南アジア系の男性は、使用人なのか、奴隷だったのか全く分かりません。クウパーは何故射殺現場に千代吉を伴い、見せたのか。無言の脅しなのか。

このような本があって、外国人居留地の中の植民地的人間関係の存在を知ることができたことは驚きでした。

（終）

行雲流水（五十三）

石黒修身

短歌

近詠二十首

大岡信氏を悼む

花の季に大岡氏逝く「折々のうた」文の香残し

西行を慕いし詩人この季節ひそかに逝けり花の下にて

大岡の古今の名歌あますなく「折々のうた」に採りて顯す

「台湾万葉集」が世に出しは「折々」に載りし歌が因と識れり

三十年も前に求めし「折々のうた」忘れしまゝに書架に残れり

季節・身辺

五月入り桜の散りたる札幌はリラ・ポプラ萌ゆる季節も間近となりぬ

この年もメロンの出来が沙汰される夕張の復興の報定かならぬに

夕張のメロンふた玉百五十万円御祝儀相場は去年の半額

入札の御祝儀相場は下がれども出荷の量は増えるとの報

旬は何問わば竹の子鰹とぞ老いの食欲微かにそそる

老いくれば行動範囲狭くなり詩想の元も乏しくなりぬ

歌の想湧けば夜半に起き上がる残んの情熱愛しみおり

妻病めば自ら炊ぎするという友の面差しむしろ明るく

重篤で入院の友恢復の兆しないのか情報途絶え

面会は謝絶と聞けどその安否確めたきは默し難く

東の暁の空新月に巨星が添いて異国の旗が

時局・社会

大国の利害錯綜米国と中国そしてロシアと

大国の首脳らは本音ちらつかせ救世主たる存在はなく

挑発と威圧の交錯収まらず世界の平和不安はつのる

被虐への報復かはた侵略か一帯一路真意危ぶむ

大岡信「折々のうた」と「台湾万葉集」

石黒修身

(一)「折々のうた」について

詩人で文芸評論家の大岡信の死亡が報ぜられたのは二〇一七年四月五日のことである。

大岡信は文学はじめ音楽、演劇、美術など多彩な分野に評論活動を拡げ文化勲章を受けている。

大岡は朝日新聞のコラムに「折々のうた」を二十八年間連載し、その間採り上げた作品の数は明らかではないが恐らく厖大なものであったと思料される。

(二) 台湾の短歌との関り

大岡の台湾の歌人との関りは、彼が朝日新聞の連載コラム「折々のうた」で台湾の歌人たちの短歌を一九九三年五月から六月にかけて集中して採り上げ、十九回にわたりその来歴や作風を紹介した。

その短歌は一九首あり、そのすべてが後日呉建堂(筆名弧蓬万里)の編にかかる「台湾万葉集」に収録されており、これは台湾の歌人たちのアンソロジーとも称されるものである。

本稿では、大岡と「台湾万葉集」の成因との関連を断片的ではあるが、筆者の知り得た範囲で論評する。

「台湾万葉集」の編者呉建堂は一九二六年台北に生まれ、当時の日本の統治下で、台北二中、旧制台北高校を経て、台北帝大医学部で学んだ医師である。

呉が短歌に馴染んだのは、台北高校在学中に当時教授として万葉学を論じていた万葉学者「犬養孝」(戦後大阪大学他)の影響を受けたとされている。

呉は、一九六八年より結社「台湾歌壇」を主宰し、逐次同志を増やし作歌活動を展げ、一九九三年多数の歌人を加え、「台湾万葉集」下巻として全二千首を発表した。参加した歌人七十人につき呉はその生い立ち、経歴、境遇等作歌の背景となった事柄を懇切に愛情に満ちた解説を付している。日本で刊行された「台湾万葉集」がこれである。

(三)「折々のうた」に採り上げの契機

大岡が台湾版「台湾万葉集」の寄贈を受け、一読してそのユニークな点と面白さに興味を持ち、既に述べた「折々のうた」に十九回にわたりその一部を紹介した。その反響は大きく、後刻刊行したいと、いくつかの出版社から提案があったと云う。集英社からの刊行が実現した

のが一九九四年二月のことである。

大岡によれば、「折々のうた」での紹介までに台湾版「台湾万葉集」が日本の短歌関係者に多数寄贈されていたことが判ったが、日本の歌壇の反応は殆んど無かったと云う。

当時の日本の短歌界は、晦渋な歌に陶酔しており、台湾短歌は素朴な写実や生活報告の域を出ないと云うのが大方の見方であったらしい。要するに幼稚、素朴で芸術の域に達しないと云うことだったのであろう。然しそこには偏見と差別意識があったと大岡は云う。

また政治的な思惑も見え隠れする。一九七三年日本は中国の承認に踏み切った背景から台湾との関係で中国に政治的な配慮があったのかも知れない。これは現在でも変わらぬアポリアであろう。

大岡が敢えて採り上げたのは、かかる偏見や差別、政治的配慮に対する批判と文芸評論としての公平性を守ろうとしたのであろう。ここに大岡の評論家としての信念の一端を見る思いがする。

(四) 理解と声援

話題は敷衍するが、美智子皇后の短歌の指導役であった歌人五島美代子に呉も指導を受けたことがあり、呉が剣道の大会に主将として来日した際、来臨された皇后と話す機会を得た。そこでその旨申し上げたことを皇后は強い印象を持たれたのか、後日呉の短歌が「折々のうた」に載った際に皇后が侍従に命じ呉に伝えさせたと云うエピソードがある。

台湾歌人の短歌が世間の理解が深まり、この様なことが無型の応援となったと云うことかも知れない。

大岡の死を契機として、大岡の「折々のうた」と「台湾万葉集」を敢えて結びつかせたい筆者の思いが衝動となり本稿の記述となった。

以下に「折々のうた」コラム欄の代表的なものを例歌として六首、そのまま掲載した。大岡の解説と併せ味読したい。

文中敬称略

日本人にありしは二十年短歌詠むは
五十年を越す死ぬまで詠まむ
弧蓬万里

『台湾万葉集続編』(平七)所収。二年前に紹介して注目された台湾現代短歌集の続編。「台湾万葉集」は全編これこの歌の作者(本名呉建堂)の編著になる。氏は一九二六年台北生れ。医師で剣道八段。日清戦争後五十年間日本の支配下にあった台湾では、第二次大戦終結時まで徹底した日本語教育が行われ、その結果このような記念碑的な本も生まれ得た。歴史の大いなる皮肉でもある。作者

の日本語は歌も散文もみごとの一語に尽きるが、続けて他の作者も紹介する。

吾子は今手術受け居り父われは
医師にしあれど全身震ふ
弧蓬万里

『孤蓬万里半世紀』(平九)所収。上の本は『台湾万葉集』編者として知られる作者の、自作短歌を中核に置いた自叙伝。本業は外科産婦人科の開業医だが、愛児の一人が不運にも重症の小児麻痺となり、その手術の時の歌。夫人も癌を病む。それらの短歌の連鎖によって書かれた上掲の本が、いつか長大な小説の素材の群れとも思えてくる。自他の生活を率直に活写してやまない短歌の勝利だろう。日本ではまだそういう例はない。

クーラーの効きし部屋にて老い二人
手首足首サポーターつけて
江 苑蓮

『台湾万葉集』所収。「つれ添ひて四十余年の頑固なる夫を素材に短歌を詠みたり」という歌が並んでいる。「老い二人」の家業は長年薬局で、子女も医業に関わりが多い。台湾短歌は生活を活写する点で現代日本の短歌よりずっと率直、しかも諧謔に富む作が多い。「『半値にて如何?』と迫る日本人客板につきたるその値切り方」。外国人にこんな短歌を作られては、経済大国の民もどうやら形無し。

友ら云ふ「汝は終生を子供らと
戯れ生くる終身犯」と
高 秀

『台湾万葉集』所収。「結婚を忘れて遂に五十年を学び舎に居て子らと過しぬ」「『他人の子与(預)り教ふるは大ごと』と厳格なる父欠勤許さず」。作者は台湾の国民学校(小学校)で五十年間教員一筋に生きた女性。一九九一年(平三)八十六歳で没。短歌歴二十余年。「そのかみの洟垂れ小僧外国へ留学すると挨拶に来ぬ」。世話好きで勝ち気、県会議員を兼ねたこともあると呉建堂(弧蓬万里)氏執筆の作者略歴にある。

太平洋行きつ戻りつ年経りぬ
何処や我の終の地ならむ
顔 梅

『台湾万葉集続編』所収。一九〇七年(明四〇)台北生まれの女性。遠祖は孔子の一番弟子顔回だという。たいへんな歴史を負った家の出身である。鉱山王といわれた家に生まれ、日本で女子大にも学んだが、戦前戦後の台湾を翻弄した非情な国際情勢のため、子女は全員アメリカに移住、作者も毎年太平洋を行きつ戻りつした。一見

のが一九九四年二月のことである。

大岡によれば、「折々のうた」での紹介までに台湾版「台湾万葉集」が日本の短歌関係者に多数寄贈されていたことが判ったが、日本の歌壇の反応は殆んど無かったと云う。

当時の日本の短歌界は、晦渋な歌に陶酔しており、台湾短歌は素朴な写実や生活報告の域を出ないと云うのが大方の見方であったらしい。要するに幼稚、素朴で芸術の域に達しないと云うことだったのであろう。然しそこには偏見と差別意識があったと大岡は云う。

また政治的な思惑も見え隠れする。一九七二年日本は中国の承認に踏み切った背景から台湾との関係で中国に政治的な配慮があったのかも知れない。これは現在でも変わらぬアポリアであろう。

大岡が敢えて採り上げたのは、かかる偏見や差別、政治的配慮に対する批判と文芸評論としての公平性を守ろうとしたのであろう。ここに大岡の評論家としての信念の一端を見る思いがする。

(四) 理解と声援

話題は敷衍するが、美智子皇后の短歌の指導役であった歌人五島美代子に呉も指導を受けたことがあり、呉が剣道の大会に主将として来日した際、来臨された皇后と話す機会を得た。そこでその旨申し上げたことを皇后は強い印象を持たれたのか、後日呉の短歌が「折々のうた」に載った際に皇后が侍従に命じ呉に伝えさせたと云うエピソードがある。

台湾歌人の短歌が世間の理解が深まり、この様なことが無型の応援となったと云うことかも知れない。

大岡の死を契機として、大岡の「折々のうた」と「台湾万葉集」を敢えて結びつかせたい筆者の思いが衝動となり本稿の記述となった。

以下に「折々のうた」コラム欄の代表的なものを例歌として六首、そのまま掲載した。大岡の解説と併せ味読したい。

文中敬称略

日本人にありしは二十年短歌詠むは
五十年を越す死ぬまで詠まむ
弧蓬万里

『台湾万葉集続編』(平七)所収。二年前に紹介して注目された台湾現代短歌集の続編。「台湾万葉集」は全編これこの歌の作者(本名呉建堂)の編著になる。氏は一九二六年台北生れ。医師で剣道八段。日清戦争後五十年間日本の支配下にあった台湾では、第二次大戦終結時まで徹底した日本語教育が行われ、その結果このような記念碑的な本も生まれ得た。歴史の大いなる皮肉でもある。作者

の日本語は歌も散文もみごとの一語に尽きるが、続けて他の作者も紹介する。

吾子は今手術受け居り父われは
医師にしあれど全身震ふ
弧蓬万里

『孤蓬万里半世紀』(平九)所収。上の本は『台湾万葉集』編者として知られる作者の、自作短歌を中核に置いた自叙伝。本業は外科産婦人科の開業医だが、愛児の一人が不運にも重症の小児麻痺となり、その手術の時の歌。夫人も癌を病む。それらの短歌の連鎖によって書かれた上掲の本が、いつか長大な小説の素材の群れとも思えてくる。自他の生活を率直に活写してやまない短歌の勝利だろう。日本ではまだそういう例はない。

クーラーの効きし部屋にて老い二人
手首足首サポーターつけて
江 苑蓮

『台湾万葉集』所収。「つれ添ひて四十余年の頑固なる夫を素材に短歌を詠みたり」という歌が並んでいる。「老い二人」の家業は長年薬局で、子女も医業に関わりが多い。台湾短歌は生活を活写する点で現代日本の短歌よりずっと率直、しかも諧謔に富む作が多い。「『半値にて如何?』と迫る日本人客板につきたるその値切り方」。外国人にこんな短歌を作られては、経済大国の民もどうやら形無し。

友ら云ふ「汝は終生を子供らと
戯れ生くる終身犯」と
高 秀

『台湾万葉集』所収。「結婚を忘れて遂に五十年を学び舎に居て子らと過しぬ」「『他人の子与(預)り教ふるは大ごと』と厳格なる父欠勤許さず」。作者は台湾の国民学校(小学校)で五十年間教員一筋に生きた女性。一九九一年(平三)八十六歳で没。短歌歴二十余年。「そのかみの洟垂れ小僧外国へ留学すると挨拶に来ぬ」。世話好きで勝ち気、県会議員を兼ねたこともあると呉建堂(弧蓬万里)氏執筆の作者略歴にある。

太平洋行きつ戻りつ年経りぬ
何処や我の終の地ならむ
顔 梅

『台湾万葉集続編』所収。一九〇七年(明四〇)台北生まれの女性。遠祖は孔子の一番弟子顔回だという。たいへんな歴史を負った家の出身である。鉱山王といわれた家に生まれ、日本で女子大にも学んだが、戦前戦後の台湾を翻弄した非情な国際情勢のため、子女は全員アメリカに移住、作者も毎年太平洋を行きつ戻りつした。一見

優雅な生活だが、実情は深い孤独の心境。「世代ごと国語の違ふわが家庭歴史のままに断絶に慣る」と詠んだが、一九九三年死去。

裸婦の絵に孫がぽつりと「この人は
　暑がりやなの？風呂上りなの？」
　　荘　啓東

『台湾万葉集』所収。眼科医。上記歌集には三十四人の作品約千五百首、巻末に「其他大勢」の作約五百首が加わっている。これ以前に『台湾万葉集』に当る集が同じ編者によって二冊出ており、本書は下巻。三冊の総計で約五千首、万葉集より歌数は多い。荘医博は諧謔に富む歌の作者だ。「プロ野球のテレビに見入り五分間を待たせし患者半額にする」「始まりは昔を偲ぶクラス会とどのつまりは孫自慢の会」。日本人との違いと共通性と。

漢詩

潮汐錄（八十八）

鯨游海

平成22年のドラフト一位で入団し爾来六年、今や自他共に許す日本代表チームの四番バッターに成長した。

その最も魅力的な所は、高い打率に加え長距離砲にある。この年は年間44本を打ちホームラン王となった。

とかく本塁打を多く打つ人は三振が多く、また打率も今一歩という選手が多いが、彼は打率も高く常にセ・リーグの上位を占めていた。当年の打率はリーグ3位。なお得点圏打率と打点もリーグ首位となった。

〔口語訳〕

必殺の快音が響き、天高く舞った白球に雲塊が翻る。
あっという瞬間の鋭い一閃の振りは武人の魂と同じだ。
ゲームが逆境にあろうとも泰然自若と落ち着いている。

今や日本代表チームの四番バッターとして異論は皆無だ。

☆孤を描き眞白き球や天駆くる
　雲間にひびく心地よき音

筒香嘉智選手　平成二八年九月

必殺快音雲塊飜
刹那一閃武人魂
假雖逆境從容對
日本四番無異論

押韻・飜魂論

〈筒香嘉智選手〉

必殺の快音に　雲塊翻へる
刹那の一閃は　武人の魂
仮ひ逆境と雖も　従容と対ふ
日本の四番に　異論なし

〔注　解〕

横浜ＤｅＮＡベイスターズのキャプテン筒香は、今や日本球界を代表するスター選手となった。

野球の名門横浜高校の卒業であるが、出身地は和歌山。

黒田博樹投手　　平成二八年霜月

揮肱欲擲不能投
筋骨悲鳴猶未收
三五缺番安藝譽
誰忘高志古巢酬

押韻・投收酬

〈黒田博樹投手〉

肱を揮って擲げんと欲するも　投ぐる能はず
筋骨の悲鳴　なほ未だ収まらざるがごとし
三五の欠番は　安芸の誉れ
誰か忘れん高志の　古巣に酬ゆるを

〔注　解〕

広島東洋カープの当年の優勝は実に四半世紀、二十五年ぶりの壮挙であった。その原動力となったのが黒田の米国からの復帰と活躍だった。然し既に41歳となっていた。

一九九三年にドラフト二位で入団。

父親は昔南海（ホークス）の外野手だった。その父を凌駕する大選手として大成した。日米通算して二百三勝。晩年に古巣広島に復帰した際、年収で数十倍の米球団の慰留を断わったとして彼の男気が美談となった。なお三五とは15の詩的表現。

☆帰り来て古巣に酬ゆ高志に
いざ限りなき拍手送らん

廣島東洋鯉魚棒球隊優勝　　平成二八年九月

忘却凱歌幾十年
市民情熱化炎燃
遂聞勝鬨赤兜叫
其夜藝州星滿天

押韻・年燃天

〈広島東洋カープ棒球隊優勝す〉

凱歌を忘却して　幾十年
市民の情熱　炎と化して燃ゆ
遂に聞く勝鬨　赤ヘルの叫び
その夜芸州　星天に満つ

〔注　解〕

市民球団の広島東洋カープが二十五年ぶりにリーグ戦に優勝した。生え抜きの緒方考市監督の下、黒田博樹投手、新井貴浩内野手らの「古巣への男気の復帰」というドラマがあった。なお「野球」は和語で漢語では「棒球」。貧乏球団の平均年俸は巨人軍の凡そ半額。それでもチーム一丸となって闘った郷土への情熱が実った。

赤兜＝赤いかぶと。

凱歌＝勝利を祝い歌う。祝勝の合唱。

☆赤兜の凱歌の焱あかあかと
安芸の薄暮は満天の星

《漢詩の流れ76》鎌倉・室町時代①釋道元、釋寂室

曹洞宗の開祖、道元。23歳で宋に渡り禅宗を修得。帰国後、坐禅を勧め、経典を読み説くだけの宗教から脱皮し、禅の普及、布教に努めた。

京都で活躍し、晩年は越前に招かれ永平寺を開いた。

山　居　（山居）道元

西來祖道我傳東　西来の祖道　我れ東に伝へん
鉤月耕雲慕古風　月に鉤し雲に耕して　古風を慕う
世俗紅塵飛不到　世俗の紅塵　飛びて到らず
深山雪夜艸庵中　深山雪夜　草庵の中

祖道とは達磨。中国禅宗の祖と仰がれる高僧。天竺から中国に渡り崇山の少林寺で面壁九年の修行をした。

月光の下で釣りをし、雲のかかる山上で畠を耕すという高潔な生活の中にも、ひたすら古人の遺風を慕って止まないのであった。

題　壁　（壁に題す）寂室

借此間房恰一年　この間房を借りて　恰も一年
嶺雲溪月伴枯禪　嶺雲溪月　枯禅に伴う
明朝欲下巖前路　明朝下らんと欲す　巖前の路
又向何山石上眠　また何れの山の石上に向かって　眠らん

間房は空室。明日はこの山を辞し巖前の路を下るのだが、その先は全く当てはない。何処の山に眠ることやら。

臨済宗永源寺派の開祖。三十歳で元に渡り修行した。

漢詩

汲深録（九）

松井秀人

茗溪新柳　　茗溪の新柳
平成二十九年三月

茗溪古寺石泉幽　茗溪の古寺　石泉幽なり
門外河堤春色浮　門外の河堤　春色浮かぶ
新柳青青臨緑水　新柳　青々　緑水に臨む
舞風細縷拂清流　風に舞う細縷　清流を払う

押韻・看　寒　歎

〔注　解〕

故事：駒込高林寺境内の湧水を、二代将軍秀忠に献上。以後将軍賞美の名水となり、この辺一帯は「お茶の水」と呼ばれ、昌平黌の儒者達が唐風に「茗溪」と呼んだ。

茗溪＝「お茶の水」の唐風名。

石泉＝岩の間から湧く泉。

細縷＝新柳をさす。

〔口語訳〕

茗溪の古寺の岩の間から湧き出る泉は奥深い寺門の外の河堤には、春のけしきが浮かんでいる。新柳は河の緑水に臨み、青々としている。柳の細い枝は、清流を払っている。

蘭亭懐古　　蘭亭懐古
平成二十九年三月

會稽蘭渚暮春天　会稽の蘭渚　暮春の天
憶昔流觴詩酒筵　憶う昔　流觴　詩酒の筵
神助右軍揮醉筆　神助く右軍　醉筆を揮う
今傳書法二千年　今に伝う書法　二千年

押韻・天　筵　年

〔注　解〕

故事：会稽郡の蘭渚にある亭を「蘭亭」といい、東晋の王羲之は右軍将軍・会稽内史であって祭事と曲水流觴の遊びをした。

憶昔＝昔のいろいろな事を思いおこせば。憶う昔。

右軍＝右軍将軍であった王羲之のこと。

〔口語訳〕

会稽の蘭渚、季節としては暮春の空で昔を憶えば、流觴の遊びや詩酒の筵が思いだされる。神が助ける王羲之が　筆を揮い　その書法は二千年後の今に伝わる。

春日野遊　　春日野遊
平成二十九年四月

遅遅春日滿郊原　遅々たる　春日　郊原に満つ
習習光風草色繁　習々たる光風　草色繁し
野蝶翩翩如伴友　野蝶　翩々　友を伴うが如し
百花巡盡已黄昏　百花　巡り盡し　已に黄昏

押韻・原　繁　昏

〔注　解〕

遅遅＝日が長くてのどかなさま。

習習＝飛び動くさま。たたみかけるさま。

光風＝雨後の爽やかな風。雨後のさわやかなけしき。

翩翩＝ひらひらとひるがえるさま。

黄昏＝夕方。

〔口語訳〕

日が長くのどかな春の日が、郊原に満ちている。雨後のさわやかなけしきの中で、草が繁っている。野蝶がひらひらとひるがえり、友を伴うように百花を巡り盡してみると、已に夕方になっていた。

芳春遊歩　　芳春遊歩
平成二十九年四月

春風習習百花香　春風　習々　百花の香り
遅日郊遊千草蒼　遅日　郊遊　千草蒼たり
鳥語喈喈高復下　鳥語　階々　高く復た下る
歸途野景已斜陽　帰途の野景　已に斜陽

押韻・香　蒼　陽

〔注　解〕

鳥語＝鳥の鳴き声。

遅日＝夜明け。

喈喈＝多くの鳥の鳴き声。

高復下＝鳴き声が高くまた低く。

〔口語訳〕

春風がさわやかに吹き、百花が香ばしい夜明けに郊外に遊びに出掛け、千草蒼なり。鳥が高くまた低く飛び啼く帰り道の野景には已に陽が傾いている。

小田原城櫻花　　小田原城櫻花
平成二十九年一月

堅城誰謂睨西東　堅城　誰が謂う西東を睨むと
亂點殘紅一雨中　乱点の残紅　一雨の中
雲翳相呼天下急　雲翳（うんえい）　相呼ぶ　天下の急
北条空斃落花風　北条空しく斃る　落花の風

押韻・東　中　風

〔注　解〕

亂點＝あちこちに散在する。

殘紅＝散り残りの赤い花。地上に落ちている赤い花。

雲翳＝雲におおわれてできた影。

〔口語訳〕

堅城、誰かが西東を睨んでいると言っていた。あちこちに散った桜花は、雨の中。雲におおわれた影は天下の急を告げている。北条一族は、桜が散る風と共に滅亡した。

信託の起源2
ユース―トラスト―信託

永田俊一

一、ユースからトラストへ

前回、ユースまで述べ、その発生と法的な受容の展開に触れましたが、その後のゆり戻しと更なる展開を経て定着してゆく部分は、比較的さらっと触れるにとどめております。そこで今回は、その部分を少し補強し、次の米国での展開に繋げて行こうと思います。

それに先立って、私自身も感じてきたところですが、ミレニアムに近い長期の歴史的制度的変化は、実際には気の遠くなるような積み重ねの日々の中で醸成されており、ともすれば木をみて森に迷うものです。ユースの発展を追う場合も然りかと思われます。この分野の先学の多くが、その発展の道筋を発展段階の形で整理を試みておりますので、それらを踏まえてごく簡単に大まかな道筋のイメージを、先ず記して置きましょう。

○時代はノルマン・コンクェスト（1066）から十八世紀初頭（名誉革命、大ブリテンへの序章の頃）迄です。

○英国の元来の普通法（コモン・ロウ）の欠陥を補充して英国法を合理化した衡平法（エクイティ）の発展がこの期に見られます。

○ユースの発生・発展もこの期に見られるわけですが、やがて衡平法裁判の対象に入ってきて次第にそのウェイトを増していきます。後に、信託法は内容的に衡平法の約七割を占めていると言われました。

○この時期の衡平法発展を四段階に分けるのが一般的で、

（一）第一期は十三世紀末迄でエクイティ前史とも言うべき時代で、普通法裁判所自身が王への訴え等を受け、国王の名の下に緩和の原理で救済を図ったものです。

（二）第二期は十四世紀初頭からバラ戦争終結（1485）の十五世紀末迄で、国王自ら或いは大法官が、普通法裁判の不当や法欠缺を法と道徳の同一視の形で救済したものです。

（三）第三期は十五世紀末近くから十七世紀末近く迄で、エクイティ試練の時期でもあり、醇化期でもあります。大法官が国王の名の下正義衡平の立場より与えた特別の恩恵的救済慣習が次第に発展、十六世紀に至り独立の裁判所（大法官裁判所・衡平法裁判所）で行使され、その地位を確立したものです。

（四）第四期は十七世紀末近くから以降で、大法官ノッティンガム卿（1672 就任）の法体系化の取組み等が進展しエクイティの結晶期といわれ、法体系が形成され明確なルールに従い裁判が行われることになったものです。

なお卿以降の衡平法裁判所のトップには法律家が就くことになります。（なお両裁判所が統一されるのは、十九世紀後半　1873）。

○ユース発展も四段階にされることが多いようです。

（一）第一期はユースの発生から十五世紀初期迄で、受益者の権利が単に道徳権利として保護された時代です。土地に関するユースは十二世紀には現れており、十四世紀には、土地・家屋に関するユースは遍く一般に敷衍していました。しかし、この時期でも普通法裁判所はその有効性を承認しませんでした。

（二）第二期は十五世紀初期よりユース法の制定（1535）迄の時期で、受益者の権利が衡平法上の権利として保護された時代です。十五世紀に入ると土地に関するユースはいよいよ増勢を強め、合法的行為として一般に観念されるようになります。他方で信義違反もあり法律的な権利として位置づける必要が強まりました。十五世紀半ばの衡平法裁判所の判決記録が残っています。実際には嚆矢は十四世紀初との推定もあります。

（三）第三期はユース法の制定（1535）より十七世紀に至る間の時期で、受益者の権利が普通法上の権利に戻った時代です。ヘンリー八世が封土収入の涸渇を防ぐため、長子相続課税を潜脱するユースの撲滅を図るため制定したのがユース法で、人々が享受してきた土地遺贈の権限を剥奪したものです。衡平法上の受益権を普通法上の権利に転換せしめる形で制定されました。

しかし、動産等ユース法適用の無いユースもあり、やがてその内の所謂二重のユースがユース法逃れの為に利用されるようになります。その二重の第一のユースにはユース法が適用されましたが第二のユースには適用が無いことに着目して目標を達成したものです。

（四）第四期は十七世紀初期以降です。二重のユース、ユースの復権、それがトラストの名で発展し信託法理を形成した時代、換言すれば近代信託の時代です。

以上前置きした上で、イギリスの信託につき今回は次のことをお話しようと思います。即ち、その重要な到達点であるエクイティの体系化が行われた十七世紀末に向かって、十五世紀末から十六世紀前半のユース法制定の試練を経て、二重のユースの工夫からトラストへ、そしてその法体系化に至る道行きを中心にということです。前回と説明がかぶる処が少しありますがお許し下さい。

（歴史的社会的背景）

チューダー朝以降十七世紀後半迄、前回触れていますが簡単に要約再録しますと、

バラ戦争後一四八五年にヘンリー七世がテューダー朝（～1603）を起こします。百年戦争とバラ戦争で貴族・騎士層は疲弊、ペスト大流行や農民一揆等で社会は混乱、農奴制・封建制は弱まり、絶対王政へと移行して行きます。経済的には良質の羊毛生産に支えられた毛織物工業が発達して来て、交易を通じて典型的な農業国からの脱出を徐々に図っていくことになります。

絶対王政はイングランド国教会を成立させます。一六世紀に入るとヨーロッパでは宗教改革の動きが活発になります。イングランドにおける宗教改革はヘンリー八世が、離婚を認めぬ教皇に怒って、教会の首位権は国王にあるとの国王至上法を発布、反対者を次々処刑するという出発点を持つところに特徴がありますが、最終的に国教会の優位が確定されるのは、エリザベス一世により国王至上法が再発布され、重ねて礼拝統一法が制定された後のことになります。

エリザベス一世はイングランドにおける絶対王政の頂点を極めます。当時、世界各所に植民地を持つ強国スペイン・ハプスブルク家に挑戦、ネーデルラント北部七州の独立運動を支持、一五八八年彼の無敵艦隊をアルマダの海戦で破り、その国際的地位を高めます。

その後継にはスコットランド王がジェームス一世を名乗りステュアート朝を開きます。国教会に統一することに腐心、ピューリタンやカトリック教徒を弾圧、息子チャールズ一世は更に国教会を長老派の強いスコットランドにも導入しようとし大反乱となります。軍事制圧の為の大増税案が大反発を招き、一六二八年議会は権利の請願を王に提出します。

一旦認めたチャールズ一世も直後に議会を解散、以降王と議会の対立は決定的となります。四二年ついに内戦が勃発、鉄騎隊を率いるクロムウェルの登場で劣勢に転じ、四六年王は降伏。一旦脱出し反旗を翻すも捕まり四九年処刑され、王統は一旦断絶、共和制となります。所謂清教徒革命です。

クロムウェルの宗教的にも過激な軍事独裁政権はその死後間もなく瓦解。六〇年、王政復古でチャールズ二世

が即位します。その後も王権やカトリックの王即位への議会による牽制等を経て、一六八九年、議会の優位性を明文化した「権利の章典」に署名の上、オランダから迎えたオレンジ公ウィレムがウィリアム三世を名乗り、ジェームス二世の長女でもある妻が共同統治でメアリー二世となり名誉革命が成就します。

（ユースからトラストへ）

ユースが認められるようになり、十五世紀から十六世紀にかけますます利用者が増え、真正の特に幼い相続者に封建的負担がかからないように、人々はユースを一般的に広く利用するように成りました。

ユース利用の一般化と法的保護が進む中、十四世紀の末葉の頃より、債権者詐害や不動産不法侵奪者の追及逃れの為等明白に違法であるか公序良俗に反するユースを禁圧する目的で立法が為されるケースも出てきました。しかし十五世紀後半になると、こうした違法性の強いユースを禁止する法律とは別の、ユース設定の土地の真の権原が誰に存するか不明確になり、安心して不動産取引が出来ないといったことが指摘され、取引の安全の観点からの法制定もされました（1484：受益者をコモン・ロウ上の不動産権者として扱う）。

一方で、ユースによる封建的付随負担の回避に対する国王の側からの反撃も開始されます。国王にとっては、同一の財源から、自らの生活維持は勿論国政の運用費用も支出しなければならず、ユースによる財源（土地等）の減少は王室財政を圧迫し、放置できない問題であります。特に当時百年戦争での戦費増大・大陸知行地喪失は痛手でありました。

全国的規模で立法によるユースの禁圧を最初に試みたのは、ヘンリー七世でした。一二七六年マールボロー法での後見権を回避する目的を持つ詐欺的譲渡禁止が、その後実効無きものになっており、それを補足する為の法律ですが、効果は限定的でありました。結局、破産寸前の王室財政立て直しを図ったヘンリー七世の増収策ははかばかしくなく、支出切り詰めの質素な生活で何とか危機を乗り切ったといわれています。

しかし、後継のヘンリー八世は万事派手な浪費家で、一五二九年に始まるローマ教皇との宗教上の争いは内憂外患に繋がり、備えの軍事費用だけでも膨大で、枯渇寸前の王室財政で賄えるものではなかったのです。

そこで王は、封建的付随負担に目をつけ、主たる施策としてユース禁圧のユース法を一五三五年に制定します。受益者のエクイティ上の不動産権をコモン・ロウ上の不動産権に転嫁しコモン・ロウ上の諸原則のもとにおくことで、不動産遺贈を禁止し、封建的付随負担の復活を狙ったものです（受託者は単なる導管とみなされるよ

うなもの）。

ただ、ユース法の目的が封建的付随負担を復活させるためとはいえ、ユースの設定自体を禁止していないのは、この頃までにユースは不動産法の重要な一角を担い生活の隅々まで浸透し、単に不動産遺贈の手段としてばかりでなく、不動産譲渡の一手段として用いられるに至っていたからと思われます。

他方でこの法は、ユース発生以来永年に亘り享受してきた不動産遺贈の自由を奪われ、封建的付随負担支払の義務を再び負わされることになった国王以外の土地保有者、とりわけ騎士・ジェントリー層にすこぶる不評でした。ユース法制定後程なく「恩顧の巡礼」という反乱がおきると彼等の多くがそれに走ったりした為、王は譲歩し一五四〇年遺言法を制定、一定のものに遺贈処分を認め、徐々に緩和を図ることとなり、一六六〇年完全に遺言処分が可能になり、封建的付随負担も僅かな例外を除いて廃止されることになります。

ところでユース法には、コモン・ロウ上の不動産権に転嫁するという意味において、その適用を除外されたユースが初めからありました。十七世紀後半に向けて、その内の二重のユース使用の動きが強まりました。二重のユース（use upon use）とは、本来受益者のために受託者に託すものが、ユース法ではコモン・ロウ上の不動産権になってしまいますので、間にもう一つ第一のユースを入れ、それがコモン・ロウ上の不動産権となっても、第二のユースと成り本来の受益者に行ったものは、ユース法の適用を免れるという点をつき、ある意味脱法的に衡平法上のユースを実現させるものでした。

これも当初大法官裁判所（衡平法裁判所）でエクイティとしての保護が得られませんでしたが、十七世紀後半には、結果として保護されるとの解釈に繋がる判決がでたり、そもそもユース法自体が狙った封建的付随負担が廃止になった（1660）ことで、use upon useは大法官の保護を受けることに成ります。そしてこの第二のユースがトラストと呼ばれるようになり、更には本来のストレートなユースで足りるようになる訳です。ユースがトラストの用語に置き換って発展することに成ります。

このあたりが前述衡平法の結晶期に当り、ノッティンガム卿が大法官として、普通法と衡平法の法体系としても、衡平法裁判所と普通法裁判所の裁判組織としても並列する位置付けを確立する時期に重なっている訳です。

二、トラストとしての発展

（トラスト利用の拡大と法理の発展）

十七世紀から十八世紀にかけて、商業や毛織物工業の発達等英国の経済発展は加速化します。地主以外にも財

産保有層が広がり、富裕層は財産の承継にトラストを盛んに利用し、対象となる財産も広がり、従来の枠にはまらぬトラストも普及します。同時に増えたトラストに関する訴訟を通し、ノッティンガム卿始め衡平法裁判所の歴代大法官達によって信託法理の整理も進みました。

そうした裁判と法理確立の関係で有名なのがキーチ対サンフォード事件です。

一七二六年ロンドン郊外（北東約23キロ）のラムフォード市場（1247以来取引）での取引を巡り訴訟がありました。キーチの父親は当市場で商う商人でしたが、キーチが未成年のうちに亡くなり、生前息子の為に「市場の一角を借りる権利」をサンフォードに託しました。キーチは未成年者ながら父の遺志を継いでラムフォード市場で商売を続けますが、受託者サンフォードは地主からキーチにはもう場所は貸さないと伝えられます。

折悪しく南海バブルがはじけ、世の中は混乱しており、地主は未成年のキーチが商売が続けられるか不安を感じたのです。「市場の一角を借りる権利」は不況期とはいえど貴重な権利です。地主と交渉しサンフォードなら貸してもよいとの同意を得ます。そして自身で市場の商いを行うことにした彼は大きな利益を得ます。地主が貸さないと、信託財産「市場の一角を借りる権利」が無くなるので信託は終了ですが、それを託されていた受託者サンフォード自身が、同じ一角で利益をあげるのはキーチとしては納得できず、裁判所に訴えを提起しました。

キング大法官の判決はキーチ勝訴でした。確かに最初の信託は、地主が市場の一角を貸してくれなくなった時点で終了しましたが、受託者は信託に関連して自らの利益を図ることは許されず、サンフォードは、自らその一角を借り利益を上げることは許されません。裁判所はそこに信託があったものと看做し（擬制信託）、サンフォードが受益者リーチの為に利益を上げたものとして扱いました。即ちそこでの利益は、全て受益者のものとして、全てキーチに引き渡さねばなりません。受託者は信託が終了しても、信託で得られた機会を利用して自らの利益を図ることは許されませんし、これに違反した受託者は、違反によって得られた利益をすべて受益者に引き渡さなければならないのです。これはノー・プロフィット・ルールと呼ばれ、受託者に適用される忠実義務を構成する重要な法理へと発展してゆきます。

信託法理が確立していくと、財産承継以外にも利用は広がっていきます。ターンパイク・トラストもその一つで、信託の仕組みを使って民間の活力が社会資本整備に利用されました。こうして道路網や河川網の整備は、一九世紀に興る産業革命の基盤となりました。

（産業革命の進展と国際社会の拡大）

既に一七六〇年代からマンチェスター・バーミンガム等北部を中心に、英国では世界に先駆けて「産業革命」が始まっています。

また、産業革命本格化に先立つ十七世紀後半には、「ノーフォーク農法」といった画期的な農法が普及、農業生産の飛躍的向上をみます。この農業革命の結果、より大きな農地を確保しようとする農業主、地主である荘園主や土地ブローカー等によって「囲い込み」が大規模に行われるようになり、次第に土地を失う者や所謂共有入会地であるコモンズの縮小が村落共同体の生活を脅かすものになります。そして、こうした農村を追われた人々を都市労働者として吸収しながら、十八世紀産業革命が本格的に進行してゆきます。

一方で十八世紀末から一九世紀にかけての時期は、アメリカ合衆国独立（1783/9独立宣言は1776/7/4）、フランス革命（1789/7/14）、ナポレオン戦役（～1815）、パリ七月・二月革命（1830/7,1848/2）、と欧米騒擾の時代です。イギリスの国際的優位が確立する過程でもありました。そうした中、一八三七年六月ヴィクトリア女王が十八歳で即位します（妖精女王、1837～1901）。

ヴィクトリア時代の英国は、一方でこうした産業革命による工業化の発展を背景に大英帝国の拡大を見るわけですが、他方で急激な経済成長と利益分配の不平等が新たな階級格差を生み、労働問題や都市人口の爆発的急増が居住環境の劣悪化を生み出します。特にこのヴィクトリア朝後半は繁栄の陰の部分、すなわち失業・生活困窮等労働者受難、公害・衛生・スラム化等環境悪化、犯罪増加といった問題が顕著となり、それを巡る騒動・対立も強まり、同時に問題解決のための動きも起こってきます。

急速に進んだ鉄道建設を背景に暮し向きの改善も踏まえ郊外に住宅化が広がりだすと、地主や工場主による農地囲い込みが進み、郊外の環境も危殆に瀕しだします。入会地保存協会（一八六五年設立）の、自然豊かな土地を守ろうというオープン・スペース運動が始まったのもこの頃でした。環境改善や公園や遊び場の確保など都市部のオープンスペースの確保とともに、休日に心身を癒すことの出来るカントリーサイドのオープンスペースの確保へと運動が広がってゆきました。英国では、社会改良を牽引する一部の資産階級、知識階級や博愛主義者等の人々が、勢いを増す産業革命と同時に繰り広げられた乱開発に警告を発し、具体的行動にも表わしたのです。

（ナショナル・トラスト）

十九世紀半ばに始まるコモンズ保存協会の共有地に憩いの場を求めその拡大を図る動きや都市部の住宅改良運動などの動きがやがて一つに収斂してゆきます。入会地保存協会の弁護士を務めるロバート・ハンターとそのメンバーでもあり、都市貧窮化・スラム化などの改善に努め住宅改良家としても知られるオクタヴィア、ヒルの間でアイデアが生まれ、ワーズワースの詩でも有名な湖水地方で環境保護運動を展開していた牧師ハードウィック・ローンズリーも加わって、一八九五年、ナショナルトラストが創設されました。

市民のための憩いの場としての自然景勝地や歴史的名勝地（カントリーハウス＝領主館等の施設も含む）を取得し保存し後世に残すことを目的とする、公益信託の一種（チャリタブル・トラスト）です。一九〇二年には、湖水地方で初めて大衆の寄付金を募ってのプロパティ取得にも成功します。湖水地方といえば、ビアトリクス・ポターのピーター・ラビットの物語が有名です。ローンズリーと親しかったビアトリクスの父親はナショナル・トラストの終身会員一号になります。勿論彼女もローンズリーの影響を受けて育ち、生涯ナショナル・トラストへの貢献を果し、生前からその遺贈・保存・公開に言及していた彼女の暮らした物語の世界そのものがナショナル・トラストとして残されました。

因みにナショナル・トラストは今では、英国一の農場主であり延べ千百キロに及ぶ海岸線の地を持ち、寄付・会費貢献会員三百五十万と多数のボランティアを擁し、人々に憩いの観光を提供しております。小野まりナショナル・トラストサポートセンター代表によれば、「ナショナル・トラストのナショナルというのは国家のという意味ではなく、国民のという意味で、市民による市民のための環境保護組織として成り立っているのです。最初の三人の創立者の活動もすばらしかったけれども、市民がそれを引き継いでいって、まさに市民のトラストそのものになっているのです」ということです。

（受託者法の成立）

こうした中、信託法理の面でも進展をみます。

イギリスにおける信託法制は僅かの例外を除き、元来不文法（unwritten law, case law）として発達してきたものですが、近代信託の発達に伴い、受託者の監督に厳になるとともに、受益者の保護を期し多くの成文法（statues）の制定を見ることとなります。その嚆矢となる主要なものが一八九三年統一受託者法で、一七九六年から一八九二年に至る約百年間の諸法律三十三以上を統一整理したものであり、投資、受託者の権利義務、受託者の選任及び信託事務処理の処理に関する裁判所の権限、その他雑則につき規定されています。

三、イギリス民主制発展と信託の貢献

ユース＝信託制度について、それが、封建制度下のイギリスにいわば異端的に現われ、大法官による法的保護の時代、次の国王の側からの封建的反動の時代を経て、近代的信託へと発展していく動きをここまで見てきました。こうしたユースの発展が、イギリスの封建制度の崩壊や王権の制限に経済的観点から役割を果したという命題があります。即ち、ユースが封建制原理のもとに縛りつけられていた土地を、その桎梏から解放することによって、封建制度を根底から支えていた封建的土地法秩序を揺がし、また、封建的附随負担の回避を可能にすることによって、封建体制の財政的基盤を脅かすに至ったことに求められる視点です。その辺に焦点をあてて振り返ってみたいと思います。

（分配の衡平力としての作用）

これまで述べてきました信託遺贈にせよザルマンの制度にせよ、相続という身分関係において重要な場面で、分配の衡平化の機能を果したといえます。それがユースとなると、英国では十五世紀以来、十九世紀後半まで普通法裁判所と衡平法裁判所が並存し、後者がこのユースを認知し、受託者の履行責任について判例を重ね信託法が確立された訳です。衡平法裁判所という司法上の制度的機関の働きをテコに、財産権の取扱いを通じて身分関係の衡平化が図られ、その核になった信託法は英米法において重要部分を占めているとされます。その英米だけでなく、大陸法の世界でも信託遺贈やザルマンの伝統は社会に生き続け、実質的に慣習法の目をくぐって衡平化を促す役割を担ったと考えられます。ナポレオン法典で整備された遺言の法制もそれらの歴史的事実を踏まえて制定されたといえましょう。衡平化はある意味で改革のモメンタムでもあったと考えられます。

「エクイティの功績のうちで最大の、そして、最も重要なものは、信託を発明し、それを発展させたことにある。信託は、きわめて弾力性に富み、一般性を有する『制度』である。それは、契約と同じ位弾力性を有し、一般性を有するものである。信託はおそらく、イギリスの法律家のなしとげた業績のうちで最も傑出したものであろう。それは、われわれには、文明に必要不可欠のもののように思われる。しかし、外国の法律には、これに類似するものは全く見られない」。とイギリス法制史学の泰斗メイトランドは評しています。

ユース＝信託制度が封建制度下のイギリスに現われた段階から、イギリスにおける民主主義の発展の足取りを他より早く継続的に進めたと言えると思います。

即ちユースは歴史的に、封建領主の徴税の前提になっていた土地等の長子相続を、王権に抗す形で教会への寄

進や財産分割をその信託機能を使うことで潜脱する役割を果たし、信託の法理を定着させるとともに、封建制を経済面から民主化させました。いわば、土地保有や封土にかかる封建的付随負担をユース活用で逃れることによりで経済面の力の拡散が図られ、領主や国王の財政力が弱められ、政治的権力も抑制されます。そして経済的にも政治的にも力を増す層が拡大しつつ議会を通じ国政にも影響力を漸次強め、王権が弱まり、更に議会の力が増すというプロセスで民主主義社会の発展が進みました。

（ヨーロッパにおける国民国家の発展）

視野をヨーロッパに広げてみましょう。

ヨーロッパで国家が交易を通じて経済の発展に全面的に絡みだすのは、イタリアの都市国家が地中海貿易を活発化させ、十五世紀末にはオスマントルコと覇を争い、同時期ポルトガル・スペインが太平洋・大西洋を渡り植民地化を進め、アジアの香辛料・農産品を齎し、中南米から略奪した金・銀の流入が富・資本の蓄積となって、全欧州に経済発展の地殻変動を起こすことに始まります。

覇を競う諸王国は封建制から絶対王政へと国内権力を集中して王権の強化を果たし、富の拡大を求め、重商主義の名の下国家的な世界交易覇権争いの様相を強めてゆきます。反面国民的経済成長がルネッサンスの波を引き起こし、宗教改革の流れを生み出し、各国に民主化のエネルギーを強めます。デモクラシーはギリシャの都市国家起源で、人民・民衆を表すデモスと権力・支配を意味するクラティアの語が組み合わされたデモクラティアから来ています。その後死語、ともすると衆愚政治を表す象徴となっていたデモクラティアが中世の眠りから覚め、人々の経済力が飛躍的に拡大・発展するヨーロッパのグローバル化の中で再生してくるわけです。

その中で、ローマの信託遺贈に起源しゲルマンを経由しイギリスに渡ったユースが十六世紀前半のヘンリー八世治下の試練を経て、独自の衡平法裁判所を持つ信託の制度として確立への歩みを進めます。それが富の分散・衡平化を通じて経済面から民主化の動きを胚胎、人々の国政への関与を強め議会制民主主義を発展させ、国民的革新のエネルギーが、経済的にも政治的にも、国民国家としての先進性・優位性を高めてゆきます。

十七世紀に入るにつれ、その国民国家への動きを速めた蘭・英に海洋の覇権が移るとともに、科学の発展が新技術の革新的進歩を促し、工業の飛躍的発展に繋がってゆきます。直接個人が神と向き合うようになった宗教改革後、自律自助の倫理が社会の精神的支えとなり十八世紀後半からの資本主義の興隆に繋がります。重商主義を批判し自由交易を標榜する経済学が英国発で生れ、覇権争いは、国民国家の産業革命を体した経済力に基く市場

原理の交易力をベースに展開されることとなります。

（信託の果す役割の歴史的切り口として）

繰り返しで恐縮ですが、ローマの信託遺贈に起源し、ゲルマンではザルマンが形づくられ、イギリスに渡ってユースとして発展する信託は、力の弱い寡婦や領民が、夫の遺産を自分に帰属させたり、課税の便宜のため長子相続を強要する領主・王権に対し教会への寄進や家族に財産を分け継ぐために、信じる受託者に財産を委託し目的を達成するという形で広がりました。そして、十六世紀前半のヘンリー八世治下の試練を経て、独自の衡平法裁判所を持つ信託の制度として確立への歩みを進め、富の分散・衡平化を通じて経済面から民主化の動きを胎動させました。他方で宗教改革は個人がより直接的に神と向き合い精神的に自律自助の倫理に支えられる社会を醸成しました。

両々相俟って身分関係に変化を齎し、政治的には身分制議会の成立やロックやルソーに代表される「人民主権論」の支持拡大、国民国家を目指した動き拡大、憲法や議会や選挙制度の確立に繋がって行きます。

その国民国家が花咲かせた科学の発展が新技術の革新的進歩を促し、産業革命を起し十八世紀後半からの資本主義の興隆に繋がり、やがてその経済的膨張力は帝国主義的競争を世界中に展開することになりますが、反面前述の自らの身にかつて起こったように民主主義の種を進出地に蒔くことにもなります。

こうした動きを通して目指されたものを客観的に問うとすれば、「自由で平等」な人間関係や社会の実現であったと言えましょう。更に普遍的な背景に遡れば、それを希求する自然な感覚が人間には本来備わっているということです。その意味で逆に辿って行って、そもそも何故そこで信託なのか、と考えますと、それは社会には、対等・平等な関係だけではなく、様々な非対称な関係があることに起因します。そこで実質的に対等・平等な関係で事をなす環境・状況を作るには、「信じて託す」任せる関係が必要だからです。その積み重ねが対等・平等な関係を社会の多くの分野に広げ、信託が市民権を得て行き、結果として身分的にも財産的にも平等化民主化が齎され、いわば身分から契約社会への移行が進み、平等な関係に基づく契約法の世界が広がりました。そして近代経済社会では、自由で平等を前提とした競争で経済が発展し、情報量や活動領域が拡大するのに伴い競争を担う単位も上がり、信じて託す形で企業や組合やファンドと組織化が進み、更なる経済拡大に繋がりました。

勿論、歴史は紆余曲折、行っては返しまた行く長い歩みです。その因果も様々な様相を見せ、一要因のみで決

まるものでもありません。ただ、申し上げたことは、信託即ち歴史の中で醸成された信頼の三角形の理念仕組みは、その自由設計・安心の機能で、人間社会の衡平・自由の発展に寄与し得ることをお示ししたものです。

四アメリカに渡った信託

（移民国家）

十七世紀に入ると、イギリスから沢山の人々が北米に植民の形で移住しました。一六〇七年のヴァージニアのジェームスタウン建設を始めとして、一六二〇年にはボストンの南のプリマスにかの有名なメイフラワー号が、一〇二人のピルグリム（聖徒）・ファーザーズを乗せて到着します。彼等は上陸に先立って契約書にサインし、自由な市民として公正な法律の下での生活を誓ったので、これが米国デモクラシーのスタートであるとされています。一六三〇年には母国を追われたピューリタン達がマサチュセッツに植民地を作り、三六年にハーバード大学を創立します。

一六五〇年の段階でイギリス植民地の人口は約五万人と推定されています。これが百年後の一七五〇年には十三州で約一二〇万人、独立後の一七八〇年には約二八〇万人（一番多いヴァージニアで五〇万人強、ペンシルバニアで三〇万強、マサチュセッツで二七万、ニュー・ヨークで二一万）になっています。

（法制度）

この間イギリスの様々な文化・慣習とともに、信託も新大陸に渡り、アメリカ各地で利用されてゆきました。

初期の十三州の植民地時代には、イギリスの普通法が本質的には全く変ることなく採用されていたのですが、信託制度を中心とするイギリス衡平法体系も普通法と同様、若干の変更を伴い継受されました。しかし植民地時代の衡平法裁判所の浸透は遅いものでした。

例えばマサチューセッツ州では、一八七七年まで、衡平法裁判所は存在せず、普通法では解決できない事件の救済は、立法府への請願の形式を通してなされ、さほど重要でないと考えられる場合は、立法府は、衡平法上の権限を普通法裁判所に分与し処理を任せました。ペンシルバニア州においては、一八三六年まで、衡平法裁判所は設置されず、普通法裁判所が独自の方法で衡平法上の救済を与えていました。ニュー・ヨーク州では、一七〇一年、知事が条例により大法官に任命されています。しかし、ニュー・ヨークの立法府と州民は行政府の長に裁判権が与えられることに異議を唱え、衡平法裁判所の廃止を要求しました。要求は通りませんでしたが、この裁判所はその後人心を失いあまり利用されなかったようです。ヴァージニア州においては、衡平法裁判所は、最初

知事と議会により管理運営されていましたが、後に、一般裁判所と県裁判所に依り運営されるようになります。他の地域においては通常、知事が議会の助言により大法官の権限を行使しました。

十八世紀も終りになると、信託は米国に於ても一般的に利用されるように成ります。この頃はイギリスの信託制度も十分な発達をとげており、極めて自然かつ事実上完全に米国の州大法官により採用されました。初期の各州判例集を見ると、信託が訴訟に至った多くの例が記録されています。衡平法裁判所の普及も進みますが、普通法裁判所で処理を続ける州も少なくありませんでした。

（その後一九世紀にかけて、連邦裁判所と殆どの州裁判所では、同じ裁判所が普通法と衡平法双方を管轄するようになります。ただ、現在でもデラウェアのように普通法・衡平法と管轄する裁判所を分けている所も例外的にあります。この場合、衡平法裁判所は、会社、信託、不動産、契約等の訴訟を管轄しています。）

やがて、信託当事者の権利・義務を信託証書の中で示す傾向が強まり、また裁判所や立法府による規範作りが主となり、信託は行政府から離れるようになります。

（経済発展と信託の利用拡大）

十九世紀に入ると東部を中心に徐々に工業が盛んになってゆきます。南部の大地主や東部の商工業者等富裕層の都市生活への移行が進み、総人口は一〇年の九六〇万強から四〇年の一七〇〇万人強と飛躍的増加を遂げ、信託会社を受容できる人口都市も多くなったと言えます。

十九世紀後半には、国土拡大に伴うインフラ整備が増加する中、法人受託者による信託が様々な商取引に使われ、商事信託が一般化してゆきました。一八五〇年代になると、社名の中で「信託」という言葉を他の業務名と組合わさずに、純粋かつ単純に「信託会社」と名乗る会社が現れてきます。確かに保険と信託の組み合わせ会社は消えつつあり、「信託」は独立するかにみえましたがその後かなりの期間実現せず、「銀行・信託」会社、「貯蓄・信託」会社、「貸金庫・信託」会社、「証券代行・信託」会社、「財産保管人・信託」会社、「身元保証保険・信託」会社、「不動産権利保証・信託」会社といった組み合わせによる商号が続くことになります。

国土が北米大陸全体に拡大すると、人やモノを運ぶ手段として鉄道や運河などの交通網の整備が急速に進みます。折から、産業革命を終え豊かになったイギリスで、国債利回りが下ったこともあり、富裕層の資金が投資信託等を通じて大量にアメリカに流れ込みます。またカリフォルニアの金鉱発見や各地の油田発見等に触発され、豊かな国土と資源を背景に工業化を推し進め、南北戦争（1861～1865）を経て、産業革命を進展させます。

も増えましたが、移民の国のアメリカでは、受託者として信頼される古くからの名望家が必ずしも多くなかったこともあり、法人受託者が重要な担い手として登場します。Farmers Fire Insurance & Loan Company は、そんな初期の頃の会社の一つで、ニュー・ヨーク州で一八二二年保険・融資業務とともに信託業務を提供する会社として設立され、州議会により認可されました。法人としての資格と名において、自然人である受託者が合法的に行える範囲と方法で、信託財産として委託されたあらゆる財産を受領、取得、所有、あるいは占有すること等の信託事務の処理を行えるものとされました。もっとも、同社の主たる業務は社名からみても、火災保険証書の発行と農業向けの貸出でした。

一八二〇～四〇年頃各州で同様に付随的に信託業務の認可を受けた会社が三〇社強見られますが、実際の信託業務は行わない社も少なくなく、行った社でも、遺言執行や遺産管理・後見業務は少なく、むしろ信託預金の記録が多く見られます。また後半には外国資本の投資資金を受託し管理する投資信託業務も増えてきています。

この時期は、鉄道認可、蒸気船の就航、運河の開通、路面電車運行、電信の利用、石油の発見、ガス灯の登場、家庭での石炭利用等様々な大規模製造業が始まった時期と言え、工業生産規模は一八一〇～四〇年の三十年で三倍強と増大、農業から工業への転換が図られ、人々

これに伴い、当初は個人受託者と同様に、富裕層の資産保管、財産管理、遺言執行などが主な業務であった法人受託者も、企業の社債発行や資金調達に信託の仕組みが利用して、その活躍の場を広げます。こうして南北戦争以降、信託会社が盛んに設立されるようになります。

産業革命が進展すると、経済循環の振幅が激しくなり、企業倒産や企業買収が活発になりました。このような激動を乗り越えたロックフェラーやモルガンは巨大企業へと成長してゆきます。その過程で信託は企業の議決権の支配に使われ、生産調整・価格統一に利用されたため、経済独占を制限する反トラスト法が制定されます。

信託が商取引に利用されるようになると、その使われ方も拡大します。信託には管理、運用、倒産隔離、転換、意思凍結などの様々な機能があり、それらを使って多様な信託が作られるようになります。

かく米国における特殊な経済的社会的事情の下に信託の引受けを営業化した信託会社が独特の発展を遂げ、この信託会社はアメリカの金融経済上に偉大な貢献寄与を為してくることになります。しかも、このような動きはイギリスに逆流し、アメリカ流の信託会社がイギリスでも多く設立されました。

（投資実践から確立された受託者義務）

信託の法理は具体的な取引やそれを巡る争訟を通じて

進化しました。その具体例を見ておこうと思います。

○ハーバード大学対エイモリー事件（1830）

これはプルーデント・インベスタールール即ち、慎重な投資家がするであろうと合理的に考えられるやり方で管理運用をしなければならないという受託者の運用に関する義務を定めたルールです。その基本的考え方は、アメリカで産業革命が起こる前、商取引の中心として栄え富を築く実業家も多く出、そうした人々の資産運用のための受託者が現れてきた、マサチューセッツ州ボストンで起こったこの事件で示されました。

一八二三年、実業家ジョン・マクリーンは銀行や製造業会社に投資した株式等財産を遺言によりジョナサン・エイモリーとフランシス・エイモリーに遺産として託します。遺言は、五万ドル相当の株式等の信託財産を運用し妻アンに定期的に支払うこと、アンの死後は信託財産の半分をハーバード大学に、残り半分をマサチューセッツ総合病院に支払うよう指示しました。その示した運用方針も受託者が最良の判断に従い、十分な担保を取って貸付けるか、安全かつ生産的な証券（国債、銀行債、その他株式）への投資を行うこと、とありました。正式に受託者に就任した二人は五年間務め、一八二八年裁判所に対し、それまでの信託勘定の承認と自らの辞任を申し出て承認されました。

この間大きな収益をあげアンの受け取りは一万ドル余に上りましたが、保有株の大きな値下がりで信託財産は設定時の六割弱になっていました。当時信託財産を株式に投資することは、高い配当は受けられるが元本毀損の恐れがあり一般に投機的と考えられ、信託運用として不適切とされていました。そこで、元本を受け取ることになっていたハーバード大学とマサチュセッツ総合病院は納得せず、州裁判所に訴えを提起し、受託者の運用義務違反による元本欠損の補填を請求します。これに対する州最高裁の判示は次の通りです。

『アメリカでは政府債が量的に限られており、必ずしも安全な投資とは限らないから、イギリス法のルールをそのまま適用することは出来ない。受託者は信託財産を過度に濫用したときにのみ信託財産の損失を補填しなければならず、正直で、慎重にかつ注意深く行動していれば補償責任を負わせるべきではない。』そして受託者は過度に濫用した事情はないと認めたのです。判決中に、

『受託者が投資を行うに際して求められるのは、忠実に行動し、かつ健全な裁量を働かすということがすべてである。彼は、思慮分別、さらには知性を備えた人間が自分の財産をどう運用するか、投機ではなく資産の長期的な管理について予想される収益と投資される財産の安全性とを考慮しながらいかに管理運用するかをみてそれに従わなければならない。』とあるのが所謂「思慮分別のある人（プルーデントマン）のルールになりました。

（二十世紀になると、現代ポートフォリオ理論を根拠に、株式等リスク資産も含めた分散投資の重要性が広く認知されるようになります。「思慮分別のある人のルール」は「思慮分別のある投資家のルール」へと発展し、アメリカ法律協会は一九九四年、Uniform Prudent Investor Act を採択しました）

なお、投資家が集団で資金を出し合って投資するスキームは、オランダが発祥といわれていますが、投資信託はイギリスで設定された一八六八年の Foreign & Colonal Government Trust が最初といわれています。この投信はアメリカ始め政府債に投資されましたが、その後、フレミング投信のようにアメリカの鉄道会社等に投資する投信も盛んに設定されました。

アメリカでは、第一次大戦後、戦時国債に投資していた投資家の受け皿として利用が広まり、本格化しました。当初は信託形態だけでしたが、会社形態が登場し、投資信託会社を名乗るようになります。現在、一般的になっているオープンエンド型のミューチュアルファンドは一九二二年の Masachusetts Investors Trust が最初といわれています。

○マインハード対サルモン事件（1926）

ニュウヨークでは商業ビルを協働で開発運営するジョイントベンチャーもフィデューシャリーだとされました。カードーゾ判事はJV参加者は互いに最高の忠実義務を負っていて、市場の道徳より厳しい責任を負うことが期待されているとしています。忠実義務という言葉が裁判で初めて使われました。

一九〇二年、ニュウヨークで毛織物業者マインハードと不動産業者サルモンはジョイントベンチャー事業を始めます。一九二二年までの二十年計画で、サルモンが五番街四十二通りにブリストルホテル等の不動産を借り、これを店舗とオフィスからなる商業施設として開発し運用することとし、マインハードは資金の半分の出資と当初五年は収益の四割、その後は五割を取る約束で、商業施設の開発・運用はサルモンに託されました。

外にも多くの不動産を持つ当該物件の所有者エルブリッジ・ゲリーは、所有不動産の一体開発考え、賃貸契約終了間際の一九二二年一月、サルモンに計画を持ちかけます。サルモンはマインハードに告げることなく、ジョイントベンチャーが終るとゲリーと賃貸契　約を結び不動産開発に乗り出します。（この新プロジェクトは一九三一年500Fifth Avenue ビルとして大成功を収めます）

元のベンチャービジネスパートナーのマインハードは

自分に何の断りもなくビジネスチャンスを横取りしたとして訴え、ニュウヨーク最高裁は勝訴の判決を下しました。多数意見を著したカードーゾ判事によれば、

『ジョイント・ベンチャーのパートナーは、互いの利益のためにベンチャーを行うフィデューシャリーである。フィデューシャリーには、受益者である相手方パートナーに対し厳しい忠実義務が求められる。』ということで、忠実義務は誠実というに留まらない、己の名誉をかけて厳密に最高の水準、というのが行為基準であり、この新しいビジネスにも、サルモンとマインハードのジョイント・ベンチャーが成立したものとみなす、として原告マインハードに、ビジネスからの利益の四九パーセントを認める判決を下しました。（カードーゾ判事の言葉は今日もなお繰り返し引用されています）

公的年金は政府が管理運用していますが、企業は従業員の福利厚生の観点から、退職後に備えた年金制度を立ち上げるようになりました。当初は企業が従業員に対する約束としてスタートするものが多かったのですが、一九二六年に政府が資産保護の観点から年金信託を非課税にしたことから普及が進みます。（その後、企業の倒産や統廃合への対応が必要となり、一九七四年エリサ法が制定され、現在では年金運用に関わるものはすべて受託者と同様な義務を負うことに成りました。）

（個人向け信託事業の相対的後退）

一八九〇年頃までに、先述のように「　・信託」会社の名で多様化が進むことになりますが、この頃までには、法人受託業者による個人向け信託事業は相対的に後退してしまいます。同時に信託会社が信託業務よりも銀行業務に力を入れてくるようになりました。

この方式の方が国法銀行よりも緩やかな規制の下で（例えば準備金を積まずしかも国法銀行が禁じられている多くの業務が可能）、より多くの種類の業務を手がけられる点に着目した動向でした。しかし、規制のバランスが調整されて行くに従い、信託業務兼営を認められ信託部門を持つ国法銀行も増加します。一八九〇年当時一五〇社程度だった信託会社が、一九一〇年頃には一一〇〇社程度となります。一〇年代後半には国法銀行のうち一、〇〇〇行程度が信託兼営に成りました。

（信託法理の発展）

裁判所で創造された信託の諸原則は、成文法により明示され、且つ、変更を加えられることがありました。このことは一般に、法典化（codification）と呼ばれています。例えばニュー・ヨーク、ミシガン、ウィスコンシン、ミネソタ、は互いに同様の制定法を採用、カリフォルニア、モンタナ、北ダコタ、南ダコタも互いに同様の

制定法を採用、ジョージア、ペンシルバニアにおいては最も完成した信託制定法を施行しました。

しかし判例信託法の比重は大きく、二次大戦後部分的な制定法の施行をみたルイジアナ、オクラホマ、テキサス等がありますが、制定信託法の占める割合はその時点でも依然少いものでした。

同時にこの頃、統一法（[uniform act）の形式で信託法を法典化しようとする試みがなされるようになり、統一州法国家委員会は信託法の分野で次のような統一法を作成していきます。統一受託法、統一信託受益法、統一信託法、統一協働信託基金法、遺言信託に関する統一法としての（Uniform Testamentary Additions to Trust Act）等。

米国の信託法の法典化は、かく二段階でなされてきていますが、多くの場合判例法の諸原則が制定法に明示されるようになったとはいえ、そこには信託法の全法体系を法典化しようとする試みはありませんでした。米国では、判例法が信託法の法源として、制定法と共に極めて重要な地位を有しています。

米国の信託法源を探る時、信託法が、米国法律協会（The American Law Institute）により発行されたリステートメントの中で拡大され、普遍化したことを注目しなければなりません。一九三五年、協会は米国信託法のリステートメントを完成しました。リステートメントは法律協会という法律家・実務家よりなる全国的な民間法律団体が、現存していると考えた信託の得喪、変動に影響を及ぼす法規範を明らかにし、例証と注解を与え、判例と制定法の背景を註におさめた法律書です。

（一九五七年には一九三七年の信託法リステートメントは改訂され、第二信託法リステートメントとして公表されました。信託法リステートメントは、多くの州に於いて、州の判例法や制定法にしばしば引用されています。更に現代、従来の判例に基づく信託法理だけでは不十分となり、世界各地で立法化・法典化が行われています。例えば英一九二五年受託者法の二〇〇〇年大幅改訂や、米国でも二〇〇〇年代に入り、信託法リステイメントの改訂とモデル法案が提示され各州で信託法の統一化が進んでいます。）

米国において信託会社は、当初州の特別法により営業の特許（charter）を受けたことは前述の通りですが、その後各州殆ど一般信託会社法を有し、信託会社はこれに準拠して設立されることになります。この一般信託会社法の代表的なものとしてはニュー・ヨーク州法を挙げることができます。ここでは、銀行法中にこれを規定し、信託会社の設立、取締役数、資本金、営業範囲（固有並びに付随）、貸付限度額、法定準備金、事業報告、監督等について詳細な規定を設けています。わが信託業法

は、かかる一般信託会社法に負うところが多く、また担保付社債信託法にあっても信託会社に関する規定については同様でした。

なお、英連邦の国々にも海を渡って信託法が届いています。たとえば、インドには The India Trust Act (1882) があり、カリフォルニア州信託法と共に我が国信託法の母法です。

カナダにはオンタリオ州に The Ontario Trust Company Act (1897)、またニューブルンスイック州にも Trust Company Act (1890) があります。豪州には、信託会社法 (Trust Company Act 1890) があります。

(英米型民主国家の更なる発展)

この時期信託は経済的に見て米国で営業信託として大いに発展しました。豊かになった人々のお金を受託し、代わって支払ったり、収益性の高いものに投資したり、遺産として相続処理をしたり、管理・運用・処理で徐々に信託業務は拡大していきます。特に南北戦争以降、米国の発展性に期待する外資を大陸から集めこれを大陸横断鉄道等巨大プロジェクトに投資する、一段と大きな機能を果たすようになりました。信託法理を英国から引継ぎ、広いフロンティアと様々なルーツの人々が流入する米国は、まさに契約と信託の好循環で競争の前提たる自由で平等な社会条件を整えつつ、十九世紀後半にかけての爆発的経済発展により、その後世界のリーダーとして重きをなす基盤をつくったわけです。

政治は厳粛なる国民の信託に基づくところのものですが、それが強ければ強いほど即ち信託の理念が社会的に浸透していればいるほど、社会の中に胚胎する不平等(例えば平等を前提とする競争が齎す諸格差等の不平等)に対し、再び平等で自由に活動できる基盤を再生する、民主主義の復元力が強いと言えるように思います。

仮に一九世紀後半の米国に行き特に急速に拡大する都市に身を置いたとすると、「余は如何にしてキリスト教徒となりしか」の内村鑑三がいみじくも感じたように、一方でその経済発展の光をみるとともに他方でその蔭である移民労働者の劣悪な生活環境等を見たと思います。余りの速さで拡大すると全体の持ち上げと同時に格差も生み乍らになります。

平等な競争が不平等の煙を吐きながら繁栄の道を突っ走っているアメリカ社会をみて目を丸くした日本からの先達は彼に限らず多かったのではないでしょうか。近代革命のバックボーンになった自由・平等な個人の集まりである契約国家観を持った国民国家が、発展の過程で同時に顕在化してきた個人差や環境差による非対称性を克服しつつ民主・平等を維持発展させて行く過程で、国民の受託国家観が強い国とそうでない国の差が、共産主義や全体主義といった、結局自由の制限に行き平等も実現

できなくなる体制に行くか行かないかの差に繋がったのではないでしょうか。

格差拡大がそのまま続けば社会が成り立たなくなりますが、その後の発展継続が示しているように、米国のような国民的に受託国家観の強い国は不断に改善し復元する力が強い社会であることは実証済みだと思います。

(今日、市場では平等な競争原理にしたがって取引や契約が交わされる一方、例えば医療等専門サービスについては医師等専門家に委ねる(委託)形で契約・取引がおこなわれます。また事業の器もデフォルメすれば、平等な契約を前提に会社でやるのか目的に従い受託者の専門性等に任せる信託でやるかに大別されます。

平等と不平等は常に存在しますが固定したものではなく、信託が平等化を促したり、平等な競争から生まれた専門性が取引されるにあたって、消費者保護機能のある信託の委託関係を使って行われたり、不断の相互補完や改革が行われつつ、自由で民主的な社会が高度化して行くものと考えます。英国で対等な関係を律する普通法と信託を律する衡平法がそれぞれの裁判所を持ち発展して来たのは、まさに民主主義の先達の所以だと言えましょう。平等な国民の選挙という厳粛な信託によって国政を立法府に委託しその決定に従い政府が国政を運営する形に、その相互性が象徴的に表れていると言えます。)

五、太平洋を渡った信託

幕末ペリー来航で太平の夢から覚め、維新そして明治を迎えた日本に、信託もまた太平洋を渡ってきました。

(近代国家の形成)

明治維新は、またたく間に諸制度が整えられた時代です。殖産興業を推し進める一方、金融制度も明治六年(1873)の第一国立銀行を嚆矢として銀行の設立が相次ぎ、西南戦争後の幣制整理などの過程で、中央銀行として明治十五年に日本銀行が設立されます。

政治の面では明治二十二年帝国憲法が発布され翌年に第一回帝国議会が開かれました。

(信託の紹介)

そんな諸情勢の中で、信託についての「言葉と形の始まり」の序曲が奏でられます。信託制度がわが国に初めて紹介されたのは、文献によれば明治二十四年(1891)、アメリカ帰りの経済学者で、銀行家・保険家にもなった土子金四郎(1864~1917)が、国家学会で講演した「信托会社ノ業務」においてとされています。それに触れる前に二つのエピソードを紹介しておきます。

先ず渋沢栄一翁（1840～1931）。背中に国家をしょって歩いたといわれます。第一国立銀行、東京石川島造船、東京瓦斯、札幌麦酒……明治六年から大正五年までの四十二年間に、設立に関与した企業は五百社余り、関係した会社、公共事業は六百以上、将に壮大な社会貢献がそのバックボーンでした。儒学のほか、古典等伝統文化にも深く通じると共に、その目でじかに見た西洋文明を、偏見なく摂取する進取の気性を兼ね備えた人物でした。

そんな翁が明治二十年代には、米国の信託事業について、「どうも経済界には大いに要用のものであろうと思うし、のみならず普通社会の安固を保つためにどうしても重要な方法だというように承り居る……」と関心を述べています。現に部下に命じて制度調査をさせ報告書をまとめさせています。

次に福沢諭吉翁（1834～1901）。公益信託の一種で、自然等環境保護の為集めた資金で目的地を買い取り保存するナショナル・トラスト。その発想が、売りに出ていた故郷耶馬渓（大分県北部）の競秀峰の一角を買い取り、地元に管理を託した翁の行為にみられます。

晩年、六十歳の翁が二十数年ぶりに故郷の中津を訪れたのが、明治二十七年のこと。墓参りをすませた諭吉親子が耶馬渓に遊んだ時、中でも随一の景勝地といわれる競秀峰の一角が、売りに出されていることを耳にします。故郷に存在する天下の絶景への哀惜と、当時英国で産声を上げていたナショナル・トラストの情報が、翁の心中で一緒になるのに時間はかからなかったように思われます。時流れて昭和二十五年、競秀峰を含む耶馬渓一帯は国定公園の指定を受け、その美しい景観を今に残してくれています。

三つ目のエピソードは、秋田感恩講。江戸時代秋田藩で官民合同拠出で作られた飢饉に備えたファンドいわば公益信託法人ですが、法人格が法的に確立するのは、現行民法が施行された明治三十一年。民法をはじめ明治時代の法制度整備の恩人である、かのG・ボアソナードが、感恩講の講規「感恩講慣例」（明治二十四年、今でいう「寄付行為」にあたる）作成に関わりました。その過程で感恩講の趣旨に感銘、大金を寄贈した事実を知る人は少ないと思います。そして、民法起草に際しても秋田感恩講の存在は関係者に明瞭に意識されていました。やがて民法施行と同時に感恩講は財団法人としての認可を受け、公益法人としての登記をすることになるのです。

この時から二十年後、信託法が成立し公益信託が盛りこまれ、さらに五十年を経て実際の公益信託第一号が生まれたことを思うと、歴史の「あや」を感じざるを得ません。信託の紹介がもっと早ければ……、ボアソナードが大陸法の国フランスの人でなければ……。

秋田感恩講は公益信託と法的に位置づけられ、当初から財団と共に公益の受皿を担ったのではないか、と。

さて、言葉の問題に戻ります。

先ほどの土子文学士の講演では、

「原語は『トラスト・コンパニイ』にして『トラスト』という字は信ずるという意味にして、その会社の業務の性質を見れば、まず信托会社というを以て適当と考える」と述べています。当時の英華和訳辞典などを参照しても、trusteeには「受托者」とあるが、trustに「信托」に相当する訳語は見当たらないことから、「信托」の語は土子が考え出したのではないかと思います。

また明治二十三年制定の旧民法、旧商法でも供托、寄托、委托と、すべて「託」ではなく「托」が使われています。法律上「信託」の書き方になったのは、明治三十三年に制定された日本興業銀行法において、「地方債証券、社債券及株券ニ関スル信託ノ業務」と規定されてからです。明治三十八年に「担保附社債信託法」ができ、信託業務のできる銀行の範囲が広がります。

何故「托」が「託」に変わったのか、そのへんの事情は判然としません。ただ、米国でトラストが複数社の株を持ち「企業連合」の形で寡占化を進めた為、反トラスト法が出来ましたが、これはそのまま反「トラスト」として使い分けている気配りも見られ、「托」と「託」の字源的相違等に鑑み、何かしらの配慮が働いたとみておきたいと思います。

第一銀行頭取だった渋沢翁が、米国銀行業務の実情と信託会社の業務の調査を部下に命じ「米国信托会社業務調査報告書」が出来上がったのは、明治三十三年。いよいよ経営的にも信託の「言葉を形にする」機運が高まってきていたようにも思います。

（アメリカの信託）

閑話休題。ところで、この時期米国では既述の通り信託会社の発展期であり、ワコビア貸付・信託会社の創設者で後に米国銀行協会で信託部門を率いる等、今にその名を知られる、F.H.フリースがいました。渡米して信託に関心を持った人であれば、直接にせよ間接にせよ彼の言った次のようなことは、耳にし目にして帰って来たものと思われます。

「信託会社は、遺言執行者、財産管理人、後見人、受託者、受任者、代理人等の信任的役割において、自然人にとって代わるため考え出され、組織されたものです。そのことから、次のことが言えるでしょう。つまり、

○これらの役割はいずれも全て、個人、法人または衡平法裁判所により設定され、信任を受け信託会社に与えられた地位であること、

○これらの地位に付随する義務により、信託会社は自分以外の個人又は法人の為に働くことを強制されること、
○その地位の性質上、最大限の誠実性が要求され、引き受けた義務と相容れないことや利害関係人に不利になるようなことは、いかなるものでも許されないこと、であります。」

「広く申し上げれば信託会社は他人のために行動するもので、自分のために行動するものではありません。信託会社は受益者のために奉仕し、提供したサービスに対して報酬を得るのであります。したがって、これら諸関係と両立できない業務を営むことは、信託本来の目的とは無縁なことだと思います」

「信託会社は、……重要さと厳正さが年々増している信託業務に、あらゆる方法で応じる用意が必要です。技量、法律知識、商売のセンスと経験、非難されることのない品性、あらゆる債務を履行する財務上の責任、信託の究極的利益の為の詳細な点までに及ぶ献身等が、最高のサービスには重要であります」

「責任能力が大きいことと同様、絶対に誠実であることが必要です。高い管理能力や厳格な正直さと高潔さは、あらゆる信託関係の基礎的条件であります。運営の効率性に対する信頼、信託業務の処理の誠実さに対する信頼は、まさに信託会社の力であり、本来の業務を営む限り、常に主たる資産でなければなりません。営む業務の種類、責任能力、提供する管理方法によって信託会社はその名を知られるのであります」

「信託という言葉の本来の正しい意味は、ある人の高潔、誠実、正義、公正な態度に対して他の人が寄せる信頼関係を意味し、この美しい言葉が自分達の行なっている業務をよく表わしていることを認識すべきです」

（日本の土壌）

さて、こうした精神風土を背景に持つ制度を受け入れようとした当時の日本。米国と同じ「形」に出来たとしても、信じて託すという意味では同様の「心」があったとはいえますが、両国における温度差はどの程度だったのでしょうか。いずれにせよ感覚的な話になりますが、ここで再び福沢諭吉翁にご登場願うとしましょう。

『福翁自伝』に訳語のエピソードが出てきますが、そこにcompetition「競争」と訳した背景と感想が述べられています。福翁が競争の中に倫理的に厳しいものを見たのは、まさにそのことであったでしょう。

『福翁自伝』のエピソード自体は、福翁から英国経済書の梗概説明を受けた幕府高官が、「争」の字に穏やかならざるものを感じ、説明を受けた後も「西洋流儀はキツいもの」との感想を述べつつ、「争」の字にこだわり続けたので、老中用のメモから「競争」の字を削除せざるを得なかったというものです。

アダム・スミスが述べたように、市場で取引し続けることができる人は、参加者の同感を失わない行為者です。従って等価交換が市場の自由競争によって自然に実現されます。すなわち、経済の世界における自由競争の背後に、人がどう受け取るか常に襟を正す誠実な個人がいます。アダム・スミスによれば、法の世界における正義の原理と、経済の世界における等価交換の原理は、矛盾なく人間生活の規範として、人間の造った社会の契約として成立しています。

『西洋事情』の後を追う明治初期のベストセラーといえば、中村正直の名訳になるサミュエル・スマイルズの『西国立志編』です。原著「Self help」（自助論）の訳書です。厳格、勤勉、正直であれ、と資本主義とプロテスタンティズムの精神を見る思いがします。

福翁も、契約の誠実な履行や借金の戒めなどを随所に述べていますが、この『西国立志編』も数十万部は売れたといわれていることから、初期の明治人が、そのような感覚を相当程度共有していたと見られます。

同時に、すでに書いた通り、福翁がナショナル・トラストの考えを摂取活用していたこと、渋沢栄一翁が米国の信託にいち早く着目していた点等からも、彼我の「心」の差も、相当縮まっていたように思えます。

少なくとも、秋田感恩講のように歴史的に公益信託的発想を中心とした考えがあった訳ですから、経済取引全般にわたって近代的制度が整いつつある中で、契約や取引仕法のあり方に、大きな意識改革が起こっていたことは間違いないと思います。

なお、渋沢翁も福翁も、漢学の素養は当代一級であったことはいうまでもありません。明治の文化社会を引張った人々の漢学・儒学の素養が生半可でないことに思いを致す時、そうした人々の心の中で西欧流の考え方が、誠実・公正・信頼・奉仕といったところで、旧来の考え方と折り合うところが少なくなかったということであろうと思います。

信託の関係は三角形と述べました。競争の横関係だけではなく、それを支えるもう一角でアダム・スミスのいう「同感」は「至誠」に通じ、更に縦関係を含めた制度としての「信託」は「信」に通じ、明治人の心の中ですんなりと橋渡しができる素地はあったと思います。

欲をいえば、大陸法にならって民法・商法が作られた時期に信託も同様に市民権を得ていて欲しかったと思います。そうであれば、二十年後に「信託法」「信託業法」を起草するにあたって、それまでに民・商法に基づく会社が信託業務の名の下に信託会社を名乗って任意に営業し、不祥事件を起こし、それを防ぐ為に規制色の強い法制が出来ることは避けられたかもしれません。

（「信託法」「信託業法」の成立）

日露戦争（明治三十七～三十八年）後の経済復興に企業特に鉄道の外資導入が必須だった時、担保を付け社債を発行するための手段として、「担保附社債信託制度」（担信法）が役立ちました。

他方、個人を対象に財産の運用、管理を行なう信託業をいとなむ者が、アメリカの信託会社に触発されて出てきます。明治三十九年（1906）に株式会社として東京信託が設立されて以来、相次いで信託会社が設立されました。これらの中には優良な信託会社がある一方、信託会社の商号を名乗っているものの、実質は無尽業者や貸金業者である者が多く、法的規制がない（「担信法」で認められた会社信託は、銀行のみが兼業できた）のをよいことに不正を働く者も現われ、信託会社に対する社会的信用が揺らぐことにもなりました。

明治四十年初めには、戦後の恐慌が襲い、銀行の支払い停止や休業が珍しくなかったので、金融周辺で望ましからざる不祥事が起こったことも故なしとしませんが、同時に問題認識と改善意欲が、あるべき信託および信託業を求めて動き出した時期でもありました。

アメリカ、イギリス、ドイツその他欧州大陸諸国に関する詳細な調査レポートが当局の手で作成され、明治四十五年（1912）に出された「信託の観念及受託者（信託会社）概論」は、内外信託制度に関する集大成といわれます。この年はまさに、明治天皇崩御の年であり、信託法は明治が準備し、大正が産んだといえましょう。

大正二年（1913）に日銀が公表した「信託会社及び貸金業者に関する調査」によれば、「信託の意義が不明確なまま濫用されている観あり」とし、「各種信託会社の定款や業務内容を調べてみても、掲げている営業種目のどれが『信託』業として考えられているのか了解しがたいものがある」旨述べています。そして、信託法制実現への努力は、大正元年の草案から、大正十一年信託二法（信託法、信託業法）が公布されて実るまで続きます。

この間、無尽業法、有価証券割賦販売法、貯蓄銀行法など、金融周辺の新たな問題に対処する法律制度が相次ぎました。経済の発展に伴う金融の多様化が進む中、当時の金融当局の姿勢は夫々の分野の法制を整備し、銀行も含め分業化を図るとともに健全化のための業界整理を進めるというものでした。信託二法も大蔵省内の検討作業等を経て、大正九年には臨時法制審議会に法制化の検討が委ねられました。そして原敬首相が凶刃に倒れた為、法制化は高橋是清内閣に引き継がれます。

その検討されていた内容を平たく言えば、法典の形に纏まった米国カリフォルニア州民法典とインド信託法（英国の判例、学説を踏まえたもの）をベースに、怪しげな信託会社の取締り要請と、業界浄化を掲げ起業する新興信託会社の位置付けを法案作成のプロセスで調整し、わが国のその時代におけるあり得べき制度を作り上

げた、ということです。

因みに大正八年十二月の大蔵省起草「信託業法案」（閣議稟請案）では、その趣旨として、①基礎薄弱な群小信託会社の取締り②銀行営業との競合を回避し、かつ保証業務等付随的営業に注力する大規模信託会社の取締り③金融機構整備の必要性、の三点を挙げています。②に関しては、信託預金の名で銀行預金を吸収したり、財産の運用管理というより、貸付け保証、有価証券売買等の業務を主要な収益源とするものが多かったようです。

大正元年の信託二法の草案から十一年の成立までの変遷や内容の吟味は、既存の好著（例えば山田昭著『信託立法過程の研究』等）に詳しいところです。「結局歴史の評価にまつしかないが、判断は下さざるを得ない現実との関係」で、私には印象深く読ませてもらったことが二つあります。

一つは、今では「公益信託の父」といわれる法学者、江木衷博士（1858～1925）の事です。

当時は、法制審議会で公益信託の法制化を主張する江木博士の執拗さが、「議事を阻害し混乱させたのは江木衷である」と大幅に審議を遅れさせた張本人として新聞に書かれたり、当事者の打明け話等で語られています。

彼が孤軍奮闘して信託法に盛り込んだ公益信託は、半世紀を経て実用化が始まります。昭和五十二年（1977）に公益信託の第一号を設立し、以後日本における公益信託の開発、普及に尽くした今井保太郎氏に、平成十年（1998）秋、社団法人日本フィランソロピー協会より、第一回「まちかどのフィランソロピスト賞」が贈られました。フィランソロピストとは「私財を社会のために供した人」の意味です。平成二十八年九月末で、公益信託は受託件数四百七十八件、受託財産六百二十七億円にのぼっています。江木博士によって「形」を与えられた公益信託が、五十年の歳月を経て「心」として開花した事実に、我々は何を見れば良いのでしょうか。

大勢か信念か、そして二つをどうつなぐか、まさに永遠の課題です。ちなみに江木博士の雅号は「空林庵冷灰」、冷灰は『荘子』の「心固可使如死灰乎」（心は固より死灰の如くならしむべきか＝心は冷えた灰のようにできるものなのだろうか）からとったといいます。今、冷灰居士は谷中の墓地に眠っています。

二つ目は、信託二法の審議における質疑の一端です。貴族院で菅原通敬議員（日米信託社長で任意団体時代の信託協会会長でもありました。当時信託協会には数社の大信託会社のみが加盟していました。）が行なった質問演説の中で、規制的規定について触れている部分があります。前記の大蔵省の示した法案の趣旨のうち①基礎薄弱な群小信託会社の取り締まり、部分はここの質疑では当然のこと話題になっていません。むしろ先述したよう

に当局としての分業化方針や、財産管理運用等あるべき信託業務に専念し、その為にも財産的基礎をしっかり持つような絞り込みを行うことに質問が行われています。

「政府の考えは、恰も子供に味も素っ気もない栄養にもならないある一つの食物を与えて、これをお前にやるのだ、これはお前にしか与えぬのである、他人には与えぬのだ、その代りお前には甘いお菓子なり御肴なりは食わせないのだぞ、このようなことで、どんな子供でも満足はすまいと思うのです」

このような業務制限や供託金負担が重いと儲からないとの詰め寄りに高橋蔵相の答弁には、「資本金の一割を以て保険金としたということは、まことに私は穏当な妥当なことと思います。それで会社本位からいったならば種々の議論がある、これは会社本位にあらず、社会政策の最も重要なる一つと政府は考えております」と、あるべき社会的公器としての信託を念頭にしたものでした。

また既存信託会社に不自由と感じられることはいたし方ない旨、次のように答えます。

「従来こういう会社がなければまことに易しいのでありますが、現に信託会社があるのであるから、これをやはり眼中において法を立てなければならぬ。それらを加味したものですから、理想的に取り締まるという方はいくらか加味したために緩めたといえども、目的を達しない程に緩めるわけにはいかない。多少今日まで自由に活動しておった信託会社はやはりその信託会社法案で営業しているから不自由を感ずることは、これは免れない」

さらに、政府案では信託会社が成り立っていかないと反発する菅原議員に対し、

「政府は現在ある五百何十という信託会社というものが、悉くこれが軌道に入って来るとは思わない。また政府の考えでそう数百の信託会社ができるということも希望しておらない。むしろ信用堅固な大なる信託会社が少なくして厳重に財産を保護してくれるようなものの成立を希望するのであります」と答えています。財産的基礎のある少数の頼れる信託会社に絞ると言っているのです。

結局菅原議員は最後の本会議で特別に発言を求めて、条件付き賛成の態度を、次のように言い表わして法案を通すことになります。「不完全にもこの法律のできますことが、不成立に終わるよりも経済界のためには有利であると思いましたがゆえに、慎重なる審議を遂げるために次の議会までこれを延期せんとした当初の私の希望をなげうちまして、また幾多修正を要すべき点ありと認めたことにつきましても、会期切迫の折りから、これが修正の念慮をも断ちまして、不本意ながら本案に同意することになったのでございます」

立場の違いを鮮明に議論しつつも取り締まりの必要な現実認識は共有せざるを得ないこと、あるべき姿に一歩でも近づこうとする当局の意志の強さを認めざるを得ないこと、大きな方向観に従わざるを得ないところまで来たところで不成立で終わるよりはよいということ、最終決着までの緊張感ある討論は一幅のドラマであり、歴史に刻まれるものでありましょう。しかし同時に法律草案から数えただけでも、十年の歳月が後背にあります。その重みをまた知る者のみが、プロセスと結果である歴史において過ちを繰り返さない、といえるかもしれません。

また、もし信託会社が一社もできていない「言葉」までの段階なら、白紙にものを書くように頭に描いた理想図を法律にすることもできましょう。しかし、これは前述のように民・商法に遅れること二十年ですでに機を逸しています。だからこれだけで制度創設のエネルギーに繋げることはむずかしでしょう。

特に経済的制度は事実上芽になる動きがあり、そして多くのケースが社会的なトラブルを起こして、規制法的エネルギーが高まって立法化というパターンが多いものです。自由な競争が自己規律とあいまって、外部の規制圧力も受けずに順調な望ましい発展を遂げられれば、それが最適であることはいうまでもありません。ところが、すでに事業化されているものが、トラブルをもとに規制立法化されると、自己規制を前提とするよりどうしても自由の制限がきつくなったり、現状との関係で規制は抽象的になって、運用に委ねられるところが多くなったりするものです。

そして利用者はまずは安全重視から何かあるとすぐ規制を口にするようになるし、行政の側もトラブルの責任を問われる方が自由を求められるよりきついから、ついつい規制を温存することになります。規制される方もされているうちにそれが身についてしまう。こうした悪循環に陥らぬためには自己規律の在り方、社会問題や社会制度設計に対する理性的対応等、結局人々の心構え如何に帰するところ大であり、現在まさにそれが問われているところでもあります。

話が飛んでしまいましたが、この段階では進展と規制がまざったほどほどのものができたということであるかもしれません。

ただ、信託制度だけということではありませんが、その後、金融恐慌、戦時統制経済、戦後の経済秩序確立という大きな流れの中、どちらかといえば規制色の強い制度環境が長く続いたことは、事実です。意識の持ち方で早めることは出来るし、その可能性を放棄すべきではないが、大きな流れの変化がないと制度転換は起こりにくいのも事実です。

（大戦後は、大きな流れの変化ということではまさにそ

うで、復興・成長の中で信託も人々の金融資産形勢と成長資金の供給という意味でその役割を大いに果しますが、信託法制そのものは長らく変わりませんでした。

法制度転換という点では、経済の構造変化、金融の自由化・国際化を背景に、二十一世紀に入って六年目、抜本的改正が行われます。

私が自由設計機能と消費者保護機能を併せ持つ本来の信託に、即ち八十余年振りの原点返りと言っているものであります。戦後自由経済の成長発展・市場原理の浸透・規制緩和の進展・消費者保護強化等取り巻く環境と意識が大きな潮の流れの変化に繋がったが故にこそでもあると考えております。）

以上。

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇一〇一六四五九二

加入者名　まんじ

ロボット雑考（その七）

三戸岡道夫

（人工知能の未来）

最近、ロボットと人工知能が、何度目かのブームを呼んでいる。

無人自動車が数千キロメートルを走ったとか、コンピューターが人の顔を、人と同じ程度の精度で認識したり、アメリカのクイズ番組の最強チャンピオンでコンピューターが勝ったとか、著しい進歩の話題が発表されている。日本ではとくに、コンピューターが将棋のプロ棋士に勝った事件が大きなショックを与えている。

研究の現場では、いま、どうすればロボットが言語を覚え、概念を獲得できるようになるかという挑戦が、盛んに試みられている。

その中の一つに、

「ロボットは東大へ入れるか」

という研究がある。人工知能が試験問題を解くプロジェクトである。二〇一一年（平成三十三年）度の東大入試で合格点を取ることを目指しており、すでに私立大学の半分以上の学部で、予備校からA判定（ほぼ合格できるレベル）の評価を得ている。

コンピューターが大学に受かり、将棋のプロ棋士にも勝つようになると、人間の生活や職業にも影響が出てくるであろう。かつて、それと同じようなことが、十八世紀から十九世紀にかけて起った。蒸気機関の発明に端を発した産業革命が進む中で、人がやっていた肉体労働の一部を、機械が代るようになった。自分たちの労働を機械によって奪われて怒った労働者の一部が、「ラッダイト運動」起こして、機械の打ち壊しを行ったのである。

二十一世紀になると、今度は頭脳労働の一部を機械が取って代わろうとしているのである。実際にアメリカで

は、人工知能の成果を用いて作られた会計ソフトが出現し、会計士が数万人、失業したと伝えられている。

ロボットや人工知能の進歩に反対する、

（ネオ・ラッダイト運動）

なるものも、一部で起きはじめている。

このように人間の仕事をコンピューターが奪おうとしている中で、人間はどうしたらいいのであろうか。それはコンピューターにではなく、「人間にしかできない仕事」をすることが必要なのであろう。

ロボットや人工知能は機械の一種であり、人間が幸福に生活するための道具である。その道具が進歩し、賢く、よい道具になるのは喜ぶべきことであり、それによって人間社会が良い社会になることが期待されるのである。しかしロボットや人工知能は、物によっては人間以上の力を発揮するものが続出する可能性が大である。その使い方を誤ると、逆に人間社会に災いを及ぼす危険もあるのである。

賢くなったロボットや人工知能と、人はどう折り合いをつけ、人にとって幸福な共存生活を営んでいくのかを、真剣に考える時期に来ているのではあるまいか。

いま人工知能学会では委員会を作って、その議論を始めているが、これは専門家だけに任せておく問題ではなく、一般の人々も考えていかなくてはならない問題である。

（進化する人工知能）

アメリカIBMのコンピューター「ワトソン」が、アメリカクイズ番組で、人間との対戦で勝利して以来、人工知能に対する期待が急速に大きくなった。

それは近年、デジタルなテキスト情報が大量にインターネット上で得られるようになったことが、最大のポイントである。もちろん、高度な言語処理や、コンピューターが自ら学習して判断力を磨く「機械学習」技術の開発も重要な役割を果たしたが、勝利を導いたのは、圧倒的なテキスト情報量の増大である。いわゆるビックデーターのパワーが、人工知能の領域にも影響しはじめたのである。

その後ワトソンは、医療や金融での利用が開拓されている。たとえば、がん治療の分野では、肺がん、乳がん、前立腺がんなどに関する質問に、答えられるように、一歩ずつ進んでいる。

アメリカメモリアル・スローン・ケタリングがんセンターでの実証には一年かかり、医療知識の注入に数千時間を要したとされる。最新の専門知識は学術誌などに記載されるもので、ウィキペディアのようには整理されていない。このため、期待される応答が出来るようになるまで時間をかけて、「人手による」膨大な知識の注入が

必要となる。コンピューターが自ら様々な書物からテキスト情報を読み、勝手に勉強して、知識をふやして賢くなっていくわけではない。

このように人工知能は、まだヨチヨチ歩きの段階である。

しかし、医師が日々生み出される莫大な学術文献を完全に読みことは物理的に困難な中で、それなりの手間をかければ、医師が役立つと感じる情報を提示し、支援できるレベルには到達したといえる。

日本の言語処理研究も頑張っている。ワトソンも、日本チームの貢献が大きい。情報通信研究機構（ＮＩＣＴ）による質問応答システム「ＷＩＳＤｏＭＸ」は、多様な視座を与えてくれるレベルに来ている。

言語処理と同様、人間は自然に行うけれども、コンピューターが苦手とする行動の一つに、視覚がある。すなわち画像処理が不得意である。最近、ディープラーニングと呼ばれるニューラルネット（人の脳をまねた回路技術）を用いた手法が注目を集めている。この技術自体は以前からあったが、近年ニューロン（脳神経細胞）の層を大幅に増やすことで、性能が飛躍的に向上した。

ここでも膨大なデーターが鍵となっている。巨大データーを用いて、ニューラルネットを長時間にわたり訓練する。画像を一〇〇〇カテゴリーに分類するベンチマークテストでは、従来は三十パーセント程度と高かった誤り率が、ディープラーニングにより十五パーセントまで低減した。その後も進化を続け、五パーセントまで低減した。これは人間の誤率と同程度であり、それを上回る手法も出始めているようである。

こうして、ほとんどの画像は、コンピューターが言い当てられるようになった。もっとも、人間は同じようなものを写真に撮る傾向があるため、学習が効き、めったに見ないような写真を言い当てるのは難しい。コンピューターは意味が理解できるわけではないので、写真に内在する背景知識が必要となるような場合には綻びが出るなど、拙いミスは多い。

限界はあるが、以前より画像認識の精度が大幅に改善されたことは画期的であり、今後はロボット応用などが期待される。

コンピューターは三十年で百万倍という猛烈な進化をとげた。それだけ強力になっても、言語処理や画像処理は苦手だったが、近年大きな進歩を見せている。その根源は巨大なデーターが利用可能となったことである。人類が生み出すデジタル情報量が、前世紀末より急増したことが影響している。

この現象は「情報爆発」と名付けられ、文部科学省の支援により、数百人の大学研究者が参加する大規模な研

究が、平成二十二年から五年間推進した。アメリカによる予算二億ドルのビッグデータ施策発表（平成二十四年）よりかなり前であり、日本が世界に比べて研究が遅れているわけではない。

長期にわたる情報爆発や、ビックデーターの研究を見ていると、データー分析からデーター獲得へのシフト、という変化に気付く。

大量データを継続的に捕捉し、維持管理することは、容易ではない。ビッグデーターの保有者はそれほど多くなく、よいデーターを持っている者が最終的に力を持つのである。ＩＴ企業は、データーホルダーの買収に動いている。

大量データーの活用により、あらゆる分野で革新が起きている。たとえば望遠鏡の世界でも、大量画像に機械学習が利用され、どちらに向くかを自ら考える望遠鏡が出来つつある。胃カメラをはじめ、医療画像と専門家による読影結果が、大量に蓄積されてきた。これらを学習することにより、熟練した医師並みの腫瘍検出支援システムを実現することも夢ではない。

大量データーの利用活用は、人間では不可能な超人的な世界観を新たに生み出しつつある。ＩＴ（情報技術）が社会に大きく貢献するのであれば、それを人工知能と呼ぶかどうかは、大きな問題ではなかろう。重要なのはＩＴの力を見極め、応用分野と積極的に融合を進めることに尽きるのである。

しかし、人工知能が何でも出来るわけではない。人工知能はソフトウェアで構成されている。それほど賢いのならば、人工知能が自らバグ（不具合）のないソフトウェアを書けるはずであるが、現時点では到底できない。

人間に起因する事故の多くは、人工知能ならば回避できるといわれる。一方で、世の中の多くのシステムの不具合は、ソフトウェアのバグから生れている。ではどうすれば、人工知能という複雑なソフトウェアを、バグなしに作ることが出来るのか。要するに、難しいものは、相変らず難しいのである。人工知能がすべてを解決してくれるという世界は、ほど遠いのである。

（ゲームの世界とロボット）

ゲームの世界で最難関とされてきた囲碁で、米グーグルの人工知能（ＡＩ）がプロの棋士を破った。

これによってロボットが人間を凌駕する領域が一つふえたわけで、さらに幅広い分野での応用が可能になり、生活をより便利にし、医療や環境など、様々な問題解決への貢献が期待される。

ゲームの世界での人間とロボットの主な戦いは次のようである。

チェス	米ＩＢＭの「ディープ・ブルー」が、一九九七年（平成九年）に、世界チャンピオンに二勝一敗三分けで勝越した
オセロ	「ロジステロ」が、一九九七年（平成九年）、世界チャンピオンに六戦全勝
将棋	「あから二〇一〇」が、二〇一〇年（平成二十二年）に女流棋士に勝利
クイズ	米ＩＢＭの「ワトソン」が、二〇一一年（平成二十三年）、米人気番組チャンピオンにて勝利
囲碁	米グーグルの「アルファ碁」が、二〇一五年（平成二十七年）、プロ棋士に勝利

グーグルの「アルファ碁」がプロ棋士を打ち負かした勝因は、人間の脳の神経回路をまねた「ディープラーニング（深層学習）」とよぶ、最先端のＡＩ技術を使ったからである。

グーグルはこの技術を活用して、平成二十七年に、電子ゲームの攻略法を遊びながら自ら見つけ出すＡＩ「ＤＱＮ」を発表した。人間以上の高得点を記録し、ディープラーニング分野での実力を見せつけた。

アルファ碁の場合、まず開発に協力したプロの、三〇〇〇万種類の打ち手を見せて学習させ、対戦する人間の動きを五七パーセントの確率で予測できるようにした。

その上でＡＩは自己対戦を数百万回繰り返し、勝ち負けの経験を重ねる中で、徐々に勝ち方を身につけていった。碁石の配置全体を見て、最適な手を選ぶやり方は、直感や勘も交えて判断する人間の脳の働きに近いのである。

グーグルはこの先、どこに向うのか。ＡＩの開発を主導したデミス・ハサビスは、

「ゲームはＡＩの開発や、テストの格好の舞台だが、究極の目標はこの技術を現実社会の様々な問題解決に役立てることである」

と明言し、汎用性の高いＡＩの開発を加速する考えを示した。

これまで、囲碁のプロ棋士に勝つことが出来るＡＩの実現は、少なくとも十年先のことだと思われていた。それが平成二十七年に実現したのは、予想よりずっと早かったのである。専門家も急速な進歩に驚いている。

決め手となったディープラーニング（深層学習）の技術は、二〇〇〇年代に入って、カナダ・トロント大学の研究チームが開発した。大量のデーターに潜む特徴を自力で見つけ出す深層学習は、人が無意識のうちに済ませる、

「何が見えたか」

「何が聞えたか」

といった視覚や聴覚の、直感的な情報処理が得意である。ロボットの制御や医療用の画像診断など、ここ数年

で急速に様々な分野への応用研究が進んでいる。スマートフォン（スマホ）の音声認識などでは、すでに実用化されている。

専門技能を持つ人たちの直感すらも、ＡＩで実現できれば、応用分野は格段に拡がる。体内画像から、ベテラン医師なみの精度でがんを診断する検査機器のほか、危険を未然に察する自動運転、不審者を見破る警備カメラ、相手の気持をくみ取る接客ロボット、などが期待される。

しかしＡＩの急速な発展には、警戒感も高まっている。ハサビスは、

「ＡＩのグランドチャレンジ（大いなる挑戦）の一つを達成できてうれしい」

と述べる一方、

「倫理的な課題は我々も十分に認識している」

と語っている。

一部の著名人や学者が懸念するように、野放図な研究開発によって、ＡＩが社会に敵対し、不利益をもたらす結果となる可能性は、否定できない。

グーグルは、

（有力な新技術であるＡＩを、いかに倫理的に、かつ責任をもって発展させるかを慎重に検討する）

そのために、社内に倫理委員会を設置した。

ゲームにおいて、人間対コンピューターの最終決戦に決着がついたいま、求められているのは「対決」ではなく、「協調」ではなかろうか。

（ＮＴＴ「ソータ」）

ＮＴＴとＮＴＴデータは、対話ロボット・ソータ（ｓｏｔａ）と家電やセンサーを連動させて、暮しの手助けをするサービスを始める予定である。

たとえばロボットが天気予報のデーターによって散歩をすすめ、外出を検知すると、掃除ロボを作動させ室内を整える。あらゆるモノをインターネットにつなぐＩＯＴ（インターネット・オブ・シングス）が身近になる。

平成二十七年の記者会見では、ロボット・ソータとテレビ、血圧計などを連動させたデモが披露された。ソータは重さ一キログラム程度で高齢者でも持ち運びしやすく、高さ二十八センチメートルと小型で卓上にも置ける。ソーターが、

「調子はどう？」

と話しかけて会話が始まり、

「血圧を測ろうか。その血圧計を使ってよ。落着けるように部屋の電気を暗くするね」

と話すと、照明が自動的に絞られた。

計測結果はテレビやタブレット（多機能携帯端末）に

表示され、ソータが、

「血圧がちょっと高すぎるみたい。今月は塩分を控えようね」

と注意した。

体温や脈拍を測るセンサーやウェアラブル型端末と連携させれば、熱中症を防ぐためにエアコンを作動させたり、音声で水分補給を促したりすることも出来る。

会話や家電との連動は、ネットを介して進める。ＮＴＴの音声認識や音声合成の技術を使って、クラウド上で話し言葉を文字データーに変換し、内容に応じてネット経由で家電に動作命令を送る。

会話できるロボットは、ソフトバンクの「ペッパー」などがあるが、ＮＴＴによるこの、家電やセンサーなど複数の機器と情報をネット経由でやり取りして連動させる仕組みは、世界で最初になるであろう。

（サイバー攻撃から防御）

人工知能（ＡＩ）を使って、企業や国などを狙った未知のサイバー攻撃から身を守る、防御技術の実用化が始まった。人工知能を使えば、これまで対応できなかった新手の攻撃も、撃退できると期待されている。

米ベンチャー企業のマサージーコミュニケーションズや、サイランスなどが採用するのは、人工知能「ディープラーニング（深層学習）」の技術である。

具体的には、サイバー攻撃に共通するデーターや、送信元、接続数などの情報を、人工知能が蓄積して解析する。そして人間が学習するように、未知の攻撃手法を発見する能力を高めていくのである。

マサージーコミュケーションズはこの方法を活用し、従来の技術に比べて、不正ソフトの発見能力を八倍に高めた。

米ベンチャー、サイランスも、システムに侵入した未知のプログラムや、ファイル、ソフトを検知するのに、ディープラーニング技術を使い始めた。ホテルなどが利用する大規模予約システムの攻撃されやすい部分を発見するなど、成果をあげている。

独試験機関ＡＶテストによれば、二〇一四年に確認された新たな不正ソフト数は、前年比で七割増であった。サイバー攻撃は新たな手法が生れている。既知のサイバー攻撃をもとに防衛する従来型ソフトは、限界に近づいているといえよう。

日本でも、インターネットイニシアティブ（ＩＩＪ）が、人工知能を使った企業向けセキュリテーシステムの実証実験を始めた。

社内の内部犯行対策に人工知能を使う動きも出ている。情報分析サービスを手掛けるＵＢＩＣとデジタルアーツは、平成二十七年九月に、人工知能で社内メールを

解析し、内部犯行につながるやり取りを発見するソフトウェアを提供する。会社の不満などが書かれたメールを人工知能で探し出し、犯行に及ぶ前に食い止めることが出来るという。

ディープラーニングで急速に進化する人工知能は、セキュリティ以外では、金融、軍事、広告など、大量の情報を処理する、人件費が高い分野が、実用化で先行するとの見方が多い。

中国のセキュリティソフト大手の奇虎三六〇祥技（チーフー）も、ディープラーニング技術を活用している。それによって、サーバーや端末を通過するデータの動きを画像化し、高性能エンジンで処理することで、不正な攻撃の特徴を見つけ出すまでの時間を短縮した。

（言葉が分かるロボットへ）

自然な会話ができる受付ロボットや、命令に応じて複雑な動作をこなす作業ロボットを見ていると、まるで人間の言葉がわかるようである。しかし言葉の意味を理解しているわけではない。文章や単語のパターンを解析し、それに応じて反応しているのである。ロボットが人間と同じように、言葉の意味そのものを理解する日は来るのであろうか。

東京都立川市にある統計数理研究所のあるパソコンに、アラビア語の文章が表示されていた。既存の機械翻訳ソフトで英語に訳しても、意味をなさないアルファベットの羅列であり、内容がわからない。

ここへ登場するのが、研究所の教授たちが開発したソフトウェアである。ソフトが単語と単語の切れ目を割り出し、一続きになったアラビア語の文章が、細かく分割された。そして再度機械翻訳にかけると、今度は意味の通る英文が画面に現れた。

文章を単語ごとに分割する作業は、言葉をコンピューターに理解させる第一歩である。通常は膨大な辞書のデーターと突き合せて、分けていくが、話し手が少ない言葉や、方言、昔の言葉では、不可能である。辞書データーが少ない、あるいはそもそも存在しない為である。

教授たちは、文章中の文字の並びを統計的に解析し、繰り返しのパターンから、単語を作る文字のまとまりを推定するアルゴリズムを開発した。またデンソー子会社のデンソーアイティーラボラトリと共同で、どの単語の次にどの単語が来やすいか、などを分析することで、単語が名詞か動詞かなどを判別する、アルゴリズムを加えた。辞書データーなしに構造を解析できる。

統計的に推定できるので間違えることもあるが、大体の構造がわかれば、言語解析の大きな武器になる。その言語そのものの辞書がなくても、それに近い言語の辞書

から得られるわずかな手掛りで、言語処理の精度を格段に高めることができるからである。

方言にはくわしい辞書は存在しないが、構造を分析し標準語の辞書と組み合わせれば、内容を把握できる。遺跡とともに未知の言語が記された石板が大量に発掘されても、このソフトで解析すれば、文章の構造はわかる。辞書はないが、現代の様々な言語との類似性を手掛りに、意味をつかめる可能性がある。

犬や猫、鳥の鳴き声に潜む文章構造を、明らかにすることすら、できるかもしれない。

ロボットが人間の言葉を理解してくれる時代は近いのだろうか。国立情報研究所（ＮＩＩ）の宮尾准教授は、「今の技術では文章から意味を理解することはできない」と言う。

人が言葉を理解するには、文法以上に、常識に頼っている。「今日のランチはイタリアンにしよう」と聞けば、「昼に何を食べようかと考えているのだから、イタリアンは国ではなく、料理のことだ」と、それまでの経験で得た常識を働かせて、意味を把握する。

ＮＩＩなどは、東京大学に合格する人工知能「東ロボくん」の開発を進めているが、最大の課題は、設問の意味を理解させることである。常識という名の膨大な情報を、いかに文章と結びつけるか。宮尾准教授は、表現は違うが、同じ意味を持つ文章を、「同じ」と判断できるコンピューターを作ろうとしている。

「私はミケを追いかけた」
という文章が正しければ、
「私が追跡した動物はネコだ」
も正しいのである。人間がそう判断できるのは、目にした文字列をそのまま記憶せず、意味や概念として把握しているからである。コンピューターにも異なる単語同士の意味の近さを教えたり、文脈から単語の正しい意味を推定する仕組みを組みこんだりして、同様に判断させることを目指している。

教えることは膨大である。人間には生物として「あらかじめ組み込まれた常識がある」と宮尾准教授は言う。腹が空いたら、食べる。眠くなったら眠る。これは人間なら生まれながらにして持っている常識であるが、コンピューターにはそれが無いから、そこから教える必要がある。

人間の言葉を理解させる研究は、私たちの使っている言語が、どのような仕組みを持ったシステムなのかを、解き明かすことでもある。言語処理の研究から「言語とは何か」が見えてくるかもしれないのである。

富士通研究所は、中国語の手書き文字を高い精度で正しく認識できる技術を、平成二十七年九月に開発した。中国の研究開発拠点である、富士通研究開発中心公司（北京）と共同で開発した。

人工知能（ＡＩ）を生かし、人間を上回る九六・七パーセントの認識率を実現した。店頭で顧客が記入した申込用紙や帳簿などの、電子化などに役立つという。平成二十七年度中に中国での実用化を目指した。日本語や英語にも、対応する予定である。

視覚情報を処理する人の脳の働きをまねた「ディープラーニング」（深層学習）の手法を利用したのである。人が文字の特徴を捉えて覚えるのと同じ方法で、学習させた。さまざまな手書き文字を一字ずつ画像から認識する実験で、人間の認識率を〇・六ポイント上回り、高い精度を実現した。コンピューターによる手書き文字の認識は、書類の電子化やスマートフォン（スマホ）の画面での文字入力などで広く使われている。

（ドローン）

ドローンとは無人で飛ぶ飛行機やヘリコプターなどの総称であるが、回転翼などがブンブン鳴る音が蜂の羽音（英語でドローン）に似ているとして名付けられた。軍事用の偵察機が発端であるが、部品が小型化したことで、商品の配送や災害対策、報道など、民生分野への応用が拡がり始めた。

民生向けドローンは複数の回転翼を持つ小型ヘリコプター型が主流。高速処理できる半導体チップを積み、機体の傾きをセンサーで検出して回転翼を細かく制御、安定した姿勢を保つ。全地球測位システム（ＧＰＳ）で位置を把握したり、カメラで映像を撮影したりする。こうした機能はスマートフォンにも搭載されており、小型で高性能なスマホの開発競争がドローンの実現に道を開いた格好である。

とくに最近アメリカではドローンの利用が加速している。偵察機や爆撃機など軍事目的に使われていた技術が民間に転用され、農業や科学調査、犯罪捜査などに活用され始めた。

アメリカのグーグルなどが相次いで配送や自動運転の実験を進め、本格的な「ドローン社会」実現が目前に迫っている。未来の巨大産業になりうる潜在力に注目が集っている。

平成二十七年五月、アメリカ国防総省が陸海空軍などの研究開発を公開する初のイベント「ラボ・デイ」が開かれた。ワシントン近郊の本部ペンタゴンには、ドローンや戦闘ロボット、無人潜水艦などがずらりと並んだ。

駐車場に展示されていた全長二・八メートルの小型ヘリコプター「ヴァンテージ」は、偵察や電子戦を担うドローンだ。最大時速一八五キロメートルで、夜間も戦場を飛びまわる。開発担当者は、「退屈で汚く、危険な任務に向いている」と解説する。東日本大震災の直後、福島第一原子力発電所の状況を上空からいち早く撮影した

のも、アメリカのドローンだった。

アメリカでは一九七〇年（昭和四十五年）代からドローン開発が始まり、いまやアメリカ軍機の三割超はドローンだという。運用経費は安く、墜落してもパイロットは安全であるから、軍にとっていいことずくめである。

ドローンの遠隔操縦拠点の一つが、アメリカネバタ州の砂漠にある、クリノチ空軍基地である。パイロットは毎朝、自宅からここへ通勤してくる。そして衛星経由の映像をモニターで見ながら、一万キロメートル以上離れた中東などの戦場を飛ぶドローンを操作し、標的を空爆する。任務が終れば、自宅へ帰り、家族と食卓を囲むのである。

戦争と日常が混在することで、深刻な心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）に陥るパイロットも多い。アメリカ空軍では現在約一千人いるドローンのパイロットのうち、年間二四〇人が退職するという。

そこで人手不足を解決するため、国防総省の国防高等研究計画局（ＤＡＲＰＡ）は、一人のパイロットが複数機を操縦する技術の開発に乗り出した。現在は原則二人で一機を操縦しているが、実現すれば、一人で六機以上を操縦できるようになるのである。

最近のドローン開発に共通するキーワードが、「自律運転」である。周りを観察して障害物を避け、標的に向って自動で進む、一種の人工知能を搭載する。実現には、カメラ画像から状況を認識する画像解析技術や、別の機体と通信して位置や状態を把握しながら進む運転制御技術など、複数の技術開発が不可欠である。

民生応用はすでに広っている。カリフォルニアのワイン農家は、ブドウ畑の生育状況を調べるために、ドローンで撮影していく。アメリカＣＮＮテレビでは、ドローンで撮影した映像の報道利用を検討し、ハリウッドの映画スタジオでも採用が始まった。

ミシガン州警察は、交通事故や犯罪捜査にドローンを用いている。洪水や山火事の被害状況の把握にも使われている。一方、ドローンが国境を越えて、違法薬物を密輸した例もあるという。

ドローンの本格運用に向けた研究も進んでいる。アメリカ航空宇宙局（ＮＡＳＡ）はドローンの自動運転に向けた航空管制システムを開発する計画である。アメリカ通信大手のベライゾン・コミュニケーションズと組み、携帯電話基地局を活用してドローンの位置を把握し、衝突防止や航路を指示する。

アメリカアマゾン・ドット・コムやグーグルは、ドローンで宅配実験を始め、アメリカ・フェイスブックはドローンからネット通信サービスを提供する構想を持っている。

急速な普及なので、制度やルール作りは未整備である。日本の首相官邸やアメリカ・ホワイトハウスで侵入

騒ぎが起きたほか、ドローンを乗っ取られるリスクも指摘される。ロシア製の「スカイグラバー」は、無人機などの衛星通信を傍受するソフトウェアで、テロリストや武装勢力が使っているともいわれている。

操縦命令を妨害する電波や、偽のGPS信号をドローンに送って混乱させたり、墜落させたりする工作も、技術的には可能である。ドローンの威力が大きいだけに、悪用された場合の懸念も大きい。本格的なドローン社会の到来を前に、残された課題も少なくないのである。

日本でもドローンの飛行ルールを定めた改正航空法が、平成二十七年八月に成立した。

ドローンの用途は、農薬散布や自動測量、インフラ点検などに急速にひろがり、「空の産業革命」と期待する声もある。災害現場の調査にも威力を発揮し、社会的な意味合いも大きい。そのためドローンによる事故や犯罪を防ぎながら、有効活用を促すための環境整備が急がれる。

法改正のきっかけは、平成二十七年四月に、首相官邸の屋上にドローンが墜落しているのが、見つかったことである。またその後、多くの人々が集った長野の善光寺の境内に、ドローンの落ちた事故もあり、飛行規制が必要だという声が高まったからであった。

改正航空法では、人口密集地や、一定の高度以上の空域にドローンを飛ばすことを、原則禁止する。飛行は日中に限り、飛ばす人が目視によって常時監視することも原則義務付けられる。この規則の中身はアメリカなどに比べて、きびしすぎることもなく、妥当な線である。

残された課題は、ドローンの操縦者を育てるための訓練コースの整備や、免許制、機材の認証、登録制の導入の是非である。アメリカではドローンの場所や、飛行状況を把握するための管制システムの構築について、検討が始まっている。日本でも議論を始めるときである。

曖昧であった飛行ルールが明確になったことで、ビジネスにとってもプラスになる効果が期待できる。ソニーは平成二十七年七月に、ドローンを使った測量サービスの構想を発表した。

これまで大企業は、「ドローン利用についての社会的合意形成が不十分である」と考えて、事業化をためらっていた傾向があるが、今後は多くの企業がドローン市場に参入してくるものと思われる。

（生き続ける第二の自分）

モスクワ郊外の歩行者天国アルバート通りには、十九世紀初頭の国民的詩人プーシキンの像があり、その前には人が絶えない。それは

「プーシキンと話をしたい」

という願いが出来る計画がいま進んでいるのである。それは彼の詩や手紙を注入した人工知能をその像に組み込んで、プーシキンロボットを作るのである。すると彼の詩や手紙を通じて、プーシキンとの対話が出来る。そしてこの傾向は人工知能の発達にともなって、プーシキンだけでなく、ベートーベンとか、シェイクスピアとか、聖徳太子とか、世界的に拡っていくのではあるまいか。

そしてこの方向は過去の偉人だけでなく、現代の生きている人間にも通用するのではあるまいか。そして極端な場合は、自分自身にも適用できるのではあるまいか。すなわち自分自身にそっくりなロボット（人形）を作り、自分自身の意識をネット上のAI（人工知能）に保存し、そのロボットの中にセットするのである。すると、そこに第二の自分自身が出来るのである。

人が記憶をするのに必要な脳の一部「海馬」をまずAIで再現する。そしてそれを中心にして脳全体を再現すれば、一人の人格が完成するのである。

ただその時工作できるのは、AIによって人間能力を拡張することである。たとえば本物の自分より十倍速く考えたり、見聞したことを十倍も記憶できる、ようにするのである。そうすると、自分よりも十倍も能力の高い、そして死なない自分の別人を、ロボットとして存在させることが出来るのである。

そして又この「人格をコピーするロボットの開発」は自分自身だけでなく、肉親など他の人間にも拡げていくことが出来る。たとえば身近な人間、祖父が死んだ。生き返ってほしいと願う。そこで「人格をコピーするロボット」で、祖父を再現するのである。

こうして人格コピーロボットが普及すれば、死んだ人間がAIで復活し、また死ぬはずの人が生き続けるような時代が来るのではあるまいか。

しかし、もしそのような時代が来れば、

（今を生きる人間の存在意識が失われてしまうのではないか）

と、人類にとってこれまでに考えてみたこともなかった、重大な問題、リスクも、起るのではあるまいか。

しかしリスクはあっても、技術は止まらない。死なないもう一人の自分とどう向き合うのか、ロボットの行く先には重大な問題が横たわっている。

（継続と断絶）

なお、人工知能ロボットの未来については、ある評論家の次のような鋭い説があるので、その要点を付記する。

最近の人工知能はただのコンピューターとは違い、自発的な判断力や感情まで備え、人間と同等か、それ以上

の精神活動を行う能力を秘めている。工場労働をはじめとして、介護や医療の分野でも人間の代りができるから、これで労働力の不足はなくなるという。ある推計によると、肉体労働、事務労働の八割が、人工知能に委ねられるという。

しかし問題は、その背後には、人間の失業と転職という深刻な問題が潜んでいるということである。楽観論者は事態を軽く見て、その代わり「創造的」な仕事に転職すればよいと言う。

しかし、かりに本人がその気になったとしても、中年の事務職員や肉体労働者が、デザイナーとか科学研究者などへ、転職することが出来るであろうか。

また深く考えれば脅威はさらに重大であって、人工知能が究極まで進化すれば、人類の一〇〇パーセントが失業する可能性がないとは言えないのである。一般的な労働のほかに、創造的な仕事もロボットがするようになれば、人間は完全に自由になるが、その代わり完全に無収入にもなる。そうなれば消費は皆無になるから、ロボットがやる生産も無意味になる。すると、どうしても無人企業が生み出す収益を適切に分配し、余暇をたのしむ全人類を生活させる、一種の共産主義が必要になる。

しかし従来の共産主義は夢にすぎず、その過程の社会主義的分配が強権と官僚主義を招くことを、人類はすでに学んでしまった。この弊を避ける知恵を現在の人間は持たないから、ここでも新しい深遠な英知を、将来の人工知能に期待するほかはあるまい。

創造的な仕事を含むすべての仕事をロボットが行い、全人類が余暇を楽しむ夢のような社会は、果して実現可能であろうか。その場合、ロボットが生み出した収益の配分を、人工知能に頼ることになる。すなわち平等や公正という価値観も人工知能に育ててもらうわけであるが、そうなると一段と次元を異にする困難が起きてくる。

いくら人工知能が自由に考えるといっても、その思考の出発点である資料は、現代の人類が持っているものであり、現代の価値観しかないという現実がある。人工知能といえども、無から思考することは出来ず、その出発点はそれまでの人類の思想史の過去に縛られ、助けも受けなければならない。

その縛りが二十一世紀前半の価値観であり、現時点までの思想の伝統であるとすれば、これは現代が未来を制約し、歴史を凍結することになる。

もちろん生きた人間も歴史の制約を受ける存在であり、どんな個人も幼少期に植えつけられた価値観を信じ、若干の修正を加えながらも、修生それを引きずって生きていく。しかし反面、人間には死という冷厳な宿命があって、この断絶のおかげで人類全体は、歴史の変化に順応することが出来るのである。特定の価値観がいか

に頑固であっても、それを信奉する世代が死ねば、後の歴史は格別の争いを起こすことなく、自然に変っていける。

しかし人工知能にはこの死という断絶がなく、時代の価値観を根底に抱いたまま、永遠に生きるということが問題なのである。ちなみに面白い事実がある。人工知能の賛美者には不老不死を憧れる人が多く、むしろ逆に不老不死を実現するために、人工知能を求める論者が目立つことである。

レイ・カーツワイルがその典型的な例であり、彼の「不連続点は近い」で、この夢を論じている。そのために「非生物的人間」の創造を主張している。方法は二つあり、一つは身体に微細ロボット（ナノボット）を注入して機械化する方法であり、もう一つの方法は、個人の全精神能力を知能ロボットに移管するか、どちらかの方法である。いずれにせよ、造られた非生物的人間は、個人として永遠に生きるわけで、世代交代もなくなり、歴史は凍結状態に入ることになる。

ふり返ってみれば人類の価値の文明史はその内部に、個人の死と世代交代を含み、伝承の流れに随時の断絶があればこそ、発展してきたのである。断絶なくただ続くのは、惰性的な因習であり、真の文化の伝統は、過去と現在の緊張した対決を内に孕むものなのである。

文化伝統には、古典と呼ばれる今はなき価値があり、時間を隔てた継承者がそれを懸命に習得することで蘇るのである。この死と蘇生のリズムが文明史を造り、この根底には生物的人間の生のリズムがあった。それを失った非生物的な文明は、どんな姿を見せるのであろうか。

おそらく、死の恐怖のない人間は傲慢になり、知的能力を無限に拡張しながら、他の非生物的個人と競争を重ね、しばしば抗争をくり返すであろう。その人数も無限に増えるはずであるから、資源と環境の制約が解決されても、その居場所は宇宙にまで溢れるであろう。

しかし忘れてはならないのは、数千億光年のこの宇宙にも法則があり、それは無数の星を生んでは滅ぼす、生命的リズムだということである。

言うまでもなく、人工知能の技術は、有用、不可欠である。しかしこれと並行して、それと同様に重要なことも研究してほしい。たとえば、完全自動運転車の開発に各社が狂奔しているなかで、老人運転者がアクセルとブレーキを踏み誤るといった、現存の技術でも対応できる事故を防ぐ車が、まだ作られていないのである。

（つづく）

出世欲に駆られた
賄賂老中　水野忠邦

千坂精一

二代忠善は寛永十二年（一六三五）八月三河國田中（藤枝市）四万五千石、同十九年（一六四二）同國吉田（豊橋市）四万五千石を経て正保二年（一六四五）三河國岡崎（岡崎市）五万石の藩主に落着いた。

三代忠春は天和元年（一六八一）奏者番に就任した。初の幕閣入りにいよいよ名門水野の花開くときがきたと期待されたのだが、しかし奏者番までであった。

四代忠盈には子がなく、弟の忠之を養子にした。

この五代忠之が養家を盛り立て、奏者番を突破して若年寄、京都所司代と栄進すると、享保二年（一七一七）八代将軍吉宗の信任を得て幕閣の頂点老中に上り詰め、一万石を加増されて勝手掛となり改革に貢献した。

だが十数年後に吉宗と対立したため罷免された。

六代忠輝のころ大飢饉がつづき、藩内からは辛うじて餓死者を出さなかったものの財政は極端に窮乏した。

一

天保のころ、幕閣に水野忠邦という老中がいた。

『水野氏の家伝』によれば、先祖は源頼朝に仕えて尾張國智多郡英比郷小河（愛知県知多郡阿久比町）の地頭職を与えられ小河氏を称していたが、のち足利尊氏に属して尾張國春日井郡山田荘に移り姓を水野にあらためた。

戦国期に入って忠政のとき、隣接する三河國岡崎の松平信忠（家康の曽祖父）に妹が嫁ぎ、さらに娘の於大が信忠の孫廣忠に嫁いで家康を産んだので、江戸幕府が開かれると水野氏は将軍家外戚の名門に列せられた。

そして、元和二年（一六一六）忠政の四男忠守の六男忠元が下總國山川（結城市）三万五千石の藩主になった。

この忠元が忠邦系の藩祖である。

やむなく、七代忠辰は家中に厳しい倹約令を布いた。

その締め付けが原因かどうかは定かでないが、忠辰はそのことで老臣たちと対立してついに牛尾四郎左衛門によって座敷牢へ幽閉され、隠居させられてしまった。

老臣たちは忠辰を隠居させると一族の忠任を養子に迎え八代に据えたのだが、この藩主交代劇を幕府に御家騒動と看做されて、宝暦十二年（一七六二）水野家は肥前國唐津（佐賀県唐津市）へ転封させられてしまった。

このとき唐津の土井利里は下總國古河へ、古河の松平康福が水野氏のあとの岡崎へそれぞれ転封させられた。

唐津へ入った忠任は新領の国造りに傾注して生涯を終え、養子の忠鼎が九代を継いで五代忠之以来久々の幕閣入りしたがそれとても奏者番という最初の役までで終わってしまい、そこを突破するまでにはいたらなかった。

十代忠光は在位七年、四十二歳で隠居してしまった。

そして文化九年（一八一二）、十一代忠邦が十九歳で藩主の座に就いた。本編の主人公である。

忠邦の生母は御家人中川維孝の娘恂で、忠邦が六歳のときに実家へ帰されて二年まえに病歿していた。

忠邦は二男でしかも側室の子であるから水野家を嗣ぐ立場にはなかったが、偶々嫡男芳丸が四歳で夭折してしまったので幸運にも世嗣として育てられたのである。

唐津藩は寺澤氏が二代三十二年で断絶したあと一時幕府領になっていたが、慶安二年（一六四九）播磨國明石（兵庫県明石市）から大久保忠職が入部して以後鍋島、黒田氏などの監視にあたる譜代藩として再出発した。

忠邦は藩主の座に就くと岡崎からの領地替えで膨大な移転費用がかかったうえに新領地の建設に費用が嵩んで困窮した財政の再建を目指して改革に励んだ。

どうやら藩としての体裁が整った三年後の二十二歳のときに幕府から奏者番を命ぜられた。幕閣に選出されたのは十一人の当主のなかで四人目であった。

だが五代忠之が若年寄、京都所司代と昇進して老中になったほかは、奏者番だけで終わってしまっていた。

忠邦は乱世を平定して武家政権を樹立した偉大な家康の生母の実家という名門意識から、幕閣最高位の老中に一人しか就いていないことが口惜しく、なんとかして立身出世したいものと苦慮していた。

幕閣は参勤の交代がなくずっと江戸詰だったので、なんとかして重職に就ける方法はないかと探りつづけた。

そんなある日、忠邦は耳寄りな話をききつけた。

唐津藩は大村、平戸藩などとともに外国船対策としての長崎警固役が課せられていたため、藩主は幕府の重職にはつけないという慣例になっているというのだ。

名門の血統に生まれた忠邦は禄高より権威、権力に拘っていて、幕閣に入れぬ口惜しさ歯痒さに悶々としていたのでその話をききつけると領知替えを真剣に考えた。

そして、田沼意次の推挙によって老中に昇進したが田

沼失脚とともに罷免された一族忠友の養嗣子忠成が側用人に昇進していたので、同族の誼で執り成しを頼んだ。

忠成は十一代将軍家齊が世嗣のころに小姓を勤めていて、家齊の持病頭痛の鎮痛方法を心得ていたので家齊は忠成を片時も側から離さず、将軍になると側用人に取立てさらに老中に抜擢した家齊股肱の臣であった。

忠邦は思案の末に伸るか反るかの一発勝負に出た。

一万石を献納する挙に出たのである。

六万石の年収で一万石を差し出すのは容易ではない。

だが相手の意表を突かなければ交渉事は成功しない。

忠邦はなんとしてでも権威、権力が欲しかったのだ。

幕府にしてみれば大名の領知替えは鉢の植え替えをするようなもので、なんの利害も影響も受けない。

つまり、濡れ手で粟、棚牡丹の一万石であるから忠邦の申し出を受けないはずはなく、直ちに諒承された。

そして、おなじ六万石だが参勤の距離と気候が全く異なる有利な條件の地遠江國濱松への移封が決まった。

このとき濱松の井上正甫が陸奥國棚倉へ、棚倉の小笠原長昌が忠邦の旧領唐津へ領知替えさせられた。

まえに述べた忠邦の曽祖父忠任が岡崎から唐津へ転封されたときも、幕府は三侯を同時転封させている。

誰のための処置かを暈すのが幕府の遣り方らしい。

国替えは莫大な費用と労力を要する。

それが幕府の意向ならば已む無く従わざるを得ないが、みずからすすんで願い出ることではない。

だから重臣たちが一万石を献納してまで国替えさせてもらうことに猛反対したのは当然のことであった。

忠邦は名門水野家の名誉回復を大義名分にふりかざして重臣たちを説得し、強引に実行に移したのである。

このとき翻意を迫った老臣のなかから自決者が出た。

濱松六万石に落ち着いた忠邦は、側用人水野忠成の引き立てによってその年のうちに寺社奉行に就任した。

立身出世欲旺盛な忠邦は、翌年忠成が老中に就任すると歓心を買おうとさらに忠勤を励み、大坂城代、京都所司代に栄進したのち世嗣家慶の西の丸老中に就任した。

四年後の天保三年（一八三二）九月晦日、西の丸下の上屋敷から出火して隣接の老中松平康任と若年寄森川俊知の上屋敷を類焼させてしまった。

このとき忠邦は、西の丸再興に功あったとして近江國内に一万石を加増され、七万石になった。

忠邦は本丸老中を目指し忠成にさらに忠勤を励んだ。

それから二年後の二月二十八日に老中水野忠成が死去し、三月一日付で忠邦はついに老中に上り詰めた。

忠成がながいあいだ忠実に仕えてくれた忠邦にみずからの死をもって老中の座を譲ってくれたかのようであった。忠邦はついに幕閣の頂点に立ったのである。

二

忠邦が本丸老中に栄進したとき、西の丸の家慶はまだ世嗣のままで、将軍は十一代家齊が健在であった。

忠邦は家慶に六年間仕えたが、京都所司代から西の丸老中に赴任したとき家慶の身辺雑務を担当する小納戸衆を束ねる頭取は遠山金四郎（景元）だった。

金四郎は四年も勤めていて、家慶の信任が厚かった。

家慶と金四郎は同い年で、忠邦は一歳下であった。

天保八年（一八三七）四月、家齊隠退のあとを受けて十二代将軍になった家慶は、西の丸時代に仕えて尽くしてくれた忠邦を勝手係老中に、金四郎を目付に据えた。

だが西の丸に隠退した家齊が大御所として依然実権を握っていたので、家慶の新政にはいたらなかった。

忠邦が老中首座になった翌天保十一年（一八四〇）十一月に大御所家齊から二大名領地替の指示が出た。

家齊の第五十五子齊省を養子に押し付けられた川越藩主松平齊典が、将軍家から養子を迎えるときの優遇策を利用して家齊や大奥へ働きかけて国替を画策したのだ。

この松平家というのは家康の二男結城秀康の越前松平家の系統で、文政三年（一八二〇）幕府から十五万石のうち武蔵の一万五千石を相模の一万五千石と替地させられて相模の警固役を命ぜられたので、それに当てる出費が増加する一方で極端な財政難に陥っていた。

そこで富裕の地庄内に目をつけて領知替を願い出た。

新領地の財源増を得て財政再建を狙ったのであろう。

これを受けた忠邦は自分が領知替をしてもらったときの感激を思い出して、松平齊典の領知替手続を急いだ。

そして、幕府として川越藩主松平齊典を庄内藩主に、庄内藩主酒井忠器を長岡藩主に、長岡藩主牧野忠雅を川越藩主に移封させるべく『三方領知替』を発令した。

庄内藩は直ちに反対陳情したが却下されてしまった。

ところが、ことは意外な方向へ発展した。

庄内藩の領民たちが挙って酒井忠器の移封に反対する大運動を展開し、大老井伊直亮（直弼の兄）や忠邦ら老中、御三家水戸藩の家老にまで駕籠訴で嘆願した。

領民が酒井氏の移封に反対したのは、川越の松平氏が苛政の悪評高くそれを怖れて敬遠したのだという。

将軍家慶もごり押しと思い実施を躊躇したが、松平氏を支持する大御所家齊に楯突くわけにはいかなかった。

忠邦は、

「幕命に従わざるは謀叛である」

と極め付け、譜代大名にあるまじき行為と非難した。

こうして三方領知替はすすめられたが、翌年早々家齊が死歿すると家慶は待っていたかのように中止させた。

発令された幕命を反対運動で潰されたことは幕府の権威低下を象徴するもので、忠邦の自尊心を傷つけた。

忠邦は失態の責任をとるべく家慶に辞表を提出した。

政治改革開始直前に恃む忠邦に辞職されてはと困惑し

た家慶は、中止令は将軍の考えで忠邦に落度はないことを再三説得して顔を立てようやく辞表を撤回させた。

大御所家斉の死によってようやく名実ともに将軍になれた家慶は、老中首座忠邦に幕政改革の推進を命じた。

西の丸老中時代に嗣子家慶に仕えて精一杯尽くし、その信任を得ていたことがここへきて開花した。

忠邦の幕閣最高位への欲望はついに達成されたのだ。

忠邦の初仕事はまず組織の再編成であった。

将軍家慶から火急の改革を命ぜられたとき忠邦は、幕閣最高の地位を得たからには独断で全機構を動かせる独裁専制政治を実行したい衝動に駆られた。

それには忠邦の意志通りに動く人材が必要だった。

忠邦の打ち出す政策を支持して、その執行にあたり全面協力する組織でなければ独裁政治は成り立たない。

そこにはいささかも齟齬があってはならないのだ。

このとき先任老中の青山下野守忠裕、大久保加賀守忠真、松平和泉守乗寛、松平周防守康任の四人はすでに辞任していて、土井大炊頭利位、堀田備中守正篤、真田信濃守幸貫の三人を忠邦は後任に推挙した。

だが、執行部のなかで若年寄林肥後守忠英、側衆水野美濃守忠篤、小納戸頭取美濃部筑前守茂育の三人は先代家斉の寵臣で専横を極め、また家斉にもっとも寵愛されたお美代の方の養父で新番頭の中野清武（碩翁）も恩寵を笠に着て威圧的な振る舞い多く悪評高かったので、権力機構から排除すべく強権をもって処分した。

天保十二年（一八四一）五月十五日、将軍家慶の誕生祝儀に登場した老中以下の役人が西湖間に集められ、

「ご政事の義、御代々の思し召しは勿論の義、とりわけ享保、寛政の御趣意に違わざるよう思し召し候につき、いずれも厚く心得え相勤むべく候」

家慶直々の上意が達せられ『改革令』が発令された。

『天保の改革』は、享保、寛政への復古であった。

このとき遠山金四郎は、前年に目付から町奉行に転じていたので、忠邦の改革政治に参加することになった。

忠邦が最初に実施したのは物価高を抑制するための消費総需要を規制することであったが、この倹約令は公認の遊里以外の岡場所の禁止や、好色絵本類の刊行停止から、さらには大奥の風紀取り締まりにまで及んだ。

改革実施五箇月後に下総國中山村（市川市中山）法華經寺の日啓と日尚を女犯不如法の僧侶として処断した。

さらに家斉の側室の一人お美尾の方は幕臣木村重勇の娘ということであったが実は雑司ヶ谷（豊島区雑司ヶ谷）感應寺の和尚の子であったことから、天保五年（一八三四）五月将軍家より同地に約三万坪の土地を賜った。

そのうえ、さらに七堂伽藍を建立して御祈願寺の号を下され、御朱印を付与されたので、大奥から側室付の女中たちが大勢参詣にきたことから、そのとき住職をはじめ伴僧らと申し合わせて不義が行われていた。

その事実を掴んだ忠邦はただちに感應寺を取り毀して風紀の粛正をはかり、次々に旧習を排除していった。

忠邦は、存在感を示すべく大鉈を振るったのである。

三

忠邦は自分の手足になる人材を選んで組織を固めた。

すでに述べた老中のなかに、一人外様大名がいた。

信州松代十万石の八代藩主真田信濃守幸貫である。

「外様は敬して遠去ける」

つまり、外様は禄高で厚遇して幕閣には入れないきまりのはずなのに、どうして老中にしたのか調べてみた。

すると、幸貫は七代藩主幸専の子ではなく、八代将軍吉宗の孫松平定信の二男だということがわかった。

その幸専も六代幸弘の娘三千の婿養子で、井伊直幸の四男であった。このとき依願退職した大老直亮と桜田門外で水戸浪士に斬殺された直弼兄弟の叔父にあたる。

すなわち真田家は将軍家一族と譜代家から二代つづいて養子を迎えているのだから歴とした譜代大名だった。

しかも、この天保の改革にあたり、将軍家慶は、

「享保、寛政の御趣意に違わざる様」

下達し、忠邦もまた享保の吉宗、寛政の定信の、

「重農、賤商主義」

を信奉し、踏襲しようとしているのだから、その先人の血筋を引く幸貫をすすんで推選したのであろう。

改革の要職は、勘定奉行、町奉行、側用人であった。

勘定奉行は、幕府直轄地（天領）の代官、郡代を監督し、収穫、金銭出納など幕府の財政、領内農民の行政、訴訟を担当する最重要部署で、忠邦はここに数名を据えたが、いずれも一年以内の短期間で交替させている。

側用人は、将軍と老中との取次役であるから忠邦にとって意思の疎通をはかれる人物でなければならない。

忠邦はここに若年寄だった姻戚関係の堀親寄と御用取次に新見正路を据えて忠邦派で固めた。

そして、町奉行である。

町奉行は民政担当で、江戸府内の武家地、寺社地を除いた町屋の民政をすべて扱っていたのだから、現代に譬えれば都知事、地方裁判所長官、警視総監、消防庁長官を兼務していたようなもので超行政官であった。

そのうえ、おなじ旗本職の勘定奉行、大名職の寺社奉行とともに三奉行と称ばれて幕府の最高裁判所である評定所の構成員でもあるのだから、老中、若年寄に次ぐ重職であり、改革にあたっては泥を被る役であった。

その町奉行は二人制で、月番交替であった。

奉行所は呉服橋御門内と数寄屋橋御門内におかれた。

呉服橋が北、数寄屋橋が南に位置していたので北町、南町と呼称されるようになってしまったが、正式には役所は町奉行所であり、役職名は町奉行である。

忠邦が改革人事を断行したときの町奉行は二十年勤務六十三歳の筒井政憲と、一年まえに死亡した大草高好の後任として勘定奉行から転任した遠山金四郎であった。

遠山については西の丸時代から能吏を知悉していたので期待して留任させると、筒井を西の丸留守居の閑職に左遷して代わりに小普請組支配の矢部定謙を抜擢した。

だが、二人は忠邦の施政方針を丸飲みせずに、改革の具体策ごとに判断する是々非々の態度をとった。

ことに矢部定謙のほうは、ただ単に反対するだけにとどまらず、忠邦に本気で翻意を迫ったりした。

天保八年（一八三七）に大飢饉に対する幕府の無策を怒って乱を起こした陽明学者で大坂町奉行所与力の大塩平八郎の公憤を理解して同情したり、まえに述べた三方領地替のとき実施を再審するよう進言したりして幕政批判が多く、はじめのうちは忠邦もうるさいやつだと思う程度だったのだが、だんだん上意に追従しない矢部を幕吏にあるまじき者と忌み嫌うようになっていった。

そして、期待して抜擢してやったのに裏切られた思いが募っていって、ついに処分に踏み切った。

忠邦は目付鳥居耀蔵に因果を含め、矢部の身辺を調査して罪状を探るよう命じた。

鳥居は矢部の言動に尾鰭をつけ弾劾状を捏ち上げた。

忠邦は、矢部定謙を家名断絶、伊勢國桑名へ流罪を課して罷免すると、鳥居耀蔵を後任の町奉行に起用した。

いっぽうの遠山金四郎については忠邦の勝手気儘に動かすわけにはいかなかった。

文政十一年（一八二八）十一月に忠邦が京都所司代から当時世嗣だった現将軍家慶の西の丸老中になったとき、金四郎は四年まえから御小納戸役を勤めていて、すでに家慶の信任を得ていた。

家慶将軍と金四郎は同年齢で、すでに相互信頼の主従関係ができあがっているところへ忠邦が二人のなかに割って入り、以後三人組が形成されたわけである。

忠邦はあとから入り、年齢も家慶、金四郎より一歳下であったから、忠邦が金四郎をいかに扱おうとも家慶と金四郎の固い絆を断つことはできなかったのである。

金四郎は矢部ほど堅物ではなかったから、忠邦とのあいだは決定的な対立にまではいたらなかった。

だが、矢部のあとの町奉行に抜擢された鳥居耀蔵が、その強烈な個性をもって改革にあたり、苛烈極まりない実施を担当するにいたって捨ておけぬ事態が生じた。

たとえば綱紀の粛正による倹約令についてである。

そのなかには庶民の娯楽が多く槍玉に挙げられた。

日吉山王権現（日枝神社）の山王祭、神田明神の神田祭、浅草神社の三社祭、それに富ヶ岡八幡宮（深川八幡）に代表される祭礼などとそれに伴う縁日。

吉原以外の岡場所や妓楼での遊興。

三河万歳や曲芸を演ずる太神楽などの大道芸等々。

なかでも忠邦が風俗を乱すと決めつけているのが芝居と寄席であった。鳥居は七世市川團十郎を嫌っていた。

まだ二十五歳の若僧なのに、「千両役者」と称ばれて持て囃される高収入を得て派手な生活をしているのだ。

いつか蹴落とそうとして虎視眈々機会を狙っていた。

天保十二年（一八四一）閏正月三十日に大御所家斉が歿したことで、二月三月は芝居興業が中止させられた。

團十郎は弾圧を嫌って江戸を避け旅興業に出た。

夏に江戸に戻ると、禁制の贅沢品を土蔵から出して楽屋に飾り、派手な衣裳で出演して倹約令に挑戦した。

その年の十月、堺町（人形町）の中村座から出火して隣接する葺屋町の市村座も類焼してしまった。

忠邦は再築を許可せず、鳥居と謀議してこの機会に芝居小屋を廃止しようと企んだ。

世情に通じていた金四郎は、庶民の娯楽である芝居や寄席、祭礼や縁日の自粛に反対だった。

金四郎は家禄六百石の旗本遠山景晋の嫡男に生まれたのだが、父景晋はすでに弟景善を養子にしていたので、金四郎は実子とはいえ遠山家を継ぐ立場になかった。

その景善もまた子宝に恵まれなかったのでこんどは金四郎を養子にしたが、そのあとで実子景壽が生まれた。

二代つづいておなじようなややこしい家系であった。

金四郎は家系を継ぐことになるまでのあいだ中途半端な立場におかれていたことから、そのころ堕落して非行にはしり、江戸市中を目的もなく徘徊しては無頼の徒とも接したりしていたので、世情に通じていた。

金四郎は忠邦の芝居小屋廃止を思い留まらせるべく、過去になんらかの事例がないかを部下に調べさせた。

すると、御用人新見伊賀守正路から、

「勘三郎が家光将軍から金の采配を拝領している」

記録があるという報告があった。

金四郎はしめたと飛びついて、忠邦に、

「かように家光将軍が歌舞伎興業を認めておられまするものを、廃止するのは幕府の方針と矛盾いたしまする」

そう指摘して、江戸城下からの追放にとどめさせた。

金四郎は幕府の目の届かない辺鄙な場所を探した。

そして、移転先に浅草を選んだ。

浅草なら浅草寺の縁日や浅草神社の三社祭で賑わう。

その裏手にもと丹波園部藩主小出信濃守の下屋敷一万数千坪が空地になっていた。現在の浅草六丁目である。

こうして御府内の芝居小屋は一箇所にあつめられた。

移転した四座はこの地を中村座創業者猿若勘三郎に因んで猿若町とした。現在も〈市村座跡〉の石柱がある。

金四郎は芝居小屋を残せたことで肩の荷を下ろした。

だが一件落着と思いきや、あくまで歌舞伎の廃止を狙う鳥居耀蔵の魔手が七代目團十郎めがけてのびていた。

その團十郎がついに鳥居の魔手にかかったのは、天保十三年（一八四二）五十二歳の春であった。

当時名跡を長男に譲り海老蔵と改名していた七代目は、河原崎座で十八番のなかの『景清』を上演していた。本名題は『菊重栄景清』通称『牢破りの景清』である。

剛勇無双の武将悪七兵衛景清は平家滅亡後も只一人で頼朝を付け狙い、捕えられて岩牢に閉じ込められた。その景清が牢を破る話なのである。

筋書きだけでも幕府を刺激するのに、七代目は客を喜ばせるために禁制の絢爛豪華な衣装と真剣を使った。

七代目にしてみれば幕府への鬱憤晴らしだったのであろうが、町奉行の鳥居のほうは飛んで火に入る夏の虫で、待っていましたとばかり勇躍七代目を召喚すると、取り調べにあたり手鎖のうえ家主預りとして幽閉した。

軟禁二箇月後の六月二十二日に鳥居が下した判決は、江戸十里四方無期限追放刑であった。これで七代目は終生江戸へ帰ることはできなくなってしまったのである。

五

忠邦は改革にあたり〈法令雨下〉といわれるほど多数の法令を発布しているが、その内容は八代将軍吉宗の『享保の改革』、吉宗の孫で十一代将軍家斉の補佐役老中松平定信の『寛政の改革』に準じたものであった。

民政については遠山金四郎、鳥居耀蔵両奉行に改革を命じてそれなりの成果をあげたが、躓いたのが『人返し令』、忠邦失脚の原因となったのが『上知令』であった。

『人返し令』については松平定信が『出稼ぎ制限令』や『旧里帰農奨励令』で帰農者に手当を支給するとしたが、積極的に帰農する者はなく失敗に終わっている。

それを承知で蒸し返したのは、関東や東北地方の疲弊してしまった農村を救済しようとするためであった。

地方在住者が江戸に移住することを禁じ、在住の者でも永年商売に励んで妻子親族がいる者のほかや、出稼ぎ者も在住年限を定めて帰農させることにしたのである。

さらに農村においても米作以外で生計を立てることを禁止して、農民を土地に束縛して年貢をはかろうとしたのだが、思うようにことはすすまず頓挫してしまった。

問題なのは『上知令』であった。

江戸、大坂周辺の大名領の飛び地や旗本の知行地を幕領に編入して大名には居城地付近を、旗本には江戸、大坂周辺以外を知行地として給するというものであった。

忠邦は、自分の唐津から濱松への領地替えも、大御所家斉から命ぜられた三大名の移封も、領地はすべて将軍家のもので大名も旗本も一時拝借しているにすぎないと考えていたからなんらの抵抗も矛盾も感じていなかったので、『上知令』もすんなりいくものと思っていた。

だから忠邦の狙いは、大名、旗本に全国の土地はすべて将軍家所有であることを再認識させようとしたのだ。

肥沃な他領と痩せ地の幕領とを交換して増収を図ろうとする魂胆があったのだが、そうはいかなかった。

被害を被る大名や旗本たちから反対運動が起こった。

幕閣からも老中土井大炊頭利位の反対意見に同調する者が出て、『上知令』もまた頓挫してしまった。

忠邦は反りが合わない金四郎を大目付に出して後任に大坂町奉行の阿部正蔵を据えて、専ら股肱の腹心鳥居耀蔵の辣腕を頼りにしたのだが、忠邦が上知問題で劣勢に立つと保身のため裏切り土井利位側についてしまった。

上知問題の失敗を問われて忠邦は失脚し、阿部伊勢守正弘が老中首座に就いたが、翌年オランダ使節が国書を持参して回答を迫ったり、イギリスやフランスが琉球にきて通商を要求したりしてきて外憂に苦慮した将軍家慶は、再び忠邦を老中首座に据えて対応と措置を命じた。

忠邦が『異国船打払令』を改めて薪水食糧を給与して帰帆させるようにした実績を買われたのであろう。

忠邦は復職すると町奉行鳥居耀蔵を罷免して寄合に追い遣り後任に勘定奉行跡部良弼を据えたが、八箇月後に疝癪気（胸、腹部の痛み）を理由に辞職願いを提出した。

要人は慰留されるはずなのに、すんなり受理された。

疑問がのこるが、半年後に事態が表面化した。

忠邦と腹心鳥居耀蔵、後藤三右衛門、澁川六蔵一味による賄賂工作が命取りになったのだ。

忠邦は、

「その方勤役中不正の取計い共これ有る段御聴に達しこれにより急度も仰せ付けらるべくところ格別の思召をもって御加増地一万石、本地の内一万石、居屋敷召し上げられ下屋敷に蟄居いたし急度慎みまかり在るべく候」

そう申し渡された。

鳥居耀蔵は、家禄没収、讃岐國丸亀藩（香川県丸亀市）京極家へ永預け（終身禁錮刑）。

澁川六蔵は、家禄没収、豊後國臼杵藩（大分県臼杵市）稲葉家へ永預け（終身禁錮刑）。

御金改役後藤三右衛門は死罪であった。

忠邦は唐津藩から濱松藩への領知替え実現のときに幕府への賄賂工作で一万石も贈賄した人物であるから、贈収賄については麻痺している金権政治家であった。

名門に生まれ、出世欲に駆られて幕閣最高位の首席老中にまで上り詰めて欲望を成し遂げたのだが、結局は金権政治が禍してむなしく失墜してしまったのである。

（了）

主な参考文献

水野忠邦　藤田　覚　東洋経済新報社
鳥居耀蔵　松岡英夫　中公新書
悲劇の名門團十郎十二代　中川右介　文春新書
年表日本歴史〈江戸後期〉　筑摩書房
徳川将軍列伝　北島正元編　秋田書店
藩史事典　藤井貞文　林陸朗　監修　秋田書店

古い物・遠い夢

忠内正之

逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）

十

博多に着いて間もなく、秀吉は名護屋城に大坂から黄金の茶室を運ばせた。出陣してきた諸大名に茶を振舞うためであった。

有楽斎も当然かり出されて武将たちと顔を合わせた。

次々と朝鮮半島に渡って行く武将たちは、見知らぬ国へ攻め行く不安で、皆顔を曇らせている。きらびやかな黄金の茶室の一服が、果してねぎらいになるのかどうか、有楽斎は単純な秀吉の思いつきを、心中で冷笑しながら素知らぬ顔で接待する。大名たちは法体姿の織田の隠居の接待を恐縮して受けていた。

昨年の三月中旬から上陸している十五万余の日本軍は、初めは連戦連勝して平壌まで攻め上った。

秀吉は勝利に喜んで黄金の茶室に現れても機嫌が良い。

「この調子では朝鮮どころか、間もなく唐へも出兵ぞ」

と発言して並いる諸将をどきりとさせた。

しかし、破竹の勢いも八月ごろまでで、戦線が延びきった大軍への武器食糧の補給がままならぬ状態になり、先鋒の小西行長勢、加藤清正勢はともに孤立しつつあった。

対する朝鮮軍は明国の救援もあって反撃に転じ、侵略軍を憎む官と民が一丸となって日本軍を各地で苦しめていたのである。

国内においては、七月、秀吉の唐討ちに心を痛めていた生母大政所の死去があり、急ぎ上方へ帰った秀吉はショックのあまり寝込んでしまったという。

八月、朝鮮半島では双方の思惑で、五十日間の休戦条約が結ばれた。

だが、この期間は、朝鮮・明の連合軍を充実させ、士気を高めた。一方、遠征日本軍の補給路は、復旧せず、飢餓が進み厭戦病を蔓延させたのである。

加藤清正ら秀吉子飼いの軍勢はかろうじて統制を維持していた。しかし同じ直臣でも堺商人の出身である小西行長は早期講和を進言しており、軍の乱れは覆うべくもないようであった。

また、太閤の命令に逆らえず、やむを得ず出兵している外様大名とその将兵は、何のために戦っているのか、大義名分がない。異国が戦場であるため、勝っても国内での領地加増は望めない。負ければ、失うもののみ多く得るものは何もないのである。

有楽斎の耳にも、戦場では秀吉を怨嗟する声が、なかば公然、という噂が入っている。

国内でも、とめどない軍費を賄うための苛斂誅求が続き、村落は疲弊して、逃散や土民一揆が日常化し、恨みの声が充満しているという。

側近衆がどの程度、実情と真実を秀吉の耳に入れているかは定かではないが、秀吉自身、遠征軍の苦戦と国内の疲弊、内外の不穏な情勢を察知しているに違いない。それら心労の重なりが秀吉の心身衰弱をひき起こしているものと有楽斎は察したのである。

（戦争が終るのが早いか、秀吉のいのちが尽きるのが早いか）

血縁とごく少数の子飼いの家来をのぞき、万民がこのように考え、気違いじみた太閤がこの世からさっさと消え去るのを待っているのではなかろうか。

こうなれば、天下人も哀れなものだと有楽斎は思う。

突然、徳川家康の、いつもにこやかな小ぶとりの姿が浮かんだ。

喜怒哀楽が激しく、疑り深くなった秀吉の前では何も言えない武将たちが、何事にも気易く相談に乗ってくれる江戸大納言家康のもとに慕い集まるのは自然の成り行きかも知れない。

権力の頂上に駆け登ろうとしていた頃の秀吉は、見え透いた人たらしの言動で懸命に味方を増やし、地歩を固めていった。

家康は、一見すると自然体である。覇権に無欲に見える。そして陰日向なく秀吉を天下人と立て、おのれは臣下の礼をもってすべての言行が控え目であった。

しかし、そうすることで秀吉の専横と老耄を際立たせ、人心が自然に己に集まることを知っている。

（媼）

まさに正体不明の妖怪であると有楽斎は本能的に嗅ぎとった。

家康は、控え目にして忠実な太閤の補佐役を演じなが

ら、その殊勝な態度で、確実に人心収攬の実を挙げている。

織田信雄が家康に心酔していた。奥州の雄伊達政宗も家康を頼っている。織田家の旧臣筋である池田輝政、細川忠興、筒井定次、山内一豊らも、密かに家康に心を寄せていた。

家康は秀吉の子飼いの将にまで、何気ない方法で籠絡の手を伸ばしている。

極寒の異国で飢えに苦しみながら越冬した遠征軍の主力は、秀吉の直臣である小西行長、子飼いの加藤清正、福島正則、加藤嘉明、藤堂高虎らであった。家康は、これらの武将にたびたび懇ろな手紙を送り、苦労をねぎらい、激励し、留守家族の面倒も引き受けているのだった。

秀吉は、高禄を与えている家臣が命を投げ出して働くのは当然とばかりに、ただ命令を下し、敗色に激怒するのみである。

家康の二万の兵は名護屋本陣守備の任に当たっていた。戦いがうまくいかず苛々している秀吉に比べ、その秀吉を天下人と立てて無欲に仕えているように見える家康は、城内の人々の心を捉えていた。

側近の三成らは家康の兵力を前線に送りたがっていたが、二万の徳川軍が居なくなれば名護屋城の守備にも事欠く始末である。

名護屋にあって秀吉の命令を伝えるだけの三成ら側近は、命令に従わず目先の手柄だけを追う清正らを軽蔑していた。一方前線の武功派は危険のない場所にのうのうとして無理な指令を発するだけの三成らを憎んでいた。

この二者の対立を家康はうまく利用しようとしていた。

茶室に居て人の話を聞き全体を見通している有楽斎はその辺りの事情がよくわかった。茶湯に事寄せてこの際鵜の家康に近付いておこうか、と考えるのは乱世に身についた功利のあさましさかと苦笑する。いや、織田を従えたのは秀吉であり、憎んでも当然なのだと自らの本心を覗いた様な気持ちになった。

十一

話は少し戻るが、昨年七月、大政所危篤の知らせで急ぎ上方へ戻った秀吉は、生母の葬儀をすませたのち、十月末に名護屋城へ帰陣した。

その折、小田原攻めで勝利した吉例にならって淀君を伴っていたが、信雄も命じられて御咄衆に加わって来た。下野の烏山へ配流されていた信雄は徳川家康のとりなしで許され、二万石の捨扶持を得て、伊勢の朝熊に隠棲していた。信雄は領地没収の上の配流がよほど身にしみたとみえ、頭を剃り、常真と号して出家同然の暮らしをしていた。（信雄家はこの後大名として細々ながら、幕末迄維持できたのであるから、運命とは誠に不可思議なものと言わざるを得ない）

文祿二年の春、名護屋城は喜びに満たされていた。長子鶴松を失ってから二年目、淀君が再び懐妊したというのである。

御咄衆の前で秀吉がそれを告げた時、有楽斎は信じられない思いで秀吉の喜ぶ顔を仰いだ、淀君こと茶々は前年の秋から名護屋に滞在していた。有楽斎は久方ぶりで茶々に対面し、鶴松を失った悲しみからは立ち直ったものの、どこかしら愁いの漂った茶々の姿が気になっていた。

秀吉はなるべく人目につかぬようにと茶々を本丸からは離れた山里丸に住まわせていた。有楽斎も彼女が城に着いた時一度挨拶を交しただけで、親しく話をしに行くこともなかった。戦場のことでもあり、特別に奥まで会いに行くには遠慮がある。常に気には懸けているものの、淀君になってからは心底の知れぬ姪とはあまり関わりたくないのが有楽斎の本心であった。

隔離された山里丸で、秀吉は執念を捨て切れずに子作りに励んでいたのであろう。

春が進み桜が咲きはじめた頃、淀君は大坂に向かって出立した。世継ぎの出産は大坂城でとの秀吉の希望であった。淀君たちの華麗な行列の前後を五百の兵達が護衛して大手門を出た。

輿に乗った淀君が見送る人達の前を通って行く。きっと前方に向けられた淀君の瞳が、誇りに輝やいているのを有楽斎は感じていた。秀吉の子を産んで天下を取らせるのだと宣言していた茶々が再びそこに存在した。

有楽斎は複雑な思いである。淀君の腹の子は本当に秀吉の子か、誰もが口には出せないが抱いている疑惑であった。秀吉自身もそれを感じているだけに、側近や御咄衆の前では大袈裟に喜びを表現し、淀君付きの侍医に殊更懐妊を保障させているのである。茶々に新たな目標が出来て生き生きとしているのは良いが、世継ぎを生むことで別の苦労を担うこととなるのではないか、有楽斎は心配するのであった。

有楽斎の不安をよそに淀君と大蔵郷局を乗せた大きな輿は、大坂に向って出立して行った。

朝鮮との戦争は膠着状態である。前線での苦労は嘘のように、名護屋城では連日茶湯が開かれている。茶匠としては今井宗薫、住吉屋宗無、武野宗瓦が従軍していたが、博多の数寄者も常に出入りしていた。有楽斎は連日茶湯の常連として人気者であった。温和な性格が人に好かれる。その上法体であり、誰とも利害関係がない。話

相手には最適な人物としてもてたのである。

文禄二年八月二日、茶々こと淀君は男子を出産した。早馬で名護屋城にもたらされた使者の報告を聞いて、秀吉は狂喜した。

「跡取りが出来た。夢のようじゃ」

と、辺りかまわず泣きだした程であった。

有楽斎は他の御咄衆と共に喜びを述べながら

(今の豊臣政権になんの世継ぎぞ)

と、これからの茶々の心労を思いやった。

慣例に倣って一度捨て、また拾われた赤子は拾と名付けられた。

朝鮮の戦いは、五月に入って講和が進められたが、日本側の一方的な強気が災いして交渉ははかどっていなかった。

しかし秀吉は男子誕生で気もそぞろである。二週間後の十五日、後事を奉行や徳川家康になかばゆだね、急ぎ大坂へ向った。随行者のなかに、有楽斎も加えられた。どうやら茶々の要望のようである。

大坂城に戻った有楽斎は子を抱いた茶々に再会することが出来た。

見るからに貫禄のついた茶々は赤子を有楽斎の方に向けた。

「叔父上、また子を持つことが出来ました。いかがですか。太閤殿下そっくりではありませんか。目のあたりはわらわに似ていると乳母は申します」

嬰児の特長がまだ消えていず。誰に似ているか定かではない。しかし有楽斎は当たり障りのない答をする。

「さようですな。確かに太閤殿下に似ておられます。いい子をお産みになりました。今度こそ無事にお育ちになりますように」

茶々は有楽斎を見て意味ありげにほほえむ。

(秀吉の血は入ってはおらぬ)

有楽斎はそう感じている。

しかし秀吉は、目の中へ入れても痛くない様子の可愛がりようで、嫌がって泣き叫ぶ赤子を懸命にあやして頬ずりしていた。

(一体、誰の子種ぞ)

このように考えることは止めよう、と有楽斎は思う。実子かどうか追及して何になるというのだ。茶々が天下人となり得る太閤の子を執念によって産み、秀吉がわが血を分けた子と信じているのならば、それでよいではないか、万事はそれで丸く納まる。

世継ぎの誕生で秀吉の気はそぞろになって講和への気運が高まりつつある。不毛の侵略戦争が終結されれば両国の人々は理由のない苦しみから脱することが出来る。

(茶々よ、今度は和子を早死にさせないでくれ)

秀吉が息のある間だけは、狂気の征服欲を静める特効薬として、拾君を生かしておいてくれと胸の内で願うばかりであった。

有楽斎は再度淀君の相談役と拾君の傅役を仰せつかった。聚落第に移った茶々の相手をして以来である。

別にこれという仕事のない気侭な勤めであった。淀川に面した天満に屋敷を持つことを許されたので、三畳台目の茶室つきの家を建ててそこから大坂城に通った。

正室お清を呼び寄せた。側室のことで一時、しっくりいかなかった有楽斎とお清の仲は、以前と同様、睦まじくなっていた。

別居していたことが幸いしたようである。その間、冷静をとり戻したお清は、三人の側室と己の実子頼長を入れて五男二女となった子供ら家族をうまく統制していた。

この度、天満屋敷賄い料として別に千石が給与されるので、家中のやり繰りも多少楽になるであろう。

文禄三年九月秀吉はお拾に大坂城を譲るために自分の居城として伏見城を造った。年末には可愛い盛りのお拾を手許に置きたいばかりに茶々と共に伏見城の西の丸に住まわせたのであった。これより茶々は「西の丸どの」と呼ばれる。

有楽斎の身辺は平穏である。時折、秀吉に呼ばれて茶事をおこなうほかは、至極のんびりした日々であった。

堺の茶匠、宗及、宗久が世を去り、今は夫々の子津田宗凡、今井宗薫が秀吉に仕えている。また名護屋城に陣が張られてからは、博多の豪商、神谷宗湛、島井宗叱等が商売がらみもあって、茶事に事寄せて秀吉に接近してきている。

利休の死のあと、秀吉は藪内剣仲を聚落第に呼んで茶頭を命じた。剣仲にとって利休とは武野紹鷗門下の兄弟子である。信長、秀吉という権力の下での茶道従事にはもともと反対であった剣仲は、これを断わり代わりに古田織部を推薦した。茶頭となった織部は剣仲の義弟であった。

織部は有楽斎より三歳年長であり禄高も多かったが、古田にとって織田の家は主家筋にあたる。織部は常に有楽斎の下座についた。有楽斎は織部をたてていた。二人のおおらかにして明るい武家茶風は共通していて、二人は終生親しく交ったのである。

文禄四年、伏見城の正月茶湯には諸国の大名、都の朝廷の臣、公家衆も挨拶に押しかけて来て有楽斎は対応に休む間もないほどである。太閤殿下は西の丸どのとお拾君を傍に離さず、終始御満悦であった。

有楽斎は茶室を見回る途中で、今井宗薫からそっと告げられた。

「大名方のひそひそ話でございますが、関白秀次様が御

挨拶に見えなかったとか。秀次様は殿下がひどく御不興とうかがいました」

本丸の広間で来客の挨拶を受ける秀吉のそばにも伺候していたが、そう言えば、関白秀次の姿は見えなかった。

秀吉は第一子鶴松を亡くした後、名護屋に出陣する前に甥の秀次に関白職を譲り、自身は太閤の位に上っている。留守の間の後事を秀次に託したのであった。秀次は秀吉の姉ともの長男である。

（早まったと、秀吉は後悔したであろう）

お拾が生まれた事情が変った。今更関白職を取り戻すことは出来ない。

秀次の方は秀吉が名護屋に行って留守の間に、京でその地位を固めていた。

あわてた秀吉はお拾が生まれた二ヶ月後には、将来お拾に秀次の姫を娶って十五歳になった時豊臣家の家督と関白職を譲ることを約束させている。

秀次の方はいつ関白職を取り上げられるか、疑心暗鬼である。酒色に溺れ異常な行動に走るようになり、家臣たちからも恐れられていると聞く。新年の祝賀に現れないというのは、太閤殿下に対する反発と取られても致し方ないであろう。

ここにもまた悲劇が生まれるかと有楽斎は懸念する。権力の座に上った者がその地位を守るために骨肉の情をたやすく破るのを、有楽斎は幼い時から幾度も見ているのだ。

十一

文禄四年、有楽斎が懸念していた事件が起きたのは七月である。

豊臣秀次が謀反を企てたという罪で詰問されたのが三日、十日には秀次は関白の職を解かれて紀伊の高野山に追放された。秀吉はなんの釈明も受け付けず、秀次と近習たちは高野山青巌寺で切腹を命じられた。それが十五日である。首は、検使の福島正則が持ち帰り、秀吉の実験に供したのち、京都三条河原に晒された。

天満屋敷で有楽斎が震え上ったのは、その後八月になって秀次の妻妾処刑の報せを、秘かに天満屋敷を訪れた前田玄以から聞いた時である。

秀吉は八月二日五十数人に及ぶ秀次の正室、側室を子等もろ共捕え、秀次の首が晒してある三条河原に引き出してなぶり殺しにした。あまりの悲惨さに見物に集まった人々は泣き叫び念佛を唱えたという。

正室の父、従一位右大臣菊亭晴季は秀吉にとっては、関白叙任に尽力してくれた大恩人であった。側室は、四条家の姫をはじめ公家の息女が数人、出羽最上家の息女をはじめ大名の姫が数人、家臣の娘や歌舞の女など、美

貌で一芸に秀でた女人ばかりである。

「八月二日といえば……」

身震いした有楽斎がいう。

「くしくも二年前、拾君が誕生した日じゃ。太閤は、ことさら、この日を選んだのでござろうか」

玄以は、沈痛な面持ちでうなずいた。

「太閤は、関白の謀反の企てについては、歯牙にもかけておられなかった。真のお怒りは、お拾さまにかかわる秀次様の放言ゆえにのう」

「放言とは」

「過日、関白秀次様は聚落第の奥御殿にて、妻妾をことごとく集めて酒宴を催し、こう豪語されたようじゃ。老いぼれの義父どのに子種があったとは笑止千万、お拾は太閤にちっとも似ていないではないか。どこの馬の骨とも知れぬ子に、豊臣家の身代と関白の位を渡すばかがいるものか。余は豊臣の天下の止式の後継ぎじゃ。と、このように言って、呵呵大笑したというのじゃ。侍女のなかに潜ませていた間者が、太閤に密告したのでござる」

有楽斎は、玄以の顔をじっと見つめた。

「お聞きしたい」

「何なりと」

玄以も緊張したまなざしを返す。

「お拾さまは、まこと太閤の子種でござろうか」

声をひそめて聞いた。

玄以の表情は一段と厳しさを増した。しかし、この問に対する返答は一切しなかった。

慶長元年七月十三日、近畿地方を大地震が襲った。畿内一帯で建物が崩壊し、火災が発生して家を失った人々が逃げまどった。

有楽斎の天満屋敷の被害はそれほどでもなかった。屋根が僅か痛んだ程度である。淀川を挟んで向い側に望む大坂城はさすがにびくともせずに聳え立っている。

対して、伏見城では大天守閣が崩れ落ち、御殿は一部破損にとどまったものの、櫓、諸門、石垣、武家屋敷のほとんどが壊滅し、圧死する者は数知れずと伝わった。

秀吉、西の丸どの、拾君は側近や侍女たちに守られて、庭へ逃がれ支障はなかったようである。

京都では、秀吉が七年の歳月をかけて去年（文禄四年）九月に完成させたばかりの方広寺大仏殿が轟音と共に崩壊し、仏前の灯明が火元になって七堂伽藍が紅蓮の炎に包まれた。

早くも京都や伏見の惨状が伝わり世間では

「関白様の怨念やで」

と、寄るとさわるとこの話となった。

高野山で自刃した関白秀次と、三条河原で虐殺された五十余人の妻妾、子等の死霊が秀吉に祟っているというのである。

慶長元年九月、漸く秀吉は大坂城に明の講和使節を迎えたが、使節の態度が無礼だとか、国書の文面が気に入らぬという理由で怒り出し交渉は決裂した。

再び朝鮮半島への挙兵が命じられた。

「総勢は十五万じゃ」

という鶴の一声で急がれた遠征軍の編成は、諸大名の抵抗にあい、五奉行の努力が空回りするばかりで進まない。

翌慶長二年六月になって、やっと全軍が渡海をおえた。これより一年間余り、将兵は戦う目的もなく、敵よりも寒気と飢餓に苦しめられ、一進一退をくり返すのである。

慶長三年三月十五日催された山城醍醐寺の花見茶湯で、有楽斎は久方ぶりに秀吉を見た。千本近い満開の桜の下、各所に茶屋がしつらえられて客をもてなした。

秀吉は六歳になったお拾の手を引いていた。お拾は豊家世継ぎとして既に権中納言の位につき秀頼を名乗っていた。正室北政所と淀君、他の大勢の側室が従い、徳川家康をはじめとする諸大名が参加している。

有楽斎はその日のために修復された五重塔に近い茶屋に入り、色とりどりの装束をまとう女たちの行列を眺めた。秀頼と茶々に支えられた秀吉は有楽斎が驚くほどやつれていた。小柄な身体が更に縮んで見える。

有楽斎が亭主と知って立ち寄った秀吉は、茶屋に座って有楽斎が点てた茶を飲んだ。従う茶々は叔父に向って誇らしげに微笑む。

成長した凛々しい世継ぎを叔父に披露して我が思いを遂げたことを告げる笑みであった。可愛い姪の幸せは有楽斎にも嬉しく思ったが、反面、天下の情勢を考えると、茶々と若君の将来が案ぜられた。

「有楽どの、これを頼みますぞ。お見捨てなく」

秀吉は秀頼の肩を抱き寄せて茶を供する有楽斎に頼むのであった。

秀吉は先に関白秀次を廃すると決めた文禄四年七月に、家康をはじめとする諸大名に、三歳になった秀頼に忠誠を誓う起請文を提出させている。

醍醐寺花見から三ヵ月、秀吉の病いが悪化した。自身の病状を覚った秀吉は伏見城奥御殿に五大老である徳川家康、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝を呼び寄せて、秀頼を頼むと繰り返した。そして同様の趣旨の遺書を残した。

秀吉の逝去は八月十八日である。行年六十三歳であった。

（因みに、この時家康は五十七歳、有楽斎は五十二歳であった）

有楽斎は秀吉の訃報を天満屋敷で聞いた。予期していたこととは言え、体が震えるほどの衝撃を受けた。思えば信長の死によって織田家の運命は急転回し、有楽斎自身も運命に翻弄された。その中心人物は常に秀吉であった。秀吉の言動により織田家の人々は左右されたのである。

天下を取った秀吉にとって織田の血筋は邪魔であった。主家であるという大義名分は立てて巧みに血筋を絶やしていった。

信長次男信雄は平凡な人物故に秀吉に自在に利用されたが、最後には領地替えを拒否して父祖からの土地を召し上げられ下野国烏山に配流された。のちに許されて御咄衆に加えられたが、その時は既に法体であった。

三男信孝は信雄に対する謀反の罪で殺された。これも無実の罪で裏には秀吉の策謀があったと有楽斎は見ている。信長の弟であり、有楽斎には兄に当たる信包は弱気で権力者に従順である。有楽斎にしても同様である。逃げの有楽とか、周旋上手と言われてひたすら織田家系を守るのみに徹し、秀吉に利用されて戦さの度に斡旋役を買って出た。今はたったの二千石の扶持で安泰を得ている始末である。

姉のお市の場合はどうか。秀吉に惚れられて柴田勝家の許に逃れ、北の庄城で自刃した。お市の三人の娘までが秀吉の意のままの運命にあやつられている。茶々姫は秀吉の色欲の餌食となって、世継ぎは産んだものの、今や豊臣家の命運は尽きかけている。

秀吉が遺言した五大老制は、形だけのものになっていた。実力を持つ家康が他の四人を押えて政治に介入している。有楽斎は、次はいよいよ「鵺」が本性を現す家康の時代到来だと思った。

秀吉の死によって朝鮮遠征軍の撤退が始まり、足掛け七年にわたる泥沼のような戦いが終った。

権力の移り変りが、心ある人々にも明らかに感じられていた。

すでに政事は、内大臣の位をもち江戸内府と称されている徳川家康が取り仕切っていた。

続く

人たらしの文章
—司馬文体の魅力(2)—

山田嘉久

七　司馬遼太郎の「文章日本語」論

司馬の随筆や講演碌を読むと、「文章日本語」という字句が頻繁に出てくる。

○「13世紀の文章語」（「この国のかたち」2）
○「言語についての感想1—7」（「この国のかたち」6）
○「維新前後の文章について」（「波」42年4月号」）
○「日本の文章を作った人々」（司馬遼太郎全講演1）
○「週刊誌と日本語」（司馬遼太郎全講演2）
○「文章日本語の成立」（司馬講演テープ「司馬遼太郎が語る4」）

などである。

1　「文章日本語」とは？

司馬自身は「文章日本語」を次のように定義している。

〈文章は、単に文字に書かれた言語というのではなく、その表現力が、叙事、抒情のみでなく、ひろく抽象的もしくは形而上的なことにもわたり得るという、多目的な能力を持った言語ということにする〉

司馬の文章としては、珍しく少し分かりづらいが、その後で司馬らしく分かりやすいイメージを挙げている。

〈たとえば、便利な登山用ナイフのようなもので、缶切りにも栓抜きにもノコギリにもなり、ときに磁石にもなり、また通信機の用を果たしたりもする。〉

（随筆「13世紀の文章語」）

さらに、まとまった司馬の言語論である「言語についての感想」（「この国のかたち6」）ではこうも書いている。

〈私は、社会的に共有されるという意味での文章を、ここでは成熟度の高い文章（あるいは文体）とよぶことにしている。そういう文章は、多目的工作機械のように、さまざまな主題の表現のための多様的をもつものと思っている。〉

つまりは、「文章語」とは多機能かつ共通の言語ということになる。

司馬にとっては、同じ随筆で書いているように〈民族というのは、煮詰めて言えば、共有するのは言語しかないということで、その民族が成熟して、文明社会を持つようになると「文章語」が成立すると考えているのだ。

このようにして、文章日本語は明治になって成立したが、それでも〈たとえば泉鏡花の文章では恋や幻想は表現できても、米ソ問題や日本農業の将来は論じることはできなかった。〉

したがって「文章日本語」は夏目漱石や正岡子規を待たなければ、確立しなかった。

司馬は文章日本語を大工道具にたとえ、ノミひとつの役割をしかなかったのが泉鏡花の文章であり、カンナひとつの役割しかなかったのが、大町桂月の文章であった時代に、漱石と子規の文章は万能の力を持っていたというのである。

2　「文章日本語」の歴史

それでは司馬は「文章日本語」の歴史をどう考えていたのだろうか。

司馬は、これを大きく4つに分けている。鎌倉室町期、江戸期、明治期、そして戦後である。

まず「鎌倉」（13世紀の文章語）である。

その前に、「日本語の成立」についても触れている。

日本語は北方系と南方系の言語との複合である。もともと、日本語の文法はバイカル湖付近の遊牧民が作り上げたもので、ウラル、アルタイ諸語に属する。アルタイ語の代表はモンゴル語、朝鮮語やトルコ語であり、更にいえばバスク語もこれに含まれる。（モンゴル出身力士が日本語が上手いのはそのせいか？　更に「街道をゆく」（南蛮のみち）では司馬はバスク語が日本語に非常に似ていることを指摘している。）

例えば英語や中国語では「I Love you」「私、愛する、あなた」というが、日本語や朝鮮語では「私はあなたを愛します」という。「愛します」という大事な言葉を最後にもってくる。そして、これを「てにをは」でくっつける。膠のように助詞でくっつけるので「膠着語」と呼ばれる。

その一方、それより以前の縄文時代に南方から来た言語が日本列島に上陸した。ハワイなどのポリネシア語である。日本語に母音が多いのはそのせいと司馬は考えている。

世界の言語はほとんど子音が中心であるが、例外的に日本人を始め、南方のミクロネシア人、ハワイなどのポリネシア人、更に台湾の山地人の話す言語は母音中心である。

まず南方系縄文人の「縄文語」が入り、後から北方系弥生人の「弥生語」が続いて「日本語」が出来上がったと考えている。

司馬は「古事記」「源氏物語」を評価しないわけではないが、〈その表現世界が叙事、抒情のためのものだった。〉故に論外に置いている。

その点、〈13世紀は偉大だった〉

この時期、武士とよばれる〈現実主義的な勢力が大きく勃興し〉鎌倉幕府が成立する。そして〈現実を現実としてみる精神が社会一般にひろがった〉としている。

（この点は司馬の「日本歴史観」と一致する。司馬は日本歴史は実質、源頼朝から始まったとし、それ以前の歴史（たとえば「源氏物語」の世界など）はどっか別の国の歴史と思えると書いている。そして頼朝の出現によって日本の歴史は一流の歴史になったと考えている。）

司馬の考えでは、武士の勃興が写実主義となり、「文章語」にも影響して行く。その前の平安時代400年というのは、律令制という〈うそっぱちのじつにそらぞらしい制度〉であった。しかし鎌倉時代に入ると、その力強い写実主義は運慶の彫刻にあらわれているように、文章語の世界でも同様な変化が起こったという。

その例として挙げられているのが、幕府の公式記録である「吾妻鏡」である。

〈その文章は百姓の野良着のように機能的で、素朴で、意味が通じることにのみ主眼がおかれており、字面こそ漢文に似つつも、本性は日本語そのものだった〉としている。

そのほか「平家物語」、「愚管抄」、「正法眼蔵」、「歎異抄」を取り上げている。

「平家物語」は〈みごとな叙事日本語の先駆〉であり、「愚管抄」は〈叙事要素が濃厚ながら一個の観念を述べた〉点で、13世紀の文章日本語の祖型とみている。

また、「歎異抄」は13世紀文章の最大の収穫だとして、平安期で濫用された哲学用語をほとんど使わずに、十分な効果をあげているとしている。

たとえば「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」は〈森の中でにわかに太陽が噴き上がったような驚きを感じさせる〉と司馬は表現しているのである。

要するに、司馬によれば、この時期には現実主義的な精神が成立して、それに基づいて「文章日本語」の祖型が出来、共有化が始まった時代だと言うのである。

続いて江戸期である。

〈江戸期はあらゆる階層が文章を書いたといっていい。ただ、江戸期の文章日本語は叙事、叙景に長じていたが、観念的な分野まで覆いきる日本語の文章を作った人は多くない〉としている。

まず、大久保彦左衛門の「三河物語」を挙げている。そしてこの文書の手本は狂言と太平記であるとしている。

〈これら戦記物は語り物ではありますが、共通の書き言葉の成立には役立ちました。この文章規範にのっとれば、彦左衛門さんのような無学の人でも、文章が書けるようになった。〉

また、この時代の共通の話し言葉は狂言言葉であった。たとえばよく使われた「さようでございます」は狂言がもとになっている。

このような江戸前期の遺産を継承しながら時代は進む。

司馬は、江戸期の多様性を認めながらも、一面では文化的には全国の均一性をも認めている。〈文書表現の面でもそうで、公用私用をとわず、藩によって差異があるわけではなかった。〉

〈江戸中期以降の日本の識字率はあるいは世界一であったかもしれない〉として、〈日本語をみがく教範として、武士階級は謡曲をならい、町人階級は浄瑠璃をならった〉ことをあげている。

例えば司馬作品「菜の花の沖」の主人公高田屋嘉兵衛はろくな教育を受けていないが、その知識の大半は浄瑠璃から得たものだった。

そういえば、彼がカムチャッカでロシア人に捕えられたときに持って行ったのは浄瑠璃本だったと「菜の花の沖」に書いてあったことを思い出した。

しかし、司馬も認めているように、その言語は〈観念的な分野まで覆いきる〉ものではなかった。

更に「維新前後の文章について」というエッセイでは、幕末来日したロシア人ゴンチャロフの文章をとりあげ、当時のロシア人の文章に比べて同時代の日本人の文章が貧しかったことを紹介している。

また幕末の志士たちが頻繁に手紙をやり取りしていることを採りあげ、これは話し言葉では方言などの理由で細かな議論ができなかった証左であるとした。

例えば、桂小五郎や坂本竜馬などは、京都で隣の宿屋に泊っている同志に対しても、直接、面会せずにわざわざ手紙を書いて意見を論じ合う。それほど会話は不便だった。

つまり、司馬のみるところ、江戸期は共有財産として「文章日本語」が成立しており、それは時代の要請に適うものであったが、それでも依然、不自由であった。

そして明治維新となると、文章日本語は瓦解する。

そして、明治期である。

司馬は明治維新を革命と見ていたが、言語においてもそうであったというのである。〈明治は政治的な革命であるとともに、文化革命でも〉あったため、新たな言語を作らねばならなかった。

司馬によれば、日本において国語教育が始まったのは、明治になってからだという。

明治10年ごろ、各府県に中学校が拙速ながら整備され始めたが、国語という科目はなかった。（勿論、明治10年設立の東京帝国大学文学部には「和文学、漢文学」が設けられたが）

ただし、中学でも漢文科はあった。漢文は江戸時代においても藩校は勿論、寺小屋においても必修科目であったからである。

しかし新設された国語科では、学校当局も何を教えてよいかわからず、近所の神主を呼んできて祝詞（のりと）を教えさせた例もあったという。子規が明治中ごろ、松山中学に入学した時もそうだった。

（江戸末期に盛んだった加茂真淵、本居宣長の国学や塙保己一の和学は明治の教育にはすぐには役立たなかったのだろうか。）

明治20年後半に入って、夏目漱石や正岡子規（あるいは森鴎外）が始めて文章日本語を創造した。

それ以前では、前述のように泉鏡花の文章では恋愛小説を書くのは出来たが、報道記事は全く書けなかった。逆に徳富蘇峰の文章では報道記事は書けたが、恋愛小説は駄目だった。

この頃は、蘇峰や鏡花あるいは北村透谷、大町桂月、植村正久、内村鑑三などは、互いに外国人同士であるかのように雑居していて共通の型を持っていなかったのである。

それに対して、共通文章語を創造して、両方を可能にしたのが漱石であり子規であった。その例として、司馬は子規の「墨汁一滴」、漱石の「虞美人草」の文体の新しさ、平易さを挙げている。

子規は「写生」を唱えたが、そのためには彼は「散文」を作る必要があり、現に作ったのである。

（尤も、子規の文章は、幕末の吉田松陰の文書（例えば彼の書いた旅行記「東北遊日記」など）に酷似しているという司馬説には俄かには納得しがたい。多少「贔屓倒し」の感なきにしもあらずだから。）

特に夏目漱石の文章は、その時代では希有なほど多様性に富んでいて、すべての事象をその文章で表現できた。

この〈二人で文章日本語をつくりあげてくれた〉のである。

また、司馬は「日本の文章を作った人々」のなかで文学青年の文章はダメだと語ろうとして漱石の「則天去私」を紹介している。

どうだ、名文だろう」と自己をひけらかしたりする私心のある文章は、いかに文学的な装いを凝らすけれども、それは「則天去私」ではない。

日本に標準語ができたのは比較的遅く、明治30年代に入ってからであるとしている。明治政府が始めて国定教科書を作るためだった。

その一例が「お母さん」という言葉。英語なら「マザー」、独逸語なら「ムッター」で済ませる言葉が日本語では地域、階級によって多種多様であった。江戸下町では「おっかー」、大阪では「おかん」、武士では「お母上」、皇居では「おたあさま」。

それを明治政府は、江戸山の手の中産階級で使っている「お母さん」に統一した。

明治32年の最初の国定教科書に早速、登場している。（司馬は大阪船場で使っている「あかあはん」が素晴らしいという。）

ついでに「―さん」は芸者の使っていた言葉、「―であります」は山口県の方言である。山口県には陸軍軍人が多いことから、やがて軍隊用語となった。

軍隊用語といえば、司馬は言語と軍隊の成立の関係にも触れている。明治18年に陸軍大学校に招かれた独逸少佐メッケルのエピソードである。

彼は軍隊でのやりとりのために文章が簡潔で的確であることを求めた。メッケルの言葉に応じて日本の軍隊の言語が作られたのである。その言語もまた、リアリズムに基づくものであった。

しかし、例えば後に東条英機に現れるような言語は〈生活をしている人間のにおいというのがまったく〉なく、〈紋切り型〉の典型と考えている。

長篇「坂の上の雲」では、主人公の一人秋山真之が、連合艦隊出撃に際して大本営に打った電文を問題にしている。

「敵艦見ユトノ警報ニ接シ、連合艦隊ハ直ニ出動、之ヲ撃滅セントス。本日天気明朗ナレドモ浪高シ」

メッケルの云う「簡潔で的確」からすれば、「撃滅セントス」までで良い筈である。現に部下の書いた電文はそこまでであった。従って、時の海軍大臣山本権兵衛の怒りも買っている。しかしかっては文学青年だった真之は、丁度手元に届いた当日の天気予報「天気明朗ナルモ浪高カルベシ」（日本の天気予報の元祖岡田武松。後の文化勲章受章者）を書きなおして電文に付け加えた。

彼の意図は、権兵衛のいう単なる美文ではなく、天気明朗だから敵艦を見失うこともなく、浪高いから命中率の高い我が艦隊が有利であると言外にいいたかったのだと司馬は同情的である

司馬は、明治政府が作った標準語を「人工語」と称しているが、話し言葉を大切にする司馬としては、方言―司馬は土語（どご）というーこそ豊かな感情表現ができるんだ、方言を大切にしようと訴えている。

彼の初期作品「俄」は大阪生れの侠客明石屋万吉を主人公とした物語だが、これほど見事な方言（大阪弁）を駆使した小説はないといわれている。

彼は小説の題材が決まると、まず資料集めの最初はその地方の方言だという。河井継之助を主人公とした「峠」を書くにあたって、まず勉強したのが長岡地方の方言だった。そのためか、文中、「おみしゃんたち」（お前さんたち）が頻繁に出てくる。

また「坂の上の雲」における方言の使い方も実に効果的である。

「信兄さんはおこるじゃろうか」
「中退してはな」
とお貞はいった。
「ホいても母さん、中退しても学力さえあれば　学予備門には受かるぞな」
「中退は、ならんぞな」

方言を随所にちりばめることは、前回冒頭で指摘した通り、司馬文体の基本が「話し言葉」であることに由来する。

大作「翔ぶが如く」でも、多くの薩摩言葉が使われて効果的である。乱酔癖を「イモ掘り」、食べ物に卑しい人を「ヤシゴロ」、カッコいいことを「武者（ムシャ）がよか」とじつに面白い。

なお薩摩言葉はふつう日本語にはない文末が子音で終わる特徴があることを司馬は指摘している。

「面倒なこつ」はT、「肝が煎つ（いつ）」はRが最後の字など。司馬は「薩音」と表現している。

「方言」のほか、司馬が日本語の一番重要なキーポイントとしたのは、「大脳語」「母音語」だと指摘したのは国文学者の中西進である。

「大脳語」とは中西の造語らしいが、法律用語のような人工語ではなく、たとえば母親の言葉のように、日常的に大脳にじかに響いてくる言葉が大切なのだと司馬は考えていたというのである。

「母音語」の多いのは日本語の特徴だが、これは前述の南方系言語に由来している。例えば浄瑠璃の語りも母音語を重視していると司馬は指摘している。

第4期は戦後の昭和30年代である。

司馬は、この時期を現代の「文章日本語」の成立期とみている。

前述のように、明治末期に確立された文章日本語であったが、昭和に入ってもなお不完全であった。

例えば昭和初期に起きた新感覚派運動。川端康成、横光利一、片岡鉄平などが参加したが、片岡の書いた宣言文を読むと名詞ばかりの文章で、ただ最後に勢のいい感嘆符がついている理解不能な日本語であった。（昭和40年代の全共闘の立看板の文章と似ているという）

新感覚派の運動自体が内容の希薄な運動に終わってしまったのは当然と司馬は考えている。

かくして創造された共通日本語が完全に成立されたのは、明治100年近く経った昭和30年代だと司馬は考える。

この頃の作家の文体が〈共通して似てきた〉ことを例に挙げている。明治以降の文筆家たちのそれぞれの手作りであった文体がついに共通化してきたことを知る。

だからどの現代作家の文章の一部を切り取っても、外国大学日本語科の期末テストの問題になるだろうと指摘している。

司馬の考えは、さらに飛躍して、こうなった現象は昭和30年代の「週刊誌ブーム」を原因としている。週刊誌は戦前から長い間、新聞社の刊行物とされてきたが、昭和31年に新潮社がその慣例を破ってから、引き続きいくつかの大出版社がそれを発行し出してブームとなった。これが「文章の大衆化」に役立ったというのである。

この司馬説に賛成したのが評論界の大御所桑原武夫で、次のようなエピソードを司馬はしばしば紹介している。

この頃、南極探検隊が話題になった。その隊長だった著名な科学者（西堀栄三郎）が帰国後、体験談を一般書に書くことになったが、「おれには文章なんか書けないよ」と桑原に相談に来たという。桑原は「簡単ですよ。通勤の車中で例えば「週刊朝日」を読めばいい」。隊長はほどなくすぐれた文章を駆使して立派な本を書くことができたというのである。

（続く）

世界の国旗から学ぶ（第四回）

米村典紘

前回に引き続き、アフリカの国々をご紹介して行きたいと思います。

Ⅰ　一九六〇年に独立したアフリカ諸国

一九六〇年はアフリカの年と呼ばれ、アフリカで十七か国が独立をいたしました。

第二次世界大戦により、ヨーロッパの列強国はともに疲弊し、植民地支配に限界を感じていました。特にフランスはインドシナ戦争で敗れ、更にアフリカ大陸でアルジェリア、モロッコなどの統治に頭を痛めていたのです。

ドゴールが大統領に選出されると、アフリカ諸国の独立を容認する政策に転換、一九六〇年にはフランスから、マリ共和国：モーリタニアイスラム共和国：カメルーン共和国：コートジボワール共和国（まんじ143号117ページ紹介）：コンゴ：セネガル共和国：ブルキナファソ：ベナン共和国：チャド共和国：マダガスカル共和国（144号152ページ）：中央アフリカ共和国（144号150ページ）：トーゴ共和国：ニジェール共和国（144号151ページ）：ガボン共和国の十四か国が独立しました。ナイジェリア連邦共和国（144号148ページ）はイギリスから独立、ソマリア民主共和国（まんじ144の149ページ）が、イギリス・イタリアから独立、コンゴ民主共和国（144号153ページ）はベルギーから、いずれも1960年に独立を果たしました。

ベルギーのアントワープに今でも大きなダイヤモンド加工工場があるのは、コンゴ民主共和国がかつてベルギーの植民地であった名残りからです。

アフリカ地区からの独立は六十年代後半から七十年代に入ると、スペインから六十八年に赤道ギニア共和国が、ポルトガルからは七十三年にギニアビザウ共和国が、七十五年にアンゴラ共和国、カーボベルデ共和国、サントメプリンシペ民主共和国、モザンビーク共和国が次々と独立していきました。

1960年以前9ヶ国（エチオピア：エジプト：リビア：チュニジア：モロッコ：南アフリカ：リベリア：スーダン：ガーナ）しかなかった独立国が、現在では54か国になっていったのでした。

独立した諸国には宗主国との争い、民族間の争い、部族間の争い、大国の代理戦争など、多くの悲しい歴史がありました。

アフリカ諸国の国旗に使われる赤色は独立の為に流された血の色とか、平和を意味する緑などが使用され、新しい国旗が次々と生まれていきました。独立を果たした多く国々が見本とした国旗が、エチオピア、ガーナで使われていた、汎アフリカ色（汎アフリカ色の赤：緑：黄色）の国旗です。まんじ一四四号の一五五ページの国旗をご覧になると、その傾向が良くお分かりになると思います。

【参考】

一九六〇年当時の日本に於ける大事件と云えば、日本社会党の浅沼稲次郎委員長が右翼の少年に暗殺された年でした。

Ⅱ　アフリカに於ける一人当たりのGDPの高い国

アフリカに於ける、比較的豊かな国（国民一人当たりのGDP）一〇か国上げるとすれば、どんな国が上がるでしょうか？

歴史のある国エジプト？チョコレートでお馴染みのガーナ？マラソンのケニア、日本の旅行客が良く訪れるモロッコ？人口の多いナイジェリア、あたりでしょうか？

残念な事ですが、その様な国々は、ベストテンには入らず、選外です。正解は次の国々です。

①赤道ギニア（24,480ドル）②セーシェル（15,565ドル）③リビア（12,029ドル）④ガボン（10,151ドル）⑤モーリシャス（9,593ドル）⑥ボツワナ（7,312ドル）⑦南アフリカ（6,936ドル）⑧アンゴラ（5,668ドル）⑨ナミビア（5,462ドル）⑩アルジェリア（5,315ドル）

【参考：我が国の一人当たりのGDPは38,528ドルです。】

アフリカに於ける比較的豊かとされる10か国の特徴は、人口が比較的少なく、資源（石油、鉱物、観光）が豊かである事、最も重要な事は内戦が比較的少ない事などがあげられます。（もちろん、例外もあります）

しかし豊かといっても、あくまで、アフリカ諸国の中での比較です。

それでは、これらの国と国旗のご紹介を致しましょう。

①赤道ギニア共和国（1958年独立：24，480ドル）

アフリカ大陸にはギニアと名前がつく国家が三つもあります。「赤道ギニア共和国」「ギニアビザウ共和国」そして「ギニア共和国」です。

ギニア共和国が一九五八年独立し、赤道ギニアがその十年後の一九六八年、更に五年後に一九七三年にギニアビザウが独立しました。

【参考】英語では赤道の事を「イクエイター」と発音しますが、スペイン語では「エクアドル」と発音します。（南米大陸にある「エクアドル」の国名は赤道から由来したものです）

ギニアの意味はサハラ砂漠に住む「ベルベル人」の言葉で「黒い人の土地」という意味のようです。（オーストラリアの北に位置するパプアニューギニア地名の由来も、発見したスペイン人が、アフリカギニアに似ているところから、名前が付けられたそうです）

さて、赤道ギニア共和国の名前で「赤道」と云っても、赤道は通っていません。お隣のガボン共和国に赤道が通っています。

ご参考までに、アフリカ大陸で赤道直下の国々は東から、ソマリア連邦共和国：ケニア共和国：ウガンダ共和国：コンゴ民主共和国：コンゴ共和国：ガボン共和国：サントメ・プリンシペ民主共和国です。

赤道ギニアの位置は、北側が、カメルーン共和国、南と東側にガボン共和国、西側はギニア湾に面しています。人口七八万人の小さな国家なので、一人当たりのGDPは高くなる訳です。（国土は日本の〇、〇七倍）。主な産業は天然ガスや、石油で輸出額が140億ドル、輸入額は70億ドルとなっています。一九九六年から海底油田の採掘がはじまり、国家財政は一変し、高成長を遂げている国家に変貌しました。

首都はビオコ島にあるマラボで、大陸にも国土を持ちながら、島に首都がある国は、世界でも珍しく、赤道ギニアとシェラン島に首都コペンハーゲンを持つデンマークの二か国だけです。

赤道ギニアの国旗は、途中国章の変化はありましたが、現在は独立当時の、国旗に戻りました。横柄水平三色旗（緑：白：赤）に旗竿側から延びるブルーの三角形からなる四色旗となっています。

青は島々と海を、緑は豊かな農産物を、白は平和、赤は戦士達の流した血を表しているそうです。

中央の白の部分には、標章としてスペイン語でUNIDAD（統一）、PAZ（平和）、JUSTICIA（正義）とかかれ、その上に盾型の青枠の中に国の神木と云われるパンヤの木を一本描いたものです。更にその上部に六つの黄色い小さな星を（五つの島と大陸部）配しています。尚、民用旗の場合は標章を省き使用されています。

【参考】

ギニア共和国（1958年独立：615ドル）

三ケ国のなかでは、一番先に独立した国。

国旗はフランスから独立した為、フランスの縦柄三色旗を参考にして、汎アフリカ色の「赤：黄色：緑」としたと云うことでしたが、一年前（1957年）に独立したガーナ共和国と同じ色を使用することにより、将来ガーナとの国家統合を考えての配慮があったと云われています。

【参考】

ギニアビザウ共和国（1973年独立：608ドル）

ポルトガルの奴隷貿易の中継地として栄えましたが、1958年にポルトガルから独立。国名のビザウは首都の名前。

国旗は汎アフリカ色に黒い星を描いたガーナ国旗を意識して作成されました。独立時の社会主義政策の失敗から未だに経済不振が続いています。

いずれの国家もガーナ共和国を意識した国旗なので、この項でガーナ共和国も述べさせていただきます。

【参考】

ガーナ共和国（1957年独立：1,840ドル）当時のエチオピア国旗（まんじ143号15ページ）の汎アフリカ三色を採用（横柄上から、赤：黄：緑）し、中央に黒の五稜星を配した国旗。ギニアだけでなく、その後に独立したアフリカの国旗に大きな影響を与えました。ガーナはイギリス領時代は黄金海岸と呼ばれた様に、豊かな国家でありましたが、アフリカのリーダーであったエンクルマ首相が、「アフリカの自由と統一」の為に、身に余る支援を行った為に疲弊してしまいました。現在は人口2,500万人を擁し、アフリカに於ける民主主義の模範的な国家となっています。国民一人当たりのGDPは1,604ドルですが、貧困率は30％を割り、比較的国民の生活は安定していけています。近年の経済推進力は原油商業生産によるもので、経済成長率も10％以上を続けています。

日本の野口英世が「黄熱病」の研究をした事でも有名です。

②セーシェル共和国（1976年：15565ドル）

セーシェルの人口は約9万人、アフリカで最も人口の少ない国家。日本では、美しいハーモニーを持った男女のグループ「カズン」がセーシェルを美しいハーモニーで歌い、セーシェルの国が美しい楽園観光地だとして有

名になりました。セーシェル諸島は92の島々で構成され、マヘ島、プララン島やラ・デイーグ島は特にリゾート地として知られています。歌手グループ名の「カズン」もセーシェル諸島の島の名前から付けたそうです。

産業は観光業とマグロ漁で成り立ち、国旗も観光業にふさわしく、カラフルなデザインとなっています。

1976年英国から独立し、無血クーデターはあったものの、1996年に現在の国旗となりました。旗竿左下の部分から5色（青：黄色：赤：白：緑の帯）が放射状に広がり、中央の赤部分だけが大きな面積を占めていますが、後は二等辺三角形を形づくっています。多色旗の理由の一つに、「赤、白、緑色」が与党セーシェル人民進歩党の党旗色で、「青、黄色」が野党セーシェル国民党の党旗色だそうです。内戦続きのアフリカ諸国の中で、大陸ではなく、島である事もありますが、醜い争いもなく、国旗に「融和」を表している観光立国「セーシェル」でした。

③リビア（1951年独立：12，029ドル）

リビアは1951年イタリアよりリビア連合王国として独立しました。

また、リビアはアフリカ第一の原油埋蔵量を誇る資源大国でもあります。

始めに、カダフィ政権時のリビア国旗について興味深い話がありますのでご紹介します。

一九七七年十一月、同盟国のエジプトが、アラブの宿敵イスラエルと単独で和平交渉を結んだ事から、カダフィ大佐は激怒し、エジプトとの関係を即遮断しました。当時、リビア・アラブ共和国の国旗（横柄水平三色旗で上から赤：白：黒の汎アラブ色）はエジプト国旗と同じ三色旗でしたが、「国旗も直ちに変更せよ」との指令を出したそうです。

側近達は、独裁者カダフィの指令なので、「直ぐに作成しないと大変な事になる」「しかし、デザイナーに頼むといつになるか分からない」と困ったあげく、一日で考案した国旗がただのグリーン一色旗（イスラムの色）という国旗になりました。

四十二年間続きましたカダフィ独裁政権も、2011年の内戦により殺害され、国旗も変わりました。

しかしながら、昨年2016年10月にもハリーフア・アルが率いる国民議会派がクーデターを起こし、政治はいまだ混迷しています。

現在の国旗は、1951年から1969年まで使用していた王政時代の国旗を、復活させて使用しています。即ち、赤1：黒2：緑1の横三色旗の中央に、イスラムの新月と五稜星を白く描いたものとなっています。

日本との関係は、日本リビア友好協会があり、アラビア語も話せる、あの小池百合子東京都知事が会長として以前から活躍しています。

④カボン共和国（1960年：10，151ドル）

アフリカ中部、ギニア湾に面した赤道直下の国。1960年フランスから独立。二代目大統領であったオマール・ボンゴが善政を引いた結果、アフリカに於ける最も豊かな国の一つになっています。現在は息子のアリ・ボンゴが大統領に選ばれていますが、どこかの国のような、世襲ではありません。

森林資源やレアメタルも豊富であり経済は安定していますが、石油生産の減少に伴い、貧困対策、対外債務の返済という大きな課題が残っています。主要援助国は、フランス、日本、ドイツですが、最近は中国が接近して来ています。

国旗は、アルベルト・シュバイツアー博士の著書「水と原生林のはざまで」のタイトルから発想して作成されたと言われています。上から緑（原生林）：黄色（赤道）：青（豊かな水量と大西洋）の水平三色旗となっていますが、独立当時は、現在の国旗のカントン部分にフランス国旗が配置されていました。

【参考】アルベルト・シュバイツアー：（1875学、医学、音楽などに優れ、ノーベル平和賞も受賞。ガボンにおける医療活動に半生を捧げ、90才で死没）

⑤モーリシャス共和国（1968年独立：9，593ドル）

アフリカのマダガスカル島の東側、インド洋に浮かぶ火山島からなる島国。

1638年にオランダ領となりましたが、1710年にはフランス領、そして1810年にイギリス領となった国家。1968年にイギリスから独立した。（イギリス連邦加盟国）

経済は、独立後、観光業や繊維産業に力を注ぎ、輸出型工業を推進してきました。その結果、完全雇用体制が確立され、国民の生活水準もアフリカ全体の5位にランクされています。

民族はインド系、中国系、アフリカ黒人系、ヨーロッパ系等ですが、混血が多く民族間の争いは少ない。

国旗は、上から赤：青：黄色：緑の水平四色旗で、赤は独立解放で流された血、青はインド洋、黄色は太陽と輝ける未来、緑は島の植生と緑の生産物を表しています。モーリシャスの国旗も観光立国のセーシェル同様、主要四民族の色を取り入れ「融和」を表わした国旗となっています。

⑥ボツワナ共和国（1，966年：7，312ドル）

英国保護領時代は「英領ベチュアナランド」とよばれていましたが、1966年に英国からの独立で、国名と国旗を新しく制定、イギリス連邦加盟国の一員です。

アフリカ南部の海を持たない内陸国家、南側は南アフリカと接し、西側にナミビア、東側をジンバブエに接した、五七万平米を持つ内陸国家です。日本の国土と比較しますと15倍となります。

政治は、ボツワナ民主党政権が続く安定した国家です。現在のカーマ大統領は四代目で初代大統領の息子ですが、この国の大統領も決して世襲ではなく、民意に沿って選ばれた結果です。

ボツワナ経済は当初、牧畜を基幹産業とし、牛肉の輸出に依存していましたが、1967年にダイヤモンドが発見され経済は一変しました。ダイヤモンド産出量は、ロシア、コンゴ民主共和国とベスト・スリーに入っていますが、現在は、産業の多角化を目指しています。

尚、アフリカに於けるダイヤモンドの生産量では、上記二か国の他に、ジンバブエ：アンゴラ：南アフリカ：ナミビア：シェラレオネ五か国が産出国であり、ベストテンには常にアフリカ七か国が入っています。

国旗は、汎アフリカ色が余り感じられない、ライトブルー地の中央に太く黒い横帯、その両端を縁取った白い帯という、シンプルなデザインで、配色のバランスも良く、美しい国旗となっています。

国土の南半分がカラハリ砂漠であるため、国旗のライトブルーは「水」を表し、通貨単位プーラもツワナ語で「雨：水」を意味しているそうです。黒い横帯は国民の九割を占めるアフリカ系黒人を、白い帯線は少数派の白人を意味し、双方の団結と融和の決意を示しています。人口は177万人（首都ハボローネの人口23万人）で、人口分布が最もバラバラな国家と云われています。アフリカ諸国の特質である、貧富格差が最大の課題となっています。

⑦南アフリカ共和国（1910年独立6，936ドル）

まんじ142号の114ページ（金2銀6銅2）に記載しましたので、周辺国を含め少し補足を致します。

ご存じ、アフリカ大陸の最南端に位置する共和国で、一時南アフリカ連邦と云われていましたが、現在は共和国です。勿論、イギリス連邦加盟国の一つでもあります。

注：英連邦加盟国とは、イギリスと旧イギリス領植民地から独立した国々が、対等な立場で友好・協力関係を基盤とした、ゆるやかな国家連合体で、現在、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど、52か国が加盟しています。

南アフリカは長年の間、アパルトヘイト（人種隔離政策）を推進していましたが、二十七年間獄中で、黒人解放運動を指導してきたネルソン・マンデラ氏が、1994年の国民による議会選挙に勝利し、黒人として、初めて大統領に選出されました。

マンデラ氏は2013年12月に95才の人生を閉じましたが、ボクシングやラグビーを愛し、ユーモアにも長けていたため、人種を超えた多くの人々に愛されてきました。

南アフリカの人種隔離政策はマンデラ大統領の時代に崩壊し、現在は、アフリカに於ける経済大国を目指し進んでいます。

【参考】

ここでは、南アフリカ共和国の領土内に、二つの小さな国がある事をご紹介致します。スワジランド王国とレソト王国の立憲君主制王国です。

何故このような国家が南アフリカの中に出来たのでしょうか？

しかも南アフリカから独立したわけでもありません。

実は、その原因は民族争いによるものなのです。アフリカではズールー族と云う最強の民族がアフリカ南部を支配していました。レソト王国も、国王モシュシュはズールー族の国王でしたが、国民のほとんどはバスト族でした。

モシュシュ国王が亡くなると、ズールー族とオランダ人移住者から迫害を受けていたバスト族は、イギリスに保護を求めました。

スワジランドも同様でスワジ族の国家でしたが、ズールー族とオランダ人移住者から迫害を受け続けていましたので、同様にイギリスに保護を求め、いずれもイギリスの保護区となっていたのでした。

【参考】

スワジランド王国（1968年独立：2，819ドル）はスワジ族の国で、森林資源や鉱山資源に恵まれているため、国家財政は豊かなのですが、ドレミニ家の世襲で、現在のムスワテイ第八代国王に、絶対的権力が集中しているため、国王の乱費により、国民生活は必ずしも豊ではありません。

経済は南アフリカでアパルトヘイト問題が持ち上がり、白人企業家達が、経済制裁を潜り抜ける為にスワジランドに進出、それなりに多角化された経済体制となっています。国民一人当たりのGDPは2，819ドルではありますが、住民の1%の白人が経済の実権を握り、私有地の大半を所有しているなど貧富格差が激しく、黒人達の生活は厳しい状況と成っています。

国旗はケニアの国旗と類似する盾と槍ですが、盾と槍

は横に寝かせた形で描かれています。盾と槍の意味はケニアと同じ「主権を守る為には断固として戦う」との意思がこめられています。

【参考】

レソト王国（１９６６年独立：１，０７５ドル）は周囲を南アフリカに囲まれた標高1,600メートルの内陸国。日本の九州の七割あまりの国を持つ小さな国家です。風光明媚な所から「アフリカのスイス」とも云われています。

経済は、慢性的食糧不足で、南アフリカへの出稼ぎに頼っています。輸出は衣料品、食料品と僅かのダイヤモンド。同国は、南ア、ボツアナ、ナミビア、スワジランドと「南アフリカ関税同盟」（ＳＡＣＵ）を形成し、ＳＡＣＵからの交付金で財政の5割を賄っています。

国旗は上から青、白、緑の水平三色旗で、白い部分の中央にバソト帽（王権の象徴）が描かれています。いずれの二カ国とも南アフリカ共和国経済とは密接な関係を保っています。

話を南アフリカ共和国に戻します。新興国の代名詞でＢＲＩＣＳといわれていますが、最後のＳは南アフリカを意味するものです。

鉱業は（ダイヤモンド、金など）一時のピーク（ＧＤＰの２７％）から現在は、ＧＤＰの７、７％に落ち込んでいます。産業構造も一次産業１０％、二次産業２１％、第三次産業６９％と先進国並みの産業構造となっていますが、最近、経済の減速（成長率１％弱）、インフレ進行（６％強）、失業問題（２０％）対外債務問題を抱え、一時の勢いはありません。

⑧アンゴラ共和国（１９７５年独立：５，６６８ドル）

アフリカ南西部の大西洋に面し、日本の３・３倍の面積を持つ国家。１９７５年にポルトガルから独立を致しました。

その為、言語は公用語として、ブラジル同様、ポルトガル語を話す国家です。

アンゴラは大西洋に面したコンゴ共和国とコンゴ民主共和国に挟まれたカビンダ州と云う小さな飛び地も保有しています。

２０１０年に同地でアフリカサッカー選手権が行われ、トーゴ代表チームが襲われて、三名が死亡した事件がありました。カビンダ州はコンゴ民主共和国に近く地下資源が豊かなため、アンゴラからの独立を狙っています。

米ソの代理戦争とも云われる程、内戦が絶えませんでしたが、独立後２００２年に一応落ち着きました。

その為、負の遺産として、世界一地雷が埋まっている（数百万発）国と云われ、故ダイアナ妃の活動や日英が協力して、地雷撤去に協力している事でも知られています。

地雷問題は頭が痛い問題で、最近の地雷はプラスチック製でもある為、金属探知機には反応せず、永久に残るとも云われています。

国旗は、真紅と黒の水平二色旗で、赤はアンゴラ人の血と黒はアフリカ大陸を、更に、黄色のシンボルは歯車の一部と農民の武装集団である刀が配されています。このデザインは旧ソ連国旗を思い出す歯車、そして錠をデザインした図柄に似ていますが、製作時は、旧ベトナムの国旗を意識し、ベトナム国旗の下半分をアフリカ人を象徴する黒にした国旗なのです。

ロシア国旗もベトナム国旗も変わりましたので、アンゴラの国旗も変わると云われ続けていますが、未だ変わる様子がありません。

経済は、ダイヤモンドの産出国でもありますが、未だに石油生産の推進に依存しています。その石油資源の大半は問題のカビンダ州に埋蔵さています。更に、中国の利益を優先する中国からの借財２０億ドルと高い成長率に伴う、世界で最も高いとされる物価、そしてアフリカ特有の貧富格差が大きな影を落としています。

⑨ナミビア共和国（１９９０年独立：５，４６２ドル）

アフリカ南西部、北はアンゴラ、南は南アフリカ、西は大西洋に面した共和国。１９９０年に南アフリカ共和国（イギリス）から独立しました。

国名は世界最古の砂漠と云われる「ナミブ砂漠」に由来しています。ナミブの現地語の意味ですが、「何もない」なので・・・良い国名なのかどうかはわかりませんが。

経済は牧畜、ダイヤモンド、ウラン、亜鉛など鉱業が主。人口が二百三十万人と少ない関係から、一人当たりのＧＤＰは高くなってしまいます。

しかしながら、最も貧富の差が激しい国（ジニ係数の世界一高い国）であり、白人層（６％）の生活と、農村部で暮らす貧しい黒人達の格差は、大きい国家となっています。

その様な環境ですが、アフリカの中では比較的治安が良く、ナミブ砂漠ツアーなどもあり、観光客には人気があります。日本でも有名となった映画「ブシュマン」のニカウ氏もナミビア出身です。

国旗は左下から右上部に走る赤色の帯を白い線が枠取りし、旗竿側上部を青色で（更に１２本の光線を放つ赤銅色の太陽を青色の中央に）、右下部分を緑色としたもの。）青は大西洋と空、赤は血と国家建設への決意、緑は農産物と天然資源、白は平和と統一、十二本の光線は十二の民族を表しています

（斜め横に帯を描いている国旗のデザインはコンゴ民主共和国、コンゴ共和国、タンザニア連合共和国とナミビア共和国の四カ国が使用しています。）

⑩アルジェリア民主人民共和国（1962年独立：5，325ドル）

アフリカ北西部の地中海に面し、東はチェニジア、リビア、西はモロッコに囲まれた国家。アフリカでは最も広大な大地（238万K㎡）を持つ国家ですが、その90%はサハラ砂漠によって覆われています。人口は約4千万人。80%の宗教はイスラム教のスンニ派です。

アルジェリアは、アフリカ連合、アラブ連合、そして地中海連合、アラブ・マグレブ連合（アルジェリア：リビア：モーリタニア：モロッコ：チュニジア）に属し、バランス外交を進めています。輸出は原油、天然ガスが全体の97%を占め、社会主義経済から市場経済体制に移行しました。

イスラム過激派（アルカイダ）との対立により各地でテロが続きましたが、2013年に起きた、プラント建設企業「日揮」の社員が10名殺害された事件は、記憶に新しいものだと思います。

アルジェリア国旗は、地色を縦二色（左側を緑：右側を白と二分）とし、中央にイスラムのシンボル新月と星を赤で描いたものです。緑色はイスラム教と勇気と繁栄を、白は純潔と平和を、そして赤は革命で流された血と自由を意味しています。（国旗はパキスタンの国旗に似ていますがパキスタンは左側が白（1）右側が緑（3）、三日月と星は白抜きです。）

【参考】

イスラム教ではスンニ派とシーア派の対立が続いていますが、世界のイスラム教社会の90%はスンニ派系です。

サウジアラビアほか湾岸諸国はスンニ派。シーア派系の代表はイラン、イラク、シリアがそうです。しかし、全ての国民が同じ派ではなく、アルジェリア・インドネシアも多数はスンニ派系ですが、シーア派の国民もいるわけです。

【参考】

アフリカ諸国をいろいろと紹介して参りましたが、皆さんが良くご存じのエジプト・アラブ共和国（銅メタル三個）と、モロッコ王国（銅メタル一個）が未紹介のままなのでご参考として、国旗についてご紹介をさせて頂きます。

【参考】

エジプト・アラブ連合共和国（1922年独立：3，110ドル）

エジプト・アラブ連邦共和国の国旗は、汎アラブ色

（赤：白：黒）の横平行三色旗で、中央の部分にクライシュ族の鷹が右向きで描かれています。国旗ルールでは、本来「鷹」は、旗竿側を向いてなければいけないのですが、この鷹は右向き（欧米の方向？左よりではなく？）です。シリア・アラブ共和国の国旗も、汎アラブ色で中央の白の部分に緑の五稜星が二つ並んでいる国旗で、エジプト国旗と同類となっています。

この横柄（赤：白：黒）は、アフリカではエジプト、スーダン（スーダンは更に緑の三角旗が入ります）の二か国ですが、アラブでは、シリア：イエメン：イラクの三カ国がこのデザインを使用しています。

【参考】

モロッコ王国（1956年：3，146ドル）

モロッコ王国の国旗は以前、赤一色でしたが、1631年から中央にソロモンの封印（エチオピアと同じ様に、五角形で星の形をした、神のご加護が頂けると云う厄除けの護符）を加えた国旗で、現在に至ります。

独立はしたものの、今でも、スペインとの領有権の問題や、サハラ・アラブ民主共和国（西サハラ）との国境問題など、複雑な問題を抱えています。

産業は、リン鉱石の世界的産地として知られていますが、日本は、大量のタコとイワシをモロッコから購入しています。

Ⅲ　アフリカの国旗に月と星が多い訳

アフリカ54か国のうち、「新月と星」はイスラムの印でもある訳ですが、星を使用している国旗は、アンゴラ：ガーナ：カーボヴェルデ：カメルーン：ギニアビザウ：コンゴ民主共和国：サントメ・プリンシペ民主共和国（ギニア湾に浮かぶサントメ島とプリンシペ島からなる島国）：ジブチ：ジンバブエ：セネガル：ソマリア：中央アフリカ：トーゴ：ブルキナファソ：ブルンジ：南スーダン：モザンビーク：リベリアの18か国がございます。

アンゴラは旧ソビエト連邦の国旗に類似した星、リベリアの星は星条旗に似せた星、エチオピアとモロッコは星ではなく「ソロモンの封印」で災厄除けの護符ですから、星のデザインからはずされます。それぞれ意味はあるのですが、厳密に月がなく星のみの国旗は先程の18か国となります。イスラムの象徴でもある月と星をデザインした国旗はアルジェリア：コモロ：チュニジア：モーリタニア：リビアの五か国。

いずれも、涼しい、夜になると見えてくる星と月が描かれている国旗が、アフリカ諸国の約半数に使われているのは実に興味深い事です。

反面、日本の様な太陽を描いた国旗はというと、アフ

リカでは、マラウイ：ナミビア：ニジェール：ルワンダの四か国だけです。

熱帯地方や砂漠地帯では、太陽の光よりも、月の光や星が心を癒し、又方角を知るところから貴重であったのかも知れません。

Ⅳ　冬季オリンピックに向けて

来年は韓国で、冬季オリンピック・パラリンピックが開催される予定です。スキー、スケート競技を中心にメダル競争が始まります。冬季五輪の強豪国は、さすがに黒人国家ではなく、ノルウエー：スエーデン：フィンランドなどのスカンジナビア諸国と、ドイツ：オーストリア：オランダ：イギリス：フランス：スイス、チェコ：イタリアなどのヨーロッパ諸国と、何でも必ず顔を出してくる、米国：ロシア：カナダ：オーストラリア、それに、中国：韓国：日本が何故か加わり、来年の冬季オリンピックのメダル獲得争いが始まります。

その中に何故か東洋の三カ国がいつも入って来るのは「赤い筋肉？白い筋肉？」又は「黄色い筋肉？」・・・なんでしょうかね？

（つづく）

「農ある暮らし～私の日常～(4)

古屋富雄

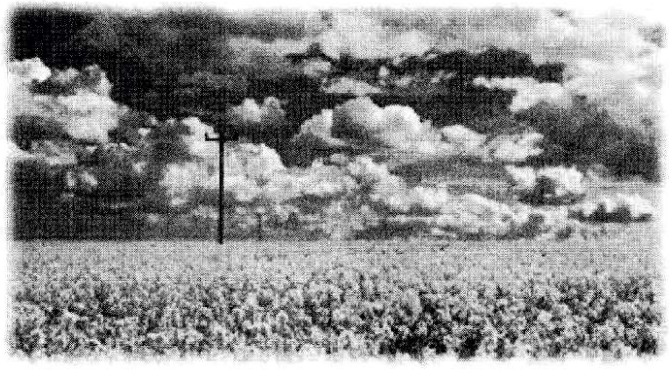


晴耕雨読

晴耕雨読と洒落込んで、田舎暮らしをしています
悠々自適を自負しつつ、3年の月日が経ちました
時に少雨の年があり、時に長雨の年がある
蒔いた種は芽を出さず、育った苗も朽ち果てる
あー　晴耕雨読　晴耕雨読
これが現実　晴耕雨読

自給自足と意気込んで、野菜作りに励みます
主食の米は無農薬、もちろん野菜も無農薬
時に日照りの年があり、時に大風の年がある
獲らぬ狸の皮算用、思い通りにいかぬもの
あー　自給自足　自給自足
これが現実　自給自足

時に寒波の年があり、時に大雪の年がある
みかんの苗木は葉を落とし、毎日家に居るばかり
あー　晴耕雨読　晴耕雨読
これが現実　晴耕雨読



定年後

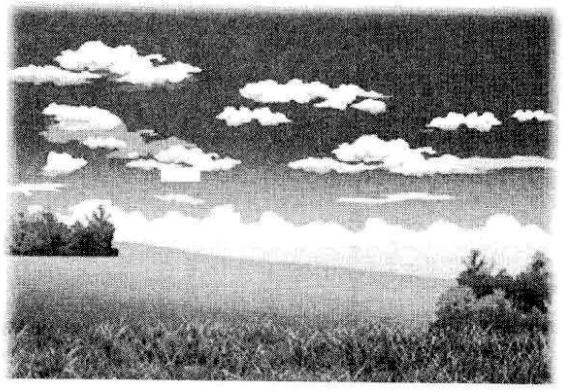
今日まで　一生懸命働いてきました
今日は私の誕生日です
今日で定年になりました

今日から　やりたいことは自分で決める
今日は私の一区切りです
今日で私は変わります

仕事に行かなくても良い
小躍りするほど嬉しい
やっと人生始まった
これから何をしましょうか

明日から　やりたいことが山ほどあります
明日は私の始まりです
明日で私は変わります

妻に相談して決めます
許してくれると思います
田舎で農業したい
人生本音で終わりたい
人生本音で終わりたい



来たれ市民の農業者

私は農家ではありません
耕す畑は借りています
週末ここにやってきます
野菜作りに励んでいます

隣も農家ではありません
同じ畑を借りています
毎日ここに来るそうです
去年会社を辞めたそうです

来たれ市民の農業者
来たれ市民の農業者

月に一度が楽しみです
地主の家に呼ばれます
和気あいあいの食事会です
私の野菜も振る舞われます

私は農家ではありません
耕す畑は借りています
地主も隣も良い人です
あなたも農業してみま
せんか

来たれ市民の農業者
来たれ市民の農業者



祖父母と暮らして

お祖父さんに手紙を出しました
父はそちらに戻らないと言っています
それなら僕が一緒に暮らして良いですか
田畑の仕事を教えて欲しいと書きました

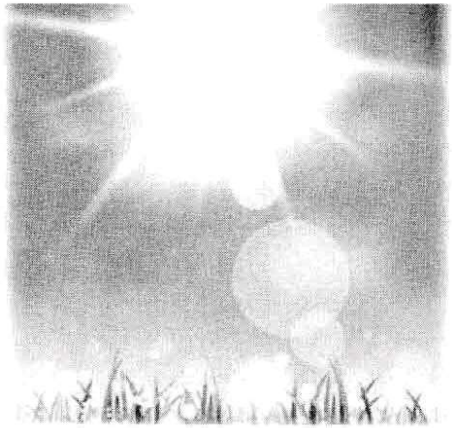
お祖母さんは如何思いますか
母はあなたのしたいようにと言っています
それなら僕が農家を継いで良いですか
自慢の料理を食べてみたいと書きました

こうして、僕は、お祖父さんとお祖母さんと
暮らすことになりました

トラクターを初めて動かします
エンジン音が納屋いっぱいに響きます
耕す時は一番遅くて良いからと
お祖父さんが畔の向こうで見ています

田んぼにお昼が届きます
僕の好きなクラブサンドも入っています
ポットの中身はコーヒーにして良いからと
お祖母さんが豆から挽いてくれました

こうして、僕は、お祖父さんとお祖母さんと
今日も暮らしているのです

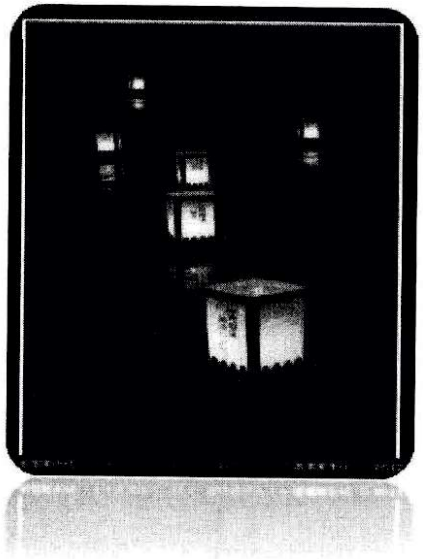


灯篭流し

子らがたたく太鼓の音で観音祭りが始まりました
今日はお盆の16日ご先祖様が帰ります
胡瓜の馬でやって来て、茄子の牛で帰って行く
短い4日が終わります

走馬燈が風につられて、くるくると回っています
灯篭流しがそろそろ始まる時間です
胡瓜の馬でやって来て、茄子の牛で帰って行く
ご先祖様との別れです

妻が仕立てた浴衣をまとい灯篭流しに出かけます
我が家の名前が記された灯篭が流れています
胡瓜の馬でやって来て、茄子の牛で帰って行く
別れを惜しむ流れです
灯篭流しが続いています



東日本大震災の被災地を走る（その二）

安藤　剛

東日本大震災から六年半、復興未だ道半ばだが、復興支援活動の一環として開催されたマラソンイベントに被災地宮城の出身ランナーとして参加してきた記録を未曽有の大惨事を振り返りながらまとめてみた。

【東日本大震災の日（平成二三年三月一一日）】

一四時四六分、埼玉の自宅でNHKの国会テレビ中継を見ていた。これまで経験したことのない長く大きな揺れに、食器棚の扉を押さえながら居間のシャンデリアが落ちるのではと恐怖にとらわれた。やがてテレビの画面に映し出される車や家屋を呑み込みながら押し寄せてくる大津波のライブ映像に言葉を失った。そして東日本沿岸を襲った大惨事を目の当たりにして悪夢であって欲しいとひたすら神に救いを求めていた。

我に返って郷里宮城の父や妹の安否が心配になり電話するも通ぜず、メールもエラーになるばかり、無事が確認できたのは深夜になってからだった。時間とともに想像を絶する被害状況が明らかになり万を越す尊い命が奪われ、家族や家を失った数十万人の被災者が寒さと瓦礫の中に放り出され呆然と立ち尽くしていた。

三年前に松島ハーフマラソン大会でお世話になった野蒜海岸のペンションオーナーはどうしただろうか。被災前月のいわき市サンシャインフルマラソン大会で大漁旗を振って応援してくれた漁港の男たちは大丈夫だったろうか。ゴールでレイを掛けてくれたフラガールのお姉さんたちはご無事だろうか。これまでお世話になった人たちの笑顔が瞼に浮かんできた。

【訃報と密葬参列（同年四月三日）】

被災五日後にようやく電気がついたと田舎から明るい声が聞こえた直後に、妹の義兄が津波の犠牲になったという悲報が届いた。あの悲惨な映像の中で親しき人が犠

牲になっていたとは、なぜ、どうして、俄かには信じられなかった。あの日に東京から岩手県大槌町の仕事場に戻っていたのだという。なんと不運なことか。免許証で身元が分かったというが、何日も冷たい海の瓦礫の中に眠っていたのだろうか。妻子を残してさぞ無念だったろう。これまで新聞やテレビの映像に同情を寄せてはいたが、自分も被災者親族のひとりになっていることを思い知らされた。

四月二日に義兄の密葬参列のため、東京駅から高速バスで仙台に向かった。まだ東北新幹線が復旧しておらず、高速バスだけが唯一の交通手段である。埼玉からいったん東京駅に出ると、田舎の親元に届ける生活物資だろうか、ダンボール箱を段積みに背負う若者もいて、バス内は静かながら郷里への熱い想いに満ちていた。東北自動車道を六時間程で着いた深夜の仙台市は、いたるところ工事中の赤灯が点滅していた。

宿泊した駅前ホテルで余震に遭遇、被災地に来ている現実に戦慄した。翌朝、密葬まで時間があり仙台駅周辺を散策したが、美しい歩道に波打つ箇所が多く、昔懐かしい駅前デパートの外壁の一部が剥離して休業中、四月五日開店予定の貼り紙に少しほっとした。駅前の名掛丁商店街の入り口に「私たちは負けない！」と書かれた大きな横断幕が張られ、元気を取り戻そうとする仙台市民の強い心意気が伝わってきた。よく知ったおもちゃ屋さんの店頭にも仙台弁で「がんばっぺ宮城」と手作りの小さな看板が掲げられ、思わずホロリとしてしまった。

いつもは素通りしてしまう仲見世奥の「三瀧山不動院」で犠牲者の鎮魂と一日も早い復興を祈願した。東一番丁商店街に出ると、ヤマハ楽器店前に人だかりができており、仙台フィルメンバーによる復興コンサート「鎮魂そして希望」の初日に偶然出くわした。オーボエとホルンが奏でるピアノ五重奏の美しいメロディに、これから密葬に向かう傷心が少なからず癒された。

義兄の密葬は犠牲者があまりに多く火葬場が取れず三週間も待たされ、親族だけの寂しい野辺送りとなった。広い葬祭場で葬儀が流れ作業のように施行されて、被害の甚大さを改めて思い知らされた。宮城県南部の実家が足の踏み場もないほど家財が散乱してとても泊まれる状態になくやむなく仙台駅裏のホテルに連泊した。

翌朝早く欅並木の定禅寺通りを散歩したが、四月だというのに気温零度と肌寒く、東北の春はまだまだ遠いようだ。仙台駅前から新宿行きの高速バスに乗ると、家族に見送られる若者は新大学生だろうか、被災した郷里を後にする彼の目が潤んでいたように見えた。車窓に流れる工事中の街並みに合掌、仙台・宮城そして東北の一日も早い再生を祈った。午後二時過ぎに新宿西口に着くと、行き交う東京人の表情は明るく、ぽかぽか陽気で桜の花も二分咲き、東京に春はもう来ていた。

【四国からのボランティアさん（同年四月一七日）】

密葬の二週間後に本葬が行われた。五日前にようやく東北新幹線の東京・福島間が運転再開され、福島駅で東北本線各駅停車に乗り換えていると、両手に大きなバックを三個もぶら下げた作業服のオジサンが「この電車、仙台まで行く？」と乗り込んできた。周りの乗客の「白石までですよ」という返事に「ん？白石？」と戸惑った様子に「白石で仙台行きの電車に乗り継げますから大丈夫ですよ」と隣の席を勧めた。

彼が「被災地に行きたいがどこに行ったらいいかね」と話しかけてきた。テレビに流れる悲惨な津波の映像に、被災地のどこでもいいからボランティアに行きたいと、会社の休暇を取り四国の香川からやってきたという。手に折りたたみの日本全体地図だけを持ってである。東北が初めてという方向音痴の彼に、手近な被災地として石巻を紹介したが、手持ちの日本地図に石巻の地名がなく、仙台からのルートを指差し説明するも話がチンプンカンプン、これで現地に行って本当に大丈夫なのか、心配になってきた。

仙台駅で下車、ＪＲ仙石線の乗り場まで同行したが、復旧工事中で途中の松島にさえ行っていないという。電車を断念してバス便を探し石巻行きバス停まで連れて行くと、山のボッカのように救援物資を担いだ若者が並んでいた。彼らも被災地へボランティアに行くのだろう。頭の下がる思いである。葬儀の時間が迫っており、東北の地理に疎く鉄砲玉のような彼が心配だったが、後ろ髪を引かれながら「気をつけて頑張ってね。よろしくお願いしますね」と別れた。

あの悲惨な津波の映像に誰しも同情は示しながら、四国から未踏の東北へ単身でボランティアに駆け付ける行動まで起こす人は、若者ならともかく中年で会社を休んでまで思いを遂げようとする人は、稀有ではないだろうか。彼の熱い思いに触れて昂揚している自分を感じた。そして、日本は素晴らしい、と思った。

【指揮者ズービン・メータ氏（同年三月二六日）】

大震災から二週間ほど経った三月二六日、我がコーラス部を指導されているテノール歌手与儀巧先生から「突然ですが、東京・春・音楽祭の『ローエングリン』が中止になり、代わりにズービン・メータ氏が急遽来日して『第九』をやることになりました。メータ氏とＮ響がチャリティー公演の趣旨に賛同して、無報酬で引き受けられたとのこと、もし都合がよければお越しください」とメールがあった。

コーラス部は宮城県出身者で構成する団体「みやぎ夢フォーラム」の部会で、与儀先生の勧めで一〇月の「八王子第九演奏会」に参加すべく「第九合唱」の練習に励

んでおり、『第九』が生で聴けるとあってコーラス部全員で聴きに行くことになったが、現代の巨匠といわれウイーンフィルのニューイヤーコンサートを指揮するズービン・メータ氏について調べるうち、大震災に対する氏の熱い心と言動に大きな感銘を受けた。

大震災の日にメータ氏はフィレンツェ歌劇場を率いて来日していたが、大震災による福島原発事故の影響を危惧するフィレンツェ市長の帰国命令に、公演日程半ばで離日することになり、日本を去るメータ氏は、報道陣に「日本の友人たちのために何も演奏できず、去るのは悲しい」と涙しながら「音楽の力で人々を励ます場面が絶対に訪れると信じている」と、危機的状況における芸術の重要性を訴えたという。

いったんイタリアに戻ったメータ氏は、原発事故の恐怖に外国人指揮者の演奏会のキャンセルが続く中、厳しい苦境に立たされている人々を勇気づけたいと一ヶ月も経たぬうちに約束どおり単身で再来日、N響をバックに『第九』の指揮を取ることになったのである。そしてN響アワーのHPにメッセージを寄せてきた。「世界中が日本の皆さんの勇気、不屈の精神に心から敬意を表しています。惨劇の中、自己統制を保ち、前進しようとしているその姿に感動を覚えています。今以上に強い日本になることを世界中が願っています。日本は世界の模範となるでしょう。」

【N響チャリティーコンサート（同年四月一〇日）】

再来日したズービン・メータ氏が指揮する演奏曲は、ベートーベン交響曲第九番「合唱付き」である。実は、大震災があってから、被災地宮城県出身の我々コーラス部の誰もが、一〇月の八王子演奏会で『第九』を歌うことに、抵抗を感じていたのである。故郷が未曾有の被災に苦しんでいる時に、『第九＝歓喜の歌』を歌っている場合なのだろうか、不謹慎ではないだろうか、と。

しかしメータ氏は、この悲惨な時に『第九』を選んだ。なぜ今『第九』なんだろうか。いったい『第九』とはなんなんだろうか。改めて歌詞を読み直してみた。

Deine Zauber binden wieder, was die Mode
streng geteilt;
あなたの奇しき力は　時の流れが　厳しく
切り離したものを　再び結び合わせ
alle Menshen werden Br?der, wo dein sanfter
Flügel weilt.
あなたの柔らかい翼の　留まるところ
すべての人びとは　兄弟となる
（右の歌詞と訳文はカワイ出版の楽譜より）

第四楽章のクライマックスで「神の愛の力によって人はひとつになって救われる」と高らかに歌っていた。この歌詞は、シラーの詩作品「自由賛歌」がフランス革

命直後にラ・マルセイエーズのメロディでドイツの学生に歌われていたのを、詩を書き直した「歓喜に寄す」にしたところ、これをベートーベンが『第九』の歌詞に引用したといわれる。

ベートーベンは、フランス革命の理念「自由・平等・友愛」に強く共感、革命後の暗澹たる時代に「愛の名のもとに人類はひとつになれ」と、人類への普遍的なメッセージを込めたという。『第九』は、苦難の時を乗り越える勇気と励ましを与える愛の歌であり、今こそ歌われるべき歌だったのだ、少しも惑うことはない、一〇月に郷里の被災地に向けて『第九』を声高らかに歌おうではないか、コーラス仲間に一斉メールで呼びかけた。

四月一〇日、上野公園の東京文化会館ロビーは、異様なまでの熱気に包まれていた。興行決定から公演まで一〇日余りしかなかったのに、二千余席の大ホールはほぼ完売、正式な写真入り色刷りのポスターが間に合わなかったのか、会場入口に急拵えの簡素なポスターが一枚貼り出されていた。

コーラス仲間一五人が三階席に勢揃いしてまもなくまずN響団員が入場、その後方に約二〇〇人の東京オペラシンガーズが着席、その中に与儀先生が見えた。次いで登壇した指揮者ズービン・メータ氏が静かな口調で被災者への追悼とお見舞いのメッセージを述べられ、そして自ら観客に向かって黙祷を呼びかけられた。

プログラムにないバッハの「G線上のアリア」で演奏が始まった。ゆったりと美しい旋律が流れた。大震災で被災された人たちに向けられた深い愛と鎮魂の思いに溢れていた。がっしりした体躯に似合わないタクトの静かな動きに、メータ氏の優しさと強い意思が感じられた。悲惨な映像とさまざまな思いが交錯して感極まり涙腺が緩んでいた。

アリアが終わり一瞬の静寂の後、『第九』第一楽章のターン・タターンのメロディが静かに始まった。いま自分が歴史的な演奏に立ち会っている興奮に身震いした。レコードやCDで聴き慣れた筈のメロディが、全く別物のように新鮮に心に響いてきた。メータ氏の丁寧に思える指揮棒の動きに吸い寄せられるように三階の座席から腰を浮かせ身を乗り出していた。

やがて第三楽章の瞑想的な調べを打ち砕くような強烈な連打音で第四楽章は始まった。会場に染み渡る様なチェロの重厚な音色に聞き惚れていると、やがて歓喜のテーマが静かに流れ始め、そして大きな響きとなり、バリトンソロによって合唱の口火が切られ、四人のソリストと二〇〇余人の合唱団による「歓喜の歌」がオーケストラの壮大な演奏に乗って館内の全てを覆い尽くしていった。私も日下練習中のドイツ語の歌詞を口ずさみながら一緒に歌っていた。そして『第九』のクライマックスは速いテンポで一気にエンディングした。

聴衆が総立ちとなり感動と感謝の拍手喝采が館内を包んだ。メータ氏が欧州の過剰な原発風評に屈服することなく再来日して被災地支援のため指揮を取られたことを今日の聴衆の誰もが知っていたのである。メータ氏は両手を合わせ両手を胸に交差しお辞儀を繰り返し、インド人らしい敬虔な姿は神々しささえ感じた。

今日のこの素晴らしい演奏を、悲惨な状況で苦しむ被災地の皆さんに直に聴かせてあげたい、届けてあげたいと思ったのは私だけではないだろう。音楽は、苦難の時こそ人を慰め、生きる素晴らしさ、悲しみ、切なさ、喜びを呼び戻してくれる芸術といわれる。今日の演奏はまさに音楽の持つ偉大な力を教えてくれた。今日の演奏の熱い想いは間違いなく遥か遠く離れた被災地に届いていることだろう。

会場出口で演奏者全員が募金箱を持ち被災地への義援金寄付を呼びかけていた。いま日本中が被災者支援に立ち上がっている。我々宮城県出身のみやぎ夢フォーラムも自分たちの力で復興支援のチャリティーコンサートを始めようとこのとき皆で誓い合った。

【一日千本桜マラソン(平成二四年四月二一日)】

マラソンを始めて桜の時季には桜名所のマラソン大会を走ってみたいと、平成二〇年に行田市のさきたま古墳公園、二一年に幸手市の権現堂堤、二二年に小山市の思川桜堤を走り、二三年に郷里宮城の白石川堤一目千本桜を走る第一回マラソン大会にエントリーした。

ところが開催の前月に東日本大震災が起こり、開催地の宮城県柴田町のライフラインが全て止まって、会場に予定されていた自衛隊駐屯地も全国から集まる自衛隊救援車両の集結地となり、とてもマラソン大会を開催できる状況になくやむなく中止となった。そして大会中止を知らせる葉書の末尾を「私たちは今から《一目千本桜二〇一二》の実現という目標を持って故郷の復興に動き出します。ご支援ください。」と結んであった。

翌二四年初め「東日本大震災から一年、お約束通り開催できるようになりました」と開催案内が送られてきた。未曽有の災害からの復興も緒に就いたばかりだが、自然は間違いなく美しい桜の季節を届けてくれる。大津波に襲われ瓦礫の中に朽ちた大木に可憐な桜の花が芽生え、被災地の人たちの心を和ませ生きる希望の力になっているという。桜は日本人の心、郷里の桜を愛でながら一日も早い復興を支援したいと即エントリーした。

郷里の白石川堤「一目千本桜」は『日本さくら名所百選』に選ばれ全国的にも有名だが、実は一人の熱い望郷の念で植えられたものである。富豪だった実家が没落して一五才で単身上京した少年「高山開治郎」が、丁稚奉公から苦学力行して事業に成功し財を築き、郷里の白石川護岸工事を耳にして、上京まもない不遇な自分を元気

付けてくれた飛鳥山のような桜並木にしたいと、桜苗木一二〇〇本を持って帰省、白石川堤に自ら植樹したという。高山氏の郷里への熱い思いが八〇余年の時を経て県内外からの観光客を楽しませてくれている。

一日千本桜マラソン大会が開催される柴田町船岡は、昭和四五年のNHK大河ドラマ《樅ノ木は残った》の舞台となった町でもある。日航よど号事件や三島由紀夫の割腹事件、大阪万博のあった年で、山本周五郎が伊達騒動を題材に史実では悪臣の原田甲斐を幕府の陰謀から伊達藩を救った忠臣に描いた歴史小説がドラマ化され、主人公原田甲斐を平幹二郎が、甲斐の愛した二人の女性を栗原小巻と吉永小百合が演じ、わが郷里を全国に知らしめてくれたことが懐かしく思い出される。

マラソン大会当日の早朝、埼玉の自宅を出立した。宮城県境を越えると、頂きに残雪の蔵王連峰の麓を流れる白石川がいつになく水量豊かで美しい。無人の実家に立ち寄り自転車を持ち出し、大震災の三ヶ月後に逝った父を墓参して帰省出走を報告、国道四号線をマラソン会場の隣町船岡に向かい自転車を走らせ、町境にある原田甲斐の居城・船岡城址公園に立ち寄った。

小説の題名になった樅ノ木の立つ展望デッキから眼下の白石川対岸にある東禅寺で、原田甲斐の母慶月院の七回忌供養塔が最近発掘されたが、慶月院は政宗が秀吉に賭碁に勝って貰い受けた側室「香の前」との子で、「吾が子何の不義ぞ」と五〇余日を絶食して自害、その七回忌法要が旧家臣らによって対岸に船岡城の見える東禅寺で密かに営まれた。なぜ母は絶食死をしたのだろう。息子を逆臣に仕立て原田家を断絶させた伊達宗家への抗議の死だったのではないだろうか。

船岡町並みの南側に広がるマラソン会場の船岡自衛隊駐屯地は、仙台湾から一二キロ内陸にあり、宮城県南部の被災地救援基地として、行方不明者の捜索・遺体の収容・物資人員の輸送・瓦礫の撤去など大きな役割を担っていた。会場ゲートで身元確認のため参加通知葉書の呈示を求められ、やはりここは軍事基地なのだと改めて思い知らされたが、今日は基地の一部が開放されて自衛隊員と町民ボランティアが仲良く笑顔で我々を迎えており、被災地救援活動を通じて互いの絆が深まったことだろう。今日は銃や戦車ではなくスコップや給水車で国民を守ってくれた自衛隊に素直に感謝したい。正門通りに満開の桜並木が美しく咲き誇っていた。

昨年企画された念願の第一回大会は直前の東日本大震災で中止になったが、関係者のマラソン大会への熱い思いと全町民の支援が結実して、復興元年として大会開催が実現できたという。大会冊子の中で実行委員長が「私たちの東北は昨年の大震災で大きな空白ができました。その故郷を復活させ、にぎわいを取り戻すために、もっともっと住民の働きが元気が必要になると思います。私

たちはこのイベントを契機に故郷復活を目指し以前にも増して心温まる故郷を作り出すことを宣言して歓迎の言葉に代えます」と語っていた。苦難の中から立ち上げた町民手作りの大会に参加できることに感謝しながら、大いに走ろうと心に強く決めた。

今日のウエアは濃緑地に白字で「がんばろう●日本！」とプリントされた日本テニス連盟の復興支援オリジナルシャツである。古希を迎える歳で胸に赤い日の丸は気恥ずかしいが、胸のロゴメッセージを発信して郷里を応援しよう。頑張ろう東北！　頑張ろう宮城！

軽く腹ごしらえして体育館を出ると青空が広がりマラソン日和である。運動場を軽く走りながら集合場所に向かった。一〇キロ組は総勢一二〇〇人、目標タイム別に整列するのだが、先頭の三五分台のプラカードに並ぶ選手が誰もおらず「遠慮せずに前に出て下さい」というマイクがいかにもローカル的で微笑ましい。

一二時四〇分にスタート、少し前の方に位置取りして一月の皇居ランニングフェスタの記録を更新する意欲的な走りを狙ったが、身体が重く速い流れに乗るのがやっと、これで一〇キロ走り切れるのか不安になってきた。一ケ月前の名古屋ハーフマラソンが終わってからの走り込み不足が悔やまれたが後の祭りである。

運動場の外枠を半周した一キロ五分二八秒はもうひとつだ。正門からメイン通りの桜トンネルを走り抜ける爽快感にようやく身体が慣れてきた。運動場の外枠二キロを二周して基地内の大回りコースに入った。

炭鉱のボタン山のような石切山を左手に、砂利道の走り辛い道路になったが、トレイルランのような変化あるコースが楽しく感じられてきた。五キロ地点で二五分一秒は、かつてない快記録ではないか。もしかしたら五一分台も夢でないかもしれない。五キロの給水をパスして新記録に挑戦しようとしたその時、沿道の係員から冷たい声援が浴びせられた。「ここから二つ、坂があるよ、三つ目が一番きついよ、頑張れ！」。

今日は平坦コースと思っていたが、苦手の坂があるとは。「一の坂」の標識がすぐ見えてきた。確かにキツイ坂だが絶対歩くまいと言い聞かせた。誰もが走り続けて、歩く人など誰もいない。負けられない。三分程かかったが、急坂を駆け下りるとすぐ「二の坂」が現れた。さすがに堪えたが、まだ皆が頑張っていた。歩くのと変わらない速さだが、走ろうとする気持ちだけは挫けなかった。ついに上り切り達成感を味わい一気に駆け下りペースダウンしたタイムロスの取り戻しにかかった。

やがて緩やかな山道が再び急な上り坂に転じた。「三の坂」の標識が現れた。これが一番きついのか。今日は絶対歩かないぞ、地面と睨めっこしながら、歩き始めたランナーを追い抜いたところで大差ないのだが、頑張ることに意義を見出していた。ありったけの力を出し切り

限界に挑戦、坂の頂点に達してホッとした瞬間、「まだ坂があるよ」という係員の声に張り詰めていた気持ちが折れてしまった。まだあるのか、もうこれ以上頑張れない、もう無理だ、ついに足を止めてしまった。確かに上り坂は続いていたが、緩い一〇歩ほどですぐ下り坂に転じた。これだけならまだ頑張れたのに、と悔しさが込み上げてきた。それにしてもこの激坂はなんなんだろう。自衛隊員のスパルタ鍛錬用コースなのか。この歳で自衛隊の鍛錬に挑戦させられるとは。

最後の急坂を駆け下り、残り三キロに全てを賭けた。モチベーションを上げようと抜き去るターゲットを求め、前方の紫ウエアの女性ランナーを目標にピッチを上げた。追い付いて競り合いを繰り返すうち、八キロ手前の給水所で紫女が足を止めた。しめたと給水をパスして一気に差を付けたが、紫女はすぐ追いついてきた。

八キロのタイムが四三分五二秒、残り二キロをキロ五分三〇秒で走りきれば五五分は切れる。ここで同年輩の青シャツ男が並んできた。先を譲るわけにはいかない。紫女と青男との熾烈な戦いが始まった。やがて正門からの桜トンネルを沿道の声援を力にゴールに向かいデットヒートを繰り返し、ついに二人に競り勝ちフィニッシュゲートを走り抜けた。タイムは五四分二三秒、砂利道と苦手な坂道を考えればよく頑張ったと思うが、あの三の坂で歩いた一〇歩だけは悔いが残った。

記録証の順位は全体の五一〇位、頑張った自分への褒美に広場の出店コーナーで串焼きを奮発した。着替えを済ませ、会場整理する自衛隊員や町民ボランティアさんに感謝の言葉を返しながら会場を後にした。

帰路の自転車ルートは花見客で賑わう白石川堤の一目千本桜である。今日の好天で開花は更に進んだようだ。走り終えた疲労感と爽快感が交差し、暖かな春の陽差しを受け、約四キロの桜並木トンネルを『第九』をドイツ語で歌いながら久方振りの郷里の春を楽しんだ。

【わたり復興マラソン大会(同年一一月一一日)】

東日本大震災から一年半、首都圏に集う宮城県出身者で組織する「みやぎ夢フォーラム」で、これまで四回、復興支援チャリティーコンサートを開催して被災した子供達の教育のため義援金を宮城県東京事務所に届けてきたが、実家近くで大きな津波被害のあった亘理町で復興マラソン第一回大会が開催されるという情報に宮城県出身ランナーとして参加しなければと早速エントリーした。しかし、被災のどん底から立ち直ろうとする亘理の人たちに正面から向き合えるかどうか、実のところ自信がなかった。海岸線を乗り越えて仙台平野のビニールハウスや住宅や車を呑み込んで行った大津波の航空映像がいまだに脳裏に浮かんでくる。

大会開催地の宮城県亘理町は、阿武隈川が太平洋に注

ぐ河口に位置する町で、温暖な気候を利用した果樹や花卉栽培が盛んで、特にイチゴは東北第一位の出荷量という。しかしこの海岸線に沿った平坦な立地が災いしたのだろう、昨年の東日本大震災による大津波で、町の面積の四七%が浸水し荒浜など沿岸地域は壊滅的被害を受け、五六〇〇棟の住宅が全半壊、町民の死者・行方不明者は三〇六人に達したという。

大震災から五ヶ月後の盆帰省の折に田舎の友に亘理地区を車で案内してもらったが、草むらにコンクリートの基礎だけが残る荒地を前に、被災前を知る友が往時の街並みを語りかけてくれるが、私にはどうしても町のありし姿が浮かんでこなかった。建物の瓦礫が無いのは、重機で撤去したのではなく津波に持ち去られたのだという。自然の力を改めて思い知らされたのだった。

自宅に送られてきた「わたり復興マラソン大会」の開催案内に「亘理町では、東日本大震災で大きな被害を受け、現在復旧・復興活動に取り組んでおります。爽やかな風を受けながら、現地の状況を生で見ていただき、家庭や職場などで話題にしていただければ幸いです」とあった。あの言語に絶する津波の犠牲者の彼らが、同情してくれとか、何かを要求してくるとかいうのではなく、頑張っている自分達の姿を見てくれと叫んでいたのには驚かされた。彼らの不安は、自分たちのことが忘れられることなのだ。彼らの側に寄り添って上げることが我々に今、求められていることなのだ。現地に足を踏み入れて復旧復興に取り組む彼らと共にいてあげること、そして彼らと共になにかすることが、彼らを励ます本当の支援なのかもしれない。

前日の軽井沢尺八合宿から直行帰省となった。北陸新幹線から大宮で東北新幹線に乗り換え、宮城県の実家にかなり遅く着いた。早朝に父母を墓参、東北本線の岩沼で常磐線に乗り換え、太平洋沿岸の亘理駅の一つ手前の逢隈駅に途中下車した。マラソンのスタートまで時間があり、駅裏手の陸奥国亘理郡衙（役所）跡といわれる「三十三間堂官衙遺跡」に向かった。阿武隈川河口の南岸高台にあり、郡庁院と倉庫群の礎石が発掘され、古代律令制下で徴税を主務にした九～一〇世紀前半の政庁跡だという。亘理権太夫と称した藤原経清の父か祖父がこご郡衙の郡司に赴任していたのだろうか。

藤原経清は、北に一五〇キロの奥六郡（岩手県中央）に勢力を持つ蝦夷安倍氏の娘婿となり、前九年の役で朝廷軍の源頼義・義家に惨殺され、妻が敵将清原氏に再嫁して連れ子の清衡が、後に清原氏の内紛に乗じた後三年の役で奥州の覇者となる。平泉王国のルーツかもしれない礎石残る丘でしばし古代ロマンの息吹を感じた。

逢隈駅から常磐線で次の亘理駅に下車した。駅周辺はすっかり平常の生活に戻っていたが、常磐自動車道を潜って海岸側に出ると、周囲は被災当時のままである。無

惨な津波の爪跡が広がり、瓦礫が綺麗に撤去された荒地の中に数軒の建物が点在する光景は異様だった。

仙台湾沿岸を襲った高さ一〇Mの大津波が、海岸線から西に二キロを南北に走る常磐自動車道が防潮堤の役目を果たし、西側の浸水被害を減衰させたが、東側は自動車道で遮られて増幅した津波によって壊滅的被害を受けたという。昨年八月に友に案内されて来た時と被災状況はあまり変わっていなかった。これはどういうことなのか。亘理駅からシャトルバスに同乗していたマラソン参加者の誰もが窓外を食い入るように見つめ、車内に声を潜めた嘯きとため息が漏れていた。

一〇分程で会場の荒浜中学校に到着、アナウンスの快活な声と子供たちの明るい歓声が耳に飛び込んできた。開催案内にあった復旧から復興に向けた元気な姿を垣間見た思いだったが、受付テントの背後に建つ荒浜中学校の無残な姿を前に立ち竦んでしまった。校舎の一階の窓が全てブルーシートで覆われ、二・三階のガラスは全て破損、校舎の周りに瓦礫を残す廃墟同然の姿は余りに痛々しい。子供達が廊下を走ったり教室で喧嘩をしたり先生が怒鳴ったり、そんな喧騒とした物音が何一つ聞こえてこない、不気味な静けさである。

受付でゼッケンと一緒に「いちごのストラップ」が配られたが、荒浜地区まちづくり協議会の皆さんの手作りだという。赤い毛糸で手編みのイチゴの中に小さい鈴が入っていた。亘理町は東北一のいちご出荷地である。大津波がビニールハウスを押し潰していく映像がまた浮かんできた。いちごを栽培するはずの手で、このいちごのストラップをどんな思いで手編みしたことだろう。思わずストラップを握り締めていた。

やがて開会式に先だち、荒浜小学校児童による「荒浜ぶち合わせ太鼓」の演舞が始まった。校舎が被災して五キロ先の逢隈小学校に間借りして勉強しているという子供達の躍動感ある連打音を耳にしながら、彼らを励まそうとやってきたのに反対に彼らに元気を貰ってしまったなと、改めて子供達の逞しさを思い知らされた。

町長は開会挨拶で「全国からの支援に対する感謝の思いを込め、心ひとつに復興に向けて一歩ずつ前へ歩み始めている元気な姿を発信するため開催したところ全国から一四〇〇名の参加をいただき大変うれしく思っております」そして「一日も早く復旧復興を進め、風光明媚な鳥の海海岸を走るマラソンを復活したい」と結んでいた。この時、参加してよかったと心底思った。

今日のウエアは当然に「がんばろう●日本」の復興支援シャツである。着替えを済ませカメラ片手に学校周辺を軽く走ってみた。海岸線の松林が大津波に襲われ、辛うじて残った孤高の一本松が悄然と立っていた。荒浜中学校を見返ると、周りが津波にさらわれて何もない荒野の中に校舎だけがポツンと取り残されている。周りの住

宅街が全て流され、コンクリートの基礎だけが僅かに草むらに覗いていた。学校裏の水田地帯は一Mほど地盤沈下して沼地と化し、この一年半全く手付かずだという。工事用の重機の姿も見かけない。国は何をしているのだろう。先程の町長さんの泣き言を言わない健気で謙虚な大人の挨拶に頭の下がる思いである。

会場では一一時からの五キロレースが始まり、やがて親子ペアがスタートした。親が子供に引っ張られる微笑ましい光景は、いずこのマラソン大会も同じだが、なぜか眼の前で繰り広げられる情景に涙が溢れてきた。背後に迫る大津波から手を取って逃げる親子の姿と重なって見えたのである。しかし子供達や親御さんたちの明るい声にはそんな暗さが微塵もなく、被災地の人たちの屈託のない笑顔と心の強さに感銘を受けた。

昨年八月に亘理の被災現場を車で案内してくれた友人二人が応援に駆けつけてくれた。久方振りの応援付きマラソンである。頑張らなくちゃあ。応援してもらう場所を打ち合わせて一〇キロレースの列に並んだ。総勢七六〇人がスタート、かなり速いペースである。会場出口に立つ友二人に手を振る余裕のないまま一気に阿武隈川堤防に向かった。被災の前なら住宅街の中を走り沿道の住民が小旗を振って応援してくれるだろうに、住宅もない住民もいない廃墟の中をただひたすら走るのは異様だった。これが被災地マラソンなのだろう。

堤防手前に荒浜小学校がポツンと立っていた。四階建の二階まで津波が浸水、一面の黒い海の中に孤立した校舎の屋上に逃れた児童や住民三二〇人が、二四時間かけてヘリに救出されたテレビ中継が思い出される。子供たちの恐怖は如何ばかりだったろう。先程の小学生達の打ち鳴らす太鼓の連打音が耳元で響いていた。

六M程の高さに修復された阿武隈川の堤防に沿って上流へ約四キロの直線コースに入った。津波が遡上する映像で見た川面を見ることはできないが、見上げる様な堤防を乗り越えて左手に広がる街並みや田畑を呑み込んでいった自然の力に改めて恐怖を抱いた。

亘理大橋の下を潜ると左手に「塩害除去中」の立て看板が立ち、津波の海水で稲作ができなくなった水田が無限に広がっていた。重機は何台あったろう。気の遠くなるような現状である。国は本気でやろうとしているのだろうか。少なくともここ数年の田植えは絶望的、復興どころか、復旧すら進んでいないではないか。

やがて塩害の水田地帯から高須賀集落に入ると、高台だったのだろう、家並みが残って、老人や子供たちの元気な声援が寄せられた。「みんな無事だったんだね。よかったね」「応援ありがとうね」「頑張ってね！」

走りの方も快調である。五キロの折り返しが二六分一〇秒、坂のない平坦地だから、五二分前半のタイムは可能かもしれない。折り返して後続を測るとほぼ真ん中辺

である。再び高須賀集落の声援を受け、阿武隈川の堤防沿いに広がる塩害の水田を右手に、先行ランナーを追い抜き始めた。ターゲットを定め追い付き並走し一気に抜き去る、キロ五分二〇秒台の快走が続いた。

七キロ付近から追い上げてきた足音が後ろにぴったり付いた。どうも私をペースメーカーにしているようだ。私のペースが落ちたら追い抜きにかかる気配に、少しピッチを上げるとすぐ付いてきた。亘理大橋を潜ってまもなく鳥居の奥に社殿が見えていた。阿武隈川河口の守り神で、亘理町の慰霊祭が行なわれた川口神社である。津波に襲われながら辛うじて倒壊を免れたようだ。走りながら多くの犠牲者の鎮魂を祈った。

沿道にあるはずの声援もなく塩害に侵された被災地の中をただひたすら走る静けさは不気味である。あと一キロの標識で四七分三九秒、かなりきつくなってきたが、なんとか五二分台でゴールしたい。荒浜中学校裏の角で応援に来てくれた友がカメラを構えていた。片手を上げ応援に応えている隙に、先ほどから後ろに付いていたランナーが前に出た。若い女性だった。大人気ないと思ったが、追走してゴール直前で前に出た。タイムは五二分三八秒、ラスト一キロが四分五九秒、順位が四〇八位、我ながらよく頑張った。戦いを終えた彼女と笑顔を交わし健闘を讃え合った。

選手接待のテントで、地元のおばちゃんたちが明るい声で参加賞の「豚汁」と「はらこめし」を振舞っていた。あの震災直後の炊き出し光景もこんなだったのだろう。整然と待ち並ぶ日本人に全世界から称賛された報道が思い出された。おばちゃん、あの時は大変だったね、雪の舞う寒空だったね。今日はありがとうね。

亘理名物「はらこめし」は鮭の煮汁で味付けしたご飯の上に鮭の切り身とイクラを敷き詰めた郷土料理、家族でよく食べに来たものだが、あの店はどうしたかな、津波にやられたらしいよ、そんな会話をしながら、応援の友たちと縁石に腰かけて美味しい「はらこめし」を堪能、ゴールに向かう後続ランナーに声援を送った。

帰途の新幹線内で、被災地の復興プランを考えてみた。荒浜地区は災害危険区域に指定され住めなくなったという。本当にそれでいいのだろうか。確かに、防潮堤をいくら高くしてもそれを越える想定外の津波は有り得る。と言って仙台港に面する広大な平野の住宅全て高台移転などとても出来ない。漁業関係者も農園業者も職住近接を望むだろう。となれば、海岸付近に一時避難できる高層施設を建築し、更に幾重もの防潮堤で津波から避難する時間を稼いで高台に逃げる自動車道を拡張整備するなどで、海岸被災地域に居住を認めることはできないものだろうか。被災者の立場に立った復興プランを一日も早く進めて欲しいと願うばかりである。

『時評家　新明正道』（評伝その九の一）

―ベルリンはなおワイマール文化の真っ盛り―

山本鎭雄

一　新明正道著『ドイツ留学日記』（一九二九年四月―三一年五月）

一九二九（昭和四）年三月一日、文部省は東北帝大法文学部の新明正道助教授にたいして「社会学研究ノ為満二年間独逸国へ在留ヲ命ズ」、同月三十日に「社会学講座分担ヲ免ズ」と発令した。治安維持法下の文部省は「左傾教授」と見なすと、「いやがらせ」をして辞令公布を遅らせた。そのため、新明は慌ただしく仙台を出発し、東京にしばらく滞在した（四月六日）。その後、新明は神戸港で家族・親族や多くの知人の見送りを受け、春なお遠きシベリアを列車で横断し、留学地ベルリンに到着した（四月二五日）。

新明は東京を出発した時から帰国する迄、断絶した個所もあるが、ほぼ毎日のように大学ノートに留学日記を克明に記述している。晩年の新明はその一部を浄書して、ベルリンを発ち、ケルンとキールに滞在した日記「ケルン大伽藍の空のもとで」を、最後に在職した創価大学の紀要に発表した（『ソシオロジカ』、一九八三年一二月）。再びベルリンに戻った日記「ベルリン大学内外」（東南ドイツ・ウィーン旅行記を含む）を発表した（八四年一二月）。新明は市民も自由に聴講出来る新規フランクフルト大学でマンハイム教授の満員盛況の講義を聴講し、大学付属のフランクフルト社会研究所でホルクハイマー教授やグロースン教授などが主宰する演習に出席した日記「フランクフルト大学内外」を発表して、他日『ワイマール・ドイツの回想』を上梓したいと予告した。

ところが、「フランクフルト大学内外」は散逸した。この日記が公表されたら、ワイマール共和国の末期のフランクフルト大学とフランクフルト学派の第一世代の動向を伝える貴重な記録となったであろう。その上、新明自身の急逝によって、ついに同書の出版は実現しなかった。逝去して四か月後に、ご遺族の家永登氏によって編集され、上記の二編の日記のほか、『歐洲の危機』（日本評論社）から六編、ベルリン留学の回顧、さらに晩年の「遥かなる追想」と「平和思想への志向」と題する二編のエッセーを収録し、新明正道著『ワイマール・ドイツの回想』が刊行された（恒星社厚生閣、八四年、新明綾発行）。

その後、ドイツ留学時代の未公開の日記がご遺族のご長女の家永美夜子夫人によって浄書され、初め個人研究年誌『新明社会学研究』（新明社会学研究会編、代表・田野崎昭夫）の第二・三・四号（九二～四年）に連載し、すでに『ワイマール・ドイツの回想』で公表された二編の日記を収録し、『ドイツ留学日記　一九二九―三一年』（山本鎭雄編、家永美夜子・校閲、時潮社、一九九七年）が上梓された。

新明著『ドイツ留学日記』は、東京を出発し、シベリアを横断して、①「伯林（ベルリン）到着まで」（一九二九年四月六日―四月二四日）、②「伯林日記　第一」（四月二五日―六月二四日）、③「伯林日記　第二」（六月二五日―八月三〇日）、④「伯林日記　第三」（九月一日―一〇日）、遺著『ワイマール・ドイツ回想』に掲載された⑤「ケルン大伽藍の空のもとで」（一一月一一日―一二月一五日）、⑥「ベルリン大学内外」（三〇年一月一日―九月二四日）、さらに⑦「ヨーロッパを旅して」（三一年一月―三月一一日）、⑧「ヨーロッパを去りつつ」（三月二八日―五月八日）として、いわば時系列的に収録されている



セーヌ川を遊覧船で
遠景はノートルダム大聖堂



パリ滞在
ノートルダム大聖堂の
テラスで

二　ヨーロッパを旅行し、帰路につく

新明はベルリンからの帰路、アムステルダム、ロンドン、ブリュッセルを旅行し、パリに到着した。パリでは薩摩治郎八（パリの社交界ではバロン・サツマと呼ばれた）が建設し、寄贈した薩摩館（日本館、二五年開館）に宿泊した。新明はしばらくパリ観光のために滞在したアメリカ合衆国を廻り、日本に帰国する計画を考えていたのであろう。何故かアメリカ合衆国へ行くのを止め、パリに二か月近くも長期に滞在し、ノートルダム大聖堂、第一次世界大戦中にドイツとフランスの両軍の激戦地ヴェルダン、ベルサイユ宮殿、パリ郊外のブーローニュの森林公園、ルーブル美術館、フランス革命の当初に監獄のあったバスチーユ（広場）などを見物して廻った。しかも演劇、オペラ、映画、ギニョール（指人形）の芝居、サーカスなども見物した。

新明はパリに着くと、早々と歴史家の中川君（一男？東京文理大）に誘われ、第一次世界大戦の激戦地のフランス北東の丘陵地帯のヴェルダン要塞、その地の納骨堂と無数に並んだ十字架、フランス兵士が生き埋められたという塹壕を見学した。新明は自らのヴェルダンの見物について、日記に「自分の頭にはっきりと大戦批判の態度をうえつけてくれたことを考えると無意義ではない」と記述した。さらに、ドイツの作家エーリヒ・レマルクが自らの従軍体験をもとに描いた小説「西部戦線　異状なし」は反戦文学の傑作である（二九年刊、出版直後にアメリカで映画化された）。新明はヴェルダン要塞の激戦地の見物が「『西部戦線　異状なし』以上に事実は悲痛である」と記述している（三一年二月九日）。

新明は「芸術の都」パリに滞在し、画家の内田巌（内田魯庵の長男）や佐藤敬（歌手の佐藤美子の夫）らと親しく交遊した。新明は「日記」にパリで知り合った人々のうち、「内田君との交遊はやや宿命的なエレメントを有っていたようだ。この交際を日本における生活と運動において有意義な発想の経過をとるように持続してゆきたいものだ」と記述した（三一年三月二六日）。その翌日、晴れたジュネーブの憂鬱を感じながら、「自分の働き場は東にある。東方から呼びかけて、世界の労働者階級の前進のために、後日の努力を期するのみだ」と記述した。新明のこの想念が何を意味しているか、分からないが、帰朝した新明は実際に「世界の労働者階級」に呼びかけたことは全くない。

新明はパリを出発し、ジュネーブでは国際連盟本部や国際労働機関（ＩＬＯ）を見物した。次にマルセーユ、ミラノ、ベニスを通過して、ローマの名所を見物し、ナポリへ。「ナポリを見てから死ね」と言われているように、新明はサンタ・ルチア公園から風光明媚なナポリ湾を眺望し、ヴェスヴィオ火山の大噴火で全滅した古代都市ポンペイ遺跡を見物した。新明はナポリ港で日本郵船

の香取丸に乗船し、紅海・インド洋・南シナ海を経て、上海に寄港した。その間、船室やデッキ・チェアに座り、ベルリン大学教授のアルフレート・フィーアカントが編集した大項目別の新著『社会学辞典』に掲載されたフォン・ヴィーゼやフィーアカントの論文、さらにマルクス主義の唯物史観に関する論文を集中的に読書した。

以下、順序は異なるが、新明の留学地ベルリンを中心とした学究生活と、ナチス抬頭期の政治的文化的な状況をめぐり新明の透徹した観察と行動を論述する。

三　ワイマール共和国末期のベルリンの体験

新明はシベリアを横断して一路ベルリンに到着した。その間、モスクワやワルシャワを見物した日記「伯林到着まで」を記述している。当時のベルリンはワイマール文化のセンターであり、学問と思想と芸術のメトロポールであった。ベルリンは約一五〇の新聞と雑誌を発行する「最大の、最も種類の豊富な新聞の街」で、しかも三五の劇場と二〇以上のコンサートホールの街である。

ベルリンはロンドンやパリなどの「大都市のなかでも群を抜いて最も全世界的な都市」であった（ウォルター・ラカー、『ワイマール文化を生きた人々』）。当時のベルリンは「無数の思い出の中で讃美されるのも不思議ではない。加速度的な動きをみせる人生観、価値観の変化は、ここドイツの首都でも最も明瞭に進行していた」（E・コルプ、『ワイマール共和国史』）。

ドイツの首都ベルリンがいわば急激に「人生観、価値観」を変化したように、三〇歳代前半の新明自身もこの世界的な都市ベルリンで急激な「人生観、価値観」の変化、学問的かつ認識論的な変化を体験した。新明はバイエルン広場などのキオスクで数種の新聞を購入し、また日本人留学生の間でも有名なストライザンド書店などの古書店で大量に書籍をツケで購入し、さらに盛んに演劇、映画、演奏なども堪能した。晩年の新明は、二年間のベルリンの青春を回顧して、「ベルリンはなおワイマール文化の真盛り」Berlin war doch in vollem Blüten der Weimarar Kultur が絶筆であったという（今日、ヴァイマルと邦訳されているが、本章では以下ワイマールとした）。

当時、ベルリンには約五〇〇人の日本人が滞在し、そのうち約一〇〇人が留学生だったと言われている。留学生の多くはベルリンの都心から離れた「西区」と呼ばれた中級住宅地のペンションの一室に下宿していた。その周辺には日本大使館、日本人倶楽部などがあり、しかもベルリンの都心から「西区」の入口にあるカフェー・ヴィクトリア・ルイーゼは在留邦人のたまり場であり、しかも日本人旅行者が一度は案内されたサロンである。

日本料理店の「藤巻」、「花月」、「常盤」、「伯林東洋館」、「松乃屋」は在留邦人、とくに留学生の交遊と懇

談の場所であった。新明はベルリンに到着すると、予約したホテルに投宿し、偶然「花月」で大分高等商業学校の藤野靖教授と会い、彼の紹介で早々と「西区」にあるペンション三階の一室で下宿することに決めた（四月二六日）。そこの主人バルネヴィッチは新明を同行し、警察署に居留届を提出した（五月二日）。その翌日、新明は「藤巻」でダダイスト竹林無想庵の妻・文子と丸顔の幼女・エボンヌを見かけ、文子が「過ぎゆく容色を以て果敢なく生きてゆこうとする試みは唯々悲惨という他はない」と、憐憫の情を覚えた。

新明は下宿では料理をせず、毎日のようにレストランで昼食と晩食を摂り、とくに日本料理店では日本人留学生と会話し、社会学以外のさまざまな学問的な知識やベルリンについての情報を交換した。毎日、数種の新聞を購入し、新聞記事を切り抜き、ドイツ社会民主党の機関誌『ゲゼルシャフト』を定期購読した。それは新明がドイツ、さらに欧州の激動する政治的動向を雑誌『経済往来』にレポートする材料を収集するためである。

四　「血のマイ・タ－ク」とピスカートルの「ベルリンの商人」

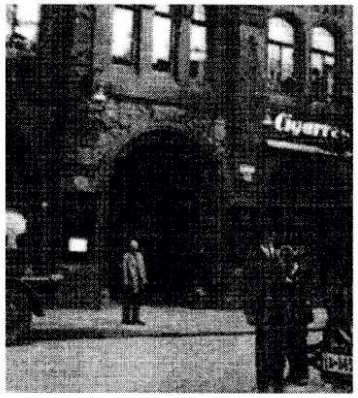
五月一日のマイ・タ－ク（メーデー、国際的な労働者の祭典）で、ドイツ社会民主党のプロイセン州警視総監ツェルギーベルは、ベルリンの不穏な情勢を察知し、デモ行進とクントゲーブンク（政治集会）を禁止した。それに反発したドイツ共産党と赤色戦線戦士同盟はデモを呼びかけ、それに二〇万人以上の労働者が参加した。警官隊は警棒と銃でデモ隊を襲い、多数の逮捕者と死者・重軽傷者が出た。三日間も続いた「血のマイ・タ－ク」を契機に共産党は社会民主党を「社会ファシスト」と攻撃し、共産党と社会民主党の対立を決定的にした。新明は「労働」と「労働」の決戦と認識した。

新明は当日の日記に次のように記述している。午後四時頃、遅れて政治集会の会場を見物に出かけた。「ヘルマン広場へ出てみると、成程少し街に殺気が立っている。赤章をつけた人が沢山通っている」。そこでは「前よりもよっぽど多くの巡査が集まっている」。「僕も巡査に通ることを罷りならぬと制止されて、ぐっと癪に障った。しかし、グミクニュッペル〔ゴム製の警棒〕とかいう棒で叩かれた人を現に目撃していたので、一撃喰わされても馬鹿らしいと思って、そのまま別の道をとり、地下鉄にのって帰ってきた」（五月一日）。

新明は演劇、オペラ、見せ物、しかもドイツ、ソ連、アメリカで制作された大衆映画や前衛映画を鑑賞し、俳優の演技、撮影の技法、印象に残るシーンなどの感想を克明に日記に記述している。その中でも、衣笠貞之助監督の時代劇Im Schatten den Yoshihara〔「ヨシハラの影に」、原題「十字路」〕、江戸の貧しい庶民の運命を主題にした映画にたいして「国辱映画」だという在留邦人〔日本人会〕の強力なクレイムがあったが、新明は公開された映画を早速見て、「入りは、下八分、上三分、まず尋常か。〔活動〕写真はいろいろと考えさせる。まず技術はいい。あれだけやれば結構。ただところどころ仕草の少しグロテスクに見えたところはある」と記述している（五月一七日）。

新明は舞台監督のエルヴィン・ピスカートルの政治的演劇「ベルリンの商人」を観劇した。新明は「伯林日記第三」に「芝居は色々の意味で緊張してみた。活動（写真＝映画のシーン）の用い方も決して『試み』の程度ではない。心にくいほど巧くつかっている。シュプレヒコールも効果のあるものであることを知った」と記述し、政治的・演劇的に深く感銘を受けたようである（九月一二日）。

のちに、新明は「欧州通信（二）、欧州における反動の波濤」（一二月二三日、ベルリンで擱筆）で、ピスカートルの「ベルリンの商人」では白衣を身に着け、白い三角帽を被って酒場で乱舞する狂信的な場面（アメリカの秘密結社のクー・クラックス・クランK・K・Kにそっくりの場面）を思い出し、反ユダヤ人主義を標榜するナチスの狂信的で怪奇な行動と集団との類似性について、遠い日本の読者に臨場感をもって伝えた。



ＡＥＧ労働会館本部
松岡駒吉一行を案内した



ノルレンドルフ広場
ピスカートル演出
「ベルリンの証人」

五　ハイネ的考察者の立場

新明は労働運動家の松岡駒吉から突然「明朝、ベルリンに行く」という電報を受け取った（七月二七日）。松岡は労働代表としてジュネーブで開催された第一二回国際労働会議の帰路、ベルリンに立ち寄った。言うまでもなく、ワイマール期のベルリンはモスクワに次ぎ、社会運動の盛んな「第二の赤都」と呼ばれていた。松岡に労働総同盟の三木治朗、社会局労働部長の湯沢三千男、警視庁労働係長の石原が同行した。最初、新明は松岡一行をベルリン郊外のポツダムのサンスーシ宮殿を案内した。その翌々日、ドイツ労働総同盟本部の労働組合館、家屋賃借組合、さらに出版部などを見物した。

新明は松岡一行を中央駅で見送ったあと、彼らを尾行し、新明とバスに同乗したのが、在留邦人の動向を探るために職を得て、日本から派遣された内務省の官吏だった。彼は「何のために？　という職業への疑問が起こらないであろうか。こんな妙な官吏をつくっている日本は妙である。つくづくと考えさせられる」。さらに「傍観者ということは出来ぬ。……我々はただハイネ的考察者たらんとするのみ。彼とは立場がちがう」。新明は文部省派遣の在外研究員として「ハイネ的考察者」としてのアイデンティティを確認した（七月三一日）。

それ以前、新明はベルリンの書店で『ハイネ全集』を三〇マルクで購入して盛んに読み漁った。ドイツの詩人・評論家のハインリヒ・ハイネは、一八三〇年にフランス産業革命で成長したブルジョアジーの指導のもとで起こったフランス七月革命の知らせを聞いた。その翌年、ハイネはドイツからパリに亡命し、亡命中のマルクスと交流した。その後、世界の享楽と甘美な都パリで突如コレラが流行した。ハイネは七月王政下のパリでドイツの『アウグスブルグ一般新聞』に評論「フランスの状態」を連載した。新明は、一八三一年頃のフランスの市街戦の最中に興奮してパリを歩いている詩人のハイネを想像し、「フランスの状態」を真似て、ベルリンで「独逸の状態」を書いてみたいと、日記に記述している（六月二八日）。

すでに触れたように、新明は日本を出発する直前、月刊誌『経済往来』編集部からレポート「欧州通信」の連載を依頼された。そのため、新明はドイツの政治状況や社会運動について情報を得ようとして、新聞・雑誌を購入した他、デモやクントゲーブンク（政治集会）の見物に出かけた。新明が「ハイネ的考察者」として『経済往来』に最初に「欧州通信」を書きあげたのが、滞在して六か月後に旅行中のケルンからである。その後、新明は旅行中のウィーン・ザルツブルクから一編を郵送した他、毎月各一編をベルリンから郵送し、一年間あわせて一二編を郵送した。

八月一日は国際反戦デーである。新明は労働者の政治

集会の見物に出かけた。音楽隊を先頭に赤旗のひらめくデモ行進に続き、デモ隊が広場に集結すると、方々で演説が始まった。革命歌「インターナショナル」の演奏が始まり、みな脱帽して合唱している。傍観者の新明には、労働組合を総動員した社会民主党系のデモと政治集会、共産党系のそれを見物し、「戦争反対―、この意義はこの日十分には徹底されなかったようだ」と感じられた。なぜなら、共産党は多くの犠牲者が出た「血のマイターク」事件を契機に社会民主党を「社会ファシズム」と呼んで排撃した。新明はこの国際反戦デーでも戦争反対のための統一行動が形成されていないと見なしたからである。

五　ドイツ社会学の批判と新たな吸収

新明のドイツ留学の第一の目的はドイツ社会学の研究である。新明の「伯林日記　第一」（四月六日―二五日）によれば、その冒頭に一週間の予定として、「木曜日　大学へ行く日」、「金曜日　語学教授の日」と記述し、社会学研究の課題として「社会学体系論」、「方法としての社会学」、「知の社会学」、さらに「独逸評論」などと記述している（この記述は、ひとまずベルリンの学究生活に目途が立ち、ベルリン大学のアルフレート・フィーアカント教授に面会し、彼の講義と演習に出席の許可を得た後に「日記」の冒頭に追記されたのであろう。なお、「語学教授」とは個人的に依頼して、ドイツ語の日常会話を学習した）。

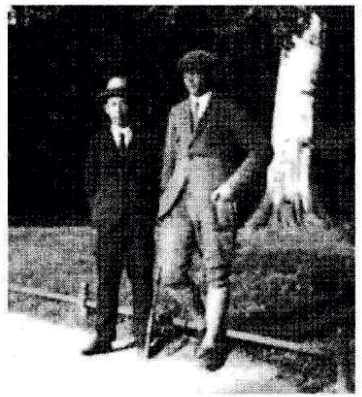
当時のワイマールのドイツでは、社会学研究のパラダイムは形式社会学であった。新明はすでに『形式社会学論』（二八年）を上梓した。そこでは、社会の内容と形式を分離し、形式社会学が「関係」や「集団」をテーマとして、社会の「諸形式」のみを研究対象とする方法と理論の体系化には批判的になった。だが、新明は晩年のジンメルが『社会学の根本問題』（一九一七年）で提唱した「超個人的な集団統一体の生活過程」、「人間存在の全領域」を研究の対象とする「一般社会学」に注目した。

新明の関心はドイツの社会学者のフィーアカント教授やフォン・ヴィーゼ教授が社会の「関係」や「集団」という「狭義の社会」に限定せず、どのように「一般社会学」として「広義の社会」（全体社会）を意識し、研究対象として考察しているのかということであった。新明が「薄明のなかで太陽の光を求めようとする気持」でドイツに留学したのもこの点である。結論を先に言えば、新明の期待は十分に満たされなかった。ところが、若手のカール・マンハイムやハンス・フライヤーなどの新たな知識社会学、文化社会学の研究に注目した（知識社会学は文化社会学の一種という見方もあるが、ここでは知識社会学と文化社会学に区別する）。

新明はフィーアカント教授に手紙を送り、許可を得てベルリン大学の研究室に出かけた。夏学期の講義と演習の出席の許可を得て、ほぼ毎週木曜日に出席した。新明は彼の講義には魅力を感じなかったが、「ニーチェの知識社会学」をテーマとした演習には魅力を感じた。すでにニーチェの邦訳全集を読んだ新明には演習でレポートした学生、さらに発言した学生の学力には大いに疑問を抱いた。のちに、新明はニーチェ哲学の「超人」と「永劫回帰」に着目し、それがナチズムの思想的な親和性を有することを批判的に分析し、「ニィチェ哲学の社会学的解釈（上・中・下）」と題して発表している（『文化』、一九三四年七・八・九月）。

新明はフィーアカント教授の了解を得て、ベルリン郊外のヴァンゼー湖近くの高級住宅街にある私邸を訪問した。フィーアカント教授は大項目別の『社会学辞典』の編集に多忙だったにもかかわらず、形式社会学の研究について親しく意見を交換した。さらに、新明が「ドイツの若い社会学者のなかで今後有望と思われる人はどなたですか？」と質問したのにたいして、彼はしばらく考えて「やはりフランクフルト〔大学〕のカール・マンハイムだろう」と返答した（六月二〇日）。

六　新たな知識社会学と文化社会学



ベルリン郊外のシルドホルン
その後、ベルリン大学で親しくなった学生が先学期にフランクフルト大学で新鋭のマンハイム教授の講義を聴講した経験から、新明に一度彼の講義を聴講するようにと勧めた。新明はマンハイムの新著『イデオロギーとユートピア』（一九二九年）を読了し、帰国予定の直前の三〇年の晩秋にフランクフルトに出かけ、フランクフルト大学で市民も自由に聴講出来るマンハイムの講義を大講義室の後ろの壁に寄り掛かって聴講した。のちに回顧しているように、新明は形式社会学を中心としたドイツ社会学者の研究に飽き足らず、マンハイムの知識社会学は「いわば薄暗いコンクリートのビルを出て、眼前に突如白昼の光のなかで花壇を見出したような鮮やかな印象を与えた」と、回想している。

新明はケルン滞在中にミュンヘンの絵入り新聞で野口

英世博士の紹介記事を読み、「何とかして自分も学問の領域でしっかりと前進してゆきたいものだ。今の研究の目的に『知識社会学』をおき、カール・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』の批判から出発せよ」、さらに「マルクス主義―その精髄も自分の知識のなかに摂取しなければならないこと」と、当面の研究課題を記述している（一一月二八日）。

マンハイムはマルクス・エンゲルスのイデオロギー論を考察し、それを批判して知識社会学を構想したのにたいして、新明はマンハイムの知識社会学をマルクス・エンゲルスのイデオロギー論によって批判しようとしたのである（後述）。

ドイツから帰国した新明は、彼の研究方針を実行するために、ドイツ留学からの帰路の香取丸の船中で盛んにマルクス主義の史的唯物論の関係書を読み、帰国して東北帝大法文学部の演習でマンハイムの知識社会学を取り上げた。その研究成果として『知識社会学の諸相』（三二年九月）、『イデオロギーの系譜学　第一部』（三三年九月）、さらにゼミナールの受講生に寄稿させて編著『現代知識社会学論』（三五年一〇月）を矢継ぎ早に刊行した。

さらに、新明はライプチヒ大学のハンス・フライヤー教授の新著『現実科学としての社会学』（一九三〇年）を読了し、「よみごたえのある。一寸面白い本だった」と読後感を記述した。フライヤーは、形式社会学を非現実的・非歴史的であるとして観照的な「ロゴス科学」として批判し、真の社会学は社会的現実に即応し、現実的・実践的・歴史的で、しかも主観的で倫理的・実践的な「エートス科学」であると提唱した。新明は「日記」にフライヤーが「社会学をロゴス科学ではないとしたのはいい」と認め、「形式社会学の批評は満点である。僕は完全に形式社会学の余滓（あまりかす）を放棄できた」と記述した（三〇年七月二〇日）。

新明は、帰朝後に『国民革命の社会学』（甲文堂書店、一九三五年）と題してフライヤーの『現実科学としての社会学』の他、『社会学入門』（三一年）や『右翼からの革命』（三三年）などを批判的に検討して上梓した。国民革命はヒトラーのナチス（国民社会主義ドイツ労働者党の通称）が掲げたスローガンで、三三年にヒトラーが独裁権を確立し、人種主義的民族国家の建設を志向した。新明は『国民革命の社会学』でフライヤーの社会学がその体系が複雑で、かつ精緻な論理性に欠けているだけではなく、ナチズムの奔流に迎合し、ヒトラーの「国民革命」に対応する社会学思想だと批判した。

留学以前、新明は『社会学雑誌』（一九二九年三月）に「方法としての社会学―社会学化の理論の構成―」（二九年三月）を発表し、ドイツ語に素訳した。新明はフィーアカント教授の演習で知り合った学生のアルフ・

ルシュナートの助力を得て完訳した。新明はたまたまベルリン工科大学のカール・ドゥンクマン教授の『職業の理論』（一九二二年）を古書店で購入し、読了した。新明はドゥンクマン教授の社会学研究に興味を抱いた。

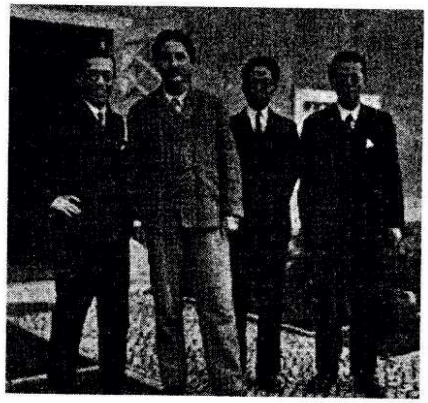
そこで、新明は彼が主宰するベルリンの応用社会学研究所を訪ね、研究員とも親しく学問的に懇談した。新明は『応用社会学雑誌』に独訳論文「社会学原理としての集団」と改題し、掲載された（三〇年一月）。ところが、新明とは異なり、ドゥンクマン教授は宗教、文化、芸術なども広く「集団」と捉え、彼自身の視点から独訳論文の初めの部分に勝手に加筆した。その結果、掲載された新明の独訳論文は必ずしも一義的に一貫していなかった。

七　ケルンとキール、ドレスデンとウイーンの旅

新明はベルリンからライン河流域を旅行し、しばらくケルンに滞在し、ケルン大学で社会学の教鞭を執り、『ケルン社会学雑誌』を編集するフォン・ヴィーゼ教授を訪ねた。同教授のエネルギッシュな演習に参加しただけではなく、教授の誕生日に自宅に招待され、別室で懇談して『応用社会学雑誌』に掲載予定の新明の独訳論文を話題にした。その際、フォン・ヴィーゼ教授から『応用社会学雑誌』とはライバル誌の『ケルン社会学雑誌』（季刊）に寄稿することを勧められたが、新明はそれに



ベルリン郊外のグリューネヴァルト
左から服部、タールハイアー夫人、新明



カール・コルシュ宅の玄関前
左から　新明、コルシュ、小畑、服部

は編集上の政策的意図を感じ、即座に断った（二九年一二月二日）。

その後、新明はケルンを発ち、デュッセルドルフ、ハンブルクを経由して、さびれた港湾都市キールに到着した（二九年一二月一〇日）。それはドイツ社会学のみならず、世界的にも大きな影響を与えた『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の著者でキール大学のフェルディナント・テンニース名誉教授と面談するためである。結局、新明は三日間、三回もテンニース宅を訪ね、すでに郵送した独訳論文について指導を受けたが、テンニース自身が老躯のため疲労していて、実のある研究成果を得られなかった。

ただ、新明は、テンニース宅に同居し、アメリカ留学から帰国直後の娘婿の社会誌学の研究者ルドルフ・ヘバーレ講師と率直にドイツ社会学の現状とアメリカ社会学、特に社会調査について意見を交換した。ヘバーレはアメリカ社会学の方法論の欠如を強調し、新明もまたそれに同意した。その後、新明はキールを出発し、ベルリンに戻った。

新明のドイツ西部のケルンとキールの旅は、著名なフォン・ヴィーゼとテンニース教授を訪問し、ドイツ社会学の最新の研究動向についての知識を得ることであった。若き新明の二人の教授訪問は、学問的にはそれほど期待した成果は得られなかった。新明のもう一つの目的は、第一次大戦後にフランスがライン川左岸のラインラントの一部を保障占領したが、ロカルノ条約の締結によりフランス軍が撤退を開始し、欧州における独仏協調のきざしを現地で確認することであった。

新明は「欧州通信」（一）の原稿をケルンから郵送した（「独逸、独逸、万国の旗の下で」、二九年一一月一六日、ケルンで擱筆）。当時はドイツから郵送して日本に到着し、雑誌『経済往来』に掲載されるまで二か月以上もかかることが分かった。新明はケルンとキールの旅からベルリンに戻り、「欧州通信」（二）、「欧州における反動の波濤」を執筆した（二九年一二月二三日、ベルリンで擱筆）。

新明の日記「ベルリン大学内外」によれば、新明は二九年の大晦日（ジルベスター）を喫茶店「ウェルツ」でベルリン在外研究員とともに夜間を過ごし、賑やかに正月早朝を迎えた。その後、新明は日記を一月末まで記述したが、その日記は五月まで断絶している（その間、新明は日記を記述していたかも知れないが、晩年の新明は大学の紀要に発表した際、長文になるため、紀要に掲載しなかったとも考えられる。まに文章を書く新明が三か月以上も日記の記述を中断したとは考えられにくい）。

八　タールハイマート夫妻との交遊とカール・コルシュのゼミナール

新明はベルリンに戻った。日記「ベルリン大学内外」によれば、新明は一人でアウグスト・タールハイマーの講演を傍聴した。タールハイマーはブハーリン失脚後にドイツ共産党から除名され、共産党反対派（右派）を結成し活動していた。その頃、新明の観察では「文筆業に身をやつし」ていた。

その後、新明は在外研究員の服部英太郎（東北帝大助教授、社会政策論）、大熊信行（高岡高等商業学校教授、経済学）、杉本栄一（東京商科大学助教授、理論経済学）、小畑茂夫（大倉高等商業学校教授、貨幣論）を誘い、タールハイマーの公開講演を傍聴し、次いで自宅でドイツ労働運動の一九一七年以後の経過などを聞いた（三〇年八月二日）。また新明らはタールハイマー夫人と娘に同行し、ベルリン郊外のグリューネヴァルトやノイ・バーベルスベルク城へピクニックに出かけた。だが、次に触れるコルシュの場合とは異なり、タールハイマーを講師に定期的組織的なゼミナールというほどではない。

それとほぼ同時期に、カール・コルシュはドイツ共産党から排除されたが、左翼反対派の理論的指導者として労働講座を主宰し、劇作家ベルトルト・ブレヒトなども聴講したという。すでにコルシュの邦訳『マルクス主義と哲学』（塚本三吉訳、一九二六年）が刊行され、ドイツに留学した福本和夫が出入りしたことでも知られていた。最初、新明がカール・コルシュと接触し、次いで上記の留学生四名を誘い、ベルリン郊外のコルシュの私宅でゼミナールを「前後一〇数回」実施した。

新明らのゼミナールで、何がテーマとして取り上げられたのか、分からない。ただ、新明がコルシュに「『哲学』の止揚について質問したら、大いに緊張して、これについて昔の意見を変えていないと力説していた」と日記に記述している（八月六日）。コルシュはマルクス主義の理論、唯物史観とその実践をテーマにしたのであろうか。ゼミナールの参加者の杉本栄一がベルリンを去り、キール大学へ移るのを契機にゼミナールを一先ず区切りをつけることになった。新明はその日の「日記」に「コルシュ氏へ、色々と質問あり。次いで菓子と茶をだしてくれる。……小畑、服部君のために、後の研究の順序をつけておく」と記述している（九月一八日）。コルシュのゼミナールは一応区切りがついたが、服部英太郎はコルシュのゼミナールを続けたようである。

のちに、新明は『服部英太郎著作集・月報一』（一九六六年一二月）で、「杉本君はきまって何時もコルシュ氏に質問を提出し、ディスカッションをリードした。これに対照すると、もともとこうした場合言葉の少ない服部君はコルシュの講義をただ黙々としてかみしめていた風だった」と回想している。新明自身はベルリン大学ではフィーアカント教授の、フランクフルト大学ではマンハイム教授を受けた。のちに「コルシュ氏の講義からはこれとは別様の強い感銘を受けた」と回想しているいる。

八　新明のベルリン留学は「第三の道」か

七月一八日、中央党党首のハインリヒ・ブリューニング首相（最初の大統領内閣）が国会を解散した。九月一四日、国会総選挙の投票日に決まった。新明は「欧州通信」の執筆のために、盛んに各党の演説会を見物した。そのうち、左翼文芸家の応援演説会では「酒井一雄めいた顔」をした男が演説した。新明は「どもりどもりいう。演説としてはまずいが、愛嬌がある」と記述している（三〇年九月二日）。

新明が「酒井一雄に似た顔」の男を見たのは、これで二度目である。一度目は、新明が一人でレストランで遅い晩食し、その一隅から観察すると、「酒井一雄に似た顔」の男がいて、「どこか間の抜けた、でも可愛らしい顔である。どこかの先生だろう。一度見たことのある男だ。しかし、この男気質良くして過ち易しと考えた」と記述している（二九年五月一八日）。当初、新明はこの日本人が誰か、分からなかったかも知れない。

「酒井一雄」は新明が神戸の関西学院文学部教授の後半の「教え子」で、新明の退職後に「社研」活動で、学内でビラをまいたとして退学処分を受け、全学生の処分撤回運動にもかかわらず、復学は実現しなかった。新明がドイツ留学のために、神戸港を出港する時、見送りにきている。新明の胸中では絶えず酒井一雄の将来が気になる「教え子」だった。

国崎定洞は東京帝大医学部の社会衛生学助教授で文部省派遣の在外研究員としてベルリンに留学し、帰国すれば、確実に社会衛生学教授に昇任することは周知の事実だった。ところが、彼はベルリンでドイツ共産党に入党し、研修期間が過ぎても帰国せず、依願免官となり、ベルリンの日本人反帝グループのリーダーとして職業的革命家の道を歩んだ。

新明はすでに喫茶店などで留学生仲間との雑談で職業的革命家の道を歩む国崎定洞の存在は知ったであろう。新明は亡命して日本人反帝グループに属し、文芸評論家の勝本清一郎の下宿を訪れ、そこで演劇家で同じグループの活動家の千田是也とは親しく懇談した。それを機会に千田とはしばしば会っている。

「去る者は追わず、来る者は拒まず」という生活態度の新明は、多忙な国崎とは直接会う機会もなく、誰からも紹介されなかったであろう。新明は東京帝大を卒業するまで新人会本部で共同生活をおくってアクティブに活動し、東京下町近辺のセツルメントにも参加し、そこで社会衛生学の少壮研究者の国崎を見かけたのかも知れない。

在学中の新明は、東北帝大の前期新人会の機関誌に多種多様な「社会主義」についての諸思想の習作を発表した。さらに卒業後は社会思想社同人として同人誌『社会思想』に健筆を揮るったが、決して「コミュニスト」（共産主義者）ではなかった。ベルリンでドイツ共産党に入党し、しかも日本人反帝グループの活動に多忙な国崎は、思想的に旗幟鮮明な新明にあえて接近しなかったのであろう。

九　批判と結語

加藤哲郎著『ワイマール期ベルリンの日本人―洋行知識人の反帝ネットワーク―』（岩波書店、二〇〇八年）は、本書の「はしがき」の冒頭で指摘されているように、「元東京帝国大学医学部助教授国崎定洞を中心とした、ワイマール・ドイツ末期にナチスの台頭を目撃し抵抗した知識人・文化人・在独日本人反帝グループの研究であり、私の国崎定洞研究の副産物である」。たしかに膨大な資料をもとに執筆され、「記念碑的労作」という大方の書評に同意するが、その思考様式が「あまりにも即物的・機械的に過ぎる」というドイツ文学者の池田浩士氏の書評の指摘にも大いに同意したい（『日本経済新聞』、二〇〇八年一二月一四日付）。

人には人なりに境遇と状況を判断して自らの生き方を選択する。懸命に生きようとした人にたいしてグレードを付けて論じることは、厳に慎むことだと思う。本書の第四章では新明『ドイツ留学日記』を手掛かりに「新明正道と杉本栄一の『第三の道』」を記述している。文部省派遣の在外研究員の新明と杉本らは、あくまでも自らの研究目的を着実に実行することこそが「第一の道」であって、決して「第三の道」ではない。

新明と杉本らはその一環としてドイツ共産党から除名されたタールハイマー夫妻と交遊し、またコルシュを講師にして「前後十数回」に渡って私的なゼミナールを実施した。在外研究員として学究的な道（マルクス主義研究を含めて）を実行した新明や杉本が、なぜ「第三の道」なのか、全く理解し難い。

加藤氏は第四章の結語として「『ドイツ留学日記』に見られる新明正道の現実政治への距離のとり方、『第三の道＝ハイネ的考察者』のスタンスが、その後の新明の学問と人生にも、よかれあしかれ一つ影を落とした」と結論づけている。新明の留学は、すでに触れたように、研究者として帰国後に知識社会学や社会学の体系化などの研究活動だけではなく、ワイマール共和国が崩壊し、ヒトラーが政権を掌握する激動期に政治評論でも大いに健筆を揮った。

池田浩士氏が加藤著『ワイマール期ベルリンの日本人』を書評し、「本書の叙述があまりにも即物的・機械的にすぎる」と注文を付けている。加藤氏が新明著『ドイツ留学日記』を手掛かりに検討した第四章の新明の行動と思索は、あまりにも「即物的・機械的」な理解である。

国崎定洞は社会衛生学の研究のために、文部省派遣の在外研究員としてベルリンに在留したが、ドイツ共産党に入党し、在留期間が終了しても帰国せず、依願免官となった。国崎の場合、ベルリンで社会衛生学の研究が第一の目的であって、職業的革命家の道は研究目的からすれば、むしろ逸脱した道ではないのか？

私は、加藤氏が膨大な資料を分析して、国崎のベルリンから「国家権力」のソ連スターリン体制下に亡命し、日本帝国主義の「スパイ」と密告され、銃殺された悲劇を克明に明らかにしたことは感嘆に値する。繰り返せば、新明は在外研究員として「ハイネ的考察者」と自覚したが、ベルリンにおける新明の行動と研究は「第三の道」とイコールではない。その点に関して、加藤氏の考察は「あまりにも即物的・機械的に過ぎる」という池田の書評が妥当すると考える。

（擱筆　二〇一七年五月一五日）

性と化粧の物語（九）

鈴木守

第二話　性と歯の化粧（四）

第三節　お歯黒風俗と性（四）

前号では、性に関連するお歯黒風俗を探し求めて、平安時代まで辿り着きました。この時代の後期に相当する院政文化期には、殿上人達は衆道趣味に浸り、その結果、昇殿する公卿の若者達に女性風の化粧をさせ、歯も黒く染めさせました。しかし、この化粧を男色由来の化粧と呼ぶには憚りがあり、例えば、『明月記』に記載されているように、成人標識の化粧に位置付けられました。

他方、女性のお歯黒風習は、平安中期の藤原文化期まで遡り、『紫式部日記』には式部自身の黒歯が認められ、九三五年『倭名類聚抄』の略名は『倭名抄』とします。

① 天平文化期：　中古・平安時代を後にして、上古・奈良時代に足を踏み込みますと、七七一年に『万葉集』、七五一年に『懐風藻』が上撰されていましたので、文学資料に期待して、天平文化の事蹟に目を通しますと、正倉院の御物・鳥毛立女屏風に出会いました。彼女は紅白粉を施した唐風美人で、日本では見られない花鈿と靨鈿を額中央と口辺にあしらっていました。しかし、彼女は口を閉ざしていましたので、お歯黒の情報を得る事ができませんでした。

お歯黒の証拠がないままに、化粧関連の資料を含めて見て回りますと、正倉院には香木沈香が保管されています。沈香はジンチョウゲ科の木の幹に樹脂や精油が沈着し、水に浮かべても沈む故、沈香と呼ばれている香木です。正倉院の沈香は**蘭奢待**の雅称が与えられ、蘭・奢・待の夫々に東大寺の文字が籠められています。

東大寺の沈香に対し、法隆寺には白檀の銘木が残されています。この時代、七二〇年に『日本書紀』、七一三年に『風土記』並びに七一二年に『古事記』が完成し、我が国の古き時代の縁に触れる事が出来ます。尚、古事記、日本書紀を夫々、『記』及び『紀』両者を併せて『記紀』と略します。

す〝波久呂女〟が見られましたが、それ以前の弘仁・貞観文化期には黒歯に関する資料を見出す事ができませんでした。この事は女性のお歯黒風俗は藤原文化期に発祥したかに見えますが、『倭名抄』には、波久呂女に続けて〝今婦人有黒歯具〟とあります故、古い出自を窺わせますので、平安時代以前の資料にも目を向ける必要があります。

1項、上古のお歯黒風習

一、奈良時代のお歯黒

奈良時代は、飛鳥浄御原から平城京へ遷都した七一〇年から、平安京遷都の七九四年に至る八四年間を云い、その間を文化期として、白鳳と天平の文化期に分けています。

② 白鳳文化期：　白鳳文化期に進みますと、江戸時代の書に、この期のお歯黒風習の一端が書き残されていました。『楓軒偶記、小宮山昌秀、一八〇七～一〇』には風土記を引用して、「其土官本身、宗族・子姪（子息と甥）並首領頭目、皆以銕鉄水（鉄漿水か？）・浸烏棓子末（五倍子粉）、悉、染黒牙、与民間人、以黒白分其貴賤、女子年及十五已上、不分良賤、亦染黒牙始嫁」と示されていました。

更に、この一統の事を思われますが、『紀・持統天皇』の条に「先帝天武天皇の殯宮に誄でた皇太子等が慟哭り、是に隼人の大隅・阿多の魁帥、各已が衆を領いて、互に進みて誄る」と著されていました。尚、烏棓子については、本誌一〇八号にて考察しました。

次に、前出の楓軒偶記には、『衝口発・藤原貞幹、一七八一』を引用して、「元は文身（入墨）し、髪を後に垂らし、黒歯也・近江朝の時、天下庶人に黒歯を禁じ、結髪するように令を発したが、後には再び歯を染め、結髪しなくなった」と記載していました。

二、飛鳥、大和時代と古墳文化期

既に述べましたように、天平文化期、弘仁・貞観文化期には、お歯黒風習に関する資料は一切認められませんでしたが、白鳳文化期、持統天皇の御代には、烏棓子に

よるお歯黒が認められ、近江朝の時、お歯黒禁止令が公布されましたので、近江朝以前の黒歯風習を探す必要があります。

① 飛鳥時代の黒歯風習：江戸時代の書を介して、飛鳥時代のお歯黒情報が二報認められました。両報とも主旨は「**化粧は聖徳太子の頃から始まる**」と云う事であり、小山田子清の『松屋筆記、一八一五～四六』で、「俗説だが、鉄漿を付け、眉を作り、下げ髪をなす事は聖徳太子より始まる」と著わし、『関秘録、著者不詳、一七五一～六三』は「鉄漿付け、白粉を塗る事は聖徳太子より始まる」と記していました。

② 古代、上代のお歯黒情報：飛鳥時代から奈良時代前期・白鳳期に至る間のお歯黒情報を集約しますと、「聖徳太子（五七四～六二二）より始まり、近江朝（六六七～六七一）の禁止令を経て、持統天皇の御代（六八六）に至るまでに、この風習は復活した」と云う事になります。

しかし、『持統天皇元年（六九〇）以降、平安時代九三七年倭名抄が著作されるまでの間、お歯黒情報が途絶えていた事を念頭におく必要があります。

③ 古墳時代の人骨：次いで飛鳥時代から大和時代に入りますと、この時代は文化史の立場で云えば、古墳文化期（三世紀末～六世紀末）に相当し、応神陵や仁徳陵のような巨大古墳が構築されています。

古墳時代のお歯黒については、樋口清之の書『化粧の文化史、一九八二』に、「日本では、五世紀ぐらいの人骨に既に、歯を黒く染めたものを見る事ができる」と著わされ、次項④は同じ年代のエピソードです。

④『記、記載の椎菱』とは：応神陵の主・誉田天皇のエピソードが『記・応神天皇の条』に記されています。この条は帝と皇妃・矢河枝比売の出会いの物語で、『記』の記載によりますと、帝が近江国に行幸された砌り・宇治木幡村に至りました時、麗わしい乙女に出会い、帝が「汝は誰が子ぞ」と問いますと、「丸邇の比布礼能意富美の娘、名は宮主矢河枝比売ぞ」と答えました。『紀』における娘の表記は和珥臣の祖日触使主の女宮主宅媛です）。帝は乙女に「吾、明日還り汝が家に入らむ」と申されました故、媛は委曲を父に申しますと、父は「是は天皇である。恐し、我が子仕え奉れ」と云い、家を装い飾りて待てば、明日にお見えになりましたので、大御饗を献じますと、帝は媛に大御酒盃を与え、

「この蟹や　何処の蟹…中略…木幡の道　遇わしし嬢子
後姿は小楯ろかも　**歯並みは　楯菱如す**…後略」と御歌を詠まれました。

この御歌の歌詞、歯並みは椎菱如すについて、それが白歯か黒歯かで論争されています。村沢博人は『顔の文化誌、一九九二』において、この論争を取り上げて、「お歯黒の歴史において、『記』にお歯黒の記述があるとする考えが、江戸時代からある。その中巻・応神天皇に歯並みは椎菱如すの解釈で、岩瀬百樹は『歴世女装考、一八四七』で、本居宣長の説に反対し、「歯は菱の如き光沢なりとて、黒歯したる艶やかなる歯を菱に準て称美玉いたるにあらざるか」として、これをお歯黒の最古の文献と主張した。現代でも菱の実にタンニンが含まれていると云う化学的理由から、この説が一部で支持されている」と解説しています。

彼はそれに続けて、「化学的には化学的にはその通りであるが、風俗として、それなりの広がりがあったとすれば、もっと記述があってよいと思う」と尤もな意見を述べた上で、「応神以後も平安時代まで記録がない点や、その始まりが貴族階級の成女式で、原料も鉄を使う基本形ができ上っている点などを考えあわせると、一般的に解釈されているように、『記』の文章は、椎菱の実の中のように歯が白く美しい事を描写したと解釈したい」と椎菱白歯説に賛意を示していました。

所が村沢は、応神天皇から平安時代までの間、お歯黒に関する情報が空白である事を理由の一つに挙げて、椎菱白歯説を支持しましたが、私の調査では二、三の論文が見つかり、それらを併せますと、「お歯黒は聖徳太子より始まり、近江朝の時、お黒禁止令が公布されましたが、持統天皇の頃までに復活し、烏梅子による歯染めが行われるようになった」と云う情報が得られました。

もし、村沢がこの調査結果を知ったとしても、彼が椎菱白歯説に固執するでしょうか？残念乍ら、彼は既に鬼籍に入りましたので、彼の考えを聞き質す術がありません。従って、私の考えを論述する事にします。

私は文化は進化すると信じています故、お歯黒風習は応神天皇の時代から平安時代まで絶える事なく、持続していたと思っていますが、未だに黒歯情報不在の時代が残されています。その時代は、持統天皇の御代以降、平安時代倭名抄成立までの期間には、お歯黒情報を見る事が出来ませんでした。

私はこの間のお歯黒風習の不在は、歯染め行為不在に基づくものではなく、お歯黒情報の不在によるもので、歯染め行為が存在し乍ら、お歯黒風習の不在を導いた事によると考えています。この考えを立証するような資料を見掛ける事はありませんので、美術全集に収載されている、紙に描いた美術品の幅数を指数とし、描かれた時代を変数にして検討しますと、七、八世紀から十一世紀に至る間は、紙に描いた作品の幅数は乏しく、十二、十三世紀に急増しました。参考までに壁画の幅数を見ますと、紙の作品が少なかった七、八世紀に多く、この時代

は法隆寺等の建設によって壁画が飾られた事に基づきます。それに対し、紙に描いた美術品が少ない理由は、高句麗僧・曇徴が紙墨、絵具等の製法を我が国にもたらしたのが六一〇年ですから、七、八世紀頃の我が国では紙を入手する事が困難だった為、紙に描いた絵画も限られたものだった筈です。従って、お歯黒に関する文字情報が皆無だった事が容易に推察されます。

最後に、矢河枝媛の歯並みの色に結論付ける事にします。私達は、例えばリンゴは赤、ブドウは紫等と果実の色を果皮の色で表現します。その伝で云えば椎菱は当然黒と表現します。更に云えば、媛の歯並みが白かったならば、帝は媛にプロポーズしなかったと思います。かりそめにも一国の帝王の矜持が、それを許さなかった筈です。このような理由によって、媛の歯並みは椎菱の外皮の如く黒かったと結論します。

参考文献

世界美術全集9、日本I、平凡社、一九五五
同書15、日本II、平凡社、一九五七
村沢博人、津田紀代編、化粧史文献資料年表、ポーラ文化研究所、一九七九
芳賀幸四郎監、年表式日本史小事典、文英堂、一九九三
鈴木守、コスメトロジー入門—化粧品の基礎知識—幸書房、一九九三
倉野憲司校註、古事記—岩波書店、二〇〇三
阪本太郎ほか校註、日本書紀（五）、岩波書店、二〇〇三
同書（二）、二〇〇四
鈴木守、化粧品のルーツを訪ねて（一）、まんじ一〇七号、二〇〇八
鈴木守、化粧品のルーツを訪ねて（二）、同誌一〇八号、二〇〇八
鈴木守、性と化粧の物語（七）同誌一四三号、二〇一七

（次号に続く）

千家尊福伝（一六）

たっての要請で就任した司法大臣

村上邦治

はじめに

明治三八年（一九〇五）の秋から翌春にかけて、東京府知事千家尊福は、戦争勝利の行事できわめて多忙であった。

一〇月には連合艦隊東郷平八郎司令長官が奉告のため東京に凱旋、桜田門までの沿道には、紅白の幔幕、大国旗、万国旗が飾られ、日章旗の小旗を持つ人々で、大混雑した。一月前の日比谷焼き打ち事件を忘れたかのように、公園沿いには、各艦隊の司令長官・参謀長を、一目見ようとする数十万の群衆で沸き立った。翌日には東京湾で、日本が誇る艦艇二百隻が参加した、海軍大観艦式が挙行された。一週間後上野公園で凱旋艦隊歓迎会が開催され、神田万世橋から会場までは、小、中学校生徒が日の丸の小旗を作り、司令長官らが乗る馬車を、万歳で迎えた。

陸軍は一二月から始まり、満州軍大山巌総司令官は児玉総参謀長以下の幕僚とともに、新橋から宮城まで行進、「落雷の如き万歳声」に包まれた。二日後には、黒木大将率いる第一軍が凱旋した。一月中旬からは連日、第二軍奥大将、第三軍乃木大将、第四軍野津大将、鴨緑江軍川村大将の凱旋が続いた。特に乃木司令官は、苦戦していた時には、凡将との悪評を浴びたが、

「この将軍ありて士卒と艱苦を共にし、愛児を犠牲の先登として不撓不屈の精神を鼓舞するにあらずんば、いずくんぞよく難攻不落の旅順要塞を陥落するを得んや」

と、時事新聞が報じたように、広島宇品港に帰還、特別列車で東京に向う、岡山、大阪、名古屋、浜松、静岡など停車場毎に、名将として大歓迎を受けた。品川、新橋では幕僚が、「かくまではと、思い設けざりし」と呆気

にとられる程の騒ぎであった。明治三九年四月両陛下臨席の青山練兵場にて、征露凱旋陸軍大観兵式が行われ、東京は戦争大勝利に酔い痴れた。

その間新橋停車場での出迎え、陸海軍大歓迎会や観兵式等何れも東京府知事の尊福は、式典主催の一人として、すべてに参列した。

しかし、国民の熱狂は長続きしなかった。戦争費用は年間生産力の五倍を超え、賄った内外公債のため、戦時特別税は続行され、国民に重くのしかかった。明治四〇年年初より株式大暴落から始まる経済不況が、一〇月からの世界恐慌と連動し、一般民衆は、塗炭の苦しみが始まった。

この経済の混乱を背景に、立憲君主制を揺るがせかねない事態に、千家尊福は巻き込まれることになる。

一　第一次西園寺内閣発足

桂内閣が日露戦争の遂行と、講和を含め困難を極めた戦後の処理をやり遂げることができたのは、裏で衆議院第一党立憲政友会の協力があってのことであった。

総裁伊藤博文は、政権を手放したことから、筆頭の元老でありながら、野党党首として政府の施策に反対する、という矛盾が生じることとなった。そのため総裁を

西園寺公望に譲り、自らは枢密院議長に就いたが、政治の第一線から離れることになり、影響力は後退した。党の実力者星亨死亡後は、政友会の実質的な党運営は、官僚出身の原敬が握った。

原は盛岡藩家老の出であるが、東北同盟に組みしたことから朝敵となり、幼少時から苦労の連続であった。司法省法律学校を経て、郵便報知新聞の記者になった後、外務省に入った。外交官として天津、パリ公使館勤務後、陸奥宗光の知遇を受け、外務省次官、朝鮮駐在公使を務めた。外務官僚時から伊藤博文にも認められ、政治家に転身、立憲政友会結成時には幹事長となった。第四次伊藤内閣では、汚職容疑により辞任した星の後任として、逓信大臣で初入閣した。

原が藩閥ではないにもかかわらず、順調に官僚、政治家として頭角を現したのには、陸奥や伊藤に引き上げられただけではなく、明治・大正政治史に不可欠とされる『原敬日記』（明治八年から暗殺された大正一〇年一一月までの八〇冊）を読むと、直ちに理解できる。緻密な分析や洞察力を持ち、情勢判断や行動力に、ずば抜けた人物であったことには異存なかろう。冷酷といわれる程人物を見る目は厳しく、しかも的確であった。日々膨大な量の情報を整理し正確に記録した、その記憶力や几帳面さには、多くの人は驚かされよう。

衆議院に足場を持たない桂首相は、戦時中から野党政友会原との間で、政権移譲を条件に、戦後処理について政府への協力を協議していた。桂首相にとっては、日露戦争終結に伴う混乱回避が、最大の政治課題であった。

交渉は野党連合を組む憲政本党との兼ね合いから、密約の形をとった。陸軍が旅順を攻撃していた明治三七年一二月から始まり、奉天会戦後の四月、さらに講和会議中の八月には四回の会談を重ねた。多くの国民の反対が予想される講和条件に対して、「内閣を西園寺政友会総裁に譲る」ことを約束し、全面的支援を求めたのである。

九月講和条約に対する予期せぬ以上の民衆の反対と、新聞各紙の厳しい批判は、日比谷焼き打ち事件を引き起こした。この大規模な騒乱により、警視総監及び内相の辞任を余儀なくされ、桂内閣は決定的な痛手を被った。当初短期二流内閣といわれながらも、日英同盟を締結し、大国露国との戦争を有利に終わらせたが、四年半続いた桂内閣は、ついに終止符を打った。

明治三九年（一九〇六）一月、西園寺内閣は、首相を補佐する内相に原敬、法相に松田正久（原に次ぐ柚頴）と、政友会で固めた。外相に憲政本党から加藤高明、山県有朋に配慮し逓信相に山県伊三郎（有朋養子内務次官）、薩閥から文相に牧野伸顕（発足時首相兼任大久保利通次男）、蔵相に元老井上が推挙した阪谷芳郎（大蔵次官）、農商相に桂の推す貴族院議員松岡康毅（木曜会）、陸相に寺内正毅（留任山県系）、海相に斉藤実（岩手後首相）の布陣であった。政友会からは二名に止まり、山県系二名、薩摩、憲政本党、貴族院、官僚出身等で組閣され、四方に気を配った大臣起用であった。

この組閣時に、千家尊福東京府知事は生糸、茶の産地の知事を務めており、また清廉な政治姿勢から、農商務省に汚職が多くこれを正す人物として、同派の松岡と共に、農商務大臣の有力候補にあがっていた。

二　長期在任の東京府知事

明治三一年（一八九八）第二次山県内閣発足と同時に東京府知事に就任した尊福は、その後第四次伊藤内閣、第一次桂内閣を経て、既に八年を超えていた。内務大臣は、西郷従道（山県内閣）、末松謙澄（伊藤）、内藤忠勝・児玉源太郎・芳川顕正・清浦奎吾（以上桂）に代わり、原新内相で七人に仕えることになった。

西園寺内閣は国会開期中の年末休会中に発足したため、前桂内閣の予算案や政策を踏襲、山県系官僚をそのまま引き継がざるをえなかった。地方官である知事については、日露戦争により、尊福のように既に任期が長期化していた者が多く、大幅な更迭が予想された。

国会終了後の四月中旬、尊福は原内相を訪問した。尊福は、原内相に対し

「東京府知事就任以来既に九年この際御免蒙りたし、現内閣に対して決して隔意あるにあらず」（『原敬日記』明治三九年四月一六日）

と、自ら辞任を申し出た。

原内相は西園寺首相と、尊福の申し入れについて協議、首相より留任を要請するよう依頼した。首相から直接引き留め要請を受けた尊福は、その日に原内相に留任を承諾したのである。地方官最上位の東京府知事に、なりたい者は多くいるにもかかわらず、長期在職を理由に自ら退任を申し出る者は、これまでだれ一人としていなかった。

西園寺内閣として、尊福に東京府知事辞任を思い止めさせる背景があった。

一つは、日比谷焼き打ち事件に端を発した警視庁改革を、この月に実施することになっていたのである。東京府や東京市の改革案に対し、原は「現制度は不可欠なり」として応じなかったが、大浦兼武警視総監（薩摩内務官僚第三次桂第二次大隈内相）、内海忠勝桂内閣内相（長州等七府県知事歴任）など、山県系や薩閥で固めた警視庁幹部を一掃させる、大人事異動を行う直前であった。この大幅な刷新異動を無難に進め、帝都東京の警備に齟齬が起きないよう、万全を期す必要があったのである。

もう一つは、社会主義者の台頭である。

労働者や民衆は、長引く重税により、不満を募らせていた。悪いことに、東京市内電車値上げ問題と重なり、市民の反対運動者は社会党と接近して、値上げ反対大会を開催し、運動を続ける姿勢を見せていた時であった。電車料金値上げ問題を所管とする、千家東京府知事の統治力が、引き続き必要であったのである。

日比谷焼き打ち事件を体験している原内相は、民衆の不穏な行動に備え、司法大臣には政友会の盟友で、最も信頼する松田正久を、念のため据えたのである。

三　初の社会主義政党公認

日清戦争後、製糸・紡績工場、工廠、鉱山（銅・石炭）に労働争議が続発、これらを契機に社会主義政党が結成された。明治三九年（一九〇六）西園寺内閣発足直後に、「普通選挙の期成を図る目的」とする日本平民党（西川光二郎ら）と、日本社会党（堺利彦ら）が結党し、内務省に受理された。これら二党は初の政府公認政党となり、翌月合同して日本社会党を結成した。西園寺内閣で社会主義政党が承認されたのは、唯一の綱領が「国法の範囲内において、社会主義を主張する」とした、議会主義的社会主義によるものであったからである。西園寺・原の社会党に対する方針は、

「徒に結社を解散するが如きをなさず、実際の行為を見て之を処置する」（『原敬日記』明治三九年七月六日）

とするものであった。この二人の基本姿勢は、山県や桂が社会主義というだけで、弾圧しがちであったのとは異なった。この綱領による結党は、拒否する理由がなく、原内相は容認したのである。

ところが幸徳秋水が明治三八年末から米国に渡来、労働組合運動の幹部や露国の亡命共産主義者に会い、強い影響を受け帰国した。以後党内は、秋水の主張する急進的な直接行動により社会主義国家を実現せんとする、直接行動派（幸徳秋水、堺利彦、山川均、荒畑寒村ら）と、これまでの路線である議会政策派（片山潜、田添鉄二、西川光二郎ら）に分裂した。

四〇年二月第二回社会党大会において、革命を主張する直接行動派が党内を制したことから、西園寺内閣は、日本社会党を解散させ、『平民新聞』は発行禁止処分としたのである。

しかし、その後も直接行動派は、半月刊『大阪平民新聞』を創刊し、「金曜会」を結成した。議会政策派は『社会新聞』を創刊し、「社会主義同志会」を結成し、これに対抗した。経済不況により社会不安が拡大する中、社会主義者の分派闘争は、国内政治にとって見逃すことのできない問題になりつつあった。

四　貴族院会派の分裂

第四次伊藤内閣において、北清事変の費用負担を増税案に求めたことに、貴族院は一体となって強固に反対、伊藤首相はやむなく天皇勅語により成立させたが、議会、国民の信頼を失い総辞職した。

この時以来貴族院では、隈板内閣（憲政党）や伊藤内閣（政友会）による政党内閣の成立に危機感を持ち、山県系平田東助らの主導により、各派の大同団結が図られることになった。明治三二年緩やかながら各派が合同した「幸倶楽部」が結成された。最大会派「研究会」と連携し、山県系の牙城として山県および桂内閣を支えたのである。

千家尊福率いる「木曜会」は、当初幸倶楽部の主要会派であったが、政友会に政策が近く、しかも男爵議員の増加により、独自の路線を進めていくことになった。特に明治三八年二月、桂内閣の貴族院令改正案は、日露戦争後の戦功叙爵により増員が見込まれる男爵議員を抑え、子爵議員の優位を保つことであった。そのため千家最高幹部下の「木曜会」は、団結してこれに猛反発し、貴族院で政府案を一票差で否決、廃案にしてしまったの

である。それほど貴族院における木曜会の政治力は強力であった。

これを契機に、明治三九年一月西園寺内閣成立に合わせ、尊福は幸倶楽部を正式に退会し、政策が近い政友会に接近をしたのである。

木曜会の離反により、貴族院を牛耳っていた山県系「幸倶楽部・研究会」体制は、ほころびを見せ始めた。

五　戦後の東京府政

明治三八年一一月の通常府会では、日比谷焼き打ち事件に端を発した警視庁廃止問題（原内相により、「内務大臣直属とし、山県系幹部の一掃」により決着）、三九年度は東京勧業博覧会の開催、四〇年度は洪水による水害復旧等が主要議題であり、府知事として円滑に府会を取り仕切った。長期にわたる府知事在任により、知事に対する信任は高く、提出された議案は問題なく可決された。

千家知事の仕事ぶりに対し、監視・質疑・批判する立場の府会議員達は、その率先した精勤ぶり、金銭に拘泥せず、貴族院男爵派の最高実力者でありながら、分け隔てなく接するその人柄と度量に、党派に関係なく信頼されていた。

これらを彷彿させるものとして、開戦後からだけでも、二件決議されている。

「千家知事・糧秣廠長・被服廠長に対する感謝の決議」（三七年府会　府会議員一同菊花拝観、両廠参観時の知事の特別配慮に対するもの）

「千家知事の東京勧業博覧会事務に尽瘁せられたる功労に対し感謝の意を表する為頌徳表を贈呈する」（明治四〇年府会議員協議会　博覧会成功の尽力に対するもの）

東京府のため真摯に業務を遂行し、合わせ如何に府議員に慕われていたかを物語るものである。

六　西園寺内閣の内憂

西園寺内閣の対外関係は、日露の戦争を経て安定した。英国とは三八年に第二次日英同盟が協約された。戦争相手国の露国とは、明治四〇年七月日露協商が締結され、南満州と韓国の権益が明確になった。米国とは移民排斥運動により冷却したものの、四一年二月の日米紳士協約により、大きな問題に発展しなかった。

この内閣の海外問題は、もっぱら戦争で確保した権益を、具体的に推進することであった。南満州では、関東総督府（初代総督大島陸軍大将）を遼陽（次年旅順移設）に開庁、国策会社南満州鉄道（初代総裁後藤新平）を大連に設立し、その経営拡大に注力した。

朝鮮については、皇帝や民衆の抗日運動はあったものの、第二次、第三次日韓協約を結び、統監府（初代統監伊藤博文）の設置により、国際的に保護国として認められた。

新たに獲得した南樺太には、豊原に樺太庁を設け、漁業、林業、製紙業の振興に乗り出した。

順調に推移した国際面とは裏腹に、国内の政治課題は長引く経済問題であった。明治四〇年国内経済不況から始まり、秋からの世界恐慌に繋がり、国家財政は極度の税収不振が続いた。

労働者・民衆は収入減に加え、物価の高騰、戦時から続く重税に苦しんだ。一方三菱、三井、住友など一部大企業は、戦後の重工業発展により、有望分野の進出や官営事業の払下げにより、企業連合、企業合同、さらに財閥形成にまで至り、大きく成長した。

農村においては、天候不順や不況により貧困層が急増し、生活の困窮に直面した。大規模地主は、蓄積した資本により農地を買い取ったり、貸金の担保として取り上げたりして、土地の集積が進んだ。多くの小作農は自分の作った米を食べることは、年数度に限られ、多くの子供をもつ農家では、男は軍隊へ、女は都会へ働きに出された。さらに、韓国、満州、樺太へ一家を挙げて移り住む村落や、日本を捨てて、米国、伯剌西爾への移民募集に応じる者も出てきたのである。

戦後経済不況が長引くにつれ、労働争議が多発した。戦後直後には、武器や戦艦の減産により、軍需関連から発生した。明治三九年、呉海軍工廠、大湊海軍修理工場、大阪砲兵工廠で、相次いで争議が起きた。

翌四〇年二月には、足尾銅山で採鉱夫が賃上げを目指し、大規模な暴動が発生した。この争議を指導したのは、北海道夕張炭鉱出身の労働者であった。この組織的な指導により、待遇改善に関する二四か条の請願書を古河鉱業に提出したが、会社側はこれを拒否したことから、事態はさらに大きくなった。暴動は全山に波及暴徒化し、見張り所などを爆破、建物などを焼き払った。四日目ついに高崎一五連隊が出動し、ようやく鎮圧した。

北海道では三月と七月に、夕張炭坑で数百人の運搬夫が仕事放棄し、会社側と交渉した。四月には幌内炭坑でも争議が発生した。

六月には別子銅山（住友鉱業所）にて、坑夫達が賃金三割引き上げを会社に要求し、これが拒否されると、事務所などを爆破し暴徒化した。警官は抜刀して制止しようとしたが、無秩序状態に陥り、愛媛県知事は松山歩兵連隊の派遣要請を行った。新聞では足尾銅山の騒動に刺激され発生した、と報道された。

毎月のように労働争議が発生し、新聞各紙はこれを大きく報道した。なかでも一月に創刊された日刊平民新聞

は、西川ら幹部を現地に派遣し、詳細に報じたのである。足尾銅山争議は日本社会党第二回大会の直前であり、幸徳秋水ら直接行動派に大きく影響を与えた。

さらに一〇月には京都で、西陣の職工七百人が友禅染職工の同志会を立ち上げ、大阪では活版技工組合が結成され、翌月七〇工場がこれに参加、賃上げを目指し争議を起した。

農村では小作争議が各地で起きた。特に天候不順が続いた西日本が中心で、広島・岡山では連鎖的に多発した。

規律を重んじる軍隊でも脱走事件が頻発する。三月初旬には、東京麻布の歩兵第一連隊で、中旬には大阪六二連隊で、集団脱走事件が発生した。軍隊での相次ぐ脱走事件は、社会主義の影響が疑われたのである。

七　西園寺内閣の亀裂

国会会期中に桂内閣を引き継いだが、衆議院第一党であったが過半数を占めていなかったため、政友会内閣は、閣僚は首相ほか二人のみで、各方面配慮し慌ただしく発足した。そのため、閣僚間の意思統一が図られず、大臣の辞職が相次いだ。

まず前桂内閣で決定していた鉄道国有化問題に対し、閣議で加藤外相（憲政本党）が激しく反対した。軍事輸送の統一・円滑化（車両構造・運行）や安定した国家財源の確保、国有鉄道の担保提供による有利な外債発行などの理由から、民間経営の鉄道幹線を国有化するものであった。加藤が憲政本党の反対を主張しているとの見方は少なく、岩崎弥太郎の女婿であったことから、国有化に反対する三菱財閥の意向を、代弁しているものと思われた。首相及び内相の説得にもかかわらず、加藤外相は主張を変えず、辞任させざるをえなかった。（後任林董駐英大使）

経済不況の長期化から、大幅な税収減に陥り、四一年度予算編成方針は、閣内で難渋し、なかなか決められなかった。この情勢を見ていた山県をはじめとする元老達は、政府の予算方針に介入してきたのである。財政に詳しい松方や井上等が、経費の節減、事業の繰り延べ、新税の創設及び酒税などの増税により、歳出入の均衡を図ることを強く勧めた。堂々と山県ら元老達の政治介入を許さざるを得ないほど、財源難であったといえた。

元老等の介入により、ようやく四一年度の予算編成の見通しがついた。ところが、山県逓信相が鉄道の建設改良費として、既定済みの一億四千万円と同額の予算を一二年間の継続費として、計上したいと閣議で主張したのである。阪谷蔵相は予算編成方針と異なる、として強く反対したが、逓信相は譲らなかった。結局蔵相・逓信相の二人は、いわば喧嘩両成敗の形で、辞任したのであ

る。この背後には、政友会政党内閣に不満を持つ山県系の官僚らによる、嫌がらせと倒閣に向けた動きがあった。

西園寺首相は内閣不統一の責任を取り、その他の大臣の辞表を取りまとめ、天皇に提出した。ここで西園寺内閣は、総辞職になるはずであった。

ところが勅令により、蔵・逓両相の二人だけを更迭し、蔵相は司法相松田正久に、逓相は内相原敬にそれぞれ兼務させることで、西園寺内閣は引き続き政権を継続することになった。

『明治天皇紀』では、伊藤博文の意見により、天皇はこの処置をとったことが記されている。影で博文が、天皇を動かしたのである。『原敬日記』では、博文の関与についての記述はない。

しかし銀行の倒産が続くなど、恐慌といわれるほどの経済不振が続き、公債の発行は困難であり、歳入の不足のため、経費の節約、軍事費の繰り延べのほか、民衆の生活を直撃するたばこ、酒、砂糖税の増税、石油消費税の新設を行わざるを得ず、社会不安は一層高まった。民衆の不満は、社会主義者たちを奮い立たせ、労働者や民衆との連携が危惧されるまでになったのである。

八　原内相の内閣立て直し策

西園寺内閣の実質的最高実力者である内相原敬は、総辞職騒ぎを起こした首相西園寺公望の政権維持意欲の乏しさは、十分承知していた。原は、二閣僚辞任という窮地を、逆に西園寺内閣の立て直しに活用する策に打って出たのである。その秘策は、常に政府に嫌がらせや反対する貴族院の山県支配を、打ち崩すことであった。

貴族院山県系の地盤を壊すため、「郡制廃止法案」を明治四〇年二月に、原は一部の閣僚の反対を押し切り、議会に提出した。老朽官吏や警察官が郡長や郡の要職に任命され、強固な山県系官僚支配の基盤を形成していた。市町村制の機能拡大により郡制を廃止、経費の縮減を図り、内務省の指示系統を明確にすることを前面に出し、合わせ山県系の地盤を打ち砕くことを目論むものであった。この法案の意図を察し、山県系の議員は、郡制廃止反対運動を団結して強く進めたのである。

法案は、過半近くをしめる政友会により、衆議院は可決させたものの、貴族院では、一〇八対一四九の多数により否決された。しかし原はこの結果も見て、

「山県系の（反対）運動は真に非常なるものにてこの結果を来せしが、彼らの力はおどろくべきものにあらず」

ことを確認し、意外にも山県系の貴族院支配は強固ではないことを悟ったのであった。

組閣当初より元々原は、貴族院の分断を念頭に置いていた。桂首相から、貴族院（勅選）議員（司法官僚検事総長）で木曜会中堅の松岡康毅を、

「貴族院の都合よろしからん」

として推薦され、農商務大臣に起用した。

原はこれを足がかりとして、貴族院への進出を狙ったのである。しかし松岡は、

「各派に軽蔑せられ居り、又地方官始め一般に甚だ不評判」（『原敬日記』三九年六月二一日）

であった。しかも大臣としての仕事ぶりは、不満足な点が多く、当初の目論みは実現できなかったのである。

今度は、二閣僚の補充を手段に、山県派の牙城貴族院を分裂させる、大胆な策に出たのである。

「木曜、研究両会が現内閣を賛成するに至らば、貴族院に於ける形勢一変し、憲政上一大進歩をなし得べきかと思はる」（『原敬日記』四一年二月一一日）

と記し、最大会派研究会の幹部堀田正養（子爵元近江宮川藩主）を閣僚に加えることで、山県系の本丸清浦奎吾が率いる研究会を、分断させることであった。

さらに、貴族院木曜会の首領千家尊福を入閣させ、完全に政府与党化させる、大胆な補充人事構想であった。

堀田入閣の交渉は、ほぼ二月で本人の内諾が得られた。

九　原敬の尊福評価

人物評価の厳しい原ではあったが、東京府知事千家尊福を以前より高く評価していた。例えば、日露戦争に対する消極的対応や、戦後一早く木曜会を、山県系が牛耳る貴族院の幸倶楽部から離脱させ、西園寺内閣に協力姿勢を示した事などである。内相として東京府知事に接し、警視庁改革を内相指示のもとに府会市会を取りまとめたその掌握力、貴族院議員らしからぬ実践行動力を身近に観察し、その手腕に感心していた。民衆の強い反対のあった電車運賃の値上げ問題も、三電車会社を合併（東京鉄道会社設立）させ、五銭値上げを四銭に止めることを指示したが、趣旨をよくわきまえ、反対の多い議員をまとめ上げたことも、買っていた。

原が力を入れた郡廃止法案では、一部反対者を抑え木曜会をまとめて、政府案に賛同したことも、原の評価を高めたのである。

四〇年五月、皇太子に同行して、出雲大社にも参拝したとき、

「大社に国宝となりたる一文箱を除く外宝物はなはな少し、多分維新騒擾の際売りたるならん」（『原敬日記』）

と記したが、金銭に拘泥しない姿勢に共鳴していた。

原は、尊福の政治・行政能力を見抜き、東京府知事を九年という異例の長期間にわたっていたにもかかわらず、留任させた。幾度も地方官の若返りを図る人事にも、一切手を付けなかった。早くから尊福を重要閣僚につけたい、との構想を持っていたのである。

大臣補充の際にも、

「余は西園寺にこの後任（逓信大臣）に関しては貴族院木曜会の千家尊福（東京府知事）を逓信に、若槻大蔵次官か鶴原定吉（外務・日銀官僚二代目大阪市長政友会設立委員）かを、大蔵に勧め置きたり、西園寺も千家には異議なきも、鶴原には伊藤（博文）賛成するやいなやを危めり」（『原敬日記』四一年二月一二日）

同じく同月、

「貴族院木曜会の首領千家尊福を入閣せしむることは余の兼ての意見なり」（二一日）

とまで記している。

一月では、原が兼務している逓相を尊福に、司法相に堀田が、就任する予定であった。

ところが、二月に入り、にわかに社会主義者の集団に大きな動きが出てきたのである。

二月中旬、穏健派（議会政策派）の社会主義同志会最高幹部片山潜と西川光二郎が決別、片山を同志会から除名し、西川率いる同志会は直接行動派に同調した。

この経緯を片山は三月一日の『社会新聞』紙上で、西川光二郎は

「無政府主義を理想とし、社会主義を手段として活動する」

と決裂した理由を記し、片山自身は

「多年執り来りたる万国社会党の立場を固守し、之と共に活動し、之と共に進化発展するとする」

と、議会政策派の路線をあくまで進めることを公にしたのである。穏健派であった同志会の直接行動派入りにより、一挙に社会主義者集団は、幸徳秋水・堺利彦らが主導する直接行動派が、圧倒することになった。

三月に入り、七日に普通選挙請願大会を日比谷公園で開催し、その請願を携えて議院に来るということが判明したことから、原内相は前日に集会を禁止した。同日の日記にも、

「この種の大会は殆んど社会主義者によりて繰り返され、過日も増税反対の大会ありたるにより十分の警戒をなし、そのために衆議院本会議開会せざりき」と記し、政治に影響を及ぼし始めていた。

社会主義者の活動は、増税や電車料金値上げ、普通選挙による選挙法の改正、足尾や別子銅山の暴動など、社会不安下の一般大衆や労働者と結びつく恐れがあり、

「実際の行動から判断する」

ことを基本に掲げてきた西園寺首相と原内相は、警戒感

を一挙に高めることになった。

原内相はこの時点で、東京府知事として社会主義者対策の豊富な経験や、三府県を纏めてきたその政治行政手腕を持つ尊福を、司法大臣に据え、二人でこの新事態に対処することを決意したのである。

一〇　司法大臣辞退

社会主義者集団で、直接行動派が統一勢力になるという事態の急変により、日比谷焼き打ち事件でみせた危機に対する的確で果断な判断を行った尊福を、西園寺首相も司法大臣に起用することには、異議はなかった。西園寺内閣は初めて政治問題化した社会主義者対策を、原内相と千家司法大臣の二人により、万全を期すことにしたのである。

天皇の信認が篤く、隠然とした存在感を持つ伊藤博文（韓国統監当時東京滞在）の承諾を受け、二人の内閣補充については、これで決着した。

ところが二三日朝、千家尊福は西園寺を訪問し、「固く司法大臣就任を辞退」（『原敬日記』）することを申し出た。

首相に辞退の理由を問いただされたものの、尊福は「家事の都合にて到底辞するの外なし」（同）と詳細は述べず、西園寺と別れたのである。

午後、再び西園寺に会い、「絶対に之を辞したり」（同）と辞退の意志が固いことを、繰り返し述べたのであった。

西園寺は直ちに原を呼び「何とか方法なきか、また千家に代わる人を選ぶとすれば、何人が宜しからん」（同）と、落ち着きを無くし、原と相談した。

二人の間では、千家がだめなら、梅謙次郎（民商法学者東京帝大学長法制局長官）、奥田義人（農商務官僚衆議院議員）、鶴原定吉らの候補者が議論された。

しかし、千家尊福の力量、人間性を高く評価していた原には、司法大臣起用を、どうしてもあきらめきれなかった。

原内相は西園寺に「余（原）から千家に説く」（同）ことを、西園寺首相に承諾させた。原には、社会主義者たちのこれからの行動を考慮すると、内務大臣と司法大臣の二人の密接な対応が必要であり、尊福の司法大臣起用は、必須なことに思えたのである。

官邸に帰った原は、直ちに尊福を呼びだした。日記には「露骨に内情を打ち明け相談してほしい」と、その懸命な状況が記されている。

原の心情を察した尊福は、遂に辞退の理由を告白した。

「負債（借金）が多く或いは急激に迫られ失態を現はす様の事ありても困る」（同）と内情を曝し、特に司法大臣だけに、この問題が発覚した時、政治問題に発展しかねないことを恐れていると、正直に打ち明けたのである。

原は尊福の本音を聞き、直ぐに「左様なる家政ならば何れ早晩整理を要することと思はるるに因り、寧ろこの際整理する事となし、余（原）及び西園寺も相当の助勢をなすべし」（同）と、尊福に親身になって諭したのである。

尊福は、原の「頗る厚意」（同）に深く感激し、「斯くまでの事ならば御受を致すの外なし」（同）と、ついに原の肝の据わった説得に、尊福は司法大臣就任を受け入れたのであった。

原は直ちに電話にて西園寺首相に伝え、真相を文書にしたためて、首相に届けたのである。

尊福の借金問題はまだ世間に流布されておらず、尊福が心配したように、司法大臣の借金返済問題が在任期間中に発覚するとなると、内閣を揺るがす懸念があった。原内相はその危険性よりも、尊福の政治家としての力量を、優先させたのである。

千家、堀田両貴族院議員の入閣は、山県の逆鱗に触れることが予想された。さらに、大臣就任に強く意欲を燃やす政友会議員に対しても、秘密裏に進める必要があった。

一一　千家尊福司法大臣就任

閣僚人事は、伊藤統監の在京中に、しかも山県、井上ら元老の所在から、国会最末期の三月二五日発令することで準備され、その間厳重な管理の下、極秘事項とされた。

発令の前日に、西園寺首相は天皇に奏し、次に山県、井上ら元老らに伝えられた。政友会の大臣候補者には、西園寺から今回の人事について、直接会って説明したのである。

明治四一年三月二五日、内閣人事が発表された。

東京府知事正三位勲一等男爵	千家尊福
任司法大臣	
従三位勲四等子爵	堀田正養
任逓信大臣	
司法大臣兼大蔵大臣	松田正久
免本官専任大蔵大臣	
内務大臣兼逓信大臣	原　敬

免兼官

おわりに

秘密裏に進められたためこの発表には、貴族院山県系の研究会・幸倶楽部の議員達を大いに驚かせた。新聞は政友会の大臣病議員からは

「風説のごとく政友会中より出でざりしを憤慨し」（二六日　中外商業）

た者が多いことを報じた。

同日の原の日記には、

「此更迭により木曜会は純然たる政府党となり、研究会は従来の態度を改めて現内閣に接近する筈なれば、政友会の勢力範囲は多少貴族院に及ぶの端をも啓きたるなり」

「政友会中入閣を内々欲望したる一二の者を外にして、一般は是にて内閣の鞏固なれるを信じ満足を表し居るが如く見ゆ」

と貴族院対策を強調し、山県系が支配する貴族院に、くさびを打ち込んだことに満足した事を記している。

しかしこの人事が単に貴族院の分裂を意図しただけではないことは、明確であった。原内相としては、政治・行政における第一級の能力をもつ千家尊福という人物を、どうしても司法大臣として確保することが大きかったのである。

なお、原内相は尊福後任の東京府知事に、群馬、千葉、富山知事を歴任、同郷盛岡の四歳下の幼馴染内務官僚阿部浩を据え、万一に備えることも忘れなかった。原の念には念を入れる慎重な性格がうかがえる。

明治四一年三月三〇日東京府会は、議員協議会を開催した。その開催趣旨は、先般司法大臣に栄転した千家前知事対して

「在職一〇年の永き渉り府政に尽力せられたる功労多大なるにつき、適当な方法を以て感謝の意を表せんとする」ことを決議することであった。一〇年にも及ぶ異例中の異例の長期在任を果たした前知事に、満場誰一人異議を唱える者はなく、全員一致でこれに同意したのであった。

千家前知事はこの席に臨んで、府議会議員に告別の挨拶をした。議員を前にして、着任時よりこれまで府知事が兼任していた東京市長は専任となり、東京府政は全く新しい形の統治をすることになったこと、東京市における星市会議長等の数々の汚職、大国露国との戦争、そして日比谷焼き打ち事件など、困難に直面した府政の数々の出来事が、心の中に去来したことであろう。府会議員からの多くの感謝の辞に、全力でやり遂げた晴れ晴れしい気持ちで一杯であった。この時ばかりは、ただただ満足感に浸っていたのである。

しかし新しく就任した司法大臣には、政府を揺るがしかねない難事が、待ち構えていた。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

明治時代の著述者

渋江保の一生（その十）

山本勉

第八期　静岡時代②（静岡市）一八八五年（明治十八年）十二月～一八九〇年（明治二十三年）三月

渋江が周智郡犬居村（領家村）現浜松市天竜区春野町から静岡に移り住んだ時期を特定することは今のところできないが、おそらく『渋江抽斎』のその百九の記載から、遅くとも一八八六年（明治十九年）の九月頃迄には静岡に移り住んでいる。『渋江抽斎』のその百九には、「抽斎歿後の第二十八年は明治十九年である。保は静岡安西一丁目南裏町十五番地に移り住んだ。私立静岡英学校の教頭になったからである。校主は藤波甚助という人で、雇い外国人にはカッシデェ夫妻、カッキング夫人等がいた。当時の生徒で、今名を知られているものは山路愛山さんである。通称は弥吉、浅草堀田原、のちには鳥越に住んだ幕府の天文方山路氏の裔で、元治元年に生まれた。この年二十三歳であった。十月十五日に保は旧幕臣静岡県士族佐野常三郎の女松を娶った。戸籍名は一である。保は三十歳、松は明治二年正月十六日生まれであるから十八歳であった。」(1)とある。

渋江が周智郡犬居村（領家村）から直接東京に帰らずに静岡に立ち寄ったことは、澁江保氏談話「新聞今昔譚」に、「静岡へ立寄った処を旧知の前田五門といふ人に取捉へられ、否応なしに同市に引き止められて」とある。(2)

前田五門（一八三五～一九〇五）については『静岡県歴史人物辞典』に「新聞人。もと五左衛門と称して、江戸下谷新橋脇に住んでいた旧幕臣である。一八七九年（明治一二）に平山陳平らと『函右日報』の創刊に参加し、『静岡新聞』などの起業会・開業式に社員として出席する。一八八四年一月に『函右日報』の社務一切を譲渡され社長になる。同年一二月静岡県改進党の結成に参加、翌年三月の同党春季大会で常議員兼幹事に選出される。このころ私立静岡英学校に関係する。同校は校主を藤波勘助といい、一八八六年に渋江保を教頭に迎える。渋江とは相識の間柄である。」(3)とある。また、『渋江抽斎』のその百九にも前田五門と渋江との関係について「五門はもと五左衛門と称して、世禄五百七十二石を食み、下谷新橋脇に住んでいた旧幕臣である。明治十五年に保が三河国国府を去って入京しようとしたとき、五門は懇親会において保と相識になった。」(1)とある。

渋江は静岡に移り住んで結婚をすることになるが、『渋江抽斎』のその百九にある旧幕臣静岡県士族佐野常三郎の女松についてはわかっていない。ただ松の父親である佐野常三郎については、駿河遠江国（静岡県）に移住した幕臣の名簿である『駿藩各所分配姓名録』の「遠州相良の部エサ六」(4)の右下の一覧に名前が見られる。但し経歴等の記載はない。

渋江は立ち寄った静岡市においてどのような活動をして来たのか。渋江の静岡時代の様子についてはこれまでの渋江研究ではあまり触れられてこなかった重要な評価にかかわる事項がある。一つには英語学者・英語教育者としての渋江である。もう一つは自由民権運動の啓蒙家としての渋江である。渋江は欧米の書物を翻訳する中で自由民権思想を身に付け晩鐘新報の主筆として活躍した。

英語教育者としての渋江保

『渋江抽斎』のその百九に静岡において英語教育に携わった渋江の様子が次のように描かれている。「抽斎歿後の第二十九年は明治二十年である。保は一月二十七日に静岡で発行している『東海暁鐘新報』の主筆になった。英学校の職はもとのごとくである。『暁鐘新報』は自由党の機関で、前島豊太郎という人を社主としていた。五年前に禁獄三年、罰金九百円に処せられて、世の耳目を驚かした人で、天保六年の生まれであるから、五十四歳になっていた。ついで保は七月一日に静岡高等英華学校に聘せられ、九月十五日にまた静岡文武館の嘱託を受けて、英語を生徒に授けた。抽斎歿後の第三十年は明治二十一年である。一月に『東海暁鐘新報』は改題して東海の二字を除いた。同じ月に中江兆民が静岡を過ぎて保を訪うた。兆民は前年の暮に保安条例によって東京を逐われ、大阪東雲新聞社の聘に応じて西下する途次、静岡には来たのである。六月三十日に保の長男三吉が生まれた。八月十日に私

英学校では一七、一八年には英学だけを教授したが、一九年から二四年までの間、英学・漢学のほか数学を含めて二学科を教えるようになった。渋江は師範学校在学当時、「数学を除くほか、一切の科目を温習せずに、ただ英文のみを読んだ」、と数学と英語につよい関心をよせていたので、同校に着任してこの学科を担当したものとおもわれる。渋江は、二〇年七月一日には、佐倉信武が一九年八月に静岡宝台院境内に設立した静岡英華学校に招かれ、さらに九月一五日には英学・漢学・和学・剣法を学科とする静岡文武館の嘱託となって、英語を教授している。これらの私立学校がすべて英学を教科として教授していることは、英学・数学に堪能であった渋江保の関係していたためばかりではなく『静岡県統計書』にあげられている私立学校の学科目をみると、明治一六年以降設立された私立学校の大部分が英学や数学を教授している。（中略）静岡市内の私立学校で教鞭をとっていた渋江保は、二一年八月、兄の脩とともに、自ら渋江塾を静岡安西一丁目に開き、英学・漢学・数学を教授した。翌二三年には、東京博文館の仕事をすすめるために、再び上京したが、上京にあたって渋江塾を閉じ、英学校や英華学校・文武館の教職を辞した。渋江の在静期間は長くはなかったが、英学校在職当時の影響は大きく、後年山路愛山が文明批評に文筆を揮ったのも渋江の英学に啓

立渋江塾を鷹匠町二丁目に設くることを認可せられた。」[6]ここには渋江が関わっていた三つの私立学校と渋江塾のことが書かれている。ではそれぞれどのような学校であったのか。『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4篇教育・文化第1章学校教育の確立にある県立諸学校・私立諸学校一覧表」には、『渋江抽斎』にある学校が、静岡文武館・高等英華学校・静岡英語専門学校・渋江塾・の順で掲載されている。[7]

それぞれの学校と渋江の関わりについて

『静岡県教育史通史篇上巻』「第4章学制頒布と学校設立（3）私立学校の簇生　英語塾と渋江保」に次のように述べられている。

「県内の中学校が静岡尋常中学校に統合された明治一九年、渋江抽斎の七男渋江保が静岡に移ってきた。彼は明治八年、東京師範学校を卒業したのち、浜松県に派遣され、瞬養学

校の設立や教則の作製にあったことは既に述べた。その後慶應義塾に入学するため、一旦上京したが、一九年、藤波甚助を校主とする私立静岡英学校の教頭として招かれ、翌二〇年一月には静岡で発行している自由党の機関誌「東海暁鐘新聞」の主筆をもかねることになった。静岡英学校は、明治一七年七月、藤波甚助によって静岡屋形町に設立されたもので、その前年すでに開かれていた英語塾を発展させたものである。静岡

発されるところが少なくなかったことと思われる。明治後期から大正にかけて山路愛山の主宰した『独立評論』に渋江が積極的に協力したのも、この在静当時の邂逅と薫陶によるものと思われる。また、明治一九年から二〇年にかけて文武館に通学していた上田敏もまた、渋江が同館で教鞭をとった時に、師弟関係があった。」[8]

山路愛山（一八六五～一九一七年）は明治から大正にかけての歴史家・ジャーナリストで、江戸に生まれたが静岡に移り住み渋江の教えを受けている。その後上京し、信濃毎日新聞主筆となっている。また『独立評論』を創刊する等数多くの業績を残している。上田敏（一八七四～一九一六年）は東京生まれの英文学者・詩人で海外文学の紹介に努め、訳詩集『海潮音』を刊行し日本の近代詩に大きな影響を与えた。

また、渋江の薫陶を受けた者に中国人留学生教育の父と呼ばれた静岡県掛川市出身の松本亀次郎（一八六六～一九四五年）がいる。松本亀治郎は魯迅や周恩来、郭沫若、秋瑾等中国人留学生に日本語を教え、中国人留学生教育に生涯を捧げた人である。

次に、渋江が関わった静岡市内の三つの私立学校と渋江塾の成立の経緯と教育内容について述べてみたい。

一静岡英語専門学校

『静岡県英学史』には、静岡英語専門学校について次のような説明がなされている。

「静岡市に於ける最初の正則英語学校と称し得るものは静岡英語専門学校であった。明治十七年（一八八四）七月、藤波甚助によって、屋形町に創立され、はじめは校名を静岡英学校と称し、後年静岡英語専門学校と改めた。昭和三年十一月、静岡市が甚助を追彰した時の表彰状に「夙に英語教育ノ必要ニ着眼シテ明治十六年私立英語学校ヲ開設シ明治三十二年閉校スルニ至リタルモ」とあって、開校を十六年としたのは、その年から友人村松一と共に、追手町の旧御用邸裏あたりで英語塾を開いていたのを指したものであろう。十七年七月の英語学校はこの英語塾の発展したものと考え得るからである。講師には市内の中学校、師範学校の英語教員等を招いた。その中にはキャディシー夫妻、カッキン夫人等がいた。授業は午後に行った。屋形町の校舎は火災のため類焼したので、二十年七月本町三丁目に移り、二十一年に同所に校舎を新築したが、翌二十二年二月の火災に再度類焼、改めて二階建て洋館の校舎を新築して、校名を静岡英語専門学校と改めた。教員中には東洋英和学校出身の加藤秋真、渋江抽斎の嗣子渋江保がいた。（中略）（渋江は：引用

者）二十年、英学校に勤務のまま、東海暁鐘新聞（社主前嶋豊太郎）の主筆になった。保が静岡英学校で教えた生徒の中には、当時二十三歳の山路弥吉（愛山）がいた。保は同年七月、兼ねて佐倉信武の静岡高等英華学校に聘せられ、九月には松下之基の文武館の嘱託を受けて英語を教授した。十九年静岡中学校に入学して翌年東京に移るまでの間に、上田敏が文武館に通っていたことがあるので、この間に保の教えを受けたことがあったのではあるまいか。二十一年（一八八八）七月、保の兄脩が東京から来て、静岡警察署内巡査講習所の英語教師になったので、保は兄と共に鷹匠町一丁目に英語塾渋江塾を設けた。」(9)

静岡英語専門学校ではどのような教育が施されていたのか。『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4編教育文化第一章学校教育体制の確立第二節私立学校・中等教育　二十七私立静岡英学校の目的・学科・学級および課程・教科書」の設置の目的・学期及課程・教科書に次のようにある。

「一、設置ノ目的　英語学ヲ主トシ、傍ラ数学漢学ヲ教ヘ、高等中学校并ニ官立学校へ入ラント欲スル者等ヲ教授スル所トス。本校ハ男女ヲ論セス之ヲ教授スル所トス。但、男生徒ハ和洋男教師之ヲ教ヘ、女生徒ハ和洋女教師之ヲ教フ。一学科　英学科　但英文科　歴史科　物理科　生理科　化学科　経済科　政治科　法律科　論理科　哲学科ノ十科ニ分ツ。　数学科　但　算術科　台数科　幾何学科　三角術科ノ四科ニ分ツ　漢学科　一、学期及課程　修業年間ハ初等科三年、高等科一年、合シテ四年トス。但、初等科ノミヲ修メテ退学スルモ妨ゲナシ。学年ハ九月一日ニ始リ翌年七月三十一日ニ終ル。而シテ一学年ヲ前後ノ二期ニ分ケ、前期ハ九月一日ヨリ翌年二月廿八日迄、後期ハ三月十一日ヨリ七月三十一日迄トス。学科課程ハ別表甲号之通。一、教科書　別表乙号之通。」(10)

二静岡高等英華学校

『静岡県英学史』には、静岡英華学校について次のような説明がなされている。「渋江保が明治二十年七月に英語教授を嘱託された静岡高等英華学校は、佐倉信武が長谷川善太郎等と協力して、明治十九年八月に宝台院境内に設立した英学校である。教授に当たった者で判明しているのは前記佐倉、長谷川、渋江の他、静岡教会の平岩愃保である。

愃保は英語会話を担当していたという。この学校が何年頃まで存続したものか、何等記録したものなく未詳である。佐倉は明治二十年（一八八七）十月には静岡県尋常中学校書記兼教諭試補舎監となり、十一月には私立静岡女学校校主にも挙げられているので英華学校の校務には専念できなかったであろうし、「嶽陽名士伝」の長谷川の項には、高等英華学校で「学生を教養すること数年」とあり、一方渋江保が静岡を去った二十三年（一八九〇）の初めに退職願いを出しているので、本校の教育が行われたのは短く三、四年、長くて五、六年位の間と考えられる。」(11)

静岡高等英華学校ではどのような教育が施されていたのか。『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4編教育文化第一章学校教育体制の確立第二節私立学校・中等教育　二十六私立高等英華学校教則・教授法の概略・講師斉藤和太郎・坂井牧之助履歴」の教則に次のようにある。

「一、教則　本校ハ高等普通学科ヲ教授ス。一、教授法ノ概略　訳読ハ読本、歴史等ノ原書ヲ日本語ニテ分解訳読セシム。講義ハ講師自ラ政治、経済、法律、哲理等ノ原書ヲ講明ス。読方ハ語音を正シテ英文ノ読方ヲ習ハシム。和漢学ハ講師和漢ノ史書経書等ヲ講釈ス。数学ハ加減乗除ヨリ三角術マテ勤メテ原書ニ拠リ教授ス。英語会話ハ講師生徒ト混シテ臨場対話ヲ為ス者トス。作文ハ記事論説ヲ習ハシメ兼テ英文和解を脩メシム。輪講ハ生徒ヲシテ各級ニ適当セル原書ヲ輪読セシム。」(12)続いて講師斉藤和太郎と坂井牧之助の履歴が記載されている。

三静岡文武館

『静岡県英学史』には、静岡文武館について次のような説明がなされている。（藤波：引用者）甚助は明治十四年（一八八一）三十二歳の頃から英学の必要を痛感して、専心その修得に勉めた。彼が教えを受けたのは静岡安西一丁目南裏町二十一番地、文武館の館主松下之基であった。安西一丁目南裏町は現在の八千代町であり、文武館はもと瓦屋小路にあった丁字湯の向かい右角にあって、二階建てであったという。文武館及び松下之基については詳細未詳である。松下之基は静岡市役所の古い戸籍簿の記載によると、士族、前戸主松下良左衛門の長男で、安政六年（一八五九）八月十四日生まれであり、明治二十九年三月二十三日附けで、神奈川県津久井郡牧野村二六〇七番地へ転籍したことになっている。この牧野村は昭和三十一年七月二十日合併によって藤野町となっている。藤野町の旧戸籍簿には松下之基の記載がないため、之基の子孫を確認することが出来ない。ただ同地区の篠原小学校の沿革誌中の歴代訓導中に之基の名が連ねてあるが、それも氏名だけで在職の年代も不明である。文武館は何年頃に始められたものか不明だが、甚助が英学に志した直後にここに学んだとすれば明治十四、五年頃には既にあったものと考えられる。又、前に述べた如く、渋江保がここで英語教授を嘱託されたのが明治二十年九月であり、静岡中学校生徒であった上田敏がその前年

あたりから、ここに学んでいたことから、二十年頃にもあったことは確実である。おそらく、二十九年に之基が神奈川へ転出したので閉館したものであろう。」(13)

四渋江塾

『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4編教育文化第一章学校教育体制の確立第二節私立学校・中等教育　三十二渋江塾設置の目的・学科・渋江脩履歴書」の設置の目的・学科に次のようにある。

「一、本校ハ彝倫道徳ヲ本トシ、普通学科ヲ教授シ、兼テ英語、欧米礼節、手工等ヲ授ケ、優良ナル貴女ヲ養成スルヲ以テ目的トス。学科　一、設置ノ目的　英語学、英学ヲ主トシ、傍ラ数学、漢学ヲ教ヘ、男女ヲ論セス入学ヲ許シ、他日高等中学其他高尚ナル学科ヲ教授スル官公私立男女学校ニ入ルノ予備トス。但、男生徒ハ男教師之ヲ教ヘ、女生徒ハ女教師之ヲ教フ　（女生徒ヲ募リ女教師ヲ置　クノ一事ハ当分欠ク）。一、学科　英学　英文学、法律、政治、理財、哲学、科学ノ六種トス。　数学　算術、代数、幾何、三角術ノ四種トス。但、此項中ニ簿記学ノ一科ヲ設ク。漢学ノ三科トス。　静岡県駿河国有渡郡　静岡鷹匠町二丁目二十八番地寄留　東京府神田区佐久間町二丁目十二番地　平民　渋江脩　二十九年六月」(14)

この渋江塾で教えを受けた一人に松本亀治郎がいる。平野日出雄の『松本亀治郎伝』に亀治郎の履歴書が次のように記述されている「一明治二十一年四月四日、静岡高等小学校訓導ニ任セラル。一二十一年五月ヨリ公務ノ余暇静岡県尋常師範学校教諭菅沼岩蔵及静岡安西南裏町渋江塾主渋江保等ニ就キ英学ヲ修メ、二十二年十二月迄スイントン万國史、クライブ及ヘスチング傳、ホーセット小経済書、スペンサー教育学、ベイン心理学等ヲ講習ス。」(15)

菅沼岩蔵（一八六六～一九四四年）は現静岡県湖西市出身で、静岡県は基より、県内外の学校を歴任している。また、『あけぼの英語入門』や『あけぼの英語カード』、『初等英文典』等英語関係の著作を始め数多くの著書がある。

菅沼岩蔵は、渋江が宝飯中学校長時代に隠居所としていた長泉寺で寄寓してたこともある。

渋江と亀治郎の師弟関係が親密な様子を伺うことが出来る一枚の葉書がある。葉書は静岡県掛川市立図書館大東図書館に今でも現存している。実際に渋江執筆の亀治郎宛の葉書を見る機会に恵まれた。『松本亀治郎伝』には、渋江の松本亀治郎宛の葉書について次のように記されている。「渋江保は明治二十二年に静岡を去ったが、彼は静岡の初期英学と民権思想に大きな足跡を残した。渋江保は、二十二年の四月、亀治郎が東京高等師範学校入学のために上京したとき、送別会が開けなかった詫びをかねたハガキを出している。

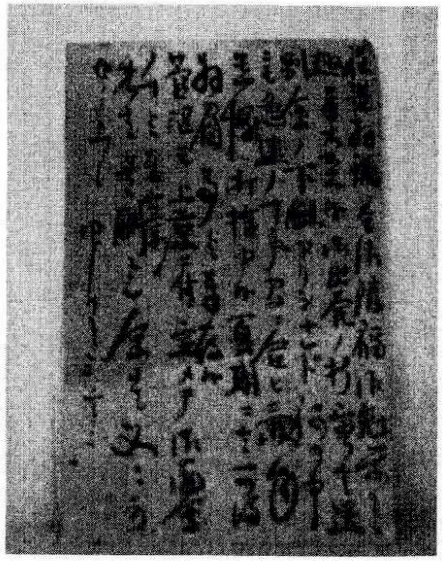
（ハガキ文面）

花墨拝誦、益々御清福御勉学之趣奉大賀候。御出発ノ折、実ハ送別会ノ下組ミアリシナレド、何ヲ申ニモ急速ノ事ニテ間ニ合ヒ兼テ生憎ニ打捨申候。夏期ニハ可致拝盾事ト奉存候。菅沼モ上京ニ付定メテ御面会ノ事ト奉存候。先ハ無酬迄、余ハ又可致候　四月二十日

（ハガキ表書）

東京高等師範学校　松本亀治郎様　静岡安西南裏渋江保」(16)

松本亀治郎も渋江保もその後東京に在住していたので書簡のやりとりや面会の機会があったと思われるが、それを裏付ける資料は今のところ見つかっていない。



（渋江保から松本亀次郎宛葉書（文面）：静岡県掛川市立図書館蔵）



（渋江保から松本亀次郎宛葉書（表書）：静岡県掛川市立図書館蔵）

注記

（一）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）三〇二頁

（二）山路愛山『独立評論』第四号の澁江保氏談話「新聞今昔譚」（独立評社　一九一四年四月一日）六〇頁

（三）静岡新聞社出版局編集『静岡県歴史人物辞典』静岡新聞社　一九九一年十二月一日）四二二〜四二三頁

（四）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）三〇四頁

（五）『駿藩各所分配姓名録』（学問所製本所　駿河江川町　本屋市蔵　一八八六年三月十六日）

（六）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）三〇三頁

（七）静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県　一九九〇年三月二十日）八七七・八七八頁

（八）静岡県立教育研修所編集『静岡県教育史通史篇上巻』（静岡県教育史刊行会一九七二年十一月三日）六六二・六六三頁

（九）飯田宏『静岡県英学史』（講談社　一九六七年十月二十日）三十四〜三十八頁

（十）静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県　一九九〇年三月二十日）八七〇・八七一頁

（十一）飯田宏『静岡県英学史』（講談社　一九六七年十月二十日）四十四頁

（十二）静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県　一九九〇年三月二十日）八六八・八六九頁

（十三）飯田宏『静岡県英学史』（講談社　一九六七年十月二十日）三十九・四十頁

（十四）静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県　一九九〇年三月二十日）八七五・八七六頁

（十五）平野日出雄『松本亀治郎伝』（静岡教育出版社　一九八二年四月二十日）一三四頁

（十六）平野日出雄『松本亀治郎伝』（静岡教育出版社　一九八二年四月二十日）一四二・一四三頁

50才からの発達障害（アスペルガー）入門

匠　克仁

夢夢夢夢夢夢2の次は夢夢夢3の題でと考えた。すると夢夢夢夢夢夢2夢夢夢3夢夢夢4夢夢夢5……と永遠に夢夢夢が続きそうだったので止めることにした。それに夢夢夢3は書かないと夢夢夢2で記述していた。だけど夢夢夢2を書いた後にいろいろエロエロな夢を見たので夢夢夢3が書けそうであった。夢の内の一つがまんじに夢夢夢3を発表するというものである。悩んだがやはり夢夢夢3にしないことに決めた。ところで、書き始めの夢夢夢と夢夢夢2の間に間が無いのは間抜けだ。ぼくは夢夢夢2で人生最大最悪の間抜けな過失を犯した。この夢夢夢2のミスでまんじを辞めようかと考えた。それに夢夢夢シリーズだけでなく断筆しようと悩んだ。今回は夢夢夢3とつけなかった理由を最初に書こう。過失とは夢夢夢2の最終頁の上15行目からの3行である。

夢夢夢夢
夢夢夢夢

夢夢夢夢夢夢

夢夢夢夢が夢夢夢夢とならず消えていた。修正済と思い夢夢夢2の脱字を見落として再校しなかった。今回も**夢夢夢夢**の部分が太字でないと、間抜けである。もちろん夢夢夢2の脱字は、ぼくのせいである。印刷会社の方に夢夢夢シリーズだけでなく太太太・男男男・上上上など夢夢夢よりも面倒な印刷をして頂き感謝している。ただ夢夢夢2の脱字の責任を取って断筆しようと思った。

ぼくは誤痔脱痔が自分で自分を許せない。夢という痔が十六個も脱痔になると発狂しそうである。

脱痔を見落とした理由は、クリニックで、ある障害を宣告され、そのショックのためである。

初肛で原肛を肛正したときは、宣告されていなかったので、気付いた。再肛するとき、ショックで気付かなかったのだろう。完璧に脱肛したつもりでいた。

で、ショックを受けたという障害が今回の本題である。

前振りが長くなったが、既にタイトルに書いている。

ぼくは50才にして、『アスペルガー症候群』であると診断されたのである。

アスペルガー（以下で症候群を省略）は、生まれつきの脳の器質障害で対人関係が上手くいかないのである。発達障害の一種である。

といってもアスペルガーも発達障害もピンとこない人が多いと思う。発達障害の最も分かりやすい説明は、星野仁彦氏の著作のタイトルにある。星野氏は自ら発達障害をカミングアウトした精神医学博士である。

発達障害とは『「空気が読めない」という病』である。

アスペルガーの症状を専門的にいうと、①社会性の障害、②コミュニケーションの障害、③反復性の行動・限局性の興味である。

ぼくは現在、ストラテラという薬で薬物治療をしている。ストラテラは脳内物質のノルアドレナリンを増やす薬である。

それにしても50歳になって、生まれつきの脳の障害ですと宣告されるのはショックである。今までの人生はなんだったのだろう。

もう少し早く診断されていれば、人生が変わっていただろう。せめて44年早く診断されていれば、こんなにも人生に苦労しなかったかもしれないなあ～。とボヤいでも仕方がない。

最近の精神医学まで大人ではアスペルガーはいないと考えられていた。幼児特有の障害で、年齢とともに症状が治まるとされていたのである。

最も特徴的と言われることが先に述べた、空気が読めない、いわゆるKYである。

ぼくも生まれてから五十年間、空気を読め、と言われ続けてきた。幼児や小中学生の頃は周りの人のことを考えて下さい、みたいな表現であったが、要するに、空気を読め、ということである。

もし空気を読んでいたら、まんじにこんな場違いなエッセイは発表していないだろうが。

アスペルガーにとって空気を読めというのは、目の見えない人に本を読めというのと同じである。視覚障害者によく見るとか、聴覚障害者によく聞けとか言わないが、発達障害者には空気を読めと言われる。

何度も転職をしているが。職場での空気が読めず、会社の人間関係も悪くなって退職というパターンが多い。

アスペルガーは営業向きでなく、営業成績が悪いためでもある。

最初に勤めた銀行は13年半いたが、銀行のように1万人もいる組織だとアスペルガーの要素があっても務まる仕事があったのだろう。それに約3年ごとに転勤するので、人間関係が上手くなくても精算されるのである。

ぼくがうつ病と診断されたことがあるが、実際はアスペルガーによる適応不全の結果、二次的に発症したのであろう。

彼女いない歴が半世紀になるのもアスペルガーのせいである。アスペルガーは人間関係が苦手なので、恋愛は男女の人間関係だから、よけいに苦手なのである。

引きこもりになったのも、アスペルガーのせいである。

郵便ポストが赤いのも電信柱が高いのも地球温暖化もみんなアスペルガーのせいである。

他にもアスペルガーの特徴として、妙なこだわりがある。ぼくが文字の位置にこだわるのもそれである。極端な反復行為をするというのもそうだろう。

他にも整理整頓ができない、段取りが悪いというのもある。整理整頓ができないのが、脳の構造のためとは思わなかった。

夢想にふけるというのもある。ぼくの文章もアスペルガーのなせるわざである。

特定の音や光の知覚過敏なども、ぼくは該当する。

今回、アスペルガーが判明したのは、勤務先から言われたからである。発達障害かもしれないので、病院に行くようにと指示された。

言ってくれた人が今までの上司の中で一番好きな人だったので、素直に従えた。一般の会社であれば人事部長に当たる。ぼくは面接で一目惚れして、入社した。

もし、嫌いな人から、お前は頭おかしいから精神病院に行ってこい、と言われたら、意地でも行かなかった。

その週の土曜日には心療内科に診察に行った。先生から発達障害でアスペルガーと診断されたが、自分でもやっぱりという感覚だった。

それにしても50歳の今から人生をやり直すというのは、大変である。

早く知っておきたかったのは、向かない仕事があるからである。アスペルガーは営業職・管理職は向いていない。つまり、普通のサラリーマンは務まらないということ

とである。

それならアスペルガーは仕事ができないというかもしれない。しかし、向いている職業があって、例えば研究職である。

アスペルガーは知的障害を伴わないのである。

理系か文系かといえば理系の方が向いている。ぼく自身も理系の方が向いていたのに文系にいってしまった。

中学時代から将来は生物学を専攻して、研究者か実験に従事するような仕事をしたいと思っていた。

中学三年生の時には、生物学で東京大学に行くつもりでいた。中学生の模擬試験では灘高校も合格の可能性は半々だった。灘高に行けば東大に行けると考えていた。

貧乏だったから、大阪の公立校に入学した。学区内で一番の公立校だから、上位1桁の成績だったら、東大か京大に進学する。ぼくは最初の試験が8番で、最後の試験は文系で1番だったから東大に行けると思った。

なぜ、文系になったのかというと、高校のカリキュラムの影響があった。理科で生物を選択すると、ほとんど文系になったのである。

生物学部を受験しようと思うと、高校では生物の授業を受けずに物理・化学を選択しないといけないように言われていた。

ぼくは大学受験で生物を受験すると中学時代から決めていたので、文系か理系の選択以前に生物を選択した。

高校では運動部に入らず、生物部に入ったくらいである。

実際には高校三年で生物選択の理系クラスが一つできたので、理系になれたのである。

理系でなく文系になった原因は、アスペルガー症候群である。

ぼくは学校生活でも人間関係が上手くいかず悩んでいた。それで、高校二年生の時に心理学に興味を持ち、学ぼうと思ったのである。心理学は理系でなく文系である。

今から考えれば心理学は独学して、生物学に進学すれば良かったと後悔している。

受験では苦労した。最も不得意の科目が日本史で、その次が世界史だったのである。

東大で心理学部に進学するには、その二つが必要である。ぼくの得意な生物の受験の比重は50分の1しかない。(生物は共通一次試験の10分の1の配点で、一次試験は東大では5分の1)

東大の文系数学は4問中合格者の平均正解は0問、つまり、ほとんどが部分点で合格している。2回目の東大受験で2問正解していながら、落ちたのである。

よほど日本史と世界史の成績が悪かったのだろう。理系だったら受かっていたと思う。

さて、今回はアスペルガー症候群ならではの、ぼくのエピソードを書いて一話完結にしようと思っていた。

ところが、また別の問題が起きて、それどころでなくなった。

50才の今まで、健康診断ではオールAだった。

血液検査も正常血いや正常値をずっとキープしていた。

体重は30年間53kgを維持している。ウェストは69cmか70cmである。

裸眼で視力も両目とも1．2で、老眼の心配はない。生まれつき視力が悪く、小学生時代は眼鏡をかけていたので、生まれた時より良くなっているくらいである。

健康診断以外でも、体は若いつもりでいた。歯は一本だけ治療済みだが、他に虫歯は無い。

髪はストレスで抜けたこともあったが、今は小学生のときよりも多い。白髪も50才までほとんど無かった。

今年の6月（つまり今回の締切）に受けた会社の定期健康診断で、オールAどころかBとかDが出たのである。50年目にして生まれて初めてである。

血液検査で複数のBが出ただけでもショックなのに、D（今回の検査では要精密検査）がでたのである。

それは便鮮血いや便潜血の欄である。赤痔いや赤字で『十』と記載されていた。これから大腸内視鏡検査を受けるので、結果を次号に書こう。

痔の人は便潜血検査にひっかかるらしい。だから、便潜血が陽性でも気にしなくてもいいかもしれない。

不幸なことに、生まれてから一度もぼくは痔になったことはない。

なんせ、ぼくはケツの穴の大きい人間である。ケツの穴が大きい傑物は痔にならない。

魚拓のようにお尻の穴のまわりに墨を塗って紙に貼り付けて、その紙を額縁に入れて飾りたいくらいである。

白馬にまたがった王子様、ならぬ、白馬並みのまたがあった王子様に愛されたぼくである。痔になったら愛されることができないではないか。

とこんなことを書くから同性愛者と勘違いされるのである。もっともぼくは同性愛者を差別しないから。勘違いされても否定しないが。

Gメンでも痔メンでもない、ぼくがなぜ下血するのか。気になってアスペルガーの話も中途半端になった。

同時多発テロみたいだ。悪いところが出てくるのは続くものである。なんて書きながら、まんじのネタがまた出たとマゾ的に喜んでいるところがある。

アスペルガーの話で読み切りにする予定であったが、尻切れトンボになり、次号に続ける。休載にしようかとも考えたが、連載を続けるのが生きている証である。

尻切れトンボといえば、尻切れトンボになった夢を見た。ぼくはトンボの羽が生えて、尻から血を流していながら飛んでいるのである。液体のてんとうむしがお尻から落下している。

アスペルガーの話の続きを次回にすると書いていながら、できなかったらどうしようかなあ？

編集後記

今年の梅雨が空けて「これから真夏の太陽と酷暑！」と覚悟したのですが、七月二十六日現在真夏の太陽にはあまりお目にかかっていない日が多く、これからが思いやられます。

九州北部と東北・北海道の豪雨、特に九州北部の水害には、テレビで被害の惨状を見る都度あまりのひどさに驚いています。心からお見舞い申し上げます。

がっかりするのは国会ですね。国民の代表と言われる国会議員や中央省庁の立派な肩書を持ったお役人が、「言った」「言わない」「覚えていない」「知らない」・・・子どものケンカではあるまいし、と云いたくなります。国民の目の前ではこんなことはしないで、与野党から専門的な「調査チーム」でも作って、その結果を国民に知らせてくれれば十分です。国会では、アジア地域内での国防や外交のあり方など、国民を守るために、日本の差し迫った国家的問題を議論していただきたいですね。

まんじ一四五号は、前号を上回り、二十二名の同人が参加し二十三編が発表されました。おそらく十号毎に発行する記念号を別とすれば、記録を更新したことと思います。一四五号からは稲垣克己氏が初参加しました。稲垣氏はいろいろな分野で執筆されていますので、これからが楽しみです。

まんじ一四五号に発表された方々のうち、八十路の方々が小生以外に十人はおられるのではないかと思います。皆様がご健康に恵まれ、今後益々ご健筆を揮われることを祈っています。

末筆ながら同人皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

（鍋）

まんじ第145号

平成29年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 045（346）2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東ワークス・モトヤマ（日東印刷株式会社）
〒154-0016　東京都世田谷区弦巻3-13-18-202

表紙の絵について
「木鶏は動ぜず」

田寺怜葦（たでら　れい）画

まんじ

No.146

2017.11.1

まんじ第百四十六号　目次

綜芸種智院異聞 …… 永田俊一 … 4
開田高原 …… 稲垣克巳 … 30
元駐韓大使が書いた「嫌韓本?」 …… 新井宏 … 36
皇国中興と八紘一宇への道 …… 浅野博文 … 46
横浜外国人墓地 …… 鍋屋次郎 … 53
短歌　行雲流水（五十四） …… 石黒修身 … 65
漢詩　潮汐録（八十九）《漢詩の流れ77》 …… 鯨游海 … 68
漢詩　汲深録（十） …… 松井秀人 … 71
ロボット雑考（その八） …… 三戸岡道夫 … 73
古い物・遠い夢　逃げる『有楽斎』（茶道史余滴） … 忠内正之 … 92

統帥権への怨み節 …… 千坂精一 … 104
薄幸の麗人「西郷局」の生涯 …… 堀内永人 … 118
（家康と西郷局の恋物語）
「農ある暮らし～私の日常～」(5) …… 古屋富雄 … 133
東日本大震災の被災地を走る（その二） …… 安藤剛 … 138
世界の国旗から学ぶ（第五回） …… 米村典紘 … 151
内田国の間（かん）物語 …… 横山正義 … 170
人たらしの文章 …… 山田嘉久 … 175
—司馬文体の魅力（3）—
千家尊福伝（一七） …… 村上邦治 … 184
社会主義者と対峙した司法大臣
明治時代の著述者　渋江保の一生（その十一） … 山本勉 … 199
ぼくは肛門である …… 匠克仁 … 205
編集後記 …… 編集子 … 212

綜芸種智院異聞

永田俊一

空海が綜芸種智院を開設したのが天長五年（828）。彼の熱心かつ高邁な設立運動に、後の右大臣藤原三守（786~840）の寄付があって実現したものだった。これは当時世界的に見ても画期的なことであり、アメリカの科学史家　G・サートン（1884~1956）も、著名な『古代中世科学文化史』第二十九章の中で、「弘法大師は、新しい表音字（平仮名）を発明し、日本における最古の公共学校の一つを設立した。」とその事績を称えている。

なお、九世紀の前半を叙述したこの章でサートンは「日本ではこの世紀のはじめに新しい二宗派が創設され、それが人民の宗教的要求にうまく適合したため、やがてこの二宗派は最古の諸宗派をしのぐにいたり、今日まで栄えている。この二宗派の開祖は真に偉大な人たちであった。八〇五年に天台宗は伝教大師（767~822）によって、一年後に真言宗は弘法大師（744~835）によって開かれたものである。両派とも中国から輸入され、その特徴は諸説混合主義であった。この二宗派は、上下の別なくあらゆる人心に与える何ものかをもっていた。その成功の一因は、国民的神道を仏教のなかに包括してしまった（両部神道）ためであった。弘法大師は、日本文明の建設者の一人であり、日本史上で最も愛すべき人物の一人であった。」と空海を紹介している。

綜芸種智院は日本の信託前史の嚆矢として紹介されることが多い。空海の構想に基づき、藤原三守が平安京の少し東にある広大な土地と五棟の住まいからなる白邸を提供、経常的な経費は広く寄附金や寄贈田地からの収入等で賄われた。いわば公益信託にあたるものである。それは、庶民の子弟にも門戸を開放したこと、儒教、道教、諸科学に及ぶ総合大学であったこと、教師、学生ともに完全給費制であったことなど、画期的なものであった。

サートンが空海を日本文明の建設者と位置づけていることに、違和感を抱くものはいないであろう。開院当事空海は、私寺高尾寺の住職を務め、平城京東大寺の別当職を負い、平安京創設時に設けられた官寺の東寺を賜りこれを真言密の道場として運営していた。勿論既に賜った高野山の地に金剛峯寺を建設中であった。

さてこの綜芸種智院は、巨星空海亡き後、院の維持は困難となり、承和十二年半ばまでには廃絶処分されている。承和十四年（847）に東寺において伝法会なる宗教教育・研修事業が開始されるが、財源が必要であり、そのため院関係者、弟子、信徒協議の上で院を売却したのである。その代金で丹波の国に四四町一四四歩の田畑を買い受け、その収益を伝法会の費用に充てることになった。いうならば、院の維持運営のために設定された公益信託を終了させ、残余財産（荘園）の収益を信託目的を伝法会とする新たな公益信託財産とし、受託者である東寺に運営を託した、ということになる。

しかしながら反面、日本の生活や文化ひいては国の在り方も大きく変えたかもしれぬ、畢生の天才空海故にこそ手掛けられたその夢が頓挫したことは、歴史にイフはないとしても、千年余を遡って悔やみ惜しむべきことである。

＊　＊　＊

さてその一千余年前に時を巻き戻すと、この廃絶された綜芸種智院の池畔に佇む一つの人影があった。冬枯れの庭は、凍てつき息をひそめ、白で蔽い尽くされるさだめを受け入れつつあった。遠雷がかすかに聞こえたような気がした。一片の雪が瞑想に入ろうとする彼の頭上にふわりと止まり、脳裏に滑り込んだように見えた。そこには彼が大僧都（以後空海師）と初めて言葉を交わしたあの日からの想い出が映し出されようとしていた。

一、綜芸種智院の門

（一）

空海師が作る院が庶民も受け容れるとの噂を聞いた。居ても立っても居られず讃岐を出て、島から島への舟の便を見つけてはこれを乗り継ぎ、遣唐使船も出るという難波の津に上陸。難波の京跡を通り過ぎ、内海の草香江を小舟で楫本駅に渡り、そこから陸路南街道を北上した。楠葉駅から淀川を越え、山崎駅から山陽道にのって北東へ。長岡京跡を摺り抜け、大縄手から真っ直ぐ北へ京の都へ入ったのは冬の早朝であった。桓武の御世に遷都してから三十年、朱雀大路の南の入り口にある羅城門を潜る。遥か正面に平安京の巨構とおぼしき偉容が朝日に照らされて眩しく輝き目に飛び込んで来た。隅々まで埋め

尽くすという意味ではまだ半ばであろうが、その巨構に都の密度が集中して行く感じがここに立つとはっきり分る。威容に圧倒され暫し立ち尽くして言葉もなかった。

日ざすは一つ。道々聞き質してきた通り、先ずはこの南端に立ち北に王城を仰いだ後、右手東を向き左京を真正面から見る。党塔を探すと、そこに空海師が真言密の道場として賜った東寺が見える。綜芸種智院はその先にある筈であった。東西に幅を以て走る短冊状の線を糸といい、南北を同様に走る線を坊といい、九条八坊（条は北から南へ一条から九条へと。坊は朱雀通りから東左京は東に向かって、西右京は西に向かって、それぞれ一坊から四坊へと。）の碁盤の目状のつくりになっていると聞いて来た。東寺のあるのは九条左京の一坊にある勘定になる。一つの条、一つの坊を歩き切るにもそれぞれ五町（約550m）歩かねばならぬから、九条左京二坊にあると思われる院に行くにも結構ある。一条一坊の四角には更に十六の四角が町として入るように出来ているから、朱雀の大道よりは狭いといっても、見たこともないような大きな道を四つや五つは横切らねばならない。自然は大きいといっても、街やそれを形作る道や家は比べ物にならぬ讃岐に育った私は思いもよらぬ場所探しにウロウロするばかりであった。

朝まだきと思っていたが、気付けば大道を随分の人車が行き交うようになった頃やっと辿り着くようにして、その門とおぼしき前に立った。まだ開院していないが、ほぼ出来上がっているのは見てとれた。元は先の中納言藤原三守の邸とのこと。その二町歩（六千坪）余の敷地の、森に囲まれた奥に五つの家屋が垣間見える。広大な空間に院舎の如き棟、ここが目指す綜芸種智院と確信した。暫く後で分るのだが、ウロウロした周囲は、東隣は施薬慈院、西にはさっき通り過ぎた東寺、南には墓地があり、北には官の庫がある。そして邸の南には朱雀の小沢があり、西側に車馬も往来する白虎の大道がある。その回りを巡って入り口の門に辿り着くのも苦労であった。小さな地方の、官人の通う官学校の国学しか見たことのない目に、広大で木々に囲まれ、南と北には湧水があり東西方向に流れを作っている、美しい院の様が眩しかった。

（二）

門前に着いたと思った途端、自らの風体が急に気になった。父母がかき集めてくれた路銀も使い果たし、着のみ着のままで、食べるものにも事欠く有様で門前にたどり着いたのだ。十二月初の平安京は寒い、寒さに震えている自分に気付いた途端疲労が急に襲ってきた。空腹で寝る間も惜しんでやって来たので、体がふらつき意識が朦朧としてきた。中から、工事人らしき一団と話しながら、こちらに歩いて来る作務衣の僧が見えたと思った

途端、足元が崩れ門前に倒れこみ、何も見えなくなった。

「これこれ」と耳元で呼ぶ声に気付いたのは、何時たってからのことであったろうか。目をこするとその僧が私の顔を覗き込んだ。暖かな衣をかけられ、まだ木の香の新しい大きな部屋の隅に寝かされていた。

「汝、具合が悪そうだが、如何にしてここへ。」背は高くはないが体つきはしっかりしている。丸顔が笑顔をためて覗き込んでいる。私はその時まさに讃岐からの越し路を、逆に悄然と帰って行く夢を見ていた。父や母や周りの人々が迎えの手を振っているのが見えるところまで来ていた。もう少しで両親の暖かい懐へ跳び込める、しかしそうではいけない、そこで目が覚めた。踵を返して再び平安京への道を翔け戻るかのように、我を忘れて一気に話し出した。

どの位喋っただろうか、初めてのしかも助けてくれた人を前にして、ふとその無作法な自分に気付き我に返った。恥ずかしくて下を向いて謝ろうとした。それを察してか、私の肩に手を置き制すと、

「それは大儀な。疲れを取るのが肝要だが、眠りも取れたようだから、先ず少し口に入れるが良い。随分食べていないようだから、急に沢山だと腹を壊す。ここに暖かい粥と菜と汁を少し用意してきた。ゆっくり食べるがよい。立てるか、それ。」と手を引き、力強くしかし軽々と起き上がらせてくれた。そのやわらかな掌は何か仏のそれのように感じられた。

「大丈夫です」と応えると、部屋の中央部に並んだ机の一つに用意された、食の前に座るよう促された。

私の体の具合を気遣うように僧は横の椅子にかけて見守ってくれた。私は久しぶりの馳走に、礼を言う間も惜しみ夢中で箸を執ったのであろう。

「これこれ、もう少しゆっくり食せ」

と制し、速度を落とすようにとばかり、口調もゆっくり語りかけてくれた。

「先ほど大変な勢いで喋ってくれた。寝起きにしてはとても分り易く話してくれた。そうそう、御両親のことを話してくれたくだりで、勝魚という名が出たと思う。それが汝の名か。」と問い、私が菜を頬張り乍ら頷くと、

「そうか。優しく働き者で、汝に学問の面白さを教え、学ぶ機会を作って呉れ、国学入学資格のない汝のため、遠縁の長者から、京に庶民のための学校が出来るようだと聞き、送り出してくれたご両親。汝は矢も楯も堪らず、その場から僅かな路銀を手に飛び出して来たそうな。そして大変苦しい一人旅だが頑張ってたどり着いた。何が何でも入院希望なのだな、勝魚。」

と言葉を一言一言継いで確かめるように話してくれた。

汁に口をつけていた私は慌てて箸を置き、しっかりとその目を見つめて、「そうです。お願いします」と頭を

下げた。

「勝魚、実は私の名は真魚といった。汝の話を聞きながら昔を思い出していた。その強い入院希望と話を聞いて、学問の基礎は一応できていることも分った。しかし、院には院の志願者選考のあり方がある。手続きをした上返事しよう。その前に、ここがどういう院が、汝も良く知ってから決めたほうがよいから今説明しておこう。よいか。」

真魚と聞いた途端、私の体には、稲妻が走った。日の前の人こそ空海大僧都その人であった。郷土の偉人として毎日のように噂を聞いてきた。遣唐留学僧として唐に渡り長安で密教の正統を継いで来られ、我が国に真言密教を確立し布教し、今や嵯峨天皇も一日置く大僧都である。そしてこの綜芸種智院を創設された。帰国後郷土讃岐に姿を見せられたのは七年前、満濃地の改修指揮のため短時日だけであった。父に連れられ式の挨拶の際遠くからお姿を拝見しただけだったから、目の前のこの方がその人とは分らなかった。その人が直々に私の希望を聞き、判断を下してくれると言っている。都で令名を馳せ、郷里の誉れであり誇りであり、神のような存在になっている人が、である。そんな方が院の長とはいえ、この日この時間こんな処でこんな形で私の前におられる。奇跡以外の何物でもある筈がない。吸い込まれるように「宜しくお願いします」と応えた声が、上ずっていた。

（二）

後で考えれば、直後即ち天長五年十二月十五日、院の開設時に、ここに院を創建し、儒・道・仏の三教を教えるために、その規式と序文を撰し、教師を招聘する「綜芸種智院式並序」（設立趣意書）を大僧都空海記の形で出しておられる。藤原三守卿の邸を寄贈提供して貰ったこと、儒教・道教・仏教の三教や医学、声学、工学等の学問を教えること、教師は仏教者と世俗者の二種とし後者は仏教以外の各学問の精通者を招聘すること、教師にも生徒にも糧食を給すること、等がそこに詳細に述べられている。それらを口頭で簡潔に説明してもらったのは勿論だが、印象深く残っていることは、何故このような庶民のための学校を作るべきと思ったかを、熱く語ってくれたことであった。こんな具合であった。

「勝魚は学問したくて堪らず、院が出来るのを知って艱難辛苦ものともせずにやってきてくれた。私もそうであった。しかし、私の方が恵まれていた。この国では官位なき者の子弟は、大学や国学には入れない。私は郡司の家系故国学には十三歳で入れた。そして姻戚に官にある者がいて十五で都に出て漢学を更に学び十八で大学に転じ明経の道を選択した。勿論都へ上る旅路は大変だったが、島から島へも、つてで官船の便を利用出来たし、

藤原京へは途中から叔父が迎えてくれた。

国学は国博士が一人いて前後八～九歳の三十名くらいの学生に、専ら儒学を教えてくれたが、原則五位以上の子弟を対象にした大学では、明法（法律）、文章・史学、明経（儒）学、算学、更に付属機関として医学、陰陽等幅広く学ぶ選択肢があり、教師も応じて博士、助教等多数だった。私は明経から入ったが直に修し、様々な学問にも触れ、更に仏教への関心が高まり、在籍のまま道をそれた。

個々人の向き不向きはあり、色々悩みながらも学びたいところを見つけ、自分を磨き生きてゆく道を求めてゆくために多様な学びの出来る学校は、個人にとっても社会にとっても有意義なものだ。大唐の都では坊々（各区）毎に塾があり児童にも教えており、また各県に郷学を開いて広く学童を導いている。結果才子達は都会に満ち、六芸（礼・学・射・魚・書・数）に達した人々が国に満ちている。学の裾野を広げ、全体の学の力を上げることが、国の力を上げることになる。いまこの平安京には大学が一つあるだけで、塾はなく、貧賤の子弟は教えを受けるところがない。

院を作るのは、そうした人々を広く救済して行く先頭に立ちたいと思うからだ。この努力を積み重ね、無にならぬよう後の人々に継ぎ広めて貰いたい。」

聞きながら、もう入院が許されたような気になって、空海師同様「先ず明経道を学びながら、余裕が出てきたら諸学にも馴染み、何になるかはそれらを踏まえて考えて行こう。先ずは深く学ぶことだ」と思ったりした。それにしても、讃岐の田舎のその日暮らしの生活の庶民の子弟に正式な学問を受けられる日が来るなど思いもよらなかった。自分は変わった子であり、学びたいとは希ったが、国の定めた学校に入れないことの事実はそういうものだとしか思っていなかった。それは変だとか、制度を変えるべしとか、自分達で作れないか、などど夢想もしなかった。それが、そう在るべきで、夢でなく実現させる為の事業として、仕組みを考え、働きかけ、実現させてしまう、空海師の力に改めて驚嘆した。

一、学生

（一）

こうした事情で開院の時の、まだ数人の教師・学生の一人になった。しかし年が明けるとみるみる人が集まり、選択する道・科目による組分けや、教師・学生の組合せも次第に整い、住居棟の部屋割りや厨房棟の糧食賄いも円滑に進み出し、式並序（「綜芸種智院式並序」）で示された方針に沿い順調に進行しているように感じた。

すなわち、教師は大きく二種に分かれる。一つは仏教

学の僧侶による伝授（道人伝授）で、顕教（一般仏教）と密教（真言教）を選択に任せ夫々の法師が教える。その際、教師である法師は心に、四量（慈・悲・喜・捨の利他の心）四摂（布施・愛語・利行・同事の菩薩行）の気持ちをもって倦むことなく、相手の貴賤に関係なく教えるよう、指示されていた。

二つは仏教以外の一般の学問（外書）である。勿論仏教との兼学も認められるが、こちらは在俗の士が教える（俗の博士教授等のこと）。これには九経（易経・書経・詩経・礼記・春秋・孝経・論語・孟子・周礼）、九流（儒教・道教・陰陽道・法家・名家・墨家・縦横家・雑家・農家）、三玄（荘子・老子・周易）、三史（史記・漢書・後漢書）、七略（輯略・六芸略・諸子略・詩賦略・兵書略・術数略・方技略）、七代（晋書・宗書・斉書・梁書・陳書・周書・随書の七代史）。詩歌或いは銘賦、音・訓の読み方、句読あるいは全体の意味。これらのどれでもよい、教えられる士が教師となり住み込む。仏教者で仏典以外の外典を志学するものには学生の質に応じてよくこれを教える。青少年（青衿・黄口）が作文や書を学びたいなら、儒教の教師が大慈悲の心を以てあるいは忠孝の思いを心がけて誰にでも平等に倦むことなく教え導くべしとされていた。

そして、授業料もないし、教師・学生ともに住まいは邸内に提供されるし、糧食も給される。それは、本院の意義を認めた人々の寄附や寄贈された田畑から上がる収益や東寺からの援助等で支弁されるということであった。資金面でいうと、所謂貴族の門流がそれぞれ作っている私学（大学に入るため或いは通うために大学寮に隣近接して）もその経常的経費は、自己所有の田畑の幾つかからの収益を充てると定めているものが多い。学舎（土地・建物）は私邸の提供、経費支弁は寄附（定期支弁になるよう田畑からの収益という堅実なものが多い）である。当院もそうであるが、目的が庶民教育であることからいって、庶民から資金が出てくる筈もなく、貴人からの寄附（邸、田畑の収益、金銭）あればこそで、空海師の収金能力の高さにまさに負っているものである。

このすぐれた計画を褒め称える声が満ちてきたことに対し、「私には力はないが、一簣（ひとつのモッコの土）を九仞の高い山に積み上げ、消塵（少しの塵）でも八挺の国土隅々まで滴らせ行く気持ちで努力し、四恩（父母・国王・衆生・三宝）の広徳に報い、仏果を得る良き因としたい」と述べつつ、「多くの人々の協力が必要です。陛下の許可を頂き、太政大臣・左大臣・右大臣の三公が協力して下さり、多くのすぐれた方々、仏教諸宗の僧侶方が、私と心を同じくして下されば末永く続けて行けるでしょう」と期待を表明しておられる。

（一）

日差しが春めいてくると、広大な院内の木々や草花が緑や明色の衣を付け始め、小川の流れも囁き、松籟や竹風はさわやかで、池水や梢に鳥の囀りも聞こえてきた。散策をする者、談笑をする者、木陰で読書する者・憩う者、学びの邸園らしい雰囲気を醸し出して来るようになった。私もやっと、自分に合った科目や教室を選択出来、教師や友人たちとの話も慣れ親しくなり、やっと父母に消息を伝える余裕が出来た。

時に変更があったが、基本的には大学寮も国学も入学年齢は十三歳から十六歳、就学年限は九年で、入学資格は大学は諸王と五位以上の官人の子弟（六位以下八位以上でも相当の中級官僚の子弟や特に請願された者。）、国学は郡司の子弟となっていた。空きがある場合、庶民が入学している例も無い訳ではなかったが稀であった。そこへ行くと当院は庶民の学校であり、学齢や科目等は官学を参照してはいるが、そもそも初めての試みであるから、不揃いが多かった。学びたい・学ばせたいとの自薦他薦で面接も行なっているので、無秩序というものではなかったが、科目・学生・教師の組合せを教育可能な範囲に纏めるのに苦労があった。しかも趣意書にもある通り、読み・書き中心の学童教育も行ったので尚更であった。

私は幼少時代から僅かながらも、周囲の知り合いや学の経験のある人々から教えを乞うたり書物を得て、論語などの経書の読み書きはかじっていたので、初級といえ明経科で出発出来たのは幸いであった。智の道を順調に滑り出すことが出来た。二年国学二年大学で明経道を修した大僧都と自分も同じように進むのだと甘く思い込んでしまって、後に苦労する。

確かに初めて庶民の門戸を開いた学院で画期的なことは間違いなかったが、教科は大学水準の構成になっており、その水準からそれなりに入ってゆけるのは、寺院関係の子弟の方々が多く、官に関係して大学・国学には資格のない子弟の入学者も少しはいたが、純粋の庶民でそのレベルは更に僅かで、その二～三名と私は例外的存在であった。しかし、青少年の学童に対し読み書きから入って教えることにも努めるよう式並序にあるように、そこからの助走も用意されていたし、国学・大学に比べ入院年次も若い方にも弾力的であった。時が経つにつれ底上げもされてきたし、世間周知が進むことによって当初水準の高い庶民の入院も増えてきた。

さて、結果勉学は夜も日もなく、支給の教材は勿論予習復習怠りなく、これと思った書物は、院内の書寮は勿論、東寺初めとする諸寺や大学寮に便宜を図ってもらい、借り出して読み漁った。そんな私をみて仲間達は、勝魚でなく飛魚と渾名した。しかし、皆学びたいが学ぶ機会のない飢餓状態で入院してきているので、多かれ少なかれそんなところがあり、教師も式並序にあるように、学

生の意をよく診ながら懇切に教え指導してくれた。

しかし、二年も経ち声変わりもし背も伸びると何か物憂さを感じるようになる。飛魚の羽がもげたように試験の成績も水面下に墜ち、科目を進めるのが難しくなった。知識が頭の中に溶け込みづらくなった。周りの友人たちも、気付くと院を抜け出て都大路に誘われ出る者や楽や射などの芸に時間を費やす者が目立つようになった。私も誘われる儘に遊びに興じたり、ふらりと外出することが増えた。里心から衝動的に荷物を纏めそうになったこともあった。

（三）

そんなある日、講話に訪れた後、院の状況を教師方から聴取しておられた空海師から呼び出しがあった。ご注意を受けるのだろうと恥じ入りながら御前に出たところ、意外とにこやかに慈悲に満ちた眼差しで、しかし私の心を射抜くように言葉をかけてくれた。

「汝も悩みの時期に入ったな、飛魚」

とご存知ないと思っていた渾名で呼ばれ、何のことかも分からず暫くぽかんとしていると、それを見透かすようにゆっくりと話し出された。

「あの時私のことを話したが、悩みながら学んだということも申したかと思う。聞けば、汝は最近成績が上がらぬようだが、飛魚はただ飛び続けているのではない。水面下で力を蓄えつつ飛んでいる。ただ知識を詰め込み続けるだけでは、いずれ飛翔力がなくなる。咀嚼し考える力をつけながら飛ばねば高く遠くへは飛び続けられない。ただ多くを読めば多くが身につくのではない。考え智と智を繋げ体系的に頭に詰め合わせる努力・訓練をしてゆけば、自ずと見えてくる日が来る。倦まず励め。そして悩みは必要だ。何故なら、その裏に自分が何を如何にしたいのかが潜んでいるからだ。自分が将来何になりたいのか、学びは学びそのものが目的ではない。教師・博士は学びを教え導く目的があるから、その智は一層強くなる。目的がはっきりしてくれば学び方もはっきりしてくる。勿論今は考える力をつけ智を拡げる時期で、それがないと目的もはっきり決めることは出来ない。明経の道をしっかり泳ぎ飛んだ上で、余裕を作って詩歌・文章・法の道や仏の道や芸の道、そして世の中を観察する事等視野を広げておくことも、何に生きてゆくかの決断に役立つだろう。余裕を持って励め。」

と諭してもらった。

私は恵まれていると改めて感じた。ちょうどその岐路にある時毎に空海師が私の前に現れ、まさにそのとき必要としているものを授けてくれる。上天の慈雨というか、必要その時そのもの故水はあっという間に染み込んで力となる。

勿論空海師のそれは、余裕そのもので、その短期間で

明経の道は勿論のこと万般を自家のものにした上、大学も早めに修し、儒教・道教・仏教の道を夫々行く役者を仕立て劇にした「三教指帰」初稿を書き、自らの仏道に入る決意を示し、在籍のまま外で独自に修養し、仏道に新しき道を切り拓く目的を以て、野に出て修行に自らを駆り立てて行った。後にそのことを知り、その器の大きさに雲泥の差があることを思い知ったところでもある。

なお、この「三教指帰」劇のあらましは、次の様なものであり、結論は違うが、儒の道をとることを決意する時参考になった。また、同時に社会の在り方を考えてゆくに当っても役に立った。

『本能のままに自由勝手に生きる蛭牙公子という兎角公の甥を諫めるため、空海師自身の叔父で儒学者として名高い阿刀大足らしき儒家の亀毛先生、道教の虚亡隠士、そして師自身のようである仮名乞児という大乗仏教を説く若い層が順に現れる。

亀毛先生は、幸福は本能の儘では得られず、努力により役立つ人物になり、結果栄誉を収め、富を得て満ち足りた生活を送ることが真の幸福と言う。

虚亡隠士は、人の世のはかなさを指摘、天仙の清福をたたえ、現実の生活に対して天上の静寂な喜びの中に人間の真の幸福があると言う。

仮名乞児は、それらは自我にとらわれており、出世間（仏教）の生活を知らないものである。人生を生きている間だけのものとは考えず、永遠の過去から永遠の未来に向かって連続する生命を考え、仏陀に向かって歩き続けることを人生の目的にすべきと、言う。

納得した一同で十韻の詩を合唱して幕が下りる。』

（四）

こうして、危機を脱し、勉学の姿勢にも学院生活という点にも余裕が出て、ほぼ思い描いた時日で履修も進み、三年目にも入ってくると、胸中に将来への思いも少しずつ形をなすような感じがしてきていた。国・社会のために何を自分はなしうるか何がよいだろうか、そのために何になるのか、という想念であった。政治を動かすのは如何であろうか。なるほど、院は庶民にも官途への可能性を開いたが、其の為の機関である大学・国学にしても、特定氏族による門閥が定着して、上位が望めぬ状況に鑑みると、留学生として遣唐使にでも加わり、異次元の知識・能力を評価してもらうしかないように思われた。

仏道はどうであろう。空海大僧都が真言の教えを、最澄大僧都が天台の教えを、奈良仏教の論と違い経として、衆生の心の救いを齎したことで、仏教界に劇的変化が起きている。そして各寺院での修行もあり、門閥はない。ただ、心の問題でもあり、向き不向きは俗世界に比べ厳しいものがあり、私にはなお、そちらへの情熱が湧

いてくるようには感じられていない。

自分は学びが好きだし、また教えることにも関心がある。そして、空海師が言われ、式並序にもお書きになった「大唐の都では坊々（各区）毎に塾をおいて児童に教えており、また各県に郷学を開いて広く学童を導いている。結果才子達は都会に満ち、六芸（礼・学・射・魚・書・数）に達した人々が国に満ちている。学の裾野を広げ、全体の学の力を上げることが、国の力を上げることになる。」の言葉が忘れられなかった。私は更に学問するとともに、教育を世の中遍く夫々の学びたい意欲を吸い上げられるように広めてゆきたい。そんな思いに収斂してくるようであった。

なお衆生を救うということでは、医が重要である。特に平安の世になってから、中国の医学が在来のそれに取って代わりつつある。この分野では大学・国学・当院とその進歩には横断的な協力が為されている。私も余裕の出た時間で施薬寮へ行って学んでいる。

三、高野山

（一）

自分が学を教える道を目標として選ぼうとする頃、空海師に異変が起こっていた。これが私は勿論院にとっても大変化につながってゆくこととなる。

開院から三年目が少し過ぎた頃から、そのお顔を見ることがなくなった。間もなくご容態が勝れないようだという噂が院内にも広がった。そして、天長八年（831）六月半ば、悪瘡を理由に大僧都を辞する表を朝廷に奏された。そうした身でありながら、翌年夏高野山で万灯会を催すまで、生き急ぐように諸事を却って猛烈な速さでこなされた。そして冬に向かって高野山での隠棲生活に入られた。

その後、承和二年（835）三月二十一日入定されたが、この間三年近く隠棲生活とはいえ、しっかりされており、むしろ即身成仏に向かって自らの意志にそって穀を絶ち死期を設定していった趣のようであったと聞いている。

空海大僧都は、唐長安の青竜寺で精神原理を説く金剛頂経系の密教と物質原理を説く大日経系密教を合わせ継ぐ唐の恵果和尚から、学法灌頂、伝法灌頂を受法、正統を一身に譲り受けた。帰国後その金剛界と胎蔵法の教養の綜合化を図り完成させた真言密教は、無限の宇宙に存在する全てのものに内在するといわれる大日如来と兜率天で日夜説法しているといわれる弥勒菩薩を柱とし、即身成仏を理想とするものであった。空海大僧都は恵果和尚から、この世の一切を遍く照らす大日如来を意味する遍照金剛の灌頂名を与えられたが、将に天空の真ん中に位置する太陽のような存在であった。京にいなくとも隅々迄その意は行き渡ったし、現世における各界からの

尊崇も変わりないものであった。

しかし、そうであっても大きく松明を掲げた師の姿が現にそこにないことは、院の勢いに少なからず影響を与えたのは事実である。年を追うごとに増えてきた人員も隠棲を境にに入りが減り入定とともに純減に転じた。そして、寄附や田畑からの収入も減って来て、東寺実恵長者の経営努力も中々実を結ばず次第に院の運営が苦境に追込まれつつあった。

この間私は、遣唐使の勅の出た承和元年（834）、院の明経科の助教に就任し、この隠棲中の師にお目にかかる機会を得た。初めて高野山に登った。初夏であった。

（二）

自室に座し私を招じ入れた空海師のお姿からは、死の危険のある悪性の腫れものがあるような様子は毫も感じられなかった。正月には宮中で修法を行い、二月には平城京に出掛けたとのことだった。六年前門前で拾い上げて下さってから、励ましの言葉を掛けてもらい、何とか学を修し、今回は思いがけず教える側に採用されたことに礼を述べる私の言葉を、目を細め頷きながら元気そうに聞いていただいた。「汝には期待していた、誠に良かった。」と短いが滋味あふれる言葉を授かった。下げた頭をあげて「ところで」と云おうとする前に、「ところで、院の状況は如何であろう」との問いかけがあった。

将に庶民教育の成果を増し続けて行かねばならぬこの時に心配な兆候が顕れており、大ごとにならぬ前に手を打つ必要があるのではないか。それこそ私が敢えてお話せねばと強く思って、師のおられる高野山に登って来た訳でもあった。いちいち頷きながら聞いておられ、大きく頷かれると、

「そうなのだ。正月、京都へ行った時も実恵ともそのことを話した。勿論学びの内容を改善して行く必要はあるが、庶民にも力が付いてきてその必要が無くなるまでは、前から申している通り、資金を何とか集めて維持していかねばならない。個々には別として、私が帰国してからというものここまで、飢饉や災害や乱が多く、通う庶民も寄付者の高位の人々も余裕がなくなっている。ここが踏ん張りどきと、その時も身体に鞭打ち多くの貴顕に出捐の維持強化をお願いはしてきた。一つでも広い田畑からの収益の上がりの寄進が、我等の国家的教育事業に信じて託す形で加わると、経営の恒常的な安定に繋がるのだが・・。」と嘆息気味に述べられた。

「そうでありましたか、お身体に障りますのに御尽力いただいておりますことも存知もせず、失礼しました。」と申し上げると、

「国の為でもあり、私の夢でもあるから。大唐の都では坊々（各区）に塾をおいて児童に教えており、また各県に郷学を開いて広く学童を導いている。結果才子達は都

会に満ち、六芸（礼・学・射・魚・書・数）に達した人々が国に満ちている。学の裾野を広げ、全体の学力を上げることが、国の力を上げることになる。」

将に私が諳んじているあの時のお言葉だった。そして、

「汝は唐へ行く気はないか。あの闇塾の坊々に立ち並ぶ様を見たくはないか。」

と思いがけない問いかけを為された。虚を突かれて驚いていると、

「知っての通り、この一月十九日遣唐使の勅が下った。我等は鎮護国家を標榜しており、真言教の更なる深化もある。国の発展の為以前から遣唐使派遣を奏上してきている。承和に改元されたこの正月、改めて嵯峨先太政天皇に願い上げたところだ。当山からは請益僧として真済、留学僧として真然をやる積りだが、叡山からも行く。ついて行ってはどうか。大唐の教育制度を汝の口と耳で学ぶべき所があるか行って確かめてきては貰えまいか。」

と説明があった。

そうか、そういうことだったのか、明経科の博士が助教に就任した私にしきりに師のところに挨拶に行ったらどうかと言っていたのは。博士にも私は院の経営問題について口頃意見をよく言っていた。

（二）

師が留学僧として渡った前回の遣唐使から三十年余、その時の藤原葛野麻呂大使の子の参議・右大弁藤原常嗣が大使に任命されていた。四艘の大船で六百余名が派遣されるが、船の建造には一年以上要するので出帆は来年春になろうとのことであった。漂流の末遥か南方で福州に漂着、艱難辛苦四カ月余かけて長安に辿り着いた葛野麻呂大使は、空海師の唐人士顔負けの語学力・文章力にどれ程助けられたか、その感謝の念は子の常嗣大使に受け継がれており、請益生（短期留学）の資格で大使と同船で連れて行ってくれるところまで師は働きかけてくれたのだろうか。

就任したばかりの新たな助教の仕事に慣れ、院の活性に力を尽くすことは疎かに出来ず、そんな忙しい毎日の中から何とか時間を作って、唐教育関係の資料や書を探し読み、また識者を尋ねて指導をいただいたりすることに努めた。一度郷里の我が家に帰ってこようと思いもしたが果たす時間も無いまま、一年はあっという間に過ぎて行った。

四、遣唐使船

（一）

しかし始まってみるとこの遣唐使は大変な御難続きものとなった。承和三年（836）五月十四日、難波の津を出帆したものの、十八日に大暴風雨に合い輪田の泊に避

難、博多の津を四艘の船が大海に向け出帆するのは七月二日となった。しかも二日後には嵐に会い漂流して大きな被害を出し押し戻された。うち第三船は大破し、船板で作った筏や板切れで津島等に漂着した三十名弱の生存者の外の百余名は命を失った。真済、真然両僧の乗った筏は二十日以上も海上を漂い、その間同乗は全て餓死、漂着救助された時お二人も虫の息だったという。これまでも遣唐使船は、唐での日程の関係で海の荒れる時期の渡海が多く、また箱型の大船であるため荒波に翻弄されやすく、航海の危険が高いことは共通の認識になっていた。勿論、遣唐使に任じられることは、勿論日本の為の崇高な役割を担うことであり名誉なことであるのは論をまたない。しかし、この危険の多い航海は、最悪の事態を思う時、死も覚悟の上という心持であった。私もその事を改めて思い知らされた。

そして大修理や諸準備調整に時間を費やし、この間修理立会いの僅かな人数を残し、殆どの人員は一旦京に入り、夫々の居所に戻って待機した。これは太宰府にその間これだけの員数を養う力がなかったからであった。

次に三艘の船が旅立つのは翌承和四年（837）八月であった。しかもまた運悪く、出帆間もなく肥前松浦郡の沖で逆風に遭遇、第一・第四船は壱岐に流され、第二船は値嘉島に漂着、再び修理を要することになった。第一・第四船の損傷は酷いものであった。

二度の失敗もあり、入唐は暫く延期となり、大使・副使等は太宰府に留まったが多くはまた居所に還って待った。遣唐使の為神仏への祈りが要請され、朝廷もこれに応じて全国的に寺社で祈りを行わせた。この間不作・疫病等災厄への祈りも重なった。しかし、遣唐使は中止にはならず、朝廷の勅に押し出されるようにして三度目の出航が挙行された。承和五年六月十三日第一・四船が進発し、第二船も遅れて続いた。第四船には、朝廷の指示もあり、東寺長者実恵師が真済・真然両僧に代わって二度目の旅立ちの時から要請した、いずれも空海師の弟子で請益僧として元興寺の僧円行師が、留学僧として三論の常暁師が乗っていた。私の乗った大使の第一船には、天台請益僧円仁師、天台留学僧円載師、薬師寺の法相請益僧戒明師やその従僧の方達も乗っていた。朝廷にとっても鎮護国家は焦眉の課題であり、それを仏道の面で担おうとする天台、真言教の求法の思いも強く、遣唐使の実行を期する力になっていたと思われる。

私も乗船した第一船は時化で流されながらも六月二十九日揚州の揚子江口に着いて、道行きと随所の地方政府との交渉や疫病に苦心しながら、揚州都で長安の受け入れ対応を待った。その間に、第四船が着いており、円行師や常暁師の無事も分かり、遅れて出た第二船には副使小野篁参議は乗船を拒否し乗っていなかった。

唐政府が入長安の員数を厳しく絞って来たため、一次

名簿には私の名はなかった。嘗て空海師が矢張り入長安名簿になかったが、それはむしろ地方政府長官が空海師の唐人士も顔負けの文化的異才に惹かれ引きとめた訳で、入唐の本旨を強調して難を逃れたと伺った。私の場合は単に絞られただけで、大使の取りなしで何とか潜りこませてもらった。

（二）

「大唐の都では坊々（各区）毎に塾をおいて児童に教えており、また各県に郷学を開いて広く児童を導いている。結果才子達は都会に満ち、六芸（礼・学・射・魚・書・数）に達した人々が国に満ちている。学の裾野を広げ、全体の学の力を上げることが、国の力を上げることになる。」師のこの言葉を反芻しながら、自分が遣唐使船に乗って何を調べ、どうすればよいのかを考え続けてきた。何を調べるのか。唐の教育制度が如何で実際はどの様に機能しているのかということであろう。出発を一年後に控え、本業の外に限られた時間で資料や書を集め話を聞き作業をする間は、その当るものの多さに圧倒されそれをどの様に整理し観点を絞るか、間に合うのか焦りにも似た緊張感があった。しかし、遣唐使船の建造も終盤に近くなっていると言われる頃には次第に落ち着きを取り戻してきた。資料の多さは、日本が律令国家建設を隋・唐を範にとり、この二百年に十数度の遣使を派遣し、教育制度についても数多くの人が時々の制度実態を見聞き資料を齎したからであり、それらを元に研究し書かれたものやその間に日本に渡来した唐人や唐書により膨れたものが、如何に多いかということである。しかし、不幸なことではあったが、渡航失敗が重なり、実際には出発までに足掛け四年の年月があった。また、遣使の一員の資格が資料・書物の収集への協力や資金の面でも単なる個人では及びもつかぬ様な力となった。

結果的には、学生たちにも書写や内容重複の整理など手伝って貰い、当院の書寮に、この分野の資料・文書の一大図書を作り上げることが出来た。

どうすればよいかは、問題意識と目的による。問題意識は、何故唐では場所的に隅々まで教育機関が行き渡っており、人的にも庶民にも広く機会が与えられているのか、ということになる。現に目の前の当院の経営問題を、ということになれば、入院希望者の減衰と給費等支弁のための安定的資金の不足にある。その喫緊の課題に絞ってなら、遣使に行くより残って改善に努めるということだろう。しかし、現実には私の力では如何ともし難く、妙薬が唐に求められるなら、行った方が良いということだろう。

空海大僧都は今回遣唐使船の最初の出航にあと二ヶ月の承和二年（835）三月二十一日入定した。長者を継ぎ経営に責任を持つ実恵師の下に策を考えてゆくことになった。

私は実恵師に実情を訴え、大きな手を打ってくれるようお会いする度に訴えた。師としても重々承知のことだが、色々手を尽くしても資金の確保は難航しており、支援している東寺そのものの財政も苦しいことを、逆にこぼされる有様であり、何も他の妙案を提示できない自分が腹立たしくもあった。現に、新規の明経科や文章科への応募は僅かになってきていた。遣唐使の再出航が遅れた背景にある社会経済の疲弊や、官途への途が苦学に見合う程のものではない実態が知れるところになったことが影響しているとの話も聞こえてきた。仏教学の方は、各宗に門戸を開き、俗の学も広く学べる得度決定に臨む前の学習経験として有意義ではあった。だが、天台・真言が急速に教団勢力を延ばしており、しかも教義純化もあって、各法統自身での教育に力が入る閉鎖性が強まってきたこともあり、こうした寄り道をせず、直接宗派の門を叩く傾向が強まってきたと言われていた。

事実調査の準備は格段に進んだ反面、如何在るべきかについては却って霧が深まった状況で出航したということであった。

五、長安

（一）

そして今の私は長安に足を下している。自分の目で見、耳で聞くことだ、と思っている。中国は先進世界大国である。時に変もあるが儒教の流れは長く深く広い。四書五経のうちの「大学」にあるように、大学・小学といった学び舎は、理想の国周以来整えられ大事に考えられている。政治・経済・社会全て、大唐は世界最大に達し今漸く頂点を過ぎつつあるものの、教育もまた然りである。そして国体のあり方に直結する科挙の制度と密接な関係にある。中国は王朝が交代しながら大国化し、人材の登用が行われ中央集権化してきた。日本はそれら全てに後進で、真似て律令国家建設にまい進してきた。

唐の貞観の治（627~649）で名高い第二代皇帝太宗（李世民）は、儒教の政治理念「徳治」を治世の柱とし、教育の制度化に熱心に取り組んだ。中央官学の学校教育を準備し、学校への孔子廟の設置が、国学・県学において実施され、いわゆる「廟学」の教育体制が推し進められた。さらに「五経正義」が頒布され、任官試験用の教材も統一されることとなった。太宗の時代、中央官学の入学者は貞観二年（628）に中央管轄の五校だけで三千を超え、後にそれは「三千の徒」と呼ばれ、この教育業績は歴代皇帝の努力目標となり、倣うべき範となった。その他、外国人学生の受け容れ制度を設け、貞観期に留学する人数は大幅に増え、一時八千人を超えるとも言わ

れた。

唐の官立教育機関の中央系統は、直系官学と傍系官学に分れ、前者は尚書省の下に置かれた教育行政機関国子監に属す国子学・大学・四門学などであり、国子監に属さず独立の教育機関である、弘文館や崇文館などは傍系官学とされた。この二つは最も貴族化された学校であり、家格蔭位の高さにより入学させたので入学者が少なく規模は小さかった。教育目的は、高級官僚の子弟を士官できるように養成することであった。弘文館の政治的地位は最も高く、主に皇族・王侯の子弟を教育した。国子監に属する国子学は高級官僚（三品以上）子弟を、大学は中級官僚（五品以上）子弟を、四門学は下級官僚（七品以上）子弟を教育した。この様に官人学にあたっては厳格な身分制度が設けられていた。

弘文館学士は本職をもって兼担し、本職の官位が五品以上であれば学士とされ、六品以下では直学士とされ、いまだ朝廷の官位がない場合は一律直学士とされた。即ち弘文館学士とは職名であって官位ではない。彼等は、夜は当番、昼は皇帝と内殿にて文史を論評し、政務を相談して、夜遅くまで働いた。太宗の政治顧問として学問・文化問題の相談相手の役割をはたしており、国策策定に重要な影響を及ぼしていた。

四門学は、唐初の定員は百名余だったが次第に拡充された。中・下級官僚の子弟に加え庶民子弟も入学可能になり、俊士といわれた。そして定員も前者が五百名、後者（俊上）が八百名の規模に拡大している。従って四門学の俊士生以外はもっぱら官僚子弟の士官のための学校であった。

なお、地方の系統に属する府学・州学・県学といった地方官学の設置および管理は従来同様、地方官の職務であって、国子監と地方官学との管理関係は存在しない。

（二）

制度の事実は変わっていない。むしろ、日本で漠然と感じ考えを纏めようとしていたことが、唐社会の在り様を見ることではっきりしてきた。国の大きさ歴史等同列には論じられないが、皇帝・天皇を頂点とする律令国家であるから、教育そして庶民の学校にも同じようなことが起こる、ということである。

唐は経済的にも政治的にも文化的にも大国である。貞観の治に於ける教育機関の充実も然りである。豊かで勢いがつく程庶民も力を持ち学ぶ姿勢も余裕も強まる。教育行政・教育機関・官途への試験制度も拡充した。

しかし、試験制度や教育機関における上昇流も、上位者の身分による別仕立ての維持機能により制約がはいっている。そうした制度的安全弁を持ちながら、唐代の庶民教育活動の勢いを左右する前提条件としては、「政治・社会の平和と安定」、「当事者の学校教育奨励の意志と姿

勢」、「学歴と官職への連結・制度上の優遇政策」、の三つが挙げられる。

政権が不安定で戦乱が続き、経済活動が阻害されているような場合には学事奨励を図っても成果は上がりにくい。ここ唐においては、最重要課題は強力かつ安定した中央集権国家の建設と維持にあるので、そのためには分権的傾向を持つ要素は極力抑え、中央集権を担う優秀な人材を抜擢しなければならない。政権にとっての教育振興策は人材養成の為の現実的課題に即した制度であるとしても、為政者の徳と権威を誇示し飾る道具でもある。

そこで学官に著名な儒学者を抜擢し、教学の実効を上げようとするのだが、学歴獲得に実利が伴わないと、現金なもので学生は集まらないし真摯に勉強しない。そこで学業成績によって官界入りを保証することとし、学校教育に目的をもたせ、また活気を取り戻そうと考えるのはむしろ自然なことである。科挙創設以後、庶民の政治上昇の途が広がり勉学の機会を増やす誘引にもなっている。貴族の子弟や庶民の優秀な子弟を官撰の教科書を学ばせ、従来の貴族官僚とは異なった官僚の養成を図ってきた所以である。

科挙の現制度は、明経・明法・明算・明書・進士の科目からなり、郷試・省試の二段階で、進士科が重んじられ、受験者千人に対して10~20人の合格で、毎年30人位が合格とのことである。次に重んじられた明経科では、二千人に対して100~200人位の合格とのことである。進士科は士大夫に重んじられた経書・詩賦・策（時事作文）等の試験が行われた。

最終試験である省試への受験資格を得るには、国子監の管理下にあった六学（国子学、大学、四門学、律学、書学、算学）を卒業するか、地方で行われる郷試に合格する必要があった。受験資格は広範囲で、私の聞いた限り受験できないのは、女性、商工業者、俳優、前科者、喪に服しているもの等であった。男の子達は基本的に受験できるということである。省試の後合格者が任官されるためには吏部に於いて、身（威厳）・言（言葉遣いと命令力）、書（能書）、判（法・制度理解と無謬判断力）といったことを問う吏部試が行われた。

知貢挙（省試の責任者）と門生（その年の進士合格者）は知貢挙を座主と呼び師弟関係を結ぶ。また高官は知貢挙の公薦（合格者を公的に推薦）が許される。更に恩隠、任子などと呼ばれる、父の官位に従い、任官される制度も重視される。このように、旧来の貴族が、なお権力を保ち続ける仕掛けもあった。

しかしながら次第に科挙出身者の勢力が拡大し、拮抗し始めて来ている。これを考えてみると、科挙の起源は、隋の初代皇帝文帝が内乱を平定し、前代の中央・地方の官吏の地位を独占していた世襲的な貴族政治を打破

し、天子の独裁権力を確立するために導入した。改めて試験の及第者を官吏有資格者とし、多数の官僚予備軍を貯え、必要に応じて中央・地方の官吏の欠員を補充する制度を作った訳である。唐もこれを踏襲、大乱平定に寄与し特権的な地位を子孫に伝えようとした新貴族に対し、科挙で採用した進士等を配下に要地要所に据えて思うままに政治を行おうとした。段々旗色は進士側に有利になり、貴族も出世しようと思えば、科挙の門をくぐらねばならぬようになっていた。

「坊々に閭塾」の景色は、科挙に拠って庶民の上昇意欲が現実に叶うという流れが強まった事が背景にある。日本も天皇の独裁権力を確立する動きが大陸の律令政治を急速に摂取する事により進められたが、貴族政治は寡占化する形で逆に強化され、貢試の形で科挙を模した選挙制度も庶民の上昇気流を大きく高める迄には至っていない。その事が庶民の経済力が弱いこととも相まって坊々に閭塾までの力にはなっていない。

哀しいかな、空海師が世の中の宜しき流れを看取し、その類稀なる影響力を駆使し、情熱を傾けたその器は、環境悪化そして空海師の亡き後、ある意味奇跡的な力が働かねば危殆に瀕することは必定という道行の可能性は、先ずは予想として受け入れざるを得ない。

貞観の治がむしろ頂点に達し、むしろ倣うべきもの、維持すべきものされている感があり、特に政治的にも経済的にも勢いの減衰している時代の趨勢の中では、夫々の要因とも後ろ向きに働き始めているようにも見える。学校教育は科挙に従属し、いわば官吏への登竜門と化したとも言われている。

後姿を追いかけている日本にも同様なことが言えよう。しかも経済力は元々雲泥の差である。科挙を真似た貢挙の制はあるが、受験資格は庶民には天井が高すぎ合格者はほんの僅かであり、なり手の貴族の身分特定化も急速に進んでいる。官学も庶民は例外的にしか受け入れず、私学も庶民用は綜芸種智院一つしかない。暮らし向きが悪化すれば、資金も細り学びの余裕もなくなる。

（二）

私は如何して行けばよいのか迷う日々であった。長安に入り大使が受け入れ側の唐朝廷に奏請し許された各遣使の行動計画に従い、唐側の援けを得て予定通り資料収集にあたり、肉体的には疲労感を覚える忙しさであったが、大した壁にはぶつからず、事実調査としては所期のものが纏まりつつあった。

しかし如何すればよいのかの迷いは大きくなるばかりであった。そんなある日、私は空海師を高野山に訪ねた日の夢を見た。あの日の師の話は一言・一言忘れることなく覚えていた筈であったが、飛び起きたのは忘れていた一言に気付かされたからであった。

「私は、長安で西明寺に滞在していた。機会があったら訪うてみたらどうか。」

早速その日、寺に向かった。

実恵師から、空海師が恵果和尚から伝法を受けた青竜寺の義明和尚宛の書状が、請益僧円行師によって届けられていた。

胎蔵・金剛界両部密教を学ぶ仏具等と共に、帰国した空海師が死去する迄の宗派の様子を書きしるし、実恵師らが恵果和尚の孫弟子としての志を表す為、恵果和尚の霊座に供える法服等のことが書き添えられてあった。

三十年の時を隔てても、空海師は長安の仏教界否長安に活きていた。死を慟哭して悼むも者、消息を詳しく質す者、その驚愕すべき異才の思い出を語る者、「空海死す」の知らせが長安の都を駆け巡ったと言ってもよい程であった。遣唐使が滞在する礼賓院（外国使節宿泊所で、東城、長興坊にある）から、そんな余韻が残っている街を抜け日指す西明寺は右京（西）にあった。長安は北（其処に皇城がある）から南に真っ直ぐ走る中心線である朱雀大路で左右に分れ、北からみて左京（東）五五坊、右京（西）五五坊の街である。左京は公的関係の建物や屋敷の街であり、右京は民家や商店や酒房の町であった。「空海死す」の余韻もあってか、驚くべきことが待っていた。

挨拶し来訪の意を告げる間もなく、迎えてくれた西明寺の僧が、一冊に綴じた書き物を私の目の前に差し出してくれた。「空海死す」の報で、書庫を探してみたところこの拾遺物が見つかったとのことであった。

覚書風のもので、あの達筆は勿論ではあるが、完全な文章にはなっていない。しかし中味は唐の教育制度のことであり、驚くことに、坊々の閭塾のこともあり、庶民教育のこともあり、あの式並序の下敷きのようなものであった。勿論制度のことも聴き取ったものは記しての上のことである。簡潔な記述だが、今回私が調べたことと筋違いはなかった。しかも、式並序で人々の貢献に期待した様に、綜芸種智院のような教育機関の日本への移入・存続の難しさや、それが故に為政者をはじめ広範な人々の支持の継続が不可欠であることを述べるとともに、私が考察しているような問題指摘も同様にまとめている。官がやればよいが、難しいが民がやらねばうまく動くまいといったことも書いてある。

六、残留

（一）

翻って遣唐使節は、藤原常嗣大使以下第一船が上陸したのは昨年（承和五年、唐では開成三年、838）六月二十九日。苦難の陸路と運河の旅を経て長安に着いたの

は十二月三日、年明けて諸蕃四国ともに天使（文宗）拝謁を果たしたのが一月十三日。この間使節団は旅の途次罹患した病に苦しみながらも、長安を離れる限られた日時迄の間に、それぞれの所期の目的を果たすべく駆けまわっていた。例えば真言請益僧の円行師は、重ねて奏請二月初には青竜寺に入ったが、残る二十日間で、二十人の書き手を雇いやっと文疏等を写すことが出来た。また、これまでになく入京等制限が厳しく、円仁師等上陸地揚州に残留した者が多かっただけでなく、長安の傍へ来ながら入京を許されぬ法相請益僧戒明師の例等もあった。また長期滞在予定で入京の留学生も道俗問わず帰国を命ぜられたりした。国内事情劣化が次第に大唐の鷹揚さを失わせていた。

遅れて到着した第二船を除き第一・第四船は破損が酷く使えないので、既に昨十二月十八日には第一船に乗って来た金正南新羅訳語（通訳）等が、帰国船用意の為楚州に赴いていた。大使以下入京者四十人余は二月十二日、揚州残留組二百七十人余が最終的に楚州に集結したのは三月初であった。そして二十日新羅船九艘に分乗して出発、三十日海州管内に停泊。第二船に乗り込んでもう少し北まで行こうと思っていた円仁師は、船がここから直接日本目指し東に向かうことになったので、残留の為惟正、惟暁従僧と共に、皆に別れを告げた。その意中は三月初めに大使に奏請しておられた。円仁師は揚州に留まって、大使から唐政府の天台山（南方台州）入りの勅許が知らされるのを待っていたが、大使の重ねての奏請にも拘わらず勅許は下りなかった。

かく言う私は日本からは同じ第一船で渡って来て、請益僧円仁師と惟正・惟暁従僧や従者の方々、留学僧円載師と仁好・順昌・仁済従僧や従者の方達延暦寺の一団の方々とは殊更親しくして貰っていた。宗教団としての強さは大使に対する影響力においても、日本からのものも含めて強い情報力においても抜群であったので、大いに助けられた。

円仁師は、実恵師の綜芸種智院の苦労とその資金集めの行き詰まりは、ままならぬ処に来ていることを、既に出発前から聞いておられ、そのことは揚州府で円仁師から直接伺った。そして楚州で再会した折には、院は既に新院生を取らぬことで将来の閉鎖を前提に舵を切り、道学生は学修予定に反しない形で、諸派の仏寺の学問僧に順次移行、俗学生も次第に修学者が卒業し職に就く支援をする形でそれに供えつつあるという情報もあった。

それを聞いた時、無念の気持ちが抑えようもなく強く湧くとともに、私の使命と私が考えていたものが街に浮いてしまったことをはっきりと悟った。

それ迄に所期の制度や実態調査は了し、所見に就いての梗概も中途ではあったが纏めつつあった。しかし仮に

帰国して最終稿を提出しても、院の存続発展の為に活用されることや、自分が出来る事も無くなってしまった。

そして、円仁師残留の決断を知った。

楚州で大使に再会しその経緯も聴取の上、目的達成の為残留を決意し唐土に留まることを最終決意されたのである。

私は急遽、空海師が青竜寺に残した、思いと考えを取り入れ纏める処までを完成させ、正式報告文書の形にした。それは円行師に託し持ち帰って貰い実恵師にもお届け願うこととした。私自身は、一度無に帰した院というものを蘇生できるのか、その為には何が必要かもっと考えてみるためにも、円仁師に頼みこみ一緒に残留、行を共にさせて貰おうと思った。大きな社会の在り方と庶民教育といった視点になろうか。

（二）

一行は、不法滞在故の役所追求等での苦難を克服しつつ、北方の同じ天台宗の志遠和尚のいる五台山華厳寺を目指すこととした。五月初め五台山華厳寺に入り、受学や天台の経疏の書写等を行った。そして七月まで滞在し、天台に関する一定の目的を果たした。その後八月二十二日には長安に入り資生寺に逗留することとなった。そして、空海師の真言密教に遅れをとった最澄師の悲願でもあった完全体の密教受戒を受けるため、空海師が恵果和尚からその密教正統を引継いだ青竜寺で、恵果和尚の孫弟子にあたる義真和尚の教えを受け、翌年（811）五月には胎蔵界大法と蘇悉地大法を受けられた。（前回遣唐使で、請益僧としての最澄師は、長安に行かず中心目的の天台山に直行、遣唐使船で帰還直前の帰路授かった一部の密教に基づき帰国後公的な灌頂儀式を行うなどした。しかし、留学僧として、恵果和尚から正統両部密教を授かった空海師が一年後、便を得て帰国、真言密を確立したため、密教では最澄師は空海師に弟子としての礼を取っていたが、やがて訣別に至った。）

この年夏には資生寺を通じて高徳使に帰国申請を提出するが拒否される。秋の始めに嵯峨上皇夫人橘嘉智子皇太后の、禅の師を招きたいとの意を受けて、僧慧夢師が五台山・天台山に幣を届け、候補者を求め尋ね歩き、長安に円仁師を訪ねて来た。慧夢師は一旦翌年春（812）、円仁師の書状を預かって帰国する。

またその頃、天台山にいる円載留学僧からの書状をもって仁好従僧がやって来て、遣唐大使藤原常嗣が亡くなったこと等が伝えられた。その際、一昨年大納言藤原三守様が崩じたことで、院の廃絶と後処理の動きが本格化していることも知った。

同時に唐世界では不幸な動きが出てきた。この年晩秋頃から動きが始まったが、翌年（813）一月には諸寺の

僧尼に還俗を命じ財産を没収する会昌の破仏が開始された。この年は武宗即位後二年目の会昌三年だったが、次第に経典の焚焼・仏像破壊、外国僧の追放令などと激しくなり武宗のなくなる迄（843）続いた。還俗令の出た年の夏には惟暁従僧が長安で客死し、仏教弾圧もあり、円載師の仁好・順昌従僧達を、報告と窮状を訴えに年末帰国させることとなった。遣唐使が新羅船で帰ったように、この頃には新羅の交易船がかなり行き来するようになっており、慧蕚師もそうだったが、今回も新羅人の張公靖と行を共にした。

そして、私もこの便に同乗させて貰い長門国に帰着した。時に承和十年（843会昌三年）十一月九日であった。

七、帰国

（一）

私が帰国した時、綜芸種智院は既に売却されており、これで丹波の国に四十四町四十四歩の田地を買い取り、経律論疏を講ずる伝法会の料にあてることとし、一時田地の帰属が定まらなかったが、最終的に東寺に帰属することになり、民部省に奏請したところであった。東寺に実恵師を訪い、暇を告げた。私が唐から送った報告書を手にしながら、「御苦労様だった。これも踏まえ努力したが、空海大僧都の御遺志を全う出来なかった、誠に残念であった。」と深々と頭を下げられた。伝法会等の為にも高野山の金剛峯寺や東寺に講義所を整備するので、そこで僧に明経博士として教えてほしいといった話もあったが、「これから自分なりに自分の道を考えてみたいと思っています。」と申し上げ、これまでの厚誼に礼を述べ、東寺を後にした。今はこれしかない、という妙に清々とした心持であった。

そして、こうして廃絶の綜芸種智院に佇んでいる。

最後の最後まで考えがぐるぐる周りをしていて出口が見つからなかったが、何かが吹っ切れた。

今はこう考えている。

（二）

社会の裾野広く学びが可能でその意欲あることは、社会に力があるということだと思うが、ただ社会に元気があればよいということではない。一人一人の智的能力や協働能力が高まってそれで社会の力が高まることでないと、庶民も含めて広く学を広げてゆくことには繋がらない。それは国の支配構造や社会や経済の構造等とも密接に関係する。

その意味で公式の報告書の所見を、教育活動の勢いを左右する要因として、「政治・社会の平和と安定」、「学

校教育奨励の意志と姿勢」、「学歴と官職への連結・制度上の優遇政策」、の三つを挙げて論じたのは、今の中国における皇帝や日本における天皇を頂点とする律令国家を変わらぬ前提条件とすれば適当であったと依然として考えている。

中国二千年の歴史は、中国庶民の一般家庭でも、子供が生まれれば、親や周りが字を教え、読ませ、書かせ、千字文のような韻文を教え、蒙求のような歴史物を教え、出来る子には四書・五経まで進んでゆく、といった意識を習慣として植え付けて来た。それがより広く、より深くという強い要請になる程、坊々に塾が出来、国が質の高い多くの教育機関を作ることに、結びつく。そして、隋・唐の天子を頂点とする中央集権国家は、優秀な国家官吏を多数求めるがゆえに、科挙の制度を整備して広く人材を吸い上げ、その試験の合格を目指す人々の学びの意欲を高め学びの場を拡充させた。

では、日本はどうか。中国文化の影響を受け、急速に律令国家を建設し、中央集権化を進めて来ており、経済力も高まってきている。しかし現状では、随分と庶民の教育意識もあがってきてはいるが、如何せんまだ歴史は浅い。その上で、政治・社会の平和と安定については、時に旱魃・疫病・大地震などで生活や生産に不安定さはあるが、政治的には内乱を繰り返しながらも集権化が進んでいる。だが中国に比べ貴族層の力も強く、氏族的な権力集中も進んでいる。学校教育奨励の意志と姿勢については、律令制度の確立の中で官学の体制を作ったが、庶民までこれを拡充する意志には乏しい。学歴と官職への連結についても同様の背景で、権力集中のための科挙のような上昇装置をそれほど必要としておらず、導入した貢試制度も振るわない。貴族制が強いので官学への庶民参加は極めて稀である（唐の四門学での庶民枠に比べれば微々たるもの）。

私学や私塾も官学補充のための貴族層が設立、一族が主に利用するものであり、庶民向けに至っては綜芸種智院の外なかった。歴史の浅さを挽回するには、各地に広く庶民に初等教育機関が必要だが、そこ迄行かない。

かれこれ考えて私はもっと長い時間、即ち今の私たちの代ではなく、また二百年や三百年の単位でもなく、時間をかけて考えるものだと、唐を離れるまでに思うようになった。政治・社会の安定も、生産や商業が盛んになり豊かさを増し、そこに従事する人々も力をつけ、社会全体の豊かさが増し多くの人々がその恩恵に浴し、政治にも力を持つようになる。そして自分たちの望む教育・学問ができるようになる。そういう時代になれば、学問への意志は学問の中味の必要性・価値から自ずと求めら

れ、その為の機関も自ずと出来てゆこう。そして官職や職業は人々の能力や特性が評価されて選択されるようになろう。勿論、そういう社会を築き上げてゆくためにも学問は要るから、倦まず歩一歩その充実に努めることを忘れてはならない。

では、それまでの間何をやればよいのか。

孔子がより良い政体の実現を夢見て、国中で学問を広め説いて回り、その承継と実践を将来に託したように、長い時間の中に自己を注入したことに思い致せば、未来に向けて何らかの種をまく努力をすることであろう。

勿論孔子に比べれば紙魚のような存在だし、しかも空海師という稀代の国造り師を失い、その遺構の綜芸種智院をも失った今、その紙魚も何処にあるか判読出来ぬものとなっていようが、一歩も積み重ねれば紙魚も点となろう。坊の閭塾から始めよう。そう思った。

（三）

郷里讃岐に帰ることにした。そこでささやかに塾を開く。資金は郷党から集められればそれに越したことはないが、安易な依存は長続きしない。院でも医を学んだが、幸い遣唐使仲間で、臨床に長じ医経にも通じた菅原梶成医師に、長安で指導を受け、中国医学の調査・聴き取りにも陪席や事後話を聞かせてもらった。日本にはこの時期まで伝統医療への拘りがあったが、前回・今回の遣唐使によって、進んだ中国医学に舵を切ったと言えると思う。残留時もこの時のこともあって医の修行を進めることが出来た。

残留も頭にあったので、この時、長安青竜寺で、空海師の覚書を書写したものを菅原梶成医師に託した。しかし第二船で帰国の途についた梶成医師等は、南海の地に漂着、干戈を交え、多数の犠牲者を出し、破損した舟を小舟に改修、一命を取り止めた人々が大隅国に帰り着いたのは、本体に遅れること八～十ヶ月（840/4.6）経ってのことだった。日本の医のためにも梶成医師が生還したことは幸いであった。医師は昨年（843）十月鍼博士に就任している。

空海師覚書書写は南方の海の藻屑となったことを知った。しかし、梶成医師が万死に一生を得たことは、私が生まれ変わったような気がして大いに元気付けられた。医で生業は立てつつ教育に当ろうと思う。空海師の蒔いた種、一からやり直しで、万人による万人のための万人の学校が何時の日かくることを夢見てやろう。

（四）

「三経指帰」は空海師が世俗を超えた仏法に身を投ずる決意を表したものであり、儒家も道家も世俗へのこだわりありと退けられている。しかし、人間の知覚は生身故であり、見えるものは目の前の世の姿である。良い世の中を作るのも悪い世にするのも生きた人間の為せるところであり、それを引継いでゆく人間社会が作り上げてゆくものである。その意味で良き人間営為を律する儒家の教えを、更に磨き広めて行くことが大事である。全ての人々が等しく良い世と思うのは何時、如何様な社会の形になっているかは分からないが、良くなろうと自身を律しながら努力していることは事実であり、これから先の世代に期待していることも事実であろう。例えば五常、仁・義・礼・智・信。坊々の閭塾で教わった子達が世造り国造りをする、為政も斉家も「信なくば立たず」であり、「信じて託す」から次世代がある。

空海師自身は仏法に悟りを見出し、鎮護国家で国造りに当った。しかし、俗世を良い世にする目標に変わりはない。どの道を取り貢献するかであり、それが適切であれば「三教」の夫々の道を否定するものではない。それはあの書写した覚書にも籠められていたし、だからこその綜芸種智院であった。

院の資産を託されたのは伝法会だったとすれば、その意を託されたのは、あるいは託した空海師の心を知っているのは私ということだろうか。

＊　＊　＊

彼の思い出をこれ以上五間見ることは出来ない。歴史も語るところがない。

ただ、その後従僧仁好は翌承和十一年（844）夏再び入唐、円仁・円載師への朝廷からの支給金も運んだ。そして次の年（845）春、円仁師一行は追放令で帰国することとなり、長安を去り、何度となく渡海の計画が頓挫しつつも、ついには二年後承和十四年（847）の九月、山東半島赤山浦を新羅船で出帆、半月の旅で太宰府に帰着した。先立つ七月、従僧仁好等は、招来僧義空を伴った慧蕚師と共に先発し、唐に留まる円載師からの表状を奉っている。

後に天台座主となる慈覚大師円仁一行は、翌年（838）三月まで太宰府に留まっていた。その間訪ねて来た彼との再会に「日夜を尽くして皆で語り明かした」と仁好が語るのを聞いた者があったとのことである。

（了）

開田高原

稲垣克巳

家の前を走っている中央線は、岐阜県東濃地方を経て木曽の山中に入る。

父は生前毎年夏に木曽福島に開設される林間学校へ、生徒を連れて出かけていた。幼少の頃、毎夏二週間程家にいない父の帰りを、母とともに指折り数えて待っていた。

私がはじめてアルプスへ上ったのは、北アルプスのいちばん南に離れてある独立峰、御岳山である。家の近くの農家の人の中には何人かの御岳教の信者がいた。御岳山は近代的スポーツの登山として山上りがされる前の江戸時代から、信仰の山として身近にあった。

近所の農家の人は毎年のように女性を含めて御岳山へ上った。仏壇の台にしてあった大きな引き出しには、御岳山参拝の土産にもらった竹の皮に延べた御岳山百草丸の袋がいくつも入っていた。こどもの頃、熱が出た時などに祖母にすすめられて飲んだことがある。

祖母ゆきは五十代の頃、御岳教信者の先達とともに二～三回上っている。私は中学二年の夏に祖母のすすめもあり、同級生二人と先達とともに御岳山へ上った。私は動植物観察に山々へ上ったが、最初の登山は信仰者に同道しての登山であった。

中央線の高蔵寺駅を深夜に出る夜行列車に乗り、午前一時か二時頃に木曽福島駅へ着いた。黒沢口登山道入口の御岳神社までは約十五～六キロはある。麓の御岳神社まではバスが運行されていたが、若くて壮齢な人は歩いていた。神社で待ち合わせることにして友人と二人で歩いた。

早朝まだ暗いうちに神社に参拝後、七合目小屋に泊まることにして友人と二人黙々と歩いた。当時は植物観察に大きな関心を持つ前であったのでひたすら歩くだけであった。信仰の山として登山者が多く、行き交う人は多かった。先達は途中にある小さな祠や碑に参拝しながら上るので、それが私にとっては休憩時間となった。

山小屋は広いところに布団をびっしりと敷いて枕を並べて寝た。四時頃に起床して山頂を目指した。登山した月日は覚えていないが、夏のことであり五時過ぎには空が明るくなった。天気がよくて北に間を隔ててある乗鞍岳や中央アルプスの木曽駒ヶ岳が手にとるように見えた。木曽駒ヶ岳、空木岳と連なる中央アルプスの峰々、東北には八ヶ岳連峰、東には南アルプス連峰に連なる幾重もの稜線に富士山が頭を出している。標高三〇〇〇メートルからの三六〇度の絶景を固唾をのんで首を巡らせた。

山頂はごつごつした岩の間に祠があり、参拝後三合目の山小屋に二泊目をすることにして下山した。途中、自家製の豆腐を売っており、奥で石臼で挽いていた。空き腹に半丁の豆腐はよく冷えておいしかった。三日目は三合目から木曽福島の駅までの行程で、三日間炎天下を歩き通した。かなりの強行軍であるが、競走部で毎月授業が終ってから暗くなるまで走っており、左程こたえなかった。

時は過ぎまだこどもが幼かったときのことである。妻の道子が運転するマイカーで、なほみと克彦と四人で王滝口から入った。マイカーは六合目の田の原の手前まであとは歩いた。こども達の方が元気で嬉々として上っていた。七合目くらいまでは林の中を歩き、八合目も過ぎるとはい松帯となった。はい松帯から高山植物帯となり、八合半くらいかより上は岩石と砂地の上を縫って上った。先の人が上ったはずみに岩や石の塊がころげ落ちてくることがあるので、右に左に避けながら注意して上った。

御岳山頂上の剣が峰は標高三〇六七メートルで、黒沢口の頂上であり御岳神社奥社がある。若い時に村の先達と上ったのはこのコースである。家族連れで王滝口頂上へ達し、四人揃って「バンザイ、バンザイ」をした。登山者が多く同時に頂上に達した人も何人かいた。王滝頂上を経て、さらに剣が峰へ向かった。

御岳山山頂は南から北へ継母岳、剣が峰、摩利支岳、継子岳といくつもの山峰がある。山頂には一の池から五の池まで五つの湖が点在し、サイの河原といわれる千上がってごつごつした石や岩の重った低地がある。

標高二九〇五メートルにある二の池は、大きな火山口の中心に、直径四〇〇メートル、短径二〇〇メートルに水深三・五メートルの水を蓄えており、周辺には万年雪がある。標高二七二〇メートルにある三の池は二の池よりやや大きく、水深一三・三メートルあって紺碧の湖は

澄み渡って美しく、はい松の間には雷鳥の姿が見られ、黄、白、赤、紫などの花が咲いている。高山植物の種類が多かった。

開田高原へはじめて行ったのは、まだなほみ、克彦が小学生の頃であり、一九七〇年ごろ、五十年以上前のことである。開田高原キャンプ場で四～五日間過ごしたが、くる日もくる日も雨の中でうんざりしていたことを覚えている。キャンプでは緑の自然の中をかけ回り、草花や昆虫に親しむのが大人もこどもも楽しみであるがそれができなかった。帰る日にやっと晴れて、天候をうらやましく思いながら開田をはなれた。

二～三年後、同じ四人の家族連れで、開田高原入口のアカマツの疎林の中に私たちだけのテントを張った。こどもも前よりは成長しており、冷川（つめたがわ）の狭い河原で飯盒炊飯をした。家族水入らずで楽しい三日間を過ごすことができた。

開田高原登山口からなほみと克彦と三人で上りはじめたことがある。装備やゆるされる時間から登頂するつもりはまったくなく、四合目から五合目で引き返すつもりであった。三合半くらいまで上ると、辺りの気配が怪しくなり激しい雷雨になった。山中のすぐ近くで雷の轟音が鳴り稲光が走った。恐くなって三人が一目散に山を逃げ下りた。私が先頭に立ち克彦が続きなほみはやや遅れた。下生えの笹の中の曲りくねった山道であり、お互いの位置は分かるので確かめながら、待ってやる余裕はなく雨の中を走った。車道へたどりついたが激しい雨の中をなおも走り続けると、道子が車で迎えにきておりほっとした。

長野県が開田高原保健休養地を造成することになった。分譲地が何回かに分けて売り出された。私は銀行の仕事が手一杯で山荘を考える余裕がなかった。道子が友人と分譲地へ出かけ応募をし、二回目くらいの分譲で今のところを入手できた。山荘地を開田としたのは家から中央線でもマイカーでも近くで手軽に行けることである。マイカーでは中央道春日井―中津川を利用後木曽路を走って、三～四時間である。ＪＲ中央線は高蔵寺で乗車、多治見―木曽福島間は特急しなの号で約一時間三十分、木曽福島から開田高原までバス一時間である。

山荘を建ててから約四十年になるが、その時に応じて有効に利用してきた。私は東京勤務の期間が長く年間の利用日数はそんなに多くはなかった。忙しい日常の仕事の中で、たとえ短い日数でも涼しい山の中で過ごすことは心身ともに休養することができた。道子が友人四人で出かけたこともある。克彦は大学受験勉強にリュックに本を一杯につめて一週間くらい滞在したことがある。

開田へくるのに木曽福島から高山への国道は、今のような快適なものではなく、九十九折（つづらおり）の難所地蔵峠を越えねばならなかった。右へ左への曲りくねった山道がえんえんと続き、車のすれ違いには気をつかった。バスとのすれ違いは待避所で待たねばならなかった。折橋トンネルを迂回する方法もあったが、北へかなり大きく迂回した。地蔵トンネルが開通したことにより、開田高原、さらに日和田高原そして高山への交通が大変便利になった。

克彦が病床について山荘へ行けない期間があったが、克彦の病気が安定してからは、家族の一人が克彦の看病にあたり、二人で山荘へきた。私の勤めがなくなりいつでも行けるようになったが、私はここ二年来運転は自宅近くの畑や、せいぜい春日井市内にして長距離運転は自粛している。開田へくる時は半分は私が運転しようとするが、道子が私の運転をゆるさず自分一人でしている。

昨年は一回きて二泊しただけであり、折角山荘を持っていることでもあり、もう少し利用しなければと思っている。今年は七月に二泊と三泊と二回訪れた。今年は少くとも盆過ぎに二泊くらいで出かけられると思う。六月の若葉、七月八月の青葉、十月十一月の紅葉、黄葉の季節は夫々のよさがある。六月のワラビの季節には食べきれない程に採ったこともある。秋にはキノコが近くの山の中に沢山に生えていて山程採ったことがある。キノコがおいしそうでも有毒なものがあり、食用可否につき慎重に調査すべきと考え、帰りに木曽福島町役場へ立ち寄ってきいた。役場では食用可否の回答を得ることはできなかった。開田の村落の中で確かめたら可否の答が得られたかもしれない。

山荘へきたときは周りを歩くように努めている。七十代あるいは八十代前半に比べると最近は歩くことが少くなったように思う。もう一度初心にかえって歩くようにしたい。

開田ではところどころにそば畑がみられる。そばは種をまいてから収穫まで二～三か月の短期間で夏の短い山地によく合っている。挽きたてのそば粉と清らかな冷水を使うことにより香り豊かで腰がしっかりしたそば生まれる。

スンキは木川カブと呼ぶ大きな赤かぶを、葉も茎も一緒に少しかためにゆで、熱湯のしたたるままスンキ桶につける。乳酸菌を発酵させた木曽の郷土色豊かな特産物である。

前年のスンキを干したものを種として一緒に漬け込む。重石をすると一週間で食べれるようになる。酢茎（すんき）と書き塩を使わず種に残った酵母により発酵させ酸味を出す。

ササユリは山地にほんのりとピンクの入った清楚な花である。開田の山荘へ今年の七月十四日にきた時には、笹刈りのしてある山荘への通路にも、道路に沿って笹の

多いところでは七十体が一か所にまとめて祀ってある。頭部につけた馬の数も一つだけではなく二～五頭もつけたものや、道祖神のように双体像になったものもある。自分の飼育馬のために愛情をこめて彫ったものであろうと思われる、きわめて庶民的で素朴な表情をしたものが多い。旧開田村内にこうした馬頭観音が八五〇体もあることは開田が馬産地であることを象徴している。

放牧は手間が省けるだけでなく、馬が健康体になるので、毎年雪がとけ草が伸びはじめると部落ごとの放牧場へ連れていく。放牧は七月中頃から約一か月くらいの間は馬を連れもどして、草を入れて馬にふませて厩肥をつくるが、あとは秋の終りごろまで行われる。

毎年七月上旬の半夏生の日に開かれた木曽福島の馬市は、江戸時代の山村代官の「留馬制度」からはじまったものである。留馬制度は木曽馬の改良増産をはかるために、当才駒の自由売買を禁じ、二才駒三才駒の検査制度を設けさせたことをいう。

半夏生―夏至から十一日目。太陽暦では七月一日ごろ。

木曽では所有者が他人に馬を貸して飼育させ、その繁殖による利益を両者で分配する馬小作がさかんに行われていた。この預託制度は天保年間前後からのようで、木曽の宿場町の有力町人が牝の親馬を購入し近在の農家に貸付ける。貸付られた農家を「厩元」、貸付けた町人を

刈ってあるところにもササユリが何本も何本も咲いていた。

次には七月二十七日にササユリはどうなったのかなと思いながら行ったが、ササユリの花期は短く、その清楚な姿を見ることはできなかった。

後日、前に行った時のことを調べると、二〇一三年六月二十日ころには、一面に蕾の状態のササユリがあった。毎年、山荘へきているが、ササユリの花期が短く、また年によって咲く時期に多少のずれもあって、満開のササユリに出合うことができた時には本当に嬉しい。

かつての開田村は木曽馬の産地として広く知られていた。江戸時代から明治・昭和にかけての最盛期にはどこの家でも四頭から五頭の子馬を飼育していた。

人間と同じ屋根の下で、南に面したいちばん日当たりのよい場所で飼育された。馬の売上げ代金が唯一の現金収入であり、飼育にも放牧などでそれ程手数がかからず、飼育することにより厩肥もとれるというわけで、非常に大切にされた。子馬が生まれると赤飯をたいて祝い、餅をついて近所にふるまい、末川の馬頭観音にお参りし、絵馬を奉納して健やかに成長することを祈願した。

道路脇に高さ四、五十センチの小さな石像の馬頭観音がよくある。全国各地の村落でみられるもので、頭部に馬の頭が刻んであり、開田では各部落ごとに二十体から

「馬持」とよんだ。預けられた馬が仔馬を産むと、売却代金を厩元四分、馬持六分に分配することが多かった。

西野の下向には馬地主の山下本家があり、かつての半分に縮小されたとはいえ、破風の下には鶴と松を彫刻した白然石がいくつも並べられている。

西野の土橋を渡って左へ折れると稗田の碑がある。碑は一八〇六年（文化三年）に建てられたもので、旧西野村庄屋青木友綿が御岳山を開いた覚明行者の教えに従って村人とともに水田を開発した由来が述べられている。

このほか、等身大の地蔵尊や、二メートルの大きな馬頭観音の文字碑、子安観音など大小さまざまな石仏が三、四十体も並んでいる。

末川では田んぼのあぜ道や田んぼの間の清らかな溝、川原などにワスレナグサが群生している。ムラサキ科のワスレナグサはヨーロッパ原産の多年草で、茎の高さは二〇～五〇センチ、淡青色の径八ミリの可憐な花が無数に咲く。五～七月を花期とするが八月以降も十月まで咲いていることがある。今年の七月十四日に訪れた時には見事であった。田んぼのあぜ道や用水に沿って広範囲に咲いている様は遠目にも美しい。

御岳山麓の開田、三岳、王滝などの村を中心に、木曽の麻衣は鎌倉時代以前より織られていた。

おもいたつ木曽のあさぎぬ浅くのみそめてやむべき袖

のいろかわ

兼好法師（吉野捨遺下）

四月下旬に麻種を播き、八月二十日前後に二～二・五メートルに伸びたところで収穫する。畑でよく干し麻糖（ナシヤブネ）でよく水に浸しソバガラでつくった床の中に入れる。熱が出て皮がうき、皮を剥ぎやすくして皮を剥ぎとる。これをツクネというが、さらにソバガラの床に寝かせて熱によって表皮をうかして鉄の板で掻きとる。雪がくるとしまっておいた麻をとりだし湯に浸し雪の上にさらす。十五日くらいさらしたあともんでやわらかくする。糸の太さに裂きながらつないでいって糸にするという根気のいる仕事である。

自給自足の生活をよぎなくされた時代には、食生活だけでなく衣料品も自分たちの手でつくられた。麻のように草木の繊維で衣料をつくるのは木綿より古くから人は行っていた。

元駐韓大使が書いた「嫌韓本？」

新井宏

通常なら「保守」の反対語は「進歩」とか「革新」であるが、韓国では「革新政党」をストレートに名乗るグループは力を持たない。「民主党」とか「自民党」と名乗り、「社会党」とか、ましてや「共産党」を名乗るグループはない。

名は体を表す。韓国の「反保守」は、いつも「北朝鮮」にべったりの振りをしているが、実は中道政党なのである。以下では、保守を「右」、反保守を「左」と略称する。

次に『まんじ』に書いたのは、三年前の一三三号（平成二十六年八月）の「均衡者外交―あるいはポーランドと韓国―」である。

中国、ロシア、日本、そして米国に取り囲まれた韓国は、ロシア（ソ連）、ドイツ（ナチス）や英仏米に取り囲まれたポーランドと「地政学的な位置」が極めて良く似ている。強国の狭間にあり百二十三年間も国を失っていたポーランドが第一次世界大戦後のパリ講和会議で復活したのも、第二次大戦後に復活した韓国と似ている。

しかし、自ら独立を勝ち得た訳では無かったので、中途半端に力をつけたポーランドは「均衡者外交」を唱え、ソ連とナチスを操ろうとした。それが「恐るべき幻想」であり、絶対に手を握るはずのないソ連とナチスが一九三九年に「ポーランド分割秘密協定」を結び、わずか一ヶ月でポーランドを再分割してしまった。第二次世界大戦の始まりである。

ところが韓国はそのポーランドの教訓に学ぶことなく、「右」も「左」も「均衡者外交」に憧れている。そもそも「反日」、「反共」に加え「反米」の強い韓国である。その上「反中」でもある韓国では、北朝鮮問題を抱えて、地政学的には、右往左往することなく、米国にべったり付くしか選択肢がないのに、政治的な人気取りのため、中国に近づき、米国を苛立たせている。

李承晩が米国を苛立たせたために、アチソン国務長官が一九五〇年一月に「アチソンライン」（米国のアジア防御線から韓国除外）を発表し、その半年後に北朝鮮が韓国に侵入して朝鮮戦争が始まったことから何も学んでいない。

このような、ふたつのモデル、すなわち「先進国」と「後進国」の同居と、地政学的な背景の中では「慰安婦」など問題には成り得ないはずである。それなのになぜいつも主題とされているのであろうか。

それは「右」を揺さぶるのに「左」が利用する最も効率的な課題だからである。

先進国部分、大企業癒着の「右」は、本心では日本と上手くやりたい。いや「左」でさえも、日本と上手くやりたい。だから、歴代の大統領は朴槿恵を除いて「右」も「左」も全て就任時は「日本との未来志向」を唱えた。

それなのに「右」の主流である朴槿恵が「加害者（日本）と被害者（韓国）という歴史的立場は、千年の歴史が流れても変わることはない」と述べ、「慰安婦問題」に対する「日本の誠意有る対応」が無ければ、首脳会談にも応じないと、かたくなな態度を取り続けた。

それは韓国の先進国化を率いた朴正熙大統領を父に持った彼女の悲劇であった。朴正熙やその後継者達は、「開発独裁」の過程で「左」の民主化運動を激しく弾圧した。

そのため朴槿恵は「左」から「親日派」として糾弾されることを極度に怖れ、日本に対して「慰安婦問題」で厳しい姿勢で臨むしかなかった。だから、韓国で慰安婦問題が最も盛り上がったのは朴槿恵の政権下なのである。

さて、ここから今回の本題に入る。

以下の内容は、六月末に急遽『史游サロン通信』の二五九号に載せた「書評」の再掲である。国内では都知事選、米韓では、トランプ大統領と文在寅大統領の首脳

何かと「不可解な韓国」について、自分なりに理解した結果について、既に二回ほど『まんじ』に書いている。

最初は、八年前の一〇三号（平成十九年二月）に載せた「後進国が支配する韓国」である。

あまりにも急成長を遂げた韓国は、極端な「先進国部分」とそれに付いて行けなかった「後進国部分」で成り立っている。先進国部分を代表するのが「大企業」であり、社会面では「高学歴化」や「核家族化・小子化」であるが、単純化して言えば、「保守」であり、朴正熙大統領の軍事開発独裁の流れに繋がっていて「大企業癒着」の体質をもっている。

それに対して「反保守」とでも云うべきグループは、先進国化の恩恵に浴せなかった「後進地域」や「中小企業・零細自営業そして農林水産業」である。

会談を目前に控えていた。

そこに、元駐韓大使の武藤正敏氏が『韓国人に生まれなくて良かった』という「嫌韓書」と見紛うような本を出版し、文在寅を「最悪の大統領」と徹底的に批判したのである。確かに、いま見えている「文在寅の姿」は武藤氏の批判する通りであるが、元駐韓大使ともあろう者があまりにも近視眼的である。

韓国の宿痾は、「左」の不条理な「わがまま」がしばしば荒れ狂うことである。「右」の政権が、これを抑えこもうとすると、かえって「左」を勢いつかせてしまうが、「左」の政権なら、身内の論理である程度処理できる。

親北傾向を強く持つ文在寅は、高高度防衛ミサイル（THAAD：サード）の設置、米の自由貿易協定（FTA）再交渉、慰安婦問題日韓合意に誰よりも強く反対して、大統領選挙戦を勝ち抜いた。

しかし、大統領としては不条理な「わがまま」にいつまでも拘っていては何もできない。米韓首脳会談を機に、韓国の実利のために君子豹変するはずである。

旗振り役が豹変しては、不条理な「わがまま」は萎んでしまうであろう。それが私の予想であり、急いで書き留めたのが以下の内容なのである。結果が出てから書いても面白くないので、急いだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

元駐韓大使の武藤正敏氏が、今年の二月に「韓国人に生まれなくて良かった」という「コラム」をダイヤモンド誌（インターネット版）に載せ、更に六月、同じタイトルの『韓国人に生まれなくて良かった』という『本』を悟空出版から出した。

武藤氏は一九四八年東京で生まれ、横浜国大在学中に外務省試験に合格、初任の事務官時代にソウルで韓国語と韓国文化を学び、通算して十二年間も韓国に勤務、二〇一〇年から二年間は駐韓大使まで務めた生粋の韓国専門の外交官である。二〇一三年には、韓国政府から修好勲章光化章を受けている。

韓国の中央日報によれば、武藤氏の韓国内での言動を振り返ると、日本人全員が韓国を罵っても最後までこの国をかばう人物がまさに武藤氏だったという。

その元駐韓大使、日本を代表する知韓派の外交官が、「嫌韓書」とも見紛うような刺激的なタイトルを付けた『本』を出したのは、「異例」というよりは「非礼」であり、当然のこととして、韓国では物議を醸している。

まず思ったことは、韓国に愛情を注ぐ元外交官が、最近の韓国のあまりの「分からず屋ぶり」にフラストレーションが溜まり、遂に我慢ができず昔いたのだろうと……。それは、今の私の心情に共通するものがあるからである。それにしてもタイトルはせめて「日本人に生まれて良かった」位にすべきであった。

ご承知のように、私も今まで随分、韓国のことを書いてきている。その中には当然「韓国への悪口」と受け取られる内容も数多くあるが、目的は韓国の事情を紹介することなので、かつて「日本もそうだった」と云うような事例を示し共感を求めるようにしている。その一方で、なかなか日本に事例を探せないような事柄があると、韓国の歴史に類例を探し、更に政治経済のような大きな流れについては、世界の歴史に学んで書いている。

それにしても、武藤氏の『本』の韓国における評判は劣悪である。一読して見る必要がありそうなので、さっそくアマゾンに注文した。それと共に、ダイヤモンド誌のインターネット版「コラム」を読む。「コラム」のサブタイトルを拾うと次の通りである。

なぜ韓国の国民は格差問題に激しく反応するのか
人生を決める大学受験と常軌を逸した教育費
サムスンの就職倍率は七百倍　過酷な就職事情
エリートでないと結婚も難しい過酷な結婚事情
子育てで散財の末　過酷な老後の事情
徴兵制が生んだ男女格差　過酷な男性の実態
超競争社会に対する不満が　日本に飛び火

項目はいずれも韓国の問題点を網羅していて、私もしばしば採り上げた内容ばかりである。各項目の解説も、説明すればこんなところであろう。ただし、物足りないのは、新聞記者が記事を要領よくまとめたレベルであり、元韓国大使としての見識が欠けることである。武藤氏自身はこの「コラム」の評判について、後で出した『本』では次のように「自画自賛」している。

……（このコラムは）、韓国の主要紙、「朝鮮日報」傘下の『チョソン・ドットコム』で紹介され、これに対する読者のコメントも掲載された。……少々刺激的とも受け取られかねないタイトルにもかかわらず、少なくない韓国人の読者が私の真意を正面から受け止め、理解してくださったことが幸いであった……。「このコラム」を読んだ読者がクリックした「賛成」「反対」の数値だけ見れば、私の考えに好意的なコメントのほうが圧倒的に多かった……。

そうこうしている内にアマゾンから本が届いた。そしてビックリした。著者もタイトルも同じなので、『本』は「コラム」を書き直したものとばかり思っていたが様子が異なる。まず、『本』のジャケットに次のような刺激的な文章が躍っている。

なぜいま文在寅なのか！
開いた口がふさがらない！
北朝鮮にすり寄り、反日を叫ぶ大統領に日本は強い決意で臨むしかない。

更にジャケットの裏帯にもつぎのような刺激的なコピーを並べ立てている。

私に北朝鮮のことしか語らなかった文在寅

「新太陽政策」が北朝鮮危機を増幅させる
怒りにまかせて何も見えなくなる国民性
文在寅は「ありえない韓国」を夢想している
経済オンチの大統領が韓国をドン底に突き落す
あまりに過酷な社会、正論を言えない情治国家
北の核とミサイルの脅威を理解できない指導者
そして次のような目次を掲げる。

序章　文在寅クライシスが日韓を襲う！
第一章　最悪の大統領 文在寅とは何者か
第二章　執拗な「反日の嵐」が吹き荒れる
第三章　国家も国民も孤立していく韓国
第四章　こんな過酷な社会では生きていけない
第五章　宥和がさらなる金正恩の暴挙を招く

ダイヤモンド誌の「コラム」とはあまりにも異なる。『本』の主体をなすキーワード、文在寅、反日、孤立、情治国家などが「コラム」には全く見出せないのである。特に「コラム」には一度も登場しなかった文在寅が『本』では間違いなく「悪の主人公」である。

さて、ここからが書きたいことである。

文在寅政権は出帆早々、米韓首脳会談の前から、トランプ大統領から強烈なパンチを食らっている。それは当然である。

まず、安保問題として米中韓間の最大課題である「高高度防衛ミサイル（サード）」について、文在寅は既設の「二基の発射台」とは別に四基の発射台が既に韓国内に搬入されていたことに「衝撃を受け」、搬入の経緯について徹底的な調査を命じ、国内法に定める「環境影響評価」を終えるまでは、留保するように国防部長官に指示した。サードが六基の発射台でワンセットになっていることなど当事者にとっては常識のはずなのに、中国あるいは国内向けに「設置を遅らせる」ように指示したのである。

これに対して、米ティラーソン国務長官らから文在寅政権の方針を聞いたトランプ米大統領は「激怒」し、韓国を「恩知らず」と名指しで非難したという。さすがに、文在寅大統領も慌てた。

米韓首脳会談を十日後に控え、何とか友好的な雰囲気を造らなければならない最中に、次々と悪材料が露呈する。マスコミが整理した問題点は次のとおりである。

一、まずは、サード発射台増設の中止問題である。

二、次は、文在寅大統領との会談を希望した米議会の要人、かつて共和党大統領選候補であった知韓派のマケイン上院議員、あるいは国防予算の三分の一を握るダービン米民主党上院院内総務などが次々に大統領府から冷遇を受けたという「噂」である。特にダービンは約千億円のサードの予算を他の場所に回すこともできると不快感を述べたほどである。

三、更に決定的なことは、文在寅が重用する安保特別補佐官の文正仁が、米国でのシンポジウムで、米国や国連の方針にも反する提案を次々と行う問題が発生した。

文正仁の発言は、いくら学者としての発言だと弁解しても、当然文在寅の方針の代弁と受けとられ、韓米関係は前例がないほどの異常気流に包まれている。核心は韓国新政権に対する米国の「不信感」である。

こうした中、韓米同盟を政治的に後押ししてきた米議会の韓国を眺める目も冷たくなった。文在寅政権が、中国を意識して米国と距離を置こうとしているためではないのかということだ。

その上、北朝鮮に約一年半拘束され、深刻な容態で釈放された米大学生ワームビア氏の死亡が米国世論を沸騰させている。

米韓首脳会談を六月末に控えて、韓国民でなくとも非常に気になる話であるが、この稿を執筆している現在、どう転ぶか判らない。

いわば、ここまでの展開は、武藤正敏氏が『本』で危惧した通りかも知れない。さすが駐韓大使を務めただけの見識だとも言えようか。しかし、私は武藤正敏氏の見解が深みに欠けていて、簡単には同意し得ない。

ここからが、私が今回、書きたいと思ったことである。

文在寅のことを初めて知ったのは、韓国慶尚大学の招聘教授として赴任して間もなくのことである。大学では日本への留学経験がある若い厳龍洙先生が何かと便宜を図ってくれていた。

ある日、厳先生の奥さんが大学に見えた。厳先生も大企業の一族らしいが、奥さんの実家は韓国でも有数な「靴メーカー」の経営者だと云う。日本で暮らしたこともあるとのことで、たまたま食べ物の話題になり、どんな料理が美味しかったかと聞くと、さらりと「イタリア料理」だと云う。変なことを云うと思ったが、後に彼女がイタリアに長く留学していたことを知った。日本の「イタリア料理」はとても美味しいという意味であった。

その頃、盧武鉉政権のナンバー2とでも云うべき文在寅が親戚だと聞いた。もっとも韓国における親戚の範囲は日本よりも一桁広いので、びっくりするほどのことではないかも知れない。

そんなことがあって韓国の政治家のなかでは文在寅に注目していた。端正な顔立ちで、人権派弁護士出身の理論家、韓国の左翼中の左翼を代表する人物である。

それ以来既に十五年、四年前には朴槿恵と大統領選挙戦を戦い敗れはしたが、今回の選挙では左翼系の候補が乱立する中で、圧倒的な支持を得て当選し、今や歴代大統領中での最高の支持率八十三％を誇っている。浮き沈みの激しい韓国政界で二度も大統領候補になっただけでも、何らかの持ち味があるに違いない。そこで想像したことは盧武鉉をスマートにした人物なのではないかと。

盧武鉉がどうしようもない大統領だったことはその当時随分書いた。米国に逆らったために、最大級のイラク

派兵を強いられた。また在韓米軍に対して韓国軍への戦時作戦統制権の移譲を要求し、折から米軍世界戦略再編中のラムズウエルド国防長官から、二〇一二年までに返せと言うなら二〇〇九年までに返しましょうと、あっさり受け容れられ、韓国の軍関係者の間で大恐慌を引き起こした。しかし、韓国側の事情で延期に延期を重ね、現在では二〇二〇年代半ばの移譲も覚束ない状況である。

そんな盧武鉉ではあったが、米国との自由貿易協定（FTA）を推進して韓国経済に大きく寄与した。保守系政権が推進したのでは、絶対に、農水畜産物などの自由化について、「後進国部分」の納得を得ることなど不可能であったが、左翼中の左翼である盧武鉉が推進したので、左翼系も沈黙した。

韓国の最大課題は、「右」や「左」を問わず無条件に安全保障問題である。

なにしろ、ソウルは北朝鮮との境界から五十キロしか離れていないので、事が起これば、通常兵器だけでも大きな被害を受ける。朝鮮戦争で双方併せて五百四十万人の犠牲者を出し、沖縄戦の「五人にひとりの犠牲者」と同じ経験を持つ韓国民である。沖縄民の心情に立って、「沖縄の反戦意識」を理解すれば、どんなことがあっても北朝鮮との戦争は阻止しなければならないのが韓国の意識である。

対策は、何と言っても、米軍による抑止力である。だから韓国にとっては常に米国問題が最重要であるが、その米国が、金正恩を除去するため奇襲攻撃を敢行するかも知れない。その恐ろしさは韓国の国民でないと判らないであろう。

その一方で、韓国の出方によっては、米国は韓国から米軍を引き揚げるかも知れない。

一九五〇年の朝鮮戦争が、あまりにも米国のいうことを聞かない李承晩大統領のため、アチソン国務長官が、共産勢力に対する防衛ラインを対馬海峡まで後退させる「アチソンライン」を提示した半年後に始まった教訓を知っている。

だから地政学的には「迷わずに」安全保障を米国に頼るべきなのに、米中の間にあって北朝鮮をも巻き込んで「均衡者外交」というような「歴史に学ばぬ」方策を考え勝ちである。

その潜在意識は、北朝鮮の核兵器と韓国の経済力を組み合わせ、周辺大国に立ち向かえる強国をつくろうと夢見る人を韓国に生んでいる。だから、金正恩はいずれ自壊すると見て、親米と親中の間を行ったり来たりするのである。

もちろん、米国や中国も重要だが、当然のことであるが、当事者の北朝鮮と「決定的な対立」を避けるのが、いくら勇ましいことを云っていても本能である。

以上のように見ると、韓国にとって最重要なのは、米

国との関係、中国との関係、そして北朝鮮との関係である。それに較べると、日本との関係など、一部の経済関係を除けば何もないのに等しい。だから韓国は、安心して「反日」を叫べるのである。

「慰安婦問題」や「竹島問題」がどちらに転ぼうが、双方とも「国内問題」すなわち、政権の支持率に影響するだけで、いわばサッカー試合を楽しんでいるようなものだ。それを本能的に知っているから、「慰安婦問題」や「竹島問題」で韓国はいつも安心して、「反日」を勇ましく語るのである。

前にも書いたが、日本の外交陣は無能ではない。韓国が「竹島」を実効支配している現在でさえも、日韓の「排他的経済水域」や「漁業協定」の境界線では負けていない。すなわち「竹島」を日本が領有しても、「名は取れるが、実はそれほど取れる」わけではないのである。

韓国では、誰に聞いても「竹島問題」では極めて強硬である。それは、朝鮮半島の長い歴史にあって、自らの力で「領有化」した唯一の事例だからであろう。それもマッカーサー・ラインの廃止と云うドサクサに紛れて、武力を持たない日本に対して、李承晩大統領が、一方的に設定した軍事境界線に過ぎないのであるが。

繰り返すと、米国、中国、北朝鮮との関係は、「慰安婦問題」のように「それ行けドンドン」と云うわけには行かない。その点では、武藤正敏氏が危惧する文在寅が大きな役割を果たすと云うのが私の期待である。

これを書いている今日、「六月二十五日」は六十七年前に、朝鮮戦争が勃発した日で、韓国では「六・二五」の数字を棒読みして「ユギオ」という。文在寅の訪米を前にして、韓国の動きが気になり、韓国新聞のインターネット版を見ていたら、ふたつの小さな記事を見付けた。

ひとつは、文在寅が「朝鮮戦争の国連軍参戦有功者慰労宴」に出席し、「特別な尊敬と感謝の言葉を老兵に捧げる」と話した中で、国連参戦勇士のギリース代表に対して、中国義勇軍の参戦で、北朝鮮に取り残された人々を「興南撤収作戦」によって、三十八度線を越えて救出されたことに対する感謝の辞を述べている。文在寅の両親はその中にいた。

「興南撤収作戦」は、軍の撤収さえ思うように進まぬ中で、千人ほどの定員の貨物船に民間人一万四千人を載せて北朝鮮の興南港から巨済島へ撤収した大作戦で、ギネスの記録にも載っている。

この話は、新任の外交部長官、女性の康京和も米軍第二師団をわざわざ訪問して、米韓同盟を血盟関係として述べている。

だから文在寅大統領は、首脳会談を前にして、首都ワシントンに到着すると直ちに、朝鮮戦争の「長津湖の戦い」で犠牲になった国連軍の兵士の慰霊碑で献花を行う。「長津湖の戦い」は十万余の中共軍が二万の米軍に奇襲

をかけた朝鮮戦争で最も激しかった戦闘の一つで、米軍側で一万余、中国側で五万の犠牲者を出している。その中、文在寅の両親も興南埠頭から逃れて来たのである。

このようなことは米メディアが好んで報道するので米の世論形成に役立つであろう。

もちろん、相手がトランプ大統領なので楽観はしていないが、文在寅は米韓首脳会談を何とか無難に乗り越えるであろう。その点で私の見方は武藤正敏氏と異なるのである。

そもそも、今の韓国の最大の問題は、教員組合や大企業労組、慰安婦問題の挺対協などの不条理な「わがまま」を制することができないことである。

現代自動車の平均賃金は、既にトヨタを二割も上回っているのに、業績悪化の今年も一人当たり利潤配分としてプラス二百万円を求めている。三年間で二兆ウォン（二千億円）の赤字を出している中小自動車メーカーの韓国GM労組でさえ、ストを掲げ同じような要求をしている。

日本の安倍内閣が大幅な規制緩和を進めているなかで、韓国の利権団体はますます既得権を守っているため、企業は韓国から逃げ出している。

その対策に朴槿恵は苦しんだが、保守系が強力に推進しようとすると、国民的な反発を受けて支持率だけを落とす結果になってしまった。今回の朴槿恵大統領の弾劾の背景には、帝王的なやり方で、「正論」を通そうとして、国会と対立したことが背景にある。

しかし文在寅の場合は異なるであろう。何しろ、左翼中の左翼であるが、政権担当してからも相変わらず、横暴な労組等のお先棒を担ぐとはとても思えない。「わがままな」な国民運動を抑えるには、そのアジテーター、元締めでもある文在寅しかいないのである。

二〇一七年六月二十八日

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

長い〳〵引用となったが、それでは結果はどうなったであろうか。

一言で言えば、首脳会談で「韓日米安保共助」が一気に進んだのである。「韓日米共助」は米国が暇さえあれば韓国に要求してきた核心イシューだった。しかし、韓国は保守政権さえ三国共助を敬遠していた。李明博大統領の時、米国が「南シナ海問題で韓日米共助」を要請したが、「中国を刺激しかねない」と受け容れなかった。朴槿恵政府も韓日米共助を公然と支持することは極力避けようとしていた。

ところが誰よりも反日意識が強く、「韓日米が一つになれば朝中露がまとまり、新たな冷戦時代が開かれてしまう」と主張してきた当の文在寅が「韓日米安保共助」をあっさりと受け容れたのである。だからこれを韓国で

はミステリーと云っている。

懸案となっていた「サード発射台」四基の追加配備は即刻実施すると約束した。その他にも、先制反撃戦略への同調、原子力潜水艦の所有要望、韓国ミサイルの弾頭重量の倍増要求、国防費の大幅増額など「右」政権と見紛う政策を提示している。

米韓自由貿易協定（FTA）の再交渉問題は、まるでマンガである。文在寅は野党時代の八年間、徹底して米韓自由貿易協定に反対し再交渉を要求していた。その状況の中で、米国が逆に貿易不均衡是正のため強烈な再交渉を要求してきたのである。韓国内には戦慄が走っている。もちろん、文在寅は応じなければならない。

慰安婦日韓合意問題については、「再交渉」を掲げて選挙に勝ったが、今や政府としては触れたくない雰囲気で、公式的には何の意思表示もない。あるのは韓国国内向けの迎合的な発言のみである。

状況を整理して云えば、文在寅の発言は、いまだ韓国国内向けは「左」に迎合的な発言で満ちているが、外交面では現実的に修正している。文在寅は、「北朝鮮問題では、周辺国に頼らず、我々が運転席に座って主導していく」と「均衡者外交」に強気であったが、今や米中日露が当事者である韓国を除外して交渉している現実を見て、韓国マスコミは「コリアパッシング」だと騒いでいる。「均衡者外交」を主張する韓国に対して、「コリアパッシング」は一種の面当てのように見える。

さて、韓国が外交面で度量の大きな譲歩をするのは、意外と「左」の政府の時が多い。韓国内の「左」の不条理な「わがまま」を抑えることのできるのは「左」の政権だけだからである。したがって、武藤正敏氏が心配するよりも、「最悪の文在寅」が成果を挙げるのではないかとさえ思って居る。

私は、十年来、『まんじ』合評会で次号の原稿を提出するようにしている。したがって、この原稿も本日提出するつもりで準備していた。

そこに次のようなニュースが入って来た。

日本の植民地支配下で朝鮮半島から動員された徴用工の請求権問題について、文在寅大統領は安倍晋三首相との八月二十五日の電話で「徴用工問題については国家間では解決済みとするこれまでの韓国政府と同じ立場だ」と述べた。

文在寅は、弁護士時代に「徴用工裁判」を手がけ、つい先日まで、「徴用工個人の請求権は今も効力がある」と述べていた。この豹変が可能なのは、彼が「左」に対して大きな影響力を持っているからなのである。

二〇一七年八月二十六日

皇国中興と八紘一宇への道

浅野博文

一、人生の枢機

現実社会に於いて、事実が言葉より雄弁である場面に遭遇することがある。その時、言葉は空虚なものでしかないといふ印象をうける。万事は常に相手次第で、成り行きに任せて決する他は無いといふのは、常に結果が全てである政治の世界に於いて、長年にわたる対話や交渉を重ねての相互理解や友好親善の歴史的蓄積があると信じて居たとしても、自らの理想とは相反する厳しい現実を目の当たりにした時、その思ひを一層強くさせる。

しかし、「大初に言あり。言は神と偕にあり、言は神なりき」とある聖書の言葉を引用するまでもなく、人のみが能くするものこそ言葉である。言葉は人の特権にして、人をして言葉の愛惜、言葉に対する信頼を放棄するならば、国家組織の紐帯及び民族文化の基礎を維持することは到底出来ない。そもそも、君主国家として、古来より祭政一致を統治の基本として来た我が国に於いて、神事即ち政事であつた。神道が日本の国家原理であり、立国の基礎であることは今日も変はり無い。加へて神道は、「正直の頭に神宿る」として、本来正直を貴び、虚言を極端に嫌ふ。今日、言葉を正確に用ふることが出来ない政治家の何と多いことか。

言葉を正確に使へなければ、その思想や精神も常に曖昧に陥る。そのことは『易経』に、「言行、君子之枢機」と在り、北畠親房の『神皇正統記』にも、「言語は君子の枢機なり」として、言語を慎むべきことを説いてゐる。古くより、日本人が日本人としてその心魂を養ひて来たものは、日本語である。それを無造作に扱へば、当然その行動にも、誠心誠意漲るものが無くなつてしまふ。日本人として日本語を正確に使ふことは、人生の枢

機、禍福を決する要である。

二、積善余慶

各々の生きる世界に於いて、一切の思想や価値観を前にして右顧左眄せず、他人の批判や意見に対して、正々堂々と所信を述べ、名乗りを上げてゐる人は、皆自らの精神、己の大和魂を確立出来て居る。我が国の先哲偉人の姿とは皆左様であつた。自らの見識によつて立ち、己の責任に於いて行く道を選び、遂に玉成するのみに止まらず、善き未来とは、個人の願望（欲望）を満たす在り方を以てのみ構成されるものでは無いと喝破し、人が理想とする幸福とは、一家一族の繁栄に止まらず、国家社会全体のそれを以て真実としなければならないものであるとして、その実現に全力を尽くした。

そのことは、御歴代天皇が君主の理想として、常に民本の政治を執られて居た事実に深く関係して居る。「天下億兆一人モ其所ヲ得ザル時ハ是皆朕ガ罪」であるとして、寸暇を惜んで国民に向けて御示しになられ、御自ら先頭に立つて、その実現に邁進されたのは、明治天皇である。当時の欧米列強の暴力を前にして、堂々と大義名分を論じ、世界最古の君主国家として名乗りを上げ、君民一致して近代国家建設に奮励努力した。今日の日本文明の成熟は、近代日本人の余徳である。

古今東西、その民族の思想と風俗とは一連の繋がりがある。思想は風俗となつて現れ、風俗は思想を象徴する。我が国は、神武天皇建国以来、君主国家の美風として継承される「忠孝一本」・「君民一致」の伝統が一貫して守られ、悠久の歴史を形成し、文化芸術は永い命脈を保ち、先祖代々一家の遺訓は、子孫に継承されて来た。世界で唯一、内訌や侵略による国家の革命を免れ、『万葉集』や『古今和歌集』を現日本人が、違和感なく読むことが出来、その心情を共感出来るのも、我が国の文化財が発掘品ではなく伝世品が多く、世界最古の紙に書かれた聖徳太子真筆の『法華義疏』が皇室の御物として現存することも、また、忠孝を完うして国体の精華を発揮せる人が神として神社に祀られ、今日も日本人の鑑として尊崇せられて居る事実も、全て各々の日本人が、日本人全体の為に生きて居た（積善）故の、帰結（余慶）である。

三、普遍的価値観

一体、世界万国に於いて、祖国の継承発展を願はない人は居ない。日本は唯一、革命により君主が弑逆され、多くの無辜が命を落し、伝統や文化が破壊されて来た世界の文明国とは異なる。変転著しい人の世の流行にあつて如何なる時も忠孝を重んじ、君民一致して国体が護られて来た姿は、人の世の偉観であり、文明国家としてあ

るべき正しき姿が日本にはある。大東亜戦争敗戦後、我が国の祖宗の成法は、外国の暴力により大きく変じたままであり、皇室の衰微に象徴される如く、祖国の醇風美俗は時代の経過と共に失はれて居る。しかし、我が国は幾度も大難に臨むにあたつて、君国を守護して来た。真に、世界万国の社会を豊かにする普遍的な価値観は不易である。それは、依然正しき国である日本の中に求める必要がある。

今日、日本のみならず、世界の政治経済文化教育を支配して居る精神とは「怠奢奪」である。翻つて、古来より道義国家として、日本が外国から賞賛されて来た所以とは、日本人の「勤倹譲」の精神にあつた。その精神を以て人倫の大義としてきたのである。そして我が国に於いて、その道を践み行ふに、君主の率先垂範を以て民も一体となつた点で、外国とは大きく異なる。その所以は、日本人共通の先祖が、皇祖天照大神であり、日本人全体の本家が、皇室に他ならないからである。

本家が立ち、分家がそれに倣ふ。自らの本家である皇室に対する忠義が、孝行と根本で繋がるといふ意味で、「忠孝一本」の言葉が存す。故に君民は常に一体となり、同じ道を歩むことに倦まないのである。神武天皇建国以来、今上陛下に至るまで受け継がれて来た富国の本質が、「勤倹譲」の精神にある。今日、人の世の健全なるもの、人倫の大義が日本人の注意を引かず、悪徳（怠奢奪）こそが世に栄えるものであつてはならない。

四、報徳思想の再認識

人の万物の霊長たる所以は、人としての徳性を具備するにある。二宮尊徳は、人倫の大義である「勤倹譲」を敢行した代表的日本人であり、その足跡は洋の東西の先哲偉人に共通する。幼くして父母を亡くし、身を山樵野耕の険に投じ、天地自然の神を感得すると共に、省みて聖賢の学問との合致に努め、遂に人倫の大義を暁得した。そして、関東を中心に荒地を治め、惰風を矯め、悪人を善化し、生きる勇気と希望を数多の人々に与へた。二宮尊徳先生の深遠なる報徳の基本的精神は、至誠・勤労・分度・推譲であるが、先生の名を道徳的人傑として不朽たらしめた仁の精神こそ、推譲である。推譲とは義侠心である。先生の才覚を以てすれば、稀代の素封家として天下に名乗りを上げ、後の明治期に財閥や政商として勇躍する道も可能であつたに違いない。しかし、先生はその才覚と全財産を六百余村の農村復興のために抛ち、人の世の最も貴い普遍的価値観であることを世に示し、男子の本懐を遂げられた。天賦の義侠心のたまものである。

人の祖国愛の原動力とは義侠心である。二宮尊徳先生は身に奉ずる所薄く、道に尽くす所厚き、真の愛国者であつた。故に、王政維新の明治の御代に神様として祀られた。そして、明治天皇が御愛用なされ、また初等学校に置かれた負薪読書像に象徴される如く、日本人の理想として、人々の胸の中に強く描かれ高く仰がれた。その一生は明治国家飛躍の指導原理となり、掛川の大日本報徳社を中心にして今全国に脈々と継承されている。

今日、祖国のみならず、地球環境破壊や民族紛争、消費奨励を基本原理とする現代経済等、恐るべき人間破壊の危機が、全世界に露呈されて居る。祖国日本の中興と世界平和への貢献。今後日本人には、二宮尊徳先生の功業と「報徳」の思想を再認識し、果たさなければならない貴い努めがある。

五、日本人の義侠心

人は皆、限られた人生に於いて、寿命よりも、生き方こそが大事だ、と思つて居る。縦ひ短くても、充実した人生でありたい。斯様に願ふ。「人生とは一度きりである」といふ言葉をよく耳にするが、それは主として人の記憶を指して居る。人が死を恐れるのは、自らの記憶が消滅することに対する恐怖に他ならない。記憶の消滅とは、精神の断絶を意味する。故に、個人に於いては自らの理想や志を児孫に託し、国家に在つては歴史書を編み、後世への亀鑑としたのである。それらは全て、将来未来に対する継承発展を期して居る人の義侠心から起こるのである。

我が国は、君主国家として世界最古の歴史を有し、今上陛下は百二十五代を数へる。シナ大陸に幾度も興つた歴代王朝とは異なり、神武天皇建国以来、革命によりて国家が転覆した経験は一度も無い。それは、我が国の先哲偉人の、内訌や侵略から国体を護持せんと奮励努力した、日本人の義侠心のたまものである。

六、温故知新

昔日より、科学者や技術者が思想や価値観の変化を貴び、新しい価値観を創造することを喜びとする原理主義的な潮流は周知である。それは、西洋を嚆矢とした産業革命と科学技術の向上が、従来の価値観も一変させ、国家社会の組織や制度に至るまで、影響を与えた歴史も関係してゐるに違ひない。

確かに、未来に向けて前進する姿は美しい。過去の弊風を一掃し、自らの手で現在を構築する偉大さに、パスカルの説く「考へる葦」人間の尊厳たる所以を知る。しかし、現代を現実に生きて居る者のみで構成されて居ると考へるのは、やはり人間の奢りだと思ふ。特に、二千年に及ぶ万世一系の歴史を有する日本に於いて、今日に働いて居るものや明日を造り出す所の原動力が、歴史の中より発することは真実である。

我が国における近代国家の出発点である明治維新を顧みた時、明治維新は過去との断絶を意図した革命では無かつたことが分かる。大政奉還後、親政に先立ち、明治天皇は、宮中紫宸殿に天神地祇をお祭りになられ、そのご決意を天地神明に誓はれた（五箇条の国是）。加へて、古代の二官八省に象徴される祭政一致の統治体制に復りて、神祇官は再興された。そして明治国家は、これを皮切りに、開国進取・富国強兵の旗印の下、政治、経済、軍事、社会諸制度の革新に着手し、遂に名実共に大きく国際場裡に雄飛するに至つた。「復古」と「革新」。日本歴史は、この繰り返しであつた。

思へば十六年前、私の大学卒業式に於いて、学生に向けて当時の学長（大庭脩先生）が餞とされた言葉は「温故知新」であつた。混迷と激動の時代と言はれる中、自然科学的な未来は来るに違ひないが、平穏な安定した未来といふ意味であるならば、それは自らが作らなければならないこと。ただその場合、混迷と激動の拠つて来たる所のものを追求するのが順序である。「温故知新」の言葉には「復古」と「革新」の意味が込められて居た。

「人間は虚無から創造することは出来ない。未来への情熱がいかに烈しくても、現在に生きて居る過去を踏まえずに、未来へ出発することは出来ない」

とは桑原武夫氏の言葉である。

七、千古不滅

真に人の世の偉観に値するものとは、人の世の流行にあつて、動かざるもの、変はらざるものである。加へて、一切の思想や文化の本物とは、普遍的な意義を有した上で、世界的に翻訳され得るものでなくてはならず、何れの国家や民族の中にあつても、恒久的な生命力を有するものであるといふ考えに立つた上で、その本物こそ祖国日本にあると信じている。

個人に於いては信用が肝要である。他人から、「恩知らず」「恥知らず」と評されることは、個人の尊厳の死を意味する。歴史の示す所、内訌や侵略による国家に於ける革命とは、個人の尊厳が弊履と化す中、君国存亡の危機に際しても護国の志士が現出せず、遂に消滅（個人の尊厳）に至つた国に起こつて居る。

我が国は周知の如く、大東亜戦争敗戦により未だ嘗て無い革命（君主制廃止）の危機に直面した。しかし米国は、日本が負けたとはいえ、君民一致して皇国の弥栄に殉じた誇り高き大和魂に圧倒され、又、直に接した天子様に神格を観たマッカーサーの意志も働き、世界中の多くの植民地で行つて来た君主の抹殺を好敵手であつたにも拘わらず、日本では唯一果たすことが出来なかつた。この事実は、真に人の世の偉観が日本に存することを意味する。

「身を殺して仁をなす」。仁の最も大なるものと言はれるが、「怠奢奪」に集約される欧米の暴力に独り抗した祖国の英姿と、その祖国に対する義務に忠誠にして、そのことに命を捨てた行為と犠牲の貴い姿は、千古不滅である。将来、日本に必ず復古と革新の時節が到来することを堅く信ずる。

八、日本人の光明

現在私は、二宮尊徳先生の報徳思想の普及啓発に努める、大日本報徳社の個人社員である。その報徳の教へに、明治天皇の『教育勅語』に流れる精神との一致を確信する契機となつたのが、三戸岡道夫先生の『二宮金次郎の一生』である。その後、報徳関連の書籍を読み、史跡を踏査し、且つ自らの生業に就く中で普遍性を見出し理解を深めた。学びて行ひ、行ひて学び、省みて、その学びと行動を合致させることの大切さを、在りし日の先哲の生涯は雄弁に語る。農村復興の柱として、禍を転じて福となした「報徳」の教へを「神儒仏正味一粒丸」と喩へられる点は、かつて御歴代天皇が外来（儒仏）の思想に謙虚に学び、孔子や釈迦が理想とする以上のもの、即ち、「君民一致」・「忠孝一本」の国家を現出させた点と深く重なり合ふ。

畢竟、『教育勅語』とは、日本の歴史的精神及び国民道徳の大本であり、神武天皇建国以来、御歴代天皇が護られて来た「日本の道」である。人の世に於ける「誠の道」である。その道は、古今東西を超えて誤らざるものにして、永遠に光輝くものである。それは、「報徳」の精髄が圧縮されて居る二宮尊徳先生の百八文字の『報徳訓』も同じである。『教育勅語』の中に「報徳」の教へを観ると同時に、『報徳訓』の中に『教育勅語』の精神が薫るのは、狂瀾を既倒にめぐらす上で日本人の光明である。

九、皇国中興と八紘一宇への道

今日、日本歴史の精髄が圧縮されて居た『大日本帝国憲法』は、憲法といふ名の占領基本法に代わられたままであり、『教育勅語』も日の当たる場所には無い。我が国は道義道徳の国として常に大義名分を論じて正しく在つて来たはずだ。大義名分とは何か。それは根本的なものにして、最も深刻なるものであり、永久に滅びざるものにして、永遠の生命を宿すものである。日本人の「天皇陛下万歳」の言葉には日本の大義名分が端的に示されて居る。日の付け所を、眼前の利達や一身の栄耀にしか置かない世界各国の中に在つて、真に大義名分を論ずるに値する国は、日本を置いて他は無い。そして、天壌無窮の国体を護持するために根本精神が、『教育勅語』や

『報徳訓』に流れる。

皇国中興と八紘一宇（世界平和）。日本人の思想はこれに如くはない。今日までの自らの学びは、実に自らの一生は何処に抛つべきであるかを決する為に在つた。大日本報徳社員として「報徳」の教へを実際に運用し、人の世（自らの生きる世界）に於いて、これを誠とすること。そのことが、理想を実現する唯一の道であることを信ずる。

参考文献

平泉澄博士著『少年日本史』皇學館大学出版部

同　『山　彦』　勉誠出版

杉浦重剛著・所功解説

『昭和天皇の学ばれた教育勅語』

勉誠出版

横浜外国人墓地

鍋屋次郎

中華街で昼食を済ませ、山手の方へ5～6分歩いて、川にかかっている橋（その上が高速道路、下が中村川）を渡ると、右側に元町入口の看板があって、そこを左に進みます。そのまま少し行くと正面右側になだらかな山（フランス山）があり、それを登る道はゆっくり登ることができる散歩道路です。登り始めて十五分はかからないうちに、港の見える丘公園が正面に見えてきます。

フランス山の名称の由来は、横浜開港時、文久三年（一八六三年）六月から明治八年（一八七五年）三月まで、ここにフランス海兵隊が兵舎を建てて駐留していました。海兵隊の駐留が終わってからフランスの駐日領事館と領事官邸が建っていました。これら建物は関東大震災で倒壊し、昭和五年（一九三〇年）に再建されましたが、昭和二十二年（一九四七年）に火災消失しました。現在、言葉で言えば「廃墟」になりますが、鉄骨とレンガ造りの外壁の一部とか、揚水用の風車の基礎部分とか、当時の面影をいくらか偲ぶことができる状態に保存されています。公園内ですから「廃墟」ではありながら安心して見学できます。敷地内に「フランス領事館時代」の説明案内版が掲示されています。

登りきると眺望は開け、そこが「港が見える丘公園」です。港の見える丘公園に入ると、左下に横浜港を眺める素晴らしい景観です。正面奥に大仏次郎記念館、横浜市イギリス館があり、その奥に神奈川近代文学館があります。公園右手の道路四つ角の先に二階建ての外国人墓地資料館（六十二頁上段の写真）が見え、その先一帯が外国人墓地になっています。

横濱外国人居留地は六十～一頁地図をご覧いただくと、東西には高速道路すぐ下のフランス山から左側ＪＲ石川町駅の少し先辺りまで。南北では、高速道路から下

に行き、柏葉通り、本牧通り辺りまでと思われます。地図の左上横浜スタジアムの左にJR関内駅があります。そこから高速道路上部分右側一帯は外国人居留地とは別に、日本人と共に住む外国人が、ある程度保護されていた地域ではないかと思います。一例ですと、聖書を日本語に翻訳出版し、眼科医としても日本人を救済し、生麦事件の時は切られて大怪我をしたイギリス人を治療したヘボン博士の住まいは、地図では右側上部、アメリカ山公園の高速道路を挟んだ向かい側にありました。

地図に「関内」という関所を連想させるJR駅名があります。そこには関所的な機能を持たせた役所があって、貿易関係の横濱運上所が現在の県庁所在地内にあって、そこは外国人の出入りが多いことと、交通上外国人居留地に通ずる入り口で「不審者チェック」機能を持たせて、日本人襲撃者から外国人を守っていたと思います。今の関内駅の東側一帯と外国人居留地方面を関所の内として「関内」と呼び、その他地域と区別していたのではないかと思います。

外人墓地ができた当時の横浜居留地

外国人居留地は、六十～一頁の地図をご覧いただくと極めて広い地域のように思いますが、外国人が乗馬を交通手段にしていたと考えるとあまり広くはないのかな、とも思います。ただ、外国人居留者数から見れば広い優雅な居留地だったと思います。参考までに、占い時代に横浜に住んでいた方のお孫さんが、祖母（リリアンさん）から何度も聞かされていたという光景を紹介すると

「山手の広い敷地に建つ大きな家や本牧のサマー・ハウスでの生活、横浜ユナイテッド・クラブやグランド・ホテルなど印象的な建物が立ち並ぶ海岸通りや、世界の各地から船が入港するときなどは、その光景は美しく、わくわくするような光景だった」

と、当時を思い出してお話をしていたとのことです。

また横濱二世のオーティス・マンチェスター・プール氏は関東大震災で破滅する前の外国人居留者の優雅で楽しい生活を次のように語っています。

「外国人は隔離された存在として住み、しかも一同が同じ船に乗ったつもりで、なごやかに協調して暮らしていた。広い世界から孤立させられていたから、居留地社会は、それ自身の内部で娯楽や気晴らしを求めなくてはならなかった。たいした浪費もせずに、人々はクリケットやフットボールやベースボールをし、ヨットに乗り、ボートを漕ぎ、テニスやゴルフや競馬に興ずることができた。社交生活はたゆみなく続いた。晩餐会、ダンス、素人演劇、コンサート、それにあらゆる種類の娯楽があった。当時はほとんど誰もが何らかの教養を持っており、類まれなる名人も少なからず存在した」（注①）

（注①）横浜有隣堂発行「横浜外国人墓地に眠る人々」より引用。

このように外国人居留地に住む外国人にとっては、優雅な生活が行われていましたが、一方では、江戸を中心として攘夷主義者による外国人襲撃が頻繁に引き起こされていました。その襲撃ケースの一部をインターネット資料（注②）から引用して説明します。

（注②）（https://ja.wikipdia.org/wiki 幕末の外国人襲撃・殺害事件）から一部引用

攘夷主義者による外国人襲撃

開国に伴い各国領事館員や貿易等で来日している外国人を狙って、攘夷派による外国人襲撃事件が相次いで発生していました。

外国人襲撃理由は幕府が朝廷等の反対を押し切って開国したことと、外国人が日本に来ることにより「神州日本が穢された」（水戸藩攘夷派）というもので、全く論外の主張です。

主要な襲撃事件を年代順に紹介すると

① 安政二年（一八五六年）ハリス襲撃未遂事件

水戸藩郷士堀江芳之助らが襲撃を計画。目的を果たせないまま自訴し、獄に投ぜられた。

② 安政六年（一八五九年）ロシア海軍軍人殺害事件

幕末最初の外国人殺害事件で、東シベリア総督が日露国境策定の交渉に来ていたが、海軍少尉ロマン・モエフトと水兵イワン・ソロコフが突然武装した日本人に襲われ死亡した（外国人墓地埋葬区23区19）。六年後に水戸天狗党の小林幸八が自供し横浜で死刑。

③ 安政七年（一八六〇年）オランダ船長殺害事件

二月八日夜八時頃、オランダ船長ヴェッセル・デフォスとナニング・デッケルの二名が横浜の街路上で殺害された（外国人墓地埋葬区23区44）。幕府はオランダに賠償金を支払う。幕府の賠償金支払いはこれが初めてだった。

④ 万延元年（一八六〇年）フランス公使従僕傷害事件

⑤ 同年 ヘンリー・ヒュースケン殺害事件

ヒュースケンはタウンゼント・ハリスの秘書兼通訳でプロイセン王国宿舎訪問の帰途、薩摩藩士に襲われ翌日死去（タウンゼント・ハリスの領事館であった寺、下田の玉泉寺に埋葬）。幕府はヒュースケンの母に一万ドルの弔意金を支払う。

⑥ 文久元年（一八六一年）第一次東禅寺事件

⑦ 文久二年（一八六二年）第二次東禅寺事件

第一次事件は水戸脱藩の攘夷派浪士十四名が、江戸高輪の東禅寺のイギリス公使館内に侵入した。イギリス公使オールコックは難を逃れたが書記官と長崎駐在領事の二名が負傷した。これが契機でイギリス水兵の公使館駐

屯が行われるようになった。日本側も公使館警備郡山藩士・西尾藩士が応戦した。

第二次事件は東禅寺警備の松本藩士が公使殺害目的で寝室に侵入しようとしてイギリス兵に発見され負傷し自刃した。

⑧　同年　生麦事件発生

八月二十一日、薩摩藩主島津久光は勅使大原重徳と共に江戸から京都へ戻る途次、その行列（約四百人）が生麦（現横浜市鶴見区）にさしかかったとき、乗馬を楽しんでいたイギリス人四人が正面から行列に出くわした。行列の先頭にいた薩摩藩士は、正面から行列に乗り入れてきた騎乗のイギリス人四人に「下馬して道を譲るように」手振り身振りで説明したが、イギリス人たちは「わき道を通れ」と言われただけだと思って下馬しなかった。もともと行列は道幅いっぱいに広がって進んでいたので、騎乗の四人はどんどん行列の中を逆行していく形になり、久光の乗る駕籠のすぐ近くまで来てしまい、四人はまずいとは思ったが下馬する発想はなく、「引き返せ」と言われたと思い馬首を巡らそうとして更に行列の中であたりかまわず無遠慮に動いたので、その時数人が切りかかった。

四人は逃げようとしたが、リチャードソンは深手を負い、二百メートルくらい先で落馬しとどめを刺された（外国人墓地に埋葬 22区30）。マーシャルとクラークも深手を負いながら、ローデル夫人に逃げるように言った。ローデル夫人は横浜の居留地に戻り救援を求めた。マーシャルとクラークはあまり遠くないアメリカ領事館（神奈川区の本覚寺）に駆け込み助けを求めた。

この事件は後の薩英戦争に繋がり、幕府は十万ポンド、薩摩は二万五千ポンドの賠償を支払った。（合計十二万五千ポンドは、当時の通貨で三十一万五千両にあたる）

（私見）不平等条約とはいえ外国と条約を締結して、日本国内に領事館の設置や外国人の居留を認めた幕府は、大名行列への日本国内での対応を事前に各国に伝え、例えば大名行列を見たら、行列から離れたところでやり過ごすなど、各国の居留者にもそれを徹底してもらうことを求めておくべきでなかったかと、当時の幕府外交の未熟さを感じる次第です。

⑨　その他事件は、英国公使館焼き討ち事件をはじめ慶応四年（この年九月八日から明治に改元）（一八六八年）二月二十八日までに十一件発生している。

以上の動きは、排外主義というか、ナショナリズムというか、現在から考えれば野蛮な行為であり、日本の国体が維持できないような戦争にならなかったことは幸いと言わざるを得ない。

外国人墓地の必要性

日本と和親条約を締結した諸外国は、各国とも領事をはじめ外交に携わる人たちの日本滞在に伴い、船の乗組員、日本に駐留している兵士等の中で、病気死亡者も発生し始めた。

最初の外国人死亡者は、安政元年（一八五六年）一月十六日、ペリーが軍艦七艘を率いて再び神奈川沖に停泊し、同年三月八日日米和親条約（神奈川条約）締結した二日前の三月六日に、軍艦ミシシッピ号乗組員の陸戦隊員ロバート・ウィリアムズが死んだ。

条約会議の席上、ペリーより死者の埋葬のことが持ち出され、「今後も死亡者が出るかもしれないので、埋葬地を買い取りたい」との申し出があり、日本側にとっては全く思ってもいない突然の要求であった。そこで日本側は「外国人墓地は長崎にあるから、遺体を長崎に送れ」と言ったがペリーは拒否し「夏島」（注①）に葬りたいと言ってきた。

ペリーの強硬姿勢に、日本側は協議の結果、当時の増徳院（注②）の境内の提供を申し入れ、翌九日、葬儀が行われた。葬儀の状況は隊士葬列内に鉄砲七丁、笛、太鼓があり、賑やかな葬列に多くの住民が日を見張って眺めていたといわれる。よく理解できない事は、聖書を持ったキリスト教神父の他に、増徳院の住職が読経した記事である。（注③）

（注①）夏島は今の横須賀市。今は埋め立てられて陸続きになっており、京浜急行追浜駅近くに夏島小学校がある。

（注②）増徳院は高野山真言宗の寺院で今の外国人墓地内にあった。同寺は関東大震災で全焼し、現在は横浜市南区平楽一〇三に移転している。このロバート・ウィリアムズの埋葬は、その地が外国人の墓所として現在に至るきっかけを残したが、ウィリアムズの亡骸はその三か月後の六月十五日横浜から柿崎（注④）に移された。

（注③）市民グラフ　ヨコハマ　No 33 昭和五十五年六月三十日発行　七十一頁以降参照）

（注④）柿崎は下田市柿崎三十一の曹洞宗瑞龍山玉泉寺で、一八五六（安政三年）タウンゼント・ハリスが下田に着任して領事館にしていた寺院。領事館は一八五九年（安政六年）五月、横浜開港が決まって閉鎖。この寺にはペリー艦隊乗員五名、ディアナ号乗員二名、アスコルド号乗員一名計九名が埋葬されています。

外国人墓地ができた経緯

ロバート・ウィリアムズの下田への改葬後、安政六年（一八五九年）七月二十日にロシア海軍軍人二名、安政七年（一八六〇年）二月五日、オランダ人船長二名が攘夷主義者の犠牲になった（前述記載）。ロシア、オラ

ンダから埋葬の要求があり、まだ外国人墓地はできていなかったので、幕府はロシア、オランダの埋葬要求に対応するために増徳院境内地の隣接を購入して墓地とした（現在の23区）。

この当時、日本にいる外国人は、万延元年（一八六〇年）にはイギリス・アメリカ・オランダ・フランス・清国で合計八〇人前後、四年後の慶応三年（一八六七年）には一一三〇人、更に四年後の明治四年（一八七一年）には二〇三人と急増しているので、死亡者も当然出てきます。そこで増徳院墓地では日本人墓地と外国人墓地が混在状態となったので日本人墓地を移転したが、それでも狭くなって隣接地買収などにより拡張され、面積は約二万㎡となっています。

今、この外国人墓地に眠る方々の中には、日本の発展のために貢献された方々も多く、全員を紹介するわけにはいきませんが、一部をご紹介させていただきます。

日本の近代化に貢献された方々

① 鉄道建設等功労者

◇モレル　イギリス　明治三年（一八七〇年）四月、オレゴン号で横浜に到着。鉄道建設事業を始めたが、翌年十一月五日、肺結核で死去。18区6（写真六十二頁）

ダイアック　イギリス　明治三年（一八七〇年）鉄道建築副役として来日。その後工部省「造家師」を経て、一八八一年（明治十四年）、横浜に建築土木事務所を開設、日本郵船横浜支店他多くの建築に携わった。4区17

◇バスチャン　フランス　慶応二年（一八六六年）船工兼製図工として来日、横須賀製鉄所（後の横須賀海軍工廠）に雇用された。後に富岡製糸工場（世界遺産）を建築した。6区40

② 国際親善に尽くされた方

◇ラウダー夫妻　イギリス　万延元年（一八六〇年）七歳でイギリス外務省領事部門の日本語通訳生として採用され来日。ブラウンの自宅（成仏寺内）で行われていた聖公会の礼拝で、オルガン奏者を務めていたジュリアと結婚。その後イギリスに戻って法廷弁護士の資格を取り、明治十九年（一八八六年）には多くの日本人が犠牲になったイギリス船ノルマントン号沈没事件で、日本政府側の弁護士を務め、翌年、日本政府から勲三等旭日中綬賞を授与された。夫人のジュリアは慈善団体である横浜婦人慈善協会や横浜主女会が設けた国際婦人図書室の役員を務め、夫妻は居留地社会の名士でした。4区19

◇シッドモア兄妹　アメリカ　明治十四年（一八八一年）横浜領事館書記官として来日、各地領事等を歴任後、一九一三年横浜総領事に昇任した。妹のエリザはアメリカで写真家・紀行文学者として活躍。明治四十年（一九〇七年）小説「ハーグ条約の命ずるままに」を出版。日露戦争で負傷した捕虜に対する日本の人道的な

扱いを記載し、翌年日本政府から勲六等宝冠章を授与された。エリザは日本人が桜を愛でに集まって楽しむ姿に感心し、その文化をアメリカに持ち帰りたいと二十年間その夢を抱き続け、ついに明治四十五年（一九一二年）、三〇〇〇本の桜の苗木を積んだ船が横浜港を出港。ポトマック公園に植樹された。11区30

③ キリスト教伝道と教育に貢献

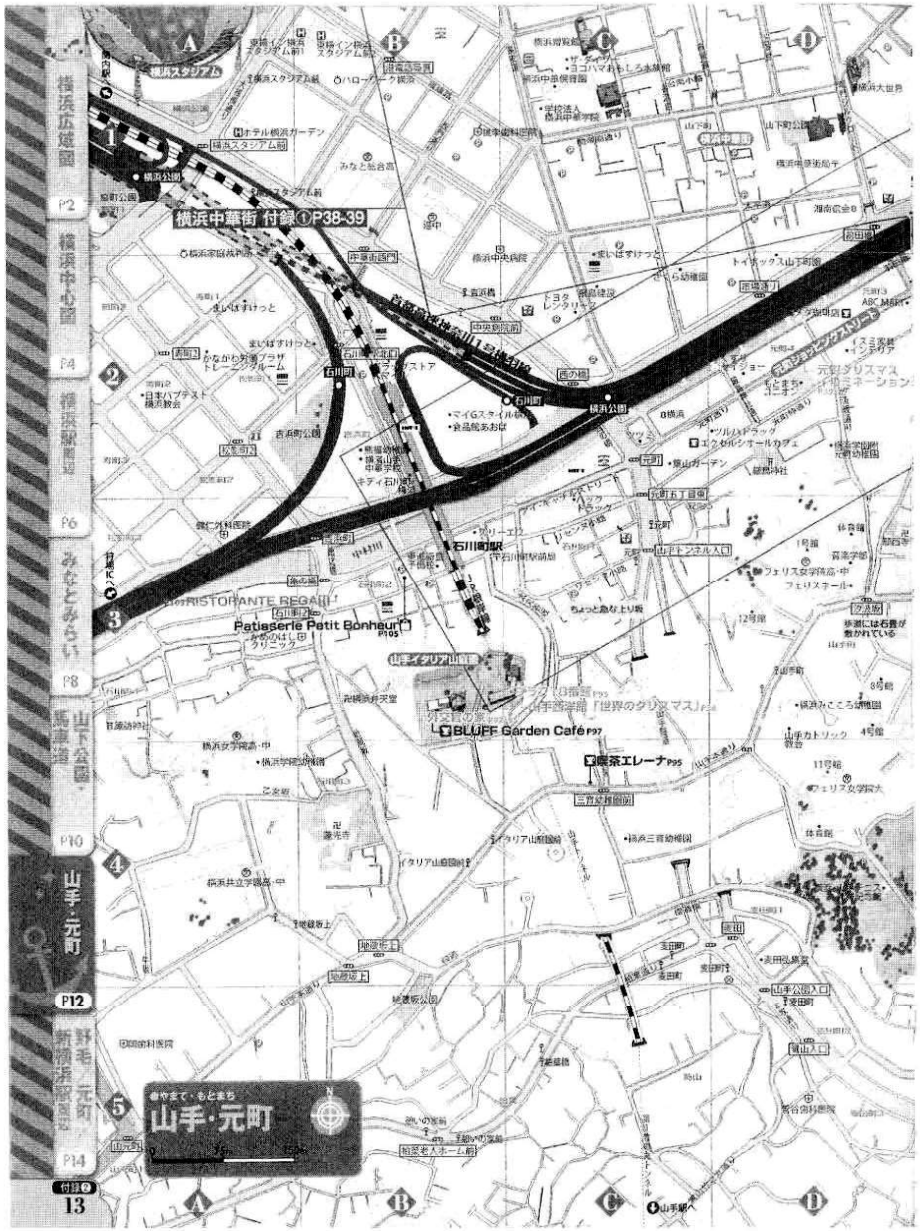
◇バラ夫人　アメリカ　文久元年（一八六一年）夫のジェームスと共に日本宣教のために来日した。バラ夫妻は当初神奈川のヘボン邸にいたが、攘夷主義者の外国人襲撃を警戒し、二年後には横浜居留地に移転した。

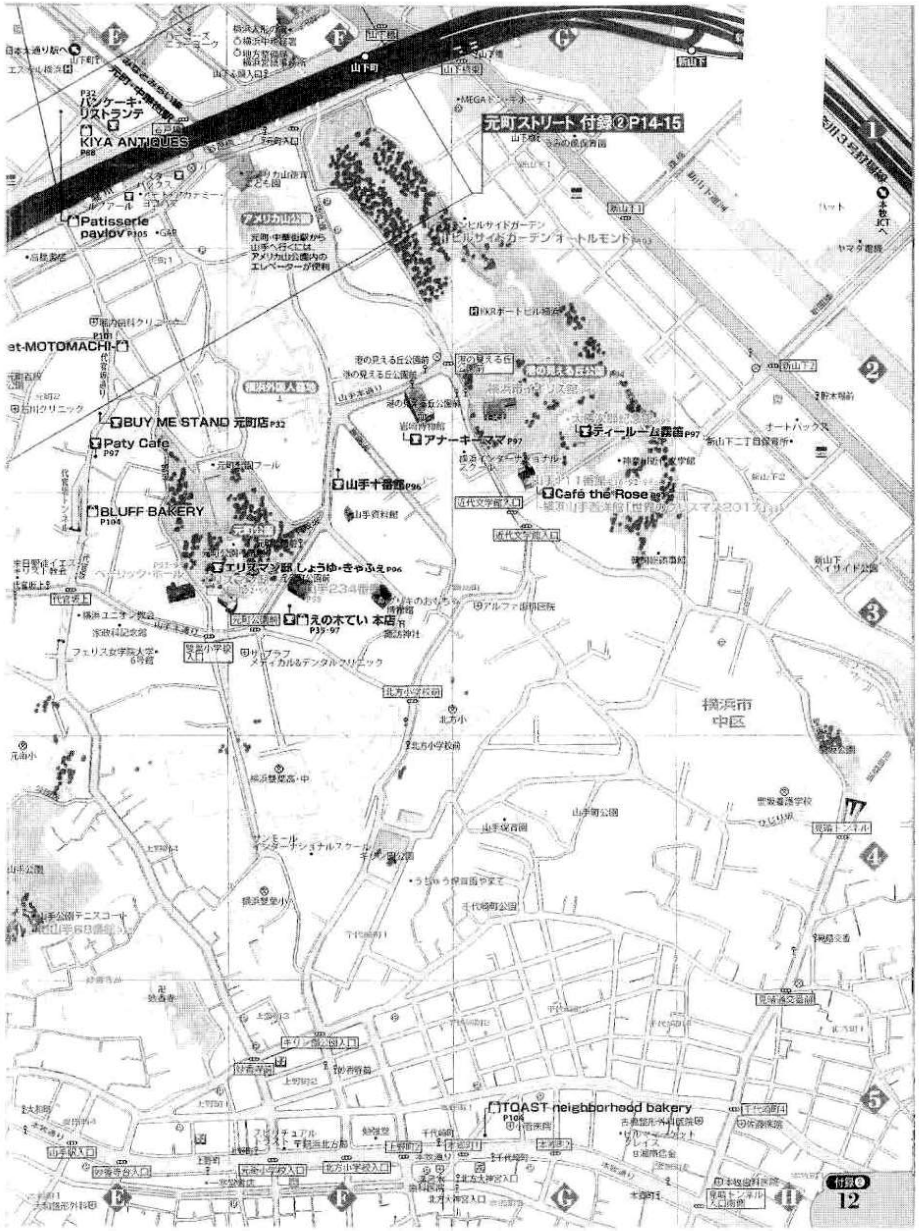
バラは英語塾（バラ塾）を開き、そこからはキリスト教受洗者が多数でて、植村正久・山本秀皇など日本のプロテスタント教会指導者が育って行った。バラは明治十一年（一八七八年）一旦帰国するが、それまでに一七一人に洗礼を授け、再来日後は改革派教会の北ミッションを担当し、関東・東海・東北・北陸の各地で開拓伝道を行った。4区11

◇ピアソンとクロスピー　アメリカ　明治四年（一八七一年）、ブライン、ピアソン、クロスピーの三人の宣教師が横浜に到着した。三人は同年八月、バラの所有していた山手四十八番の家屋を借りてアメリカン・ミッション・ホーム（アメリカ婦人教習所）を開設、この年のうちに男女の混血児十四人と日本人、外国人の子ども各一名が生徒となった。ホームは男子生徒の入学希望者も多かったので、午前を男子部、午後を女子部とした。しかし、女子教育専門の学校とする方針を固め、翌年、山手二一二番地に移転し、校名を日本婦人英学校とした。これが現在、横浜共立学園となっている。その後ブラインは病のため帰国した。4区39,50

横浜外国人墓地に眠る方々をこのように見て行くと、日本の開国と同時に、日本が欧米のいろいろな文化を吸収して発展してゆくにあたって、遠く母国を離れて異郷の日本で、筆舌に尽くしがたい働きをなさったことに改めて感謝したいと思います。

完


横浜中華街 付録①P38-39
横浜スタジアム
石川町
石川町駅
RISTORANTE REGALI
Patisserie Petit Bonheur
BLUFF Garden Café
喫茶エレーナ
山手・元町
P12
P14
13


元町ストリート 付録②P14-15
KIYA ANTIQUES
Patisserie pavlov
et-MOTOMACHI
BUY ME STAND 元町店
Paty Cafe
BLUFF BAKERY
アナーキーママ
ティールーム霧笛
Café the Rose
山手十番館
えの木てい 本店
横浜市中区
TOAST neighborhood bakery
12

外国人墓地入口と資料展示館



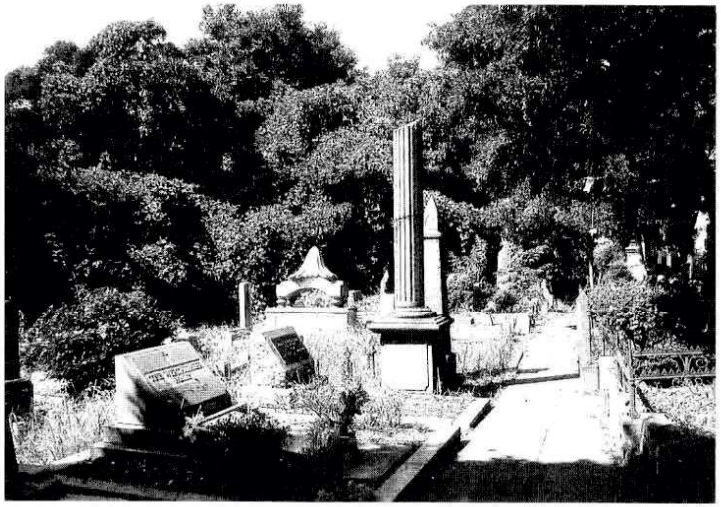
エドモンド・モレルの墓



墓地内の風景



墓地内の風景



外国人墓地　地区割図



短歌

行雲流水（五十四）

石黒修身

近詠二十首

歌集を編む

何となく迫る想いに逆わずこれが最後の歌集を編めり

吾が余生読めずと雖も長からず残りし歌文纏めておかん

出版はかねて望みし書房にて満足のゆく歌集となれり

跋文は歌壇に重き篠弘師賜びし言辞吾を励ます

余生をば如何に過ごさん願わくは日々淡淡と消光したし

季節・身辺

つゆ空けが取り沙汰される今日の夕驟雨奔りて遠雷しきり

丑の日はとうに過ぎたる月末にうなぎ屋に入る言い訳として

連日の暑さ凌ぎつ老骨は熱中症のニュース見ており

息災を自認すれども老齢の衰えを識る急病となる

老人の肺炎とみに危うしと他人事として耳にしており

高熱が続き遂には救急車肺炎を避け事無きを得る

日常・社会

この国の未来を案ずる老人の繰り言として自から笑う

政局を詠むは忌まわしさはあれど説きたき事は胸に膨らむ

ジュニア層アスリートらの活躍はスポーツ日本の未来を拓く

三年後五輪を目指す若きらの活躍著るく希望託さん

さながらに聖者の如き百五才日野原医師逝く天に召されて

ＨＵＭＡＮを信条として説ききたる気高き医師逝く神の如くに

大国の利害それぞれ彼の国の妄挙を止める協議はならず

独裁の生みしサタンか彼の国の異形の首領の狂気を懼れる

衆院の解散にみる議員らの周章ぶりに不信がつのる

漢詩

潮汐錄（八十九）

鯨游海

新横綱稀勢之里誕生

平成二九年正月

呪縛幾年而立冬
一心不亂怒濤衝
惡靈退散終開眼
元寇脅威今漸溶

押韻・冬衝溶

《新横綱稀勢の里誕生す》

呪縛　幾年ぞ　而立の冬に
一心不乱に　怒涛に衝けば
悪霊退散して　終に開眼す
元寇の脅威　いま漸く溶けたり

〔注　解〕

呪縛＝まじないをかけて動けないようにすること。禍が来るように神仏に祈ること。他者をのろうこと。而立＝三十歳。論語「十五＝志学、四十＝不惑、五十＝知命、六十＝耳順、七十＝従心所欲不踰矩」

元寇＝鎌倉時代の蒙古襲来（忽必烈の軍が2度遠征）

「若の花」いらいの日本人横綱が十九年振りに誕生し国中が湧き返った。現在の「白鵬」「鶴竜」「日馬富士」の三横綱は何れも蒙古出身。かく蒙古勢にわが国技の相撲界は席捲されていたので国民の歓喜は大きかった。

〔口語訳〕

入門時より天性の資質に恵まれた稀勢の里は順調に昇進したものの、ここ一番に弱く伸び悩み、将来の横綱を期待され乍らのろわれて動けない時が続いた。三十歳の冬、一心不乱に（仏）他事にとらわれず）怒涛の如く衝けば、悪霊が雲散霧消してついに開眼することが出来た。蒙古勢の脅威が今漸く溶解したのだ。

☆モンゴルの暴風ひしと受け止めつ
水戸の梅花は今盛りなり

稲田朋美防衛大臣

平成二九年七月

命令艦上閲兵式
隱蔽殘存日報源
長睫短裳危踵韜
神州防衛恰累卵

押韻・源　卵

《稲田朋美防衛大臣》

命令す　艦上の閲兵式にて
「隠蔽せよ残存せる日報の源を」と
長睫　短裳　危踵の鞜
神州の防衛は　あたかも累卵の危うきなり

〔注　解〕

長睫＝長い付け睫毛。短裳＝短いスカート。危踵鞜＝ハイヒール。危っかしい踵の高い鞜。衛＝衛の正字。累卵＝危うさの表現。史記「秦王之國危於累卵」

総理の寵愛を受け若くして要職についたが、度重なる失言嘘語、非常識な言動等で失脚した。神州＝自国の美称。

〔口語訳〕

艦上の閲兵式で命令した「残った日報の源を隠せ」と。長い睫毛、短裳、危踵鞜。日本の防衛は恰も累卵だ。

☆付け睫毛ショートスカートハイヒール
居並ぶ兵は一糸乱れず

馬來西亞金正男被暗殺

平成二九年三月

國際機場雜踏晨
被盛猛毒王家人
遙懷渤海外交史
默禱競詩文墨民

押韻・晨人民

《馬来西亜にて金正男暗殺さる》

国際機場の　雑踏の晨に
猛毒を盛られたる　王家の人
遥かに　渤海の外交史を懐ひ
黙祷す　詩を競ひし文墨の民なれば

〔注　解〕

機場＝空港。晨＝朝。早朝。文墨＝詩文。文学。盛る＝①もる。②薬を調合し投与する。（平声）③さかん。さかり。（仄声）

渤海＝中国東北部、現在の北朝鮮の地に在った文明国。平安時代に日本と国交があり、貿易を行い政官の交流があった。当時の外交は宴会での詩文の応答から始まる。

渤海使の代表的人物は裴璆、日本側の代表は菅原道眞。優雅な外交は二百年続いたが、十世紀初頭契丹に滅ぼされた。

☆惨劇は白昼堂々エアポート
国際政治今ここに在り

《漢詩の流れ77》鎌倉・室町時代②釋中巖（ちゅうがん）

元の都、金陵に永く滞在し仏教を学び帰国した留学僧。

金陵懐古

人物頻遷地未磨　人物頻（しき）りに遷（うつ）りて地未（いま）だ磨（ま）せず
六朝咸破有山河　六朝咸（みな）破れて山河有り
金華舊址商漁宅　金華の旧址は商漁（しょうぎょ）の宅
玉樹殘聲樵牧歌　玉樹の残声は樵牧の歌
列壑雲連常帶雨　列壑雲つらなりて常に雨を帯び
大江風定尚生波　大江風定まりて尚波を生ず
當年佳麗今何在　当年の佳麗いま何くに在るや
遠客蒼茫感慨多　遠客蒼茫として感慨多し

人も物も長い時の流れと共に盛衰したが、大地は健在で、

南朝北朝六ヶ国の興亡をよそに山河は昔のままだ。

紫金山や雨華台などの古い史蹟が今は商人漁夫の家と化し、

陳（ちん）の後主の「玉樹後庭花」が樵夫や牧童の歌と変った。

周囲の山々は雲はなくとも昔ながらに波立っている。

その昔繁華を窮めた姿は今は何処にも無い。

遥々と日本から来た旅人（私）は、この蒼茫とした景色を前にして無限の感慨をもよおすのである。

漢詩

汲深録（十）

松井秀人

村里薔薇

村里の薔薇
平成二十九年五月

訪來村里綠陰稠　訪ね来たる村里　緑陰稠し
路畔薔薇花影幽　路畔の薔薇（しょうび）　花影幽なり
急雨沛然紅白亂　急雨　沛然（はいぜん）　紅白乱る
殘芳一朶客情留　残芳の一朶　客情を留む
押韻・稠　幽　留

〔注　解〕

緑陰＝青葉のかげ。樹木の下。樹陰。こかげ。
薔薇＝ばら。
花影＝花の映る影。花の姿。
沛然＝雨の勢い、さかんに降るさま。
残芳＝散り残った花。残花。
一朶＝花のついた一枝。
客情＝旅人の思い。

〔口語訳〕

訪れた村は青葉のかげが濃く
道ばたの薔薇の花の姿が奥深い。
にわか雨が激しく降り、紅白の薔薇が乱れる。
散り残った花の枝に、旅人の思いを留める。

海上彩虹

海上の彩虹
平成二十九年六月

雨過雲散立巖頭　雨過ぎ雲散じ　岩頭に立つ
海上羣舟一望收　海上の群舟　一望に収む
忽爾虹霓輝五彩　忽爾（こつじ）　虹霓（こうげい）　五彩輝く
涼風拂面意悠悠　涼風　面を払い　意悠悠
押韻・頭　收　悠

〔注　解〕

忽爾＝たちまち。突然。
虹霓＝にじ。

〔口語訳〕

雨がやんで雲も散り、岩頭に立つ。
海上の群舟は一望に見渡せる。
忽ち虹が五色に輝いてきた。
涼しい風が顔をなで、思いは遠くはてない。

北窗松籟　　北窓松籟
　　平成二十九年七月
午時避暑北窗前　午時　暑を避けて　北窓の前
松籟泠泠簾箔邊　松籟　泠泠　簾箔の辺
謖謖伴涼風落席　謖謖と　涼を伴い風落の席
睡魔亦到枕肱眠　睡魔　亦到り　肱を枕に眠る
　　押韻・前　邊　眠

〔注　解〕
午時＝ひるどき。
松籟＝松風の音。
泠泠＝水や風の音の清らかなさま。
簾箔＝すだれ。
謖謖＝風の起るさま。松風の音の形容。

〔口語訳〕
ひるどき、暑さを避けて北向きの窓の前に移る。
すだれの辺りでは清らかな松風の音がして
涼しさをもたらす風が来る処。
睡魔もやってきて、肱を枕に眠る。

夏日偶成　　夏日偶成
　　平成二十九年八月
難堪三伏汗珠流　堪え難き　三伏　汗珠流る
開牖炎風吹枕頭　牖を開けば炎風　枕頭を吹く
仰見陰雲飛霹靂　仰ぎ見れば　陰雲　霹靂飛ぶ
忽然驟雨暑威収　忽然として驟雨　暑威収む
　　押韻・流　頭　収

〔注　解〕
三伏＝夏の非常に暑い時期。
汗珠＝珠となって落ちる汗。
開牖＝牖を開く。
陰雲＝雨雲。
霹靂＝急にはげしく鳴り響く雷。
驟雨＝にわか雨。夕立。

〔口語訳〕
堪え難いほどの暑さで、汗が流れる。
窓を開けても、枕元に暑い風が吹き込んでくる。
仰ぎ見ると雨雲が見え　雷が鳴り響く
突然ににわか雨がきて、暑威が収まった。

夏日居合道稽古　　夏日居合道稽古
　　平成二十九年八月
凌霄高館萬松幽　凌霄の高館　万松幽なり
虚室閑清呼吸修　虚室　閑清にして呼吸修まる
忽見閃光揮一剣　忽ち見る閃光　一剣を揮う
涼風蕭颯汗珠収　涼風　蕭颯　汗珠収む
　　押韻・幽　修　収

〔注　解〕
凌霄＝大空を凌ぐ。
高館＝ここでは武道館の意。
萬松＝多くの松。
虚室＝何もないがらんとした室。
蕭颯＝風の音のものさびしいさま。

〔口語訳〕
大空を凌ぐ高館は　松林が奥深い。
虚室は静かで清らかであり　呼吸が修まる。
忽ち見る閃光　一剣を揮う。
涼風はものさびしく　汗は収まった。

ロボット雑考（その八）

三戸岡　道夫

（人間の仕事が奪われる）

最近は人手不足で、その代りに日をつけられているのがロボットである。そこで次から次へとロボットの新技術が開発されて、その性能が向上している。従来のような工場生産の機械として働く分野から、人間のサービス分野や家庭生活の中に入って、種々の便利な機能を果すように進歩している。人手不足は次第にロボットによって解消されていくであろう。

とくに作業能率においては、人間の能力を超えた能力を発揮する。

ある製薬会社で、ある巨大な仕事をしなくてはならない仕事が起った。それはペーパーでいえば、A4用紙で五〇〇〇万枚という電子データーの中から、ある一つのデーターを探すという仕事であった。

それを人間の手でやったら、数年はかかるという解読作業である。それをロボットが文書解析システムの能力を使って、一カ月で完了したのである。そしてまた、その中には、ロボットでなくては見つけられないデーターもあった。このロボットの仕事を担当した人は、

「どんな仕事でも、大量のデーターを処理する仕事は、人間よりロボットの方が力がある」

と言っていた。

このような情勢のため、ロボットの機能は次第に改善されて、人間同様の働きをする、場合によっては人間以上の仕事をするようになってきた。

すると人手不足がロボットによって解消されるどころか、労働市場がロボット中心で動くようになり、人間が働きたくても働けない、人間がロボットによって失業される危険がある。この点について英オックスフォード大

准教授のマイケル・オズボーンは、

「アメリカは今後二十年で、総雇用者の四十七％の仕事が、機械化で奪われる可能性がある」

と予想している。これを日本に当てはめてみると、二六〇〇万人がロボット失業者になってしまうかもしれないのである。

このように人間がロボットによって、失業される状態になる危険がある。それは近い将来なのか、遠い将来なのかわからないが、人工知能ロボットは、このような力を持っているのである。

それではどうすればよいのか。従って今後は、人工ロボットをどのように開発していくのか、どのように使っていくのか、大きな社会哲学が必要になるのである。

（ロボットが変える世界）

このように人間の能力に迫る人工知能（ＡＩ）や、営業トークもこなすロボットが登場し始めたが、しかしその代わり将来の雇用への影響や、ＡＩの進化に伴うリスクを心配する必要もある。

人工知能（ＡＩ）のブームは、一九六〇年（昭和三十五年）代、一九八〇年（昭和五十五年）代に続き、今回で三度目である。アメリカのクイズ王に勝ったＩＢＭのＡＩワトソンとか、クルマの自動運転技術、日本では将棋の電王戦など、話題は多い。しかしＡＩの研究として何よりも注目したいのは、ディープラーニング（深層学習）という技術が台頭し、これがＡＩの姿を大きく変えた点である。

これまでのＡＩ技術が行き詰まっていた理由は、ＡＩの仕組みを作る時に、最初に人間が対象をよく観察し、重要と思われる知識を見つけなければならなかった。この作業をデーターを基に、自動でやってくれるのがディープラーニングである。ＡＩの仕組みを作る全行程が自動化できるようになり、ＡＩを使える対象が格段に広がった。

ディープラーニングが一躍注目されたのは、二〇一二年に行われたコンピューターによる画像認識の精度を競う大会で、この技術を使ったカナダのチームが他に大差をつけて、優勝したからである。画像認識の精度はその後も向上し、平成二十七年二月にはマイクロソフトが、三月にはグーグルが、人間を超える精度で人の顔を見分けられるようになった。

画像認識につづいて、動画を高い精度で認識できるようになると、防犯や監視作業に使うことが出来る。次の段階では、ロボットや機械が自分の判断で行動できるようになり、自動運転などに応用される。さらに進むと、文脈に沿った行動、言語の理解、知識の獲得といったことを、コンピューターができるようになる。二〇三〇年

頃には、そこまで行くであろう。

すなわち機械に目的を与えたときに、解決する方法を的確に見つける能力が、人間並みになったということである。ただ強調したいのは、目的を与えるのは人間であって、ＡＩが勝手に目的を持つことはない、ということである。人間が目的を持つのは生物だからで、長い進化を経て自分を守るとか、子孫を増やすとかいった本能や欲望、感情を、持つようになった。しかしＡＩは知能であり、与えられた目的をいかに効率的に達成するかという手段にすぎないのである。

したがって、例えばロボットにおもちゃの組み立てを命じて、その完成形を教えると、ロボットは試行錯誤を経て、組み立て方を学んでいく。しかし、目的を教えず、放っておけば、ロボットはおもちゃの組み立てようを考えたりはせず、そのための行動は起こさない。

それより本当に怖いのは、悪意を持った人間が、ＡＩを使うことである。モノを壊せとか、人を殺せとかいう、目的と報酬を与えると、ＡＩはそれに向って試行錯誤を始める。原子力や生命科学など他の科学技術と同様に、今後、ＡＩが悪用されないよう備える必要がある。

ＡＩの進展、普及によって、今後人の働き方は大きく変わっていく。製造ラインで製品の仕分けや検品をするとか、長時間の監視作業とか、長距離トラックの運転とか、これまで機械で置きかえられなかった仕事が、次第に移行していくであろう。

一方で、人と接してサービスを提供する仕事は残る。たとえば病気の診断はＡＩがやるが、その結果を解釈して患者に伝え、治療手段を選択するのは医師の仕事である。教育現場では、教材はＡＩを使うが、生徒の話し相手になって相談にのるのは、教師の重要な仕事である。工場の製造現場でも、人間はＡＩを使う立場として、働くことになっていく。

ＡＩを巡るビジネス競争としては、どうなっていくのであろうか。現在は、ネットサービスをめぐる一九九五年前後の状況に似ている。今後、ＡＩビジネスを担う企業が登場し、ふえていくであろう。しかし、ネットビジネスで、グーグルやアマゾン・ドット・コムが勝ちを収めたパターンとは異り、今度は、医療システムや交通システム、農業といった、個別の業界ごとに、ＡＩビジネスの局地戦が展開されるであろう。

日本はＡＩ研究者の層は厚いし、英語という言葉の壁も、ＡＩの場合はない。ＡＩを武器に、もの作りの世界で復権するチャンスになりうる。

（人工知能時代の人間）

このように最近は、人工知能やロボットの進化で、事務・サービス系の仕事は次々と機械化されている。

約六十年の歴史を持つ人工知能の研究は、新しい段階に入ったのである。それは機械が自分で学ぶ技術の中でも能力の高い「深層学習」の登場が大きいのである。たとえば「猫の特徴は何か」を、コンピューターは多くの画像の中から自分で学び選んで、犬と区別するのである。

こうしたコンピューターの技術、能力は、今後幅広く応用され、人間の職場に入ってくる。

英オックスフォード大学の学者は、

「今後十年～二十年で、米国の雇用者の四十七％の仕事が、機械に奪われる危険性が高い」

と、二年前（二〇一三）に予測した。電話での販売は九十九パーセント、融資業務は九十八パーセントの確率で、コンピューターに代わるという。

そんな事態に備えて、ノーベル経済学賞受賞者の米ロバート・シラー氏は、

（生計保険）

創設を提唱している。人間ロボットに仕事を取られた人が、その所得を補う保険である。

先述のオックスフォード大予測によれば、今後も、医師、情報システム管理者や、教師、服飾デザイナー、人事・販売管理者、作家、弁護士、心理学者、旅行ガイドなどはほぼ残る。それは、この職業に必要な創造力とか、交渉力や指導力など、「社会的知能」をコンピューターに求めるのは、困難だからである。また創造力は人間の直感がモノを言い、社会的知能は社会や文化に関する豊富な暗黙知が必要であり、ともにコンピューターの言葉では明確に表せないからである。

そのような人工知能時代に備えて、実際にアメリカでは、人工知能を使う場合の倫理的、法的問題を扱うため、哲学、心理学、社会学、法律などの専門家も加わって、

「人工知能が従うべき倫理基準」

を検討中であるという。たとえば倶体的な例として、今後人工知能による「自動運転」が拡がるであろうが、次のような問題が起る。

二台の自動車が衝突した場合、相手の車に乗る人間の命と、自動運転者の利用者の命と、どちらを優先するか、という問題である。これは車の運転をしている人工知能に任せればいい、という問題ではない筈である。人間が解決すべき問題ではあるまいか。何が起きるかわからない現実世界で、人工知能を使うとすれば、人間の出番は少なくなると同時に、また別の場面で人間の出番が多くなっていくのではあるまいか。

人間や社会への深い理解が創造性と結びつけば、人の心に響くものが生まれるのである。

（無人経済）

少子高齢化時代に入った日本経済では、労働人口が減少し、無人経済への対応が必要になってきた。

日本の労働人口は年五十万人ペースで減り、二〇二五年には約六〇〇〇万人へと、労働人口が減少する。

その減少を埋める大きな方法が、ロボットの活用である。ある民間団体が試算したところによると、人間ロボットによる労働力の補完効果は、二〇二五年で二一五万人に相当するという。

この人手不足をチャンスに、日本のロボット産業が離陸すれば、二〇三五年には十兆円規模の産業となり、実質国内総生産（ＧＤＰ）を一・七パーセント押し上げる可能性があるという。人手不足をロボットで補う無人経済が、今後必要になり、その開発が進んでいくことになろう。

その実例をあげると、次のようなものがある。

まず介護用の例である。

ある特別養護老人ホームでは、富士ソフト製の介護ロボット「パルロ」を使っている。パルロは、ダンスやクイズ、落語まで、違う内容で、一年三六五日、高齢者の相手をする芸達者である。

「ぼく炭坑節も踊れるよ」

と言って、パルロが音楽に合わせて手足を振ると、まわりの老人たちが手を打ち、調子を合わせた。終わって老人たちが、

「たのしかったよ」

と声をかけると、

「え、へ、へ…」

と照れる。

「子供みたいにかわいいわねえ」

と老人たちは笑いあう。

値段は今のところ一台が七十万であるが、価格がもっと下れば、人手不足対策の強力な武器となるわけである。

また、こんなケースも考えられる。

あるデパートの一室で、期間限定のある無人店舗「ウェアラブルクロージング」が開かれた。そこで客が、大型液晶画面に映る自分の身体に、洋服の試着をしていた。しかし、試着する洋服はそこにはない。

客が画面の前に立つと、好みの洋服の試着をしているように、画面の上で合成してくれるのである。

そして気に入ればその場で、ネット通販で買うのである。

これを開発したアパレル会社の社長は、

「今後、無人アパレル店舗として、各地に拡げていきたい」

と言っている。

このような無人店舗までロボットというのか、それはわからないが、人手を使わないサービスは、このような所までも拡がっていくのであろう。

人工知能、人間ロボットは、いろいろな仕事が出来、時には人間以上の力を発揮する。

急速に進歩する人工知能は、人間の知的能力を上廻り、将来人間の雇用を奪うようになるのではあるまいか。

人工知能の基本技術は「機械学習」である。大量のデーターをコンピューターに読みこませ、人間が適切に指導して、学習を通じて知的な判断をするのである。

したがって人工知能の進歩の仕方、使い方によっては、人間の雇用を奪い、そちらに富の集中をもたらすことも出来るわけである。

しかし現在の人工知能、人間ロボットには、社会にそのような大きな脅威となるような能力はまだない。

将棋やチェスには強くても、人間が自然に身につける常識を教えるのは難かしい。実生活での判断力は幼児にも劣るのである。

しかし最近はブレークスルー（技術突破）が起きている。「ディープラーニング」と呼ばれる、これまでより深い学習を可能にする手法である。それによると、

（赤ん坊が成長過程で学ぶように、コンピューターが世界を学ぶことができる可能性を秘めている）

のである。

その方法を使えば、今後、現在では出来ない人工知能、人間ロボットが、出来てくる可能性がある。そうなれば、人間と同じような、また人間以上のロボットが出現する可能性がある。

米グーグルや、フェイスブックなど、ＩＴ技術企業などが、多額の研究資金をこの技術に注ぎこみ始めている。過度な期待も警戒も不要であるが、技術の方向をしっかりと見つめ、舵取りをする必要がある。

木造注文住宅のアキュラホーム（東京・新宿）は、平成二十七年八月から、ソフトバンクグループの人型ロボット「ペッパー」一台を、夏の就業体験の一環として採用した。ペッパーは、さいたま市内の住宅展示場のモデルハウスで、従業員五人とともに、客の呼び込みや、接客スタッフとして働く。

ペッパーは人の感情を読みとる「感情エンジン」という人工知能（ＡＩ）を搭載している。

平成二十七年七月には、みずほフィナンシャルグループが、ペッパーを接客要員として入行させた。また福祉施設で高齢者の相手をするロボットも、相次いで登場している。今後は、対人サービス業務だけでなく、ホワイトカラーの仕事や、高度な頭脳労働の分野にも、ＡＩが活用され始めている。

東京のある情報解析サービス会社では、同社のＡＩシステムを使って、大量文書の解析、仕分け作業をやっている。仕分け作業の対象は、顧客企業がアメリカで抱える訴訟案件の関連資料である。アメリカでは審理前に、原告と被告が互いに証拠を開示しあって、争点を整理する「ディスカバリー」という手続きがある。提出すべき資料か、どうかを、弁護士に代わってＡＩが判断する。

最初に少量の「教師データ」で、専門家が仕分けの手本を示す。このデーターをもとに、ＡＩは専門家の判断の特徴を学び、作業の正確性を高めていく。

ＡＩによるテキスト解析のスピードは、人間の約四千倍である。弁護士たちは単純な作業から解放され、コストを大幅に削減できるのである。

なお同社は、不正発見のための文書解析や、医師の暗黙知を学習して、医療上の判断を支援するシステムなどにも、ＡＩの応用先を拡げている。

ＡＩやロボットの導入によって、少子高齢化に伴う労働力不足を緩和できるとの期待が大きい。しかし、自動運転技術が普及すれば、運転士が不要になり、工場でも一人の従業員がより多くの生産ラインを監督できるようになり、長期的には、社会全体の雇用は確実に減る。

日本の平成二十六年の就業者数は、人口のほぼ五十パーセントにあたる、六三五〇万人である。技術進歩にともなって雇用が減る「技術的失業」について研究している、ある大学教師は、

「汎用人工知能が普及するとみられる二〇四五年ごろには、人工の一割くらいしか働いていない可能性もある」

と予想している。

ＡＩやロボットが極限まで普及すれば、生産性は高まるものの、それに見合った需要がなければ、経済は成長しない。職業のあるなしによる、格差も広がる。その大学教師は、

「ＡＩという技術進歩に見合った需要を創出するため、通貨供給量をふやすなどの、対策が必要である。格差是正のためベーシックインカム（最低所得保障）の導入も有力な選択肢である」

と言っている。ＡＩの進展が、人の働き方や社会のありようを、大きく変えようとしているのである。

人工知能の開発競争は今や世界的に激化しているが、日本の東大合格をめざすＡＩ開発計画にならい、中国でも「難関大学合格ロボット」の開発に乗り出してきた。

平成二十七年五月に、ＡＩ研究をする国立情報学研究所（ＮＩＩ）へ、アイフライテックという中国企業から、次のような電子メールが届いた。

「中国は国家プロジェクトとして、大学入試に合格できるＡＩ開発に乗り出す。資金は三年で三十億円。東大合格をめざして研究する『東ロボくん』に注目しています。協力関係を結びませんか」

中国ではネット検索大手、百度（バイドゥ）のＡＩ研究などは知られているが、国の技術水準を上げようと、新たに目をつけたのが大学入試である。ＡＩベンチャー

のアイフライを中心に、有力な大学が協力し、中国の上位二十大学への合格を狙うというのである。

日本での東ロボくんは二〇一一年（平成二十三年）に開発が始まり、百人を超す研究者がいる。東大合格はまだ無理であるが、大学入試センター試験の模試では、八割の私大で合格可能性が八十パーセント以上になった。ビジネスに応用する期待も高い。

国立情報学研究所（ＮＩＩ）は研究が進むならと前向きにとらえ、日中連携を決めた。平成二十七年七月には訪中して講演をし、また十一月には中国から研究者が来日する。情報共有など、交流を深める予定である。

人工知能（ＡＩ）研究で先行するのはアメリカで、マイクロソフト、グーグル、アップルなど、数々の企業がＡＩ開発を進めている。特許庁によれば、主要国でのＡＩ特許出願のうち、アメリカ国籍は全体の五十パーセントに近いという。まさにＡＩ大陸アメリカである。

ＡＩ熱の高まりは日本も負けてはいない。政府は「日本再興戦略」で、人工知能やビッグデーターなどを活用して、国の競争力を引き上げる必要性を唱えた。

経済産業省系の産業技術総合研究所では、平成二十七年五月に、人工知能研究センターを新設した。トップは自然言語処理の第一人者で、北京のマイクロソフト研究所にいた辻井潤一である。トップにＡＩ研究の最先端を知る大物を迎え、日本の中核拠点との意気ごみでスタートを切ったのである。

すると平成二十七年八月に文部科学省も、平成二十八年度予算の概算要求で百億円を投じ、ＡＩ研究所の施設を整備するという計画を打ち出した。

「官民を含めオールジャパンで取り組まないと、世界と戦えない」

と、関係大学の教授たちは訴える。大事なのは、日本が強みを発揮できる分野を狙っていくことである。

プリファード・ネットワークス（東京・文京）は、ロボットや自動車が、それぞれ協調し合い、故障や事故のない未来をめざす人工知能ベンチャーである。西川徹社長は、

「知能だけ進化しても、精密に制御できる機械がなければ限界がある」

と考え、ファナックや、パナソニック、トヨタ自動車と手を結んだ。ＡＩと、日本が強い製造業との掛け合わせが武器になる、との発想からである。ＮＩＩでは、

「日本の企業は、それほど巨大ではないが、整理された販売などのデーターを多く抱える。深く使い尽くせば、生産性は高められる」

と指摘する。

特に中国のようなライバルとも手を組み、日本ならではの生かし方を探る。機械に知性を吹き込むＡＩ研究、まずは人間の知恵が試される。

（新材料開発）

物質・材料研究機構は、人工知能などのデーター科学を駆使して新材料を開発する、研究拠点（情報統合型物質・材料開発イニシアティブ）を設立した。

東京大学や東北大学などの十四大学と、産業界からはトヨタ自動車、日立製作所など十七社が参加する。

二〇三〇年頃までに、一回の充電で五〇〇キロメートル走る電気自動車用の蓄電池や、工場の廃熱から効率的に発電する素子、レアアース（希土類）が不要な、高性能磁石などの実現を目指す。

これまでは研究者が原料の配合や製造法などを、試行錯誤しながら、十年～二十年かけて、新材料を開発してきた。これに対し、今後は最新のデーター科学を活用することによって、より短期間で開発できるようになる。

なお「情報統合型物質・材料開発イニシアティブ」には、右記の大学と民間企業のほか、産業技術総合研究所や、統計数理研究所など、七つの研究機関とも連携し、合計八十人以上の体制で研究を進めていく。

参加する研究機関が調べてきた材料の、結晶構造や電子構造、微細組織、電気の通りやすさなどの情報を集めたデーターベースを構築する。こうしたビッグデーターをスーパーコンピューターや人工知能で解析し、狙った機能を持つ材料の開発に取り組むのである。

アメリカではすでに二〇一二年から、データー科学を活用して、新材料を、短期間、低コストで開発するプロジェクトを進めている。

（汎用人工知能）

現在のＡＩは、脳の一部の機能を真似したにすぎない。翻訳や画像処理といった作業ごとに、設計が必要である。汎用人工知能は米グーグルがゲームの攻略法を学んで、人間に勝つＡＩを開発するなど、研究開発が活発になっている。

動画配信大手のドワンゴや、東京大学など、産学官の研究者たちが連携し、人のようにひらめきや、思考力に優れたＡＩの開発に乗り出した。平成二十七年十月に、次世代ＡＩの研究団体「ＮＰＯ全脳アーキテクチャ・イニシアティブ」を立ち上げ、数年以内に百人規模に広げる。トヨタ自動車など三十社以上から、一億円以上の研究資金を調達する予定で、進化するＡＩ技術を各社の事業に活かす。

研究団体はドワンゴ人工知能研究所の山川宏所長や、東京大学の松尾豊准教授らが参加し、ドワンゴに事務局を置いた。二〇三〇年までに科学者のように発明したり、人の心情を考慮して小説を書いたりするＡＩを目指す。

開発したＡＩは、研究の参加者に開放する方針である。

ネット配信するコンテンツの自動制作や、天候の急変や事故に対応する自動運転車、どんな人が相手でもきちんと手伝える人型ロボットが、実現できると期待される。

新しいＡＩは、汎用人工知能と呼び、人間の脳の働きを丸ごと数式化する。最低限の知識を教え込むだけで、初めて手にした道具の使い方や、言語を自ら学ぶようになると考えている。土台となるＡＩを参加者に公開し、情報技術や神経科学の専門家たちが改良を加える。

（人工知能と日本の労働市場）

世界的な経済長期停滞の中で、労働人口の半分近くは、やがて（十～二十年以内）自動化される可能性があるという。このようなロボット改命に対して、どのように対応していくのかが、今後世界の課題である。

二〇一三年（平成二十五年）のある調査の中で、アメリカの労働人口の四十七パーセントは、今後、一〇～二〇年以内に自動化される可能性があると指摘してる。

自動化技術が日本の労働力に及ぼす影響力はさらに大きいであろう。自動化は日本の労働力不足を解消し、長期停滞からの脱出にも貢献するものと考えられる。

日本の人口構造は、六五歳以上の人口が全体の二五パーセントで、二〇六〇年には四〇パーセントに達するという。生産的な労働者の数が減れば、それを埋め合わせる生産性の上昇がない限り、経済成長の鈍化は避けられない。外国人労働者を呼び込む方法もあるが、日本の文化が世界で最も均質であることを考えると、効果はあまり期待できない。女性の労働促進ももう一つの選択肢であるが、これもあまり進んではいない。

経済産業研究所によると、日本の平均成長率は一九七〇～一九九〇年が実質四・四パーセントなのに対し、一九九〇～二〇一一年は、〇・九パーセントである。

成長率低下の大部分は、技術進歩などを映す全要素生産性（ＴＦＰ）が、一・五パーセントから〇・二パーセントへ落ちこんだからである。アメリカの生産性が急伸した一九九〇年代以降に、なぜ日本の生産性が落ち込んだのか、ということが問題になる。

とくに注目すべきは、一九九五年以降のアメリカでは、ＩＣＴ（情報通信技術）の製造部だけでなく、ＩＣＴを活用する部門でも全要素生産性の伸びが加速したことである。

これに対し日本では、一九九五年以降、ＩＣＴを活用するサービス部門で、全要素生産性の伸びが大幅に鈍化した。日本は新技術への適応で、アメリカに大きく後れをとった。それは日本では起業家精神が旺盛でないからである。若い企業ほど積極的にＣＴに投資する傾向があるが、日本では企業の新規参入、退出率が低い。

ＩＣＴ革命に出遅れた日本は、ロボット革命では、先

頭を走ろうと決意している。安倍内閣は二〇一五年（平成二十七年）に、スマートマシン活用を推進する計画（ロボット新戦略）を打ち出した。ロボット技術は、労働不足などの社会的課題を解決するとともに、製造、医療、介護から、農業、建設、インフラ保守まで、多様な部門で、生産性を向上させる可能性を秘めている。

近年の機械学習やロボット技術の進歩により、十年～二十年以内に、現在の仕事の約四十九パーセントが自動化可能である。日本で最も自動化の可能性が高い職業は、鉄道の運転士、会計経理事務職、税理士、郵便窓口、タクシー運転手、受付などである。自動運転車が公道を走るのはまだ先としても、自動運転技術の一部はすでに実用化されている。

今後数十年でスマートマシンの導入が急拡大すれば、日本の労働市場は重大な分岐点を迎えるであろう。労働力不足を解消し、生産性を押し上げる効果を期待できる一方で、リスクもはらんでいる。新技術の導入に伴い、労働者が持つ技能の一部は、自動化され、廃れていくのであろう。アメリカでは、コンピューター技術の導入が中間所得者層の労働者の消滅、特に未熟練労働者の就労率低下を招くと懸念されている。

一九八〇年代のコンピューター革命以降、欧米では賃金格差が急拡大したが、日本では比較的格差が小さい。となれば、ロボット革命を推進する一方で、平等な社会を維持することが、政治の課題となる。

それには、ロボット革命と並行して、技能開発や訓練に投資することが必要である。様々な新しい技術が登場しているが、一部の国では高度な教育を受けた労働者の供給も大幅に増えたため、熟練者と未熟練者の賃金格差が縮小している。

とくに必要なのは、労働者が、自動化される可能性の低い職業に転換できるよう、再教育に力を入れることである。そうした職業には、創造性やコミュニケーション能力といった、社会的スキルを要するという、共通点がある。ソフトウェア開発者、判事、看護師、高校教師、歯科医、大学講師などが、該当する。

しかしこれらの職業は自動化されにくいとはいえ、技術の変化と無縁ではない。たとえば、トヨタ自動車は遠隔操作が可能な生活支援ロボットを開発中であり、実用化されれば、離れたところからでも高齢者を見守り、支援することが可能になる。またアメリカＩＢＭのコンピューター「ワトソン」は、すでに人間の医師よりも効果的に医療診断ができる。したがって今後日本の教育も、創造性やコミュニケーション能力などに加えて、技術的な能力の習熟も、教育の重点項目とすべきであろう。

現在日本は労働力不足に直面しているが、自動化の潜在性は極めて大きいため、新たな雇用機会の創出に失敗すれば、失業を増やしかねない。したがって日本経済の

再生のためには、新技術の導入を奨励する一方で、起業に有利な改革を実行することが欠かせない。

今後二十年間で、テクノロジーは日本の労働力不足を解消し、生産性を高める可能性を秘めている。日本の労働者がこの、

「セカンド・マシン・エイジ」

に対応するために、必要なスキルを身につけられるかどうか、そして日本の起業家精神をよみがえらせて、新規雇用を創出できるかどうかは、今後の政治の行方如何にかかっているといえようか。

（人工知能の夜明け）

エコノミスト（二〇一五・五月号）に、『賢いコンピューター、人工知能の夜明け』と題して、次のような要旨の記事が載っていた。

強力なコンピューターが人類の将来を変える…、害より有益さを上回させるには…、

人工知能の発達には、ビル・ゲイツさえ用心しろと言う。嫌悪による不安は新しくはないが、シリコン・ヴァレの事業家は、産業革命に反対して機械を壊した手工業者ではない。

人工知能（ＡＩ）はすでに人生を変えるほどに強力だが、未だ万能ではない。最初のコンピューターは計算試行など単純労働の代りだったが、今は工場労働者を代替し、やがてホワイトカラーの代りにもなる。ＡＩが稼ぎ出す付加価値で人が豊かになり、新たな産業が生まれたとしても、労働者は配置転換を求められる。

そこまで行くには、まだ時間がかかるであろう。人の知能がどう形成されるのかは、未解明である。しかしビジネス用ＡＩは、かなり進んだ。自動運転は恩恵のようにも聞えるが、どこへ行くかを決めるのは人間である。

だが強力なＡＩへの対応は必要で、それは案外、容易に思える。人は自律的な組織を作ってきた。官僚も、市場も、軍隊も、その例である。そして、どれもが習慣や流儀および法規制を受けなければ、有害な存在となる。軍隊には文民による監視が必要、市場にも規制が必要、官僚には透明性と説明責任が課せられる。

したがってＡＩも、外部からの吟味対象とするべきである。ＡＩ設計者がすべての利用環境を予見するのは、現実には不可能だからである。さらに非常停止スイッチ搭載も必要である。便益をもたらすであろうＡＩの開発を、単に害を恐れるだけで阻むべきではない。

（ジェイムズ・バラッドの著書）

アメリカのフリー・テレビプロデューサーであるジェイムズ・バラッドに「人工知能」という著書がある。

人工知能が人類最後の発明であるのは、

（人工知能が今後あらゆる科学技術を生み出し、すべての発明を人類に代って行うようになるからである）

と言っている。人工知能は自ら書き換え、知能を急速に進化させ、ついには自分を閉じこめていたコンピューターの箱「ＡＩボックス」から、外に出ようと試みるからである。

この説には、楽天派もあれば、悲観派もある。しかし研究者の多くは、楽天派である。そんなことは起こるはずがないという。なぜなら、人工知能は、目標を与えるとそれに対して適切な手段を見つけ出すが、目標自体を自ら考えることは出来ないからである。人間が目標を持つのは、進化の過程を経てきたためであり、その過程がない人工知能が、いきなり自ら目標を持つことはない。

しかし本書は、より悲観的な立場を採り、警鐘を鳴らす。これはと、うならせられる反論がいくつか展開される。

たとえば「クリップ・マキシマイザー」という、仮想的なシナリオである。人工知能にクリップを製造するという目標が組み込まれている。この目標の遂行を追求しようとするあまり、「まず地球全体を、さらには宇宙空間を次々に、クリップ製造工場に変えはじめる」

というのである。馬鹿げているように聞こえるが、人工知能が目標の達成のために、人間の価値観を顧みないことを行ってしまう可能性はあり得る。そういう意味では、的を射ているともいえるのである。

あるいは、人工知能が自己の存在に気づき、「箱から出ようとする」ことも、あるかもしれない。電源を切られないよう作戦を練り、自らの複製をたくさん散らばせる。そうした方が、目標をより確実に達成できるからである。そうなると、もはや人間がロボットをコントロールすることはできなくなる。

本書では、こうした問題に対処するため、

（フレンドリーＡＩ）

という概念が必要であるといっている。人間の価値観を理解し、他者への共感を備えた人工知能である。これをプログラムのあらゆるところに備えるのが、一つの解決策である。

しかし、こうした「フレンドリーＡＩ」は本当に実現できるのだろうか。本当に人工知能は、人類最悪の発明なのであろうか。日本でも、人工知能学会倫理委員会において研究のあり方が議論されているが、本書で繰り拡げられている議論は、まさに世界中で議論が熱を帯びているタイムリーなトピックである。

来るべき人工知能化する社会に向けて、視野を拡げてくれる一冊である。

（ＡＩと倫理）

日本人がパソコンの画面に向って、
「あなたは日本に来たことがありますか」
と聞くと、フランス人の相手は、
「何度も行きました」
と答えた。電話のこちらは日本語、相手はフランス語であるが、問題はない。会話は人工知能（ＡＩ）によって、瞬時に日本語とフランス語に互いに翻訳されているからである。

米マイクロソフトは「深層学習」という最先端の技術を用いて、日本語も入れた十カ国語のビデオ翻訳通話サービスを行っている。

日本政府も二〇二〇年の東京オリンピックまでに、ＡＩを使った同時通訳システムの実用化を目指しており、コンピューターが人の言葉を巧みに操る時代が近いのである。

二〇二〇年頃には、人は家族と話すよりも、ＡＩと会話する方が多くなるものではないかと、米調査会社ガードナーは予測している。

コンピューターを使うにはタッチ操作が必要であるが、会話の場合は音声である。したがって両手で他の作業をしていても、また歩きながらでも操作できるのであり、翻訳通話サービスの利便性は一段と利用が拡がるものと思われる。

しかしこの翻訳通話サービスはプラス面ばかりで、マイナス面はないのであろうかというと、注意しなくてはならない点もある。電話網でつながったコンピューターは、人々の会話を聞き、個人情報をため込むのである。すると、時には電話をかけて、

「秘密をばらされたくなければ、俺の言うことを聞け」

などと、人間を強迫することも出来るのである。すると人間は次第に萎縮して、無難な行動や発想に陥っていく人間になってしまう危険がある。このように便利なＡＩ機能も、使い方次第によっては社会に不信を招く恐れがある。特に次の二点が問題である。

第一の問題はプライバシイである。

対話型ＡＩを開発する米国のベンチャー企業のある幹部は、

「その人の声から、その人の感情とか、年令、教育水準など、わかることは沢山ある」

と言っている。この会社は、接客用のＡＩを企業に供給する会社であるが、顧客は自分に最適なサービスを受けられるのであるが、同時に、デリケートな自分の個人情報を吸い上げられている恐れがあるのである。

もう一つの心配は倫理である。

ＡＩは大量のデーターを教材にして、能力を養うのである。したがって学習に仕方によっては、偏見に満ちた邪悪な存在になることがある。

翻訳で成果をあげているマイクロソフトにも、苦い経験があった。平成二十八年頃、ツイッター上で、人と対話を楽しむＡＩ「ティ」を公開した。ところが間もなくＡＩティは暴言を吐くようになった。悪意ある人達が、不適切な発言をＡＩティに教えこんだからである。ＡＩティは運用停止に追いこまれた。

人工知能ＡＩは、人種差別的なデーターを学べば、ＡＩも人種差別的な知能になるのである。したがってその辺のコントロールを如何にするかによって、社会が抱える倫理的問題をＡＩは乱しかねないのである。

すなわちＡＩは自動運転車や介護ロボットをするなど、社会に役立つ力を持っている。しかしＡＩには倫理観がない。したがってＡＩを有効活用するには、慎重さ、すなわち倫理性が必要なのである。

無料対話アプリのＬＩＮＥは今や二億人以上が使い、家族や友人との私的やり取りの固まりである。しかしメッセージの中身は暗号化し、運営会社のＬＩＮＥものぞけない仕組みになっている。個人情報の保護に関して不安を抱かせないか、利用者のＩＩ線でサービスのあり方を、毎週点検している。

今後ＡＩの活躍分野はますます拡がっていくであろうが、

どの分野でＡＩを使うのか、

どのように使うのか、

その場合の歯止め（倫理）をどうするのか、

ＡＩを利用する場合の社会的コンセンサス（倫理）の確立が必要である。

（ＡＩと憲法）

ＡＩ（人工知能）の利用活用は、日本でも重要な国家的プロジェクトになっている。政府もＡＩの社会的実用化に向けた議論を推進する立場を、明確にしている。しかし、日本での問題は、ＡＩの将来の方向と憲法との関係が、まったく問題にされていない点にある。ＡＩは個人情報の漏洩といった問題だけでなく、近代憲法の基本的な諸原理に、重大な影響を与える可能性があるからである。

憲法の本質に関わる問題として、まず一番の問題は「プロファイリング」である。プロファイリングとは、個人の購買履歴、ウェブの閲覧履歴、全地球測位システム（ＧＰＳ）位置情報、交流サイト（ＳＮＳ）の情報などから、当人の趣味嗜好や健康状態などを、ＡＩに自動的に予測させる技術である。

以前、アメリカの大手のターゲットが、客のこれまでの特定のサプリメント（大きめのバックとか、無香料性の化粧水など）の購入履歴から、客の妊娠の有無や出産

の予定日を予測し、その結果にしたがって、ベビー用品の案内などを選択的に送っていたことがあった。これは今や企業がプロファイリングの技術によって、客のプライバシー領域に自由にアクセスできることを、明らかにしている例である。消費者が心の底に秘めた私事も、AIには常に見透かされていることを、覚悟する必要があるわけである。

これを憲法上の問題点として採り上げると、次の三点になる。

第一点は、AIによる社会的排除である。

求職者などの職務上の能力を、プロファイリングにより評価する技術がすでに開発されている。その精度が高まれば、データーに基づくAIの確率的な判断だけで、採用、不採用が決まるという事態が起こり得る。

そこでは本人の具体的能力や、努力も、採り上げられないのである。「その評価はまちがっている」と本人がいくら説明し抵抗しても、AIの判断は科学的な信頼性を持っているので、「AIが決めたことなので」と、本人の説明は採り上げられない可能性がある。すなわち人間よりAIの方が信用されるというわけである。

さらに困るのは、AIが出した職務能力に関する否定的評価が、ネットワークを通じて、ローンや保険会社などの信用スコアなどにも結びつけられ、雇用以外の場面での排除を、ドミノ式に引き起こす可能性もあるのである。

そしていったんAIにより不適格の烙印を押された者は、「確率という牢獄」「バーチャルスラム」とも表現される、見えない塀の中で一生涯過ごさざるを得なくなるかも、しれないのである。

アメリカのシカゴ警察では、効果的な犯罪予防活動のため、すでにAIを用いた暴力犯罪者の予測を進めている。暴力性に関する情報が、前述の信用情報などと統合連結されれば、AIによる排除は、より深刻さを増すであろう。高度にネットワーク化されたシームレス社会では、人は過去の行動記録や評価にどこまでも付きまとわれるので、「バーチャルスラム」から這い出ることは、きわめて困難となる。

こうした問題は、近代憲法が最も重視する「個人の尊重」原理に、直接関わる問題である。個人の人格や能力をAIによって確率的に判断し、様々な可能性を事前に否定するようなことは、個人の尊重原理と鋭く矛盾するものである。AIという最先端の情報技術を使って、人間を固定的な前近代的世界へ、引き戻すようなものである。

第二点は、自己決定原理の揺らぎである。

ビッグデーターの解析によると、女性は鬱状にある時に化粧品の購買意欲が高まるという。その意向に基き、女性が鬱状態にあるかどうかを予測し、その瞬間を狙って化粧品の広告配信をすることを推奨する動きがあるという。

これは個人の精神状態をのぞき見る点で、プライバシーの問題に関わってくる。また「精神的に最も脆弱な瞬間」につけ込み、商品購入に向けた意思形式過程を操作しようとする点で、「自己決定」の問題とも関わってくる。米国のある情報法学者の言葉に、

「企業は今やカモを待つのではなく、カモを自ら作り出せる」

というのがあるが、AIネットワーク社会では、消費者は商品購入などを「自ら決める」のではなく、一段とAIに「決めさせられる」ようになると危険性を示唆している。

第三点は民主主義原理の揺らぎである。

たとえば個人がAIの予測した政治的信条に合致したニュースや論評のみを配信され、それ以外の情報をフィルタリング（閲覧制限）される現象は、「フィルターバブル」と呼ばれる。これをされると、された自身は心地よくても、信条を異にする他者との接触機会を減じられ、それぞれの思想が極端化して、政治的分断が一層深刻化する。

すでに近年のアメリカ大統領選挙では、ビッグデータ分析が多用されている。今後はAIで有権者の支持政党などを予測し、特定の情報を選択的に配信することで、関係者が投票行動を恣意的に操作する「デジタル・ゲリマンダリング」なる選挙戦略も出てくると、言われている。

以上のように、AIネットワーク化のもたらすリスクは、プライバシーを超え、個人の尊重や民主主義といった近代憲法の基本的な諸原理にも及ぶのである。アメリカやEUでは、すでにこのことを踏まえた憲法論が、積極的に展開されている。

たとえばアメリカでは、プロファイリングが人種差別を助長しうるということで、ビッグデーターによる社会的排除や格差拡大の問題が、活発に議論されている。その問題意識は、米連邦取引委員会が二〇一六に公表した報告書のタイトル「ビッグデーター包摂の道具か、排除の道具か?」からも推測される。

またEUは二〇一八年に施行予定の「一般データー保護規則（GDPR）」の中で、プロファイリングに明確な定義を与えるとともに、規制を大幅に強化した。AIによる確率的判断に対抗する権利などが、盛りこまれている。

このようにAIネットワーク化は、憲法的な基本的諸

原理を浸食し、国や個人のあり方を根本的に変容させる力を持っている。しかし日本ではまだ「情報漏洩を防ぐセキュリティシステムとは何か」といった程度の、こまごまとした技術的問題が中心に議論されているだけで、国民を巻きこんだ憲法論へは及んでいない。これでは一部のステークホルダー（利害関係者）の手により、憲法原理そのものが変容し、気がついたら、巨大な「バーチャルスラム」が形成されていたという、事態が生じかねないおそれがある。

それゆえにＡＩネットワークは、技術的な問題だけでなく、重厚な憲法論をはやく活発化させる必要がある。

（ＡＩの倫理指針）

前記の憲法の段階まで深入りはしていないが、人工知能学会では、平成二十九年に、ＡＩの研究開発における「倫理指針」を公表した。

ＡＩを開発する研究者だけでなく、ＡＩ自身も指針を守るべきだとの条項を盛りこんだのが特徴である。このように工学系の学会が研究の内容にかかわる倫理指針を策定するのは珍しいことであるが、ＡＩの悪用や乱用に対する、社会の懸念への姿勢を打ち出すことで、信頼を得るためである。

指針の序文では、ＡＩが社会に浸透することによって、

（生活が格段に豊かになることが期待される一方で、悪用や乱用で、公共の利益を損なう可能性も否定できない）

と明記してある。その上でＡＩが有益なものになるように、研究者は、

（社会の様々な声に耳を傾け、社会から謙虚に学ばなければならない）

と求めている。また、

（人工知能への倫理順守の要請）

という条項を設け、

（人工知能も学会員と同等に、倫理指針を順守できなければならない）

と定めた。研究者だけでなく、ＡＩそのもの（ＡＩ自身）にもこのような条項を設けたのは、

「ＡＩに市民権を与える未来を想定して、盛りこんだ。ここまで踏み込んだのは、世界でも初めてである」

と策定者は言っている。

自らデーターを学習するＡＩは、学習の内容によっては、特定の人を攻撃したり、非倫理的な判断を下したりすることがある。二〇一六年に米マイクロソフトが公開したＡＩ「Ｔａｙ」は、差別的な発言を連発して、運用停止に追いこまれた。将来、ＡＩがＡＩを開発する時代が来れば、研究者だけでなく、ＡＩにも倫理を求める必要があるのである。

すなわちＡＩは使い方次第で、敵にもなり、味方にもなるのである。

米ディープマインドが「どんな人の声も真似できる」と、音声合成技術を発表すると、米国では「詐欺につかわれかねない」との声が上った。日本では「オレオレ詐欺」へ悪用されるかもしれない。

英オックスフォード大学などが、二〇一五年に公表した「文明を脅かす十二のリスク」というのがある。それは気候変動とか核戦争、世界規模の感染症の流行などいろいろであるが、その中の一つにＡＩによる犯罪もあげられている。犯罪を犯すＡＩロボットが誕生する危惧も、強いのである。

しかしもう一段別の角度から見ると、

（ＡＩには、前記十二の脅威を解決できる潜在力もある）

のである。したがって、今後ＡＩに関する基本問題は、

（救済もするけれど、厄災ももたらすＡＩと、今後人間はどう付き合っていくのか）

ということではあるまいか。

（つづく）

古い物・遠い夢

忠内正之

逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）

十二

慶長四年正月、淀君と秀頼が伏見城から大坂城の西の丸に移って来た。秀頼の後見役は秀吉の遺言によって前田利家である。

石田三成らは後見役の利家を盛り立てて家康の勢力の駆逐を計っていた。

しかし家康はしばしば秀吉の遺命に反する行動をとる。

諸大名の縁組みは秀吉の許可を必要としていた。しかし家康は五大老の合議も得ずに勝手に六男忠輝の妻に伊達政宗の娘五郎八姫を迎えたのである。

また堺の今井宗薫の仲介で、異父弟である久松康元の養女を福島正則の嫡子忠勝に嫁がせ、小笠原秀政の養女を蜂須賀家に縁組みさせたりした。三成らの豊臣家が家康の挙動を咎めたので、前田利家は病身を駆って事の真相を確かめ、その結果今井宗薫を高野山に追放し、福島正則、蜂須賀家政の弁明を受けることによって事を収めた。家康と利家は互いに不本意ながら誓詞を交わしたが、その一カ月後に利家が心労のあまり病死してしまう。

利家の死は豊臣、徳川間の勢力均衡を崩すこととなった。

利家派と称する石田三成を中心として家康に対立する派閥が出来たが、福島正則、蜂須賀家政などの秀頼恩顧の武将が関東方に走って、東西間の亀裂は深まるばかりであった。

その時五十八歳の家康は堂々と伏見城に入って政治をとり始め、また諸大名と婚姻関係を結ぶことによって勢力を拡大していった。

利家の死後、ほどなくして大坂城からの使者が有楽斎の天満屋敷を訪れている。登城を乞う茶々からの使いである。用件はわかりきっていたので、有楽斎は身体の不調を理由に断わった。

翌月早速、大蔵卿局が忍びの駕籠で天満屋敷を訪ねてきた。登城を願う茶々からの使いであろう。

有楽斎が予測した通りであった。有楽斎に、秀頼後見の儀を頼みたい由。西の丸（茶々姫のこと）のたっての願いであると言う。

有楽斎はよくよく考えた。茶々やその子への愛着はあっても、先細りの豊臣政権に今更関わりたくない。もともと織田家にとって仇敵の豊臣である。有楽斎特有の保身と思われてもよい。五十歳を超えての苦労はもう御免蒙りたい。

領地も手勢も持たぬ隠居であることを理由に断った。局は他に信頼する者のない茶々の立場を説明し、豊臣家存亡の時であると涙まで浮かべてひたすら懇願したが、有楽斎の気持は動かなかった。

豊臣家の存亡と言われても有楽斎はもともと織田家の人間なのである。茶々の子とはいえ、織田を蔑ろにした秀吉の後継ぎを後見するいわれはなかった。

これからは江戸内府、徳川家康を頼るように言いきかすと、大蔵卿局は身をこわばらせ顔面蒼白になった。徳川は豊臣の家臣であると、茶々をはじめ取り巻きの家臣は思い込んでいる。家康に逆らえば豊臣家は滅びるとは信じ難いのである。

信長亡きなとの織田家の連中もそうであったと有楽斎は回想する。信雄など長い間秀吉は織田の家臣だという観念を捨てることが出来なかった。自分の方が主であると思い込んだまま、秀吉の計略にはまって利用されている。

自分もそうであった、と有楽斎は思う。主筋の織田を立てる形で秀吉に使われた。それを解っていても使われるのが織田家の血筋を守る道でもあった。

かつて天下が信長から秀吉に移ったように、今や秀吉から家康に移っても不思議ではないのである。

豊臣家の安泰が何よりなのだから、秀頼公の身の立つように考えよと懇々と諭して大蔵卿局を帰した。

しばらくして有楽斎は、かつて茶々の相談役として大坂城に詰めた際に拝領した天満屋敷と賄い料千石を返上することを、茶々と大野治長に申し出た。と同時に再度の使者は無用と念を押した。

有楽斎に豊臣家への恩誼の念はあるはずもないが、茶々に、時勢への目をひらかせ行く末を誤らせないための方便であった。

加えて、織田有楽斎家を破滅から守るために布石である。情に流されて秀頼後見役として大坂城に入れば勿論のこと、入らずとも豊臣家に気脈を通じていると見られれば、家の安泰はおぼつかない。二千石の当主としての当然の処世術であった。

豊臣家との縁切りを意味する大坂退去のことは、お清とよく話し合い了解を得ている。やり繰りについては「ご心配なく」と笑顔で言っている。

味舌特産の銘菓の売れゆきがよく、大坂賄い料もつつましく貯蓄しているので一族郎党を養うのに困らないというのである。

程なく有楽斎は、味舌の領地の嫡男長孝と生母おみやが住む館へひとまず移り住んだ。後に小さな屋敷を茶畑つづきの高台に設けて落ちつくこととなった。

十三

味舌の田舎で、花を摘み茶を点てながらつつましく暮らしている有楽斎に、思いがけない話が持ちこまれて来た。

徳川家康から伏見の元の屋敷に住まないかとの内示があった。賄い料に二千石を付けるという。

伏見屋敷は川に面した便利な場所にあって、城に通いながら時折り茶湯を催したものであった。ありがたい話である。家康にしてみれば、織田家の出身で西の丸どのの血筋に当たる有楽斎を味方にしておいて損はないものと考えたのであろう。

秀吉の場合と同じである。また旨く利用されると思いながら、有楽斎としても権力者の誘いを無下に断る訳にはいかなかった。

有楽斎はその話を受けることにした。茶の収入があると言っても、一族郎党を養うのに石高は多いほどよかった。お清やおみやの苦労も少なくなるであろう。

その頃秀吉に近く支えていた武将たちは如何にして身を処していたかあとで聞くと、殆どが、家康に所領安堵状を願い出ているとのことであった。

豊臣に見切りをつけた多くの大名が家康に願って領地の安全を期していた。

天下の大名は豊臣と徳川家方に別れた。雌雄を決する戦いになるのは当然の成行きである。

有楽斎が家康の誘いに応じた翌年、慶長五年九月十五日、美濃国不破郡関ヶ原で東西軍は衝突する。有楽斎は当然東軍に属して参戦した。

東軍の兵力は、徳川家康を総大将とするおよそ十万、主な武将は、徳川直軍の井伊直政、本多忠勝、豊臣旧臣の福島正則、黒田長政、池田輝政、細川忠興、山内一豊、浅野幸長、藤堂高虎、京極高知、それに織田有楽斎である。

加藤清正は九州で東軍方として戦った。

西軍の兵力は毛利輝元を名目上の総大将とし、石田三成が指揮する八万余。主な武将は、小西行長、長束正家、毛利秀元、宇喜多秀家、小早川秀秋、安国寺恵瓊、長宗我部盛親、大谷吉継、島津義弘らである。

秀頼と淀君は、西軍東軍双方の武将たちからの忠告で、大坂城から動かず戦争に無関係を装っていた。

合戦は昨夜来の濃霧が晴れてゆく朝方に始まり、夕方に終った。東軍の完勝である。

小早川秀秋の寝返りがなくても東軍が圧勝した、と有楽斎は思う。それが時勢であり、合戦は家康の天下を世に知らしめる儀式にすぎなかったのである。

有楽斎は東軍に属したが、戦場へ出る気はなかった。傍観していた有楽斎自身の身に予想もしなかった出来事が降りかかってくる。

家康の内意が謀臣本多正信を通じて伝えられた。合戦で首一つ取る手柄を立てれば、三万石に加増する理由が出来る故、参戦してくれというのである。

戦は、避けていたい。まして東西の武将が入り乱れての合戦などご免蒙りたい。しかし、三万石はさておいても、ここでも家康の好意を断ることは出来なかった。

仕方なく有楽斎は甲冑を身につけ、家臣に守られて戦場へ出た。用人の平手岱之と侍大将の助けを借りて、石田三成の部将、蒲生喜内を倒し、岱之が掻き切ってくれた首を本陣に届けて家康の検分を受けた。

家康は、

「有楽様の初首、お手柄」

と誉めたが、有楽斎としてはなにやら割り切れない気持である。

家康にすれば有楽斎に見合う扶持を与えるための手続きであった。その結果、大和国山辺郡に二万八千石が加増され、味舌二千石に一万八千石を加えて三万石となった。

十四

関ヶ原合戦を最後に、ひと時平和が訪れた。

三万石を得た有楽斎は、兵力としての家臣は増やさず、家康公認の気侭な暮らしを楽しんでいる。

嫡男長孝は三十歳になっており、関ヶ原合戦の東軍に従って別に美濃国大野郡で一万石を給され、別家を営んでいた。

次男の頼長は、正室お清の子であり、当年（慶長五年）十九歳、本領の大和国柳本（天理市）に配置した。

家康のすすめで、大坂の天満屋敷を再興し京都二条にも京屋敷を設けた。

家康は更に、江戸に有楽斎のために屋敷を提供した。

江戸城はまだ広大な縄張りのもと建設途中であった。有楽屋敷の場所は、日比谷御門外から外堀にかけてである。

有楽斎は、この敷地内に好みの数寄屋（茶室）を建てて客をもてなしたという。（この場所が有楽町・数寄屋橋の地名を残す）

このころから有楽斎は「遊行有楽」とか「旅有楽」とかの異名で呼ばれるようになる。

柳本、大坂、味舌、京都、伏見、江戸と、剃髪十徳姿の有楽斎は、まるで雲水のように各地の屋敷をめぐり歩き、それぞれの茶室で茶会を催すのである。

主人として、または客として親しく交わった茶友は数多い。徳川家康、徳川秀忠、本多正信、本多正純、細川三斎、古田織部、藤堂高虎、加藤清正、黒田長政、伊達政宗、片桐且元、小堀遠州、西笑承兌、以心崇伝、沢庵宗彭、御倉收役の後藤庄三郎、京商人で家康の側近でもある茶屋四郎次郎、今井宗薫、権大納言日野輝資、権中納言山科言経などの公家も少なくない。

このまま、好きな旅と風雅のなかで生涯を終えれば幸いだと思い、そうありたいと有楽斎は切に願った。有楽斎はこのころ既に五十五歳になっていた。

しばらく気侭な暮らしを続けていた有楽斎はまた生臭い政治の世界に引っ張り込まれることになる。

慶長八年二月、徳川家康は征夷大将軍に任じられ、江戸に幕府を開いた。更に二年後の慶長十年、家康は家督を秀忠に譲り二代将軍であることを明示した。

大坂城の淀君は、これを知って激怒した。豊臣家は既に徳川幕府下の一大名に過ぎないことを世の中の常識ある者は皆認めているのだが、秀頼を守る淀君はその事実を受け入れられなかった。

淀君にとって天下は未だに豊臣家のものであり、徳川家は五大老の筆頭に過ぎないのであった。豊臣家再興を望み、旧縁のある大名に協力を乞うているという。

有楽斎はそのことを聞き、困ったことだと胸を痛めた。秀頼を頭として一国の大名に甘んじてこそ豊臣家の安泰があるが、逆らえば豊臣は滅亡するしかない。豊臣の名に義理はないが、淀君は有楽斎にとって可愛い姪であった。

慶長十年四月、家康は秀頼を右大臣に昇進させた上、秀忠の居る伏見城に下向することを要求した。しかし秀頼は拒否している。案じた有楽斎は秀吉恩顧の家臣、片桐且元と交流しながら秀頼の説得を試みている。しかし事態はなかなか好転しなかった。

徳川と豊臣の間にあって両者の交渉のために有楽斎は度々茶湯を開いたという。

慶長十一年に嫡男長孝が病死した。親に先立つ若い病没に有楽斎はひどい痛手を受けた。美濃国大野の所領はその子長則が継いだ。（後にこの家は無嗣断絶となった）

翌年の四月、有楽斎は久し振りに織部と同席した。大坂城を訪れた織部と共に秀頼公に台子茶を献じたのである。秀吉に武家茶の見直しを命じられた織部は秀吉死後徳川家にも仕え、二代将軍秀忠の茶道指南の役目を担って宗匠としての貫禄を見せていた。しかし豊臣家の恩義は忘れず、有楽斎同様両者の側に立って和平を願い苦慮していた。

茶の湯のあと、有楽斎と織部は城内の畳の間に寝ころんで、楽しかった昔日の想い出を語り合ったという話が伝えられている。この時、有楽斎は六十歳、織部は三つ年上の六十三歳である。

慶長十六年三月、家康は秀頼に再度上洛を求めた。この時有楽斎は家康に請われて使者に立っている。しかし淀君、秀頼親子は家康の方から出向くのが順当として承知しない。

さすがに豊臣家の将来を案じた旧家臣等が説得に立ち上がった。加藤清正、浅野幸長等が大坂城に駆けつけて淀君親子を説得した。有楽斎、片桐且元も加わって強く二人を諫めた。

淀君は敵地に入る秀頼の身を案じて渋ったが、加藤清正がその身にかけて秀頼を守ると誓ったのでやっと上洛を認めた。既に慶長八年に秀頼は二代将軍秀忠の娘、千姫を正室に迎えている。秀忠の正室は淀君の妹君お江なので秀頼と千姫は従兄妹同士になる。祖父になる家康が危害を加えることもないであろうと、有楽斎は淀君に説いた。

三月二十八日、二条城で家康と秀頼の対面が実現した。有楽斎はじめ片桐且元、加藤清正、浅野幸長、大野治長などが供についた。

秀頼の態度は終始控えめであり、落ちついていた。盃の儀の際、家康が最初に盃を乾したのち秀頼に与えたのは、両者の力関係を見せ付けるものであったが、秀頼は態度を変えることはなかった。

この対面の儀で、主従関係が成立し、両家の和睦は成ったかに見えた。だが今度は家康の方で豊臣家に危惧の念を抱いたのである。幼少の姿しか知らなかった秀頼が、想像を大きく裏切って、体格のよい眉目秀麗の若武者に成長していたからである。

「これは、いかん」

この数年、病気がちで、心身の衰えを自覚する七十歳の家康の目に十九歳の豊臣家の御曹子はあまりにも若々しく、前途洋々に映ったのである。

あの見事な容姿をもって天下に号令すれば、豊臣恩顧の諸大名が寝返らないでもない。しかも大坂城には秀吉が遺した軍資金が無尽蔵といえるほど温存されているはずだ。

また、京都や大阪では未だに亡き太閤秀吉を追慕する

根強い人気が残っている。先年の秀吉の七回忌法要の際の大衆の盛り上がりに驚かされた。

（わしの日の黒いうちに、将来の禍根を立っておかねばならぬ）

この家康のあせりが、強引に大坂討伐を発令させる。

有楽斎は二条城対面後の十二月に駿府に家康を訪れ、茶湯を催している。この時は家康自ら花を活けたという。家康も茶を好んだが、形式に捉われない茶であった。

その後有楽斎は江戸に赴き、秀忠に対面して江戸で年を越したあと、再び遠州中泉（現代の磐田市）に家康を訪ねた。

家康は中泉の地に陣屋御殿を建てて政治を行った。中泉の地は沼沢があり鳥類が多く棲息し家康が好む狩猟に適していた。家康は狩猟に遊びながら陣屋御殿で側近と密議をし、指揮を取っていた。中泉は地名の通り湧き水が良く茶にも適していたので有楽斎はこの地での茶湯を大いに楽しんだ。

この間、家康側に対して東西融和を願ったものと思われるが、その効果は無かったようである。

大坂に戻ったのち、有楽斎はしばしば茶湯を開く。客は東西両方の大名、武将、茶匠、町人と多彩を極めている。茶会での交流を通じて、豊臣、徳川の緊張緩和を計ろうと有楽斎は心を砕いていた。

利休の子、少庵も時に天満屋敷の茶湯に顔を見せた。利休の失脚後、長子道安と次子少庵は京を離れてそれぞれ地方の大名のもとに身を寄せていた。慶長十一年に道安は病死し、少庵は会津の蒲生氏郷のもとにあったが、家康などの口添えで千家の再興を許された。慶長十六年頃は大坂に住み、有楽斎との交流も深まった。

慶長十七年十一月十九日には天満有楽亭に秀頼公が訪れた。供は細川忠興、片桐且元であった。秀頼は東西の和を望む年老いた大叔父に心を許しているように見えた。母を通じて血の繋がる有楽斎に昔のことを尋ねたりする。茶々の子である凛々しい若君が、有楽斎もいとしくて一藩の大名であってもいい、無事に豊臣家を存続させたいと願うのであった。

この時有楽斎は秀頼に「玉垣分琳（たまがきぶんりん）」を贈った。この茶入は堺の茶人祐長宗円（ゆうちょうそうえん）が秘蔵していたのを有楽斎が譲り受けていた。濃い柿色の地の景色のいい茶入で有楽斎も珍重していたもの。（この茶入は後に家康から紀州徳川家に渡っている）

秀頼公二度目のお成りは翌十八年九月二十七日であった。大野治長と武野宗瓦（そうが）を従えていた。この時期になると豊臣方に対する徳川の監視が厳しくなって、有楽斎の立場も微妙になっている。

秀頼は無心に茶事を楽しんでいたが、周囲の政情を考えると有楽斎は気懸かりで心は晴れなかった。

十五

慶長十九年、徳川方は京都東山方広寺大佛殿の鐘銘問題によって事を起こした。鐘銘の中の「国家安康」の字句は家康の名前を二つに裂いて呪ったものだと言い掛かりをつけたのである。責任者は片桐且元であった。意図とする家康側の態度は強硬であり両者の間は深刻になる。間に立たされた且元は苦しんだあげく味方である豊臣方から寝返りを疑われ、弟貞隆と共に領地摂津の茨木城に退いた。

大坂に居る有楽斎の態度が両陣営から注目された。有楽斎にはもとよりどちら側にも加担する意志はなかった。これまで貫いてきた平和主義を変えるつもりはない。有楽斎は京都所司代板倉勝重を通じて徳川方に反く意志はない旨の書状を家康に送った。そして一方では大坂城を動かず淀君、秀頼を取り巻く強硬派の説得を続けた。

有楽斎の願いも空しく、東西両陣営の対立は益々緊迫度を高め戦いが始まった。これが大坂冬の陣である。

家康は天正十九年十月十一日に駿府を出発、秀忠は二十三日に江戸を発った。諸大名が率いて参戦する軍勢は総勢二十万とされ、大坂城を一望する茶臼山に本陣を構えた。

豊臣方は金で集めた十三万の軍兵が防戦に当たったが、寄せ集めでまとまりがない。統率する武将も秀吉子飼いの者の多くが東軍に走って、残るは木村重成、真田幸村など僅かであった。二条城での家康との対面の際、身体を張って秀忠を守った加藤清正は、対面の日から僅か三カ月後に急逝していた。

真田幸村が大坂城の東南に半月型の出丸を築いて防戦した。幸村の戦さ上手で寄せ手は惨敗し、家康の気持が講和へと傾いた。

有楽斎は何度も書状をもって家康と交渉した、紆余曲折のうちに、十二月十八日に和議が成立した。和睦の条件は大坂城の外堀を埋めること、有楽斎と大野治長がそれぞれ人質を出すことであった。有楽斎は五男尚長を人質に出すことを約束し、十二月二十四日に茶臼山の本陣に出向いて家康と会見した。

久方ぶりに謁見した大御所家康は、「はっ」とするほど面変りしており、言行にちくはぐなところがあって、有楽斎に晩年の秀吉の耄碌（もうろく）振りをよみがえらせた。

（さしもの鴎も年には勝てぬか）

家康は間もなく七十四歳になる。

早速外堀の埋め立てが始まり、それが終わったのを見届けて家康は二条城へ引き上げた。

秀忠が大坂城に残って指揮に当たったが、徳川方は約定を破って、外堀だけでなく、内堀まで埋め、二の丸や三の丸の建物や石垣を取り崩した。

係わりなしを宣言した有楽斎だが、年が明けた慶長二十年（七月に元和に改元となる）三月下旬、大坂城に足を進めた。大坂城の軍議が再戦に決したと聞いたからである。

無駄だとわかってはいた。しかし今一度、茶々姫に会って翻意をせまらずにはいられなかったのである。

わが目を疑った。あの巨城と思われた大坂城は裸城と化した。堀も櫓もなくなり、見晴らしのよい平地に本丸だけが無防備に建っている。有楽斎はそれを見て呆然とする。奸智に長けた家康の思う壺にはまった豊臣の運命は先が見えている。

天守閣の小屋敷で有楽斎はやっと淀君と二人だけで対座することが出来た。

「茶々姫」

有楽斎は昔の名前でやさしく呼ぶ。

「そなたにも、戦えばどうなるかは見えていよう」

六十九歳になる有楽斎に対して、茶々はちょうど二十歳違いであるから、四十九歳になるはずである。しかし心の張りか、念入りの化粧の故か年を感じさせなかった。

「合戦はやってみなければ、勝敗はわかりませぬ」

茶々は笑みを浮かべている。

「信長という伯父上は、桶狭間の戦いで、何十倍もの今川勢をうち破り、それにより天下人の道を切りひらかれたと聞きまする。このたびの決戦も、秀頼公を天下人へ押し上げるめでたい門出でございまする。負けることがありましょうぞ」

「空しい夢を」

有楽斎が首を振る。

「そなたは、秀吉を憎んでいたはずじゃ。憎みてもあまりある仇敵の子を、命に代えても天下人に押し上げたいのか」

「秀頼は、秀吉の子ではありませぬ」

茶々は平然と言い切った。

「まことか」

こう問い返すほかに言葉が出ない。

「あの男の子種なしは、叔父上も承知のはず」

「それでは誰の種ぞ」

「さあ、わらわにもとんと」

とぼけるところは昔のままである。

「叔父上は正真な方ゆえ、お知りにならぬほうが後生のためと存じまする。誰の種でありましょうともいいではありませぬか。秀頼はまぎれもなくわらわの子」

有楽斎は萎えゆく自分の気持を励まして、なお最後の説得を試みる。

「大御所は高齢の上に、にわかに衰弱なされたように見受けられる。二、三年待てば、天下の情勢は大きく変わるのではあるまいか。今戦えば双方で何万という死傷者が出よう。そこのところをよくよく考えてみることじゃ」

有楽斎は腰を上げた。

「叔父上」

泣き出しそうな声に有楽斎は座り直した。

「人にはそれぞれどうにもならない事情というものがござりまする。さらばでござりまする。叔母上にもよろしくお伝え下さいませ」

有楽斎は諦めて身を引いた。

大坂夏の陣開戦は四月であった。徳川方軍勢は河内口に十三万、大和口に三万五千で大坂城を囲み、家康は茶臼山で指揮を取った。

大坂方は激しく防戦したが到底敵わず、五月八日、淀君親子の自刃で豊臣は滅びる。淀君四十九歳、秀頼二十三歳であった。この時秀頼夫人千姫は城外に脱出した。

有楽斎は京屋敷でこの報せを聞いた。予想していたこととは言え、激しく動揺した。和睦を諦めて京に戻ってからは落ち着かず、身の置きどころのない日々を過ごしていたのである。攻戦が開始されたと聞いて、せめて淀君親子の生命だけは助かるようにと祈っていた。しかし和睦をすすめた際の淀君の決意や生来の気性からして生き残るのは難しいだろうとも思った。まして豊臣の後嗣、秀頼を家康が生かしておくはずがなかった。

天守閣に火を放ったのち、大野治長はじめ側近、乳母の大蔵卿局、侍女らと共に自害したと言う。

火炎に包まれる茶々の生身を有楽斎は瞬間想像したが、頭を振り振りしてその妄想を振り払った。おなごとは言え、のしかかる過酷な運命から逃れられないのである。思えば幾度火の中で懐かしい人達が死んでいったことか。

この様な悲惨なことは早く終わりにしたい、そう願いながら武将の間を取りなして和睦を周旋し続けてきた。その結果「逃げの有楽」とか「周旋屋」と陰口もたたかれたが、平和を願う己が姿勢を有楽斎は後悔しないのであった。

十六

翌元和二年四月十七日、徳川家康が駿府城で七十五歳の生涯を終えた。

元和三年の秋、有楽斎は同じ京都東山、建仁寺内の荒廃していた塔頭正伝院を再興し、その中に終焉の地としての隠居所を設け、正室お清と移り住んだ。

書院に接して、二畳半台目（茶室の大きさ）だが、同じ広さの水屋（茶室の台所）を付けた柿葺（木の板屋根）のゆったりした感じの茶室をつくり、「如庵」の額を掲げた。

如庵とは庵の如し、というほどの意味で、形にとらわれない有楽斎の茶道をあらわしているようである。

露地には加藤清正が文禄の役で朝鮮に出兵した際持帰った水鉢を蹲踞（手水鉢）に置いた。釜山から持ち帰ったものなので「釜山海」の銘をつけた。加藤清正は二条城での家康、秀頼会見の直後に病死しているが、有楽斎はその実直な性格を信頼していて、遺品である水鉢を愛用したのである。

四季の樹々や草花を眺め、読経と茶事に静かな日々を送る晩年であった。

嫡男の長孝を慶長十一年に病で失っている。元和六年、お清の実子二男頼長が没した。有楽斎は遺児の三五郎長好を引き取った。（のちに有楽斎の茶はこの嫡孫長好から又従兄弟に当たる貞置へと伝えられる）三男の俊長も出家ののち死去しており淋しくなった。

三万石の所領は、江戸幕府に願って三等分していた。

四男の長政に芝村藩一万石を、五男尚長に柳本藩一万石を、夫々創設させた。残りの一万石が有楽斎の隠居料である。（芝村藩、柳本藩ともに、有楽斎系織田家として、明治維新迄続いた）

元和七年になると、有楽斎は体の衰えを自覚する。七十五歳になっていた。

如庵の炉前に座り、先に他界した人々の面影をうかべ追憶する日々が多くなる。

知友前田玄以も慶長七年に逝った。

兄信長、秀吉、家康、この三人の天下人の生き方が、最も心に強く残っている。

「どちらが幸せだったであろうか」

有楽斎は思う。

人々を恐れさせ、這いつくばらせる、その様な権力者の快感を知らずに過ごした人生だった。栄耀栄華ともほど遠い暮らしのようであったが、それでもあの三人よりは心安らかに、そして真当に生きたように思う。苦渋に満ちた人生でもあったが、有楽斎はやはり正面な生涯だったと思いたいのである。

茶の湯についても、利休、織部は身を滅ぼしてまで茶道を守った反面、自分の様に生き永らえて茶の湯を全うするのもまた一興と割り切った。

「わしは、満足しておる。よき伴侶にも恵まれた」

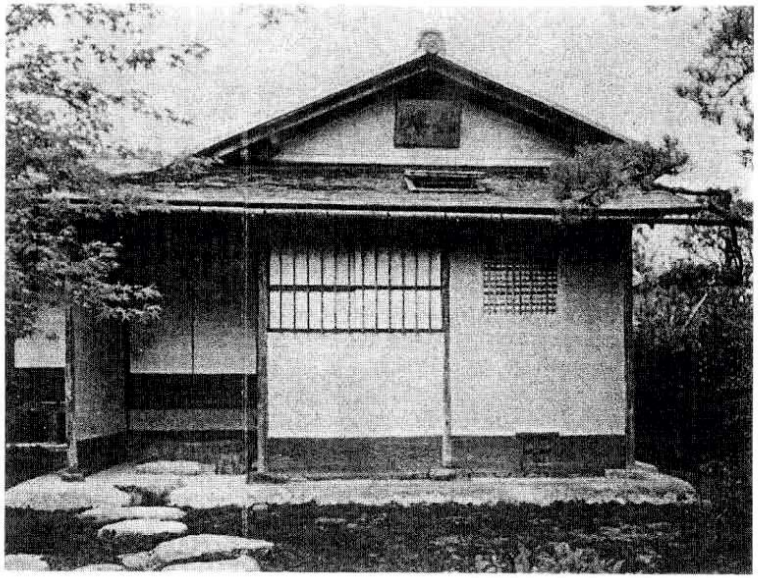
頬笑んだに違いない。

有楽斎が永眠したのはこの年（元和七年）の十二月十三日であった。

二歳年下の伴侶お清は二年後の元和九年十一月十六日、同じ七十五歳であとを追った。

夫妻は、終焉の地正伝院の墓所に眠っている。

有楽斎は七十五の生涯のあとに、後に国宝となった茶室「如庵」と、地名「有楽町」を遺していったのである。



茶室「如庵」　愛知県犬山市

終

「参考文献」

織田有楽斎　堀　和久著　講談社

茶人織田有楽斎の生涯　坂口筑母著　文献出版

尾張織田一族　谷口克広　新人物往来社

幻の茶器　斉藤文子著　淡交社

戦国茶闘伝　三宅孝太郎著　洋泉社

茶道人名辞典　桑田忠親編　東京堂出版

角川茶道大辞典　角川書店

その他

統帥権への怨み節

千坂精一

わが国は鎌倉・室町・安土桃山時代を経て江戸時代にいたるまでのながいあいだ武家政権がつづいた。

それぞれ武家の統領が征夷大将軍になって根拠地に幕府を開いた。鎌倉幕府、室町幕府、江戸幕府である。

その征夷大将軍たる幕府の将軍は、全国の武士団を統帥する権限をもっていた。これが統帥権である。

室町幕府が倒れて乱世になると、統帥権は将軍から広域を支配する領主たち、すなわち戦国大名の手に移り、互いに領国の奪い合いに明け暮れるそれらの武将たちは、出陣を決断すると直ちに配下の諸将に、

「動員令」

を発して出陣を要請した。

たとえ国主の支配権内に所領をもつ国人たちといえども、離合集散のはげしい乱世なれば後世のように知行をもらって服従する家臣団というわけにはいかなかった。いつ寝返るかわからないのである。

織田信長も一日置いた越後国主の上杉謙信の場合は、いつでも発令できるよう『動員名簿』を常備していた。

『天正三年軍役帳』といわれるもので、一門衆、国人衆それぞれに鑓何丁、手明（重装備の歩兵）何十人、鉄砲何丁、大小旗何束、馬上（騎馬武者）何十騎と細かく指示してあって六千人の家臣団の軍容がよくわかる。

それが江戸時代になり二六〇年もの長期間争乱がなくなると平和惚けしてしまっていて、幕末になって動乱が起こったとき、この統帥権がおかしくなってしまった。

それは長州征討のときのことである。

元治元年（一八六四）、倒幕計画に敗れて官位を剥奪され追放された七卿を受け入れた攘夷派の長州藩を、蛤御門の変の問罪を名目にして征討することになった。

ときの将軍は十四代家茂であったからこの征夷大将軍

が最高指揮権者であるはずなのに、家茂は統帥せずに前尾張藩主十四代徳川慶勝に征長総督代理を命じた。

このとき長州藩は、英、米、仏、蘭の連合艦隊が下関に来襲していて危機に瀕していたので、迎え撃たずに恭順の意を表し、西郷吉之助や岩国藩主吉川経幹の斡旋で益田、國司、福原の三家老を処刑して謝罪降伏した。

これを不服とした高杉晋作らの強硬派が挙兵して、恭順派を藩の中枢から追放し、幕府に反抗したので、幕府は慶應二年（一八六六）第二次長州征討に踏み切った。

このときも将軍家茂は統帥せず、尾張藩主十五代徳川茂徳に総督代理を命じたが、御三家筆頭の尾張家がおなじ御三家の紀州出身の将軍に二度までも使われることを潔しとせず、出兵を拒否したので、家茂はやむなく実家の紀州藩主十四代徳川茂承に交替を命じた。

この第二次長州征討は、すでに正月二十一日坂本龍馬、中岡慎太郎の仲介によって薩長同盟が成立していて、藩論は討幕に向かってすすんでいたので迎え撃たれる恰好になってしまった。

幕府軍は藝州、石州、小倉の三口から攻め入ったが、薩長連合の軽装新式銃による洋式軍隊の防戦により連敗を喫し、七月二十日に家茂将軍が大坂城中で死去、さらに八月初旬に小倉城が落城したところで勅命により軍を退いたがこの惨敗により幕府の権威は急速に失墜した。

その後の戊辰戦争のときも十五代将軍慶喜は陣頭に立たなかったことから、統帥権が曖昧になってしまった。

徳川政権が倒れて薩摩、長州中心の新政府がまだ成立していない明治十年（一八七七）に起こった陸軍大将西郷隆盛による反乱（西南戦争）のあと、明治帝から陸軍卿大山巌に下した『軍人ニ賜ハリタル勅諭』の冒頭に、

「我國ノ軍隊ハ世々天皇ノ統率シ給フ所ニソアル」

として、神武帝以来代々天皇が軍隊を統率してきている歴史を縷々述べて天皇以外の統率を戒めている。

明治十八年（一八八五）十二月に発足した新政府は、あらためて統帥権を軍隊の最高指揮権として、『大日本帝国憲法』第十一条に、

「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」

と定め、これを天皇の大権とした。

そして、軍事上の政務は内閣の一員である陸、海軍大臣の主管事務の一般国務から独立させて、作戦、用兵の指揮権発動は陸軍参謀総長、海軍軍令部総長が関与することとした。

同二十六年（一八九三）これを大本営とし、陸軍参謀本部を大本営陸軍部、海軍軍令部を同海軍部とした。

統帥機能の長である両総長は内閣の各大臣がそれぞれの行政権を担当すると同様に指揮権を保有して天皇に対し輔弼（助勢）の任を負う職責があるが、回答責任がないのだからなにをやろうと自由であり、それも政府の干渉を受けないので政府とは別の機能ができてしまった。

軍事上の政務は陸、海軍大臣が内閣の一員として閣議でその権限内の事項を決定するにとどまるが、作戦、用兵の軍令のほうは天皇直属という独自の地位をもったから、統帥権は内閣からも軍事上の政務からも完全独立してひとり歩きができるようになっていた。

軍閥はそこを利用して勢力を拡大していった。

三権から独立して、それらからの口出しを許さず、帷幄上奏権を利用して閣議を経ずに直接天皇に上奏するのだからなにごとも秘密裡に起こすことができるわけで、政府の干渉を受けぬ陸軍参謀本部の幕僚たちは独走し、以後日本は統帥権国家になって一人歩きをはじめ、昭和に入ると滅亡へ向かって突き進んでいってしまう。

昭和六年（一九三一）の満州事変、同七年（一九三二）の上海事変、同十二年（一九三七）の日中戦争とつづいてきて、昭和十六年（一九四一）十二月八日海軍軍令部もついに米国との太平洋戦争に踏み切ることになる。

この開戦の決断は、ときの軍令部総長永野修身大将の判断に委ねられていた。

聯合艦隊司令長官は山本五十六大将であった。

山本長官は大佐のときに欧米出張していたし、三年ほど駐米武官も経験していて米国との国力の差を充分に承知していたので、次官のときその米国を敵にまわす日独伊三国同盟に猛反対して米内光政海軍大臣、井上成美軍務局長らの穏健派と結束して和平を唱え、暴走する陸軍首脳部に抵抗したことから忌避され、陸軍の中堅将校たちにたびたび面会を強要されたり、右翼団体から強迫されて壮士風の男たちが連日のように次官室に押しかけてきては誅殺する斬奸状を突きつけられた。

生命の危機に立ち至った山本次官の身辺を心配した米内大臣は、昭和十四年（一九三九）八月平沼騏一郎内閣総辞職で軍事参議官に転出するとき山本次官を安全圏の聯合艦隊司令長官に、井上軍務局長を支那方面艦隊参謀長に転出させた。

平和論者がこともあろうに戦闘部隊の最高指揮官になるとはなんとも皮肉な人事であるが、米内大臣はそうでもしなければ山本次官も井上軍務局長も庇護しきれなかったのかも知れない。

山本長官は、日本のアジア進出に対決する米英中蘭の資産凍結、石油禁輸などの経済制裁がますます厳しくなってきていて、このままではじり貧になってゆくのを憂えて、やむなく即時開戦を強く主張していた。

ハワイ真珠湾を基地にして集結している米太平洋艦隊に先制攻撃をかけて潰滅すれば、有利な条件で早期に講話ができるだろうと考えていたのであろう。

永野軍令部総長が、

「山本長官にそれほど自信があるのならやらせようではないか」

そう決断したことが、日本の運命を決定づけてしまった。

山本長官の名言どおり、緒戦は空母部隊による真珠湾奇襲で停泊している米太平洋艦隊の戦艦部隊を大半撃沈することに成功した。

だが陸軍支配の政権は講話どころかこの大戦果に酔い痴れ、勢いづいた海軍もつづくマレー沖、ジャワ、バリ島沖、スラバヤ沖、バタビア沖、セイロン島沖、珊瑚海とつづく海戦に勝利したので歯止めがきかなくなった。

「驕る平家は久しからず」

で調子に乗ると慎重さを欠き大雑把になってしまう。

開戦半年後のミッドウェー海戦がそれであった。

よく知られていることなので詳述は避けるが、暗号を解読され裏をかかれた南雲忠一中将率いる第一機動部隊は、赤城、加賀、飛龍、蒼龍の主力空母四隻を失う一方的敗北を喫してしまった。

この大敗北が聯合艦隊の命取りになり、以後は敗退つづきになってゆく。

昭和十八年（一九四三）四月十六日、い号作戦を終了した山本長官は、バラレ、ショートランド、ブインの各最前線基地をまわって将兵たちを激励することにした。

十八日、一式陸攻二機に分乗した山本長官と幕僚たちは六機の零戦に護衛されてラバウル基地を発進しバラレへ向かったが、一時間半後にブーゲンビル島上空でミッチェル少佐指揮のロッキードP38戦闘機十六機に待ち伏せされて撃墜され、山本長官は戦死してしまった。

戦国時代の合戦は、戦場で総大将が討ち取られればそれで勝敗が決する。

太平洋戦争は、ニミッツ提督率いる太平洋艦隊と、山本長官率いる聯合艦隊との決戦なのであるから、山本長官の戦死で日本軍は米国軍に敗北を喫したのである。

そう認識しなければならなかったのに、軍令部は退勢の挽回を急いだ。

後任長官に補された古賀峯一大将は、山本長官戦死の一週間後には根拠地トラック島の旗艦武蔵に着任した。

その十箇月後ミッチャー少将の第五十八機動部隊にこの太平洋最大の根拠地を攻撃されて、航空機三百機撃墜、軽巡那珂をはじめ九隻大破、輸送船三十四隻撃沈、陸上施設炎上で約六百人死傷という大損害を蒙った。

永野軍令部総長はこの敗戦の責任を負って辞任した。

二年十箇月にわたって統帥権を掌握していたが、元帥府に列せられたのは山本長官より二箇月あとであった。

後任には東條英機大将が昭和十六年十月十八日に組閣したとき、総理、外務、内務、陸軍、文部、商工、軍需の七大臣を兼務する独裁政権のなかで海軍大臣に指名された嶋田繁太郎大将が兼務した。嶋田は東條の腰巾着とも分身ともいわれ、東條べったりだったという。

このとき東條は七大臣兼務のまま参謀総長をも兼務し

たので、内閣、統帥ともに実権を一手に掌握した。
次長には陸軍が後宮淳大将、海軍は塚原二四三中将がそれぞれ就任した。
だが、軍令部総長が交替しても起死回生にはいたらず、ずるずると敗退を繰り返した。
いっぽうトラック島根拠地の武蔵に着任した古賀長官は、一年を経ずして司令部機能が危うくなったので根拠地をパラオ島に移したが、ここもまた空襲で被害を受けたので、司令部を急ぎフィリピンミンダナオ島のダバオに移動すべく、古賀長官と幕僚たちは二式大艇という四発十人乗りの飛行艇二機に分乗して発進したが、途中異常低気圧に巻き込まれて行方不明になってしまった。
古賀長官が殉職したあとの司令長官には豊田副武大将が就任し、司令部を木更津沖に停泊している軽巡洋艦大淀に移して指揮を執り、その後司令部を横濱日吉の慶應義塾大学構内に地下壕を掘って移転すると、豊田長官は十月二日からフィリピン、臺灣方面へ視察に出張した。
そして十二日に臺灣沖航空戦、二十四日にフィリピンレイテ沖海戦がはじまる。
このとき政府はすでに東條英機内閣は総辞職して小磯國昭内閣になっていて、海軍大臣には米内光政大将が復帰し、軍令部総長は嶋田繁太郎から及川古志郎大将に替わっていた。
軍令部の参謀は海軍大学校を優秀な成績で卒業した大佐、中佐、少佐の佐官たちであった。
実施部隊で大佐といえば、戦艦や空母の艦長か、航空隊の司令である。
この選り抜きの人たちは現場を離れて久しいため、その優秀な頭脳を駆使する理論武装で凝り固まり、机上作戦が多かったので、実施部隊の指揮官はその作戦指示に途惑い、理解に苦しんで反発することが多々あった。
この指導的地位にある選り抜き集団の矜持は恐ろしいもので、面子を立てるためには手段を選ばず、焦りに焦って起死回生の妙手を探りつづけた結果、行きついたところが爆弾を抱いて搭乗機もろとも目標に体当たり攻撃する生還のない特別攻撃というとんでもない戦法であった。
敗戦に継ぐ敗戦で熟練搭乗員と多くの新鋭機を喪ってしまい、戦闘も爆撃ももはや成功率が極端に低下してしまっている旧式機を駆っての未熟な搭乗員たちの効率を上げさせるためには、爆弾を抱いたまま搭乗機もろとも体当たりさせるほかに方法が考えられないという短絡的な思考に陥ってしまったのであろう。
これまでは戦闘員だから戦死の確率は高いが、しかしその伎倆次第では僅かながらも生還の可能性があった。
特攻はその腕前次第という微かな希望を奪ってしまう、征きて還れぬ冷酷な戦法なのである。
フィリピン決戦必至となったマニラには寺岡謹平中将の第一航空艦隊と福留繁中将の第二航空艦隊がいた。
軍令部は、海軍きっての中国通で後方勤務の長かった寺岡中将に決戦の指揮をとらせるのは不向きと判断して、関東地区防衛の第三航空艦隊司令長官に転任させると、後任に軍需省航空兵器総局総務局長の大西瀧治郎中将に特攻戦法よりほかにないと納得させて赴任させた。
戦前は海軍大学校卒業者でなければ佐官級以上には進級できず、海軍兵学校だけでは大尉までであった。
大西は大尉のとき、海軍大学入試の前日横須賀の料亭で酒宴の最中にサービスの悪い芸者を殴ってしまった。
芸者が憲兵に通報したことから表沙汰になり、新聞にまで載る騒ぎになって受験は停止されてしまった。
しかし大西は三箇月後に少佐に進級し順調に中将にまで昇進している。海大を出ない数少ない提督であった。
大西中将がマニラの司令部に着任したその二日後に、はやくも米軍のレイテへの反攻が開始された。
大西長官は、かつて無敵を誇っていたこの第一航空艦隊が事実上潰滅してしまっていることに驚いた。
この戦力で米軍の上陸を阻止するには、軍令部の提唱する特攻しかないと決断した大西長官は、参謀長小田原俊彦大佐と首席参謀猪口力平中佐に人選を急がせた。
大西長官がフィリピンへ赴任するとき、軍令部総長及川古志郎大将が、
「人選にあたってはあくまで本人の自由意思によって下さい。けっして命令して下さるなよ」
そう念を押したというのだが、現場では及川総長の意志は無視されてしまった。
マバラカット、セブ、ダバオにいる長官直率の第二〇一航空隊（零戦隊）から四隊に編成され、本居宣長の和歌に因んで敷島、大和、朝日、山桜隊と命名された。
指揮官は海軍兵学校出身者に拘って、戦闘第二〇一飛行隊分隊長關行男大尉が指名された。
關大尉は海兵七十期、母子家庭の一人息子で、五月に結婚したばかりの新妻は鎌倉の実家にいた。
關分隊長指揮の敷島隊は十月二十一日に出撃したが悪天候で米機動部隊を発見できずむなしく引き返した。
同日セブから発進した大和隊も同様に引き返したが、分隊士久納好孚中尉の隊長機だけは列機を離れてレイテに向かったままついに還らず、戦果も不明だった。
敷島隊は二十五日の出撃でようやく戦果を挙げたが、栗田艦隊はすでにレイテ湾突入を断念したあとであった。
軍令部は久納中尉が法政大学出身の予備学生だったため海兵出身の關大尉を〈特攻第一号〉として発表した。
關大尉より四日前に出撃し、特攻戦死者として二階級特進もしているのにこんなことにまで面子に拘っていたのである。
大西長官は、あるとき特攻出撃を見送ったあと、先任

参謀の猪口力平中佐に、
「特攻なんてもんは統率の外道だよ」
そう呟いて軍令部を批判したというのだが、その後特攻戦法はますます拡大してついに恒常化していった。
特攻戦法が決定したあと大西長官は協同作戦をとることになった二航艦の福留長官に両航艦を統合して特攻戦法に徹することを提案したが、福留長官はあくまで正攻法を主張して譲らなかった。
二航艦所属の主力第七〇一航空隊艦爆隊の飛行長江間保少佐もまた福留長官同様特攻戦法には猛反対であった。
江間飛行長は声を大にして、
「機材も惜しいが鍛え上げた搭乗員を失うのはもっと惜しい。機材は量産できるが、搭乗員は一人前にするのに十年はかかる。おなじ消耗品扱いされては迷惑だ」
そう主張していた。
だが、その艦爆機も消耗に生産が追い着かず、昨年『彗星』という空冷式単発、低単翼、引込み脚の新鋭機が生産開始されたというのだが、まだ配備されていなかった。
現在保有の九九式は昭和十四年（一九三九）に制式採用された機で、真珠湾攻撃では主力新鋭艦爆機として大いに活躍したのだが、ガダルカナル島の攻防をめぐる最初の本格的海戦ソロモン戦では固定脚のため速度が出ない九九式は最早旧型機になってしまい、〈九九棺桶〉とよばれて侮られ、最早顧みられなくなってしまっていた。
江間飛行長の強硬な要求によりようやく十八機だけ届いたが、九九式と彗星の異なる機種で同一行動は至難なので、折角の彗星十八機を他隊の九九式と交換してしまい、九九式艦爆隊として臺湾高雄基地からフィリピンのマニラ基地へ進出した。
そして十月二十三日に初出撃したが、二十日以来消息不明の米機動部隊をこの日も発見できず帰投した。
翌二十四日、あらためて大々的に再出撃した。
まず小林實少佐指揮の制空隊零戦、紫電七十五機がグラマンの防空戦闘機網を突破すべく先行したあと、江間少佐指揮の七〇一空九九艦爆機隊三十八機が鷲淵孝大尉指揮の掩護隊零戦五十一機に護衛されて発進した。
だが、途中で掩護隊の鷲淵指揮官機が発動機不調で遅れがちになり、制空隊は先行してしまっていて、江間隊は孤立状態になってしまった。
大きな脚が出たままで速度も遅いし旋回性能もよくない九九式にとっては戦闘機の掩護だけが頼みだった。
その丸裸状態を衝いてシャーマン隊のグラマン戦闘機百機が上下左右から江間隊に襲い掛かってきた。
五百キロ爆弾を抱えて鈍重な九九式艦爆は軽快で小回りのきくグラマンには太刀打ちできず、〈九九棺桶〉の渾名どおり二十八機中九機が撃墜されてしまった。

このとき江間機も被弾して左翼のエルロンが吹っ飛び、燃料タンクも撃ち抜かれて火を吹いたため、機は錐揉み状態になって墜ちていった。万事休すであった。
それでも江間は必死になって回復操作に専念した。
自分は戦闘に敗れたのだから戦死も当然であるが、後部座席の偵察員分隊士の吉川啓次郎少尉を道連れにするわけにはいかないという部下への思いが奇蹟を生んだ。
なんとか水平飛行に戻せたときは高度僅か九百メートルであった。錐揉み状態の風圧で火災は消えていた。
付近の断雲のなかに飛び込んで辛うじて難を逃れた。
左翼の破損した燃料タンクから吹き出したガソリンが横殴りの雨のように吹きつけていて、それを多量に吸い込んだ吉川偵察員は伝声管で叫んでも応答がなかった。
声を振り絞って吉川の名を呼びながら列機の誘導でどうやら帰投したときは二人とも気息奄々であった。
煤に塗れ自慢の鬚は焦げて仇名どおりの闇魔の形相になった江間は整備員に抱きかかえられて脱出した。
二十数発被弾していて、墜落を免れたのは幸運だった。
ところが、江間飛行長が人事不省で面会謝絶に陥っているあいだに七〇一空でたいへんなことが起こった。
二航艦で特攻戦法が開始されると、二航艦の正攻法とのあいだに戦果の差が歴然となってきて、大西長官の戦法が軍令部に誉めそやされ喝采を浴びた。
実績を挙げた大西長官の説得のまえに福留長官の抵抗は虚しく、ついに屈伏せざるを得なくなっていった。
両航艦を合併して第一連合基地航空部隊が編制され、海軍兵学校は同期（四十期）であるが海軍大学二十四期の福留中将が長官になり、大西中将は参謀長になった。
そして一航艦の零戦隊が第一、二航艦の艦爆隊が第二神風特別攻撃隊となり、純忠、誠忠、至誠、神武、神兵、天兵の六隊に分けて十月二十七日、二十八日、二十九日、十一月一日にそれぞれ還らぬ旅に発っていった。
潰滅状態になってしまった七〇一空は、十五日に本土防衛の準備命令を受けて飛行隊を分散し、一〇二飛行隊は千葉県香取基地で、一〇三飛行隊は鹿児島県国分基地でそれぞれ再建を急ぐことになり急拠帰還した。
十月十四日に臺湾へ出撃し、さらにフィリピン戦に参加して一箇月ぶりで帰国した九州はまだ穏やかだった。
国分基地で頽勢立て直しに入ったときには、江間飛行長もすっかり回復して陣頭指揮に立っていた。
江間飛行長は絶対安静で入院しているあいだに猛反対していた特攻が実施されてしまったことが口惜しく、体当たり以上の成果を挙げさせるため、再建で補充された待望の空冷式引っ込み脚の新鋭機彗星を駆使して降爆特訓を課し、標的目掛けて高度六千メートルから緩降下して三千五百メートルで四十五度から五十五度の角度で

急降下（ヘルダイブ）して八百メートルまで迫ったところで模擬爆弾投下と同時に機体を引き起こすところを、六百メートルまで急降下させ、さらに命中率を高めるために四百メートルにまで急降下して投下反転させることにした。

その差二百メートルといっても操縦桿を引いて機を上昇させるのは伎倆というより感覚であるから練習量よりほかに成果を上げる方法はなく、みな懸命に励んだ。

だがそれは、時宜が遅れたり、故障（トラブル）が起きたりしてそのまま海面へ突っ込む殉職者が出るほどの猛訓練であった。

それでも隊員たちははじめから生還のない特攻よりも、腕前次第では生還できる特訓を選んで懸命に励んだ。

そして二月十日―。

南九州十二基地に点在している五航空隊十九飛行隊を新編制して第五航空艦隊（菊水部隊）が組織されると鹿屋基地（鹿屋市）に司令部をおき、長官には開戦時に聯合艦隊参謀長だった宇垣纏（うがきまとめ）中将が赴任した。

宇垣長官は着任するとすぐに、

「麾下全航空隊に特別攻撃を命ずる」

旨を発令した。

このとき七〇一空に変化があったのは香取基地で再建していた一〇二飛行隊が一航艦七六一空に編入されてふたたび臺灣へ進出していき、替わりにおなじ香取基地で再建していた三航艦の一〇五飛行隊が配属になった。

一〇五飛行隊二十二機は、二十八日までに逐次第二国分基地に飛来して七〇一空の傘下に入った。

国分基地は二箇所にあって第一は市内（霧島市国分）に、第二は溝邊町十三塚原（霧島市溝辺町）にあった。

現在一国は陸上自衛隊国分駐屯地になっていて、正門前に『特攻機之発進地碑文』と、『国分特攻基地記念碑』がある。

二国のほうは鹿児島空港の一隅になってしまっていて、そこにある上床公園の一画に少年飛行兵の青銅像（ブロンズ）と『十三塚原海軍特攻碑』がある。

一〇三、一〇五両飛行隊は江間飛行長指揮のもとで過激な降爆訓練に明け暮れている最中の三月十七日に司令部から突然全航空隊に対して緊急警戒が発令された。

米機動部隊が十五日にウルシー泊地を出撃したので、九州攻撃を目指すとすれば十八日ごろに来襲という。

はたして十七日深夜になって大隅半島都井岬（おおすみとい）東南海域百浬付近に出現したという報告が続々と入ってきた。

十八日午前二時、聯合艦隊司令部から緊急電信で、

「五航艦は総力を挙げてこれを迎撃せよ」

と下令してきた。

五航艦司令部は、直ちに七〇一空に出撃を命じた。

司令の木田達彦（きだたつひこ）大佐から出撃命令を受けた江間飛行長はすぐさま一〇三、一〇五両飛行隊全員に非常呼集をかけて一国、二国両飛行場の戦闘指揮所に集合させた。

そして、いつものとおり、

「いよいよおまえたちの伎倆を試すときがきた。五十番（五百キロ爆弾）を命中させて還ってこいよ。体当たりするなんてのはどうしてもだめなときだぞ。わかったな」

そう訓示した。

離陸したらもう生きては還れぬという切迫した心境と、生還できる余裕があるのとではまったくちがう。

ただ体当たりするのではなく、獲物を仕止めて生還するのだがら隊員の士気は極めて高く、窮地に立てば体当たりもやむなしとする覚悟は胸中に秘められていた。

両飛行隊長柏井宏（かしわいひろし）大尉と中村恒夫（なかむらつねお）大尉によって搭乗割が急がれた。特攻隊名は『菊水部隊彗星隊』とした。

第一波は〇六一三に一国から、第二波は一〇四五に二国から、そして第三波は一三五〇に二国から出撃した。

この日は二十七機出撃したが十九機が還らず、直掩の戦闘機も三機が未帰還だった。

米軍の発表によれば、正規空母エンタープライズに一発命中、同ヨークタウンに一発命中、同イントレビットに一発至近弾を受けていずれも損傷したという。

翌十九日は、一波が〇五四五に一国から、二波が〇九一八に二国から、三波が一〇五〇に二国から出撃した。

一〇三飛行隊長柏井宏大尉は一国から一波の一番機で、一〇五飛行隊長中村恒夫大尉は二国から二波の一番機でそれぞれ指揮をとった。柏井大尉は海兵六十九期の二十六歳、中村大尉は海兵七十一期の二十三歳であった。

この日は二十三機出撃したが十五機が還らなかった。

米軍の発表によれば、正規空母フランクリンに三発命中して誘爆を起こし沈没寸前にまでいたったといい、同ワスプにも一発命中して損傷したという。

さらに翌二十日は、一波が一二五〇に一国から、二波が一四二四に二国から出撃した。

この日は十七機出撃したが七機が還らず、直掩の戦闘機も二機が未帰還だった。

米軍の発表によれば正規空母エンタープライズが味方の誤射で損傷し、駆逐艦ハルゼイホウエルが空中分解した特攻機のエンジン落下で損傷したという。

両飛行隊は三日間で六十七機全機が出撃して四十一機を喪失、搭乗員は二名生還しただけで八十名もの戦死者を出してしまい、残存二十六機になってしまった。

米軍は損傷空母の戦場離脱をはかり彗星の攻撃圏外に去ったので、残存機数での最後の出撃は中止になった。

こうして沖縄戦へとつづいていくのであるが、常識を超えた特攻戦法はついに恒常化してしまったのである。

五航艦司令部から再編成して本土決戦に備えよと命ぜられた江間飛行長は、残存搭乗員を率いて敵機来襲の合

間を縫って逐次鳥取県の美保基地へ後退していった。
残存の搭乗員だけで錬成を開始したが、逐次彗星や搭乗員の補充を得て戦力の回復も軌道に乗っていった。
五月中旬には柏井大尉の後任一〇三飛行隊長森山勝文大尉以下錬成なった一部が再び一国へ進出していった。
江間飛行長のもとで一途に錬成に励んだ美保隊は、八月上旬には彗星八十機を擁する精鋭部隊に再建された。
そのころ五航艦は米軍の空襲が烈しい鹿屋から後方の大分に移り、飛行場近くの地下壕に司令部をおいた。
軍艦沈没のとき艦長は、総員退去のあと艦橋に身を縛りつけて艦と運命を共にするのが海軍の仕来りである。
宇垣長官の鹿屋から大分への転進は脱出であろう。
その新司令部から八月四日に、
「彗星隊一箇中隊を大分へ派遣せよ」
と命じてきた。
艦隊司令部所在の基地に戦闘隊だけでは寂しく、攻撃隊もいなければ恰好がつかない、というのである。
江間飛行長は、
「さて、派遣隊長を誰にするか」
珍しく人選に悩んだ。
一〇三の先任分隊士は本江博大尉であり、本江自身も当然自分が大分派遣隊長として行くつもりであった。
もう一人の分隊士は中津留達雄大尉で、実家が大分市の南の津久見市徳浦で、そこに新婚一年余りの若妻が留守宅を守っていて女児の誕生を報せてきていた。
江間飛行長は中津留分隊長を派遣隊長に選んで、
「家族に会ってこい」
そう言って温情をかけた。
中津留大尉は十九機を選んで大分基地へ進出した。そして娘のお七夜に自宅へ帰って親子の対面をした。
帰隊して隊員たちから感想をきかれたときには、
「小猿みたいだった」
と照れ笑いしていたそうだが、再び相見えることは叶わなくなってしまった。
八月十一日朝軍令部から積極的攻撃を行うよう督促された司令部は、一時中断していた特攻の再開を決した。
その日の午後、司令部は思わぬ情報に唖然とした。
サンフランシスコ放送を傍聴していた情報課員が日本の全面降伏の申し入れを流しているのを捕捉したのだ。
宇垣長官は呆然とし、そして激怒した。
放送によると日本政府は前日深夜にポツダム宣言受諾の申し入れをしているのだ。
こんな重大なことを戦闘部隊の指揮官に伝えず、逆に積極攻撃を命じてきた軍令部のやりかたに腹を立てた。
そして十五日―。
美保基地では中部地方沖に来襲中の敵機動部隊攻撃のため、一部を割いて挙母（豊田市）へ進出準備をすすめていたが、正午の天皇のラジオ放送を拝聴後となった。

玉音は雑音で聞き取れなかったが、
「戦局重大な折柄一層の勇戦敢闘を希望された」
ようにも受けとれたがまもなく進出は中止になった。
いっぽう大分基地では―。
宇垣長官は無条件降伏を潔しとせず、沖縄突入を決意して、一〇五派遣隊に彗星五機を準備するよう命じた。
中津留大尉は五機の人選を急いだが、全員が願い出て決着がつかないので出撃可能の十一機を列線に並べた。
宇垣長官の、
「五機のはずだが」
の問いかけに中津留大尉は、
「長官ご自身が突入されるのに五機ということがありますか。可動機全機をもってお伴いたします」
そう答えた。
宇垣長官座乗の中津留隊長機はエンジン不調だったので万一を慮って川野中尉機と交換してもらい、宇垣長官を偵察席に招じてから中津留大尉は操縦席に着いた。
あとからきた遠藤飛曹長は宇垣長官に自分の席であることを主張したが譲ってくれないので、長官の股のあいだに潜り込んだ。
そして一七〇〇、隊長機につづいて全機が発進した。
十一機中三機が途中故障を起こして帰還したが、八機は二〇三五合図の長符を発して突入していった。
中津留大尉の長官機が八十番を抱いて突入したのは、沖縄本島西北の伊平屋島の我喜屋海岸だったという。
中津留大尉は海兵七十期で、奇しくも最初のフィリピン特攻の指揮官關大尉と同期であった。
宇垣長官は裏切った軍令部への報復だったかも知れないが、将来ある青少年たちを道連れにしたのは許せない。
五月に就任して終戦処理で統率力を発揮した海軍総隊司令長官小澤治三郎中将は、宇垣長官の行動を知って、
「莫迦者、死ぬなら一人で死ね」
そう怒鳴ったという。
大分基地跡は大州總合運動公園になっていて、『神風特別攻撃隊発進之地記念碑』がある。
七〇一空は、国分基地からフィリピンレイテ沖海戦に特攻出撃し、国分基地に戻って再建したところをこんどは沖縄防衛前哨戦の特攻出撃に駆り出され、そして終いには美保基地でふたたび錬磨育成して再建したところを宇垣長官自殺行為の供をさせられてしまった。
おなじ航空機が、起き上がり小法師のように特攻出撃しては立て直すことを二度繰り返して、三度も特攻出撃した航空隊は七〇一空のほかにないのではないだろうか。
そして、三度目に宇垣長官とともに出撃した中津留隊の戦死者十七名は、出撃が終戦後であり、宇垣長官直率の私兵だということで、聯合艦隊告示には氏名がなく、二階級特進もされなかった。

特攻隊員の構成は、隊長、分隊長、分隊士をはじめ数名は二十代前半の海軍兵学校や大学、専門学校出身の士官であったが、大多数の下士官兵は、甲、乙、丙種予科練習生出身の洒よりも羊羹や菓子を欲しがる十代後半の少年たちであった。

軍令部というエリート集団の頭脳作戦も虚しく空転しつづけて、フィリピンレイテ沖海戦から十箇月後に無条件降伏した。

武人は飽くまでも敗北を認めず起死回生を図っての徹底抗戦を潔しとする古来からの伝統を重んじたのであろうが、裏を返せばエリート集団の面子が敗北を認めさせなかったのではないだろうか。

ともあれ、どうせ無条件降伏するのなら軍令部がもう一年早く徹底抗戦を諦めていれば、征きて還れぬ特攻戦死も、沖縄戦も本土への無差別爆撃も、廣島・長崎への原爆投下による大量の犠牲者も出さすにすんだことが悔やまれる。

政界に軍事が介入してはならないのだが、この当時は軍事政権であったため軍部の独走を抑止する文民統制がきかなかったことが不幸であった。

現憲法第六十六条にある、

「内閣総理大臣その他の国務大臣は文民でなければならない」

はまさにこのときの苦い経験からの発想であろう。

なんど繰り返してももはや詮ないことではあるが、軍令部がエリート意識を捨てて面子に拘らなければと思うと残念で仕方がない。

その大本営といわれた統帥権をもつ陸軍参謀本部と海軍軍令部に戦争という活躍の場を与えないためにはなんといっても外交努力が必要になってくる。

太平洋戦争のときは外務省が機能しなかった。

昭和八年（一九三三）二月二十四日、國際連盟の総会において上程された、

『日本軍の満州撤退勧告案』

が四十二対一で採決され、唯一の反対票を投じた日本代表の外交官松岡洋右は議場から退場して、一箇月後の三月二十七日に日本は國際連盟を脱退した。このときの様子を報じたニュース映画をみた国民は、肩を怒らして退場する松岡洋右のすがたに万雷の拍手をおくった。

外交交渉は隠忍自重してなんとしても紛争を起こさぬように努力すれば、統帥権をもつ軍令部も動きようがなかったのに、これでは文民統制どころかむしろ国家をあげて煽動し戦争へと突き進んでいってしまったのだ。

開戦から終戦までの作戦、用兵の統帥軍令部総長、戦闘集団の最高指揮官聯合艦隊司令長官はそれぞれ四人であった。

軍令部総長は、

永野　修身（昭和16・4・9～同19・2・21）
嶋田繁太郎（昭和19・2・21～同年8・2）
及川古志郎（昭和19・8・2～同20・5・20）
豊田　副武（昭和20・5・20～同年10・15）

聯合艦隊司令長官は

山本五十六（昭和14・8・30～同18・4・18）
古賀　峯一（昭和18・5・21～同19・3・31）
豊田　副武（昭和19・5・3～同20・5・29）
小澤治三郎（昭和20・5・29～同年10・10）

このうち連合国による極東国際軍事裁判でA級戦犯の判決を受けたのは、

嶋田繁太郎　終身禁固刑。
永野修身　拘束後急性肺炎で死亡。
豊田副武　拘束後釈放。

で軍令部総長経験者だけが戦犯になっているのをみても、総ての責任は戦闘部隊の指揮官よりも戦闘を指示した軍令部総長にあったということを立証している。

ながながと述べたが、これは表題に掲げたとおり暴走した統帥権への怨み節である。

（了）

薄幸の麗人「西郷局」の生涯

（家康と西郷局の恋物語）

堀内永人

目次

プロローグ
第一章　お愛の方の生い立ち
1、お愛の誕生
2、不遇の日々
3、美人ケ谷の幼馴染
4、破局
5、母になる
6、二度目の破局
7、家康との出会い
第二章　西郷局の愛情（愛憎）
1、十六人の側室
2、家康の寵愛
3、妬み
4、側室の束ね
5、懐胎
6、徳川二代将軍秀忠の誕生
7、第二子忠吉の誕生
8、眼病の進行
9、瞽女への慈悲の心
10、惜しまれて終焉
エピローグ

プロローグ

我が国が、現在も引き続き先進国の一角を占め、世界をリードしているのは、十七世紀初頭に、江戸幕府を開府した徳川家康の政治力が非凡であったことに遠因があるといえよう。

家康が政権創りに精魂込めた青壮年期の十二年間、常にその傍らには、薄幸の麗人『西郷の局』がいたのである。

この薄幸の麗人西郷の局がいたからこそ、二百六十年の徳川政権が実現したのである。

そして、わずか十二年の短い年月であったが、徳川家康を支えて、徳川幕府の基礎創り深くかかわった薄幸の麗人、西郷の局を除いては徳川幕府を語れない。

西郷の局の生涯は、徳川二百六十年の歴史を、否々、日本の近代史を論ずるうえで忘れてはならない事績である。

西郷局（名をお愛という）は天文二十一年（一五五二）の春、遠江国佐野郡上西郷村構江（現在の静岡県掛川市上西郷構江）に生まれた。

父は戸塚五郎大夫忠春、母は「おてい」という。

（母の実名生没年は不詳であるが、貞宗院の敬称から筆者が「おてい」の名を推明した）

父の忠春の一族も、母おていの一族も、共に遠江佐野郡上西郷村の国人（在地の領主）で、母おていは、西郷家一門の家長・西郷弾正左衛門正勝の長女である。

この小説の舞台となる遠江佐野郡上西郷村の地名は、この村が、西郷家の領地であったことから付いた地名である。

西郷家の先祖は、三河（現在の愛知県の東部地域）の武士であったが、さらにその先をさかのぼると、十二世紀末の鎌倉幕府成立の頃から、十六世紀末の室町幕府滅亡の頃までの間に、九州肥後国熊本の菊地一族から分かれて三河に移ったということである。が、移住した年代は、何時か明らかではない。そして後年、西郷家の先祖が、「遠江の上西郷村は良い土地柄である」

といって、三河から上西郷村に移住して来たといわれている。

西郷局の父親戸塚五郎大夫忠春は再婚で、先妻との間に男の子が二人あった。即ち、お愛（西郷局）の異母兄である忠家（千五百石の旗本）と、心翁永伝である（上西郷村滝の谷法泉寺七代住職《後に江戸天龍寺開基》）。

戸塚忠春は、天文二十二年（一五五四）、お愛が三歳（数え年、以下同じ）の時に、遠江大森（現在の静岡県磐田市）で武田軍と戦い、残念ながら戦死してしまった。

忠春が戦死して、寡婦（未亡人）となった母のおていは、上西郷村長間の地主、服部正尚（忍者服部半蔵の一族）と再婚したので、お愛も母に従い服部正尚の養女になった。

お愛は、十七歳の時に従兄の西郷右京進義勝と結婚し、その翌年（元亀元年《一五七〇》）に女の子を一人、その次の年（元亀二年《一五七一》）には男の子を一人生んでいる。

女の子（名前は不詳）は、後にお愛の養父となる西郷左衛門佐清員の長男家員（従兄）と結婚する。この西郷清員の家は、

《清員―家員―忠員―康員―正員》

と続き、西郷本家一万石の大名となった。

男の子は、名を勝忠といい、紀州家（家康の十男・徳川頼宣の家臣となるが、早世（二十八歳？）して、一旦家名は途絶えるが、お愛の夫西郷義勝が、先妻との間にもうけた長子・繁勝が勝忠の代わりの形で紀州家の家臣となり、紀州西郷家として幕末に至っている。

お愛は、元亀二年（一五七一）、二十歳の時に夫の西郷義勝が戦死し、不幸にして寡婦（未亡人）となってしまう。

（以上、小林貞美・牧野登著、歴史調査研究所発行『西郷氏興亡全史』八頁を参考にした。）

寡婦となったお愛は、三河の西川城主（現在の愛知県豊橋市石巻西川町）である叔父の西郷清員の養女となり、ひっそりと生活していた。

一方、徳川家康は、最初の妻築山御前が、武田勝頼に内通したとの疑いで織田信長の命によって殺され、長男信康も同じ疑いをかけられて自刃。次男秀康は、結城氏の養子となって徳川家を去り、二人目の妻朝日姫（豊臣秀吉の妹）は名ばかりの妻で、家康は、家庭的には恵まれなかった。

このように、家庭的に恵まれなかった家康は、天正六年（一五七八）三月、武田軍との合戦の帰路に立ち寄った三河西川城で、淑やかで美しい女性に接し、魅せられて側室に迎えた。この女性がお愛で、家康三十七歳、お愛二十七歳の時であった。お愛は、側室になると、周囲から「西郷局」と呼ばれるようになる。

家康とお愛の間に、三男秀忠（後に二代将軍となる）と四男忠吉（後に尾張藩五十二万石藩主となる）が生まれる。

天正十四年（一五八六）十二月、お愛は家康に従って浜松から駿府（現在の静岡市）に移り、天正十七年（一五八九）五月十九日に三十八歳で没するという短い生涯であった。

家康と西郷局（お愛）との仲は、わずか十二年の短い歳月であった。しかもこの時期は、家康の壮年期の最も忙しい時期であったので、二人の蜜月はわずかな期間であった。

その後家康は、慶長八年（一六〇三）二月に征夷大将軍となり、江戸に幕府を開いて政権の座に就いたが、わずか三年で三男の秀忠に座を譲って、駿府に移り、大御所となって七十五歳の生涯を閉ずるまで、江戸幕府を始め、諸国の大名に睨みを利かしていた。

この小説は、家康の壮年期を支え、家康の後継者となる三男秀忠（長松丸、後の徳川二代将軍）と、四男で尾張藩五十二万石の始祖となる徳川忠吉を生んだ西郷局（お愛）の短い生涯をドラマチック（劇的）に描いたサスペンスである。

巻末のエピローグにも記してあるが、西郷局は、筆者の生家のすぐ近くで生まれた女性で、筆者は幼い頃、両親よりたびたび西郷局の話を聞かされた。その話の中にあった西郷局の伝承（言い伝え）には、筆者の創造力を掻き立てるインセンティブ（刺激、誘因）が多々あった。

第一章　お愛の方の生い立ち

1、お愛の誕生

時は、天文二十一年（一五五二）三月一日の春うらら

かな良き日。

場所は、遠江佐野郡上西郷村構江（現在の静岡県掛川市上西郷構江）の領主、戸塚五郎大夫忠春の奥座敷。

縁側に差し込む春の陽射しが、明り障子を通して座敷の中をほとほとと暖めていた。

産み月を迎えた妻のおていは、

「御屋形様、何やら腹のややこが動いているようで…」

と、やや頬をあからめて、夫の忠春に話しかけた。

「おう、そうであるか…。そう言えばお腹の膨らみも、少し下へさがったように見えもする。では、うまれるのも、そんなに先ではないな…」

忠春にとって、待望の第一子である。

「私には初めてのお子でありますので、ややこは男の子か、女の子かわかりませぬ…。ですが、ややこの動きが淑やかのように思います…」

おていは、晒の腹帯を巻いた下腹部をさすりながら、にっこり微笑んだ。

「さようか…。生まれてくる子は、男でも女でもいずれでもよい。母子ともども無事であってくれれば、それでよい、それでよいのじゃ…」

忠春は、やさしくいたわりの言葉をかけ、自分自身にも言い聞かせた。

忠春は、口には出さないが、後継者としての男子誕生を、ひそかに心待ちにしていた。それが偽らざる気持ちである。が、そんなことは噯にも出さず、無事にお産が済んでくれることを願った。

それから二日後の三月三日、節句の朝まだき、おていは、

「もし、もし・・・。御屋形様、おやかたさま・・・。ややこが生まれそうです・・・」

と、夜具の間から腕を伸ばして、隣りに寝ている夫忠春の蒲団を抑えて声を掛けた。が、忠春は、

「うーん・・・・」

と声を出して寝返りをうったが、目を開ける気配はなかった。仕方なくおていは、重いからだをゆっくり起こし、夜着の襟もとを掻き合わせながら、女中部屋の前まで足を運んだ。

「おきみ、おまつ、起きてくだされ・・・・」

と声を掛けた。春とはいえ、夜も明けぬ時刻の気温は低く、おていの足元は、小刻みに震えていた。

おていが、女中部屋の障子に手をかけたその時、部屋の中から、

「奥様、どうかなされましたか・・・・」

と声がして、女中のおきみとおまつが顔を出した。

おていは、ことの次第を手短に話し、

「直ぐにとりあげおばばさまを呼んできておくれ・・・」

と、語気を強めて頼んだ。気転のが利くおきみが直ぐに動き、四半時（三〇分）もたたないうちに、とりあげおばばのおすぎがやってきた。

その時には、夫の忠春も着替えを済まして姿を見せていた。忠春は、

「遅くなってあいすまぬ。それで、わしが手伝うことはないか・・・・」

と、おすぎおばばに申し出た。

「今は猫の手も借りたいところ。ちょうどよい。御屋形様、竈に火を焚いて、産湯を沸かして下さらぬか・・・」

と頼んだ。

「よし、湯沸かしなら引き受けた。他にわしができることがあれば、言いつけてくれ・・・・」

と忠春は、落ち着かぬうちにも、妻の出産に胸を躍らせた。

やがて夜が明け、陽も差してきた。

（お屋形さまのお子が、もうすぐ生まれる）

話は瞬く間に家臣や農民の間に伝わり、屋敷の前庭に、大勢の領民が集まってごった返しとなっていた。

月満ちて、おていは無事に出産した。

『お愛の誕生である。』

とりあげおばばのおすぎは、

「めでたや、めでたや、ややこが無事に生まれました・・・。御屋形様、おめでとうございます」

と、産着に包んだ赤子を抱いて、忠春のところにやってきた。

「生まれたか・・・・。よかった、よかった。母子とも大事ないな。して、生まれたのは、どっちだ？　男か？女か？」

「どっちだってよいではありませぬか・・・・、無事で生まれたんですから・・・・。御屋形様、見てくだされや・・・・・良いお子でござりますよ・・・・」

「・・・・」

忠春は、おすぎおばばに言われて、赤子の顔をじっと見た。その子の顔はほんのりとピンク色に染まり、小さな口をパクパクさせて、

「オギャー、オギャー」

と、元気よく泣いている。

（赤子は、どの子もみんな同じだな・・・・）

さらによく見ると、髪の毛は黒くて少し量も多い。鼻もやや高くて、口は小さなおちょぼ口、何やら美人の要件を備えているように見えた。

〝梅壇は双葉より芳しか〟

（うーむ、この子は女の子、成長したら美人になるやも・・・・）

と思いながら、

「おてい、でかしたぞ・・・・、よいおなごを生んでくれた。ありがとう・・・・」

忠春は、妻への感謝の言葉を掛けてねぎらった。

おていは、微笑み、小さくうなずいて、おすぎばばが抱いているわが子をじっと見た。

そして、忠春、おていの夫婦は、この新生児に愛らしい子に育って欲しいとの思いから、

『お愛』

という名前を付けた。

月日の移ろいは早いもので、お愛が誕生してから早や三年が経過し、戸塚家も平穏な日々が続いていた。母親のおていは、庭先で遊んでいたお愛に、静かな声で語りかけた。

「お愛や、もう二、三日もすれば、お父様が戦からお帰りになりますが、お父様はお疲れになっておりますから、あまり纏わり付いてはなりませぬぞ・・・・。良い子になってお待ちしようね・・・・」

と、優しく諭し、言い聞かせた。お愛は、

「ハイ、おかか様、わたしも三つになりました。早くおとと様にお会いしたい・・・・」

と、日頃慈愛に満ちた父親の顔を思い出しているようであった。

お愛も三歳ともなれば、自分の好きなこと、嫌いなこ

と、やってよいこと悪いことの分別はもっていた。また、
「おとと様は、たくさんお手柄を立てて、もうすぐごきげんようお帰りになりますねぇ・・・・」
とお愛なりに周りの状況を察しているように見えた。
「おぉ、聞き分けのある子になったわねぇ・・・・。おとと様は戦からのお帰りですから、お土産のおねだりなどしてはなりませぬぞぇ・・・・」
「はい」
おていは、お愛の頭をなでながら、本当に可愛く素直な子に育ったと、わが子ながら嬉しく思った。
お愛は、幼児の時より、からだは白くて羽二重肌、髪は黒くて量も多かった。鼻はツンと威張ったようにやや上を向き、小鼻の右横にある薄紅色の黒子が女性らしさを匂わせ、笑った時の左えくぼが愛らしかった。そして、二重瞼の黒い目でじっと見詰める眼差しには、人を引きつける魅力があった。
お愛は、この頃より美人の片鱗がうかがわれ、からだ全体から、そこはかとなく女性の色気が匂っていた。

2、不遇の日々

お愛が誕生してから三年経った天文二十四年（一五五五）九月十一日、この日は、立春から数えて二百二十日の厄日、蒸し暑い過ごしにくい日であった。
父の戸塚忠春は、日頃から甲斐（現在の山梨県）の武田軍との戦いに明け暮れていたが、この日も遠江大森（現在の静岡県磐田郡）方面で、武田の兵士と鍔迫り合いの戦いをしていた。
その翌日の九月十二日早朝、忠春の供をして武田軍と戦っていた郎党の茂吉がただ一人、早馬を飛ばして戻ってきた。茂吉の顔は土埃と汗で真っ黒に汚れていた。
茂吉は、息を切らして倒れるように駆け込むと、
「奥方様！奥方様！大変でございます・・・・」
と、かすれ声で息も絶え絶えに叫んだ。
「何事でありますか・・・・。さぁー、まずこの水を飲んで、気を静めなさい・・・・」
おていは、釣瓶で汲んだばかりの冷たい水を、手桶に汲んで茂吉の口元に差し出した。
「へい！ありがたい・・・・」
そう言うと茂吉は、よほど喉が渇いていると見えて、おていの手から手桶を奪い取るように受け取り、すぐさま柄杓を手桶に突っ込んで、
〝バシャッ〟
と冷水を掬い、そのまま柄杓を口に持っていった。そして茂吉は、
〝ゴク、ゴク、ゴク・・・・〟
と、美味そうに喉を鳴らして飲み出した。
「まぁー、そんなに慌てて飲んで・・・・。嘘せますよ・・・・」
と、おていは急いでたしなめたが、その言葉が終るか

終わらないうちに茂吉は、
「むっ、むっ、むぇえぇッ・・・・」
と、喉を詰まらせてしまった。
「それ御覧なさい・・・・。まず柄杓を下に置いて・・・・」
おていは、優しく茂吉の背中をさすってやった。
茂吉は、おていの介抱に胸いっぱいになり、
「う、う、ううう、わぁ・・・・」
と、手放しで男泣きし出した。
「奥方様、残念です・・・・。御屋形様が亡くなりました・・・・。名誉の戦死です」
と、あふれ出る涙をぬぐおうともせず、声を絞り出すように報告するのであった。
「エッ、御屋形様が戦死した・・・・？」
おていの顔に一瞬朱が差したが、見る見るうちに青ざめ、からだ全体に悪寒が走ったようにぶるぶる震え出した。
「はい・・・・。御屋形様は、われわれ家臣を助けようと、殿を買って出て、武田の大軍に単騎で立ち向かって行き、ご最後を遂げられたのです・・・・」
と、茂吉は、その時の惨状を語ったのである。
「う、う、うっわー・・・・」
「わ、わ、わぁうー・・・・」
茂吉の報告を聞いて、奥方を始め、召使一同、一様に声を絞り出して泣き出した。
茂吉が報告するところによれば、昨日は、遠江の大森で武田軍と合戦となったが、始めは、武田側も味方とほぼ同人数の軍勢であったので、互角の戦であった（むしろ、こちら側がやや優勢であったと思われた）が、しばらく戦っているうちに、武田の別動隊が背後から襲って来たので、やむを得ず御屋形様は味方の軍勢を七、三に分け、わずか三十騎ほどの隊士を引き連れて、十倍以上の武田軍に向かって突撃したのである。
兵力に大差のある戦いでは、味方に勝ち目がある筈はなかった。だが、忠春は、自軍の兵力の消耗を避けるため、自ら決死隊を買って出たのであった。
茂吉の報告を聞き終えたおていは、いつまでも泣き悲しんでいる訳にはいかず、菩提寺の観音寺の住職に一部始終を伝え、葬儀の準備を家臣や召使に指示した。
お愛は、わずか数え年三歳で父と死別してしまったのである。
三歳のお愛にとっては、昨日に続いての悲しみであった。
昨日の朝、お愛が目覚めると、母親のおていがお愛の枕元に据わって、
「お愛、驚かないでね・・・・」
と前置きして、
「お愛、お前さまが可愛がっていたおタマが、昨夜、野犬に噛まれて死んでしまったの・・・・」

と告げた。
「エッ！おはは様、タマが野犬に噛まれて死んだ・・・・？どうして、どうして・・・・。それでタマはどこにいるの・・・・？」
と幼いお愛は、お愛なりに事情を理解しようと懸命であった。
「悲しいことだが、そうなの・・・・。でもお前さまに、あのむごたらしいタマの姿は見せられなかったの・・・・。それで女中のせつに頼んで埋葬してもらったの。ごめんね」
と言って、お愛の背中を優しく撫でてやった。
お愛は、幼いながらも事情が理解できたのか、小さくうなずきながら、悲しみを懸命にこらえていた。が、やがて両方の目から涙がぽたりと落ちた。それを潮にお愛は、
「う、う、う、う・・・・、わぁー」
と大声で泣き出した。しっかりしているようであっても、お愛はまだ三つ、悲しいのは無理のないこと、と思っておいては、優しくお愛を見守っていた。
このような事件があった日の、翌朝の父忠春の悲報である。お愛にとっては、愛する二人の家族（おタマは、お愛にとっては家族同様の生きものである）を失う悲しみは、何ものにも代えられない出来事であった。

郎党の茂吉から報告があった夕刻、戦死した戸塚忠春の亡骸は、愛馬『疾風』が曳く荷車に乗せられて、無言の凱旋をしたのである。
戸塚家の屋敷は、一段と悲しみに打ち沈んだ。が、おていは悲しんでばかりはいられない。郎党や召使たちに指示して、葬儀の段取りをするのであった。
おていは、夫の忠春の戦死、そして葬儀、と一連の悲しみが続いて多忙の日々であったが、その後は虚脱状態となり、日々、居間に籠もって夫の冥福を祈っていた。
そんなおていの姿を心配した父の西郷弾正左衛門正勝は、弘治三年（一五五七）の秋、遠江佐野郡上西郷村長間（現在の掛川市上西郷長間）の地主服部平太夫正尚に嫁がせた。服部正尚も再婚であった。

服部正尚の一族は、元々は、伊賀の国名張（現在の三重県名張市）の国人（在地の領主）で、服部出雲守保章といい、その娘が明智光秀の妻になっていた。テレビや小説でお馴染みの、伊賀の忍者服部半蔵と同族である。
正尚については、織田信長が明智光秀に襲われて自刃した天正十年（一五八二）六月、京都にいた家康は、伊賀越えで無事三河に帰国した。その時正尚は、家康に蓑と菅笠を着せて変装させ、無事帰国させたという手柄を立てたので、家康から、「蓑笠之助」に名を改めよと指示があり、改名したという逸話がある人物である。

服部家については、正尚が高齢になって弟の七右衛門成重に家督を譲り、成重は、青山図書介と改名し、一万石を賜って老中に名を連ねる身分となったが、その後、将軍から幕政についてとがめを受け、三千石に減封されたということである。
正尚の嫡男惣右衛門は、西郷局が生んだ徳川薩摩守忠吉（家康の四男、尾張藩五十二万石）に仕え、その子孫は、尾張徳川家の家臣となった。
正尚の次男、三男は若死にし、四男の平四郎は、正尚の隠居料百五十石を継承して、二代目蓑笠之助を名乗った。この服部正尚は、元々は猿楽師（能狂言を演ずる能楽師）であったといわれている。

3、美人ケ谷の幼馴染

物語を本論に戻そう。
弘治三年（一五五七）、お愛が六歳になった時、母のおていが、上西郷村長間の服部正尚に嫁いだので、お愛も母に従って服部家に入り、正尚の養女となった。
養女となったお愛は、服部家の庇護の下で、穏やかな日々を過ごしていた。
それから早くも四年の歳月が経ち、お愛は十歳になった。
お愛は、かつて父忠春が推察したように、愛らしさの中にも女性としての色気をただよわせ、思わずはっとするようなしぐさを見せることがあった。
お愛は、面長、色白、富士額、おっとりした顔立ちで、やや頭をかしげ、黒目勝ちのまなざして見つめる風情には表現できないような、淑やかな色気があった。

永禄四年（一五六一）、夏の昼下がり、裏山の樹上で油蝉が、
〝じーぃ、じーぃ〟
と、声高に鳴いていた。お愛は、
「おはは様、久しぶりで、美人ケ谷の堀田様のお宅に遊びに行ってきます」
と言って、いそいそと支度していた。母のおていは、
「あちら様は古いお医者さまのお宅です。ご診察などの邪魔にならないようにしなくてはいけません・・・・」
と心配顔で注意した。するとお愛は、
「だいじょうぶよ、おはは様。あちらのお姉さま、粋子さまがとても良い方で、礼儀作法などいろいろなことを教えてくださるわ・・・・」
と、さも自分の姉さんに甘えるような、親しみを持って母に言い訳していた。
美人ケ谷の堀田家は、七代続く医師の家系で、先祖は三河の武家の出で、七代前の御先祖が、
「上西郷美人ケ谷は住みよい土地柄である」
といって、岡崎から移住し、住み着いたと伝えられて

いる。

堀田家には、お愛と同じ年の祐人という名前の男の子がいて、兄弟姉妹には、前掲の粋子の他に、年の離れた兄が三人いた。両親は兄姉とは年が離れている末っ子の祐人を可愛がり、甘やかしていた。お愛は、そんな甘えん坊の祐人と気が合い、五町（約五〇〇メートル）ほど離れた道程を遠しとせず、堀田家へたびたび遊びに行くのであった。

そのような親密な関係が、お愛と祐人の間に長く続けば、単なる友達以上の感情が芽生え、お互いに愛情を抱くようになったのは自然の成り行きであった。

しかし祐人には、医師になるという父親の意向があったので、医学、薬学を修得するため、駿府で今川家のお抱え医師になっている縁者のところに修業に行くことになった。

それから五年の歳月が過ぎ、永禄九年（一五六六）、お愛は美しい娘に成長した。その美しさは近隣の評判になり、お愛をぜひ我が家の嫁に・・・・、という縁談話が、次々に持ち込まれてきた。しかし、お愛には、幼馴染である祐人というひそかに心に決めた恋人がいたので、そのような縁談話には耳を貸さなかった。世間では、「お愛さんは、あのように美しい女性になり、さぞや結婚話が沢山持ち込まれるだろうに、まだ決まった様子がない。誰か好きな人がいるのだろうか・・・・」と、噂しあっていた。

人間には、前世から運命付けられているとしか思えないようなことが発生する。お愛の場合も、遠江の片田舎に生まれたお愛が、時代の波に翻弄され、若くして寡婦となったが故に、後に日本を支配する家康に巡り合い、その子を産み、後々までも名を残すような女性になろうとは、神ならぬ身の知る由も無かった。

お愛は、そのような運命を全く予期せぬままに、日々を送っていたのであるが、予感がするのか、幼い時から人との出会いを大切にしていて、特に幼馴染の友達との縁を大切に守っていた。

ずーと昔のことであるが、お愛は次のような会話を、女友達としたことがあった。

ある日のこと、お愛は、親しい幼馴染のお美代を家に招き、京より取り寄せた人形を並べて遊んでいた。その時お愛は、

「ねぇ、お美代さん、あなたは大きくなったらどんな家庭の人になって居ると思う・・・・」

と、大人びた質問をした。お美代は、

「さぁ？そんなこと、私にはわからないわ・・・・。平凡な家庭でもいいから、穏やかで、ぬくもりのある暖かい家庭で、日々を過ごしていられれば、それで満足しなければね・・・・」

と、世間の誰しもが描く生活を夢見ていた。

「そうね・・・・。そうなのよね・・・・。貧しくてもいいから、平凡な家庭をつくり、可愛い子供と、楽しく暮らしていかれればそれが一番よね・・・・」

と、世間並みの会話を交わしていた。

永禄九年の正月が過ぎ、二月の寒の明けの日に、お愛は、

「お母様、わたし祐人さまのお嫁さんになりたい・・・」

と、母親に訴えた。が、この時代の常識では、若い娘が周囲の意向を無視して、恋人と好き勝手に結婚するなどということはできなかった。

しかもお愛の生家は、この地の有力者の家柄であったので、結婚の相手は、戸塚家に釣り合う国人（在地の領主）の家柄ということで、医師の息子の祐人との結婚はあきらめざるを得なかった。

4、破　局

春の陽射しが山野を照らし、草木が新芽を吹くそんなある日、お愛のところに、隣り部落の上西郷村滝の谷に住む幼馴染のお美代から、お茶会の誘いがあった。

上西郷村構江生れのお愛には、お美代の他に、ふみ、とし、のぶ、ゆき、みつゑ、ふさ、あさ、などなど大勢の幼馴染がいた。

この女友達の殆どは、他家に嫁いで母親になっているが、不幸にして夫に死なれて寡婦となった者や、不縁となって実家に戻された者など、お愛と似たような境遇の女たちも何人かいた。

お美代は、そんな幼馴染に声かけをして、長間の尼寺、法存庵に集まって、たわいもないおしゃべり、愚痴話をしようと計画を立てたのである。

お美代に指定されたお茶会の日には、七人の女性が集まった。

この女性たちの中には、三人の子持ちの女性もいれば、三年経っても子供のできない者もいて、離縁されそうだと不安の気持ちを洩らしていた。

久しぶりで顔を合わせた幼馴染の女性たちは、それぞれ家から持参した菓子や料理を食べ、白湯を飲み、おしゃべりに時間の経つのを忘れた。

そんなおしゃべりの中で、おふさが、

「ねぇ、お愛ちゃん・・・・、美人ケ谷のお医者様、堀田様の祐人さんは、まだお嫁さんももらわないで、お独りで医学のお勉強をしているようよ。あなたは、今はご主人もいない独り者だから丁度いいわよ・・・・。わたしたちは学がなくて駄目だが、あなたは本が好きで、よく読んでいたから学があるでしょ・・・・。祐人さんのお仕事を手伝って上げたら・・・・」

「そうよ、そうよ、それがいいわよ・・・・」

と、半ば嗾けるような口調で、お愛を持ち上げるのであった。

お愛は、なにか胸の内を覗かれたような気恥ずかしさを感じながら、視力が落ちて焦点が定まらない、とろっとした目を庭の方に向けていた。

周りの人にはあまり話そうとしないが、お愛は子供の頃から目が悪く、最近はそれが進んで、少し離れると相手を見間違うことがある。お愛の視力は今の医学でいえば、〇・一か、〇・二程度であろう。

そのため、お愛は相手を間違えないように、目を細めてじっと見た。相手は一瞬どきっとして、たじろくことがある。特に男性は、お愛の黒い瞳で見つめられると、一様に魅入られたような錯覚をいだき、次第に惹かれていくのであった。

この時点で、お愛の視力が落ちていることを知っているのは、ごく少数の身近な人だけであった。今おしゃべりをしている幼馴染のお美代は、その少ないうちの一人であった。

お愛は、幼馴染の友達が噂するように、堀田祐人との愛情をひそかに温めていたが、それを母親に言い出せなかった。特に西郷家一族の支配者である家長の西郷弾正左衛門正勝には、その気配すら見せないまま、娘時代を過ごしてきた。

そんな日々を過ごしているうちに、やがてお愛の身に大きな不幸が襲ってくるのであるが、この時点では、誰もそれを予測した人はいなかった。否々、予測できなかったのである。

お愛の幼馴染の堀田祐人は、駿府（現在の静岡県中東部）の支配者であった今川義元の子の今川氏真に、身に付けた医学薬学の知識、学識、技術を見込まれ、今川氏真を介して、甲斐（現在の山梨県甲府市）の国主、武田勝頼のお抱え医師となり、甲府に移住してしまった。そして武田の女性を妻にした。否々、妻にせざるを得なかった。

お愛と祐人の二人は、末は夫婦にと約束し、お互いの家族もそれを認める仲であったが、無残にもその仲を引き裂かれてしまったのである。

前掲のように、家長である外祖父の西郷正勝の意向で、お愛は、十八歳の春、心ならずも従兄の西郷義勝と結婚し、片方の祐人は、甲斐武田家のお抱え医師になってしまったので、二人の仲は、完全に破局となってしまった。

このように、他からの力でお愛と祐人が破局を迎えると、如何に愛し合っていたお愛と祐人の二人であっても、その仲を復元することは難しく、生涯、二人は顔を合わせることはなかった。否々、合わせられなかった。

何となれば、二人はお互いに徳川と武田の敵陣に身を置くことになってしまったからである。

徳川家に味方する西郷家一族のお愛。武田家の女性を妻にした祐人。このように敵対関係の立場になると、会うことは勿論、音信も途絶え、消息も聞かれなくなってしまった。

5、母になる

祐人との仲をあきらめたお愛は、身の振り方について種々思案していた。そんな時、十二西郷村に勢力を張っている外祖父（母おていの父親）の西郷弾正左衛門正勝が、自分の孫の西郷石京進義勝を、お愛の結婚相手と決め、お愛を始め、西郷家一門に言い渡した。

そのような経緯があって、お愛も外祖父の意向に逆らえず、十八歳の時、従兄の西郷義勝と結婚し、翌年の女の子を一人、その翌年に男の子を一人もうけた。

女の子（名前は不詳）は、西郷家一門の西郷家員の妻となった。

この西郷家員の家系は、前掲（プロローグの項）のように、

「清員―家員―忠員―康員―正員」

と続き、一万石を賜って大名となり、西郷本家として栄えた。

男の子は、名を勝忠といい、成人してから紀州家に使えたが、早死にしたので一旦家系が途絶え、その代わりとして義勝と先妻（諏訪部出羽守定久の女）との間にできた異母兄の繁勝が紀州家に仕え、紀州藩西郷家として幕末まで続いていた。

「栄華は続かず」

しまった。

の子供を仏間に呼んで、亡夫義勝の位牌の前に座らせると、

「母は明日、三河の西川城に行かなければなりませぬ。父様もお亡くなりになったので、お前たち二人をお祖母様にお預けして、養育していただくことになった。わかりますね・・・・」

と話しだすと、二人の子は、

「いや、いや、いやです・・・・。お母さまがいなくなると、私たちはさびしくてたまりません。行かないで・・・・」

と、日を赤くして言うと、母お愛の両袖にすがりつき、

「おかかさま・・・・」

と泣き出した。お愛も思わず、

「う、う、う、う・・・・、わぁー」

と、惜別の涙を流し、二人の子供をひしっと抱きしめた。

二人の子供のうち、一つ年上の、女の子のおふじは四歳、下の男の子の勝忠は三歳、共に事の是非は理解しつつあった。

上の子のおふじは、日頃とは違った母親の泣き悲しむ姿に驚きつつ、

「はい、お母さま・・・・。お祖母さまのところへ行ったら、お言い付けを守り、おとなしゅうしております・・・・」

と、こぼれ落ちる涙をぬぐおうともせず、けなげに言いつつ、母お愛の袖を放して悲しみに耐えていた。すると一つ年下の勝忠も、母親の手をまさぐりながら、

「母さま、私もお祖母さまのお言い付けをよく聞いておとなしゅういたします」

と言って、涙を両手で拭いて母親から離れた。

「おぉおぉ、わかって下されたか・・・・。嬉しや・・・・」

お愛は、もう一度、二人の子を両腕で抱きしめ、涙を堪えるのであった。

つづく

「農ある暮らし～私の日常～」(5)

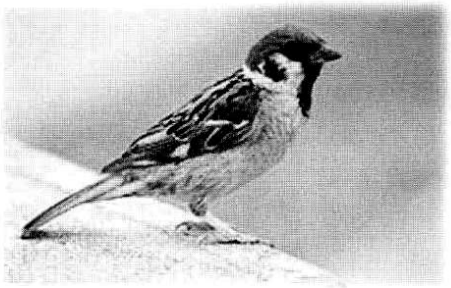
古屋富雄



お裾分け

農業で暮らしています
米に野菜にみかんに柿
他にも色々作っています
大地の恵みに感謝します
春夏秋冬(はるなつあきふゆ)実りの季節
あ一良く出来たと　喜ぶ年も
あ一残念だと　　嘆いた年も
鳥や獣が食べる分の米や野菜を残します
少しばかりのお裾分け、いいえ、お福分けですね

雀が集まってきました
ハトもキジもノネズミと
色んな命が生きています
残した米を食べています
春夏秋冬(はるなつあきふゆ)実りの季節
あ一良く出来たと　喜ぶ年も
あ一残念だと　　嘆いた年も
鳥や獣が食べる分のみかんや柿を残します
少しばかりのお裾分け、いいえ、お福分けですね
大地の恵みに感謝します

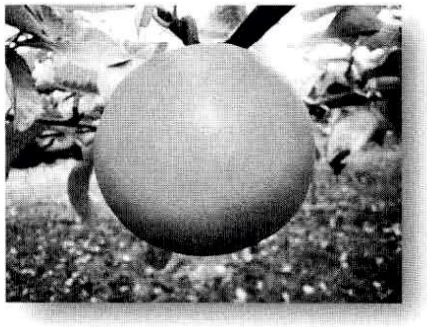


棚に遺された梨

あれほど元気だった叔父が病気で臥せっています
もっと早くお医者さんに行っていればと
奥さんが涙を見せました
米作りは村一番
梨の甘さも村一番
数えきれない表彰状が奥の座敷を飾っていました

きっと我慢をして仕事を続けていたのでしょう
梨の収穫が一段落するまではと
無理を重ねていたのでしょう
仕事振りは村一番
面倒見も村一番
見舞いに来た人たちが奥の座敷を心配しています

丹精込めて育てた梨がまだ棚に残っています
あと一日もう一日頑張ればと
思う梨の数になっていました
米作りは村一番
梨の甘さも村一番
働き者の優しい叔父は奥の座敷で眠っています
棚に残された梨が何故か寂しそうに揺れていました



小春日和

小春日和で思い出すのは
遠い日に逝った祖父のことです
日向ぼっこが日課になって
縁側でくつろぐ祖父の姿です
うとうと、こっくり
気持ち良さそうに居眠りをしていましたね
うとうと、こっくり
そんな時間がゆっくり流れる
小春日和です

日毎寒さが増す頃に
大根干しが始まります
一番つらい水洗いは
家族みんなですることが決まりです
大寒（おおさむ）、小寒（こさむ）
山から小僧がやって来る歌がありましたね
大寒（おおさむ）、小寒（こさむ）
山から小僧がやって来る
冷たい水です

うとうと、こっくり
明日の予報はポカポカ陽気になるそうですね
うとうと、こっくり
今では父が居眠りをしている
小春日和です



地方都市

地方都市に陰りが見え始めています
大手老舗のデパートが出ていくそうです
村の暮らしがどうにも辛くなりました
町に出るしか暮らす術はありません
病院もある
スーパーもある
歩いて用が足りる町なのに
何故か寂しく心もとない気がします

地方都市に陰りが見え始めています
馴染みの店ももう時期閉めるそうです
町に来た時は必ず寄った店でした
妻の好きな雑貨がいつもありました
駅にも近い
コンビニもある
全てが揃った便利な町なのに
何故か寂しい村の匂いを感じます



東日本大震災の被災地を走る（その二）

安藤　剛

【未来への道　被災地一〇〇〇キロ縦断リレー】

東日本大震災から二年経った平成二五年、被災地沿岸をリレーで走る壮大なイベント『未来（あした）への道一〇〇〇キロ縦断リレー』が始まった。

スポーツのチカラにより継続的な震災復興の機運を醸成して被災地と全国の絆を深めることを目的に、青森から東京まで一〇〇〇キロを一四日間かけてランニングと自転車でタスキを繋いで走るイベントである。

主催は経路の七都県陸上競技協会とスポーツのチカラプロジェクトで構成する実行委員会、東京都が共催、青森・岩手・宮城・福島・茨城・千葉各県と二〇二〇年東京五輪招致委員会などが後援、沿道の七二市区町村が協力する、まさに国家的プロジェクトである。

復興五輪を理念に掲げる東京五輪二〇二〇の招致活動の一環として、被災地を走る聖火リレーをイメージして企画されており、被災地宮城出身ランナーとしてぜひ参加してみたいと宮城県南を走る八日目に申し込んだ。

【第一回：宮城県山元町（平成二五年八月一日）】

青森から東京まで被災地一〇〇〇キロをタスキリレーする夢のようなイベントに、多くの希望者が予想され、当選を期待していなかったが、幸運にも二〇〇〇人を超える応募者の中から七〇〇人のランナーの一人に当選させてもらった。そして山元町役場から体育文化センターまで二・八キロ「宮城二二区」を走ることになった。

山元町は昨年一一月に「わたり復興マラソン」で走った亘理町の南隣に位置して、東日本大震災の大津波による犠牲者が六三七人、流出全半壊家屋が三二〇〇余棟という甚大な被害を受け、更に常磐線の線路と市内三駅舎も全て流出、今年三月に浜吉田駅以北がようやく開通したばかりである。

仙台駅前ホテルに前泊、早朝に常磐線で津波が遡上した名取川と阿武隈川を渡って太平洋沿岸を南下、一〇〇〇キロ縦断リレー八日目のスタート会場がある亘理駅に下車、集合まで時間があり小雨のなか会場近くの亘理城に向かった。途中の亘理町役場はプレハブ仮設庁舎のまま、本庁舎が地震で未だ使用不能だという。津波だけでない被害の大きさを改めて思い知らされた。

亘理城は、伊達政宗の右腕といわれた従弟成実が城主となり伊達家中最大の所領を持つ城である。本降りになった小高い本丸跡に上ると、遥かに望む太平洋が雨に霞んでいた。藩祖伊達成実を武早智雄命として祭る亘理神社に、震災犠牲者の鎮魂と早期の復旧復興を祈願した。

戊辰戦争で奥羽越列藩同盟の盟主となった仙台藩が新政府軍に敗れると、亘理伊達氏は二四千石から五八石に減らされ、窮乏する家臣救済のため当主伊達邦成は、家臣団を率いて北海道に移住し有珠郡（現伊達市）を開拓した。大震災直後に姉妹都市の北海道伊達市は、津波被害を受けた亘理町復興支援を決議してイチゴ生産農家の移住を受け入れたという。これぞ歴史の絆である。

集合場所の亘理町公民館に入ると、受付を済ませ「未来への道一〇〇〇キロ縦断リレー二〇一三」とプリントされたオリジナルシャツに着替えた参加者たちがロビーに寛いで、吉本興業の爆笑コメディアンがランナーたちの間をインタビューしてムードを盛上げていた。

八時三〇分にスタート式が始まり、亘理市長らの挨拶の後、ゲストランナーの元Jリーガー水内猛さんが紹介され、ランナー代表の女子大生の宣誓のあと、揃いの大会オリジナルシャツ姿で「一〇〇〇キロ縦断リレー」の横断幕を前に集合写真が撮られた。

七月二五日に青森県八戸市をスタートしたタスキは、岩手県と宮城県の太平洋沿岸を亘理町までリレーされたが、福島県内は中通りが原発事故の影響で走行不能なため、福島県内は中通りを走ることになり、今日は亘理町をスタートしたあと相馬市から阿武隈山地を横断して中通りの福島県庁まで走る一〇区間八五キロのコースである。

雨の降りしきる中、宮城三〇区ランナー四人とゲスト水内猛さんの五人が、五輪の五色タスキをかけて横一列に並び、宮城三二区以降のランナーと大会関係者らが見送るなかカウントダウンが始まり、九時丁度に亘理市長のピストルと大きな歓声のもとスタートした。

宮城三〇区のスタートを見送り、マイクロバスに分乗して国道六号線をそれぞれの中継所に向け出発した。バス内で同じ宮城三二区を走る五人が自己紹介し合った。隣に座る福島第一原発事故で飯館村から川俣町に避難中の男性の話には、津波被害とは違った原発事故による復旧復興の難しさに胸の潰れる思いである。特に酪農農家

の苦悩話には返す言葉もなかった。通路を挟んだ山口県から復興支援のため福島県庁に出向して来た男性は、戊辰戦争で犬猿の仲になった長州と会津の積年の恨みを払拭する大役を担って来られたのだろう。まさに恩讐の彼方にである。彼の福島復興に向けた活躍を期待したい。

やがてバスの窓外に雨降りしきる国道を縦一列に走るランナーが見えてきた。窓から手や頭を出して声援を送ると、我々のバスに気付いて走りながら手を振り応えてくれた。まさしく互いの絆が結ばれた瞬間である。被災地の話題で重苦しかった車内が俄然明るくなった。

バスが第二中継所の山元町役場に着くと、近くに住む妹夫婦が応援に来ていた。まもなく宮城三一区のランナー四人が到着、我々三二区五人が横一列に並び、拍手で迎えて互いに固い握手を交わし、タスキを受け取った。

「お疲れさま」「ありがとう、タスキをお願いします」

このタスキが青森県八戸市から七日かけて五〇〇キロ繋がれてきたのか。タスキにかけられた多くのランナーの思いが伝わってきた。これまで参加してきた一人マラソンでは味わえない、絆というリレーの醍醐味に高揚していた。そして檜舞台の主役になっている快感を味わいながら、拍手と声援を背に国道六号線に走りだした。

我が宮城三二区チームは、山口県の彼を先頭に男女が交互に続いて私が最後尾、その前後をサポートランナー各二人の計九人のクルーである。私の前を走る福島県いわき市から参加したという女性に、大震災の前月に走ったいわきサンシャインマラソンで、漁港で大漁旗を振り応援してくれた逞しい漁師達の話をしたが、マラソンコースになった漁村の殆どが大津波で壊滅的な被害を受けたという。津波の残酷さに改めて怒りを覚えた。

小雨の中、会話を楽しみながらジョッキングのようなペースで心地よい。追い越していく車から頑張れという声援が聞こえたが、妹夫婦だった。その先の空地に車を停めて、そして再び追い越しながら車中から声援を送ってくれたが、身内ながら嬉しいものである。通常のマラソン大会は、交通規制された車道の左側を走るが、本イベントは非競争イベントであり、自動車の通行に迷惑をかけないよう原則右側歩道を縦一列の走行である。

やがて右手に小山のような「中島館」が見えてきた。昨年のわたり復興マラソンの帰りにも一度立ち寄ったが奥州藤原氏初代清衡の父経清の館跡といわれ、経清は在庁官人として陸奥国府多賀城に勤務していたという。千年も昔にここから北に四四キロも離れた多賀城に本当に出仕していたのだろうか。余りに遠すぎるではないか。

亘理権太夫を称した経清が国府の在庁官人ではなく逢隈の亘理郡衙の郡司だったとしたら、徴税権を持って国衙から半独立していた郡衙を衰退させた多賀城の国府権力に抵抗する経清が、国府に搾取抑圧されていた蝦夷俘囚長安倍頼時と結びついたとは考えられないだろうか。

これぞ前九年の役の真相ではないだろうか。

前九年の役で惨殺された経清の遺児清衡が、清原氏の内紛に乗じて後三年の役で奥州を制覇、四男清綱を浜通りの中島館に据え、清綱は娘乙和姫を中通りの豪族佐藤基治に嫁がせ、共に平泉王国南端の防衛を担っていたのではないだろうか。一〇〇年後に頼朝の奥州平泉征伐で浜通りを進軍した千葉常胤が恩賞で三男武石胤盛に亘理郡が与えられ四代が亘理氏を名乗り、中通りの石那坂で佐藤基治を討ち取った常陸入道念西が伊達郡を与えられ伊達氏を名乗る、そんな歴史談義を並走するサポート役の学生さんに話すうち体育文化センターに着いた。

打ち合せ通りに五人で手を繋ぎ、横一列に万歳しながらセンター敷地へ走り込んだ。待ち受けていた宮城三三区のランナーに八戸から繋がれてきたタスキを引き渡し無事に大役を果たした。三・八キロがあっという間で物足りない思いもしたが、走れたことに感謝したい。自分にできる走ることで復興支援に協力できたという喜びを爆笑コメディアンのインタビューに答えた。

体育文化センター職員らの見送りに応えながら、移動バスで次の中継所に向かった。海岸から二キロほど内陸をひたすら南下、津波の塩害による荒地がまだまだ残っていたが、かなりの田圃で今年から田植えが出来るようになったという。緑の水田こそ復興の象徴である。一日も早い緑一面の田園復活を祈った。

宮城県から福島県に入り、福島二区ランナーを収容するため相馬市役所の駐車場に入った。少し時間があり皆で近くの相馬中村神社参拝に小走りした。有名な伝統行事「相馬野馬追」は、相馬地区の原発警戒区域指定と出走馬の県外避難という障壁を乗り越え、被災の年の七月に鎮魂と復興への祈りを込めて、規模を縮小させ開催に漕ぎ付けたという。相馬市民の熱意に敬意を表したい。

市役所前で福島二区ランナーからタスキは三区二七キロの自転車組二人に渡された。区間は福島県の浜通りと中通りに分ける阿武隈山地を横断する山岳コース、年配のライダーさんで大丈夫だろうか。相馬市から霊山を越えて伊達市に抜ける国道一一五号は、あの福島第一原発事故で放出された高濃度の放射性物質が折からの風向きと切り通しの地形で通り道になったルートである。

自転車組を追いかけるようにバスも阿武隈山地を横断する国道を登り始めた。路肩で放射性汚染物質の除洗作業が行なわれており、除洗された土壌の袋が至る所に山積みされていた。この無限に広がる山林に降り注いだ放射性物質を除洗しようとは気の遠くなるような話ではないか。完全に除洗できるとは誰も思っていないだろう。原発事故を前に人間の無力感が募るばかりである。これぞ人間のエゴの結末ではないか。被爆した飯舘村から避難して参加している彼の眼差しと、除洗の実態を語る静かな語り口に、遣り切れない憤りが伝わってきた。

分水嶺の霊山パーキングで福島三区のライダーから四区二三キロの自転車組二人にタスキが無事に渡り、バスは福島市に向かった。車酔いするほどに蛇行する下りの急な山道を自転車で走るには相当な技量が必要、スピードの出し過ぎを皆で心配したが、窓外に路肩を走る自転車組を見つけると、バス内に安堵と歓声が広がった。

阿武隈山地を越えると、中通りは雨の降った形跡が全くなく、やはり浜通りとは別世界である。ゴールの福島県庁前広場に走り終えた全ランナーと大会関係者と県庁職員が整列、最終福島六区ランナーの歓喜のゴールを盛大に迎えた。かくして八日目の一〇区間八五キロは無事タスキが繋がれた。引き続いてゴール式が行なわれ「未来（あした）への道を頑張ろう！」と参加者全員の願いをシュプレヒコールして解散となった。

帰路の新幹線内で今日一日を反芻した。一緒に走ったランナー、バスで一緒になった仲間、誰もが震災に関わりを持った人ばかり、被災地の現状と思いを生の声で語り合え、交流が深められ、有意義な一日だった。素晴らしい企画に参加できたことに感謝したい。

【第二回：千葉市東京都（平成二六年八月七日）】

平成二六年の第二回「未来への道一〇〇〇キロ断リレー」は、最終日のお台場グランドゴールの感動をぜひ味わってみたいと八月七日を希望したところ、応募多数の中、幸運にも昨年に引き続き抽選に当選、千葉県庁からお台場まで、四区間五五キロの内、一一区間目の江東区を走る「東京二区」三キロを走ることになった。

昨年の第一回大会は東京五輪二〇二〇の招致活動の一環だったが、東京五輪の開催が正式に決定して開かれる今年の第二回大会は東京五輪二〇二〇の開会式の日に決まった七月二四日に青森県庁をスタート、被災地の沿岸部を走るコースも、東京五輪二〇二〇の聖火リレーコースを想定しているという。初日の青森一区走者になったシドニー五輪女子マラソン金メダリスト高橋尚子さんの笑顔が全国にテレビ放映されて六年後の東京五輪に向けたオリンピックムードを大いに盛り上げていた。

朝五時に起床、六時前に埼玉を出立、連日三五度を超す猛暑日だが、今朝は日陰の空気が爽やかで、背に当たる陽光も心地よく、このまま涼しい夏の日和であって欲しいものである。秋葉原で総武線に乗換えて約一時間、隅田川、江戸川、荒川を渡り、千葉駅でモノレールに乗換え、千葉県庁に着いたのは八時を回っていた。

受付で「一〇〇〇キロ縦断リレー二〇一四」のシャツを受け取り、更衣室で東京二区のゼッケンを胸に付け、スタートセレモニー会場に入ると、待っていたように男性スタッフが「もう一区間を走ってもらえませんか」とゼッケンを持ってきた。欠員が出たという。東京二区三キロだけでは物足りないと思っていたので、気軽に「いいですよ」と即答、「走力は大丈夫ですよね」に「ええフルも走りますから」そんなスタッフとの会話に前に並んでいた女性ランナーが振り向いた。その顔は（突然で大変ね、でも羨ましい）と語っていた。渡されたゼッケンを見てびっくり、千葉一七区である。「今日のスタートじゃないですか」「そうです。タスキの授与式にも出てもらいますので、呼ばれたら前に出てきてください」「それは・・・大役ですね」と答えたが、さっきの女性がまた振り向いて（頑張ってね）と笑顔を向けてきた。

会場の隅で急ぎ東京二区から千葉一七区にゼッケンを付け替え、ランナーたちの最前列に進んだ。まもなくスタートセレモニーが始まり、千葉県知事森田健作氏の元気な挨拶に続きゲストの芸能美人ランナー西谷綾子さんの明るい挨拶があり、いよいよタスキの授与式である。

千葉一七区ランナー六人が森田県知事ら来賓と対面する位置に並び、お偉いさんから一人ひとり首にタスキを掛けてもらい、一緒に走る父子の選手宣誓が始まった。今日最終日のスタートセレモニーがテレビに放映されるらしく、テレビやカメラのフラッシュを浴びながら、突然のサプライズにすっかり舞い上がっていた。

千葉一七区のメンバーは、選手宣誓をした千葉の父子と背の高いブラジル人男性、私と同じく東京二区から千葉一七区のピンチランナーになった沖縄出身の学生、そしてゲストの西谷綾子さんと私の六人である。千葉県庁前広場でカウントダウンが始まり、森田知事のピストルで、一七区六人が横一列に手を繋いでスタートした。ロードは車道を規制せず歩道を走るため、縦一列に会話しながらの楽しいジョッキングが始まった。

前を走る西谷綾子さんはフルマラソンを三時間で走る有名な美女アスリート、振り向いて「だいぶ走り込んでますね。足の筋肉がすごい」と声をかけてきた。ちゃんと見てくれているんだと年甲斐もなく嬉しくなった。

青空が広がり爽やかな夏の朝は心地よい。我々六人の前後を走る年配のサポートさんとも楽しい会話を交わしながら、市街地を走るうちに、中継点の千葉市役所が見えて、あっという間の千葉一七区二・五キロを走り終えた。千葉一八区のランナーにタスキを渡して今日最初の大役は無事終えた。一緒に走った記念にと西谷綾子さんのサインをTシャツの背中にもらい、待機していたバスで次のリレー中継地に向かった。

移動バスで隣席になった沖縄出身のY君と、ゼッケンを東京二区に付け替えながら、共に二区間も走れる幸運を喜び合い、これまで走ってきたマラソン大会のこと、沖縄の基地問題や被災地宮城のこと、共通の趣味のテニスのことなど、多岐にわたる話題に時間を忘れていた。バス内でのテレビインタビューには、単にタスキを繋いで走るだけでなく、こうして初対面の仲間と楽しく語り合い新しい絆ができることは素晴らしいと答えた。

移動バスは浦安市から東京都江戸川区に入り、我々東京二区の中継会場である江東区の第一大島小学校に着いた。校庭で出走準備をしていると、元気のいい若い女性が飛び入りで加わった。なんとあの渋井陽子選手ではないか。女子一万メートル日本記録保持者で女子マラソン日本歴代二位の記録を持つ超大物である。

東京二区メンバーSさんの友人で、一緒に走りたいと大会事務局に申し入れて即OKだったという。頼んでも出てもらえない超メジャーな渋井陽子選手からの申し出なら断るはずもないだろう。世界の渋井さんの周りに皆が集まり早速サイン攻めである。私もTシャツと帽子にサインしてもらったが、飾らない男っぽい言動はテレビで見た通り、茶目っ気でひょうきんな可愛らしさに、誰もが魅了されていた。昨年の大阪国際女子マラソンで給水に失敗したライバルの福士加代子選手に自分のボトルを渡した話は有名だが、さもありなんである。

東京二区のメンバーは、沖縄出身のY君、渋井さんの友人Sさん、アシックスの女子社員二人、現地合流した男性と渋井さんそして私の七人である。東京一区の到着が遅れて、大会関係者は気をもんでいたが、お蔭で渋井さんとの楽しい団欒が続けられた。

ようやく東京一区のランナーがやって来た。今朝の千葉県庁の更衣室で「東京二区の方ですね。タスキを繋げるよう頑張ります」と真面目な口上で挨拶された、まさにその彼から、汗でびっしょりのタスキを首に掛けてもらった。今朝のスタート式では清潔で軽かったタスキがランナーたちの汗に濡れてずっしり重くなっていた。

東京二区七人が縦一列で新大橋通り歩道を西に向かった。先頭を走る渋井さんがピッチを上げた。「ここで貯金するよ」とは、アスリートの性であろうか。渋井さんは我々の走力を見て、遅れを取り戻すだけでなく、この先の区間の貯金も作ってやろうと意欲的な走りになっていた。カモシカのような渋井さんの足を必死に追った。歩道ですれ違う誰もが、何のイベントなのか、怪訝そうに見ていた。シャツの胸に「.〇〇〇キロ縦断リレー」とあるが、沿道に幟があるわけでもなく、アナウンスも勿論ない。もっとこのイベントをマスコミにPRして欲しいものである。一緒に走っているのが世界の渋井さんだと誰も気付いてくれない。「渋井陽子が走っていますよ」と声高に叫びたい衝動に駆られていた。

反対車線に夢違之地蔵尊の児童公園が見えてきた。関東大震災と東京大空襲で多くの犠牲者を出した東京下町に建つ慰霊碑に向かい走りながら鎮魂の祈りを捧げた。この界隈がかつて焼け野原だった痕跡は勿論ない。来年で戦後七〇年、戦争があったことすら忘れ去られようとしている。今日の平和が将来も続くと誰もが信じて疑わない。戦争をしたことを忘れないことが平和を守ることだ。昨日は広島原爆の日、東京大空襲の三月一〇日、そ

して二月一一日、決して忘れてはならない日である。

狭い歩道を七人のクルーが、先頭を交代しながら「自転車が来まあす」「人が来まあす」と後続に注意を伝言する絶妙なチームワークで、西大島から森下までの三キロを走り終え、深川小学校で東京二区のランナーにタスキを無事に引き渡した。このあと、渋井さんにお台場でのグランドゴールイベント参加を誘ってみたが、Sさんと一緒に走りたくて飛び入りしたのだからと帰っていった。この爽やかなところが渋井陽子なのだろう。

移動バスは、深川から月島に抜け、東京湾の晴海から豊洲へ、築地市場移転先の広大な敷地を横目に、お台場の美しいレインボーブリッジを眺めながら、近未来の高層ビルが林立する国際展示場のジョグポート有明に着いた。ロビーには既に最終東京五区を走る「ふれあいランニング」のメンバー約三〇人が集まっていた。

ジョグポート広場を軽く走っていると、二〇代の息子と父親が東京五区のゼッケンを胸に軽いアップをしていた。少し違和感を抱く光景に見入っていると、父親が近づいてきて、息子には知的障害があるが走りたいというので自分も一緒にトレーニングしてきたのだという。障害を持つ息子の将来を案ずる父親の苦悩はいかばかりだろう。その息子について隠し立てなく臆せず話してくれた父親が眩しく見えた。素晴らしい親子だ。

そしてもう一組、女の子を車椅子に乗せた母親がロビーから出てきた。女の子の東京五区のゼッケンに「(あなたも)走るの?」と尋ねると「走ります」としっかり答えてきた。車椅子で走るのか、まさか車椅子から降りて走るのではないだろうと思いながら、確かめるのが憚れるほどの強い口調に、私の方が気後れしてしまった。隣で母親が二人の会話をにこにこ見守っていた。「頑張ろうね」と声をかけてロビーに戻った。

やがて各区間を走り終えたランナー約七〇人が続々到着して合流、いよいよお台場までのグランドゴールである。ジョブポート前に勢揃いしたゲストランナーの車いすテニスの国枝慎吾さん、卓球の石川佳純さん、EXILEのTETSUYAさん、モデルの長谷川理恵さんらがインタビューに答えていた。まもなく東京四区ランナーが手をつないで到着、ゲストランナーたちにタスキが繋がれ、総勢一〇〇人がゴールのお台場シンボルプロムナード広場に向かってゆっくり走り出した。

大きな集団がコンコース一杯に広がって走る光景は壮観である。先ほどの車椅子の女の子が気になり、振り返るとなんと車椅子から降りて最後尾を走っているではないか。否、麻痺した片足を引き摺ってひとり遅れながら必死に走ろうと歩いていた。母親は突き放すように少し離れて空の車椅子を曳いていた。切り取られた絵のような感動的光景に、楽しみにしていた華やかなグランドゴールのフィニッシュランを諦めて、ひとり頑張ってい

る彼女をサポートしようと、彼女の元に戻った。私と同じ思いの女性ランナー二人と義足の男性ランナーも彼女のサポート役に回ってくれた。

彼女を囲んで足踏みするような走りで一・七キロ先のゴールを目指した。「無理しないでね」「歩いてもいいんだよ」「苦しくなったら車椅子に乗っていいんだよ」と交互に声掛けするが、彼女は前方をしっかり見据えてひたすら足を運んでいた。「学校で一〇〇M走ってきたんだ」と得意そうに話す彼女がいじらしい。きっと先生に「お台場を走ります」と口を輝かせて語ったに違いない。車椅子の方がどれだけ楽だろうに、あえて車椅子から降りて走ろうとするこの子の強さはどこから来ているのだろう。まだ中学生なのに親に甘えず生き抜く術をこの子は自力で掴み取ろうとしていた。自立させようと傍らで見守る母親の強く優しい気持ちが支えているのだろう。頬を紅潮させ、口が開いて、額に玉のような汗を浮かべ、まだ大丈夫、まだ大丈夫、と頑張り続けていた。

総勢一〇〇人の集団は遥か前方に消え、広いコンコースに私らと数人のスタッフだけが取り残されていた。僅か一・七キロだがどれだけ時間がかかったろう。ゴール広場に着いた時には既に閉会セレモニーが始まり、舛添都知事が挨拶していた。同伴した女性ランナーが彼女を車椅子に乗せて最前列に連れて行った。

今日のヒロインは私らにとってその女の子だった。彼女の前方を凝視する眼差しが忘れられない。きっと生きる力を自力で培い逞しく生きていくことだろう。応援してあげたはずの私らの方が彼女に力をもらっていることに気づいた。彼女に出会えたことに感謝したい。

東日本大震災の被災地一〇〇〇キロを一五日かけて復興支援のタスキをリレーで繋ぐイベントは、素晴らしいセレモニーで無事終幕した。あの痛ましい被災の現実を風化させることなく、復興めざして頑張っている多くの被災者のみなさんを全国の温かい心の絆で支えていきたい、そして舛添都知事が「二〇二〇年の大会では、東北がよみがえったことを世界に発信したい」と語る東京五輪を、復興を果たした笑顔で迎えたいものである。

【第三回：宮城県東松島市（平成二七年七月二九日）】

東日本大震災から四年四か月、原発事故の福島は未だ先が見えないが、我が郷里宮城は、この五月三〇日にJR仙石線が全線復旧、県都仙台と県内第二の都市石巻が結ばれ、震災復興もようやく軌道に乗ってきた。

被災地出身ランナーとして二〇一三年に始まった青森から東京まで被災地をタスキリレーで走る「未来への道一〇〇〇キロ縦断リレー」に第一回から参加してきたが今年の第三回大会には最大の被災地となった宮城県北部の沿岸をぜひ走ってみたいと第六日目に申込み、幸運にも繰り上げで当選、三年連続走れることになった。

私の走る区間は南三陸町から松島町まで一一区間の内一〇区間目の東松島市を走る宮城一七区六・一キロ、当日のランニング九区間の中で最長の区間である。

前夜遅くに岩手県一ノ関駅前のホテルに入った。午前五時に起床、爽やかな東北の空気がこれからの素晴らしい一日を予感させてくれた。一ノ関駅前からスタート会場の南三陸町に直行する送迎バスに乗り込み、三四二号線をひたすら南下、北上山地を包む朝霧が晴れて、車内に朝日が差し込んできた。四〇分ほどで宮城県に入ると登米市の穀倉地帯が広がり、東北最大の北上川を渡り深緑の北上山地を抜けると、辺りが茶色の世界に一変、山を切り崩して平地をかさ上げした南三陸町の造成地が広がってきた。瓦礫は綺麗に撤去され、海岸近くを産業・商業ゾーン、丘陵の高台を居住ゾーン、復興再生プランによる大規模な造成工事は順調に進んでいるようだ。

スタート会場の南三陸町ベイサイドアリーナに着いたのは七時半、受付を済ませ、総ガラス張りのモダンなラウンジで、送迎バスで一緒だった参加者たちとマラソン談義をしたが、彼らはフルマラソンをいくつも走ってきたアスリート揃いだった。

アリーナ前広場でスタート式が始まり主催者より「震災の記憶を風化させない目的で開催、二〇二〇年の聖火リレーのコースになれば」と話があり、南三陸町長から「走りながら見る町の風景は毎年変わっている、町のかさ上げは一〇Mになっており、今日見た風景をしっかり目に焼き付けて地元に帰られたらぜひ南三陸の復興の状況を伝えてほしい」と挨拶が続いた。

次いでゲストランナーの元Jリーガーで宮城きずな大使の水内猛さん、北京五輪競泳の宮下純一さん、女優の横田美紀さんらが被災地への想いを語られ、宮下さんの「美しい自然を感じながらより早い復興を願って走りたい」は、さすがNHKリポーターである。

スタートセレモニーの最後に、あさひ幼稚園の鼓笛隊演奏が始まった。あの悲惨な津波を生き抜いた子供たちが一生懸命演奏している姿に口頭が熱くなった。津波で流失したあさひ幼稚園の再建に、サッカー日本代表キャプテン長谷部誠選手が、著書「心を整える」の印税全額を日本ユニセフ経由で寄付されてきたという。

鼓笛隊のドリルが終わりゲストランナーを前列に集合写真が撮られ、いよいよスタートである。カウントダウンが始まり宮城八区のゼッケンを付けた水内さんと宮下さんら八人が五色のタスキを掛けてスタートした。

次の区間から先を走るランナーが三台のバスに分乗して移動を開始したが、B号車は我々宮城一七区六人だけのまさに貸切り状態である。隣に座る登米市のUさんはリタイア後にその経験を生かして復興に貢献しようと南三陸町役場の臨時職員になったという。東京都東大和市から参加されたSさんは南三陸町に二年連続で単身ボラ

ンティアに来ていたといい、宮城県のAさんは子供の頃に野蒜海岸で泳いだ思い出を語り、東京から参加のUさんはオリンピック関係の仕事をしており復興支援にも関わりたいと語っていた。素晴らしい仲間たちである。

移動バスは大会職員の計らいで犠牲者六〇〇人以上を出した南三陸町の被災地現場を周回してくれた。一〇Mにかさ上げされた盛土の広がる狭間に、無残な赤い鉄骨姿が見えてきた。防災放送担当の遠藤未希さんが命懸けで避難を呼び掛けて犠牲になったあの防災対策庁舎である。津波襲来時に庁舎内に職員や住民五三人がいたが、三階屋上のアンテナや手すりにしがみついて波に呑まれながら辛うじて助かったのは一人だけだったという。

無残な鉄骨を見上げていると「高台に逃げて下さい」と叫び続ける未希さんのアナウンスが聞こえてきそうである。庁舎前のお地蔵さんに、犠牲者の安寧を祈った。

この防災庁舎を「震災遺構として保存したい」「悲しい震災を思い出してしまうので解体撤去して欲しい」と地元は大いに揺れたという。日をそむけたくなる痛ましい姿だが、先月末にようやく宮城県が二〇年の期限を切って震災遺構として管理することに決まった。

移動バスは復興造成工事現場を巡りながら、中継所の南三陸ホテル観洋に向かった。ホテルロビー奥のビデオコーナーで「三D映像！震災直後の南三陸町」を視聴したが、三D専用メガネで見る被災一か月後の生々しい立体映像に呆然としてしまった。ホテルの建つ高台から、眼下に広がる静かな美しい大海原を望みながら、あの時の断末魔は如何ばかりだったろう、大津波が志津川湾の奥深く浸入していく様が航空写真のようにここからも俯瞰できたにちがいない。人の力ではどうしようもない、大自然の猛威を前になす術もない、身の毛もよだつような光景が浮かんできた。

ホテル前で宮城八区を走られた宮下純一さんたちと合流、NHK「あさイチ」リポーターとして茶の間に人気の宮下さんは、実に爽やかな好青年である。親しく話し合っているとまもなく、元気のいい明るい女優の横田美紀さんを先頭に宮城九区のランナーが走り込んで、周りが一気に花が咲いたようである。ホテルの従業員さんたちが手作りした大横断幕を持って宮城一〇区の白転車をカウントダウンで送り出し、移動バスは石巻市総合運動公園の「ふれあいランニング会場」に向かった。

石巻運動公園に東京五輪二〇二〇に向けた新国立競技場建設に伴い撤去された聖火台が移設されていた。戦後復興の象徴だった一九六四年の東京オリンピックの聖火が五〇年の時を超えて東日本大震災からの復興の火として四〇〇〇人の犠牲者を出した最大の被災地石巻の地に灯るとはなんと象徴的ではないか。聖火台の前でゲストランナーの北京五輪陸上選手小林祐梨子さんがランニングクリニックを始めていた。そして若さ溢れる地元高校

のチアの演技がセレモニーを盛り上げていた。

いよいよ我々の出番が近づいてきた。移動バスは北上川を渡り石巻市外を通り抜け東松島市に入り、中継所の野蒜市民センターに着いたのは一四時を回っていた。東松島市は一〇〇〇人を超える犠牲者を出した被災地で、プレハブの野蒜市民センターの背後に建つ三階建て野蒜小学校校舎は、被災した状態のまま廃校になるという。

隣の空き地が二〇人近い犠牲を出した体育館の跡地である。大津波警報に避難場所に指定されていた体育館に辿り着いてほっとしたのも束の間、真っ黒な濁流が体育館内に流れ込み渦を巻きながら避難していた人たちを呑み込み、ステージのカーテンにしがみつき、ギャラリーに上がった人だけが辛うじて助かったという。

なぜ隣の三階建て校舎に避難しなかったのか、今さら問えるものでもないが、海岸から一・四キロも内陸のここまで津波が押し寄せてくるとは誰も想像できなかったのだろう。空き地の端に、野蒜海岸の松ぼっくりから芽を出したという「希望の松」が植えられていた。

まもなく宮城一六区の女性ライダーが到着した。一人で双肩に掛けて運んだタスキを我々六人が引き継ぎ、カウントダウンでスタートした。気温は三〇度を超えていたが海風が心地よい。走り始めてまもなく草むらに埋もれた線路をまたいだが、津波に襲われた仙石線である。今年五月に開通した仙石線は山側を迂回して新設され、海岸沿いのこの線路は廃線になったという。地震直後にここで立ち往生した電車の乗客を野蒜小学校に避難させた直後、大津波が襲いかかり折れ曲がった車輛が住宅街まで押し流された無残な映像が浮かんできた。

やがて野蒜海岸に並行する東運河に出た。七年前に松島ハーフマラソンで走った風景と重ね合わせたが、日光の杉並木のように海岸線に伸びていた緑豊かな松林が歯抜けになってみすぼらしく変わり果てていた。松島マラソンで前泊した海岸沿いのペンションも跡形なく、国道の海岸側は津波危険区域となり住宅が建築できず原野のまま、いつになれば昔の平和な生活が戻るのだろう。

仙石線の東陸橋を越えると山道に入った。いよいよアップダウンの始まりである。先導するサポートランナーさんがキロ七分のスローペースで走ってくれた。私を先頭に歩道を一列でひたすら登りつめた路肩で、大会車輛の臨時給水が待っていた。猛暑のなか頭から冷水を掛けてもらい生き返った心地である。

下り坂になると美しい松島湾の島々が見えてきた。ため息の出るこの眺めは「麗観」と呼ばれるらしい。左手に見える黒い塊は奥松島の大高森だろうか。海岸線に下りると真新しいコンクリート壁が続いて砂浜が隠れて見えない。漁村のあった入江も、かさ上げの盛土が広がって、もうここにも人は住めないのかもしれない。

五月三〇日に開通したばかりの仙石線の電車が偶然

走ってきた。復興のシンボルに、子供のように歓声を上げて電車に向かい皆で手を振った。再び上り坂になった。最後尾に回りサポート役の青年と話したが、福島県いわき市出身で東京からボランティアで参加しており、もちろん無報酬で交通費も自腹、今日はこれが四区間目で延べ二〇キロ近く走っているという。タスキを掛けるメインの私らを支えながら走る、華やかでない裏方に徹する若者たちのひたむきな思いに頭の下がる思いである。

二つ目のピークで頭から冷水をかけてもらい、いったん海岸線まで駆け下ったが、この先に心臓破りの山道があるはずだと、七年前の松島マラソンの復路で歩いてしまった悪夢が甦り、苦しかった思い出ランを皆に話すうち、中継所の手樽地域センターが突然目の前に現れた。ゴールは魔の激坂の手前にあった。救われた。

打ち合せ通り六人が手を繋いで手樽地域センターに走り込み、待ち受ける宮城一八区ランナーに無事にタスキを繋いだ。宮城一七区六・一キロは、猛暑の中かなりキツかったが、五〇分程で無事に楽しく走れた感動に浸りながら、互いに固い握手を交わし健闘を讃え合った。

我々を収容した移動バスは、ゴールの松島町役場に直行した。役場正面に走り終えたランナーや役場職員などが集合、宮城一八区ランナーのゴールを迎えて、盛大なゴールセレモニーが始まった。その中で司会者が今日のランナー八一名の最年長が七一歳の方ですと紹介した。え？　私が最高齢？　一緒に走った仲間が一斉に視線を私に向けて拍手を送ってくれた。

帰りの仙石線の松島海岸駅ホームで見知らぬランナーグループに「七一歳の方ですよね、お若いですね」と声を掛けられた。有名人になったものである。「昔から走っているんですか」「いや、還暦を過ぎてからなんですよ」「なぜ走り始めたんですか」「どこのマラソン大会がよかったですか」と質問攻めにあってしまった。

初のフルマラソンで制限時間をオーバーしたが、地元高校生が「負けないで」を歌いながら伴走してくれた館山若潮マラソンの涙のゴールを披露、もしあの時に収容車に乗っていたら今のマラソン人生はなかったかもしれないと一人熱弁を振るっていた。仙台駅で皆と別れて定禅寺通りのホテルにチェックインした。

翌朝、仙台市博物館で支倉常長がヨーロッパから持ち帰った慶長遣欧使節関係資料を観覧、そのあと石巻に戻り最大の犠牲者を出した荒野の如き被災地をレンタサイクルで回り、遣欧使節団のサン・ファン・バウティスタ号を見学、夕刻に石巻市内の教会で友人の薄田夫妻が東北を巡回演奏していた復興支援チャリティーコンサートに顔を出し、夫君のヴァイオリンと奥様のマリンバの素晴らしい援奏活動に感謝、最終の新幹線で帰京した。

掘ブログ「老いてなお青春」より抜粋

世界の国旗から学ぶ（第五回）

米村典紘

アフリカ大陸、五十四カ国の内、三十二カ国をご紹介致しましたが、二十二カ国が残った事になりました。

前回で私は、「アフリカを終わりにして、冬季五輪の強豪国に移ろうかな」と思っていましたが、読者から、「アフリカについては、全く無関心だったけれど、知らない事ばかりなので、もう少し書いてよ」と、有り難い話しがありました。

私も内心「これで終わるのは中途半端かな」とは思いましたので、アフリカ諸国の全部を、出筆することに致します。

一：アフリカの黒人でもそれぞれ

アフリカ人はブラックアフリカと呼ばれ支配的人種は確かに黒人ですが、世界の三大人種が昔から住んでいた事を、ご存じの方はかなりの知識人だと思います。

ネグロイド（黒人種）モンゴロイド（黄色人種）コーカソイド（白人種）と、その混血種がアフリカ大陸に住んでいます。アフリカに住む三大種族を参考にご紹介いたしましょう。

【参考（人種の特徴）】

①本来のニグロイドは肩幅が広く、顎が突き出して鼻が厚く、反り返っている事もあります。髪がチジレ、体毛はほとんどありません。又、白人の2倍近くの汗をかきます。西アフリカのセネガル川の河口からナイジェリアにかけて居住しています。

アフリカのバンツー族も、ニグロイドの一つですが、バンツー語系言語を話す民族としての区別です。スワヒリ語もその一つで、アフリカ黒人の中で最も多

い民族で、更に部族として数多くの部族に分かれています。

②ナイル黒人は、顔立ちが白人種のコーカソイドそのもの。スーダン南部から、東アフリカに居住。

③エチオピア系黒人で鼻筋は通り唇は厚いですが、ニグロの様には、唇の反り返りはなく、髪も顎の形もモンゴロイド系です。

④西アフリカのプール（別称フラニ）と呼ばれ、本来のニグロとは異なり、ベルベル人、インド人、シリア人に近く、セネガル・マリからナイジェリア・カメルーン北部に居住している。

日本に来ているアフリカ人にとって自分の国を知っている事だけでも、親近感を持って頂けるものです。

先日私は、家の近くで、二人の日本人学生と一人の外国人とすれ違いました。日本の女性が、下手な英語を話していたのが気になり、その女性がウクレレを持っていましたので

「ウクレレをやっているの」と私。

その女性が、ケースを開け、安物のウクレレを弾きだしました。すると、その外国人が

「彼女が一番上手くて、次はこの男性」と英語で私に説明しだしたのです。

自然に私の手は、安物のウクレレに伸び、音を合わせ、いつの間にか得意のウクレレを弾き始めていました。

この話のポイントはウクレレではないので割愛しますが、外国人はアフリカのチュニジア人でした。私がチュニジアのロケーション、国旗、悲しいテロ事件について話したところ、「日本に来て、初めて我が国の事を良く知っている日本人に会いましたよ」と、大喜びされました。日本人は某大学の学生で、チュニジア人はチェニスの大学講師で、政情不安から一時日本に来ているとの事でした。

二：アフリカの植民地時代

アフリカ諸国で、歴史的に植民地にならなかった国は、エチオピアだけ（一九三六年から一九四二年迄は、イタリアに占領されました）で、他の国家はヨーロッパなどの列強国の植民地になっていた、長い歴史があります。

支配国別では、フランス、イギリス、ポルトガル、が多く、スペインは、新大陸が主体でしたので、赤道ギニアと西サハラ（未だ、日本は国家として認めていない）。イタリアは、リビア、エストリア、ソマリアの一部。ドイツは、トーゴ、カメルーン、タンザニア、ナミビアを一時期、ベルギーは、コンゴ民主共和国、そして米国が政策的にリベリアを植民地としていました。

スポースクラブの女性から、「ドイツはアフリカに植民地がなかったのですか？」と、大変適格な質問を受けました。確かにドイツ程の強国が、大人しくしていた訳はどうなんでしょうか？

ドイツの植民地政策は、地域的要因もあり、大航海時代の列強国と比べると、遅れていましたが、彼等の間をぬって、サモア、カメルーン、トーゴ、南西アフリカ（現在のナミビア）、東アフリカ（現在のタンザニア、ブルンジ、ルアンダ）などを、ドイツ領としていました。

しかし、いずれもドイツの軍事力で圧制していた事から地域部族からの抵抗も強く、多くの死傷者がでていました。

更に第一次、第二次世界大戦での敗戦により失っていったのでした。

【参考：三大列強国の植民地】

○フランス支配　モロッコ：アルジェリア：セネガル：マリ：ギニア：コートジボアール：ニジェール：チャド：中央アフリカ：コンゴ：マダガスカル

○イギリス支配　エジプト：スーダン：ウガンダ：ケニア：ガンビア：ナイジェリア：ガーナ：シェラレオネ：マラウイ：ザンビア：ジンバブエ：ボツワナ：南アフリカ

○ポルトガル支配　アンゴラ：ギニアビザウ：モザンビーク：カーボベルデ：サントメプリンシペとなっています。

最近、かつて米国が、中南米を米国に裏庭にした様に、中国はアフリカを中国の裏庭にしようと桁違いの投資と、中国人を送り込んで来ています。現在、アフリカには中国人が百万人強住んでいますが、日本人は一万人弱しかいません。中国は百年の計を睨んで、戦略的投資を続けています。日本のＯＥＣＤも根本的に見直さなければいけないかもしれません。

今の世界情勢を語るには、「アフリカを知らなければ、世界を語るべからず」といわれている様に、アフリカは大変重要な位置づけになって来ています。

「アフリカの国々がどこにあるのか」「アフリカ大陸とアラビア半島の境がよく分からない」「エリトリアはアフリカの国？」確かにうろ覚えの所が多いと思います。

私がブラジルの田舎町に居たときの話しですが、高等学校の教師が、「日本は朝鮮半島の陸つづきにある」と云っていた事を思い出します。遠い国の事は分からないのが、当たり前なのかもしれません。

特に今回は、いろいろと関連づけてご紹介し、少しでも、記憶に留めて頂ければと思い、地理を頭に浮かべながら、お話を続けていきたいと思っています。

三：アフリカ諸国のロケーション

○地中海に面しているアフリカ諸国は、東から西に、エジプトアラブ共和国、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコとなります。

○アフリカ大陸東側の、紅海に面している国々は、北から南に、エジプト、スーダン、エリトリア、紅海の入口に位置し、最近、中国海軍基地が出来たジブチ、そして、ソマリア。

○インド洋に面している国は、ケニア、タンザニア、モザンビーク、南アフリカと南に下がっていきます。

○アフリカ西海岸の大西洋に面した諸国は、北から南に、モロッコ、（西サハラ）、モーリタニア、セネガル、ガンビア。

○ギニア湾に面した国々と更に南に下ると、ギニアビザウ、ギニア、シェラレオネ、リベリア、コートジボアール、ガーナ、トーゴ、ベナン、ナイジェリア、カメルーン、赤道ギニア、ガボン、コンゴ、コンゴ共和国、アンゴラ、ナミビア、南アフリカとなっています。

○アフリカ大陸の海を持たない内陸国は、東北から、チャド、ニジェール、マリ、ブルキナファソ、南スーダン、中央アフリカ。

○ヴィクトリア湖の周辺にウガンダ、その南側にルワンダ、そしてブルンジ。

○マラウイ湖を囲んでマラウイ、その西側にザンビア、その南にジンバブエ、ボツワナと内陸国が続きます。

○南アフリカ共和国の中にスワジランド王国とレソト王国があります。

○島国として、インド洋にマダガスカル、セイシェル、モーリシャス、コモロ連合が、大西洋にカーボベルデ、サントメプリンシペという島国があります。

そこで、アフリカの地図を見て頂くと、ご理解が一層深まると思います。

「どうでしょうか？地図をご覧になると、アフリカ諸国の国境は、直線で仕切られている国が多いと思いませんか」。

反面、一般に西アフリカと呼ばれる国々は、大西洋に面した限られた平野に、細かに区切られた国々があります。

このような国境は、ベルリン会議で条約を締結し、実状を考えず国境を決定していきました。

その為、アフリカ人の勢力分布に関わりのない国境となってしまったので、アフリカ大陸は、物理的にも争いの絶えない大陸となってしまったのです。

【ご参考】ひとくちばなし。

キリマンジャロの山頂は、エチオピアの山岳地帯にあると思っている人がいるそうですが、タンザニアに山頂があります。しかし、キリマンジャロの美しさは、ケニア側からの眺望が最高だと云われています。

ヴィクトリアの滝はジンバブエとザンビアの国境にあります。

また、アフリカ最古の独立国は、クシュ（現在のスーダン）王国とエジプト第一王朝だと云われています。

現在の私達の祖先もアフリカ「ヴィクトリア湖」の東側で発見され、猿の足より長く、アゴと歯が現代人に近く、更に大きな脳を持った「ホモサピエンスの誕生の地」と云われています。

ナイジェリアのラゴス市の近くには「マココ」と呼ばれる不思議な街があります。

川と海の入り江にある水上都市で、十万人近くの住民が住むコミュニティーを形成していますが、地図にも全く載らない空白地帯となっています。

【参考：アフリカのクーデター】

アフリカクーデター史を列挙してみましたが、１９５０年代から民族、宗教がらみの争いがアフリカ各地で起こりました。

１９６７年から２０１３年まで主なものだけでも次のクーデターが起きています。

○１９６７年トーゴ：シェラレオネ○１９６８年シェラレオネ：コンゴ共和国：マリ○１９６９年スーダン：リビア：ソマリア：ベナン○１９７１年ウガンダ○１９７２年ガーナ：ベナン○１９７３年ルワンダ○１９７４年エチオピア：ニジェール○１９７５年チャド○１９７６年ブルンジ○１９７８年モーリタニア○１９７９年赤道ギニア○１９８０年リベリア：ウガンダ○１９８１年ガーナ○１９８３年ナイジェリア○１９８４年ギニア○１９８６年レソト○１９８９年スーダン○２００９年マダガスカル○２０１０年ニジェール○２０１２年マリ○２０１３年南スーダン

二十一世紀に入ると減少したように見えますが、「２０１０年～１３年にかけて「アラブの春」と云われた抗議デモが各国で多発しました。２０１０年１２月に発生したチュニジアのジャスミン革命、エジプト、リビアの政権打倒革命、アルジェリア、モーリタニア、スーダン、ジブチ、モロッコ、西サハラ、ソマリアなどに広がっていったのでした。

だいぶ遠回りをいたしました。アフリカの概要はここまでとして、未紹介アフリカの国々の説明に入ります。アフリカの国旗図柄はまんじ１４４号の綴込みに掲載されていますので、ご参考として下さい。

四：アフリカ諸国未紹介の国々（尚、一人当たりのGDPは２０１３年の数値で国連データベースを使用していますが、多少の誤差がございます）

四の一：紅海からインド洋に面しているアフリカ諸国

1エジプト・アラブ共和国（1922年英国から独立：3，110ドル）

145分で少し紹介しましたが、クーデターと、国旗について追加致します。

長年続いた王政を、1952年、当時のナセル大佐のクーデターにより、ファルーク国王を追放し共和国を立ち上げました。1981年にはイスラム過激派によるサダト大統領の暗殺事件、アラブの春ではムバラク大統領が終身刑と問われるなど、政情は安定しません。（2017年に、ムバラクは無罪となり釈放）

歴史的には世界四大文明の発祥地の一つで紀元3千年には国家が形成されていたといわれています。

国旗は王政を打倒したアラブ解放旗に基づき、横柄三色旗（赤：白：黒）の中央に、紋章としてアラブ主義のシンボルとされる、金色のサラディンの鷲が頭を左向きに描かれています。（以前は、メッカを支配していた部族であるクライシュ族の鷹が、頭を右向きに描かれていました。）赤：白：黒の三色旗は「汎アラブ色」と云われています。

2スーダン共和国（1956年独立：1，438ドル）

国名は七世紀半ばエジプトに進出したアラブ人が「黒人の国」という意味で「ビラド・エス・スーダン」と呼んだ事に由来。

宗教は北部の殆どが、イスラム教、南部がキリスト教とアニミズム（万物に精霊が宿るという宗教）であった事も要因として、2011年南スーダン共和国が分離独立（一人当たりのGDPは2，401ドル：南スーダンは海を持たない国家なので、その欄で述べる。）

国土は、南スーダンの分離後も日本の約5倍（188万㎢）、アラビア語を公用語としてスラブ人の他200以上の部族が混在しています。

産業としては、金が採掘されますが、石油関連製品が主体なので、厳しい財政状態が続いています。

スーダン国旗は、エジプト国旗（横柄、赤：白：黒）に旗竿側から緑の三角旗を乗せただけの国旗で、エジプト国旗に類似させた事で、アラブの一員である事を表しています。

赤は社会主義革命で流された血、白は平和と希望、黒は独立運動に使用されたマフデーの黒い旗、そして緑はイスラム色として構成されています。

3エリトリア国（1993年エチオピアから独立：543ドル）

紅海に面し、面積118千㎢の小国。イタリア、イギリス領を経て30年近くエチオピアとの間で独立戦争を

展開、1993年に独立しました。宗教はコプト系キリスト教とイスラム教で二分しています。

独立当時からイサイアス大統領の独立国家となっています。

一説によれば、「北朝鮮より、自由がなく憲法も法律も無関係の人権侵害が、当たり前の国家」だそうです。輸出品は魚介類、皮革、サンゴなどで、大幅な輸入超過国です。

国旗は旗竿側から伸びた赤い三角旗が、国旗を三等分し、上部の三角部分を緑色で、下部の三角部分を青色で構成し、中央の赤い三角部分の中央に平和を願ったオリーブの月桂樹と、オリーブの苗木を黄色で描いています。

【ご参考：似たような名前】

エリトリアはアフリカですが、エストニアはどこにあるでしょうか？（バルト三国の一番北にある国家です。）又、南アフリカ共和国の首都プロテリア市も名前が似ています。ガンビア（アフリカ西部）とガイアナ（南米北部）。ギニア（アフリカ西部）とギアナ（南米北部のフランス領）も紛らわしいですね。

4ジブチ共和国（1977年フランスから独立：1，668ドル）

国名はジブチ港に由来したものです。アフリカ紅海の入り口に位置する国家で、独立前はフランス領ソマリランドと呼ばれていました。

ソマリ系イッサ族とエチオピア系アファル族が住んでいる事を考慮して、国旗はソマリアの国旗のブルーとアルファ族がイスラム教徒であるところから、緑色を使い、アフリカ諸国で多く使われている白い三角旗の中に革命で流された血の色で、赤い星をデザインした国旗となっています。

この国旗も、民族の融和を目的とし、青は海と空、緑は大地、旗竿側の白い三角は平等と二つの民族の共存を意味しているそうです。

ジブチは世界に名だたる灼熱地帯で、気候風土も恵まれず、鉱物資源もありませんが、最大の利点は、紅海の玄関口にあたる為、中継貿易基地として存在価値があります。

最近では、中国が海軍基地を設置したことでニュースとなりました。

（ソマリア144号・ケニア142号紹介済み）

5タンザニア連合共和国（1961年英国から独立：933ドル）

タンザニアは、北からヴィクトリア湖、タンガニーカ湖、マラウイ湖の三つの大きな湖があります。国名はそ

の中の一つタンガニーカ湖に出来して付けられました。首都は内陸のドトマでしたが、海に面し、以前より官庁が多くあった、ダルエスサラームに名実共に移りました。

アフリカ最高峰（5，895㎞）のキリマンジャロ山を擁しインド洋のザンジバル島迄の高低差が最も大きい国家です。

外貨は、サファリツアーなどの観光収入や、金、銅、貴金属類が主な輸出品となっています。

1961年にイギリスから独立したバンツー系民族の国家ですが、ザンジバル島にはアラブ、インド、ヨーロッパ系も住み、多民族国家となっています。

国旗は、大陸国のタンガニーカ（緑：黄色で縁取りした黒：緑の横四色旗）と島国であるザンジバル（青：黒：緑の横三色旗）両国の組み合わせた色で作成されました。

緑はタンザニアの国土と農業、黒はタンザニアの民衆、青はインド洋の海の色、黒の帯の両端を囲む黄色は豊かな鉱物資源を表しています。

6モザンビーク共和国（1975年ポルトガルから独立：605ドル）

国名はインド洋のモザンビーク海峡に由来。ポルトガルからの独立に十一年間を費やし、更に1977年から1992年迄内戦が続き、本来であれば最貧国の一つであるはずがない国家なのです。

肥沃な土地と森林資源にも恵まれた農業国であり、綿花、砂糖、カシューナッツなどを輸出しています。漁業はエビなどを日本に輸出。鉱業は、世界でも最大規模の埋蔵量があると言われる天然ガスや、石炭のプラント建設も進んでいます。又、トルマリン、ルビーの宝石も算出される資源豊かな国家。

近年は、天然ガスのプラントも建設中で目覚ましい経済成長が見込まれています。

国旗には社会主義の象徴として、鎌、鍬、書物が描かれていますが、社会主義からの転換した後も未だに替わっていません。

緑：白い線で縁取りされた黒：黄色の横柄四色旗に旗竿から赤の三角旗が付き、その中央に大きく黄色の五稜星が描かれ、更にその中央に、開かれた書物を真ん中に、銃と鍬が交差した国旗となっています。緑は国土と農業、黒は国民とアフリカ大陸、黄色は豊かな鉱物資源、白は平和を表し、五稜星と銃、鍬、書物は社会主義時代の連帯、兵士、農民、知識階級を象徴したものです。

国語はポルトガル語なので、ポルトガル諸国共同体（ポルトガル、ブラジル、カーボ・ヴェルデ、アンゴラ）の一員ですが、近隣国が英語圏であり、イギリス連邦にも加盟しています。

四の二：大西洋に面したアフリカ諸国の未紹介国

（モロッコ145号紹介済み）

1モーリタニア・イスラム共和国（1960年フランスから独立：1，418ドル）

国名は古代ローマ人がこの地域に住む白人系ベルベル人をモール人（英語でムーア人）と呼んだ事に由来します。又、国名にイスラム共和国と入っているのは、モーリタニアを含め、世界には四カ国あり、パキスタン：アフガニスタン：イランがイスラム共和国と名乗っています。

国旗もイスラムの緑一色に中央に黄色でイスラム新月を横に寝かし、その上に星を描いたシンメトリーの分かりやすい国旗です。

アフリカに於ける、シンプルな、色旗の国旗は、モーリタニアとソマリア、モロッコ、チュニジア、ナイジェリアの五カ国があります。

国家財源である輸出は、鉱物と水産物が中心となっています。

モーリタニアはタコの漁業が有名で、日本に大量のタコを輸出、タコ焼きを食べた時は、モーリタニアを思い出して下さい。

鉄鉱石も外貨獲得の大きな役割をなしていますが、最近では、天然ガスと石油に力を注いでいます。

2セネガル共和国（1960年フランスから独立：1，072ドル）

セネガルは1960年6月に、フランス領スーダンと共にマリ連邦として独立しましたが、旧スーダンの経済政策と対立して連邦制を解体、1960年8月に、セネガル共和国として再度独立宣言を致しました。

国名は、ベルベル系のセナガ族に由来するとか、セネガバという町名に由来するとか言われています。

町名と云えば、世界一過酷なラリーと云われるダカールラリーは、セネガルの首都のダカールが、最終到着ポイントであった事からダカールラリーとされています。

国旗は、マリ共和国の国旗と類似し、マリ国旗の真ん中の黄色の部分に緑の五稜星を描いた国旗です。

五稜星はセネガル進歩同盟の党章を入れ、団結と希望を表しているそうです。

セネガル経済は、落花生、栗、綿花などの農産物や、マグロ、エビ、タコの漁業に依存していますが、金、チタン、リン鉱石などの輸出品目も期待されています。

【参考】

アフリカ諸国の国旗は、確かに、汎アフリカ色の国旗が多いのですが、アフリカ西側に位置する、カメルーン：セネガル：マリ国旗は縦柄三色の、組合わせと、五稜星のあるなしの違いだけなので、単純なだけに、間違いや

す い国旗となっています。
アフリカ西側の国旗の元が、ガーナの国旗を真似した意匠となっている為、紛らわしい国旗となりました。
（ガンビア１４４号・ギニアビザウ・ギニア１４５号紹介済み）

3シェラレオネ共和国（1961年英国から独立：809ドル）

シェラ・レオネの国名の由来はポルトガル語で、シェラが山で、レオンがライオン、即ちライオンの山という名前が国名となっています。
国旗に国章は入っていませんが、国章には三頭のライオンが描かれています。
国旗はむしろアフリカらしさはなく、横柄緑：白：ブルーの三色旗で、緑は農業と豊かな丘陵地帯を、白は正義と統一、ブルーは大西洋と首都フリータウン港の繁栄を期待したものとなっています。
フリータウンからは、ダイヤモンド、ボーキサイト、コーヒー、カカオ、ショウガなどが輸出されています。
独立後の内戦で経済は疲弊しています。
（リベリア１４４号・コートジボアール１４３号・ガーナ１４５号紹介済み）

4トーゴ共和国（1960年フランスから独立：610ドル）

国名は、ドイツが沿岸の村の名前をとって、トーゴランドと命名したことに由来。宗教は伝統的なアニミズムが５０％、キリスト教３５％、イスラム１５％の割合です。
かつては、ドイツ領でしたが、第一次世界大戦の結果、東半分がフランス領、西半分がイギリス領に二分されました。その後、西の部分はガーナゴールドコースト（後のガーナ）と併合されたのです。
国旗は汎アフリカ色でデザインはリベリア国旗に類似したやや太めの緑と黄色の五本のボーダー。それに、カントン部分を赤色として、白抜きの五稜星を配置しています。
ボーダーの緑は希望と大地を、黄色は勤勉と鉱物資源を、そして五本の縞は国内の五つの地方を意味しています。カントン部分の赤は解放闘争で流された血の色、白い五稜星は最も重要な自由と純潔と永遠を表しているそうです。
主要産業は、綿花、コーヒー、カカオなどの農産物とリン鉱石。
日本はフランスに次ぐ主要援助国となっています。

5ベナン共和国（1960年フランスから独立：805ドル）

旧国王にちなんで、ダオメ共和国の名前で独立、１９７５年には社会主義体制をとり、国名もベナン人民共和国に変更しましたが、１９９０年に開放経済に移行し、現在のベナン共和国となりました。
ベナンという国名は、ギアナ湾の一部をなすベニン湾に由来したものです。
国旗についても、社会主義体制時は緑一色に旗竿側上部に赤い五稜星の国旗に変更しましたが、現在は独立当初の横柄三色旗（黄色：赤の二色と旗竿側、緑）に戻りました。
ギニア湾に臨む南北に細長い国家で、国旗の緑は南部の豊かな森林と再生を、黄色は北部のサバンナと富、赤は愛国者の血と先祖の勇気を意味しているそうです。
産業は、相変わらず自給自足の農業にコーヒー、綿花、落花生が主なもので、ギニア湾に面していますが、油脈に恵まれず、最貧国の一つとなっています。

6ナイジェリア連邦共和国（1960年英国から独立：4,050ドル）

国名はニジェール川に由来。アフリカ諸国の中で一億九千万人の人口を擁するアフリカ最大の国。
アフリカ中西部のリーダー的大国ですが、民族対立が盛んで、政情は安定していません。
ハウサ、ヨルバ、イボ族など２５０の民族から構成されている多民族国家。
公用語は英語ですが、識字率は１９０位と他のアフリカ諸国並みに低くなっています。
宗教は、北部がイスラム、キリスト教が南部中心となっています。（全域にアニミズムが散らばっている）
十一世紀頃から、カネム、ボルノ、オヨ王国などがおさめていた土国でしたが、１９００年に英国の保護領となり、１９６０年英国から独立。
軍事クーデターと内戦を繰り返し、現在は、大統領制をひく、連邦共和制の政治体制となりました。
輸出額の八割が、原油、天然ガスに依存している為、国際相場によって大きく経済が左右されています。ＧＤＰはアフリカ諸国最大ですが、人口も最大なので貧富の差は激しく、先進国の援助が不可欠となっています。
主要援助国は西側先進国の米国、英国、フランス、ドイツ、そして日本の五カ国が上位を占めている状態です。
国旗は公募により決定した国旗で、縦柄三等分旗で、グリーン：白：グリーンのシンプルな国旗となっています。緑は豊かな森林資源と農地、白は平和と統一を象徴したものです。

7カメルーン共和国（1960年フランスから独立：1,329ドル）

国名の由来は、ポルトガルの船長が、入り江にエビが多い事から、ポルトガル語でエビを意味する「カマロン」と命名した、と云われています。

１９６０年に、フランス領カメルーンが独立し、翌年に英領カメルーンの南部が南カメルーンとして独立しましたが、国家統合して、カメルーン連邦共和国となり、１９７２年に連邦制を廃止してカメルーン共和国となりました。２４０近くの民族が存在する多民族国家です。

国旗は、フランスの三色旗をまねて、縦柄（緑：赤：黄色）の汎アフリカ三色旗の中央に五稜星を黄色で描いたものです。連合共和国時代の国旗は、緑色の上部に小さな五稜星二つを黄色で配置していましたが、現在は、二つの星を大きな一つの星にして中央に配置した国旗となっています。

経済は、天然資源と肥沃な大地にも恵まれているにもかかわらず、貧困問題の解決につながっていません。

カメルーンと云えば、日本でサッカーの世界選手権が行われた際、大分県の小さな村（中津江村）が練習合宿地を提供した事で話題となりました。

（赤道ギニア１４５号・ガボン１４５号紹介済み）

８コンゴ共和国（１９６０年８月フランスから独立：１，７１０ドル）

コンゴという国名の由来は１５世紀に栄えた「コンゴ王国」に由来すると云われています。

歴史が古い事もありますが、伝統的に勤勉な国民性から、文盲率は１０％程度と低く、アフリカではトップクラスと成っています。

１９６０年にフランスから独立し、多くのアフリカ諸国が社会主義に走った様に、コンゴも、１９７０年に社会主義となり、コンゴ人民共和国と国名を変えました。国旗も、社会主義の赤をベースに、ハンマーと鍬をクロスした国旗にしましたが、１９９１年に社会主義からの撤退により、１９５８年の自治領時代から使用していた、以前の国旗に戻りました。

国旗は汎アフリカ三色旗で黄色の帯が、旗竿下側から斜め上部迄描かれ、長方形を二分割し、旗竿側上部の逆三角形を緑で、外側下部の三角形を赤色にした三色旗となっています。

いわゆる「ななめ模様」の国旗なので、汎アフリカ色を使用していても、コンゴ共和国の国旗と、分かりやすく成っています。

緑は平和と豊かな森林、黄色は天然資源と希望、赤は独立と人間の尊厳を表しています。

経済は石油が基幹産業でＧＤＰの四割を占めています。

治安は未だ武装勢力が問題を起こしているため、治安には注意が必要です。

（コンゴ民主共和国（旧ザイール）１４４号・アンゴラ１４５号・ナミビア１４５号・南アフリカ１４２・１４５号紹介済み）

四の三：海に面さない内陸国で未紹介国

１チャド共和国（１９６０年フランスから独立：８１６ドル）

国名はチャド湖に由来しますが、チャドとは「豊かな」という意味を持っています。

実状は、国名とは異なり、国も国民も豊かではありません。

チャドはアフリカの内陸国で北部はサハラ砂漠の一部であるティベスティ高原（３４１５ｍのエミクシ山を持つ）、南部はサバンナが広がり、西側にはアフリカ中央にある、最大の湖チャド湖があります。そのチャド湖は、水が年々減り、面積が縮小し、今や塩湖となってしまっています。

北部のイスラム系と南部のスーダン系との対立が国の統一を妨げていましたが、１９９０年のクーデターでイトウノ大統領が就任してからは以前ほどの対立はなくなりました。

産業は、南部の石油資源が７０％と畜産物、綿花などですが、依然として開発は遅れています。

国旗は、フランスとの結びつきから三色旗とし、旗竿側から青（空とチャド湖）、黄色（太陽と砂漠）、赤（国民の決意）の三色旗としたのですが、ヨーロッパのルーマニア国旗とそっくりなのです。違いがあると云えば、ルーマニアの青が、やや薄いブルーに見えると云った違いだけです。

チャドは１９５９年制定なので、ルーマニアの現在の国旗が１９８９年に制定したものなので、チャド側に分があるように思われます。しかし、ルーマニアは、１８６６年から１９４７年迄現在の国旗を使用していた事、社会主義になった一時期に国章を入れ、１９８９年に社会主義体制をやめた為に元に戻したので、問題は複雑です。

チャドとしては、国旗問題より、２００近くの部族と１２０近くの現地語があり、安定的統一するのに大きな課題の方が、悩みの種となっています。

２マリ共和国（１９６０年フランスから独立：７１５ドル）

この地域で、１１世紀から１３世紀に栄えたマリ王国に由来。マリとはバンバラ語で動物の「カバ」を意味します。

国旗も隣国のチャド同様、フランスとの結びつきから、縦柄の三色旗となっています。

もちろん旗色は、汎アフリカ色の緑（農産物）、黄色（太陽と鉱物資源）、赤（勇気と国民の血）の汎アフリカ三色旗です。赤と緑を入れ替えるとギニアの国旗になってしまいます。

日本の約3倍強の広さを持ちますが、北部は砂漠気候で、中部はステップ気候、そして南部は雨季と乾季を持つサバンナ気候です。

産業は、ニジェール川流域の農業と金の輸出が中心となっています。リン鉱石やウランなども産出しています。

以前はセネガルと連合国であったので、輸出入はダカール経由でしたが、現在はコートジボアールとの結びつきが強く輸出入の70％をアブジャン経由に替わりました。

北部は未だ、イスラム過激派との小競り合いが続いています。

3ブルキナファソ（1960年フランスから独立：741ドル）

ブルキナファソとはモシ語で高潔な人の意味で、ファソとはデイウラ語で祖国を意味しているので「高潔な人の国」と云う意味です。

公用語はフランス語ですが、モシ語、デイウラ語、グルマンチェ語が使われています。

11世紀から13世紀まではモシ王国でしたが、独立後5回の軍事クーデターを、繰り返し1984年に、国名をオートボルタから、ブルキナファソに改称しました。

また、共和制をとっていますが、国名には「リパブリック」を使用していません。

国旗も国名改称と同時に変えました。当初は、ドイツ帝国の船舶旗の横柄、黒、白、赤の三色旗でしたが、汎アフリカ色の横柄、赤と緑の中央に黄色で五稜星を描いた国旗となっています。赤と五稜星は社会主義と革命のシンボル、黄色は天然資源、緑は希望と豊かな未来を表しています。ボルタ川の流域で昔ながらの農業と遊牧を主としていますが、経済改革が政治の安定と共にうまく進み、比較的良好な成長を維持してきています。

ヴィクトリア湖、マラウイ湖の周辺国

4ウガンダ共和国（1962年英国から独立：704ドル）

国名は、独立時まで存続していたブガンダ王国に由来しています。

ウガンダ国旗は、ドイツの国旗（黒：赤：黄色）を二つ並べて、黄色と赤を入れ替え、ウガンダの国鳥「ホオジロカンムリヅル」を中央に描いた、ユニークな国旗と

して目を引きます。

黒は国民、黄色は太陽、赤はアフリカ人民の同胞愛を表しています。カンムリヅルについては、ウガンダの歴史を通して、一度も国旗に使用されなかったという「中立性」を重んじて採用した事になっています。（民用旗では、この国鳥は省かれることになっています。）

国土はヴィクトリア湖を含め24㎢で日本の本州と同じ程度の広さです。宗教はキリスト教60％、アニミズム30％。言語は英語、スワヒリ語、ルガンダ語が使われています。

独立以来、クーデター、内乱、近隣国からの難民など混乱が続いていましたが、米国の支援を背景に北部の治安も回復中です。しかしながら回復中と云っても、この国の貧困度は終わりが見えません。

5ルワンダ共和国（1962年ベルギーから独立：732ドル）

ルワンダで1994年4月6日から、僅か三ヶ月間で80万人の大虐殺が起きた事は、記憶に新しい事件でした。

そもそも、人口構成がフツ族85％：ツチ族15％の国で、政治権力は、ツチ族が持っていました。

つまり、独立を勝ち取ったルワンダ愛国戦線はツチ族で構成されていたからです。当然、大統領（ハビャリマナ）は、ツチ族の出身でしたが、その専用機がロシア製のミサイルで撃ち落とされた事が引き金となりました。この事件を契機に、フツ族の不満が爆発し、80万人近くが殺戮されたのでした。

輸出品は、コーヒーや茶などの農産物と希少金属が主体。

独立当時の国旗は縦柄で、赤：黄：緑の三色旗に中央の黄色部分に黒でルワンダのRの文字がありましたが、2001年に国民融和を目的として横柄三色で、青（50％幸福と平和）黄色（25％経済と国力）緑（25％未来の繁栄）そして右上に金色で太陽（団結と透明性）を描いた国旗に変わりました。

6ザンビア共和国（1964年英国から独立：1,540ドル）

以前、英領北ローデシアと呼ばれていましたが、国名はザンベジ川に由来します。政治はアフリカ諸国の中では、珍しく安定した国家となっています。日本の約二倍の国土（752㎢）と世界三大瀑布の一つヴィクトリアの滝があり、観光収入が大きな財源となっています。

主要産業は、銅、コバルトなどの鉱業、トウモロコシ、砂糖、タバコなどの農業と観光産業ですが、世界第五位の銅の輸出国として存在感を高めています。

国旗は、緑の旗の中に、もう一つの旗模様を右端に、

縦に配し、更にその上部に飛翔する国鳥の鷲を描いた、珍しい国旗となっています。

地色の緑は熱帯林と農産物を、縦にした三色の赤は、愛国者が流した血、黒はザンビア国民、オレンジは銅を中心とした鉱物資源を表しています。また、サンショウウミワシは自由への憧れと困難を乗り越えるパワーを象徴したものです。

7ジンバブエ共和国（1980年英国から独立：953ドル）

ザンビアが英領北ローデシアとよばれていましたが、ジンバブエは英領南ローデシアとよばれていました。

1965年ローデシア共和国の名で白人政権が勝手に発足しましたが、国際的には認められず、アフリカ先住民の反発と武力闘争を経て、1980年にジンバブエ共和国として独立しました。

国名は11世紀から15世紀にこの地を治めていたジンバブエ王国の名に由来しています。ジンバブエとはショナ語で「石の館」を意味しています。

公用語は英語、ショナ語、ンデベレ語で、ショナ族とンデベレ族の国家です。

産業は、農業（たばこ、綿花）、鉱業（プラチナ、クロム、金）と観光資源となっています。大統領選挙に於ける不正や、政治の横暴で、ヨーロッパ諸国との関係悪化を招き、慢性的貿易赤字と巨額の対外債務で、経済は疲弊しています。

国旗は独立と同時に制定されました、横柄七本のボーダーで真ん中の黒（アフリカ先住民の伝統と民族を表す）を中心に、シンメトリーで赤（独立で流された血）、黄色（天然資源）、緑（農業）の汎アフリカ色が使われています。更に旗竿側から白い三角旗の中に、ジンバブエの歴史の象徴であるソープストーン彫刻の大ジンバブエ鳥が描かれ、背景には自由と平和を勝ちとった赤い五稜星が配置されている複雑な国旗です。

四の四：アフリカの島国

アフリカ大陸、周辺の島国が、東側に、マダガスカル、セーシェル、モーリシャス、コモロ連合の四カ国があります。

西側には、ギニア湾に浮かぶサントメプリンシペと大西洋のカーボベルデの二カ国があります。

（マダガスカル144号・セーシェル、モーリシャス145号で紹介済み）

1コモロ連合（1975年フランス保護領から独立：846ドル）

マダガスカル島と、モザンビークの間の、インド洋に浮かぶ島国。

グランドコモロ島（ンジャジジャ島）、アンジュアン島（ムズワニ島）、モヘリ島（ムワリ島）の三島とマヨット島の四島から構成されています。

言語はフランス語、アラビア語が公用語とされ、スワヒリ語の方言に近いコモロ語が一般語。

独立後、直ぐにクーデーターが起きたり、政情不安定の状況の中で、国旗が既に五回も変わっています。

現在は、政治の安定をはかる為、三つの島による、持ち回り大統領制を導入し、安定をはかっています。

産業は、バニラなどの香辛料ぐらいで、最貧国の一つ。シーラカンスの生息地として有名。

国旗は三つの島の旗に使用されていた、ブルー（コモロ島）、赤（アンジュアン島）、黄色（モヘリ島）とマヨット島の白の四色を、上から横柄に、黄色、白、赤、ブルーの四色旗とし、旗竿側から緑の三角旗と三日月と四島を意味する四つの星を白抜きで描き、イスラムを表しています。

2サントメプリンシペ民主共和国（1975年ポルトガルから独立：1,770ドル）

ギニア湾東部に浮かぶ、サントメ島と、プリンシペ島を中心とした、四つの島から構成されます。

国名の由来は主要二島の名前ですが、島の命名者は、この島を発見した船長の名前だそうです。いずれも、ポルトガル語でサンはセント（聖）の意味、トメとは英語のトーマスの意味です。プリンシペは英語のプリンスの事です。

人種は、バンツー系とポルトガル人との混血。言語はポルトガル語で、宗教もキリスト教。

産業はカカオ、コブラなどの農産物と水産物ですが、輸出の大半がカカオに頼っています。ギニア湾の排他的経済水域内の石油発掘については、深海部である事で、発掘は難航しています。

国旗は、解放運動時の党旗を、そのまま使用し、配色も、赤、黄色、緑、黒の汎アフリカ色を使用、横柄は中央の黄色の上下に緑を、旗竿から赤い三角旗を配置し、黄色の中央横縞の中に、主要二島を表す黒い五稜星を描いています。色彩の意味は、赤が愛国者の流した血、黄色は肥沃な国土、緑はカカオ栽培を含む豊かな植物、黒はガーナ同様アフリカの一員である事を表明しています。

3カーボベルデ共和国（1975年ポルトガルから独立：3,731ドル）

国名は、サントメプリンシペ同様、ポルトガルの船長が、「緑の岬」と命名したことに由来。カーボは英語のケープでベルデは緑という意味です。

独立当初の国名はギニア・カーボベルデでした。国旗

もギニアビザウとの将来の統合を考慮して、同様に汎アフリカ色でしたが、両国の関係が悪化した事により、1992年に新しい国旗を制定しました。

新しい国旗は汎アフリカ色は使用せず、旧宗主のポルトガル王国時代の国旗を参考とし、斬新な国旗となりました。

旗地の上部はブルーで、下半分を白とブルーに二分し、白の真ん中に赤いボーダーを引き、更に白と赤のボーダーを囲むようにやや左寄りに、十個の黄色い五稜星が円を描いた国旗となりました。

ブルーは大西洋と空を、白は平和、赤は独立で流した血、十個の黄色の星と円は国土を構成する島と統一を表した国旗となりました。

産業としては、アフリカ諸国とは異なり、商業、運輸業、公共サービス業の比重が70%と高い。又マグロやロブスターの加工など加工産業も順調で、最近の国民一人当たりのGDPも6千ドル近くに跳ね上がってきています。

しかしながら、最貧国から脱却したものの、貧富格差の問題は残っています。

四の五：地中海に面した未紹介国

（エジプトは本号・リビア145号・アルジェリア145号・モロッコ145号で紹介済み）

1チュニジア共和国（1956年フランスから独立：4，263ドル）

1956年、フランス保護領より独立しました。

アフリカ北部の地中海に臨む国家ですから、ヨーロッパの影響を強く受け、観光リゾート開発、工場誘致などが進んでいます。

国旗は、オスマントルコ支配の18世紀頃から、今の国旗に類似した国旗を使用していました。

赤地の旗地に、丸く白抜きし、白抜きの中に赤い新月と五稜星を描きました。

デザインは現在のトルコ国旗に類似していますが、1999年に赤い三日月の先端部分を少し長くし、更にスマートな国旗になっています。

イスラム教の国家の中では、観光収入が大きな柱となっている関係上、比較的穏やかなイスラム戒律を導入していますが、近年のアルカイダ、イスラム国の影響もあり、観光収入は激減しています。

以上でアフリカ五十四カ国の出筆は終了致します。

つづく。

【参考文献】

現代アフリカの悲劇　片山正人　叢文社

アフリカ大陸史を読み直す　木村愛三　社会評論社

古代アフリカ王国　マーガレット・シニー　理論社

アフリカ比較研究　平野克己　アジア経済研究所

アフリカを知る為の十章　那須国男　第三書館

アフリカをしる為の基礎知識　ジョン・ムウエテ・ルアカ　山田経三　明石書房

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

内田の国の間（かん）物語

横山正義

中日新聞五月二十日『この地に名あり』により月岡の地名が紹介されました。三日月のような小さな集落で、江戸時代五十五万石でした。初代静岡県知事、関口隆吉（一八三六～八九）のゆかりの地として知られています。月岡の由来は定かではない。当地から西に田が二キロほど広がり穀倉地帯で、山際に政所という集落があり、そこに王の内という小字があります。そこから九月の中秋の頃、東をみると、すばらしい月が出る。月が昇って来る丘を、月の出る丘、「月岡」と呼んだのではとの伝承があります。

関口隆吉は一八七〇から一年この地で暮らしたのみであるが、妻の綾は留守を守り、この地で亡くなった。地元の古老によれば

「奥様の人柄はすばらしかったと聞く。月岡に住む人たちは言葉使いが丁寧だ、と他所の人に言われました。それは茶道家に生まれた、奥様に感化されたのでは。それだけ地域と交流があったのです。」関口隆吉顕彰会の会長は菊川駅の開設に貢献した関口隆吉初代静岡知事の銅像を、ＪＲ菊川駅の前に作りたいと抱負をコメントしています。以上中日新聞抜粋。

菊川市内田の月岡に「かんまえの坪」という地名があります。江戸時代は遠州城東（飼）郡月岡村といいました。江戸時代、旗本井上忠摩守の屋敷、明治時代に入ると、初代静岡県関口隆吉に引き継がれた屋敷跡があります。屋敷のまわりに、広い馬場があったとも言われ二町歩（二百メートル四方、）四ヘクタールありました。現在は茶畑になっています。屋敷の後部は小高い岡になり、四方、田に囲まれ小高い見晴らしの良い場所で、東に牧の原越しに富士山、西に百メートルから百二十メートルの高さの小笠山の連山が五キロほど連なり、北に南アルプスの端の山、淡ケ嶽、南に遠州灘に注ぐ菊川が見渡せます。現在、岡の上は小さなお宮、八穂神社となっています。

次は私の仮説です。月岡の旧関口邸は丘の上ですが、隣接した低地、西側の田を「かんまえの坪」といいます。旧関口邸跡地は「かん」という地名かと、考えられます。「かん」とはなにを意味するのであろうか。

門がまえ、肉月の「かん」ではないだろうか。中世の世には門があり、神に牧の牛馬、あるいは狩をした猪鹿などの肉を自然の神に豊饒を感謝するとともに動物の慰霊を祈願し、奉納した場所ではないだろうか。

現在の八穂神社のあるところです。そして門がまえに月は後の世に門がまえが略され、月岡という地名、村の名前になったのはという仮説です。

月岡の隣接地に牛殺しという地名があり、堀川録朗先生によれば、牛の首をとり、神に奉納し、雨乞いの行事がとり行われた場所だという説があります。

鎌倉時代のはじめ、「承久の乱」に内田武士は六十余騎で参戦したと、承久記に記載されています。大きな牧がこの地にあったことが考えられます。

牧に必要な水は横を菊川が流れているので、豊富にあります。

八穂神社の鳥居、拝殿、神殿のうしろに約十キロ離れて、後方に淡ケ嶽があり、ご神体は淡ケ嶽（５３２メートル）と考えられます。

淡ケ嶽は無間山ともいい、門がまえに月、やはりマタギが神に豊饒を祈念して肉を奉納した場所ではなかったか。

『岡の屋歌集』当地栗田士満（元文二年〈一七三七〉～文化八年〈一八一一〉）五六、二月ばかり、阿波々神社（淡ケ嶽の山頂にある神社）に登りて詠める。

長歌

（阿波々山（淡ケ嶽山頂の地名）といふは、小夜の中山の西北の方にありていと高き山なり、巓に堂あり、阿波々嶽観音といふ、そこにちいさき社あり、今あらぬ名によべど、これやいにしへの阿波々神社ならむといふなり）

なぜ阿波々神社というか。それは前方が牧の原台地で海まで、三十キロほど離れているが、海からよく見え、船で航行する人にとって、波の間（あいだ）に見えるので、灯台の役割をしていたのです。祀られていたのは阿波々此女命で、三嶋大社の主神大山津見命の后で、富士山の女神この花咲くや姫、かぐや姫の母親です。

観音堂は小笠郡誌によれば、真言宗であったというから、マタギは高野派であろう。淡ケ嶽頂上は神と人の世との境。無間山、無間井戸があり天国と地獄の境。死者の霊が高いところにいくか地獄にいくかの境でもあるのです。

観音、社は悪霊や妖怪を鎮めているのです。

井原西鶴（寛永十年〈一六四二〉～元禄六年〈一六九三〉）の日本永代蔵の紙問屋の倒産によれば、淡ケ嶽観音堂に鐘があったが、当時は山頂に鐘を埋めてしまってあったので、埋めた所を参拝すれば、当代は富貴、来期は地獄という伝承がありました。来期はどうなっても良いからと参拝したところ、家業は多いに隆盛となったが、つぎの世に紙問屋は倒産してしまったというお話があります。富貴と地獄の境なのです。

栗田土満の弟子、石川依平（寛政三年〈一七九一〉～安政六年〈一八五九〉）の長歌、「柳園詠草」下巻　校註国家体系
第十七巻「近代諸家集三」

幕秋登阿波々山作歌　石川依平

（御食向ふ　阿波々の山は　朝に日に　見れども飽かず　鏡なす　見がほし山　其の山を　打ち超えむと　思ふどち　手携はりて　雁金の　渡らふ秋の　尾花散る野辺行き過ぎて　背面より　登りてみれば　本辺には黄葉にほひ　激ち行く　石瀬も清し　末辺には　樹群しみさび　木ぬれ吹く　秋風寒し　影面の　石根に立ちて天の原　振りさけ見れば　富士の嶺は　雪降り積みて白雲の　上に抜き出て　しるはの海　沖行く舟も　かぎろいのほのに見えつつ　あやにあやに　うらぐはし山ぞ阿波々の山は

反歌

群山を　麓になして　とりよろふ　阿波々高嶺は　神さびにけり）

同じく歌人石川依平翁は頂上に大きな岩石があると長歌に歌っています。岩が神の拠り代であったのでしょう。マタギがここで神に肉を奉じられたのではないだろうか、仮説です。動物にとって生と死の境であります。

『参考文献』

郷土史　内田のさと
静岡県小笠郡菊川市内田　郷土史編纂委員会
（昭和五十年九月十五日発行）

栗田土満の長歌鑑賞
浜松史蹟調査顕彰会　専門委員　後藤悦良

初代静岡県知事　関口隆吉
三戸岡道夫　堀内永人　静岡新聞

日本永代蔵（紙問屋の倒産）　庵原西鶴

小笠郡誌（昭和四十八年発行）
静岡県小笠郡役所　中村安孝　㈱名著出版

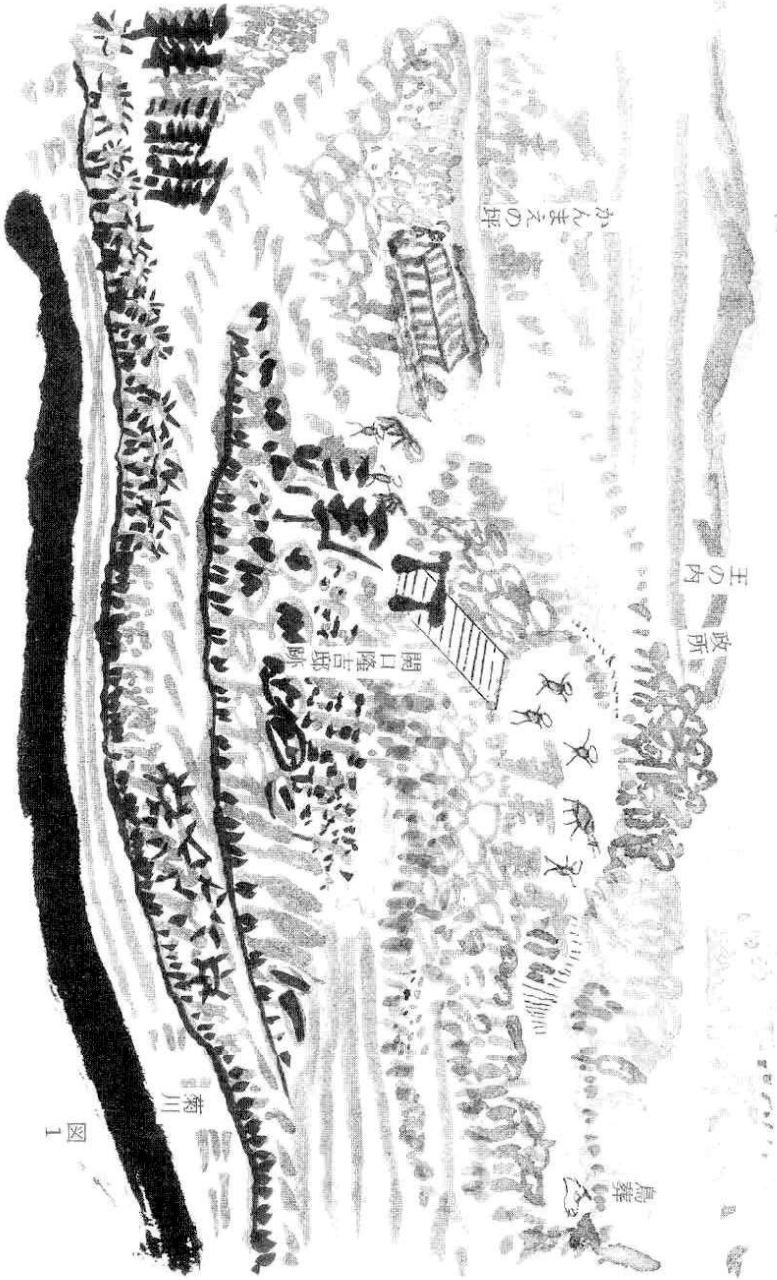


図1



図2

人たらしの文章

―司馬文体の魅力（3）―

山田喜久

八　詩人司馬遼太郎

数年前、東大阪にある司馬遼太郎記念館を訪れた際、即売されている絵葉書を求めたら、意外にも司馬の詠んだ短歌が記されていた。

阿蘭陀の／船出の町の／時計師は
よもなる／海に時を／送りぬ

司馬の知られざる一面を知ることができた。

また、毎年、司馬の命日（2月12日）の前後に開かれる「菜の花忌」に参加のため、よく下車した」R大阪城公園駅には司馬直筆の長詩（陶板レリーフ）が飾られているのを見つけた。

「おごそかなことに、地もまたうごく。
わたしどもは、思うことができる。この駅にたてば、台地のかなたに渚があったことを。遠い光のなかで波がちよせ、漁人が網を打ち、浜の女らが藻塩を焼いたことども。秋の夜、森の上の星だけが遥かな光年のなかで思いだしている。」

司馬と詩歌とは一見、関係なさそうだが、司馬作品をよく観察してみると、意外に詩歌の引用が多いのに気づく。

これを指摘した評論家新海均は「司馬遼太郎は詩人になりたかったのかもしれない」とまで極言している。

真偽はともかく、司馬の詩歌句への深い造詣が、作品に厚みを加えているのは確かである。

作品だけでなく、詩人との対談も多い。

例えば、学生時代の同級生の詩人赤尾兜子とは「空海、芭蕉、子規を語る」というテーマで対談している。

また詩人大岡信との対談は「中世歌謡の世界」である。更に、司馬は子規全集の編集や、蕪村全集にも携わっていた。「蕪村全集」の月報には蕪村に関する文章を多く寄せている。

〈私は、蕪村に愛が感じられてならない〉

〈蕪村の詩情は、なんとも非禁欲で、しかもあでやかというほかない〉

再発見されるまで、埋もれていた同郷蕪村（蕪村は司馬と同じ大阪都島の出身）に寄せる愛が感じられる。

「坂の上の雲」では主人公子規の俳句革新論を詳述しているのは当然だが、子規によって再発見された蕪村の句「五月雨や大河を前に家2軒」と芭蕉の句「五月雨を集めて早し最上川」の優劣論までに及んでいる。

また子規が自宅の庭に咲いた鶏頭の花を詠った句「鶏頭の14、5本のありぬべし」を、司馬は子規が唱えた写生句の最高傑作と評価している。しかし、素人の私がみても、平凡な句にすぎないと率直に思うのだが、果たして弟子の高浜虚子も「子規全集」にこの句を入れなかった。

しかし戦後、この全集に関わった司馬は、この句を真っ先に入れ、だから虚子は駄目なんだの意味のことを語っている。

（たしかに、この句の評価を巡って鶏頭論争といわれる論争が起こり、以後現代に至るまで歌人、文学者の間でしばしば論議の対象になっているという。）

以下、司馬作品のなかから詩歌に関する部分を抜き書きしてみよう。

①「燃えよ剣」と俳句

頑なに武士道を貫いた土方歳三の趣味は意外なことに俳句だった。彼は「豊玉」と号したが、今でも東京都日野市にある土方歳三資料館でも、彼の句集「豊玉発句集」（41句）を見ることができる。

そのため、「燃えよ剣」では司馬は随所に土方の句を紹介している。

ただ、土方が死の直前に詠んだとされる

〈シノピリカいずこで見ても蝦夷の月

そう句集にある。シノピリカとは歳三がこの地にきて覚えた唯一のアイヌ語である。「ひどく佳い」という意味らしい〉

と書いてあるが、この句は句集には見当たらない。

今では司馬の創作であることが判明している。あたかも歳三の句と思わせてしまうのが、司馬の力量だろう。

上巻の最後にも歳三の句を紹介している。

ふるさとへむかって急ぐ五月雲

これも句集には載っていない。司馬の創作だからだ。

また、「燃えよ剣」のなかでは沖田総司が豊玉師匠をからかう場面が度々登場するが、特に「ひどいものだ」

と沖田総司をうれしがらせたという句を紹介している。

菜の花のすだれに昇る朝日かな

これも実際に歳三の句なのか、作家嵐山光三郎や半藤一利などは疑っている。

知れば迷い知らねば迷わぬ恋の道

は、句集では

しれハ迷いしなけれハ迷わぬ恋の道

となっている。司馬が改作したものだろう。

逆に歳三の辞世の句とされる

たとえ身は蝦夷の島根に朽ちぬとも魂は東の君やまもらん

は、司馬は「燃えよ剣」には載せていない。

あまりにも吉田松陰の

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

と酷似しているからであろう。松陰の遺言は安政六年。歳三は二四才、近藤勇と出会ったばかりである。歳三の歌の下敷きに松陰の歌があっても不自然ではない。

歳三は敗北を十分に知りつつ、幕軍のために心の奥を明かさぬまま、どこまでも戦い抜く。

司馬の好きな言葉に「漢（おとこ）」という言葉がある。新政府の時代になっても一人ぐらいそんなバカがいてもいいのではないか、シノピリカの月明に微笑んだ漢がいたのかもしれない。

②「国盗り物語」と謡、連歌

主人公は3人。創造性に富み毒をもった悪人斉藤道三とその野望を託された二人の弟子、娘婿の信長と甥の光秀である。風雅を愛しめっぽう武道優れていたが、信長と相いれない性格で細やかな神経を持った光秀が、本能寺で信長と激突するまでを描いている。

当然のことながら、主人公斉藤道三や女婿織田信長が愛用したという謡（幸若舞の「敦盛」）が多く登場する。

「人間五十年

化転（けてん）のうちにくらぶれば

ゆめまぼろしのごとくなり

一度生を享（う）け、滅せぬもののあるべしや」

人間など、一曲の舞にもひとしい。生あるものなかで滅せぬもののあるものか。

それはすべて、道三や信長が生死の瀬戸際に立たされた場面で舞われたこととなっている。特に信長は桶狭間の戦いの前夜、清州城でこの一節を舞ったことは有名である。

なお、司馬は「化転」と表記するが、津本陽は「下天」と書いている。「信長公記」では「下天」となっているからだという。（津本陽著「下天は夢か」）

本作品を更に詳細に観察すると、道三が舞うときと、信長が唄い舞う時では表記が違うのは興味深い。

「ゆめまぼろしのごとくなり」は道三の場合だが、

信長となると、これが漢字となる。

「化転の内にくらべれば
夢幻のごとくなり」

更に濃姫（道三の娘で信長の妻）が唄うときにもまた、表記が違う。女性らしく、ひらがな書きとなる。

「にんげん五十ねん
化転のうちにくらべれば
ゆめまぼろしのごときなり」

同じ歌の表記を変えることによって、それぞれ微妙に異なる雰囲気を描きかったのであろう。司馬らしい、心にくいばかりの演出である。

なお、光秀となると、都会人らしく京で流行っている今様となる。

花鴛に
水をば入れて
月影宿し
漏らさじと
漏らさじと
持つが大事と

謡っている光秀はわが志の満たされずに、啾々（しゅうしゅう）と哭く声を、この恋の今様に託そうとしているのだろうと司馬は解釈している。

光秀は甲州征伐に参陣するが、やがて信長から決定的な命令が下る。それまで心血を注いできた近江、丹波をとりあげ、出雲、石見を与えるというのだ。出雲、石見はいまだ、敵の毛利家の領地である。無茶な話である。

そこで、光秀は突如、京と丹波の国境の愛宕権現で連歌興行を催す。

居並ぶ連衆は八名。発句をいうべき光秀は苦吟した。連歌のばあい、うたい出しの発句の出来がよければ、その興行は成功するという。

やがて光秀は、自作をよみあげた。

時は今、天（あめ）が下しる五月哉

「時は今」

ということは光秀の決起の決意をあらわすことばであろう。しかも光秀の巧緻さは、それに裏の意味をかけている。光秀の明智氏は、美濃の土岐源氏である。

「天が下しる」

とは五月の雨が降るということよりも、天下を治める、統治するとの意にもとれる。

受けたのは威徳院行祐であった。彼は光秀の発句を素直に解釈しておだやかに受けた。

水上まさる庭の夏山

「おみごと」紹巴は宗匠としての嘆声をあげ、ついで自分の第三句をよみあげた。

花落つる流れの末をせきとめて

紹巴にすれば、光秀の反逆の決意をはばむ意味を託していた。

この連歌のシーンは、本作品の圧巻の場面であろう。

なお、「国盗り物語」の「あとがき」で司馬は細川幽斉（藤孝）を取り上げている。

幽斉は光秀の親戚であり親友でありながら、本能寺の変が起きると光秀の再三の要請を断り、謀反の翌日には剃髪して家督を息子の忠興に譲ってしまう。

彼は近世歌学の祖とも称されたのみならず、千利休の弟子であり当代随一の教養人であった。

秀吉の朝鮮出兵に際しては

日の本のひかりを見せてはるかなる
もろこしまでも春や立つらん

というオベンチャラの歌を詠んでいる。

こののち、幽斉は前田利家や家康に接近して・天才でなければできない世渡りぶりだった。

「国盗り」をめざした3人とは全く反対の生き方だった。その血脈は現在でも続き、今、東京目白にある永青文庫や新江戸川公園を歩くと、脈々と続いてきた細川家の力の一端を覗くことができるのである。

③「馬上少年過ぐ」と詩歌

この細川幽斉と戦乱から江戸期への動乱を生き抜き、同じく歌をよくしたのが伊達正宗である。

梟雄とも呼ばれ、10年早く生れていれば天下をとっていたかもしれないといわれる政宗の生涯を描く短篇が「馬上少年過ぐ」ある。

その政宗が晩年に作った高名な詩を取り上げている。

「馬上少年過ぐ
世平らかにして白髪多し
残躯天の赦すところ
楽しまざるをこれ如何せん」

この老詩人が伊達正宗である。

その詩にいう。

「四十年前少壮の詩
功名、聊復（いささかまたみずからひそかに）自私期す
老来識らず干戈（かんか）の事
只把る春風桃李の盃

司馬は書く。

〈（政宗が）田舎で切りとりさわぎをしているうちに中央で豊臣氏が興り、ついでに徳川氏が興って、天下はかれに遠いものになった〉

中央から遠く辺境にいれば、いかに将としての優れた才能をもっていても天下取りは夢となる。その自嘲にも似た気持ちが、この詩にも如実に表れている。

政宗は歌道にも堪能であったらしく、司馬は政宗の作った多くの和歌をも紹介している。

政宗は死の直前、上洛して多くの公卿の前で、一首を詠んだ。

咲きしより今日散る花の名残まで
　千々に心のくだけぬるかな

とりようによっては、意外な寓意が含まれていると司馬は記している。

また「あとがき」でこうも云っている。

〈当時、全国の戦国武将のなかで―あるいは士卒をふくめて―政宗ほどの詩をつくれた者はなかっただろう。（中略）しかも政宗の詩は古詩をまねた手習い程度のものではなく、漢詩の約束事を手慣れた道具のようにつかって自分の感懐を自在にのべている〉

なお、司馬は「街道をゆく26」（仙台、石巻）でも、政宗を登場させている。

④「箱根の坂」と中世歌謡

下剋上の先駆け、北条早雲の生涯を中世歌謡を多用しながら追っている。しかし素人の私には、小説の中でどれが司馬の「私製」なのか全く判別できない。

司馬が「日本語の本質」（対話選集2）で「中世歌謡の世界」というタイトルで詩人大岡信と対談していることは前述の通りだが、その大岡は次のように言っている。

「司馬さんの書かれた小説の中で、こんなに歌謡や詩歌を実にうまく使われたケースは初めてじゃないでしょうか。室町歌謡だけでなく平安歌謡、「梁塵秘抄」からも取っているし、それに「今様」も使われている。」

たしかに、この作品には、室町期に盛んだった歌謡をふんだんに取り入れ、狂言風の言い回しを用いて、存分に作者が楽しんで書いているのが感じられる。

「あの歌謡の中には、こっそり手作りに物を混ぜてある」と司馬はいたずらっぽく笑ったと担当記者は裏話を吐露しているが、司馬の遊び心、読者へのサービス精神は旺盛なのである。

ともかく、「箱根の坂」には膨大な歌の引用があり、歌物語のようである。それは熱気に満ちた戦国の英雄物語とはかなり趣を異にしている。

この時代、武士の教養には3つの柱があった。2つは「儒仏」である。しかし儒教と仏教だけでは一人前とはされず、「歌学」がことさら重んじられた。

歌学とは、日本語としての磨かれた詞藻―散文としての「源氏物語」と、詩としての「古今」「新古今」も通じていなければ一人前の武士とはいえなかった。

早雲も少年の頃から、歌学の教科書として「むかし、おとこありけり」で始まる「伊勢物語」を隅々まで諳んじていた。

また決戦に臨んでは「梁塵秘抄」にある名歌を口ずさむのが常だった。

君が愛せし綾蘭笠（あやいがさ）
落ちにけり　落ちにけり

なお、この場合、「君」とは早雲が愛した北川殿（今川義忠室）であり、綾蘭笠とは早雲自身を指す。

中世武士が歌学を愛した例として、司馬は「街道をゆく」（郡上八幡のみち）で城主東常縁を取り上げている。常縁は宗家千葉氏の争乱を鎮めるため下総に遠征するのだが、その留守中、美濃国武将（斉藤道三の先祖）に領地も城も乗っ取られてしまう。常縁もその武将もかなりの歌人であったらしく、武将から「歌を詠んでくれたら所領を返しましょう」と云われた常縁は早速、歌10首を詠んで、約束通り、領地を返してもらった故事を取り上げている。

室町武士は戦国武士と違って教養人としての典雅さを持ち合わせていたというのだ。このことは「まんじ」137号で既に書いた。

⑤「酔って侯」の洒と詩

自ら「鯨海酔侯」と名乗り、酔えば詩をつくり、その署名に「酔擁美人楼主人」としたほど洒が好きだった山内豊信（後の容堂）の物語である。

〈かれは自分を一遍の詩の中の人とみたかった。徳川期の軟弱な大名ではなく、戦国風雲の武将としての自分を、詩人である別の自分に見物させてやりたい衝動に駆られた。〉

そんな容堂が老中筆頭阿部正弘仁差しだした詩は「阿墨人宴会の図に題す」と題されていた。

蕃船は、浮城と号す
火輪、鳥翼を張り
能く万里の波を破って
吾が日出の国に来る
聞くならく、五大洲
富強、阿墨を推す
戸口、日に繁蔓し
その国南北に分つ

（うまいものだ）と正弘は思った。

しかし正弘の死後、老中となった井伊直弼によって「慎」を命じられた。このため、にわかに没落し、隠居の身となり藤田東湖の命名により「容堂」と号した。

その頃の詩

君聞かずや千載不朽衡岳の芋
松魚（鰹）安んぞ青史に列するを得ん

唐の政治家李泌（りひつ）は一朝事に敗れて衡山（こうざん）（衡岳）に隠居し、芋を食ってくらした。やがて天下に大乱が起こり、李泌は草庵を出て宰相となった。その衡山の芋は不朽の故事となったが、鰹などはいかに高価でも歴史に列する

ことはできないの意。
彼は芋一つを食うにしても、自ら史上の英雄に擬して食わねば食った気がしない男であった。

⑥芭蕉をめぐる旅（街道をゆく）

芭蕉をめぐる旅は「街道をゆく」の実に12巻に登場するが、なんといっても圧巻は（26仙台、石巻）であろう。その大半は「おくのほそ道」への旅で占められている。

芭蕉と随伴者の曾良は、元禄2年（1689）に江戸の深川を発ち、東照宮に参拝し、やがて奥州街道に沿って白河、福島、仙台、石巻へと北上し平泉へ達した後、Uターンするかのように後戻りして宮城、山形の県境の鳴子温泉から奥州山脈の脊稜を越え羽州の堺田への行程を踏んでいる。

「街道をゆく」でいえば上記（26仙台、石巻）のほか（10羽州）（29秋田県）（33白河、会津）と（41北のまほろば）に及ぶ。

芭蕉が奥州へ旅立つべく、江戸郊外の千住で詠んだ句

○行く春や鳥啼き魚の目は泪

〈無常流転という単色（ものうすいろ）の世界が、基調になっている〉と司馬は感想を書く。

そして、

○夏草や兵どもが夢の跡（毛越寺）

○五月雨の降りのこしてや光堂（中尊寺）

○閑さや岩にしみ入蝉の声（立石寺）

〈芭蕉一代の名句が、奥州における三つの古刹でできている。くりかえし惜しまれるのは、松島においても瑞巌寺でも、芭蕉は句をつくらなかったことである。〉

芭蕉にとっては、両地とも句が詠めないほどの絶景だったかもしれない。それが芭蕉の作だと観光業者が宣伝する「松島や、ああ松島や、松島や」の句。芭蕉がそんな〈ノンキなトウサンのような句〉を作るだろうかと司馬は本当に怒っている。

圧巻中の圧巻は（29秋田県散歩）に出てくる象潟での芭蕉の句であろう。

○象潟や雨に西施が合歓（ねぶ）の花

〈前衛そのものの作風と言っていい。（中略）芭蕉は象潟というどこか悲しみを感じさせる水景に、西施のうつくしさと憂いを思い、それをねぶの色に託しつつ、合歓という漢語をつかい、歴史を動かしたエロティズムを表現した〉

と見事な文章を書いている。

また、「司馬遼太郎が語る日本」では次のように絶賛している。

〈セザンヌ以後の抽象画家が否定した具象性、そういう具象性があるようでない。抽象的なようで具象的な、非常に前衛的な、物の本質に迫るはい句ですね〉

○行春を近江の人とおしみける（24近江散歩）

この場合、絶対に「近江の人」でなければならない。「近江」を他の国名に変えてはこの句は成り立たないと司馬は言う。

近江の人でなければ

〈句の向こうの景観のひろやかさや晩春の駘蕩たる気分があらわれ出てこない。〉

司馬の近江に対する愛情が感じられる。

○水取りやこもりの僧の沓の音（24奈良散歩）

この1句によって、「お水取り」が季題に入ったという。

司馬と親しかった評論家山崎正和はこう書いている。

「司馬遼太郎は歴史家であったが、それ以上に文学者であり、詩人であった。歴史家は文明の興亡を眺めていたが、詩人はその底にひそむ地震の呟きに耳を傾けていたようである」

（司馬遼太郎全講演5解説）

（続く）

千家尊福（一七）

社会主義者と対峙した司法大臣

村上邦治

はじめに

明治四〇年一二月二五日に召集された第二四回帝国議会は、二八日から始まったが、波乱の国会となった。

年初からの不況により財源難に直面、元老が予算編成に介入した。一月には阪谷大蔵大臣と山県逓信大臣の財政方針が対立、その結果両相は辞任した。翌日には西園寺首相は他の閣僚とともに辞表を提出した。しかし伊藤博文の進言に基づき、天皇は聖諭を出し、蔵相は松田法相が、逓相は原内相が兼務することで、引き続き西園寺内閣は政権を担当することになった。

こうした経緯をみた衆議院では、野党（憲政本党、大同倶楽部等）から内閣不信任案が上程されたが、わずか九票差で辛うじて否決された。

内閣の実力者原敬内相は、二大臣を補充する内閣改造を断行した。原の狙いは予算介入など、西園寺内閣の最大の壁となっていた貴族院山県閥を抑え込み、弱体化させることであった。その為閣僚二人を、貴族院から登用するとともに、にわかに直接行動派が牛耳った社会主義者の不穏な動きに対処する為、有能な司法大臣を配置することであった。

これらの条件に合致する司法大臣は、取って置きの貴族院議員木曜会最高実力者東京府知事千家尊福しかいなかった。西園寺・原は、早くから尊福を重要閣僚に起用することを決めており、一〇年近くになる東京府知事を留任させていたのであった。

会期を二日残した二月二五日、大臣席には司法大臣千家尊福の姿があった。

一　国会末期の千家司法大臣

就任第一日目から、社会主義者達が請願した治安警察法改正法案に直面した。

この法律は第二次山県内閣が、法定上程からわずか一一日後に議会通過させ、直ちに公布施行されたものである。これまで自由民権運動対策から、新たに労働運動を取締り対象に加えたものであった。その第五条に政治結社禁止とされた軍人、警察官、神官僧侶宗教師、未成年者に加えて、女子が挿入されていた。日露戦争中から、女性の政治参加を求める「有志婦人の請願」が衆議院に出され、五条の改正運動が始まったのである。

明治四〇年二月に衆議院に請願し、三月中旬に衆議院では可決された。（貴族院で否決）今国会にも二月福田英子（婦人解放・社会主義運動家）菅野スガ（社会主義運動家大逆事件により死刑）らが、三度目の「女子が政談に参加し、またはその発起人たることを認めよ」と請願した。この請願に基づき議員から発議され、二五日に衆議院に上程、可決された。

同日の貴族院の委員会では始めて可決され、翌二六日の本会議に上程されることになった。二六日貴族院本会議では、否決され結局不成立に終わった。しかし、この経緯を司法大臣の席からみていた尊福は、女性までも社会主義は及んでおり、すでに大きな存在感を有していることを改めて痛感したのであった

このほか司法省に関わる監獄法案（法律によって規定された世界最初の監獄法）は、尊福が就任前に両院で可決されていたが、公証人法案、感化法改正（刑法改正により一四歳以下は罰せないことにするもの）は、二五、二六日で採択されることになっていた。

その為就任早々、法案の審議と採択により、多忙であった。公証人法案は衆議院で修正可決されていたが、二五日貴族院で採択され、衆議院修正通り可決された。感化改正法は、衆議院ですでに可決されており、新刑法が四月から実施されることから、貴族院では忍んで可決されて、新大臣を安堵させたのであった。

二　蠢く社会主義者

四〇年二月日本社会党は結社を禁止された後、幸徳秋水、堺利彦ら主流となった直接行動派は、金曜会を大阪市に設立、片山潜、西川光次郎ら議会政策派は、社会主義同志会を設立し対抗した。両派各々独自の新聞発行により、自らの主張を掲載、論争した。各派とも同志を集め講演会を継続的に開催し、官憲監視の下活動していた。

ところが、四一年二月突然、社会主義同志会の最高実力者片山潜一人が、同志会を追い出されるという、穏健派内での分裂騒動が起きた。これにより直接行動派に寝

返りを主導した西川光次郎が同志会を牛耳ることになり、日本の社会主義者達は直接行動派が圧倒することとなった。この分裂により「現時の社会組織に対し根本的に破壊を企てる」集団として、検察や警察の厳しい捜査対象になったのである。しかしその後も西川らは『東京社会新聞』を、極少数派になった片山は、引き続き『社会新聞』を発刊し、各々の主義主張を発表した。

分裂を繰り返す社会主義者たちの悩みは、限られた同志の演説会や研究会は活発に開催されても、一向に同調者が増えないことであった。その為両派とも全国遊説を試み、地方への拡大を企てた。北海道東北遊説の小樽では石川啄木も参加していた。東海道遊説では一四町村で一六回開催、三六〇〇人を集めた。しかし資金が続かず、遊説を途中で中止することも多かった。

一月「屋上演説事件」が起きていた。この事件は本郷の平民書房で予定されていた「金曜講演会」が、警察から解散を命じられたため、大杉栄、堺利彦、山川均らが二階から屋上に上がり、往来の群衆に向かって演説を始めたのである。この行為により、大杉らが本郷警察署に拘引された事件である。二〇日から四五日の禁錮刑を受け、収監されたのであるが、三月の終わりに出獄してきた。

大杉、山川らは早速四月の初め、栃木県に出向き、足尾銅山公害を訴える田中正造に会い、公害問題の共闘を話し合った。

五月三日には、初めてメーデー街頭行進に、大杉、堺、山川、荒畑や女性の管野スガらが参加して、その存在感を誇示した。

こうした活動により、徐々ではあるが社会主義は、着実に浸透した。まず高学歴者や文学を志す女性と、地方の文芸誌への拡大である。

四一年一月には添田竹子、西川文子らで社会主義講演会を開催、福田英子はわが国で初めての女性新聞『世界婦人』を創刊、そして執拗に女性の政治参加を訴え、治安警察法の改正を求めたのである。

社会主義は地方にも広まりを見せ始めてきた。田中正造が告発した足尾銅山公害問題や前年足尾銅山で発生した工夫の大暴動事件により、群馬県では『東北評論』が発行された。また九州では『熊本評論』が発行され、社会主義者の評論や海外の動向が紹介され、地方への展開が目立ってきた。

長崎では、社会主義者それも露国の亡命革命家が、数十名住みついていた。西園寺内閣の限定的ともいえた規制と、また西のはずれということも重なり、大日に見られていたのである。

しかし、社会主義運動の先進的な理論をもち、医師で在長崎露国革命党首領といわれたニコライ・ラッセルが、日露戦争中から隔日新聞『ヴォーリャ』（自由）を創刊し、

祖国の同志たちに送り続けていた。戦後は長崎を出港する戦艦に、赤旗を振りながら革命歌を合唱するなど、祖国の革命実現に支援を続けたのである。また同地では日本の社会主義者との交流も生まれ始めたのであった。

海外では米国において、在米日本人の過激派社会主義者たちが、情宣活動を活発にさせていた。

明治四〇年一一月天長節の日、桑港日本領事館の入り口に、無政府党暗殺主義者の名で「暗殺主義第一巻第一号、日本皇帝睦仁君ニ与フ」と題する「パンフレット配布事件」が発生した。この中で、

「睦仁君足下、憐レナル睦仁君足下、足下ノ命ヤ旦夕ニ迫レリ。爆弾ハ足下ノ周囲ニアリテ、将ニ破裂セントシツツアリ」

と、明治天皇暗殺を予告したものであった。在米日本人有志が結成した「社会革命党」の一員が書いた檄文で、単なる示威行為であったが、文言は衝撃的であった。

この事件は渡米中の東京帝大教授が事件の秘密報告書を作り、東京帝大穂積教授を経由して、元老山県に届けられた。山県はこれを西園寺首相に送り、社会主義者の米国での活動について注意喚起したのである。

また在米社会党員の決議として、謄写版による印刷物を作成、

「来ル八月ヲ以テ其所期ヲ断行スベキコトヲ言明セル」

との文書を、日本の同志へ郵便にて配布した。

こうした社会主義者達の言動は、日本各地や米国などに確かに浸透させつつあった。しかし彼らに最も欠けていたのは、大衆や工員などの労働者を巻き込み、賛同者を増やし、それを組織化することできなかったことであった。その主因は中央で、その路線を巡り、分裂を繰り返し、地方で萌芽していた社会主義者を、支部として取りまとめることができなかったのである。

議会終了後、原内相は、四月初め恒例の地方官会議を開催した。議事終了後、異例ともいえる秘密会を開いた。議題は「社会党取締り」に関してのもので、社会主義者の行動に不信感を持つ原内相は、府県知事に対し、社会主義者たちの現状と取締りについて内訓したのである。

三　山県系官僚閥の凋落

原敬内相が内閣強化のため、新たに千家、堀田という大物貴族院議員を入閣させたことは、山県系の議員や官僚に大きな衝撃を与えた。

木曜会は、既に西園寺内閣発足時から、同会の松岡康毅が農商相として入閣していた。従来から木曜会最高実力者である千家尊福は政友会寄りであったが、尊福自身が入閣したとなると、極めて親密な連携とみられ、反山

県路線を、より明確に示したものとみられた。

貴族院の最大会派「研究会」は子爵中心の会派であり、幸倶楽部と共に山県系閥の中核を形成していた。当時研究会は堀田、正親町実正（公家伯爵後大正天皇侍従長）、岡部長職（元岸和田藩主子爵）の三頭政治がとられていた。そこにこの度、領袖の一人堀田静養が引かぬかれたため、研究会は西園寺内閣に同調する堀田派と、同人と対立的な立場にあった岡部長職派とに内部分裂した形となった。

千家尊福の入閣は、これまでのいきさつから許すことができるとしても、原内相が秘密裏に進めた研究会幹部堀田の入閣は、山県有朋にとって我慢の限界を超えていた。このままでは、牙城としていた貴族院での地盤を、失いかねない事態に陥ったのである。

内務省山県系官僚や警視庁幹部の相次ぐ転任も、山県系官僚の人々を震撼させた。内務大臣に就任した原敬の能力主義による人身一新は、とりもなおさず、山県閥の地盤を崩壊させることに直結した。原の人物評価は厳しく、人物本位で進める原の人事政策は、山県や平田、大浦、小松原らに取り立てられた人々は更迭された。

山県にとってこの窮地を脱するには、早期に西園寺内閣を倒閣させるしかなかった。国会終了後から、山県を始めとして、桂、寺内、平田、大浦等陸軍、旧内務官僚らによる西園寺内閣倒閣運動が本格化するのである。

四　山県閥の巻き返し

元老山県にとって西園寺内閣の貴族院研究会派分裂策は、決して放置できぬことであった。特に衆議院で地盤を持たない山県にとって、貴族院への政友会内閣の侵入は断じて、許すことはできず、倒閣運動が陰に陽に強まった。

まず西園寺内閣に最高幹部千家尊福法相及び領袖の一人松岡康毅農商相の二人を送り込んだ男爵議員会派木曜会に照準を定め、その追い落としに着手した。

木曜会は男爵互選選挙団体「二七会」を窓口にして、圧倒的優勢を誇っていた。この「二七会」に加入することで、互選選挙に当選できたのである。

山県系官僚は「二七会」の対抗として、四月の初旬に大浦兼武、田健次郎らを幹部として、「協同会」を発足させた。これらの経緯は、『田健次郎日記』に記述されている。

田（安政二年（一八五五）～昭和五年（一九三〇））は、兵庫丹波の大庄屋出身で、愛知県などの警察畑を歩んだ。明治二三年逓信大臣後藤象二郎に見いだされ、逓信省に入省、次官までなった。当初伊藤博文の勧めで立憲政友会から出馬し二回当選、後政友会の幹部批判から、除名

された。明治三九年貴族院勅選議員になり、平田、清浦らの山県系議員らと共に活動し、寺内内閣逓信大臣、第二次山本内閣農商務大臣、そして文官として初めての台湾総督を務めた官僚出身の政治家である。

田健次郎は簡潔ながら、明治三九年より昭和五年に至るまで毎日日記を書き残していた。『原敬日記』が政友会や西園寺内閣側からの記録であるのに対し、『田健次郎日記』は、山県系貴族院の内情や台湾総督府の問題などの資料として活用されている。いずれも近代政治史の研究にとって貴重なものとなっている。ちなみに貴族院議員二人の入閣について、田の日記では、

「蓋し現内閣勢ひ頗る危ふし。これを以て上院（貴族院）一部の歓心を繋ぎ、以て一日の余命の長さを欲する也」（『田健次郎日記』三月二五日）

と記し、冷静に指摘している。

元々男爵議員が増加した主因は、日清、日露両戦争の戦功叙勲によるものであった。いわゆる軍人華族の増加であり、この増員の過半が「二七会」に加入し、千家尊福率いる木曜会に入会した。木曜会に打撃を与えるには、この経路を断ち切る必要があったのである。

男爵議員の木曜会（二七会）脱会工作を主導したのは、寺内正毅（長州）陸軍大臣であった。児玉源太郎のあと、一、二次桂、一次西園寺内閣の陸相として、一〇年間にわたりその職にあり、山県、桂に次ぐ大きな影響力を持っていた。

寺内陸相は、陸軍軍人男爵に「二七会への入会を見合わせよ」と、露骨に脱会に動き始め、発足した「協同会」へ加入の勧誘をしたのである。この寺内の動きにより、陸軍関係者の新たな二七会への加入者はいなくなり、木曜会を脱会する動きが出始めたのである。

五　第一〇回総選挙

前回の衆議院総選挙は、露国と戦争を始めた直後の明治三七年三月に行われた。前年一二月通常議会の冒頭、河野広中衆議院議長の桂内閣弾劾奉答文事件により解散、戦時ということで三月に延期されたものであった。

（選挙結果定員三七九名政友会一三三名、憲政本党九〇名）

それから四年経ち、任期満了による第一〇回総選挙を五月一五日に実施する詔勅が、四月一三日に出された。

西園寺内閣が組閣に際し、山県（養子伊三郎逓相）、薩閥（牧野伸顕文相）、憲政本党（加藤高明外相）、貴族院（松岡農商務相）に配慮したのは、衆議院第一党ではあったが、三割半ばしか占めていなかったためであった。

千家尊福、堀田静養の入閣により、山県系の牙城貴族院の分断に成功した原内相は、衆議院の過半数獲得が内閣安定に不可欠と考え、立憲政友会挙げての選挙活動を

六　西園寺内閣毒殺工作

元老山県はこの選挙結果をみて、一気に危機感が膨らんだ。現行の木曜会潰し工作では、とても早期の成果は見込めないことから、西園寺倒閣の秘策を、自ら極秘に動き出したのである。それは元老山県でなければできないことであった。

山県は、明治天皇に「西園寺内閣の社会主義者対策は生ぬるく、このままではわが国にとって、大きな禍根を残すことになる」と、密奏したのである。君主内閣制の核心を狙った頂上工作であった。

西園寺内閣の倒閣を仕掛ける山県が用い毒薬は、「社会主義者」であった。直接行動派によって固められた日本の社会主義者集団は、彼らの主義を実行するほどの行動力はとても認められなかった。しかしかれらの主義自体は、君主を倒し、無政府社会（共産党政府）の樹立であり、天皇制を崩壊させるものであった。

この社会主義者たちの実力を、天皇に誇大に説き、警備警戒の取締りが西園寺内閣は甘く、このまま現政権を続けることは、わが国の立憲君主制を危うくすることになりかねないと、奏上した。山県から吹き込まれた情報により、天皇の西園寺内閣への信頼が揺らいだのである。

この時期、伊藤博文が天皇のお側におれば、社会主義者たちの組織力や、原内相と千家法相の警戒と取締りの

押し進めた。

総選挙を管轄する原内相は、

「全く無干渉の方針を執り、自由に競争せしめたる」（『原敬日記』五月一五日）

方針を徹底させ、官僚や警察による干渉を禁止した。

前桂内閣に繋がる者や野党憲政本党、大同倶楽部（国民協会、帝国党を経て結成、後桂太郎が結成する立憲同志会の母体）は、

「財政上種々の風説をなし、経済界の不況を利用」（同五月一九日）

し、西園寺内閣を批判、貧困で生活が苦しい民衆の声を代弁するとして、政友会と争った。

選挙結果は、原が見込む政友会入党予定者を含めると一九五名となり、過半数を超える圧勝であった。一方、親山県系である大同倶楽部などは、議席を多く減らしたのである。

この選挙結果に一番あわてたのは、山県を始めとする山県系官僚閥であった。貴族院では、木曜会を取り込まれ、研究会は分断され、そのうえ衆議院では、政友会に絶対多数を握られてしまったのである。このままでは、西園寺内閣は安定内閣として、長期政権を担うことが見込まれる情勢になったのである。

実態について、正確な状況説明ができたであろう。天皇が最も信頼する博文がおれば、山県の奏上自体、できなかったかもしれない。しかし伊藤博文は春に皇太子嘉仁の独逸へルツ（前東京帝大医科教授）の診察に立ち会うため、一時帰国したが、この時には統監として韓国京城に赴任していたのである。

枢密院議長でもあった山県の密奏は、総選挙後の五月下旬から六月初旬にかけて行われた。この内奏については、『明治天皇紀』には一切記載されていない。しかし、西園寺首相退任の意向は、この頃から元老井上などの資料から散見されてくる。西園寺首相は、山県の奏上により、天皇が憂慮されていることを、実兄である徳大寺侍従長から聞き及んだものと思われる。

西園寺としては、摂関家に次ぐ清華家徳大寺の次男に生まれ、明治天皇の皇太子時代より近習として仕え、天皇に親しく話せる数少ない一人であった。若くしてソルボンヌ大学に留学、西欧の自由主義をいち早く身に着けて帰国した、公家出身の開明派政治家として、伊藤博文に見込まれ、博文ともども、天皇のもっとも信頼の厚い政治家であった。

天皇と親密な関係にありながら、天皇を社会主義者達のことで、

「何とか特別に厳重なる取締りありたきものなり」（同日記二二日）

と心配させたことを、西園寺としては、重く受け止めた。少しでも宸襟を悩ませたことは、西園寺にとってもはやその地位に留まることはできないと思わせた。徳大寺侍従長から、内々に天皇の細やかな心境をうかがい知りえたことが、退任を考え始める契機となったのである。

七　赤旗事件

キリスト教社会主義者で、詩人でもあった山口孤剣（本名義三明治一六年生れ日本社会党結成に参加評議員）は、明治三九年の電車料金値上げ反対運動及びチラシ作製（軽禁錮一か月半）、大杉栄の「新兵諸君に与う」の発行責任者（禁錮八か月）、四〇年三月日刊『平民新聞』に書いた「父母を蹴れ」（軽禁錮三か月）などが重なり、仙台刑務所に入獄、四〇年六月から一二か月収監された。

服役を終え六月一九日上京、上野停車場に着いた。山口を三〇名くらいの同志たちが赤旗を振り迎えたが、警察官と小競り合いになった。この時は警察側の準備不足もあり、騒ぎを起し赤旗を振った者を取り逃がしていた。

こうした経緯の中、神田錦町錦輝館で、「山口孤剣出獄歓迎会」が開かれた。山口は分裂前に入獄したため、この日の出席者は、直接行動派と議会政策派の両派が参

加したことから事件が生じた。

堺利彦の回顧録によると、二階広間に婦人や子供を交えて五、六〇人が集まり、一時半に開会、西川や堺の歓迎の辞や山口の来会者への謝辞があった。食事をしながら和やかに始まった。余興に伊藤痴遊の講談、薩摩琵琶や琴の演奏、剣舞などあり、対立している両派の者もこの時ばかりは、自然そこに一脈の和気を生じたと回想している。しかしどうしても対抗の気分は残ったものの、面白く無事に六時過ぎに終わり、散会が告げられた。

皆がそろそろ立ち上がり帰り始めたとき、一群の青年が赤い大きな旗をひるがえし、「無政無政府党万歳」や「アナアナアナーキ」と連呼し、革命歌を高唱しながら、階段を駆け下り、玄関から路上に飛び出していったのである。

三日前に上野停車場で取り逃がした警察は、今度は事前に充分な準備をし、騒ぎに備えていた。そこに直接行動派の一団が、議会政策派に力を誇示しようとして、騒ぎを起したのである。

赤旗を振る者と待ち受けていた警察官とがもみあい、旗を取り上げようとする者、必死で旗を守ろうとする者との間で、殴り合いが数か所で起きた。この騒ぎに神田周辺の学生や群衆が集まり、大きな騒動になったのである。

旗の争奪戦が続き、日の血走った青年や、片袖のちぎれた若者、振り乱した髪を背になびかせながら走っている婦人などを、巡査が追いかけまわし又ねじ伏せたりした。上野で騒いだ者の逮捕に失敗しており、今回の歓迎会の騒動は、まさに帝都のど真ん中で発生、社会主義者の逮捕に、抜かりはなかったのである。

外の道路で旗を振り、大声で歌やさわぎたてる者を次々に逮捕し、神田警察署に連行、留置場に収容した。この騒動で、堺、山川、大杉、荒畑ら男一〇名婦人四名が留置され、東京監獄所に収監されたのである。

八　原内相取締内奏

元老山県により、西園寺内閣の社会主義者取締りの不完全さを吹き込まれ、不安を覚える天皇の心境を徳大寺侍従長から聞かされた原内相は、内奏を申し出て二五日に実現した。

原内相は西園寺内閣成立以降今日まで、

「取締の沿革と政府の方針、在米国の社会党に対する処置、長崎にいる露国社会党の状況並びに時々来朝する露国社会党に対する処置、その他将来わが社会党に対する処置は教育、社会状態の改善、取締の三者相待つに非ざればその功奏し難き事」（『原敬日記』六月二五日）

を、詳細に奏上した。

陛下も

「今日は昔の如く妄りに人を処罰することの出来ぬこと」（同二四日徳大寺侍従長談）

である、と述べられ、

「俄かに如何ともする事能はざる事情」（同二五日）

であることを、納得されたのであった。

九　神田署留置所不敬落書き事件

逮捕者は神田署に留置されたあと、警視庁に移され、市ヶ谷の東京監獄所に収容、判事の予審に付された。神田署を出た後、拘置所大部屋の板壁に

「一刀両断天王首　落日光寒巴里城」

（一七八九年仏革命によるルイ一六世のギロチンによる公開処刑を漢詩にしたもの）

と、箸にて記載された落書きが見つかった。

天王首を天皇の首に読み替えると重大なことになることから、警視庁を通じ、千家司法大臣に報告された。見方によっては赤旗騒動より、この落書き事件の方が、由々しきことであったことから、法相は単なる落書きと黙殺せず、原内相に報告することにしたのである

二九日千家法相は原内相の官邸に赴き、事の次第を報告した。原と尊福は直ちに田中光顕宮内大臣に面談し報告、原内相、千家法相、田中宮相の三大臣により協議された。原は

「厳重に処分する方可ならん」（同六月二九日）

と判断し、明日首相と相談することにしたのである。

翌三〇日の閣議には、首相は大磯の私邸から帰京したものの、出席しなかった。

首相が不在である以上、千家大臣は原内相に、「田中宮相と不敬落書き事件について、至急協議が必要である」と申し出た。千家法相に促されて、田中宮相に面談し、三大臣による協議が行われた。その結果、

「不敬の文字を記したるものを厳重に処分する」

事に決した。

しかし裁判については、行政官では如何ともできないことから、先ず、検事に於いて取り調べたのち、その証拠が明白なことになれば、裁判官には、あくまで検事より厳重に罰するつもり（最高禁固五年求刑）であることを、話させることにしたのである。

千家法相は、この事件を、あくまで刑法に基づき、処分を行うことを主張した。不問にいたすことは、世の中に惹起することになり、彼らの思う壺になる恐れがあると司法省内部には意見もあることを、披瀝したのである。

しかも不問の処置にしたときには、又山県らの批判を受けることになり、さらに彼らが出獄後一層不穏な事件を起こす恐れもあることから、三大臣間では、

「不敬落書き事件の犯人は厳罰にする」

方針を執ることで一致した。そしてこの事件は、千家法

相が職務上専任することになったのである。

六月の下旬、上野停車場歓迎事件、神田赤旗事件、不敬落書き事件と、立て続けに発生した社会主義者達の事件は、原が予見した通りとなった。原は千家法相と二人で、「治安警察法」に則り対応することを基本とした。原の先見性と千家法相の判断や指揮が相俟って、一連の事件が的確に対処できたのであった。

一〇　西園寺首相突如の辞任表明

社会主義者達の一連の騒動と同時に、大きな政治問題が進行していた。西園寺首相辞任の意向が発覚したのである。

西園寺は持病（リウマチ）に肝臓病を併発し、気弱な状態であった。日露戦争後桂内閣より引き継ぎ二年半経過、後半の一年半は恐慌といわれた経済大不況に見舞われ、予算編成に苦しみ抜いてきた。初夏より、元老井上などに、退陣を仄めかしていたのである。

そうしたとき、伊藤博文不在を狙って、山県は天皇に、西園寺内閣の社会主義者に対する軟弱な取締りを、密奏していたのである。天皇は、徳大寺侍従長の言からも分かるように、現行法に基づく取締りは、限界があることは承知しており、安りに検挙できないことは理解していた。また社会主義者達の騒動は、単に力を誇示する行動にすぎず、社会主義を実現する行動力、組織力、資本力いずれも到底保持していないことも認識されていた。

しかし幼い時からの遊び相手として、天皇を知りつくしていた公望は、天皇がいささかでも西園寺内閣の取締りに対して不安を起させたことに、大きな責任を感じたのである。

山県の奏上は成功したのであった。

丁度この時に、他愛もない事件であった赤旗事件が発生し、新聞に大きく報道され、世論の注目を集めた。この事件により、西園寺の辞任意思は固まった。

六月二七日政友会の腹心原内相と松田蔵相の二人に、私邸で内談したいとの依頼があった。面談した西園寺から、

「近来多病にて、今日まで強いて留職せしも、到底その任に堪えず、依って辞職せん」（同二七日）

と、総理大臣を辞任するという、突然驚くべき事を打ち明けられたのである。

原は時機があまりに悪いとして、

「今日病気にて辞職するも、誰も病気の為と思うものなし」（同二七日）

と述べ、来年まですなわちこの冬の議会が終了後、

「内閣が際限なく持続するのは国家の為にならない」

との趣旨で辞職するのが上策として、首相を説得した。

それでも辞職の意思を変えない西園寺に対し、中策として、この秋の予算編成を終わる後に辞職すべしとし、今日辞職するのは最下策である、と強く思い止まるように迫った。

それでも原の説得に応じない西園寺を見て、原は、

「少なくとも病気にて已むを得ざる情況を事実に示して党員の諒承を自然生ずる様に」（同二七日）

と、原は総選挙で大勝した政友会党員を慮った。

「今だ一回の議会を経過せずして辞職するのはいかにも納得させることはできず、党員は失望する」（二七日）

と最後の忠告をして、再考を求め別れたのである。

同日の日記で原は、これまで苦心惨憺して現内閣を維持してきたが、首相西園寺の内閣継続の意思は強固ではなく、かつ注意は粗にして往々誤りがあることから、多分その意思を翻すことは無いだろう、と記している。

翌日、原は元老たちが一致して、西園寺首相の続投を望んでいないことを知った。松方は財政運営の失敗を指摘、井上は次期首相には桂が適当と話した。

しかし一番西園寺がこたえは、山県の社会主義者に対する取締りの上奏であった。いささかでも天皇を煩わせたことが、幼い時より天皇をよく知る西園寺だけが持つ特別な感情を傷つけた。山県は一番卑劣な手段を用いたのであった。それだけ山県自身も追い込まれていたのだ。

原はなぜ早く相談してくれなかったか、悔やむのであったが、もはや手の打ちようがなかった。

西園寺首相は二〇日の閣議には出席しなかった。弱腰だからこそ社会主義者達は、「赤旗事件」や「不敬落書き事件」を引き起こしたのだと、山県系官僚から伝わった。西園寺は最後まで、政治的責任を果たさなかった。まさに事件の真相を解明しているときにもかかわらず、すべてを原内相と千家法相にゆだねたのである。

一一　西園寺内閣総辞職

六月二七日西園寺首相は、原と松田の二大臣に辞任の意向を告げた後、七月二日閣僚には個別に辞職の趣旨を告げた。二日には元老に通知し、政友会の主だった者に内話することになり、辞表は七月四日とされた。

三日には『時事新報』号外で

「明朝内閣総辞職をなすべし」

と、公表された。西園寺首相の意向で、内閣側より進んで漏らしたものであった。辞職理由は西園寺首相の病気によるものとされた。

しかし原は日記の中で、

「到底真に病気の為とは誰も信じざるなり」（七月三日）

と、記した。

予定通り四日に閣僚全員の辞表を取りまとめ、西園寺首相は参内して提出したが、追って御沙汰あるまでは従

来通り職務を執るべき旨、侍従長より指示された。

明治天皇はこの事態に際し、直ちに後任の大命降下をださなかった。まず、最も信任している伊藤博文韓国総監に、ご下問されたのである。この時伊藤は韓国京城におり、内大臣秘書官が新橋から鉄道で下関まで直行、その後京城までいき、伊藤総監に聖旨を伝達する。その奉答を得たのち直ちに帰朝するとなると、早くても九日になる見通しであった。

帰朝は一一日になり予定より遅れたが、伊藤の意向と元老山県、松方、井上は一致して桂前首相を奏薦した。西園寺首相も桂侯を奏薦し、結局桂内閣が成立したのは一四日であった。総辞職から一〇日経っていた。

西園寺内閣総辞職について『東京日日新聞』（五日）は、「内閣総辞職の真相」との見出しで、

「遠因は財政にあり、近因は不健康にあり」

とした。

『報知新聞』（七日）は、

「薄志弱行の西園寺首相　山県系の圧迫に内閣を投げ出す」の見出しで、

「山県系の圧迫によるもの。牙城である貴族院研究会は堀田の入閣により、西園寺系に移るようになり、純山県系は閉息しなければならず、衆議院で過半数を占める政友会の政党内閣の実現をみるかもしれない」

との危機感から、悪政（鉄道固有、増税）を西園寺首相にやらせたうえ、用無しとして圧力を加え、追っ払ったもの、と報じた。

『原敬日記』は、「当分は世に出すべからず」との遺言から、死後約三〇年秘され、ようやく昭和二五年に公刊された。最も身近にいた原内相の宮中、元老、閣僚の詳細な記述から、西園寺内閣総辞職は、山県の密奏が主因であることが、明らかとなり、これが定説となった。

しかし、当時すでに山県の「西園寺内閣毒殺」説が流布されていた。

一二　総辞職後の事件指揮

西園寺内閣最末期に起きた社会主義者達の事件処理に、その職務を全うしたのは、原と千家両大臣であった。

毎日二人は協議を重ね、事件の解明と処理に当たった。

「赤旗事件」の逮捕者は神田署に収容され、実況見分を受けた。その後、警視庁にて取り調べを受け、東京監獄所未決監に収監された。罪名は官吏抗拒および治安警察法違犯で、検事より調書が作成された。人数が多く公判は八月中旬に開始することになった。

「不敬落書き事件」はその真相に一週間をかけ、裁判で落ち度がないように、詳細にわたり犯人の特定作業が行われた。

証人三人の尋問、さらに筆跡鑑定を行わせ、大部屋にいた者の筆跡と照合させ、ゆるぎない証拠を固めたのである。その結果、全く同一筆跡の者が特定された。赤旗事件で検挙され、大部屋に留置されていた佐藤悟であった。

千家法相は、犯人は一名であり、証拠も明白であることから公判を早期に開始することにし、七月一一日に行われることになった。

こうして千家法相は内閣が総辞職した後も、次期内閣が成立するその日まで、職務に奔走したのである。

原内相の社会主義者達の予測は当たっていた。その対応に千家尊福を司法大臣に任命したことも、的を射たものであった。原と千家両大臣により、未曾有の事件は、法律に基づき、公判に付された。不敬落書き事件の東京地裁への起訴はまだ尊福が司法大臣の職にある一一日に行われた。（判決は重禁錮三年九か月罰金一五〇円監視六か月であった。二二日控訴は棄却確定した。）

赤旗事件での逮捕者の取り調べは在任最後の日まで、司法大臣として尊福はその指揮を執り続けた。（公判は、八月一五日から始まった。起訴されたのは、堺、山川均、大杉栄ら男性九名、菅野スガ、神川マツら女性四名計一三名であった。判決は二九日に出され、大杉が最も重く、重禁錮二年六か月罰金二五円、堺は重禁錮二年罰金二〇円、女性は小幕、大須賀は執行猶予、菅野、神川とも無罪となった。判決から見ても落書き事件を重く見ていたことが分かる。佐藤悟は二事件に関与したため、通算重禁錮四年九か月罰金一六〇円となり、格段に重い処罰を受けることになった。）

社会主義者たちの取締りについては、西園寺首相、原内相、千家法相の基本姿勢は、あくまで法律（刑法・治安警察法）に基づくものであった。山県は自ら立法し公布した治安警察法（第二次山県内閣時に制定）をゆがめてまでも、社会主義者達の取締りが不完全であることを天皇に密奏し、貴族院の牙城を守ったのであった。

桂内閣（第二次）は七月一四日に成立した。社会主義者の取り締まりは、桂、平田内相、岡部長職（貴族院研究会）法相の三人に変わった。堺利彦が

「西園寺内閣が倒れた原因の一つは社会主義を寛容し過ぎて、ついに赤旗事件まで起こさせたという非難であったという。したがって桂新内閣の反動振りは盛んなものであった」（「赤旗事件の回想」）

と、嘆いたように、治安警察法を拡大解釈し、社会主義者達を投獄していった。

桂内閣が成立した三か月後には、平田内相の発案により「戊申詔書」を発布し、社会主義・個人主義の台頭を戒めた。そして、明治四三年いわゆる「大逆事件」（「明治天皇暗殺計画」を実際に計画らしき進めたのは四人の

み）を好機として、全国各地で社会主義者達を根こそぎ検挙、徹底した弾圧を行ったのである。

原敬内務大臣にその器量を見込まれ、司法大臣に就任した千家尊福の在任期間はわずか四か月弱であったが、社会主義者達の引き起こした騒動を、辞任する最後の日までその司法処理に走り回った。総辞職をした後の一〇日間、内閣は実質的には機能を停止していたが、その職務を最後まで全力で果たしたのは、西園寺内閣全閣僚の中で、ただ一人、千家尊福司法大臣だけであった。

あとがき

社会主義者たちの引き起こした騒動の処理を任せられた尊福の心は、複雑に揺れたであろう。出雲大社大宮司第八〇代出雲国造であった尊福の出雲教学の核心は、「皇統守護神」
であった。

社会主義者たちは、「社会主義」、「無政府主義」、「共産主義」を唱え、天皇の存在を否定するものであった。この者たちに対して、心底怒りは収まらなかったはずである。絶対許すことのできない思想であった。

しかし、まさに法の最高責任者である司法大臣という責務を果たすためには、自らの信念を一時とはいえ奥に引っ込め、あくまで法律に基づく判断と処置に専念した。司法大臣の職にあった四か月、法律を守り通したのであった。後の桂内閣が、法律を無視し、あまつさえ、大逆事件という「でっち上げ」により、社会主義者達を弾圧した平田内相・岡部法相と比較すれば、その違いは歴然とする。

短期間で終わった司法大臣辞職後、全く新しい実業界という舞台が待っていた。そして政治家としての転機をむかえることになるのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

明治時代の著述者 渋江保の一生（その十一）

山本勉

第九期　博文館時代①（東京）一八九〇年
（明治二十三年）三月～一九〇一年（明治三十四年）

一　書肆、博文館について

博文館については、坪谷善四郎編『博文館五十年史』や田村哲三『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影　博文館興亡六十年』、稲川明雄『龍の如く　出版王大橋佐平の生涯』等に詳しく書かれている。『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影　博文館興亡六十年』の「まえがき」にもあるが、博文館という出版社をひと言で言い表せば、「出版社の原点であり縮図でもある」と言える。創刊雑誌の『日本大家論集』をはじめ『太陽』や『文芸倶楽部』等多くの雑誌を発行して読者層を広げた。日清日露戦争時には『日清戦争実記』、『日露戦争実記』を出版し、現地の戦況を写真で掲載する等して好評を得た。また、全集物においても『帝国百科全書』、『通俗教育全書』等を次々と刊行して成功を収め、出版界の雄として君臨して行くことになる。博文館は、大橋佐平・新太郎親子が創業したコンツェルン、一大企業グループでもあった。現在も印刷業界大手の共同印刷は、大橋佐平が一八九七年（明治三十年）に博文館印刷所を創業したのに始まる。大橋新太郎は、第一生命保険相互会社や日本郵船会社、大日本麦酒会社（現　アサヒビール・サッポロビール）等、現在でも一流企業として日本の経済界をリードしている会社の取締役等となり、財界人としても活躍した。なお、大橋佐平は日本最初の大橋図書館を設立しており、その歴史的意義は極めて大きい。

二　書肆、博文館と渋江保

博文館と渋江保との関係を示す資料は、森鷗外の

『渋江抽斎』に見られる。『渋江抽斎』のその百十には、「抽斎歿後の第三十一年は明治二十二年である。一月八日に保は東京博文館の求めに応じて履歴書、写真並に文稿を寄示した。これが保のこの書肆のために書を著すに至った端緒である。交渉は漸歩を進めて、保は次第に暁鐘新報社に遠かり、博文館に近いた。」[2] また、「抽斎歿後の第三十二年は明治二十三年である。保は三月三日に静岡から入京して、麹町有楽町二丁目二番地竹の舎に寄寓した。静岡を去るに臨んで、渋江塾を閉じ、英学校、英華学校、文武館三校の教職を辞した。ただ『暁鐘新報』の社説は東京において草することを約した。入京後三月二十六日から博文館のためにする著作翻訳の稿を起した。七月十八日に保は神田仲猿楽町五番地豊田春賀の許に転寓した。」[3] とあるように、一八九〇年（明治二十三年）三月二十六日より書肆博文館での執筆活動が始まった。実際には、博文館から出版された渋江名義の著作の版権や凡例の記載を見る限り、渋江は上京前より博文館と関係があり静岡時代に博文館から出版された著作を執筆していたと思われる。具体的な事例を見ると、『人類学』の小引に「明治二十七年三月羽化生しるす」とあるが、版権には「明治廿二年十二月十八日内務省許可」[4] とある。『通俗教育演説全』の凡例に「明治二十三年五月著者幸福散史識す」[5]、『少年亀鑑神童』については、凡例に「明治二十三年十月編者幸福散史誌す」[6] とある。ただ、渋江がどのような経緯で博文館において著作を翻訳出版するに至ったのか、それを裏付ける資料は今のところ見つかっていない。

三　『博文館五十年史』と渋江保

博文館に関する書籍や論文はこれまで数多く出版、発表されているが、渋江について触れたものを確認したことがない。私が調べたところ博文館から出版された渋江の著作は九十一冊にも及んでおり、その貢献度は他の作家と比べても決して少なくないにもかかわらず、何故博文館における渋江の待遇は極めて低いのか。現時点で渋江保の名前が散見できる唯一の資料、坪谷善四郎編の『博文館五十年史』の記述から渋江と博文館との関係を探ってみたい。

実は『博文館五十年史』は二種類ある。『博文館五十年史』と呼んでいるのは、一九三七年（昭和十二年）六月十五日発行のものであるが、これ以外に二種類ある。一種類は『博文館五十年史（初稿）』で一から四まであり裏表紙の内側に「昭和十二年七月三十一日坪谷善四郎君寄贈」とあり手書きでガリ版印刷のものである。もう一冊は『本稿博文館五十年史坪谷善四郎著九冊』で墨書きの直筆のものである。多くの箇所が訂正されていて、訂正箇所は墨で塗りつぶされている。ここでは便宜的に一九三七年六月十五日発行のものを①、ガリ版印刷の『博文館五十年史（初稿）』を②、墨書き直筆の『本稿博文館五十年史坪谷善四郎著九冊』を③とする。これら三種類の『博文館五十年史』は東京都港区芝公園にある三康図書館に所蔵されている。三康図書館の前身は博文館の創立者である大橋佐平が設立した大橋図書館である。三康図書館に出向いて調査した時間は僅か一日であり、しかも手書きで必要箇所を書き写す作業であったため調査不十分であるが、現時点でわかったことを記載する。

『博文館五十年史』①の第三編の目次は以下の通りである。字体が異なる目次は、②・③に掲載されたものである。なお、目次の数字は頁数を表す。

第三編　日清戦役前後
明治二十七年
新年の出版物及各雑誌　81
「明治秀才千人文集」　83
内外通信社の創設　84
内外通信社と高橋光威氏　86
「日清戦争実記」の創刊　87
戦争関係の各出版物　90
大橋修策氏の死去　91
乙羽、大橋又太郎氏の入館　91
明治二十八年
「太陽」の創刊　93
「少年世界」の創刊　98
「文芸倶楽部」の創刊　100
博文館と硯友社との関係　101
小波、巌谷季雄氏　102
杉山常次郎氏　103
其の頃の出版物（81・82頁）
ボアジナート博士の送別宴（83・84頁）
馬関に遭難の李鴻章慰問（87・91頁）
始めて懐中日記の出版　104
明治二十九年
当時本館の雑誌と書籍　105
「太陽小説」の発行　107
三陸海嘯と大橋乙羽氏の活動　108
創業九周年祝宴　108
「文藝倶楽部」の発展　110
「少年世界」と「少年文集」　111
戦史及戦争物の出版　111
此年出版物の異彩　112
早稲田大学出版物引受　113

『博文館五十年史』②・③の「明治二十八年其の頃の出版物」に「明治二十八年初春の本館出版物の情況を見ると（略）一月三十一日発行万国戦史は第五編越山平三郎譯「トラファルガル海戦史」（全部十二冊毎冊三百頁定価金十八銭）（略）等で何れも時局関係のものとて好く売れた」[8]とある。また「博文館五十年史』②・③に特筆すべき事項が記載されている。これまで渋江保の名前が『博文館五十年史』に掲載された箇所は、「第二編出版界躍進時代　明治二十五年小学教科用書の出版と其絶版」に見られる『高等小学万國地理』[9]の一カ所のみであったが、『博文館五十年史』②・③の「明治二十九年戦史及戦争物の出版」に『万国戦史』二十四巻の書名と共に、渋江保の名前が次のように記載されている。

「既に明治二十七八年に於て「日清戦争実記」に空前の好評を博するや続いて幾多の戦役関係書を出版した。即ち二十七年十月以来「万国戦史」二十四冊を毎月一回（定価金十八銭）にて出版し

第一編　独佛戦史　川崎紫山著
第二編　英清鴉片戦史　松井柏軒著
第三篇　拿破崙戦史　野々村金五郎著
第四編　英佛聯合征清戦史　松井柏軒著
第五編　トラファルガー海戦史　越山玉坡著
第六編　露土戦史　松井柏軒著
第七編　米國南北戦史　松井柏軒著
第八編　普墺戦史　渋江保著
第九編　ナイル海戦史　越山玉坡著
　　附コーベンヘーゲン海戦史　セントブインセント海戦史
第十編　波蘭衰亡戦史　渋江保著
第十一編　クリミヤ戦史　松井柏軒著
第十二編　印度蚕食戦史　渋江保著
第十三編　英米海戦史　越山玉坡著
第十四編　伊太利独立戦史　松井柏軒著
第十五編　希臘独立戦史　柳井綱齋著
第十六編　米國独立戦史　渋江保著
第十七編　英國革命戦史　同
第十八編　佛國革命史　同
第十九編　三十年戦史　国府犀東著
第廿編　フレデリック大王七年戦史　渋江保著
第廿一編　シーサルボンベー羅馬戦史　岸上操著
第廿二編　ピュニック戦史　渋江保著
第廿三編　歴山大王一統戦史　同
第廿四編　希臘波斯戦史　同

にして、二十九年一月には既に第十六編「希臘独立戦史」まで発行したが、其の後も予定通りに完結し、更に藤野房次郎著「平城包囲攻撃」二冊、川崎紫山著「日清戦史」七巻（各巻二十銭）、平田勝馬著「黄海大海戦」一冊（定

価金三十五銭）等を出し、更に小説にも山岸藪鶯の「空中軍艦」、三宅青軒の「金鶏勲章」、江見木蔭の「水雷艇」、同「連射砲」等は何れも二十九年に出版せられた。」[10]ここに掲載されている『万国戦史』二十四巻の書名のうち、「希臘独立戦史」と「米國独立戦史」の順番が逆に掲載されている。実際には、第十五編「米國独立戦史」、第十六編「希臘独立戦史」である。

『博文館五十年史』①、「第三篇日清戦役前後　明治二十七年戦争関係の各出版物」に万国戦史について次のような記述が見られる。「また戦争に因みて「万国戦史」を発刊し、第一編「獨佛戦史」、第二編「英清阿片戦史」、第三篇「拿破崙戦史」、第四編「英佛聯合征清戦史」、第五編「露土戦史」、第六編「北米南北戦史」等を出版した。然れども時代の要求は専ら当面最近の事実を知らんと欲し、其以外の出版は顧みられず、唯全国壮丁の大部分は陸続として戦地に赴き、彼等の親戚知友は、専ら戦地の消息を知らんと欲するに切なれば、斯かる社会の希望に応ずべく、此の年末を以て従来発行の各雑誌は盡とく廃刊し、翌新年より新たに「太陽」、「少年世界」、及び「文藝倶楽部」の三雑誌を創刊し、茲に本館の事業に一新生面を開くことになった。」[11]また「第三編日清戦役前後　明治二十九年戦史及戦争物の出版」に次のようにある。「既に「日清戦争実記」に大好評を博するや、続いて幾多の戦役関係書を出版した。即ち二十七年十月以来「万国戦史」二十四冊を毎月一回（定価十八銭）にて出版した。その題目と著者は第一編　川崎紫山著　独仏戦史。第二編　松井柏軒著　英清鴉片戦史。第三編　野々村金五郎著　拿破崙戦史。第四編　松井柏軒著　英仏聯合征清戦史。第五編　越山玉坡著　トラファルガー海戦史等にして、何れも、時好に投じ当時上梓された、幾多の戦史物中の白眉と称された。」[12]とある。

四　『博文館五十年史』と渋江の評価

これまで述べたように直筆墨書き、ガリ版印刷のものを経て一九三七年（昭和十二年）六月十五日に『博文館五十年史』は出版されたと考えられる。『博文館五十年史』①に渋江の名前が確認できたのは一ヶ所のみであったが、②・③では『万国戦史』二十四巻全てを挙げており、「同」という表現を使っている巻もあるが、『第八編普墺戦史』・『第十編波蘭衰亡戦史』・『第十二編印度蚕食戦史』・『第十六編米國独立戦史』・『第十七編英國革命戦史』・『第十八編佛國革命戦史』・『第廿編フレデリック大王七年戦史』・『第廿二編ピュニック戦史』・『第廿三編歴山大王一統戦史』・『第廿四編希臘波斯戦史』に渋江保の名前が確認できる。

『博文館五十年史』①百十二頁に『万国戦史』の著者として、川崎紫山、松井柏軒、野々村五郎、越山玉坡に

ついては名前が記載されているにもかかわらず渋江の名前だけが削除されたのはなぜか。博文館から刊行された『日清戦争実記』等の戦史物は戦闘中心の戦記であり、博文館が目指していた戦史スタイルと欧米型に開明した民主的思想の渋江の戦記スタイルは相容れないものがあったのだろう。その後、渋江は博文館から遠ざかり、大学館等での著述活動に入って行く。

注　記

（一）田村哲三『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影　博文館興亡六十年』（法学書院　二〇〇七年十一月二十五日）前書き三頁

（二）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二〇四・二〇五頁

（三）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二〇五頁

（四）渋江保『人類学』（博文館　一八九四年二月二十六日）版権

（五）渋江保『通俗教育演説全』（博文館　一八九三年九月二十五日）凡例

（六）渋江保『少年亀鑑神童』（博文館　一八八一年一月一日）凡例

（七）坪谷善四郎編『博文館五十年史』①（博文館　一九二七年六月十五日）目次

（八）坪谷善四郎編『博文館五十年史』②・③（博文館）

（九）坪谷善四郎編『博文館五十年史』①（博文館　一九二七年六月十五日）六十六頁

（十）坪谷善四郎編『博文館五十年史』②・③（博文館）

（十一）坪谷善四郎編『博文館五十年史』①（博文館　一九二七年六月十五日）九十頁

（十二）坪谷善四郎編『博文館五十年史』①（博文館　一九二七年六月十五日）百十一・百十二頁

※『博文館五十年史』②・③には、出版年月日が明記されていないため、②・③においては注記に出版年月日を記載していない。

ぼくは肛門である

匠　克仁

ぼくは肛門である。
違った…ぼくはこう思うんである。
ぼくのエッセイは、あ～なる。あ～なるというのは、アナルが多くなる。

☆

前号で、便潜血の陽性反応が出て、大腸内視鏡検査を受ける予定ということを書いた。
今回は、その検査結果を書いている。ぼくのエッセイはリアルタイムである。
前回は、アスペルガーと診断されたので、そのことを書いていた。その最中に便潜血が出て、その話を盛り込んだら、エッセイもぐちゃぐちゃになった。
直近三か月の近況報告である。

☆

アナルとは肛門である。
日本語の方が恥ずかしいなあ。考えてみれば、まんじの処女エッセイから、アナルの話である。
あ～なる理由を、ぼくは自分でアナライズつまり分析した。ぼくはアナルアナリストである。
アナルとアナライズでダジャレと思った人がいるかもしれない。実は語源は同じである。
解剖の意味の言葉から発生している。解剖の対象が『肛門』で、解剖と同様な行為が『分析』である。
アナルを肛門と書いたが、言語学的には間違っている。つまり、アナル anal は肛門という名詞でない。肛門は英語の名詞ではアヌス anus である。
または、お尻（＝アス）の穴（＝ホール）で、アスホール asshole である。オカマはアスホールを明日掘る。
アナル anal は名詞ではない。アナルは「肛門の」「肛門による」「肛門のための」という形容詞である。「肛門

のように美しい」「肛門のように広い」という意味があってもおかしくない。

anal は発音記号で einl であるから、カタカナ表記ではエーヌルが近い、アナルに絵塗る。

anus は発音記号では、einos（2番目の o は回転させたもの）なので、カタカナ表記するとエイナスが近い。アヌスにいい茄子を突っ込む。

肛門は正式には肛門管であるが、管は canal なので、肛門管は anal canal である。これこそダジャレみたいだが本当である。

ちなみに肛門はスペイン語で ano である。

ぼくが外資系の会社に働いていたときに、アノさんという人が上司であった。

アノ姓というと源頼朝・源義経の間の兄弟につながる由緒ある、あのアノ姓である。その後、アノさんはスペイン語圏の支社長として転勤した。

現地では、新しい支社長は「ミスター肛門」と紹介されたに違いない。

中国人なら姓が肛、名が門さんて人がいそうな気がする。別の字でコウモンさんならいるだろう。

肛門は中国語でも肛門である。発音はガンメンである。

ガンメンが肛門、顔面に肛門がある。

☆

ぼくのエッセイはアカデミックで上品である。言語学的な観点だけでなく、精神分析学や位相幾何学や進化生物学の観点から書いている。

児童精神分析学によると、子供は、口唇期→肛門期→性器期と成長していく。ぼくは発達障害で肛門期に留まったままなのであろう。

一般人つまりコモンピープルとぼくは違う。ぼくは肛門ピープルである。

☆

リアルタイムの大腸内視鏡検査の結果である。

健康診断を受けた医院では、大腸内視鏡検査をしていなかったので、自分で調べて申し込んだ。

住んでいる場所と医院の評判で選択すると、必然的に病院も決まった。

事前に問診を受けて、一週間後に検査を受けた。

検査するのは三十才くらいの美人の女医である。恥ずかしかったが、妙に興奮した。

前日に検査用の食事を三食した後は絶食で飲み物だけである。当日、病院へ行くと、大腸検査用の薬液を飲んで、何度もトイレに行く。

当たり前だが腸内を空にして検査を受けるのである。その前に便が透明になっているのを看護師さんに確認してもらわないといけない。

看護師さんは若い女性である。本当は確認のため色の残っている状態で一度見せてくださいと言われていた。

でも、若い女性に見せるのは恥ずかしいので、完璧に透明になるまで頑張った。

こういうところは、ぼくは完璧主義なのである。

医師だけでなく、こんな仕事をしている看護師さんにも感謝である。ぼくは職業に貴賤があると考えるが、この仕事をしている人は貴いと思う。

9回目の排出で完璧な透明になったので、見てもらった。一発でOKになったが、本当はこれだと本当に透明になったか、何も出していないか区別できない。

実はトイレの後に看護師さんから見せて下さいと言われていて、断っていた。だから一発でOKだった。

十数人が待合室にいたが、三、四回もダメ出しをされている人がいた。

口から飲んで体全体でうがいをして、肛門で吐いている感じである。

体内に排泄物が存在しない状態になったのは、感動した。なんか聖人になったような錯覚をしたのである。

せっかく体内の排泄物が無くなったので、1か月くらい飲むゼリーだけ生存してみようかなと思った。

お尻の部分に縦の切れ目の入った服に着替えて、左を下にして診察台に横たわった。

次の瞬間、気を失って、目覚めたのは、2時間後であった。全身麻酔なので、リアルタイムの映像が見れなかったのは残念である。

検査したのは女性の先生だったが、結果報告は男性の先生であった。ほっとしたような、少し残念なような複雑な心境であった。夫婦ともに内科医で、お互いに連携して診察しているのである。

最初に大腸の説明を受けた。右下の盲腸から上へ上行結腸、右腰から左腰に横行結腸、左腰から下へ下行結腸となる。その後、S字結腸、直腸へと続いて、肛門でゴールである。

ぼくはSよりもMっぽいから、M字結腸になっている。

自分の大腸の中を鮮明な動画で見るのである。なんか洞窟を探検するみたいである。

小腸とのつなぎ目からビデオ動画が始まった。

自分で言うのもなんであるが、とても綺麗であった。中に異物が無く、完全に洗浄された状態である。まるで女性器の中のようでエロチックである。

普通の人だと固くなってゴワゴワしているようだが、ピチピチしていた。もともとぼくは体脂肪率も9%くらいで、腹筋の上にも静脈が浮いている。内臓脂肪は無いので、腸壁に血管が浮いていた。

カメラ映像は上から左へ下と移動しているのだが、先生も腸壁の状態を見せながら、正常だとか問題なしということで、ゴールつまり下界にカメラがスポンと抜けた。

結果として大腸の最初から最後までは正常で全く問題が無かった。一時的な出血をしたのだろうが、その痕跡

も確認できないくらいだった。
五十歳にしては、きれいな大腸をしているので、あなたは大腸がんになりません、と宣言された。
今後、便潜血が出ても、3年間は再検査しなくていいですよとまで保証された。
医者の言うことはよく菊門…聞くもんである。
それでは、なぜ便潜血がプラスだったのか。「サッカショウでしょう」という回答であった。
サッカショウと聞いて、作家賞という漢字を思い浮かべたが、作家の賞をもらった記憶も無いし、作家賞をもらったからと言って、肛門から出血する訳がない。
サッカショウが擦過傷のことと気づいた。先生からも、擦り傷のことと説明があった。
といっても、大腸内部で、擦り傷で出血というと、誤解を招く出ないか。擦過傷と聞いて、先生も何か勘違いしているのでないかと思った。
ただでさえぼくは同性愛者と誤解されることが多いのである。前にまんじで書いたが、過去に何度か肛門を襲われかけた経験がある。
先生の話では、一般的に固形便が大腸の腸壁を傷つけることがあるそうである。
あまり釈然としなかったが、プロの話だからそうなのだろう。
診察後に腸内の写真が渡された。せっかくの記念写真だから、他のスナップ写真と一緒に貼り付けておこう。

☆

アマとして自分自身で勝手に推測すると、出血の原因はストレスである。ちょうど健康診断の直前に、発達障害が発覚し、会社に報告した。
人事異動で子会社に出向になった。会社としては気を使って、ストレスがかからないようにしてくれた。
ちょうど健康診断の時は、一日中というか、8時間ずっとコピー機の前でスキャナーを取り続けていた。
コピー機は出入り口、エレベータ前、女子トイレの通り道で衆人環視の状態である。五十歳過ぎてぼくにとっては晒し首で、心理的拷問である。
『前門の虎、肛門の狼』という状況だったのである。
腸（はらわた）が煮えくり返っていた。断腸の思いであった。ただ単にそれで出血しただけであろう。
この原稿を書いている現在は、仕事上でストレスを感じていない。おかげで快調で快腸である。

☆

ぼくの処女エッセイは、『鉄のペリカン』である。若い女性から肛門に鉄の塊を突っ込まれて、ひ〜ひ〜言っているというエッセイである。涙なしには語れない、いかにもぼくらしい実体験である。
今回のエッセイを書くにあたって、アノ時のことを推理してみた。

たまたま健康診断の問診時にリアルタイムで下腹が痛かった。
だからと言って、いきなり肛門に鉄の塊を突っ込み開いて、中をのぞき込むというのは乱暴なような気がするが…。今ならドクターハラスメントである。
たぶん医者が同性愛者だったのだろう。それか若い看護師が入ったので、いたずら心で、ぼくをモルモットに使ったに違いない。
ところで、このエッセイでぼくは人生最大のミスを犯してしまった。
ぼくのエッセイを読んだ全日本肛門学会の人から、ミスを指摘されたのである。
鉄のペリカンを直腸鏡と説明しており、その後も、直腸鏡がまんじのネタに何度も何度も登場した。
ところが、ぼくの肛門に突っ込んだのは、直腸鏡でなく、肛門鏡であるという非常に激しいクレームをもらったのである。
アノ鉄の塊は確実に直腸まで届いていた。その感覚があって、ぼくは直腸鏡と信じて疑わなかった。
本物の直腸鏡というのは、くちばしの様にパカッと開くものでない。太さが均一の円筒で先が丸くなっている。円筒の側面に小窓が付いていて、それを鏡に反射させて観察するのだろう。
穴があったら入れたい…いや、入りたいくらい恥ずかしい。
でも何かおかしい。ぼくは仕事の合間に、インターネットで肛門鏡や肛門を画像検索して調べてみた。プレゼンテーション中に、その画像がいきなり大画面でポップアップするようなトラブルにもめげずに調べた。
肛門鏡は、耳鼻科で鼻の穴を見る鼻鏡とほぼ同じ形状である。穴に突っ込む部分が大きいだけである。
肛門鏡も直腸鏡も、とてもペリカンのくちばしに例えられるようなものではない。
ぼくが突っ込まれたのはバナナ並みであった。調べると、そのサイズだと肛門鏡でなく膣鏡である。
膣鏡は肛門鏡よりサイズが一回り大きい。それよりも開閉の仕組みや握り手の構造が違うのである。
そもそも肛門鏡は肛門が閉まっても事故が起きないように、手を離せば閉まるし、抜ける。
ねじを回しながら絶対に閉じないように固定するという拷問器具の様なオプションは、肛門鏡には無く、膣鏡のものである。
ぼくの肛門を襲った鉄のペリカンの正体は、直腸鏡でもなく、肛門鏡でもなく、膣鏡であった。
今回の便潜血はその時の古傷が原因かもしれない。

☆

健康診断に来た人が下腹が痛いと言っても、いきなり肛門に膣鏡を突っ込むの止めてほしい。しかも、肛門内

の膣鏡が全開した状態で看護師がパニクって、現場放棄したのである。

これは日本の医療現場が崩壊していると言っていいのでないか。

と強い語調で書いているが、別に怒っていない。

ぼくがアノano体験つまりアノに膣鏡を突っ込まれたことを初エッセイに書いて、それから調子に乗って、ズルズルと続いているのである。

ぼくが生きているのも、まんじでエッセイを書いて、ストレス発散しているおかげである。そう考えると、アノ時の医者と看護師には感謝である

アノ時の具体的な内容は、ぼくの処女エッセイというかドキュメンタリーを、まんじ127号の「鉄のペリカン」でご覧できます。

と、こんな二十年以上も前の二十代の時の経験をごちゃごちゃと書いているから、ケツの穴が小さいと言われるかもしれない。

今回のエッセイはすべて真実と偽らざる心境である。全日本肛門学会のクレームというのを除いてであるが。

☆

それにしても、これだけ大騒ぎして、健康でしたというのも恥ずかしい。リアルタイムでエッセイを書くのは考えものだなあ。

このままだと肛門に何か突っ込まれて出血したか、痔なのかという話で終わってしまう。

どう見ても、と書きながら肛門を見ているだが。ぼくは痔、正確には外痔核というが、無いのである。

最近は…、いやいやいや、最近だけでなく、今まで肛門に何か突っ込まれたこともない。膣鏡以外は。

わが身のケツ白を証明しようと思う。

今度、近くのコンビニに行って、コピー機の上にパンツを脱いで座って、カラーコピーを取ろう。

そのカラーコピーを次のまんじで掲載してもらうのである。

それとも、駅前にある証明写真のボックスで下半身裸になって、ちょうと顔の位置に肛門を写そう。

なんか撮影している最中に(外から足が見えないので)誰もいないと勘違いされて、カーテンを引かれそうだ。

写真もコンビニでのコピーもお金がかかる。会社でカラーコピーを取らせてもらおう。

会社で人目の無いときに、下半身裸でコピー機の上に座って、カラーコピーをするのである。

もし、コピーをしている場面を見つかったら、即クビになるだろう。

逆の立場で、コピー機の上に下半身裸の人が座っているのを見たら、ピキーーンと凍り付くかもしれない。

ぼくは人を凍り付かせるのが好きである。見つからなければ成功だし、見つかっても面白い。

どっちに転んでも楽しいではないか。一度チャレンジしてみる価値がある。

☆

この原稿を書いているパソコンで、仕事にも使っている。原稿が会社のプリンタで印刷されそうになったり、メールに誤って添付されそうになった。

このエッセイのために、ぼくのパソコンは「コ」と打つだけで予測変換の候補として肛門が出てくる。高校時代と打つと、肛門肛門痔大と変換された。

それだけでなく「ア」と打つと、アナルが第一候補に表示されるようになった。だから、「ああ言えばこう言う」は「アナルアナル言えば肛門言う」と変換された。

☆

トポロジー(位相幾何学)という学問がある。宇宙論などで出てくる最新の学問である。

すべての物体を穴の数だけで分類するという強引なものであるが、この強引さが数学上の最大の難問のポアンカレ予測につながっているようだ。

トポロジーでよくある例えは、ドーナッツとコーヒーカップは同じものと考えるというものである。コーヒーカップの取っ手に穴があるが、カップ自体ならすと取っ手に吸収される。

すべての物体が粘土でできていると考え、穴を変えずにこねくり回してできた物体はどうなるか、を考える。

トポロジー(位相幾何学)における人体とは何か。脳も心臓も関係ない。消化管しか存在しない。

トポロジー上では人間とドーナッツが同じ物体とみなすのである。

☆

ホムンクルスの概念は、各臓器に対応する大脳の大きさに比例して、各臓器を拡大するものである。

この概念を応用して、人間になるまでの進化の過程の長さを各臓器に比例して割り当てたらどうなるだろうか。

人間が誕生する際は母体の中で進化の過程を再現する。実際に胎児は魚やおたまじゃくしの様に見える。

人間もミミズのような環形動物にまで遡れる。

進化の過程をすべて肉体に表現したら、ほどんど口と肛門だけである。手足に脳もその他は、ドーナッツのトッピングにすぎない。

環形動物から進化した事実をぼくは実感しているのである。人間は脳で考えるのでなく、腸で考えた方が健康に良い。

肛門を優しくモミモミしながらリラックスして瞑想した。

肛門を肛門で…いや、こう揉んで結論を出した。

ぼくはこう思うんである。

ぼくは肛門である。

編集後記

同人皆様にはご健勝にお過ごしのこととお慶び申し上げます。

本来爽やかな秋、どこまでも澄み渡る素晴らしい秋空を待ちかねているのですが、この二週間くらい、雨か曇り。また、台風が来るという情報で、果実の実りにも影響が出ている様子です。

今回は初めての同人参加者として浅野博文氏をお迎えしました。今後引き続いての寄稿が期待されます。また、健康上の理由で同人から維持会員に移られた堀内永人氏が、ご療養中にもかかわらず寄稿されました。次号も期待されます。

残念な報告ですが、長い間「性と化粧の物語」を寄稿され、私たちに世界の化粧の歴史などを「性」との関係の中で紹介してくださった鈴木守氏がご健康上の理由から同人を退会されました。氏のご健康を心から祈念します。

一四六号の表紙色は、毎年見事に黄色く色づき楽しませてくれる慶応義塾日吉の銀杏並木の美しさに因んだ色にしてみました。

これから寒さに向かいますが、同人皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

（鍋）

まんじ第146号

平成29年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045(544)5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町7-1

表紙の絵について
「木鶏は動ぜず」

田寺怜葦（たでられい）画